怪談名作集

日本名著全集
江戸文藝之部第十卷

この巻の装幀――

背及表紙意匠　山口蓬春氏畫
見返し前附・後附　山口蓬春氏畫
背文字　渡邊新三郎氏筆
扉文字　近藤雪竹氏筆
箱に用ひた圖案　小杉未醒氏畫

怪談名作集目録

狗張子　元禄五年　淺井了意　二六三

怪談全書　同十一年　林道春　三七九

古今奇談英草紙　寛延二年　近路行者　四三五

（目録をはり）

解　説

一

山口剛

この第十卷は、伽婢子、狗張子、怪談全書、英草紙、繁野話、雨月物語、唐錦、莠句册、垣根草及び漫遊記の十部を集めて、「怪談名作集」と題してゐる。伽婢子、狗張子、英草紙、繁野話、雨月物語の五部は、これまでも幾度となく形をかへて飜刻された。今は廣く讀まれる典籍に屬する。漫遊記が漫遊記として飜刻せられるのは、今度がはじめてであり、外の四部はこの集によつて漸く活字本となるとのことである。飜刻の有無遲速は別に作の價値に關しない。いづれにしても、傑れた內容を有し、また早くから知られたこれ等を、稱して名作と呼ぶに不足はない。たゞいさゝか氣にかゝるのが「怪談」である。

江戶の人情本の元祖とは、誰よりさきに作者みづからがゆるし、やがて廣く世間からもゆるされた狄訓亭爲永春水ではあるが、稗史小說の書目の編纂などにはもとより適する筈がない。まして巧拙の批判までを加へようといふのである。彼果して幾何の書を涉獵したらう。かつて貸本屋として手がけた位では、また聞の受賣などでは、とても出來る譯がない。とうに葬られた「增補稗史外題鑑」は元來が疎鹵杜撰の冗籍に過ぎなかつた。出板の當時にも非難の聲が高かつた。曲亭馬琴の友人木村默老は一々事例を擧げて細やかにこれを難じ、馬琴もまた口穢く罵りかへして、默老の言葉を裏書した。馬琴としては、むしろ大人げない業で

ある。しかし、舊著を剽竊して、新に出板された腹立しさが、これを機會として爆發したまでである。

こゝに必要なだけを限つて、默老の非難を聞き直せば斯うである。奇談怪談の類はとりわけて多いのを、何故七八部しか選ばないか。もし佳作を選ぶとなれば、もつとしかとした標準がなければなるまい。それにしてもあまり無茶な標準でないか。たとへば英草紙、繁野話を擧げながら、これ等と伯仲の間にある垣根草を逸したのは何故であるかといふのである。

「且莠句册を秀句册と誤り、雨月物語を兎月物語と謬れるは沙汰のかぎり也。是は筆工の誤かは知らねども、まだしも兎月物語と假名を下さば宜しからんに、兎月とせしはいかにぞや、小說中本といへども著述もする者が、湯桶讀の假名を付しに抱腹の至り也」

まさか雨月を兎月とするやうな校訂の疎漏もなからうし、また垣根草をも忘れないこの集は、默老から頭ごなしに叱られずに濟みさうである。けれど題名に「怪談」とのみいつて、「奇談」を重ねないのが、ともすると春水づれに哂はれはしまいか。氣にかゝる「怪談」である。

十部の書には、幾百の小話が載せられてゐる、いふところの怪談、妖怪變化の談がその多くを占めてゐることはゐるにしても、幽靈やおばけのけぶらひだに見せぬ話も少くない。あやしい、不思議な、けぶなといふ點から見れば、どれも同じ事におちるであらうが、兎に角にそれ等と一括して、幽靈ばなしに最も緣の深さうな「怪談」をのみ冠せたのは、或は不穿鑿の譏をまぬかれないかも知れぬ。一言の辯なきを得ない。

二

一度引合ひに出した馬琴をまたこゝに拉れて來る。例の筆まめがよい事を書き留めておいてくれたからである。文化五年九月二十日、地本問屋蔦屋の主、重三郎から馬琴へ宛てた手紙の文面は、「著作堂雜記」の中に見ることが出來る。その頃の草雙紙に關して、いろ〳〵の事が、その寫しから考へさせられる。

一、男女共兇惡の事
一、同奇病を煩ひ、身中より火抔燃出、右に付怪異の事
一、惡婦强力の事
一、女并幼年者盜賊筋の事
一、人の首抔飛廻り候事
一、葬禮の體
一、水腐の死骸
一、天災の事
一、異鳥異獸の圖
右之外、蛇抔身體手足へ卷付居候類、一切――夫婦の契約致し、後に親子兄妹等の由相知れ候類、都而當時に拘り候類は不宜候由、御懸り役頭より、名主山口庄左衞門殿被申聞候に付、右之趣仲ケ間申合、以來右體の作出板致間敷旨取極置候間、御心得にも相成可申哉と、此段御案内申上候

九月二十日　　　　　　　　　蔦　重

著　作　堂　樣

草雙紙と妖怪變化の關係は、早く赤本の昔から結ばれてゐた。坂田金平などの英雄をして、強勇のかぎりを演ぜさせる魑魅魍魎のワキ師の働きもめざましい。黒本時代には更に新奇の姿の化性の者が多く跳梁した。青本時代にはやゝ洒落を解する者どもさへ出現する。おのづから質に變化がありながら、傳統として繼承せられるのが、黄表紙の怪談物であつた。

金々先生の正統に楯をついて、なほこの傳統を守りおほせようとする黄表紙に於ける怪談物の努力は空しく終つた。をり〳〵の流行に思ひ出したやうな段取をくりかへして、勢力を盛りかへすものゝ、結局は西の海へさらりと逃げ出さねばならなかつた。

多くの例を擧げるまでもない、楚滿人の作「化物大閉口」の世界にちよと踏み込んでみる。

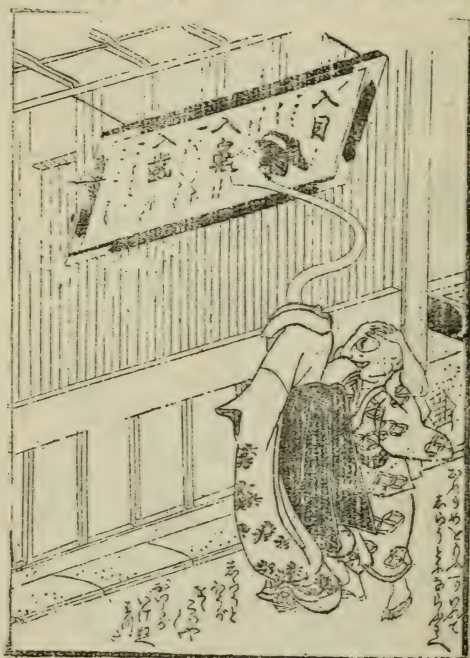
一、近年は草雙紙に金平が腕づく

黄表紙怪

をやめしより化物共は段々衰微して、日々御當地の繁昌にゝひ、出づべき空屋敷もなく、はしからはし、隅から隅まで、賑やかに夜は屋台店や、二八の行燈、茶漬屋の看板に白晝のやうなれば、一向面出しもならず、此まゝならば化物一統とりつゞき出來難く、いかゞはせんと寄り合ひ相談するに、見越入道がいふは、これは草雙紙の作者に頼み、おそろしくこはい所を新板に出して貰はゞ、またく世に出づる事もあらんといへば、皆々然るべしと相談極まる」

物大閉口「

作者には楚満人が選ばれる。化物どもは夜中ひそかにその門を敲く。楚満人は今時化物をこはがる者はない。化物は却つて人間にあるものをと、利蘭のドンガラスといふ眼鏡で人間世界をのぞかせる。

不思議な光景がそこに展開する。獨寝の三つ滿園の客の首は伸びて轆轤首さながらである。客をあやなす

女には千手觀音から揚錢をとるほど多くの手がある。遊女をたらさうとする客人の鼻は愛宕山の太郎坊に五割ましほど高い。振袖のうひ〳〵しい菓子振に化けおほせる三人の子持もあつた。化物どもは見れば見るほど呆れかへる折柄、入眼、入鼻、入歯、白髮染、毛生藥の看板を見つけては、もう一言もなかつた。

「かくて化物ども段々おそろしき有様を見窮めて、ぶる〳〵ものにて申けるは、向後御當地にてわれ〳〵いか樣に化けたりとも、なか〳〵おちの來る事あるべからず、所詮子供衆までがこはがらねば、さつぱりと思ひ切り、此後は面出しを致すまじとあやまりいつてぞ見えにける」

楚滿人もさすがに氣の毒になつた。さうばかりいつたものでない、何處ぞによい住ひもあらうものをと破編笠を餞にする。化物どもは當はなけれど、とにかくに箱根の山越して、とぼ〳〵と歩みゆくのである。

一編の戲作からも、裕に黃表紙に

「於六櫛木」

於ける怪談物の消長が推しはかられる。この作の出板年次の寛政八年なることが注意せられる。

洒落に敵せずして遠く退散した化物どもが、また江戸に跋扈する日が來た。敵討物の蔭に隠れて猛威を逞しうするのである。楚滿人が敵討物を案じ出した頃には、必ずしもこれ等を要しなかつた。それが一代の流行を來して、摸倣踏襲相踵いで出づるに及び、珍しい趣向を競ふはては、敵の在所を告げる幽靈が必須の條件となり、敵討の孝子の武勇試しとして、化物がなくてかなはぬ試驗石となつた。その機運は、化物どもが楚滿人のもとを辭して、江戸を去るにさき立つて、すでに動いてゐたのである。楚滿人の記念すべき作「敵討義女英」は實に寛政七年の出板であつた。

曾仇討「

文化三年に、三馬が「雷太郎強悪物語」を合巻に仕立てたのは、もとより草雙紙の趨勢に乘じたまでのこ

とである。しかし、この形式の革命がおのづから後の長編を馴致する因をなしたのである。

見のがし難いのは、「雷太郎强惡物語」の强惡である。金々先生以來の傳說である輕い、細い、柔かい洒落を驅逐した敵討物は、敵討の効果を多くするために、出來るだけ敵にはむごい殺し方をさせ、孝子には苦しい思ひをさせた。强惡な、殘虐なかぎりを紙上に齎らせようとする。そこへ出て來る幽靈にも、妖怪にも、もう金平物以來のこはい中にも、をかしい、愛嬌ぶりなどは、つゆほどもない。凄惨といはうか、慘烈といはうか、不氣味な筋のみが續く。文化五年に、蔦重が馬琴に知らせた合卷作風の心得は、あまりにこれ等の趣向がはめを弛してゐるがための取締であつた。あの手紙の裏をかへせば、直に讀むことが出來るその頃の草雙紙の世界の狀態である。これも多くの例までもない。文化四年の出板、京傳作の合卷一於六櫛木曾仇討」の一丁で事足りさうである。

三

三日法度の江戶の時代に、この取締がどれほどの効力を有する。合卷に於ける凄惨の狀や、怪異の相は、むしろ年を逐うて甚しきを加へてゐる。讀者の要求がこゝにあつた。官憲の力を以てしても、仕方がなかつた。

文化五年の禁令に見えるほどの條件は、また讀本の上にも數へられる。何故あれにのみ咎めて、これを默許するか。問題は繪を主とすると、從にするとによつて決する。まづ大人向の讀本、女子供相手の合卷といふちがひはあるものゝ、當時の官憲がおそれたのは、繪のおもてのあさましい、氣味わるい無慚な姿であつた。

ところが、その繪が動き出し、その繪の人物がものをいふ合卷が現在に存在してゐるとすれば、どうであらう。さうして人々が咽喉をからしてまで、それ等の活躍にやんやの聲を浴びせかけたらどうであらう。文化の末年からその怖るべきものが、江戸の興味の中心となつたのである。これがまた合卷に反映する。またしても幽靈全盛、おばけ流行の草雙紙であつた。

文化五年からは、少し時の距離があり過ぎるが、例としては、これが一番適切らしい。

文政八年五月のことである。江戸の中村座の櫓には撥袖を咬へた女の生首のものすごい繪風が懸けられてある。怪談狂言の作者鶴屋南北、怪談狂言の家元尾上菊五郎の立て籠るこの小屋の狼火である。もうどんなおそろしい新怪談が見られることかと、江戸の人々は寄ると觸ると、噂とりどりであつた。

「四谷怪談」蛇山庵室

しばし程經て二枚の櫓下番附が人々の手から手へ渡る。一枚には戸板に打ちつけられた男の幽靈、一枚には若い美しい女を釣り上げる女の幽靈が畫かれてあつた。一御贔屓の好みに任せ、古き世界の民谷なにがし、

妻のお岩は子の年度、妹の袖が祝言の、銚子にまとふ嫉妬の蛇、それも巳歳の男の縁切り、しかも媒人に直助が三下り半の去り狀は、女の筆のいろは假名」しかじの文字も讀まれた。

いろは假名の忠臣藏を背景としたお岩の怪談、それに小幡小平次の怪談、また直助權兵衛の因果物語を摑ませた新狂言の蓋は七月二十七日に明いた。いふまでもない連日の大入である。

腫れぼつたい顔をあげて、昨日のお芝居は面白かつたの一言がいひたさに、態々泣きに行く見物は今も多い。けれどその筋の取締はなくとも、その晩から一人歩きも出來ない脅えやうを享樂するために、馳せ參ずる狂熱は、けふ日は見られさうもない。その頃の奇しき現象を何によつて解釋すべきか。管々しうはいふまい。歸するところは、あの濡れ場の淫猥と共に、痲痺しつくした神經の持主が、無理から強烈な刺戟を求めるためであつた。されば、怪談の名優松助なく、三代目菊五郎なく、名作者南北なき後も、嘉永安政文久と次を逐つて怪談狂言が流行する。中には佐倉宗吾の怪談物「東山櫻莊子」のやうな傑作をも出すのであつた。

何がさて、歌舞伎が江戸の生活の半ばを支配するその頃であつた。怪談趣味は卑遠に至らぬ限なくゆき亘る。人情本の世界にさへ浸潤しては、おもはぬ仕掛物を月下氷人とする趣向さへ案じ出された。

雨は次第につよくなり、風吹きあれてすさまじく雨戸

」東　山

に當り植込の梢をならし、鐘の音もをちこちにしてものすごく、後見らるゝ片明り、淋しきまゝに掻き立てる痩燈心に數をまし、百物語にあらねども、底心ある半次郎は化物ばなしのまことらしきを二つ三つ四つ數ふれば、はや子刻の鐘がきこえる。お絲はこはさにせう事なく、半次郎と同じ座敷に床を並べる。その夜も更けて、風は凪いだけれど、雨水傳ふ軒のつま音凄く悲しい折柄、お絲が見かへる次の間の障子にあり〳〵とうつる火陰ともろともに髪ふり亂せし女の幽靈、お絲はアッと聲立てゝ、われにもあらず半次郎の夜着の中へ逃げこむ。やゝあつて半次郎はこはかつたかえといふ。お絲の聲は小い。アレサ口をおきゝなさいますな、まだ居るかも知れませんよと男にすがりついて慄へてゐる。ナニ幽靈はもえてしまつたアナと半次郎は障子をあけて、化物蝋燭を見せる。「それ御覽じろ、中店で賣る泉日吉が新工夫、なんとうまい細工だらう」

それからさき、お絲と半次郎の二人がどうならうと、

櫻莊子「幽靈場

與り知らぬことである。かゝる怪談の流行によつて、深く慣された「怪談」の語感が、つひに「怪談名作集」の題名にまで累を及ぼすのである。

怪と奇と妖の字義を、その本來にまで溯つて推究することはさうまで必要でない。妖怪と變化、幽靈と怪物を早い頃から混同するやうに、古くは怪談と奇談との別を樹ててゐなかつた。たとへば「雨月物語」である。あれは怪談に屬するか、奇談に屬するかといへば、二つの種類が混つてゐるからといへば、それまでであるが、作者在世當時の廣告には「古今怪談」とも「古今奇談」とも冠らせてゐたのである。少くとも「雨月物語」前後は奇談も、怪談も、怪異談もけぢめはなかつた。

春水が「増補外題鑑」を編み出す頃は、凄しい怪談

「春色惠之

の流行が、おのづからその義を限定して、單なる異聞奇事をその範疇に入れることをゆるさない。それと共に奇談の一語を重ねて用ゐなければならなかつた。すなはち上の怪談はいはゆる奇談を含み、また奇談と性質を同じうするものでなかつた。

こちたきものは江戸小説に關する名目である。本來がその時その折の稱呼を借り用ゐるだけに、本質から考へてゆけば、たえず錯亂と混雜に迷はされる。「英草紙」「繁野話」などは或は讀本と呼ぶべきであらう。しかし、文化文政度に於ける京傳馬琴等の讀本とまた性質を異にするふしも多い。そこで初期の讀本として區別もされる。「伽婢子」「狗張子」は假名草紙として扱はれてゐる。けれどもある一條件を除くの外は、どこに

「花
さし繪

「英草紙」との間に相異を認めることが出來よう。されぱとて、從來の見は、これを初期の讀本として扱はうとはしない。浮世草紙といはれてゐる中にも、いはゆる浮世草紙の概念を脱して、はやく「伽婢子」「英草紙」と等類を同じうしていふべきものも少くない。今は更に怪異小説また奇異小説の名目も加はつてゐる。その小説といふのが、また事の亂れを齎らせぬでもない。おもふに江戸小説の一切に亙つて、過去の名目から離れて、劃然たる分類を仕立直さぬ限りは、つひに免れ得ない混亂である。

こんな楽屋うちの話をこゝに書いてよいかどうか、自分にはわからない。「日本名著全集」の計畫が發表されるにさきだつて、わたしもその議に與つた。時の編輯主任が示された案の中に「怪異名作集」の目がある。遠慮もなく朱をひいて　他の名に代へようとした時、その人に難色あるを見た。怪談といふのはよい名なんですがといはれる。わたしは意のあるところを忖度するに難くなかつた。事は典籍以外に關するやうであつた。その怪談は近い頃の用例、今日も多くそれに從ふ稱呼を利用せんとするやうであつた。江戸小説の現在の分類は正しくいへば決して據るに足りないこと、また怪談の意を解して二義あることを考へるわたしは、朱筆を擱いて微笑をもらすだけであつた。その微笑がつひに今このやうな無用の冗辯を弄せねばならぬはめに陷らせたのである。その人はもうこの世にゐない。追憶はつひこんな事をも書きとめさせる。

僥倖にも、一事の辯が、草雙紙に於ける怪談の性質、また江戸末期に於ける怪談の流行の狀態にも、少しばかりであるが、觸れさせたのである。それ等に就いて一わたり考へておくことが、この集に收められた十部の書を闡明する上に於て、なか〱に役立ちはせぬかと思はれる。

「伽婢子」が怪を語ること多きは、今あらためていふのも愚しい。著者は幾つかの不思議なはなしの後に、

「怪を語ば怪至」の章で結んでゐる。

「むかしより人のいひ傳へしおそろしき事あやしき事をあつめて、百話（ものがたり）すれば、必らず、おそろしき事有りといへり。百物語には法式あり、月くらき夜行燈に火を點じ、その行燈は青き紙にてはり立て、百筋の燈心を點じ、一つの物語に燈心一筋づゝ引とりぬれば、座中漸々暗くなり、青き紙の色うつろひて、何となく物すごくなりゆくなり。それに語りつゞくれば、あやしき事おそろしき事あらはるゝとかや」

寛文の頃といへば、武邊騷ぎのまだ鎭まらぬほどである。その頃の百物語の流行と、江戸末期のそれとの間には、その出發點に於いて、大い相異が存する。最も注意して比較せねばならぬ問題である。著者の態度の相異に至つては、忘れてはならぬ重要事項であつた。著者は前をうけて、下京邊の百物語の出來事を語る。そのあとに「諺にいはく、白日に人を談ずること勿れ、人を談ずれば、害を生ず、昏夜に鬼を語ること勿れ、鬼を語れば怪いたるとは、此事なるべしと、此物語百條に滿ずして筆をこゝにとゞむ」と續けてゐる。これを序の文と照し合せると、著者の意のあるところを髣髴することが出來る。江戸末期の書、果してかくの言を載せてゐることであらうか。十部の書の中、「雨月物語」だけはやゝ異色がある。これは著者その人にのみ關する。時代に即していふ時、その半ばを考へればよかつた。

七人比丘尼はいふところの怪談ではない。しかし「きく井殿御臺」のくだりには、怪異の聽くべきものがあつた。江戸末期の草雙紙作者がこれを扱つたなら、その人を尼にする前に、どれほど殘忍な無慚な不氣味な出來事をいひ立て書き立てたであらう。重心おのづから異るところがあるためである。馬琴の「新累解脱物語」は元祿三年板の「死靈解脱物語聞書」を飜案したものである。二つの比較は讀本の作者と、怪異の

開書をとる人との間の距離を明瞭にする。その「開書」をまた「阿國御前化粧鏡」などの南北の作、またそれ等に據る合卷と比較すれば、いよ〳〵大い距離がたしかめられる。「開書」には珍しいまで凄慘の氣が充ち溢れてゐる。しかし、それは畢竟祐天上人を尊くし、念佛をかたじけなうするための手段とも見られる。すなはち死靈のためにのみ死靈を語るのでない。なほもの凄さを期するがための凄さをしるしたも

「七人びくに」さし繪

のでもない。作者の意は、早く累の怨靈をして、人々の仁王法華心經の誦口を止めさせ、さて、「やみなんやみなん、誦むべからず、たとひ幾反功を積むとも我に緣なし、誦むべからず、只念佛をとなへて與へたまへ」といはせたかつたのであらう。その後祐天上人の高德を禮讃したかつたのであらう。古い頃の怪談は、多くこの成心によつて、少し前の時代の懺悔物、因果物を繼承するのであつた。今の十部の書はその成心ある點に於て、やゝ態度を同じうする、しかし、意圖するところは、佛敎輪廻の連說ではなかつた。そこに古い怪談と異なる新しさが存する。その成心の何であるかゞ問題となる。

かういふ折でないと、つい謂ひ殘しさうである。或はいひ殘してもよい事であるが、一體十部の書は默老の言葉ではないが、數多い怪談物としては少きに失する。名作はこれだけではない。ましてもつと多くを收める豫定であつたとの事。豫定の書のすべての校正が終つて、今更に最初の誤算の甚しいのに驚いた編輯部から、ほゞ一千頁を限度とするには、何を殘し何を棄てたらよいかとの意見を徵せられた。わたしは後に於て何等かの形にて補ふと聞くがために、まづ「怪談名作集」の正編としては、正系の逸し難きものを取つて、傍系と見てよいのを舍てた。取舍は內容を主として、冊數の多少を考へなかつた。もし「伽婢子」「狗張子」の長編を外にしたら、舍てられた短い物の七八部は裕に收めることが出來た筈である。わたしのおし通した主張が果して會員諸君の滿足を得るか、どうかを知らない。或は累を編輯部と書肆とに致しはせぬかを氣づかつてゐる。

四

草も木も言立てる遠い昔にはあやしい神々が多かつた。後の妖怪も變化も昔神の名に籠められてゐたのである。記紀には限りなく、不思議な神業が傳へられてある。伊弉諾尊の御櫛は筍と化した。櫛稻田姫も櫛に化した。白狗に化した文石小麿は殺されて、もとの姿にかへつた。舒明の御代には天狗（あまきつね）が天かける。齊明の御代には大笠を冠つた鬼が大喪葬を仰ぎ見ようと出現した。

　これは記紀の話ではない。ずつと後れての記述である。寶龜年中、近江の國の一堂に住ひする僧の夢に人あつてわがために經誦めといふ。覺

めていぶかるその且、小い白猿が來て、わがために法華經を讀めといふ。汝は誰ぞと僧が問ふ。われは東天竺國の大王であつた、彼の國にある時、修行僧を妨げた罪報によつて、獼猴の身となつた。法華の功德によつて解脫したい、とその者が答へたとのことである。このやうな輪廻轉生の怪は、かつて誰も知らなかつた。印度思想が濕潤した末に、はじめて見ることが出來た。奈良朝も末になつてから、さらいふ種類は非常な速度で加はつて來た。「日本靈異記」はこれ等の多くを傳へてゐる。

平安朝の裏はさびしかつた。貴族の生活のはなやかさも、ほんのうち見の相に過ぎない。若い美しい男と

女が戀の戯から、「いづれか狐ならんな」といふ言葉の陰にも、人迷はせの狐の恐しさが隱れてゐる。折角人目を避ける戀のかくれ家にしても、家が古く、庭が荒れてゐると、そこに潜み住む變化の邪魔がはげしかつた。まして不斷の脅威に驅り立てられるのは、ものゝけの闖入である。生靈や死靈がいつ何時何人の上に何をゆかりに祟りをなすか。人間の身には測り知るべくもなかつた。病めばまづくすしよりさきに驗者を招ずるのである。

これ等を調伏する筈の陰陽道、宿曜道までが却つて恐怖を誘導するほど、世の相は險惡であつた。心のうちにも、身の外にも、魑魅魍魎は跳梁跋扈する。

あの驕氣の九條師輔も、百鬼夜行の前には、車の牛をはづし、車の簾を垂れ、隨身どもにさきをおはせ、雜色どもに絕えず警蹕させ、

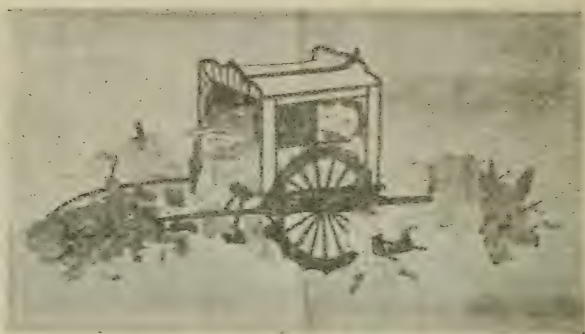
みづからはうつぶし伏して、尊勝陀羅尼を誦するのである。正二子、三四午、五六巳、七八戌、九十未、十一十二辰、これ百鬼夜行の日、夜行くべからずなど、いつか支那の風習に倣ふのである。このやうにしてわが國の妖怪變化の數はいやまさりにまさる。

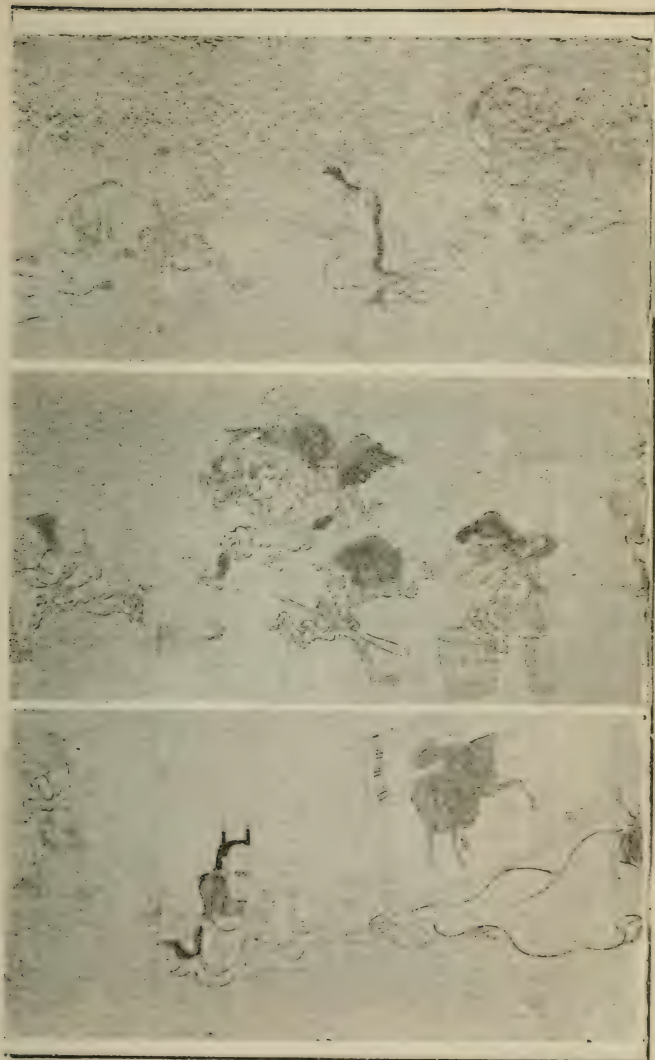
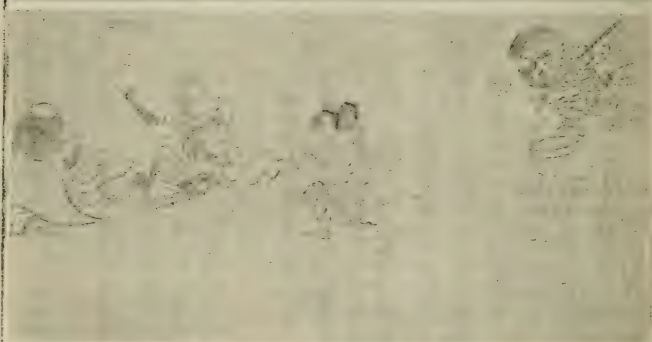
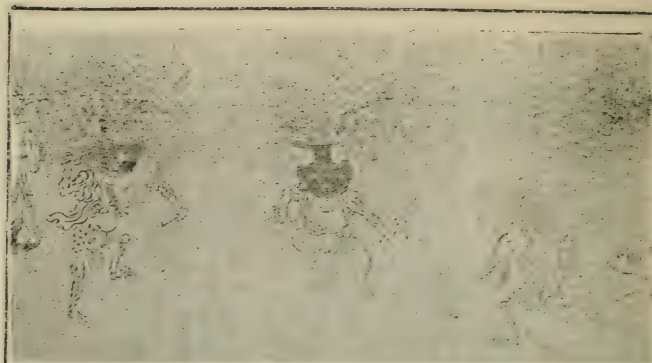
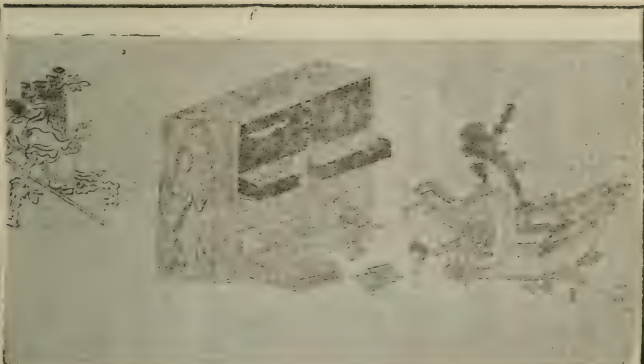
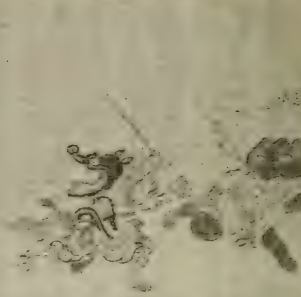
「今昔物語」にはその頃の怪異の事が多くしるされてゐた。それはこの集に收められた十部の怪談を讀むためには、なくてかなはぬ參考の資料である。作者のおの〳〵が案頭において、題材の一つとしたことは、作の中から、最も明に指摘せられる。

妖怪や幽靈の一切の種類が出揃つた鎌倉時代には、その數が殖へようとも減るわけがなかつた。「古今著聞集」「宇治拾遺物語」のやうな「今昔」の脉をうけたものは勿論、佛教の弘布を旨とする因果物語、懺悔物語の間々

を縫ふやうに怪異の記載の續いてゐるのが目につく。これも亦後の怪談物に影響することが多かつた。
佛の數を示し、時の相を傳へようとする動機から盛行を來した繪卷物も、この問題には忘れてならぬ資料であつた。かつて心の中にのみ描き、文字の上にのみ現はさうと努めてゐた幻影も彩りの色の鮮に眼前に展開されるのである。おそはれる人でなくても、繙く者は皆一様にこのおそろしい、あやしい姿に直面するのであつた。實際に存在するか、否かは問題でない。映像としては、誰もこれ等の猖獗を認めねばならなかつた。妖怪を描き、變化を描く繪卷物はつぎ／＼に珍しい姿を見せてゐる。畫家が趣向を凝すのではない。畫家はたゞ民衆の信を如實に傳へようとするに過ぎない。民衆の心眼また肉眼に映る形像が、ます／＼多樣複雜になつただけである。

器物百年を經て、化して精靈を得てより人を誑かすといふ付喪神の思想は古くからある。さういふ器物の

傳土佐光信筆百鬼夜行

精靈が頻りに横行する百鬼の數は更に百鬼を增し、またその上に百鬼を加へてもよいほどである。鎌倉時代の末から室町時代にかけて、描かれた百鬼夜行の繪卷も二三ではなかつたらしい。

現存する土佐光信の筆といひ、土佐經隆の筆といふのが、果して

その人々の眞蹟であるかは保證のかぎりでない。それでも鎌倉室町時代の民衆が何をおそれ、何に脅えたかといふ心の蹟を知るには十分である。解說の中に挿入し、また附錄としたもののやうなのが、いかに摸寫から摸寫にいそがしく、そのはてにどれ程怪談物のさし繪は勿論、また讀本の中にも、草雙紙の中にも混入してゐるか、少しく比べ合はせただけでも、あまりに頻繁に遭遇するのに驚かされる。

舞臺の上でまで、美しい幽靈に歌はせ舞はせて享樂しようとする室町時代には、今から見れば、たど〳〵しい、しかしその頃としては技巧の限りを見せた筆つきで、いろ〳〵の怪異をしるしたものが、現存するよりも、もつと多くありはしなかつたかと思はれる。その寫本が江戸の代となつてから御伽草紙の名で一括して出板された。板本にはさし繪がある。これが繪卷物と緊密な關係を保つてゐる。その御伽草紙はある理由の下に、後の草雙紙とある距離をおきながら、特殊な交渉をつゞけるのである。

しかし、室町時代にも、「今昔物語」のやうな、「宇治拾遺」のやうな形式をとる怪異の記錄がなければならない。少くともその一

つが、享保の頃に出板せられた。この頃よく噂に上る「奇異雜談集」がそれである。

作者、姓は中村、その名を詳にしない。「江州ひがしの郡三雲の庄山南の奥に一村あり。村の中に妙感寺あり、六角殿文明年中に妙感寺に居住す、數年に諸侍みな家をつくりて居れり。予が父中村豐前守も家をつくりて居するなり」及びその他の記事でわづかにその人の片影を推するばかりである。馬琴もその藏本に頭註して「此段作者みづからの父の姓名をあらはせり。よりて世の人中村氏の子なることを知れり」といふのである。書中の記事は幸に年代を明記するものが多い、これによつて明應頃から天文十年に及んでゐることが知られる。全部六卷、三十一章。これが今の板本であるが、天正の頃の寫本と比較すると、五章ほど省略されてゐるとのことである。

五章の省略も惜しいには相違ないが、この書の傾向は殘る三十一章で十分に考へることが出來る。これはわが國の怪と漢土の怪とを撮合してゐる。何人の筆か知らないが、序文にも、明に「錄唐土本朝怪異之說」と斷つてゐる。

和漢の怪を合はせ錄するのは、「今昔」以來のことである。別に珍しがるまでもない。しかし、考へておいてよいのは、その頃出る向々では、頻りに支那の怨異の書がよろこばれてゐたことである。「捜神記」「山海經」などが奈良朝時分に嬉しがられたと同じほどか、またそれ以上に、「太平廣記」「夷堅志」などが愛讀せられたことである。わが妖怪變化の幾つかは、これ等からも數を殖してゐた。

あの大部な「太平廣記」のどの部分が特にどいふことも滿更いへないことでもなささうであるが、それよりも、こゝには作者中村某が「剪燈新話」に寄せた感激に就いていはねばならない。

「新渡に剪燈新話といふ書あり、奇異なる物語をあつめたる書たり、今二三ケ條を取て、こゝに載するなり。剪燈とは蠟燭の心をきるなり。たへふくるまでかたるといふこゝろなり、新話とは舊(もと)剪燈夜話といふ書あり。事ふりたるゆゑあたらしき事どもかたるゆゑに、新話といふなり。今唐のことばをやはらげ、日本のことばになして記するなり」

燈の下しづかに新渡の書を繙けば、ほのめく唐紙の香に、人はもう海のかなたへと誘はれる。事の不思議を傳へる瞿佑が艶麗の筆はまた夢の國へとつれてゆく。ふと覺めてはそのまゝに消してしまふのが惜しい歡喜である。珍しい幽靈ばなしをせめて、わが國ぶりにうつして見たくなつた。すなはち金鳳釵記、牡丹燈記申陽洞記の三條を譯したのである。

「剪燈新話」の作者、瞿佑、字は宗吉、存齋と號した。錢塘の人である。洪武中臨安に教諭となつてゐた頃、著述甚だ多かつた。その「剪燈新話」は怪異の書「剪燈錄」の一部に過ぎなかつた。瞿佑の言にいふ、

「余既に古今怪奇の事を編輯して以て剪燈錄となす。凡そ四十卷、その筆は皆喜ぶべく、悲むべく、驚くべく、怪しむべきものなるも、惜む所は筆跡荒蕪、詞源淺狭にして目を鬼だて、耳を鴻にする論の以て之を發揚するなきのみ」謙遜の程度は考へなくてもよい。惜しいのは、その四十卷が散佚して、今はわづかに新話として四卷しか殘らないことである。永樂の頃、周王府の長吏となつてゐたが、禍に遭つて、保安に貶せられた間に、散佚してしまつたのであつた。

作者みづからは、著作の後四十四年にして、「彼の時は年富み力強く、言を立つるに銳にして、或は傳聞未だ詳ならず、或は鋪張太だ過ぎて、未だ疎率なる所あるを免れざるも云々」と追悔の辭を致すにせよ、わが日東の國の怪談を指導するには十分であつた。もし天文の頃この書が日本に渡らなかつたなら、江戶時代の新怪談の黎明は、あゝ早くは來なかつたであらう。どうしても記憶せねばならぬ「奇異雜談集」の三條の飜譯である。

了意の「伽婢子」は「剪燈新話」全部二十話の中十八話を飜案し、また「新話」の續編ともいふべき李昌祺の「剪燈餘話」その他を飜案した。江戶の怪談はそれ等以前に出板の書はあることはありながら、まづ傑出せる點から、これを祖と見てもよいやうである。摸倣の作が相踵いで出づる。

名は怪談でも、奇談でも、怪異小說でも、どうでもよいが、一體あの片々たる小話の集りが、文學史上にいかなる位置を占めてゐるかの問題は、「怪談名作集」收載書目の一々の解說にさきだつて、一應は考へねばならぬ事柄であると思はれる。

最も知られてゐる一話をとつて、その由來と影響を說く方が結句都合がよささうである。牡丹燈籠は圓朝

を俟ずして、もう天文の頃に抄譯され、寛文の頃に飜案されてゐた。これが圓朝までにどんなうつり替りがあつたか。せめてはこの位の筋を立てゝおくのがよいやうに思はれる。それには一應「剪燈新話」の原文を讀んでおかなくてはなるまい。要ない業のやうにもおもはれるにしても、さうせねば飜譯ぶり、飜案ぶりが明瞭になりさうもない。しかし、こゝには原文をそのまゝに引かないで、書き下しにする。書き下しは明刊本に據ることにした。慶安和刻本に比べて、異同の少なからぬのは、そのためである。尤も「奇異雜談集」の作者が見たのはこれではなく、「剪燈新話句解」でないかと思はれる。飜譯の用語の中にそれと氣づかせられる節々が見うけられる。これが慶安和刻本の原本であつた。それなのに、なほ他本に據るのは、その方に正しい文章を讀むことが出來ると信ずるからである。たゞ古いに溯ればよいといふ譯ではなかつた。

剪燈新話句解卷之上

山陽瞿佑宗吉著

滄洲　訂立

垂胡子　集釋

水宮慶會錄

至正（元順帝年號）甲申歲潮州（古閩越之地今廣東布政司）士人余善文於所居白晝閑坐忽有力士二人黃巾繡襖自外而入致敬於前曰廣利王奉邀善文驚曰廣利洋海之神善文塵世之士幽顯路殊安得相及二人曰君但請行毋用辭阻遂與之偕出南門外見大紅船

五

牡丹燈記

方氏の浙東に據るや、毎歳元夕、明州に於て、燈を張る五夜、傾城の士女皆縱觀するを得。至正庚子の歲、喬生といふ者あり、鎭明嶺下に居る。初めて其の耦を喪ひ、又父母なし。鰥居無聊、復出でて遊ばず。但門に倚て佇立するのみ。十五夜三更盡きて、行人漸く稀なり。一丫鬟の手に雙頭の牡丹燈を執つて前導するを見る。一美人其の後に在り。約年十七八、紅裙綠衫、婷婷嫋嫋、迤邐して西に投じて去る。喬生月下に於て之を

新話　卷二　十八

旣迫亦無心入院悵悵而歸親黨問其故方始具言
之衆共歎異生後終身不娶入鴈蕩山採藥遂不復
還

牡丹燈記

方氏之據浙東也毎歳元夕於明州張燈五夜傾城
士女皆得縱觀至正庚子之歳有喬生者居鎭明嶺
下初喪其耦又無父母鰥居無聊不復出遊但倚門
佇立而已十五夜三更盡行人漸稀見一丫鬟手執
雙頭牡丹燈前導一美人在其後約年十七八紅裙

明刊「剪燈新話」

視る。顔貌比なし。神魂飛蕩、自ら制する能はず。乃ち之に尾して去る。或は之に先ち、或は之に後れ、行くこと数十歩にして、女忽ち回顧し微しく笑つて曰く「初め桑中の期なくして、乃ち月下の遇あり。偶然たるに非ざるに似たり」生即ち趨り前んで之に揖して曰く「敝居咫尺、佳人能く回顧すべきや否や」女初めより難む意なし。即ち丫鬟を呼んで曰く「金蓮燈を挑て同じく往くべし」是に於て金蓮復回る。生、女と手を携へて家に至り、其の歓楽を極む。自ら以為らく、巫山洛浦の遇も是に過ぎじと。生其の姓名居地を問ふ。女の曰く、姓は符、麗卿は其の字、淑芳は其の名、故の奉化州判の女なり。先人既に歿して家事零替す。既に伯叔なく、

生後終身不娶入雁蕩山採藥遂不復還（雁蕩山在温州府有二一在樂清縣一在平陽縣五代時僧願齊以爲天下名山結茅其間）

牡丹燈記

方氏之據浙東也（方氏名谷珍台州人元人起兵據有浙東之地即今浙江明州等處明州即今寧波）每歲元夕（上元之夕即正月十五夜）於明州張燈五夜（府張士誠乃唐舊號爲明州府史記漢祠太一以昏時列火滿街今人正月十五夜觀燈是其遺事也）傾城士女（漢李延年傳北方有佳人一笑傾人城再笑傾人國）皆得縱觀（恣意而觀也史記秦皇漢高帝觀秦皇）至正庚子之歲有喬生者居鎮明嶺下（鎮明嶺在寧波府南宋時郡守李吏更以土增之高數十丈）初喪其耦（耦配也）鰥居無聊（鰥魚名魚目衆衆不寐故老而無妻者謂之鰥聊頼也無聊言無所聊頼也）不復出遊但倚門佇立而已（佇立延佇而立也）十五夜三更盡

（通ず前ノ条ニ）

四十八図

「剪燈新話句解」

終に族弟鮮し。止妾が一身、遂に金蓮と湖西に僑居するのみ」生之を留めて宿せしむ。態度温和詞氣婉娩、幃を低れ枕を匿けて、甚だ歡愛を極む。天明け、泣いて別れて去る。暮に及べば則ち又至る。是の如き者、まさに半月に及ばんとす。

隣翁これを疑うて壁に穴して、之を窺へば、則ち生が一粉粧髑髏と燈下に對坐するを見、大に驚く。明旦之を詰る。諱して肯て言はず。隣翁の曰く、「噫、子禍あらん。人は乃ち至盛の純陽、鬼は乃ち幽陰の邪穢、今子幽陰の魅と同じ

不復還

牡丹燈記

方氏之據浙東也每歲元夕於明州張燈五夜傾城士女皆得縱觀至正庚子之歲有喬生者居鎭明嶺下初喪其耦鰥居無聊不復出遊但倚門佇立而已十五夜

慶安和刻板

く處て知らず、冥穢の物と同じく宿して悟らず。一旦眞元耗盡せば、災禍來臨せん。惜しいかな、子青春の年を以て、遽に黄壌の客とならん。悲まざるべけんや」生始めて驚き懼れ、備さに其の詳を述ぶ。隣翁の曰く「彼は湖西に僑居すと言へば、當に往いて訪問すべし。有無卽ち知るべし」生其の教の如くす。逕に月湖の西に投じ、長橋の下高堤の上を往來して、居人に訪ふ、言ふ並びに無しと、過客に問ふ、言ふ未た有らずと。日まさに夕ならんとす。乃ち湖心寺に入て、少しく憩ふ。行いて東廊に遍く、復西廊を過ぐ。廊盡きて一暗室を得たり。旅櫬あるを見る。白紙其の上に、題して曰く「故の奉化符州判の女麗卿の柩」と。柩前一雙頭の牡丹燈を懸け、燈下に一冥器婢子を立つ。背上二字あり、金蓮と曰ふ。生大に驚き、毛髪盡く竪ち、寒栗身に滿つ。急に寺を出で敢て回顧せず。是の夜、宿を隣翁の家に借る。憂懼の色掬すべし。隣翁の曰く「玄妙觀の魏法師は故の開府王眞人の弟子なり、符籙當今の第一たり。汝宜しく急に往て求むべし」

明旦生觀内に往く。法師其の至るを望見して驚いて曰く、「妖氣甚だ濃かなり。何すれぞ此に來る。」生床下に拜して具に其の由を述ぶ。法師硃符二道を以て之に付し、其の一は門に置き一は室に懸けしめ。仍て生を戒む。「再び湖心寺に遊ぶことを得ざれ」生教を受けて歸り、言の如く安頓す。是の後果して來らず。

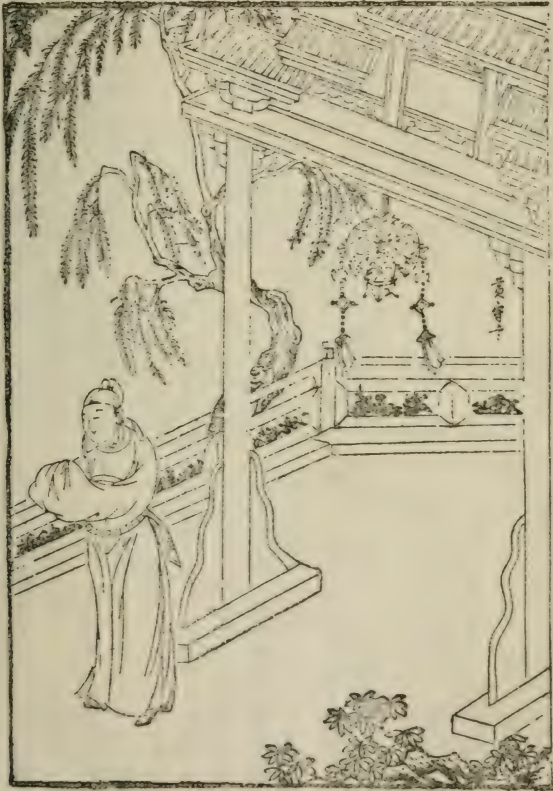
一月有餘、生袞繡橋に往き友を訪ねて留飲して酔ふ。都て法師の戒を忘れ、竟に湖心寺の路を取て家に歸る。將に寺門に至らんとす。忽ち金蓮の迎へて前に拜するを見る。曰く、「娘子久しく待つ。何ぞ一向薄倖是の如く其の所以を忘る」之と西廊に入り直に室中に至る。女之を數めて曰く、「妾君と素より相識にあらず。偶燈下に於て一たび見え、君が意を感じ、遂に全體を以て之に事ふ。暮に往き朝に來る、君に於て甚だ薄からず。奈何ぞ妖道士の言に因つて遽に疑惑を生じ、便ち永く絶たんと欲する、薄倖是の如し。妾が君を恨むこ

と深し。今幸ひに遇ふことを得たり。豈能く相舍てんや」即ち生が手を握つて柩の前に至る。柩忽ち自ら開く。之を擁して同じく入る、隨つて卽ち閉づ。生遂に柩中に死す。

隣翁其の歸らざるを怪んで遠近に詢ね問ふ。寺中柩を停るの室に至るに及び、則ち生が衣の裾微かに柩外に露はるゝを見る。急に寺僧に請うて之を發く。死して已に久し。女の尸と俯仰して内に臥す。女の貌生けるが如し。寺僧嘆じて曰く、「此は奉化州符君が女なり。死ぬる時、年十七、權に此に寄す。家を擧げて北に遷り、竟に音耗を絕つ。今に至るまで十有二年。意はざりき、怪を作すこと是の如くならんとは」遂に生の尸及び女の柩を舁げて、同じく西門の外に葬る。是の後雲陰の晝、月黑の宵、往往人あつて生と女と手を携へて同じく行き、一丫鬟雙頭の牡丹燈を挑げて前導するを見る。之に遇ふ者輒ち重病を得。薦るに功德を以てし、祭るに牲醴を以てして、少安を得るに庶し。否ざれば則起たず。居人大いに懼る。竟に玄妙觀に往き魏法師に謁して訴ふ。法師の曰く、「吾が符籙はたゞ能く其の未だ然らざるを治むるのみ。今祟成る、吾が知る所にあらず。聞く、鐵冠道人といふ者あり。四明山頂に居り、鬼神を考校するの法術驗あり。汝が盍往いて之を求むべし」

衆遂に山に至つて藤葛を攀緣し、溪澗を蹻越して、直に絕頂に上る。果して草庵一所有り。道人几に凭つて坐す、方に童子の鶴を調するを看る。衆庵下に羅拜し、告るに來故を以てす。道人の曰く、「山林の隱士旦暮且に死せんとす。烏んぞ奇術あらん。君が誤聽を過てり」之を拒む事甚だ嚴なり。衆の曰く、「某本知らず、蓋し玄妙觀の魏法師の指敎する所のみ」始めて徼しく晒つて曰く、「老夫山を下らざること已に六十年、小子饒舌、我をして辭し避くるを得ざらしむ」即ち童子と山を下る。徑ちに西門の外に至り、方丈の壇を結び、

席に踞り、端坐して、符を書いて之を焚く。忽ち見る、將吏數輩出でゝ命を請ふ。黃巾繡襖金甲雕戈皆長丈餘、壇下に屹立す、其貌甚恭し。道人の曰く、「此間邪祟ありて禍を爲し、居民を驚動す、汝輩其れ豈に知らざらんや、宜しく疾く之を驅りて至るべし」命を受けて往く。

須臾にして、枷鎖を以て、女と生と倂に金蓮を押して俱に到る。鞭箠揮撃して流血淋漓たり。道人訶責し、

明刊」剪燈新話

其をして罪を供せしむ。將吏紙筆を以て之を授く、遂に各數百言を供す。今盡く載せず、其略を此に述ぶ。喬生供して曰く、伏して念ふ。某、室を喪うて寡居し、門に倚つて獨立す。色に在るの戒を犯し、多恣の求を動かす。孫生が兩頭の蛇を見て決斷するに效ふこと能はず。乃ち鄭子が九尾の狐に逢つて愛憐するが如くなることを致す。事既に追ふことなし、悔むと

「牡丹燈記」

も將奚か及ばん。

符女供して曰く

伏して念ふ。某、青年にして世を棄て、白晝隣なし。六魄離ると雖も、一靈未だ泯びず。燈前月下五百年、歡喜の寃家に逢ひ、世上民間千萬人風流の話本を作す。迷うて返ることを知らず、罪安んぞ逃るべき。

金蓮供して曰く

伏して念ふ。某、殺青を骨となし、染素を胎と成し、墳壙に埋藏せらる。是れ誰か俑を作つて用ゆる。面目欘發、人に比するに體を具へて微なり。既に名字の呼あり。靈識の異なかるべけんや。因つて計を得たり。豈敢て妖をなさんや。

供し畢り、將吏取つて呈す。道人巨筆を以て判して曰く、

蓋し、聞く、大禹鼎を鑄て、神姦鬼秘、其の形を逃るゝことを得る莫し。温嶠犀を然して、水府龍宮倶に其の狀を現することを得たりと。惟幽冥の異路、乃ち詭怪の多端、之に遇ふ者、人に利あらず、之に遭ふ者、物に害あり。故に大厲門に入て晉景殂し、妖豕野に啼いて齊襄殂す。禍を降して災を儲し、妖を興して孽を作す。是を以て九天邪を斬るの使を設け、十地惡を罰するの司を列ね、魑魅魍魎をして、以て其の奸を容るゝこと無らしめ、夜叉羅刹をして其の虐を肆にすることを得ざらしむ。矧んや清平の世、綱紀の朝をや。而るを乃ち形顯變幻し、草木に依附し、天陰り雨濕ふの夜、月落ち參横はるの時、梁に嘯いて聲有り。其の室を窺つて覩ること無し。蠅蠅狗苟、羊狼狼貪、疾きこと飄風の如く、烈きこと猛犬の若し。

喬家の子生きて猶悟らず。死して何ぞ惜まん。符氏の女、死して尙貪婬、生けるとき知るべし。況んや金蓮が恠誕、冥器の妖精、世を惑はし人を欺く、條に違ひ法を犯す。狐綏々として蕩する有り。鶉奔々として良なし。惡以て容し難く、罪赦すべからず。陷人の坑今より塡ち滿つ。迷魂の陣此より打開し、雙明の燈を燒毀し、九幽の獄に送る。

判詞已に具て、主者奉行す。急々律令の如くす。卽ち見る、三人悲啼宛轉し、將吏の爲めに驅迫せられて去るを。道人袖を拂つて山に入る。明日衆往いて之を謝す。復見るべからず。止草庵の存するのみ有り。急に玄妙觀に往き、魏法師を訪ひて之を問へば、則ち瘖を病みて言ふこと能はず。

六

「奇異雜談集」の著者の態度は、この「牡丹燈記」を譯して「女人死後男を棺の內へ引込ころす事」と題した一事からも推知せられる。他の二條の場合も同じことであるが、事の奇妙を傳へるのを主眼としたのであつた。譯者はまた支那の風俗に對して興味と知識を寄せてゐた。元夕張燈といふのに、まづ說明を加へる。

「唐には正月十五日の夜、家々の門にともしびをあかし、種々いぎやうのとうろをはりて、門にかくるゆへに、男女諸人是を見て曉にいたるまであそびありく事、日本の盆のごとくなり。是は三元下降の日といふて、一年に三度天帝あまくだりて、人間の善業惡業を記する日也。正月十五日を上元といふ。此夜を元宵とも、元夕ともいふなり。七月十五日を中元といふ。十月十五日を下元といふなり。此ゆへに唐には、上元の夜、家々の門にともしびをあかして、天帝をまつる。すなはち是七月否卦、十五日に鬼靈をまつる

日にあたるなり」

また雙頭の牡丹燈にも、いふところがあつた。

「牡丹の枝のさきに、花二つあひならぶかたちを燈籠にはるなり。是を雙頭の牡丹燈といふなり」

これだけを前置として、とりかゝる譯のはじめのほどはかうであつた。

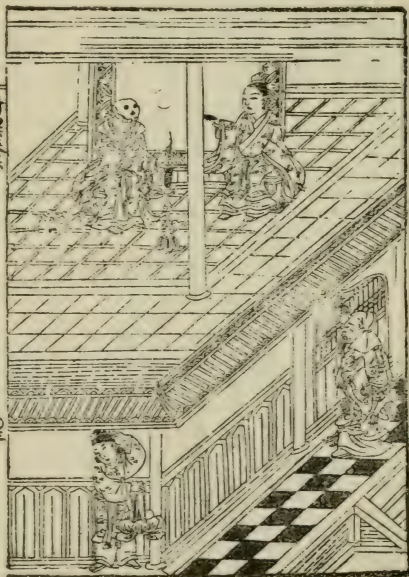
「元朝のすゑの至正年中のことたるに、明州の鎮明嶺のもとに、喬生といふものあり。妻をうしなひて、やもめにして閑居す。正月十五夜にいたりて、諸人みな出て燈籠を見てあそび行といへども、喬生はひとり門にたゝずみて、みちに出あそばず。夜半のすぎになりて道に人もなく、月のみあきらかなるに、丫鬟の童女ありて、雙頭の牡丹燈をかたにかゝげて、さきにゆけば後に、窈窕たる美女一人したがつて、西にゆく。喬生これを見て、やむことをえず、すなはち出行て、ちかくみれば、はなはだすぐれたる美人なり。年に約せば、十七八、くれなゐの裙、みどりの袖にして、ゆるやかにあゆむ。氣だかき靜、まことに國をかたぶくべき色なり。喬生心もまとぶばかりにて、つゐにあとにしたがひ行、あるひはさきになり、あるひはあとになりてゆくこと、半町ばかりにして云々」

「奇異雜談集」は、いつか機を得て出すやうに豫定されてゐる「續怪談名作集」に附載されることと聞いてゐる。それなれば、こゝに全部を引いて、この譯しぶりを一々原文と對比する必要もないやうに思はれる。たゞ、いかにも原文に忠實であること、また淡々たる筆づかひであることを一言しておけばよいやうに思はれる。しかも、また譯者に特別の用意のあることを附け加へねばなるまい。たとへば原文には、「生與女携手至家」とのみあるを「金蓮をばはしのまに居せしめ、女を中堂に請じいるゝなり」とつけ加へていふのであ

つた。同じ心から省略することのあるのも勿論である。

さらはいひながら、どうしても引用せねばならないのは、終の一節である。喬生、符女及び金蓮の黨に遭ふ者が、とかく病に犯されるので、人々は鐵冠道人に懇願する。道人が玄妙觀の小わつぱ奴、よしないことをいひおつたと呟きながら、行法を修して吏(つかひ)を呼び、三靈をかり出すところは斯う譯されてゐる。

——吏すなはち行て時をうつさず、枷鎖(かせくさり)をもつて三人ともにひいてきたり、むちをもつてうつ事はかりなし。血ながれてやまず。道人ことばをもつて、かしやくする事やゝ久し。三人のゆふれいみな諸伏していはく、あへてふたゝびたゝりをなし、人をわづらはす事あるべからずといふて、拜しさつて見えず、道人と吏と、ともにさりてかへるなり。翌日衆みな山にのぼりて謝せんとすれば、たゞ草庵のみありて、道人なし。又玄妙觀に行て、魏法師に謁す

「奇異雜談集」

れば、唖にして物いふ事、あたはざるなり。けだし鐵冠道人のなせるところか。

「けだし鐵冠道人のなせるところか」は原文にはない。これを加へたのが、作者の深切である。註釋になつてゐる。こゝには大い省略があつた。三靈の供書は片寄せられて「あへて一ふたゝびたゝりをなし、人をわづらはす事あるべからず」とのみある。道人の判詞には 然觸れなかつた。何か譯がありさうである。

幽鬼出でゝ人と契ることは、唐代の傳奇にしば／＼見るところである。精耗し、魂消して、人つひに死すといふのも、趣向としてさまで珍しくない。幽鬼冥府に罪を數められることは、むしろ陳套に屬する。「牡丹燈記」の妙はそれ等の筋を一つに纏綿した點にあつた。尤もその位の筋の複雜ならば、明代の譚詞小說、すなはち世話言葉で書いたものにはいくらもある。瞿佑の筆は、その頃の流行を避けて、時代の言葉で、典雅の趣を見せて、遠く唐代の傳奇を凌ぎ、魏晋の小說をも向うにまはさうとしたのである。前に掲げたやうな書き下しの文では、實は眼にも耳にも、ほんの片端しか感ぜられない駢儷體の美を限りなく發揮しようとするのが、彼の苦心である。その苦心の極まるところが、「剪燈新話」のどの條にもある詩詞であつた。「伊勢物語」「大和物語」をいはれてゐるやうに歌物語と稱するなら、これは唐の歌物語であつた。「牡丹燈記」では、それが三靈の供書と、冥官の判詞になつてゐるのである。富膽の文藻が最もさやかに見られる。

「奇異雜談集」の著者には、その詩詞を譯す腕がなかつたなどとは、滅多にいはれることではない。けれど、譯せる、譯せぬは別として、苦勞してまで譯す必要はなかつたらしい。不思議な事件を傳へることだけが、その人の願望であつた。

「牡丹燈記」を飜案した「伽婢子」の「牡丹の燈籠」では飜譯でないだけに、支那の香を出してはならない。時を天文とし、土地を京とし、喬生を荻原新之丞とし、女を二階堂の息女淺茅とする。「元夕張燈」をばはじめから精靈祭の燈籠にしてしまふ。また「燈籠のかざり物、あるひは花鳥あるひは草木さま〴〵しをらしくつくりなして、その中にともしびともして夜もすがらかけをく」としてそれとなく「雙頭牡丹燈」を說明するのであつた。もとより「奇異雜談集」がするほどの用意を腹においての飜案であつた。

飜案の中には、ところ〴〵飜譯の辭句も混つて居よう。「伽婢子」と「奇異雜談集」の飜譯の比較も出來ないことでもなかつた。喬生符女と邂逅する夜、符女がはじめて喬生にいひかけた言葉「初無二桑中之期一、乃有二月下之遇一、似レ非二偶然一也」を「奇異雜談集」は「舊(もと)見し人にあらず、月下にはじめて見る。もと知(しる)の心に似たり」と譯した。心やゝ原文と異なるところが見える。「伽婢子」は「みづから人に契りて待ちわびたる身にも侍べらず、たゞこよひの月にあこがれ出て、そゞろに夜ふけがた歸る道だに、すさまじや、をくりて給(たべ)かし」と譯した。桑中之期は、「集解」すでに示すが如く、詩の鄘風に出で、月下之遇は「李白」の詩に出づる。「伽婢子」のは、をはりの方こそ少しく離れ過ぎてみるものゝ、はじめの方は、修辭のあとをも心して譯してゐる。

努めて原文の華麗をうつさうとする「伽婢子」は、原文にないところをも加へて、あでやかに仕立てようとする。「奇異雜談集」が原文と共に淡くしるしてゐる始めの一節、門に倚つてものおもふくだりに、

いかなれば立もはなれずおもかげの身にそひながらかなしかるらむ

といふ原文にない歌をつけ添へてゐる。まして、二人がいひかはす夜の樣の文飾は、はるかに原文の上にあ

る。互に詠みかはす歌までが作り添へられてゐる。

それならば、「奇異雜談集」がもらした佚書と判詞とは當然巧みを盡して譯されてゐる筈である。それはなかつた。それどころか、四明山のくだりは全く省れてゐる。三人の鬮にあふ者、皆病みわづらふ事をしるしたあと、「荻原一族これをなげきて、一千部の法華經をよみ、一日頓寫の經を墓におさめてとふらひしかば、かさねてあらはれ出ずと也」とのみある。何故さうなつてゐるかは、やゝ推究に値する。

七

「奇異雜談集」の著者も、すでに心づいてゐたればこそ、元夕を註して、一年に三度天帝あまくだりて云云といつてゐるやうに、「剪燈新話」に見える冥官は、わが國俗が認める閻魔王の如く、佛教の上にのみ立つものでなかつた。「牡丹燈記」の玄妙觀の觀が明に示すやうに、道敎の系統に屬する。支那の戲曲小說に見るところ、大方これであつた。おもふに、「伽婢子」では、あのくだりをそのまゝにわが國の出來事に移すとすると地獄なり、閻魔王の概念が、あえかなる物語の興趣を破壞することをおそれたのでなかつたか。「剪燈新話」の作者が最も力を凝めて、冥府の幽暗を艶麗に轉じさせた佚書、判詞の駢儷文辭の美は、歌やうに引き直したが最後、却つて滑稽に墮ちはせぬかの懸念が、この武斷をさせたのではあるまいか。「伽婢子」のほかの條に「剪燈新話」の別話から、冥府の狀を叙したのがなくもない。それはさうしてもをかしくないもの、わが概念と衝突せぬ範圍に限られてゐることが注意せられる。

「伽婢子」の著者了意が、「牡丹燈記」のをはりのほどを切り舍てる時、どんなに殘りをしく思つたかは、

それと反對な處置をとつた場合から證明することが出來る。わが國ぶりにやす〳〵と飜案せられる箇所は、一度ならず、二度ならず、使ひこなすのであつた。

「剪燈新話」の二十話の中、飜案せられたのは十八話であるといふのは、殆ど正面からしたものに限つていふのであつて、殘る二話も裁斷したあとで仕立直してゐる。「牡丹燈記」も、その裁斷によつて、また新に二つの話をつくり出すのであつた。

一つは卷十の「祈りて幽靈に契る」がそれである。ゆくりなく幽靈に誘はれた喬生は、わざと幽靈に祈つて契をこめる北條新六郎となつた。平井城主上杉憲政の息女彌子の靈は、牡丹燈をこそ手にしないが、例の女の童を從ひて現はれるのであつた。家の者が壁を堀つて覗けば、女の聲はきこゆれど、姿は見えず、女の童と見えたは伽婢子らしかつたとあれば、まがふ方なき「牡丹燈記」であつた。たゞこの喬生はさすがに武士である。女の方でないも一つの幽靈を太刀もておひ拂ひもする。寛文の頃の飜案には、こんな武邊ものの混入も必要であつたのである。

もう一つは、「伽婢子」でないが、同じ了意の作、すなはち「伽婢子」の續編である「狗張子」の卷四、「塚中の契り」に見られる。隣翁が喬生の歸らざるを怪しみ、湖心寺、停柩の室に、生の衣裾の棺外に微露するを見、之を發けば、生と女と俯仰して門に臥してゐたといふ原文の一節が、この一話の趣向を立てさせたのであつた。原文もすでに塚中の契がどんなに濃かであつたかを暗示してゐる。了意はその暗示に從つて、塚を堀りかへす人々に對して、こゝの喬生すなはち筒岡權七をして「何者なれば人の語らひを醒すらん」といはせもし、杉原に書いた二人の歌をも塚中におかせたのである。たゞ作者は、「牡丹燈記」と同想におちさ

せまいとの考から、堀り出された時、權七未だ死せず、半年の後また亡魂に誘はれて死ぬことにしたのであつた。

かうまで露はでないものは、「伽婢子」にも「狗張子」の中にも、くりかへされてゐる。中にも「狗張子」の巻三「形見の山吹の事」は、特にひき出して、前の二話と共に三話と數へた方がよいかとも思はれる。

もとに溯つていへば、「剪燈新話」の話のおの〳〵には明代のその時分の巷説をさながらに取つたのもあらうが、多くは前代の創作を分解し綜合して、才人の才を縱橫に見せたのであつた。たま〳〵その書が日東の國に渡つて、當代の才人ばらによつて、同じ意圖の下に、同じ作用が起されたのに不思議はない。口から耳へ、耳から口へ傳承する文學は、永い年月の間には、變化もあり、混淆もあつて、一が二となり、三となつて、弘い地域に不思議を搖曳させるのである。紙の上の怪談の創作はこれとは違ふ。殊に支那の典籍よりするものはわけても違ふ。ずつと短い間に、時には同じ本の中でさへ、一を二にし、三にするのである。まして限りない摸倣踏襲は、その三を四にし、五にする。たゞし、その動きのうちにも、作者その人と、その時とに深い根柢を有してゐる。怪談物の研究の一條件はそこを尋ねるにあらう。研究はまた支那日本の創作から創作への分岐を追ふだけでは足りない。口碑巷說、或はまだ一度も耳より外に傳へてないものとの交渉を念入りに吟味すべきであらう。そこに怪談研究か他の様式の小說にない困難に出合ふのである。その困難を排して、同じ心理が筆と舌の場合で、どうまで情緒を異にするか、さうした後にその種の創作心理をたしかめようなどの問題は研究として、まだ〳〵遠い未來のことである。「伽婢子」「英草紙」「雨月物語」などの、最も弘く讀まれてゐるものゝ原據、わけて割合に取材範圍の狹い支那の原據さへ、一々たしかめられな

いのが國文學界の現狀である。どうして、了意庭鐘秋成の肚子裏のものを探りながら、共々にその出來榮えを批評しあふことが出來よう。さう思つただけでも、堪へ難いわびしさである。

八

「牡丹燈記」全體の飜案が、どういふ怪談物及びその他の文學に、どういふ起伏をなしてゐるかといふことは、話の運びから考へなくてもよいやうである。わたしはむしろ分裂のあとを辿るべきであつた。それも煩はしさを避けて、顯著なるものにとゞめねばならない。

「奇異雜談集」にも「伽婢子」にも見棄てられた冥府のくだりは庭鐘によつて拾はれたのである。庭鐘は「伽婢子」の卷四「地獄を見て蘇る」の原據である「剪燈新話」の「令狐生冥夢錄」などよりずつと委しい明の小說「警世通言」の「鬧陰司司馬貌斷獄」を本として「英草紙」卷三の「紀任重陰司に至り滯獄を斷くる話」を作つた。それと共に「牡丹燈記」の供書と判詞の形式からも暗示を得たのであつた。供書と判詞の駢儷美は、談議の言となつて、興味を史論に繫ぐこととした。輕い暗示にも倣く、そこからいろ／＼の意表に出づるものを作り出すのが、庭鐘飜案の常である。これも例の一つとして見るべきであつた。

これも同じ冥府のくだりであつた。符女喬生金蓮が冥官の前にひき出される。文に「鞭箠揮擊、流血淋漓、道人訶責」とある。これを具體的にとりなして、凄慘の狀を縱橫にしたのが「怪醜夜光珠」の卷四の「山田半七亡妻の責を正しく見る事」である。

三年以前妻に別れた山田半七は、文月十六日慈照寺の大文字を見に行つて道に迷ふ。僧一人小き挑灯をさ

げて來たのに逢ひ、案内せられてその庵にやどる。門の脇の小い穴から入る。穴は直に廣い座敷につゞいてゐた。僧はいふ、あやしき事ありとも聲ばし立たまふなと。しばらくあつて、鬼のやうな異形の者二十人座敷へ直る。上座の者が手を打つに從つて、痩せた女ども出て來てものを捧げ、念佛、題目、または光明眞言などを唱へては、内へ入る。その十一番目に來た女が半七の亡妻であつた。生前佛神へ詣でたことなく、それに悋氣深い罪などを數へられて呵責のかぎりを受ける。裸にする、背を割破られる、熱した鐵丸を五體四肢の上におかれる。見てゐた半七怒りに堪へて飛び出づれば、一切のものは消えて松風のみがさびしかつたとある。「牡丹燈記」のあれこれを點綴したあとが、極めて著しい。

喬生再湖心寺を訪うて、金蓮に迎へられる。「娘子久待、何一向薄情如レ是」といふ。拉れられて室中に抵る。女、坐にあつて生を數める。恨みのかず／＼を述べ立て、さて「妾恨レ君深矣、今幸得レ見、豈能相捨」といふ／＼、生の手を握る。「至二柩前一、柩忽自開、擁レ之同入、隨卽閉矣、生途死二於柩中一」この一段に見える女の執念は、あまりにすさまじい。その執念を他し女に對する妬みとしたならば、どうであらう。女の亡靈がもつと男を苦しめてから殺すとしたらどうであらう。秋成の飜案は凄愴の狀をうつして、はるかに原文を凌いでゐる。

「雨月物語」はこの集の中にある。卷三の「吉備津の釜」の約を說く必要もなささうである。しかし、吉備津の釜卜(うら)惡いに拘はらず、强ひて結んだ正太郎と磯良の緣の末は惡く、正太郎は妻をかへりみず、鞆の津の妓に性根を奪はれた後の事は一わたりいつておく方がよささうである。

妖は磯良の生靈に殺される。正太郎はその塚の前に泣く。塚にはまた新塚が並んでゐる。それに花を手向

けてゐる女に案内せられて、塚の主なる夫に別れて病み臥してゐるといふ妻なる者を見舞つてやらうとする。妻に別れた悲しさゆゑの思ひやりであつた。主の女が屏風を少し引きあけて、「珍しくもあひ見たるものかな、辛き報いのほど知らせまゐらせん」といふに驚けば故郷に殘した磯良であつた。正太郎はその姿のおそろしさに氣絶する。やつと蘇ると、そこには何もなかつた。隣人のすゝめに陰陽師から朱符をうけて戸毎に貼す。磯良の死靈は夜々來り襲ふ。「あな憎くや、こゝにも貼しつるよ」ときこえる聲はおそろしかつた。四十二日のもの忌みも終らうとする。もう夜は明けたと心安かに戸をあけるやがてに、軒にあなやの聲はして、正太郎の姿は見えなかつた。

秋成は隣人を通して、おそろしく、凄しいものを描いてゐる。

「或は異しみ、或はおそる／＼ともし火を挑げて、こゝかしこを見めぐるに、明けたる戸腋の壁に、腥々しき血灌ぎ流れて地に傳ふ。されど屍も骨も見えず。月あかりに見れば、軒のつまに物あり。燈火を捧げて照らし見るに男の髪の髻ばかり掛りて、外にはつゆばかりの物なし」

さきに秋成は死せる磯良を生けるものとしてうつし出した。案内せられた正太郎を見る顏の靑さ、たゆき眼の凄さ、指したる手の靑く細りたる、たゞそれのみをいうて鬼氣を紙表に横溢させたのである。さうしてまた、こゝの髻一つである。さすがに秋成は怪談壇上の獅子王であつた。

その人と京傳とを比べるのは、氣の毒に堪へないけれど、さうせねばならないのは、彼に讀本「復讐奇談安積沼」の作があるからである。これは一に「小幡小平次死靈物語」ともいふ。

小平次を殺した姦夫左九郎は、もうおもて晴れて姦婦お塚と共に棲んでゐる。小平次の亡靈はしば〳〵怪をなすけれど、强氣なお塚はさまで心にかけないでゐた。怪はます〳〵激しく、つひにお塚に狂氣となつた。一日賢しい祝部が來て、寃魂の祟あることを告げ、また朱で書いた神符を授けて戸毎におし、三十二日間身心を淸らかにせよと敎へる。

その夜三更の比、おそろしい聲がきこえる、「今夜はとりゆかんと思ひしに、にくき奴、こゝにたふとき符文を設つるよ」またの夜も「あなにくき奴、こゝにも貼つるは」のつぶやきが聞える。三十二日といふ夜しのゝめの空明けるにうれしく、厨の引窓をひらく。風さと吹くにつれて一團の陰火が飛び入ると見えたが屏風の裏にあと叫ぶ聲が耳をつらぬく。屏風のなかにはお塚の姿はない。

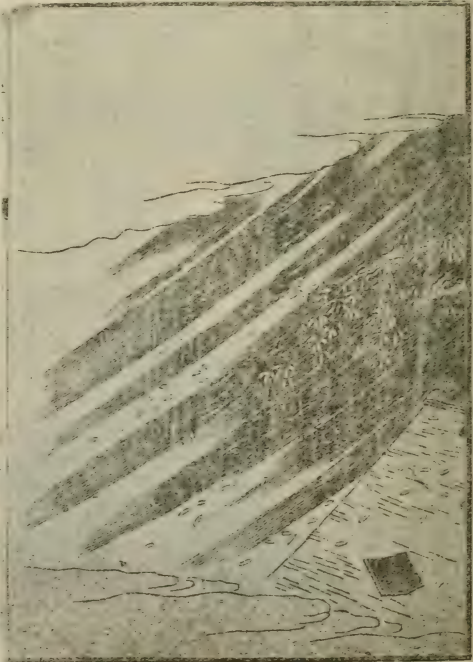
「或はあやしみ、或はおそる

安積沼」

おそる、ともし火をとりて、こゝ彼所を見めぐりけるに、窓ある壁に腥々しき血そゝぎ流れて地につとふ。されど屍も骨も見えず、月あかりに見れば軒のつまに物あり、ともし火をさゝげて見るに、たけ長き女の髪の毛ばかりかゝりて、外には露ばかりのものもなし」

まがふ方なき「雨月物語」の剽竊であつた。引いた一節だけでなく、こゝのくだりは皆さうである。しかし、男の髻とたけ長きと斷る女の髪の毛とは、凄さにどれだけの相異がある。京傳の加筆が折角の壁に痕をつけるあさましさを咎めねばならない。

壁に流れる血と、軒の端の髻だけをいつて、磯良が正太郎を殺すさまをあらはにいはないのが、秋成の筆のすごさである。剽竊した京傳もさすがに、文の上には加へなかつたが、つひにさし繪にあるまじいものを

さし繪

示した。二度目からの摺本には、さうでなかつたが、初摺本には丁寧に三度摺の血しほの色をさへ見せてゐる。愚や及び難いものがあつた。

「吉備津釜」の摸倣はこゝにをはつたが、京傳が秋成と共に「牡丹燈記」に據ることはまだつゞく。「牡丹燈記」には二人の道人があつた。魏法師と鐵冠道人である。「安積沼」の親部は魏法師に當る。鐵冠道人に當るのは、左九郎から金をかたりとる賊僧であつた。賊僧が因をなして左九郎は、安積沼に溺れた小平次と同じやうな苦しみを見せて死ぬ。これも小平次が亡靈の所行、すべては因果應報であつた。

この一條は京傳を通じて、讀本に於ける秋成の影響を示してゐる。その京傳と秋成との關係はまたひろく讀本と怪談の關係にもいひかへることが出來る。因果物語から獨立した怪談は、また讀本の世界に於て、勸懲の一筋の中に拘束せられることとなつたのである。永い間讀本を構成する要素としてのみ研究せられて、殊更に考へられなかつた理由である。

九

かういふ發展をつゞける「牡丹燈記」が、いふところの怪談の中でも聞えたそれが、怪談狂言作者南北などにかへりみられぬ筈はない。舞臺の上に若い女が牡丹燈籠を提げてゆくあでやかさ。そのあとのなまめかしさ。もと〳〵おそろしさと戀しさを綯ひ交ぜにするこの話は、歌舞伎の夢に最もふさはしい。

南北の「阿國御前化粧鏡」は文化六年の作であつた。その一番目、元興寺の場には、牡丹燈籠がなくてかなはぬ小道具であつた。まして腰元撫子がそれを提げ、銀杏の前と狩野四郎次郎元信のあとからつゞく場面

はそのまゝ「牡丹燈記」であつた。元信が案内せられた御殿にはお國御前がゐた。元信に掴むいろ〳〵の葛藤があつた後、土佐又平所持の佛像の奇特によつて、お國御前は死霊の姿を現はす。大ドロ〳〵で御殿は變つて荒寺となる。軒の牡丹燈籠は碎けて、花瓣はハラ〳〵と落ちる。古い佛前の燈籠となつて系圖の一巻が出る。お國御前の姿はきえて髑髏一つが殘る。お國御前に扮する者は、例の怪談の名優尾上松助であつた。

一度讀本に觸れ、歌舞伎に觸れるとなこと、すぐに考へは草雙紙へとおちる。これほどのものが、幾度となくくりかへす怪談流行の草雙紙の一隅を占めない譯はない。けれどそれを一々いひ立てると際限がない。むしろ、わたしは草雙紙の世界では、「牡丹燈籠」物から離れて、それを「剪燈新話」などでしめ括つたものを探し出すことに努めるがよささうである。さればとて、「剪燈新話」の

「阿國御前化粧鏡」

表題をもじつた「賢愚湊錢湯新話」などを云々するのではない。そんな類さへ二三にはとゞまらない。

立川焉馬が文化十一年に出した「古今化物評判」が丁度よい圖に當てはまる。これは角書して「大和屋、音羽屋、成田屋」といふやうに、これまでの化物の評判めかして、實は三津五郎、松緑、[illegible]郎の怪談芝居の禮讃の書であつた。中にも前年六月の森田座の「尾上松緑洗濯話」が核心をなしてゐる。

怪談狂言には作者南北と共に、どうあつても忘れてはならぬ松緑であつた。前名松助のお化上手であつた。早變りと仕掛に、妖怪變化の巧みを見せて、人々を嬉しがらせ、こはがらせる摩訶不思議の達人であつた。「古今化物評判」には彼に對する眞顔のほめ詞がある。それが二重にも、三重にも入用である。引用せねばならない。それには畫の趣向が伴つてゐる。いかなことでも活字に汚す譯にはゆかなかつた。

筆寫を凸版にかへたわたしは、その旁を短い註めくものに致さねばならない。何故の轆轤首であるか。「洗濯話」を傳へる焉馬の言葉を借りて註に當てる。

「時に狂言いろ〳〵ありて、松緑栗をすくうち、上にて市川門三今川仲秋にて笛を吹く。此音色に聞とれゐる所、蝶のむれゐるを見て、首段々長くなり、屏風よりなげしを傳ひ、鴨居の上の箱を嚙

みわり、一卷を咬へ、二階坐敷の屏風の中へ入る。その時團十郎出で首を斬れば、體はその首を片手にひきさげ現はれ出で、桃井播磨之介の岩井梅藏、遠里姫に松本米三、この二人をうしろがみに引とゞむるこのおそろしさ云々」

それは必ずしも、わたしには肝要でない。引用を欲したのは本文にある。「茶屋舟宿や髪結床剪燈新話」の髪結床から剪燈新話へのつゞきは何であるか。文化八年出板の「浮世床」は一名を「柳髪新話」といつた。伊藤單朴の「錢湯新話」を踏へてゐる「浮世風呂」と共に、一筋の絲を「剪燈新話」に繋いでゐるのである。

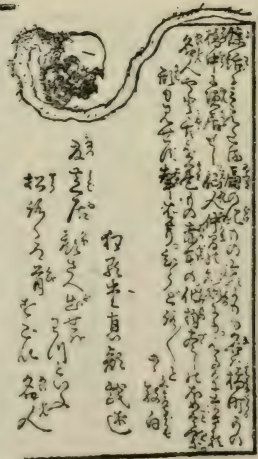
「清風先生雜本素と餘話に見えたる」の「餘話」はいふまでもない、「剪燈餘話」を意味する。その中に「武平靈怪錄」といふ一話がある。莽然たる空庵のさびしい夜を、破れ硯と、禿筆と、破れ蒲團と、古團扇がおの〳〵身の上を詠み出す。と見る、

「古今化物評判」

一叟の縞衣竹杖、態度閑雅、兩袖翩々として搖擺して進む。清風先生羅本素の來たのである。これ實は芭蕉の怪であつた。泥像の怪また詩を吟じ、羅本素も長詩を歌ふのであつた。

こゝにも附けそへねばならないのが、了意の飜案であつた。「狗張子」の卷六に「鹽田平九郎怪異を見る」といふのがある。それには芭蕉の精魅は省かれてゐるが、破れた團扇と、破れた笛と、小さい帚木とがおの／＼漢詩を吟ずることになつてゐた。

圓朝」牡

どこまで續く「剪燈新話」の勢力であらう。「餘話」までが、つれ添ふのであつた。さればこそ爲永春水なども見よう見眞似に「椿說鬼魅談語」などを作つて見たくなるのである。これは草雙紙の合卷であつた。

「牡丹燈籠」

漸く圓朝の「牡丹燈籠」に辿りついた。舞臺の怪談は早速に寄席の怪談ばなしとなつた。江戸の社會に於ける舞臺と寄席との約束がさうさせるのである。あれに松助の名人があれば、これには林屋正藏の上手がある。いふところの江戸怪談ばなしの開祖であつた。その後をうけた圓朝に就いて、またその「牡丹燈籠」に就いてくど／＼といふ必要もあるまい。けれどあのカラコン、カランコロンにだけは觸れておきたい。

こゝの喬生、萩原新三郎は侍女のお露が自分に戀して焦れ死をしたのを氣の毒に思つて、毎日念佛三昧で暮してゐた。

「今日しも盆の十三日なれば、精靈棚の支度などを致して仕舞ひ、縁側へ一寸敷物を敷き、蚊遣を薫らして、新三郎は白地の浴衣を着、深草形の團扇を片手に蚊を拂ひながら冴え渡る十三日の月を眺めて居ますと、カラコン／＼と珍らしく駒下駄の音をさせて、生垣の外を通るものがあるから」

見るとお露と牡丹燈籠をさげた女中のお米であつた。それから二人は夜な／＼通つて來る。新三郎は間もなくそれが亡靈であることを知つた。さう知ると駒下駄の音がすごくひゞく。

「傳通院の八ツの鐘がボーンと忍ケ岡の池に響き、向ケ岡の清水の流れる音

「傾城淺間曾我」

「愛染明王影向松」

が、そよ〳〵と聞え、山に當る秋風の音ばかりで、陰々寂寞世間がしんとすると、毎(いつ)もに異らず、根津の清水の下から、駒下駄の音高くカランコロン〳〵とするから、新三郎は心の裡でソラ來た」とおそれおのゝかざるを得ない。

「剪燈新話」の隣翁に當る伴藏も亡靈と知つてゐる。その耳にもカランコロン〳〵が聞える。ぞつと肩から水をかけられる程怖氣立つのであつた。

四朝のはなしのはじめての速記錄、明治十七年「怪談牡丹燈籠」のさし繪は、このカランコロンを裏切つてゐる。そればかりでない、亡靈を目睹した者の言葉としても「裾が見えないで腰から上ばかり、まるで繪に描いた幽靈の通り」とある。それと駒下駄の矛盾がいさゝか問題となり得る。

「牡丹燈記」にこそないが、支那の記載は幽鬼の發音を傳へる。今もまたさうである。わが國のも、古くは「ものゝ足音」などの言葉もあるやうに、決して腰から上だけではなかつた。こゝに收載せられたものゝ挿繪の中でも古い頃のものには幽靈には足がある。その他の例でも元祿板の「傾城淺間曾我」の虎御前の生靈に足がないのは、替紙の顏を書きそへたといふだけであつた。隨分「四谷怪談」の提灯拔けを考へてもよい、元祿頃の淨瑠璃本「愛染明王影向松」の宮城野の怨靈であるが、裾をひくどころか、足がない筈の女のあやつり人形でありながら、別に二つの足か書きそへてある。

その足がどうしてなくなつたか。心で描き　筆で描く幽靈が腰から上だけに治定したのは、どんな理由があつてのことか。考へれば考へるほど、複雜な問題である。支那に資料を索めて得ず、或は南洋系統の幽靈までを參照する必要もあるかも知れぬ。讀んで厄介な怪談物は　また眺めても面倒なさし繪を有つてゐる。

そこに大い興味が伏在する。

「牡丹燈記」の飜案の話が、つい長くなつたが、どの飜案物にも、よし支那のにもせよ、日本のにせよ、これだけの手續をとるのが、本來でなければならない。わたしの貧しい知識は推定を全部に亘つていひ得るまでにはなつてゐない。またさうする事はやゝ特殊の研究に屬しもしよう。收載の書目おの／＼の解說についてはおのづから別途に出づるを要する。

一〇

伽婢子　大本　十三冊

瓢水子松雲の作、寛文六年の刊行。

松雲の傳は甚だ詳でない。自序に署名して瓢水子松雲處士といひ、雲樵の序に松雲處士といふので、その浪人であることが推せられる。「伽婢子」の續編「狗張子」の義端の序に「洛陽本性寺の了意大德は極めて博識强記にして特に文思の才に富めり。生平の著述甚だ多し。晩年に及びて筆力ます／＼老健なり。去年庚午の春、徃に編集せる伽婢子の遺せるを拾ひ、漏れたるを搜りて狗張子若干卷を作り、その續集に擬へんとす。其の年の冬に至り、既に七卷を撰び輯む、翌年辛未の元旦、意らざるに遽然として寂を示す」とある。いつか松雲は僧籍に入つて了意と稱したこと、また本性寺の住であつたことが考へられる。「狗張子」の自序の署名は「洛本性寺昭儀坊沙門了意」であつた。

「御前御伽婢子」の序には「一向の粋僧」と見えてゐる。都の錦はともすれば奇矯の言を弄す。粋僧の義をどう解してよいか知らないが、濶達洒脱の風をおもふに足りる。義端の序にいふ辛未とは元祿四年であつた。歿した年はさだかに知られないが、高齢の死であることは明である。

長い生涯の間に、松雲の了意の著書と稱するものは多い。義端の言すでにこれを證明してゐる。しかし、その數の夥しいのと、著作の範圍の廣さから、著書の署名、またその頃の書籍目錄作者附にある了意、松雲、淺井了意、淺井松雲了意、本性寺松雲、瓢水子松雲處士、桑門釋了意をすべて一人と見ることに懸念を懷かせる。されば柳亭種彥は「浮世物語」「江戶名所記」「武藏あぶみ」「錦木」の淺井了意と「伽婢子」「狗張子」の了意を同名異人と考へもする。果してさうであるかどうかは、書籍目錄以外に資料が發見されない今はつひに解決されない問題であつた。

御伽婢子巻之一
○龍宮の上棟

寛文板

何はともあれ、「伽婢子」と「狗張子」の作者は同じ人の了意松雲であつた。しかも、二つの書名はともに子供に關してゐる。狗張子はいふまでもない、伽婢子は天兒の名殘、後のはひ〳〵兒これである。何故にさう名附けたかといへば、子供相手の本であり、童家勸懲の書であると、自序にいつてゐる。文人はとかくこんな戯をいひたがる。それに敎訓物流行の折柄とて、なほ斯うもいつたのであらうが、つひに「遠く古を取るにあらず、近く聞き傳へし事を載せ集めて記し著はす物」でなかつた。「牡丹燈記」の飜案が、もうその裏切りを明に示してゐる。

あの飜案はどちらかといへば原文に忠實なものであつた。皆がさうであるとはいはれない。その例として巻一の「眞上阿祇奈君龍宮上棟の文を書きし事」をとる。

巻頭に掲ぐるだけに、殊に心した飜案であつた。原文の「剪燈新話」の第一話「水宮慶會錄」では、至正甲申の歳、潮州の士人余善文が水宮に

「剪燈新話」

詣ることになつてゐる。（潮州、句解本潮州に作る。明刊本によつて改む）それを江州の勢多にするのは、俗說の龍宮をむかへ、時を永正にしたのは、至正に因むだけであつた。善文は大紅船に乘る、兩黃龍が船を挾んで飛行する。龍船の概念は、そのまゝはわれに移せさうもない。そこで眞上をして驪馬に乘つて、水中を驅けさせる。馬には龍種といふことも考へてよいのである。

　善文が廣利王の囑をうけて草した文辭は、瞿佑が最も力を致したものである。了意の文は形を似せて、意を異にする。また新に詩を作りそへ、また歌までもそへてゐる。飜案者はおのが才藻の必ずしも原作者に劣つてゐないことを示したかつたのであらう。

水宮慶會錄圖

　原文には美女が淩波曲の詞をうたひ、歌童が採蓮曲をうたふことがある。それをそのまゝにうけるのは智慧がなさ過ぎる。故に蟹・詞と、龜の詞に代へたのである。原文には、水宮慶會詩二十韻がある。瞿佑が誇が

擲せられる。了意は別に新しい詩や歌を作つてまで、その詩に稱つかなくてもよい。事の奇妙が「御伽婢子」のはじめからの計畫であつたからである。さうして晉唐の諸小說を參照して、能宮城の有樣、また雷公鼓、喞風の革嚢、洪雨の瓶の不思議をしるしたのである。

これほどまででなくとも、「新話」のも「餘話」のも、また晉唐の小說、及び隨錄のも、努めてもとの句のないやうにと心掛けてゐる。從つてわが口碑の類は、出來るだけ利用されてゐる。卷十一の「土佐國の狗神附金蠶」などは、狗神の不思議を傳へるが主か、それとも附け加へた金蠶が主か、何せよ、樂屋內を一寸のぞかせた形として注意して、よささうである。

元祿板題簽

元祿板奥附

その頃としてはまづ巧な飜案の書が、世にもてはやされぬ筈はなかつた。元祿十二年には再板が出た。新に板を彫らせた半紙本である。內容こそ違つてゐないが、繪は異同が少くない。一丁の繪を半丁の繪に改め、半丁のを二つ並べて一丁のと紛はしくしてゐる。文政九年に三板が出た。これは江戸板、元祿板

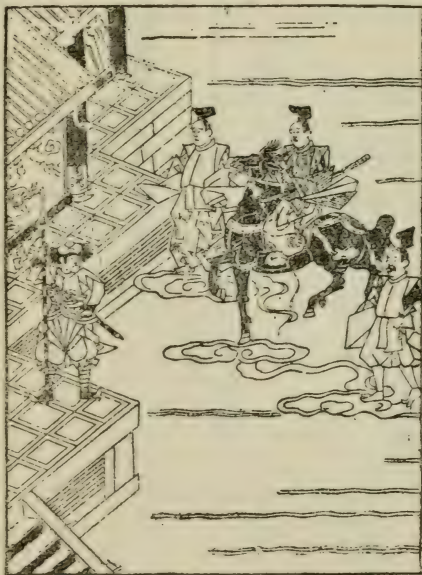
をそのまゝに用ゐたのである。

天和三年には「新御伽婢子」が出た。これから「伽婢子」の摸倣が矢つぎ早やに出はじめる。尤もその以前、元祿三年の頃、作者自身續編の筆を執つてゐた。

狗張子 大七册

了意はもつと書きつゞける豫定でゐたが、病歿して七卷のみが殘つた。京の書肆文會堂主九兵衞はその遺稿を出板した。義端の號で書いた序の一節に「それ此の書は了意大德晩年思ひを究め精を研きて、筆作せる眞跡にして、是れ實に大德遺訓の形見なるをや、是故に今その眞蹟一字も改めず、梓に彫め、世に行ひぬ」とある。

元祿板さし繪
本文二二三頁參照

収められた話の中には、また「剪燈新話」の筋を仕立直したのもある。勿論「伽婢子」と努めて重複せぬ

やうにと、時と處とに工夫を凝し、事の運びにも變化をもとめてゐる。李昌祺の「剪燈餘話」が「新話」の後を承けてゐるやうに、「狗張子」も「餘話」の飜案の方が多かつた。飜案ぶりは前とかはりがない。例はすでに、清風先生羅本素を說くとて、卷六の「鹽田平九郎怪異を見る」の原話「武平靈怪錄」に就いて一わたりはいつた。別に例を擧げるまでもない。ただし、原文は怪を見る以前に、項家の興亡を語つてはゐるが、飜案で武田家の滅亡をいふが如き詳細はない。そこに相異が見られる。「狗張子」と「伽婢子」との間に、大い差があるとすれば、「狗張子」に於て、より多く治亂に關する筆を見ることである。しかも、武田家にかゝる事作が多い。何かの理由があるやうに思はれる。

「狗張子」は「伽婢子」よりも唐代の異聞瑣語に據るのが多い。中には全く飜譯といつてよいのもある。最も短いのを選んで飜譯ぶりを見るのも惡くはあるまい。卷二、「死して二人となる」の原文を擧げる。杜青

元祿板さし繪

本文二四頁二五頁參照

萬の「奇異記」の一つである。「唐人說薈」に收められてゐる。例の書き下しにする。

「貞元の初、河南少尹李則卒す。未だ殮せず、一朱衣の人あり、來つて刺を投じて弔を申べ、自ら蘇郎中と稱す。既に入りて哀慟すること尤も甚し。俄頃にして屍起ち之と相搏つ。家人皆驚き走りて堂を出づ。二人門を閉ぢて毆擊し、暮に及びて方に息む。孝子乃ち敢て入り、二尸の共に臥して牀に在るを見る。長短形狀、姿貌鬚髯、衣服一も差異なし。是に於て族を聚むるも識る能はず、遂に棺を同じうして之を葬る」

「徇葉子」はまたわが古典を引くことが「伽婢子」にまさつてゐる。「源氏雲隱抄」「伊勢物語抒海」の著者でありさうなこの人に、それがあるのは不思議でなかつた。それにしても、元祿の頃までは廣く聞えたその博識も、ずつと後の嘉永頃には、もう一般には認められなくなつたのであらうか。嘉永四年の京都丁字屋板、古板を求めて摺り出したものゝ署名、「近松信盛著」を輕い餘興として讀めるのも面白い。

怪談 小夜時雨（さよしぐれ）　南仙笑著聞集　全五冊
近刻

文政九年丙戌正月補刻

大坂　前川六左エ門
京　丁子屋平兵衛

三板伽婢子奥附

さうなると、義端の序文が邪魔になる。そこで惜しげもなく塵してしまつた。了意の序文はともかく、「洛本性寺昭儀坊沙門了沙門了意」が邪魔になる。これを削つて「近松門左衛門信盛」と入木したけれど「了意」「松雲之印」をそのまゝに殘して、馬脚を露はすのも、愛嬌であつた。

「伽婢子」「狗張子」の後塵を拜さうとする書の中で、ほんの一言いはずに濟ますことが出來ないのは「玉帚木」である。「狗張子」を出板した林義端の作、元祿九年の出板である。その前に「玉櫛笥」の作のあつたことは「玉帚木」のはし書に見える。

文會堂に坐して、雜話小說の新なのを見る每に、筆寫しておいた。また立ち寄る客から鄉里の奇話を聞いてかきとめておいた。「玉櫛笥」七卷はさうして出來た。「釋了意狗張子の續集になぞらへり」と序にあるその遺漏が「玉帚木」となつたとも見える。

二

「剪燈新話句解」が訓點を附けて飜刻されたのは慶安元年であつた。「剪燈餘話」のはずつと後れた元祿五年であつた。易々と讀まれて、寛文の飜案の腕前が今更に驚歎せられることになつたのである。治國平天下の道を學びながら、人々はこんな新しい怪異を通して、遠い支那へなほ一段と親しみを加へるのである。今でこそ疑惑の眼で、その署名を見るのであるが、當時は誰も深い信用をおいて、讀んだらうとおもはれる羅山の怪談に關する著書までがあつた。

吟畢撫掌大笑傍若無人忽風約雲開月光穿戸隱
隱見諸人狀貌或矮而體方或瘠而頭銳或黑面而
一臂甚長或烏帽而一軀極短徐行者翩翩然郤披
毿屹立者亭亭焉而倚壁寂後一老頸若生鱗仲和
異之方欲諦視僧忽曰清風先生羅本素至矣衆皆
起迎進見一叟縞衣竹杖態度閑雅兩袖翩翩搖擺
而進揖衆客而言曰諸友今夕之吟樂乎原顏曰先
生何後也各誦所作呈之先生曰諸公自道甚佳但
不免爲外客所怪以禮曰客雖未毫然草晩當與上

「剪燈餘話」武平靈怪錄中の一頁

怪談全書　大本五冊

元祿十一年板、卷首に林道春と署し、奥附に羅山子作之と見える。あの林羅山の作であることを確めてゐる。鴻儒またかゝる書を著はしたといふことは、當時またその後の小説家にとつては、肩身の廣い譯である。こゝには一例を擧げておく。伊丹椿園はその著「怪異譚叢」にかう書いてゐた。原文は漢文である。

「漢文を譯し傳ふるに國字を以てすれば、則ち方言土音容易に似て容易に非ず。鴻儒碩師と雖も間謬誤あり。慶元の時に方て羅山林先生博洽を以て名一世に高し、講習の餘閒、怪談全書五卷を著はす、是より其の後好事の者、傳效して廣く海内に行はる云々」

その道春は諸書を涉獵して、奇異の事に遭へば卽ち錄した、さうしてこの一書をなしたと見られる體裁である。了意な

剪燈繪」

どが、努めて原據を示すまいとした態度をかへて、一々出典を擧げてゐる。まゝわが國のと合せ錄することもある。杜鵑巳が卵を諸鳥の巣の内に入れてかはしむことをいつて、倭歌の鶯のかひこの中のほとゝぎすとよめるもこの事にやといふ類である。

出典には「後漢書」「後魏書」「吳越春秋」などの史書も見えるのが、志怪の書が多かつた。「異聞錄」「捜神記」「幽冥錄」の類である。しかし、最も多いのは「太平廣記」「古今説海」中のものであつた。「剪燈新話」からも一條を拔いてゐる。「金鳳釵」である。これ等はもとより、原話の要を約したものであるが、選擇はよい。少くとも後の作家が飜案の材となつたものが選ばれてゐるのがよかつた。たとへば「淳于棼」は馬琴の「南柯夢」の據りどころ、「馬頭娘」また同じ人の「八犬傳」の伏姫の原形であつた。「歐陽紇」は「繁野話」の「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」「魚服」は秋成の「夢應の鯉魚」と同じ出所であつた。當時どんなものが喜ばれてゐたかを知るには、飜案の裏にまはつて考へるよりは、話が早い。怪談物

話「武平靈怪錄

を考へる上にはなくてかなはぬ典籍であつた。

こゝに注意しなくてならないのは、いふところの譯詞小說が一部も見えないことである。

そんな事は、はじめから問題にならなかつた。譯詞とは平談俗語を意味する。その頃でいふ唐音を解さないと容易に讀めさうもない。羅山先生の博治も未だこれに及ばなかつたのである。けれど唐音の學は早くから存してゐた。その廣く世に行はれたのは長崎の人岡嶋冠山を俟たねばならなかつた。すなはち神官の學を一に崎陽の學とまでいふのであつた。江村の北海の「授業編」の所說は最も

遊玄信盛著
伽婢子 前後 全部七巻
菱川師宣画

嘉永四年辛亥の春 平安書肆 正寶堂誌

嘉永板見かへし（解說六七頁參照）

簡明にその間の消息を明にする。

「抑唐音の吾邦に行はるゝ事、元和より以前は姑く置、正保の頃朱之瑜、陳元贇など歸化の後其の人に親しかりし人は、やゝ唐音に通じたる人ありけれども、未だ汎く世間へ流布せず、余幼穉の頃までは長崎の譯官、黄檗の僧徒ならでは知らぬ事の樣に人々おぼえて、京師など是を主張する人まれなり。岡嶋援之、長崎より京大阪へのぼり江戸へも赴きて其業次第にひろまり、唐話纂要、雅俗語言などいふ類ひの書ども多く、梓にちりばめて世に行はる云々」

> **怪談全書巻之一**　　林道春
>
> 望帝　前書已有之　不及再書
>
> 鼈令ト云モノ荆國ノ人ナリ。死シテ其屍ナガレテ江水ニウカビ。又人トナリテ蜀ノ國ヘユク。蜀ノ王望帝ニマミユ。直人ニアラザレバ望帝位ヲユヅリテ。鼈令ヲ宰相トシテ。ヤガテ王トシテ望帝ノガレユク。死後ニ化シテ鳥トナル。其名ヲ杜宇トシ又杜鵑ト號ス。杜鵑子ヲウムトキ諸鳥ニナ其子ヲカフ。是ハムカシ蜀ノ王ノ魂ナリトテウヤマヒアハレム故ナリ。或ハ杜

援之は字、後玉成に改めた、名は明敬、後璞に改めた。冠山はその號である。彼は寶永元年の頃はすでに京にゐた。文會堂は林義端を訪ねては、支那の怪異に話がはづんだ日の多いことも考へられなくはない。さうして譚詞小説の筋を語りつ聽きつする光景も想像される。「雲合奇蹤」の譯「通俗元明軍談」また訓點を

附した「忠義水滸傳」の出板の相談もその間に出來たのであらう。「元明軍談」には義端の序がある。中に「去秋請譯解英烈水滸二傳而行于世、今春英烈傳先成登梓」と見える。「元明軍談」は一に「通俗皇明英烈傳」といつた。寶永二年の刊行に係る。

冠山が唐音宣傳の努力はすさまじい。荻生徂徠などもすつかり參つてしまつて、彼が口眞似にいそがしかつた。後には唐音に關する著述が多い。初學のために、二字話、三字話からはじまつて、常言に入らせ、しまひには一寸した和漢の奇談ぐらゐは話させようとしてゐる。斯うして段々と世間は譯詞小說への途を拓いてゆくのであつた。譯詞小說の讀まれるところに、日東の國に新な怪談物を加へてゆくのである。

さう考へてみると、どうしても忘れられない岡白駒であつた。京儒にして小說に熟したその人は、明代の短い小說の中から選び、おの〳〵數篇をとつて「小說奇言」「小說精言」などを著はした。訓點を加へ、譯義をそへたのもある。奚疑齋著

唐話纂要卷之六

有點四聲　去入　上平

孫八救人得福

昔在長崎有孫八者。膂力過人。遊俠自得。後有事故而被官逐放。遂爲下賤游漢。而流落京師。旅宿於五條橋邊。賣烟爲生。身有少許錢鈔。則沽酒邀客。定欲盡醉。未嘗有顧後寬前。而拘于小節也。時値七月。十三夜孟蘭盆。家家張燈。處處作戲。若男

名の「小說粹言」またその撰と考へられる。これ等は寛保寶曆に亘つてなされてゐる。

白駒が題するに「言」を以てしたのは、私にいふところの明代の「三言」を思ふためであつたか。「三言」はすなはち「喩世明言」「警世通言」「醒世恒言」である。馮夢龍の編に係る。そのうち「喩世明言」は「古今小說」ともいふ。秋水園主人の「小說字彙」の引用書目にはその名が載せられてゐる。大正の震火に遭つて「通言」と共に喪つた家藏の書も、やはり「古今小說」であつた。

白駒の頃は冠山の譯の「通俗忠義水滸傳」も遺著として出板せられる氣運になつた。その長編に倣ふわが讀本もそろ〳〵準備されねばならぬ。「三言」の中の短いものゝ飜案がそれであつた。しかし、さういふのは、後からの話である。當時としてはそれ等の短い「怪談」が、立派な獨立性を持つてゐたのである。

飜案の種本は「三言」だけでない。「三言」から抜萃した「今古奇觀」もあつた。また「拍案驚奇」もあ

奇談遣倦

孫八救テ人ヲ得ル福ヲ事

昔在長崎ニ孫八ト云フ者アリ。膂力人ニ過キテ。義俠ヲ自ラ得ケル。後事有テ逐放セラレ、遂ニ一ト箇ノ游蕩漢トナリテ京都ニ流落ス。五條ノ邊ノ人ニ旅宿ノ細ヲ賃テ世ヲ度ル。毎ニ少許ノ銭アルトキハ則チ酒ヲ沽テ悶ヲ遣ヘ只モ醉センヿヲノミ欲ノ。後ヲ顧ズ。窮テ小節ニ拘ルヿアラザリケリ。一年程ニ七月十二夜ノ盂蘭盆ノ時節ニ至リ、家々ニ燈籠ヲカケ。處々ニ戯文ヲオドル。歳ニ京都ノ繁華天下ニ比セナカリケリ。惟リ孫八ハ旅宿淒寞ノ酒後ニ…ケル處ニ。忽チ衣服端厳ニシテ。衣冠整々タル官人徑ニ其ノ前ニ至リ、物ヲ云ノベテ。孫八ニ向テ宣フハ。我今汝ニ頼ムキコト有テ特

「唐話纂要」

つた。「西湖佳話」もあつた。その頃、この種のものがどんなに讀まれてゐたかは、「小說字彙」の引用書目が最も明に敎へてくれる。そしてその數の意外に多いのに驚かされる。

二

古今奇談 英草紙　半紙本五册

署名、近路行者著述、千里浪子訂正。序文の署名、十千閣主人。寬延二年出板。

古今奇談英草紙後編 繁野話　半紙本六册

署名、近路行者著、千里浪子正。序文の署名、十千閣主人。明和三年出板。卷數五、その五卷を第五册六册に分けてゐる。

古今奇談 莠句册　半紙本五册

小說精言 卷四　（二十一）

了幾年象棋壽並八十餘而終陳多壽官至僉憲朱
氏多福恩愛無比生下一雙兒女盡老百年至今子
孫繁盛這回書喚做生死夫妻詩曰
從來美眷說朱陳　一局棋枰締好姻
只爲二人多節義　死生不解賴神明

譯義
東西街 南北ヲ横トシ東西ヲ縱トス ○本分 己ガ分ヲ守リ外ヲ求ムル意ナキ義也故ニリチギト譯ス ○寒飯 俗語ニカナキ滴ヲ寒酒ト云サイナキ飯ヲ寒飯ト云 ○說那裡話 是ハ何事ヲ云玉フゾヤ トナレル事ヲ勸ムルヲ白白地做ト ○白白地 ヲ不敢當ノ辭ナリ ○白識的 貨ヲ取ラズニカ作ル觸物 ○下禮 凡進物贈物ヲ皆禮物ト云此禮ハ結納ノ贈物ヲ云故ユヒイレト訳ス ○庚帖

「小說精言」

署名、近路行者著、千里浪子正。序文の署名、十千閣主人。天明六年出板。

席上奇觀 垣根草　半紙本五冊

一に「古今奇談墻根草」といふ。署名、草官散人纂述、十六公子校訂。洛西隱士某の序文に、近頃故簏の中に垣根草と題するものがたりを獲て剞劂に授くるよしをいつてゐる。菅翁某の附記と共に、例の假托と思はれる。

署名は違つてゐても、實は都賀庭鐘一人である。「垣根草」にはなほ續編があつた。「古今武將外傳」の題名で出板する豫定のあつたことは、隱士某の序文に見えてゐる。つひにその運びに至らなかつたやうである。

「都賀氏、名は庭鐘、字は公聲、大江漁夫と號す、又辛夷館とも。通稱六藏、大阪の人、儒を業とす。上田餘齋翁は此人に學べりと云」蜀山人の「一話一言」にかう見えてゐる。庭鐘はまた集居主人とも六藏道人とも號した。「開卷一笑」の飜刻と「者婆演義」の飜譯「國字演義醫王耆婆傳」は集居

古今奇談英草紙第一巻

㊀後醍醐の帝三たび藤房の諫を折く話

主人の名によつてなされてゐる。その他の著述も少くない。中に「狂詩選」の著がある。明清詩中狂詩のものを選び錄してゐる。その好みか「英草紙」その他に目える。彼の自作の詩と相通ずるふしが多い。

庭鐘は誰から唐音を學んで、譯詞小說を讀むやうになつたのであらうか。今日に於ては知るよしがない。彼は若い頃、京都に遊學したといへば、或は岡嶋冠山等の主唱にかゝる唐音流行を追つたものであらうか。

彼はまたわが古典にも少なからぬ理解を有してゐた。これもその頃の國學ばやりがさうさせたのであらう。この二つの知識が優秀な飜案家として立たせたのである。儒にして醫を兼ねるこれもその頃の風であるが、早くから小說家の方に聞えてゐたことは明和の「三ケ津學者評判記」から知られる。

古今奇談繁野話第一巻

(一)雲魂雲情を語て久しきを誓ふ話

「本ヤ組 小說家の學者さうな。「頭取」左樣でござります。あれこれ小說が板にござります。作は紅功者に見えます。」

「英草紙」「繁野話」「莠句冊」に收めたのがおの〳〵九話、「垣根草」に收めたのが十三話、どれも基づくと

ころがある。わたしは悉くそれを闡明することが出來ない。ある程度にはあぶなつかしい推測も出來さうであるにしても、今それを説く餘裕はなかつた。

それにしても知り得る限りに於ては、庭鐘の飜案ぶりは多樣であつた。殆ど逐字譯と見られるのもあり、思ひ切つて趣向を變へたのもある。飜案の對象も、話詞小説だけでなく、傳奇小説に據るものも多い。たゞし飜案によつて半ば支那を離れながら、半ば支那を殘さうとする作風にはかはりがない。「伽婢子」及び「雨月物語」と異なる所以である。その何故なるかは、最も推考に値する。

逐字譯の例としては、もと「喩世明言」にあり、また「今古奇觀」にあるために、容易に見ることの出來る「金玉奴棒打薄情郎」と「英草紙」の「馬場求馬妻を沈めて樋口が聟と成る話」とを讀みくらべればよい。これはもとより話詞小説に屬する。傳奇小説からの飜案の例としては「繁野話」の「紀の關守が靈弓一旦白鳥に化す話」をその原據「任氏傳」と比較すればよい。これはまた飜案者が「今昔物語」の「人妻化成弓後成鳥飛失話」を參照したことを示すことになる。わが古典をどう利用したかといふ例としてもよかつた。

庭鐘が飜案の技倆を見せすぎるほど見せてゐるのは、「英草紙」卷頭の「後醍醐の帝三たび藤房の諫を折く

話」であつた。原話は「警世通言」にある。わたしは藏して私に誇とした「通言」を火に奪はれた今も、このものが「小説粋言」に収められてゐることを喜ぶ。それによつて讀み合はせることにする。尤もこの比較の結果はかつて「讀本の發生」と題した一小論文で發表したことがあつた。今その要を約するにとゞめる。

「通言」の「王荊公三難蘇學士」は荊公王安石が蘇東坡の聰明を恃むことを難詰すること三度に及ぶ話である。東坡の輕薄は荊公から疎まれて湖州の刺史となり、三年の後また荊公の邸を訪ねる。主人の机には書きさしの詩があつた。「西風昨夜過園林、吹落黄花滿地金」菊花はしぼみこそすれ、何の落ち散るものか、さてはこゝの主人やきが廻つたなと例の早合點する。そしてその二句をついで、「秋花不比春花落。説與詩人仔細吟」と書きしるした。

荊公は東坡の輕薄を憎んだ。また彼が黄州の菊花の落瓣を知らぬことを情なく思つた。黄州團練副使に遷した。東坡は黄州に赴任した秋、ゆくりなくも後園の菊が滿地金を鋪いて枝上一朶をとゞめないのを見た。

東坡ははじめて荆公がおのれをこゝに配した理由を知つた。

　東坡は黄州から上京する。途瞿塘三峡を過ぐる。三峡とは上峡、中峡、下峡である。さきに荆公は陽羨の茶を服するために中峡の水を欲した。使を以て致すやうに東坡に囑しておいた。をりから秋後冬前、水勢はすさまじい。東坡は三峡の賦を案じわづらつた擧句、殊に旅のつかれも出て、うとうとしてゐる中に、もう下峡にかゝる。覺めて水手に相談したが、また溯るのは容易でない。三峡はずつとつゞいて居ります。上峡から中峡へ、中峡から下峡へ、晝夜の區別なく流れて居ります。どれも同じ水、よい惡いがありはしませんといふ者があつた。いかにもさうだ。あの荆公の杓子定規だつたと考へた東坡は下峡の水を汲んで中峡の水と稱した。

　荆公はその水を煮、その色を見て、下峡の水なることを斷じ、且三峡の水の質に異ある所以を示した。東坡は聰明に過ぎてまた粗忽をなしたのである。

荆公は東坡をして左右二十四櫥の書籍を亂抽して、その中から一句をいはせる。直にいひ添へる下句に誤がなかつた。東坡はその中のある一句を解しかねて、要なき言を弄した。「如意君安樂」の上句と、「竊已啖之矣」の下句の解釋である。そして荆公からたしなめられた。また荆公からその句に對を要められた。それも答へることが出來なかつた。かうして王荆公は三度蘇學士を難じたのである。

「英草紙」では荆公は後醍醐帝であり、東坡は藤房であつた。黄州の菊を武藏野の逃水に代へた。これを第一難とし、また佛敎の論難を第二難とし、世に有名なる千里の馬の話を第三難としたのであつた。

瞿塘中峽の水の話は面白い。それを棄てる庭鐘ではない。「莠句册」の「猥瑣道人水品を辨じ五宮の音を知る話」を新に仕立てたのである。三峽を宇治河に擬し、宇治と志津二流の合するところを中峽とした。わたしはその文がこの集に收められてゐるのに拘はらず、一々對比することがつまらな過ぎることを知る。それよりも、飜案のこの一話にその頃の煎茶流行、京大阪の水質調べのゆきとゞいてゐた事を背景として考へようとする。それよりもなほ庭鐘も茶事を好んで、大枝流芳と友としよく、その著「煎茶仕用集」に序を書いてゐることをいひ添へようとする。

黄州の菊花が落ち散る話も面白い。そこで飜案の筆は「莠句册」の「玉林道人雜談して回頭を屈する話」をつくりなした。この話の中には、東坡が窮した如意君の解が含められてゐる。

一原話を剪裁して三話を作る庭鐘の飜案の手腕はまづこんなものであつた。しかし、その巧はつひに樂屋落ちの巧にをはる。「繁野話」の序文には寧ろそれを誇るけはひが讀まれる。わたしは「英草紙」の後、「繁野話」が出るまで十六年、「繁野話」から「莠句册」まで十八年、「莠句册」から「垣根草」まで六年を待たねばなら

ぬ理由をこの一點に於て解釋してよいと思ふ。
事をうつすにいそがしい彼の飜案は、時代から、また風習から見て、あまりにそぐはない節々が多かつた。もし「英草紙」の「黒川源太主山に入つて道を得たる話」の後に見るやうな女性觀を持つ作者がその頃にゐたならば、それこそ問題である。しかし、それを「通言」また「今古奇觀」の「莊子休鼓盆成大道」と讀み合はせれば、飜案とよりは飜譯であることを知り、また飜譯の選びが奇構を主としたことを考へただけで事が濟んでしまふ。

　けれど見のがしてならないのは、庭鐘が史論をなす時には、よし輪郭を原話に借りるにしても、中に獨自の見を寄するのが多い。それは「英草紙」よりも「繁野話」「莠句冊」と著を重ねるに從つて、なほ〳〵多くなり、つひに「垣根草」に至つては、大半がそれに傾いてゐる。わたしは「垣根草」の續編として「古今武將外傳」のあることを

「今古奇觀」繡像

偶然でないと思つてゐる。

外傳、すなはち逸史の體は、支那の文人の喜んでなすところである。庭鐘は漸く飜譯飜案から脱し出で て、彼土の人と赴くところを一にしたのである。

庭鐘の著が後の讀本作者にいかに多くを與へたか。その書目を擧げるだけでも煩にしい。わづかに「雨月物語」をかりて、それとこれとの關係をいふことにする。

一三

今古怪談 雨月物語　半紙本　五册

上田秋成の作、安永五年の出板。これには大本三册ものがある。京の梅村、大阪の野村二書肆の板を、大阪の文榮堂が再摺したのである。

秋成、通稱東作、號を無腸、剪枝畸人、鶉翁、餘齋といふ。なほ數號がある。秋成は薄遇の人であつた。大阪に生れたが、實の父を知らない。四歳また實母に別れた。上田は養家の姓である。養母は間もなく死んで、また別の母に養はれた。庭鐘に就いて、漢學を學んだ。几圭に就いて俳諧を學び、また和譯太郎と稱して「諸藝聞耳世間猿」「世間妾形氣」を著はした。八文字屋物の類である。若い頃の遊蕩の殘影と、早くから世をすねた傾向が窺はれる。三十三歳の時、加藤宇萬伎に就いて國學を遊んだ。宇萬伎は加茂眞淵門の雄なる者である。後二年、明和五年三月「雨月物語」の稿が成つた。三十五歳の時である。後八年にしてはじめて

「くせ物語」の秋成

出板せられた。明和八年火災に遭つて、一切を灰燼に歸し、生計漸く不如意、そこで醫を學んだ。晩年甚だ著述に富む、多くは和歌和文に關するものであつた。
　五十七歳左眼明を失つたが、後やゝ癒えて、右眼が却つてあやしくなつた。その頃妻にも死なれてゐた。彼みづからの言によればわづかに煎茶によつて慰めてゐたのである。凄慘極りなきものがあつた。京都南禪寺の紅梅の下に墓をトし、また棺を作つて寺に托したのは、六十九歳の時である。蜀山人が秋成のために草した「長夜室記」はこれによつて言を爲してゐる。文は秋成の歌文集「藤簍冊子（つゞらぶみ）」の中に收められてゐる。
　全くの孤獨である秋成は七十四歳の時、草稿を井中に投じた。彼の言葉にいふ、「無益の草紙世に殘らじと何やかや取り集めて、八十部ばかり庭の古井に沈めて今は心ゆきぬ。
　長き夢見果てぬ程に我魂の古井におちて心さむしも」
文化六年、病歿した。享年七十六歳。
　秋成を知る者には、死の前年に成つた隨筆「膽大小心錄」

秋成陶像

はどうしても讀んでおかねばならない。「くせ物語」また彼の皮肉を餘りなく示してゐる。また「雨月物語」を讀む場合に、是非とも合せ考へねばならないのは「春雨物語」である。これも怪奇の事を叙してゐる。もと十卷あつたのが、今はその半しか傳はつてゐない。「血帷子」「天津處女」「海賊」「目一つ神」「樊噲」これである。文辭の遒勁はさる事ながら、内容からいへば、「雨月」に及ぶべきでなかつた。

「雨月物語」五卷、九話を收めてゐる。この多くは飜案である。その態度に就いて少しく考へなければならない。

「蛇性の婬」は「西湖佳話」の一話「雷峯怪蹟」の筋をそのまゝにうつしてゐる。工夫は道成寺傳說に結ぶことにある。支那の色調の何ものもなく、却つてわが古典の色ざしが濃であることが見られる。

「夢應の鯉魚」は「古今說海」收むるところの「魚服記」に據る。それもその頃の諢詞小說流行の色眼鏡から、「醒世恒言」の「薛錄事魚證仙」の飜案であるやうに見られた事もあつた。その失當は讀み比べさへ

雨月物語卷之一

白峯

あふ坂の関守にゆるされてより。秋こし山の黄葉見過しがたく。浜千鳥の跡ふみつくる鳴海がた。不尽の高嶺の煙。浮嶋がはら。清見が関。大磯小いその浦々。むらさき艶ふ武蔵野の原。塩竈の和たる朝げしき。象潟の蜑が苫や。佐野の舟梁。木曽の桟橋。心のとゞまらぬかたぞなきに。猶西の国の歌枕見まほしとて。仁安三年の秋は。葭がちる難波を経て。須磨明石の浦ふく風を身にしみつも。行々讃岐の真尾坂の林といふにしばらく笻を植む。草枕はるけき旅路の労にもあらで。観念修行の便せし庵なりけり。この里

魚服記　　說淵三十五　列傳三十五

薛偉者乾元二年任涇州青城縣主簿與丞鄒滂尉雷濟裴寮同時其秋偉病七日忽奄然若往者連呼不應而心頭微暖家人不忍即斂環而伺之經二十日忽長吁起坐謂其人曰吾不知人間幾日矣曰二十日矣爲我覷群官方食鱠否言吾已蘇甚有奇事請諸公罷筯來聽也僕人走示

「古今說海」

ふのか。考へ直して見る必要がある。

楚人俞伯牙、國を出でゝ晋の上大夫となる。使して楚國に歸る。その歸るさ、漢陽江口に船がゝりする。八月仲秋の夜、さつと襲ひ來た雨風は收つて、さやけくも月は照し出づる。伯牙があまりの心うれしさに琴をかなでる。しばらくして琴の絲が刮剌的(かつらり)と斷れる。秘曲を竊み聞く者が潜み居るか、それとも刺客か、

すれば何でもないことであるが、其當はまた譯詞體としては讀み易い「西湖佳話」以外に秋成が譯詞小説を譯してゐるとの結論に達せさせる。心せねばならぬ一事であつた。しかし、秋成にも「菊花の約」がある。原據は「警世通言」にあり、「今古奇觀」にもある「俞伯牙摔琴謝知音」であつた。かくてもなほ秋成未だ譯詞小説を譯さずとい

第二十六卷

薛錄事魚服證仙

佳間白龍緣底事、家傳網罟區區、雖然縱適在河渠、失其雲雨勢、無乃困余且。○要識靈心能變化、須教魚服非常、虛非陽喜裡作昏愚、請看開何往、薛偉亦爲魚

話說唐肅宗乾元年間、有個官人姓薛名偉、吳縣人氏、做中天寶末年進士、初任扶風縣尉、名聲頗著、後爲蜀中青城縣主簿、夫人顧氏、乃是吳縣第一個大族、不惟容止端麗、且性格柔婉、夫妻相待、愛敬如賓、不覺在任、又經三年、大尹陞遷去了、上司知其廉能、即委他署攝縣印。那青城縣、本在窮山深谷之中、出地硗瘠、歷年荒歉、民窮盜與

醒世恒言

「醒世恒言」

盜賊かといぶかるところへ、一人の樵夫が姿を顯はす。彼はよく音律を解する者、迎へられて船に上る。二人の間に音樂の話が一しきり語られる。伯牙はその言に服して、改めて賓客の禮を以て對する。このほとり近くの集賢村に住ひする鐘子期、樵して老父を養ふ孝子であつた。二人はつひに兄弟の約をなした。語り明した十六日の朝、飽かぬ別れをせねばならぬ兄の伯牙、弟の子期の二人である。伯牙は來年仲秋またこゝに來ることを契つた。子期またこのほとりに待つことを固く約した。

一年を待ちわびた伯牙は、去年の月さながらの夜に、去年のとまりに舟を寄せた。待つべき人は見えない。泊舟の多いのに、もしか尋ねわづらひやすると琴を調べる。絃に凄切のひゞきがあつた。伯牙ははたと調の手をやめた。弟の身に何事かありはせぬかと心のうちは慌しかつた。

明くるおそしと集賢村へ急ぐ。子期の父に遭つて、子期の死を知つた。彼は死に臨んで、江邊に葬つて兄との約を果させたまへと父に囑した。父は伯牙の舟がゝりしたあたりに墓を築いたのである。伯牙が墓前にかいならす絲には、世のあはれが籠められてゐた。絲に合はする歌も哀しい。歌をはつて琴を摧く。

西湖」

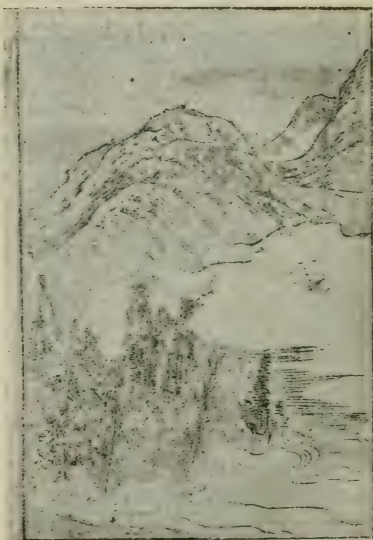
捽き得て玉軫拋殘、金徽零亂たり。子期の父はあやしんで問ふ。その答

瑤琴を摔捽して鳳尾寒し
子期在らず誰に對して彈ぜん
春風滿面みな朋友なるも
知音を覓めんと欲するは難上の難

伯牙は官を辭して、こゝに來り、子期に代つて、父を養ふことを約した。

「菊花の約」の原話はこれであるけれど、秋成はこれから飜案したのでなかつた。これを飜案したといふよりは飜譯した方がよささうである「英草紙」の「豐原兼秋音を聽きて國の盛衰を知る話」が直接の粉本であつた。

わたしはこの三話の比較に就いて多くを語る餘裕がない。最も重要なる一事だけにとゞめる。原話には長長しい音樂の論がある。伯牙と子期の問答の形式に於てなされてゐる。庭鐘はまたそのまゝに承け、更にわが國の音樂をも加へてゐる。庭鐘みづからの好みのあらはれである。秋成はそれを避けた。そして二人の義理を本筋とした。八文字屋風の小說をも作つたこともあるこの作者は、西鶴の「武家義理物語」をも參照した。「約束の雪の朝食」がそれである。けれどそこに西鶴との相異がある。原話にも、庭鐘のにも、西鶴にも

佳　話「

ないものが、秋成だけにある。幽靈これである。幽靈の存在を信じ、狐狸の怪を信じてゐる秋成の心のあらはれであつた。後に「膽大小心錄」に於て、しば／＼その信を語つてゐる。「雨月」が怪談物の中で群を抜く理由は多くこの一點に歸着する。

「雨月物語」の後の讀本に於ける影響は、庭鐘のより更に甚しかつた。「白峯」と「弓張月」との關係の如き、本

「今古奇觀」

馬琴「弓」

文を讀まないまでも、さし繪一つがもう立派に全體を暗示してゐる。秋成の據りどころは「撰集抄」以外にもあつた。しかし、「撰集抄」も參照されたことは明瞭であるが、それには上皇の怨靈はなかつた。

一四

今古小說 唐(から)錦(にしき)　大本　四冊

椿園主人の作、安永十年出板。

椿園は通稱浦邊源曹、攝津伊丹の人、その著書はなか／＼に多い。「翁草」「深山草」「雨劍奇遇」「怪異譚叢」「坂東水滸傳」「女水滸傳」等がある。「椿園雜話」「伊丹軍誌」の如きは著書の豫告は見えてゐるが果して出板されたかどうか明でない。また相應に畫筆を執つた。作中のさし繪の自畫に係るものが多い。今署名ある「古今奇談深山草」中の一葉をかかげる。

源曹華押

彼の博學は諸書に傳へられてゐる。また行文の達かなことが傳へられてゐる。こゝに、これも「深山草」の中から引いてみる。友人東瓦の跋である。

張月「白峯」

「撰集抄」白峯

この人書を編むに際して、頻に其頃の類書を顧慮し流行を考へる僻があつた。庭鐘秋成等と異なる點である。椿園の作をこれ等の人々と比較すれば、作柄としてはもとより一籌を輸してゐる。しかし、怪談の流行からいへば、どうしても逸し難い、おのづから其間にあつて一方の覇を成してゐた。

一日椿園主人のもとを訪ひぬるに、主人常に書淫の名あれば、和漢さま〴〵の書籍高く堆をなして四壁に滿ぬる中に座して筆を弄し居たり。何やらんと近く進みて見れば此物語をかけるなり。其速なること水の下に流るゝが如く、談笑しながら須臾の間に數紙をかさねて更に原稿を設ず。兩三日を經て書舖を過れば早四巻となりて上梓の催しをなすを見る云々。

「深山草」

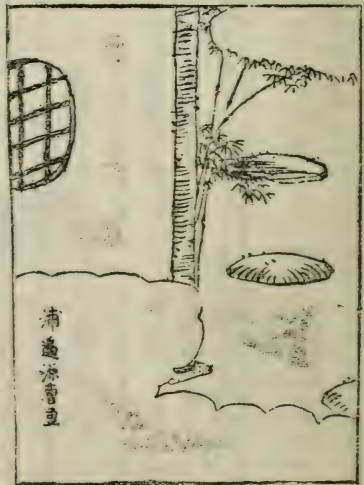
數多い者の中からわづかに一を拔いたのは、「深山草」「怪異譚叢」などがすでに他日の收載を約されてゐるからである。拔かれたのは一書でも、裕に椿園の作風を推することが出來るやうにおもはれる。

「伽婢子」の類は努めて飜案であることを見せまいとした。庭鐘は見せてもよいとした。秋成は全然さうおもはせまいとした。いや一切を秋成化してからとりかゝつた。椿園には二樣の態度があつた。「怪異談叢」は一々原據を示した自由譯である。「深山草」は飜案と共にその原據を示してゐる。「翁草」と「唐錦」は飜案をのみしるしてゐる。書淫の名がすでに存してゐるやうに、やゝ彼土の書に囚へられたこの人の知識から脱し切れないことが、もとより天分の問題もあるが、さうまでかゞやきを見せない譯であつた。

「唐錦」四卷は九話を收めてゐる。おの／＼原據を有する。「唐錦」の「唐」はひそかにそれを示すものであらうが、表面はさういはなかつた。同好の友打寄つて語つた奇事異聞の多いうちに、尤佳なるものを選んだ、たゝまくをしきの歌の心によつて題を附したと序にいつてゐる。

序はまたかうもいつてゐる。冠山白駒の後、支那の俗語に通ずる者多く、海内靡然として中華の小説を翫

さし繪

ぶ。しかし小說家のなすところを見ると、事新奇であれば文辭拙に、文辭やゝ見るに足りるのは飜譯そのまゝに過ぎない。僕此道を深く嗜むけれど、漢文にうとく和文に通ぜないといふのである。おそらく作者のいはんと欲するところはその裏にあつたらう。

さういふ「唐錦」の飜案ぶりはどうであるか。例の多くを說く暇がない。誰も氣づいてゐさうな一語だけに就いていふ。

第一卷の「圓鐵法師舊友を救ふ話」は、「水滸傳」の百八人の一人魯智深が野猪林に林冲の難を救つたことを飜案したのであつた。「花和尙大鬧野猪林」の章これである。智深が野猪林にゆく前に、瓦罐寺に於て大に餓えたことがあつた。ために崔道成、丘小乙と戰つて敗れ、漸く食を得て、はじめて彼等を殺すことが出來たのである。

今古小說唐錦卷之一

けれど、こゝの圓鐵の飢に苦しむ折の話は少し趣を異にする。その相異は意外な巷談をとつたためでないかと思はれる。劇中の人物助六のモデルといはれてゐた江戶藏前の札差、大口屋曉雨の噂から暗示を得なかつたか。

曉雨一新刀を試めさうと思つてゐた。吉原土手へかゝる時、一人の乞食がさきほどの雨に濡れそぼつてゐるのを見た。そんな思ひをするより、何でも望をかなへてやるから、命をくれといふ。饅頭を腹一杯食べて死にたうございますといふ。それではと早速にとり寄せてやる。乞食は幾つとなく食べ終つて靜に座に直る。バツサリと斬つた斬手の腕もよい、刀の切れ味もよかつた。雨に濡れた着物も見事に切れてしまつた。それから刀を濡衣と呼んだ。これを椿園が撮合はせたのではなかつたか。よし、さうでなくとも、彼の飜案にはこの種のものが、しば〳〵見られた。

一五

漫遊記　半紙本　五冊

建部綾足の作、寛政十年の出板。

綾足は津輕の人、字は孟喬、寒葉齋と號した。また吸露庵といつた。この人の生涯は數奇を極めてゐた。早く長崎に遊んで熊斐に畫を學びて、一方の雄となつた。また京の東福寺に入つて僧となつた、たま〳〵俳諧を習つては三月の間に、その師を正すまでに上達した。還俗して俳諧師となる。江戸淺草、雷門のほとりに住ひした。涼袋の號はそこの風神に因んだのである。賀茂眞淵の門に學んで國學を修めたが、古典の攷究は、こ

「水滸傳」繡像

れまでの俳諧と結んで片歌を主唱した。「片歌二夜問答」「片歌百夜問答」などの著も、伊勢の能褒野に面倒な手續を經て日本武尊の歌碑を建てたのも、自らその一派の祖を以て任じたいためであつた。歌碑は「はしけやしわぎへの方ゆ雲ゐたち來も」を刻した、けだし上代の片歌の詠は尊にはじまると解したのである。この運動はさまでの功を遂げなかつた、徒に彼が才氣を示すにをはつた。

彼を才人と稱しては悪いかも知れぬ、むしろ畸人と稱すべきであるかも知れない、往々にして狂態の事が傳へられてゐる。かつて長崎に繪を學んだのは某侯の命による。頂戴した三百金で、早速馴染の妓を身請する。それにあとを頼んで旅住ひすること六年、歸り來つて、その殿のおんもとに伺候する。仰せをうけて御前に揮毫を試みる。紙上たゞ一つの眞黑た塊。これは何かとの問ひに、山の字で御座いますとの答、すぐその場では暇になつた。しかも妓は留守の間に弟子の一人と私してゐた。綾足はそれを許してやり別に愛してゐた妓を身請して妻としたといはれてゐる。果してさうか、眞僞のほどは知らない。年外沙彌はその妻が生める子であつたらうか。

わきもはじめて孕めるに、をとこならば必ず佛のみ子に奉らむとうけひけるに、寶暦十あまり三のとし葉月中の三日、時正の日のはしめのあかつき、男とて平かにあれ出でたり。頭おろし給ふべき師には、かねて洞水禪師なむたのみまゐらせし、さて綠兒の名はかのおもひ得しはじめより、年外沙彌となむとなへ侍る。同じ年の神無月朔日、戒うくる時によみて與ふる片うた一トくさ

むかしより釋迦（サカ）のみまごそ吾子（アコ）となおぼしそ

綾足の片歌の詠口の例にと引いてみる。この事がどうのからのといふ譯ではないが、どうも綾足は奇拔を衒ひすぎる。傳へられる彼の畸行といふのも、或は爲にするあつてかむる假面と解される。

彼はしば／＼羇旅の人となつた。俳諧稼業、書かき稼業、それに片歌の宣傳もある。俳諧で產をなしたのは、淡々と彼との噂も事實でありはしなかつたか。明和の初年彼は京阪に居た。その頃はもう一かどの國學者氣取りであつた。秋成が一時就いて學ばうとしたのもこの時であつた。折から西八條村に怪談めいた事件があつた。綾足は直に一編を作つた。明和五年刊行の「西山物語」がこれである。時の流行をうけた怪談物を、支那風にしないで、擬古の體を以てしたのが新しい。しかも、用語に、記紀萬葉その他を引いて註を附した。臭みの鼻につくのもこの人の僻である。この態度を、更にその頃の流行である支那の稗史に擬らしたのが「本朝水滸傳」であつた。明和十年の刊行に係る。わが古典と支那の諢詞小說の提携、それは

漫遊記巻之壹

○若狹乃國の孝女　綾足著

すでに庭鐘その他の作にも見えてゐたが、こゝにこの長編が出來たのである。出來榮えが惡くて、馬琴から罵倒されるにしても、江戸小說史上記念すべき作である。讀本の黎明はかうして告げられたのである。

醫族の人である彼は、つひに熊谷の驛で病歿した。安永三年三月十八日のことであつた。享年五十六。その門人等相寄つて江戸向島弘福寺に葬つた。七年忌に一陽井素外等が追善のためにと、遺稿「紀行三千里」を出板した。寶曆四年に長崎へ旅した折の日記を主體とした小冊子である。これには是非引用したいことが多い。少くとも墓碑の圖の一葉ぐらゐはこゝに入れておきたかつた。わたしは偶人に貸しなくして、さうしかねたことを本意なく思つてゐる。

「西山物語」

綾足死して、遺稿の世に出づるものも少くない。京都で相識となつた伴蒿蹊によつて「すゞみ草」は出板せられた。「漫遊記」また誰かに知らねど、京人の手によつて出板された。

「漫遊記」はもと「をり／＼草」といつた。奇事異聞を春夏秋冬に配し、三十七話を收めてゐる。多く明和頃の筆であつた。何等かの事情でその稿本が京坂に殘つてゐたのを、後人がまづ十七話を選んで前編五冊

を出板し、ついで後編五册を出板しようとした。しかも後編の出板を見るに至らなかつたのである。
綾足に「蕉門頭陀物語」がある。これは旅間聞くところの蕉門俳士の逸事を集めたもの。この「漫遊記」も亦旅中に見聞したもの、時に即しては「をり〳〵草」といひ、土地に即しては「漫遊記」といふのである。

畢竟それだけに過ぎないが、これを怪談物全體から見ると、この命名はまた一縷の理を持つてゐる。

怪異の幾つかを集めて、一部をなす場合に、善く二つの様式が用ゐられることがある。

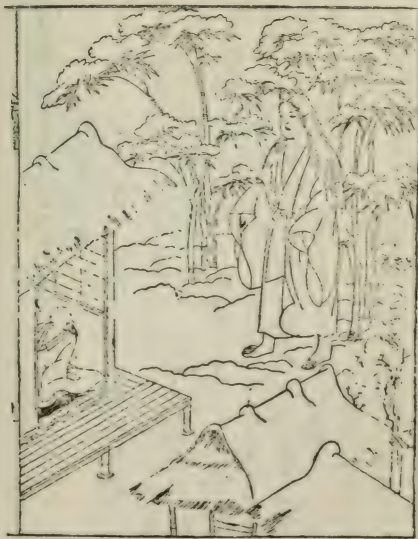
一つは一座相會して、互に語手聽手となる百物語の形式、一つは一人旅して所々の怪を聞く形式即ち諸國物語の形式である。諸國物語は早く狂歌を旨としたものに一休物があつた。怪談流行となつては、「宗祇諸國物語」が早かつた。西鶴の「諸國咄」がこれに續く。この諸國物語は、或は京阪また江戸の作者の机上から捏出される場合もある。また諸國からたしかに輸入されたものもある筈である。前者は姑くおく。「漫遊記」の如きは

「宗祇諸國物語」本文

後者に屬するものとして、「伽婢子」「英草紙」を見る限と違つた見方をしなければならない。そしてこれは典籍に據る以上の厄介な事であつた。

収載の書十部、その解說を終はらうとして、最も明に注意せられるのは、綾足を除く外は、皆京阪の作家であることである。しかも綾足の著書さへ京に於て出版された。かつて馬琴は「本朝水滸傳」を江戸の讀本の中に數へるために多くの言をなしたことがあつた。つまるところは、滔々瀾なす江戸の讀本もその源流はすべて京阪にあつた。正系として、これだけは收めておかねばならぬ十部の選定が、おのづからこれを明にする。しかし、讀本以外、末期の怪談物以外、江戸にも「英草紙」その他の形式をそのまゝに摸倣したものも少くない。「續怪談名作集」の中にはさういふものゝ二三部は加へなくてはなるまい。

同上さし繪

你好子

伽婢子序

夫聖人は常を說て道ををしへ、德をほどこして身をとゝのへ、理をあきらかにして心ををさむ。天下國家その風にうつり、その俗を易ふることを宗とし、總て怪力亂神をかたらずといへ共、若止むことを得ざるときは、亦述著して則をなせり。こゝをもつて易には龍の野に戰かふといひ、書には鼎の中に雉の鳴くことをしるし、春秋には亂賊の事を

しめし、詩には國風鄭風の篇を載せて、後世につたへて明らけき鑑とし給へり。況や佛理には三世因果の理をしへて、四生流轉の業(たね)をいましめ、或は神通或は變化の品々を説給へり。又神道の幽微なる、草木土石にいたるまで、みなその神靈ある事をしるして、不測(しき)の妙理をあらはせり。三教おのく靈理奇特怪異感應のむなしからざることををしへて、其道にいらしむる媒とす。聖

經賢傳、諸史百家の書すでに牛に汗し、棟に充つといふ。是本朝記述の編、古今筆作の文、何ぞ只五車に積のみならんや。中にも花山法皇の大和物語、宇治大納言の拾遺物語、其外竹取うつほの俊景の巻をはじめて、怪く奇特の事共をしるせるところ、手を折て數るに遑あらず。然るに此伽婢子は、遠く古へをとるにあらず、近く聞つたへしことを載あつめてしるしあらはすもの也。學

智ある人の目をよろこばしめ、耳をすゝぐためにせず。只兒女の聞をおどろかし、おのづから心をあらため、正道におもむくひとつの補とせむと也。その目をたつとびて、耳を信ぜざるは、古人のいやしむ所也。陰陽五行天地の造化は廣大にして、測りがたく幽遠にして知りがたし。時まのあたり見ざるをもつて今聞く所を疑ふことなかれと、云爾。

于時寛文六年
丙午正月日
瓢水子松雲
處士自序

伽婢子序

伽婢子は松雲處士の著はす所なり。凡て若干巻概ね神怪奇異の事を言ふ。言辭の藻麗なる哈味の繁華なる人口に膾炙する者の勝げて言ふ可からず。論語説に曰く、怪神を語らずと。玆の書の作、詐を懐ぎて人を欺くの謗を免れざらんか。云く、然らず。それ士の道に志す者の載籍の崇阿を捜

伽婢子序

伽婢子松雲處士之所著也
凡若干巻槩言神怪奇異之
事言辭之藻麗也含味之繁
華也膾炙人口者不可勝言焉
論語説曰子不語怪神矣茲書
之作不免懐詐欺人之謗乎

り、蘊法の淵源に涵し、言を擇び行を擇び、善を積み德を累ねて不滅の名を施す。若しそれ庸人孺子の詩書を讀むことを知らざる、耳博聞の明なく身貞直の厚なし。虚浮の俗日々に以て長ず。側に精微の言を聞きて首を疾め額を蹙め、啾々焉として退く。經典の沉深なる、載籍の浩瀚なる、譬へば聾を會して鼓するが如

云於厥志于彼志之搜
載籍之累不可涵禮法之淵源
擇言擇行積善累德而施不
滅之名若夫庸人孺子之不知
讀詩書耳博聞之明身無
貞直之厚虛浮之俗日以
長側聞精微之言疾首蹙額

し。これ何の益か之れ有らん。伽婢子の書たる、言新奇を摭し、義淺近を極む。怪異の耳を驚かし滑稽の人を説（よろこば）しむる事、寝て得れば之れ醒め、倦て得れば之れ舒ぶ。これ庸人孺子の好みて讀み、易く解する所也。男女の淫奔をいふが如きは則ち深く誡めん事を欲す。幽明神怪は則ち理を覈めんと欲す。君子達道の事にあらず

嗤〻笑〻遐經典之泯滅載籍之淺滿而閑〻會贊而設之何益之有伽婢子之爲書言摭新奇極淺近怪異之驚耳滑稽之説人寢而醒倦得之舒是庸人孺子之所好讀而易解男女淫

と雖も願くば庸孺の監戒に便せんと欲するのみ。

寛文六年龍集丙午正月下澣

雲　樵

奔見所識深識甚明神性見之
欲覆激理雖指君子達庸之
予憑欲使之庸孺之監戒而已
寛文六年龍集丙午正月下澣
雲樵

第二巻

濱田与兵衛妻が夢と幻に見る事

鉄谷孫七郎居士に成る事

牡丹燈籠

荻原新之丞海賊に逢事

第三巻

浅倉新之丞閻魔王と對面の事

舩田左近夢ものかたりの事

遊佐七郎一睡に六年の栄花の事

入棺之尸甦恠

野路忠太が妻の幽霊物語の事

第五巻

長柄僧都が銭の精霊に逢事

鶴瀬安左衛門勇士の亡魂に逢て諸将を評する事

富田久内慈悲心深きによりて火難を遁る事

原隼人佐鬼胎の事

第六巻

伊勢兵庫仙境に到る事

岩田の刀自定見蔵屋より出て長生揃穂の占

荻井清六極世の帯織機を帰る事

端乃かゝ見んの事

長局佐治白髪月の挟掬よ宣す

第七巻

伏見ん流江谷舛腰馬乃事

蕃沼新右衛門番感掬続乃事

花加薮がある事

小山田郡司拝典日呉二事

福田源七津田兵八と妻を争ふ事

菅谷九右衛門梶柄瀬川の幽霊に逢ふ事

隠田三郎宮白の神の加護を蒙る事

第八巻

長鬚国の事

漳州廟湯島の神に詣て大蛇を殺す事

巨勢兵部夢胡蝶の事

隅屋藤次が事

屏風の絵の人形躍る事

上杉憲政息女の事

窟の内の仙人の事

鵜鷹 付 龍馬風の事

了仙貧窮 付 天狗道の事

第十一巻

宇土の隠里の事

土佐の国犬神 付 金蚕の事

豊田孫吉が事

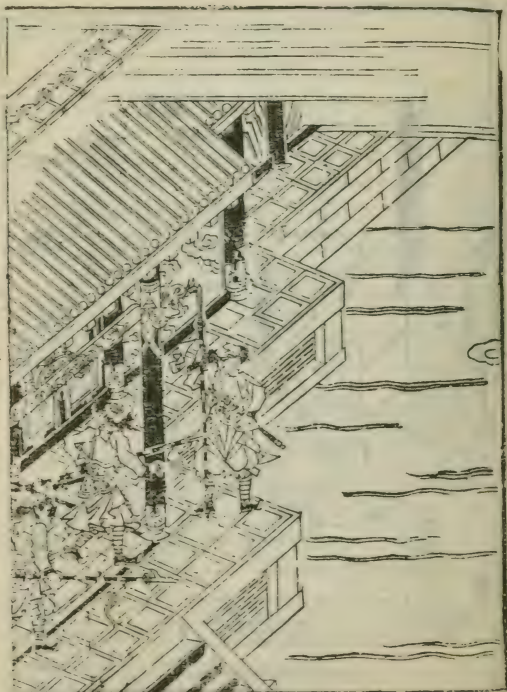
七歩蛇の事

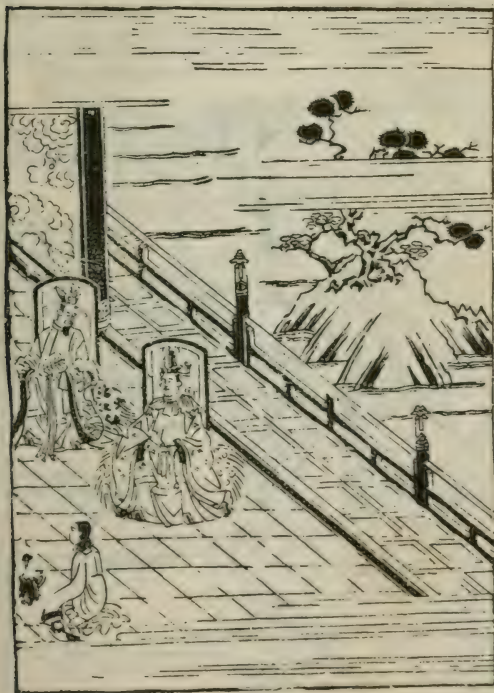
伽婢子巻之一

○龍宮の上棟

江州勢多の橋は、東國第一の大橋にして、西東にかゝれり。橋より西の方、北には滋賀辛崎もまのあたりにて、山田矢橋の渡し舟、鹽津海津の、上り舟に帆かけて走るも得ならず見ゆ。南の方は石山寺、夕暮つぐる鐘の音に、山づたひ行く岩間寺も、程近く續きたり。橋より東のかた、北には任那の里、ここは名におふ蓮の名所にて、六月の中比より咲きみだるゝ、蓮花匂ひは四方に薫じて、見に來る人の心さへ、自ら濁りにしまぬたのしみあり。橋の南には田上山の夕日影、鳴送る蝉の聲に、夏は涼しさ勝りけり。うしろは伊勢路に續き、前には湖水の流れながく、鹿飛の瀧より宇治の川瀬に出るといふ。その北には螢谷とて洞あり。四月の初つかたより、五月の半に至るまで、數百萬斛の螢湧出て、湖水の面に集り、或は鞠の大さ、或は車の輪のごとくかたまり圓がりて、雲路遙かにまひあがり、俄に水の上にはたとおち、はら〳〵と碎けて水に流るゝ有さま、點々たる柘榴花の五月雨にさくが如くにて、光りさやかにみだれたるは、又すてがたき眺め也。されば世の好事の輩、僧俗ともに遊び來て、哥よみ詩つくる、其言葉多く、口につたへ書に記せり。橋の東南のかた湖水の渚にそうて小社あり。むかし俵藤太秀郷、此あたりより龍宮に行て、三上の嶽のむかでを退治し、絹と俵と鍋と鐘とを得て歸る。中にも鐘は三井寺に寄附して、今も其名高く世にのこれり。後柏原院の朝、永正年中に、滋賀郡松本といふ所に、眞上阿祇奈君といふ人あり。もとは禁中に伺公して、文章生の官職にあづかりし人なれども、世の忽劇をいとひて冠をかけて引こもり、此所に跡をとゞめ、心しづかに月日をぞ過されける。或日の夕暮に、布衣に烏帽子着たる者二人來り、庭の前に跪きて、これは水海底の龍宮城より、迎へ奉るべき事ありてまゐり侍べりといふ。眞上おどろき色を替て、龍宮と人間と道へだたり、境異なり、如何でか行いたるべき。いに

しへは其道ありしと聞つたへしかども、今は絶えて其跡を知らずといふ。使者のいふやう、よき馬に鞍おきて門外に繋ぎおきたり。これにめして赴き給はんには、水漫々として波高くとも、少しも苦しき事あらじといふ。眞上怪しみながら座を立て、門に出たれば、その長七寸ばかり、太逞しき驪の馬に、金幅輪の鞍おき、螺鈿の鐙をかけ、白銀の轡をかませて引たて、白丁十餘人はらはらと立て、眞上を馬にかきのせ、二人の使者は前にはしり、馬は虚空にあがりとぶがごとし。眞上直下と見おろせば、足の下はたゞ雲の浪、煙の波茫々として、其外には何も見えず、しばしの間に宮門に至り、馬より下りて立たり。門をまもる者共は、蝦魚のかしら、螃蟹の甲、辛螺、貝蛤の殼に似たる、甲の緒をしめ、鑓長刀を立ならべ、きびしく番をつとむる。眞上を見て皆ひざまづき、頭を地につけて敬ひつゝしめり。二人の使者内に入て後、しばらくありて、緑衣の官人とおぼしきもの二人出て、門より内に引てあゆむ。門の上には、含仁門といふ額をかけたり。門に入て半町ばかり行ければ、水精の宮殿あり。階を登りて入ければ、

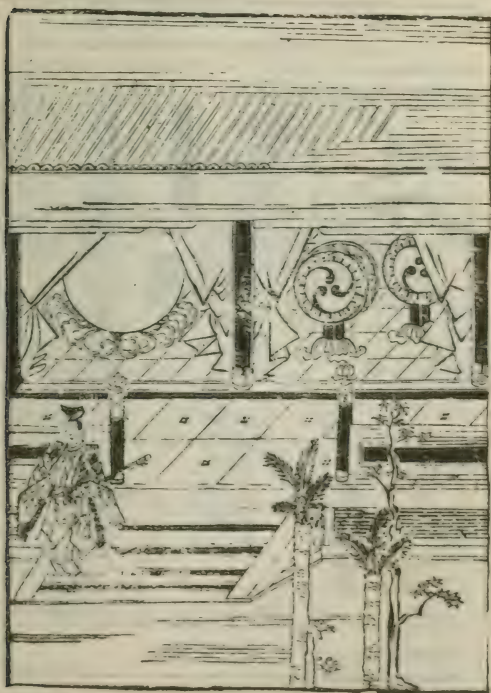
龍王すなはち綵雲の冠をいたゞき、飛雪の劔を帯、笏を正しくして立出つゝ、眞上を延て白玉の床に座をしめたり。眞上大に敬ひ禮拜して、我はこれ大日本國の小臣なり。草木と共に腐はつべき身なり。いかでか神王の威を冒して、上客の禮をうけ奉らんやといふ。龍王のいはく、久しく名を聞て、今尊顔をむかへ侍べり、辭退し給ふに及ばずとて、强て床の上にのぼせ、自ら又七寶の床にのぼり南にさし向うて座したり。かゝる所に賓客入來り給ふといふ。龍王又座をくだり、階に出て迎いれたりければ、三人の客あり。いづれも氣高きよそほひ、此世の人とも覺えず。玉の冠をいたゞき、錦の袂をかひつくろうて、威儀正しく、七寶の手ぐるまより下りて、靜に殿上にのぼり、床に坐したり。眞上は床を退きて、金障のもとに隱れうづくまる。已に座定りて、龍王語りけるは、人間世界の文章生をむかへ奉れり。君たちこれを疑ひ給ふなとて、眞上をよびてすゝめしかば、眞上出て禮拜するに、三人の客また拜をいたす。前の玉座に上り給へと云に、眞上辭して曰く、我はこれ一个の小臣也。いやしきが貴族に對して床にのぼ

らん事おそれありと、三人の客おなじく曰く、誠に人界と龍城と其境隔ちて、通路絶えたれども、神王已に人間をかんが見る事明らけし。君これたゞ人ならんや。こゝに請じ奉れり、何ぞ辭するに及ばん。早く床に坐し給へと。眞上すなはち床に座す。龍王かたりけるは、朕此程新に一つの宮殿をかまへ造る。木工頭番匠の司あつまり、玉のいしずゑをすゑ、虹のうつばり、雲のむなぎ、文の柱、皆具はりもとめしかども、只とぼしきものは、上梁の文祝拜のことば也。ほのかに聞つたふ、眞上の阿祇奈君は、學智道德の名かくれなし。此故に遠く招きて請じ奉る。幸に朕爲に一篇をかきて給といふに、二人の童子十二三ばかりなるが、髮からわにあげて、一人は碧玉の硯に、湘竹の管に文犀の毛さしたる筆とりそへ、神蘂の灰に、紅藍麝臍を和したる墨すり湛えてさゝげ、一人は鮫人の絹一丈をもちて、眞上にすゝむ。阿祇奈君辭するに言葉なく、筆をそめて書たり。

天地の間には蒼海を最大なりとし、生物のなかには龍神を殊に靈とす。已に世を潤すの功あり、いかでか、福をのぶるの惠なからんや。この故

に、香をたき燈をかゝげて、依いのる。飛龍は大なる人をみるに利ことあり。又もちひて不測の迹に象れり。維歳次今月今日新に玉の殿をかまへ昭けく精き華を營めり。水晶瑠璃のはしらをたて、琥珀琅玕の梁を掛。珠の簾をまきぬれば、山の雲青くうつり、玉の戸を開けば、洞の霞白くめぐる。天高く地厚して、南溟八千里をしづめ、雨順風調て北の渚五百淵ををさむ。空にあがり泉に下りては、蒼生の望みをかなへ、形を現はし身を隠しては、上帝の仁を祐く。その威ひ古今にわたり、その德磧礫に曁ぼす。玄龜赤鯉をどりて祝ひ、木魅山魑あつまりて賀ぶ。こゝに歌一曲を作りて、雕ばめたる梁のうへに掲す。

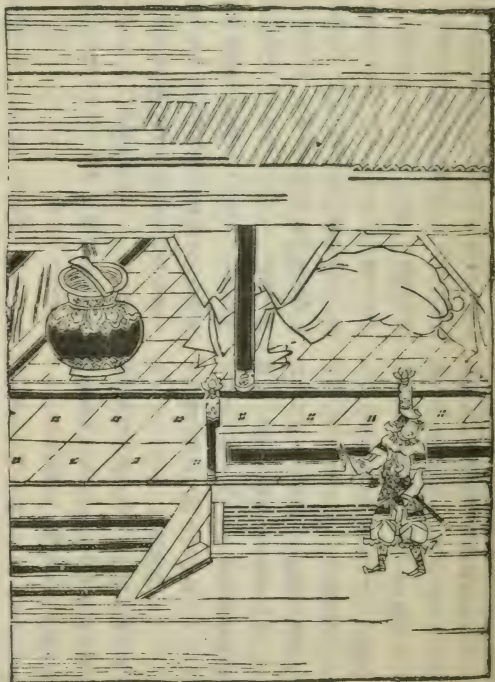
扶桑海淵落二瑤宮一
水族駢頭承二德化一
萬籟唱和慶賛歌
若神河伯朝宗駕

をさまれるみちぞしるけき龍の宮の
世はひさかたのつきじとをしる

伏てねがはくは、上棟の後、百の福共に臻り、千の喜偈く來り、瑤の宮安くおだやかにして、溟海平けく治り、天つ空の月日に齊しくその限有べからず。

と書て奉る。龍王大に悦び、三人の客に見せしむるに、皆感じてほめたり。則ち上梁の宴を開きて曰、阿祇奈君は人間にありて、未だ終に知り給はじ。一人は江の神、一人は河の神、一人は淵の神なり。君と友となり、今日のあそびには更に心をとけ給へ。何か憚ることあらんとて、杯をめぐらし酒を勸む。廿ばかりの女房十餘人を出し、雪の袖を飜し歌ひ舞。その面かたち世に未だ見ず。うるはしくたをやかにして、玉の釵に花を飾り、白き羅に袖つけて歌ふ聲、雲に響きつゝ、少時舞て退きければ、又びんづら結たる童子、十餘人、其うつくしさ雛の如くなるが、緗のひたゝれに錦の袴を着て、花をかざし立めぐりて袂を翻す。哥の聲すみのぼり、梁の塵や飛ぬらん。糸竹の音に和して面白さ限りなし。舞已にをはりければ、主の龍王よろこびに餘り、爵を洗ひ銚子を更め、阿祇奈君が前に置、みづから玉の笛を吹鳴らし、谿谷吟を歌ひて後、其座に有ける者共まかり出て、客の爲に戯の藝を盡せとあり。畏りて出たる人、みづから郭介子と名のる。これ蟹の精也。其うたひける詞に、我は谷かげ岩まに隱れ、秬の實のる

秋になれば、月清く風凉しきに催され、河にまろび海に泳ぐ。腹には黄を含み、外はまどかにいと堅く、二の眼空に望み、八の足またがり、其形は乙女の笑を求め、其味は兵のかほばせを喜ばし、甲をまとひ戈を取り、沫を噴唾を廻らし、無腸公子の名を施し、つな手の舞を舞けらし。

とて、前に進み後に退き、右に馳り左に走りければ、その類の者拍子をとる。座中笑壺に入て笑ひにぎはふ。其次に玄先生と名のりて馳出つゝ、袖を飜し拍子をとり、尾をのべ頸を動かす。是龜の精也。其歌ひける詞に、

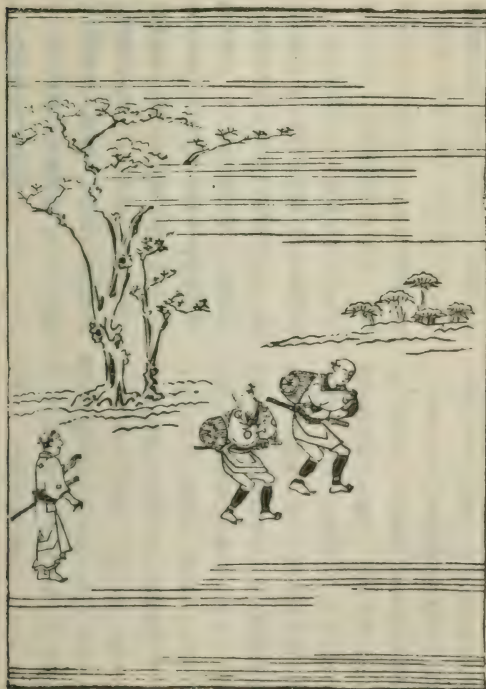
我はこれ蓍の草むらに隱れ、蓮の葉に遊び、書を負て水に浮び、網をかうぶりて夢をしめす。殼は人の兆を現はし、胸に士の氣を含む。世の寶となり道の敎をなす。六の藏して伏し千年の壽を保つ。氣を吐けば糸筋のごとく、尾を曳て樂を極む。青海の舞を舞べし。

と頭を動かし頸をしゞめ、目をまじろき足をあげ、暫しかなでゝ引入ければ、滿座の蛩聲をあげ腹をさゝげ、おきふして笑ひどよみ、輿を催す。其外蝦蛁木玉山びこ、よろづの魚、おのれ〳〵

が能をあらはし藝をつくす。已に酒酣にして醉に和しつゝ、三神の客座をたち、拜謝てかへりしかば、主の龍王階のもと迄送られたり。眞上袖かきをさめて、たのしみはこゝに極めぬ。願はくは龍宮城の有樣あまねく見せたまへと望みしに、いと易き事とて、階を下り庭に出て歩せらるゝに、雲とぢて何も見えず。龍王則ち吹雲の官人を召されたり。其姿、首に七曲の甲を着し、鼻高く口大なるもの、これ蜃の精なるべし。口をしゞめて天に向ひ吹ければ、世界ひろく平かに山もなく岩もなし。霧雲數十里はれひらけ、玉の樹庭に列うえ、金のいさごを敷渡し、梢に五色の花開け、池には四色の蓮さきて、匂ひ又こまやかなり。廻れば金の廊あり。庭には瑠璃の塼をしきたり。官人を差副へ見せしめらる。一つの樓閣あり。玻璃水晶にて造りたて、珠をちりばめて飾りたり。是に登れば虚空を凌ぐ心地して、一の重にはあがり得ず。こゝは下輩凡人の登る事協はず、神通のものこそ行至れと、それより又ひとつの樓臺に登れば、側に圓き鏡の如くなるものあり。きら〳〵と光りかゞやき、睛をくるめかして立向ひ難し。官人いふやう、これは電母の鏡とて、少し動せば大なる電出て、世の人の目を奪ふといふ。又かたはらに太鼓あり。大小その數多し。眞上これをうちてみんとす。官人とゞめていふやう、若強く打ならせば、人間界の山川谷平地震鳴はためき、人みな膽を失ひ命を亡し、死なずとも耳を失はん。これは雷公のつづみ也といふ。又かたはらに槖籥の如くなるものあり。眞上これを動かさんとす。官人又とゞめていふやう、是は嘯風の革嚢なり。これを強くうごかさば、山くづれ岩石飛て空にあがり、人の家は皆吹破れて、四方に散亂れんといふ。その傍に水瓶あり。箒のごとくなる物を上にのせたり。眞上是をとり、水に差入て打ふらんとす。官人おし留めて、是は洪雨の瓶なり。此箒に浸して強く打ふらば、人間世界は大雨洪水押流れ、山もひたり、陸は海にぞなりなんといふ。阿祇奈君とひけるやう、扨これらを司る官人はいづくにありやと。答て云やう、雷公電母風伯雨師は、極めて恐あらき輩なれば、常には獄に押籠められ、心の儘に振舞ふ事かなはず。若し出して其役を勤むる時は、此所に集り、雨風いかづち電みな分量ある事にて、それより過ぬれば、科に行はれ侍べる。凡そあらゆる宮殿樓閣は、見盡す事かなはず。それより

立帰れば、龍王さま〳〵もてなし、瑠璃の盃に眞珠二顆、氷の絹二疋を歸るさの餞とし、禮儀あつく龍王階に送り出て、官人に仰せて送り返さる。阿祇奈君目をふさげば、空をかける心地して、勢多の橋の東なる龍王の社の前に出たり。珠と絹をもちて歸り寶とす。其後名を隱し、道を行ひ其終る所を知らず。

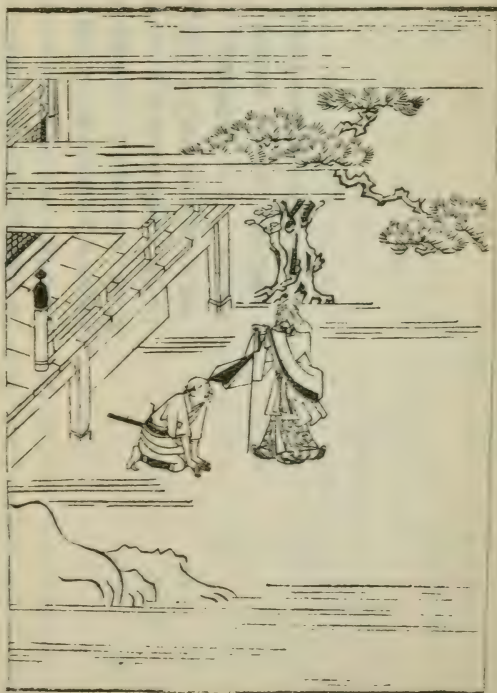
○黄金百兩

河内國平野と云所に、文兵次とて有德人あり。しかも心ざし情ある者也。同じ里に由利源内とて、生才覺の男、兵次と親しき友だち也。松永長慶に召拘られ代官になり、老母妻子共に大和國に引こしけり。其まかなひに詰り、兵次に黄金百兩を借。元より親き友なれば、借狀質物にも及ばず。こゝに此ころ、細川三好の兩家不和にして、河内津の國わたり騷動す。兵次は一跡殘らず亂妨せられ、一日を送る力もなし。弘治年中、暫らく物靜に成ければ、三好は京都にあり、其家老松永は和州に城を構へ、大に民百姓を貪る。去ほどに兵次は妻子をつれて和州に行き、源内を尋ぬるに、松永が家にして權威高く、家の内賑々し。兵次はおとろへて形かじけ、おもかはりしたり。その近きあたりに宿かりて妻子を置き、我身ばかり源内に逢てかう〳〵といふ。源内初めは忘れたりけるが、故鄕名字こま〳〵と聞て誠にと驚き、酒進めて飮ませながら、借金の事は一言もいはず。兵次もいふべき序なく立歸る。妻いふやう、是まで流浪して來るも、源内が惠あるべきかと思ふに、僅の酒飮たるとて、百兩の金に替て一言をもいはずして歸る事やある。斯の如くならば、我らは頓て道の傍に飢て死すべしといふ。兵次これを聞に、理に過て覺えしかば、夜明るを待かね、又源内がもとに行たれば、源内出て對面して、誠に其かみ金子を借たる事今も忘れず、その恩をおろそかに思はんや。其時の手形あらば持來り給へ、數の限り返し參らせむといふ。兵次答ていふやうは、同じ里に親しき友と、互に住たる契り淺からねば、手形質物にも及ばず借奉りし金子なり。今我劫盜の爲に一跡をうばひとられ、身のたゝずみなき故に、如何にも此金子を給はらば、然るべき商買をもいたして、妻子を養ひ侍べらばやと思ふなり。只今我をとり立るよとおぼして、右の金子を惠み返し給へといふ。源内打笑ひ、手形なくしては

算用なり難し。されども思ひ出さば、數の如く返し侍らんとて兵次を歸らせたり。かくて半年ばかりを經て極月になりぬ。古年をば送りけれ共、新しき春を迎ゆべき手だてなし。食ともしく衣うすければ、妻子は飢凍て、只泣より外の事なし。兵次これを見るに堪がたくて、源内が許に行いたり、泪を流していふやう、年すでに推つまり、新春は近きにあれ共、妻子は飢凍えて又一錢の貯へなく、炊て食すべき米もなし。假令借奉りし金子皆返し給はらずとも、年を迎ゆるほどの妻子のたすけをなし給はゞ、是に過たるめぐみはあらじといふ。源内うち聞て、誠に痛はしく思ふといへども、我さへ僅の知行なれば、今皆返し參らせむ事は叶ふべからず。明日まづ米二石錢二貫文を奉らん。是にて兎も角も年とり給へといふ。兵次大に悦び我家に歸り、明日必ず惠つかはされん。侍まうけて此程のわびしさを慰まんといふに、妻子限りなく嬉しと思ひ、夜の明るを遲しと、其子を門に出して、錢米をもちて來る人あらば、こゝぞと敎よとて侍せおく。須臾ありて内に走り入ていふやう、米を負たる人こそ來れと。急ぎ出て見れ

ば、其家の門は見向きもせずして打過る。もし家を忘れて打通るかと思ひ、其米は文兵次が家に給はるにてはなきかと問へば、いや是は城の内より肴の代に遣はさるゝ米也といふ。又しばしありて、其子走り入て、只今錢をかたげたる人こそ來れと。兵次かけ出て見るに、その門口をば空知らずして打通る。是も家を知らざるかとて引留めて、此錢は由利源内殿より兵次が許へ遣はさるゝにやと問ば、是は弓削三郎殿より矢括つ代物に送らるゝとて過行けば、兵次耻しき事いふばかりなし。正月まかなひの用意とて、錢米持運ぶ事急がはしきを、引とめ／＼尋問に、いづれも源内がもとより出る錢米ならで、一日のうち待暮し、漸人影も見えざりければ内に入ぬ。油もなければ燈火たつべき樣もなく、いとゞ闇き一間の內に、

妻子打向ひ、今は頼もしき事もなし、堅く契約しながら、我を欺けることよ。米薪を求むべきたよりもなければ、夜もすがら寢もせず泣あかす。兵次いよいよ堪かね、口惜しき事かな、さしも唯源内を指殺して此鬱忿をはらさんと思ひ、夜もすがら刀を研ぎ、源内が門に忍び居たりしが、又思ひ返すやう、

源内こそ我に不義を致しけれ、また源内が老母妻子には何の咎もなし。今源内を殺さば、家忽ちに滅して、科もなき老母妻子は路頭に立べし。人こそ我に不義ありとも、我は人をば倒さじものを、天道まこと有らば、我には悪もあるべきものをと、思ひ直して家に立歸り、兎角して小袖刀、賣しろなして正月元三のいとなみはいたしぬ。かくて兵次或朝、家を出て泊瀬の觀音にまうで、行末ふかく禱り申て、山の奥にわけ入しが、覺えずひとつの池の邊に到り、誤ちて池の中に落たりしに、其水雨方に別れて道あり。道をつたうて二町ばかり行ければ、城の惣門にいたる。樓門の上に淸性舘と云ふ額をかけたり。内に入て見れば、人氣もなく物しづかにて、幾年經たりとも知られぬ、古木の松枝をかはして、生並べり。廊下をめぐりて奥の方にいたり、御殿の階にのぞめども人も見えず、とがむる者もなし。只鐘の聲遙に、振鈴の響に和して聞えたるばかり也。兵次餘りに飢つかれて、石礎を枕として臥て休み居たり。かゝる所に眉鬚長く生のび、頭には帽子かづき、足には靴をはき、手に白木の杖をつきたる老翁來りて、兵次を見て打笑ひ、如何に久しく對面せざりしや、昔の事ども覺えたるかといふ。兵次おきあがり跪て、我更に此所に來れる事は今ぞ初なる、如何でか昔の事とて知べき道侍らんといふ。老翁聞て、げにも汝は飢渇の火にやかれて、昔を忘れたるも理り也とて、懐より梨と棗とを取出して食はしめたるに、兵次胸凉しく心さわやかに、雲霧のはれ行空に、月の出るがごとく、まよひの暗みな除りて過去の事共、猶きのふの如くに覺えたり。老翁の曰、汝昔過去の時、初瀬の近郷を領せし人なり。觀音を信じて花香灯明をそなへ、常に歩みをはこびしか共、只百姓を貪り、賦斂をおもく課役を茂くして、人の愁を知らず。此故に死して惡趣に落つべかりし處に、觀音の大悲をもつて、惡を轉じて二たびこの人間に返し給へり。しばらく富貴を極めしかども、昔の業感に因りて、今かく貧なれり。然るを汝源内が不義を怨て、一念の惡心を起せしかば、惡鬼たちまちに汝が後にしたがひ、妻子一家跡なくほろぶべかりしを、又忽ちに心を改めしかば、神明已に是をしろしめし、福神これに立添ひて、惡鬼は遠く逃去ぬ。すべて惡業善事其むくひある事は形に影のしたがひ、聲の響に應ずるが如し。今より後も苟且の事といふとも、惡を愼し

み善を求むべし。然らばかならず安樂の地に一生を送らんと敎へられたり。兵次さては此所は人界にあらず、神聖の住所なりと思ひつけて、事のちなみに當世の事をさして問けるやう、今世の中絲の亂れのごとくにして、諸方に側起る者蜂の如し。いづれか榮えいづれか衰へん。願くはその行先を示し給へといふ。老翁答へられけるは、人の心更に纖積の如く、彼を殺して我立ち、餘所を打ておのれに合せんとす。此故に王法ひすろぎ朝威衰へ、三綱五常の道斷えて、五畿七道互に爭ひ、國々亂れざる所なし。臣としては君を誅り、君としては臣をそねけ、或は父子の間と雖も快からず、兄弟忽ちに敵となり、運つよく利に乘る時は、いやしきが高くあがり、小身なるが大にはびこり、運衰へ勢つきては、大家高位もおし倒され、聟を殺し子を殺せば、一家一族のわりなきも、只危きにのみ心を碎きて、安き暇更になしとて、當時諸國の名ある輩、それかれと指を折り、其身の善惡と行末の盛衰を、質に懸て語られたり。兵次重ねていふやう、由利源内今すでに人の債を返さず、己威を保ら勢に誇る。此者と一も行末久しかる

べしやと。老翁の曰、源内が主君まづ大なる不義を行ひ、權威よこしまに振うて、民を虐世を貪る。冥衆是を疎み、神靈これを惡み、福壽の籍を削られて、其身杻械にかゝり、其首に縲紲の繩をかけて肉を腐、骨を散されん事何ぞ遠からん。源内又是に隨ひ、惡逆無道なる事譬ふるに言葉なし。人の債を返さゞる、かれが財物は皆これ他の寶也。己いたづらに守護するのみ。今見よ三年を出ずして家運つきて、災來るべし。汝必ずその災を恐るべし。源内が家近く住せば惡かりなむ。京都も靜なるべからず。早く歸りて山科の奥、笠取の谷に移り行けとて、黃金十兩を與へ、道筋を敎へて出し返す。一里餘りをゆくかとおぼえて、山の後なる岩穴より出づることを得たれば、家を出てより三十日に及ぶといふ。妻子待受けて喜ぶ事かぎりなし。やがて緣を求め、山科の奥笠取の谷に引こもり、商人となり薪を出し賣て、世を渡る業とす。家やう／＼心安く、妻子も緩やかなる心地す。その後永祿庚午の年、松永反逆の事ありて、織田家のために家門滅却せらる。由利源內此時に生捕られて殺され、日比非道に貪り貯へし財寶、みな敵軍の得物となれり。是を聞傳へて年月を數ふれば、僅に三年に及べり。兵次は今も其末殘りて住けりといふ。

伽婢子巻一終

伽婢子巻之二

○十津川の仙境

和泉の堺に薬種をあきなふ者あり。その名を長次といふ。久しく瘡毒をうれへて紀州十津川に湯治しけり。病に相當せしにや、十四五日の間に平復し侍べり。長次或日思ふやう、年比聞傳へし十津川の溫泉の奥には、人參黄精といふもの生出て、尋ねあたれば多く有りといふ。此なぐさみに近き所を捜し見ばやと思ひ、僕をば宿にとゞめ、唯一人山深く入しかば、道にふみ迷へり。一つの谷にくだりて見れば、美くしき籠の流れ出ければ、此水上に人里ありと思ひ、水にしたがうてのぼるに、日はすでに暮かゝり、鳥の音かすかにねぐらを爭ふ。かくて十町ばかり行かと覺えし。岩をきりぬきたる門に到り、內に入て見れば、茅葺の家五六十ばかり軒を並べて立たり。家々のありさま、石垣苔生て壁みどりをなし、竹の折戸物淋しく、蔦かづら冠木をかざる。犬ほえて砌をめぐり、鷄鳴て屋にのぼる。桑の枝茂り、麻の葉おほひ、誠に住ならしたる村里也。樵つみける椎柴、春つきてほす粟粳、さすがにわびしからずぞ見えたる。人の形勢古風ありて、素袍袴に烏帽子着て、行還しづかに威儀みだりならず。長次が立やすらひたる姿を見て、大に怪み驚きて問ひけるやう、如何なる人なれば、此里にはさまよひ來れる。世の常にして知るべき所にあらずといふ。長次ありのまゝに語る。こゝにひとりの老人衣冠正しきが、蓬の沓をはき藜の杖をつきて、みづから三位中將と名のり、長次に向ひて曰、こゝは山深く岩ほそばだち、熊狼むらがり走り、狐木玉のあそぶ所にして、日は暮たり。此まゝ打捨なば、是ぞ水に溺れたるを見ながら、援はざるにおなじかるべし。こなたへおはせよ、宿かし侍らんとて、家に連れて歸りぬ。內のていきたなからず、召使はるゝ男女更にみだりならず。既に一間の所に呼びすゑ、ともし火をかゝげ座定りてのちに、長次問けるやう、此所はありとも知らぬ村里也。如何に住そめ給ひしやらんといふ。あるじ眉をひ

そめて、是は浮世の難を逃れし人の隠れて住ところなり。若しひてそのかみの事を語らば、徒らに愁を催すなかだちならんといふ。長次あながちに其住初し故をとふに、あるじ語りけるは、

我は平家沒落して西海の浪に沈みける比より、此所に住初たり。我は是小松の内府重盛公の嫡子三位中將維盛と云ひし者也。祖父大相國清盛入道は、惡行重疊して人望にそむき、父内府は世を早うし給ひ、伯父宗盛公世を取て、非道不義なる事法に過ぎたり。一門のともがら多くは皆奢りを極め榮花にほこり、家運たちまちに傾き、東國には兵衛の佐頼朝、譜代の家人を催して義兵をあげ、北國には木曾の冠者義仲、一族郎等をすゝめて謀反す。其外諸國の源氏、蜂の如くに起り、蟻の如くに集りけるを、茲にはせむかひ、かしこに責寄するに、更に軍の利なく、味方の軍兵たび〱に打れて、終に木曾がために都を追落され、攝津國一の谷に籠り、暫く心も安かりしに、九郎義經が爲にこゝをも破られ、一門の中に、通盛敦盛以下多く亡び給ひ、女の當り魂を消し胸をひやし、うきめを見聞かなしさ、生をかゆるとも忘るべき事かや。

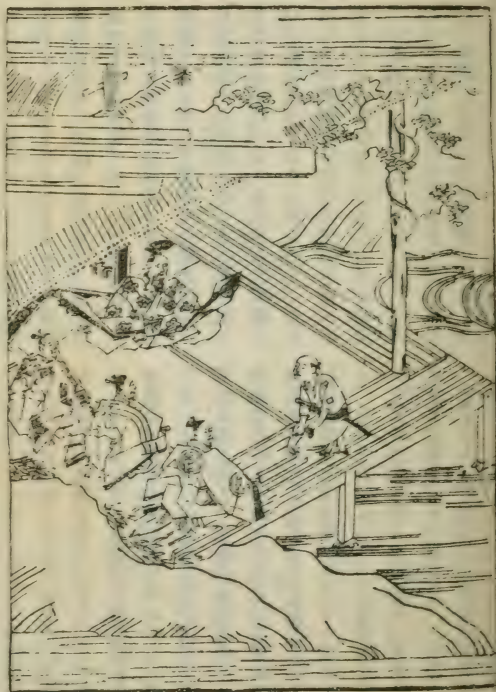
とかくする程に、讃岐國八嶋の洲崎に城郭を構へ、一門の人々楯籠りしかば、故郷は雲井の餘所に隔り、思ひは妻子の名殘に止まり、身は八島に在りながら、心は都に通ひければ、萬につけてあぢきなく、行末とても頼みなしと、うかれ果たる心より思ひ立て、譜代の侍與三兵衛重景石童丸といふわらは、武里といふ舍人は、舟に心得たる者なれば、此三人を召具して忍びて八島の内裏を出て、阿波の由木の浦につきて、

をり〱はしらぬうらぢのもしほ草
　かきおく跡をかたみともみよ

重景返しとおぼしくて、

我おもひ空ふく風にたぐふらし
　かたぶく月にうつる夕ぐれ

石童丸涙をおさへて、

玉ぼこの道ゆきかねてのる舟に
　心はいとゞあこがれにけり

それより紀伊國和哥吹上の浦をうち過て、由良の湊より舟をおりて、戀しき都をながめやり、高野山にまうでて、瀧口時頼入道にあうて案内せさせ、院谷々をがみめぐり、これより熊野に參詣すべしとて三藤のわたり、藤代より和歌の浦吹上の濱、古木の杜蕪坂千里の濱のあたり近く、岩代の王子をう

ちこえ岩田川にて垢離をとりて、

岩田川ちかひの舟にさほさして
　しづむ我身もうかびぬるかな

それより本宮にまうでつゝ、新宮那智のこりなくめぐりて、濱の宮より舟に乗り、礒の松の木をけづりて、

　權亮三位中將平維盛戰場を出て、那智の浦に入水す。元暦元年三月廿八日、維盛廿七歳、重景同年、石童丸十八歳

生れてはつひに死てふことのみぞ
　定なき世にさだめありける

と書て世には入水と知らせけれども、今この山中に隠れしかば、肥後守貞能跡をもとめて尋ね來れり。平氏の一門沒落して、皆こと〴〵く壇の浦にて水中に入給ふ。都に隠れし平氏の一類も、根を斷ち葉を枯らしけりと、貞能かたり侍べるにぞ、よくこそのがれけれと、かなしき中に心を慰め、田をうゑ薪とり、みづから清風朗月に心を澄まし、物靜にしてたましひをやしなふ。人里絶て音づれもなし。花の咲くを春と思ひ、木の葉のちるを秋と知り、月のいづるをかぞへ盡して、月なき時を晦とあかし暮らす身となり侍べり。貞能重景石童丸が子孫ひろごりて、家居を並べて住ける也。さだめて頼朝世をとりぬらん。今はこれ誰の世ぞ。願くは物語せよとあり。長次大に驚き恐れ、只かりそめの山住、世の常の事にこそ思ひ奉りしに、かゝる止事なき御身とは、露も思ひよらざりけりとて、首を地につけ禮義をいたす。三位中將、いやとよ、今は然るべからず。それ〴〵との給ふに、貞能重景石童丸立出たり。いづれもその歳六十ばかりに見えたるが、貞能いふやう、迚うちとけ給ひたる御事也。その世の移り替りし事共、語りてきかせ給へと也。長次居なほりて、さらばあら〳〵聞つたへし事かたり侍べらむ。扨も平氏の一門西海の波に沈み給ひ、兵衛佐頼朝天下ををさめ、いくばくもなく病死し給ふ。蒲冠者範頼九郎判官義經みな頼朝にうたれ、頼朝の子息頼家世をとり、子なくして病死あり。頼朝の二男頼家の舍弟跡を治め給ふ。頼家の妾の腹に子あるよし聞つたへ、尋出して鶴岡の別當になさる。禪師公曉と號す　和田畠山梶原等が一族此君の時うちほろぼさる。實朝卿鶴岡社參の夜、かの禪師の公實朝を殺す。北條義時その跡を奪ひて天下の權をとる。是より九代にいたり、相摸守高時入道宗鑒、大に奢りて國亂れ、新田義貞鎌倉をほろぼす。足利尊氏と新田といくさあり　足利つひに義貞をほろぼ

し、その子息義詮を京の公方と定め、二男左馬頭基氏を鎌倉の公方と定め、天下暫くしづかなりしかども、王道は地に落てあるかなきかの有さま也。武家世をとりて權威たかし。後に京都鎌倉の公方不會になりて、鎌倉の執權上杉の一族、公方を追おとす。此時に當りて京都の公方も權威を失なひ、諸國の武士たがひにそばだち、天下大に亂れて合戰やむ時なし。三好修理大夫其家人松永彈正は畿內南海に逆威をふるひ、今川義元は駿河遠州をしたがへ、國司源具教は勢州にあり、武田晴信甲信兩國にはびこり、北條氏康は關八州にまたがり、佐竹義重は常陸にあり。蘆名盛高は會津を領じ、長尾景虎は越後よりおし出る。朝倉義景越前を守り、畠山が一族は河內にあり、陶尾張守は周防長門を押領し、毛利元就安藝におこり、尼子義久は出雲隱岐石見伯耆にひろごり、豐後に大友肥前に龍造寺、その外江州に淺井佐々木、尾州に織田、濃州に齋藤、大和に筒井、其外諸國郡邑の間に黨を立て兵を集め、たがひに村里をあらそうて、攻戰ひ奪ひとる。壽永古へ安德天皇西海に赴き給ひし、今弘治二年丙辰の歲まで、星霜三百七十四年、天子すでに二十六代、鎌倉は賴朝より三代、北條家九代、足利家十二代、京都の足利今すでに十三代、新將軍源義輝公と申す也と語りしかば、三位中將これを聞き給ひて、不覺の淚を流し給ふ。夜すでに更ゆけば、山の中物しづかに、梢をつたふ風の音軒近く聞えて、長次が魂すみわたり、凉しく覺えたり。あるじさまざま酒をすゝめらる。夜すでにあけて、山の端あかく橫雲たなびきて、鳥の聲定かになれば、長次今は是までなりとて拜禮つゝしみて立出れば、あるじのたまはく、我ら更に仙人にもあらず、幽靈にもあらず。おほくの年を重ねし事思はざる外の幸ひなり。なんぢ歸りて世に語る事なかれとて、

みやまべの月は昔の月ながら
　はるかにかはる人の世の中

とよみて、わかれをとり內に入給へば、長次は切通しの門を出て、一町ばかりに一所づゝ、竹の杖をさして記とし、十津川の宿に歸る事を得て、來年の春、酒さかなとゝのへつゝ、又かの山路に分入て尋ぬるに、たゞ古松老槐に橫たはり、岩ほそばだち茅薄しげり、樵の通ふところ鳥の聲かすかに、草刈の行ところ谷の水流れ、しるしの竹も見えねば、たづねわびつゝ立かへる。そもそもこれは仙境の道人なりけん、その

類しりがたし。

二 眞紅撃帶

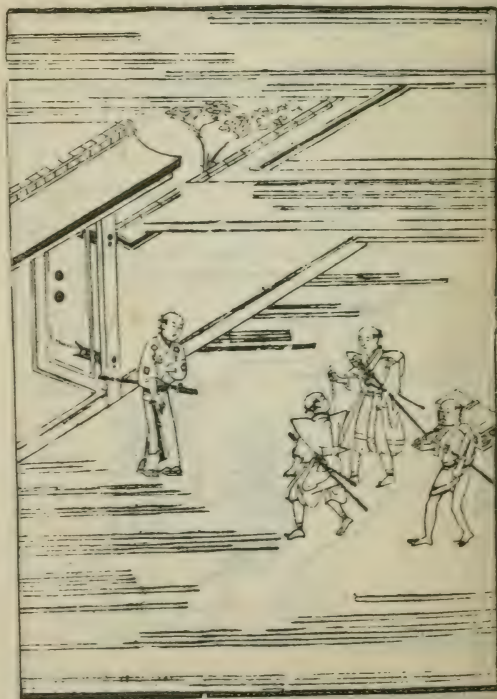
越前敦賀の津に、濱田長八とて有德人ありて、二人の娘をもちたり。その隣に若林長門守が一族、檜垣平太といふもの、武門を離れ商人となり、金銀のたかにもちて住侍べり、是に一人の子あり、平次と名づく。長八が娘と同じ年比にて、いとけなき時に常に出合ひて遊びけり。平太すなはち長八が姉娘を我子の妻とすべきよし、媒を以ていはせければ、やがて受けごひけり。さらば其しるしにとて、酒さかなとゝのへ、眞紅の撃帶ひとつ娘にとらせたり。天正三年の秋、朝倉が餘黨おこり出て、虎杖、木芽峠、鉢伏、今條、火燧、吸津、龍門寺、諸方の要害に楯ごもる。其中に若林長門守は河野の新城に籠りしかは、信長信忠父子八萬餘騎を率して、敦賀に着陣あり。木下藤吉郎に仰せて、河野の城をとりかこませらる。檜垣平太は若林が一門なれば、敦賀にありて咎められむ事をおそれ、一家を開のきて、所縁につきて京都にのぼり、五年までとゞまりつゝ、其間に敦賀のかたへは風のたよりもなし。長八が娘は年すでに十九になり、容顔うつくしかりければ、人皆これを求むれ共、娘更に聞入れず、みづからいとけなき時より一たび平次に約束して、今たとひ捨てられたりとも、又こと夫をまうくべきや。その上平次もし生てかへり來らば、誠に耻かしき事なるべしとて、朝夕は深く引籠り居たりけるが、平次が行方の戀しさ、露忘るゝ隙なく、只かりそめの手すさみにも、其人の事のみあらまされて、人しれぬ物思ひに涙を流すばかり也。つひに思ひくづをれて病のゆかに臥し、半年餘りの後つひにむなしく成ければ、二人の親大に歎き悲しみつゝ、小濱といふ所の寺に埋みけり。母その娘の額をなで、平次がつかはしける眞紅の帶を取出し、是は汝の夫のとらせたる帶ぞや、跡にとゞめて何にかせむ。黄泉までも見よかしとて、むなしき娘が腰に結びておくり埋みけり。三十日あまりの後、平次すなはち來りぬ。長八これをよびいれて、如何にと問へば、答へていふやう、若林長門守が河野の新城に楯籠りしかば、信長公八萬餘騎にて此敦賀に着陣あり。もし若林が一族なりとて尋ねいましめられん事を恐れて、とる物もとり敢へず京都にのぼり、所縁につきて暫く住居せし所に、打續きて二人の親むなしくな

りければ、往昔の契約わすれがたくて、こゝに歸り來れりといふ。濱田夫婦涙を流していふやう、姉娘はそのころよりそこの御事を思ひあこがれ、病を受けて去ぬる月の初めつかた、つひにむなしくなり侍べり。久しく便りのなかりつる事を、さこそ恨み思ひけむ。これ見給へ、硯の蓋に書おきたりとて、なく／＼取出して平次に見せたり。その哥に、

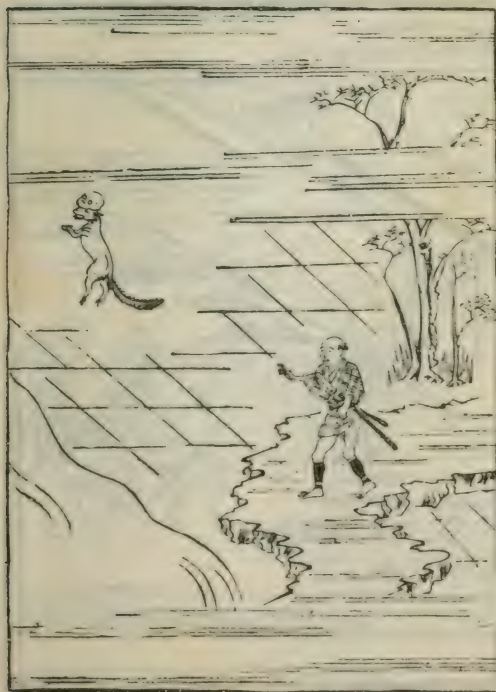
せめてやは香をだにゝほへ梅の花
　しらぬ山路のおくにさくとも

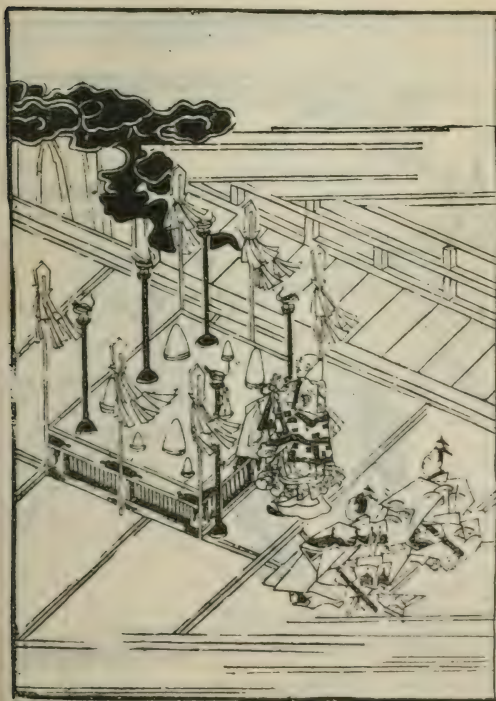
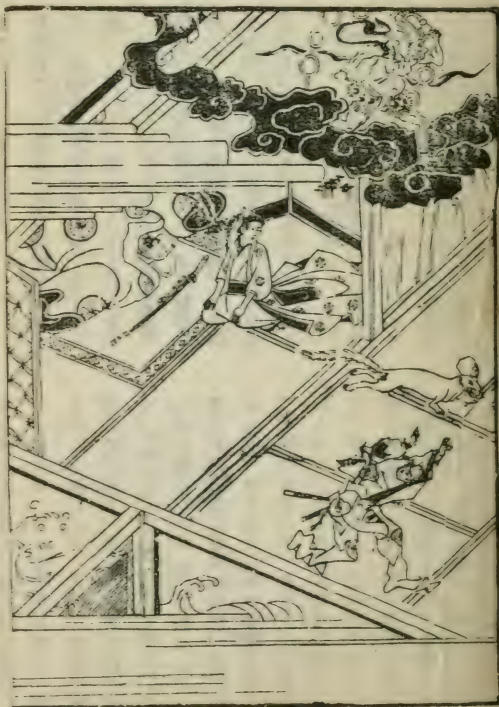
平次是を見るに、我身のつらさ今更に思ひ知られて、悲しき事かぎりなし。佛持堂にまゐり、位牌の前に花香たむけ、念佛となふれば、二人の親うしろに來りつゝ、これこそ汝が戀ける平次の手向なれ、よく／＼うけよとて、ふしまろび悲しみ歎きければ、平次を初めて家にある人、皆一同に聲をそろへてなきけるもあはれなり。濱田夫婦いふやう、今は父母もおはせねば、獨身となりて心細かるらむ。今姉娘の死したればとて、餘所にやは見るべき。同じくは此家におはして、ともかうも身の業をいとなみ給へとて、家の後に住所しつらひてとゞめおきたり。かくて四十九日の中陰とりおこなひ、家こぞりて小瀧の墓にまうでつゝ、平次をば留主せさす。下向のとき、日すでに誰がれに及びて、平次は門に出むかふ。皆おの／＼內に入たりけるに、妹娘今年十六歲なるが、乘物の內より何やらむおとしけり。平次ひそかに拾うて見れば、眞紅の帶也。ふかくおさめて內に入つゝ、わが住かたに歸り、ともしびのもとに物思ひつゞけてひとり坐し居たり。夜更け人靜まりてのち、妻戸を音づるゝものあり。戸を開きて見れば妹娘なり。そのまゝ內に入て囁きいふやう、みづから姉におくれて歎きに沈めり。向に眞紅の帶を投しを、君拾ひ給ふや、深き宿世忘れがたくして、これまで忍びて參り侍べり。契りを結びて偕老のかたらひをなさんといふ。平次きゝて驚きいふやう、ゆめ／＼あるべき事とも覺えず。御父母のなさけありて我を養ひ給ふだにあるを、許されもなくして正なき事を行ひ、もし洩れなん後をばいかゞせむ。とく／＼歸り給へといふ。妹大に怨みいかりて云やう、わが父すでに聟の思ひをなし、此家に養へり。みづからこゝに來れる心ざしを空しくなし給はゞ、身を投て死なんに、必ず後の悔みをなし、生をかへても怨み參らせむといふ。平次力なく其心にしたがひけり。曉になりて

妹はおきていにけり。それよりはひたすらに暮に來りて朝に歸る。よひ〳〵ごとの關守を恨むるばかり、うちとけてわりなく契りけり。三十日ばかりの後、或夜又來りて平次に語るやう、今迄は人更に知らず。されども事は洩れやすければ、もしあらはれて憂き目をや見ん。君我をつれて、垣を越えて跡をくらまし給へ。心安く階老を契らんといふ。平次も此上はわりなき情の捨難くして、うちつれて忍び出つゝ、三國の湊に被官の者ありける。それがもとに行て、かう〳〵と名のり賴むよしいひければ、かひ〳〵しく受け入れて一年ばかりかくれ住侍べり。女或時いふやう、父母のいましめの恐ろしさに君とつれて、こゝに逃來りけれ。すでに一年の月日を過ぐしたれば、二人の親さこそみづからを思ひ給ふらめ。今は如何にも罪ゆるし給はん。いざや古鄕に歸らんといふ。平次此上はとて、つれて敦賀に歸り、まづ女をば舟に置きて、我身ばかり濱田が家に至り、案内して對面を遂げていふやう、さても我さしもいたはりおぼしけるを、御ゆるされもなく、まさなきわざして不義の名をかうぶりし事、その罪かろからずと雖も、すで

に年を重ねぬれば、今は怒りもゆるくなり給はん。此故にこれまでつれて歸り侍べり。罪ゆるし給はんやといふ。濱田聞てそれは如何なる御事ぞ、更に心得がたしといふ、平次ありのまゝに語りて、眞紅の帯を取出してみせたり。其時濱田大に驚き、此帯はそのかみ姉に約束せし時に給はりし物也。姉むなしくなりければ、棺に納めて埋み侍べり。又妹は病おもく床にふしてあり。君とつれて他國にゆくべき事なしとて、舟にとゞめおきたりといふをきゝて、人を遣して見するに、舟にはふなかたの外は更に人なし。是はそも如何なる事ぞとて、濱田夫婦は驚き疑ふ處に、妹の娘そのまゝ床より立あがりて、さまざま口ばしりて、我すでに平次に約束ありながら、世を早うせしかば、おくり捨られて塚の主となされしかども、平次に深きすぐせの縁あり。此故に今又こゝに來れり。願くは我が妹を以て平次が妻となしてたべ。然らば日比の病も愈ゆべし。これみづからが心に望むところなり。若し此事をかなへ給はずは、妹が命をも同じ道に引取りて、我が黄泉の友とせむといふ。家うちの人皆驚き怪しみて、其身を見れば妹の

娘にして、其身のあつかひ、物いふ聲こと葉は、皆姉の娘に少しもたがはず。父の濱田いふやう、汝は已に死したり。如何でか其跡までも執心深くは思ふぞやと。物の氣答へていふやう、自ら先世に深き縁ある故に、命こそ短かけれ共、閻魔大王にいとまを給はり、此一年餘りの契りをなし侍べり、今は迷途に歸り侍べる。必ずみづからがいふ事たがへ給ふなとて、平次が手をとり涙を流し暇乞して、又手を合せ父母を拜みつゝ、さていふやうは、かまへて平次の妻となるとも、女の道よく守り父母に孝行せよや　今は是までぞとてわなわなとふるひて、地に倒れて死入たり。人々驚き容に水そゝぎければ、妹よみがへり、病は忽ちにいえたり。先の事共を問ひけるに、一つも覺えたる事なし、是によりてつひに妹娘を以て、平次と夫婦になしつゝ、さまゞゝ佛事をいとなみ、姉娘が跡をとぶらひ侍べり。これを聞人きどくのためしに思ひけり

狐の妖怪

江州武佐の宿に、竊竹小彌太といふも

のあり。元は甲賀に住て、相撲を好み力量ありて、心も不敵なりけるが、中比こゝに來り旅人に宿かし、旅籠を以て營みとす。ある時所用の事ありて、篠原堤を行きけるに、日すでに暮かゝり前後に人跡もなし。只我獨り道をいそぐ。其間、道の傍らに一つの狐かけいでゝ、人の髑髏を戴き立あがりて、北に向ひ禮拜するに、かの髑髏地に落たり。又とりて戴きて禮拜するに又落たり。落れば又戴く程に、七八度に及びて落ざりければ、狐すなはち立居ふのまゝにして、百度ばかり北を拜む。小彌太不思議に思ひて、立とまりて見れば、忽に十七八の女になる。その美しさ國中には並びもなく覺えたり。日は暮はてゝ昏かりしに、小彌太が前に立て聲打あげ、物哀れに啼きつゝ行く。元より小彌太は不敵者なれば、少しも怖れず女のそばに立寄り、如何にこれは誰人なれば、何故に日暮て、たとひとり物悲しく啼叫び、いづくをさしておはするやらんといふ。かの女なくなく答へけるは、みづからは是より北の郡余五といふ所の者にて侍べり。このほど山本山の城を責とらんとて、木下藤吉郎とかや聞えし大將はせむかひ、

其引足に、余五木下のあたり皆焼拂ひ給へば、みづからが親兄弟は山本山にして打死せられ、母はおそれて病出たり。かゝる所へ軍兵打入て、家にありける財寳は一つも殘さず奪ひ取たり。母聲をあげて恨みしかば、切殺しぬ。みづから怖ろしさに草むらの中に隱れて、やう〳〵に命をつぎけれ共、親もなく兄弟もなし。賴む陰なき孤子となり、いづくに身をおくべき便りもなければ、今は唯身を投げて死なばやと思ひ侍べるに、悲しさは堪がたくて、人目をも知らず啼侍べるぞやといふ。小彌太聞てまさしく狐の化けて、我をたぶらかさんとす。我は又此狐をたぶらかして德つかばやと思ひ、げに〳〵哀れなる御事かな。親兄弟も皆になりて、立よるかげもおはしまさずは、幸にそれがしの家ずことに貧しけれ共、一人を養ふほどの事は、ともかうもし侍べらん。我家の事心にしめてまかなひ使はれ侍べらば、賴もしく見とゞけ侍べらんといふ。女大によろこびて、あはれみ思召しやしなうて給らば、みづからがため、父母の生れかはりと思ひ奉らんとて、打連れて武佐の宿に到り、小彌太が妻に對面して、さきのごとくにかき

くどきなければ、妻もあはれに思ひ、ことさら形の美くしきを見て、いたはりいつくしむ。小彌太露ばかりも妻に狐の事を語らず。天正のはじめ江州漸やく静になり、北の郡は木下藤吉郎是を領知し給ふに、石田市令助京より下りける次に、武佐の宿小彌太が家に留まり、かの女を見て限りなく愛まどひ、如何にもして此女を我に與へよと、いはれしかば、小彌太いふやう、歴々の諸大名みな望み給へども、今にいづかたへも參らせず。それがし身すぎのたよりようしく宛おこなひ給はゞ奉らんといふ。石田聞て、金子百両を出し與へ、女を買とり打つれて岐阜に歸られたり。女いと才覺あり。よろづにつきてさか〳〵しう利根にして、人の心にさきだち、物をまかなふ事石田が思ふ如くなれば、本妻をゝかたはらになし、

只此女を寵愛す。されども女は少も高ぶるけしきもなく、本妻の心をとりて、みづからは妾なり。いかでか本妻の心をそむき奉らんやとて、夜晝まめやかに仕へ侍べりしかば、本妻もさすがに憎からず、ねんごろにいとほしみけり。出入ともがらにも、ほど〳〵につきて物なんど取らせけり。あるひは絹

小袖ふくさ物、針白粉やうの類、いつもとめおくとも見えねど、取出して賦つかはす。しかも其身麻績つむぎ、物縫ひ、ゑかき花結び迄くらからず侍べり。石田が家にこそ賢女を求めけれと取沙汰あり。半年ばかりの後石田又京都に上る。女いふやう、必ず忠義をもつぱらとして、私を忘れ、千金より重き御身を、小細の事に替給ふな。御内の事はみづからに任せ給へとて出し立て、京にのぼせたり。京にして高雄の僧、祐覺僧都に對面す。祐覺つく／＼と見て、石田殿は妖恠に犯されて、精氣を毀れ給ふ。はやく療治し給はずは、命を失ひ給ふべし。此相それがし見損ずまじといふに、石田更に信ぜず。我をあざむく賓僧の妄語、今に始めずとて打笑ひしが、程なく心地わづらひ付き、面の色黄に痩て、身の肉かれて膏なし。唯うか／＼として物事正しからず。家人等驚き、さま／＼醫療すれどもしるしなし。此時に高雄の僧のいひし事を思ひ出して、祐覺を請じて見せしむ。僧のいはく、此事我更に見損ずまじ。初めわがいふ事を信ぜずして、今この病現れたり。佛法の道は慈悲をさきとす。祈禱を以て是を治せむ、早く國に歸りて侍べし。我も下りてしるしをあらはさんといはれしかば、家人等驚き、祐覺ともろ友に夜を日につぎて岐阜に歸り、壇を飾り廿四行の供物、二十四の灯明、十二本の幣をたて、四種の名香をたきて、一紙の祭文をよみて禳していはく

維年天正歳次甲戌今月今日、石田氏某妖狐の爲に惱さる。夫二氣はじめて別れ、三才已にきざし、物と人とおの／＼其類にしたがうて、性分その形をうけしよりこのかた、品位みなひとしからず。こゝに狐魅の妖ありて恣まゝに恠をなし、木の葉を綴りて衣とし、髑髏をいたゞきて鬘とし、貌をあらため媚を生ず。渠常に氷を聽て水を渡り、疑を致す事時として忘れず。尾を擊て火を出し、祟を作こと更に止ず。此故に大安は羅漢の地に奔り、百丈は因果の禪を詰る。千年の恠を兩脚の譏にあらはし、一夫の腹を双手の賜に破らしむ。粵に石田氏某は軍戶の將帥、武門の命士也。何ぞ妄りに汝が腥穢を施して其精氣を奪ふや。身を武佐の旅館によせて、愛を良家の寢席に與さしむ。汝が狀は綏々、汝が名は柴々、式て其醜をいひ、唱て其惡を示す者也。首丘は其本を忘れざる事をいふと雖も、虎威を假の奸ことは

恐すべからず。汝今すみやかに去、速かに去。汝知らずや、九尾誅せられて千載にも教なき事を。誰か汝が妖媚をいとひにくまざらん。もしすみやかにしりぞき去ずば、州郡大小の神社を驚かし、四殺の剱を以て殺し、六害の水に沈めん。

と読終りしかば、俄に黒雲棚引き大雨降り、雷電夥しく鳴渡りければ、女はなはだ恐れまどひ、そのまゝ倒れて死けり。家人等驚き立よりて見れば、大なる古狐なり。首に人のしやれかうべを戴きて落ずしてあり。此女の手より人に遣はし与へたる物ども取よせて見れば、絹小袖と見えしは皆芭蕉の葉、白粉といひしは糠埃也。針かとおもひしは松の葉也けり。石田氏が心地快然と涼やかになり、忽に平復して、此物どもを見るに怪しき事限りなし。狐の尸をば遠き山の奥に埋み、符を押て跡を禳ひ、丹砂雄黄なんど調合の薬を服せしめて、その根本を補ひ、さて武佐の小彌太を尋ねさするに、女を責て徳つき、家を移していづち行けるとも知らず。まさに狐魅よく人を惑はし、詀覺僧都の法験を感歎しけるとぞ。

伽婢子巻二終

伽婢子巻之三

（一）妻の夢を夫面に見る

周防山口の城主大内義隆の家人、濱田の與兵衛が妻は、室の泊の遊女なりしが、濱田これを見そめしより、わりなく思ひて契り深く語らひ、つひに迎へて本妻とす。かたちうつくしく風流ありて、心ざま情深く、哥の道に心ざしあり。手もうつくしう書けるが、然るべき前世の契りにや、濱田が妻となり、互に妹脊の語らひ此世ならずぞ思ひける。主君義隆京都將軍の召によりて上洛し、正三位の侍從兼太宰大貳に補任せられ、久しく都に逗留あり。濱田もめしつれられ京にありけり。妻これを戀て、間なく時なく待わび侍べり。比は八月十五夜空くもりて月の見えざりければ、

おもひやる都の空の月かげを
いくへの雲かたちへだつらむ

とうちながめ、ねられぬ枕をひとり傾けて、あかしかねたる夜を恨み臥したり。其日義隆國にくだり給ひて、濱田も夜更るまで城中にありて漸く家に歸る。その家は惣門の外にあり。雲おほひ月くらくして、さだかならざりける道の傍ら、半町ばかりの草むらに、幕打まはし篝火あかくかゝげて、男女十人ばかり、今宵の月にあこがれ酒宴すると見ゆ。濱田思ふやうは、國主歸り給ひ家々喜びをなす。誰人かこよひこゝに出て遊ぶらんと恠しみて、ひそかに立寄り、白楊の一樹繁げりたる間に、隱れてうかゞひ見れば、わが妻の女房もその座にありて、物いひ笑ひける。是はそも如何なることぞ、まさなきわざかなと怨み深く、猶その有樣をつくづくと見居たり。座上にありける男いふやう、如何にこよひの月こそ殘り多けれ。心なの雲や。是になど一詞のふしもおはせぬかといふ。濱田が妻辭しけれども、人々しひて哥よめとすゝむれば、

きりぎりす聲もかれ野の草むらに
月さへくらしこと更になけ

とよみければ、柳陰にかくれて聞ける濱田も、あはれに思ひつゝ涙をながす。座中の人はさしも與じてさかづきをめぐらす。かくて十七八と見ゆる少年の

前に、さかづきあれども酒を受けざりしを、座中しひければ、此女房の哥あらば飲侍べらん といふ。女房一首こそ思ふ事によそへてもよみけれ。発し給へといふにきかず。さてかくなむ。

ゆく水のかへらぬけふをおしめたゞ
　わかきも年はとまらぬものを

さかづきあるかたにめぐりて濱田が妻に、又哥うたひ給へといふに、今様一ふしをうたふ。

さびしき閨の獨ねは、風ぞ身にしむ荻はらや、そよぐにつけて音づれの、絶ても君に恨はなしに、戀しき空にとぶ雁に、せめて便りをつけてやらまし。

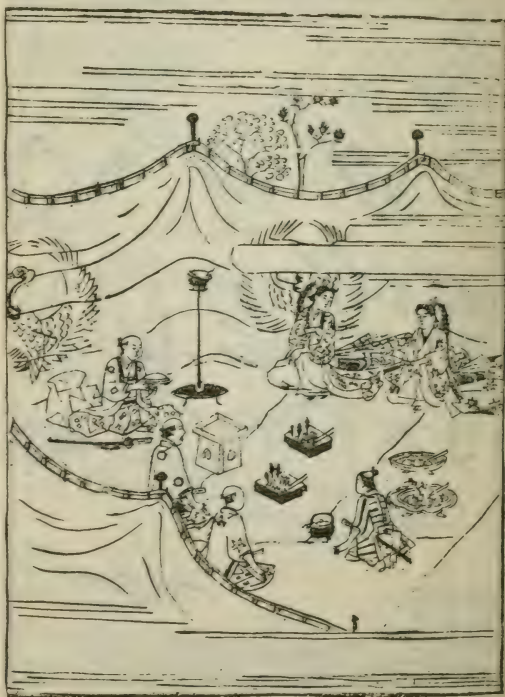
その座に儒學せしとみえし男、いかゞ思ひけん、打涙ぐみて、

螢火穿二白楊一　悲風入二荒草一
疑是夢中遊　愁斟一盃酒

と吟詠するに、いかで今宵ばかり夢なるべき。すべて人の世は皆夢なるものをとて、濱田が妻そゞろに涙を流す。座上の人大に怒りて、此座にありて涙を流すいまいましさよとて、濱田が妻に盃を投げかけしかば、額にあたる。妻怒りて座の下より、石を取出し投たりければ、座上の人の頭にあたり、血

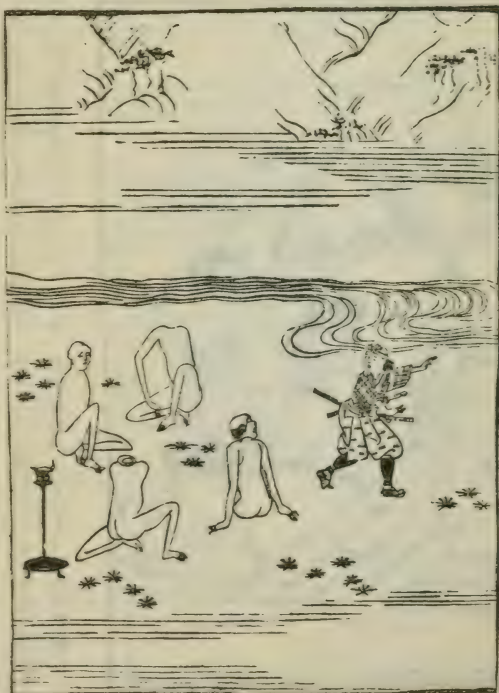
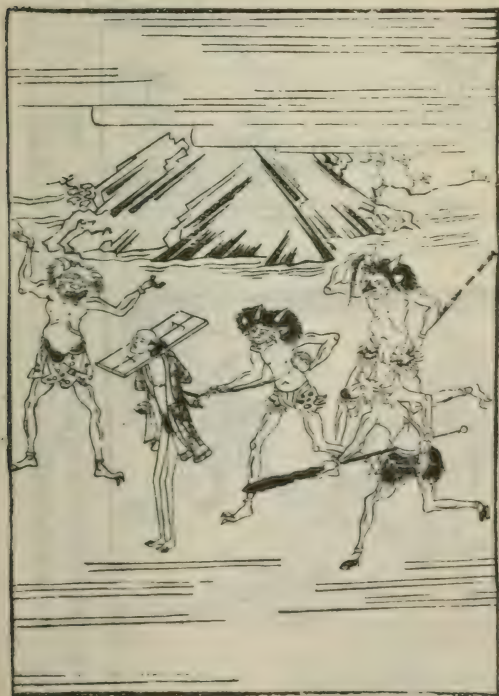
走りて流るゝ事瀧のごとし。座中驚き立騒ぐかと見えし。ともしび消えて人もなく、唯草むらに蟲の聲のみぞ殘りたる。濱田大に怪しみ、さては我妻むなしくなりて幽靈の顯れ見えけるかと、いとゞ悲しくて家に歸りければ、妻は臥してあり。如何にと驚かせば、妻起あがり喜びて語るやう、餘りに待わびてまどろみしかば、夢の中に十人ばかり、草むらに酒飲み遊びて哥を望まれ、其中にも君のみ戀しさをよそへてうたひ侍べり。座上の人みづからが涙を流す事を忌みて盃を投げかけしを、みづから石を取て打返すに、座中さはぎ立と覺えて夢さめたり。盃の額に當りしと覺えしが夢さめて、今も頭の痛くおぼゆとて、哥も詩もかう〳〵と語る。白楊の陰にして見きゝたるに少しも違はず。濱田つら〳〵思ふに白楊陰に隱れて見たりし事は、我妻の夢のうちの事にてありけるとなむ。

○鬼谷に落て鬼となる

若州遠敷郡熊川といふ所に、蜂谷孫太郎といふ者あり。家富み榮えて乏き事なし。この故に耕作商賣の事は心にも掛けず、只儒學を好みて僅に其片端を

讀み、是に過たる事あるべからずと、一文不通の人を見ては物の數ともせず、文字學道ある人を見ても、我には優らじと輕優し、剰へ佛法をそしり、善惡因果のことわり、三世流轉の敎を破り、地獄天堂娑婆淨土の說をわらひ、鬼神幽靈の事を聞ては、更に信せず。人死すれば魂は陽に歸り、魄は陰にかへる。形は土となり、何か殘る物なし。美食に飽小袖着て、妻子ゆたかに樂をきはむるは佛よ。麁食をだに腹に飽ず、麻衣一重だに肩を裾に、妻子を沽却し、辛苦するは餓鬼道よ。人の門にたち聲をばかりに物を乞て、わけをくらひてきたなしとも思はず。石を枕にし草に臥て、雪降れども赤裸なる者は畜生よ。科を犯し牢獄に入られ、繩をかゝり頸をはねられ、身をためされ、骨を碎かれ、或は水責火刑、磔なんどは地獄道也。これを取扱ふ者は獄卒よ。此外には總て何もなし。目にも見えぬ來世の事、まことにもあらぬ幽靈の事、僧法師巫神子のいふ處を信ずることそおろかなれと云ひ罵り、たま／＼諫むる人あれば、四書六經の文を引出し、邪に義理をつけて、辯舌にまかせていひかすめ、放逸無慚なる事いふば

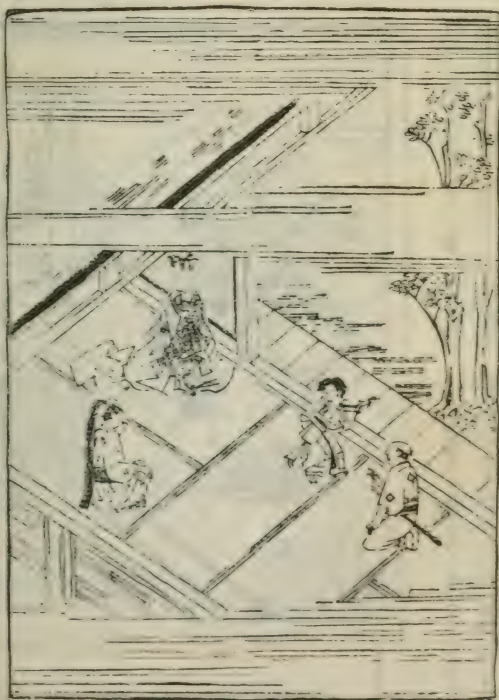
かりなし。時の人鬼孫太郎と名付て、ひとつ者にして取合ず。或時所用の事に付て敦賀に赴くとて、唯一人行けるが、日たけて家を出たりければにや、今津川原にして日は暮たり。江州北の庄、兵亂の後なりければ人の往來もまれなり。たやすく宿かす家もなし。河原おもてに出て見渡せば、人の白骨ここかしこに亂れ、水の流ものさびしく、日は暮はてゝ四方の山々雲とぢこめ、立寄るべき宿もなし。いかゞすべきと思侘びつゝ、北の山ぎはに少し茂りたる松の林あり。こゝに分入て、樹の根をたよりとし、すこし休み居たれば、鵂鶹の聲すさまじく、狐火の光り物凄く、梢に渡る夕嵐いとゞ身にしみて、何となく心細く思ふ所に、左右を見れば、人の死骸七つ八つ、西枕南かしらに臥倒れてあり。肅々たる風のまぎれに、小雨一とほり音づれ、電ひらめき雷なり出たり。かゝる所に臥倒れたる尸、一同にむくと起上り、孫太郎を目掛けてよろめき集る。恐ろしさ限なく、松の木に登りければ、尸ども木のもとに立寄り、今宵の内には此者は取るべき也とのゝしる間に、雨ふり止み、空晴れて、秋の月さやかに輝き出たり。

たちまちにひとつの夜叉走り來れり。身の色青く、角生て口廣く、髮亂れて、両の手にて戸をつかみ、首を引抜き手足をむしりて、是をくらふ事瓜をかむが如くにして、飽までくらひて後、わが登り隱れたる松の根を枕として臥たれば、鼾睡の音地に響く。孫太郎思ふやう、此夜叉睡り覺めなば、一定我を引おろして殺しくらはん。たゞよく寢入たる間に逃げばやと思ひ、靜かに樹をくだり、逸足をいだして走り逃げければ、夜叉は目を覺し、隙間もなく追かくる。山の麓に古寺あり。軒破れ壇くづれて住僧もなし。うちに大體の古佛あり。こゝに走入て助け給へと佛に祈り、後に廻りたれば、佛像のせなかに穴あり。孫太郎此穴のうちに入て、腹の中に忍び隱れたり。夜叉はあとより馳入て、堂の内を捜しけれども、佛像の腹まではは思ひ寄らざりけれ、出て去ぬ。今は得たり。今夜の點心まうけたりとうた心安しと思ふ所に、この佛像足拍子ふうて、から／＼と打笑ひ、堂を出て歩み腹をたゝきて、夜叉は是を求めてとりにがし、我は求めずしておのづからみゆく。かしこなる石に躓きてはたと倒れ、手も足もうちくだけたり。孫太郎

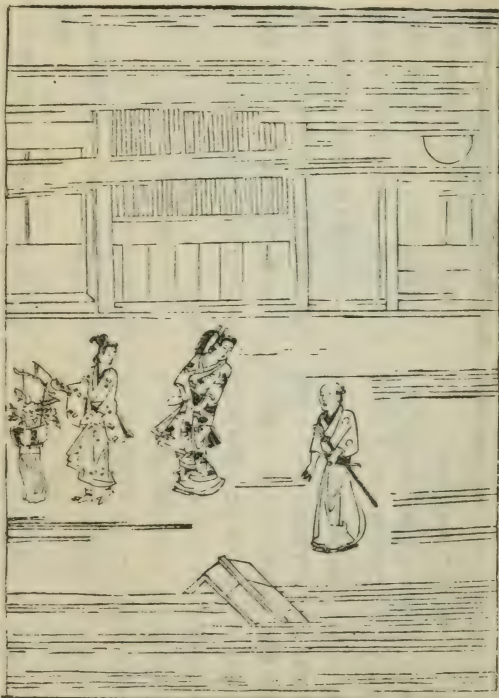
穴より出て佛像に向ひ、我をくらはんとして禍ひ其身にあたれり。人を助くる佛の結構と罵りながら、堂より東に行けば、野中にともしびかゝやきて、人多く坐して見ゆ。是に力を得て走り赴きければ、首なきもの、手なき者、足なき者、皆赤裸にて並び坐したり。孫太郎きもをけし、走りぬけんとす。ばけものおほきに怒りて、我等酒宴する半に座をさます事こそ安からね。とらへて肴にせむとて、一同に立て追かくる。孫太郎山際に添うて走りければ川あり。流るゝともなく渡るともなく向に駈あがれば、妖は立もどりぬ。孫太郎足に任せて行く。耳もとに猶どよみ罵る聲聞えて身の毛よだち、人心ちもなく半里ばかり行ければ、月すでに西に傾き雲暗く、草茂りたる山間に行かゝり、石に顚きて一つの穴に落入たり。其深き事百丈ばかり也。やうやう落つきければ、腥き風吹すさまじき事、骨にとほる。光りあきらかになりて見めぐらせば、鬼の集り住む所なり。或は髪赤く兩の角火の如く、或は青き毛生て翼ある者、又は鳥の嘴ありて牙くひちがひ、又は牛の頭けだもののおもてにして、身の色赤きは靛の如

く靑きは藍に似たり。目の光はいなびかりの如く口より火焰を吐く。孫太郎が來るを見て、互に曰く、これ此國の障りとなる者ぞ。取逃すな。唯つなげよやとて、鐵の枷をいれ銅の手械さして、鬼の大王の庭の前に引すゆる。鬼の王大きに怒りて曰、汝人間にありて、漫りに三寸を動かし唇を翻へし、鬼神幽靈なしといふてさま〲我等をないがしろにし、辱を與ふるいたづら者也。汝書典に眼をさらす。中庸に曰、鬼神の德それ盛なるかなと。論語に曰、鬼神を敬して之を遠ざくと。易の睽卦に曰、鬼を一車にのすと。詩の小雅に曰、鬼をなし蜮をなすと。その外左傳には晉の景公の夢、鄭の大夫伯有が事、皆鬼神をいへり。唯怪力亂神を言はすと云へる一語を、邪に心得て、みだりに鬼神を侮る事は何のためぞとて、則ち下部の鬼に仰せて散々に打擲せしむ。鬼の王の曰く、その者の長高くなせと。鬼ども集りて頭より手足まで引延ばすに、俄に身の長三丈ばかりになり、竹の竿の如し。鬼ども笑ひどよめき、おしたてゝ歩まするに、ゆらめきて打倒れたり。鬼の王又いひけるは、其者を身の長短かくせよと。鬼ども又捕らへ

て團子の如くつくね、ひらめしかば、俄に横はだかりに短くなる。突立て歩まするに、むく／＼として蟹の如し。鬼共手を打て大に笑ふ。こゝに年老たる鬼の云やう、汝常に鬼神なき者といひ破る。今この形を長く短くさま／＼嬲りもて遊ばれ、大なる辱を見たり。誠に不敏の事なれば宥與へんとて、手にて提げなげしかば、孫太郎元の姿になる。さらば是より人間に返すべしといふ。鬼ども皆曰、此者を只返しては詮なし。餞すべしとて、或鬼、我は雲路を分る角を取らせんとて、兩の角を孫太郎が額におく、或鬼はわれ風に嘯く嘴を與へんとて、鐵の嘴を孫太郎が唇にくはへたり。或鬼、我は朱に亂れし髮を譲らんとて、紅藍の水にて髮を染めたり。或鬼、我はみどりに光る睛を與んとて、青き珠二つを目の中に押入たり。すでに送られて穴を出つゝ、家に歸らんと思ひ、今津川原より道にさしかゝれば、雲路を分る兩の角差し向ひ、風に嘯く嘴尖り、朱に亂れし髮さかしまにたちて火の如く、碧の光りをふくむまなこ輝き、さしも恐ろしき鬼の姿となり、熊川に歸り家に入たれば、妻も下人も怖れ驚く。孫太郎涙を流し、かう／＼

の事ありて、此妻に成りしか共、心はゆめ〳〵かはらずといふに、妻は中中此有様、目の前に直に見るもなさけなく〳〵悲しとて、孫太郎がかしらにかたびら打掛けて、唯なき悲しむより外はなし。幼なき子共は怖れなきて逃げ、あたりの人集りて、手をうちて恠しみ見る。孫太郎も物憂く覚え、戸を閉ぢて人にも逢はず、物をも食ず打籠り、思ひに亂れて煩ひ付き、遂にむなしくなりぬ。そののち時々は元の孫太郎が妻にて、幻の如く家のめぐりを歩きけるを、佛事營みければ二たび見えずとぞ。

○牡丹灯籠

年毎の七月十五日より廿四日までは、聖霊の棚をかざり、家々これを祭る。又いろ〳〵の灯籠を作りて、或は祭の棚にともし、或は町家の軒にともし、又聖霊の塚に巡りて石塔の前にともす。其灯籠のかざり物、或は花鳥或は草木、さま〴〵しほらしく作りなして、其中にともし火ともして夜もすがらかけおく。是を見る人道もさりあへず。又其間に踊子どもの集り、聲よき音頭に頌

哥出させ、振よく踊る事、都の町々上下皆かくの如し。天文戊申の歳、五條京極に荻原新之丞といふ者あり。近きころ妻に後れて愛執の涙袖に餘り、戀慕の焔胸をこがし、ひとり淋しき窓のもとに、ありし世の事を思ひ續くるに、いとゞ悲しさかぎりもなし。聖靈祭りの營みも、今年はとりわき、此妻さへ無き名の數に入ける事よと、經讀み回向して、終に出ても遊はず、友だちのさそひ來れども、心たゞ浮立たず、門にたゝずみ立てうかれをるより外はなし。

いかなれば立もはなれず面影の
身にそひながらかなしかるらむ

とうちながめ涙を押拭ふ。十五日の夜いたく更けて、遊びありく人も稀になり、物音も靜かなりけるに、一人の美人その年廿ばかりと見ゆるが、十四五ばかりの女の童に、美しき牡丹花の灯籠持たせ、さしもゆるやかに打過る。

芙蓉のまなじりあざやかに、楊柳の姿たをやかなり。かづらのまゆ、みどりの髮いふばかりなくあてやか也。荻原月のもとに是を見て、是はそも天津乙女の天降りて、人間に遊ぶにや、龍の宮の乙姫のわたつ海より出て慰むにや、

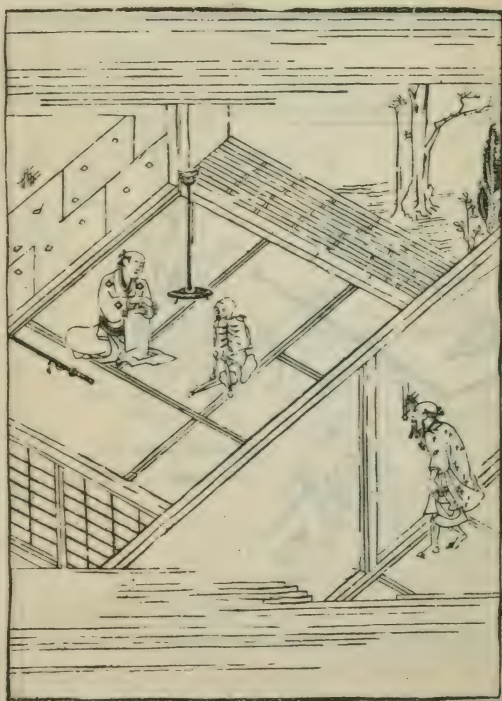
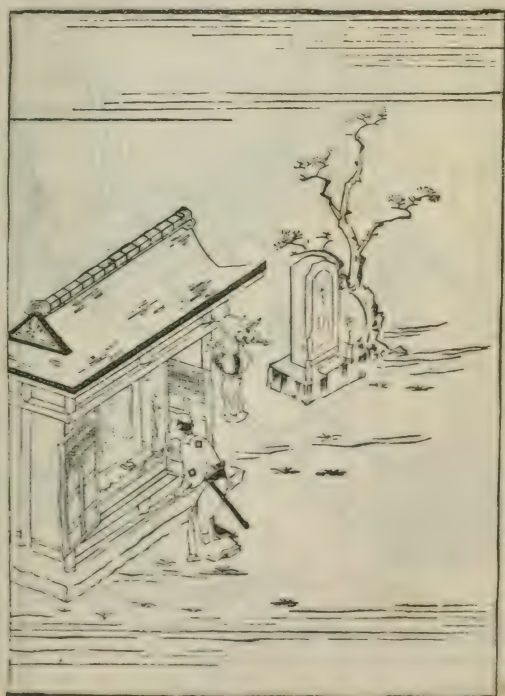
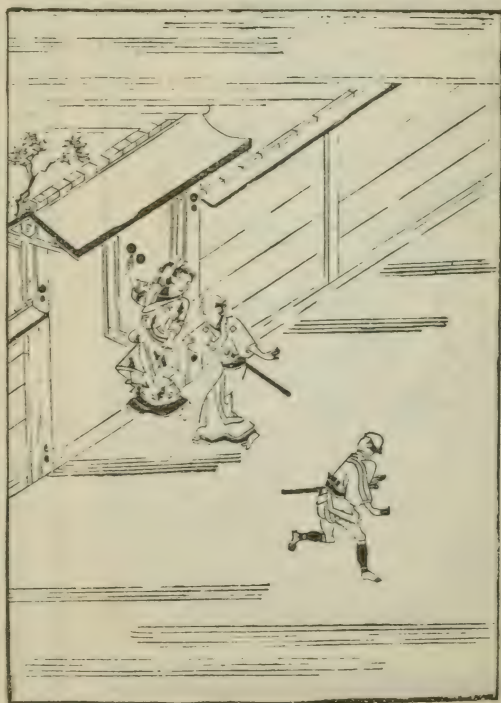
誠に人の種ならずと覺えて、魂飛び心浮かれ、みづからをさへとゞむる思ひなく、めで惑ひつゝ後に隨ひて行く。前になり後になりなまめきけるに、一町ばかり西のかたにて、かの女うしろに顧みて、すこし笑ひていふやう、みづから人に契りて待侘たる身にも侍べらず。唯今宵の月に憧れ出て、そゞろに夜更け方、歸る道だにすさまじや。送りて給かしといへば、荻原やをら進みていふやう、君歸るさの道も遠きには、夜深くして便なう侍べり。某のすむ所は塵塚たかく積りて、見苦しげなるあばらやなれど、たよりにつけてあかし給はゞ、宿かし參らせむと戯ぶるれば、女打笑みて、窓もる月を獨り詠めてあくる侘しさを、嬉しくもの給ふ物かな。情によわるは人の心ぞかしとて立もどりければ、荻原喜びて女と手を取組つゝ家に歸り、酒とり出し、女の童に酌とらせ少し打飲み、傾く月にわりなき言の葉を聞くにぞ、今日を限りの命ともがなと兼ての後ぞ思る、荻原、

また後のちぎりまでやは新枕
たゞ今宵こそかぎりなるらめ

と云ひければ女とりあへず、

ゆふな／＼まつとしいはゞこざらめや
かこちがほなるかねことはなぞ

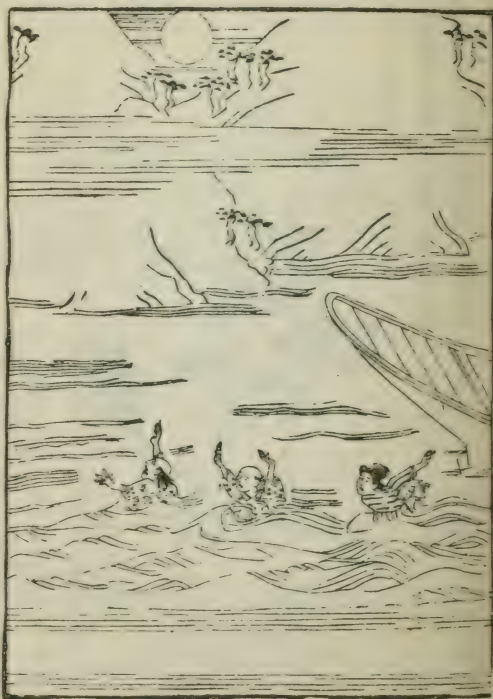
と返しすれば、荻原いよ／＼嬉しくて、互にとくる下紐の結ぶ契や新枕、交す心も隔なき、睦言はまだ盡きなくに、はや明方にぞなりにける。荻原、その住給ふ所はいづくぞ、木の丸殿にはあらねど名のらせ給へといふ。女聞て、みづからは藤氏のすゑ二階堂政行の後也。其比は時めきし世もありて家榮え侍べりしに、時世移りてあるかなきかの風情にて、かすかに住侍べり。父は政宣京都の亂れに打死し、兄弟皆絶て家をとろへ、我が身獨り女のわらはと萬壽寺のほとりに住侍べり。名のるにつけては、耻かしくも悲しくも侍べる也と、語りける言の葉優しく、物ごしさやかに愛敬あり。すでに横雲たなびきて、月山の端に傾き、ともし火白うかすかに殘りければ、名ごり盡せず起き別れて歸りぬ。それよりして日暮るれば來り、明がたには歸り、夜毎に通ひ來ること更に約束を違へず。荻原は心惑ひてなにはの事も思ひ分けず、唯此女のわりなく思ひかはして、契りは千世も變らじと通ひ來る嬉しさに、晝といへども又こと人に逢ふ事なし。斯て廿日餘りに及びたり。隣の家によく物に心得たる翁のすみけるが、荻原が家にけしからず若き女の聲して、夜毎

に哥うたひ笑ひ遊ぶ事の怪しさよと思ひ、壁の隙間より覗きて見れば、一具の白骨と荻原と灯のもとに差向ひて坐したり。荻原物云へば、かの白骨手あし動き髑髏うなづきて、口とおぼしき所より、聲響き出て物語りす。翁大に驚きて、夜の明るを待かねて荻原を呼よせ、此程夜毎に客人ありと聞ゆ。誰人ぞといふに、更に隠して語らず。翁のいふやう、荻原は必ずわざはひあるべし。何をか包むべき。今夜壁より覗き見ければかう〳〵侍べり。凡そ人として命生たる間は、陽分至りて盛に清く、死して幽靈となれば、陰氣はげしくよこしまに穢るゝ也。此故に死すれば忌深し。今汝は幽陰氣の靈と同じく坐して是を知らず。穢れてよこしまなる妖魅と共に寢て悟らず。忽に眞精の元氣を耗し盡して精分を奪はれ、わざはひ來り病出侍べらば、藥石鍼灸の及ぶ所にあらず。傳尸癆瘵の惡症を受け、まだもえ出る若草の年を、老先長く待ずして、俄に黄泉の客となり、苔の下に埋もれなん。諒に悲しき事ならずやといふに、荻原始めて驚き、恐ろしく思ふ心づきてありの儘に語る。翁聞て、萬壽寺のほとりに住といはゞ、そこに

行て尋ね見よと教ゆ。荻原それより五條を西へ、万里小路よりこゝかしこを尋ね、堤の上柳の林に行めぐり、人に問へども知れるかたなし。日も暮がたに萬壽寺に入て暫く休みつゝ、浴室の後ろを北にゆきて見れば、物ふりたる魂屋あり。差寄りて見れば棺の表に、二階堂左衛門尉政宣が息女彌子吟松院冷月禪定尼とあり。かたはらに古き伽婢子あり。うしろに淺茅といふ名を書たり。棺の前に牡丹花の燈籠の古きを懸けたり。疑ひもなく是ぞとおもふに、身の毛よだちて恐ろしく、跡を見返らず、寺を走り出て歸り、此日比めでて惑ひける戀もさめ果て、我が家も恐ろしく、暮るを待かね明るを恨みし心もいつしか忘れ、今夜もし來らばいかゞせんと、隣の翁が家にゆきて宿を借りて明しけり。さていかゞすべきと愁へ歎く。翁教へけるは、東寺の卿公は行學氣備て、しかも驗者の名あり。急ぎゆきて頼み參らせよといふ。荻原かしこにまうでゝ對面を遂げしに、卿公仰せけるやう、汝は妖魅の氣に精血を耗散し、神魂を昏惑せり。今十日を過なば命は有まじき也とのたまふに、荻原ありの儘に語る。卿公すなはち符を書て

輿へ、門におさせらる。それより女二たび來らず。五十日ばかりの後に、或日荻原東寺に行て、卿公に禮拜して酒に醉て歸る。流石に女の面影戀しくや有けん、萬壽寺の門前近く立寄て、內を見いれ侍べりしに、女忽ちに前に顯はれ、甚恨みていふやう、此日比契りし言の葉の、早くも僞りになり、薄きなさけの色見えたり。初は君が心ざし、淺からざる故にこそ我身を任せて、暮に行きあしたに歸り、何時まで草のいつ迄も、絕せじとこそ契りけるを、卿公とかや、なさけなき隔のわざはひして、君が心を餘所にせし事よ。今幸に逢まゐらせしこそ嬉しけれ。此方へ入給へとて、荻原が手を取り門より奥に連れてゆく。召連れたる荻原が男は、肝を消し恐れて逃げたり。家に歸りて人々につげければ、人皆驚き行て見るに、荻原すでに女の墓に引込れ、白骨と打重りて死してあり。寺僧たち大に怪しみ思ひ、やがて鳥部山に墓を移す。その後雨降り空曇る夜は、荻原と女と手を取組み、女の童に牡丹花の灯籠ともさせ出てありく。是に行逢ふ者は重く煩ふとて、あたり近き人は怖れ侍べりし。荻原が一族これを歎きて、一千

部の法華經を讀み、一日頓寫の經を墓に納めてとぶらひしかば、重ねて現はれ出ずと也。

○梅花屛風

天文のすゑ京都の兵亂打續き、三好と細川家年を重ねて合戰に及び、その時の公方は光源院源義輝公、しば／＼是を鎭めんと謀給へども、威輕く權薄くして、更に是を用ひ奉る人なし。こゝに周防の國山口の城主太宰大貳大内義隆は、そのころ從二位の侍從に補任せられ、兵部卿を兼官して、權威高く西海に輝きしかば、公卿殿上人多く義隆を頼みて、周防の國に下り、山口の城に身を隱し、世の亂を逃れ京の騷ぎを免がれ給ふ。然るに義隆久しく武道を忘れ、詩哥風詠の遊びを事とし、佞人を近つけ國政をないがしろにし、物の上手と云へば、諸藝者多く集めて、晝夜榮耀をほしいまゝにせられしかば、その家老陶尾張守晴賢謀反して、義隆を追出し長門の大寧寺に押詰め、義隆つひに自害せらる。尾張守は、豐後の國主大友入道宗麟が舍弟三郎義長を、山口の城に迎へて主君とし、政道執行

ふ。此時に當つて、前關白藤原尹房公、前左大臣藤原公頼公は、山口の城を逃出るに度を失うて、流矢にあたりて薨じ給ふ。從二位藤原親世は髪を剃りて逃れ出給ふ。其中にも中納言藤原基頼卿は謀逞しく、しかも諸藝に渡り、繪よく書給ひ、手跡哥の道に賢きのみならず、武道を心に掛け、馬にのりて手綱の曲を究め、水練に其術を傳へ、半日ばかりは水底にありても物とも思はず、又よく水を泳ぎ潜る事魚の如し。これは殊更に義隆都に上りける時は、官加階の事よろづ執し申給ひて、禁中の事、とかく懇ろに取まかなひ給ふ故に、此度京都の兵亂にも、別義を以て山口によびくだし參らせ、かしづきもてなし、城の外に家造りして置き奉らる。此上はとて妻妾奴婢までよびくだし、暫くは心安くおはしけるに、俄に陶が謀反起りしかば、中納言殿は北の方家人等、重寶の道具ども船に取積み、夜もすがら山口の城を逃げ逃れて、京都を心ざして上られたり。安藝の國に入て、高砂たゝの海まで漕つけて、風あしければ鹽がゝりし給ふ。北の方なくなくかくぞ聞えし。

たゝの海いかにうきたる舟のうへ

さのみにあらきなみまくらかな

夜ふけがた月傾きけるに、中納言殿酒取りいださせ、北の方もろともに少しづゝ打飲み、菓子やうの物取開らき、舟人にも食はせなむどし給ふ。舟人はこゝより一里ばかり東のかた、能地といふ所の者なるが、船に積みたる諸道具財寶皆金銀をちりばめ、絹小袖多く見えしかば、舟人忽ちに惡心をおこし、今宵此ともがらを殺し、財寶を奪ひとり德つかばや、今の世は所々みだれ立て、さして咎むる人も有まじと思ひ、夜いたく更て月も入はて暗き紛れに、家人等男女三人は海へ投げ入たり。中納言殿聞付けて起立ち給ふ所を、後にまはりてはねあげ、海に投入たり。北の方これはいかにとのたまふを、舟人捕へていふやう、心安く思ひ給へ、君をば殺すまじきぞ。わが子二人あり。太郎には新婦迎へて次郎にはまだ妻もなし　わが新婦にすべしとて、舟を出し能地の家に歸り、財寶小袖やうの物出し賣りけり。北の方心地少しあしければ、よくたらんまで待給へ。次郎殿と夫婦になり侍べらんとありしに、舟人嬉しげ也　九月十三夜、舟人子ども新婦姑打つれて、舟に乘りつゝ出て遊び、

夜ふけ方皆酒に醉て、前後も知らず臥たりけるを、中納言殿の北の方ひそかに岸にあがり、足に任せて夜もすがら走り逃げつゝ、夜の明方に狐崎のかれいの山もとにかゝぐりつき給ふ。歩みもならはぬ濱路山道を凌ぎ越ゆるに、跡より追手やかゝるらんと悲しく怖ろしく、足はちしほのくれなゐの如く、茨に掻破り石に損ぜられ、兎角して明はなれたる霧のまぎれより見れば、林の中に家あり。門の内に走り入ければ、經讀み念佛する聲聞え、尼一人立出て、是はこゝもとには見馴れぬ人なり。如何なれば朝まだきにかちはだしにて、是へはおはしけると問に、北の方、みづからは和布苅のとまりに住ものにて侍べり。我夫は去年都に上りてうたれ、孀となりて姑に仕へ參らするに、姑の心はしたなく、又小姑つらく當り、剃へあらざる濡衣着せて浮き立ち、よる晝ものうき事いふばかりなし。今夜十三夜の月見にとて、家内舟に乗りて酒飲みつゝ、みづからに酌取らせ侍べり。過ちて盃を海に落しぬ。さだめて恐ろしき責に逢ひ侍べらん事の悲しさに、夜に紛れて逃げ走り、是までさまよひ參りて侍べりといふて涙を流す。尼いふやう、同じくは是より家に歸り給へ、我等送りて姑に詫言すべし。若し又こゝもとにして夫持ち給はんには、然るべき媒を賴みて參らせむ。とにかくに世の常ならぬ御有さまの痛はしさに申すぞやといふに、北の方更に受こはず。唯尼になしてたべとばかり仰せけり。尼のいふやう、此所は昔淳和天皇の后、出家して武庫の山に籠り、如意比丘尼と申き。此人修法のいとまこゝに來り、浦島子が箱を納め、空海和尚を以て供養したまへる寺なれども、時世移りしかば幽かなる跡となり、其時作り給へる、櫻木の如意輪観音の胸の内に、かの箱を納められ、靈佛にておはしけるに、國の守掠め取り、其家共に燒亡び給へり。然るに此寺は濱近くして、波の音騷がしく、人影まれに、蓬葎しげりつゝ、たま／＼友とするものは、うしろの山に叫ぶ猿の聲、前なる潮に千鳥のなく音、松吹く風、岸うつ波、これより外には言問ひ交す者なし。同行の尼三人何れも五十ばかりの年にて、召使はるゝ侍者の尼も、齢ひは若けれどもおこなひは愼めり。今君美しき花の姿を墨染にやつし、栁の髮を剃り落して、尼となり給はんは、いと惜しき事ながらも、愛着執心を切り離れて、識の道に入ぬれば、身は幻の如く命は露に似たり。今出家し給はゞ、坐禪の

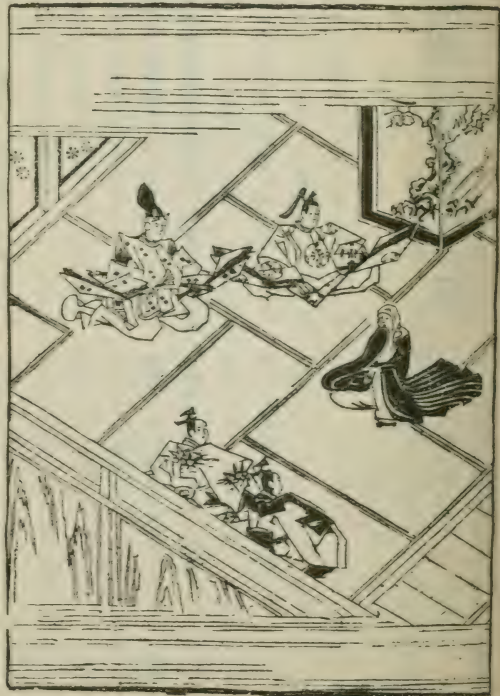
床に妄念の雲を拂ひ、灯明の光に無明の闇を照し、香の煙はおのづから心法の穢を拂ひ、花を摘めばひたすら煩惱の焔涼くなり、朝には粥を食し午の刻に齋を行ひ、緣に隨ひあるに任せて年月を送る。恨もなく嫉みもなし。心靜かに身穩か也。徒に世にかゝはりて、苦しき物思ひに來世の愁へを求めむよりは、世を厭うて出離の道を行はんにはまさるべからずと述べられたり。北の方やがて佛前にまうで、髮切りて剃らせ、法名梨春とぞいひける。もとより此女房はいとけなき時より、哥草紙讀み手ならふ事をのみ、書典を讀ては文字こと〳〵く覺えし人なりければ、出家して幾程もなきに、內典經論の深き理を悟れり。院主の尼公も、後には皆此梨春に尋ねてこそ、佛法の理、經論の文義をも會得せられけれ。梨春かくぞ口すさびける。

中々にうきにしづまぬ身なりせば
　みのりの海のそこをしらめや

まことに佛種は緣より起るとは、これらぞためし也ける。常には奧深く引籠り聖敎に眼をさらし、容易く人にも逢ふ事なし。或日一人の俗來りて、院主の尼公に必ず事侍べり。經讀みて給

とて布施物參らせ、一幅の梅の繪を、供養のためとて佛前に打置たり。尼公是を取りて屏風におされたり。梨春是を見るに、まさしく我箱に入たる繪なり。尼公に如何なる者の奉りしととふに、是は能地の舟人、此寺の檀那にて來る。世にいふ、此者は人を殺し剝掠て世を渡るといふ、誠か知らずと語る。梨春さては疑ひなく、彼の舟人よと思ひながら色にも出さず、筆を取りて繪の上に書けるは、

わがやどの梅の立枝を見るからに
　思ひの外に君や來まさむ

尼公更に其下心を知らず。唯美しき筆の跡を譽めたるばかり也。古哥の言葉を少し引直しける、いと思ひ入たる心ありけむ。備後の國鞆の住人品治九兵衛といふ者、子細ありてこの寺に來り、屏風の繪と哥と何れも不思儀の筆跡なりと見咎め、尼公に請受けて歸り、わがすむ所に立てもてあそぶ。こゝに中納言基頼卿は、敢なく水中に突落され給ひしか共、元より水練の達者なれば、波をくゞり潮をしのぎて、十町許りの末にて岸にあがり、それより足に任せて備後の國鞆の浦まで落來り、山名玄蕃頭が家にいたり、奉公せんとのたまふ

を、人々世の常ならぬ有様を見咎め、山名にかう〳〵といひければ、出て對面し、奥に呼入てこま〴〵ととひ聞けるに、ありの儘に語り給ふ。扨は痛はしき御事かな。京都も未だ靜かならねば、上り給ふとも住所あるべからず。暫くこれにおはして、世の變をも見給へとてとゞめおく。品治九兵衛は玄蕃頭が家人なりければ、かやうの物求めたりしと物語するに、中納言殿心もとなく取寄せて見給ふに、覺えず淚ぞ流されける。山名あやしみて問ければ、中納言殿是は某の書たる繪なり。此哥はまさしく我妻の手跡也。たゞの海にて、妻子家人皆水中に沈められし、財寶は殘らず舟人の爲に取られぬらん。妻は如何にして命生けん。此書は何の故に此哥をかきて出しぬらんとのたまふ。山名則ち品治をめしてつぶさに尋ねければ、庵主の尼公はじめよりの事を語りけり。梨春に對面してありの儘に語り給へといふに、今は何をか包み侍べらんとて、舟人の有様語り給ふにぞ、疑ひもなく中納言殿の北の方とは知られけれ。扨はとて鞆の浦へ呼び迎へ參らせ、中納言殿と對面しては、たゞ夢のやうにぞ覺え給ひける。かはる姿とて互ひに衰へ給ふ有さま、今更哀れぞまさりける。暫く鞆におはしける間に、京都の世の中移り替り、三好松永滅びて、義昭將軍武運開けしかば、都に上らむとし給ふ處に、中納言殿俄にいたはりつきて空しくなり給ふ。梨春に直に尼になり給ひ、廿日ばかりののち、打續きて夢に中納言殿さそひ來り給ふと見て、程なく北の方もむなしくなり給ふ。山名是を同じ所に埋み奉りけり。中陰のはての日、二つの塚より白き雲立のぼり、西をさして行くかと見えし。異香すでに山谷にみち〳〵たり。時の人奇特の思ひをなしけり。

伽婢子巻之四

○地獄を見て蘇

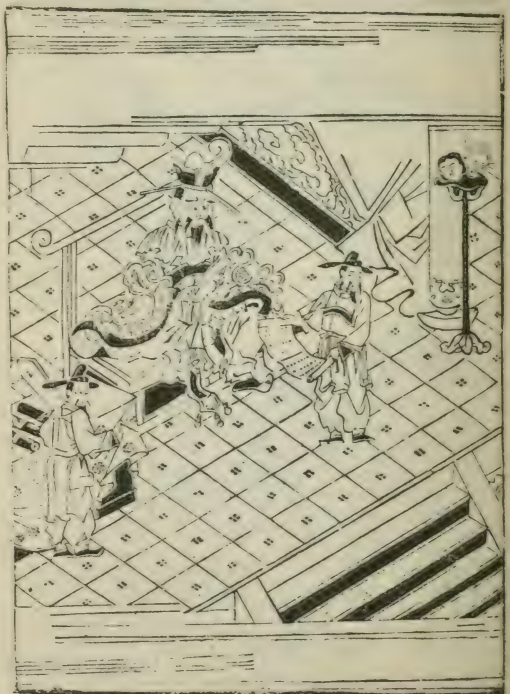
淺原新之丞は、相州鎌倉の三浦道寸が一族の末なり。才智ありて辯舌人にすぐれ、儒學を專らとして佛法を信ぜず、迷途流轉の事因果變化のことわりを聞ては、さま〴〵言かすめて誹あなどり、僧法師と雖もうらやまはず、口にまかせて誹謗し、理を非にまげて難じ破る。其隣に孫平とて有德なる者あり。若かりし時より欲心深く、慳貪放逸にして更に後世を願はず、川狩を好みて常の慰みとす。或時心地わづらひて俄にむなしく成たり。妻子一門驚き歎きて、願たて祈禱しけり。胸のあたり未だ溫かなりければ、まづ葬禮をばせず、まづ僧を請じ佛前を飾り經よみけるに、三日といふ暮方によみがへりて語りけるやう、我死して迷途に赴きしに、其道はなはだ暗し。又こととふべき人もなし。かくて一里ばかり行かと覺えし。一つの門にいたり內に立入しかば、一つの廳場あり。冥官きざはしに出て我を招きて、汝死してこゝに來る。妻子歎きて金銀を散らし、祈禱佛事とりどりに營む故に、此功力によつて二たび娑婆に歸し遣す也とのたまふ。我嬉しくて門を出て歸ると覺えてよみがへりたりといふ。まことに祈禱佛事の功力はむなしからざりけりとて、喜ぶ事限りなし。淺原是を聞て大に嘲り笑ひて曰、世のむさぼり深き邪欲奸曲の地頭代官どもは、賄を得ては非道をも正理になし、物を與へざれば科なきをも罪におとす。此故に富る者は非公事にも勝、貧き者は道理にも負を取る。これ此世ばかりの事かと思ふに迷途の冥官も私あり。金銀だに多く散じて佛事をだによく營めば、或は死してもよみがへり、或は地獄もうかぶとかや。貧きものは力なし。善惡のむくひは、多く錢金を散す人こそ來世も心安けれ。むかし漢の韋賢が言葉に、子に黃金萬籯をのこさむより、如じ子に一經を敎へんにはといへり。地獄の沙汰も錢によるべし。閻魔王も金だにあれば罪は赦す。韋賢が言葉は至なしといひて、手をうちて笑ひあざける。扨かくぞよみ

ける。

おそろしき地獄の涉汰も錢ぞかし

念佛の代に欲をふかゝれ

家に歸り、ともしびのもとに唯獨り坐し居たりけるに、忽ちに二の鬼來れり。其有樣すさまじく、身の毛よだちけるに、これは閻魔王よりの使なり。急ぎ參るべしとて、淺原が兩の手を引たて門を出て走る。歩むともなく飛ともなく、須臾の程に一つの廳場にいたりぬ。世間の評諚場の如し。御殿の奥には大王と覺しき人、玉の冠を戴き褥の上に坐し、冥官はその左右に位に依りて坐せり。二の鬼淺原を其前の庭に引すゆる。大王いかれる聲を出して、汝は儒學を絆として佛法を異端と貶め、深き道理をしらずしてみだりに誹りあざける。いでや迷途の事はなしといふ、此科口より出たり。速く拔舌奈梨に遣しその舌を拔出し、犂を以て鋤返せとの給ふ。淺原首を地につけて、我更に非道の罪なし。儒の敎を守りて、君臣父子夫妻兄弟朋友の五倫の道、よこしまならじとたしなみ、天理性分の本然を説て其德を仰ぐ。更に佛道を修せずといふとも、地獄に落べきいはれなしといふ。大王のたまはく、冥官も私あり。

善悪のむくひは貧富によるとて、念佛の代に欲を深かれといふ哥は、誰が詠みしぞと怒り給ふ。淺原答へていふやう、古しへ三皇五帝の世には、天堂鬼神の事を述べず。三代の時に至りて、山川の神をまつる事初めてこれあり。後漢の世に佛法傳り、夫より天堂地獄因果の理を示す。こゝに於て山川にも靈あり。社頭にも主あり。木佛繪像みな奇特を現ず。世の人是に溺れて性理を失ひ、惡をなして改めず、科を犯してほしいまゝ也。つよきは弱を凌ぎ、富は貧をあなづり、親に孝なく君に忠なく、一家睦しからず、財寶をむさぼり邪欲をかまへ、義を知らず節を守らず、利に走りて恩を忘れ、唯金銀だに散して佛事供養を營めば、罪深きも科重きも、地獄をのがれて天堂に生ずといふ。若よくかくの如くならば、惡人といふとも富貴なれば天上に生れ、貧者は善人も地獄に落べし。閻魔の廳と雖も、富貴なる惡人大佛事をなせば、淨土に遺すといはゞ、貧者のうらみなきにあらず。是廉直の批判にあらず。私と云べし。我この事を思ふが故に、一首の狂哥を詠みて此責に遇ふ。大王深く察し給へといふ。大王聞て宣はく、此理

よこしまならず。諫るところ實也。みだりに罪を加へ難し。此謗りある事は、孫平が佛事祈禱に金銀多く散じたる故に、二たび娑婆に歸されたりと沙汰せし故也。急ぎ孫平を召し來れとの給ふ。須臾の間に孫平を召し來る。手桎首械を入れて直に地獄に遣はし、淺原をば娑婆に送り歸せとあり。二人の冥官座を立て、淺原を連れて庭を出る。淺原云やう、我人間にありて儒學をつとめ、佛經に說ところ、地獄の事を聞ながら信を起さず。今すでにこゝに來る。願くは地獄の有樣を見せて、我にいよいよ信を起さしめ給へかしといふ。冥官聞てさらば司錄神にとふべしとて、西のかた廊下を過て一つの殿に行く。善惡二道の記錄山の如くに積たり。冥官しかじかといふに、司錄神簿を出したり。冥官をこれとりもち、淺原を連れて北のかた半里ばかり行けるに、銅の築地高く、鐵の門きびしき城に至る。黑煙天におほひ、叫ぶ聲地を響かす。牛頭馬頭の鬼あまた、鐵棒鐵叉を横たへ、門の左右に立たり。二人の冥官さきの簿を渡し、淺原を連れて門に入て見せしむ。罪人數知らず。獄卒捕へて地に伏せ、皮を剝ぎ血を絞り、腹をさ

き目を剜り、耳をそぎ鼻を切り、手足をもぎて肉をそぐ。罪人泣き叫び、苦を悲しむ聲地にみちたり。これはむかし人間にありし時、山海に獵漁殺生を營みし者也。又或所には銅の柱を二本立並べ、男と女と二人を磔にして、獄卒鉾をもつて腹を斷さき、銅の湯を銚子に盛て流しかくるに、五臟六腑燋れ燃てわき流るゝ男も女も只首ばかり柱に殘りて泣叫ぶ。淺原其故をとふに、冥官答て曰、是は婆婆にありし時、この男は醫師なり。此女の夫病深きを療治せしむるに、醫師と女とまさなきみそかごとして、夫に惡しき藥を與へ、女あらけなく當りて殺しつゝ夫婦となりき。二人ながら死して今此苦を受るといふ。又或所には尼法師多く裸にて、熱鐵の地に蹲まり居たるを、獄卒來りて牛馬の皮を着覆ふに、尼も法師もそのまゝ牛馬になる。是に盤石を負せくろがねの鞭を以て是を打に、皮破れ肉そげて血の流るゝ事瀧の如し。淺原又問うて曰。これ人間にありし時、尼となり法師となりて、田作らずして飽まで食ひ、機おらずして暖に着て、形は出家ながら戒律を守らず、心に慈悲なく學道なくして、徒らに施物をくらひけ

る者共也。此故に畜生となりて信施を償ふと云。又或所を見れば俗人多く牛馬となりて苦を受く。これは昔代官として百姓を取倒し、妻子を沽却せしめたり。百姓辛苦の肪を膏とる。是も施物に同じからずやと云。最後にある地獄に至る。猛火殊更にもえあがり、數百人くろがねの地に坐し手枷首械をさされ、五體さながらもえこがれ、焔みちみちたり。毒蛇來りて其身をまとひ血を吸、又鐵の嘴ある鷹飛來り、罪人の肩を踏へて眼を啄ばみ、肉を引裂き食ふ。泣き叫ばんとすれば、猛火のけふり咽に迫り、苦みいふばかりなし。肉盡きて骨現れ死すれば、涼しき風吹來り、又元の如くにして蘇る。淺原其故をとふに曰、是は往昔鎌倉の上杉則政の子息龍若殿のめのと妻鹿田新介、その弟長三郎同三郎助その外親類郎合廿人、すでに則政沒落の時、主君龍若殿をつれて、敵北條氏康に渡して降人に出たり。主君を殺したる天罰あたり、此廿人みな氏康に殺され、死して此地獄に落て億萬劫を經るといふとも、浮ぶ時あるべからず。其外の輩も皆主君を殺し不忠を抱き、國家を亡ぼしける者共也と、こま〳〵と語る。其より淺原冥官につれて門を出ると覺えしかば、忽ちに蘇り、隣の孫平は如何にと問ければ、其夜又むなしくなれり。是によりて、淺原儒學を捨てゝ建長寺にいたり、參學して醒悟發明の道人となりけり。

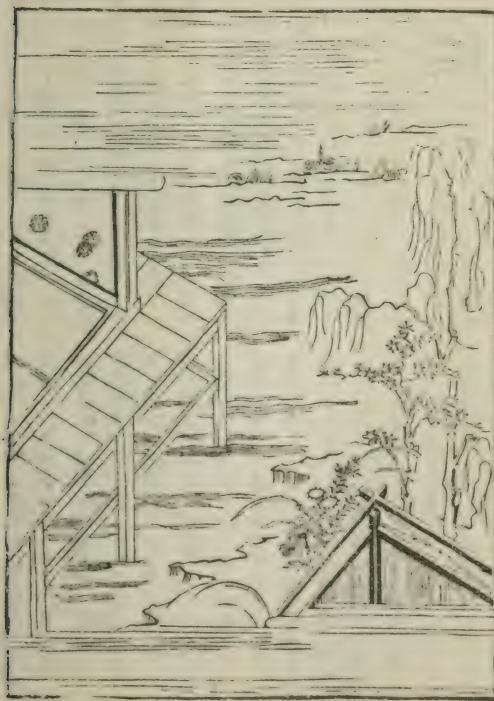
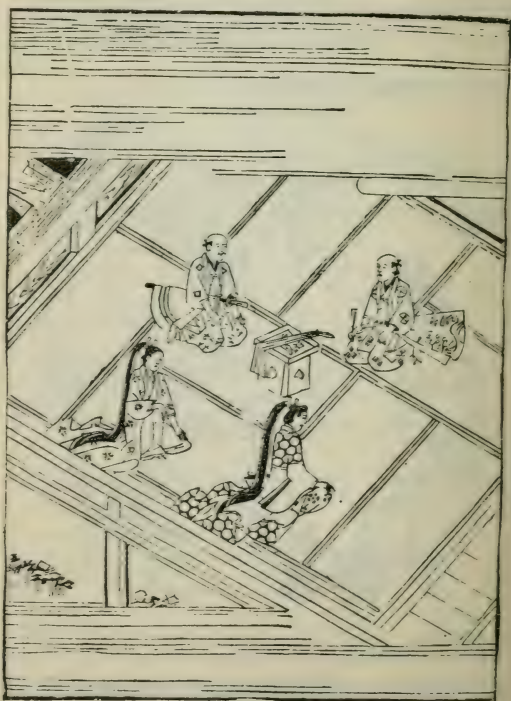
○夢のちぎり

大永の比ほひ舟田左右といふ者あり。武門を出て凡下となり、山城の淀といふ所に住けり。心ざま優にしてなさけ深く、しかも無雙の美男なり。家富てゆたかなりければ、人皆惡しくも云はず。年廿二になるまで妻をも迎へず、只色好みの名をとりたり。橋本といふ所に田地をもちければ、秋の末つかた田を刈らせむとて、舟にのりつゝ、行く〳〵橋本の北に酒賣る家ありて、住居にぎにぎしう内の躰奇麗に見ゆ。舟田は舟を家のうしろの岸に着けて、酒を買て飲んとす。あるじ出てこなたへとて呼入しに、かけ造りにしたる亭にのぼる。亭の西の方にはふりたる柳枝たれて紅葉に交はり、嵐に散り落ち、下葉うつろふ萩が露、枝もとをゝに重げなり。秋をかなしむ蟲のこゑ、尾花がもとに弱り行き、籬の菊は咲匂ひ、袖のかほりを誰ぞとも、あだにゆかしき心地ぞする。北の方を見渡せば、淀の川波子

沈む、鷗の聲はをちこちに、遊ぶ心ぞ知らまほし。楊枝が島も程近く、渚の院もこゝなれや。水野を過て山崎や、うど野につゞく三嶋江まで、只一目にぞ見わたさるゝ。あるじ盃出し酒すゝめて、是は松江の鱸魚にはあらねども、かの玄恵法印が庭の訓に名をほめたる、又淀鯉の鱠とてとり供へて出したり。又是は呉中の蓴菜には侍べらねど、貫之が詠めにつみたる、水野の澤の根芹にて侍べるなど、心ありげにもてなしければ、舟田あるじの心を感じて數盃をかたぶけたり。この家に娘あり。年十八ばかり、未だいづかたにも緣を結ばず、亭に續きたる一間の部屋に住みけり。親もとよりゆたかなりければ、哥双紙なんど多くもとめてよませ、手はすぐれねども物かく事流るゝが如し。心ざまやさしくなさけあり。舟田が亭にありけるを見て心惑ひしつゝ、帳の隙よりさし覗き、或は顏を皆ながらさしあらはし、或は帳の外に立、又内に引籠り、又帳より外に出つゝ、耻かしさも忘れて焦るゝばかりなまめきたり。舟田これを見るに、女の顏かたち世にたぐひなく美くしく輝くばかりに覺えて、知らずわが魂も女の袂に入ぬらん。互に心を通はせて、目と目を見合せ侍べりしか共、更に一言葉をいふべきよしもなく、日すでに傾きしかば、舟田は暇乞し座を立て舟に乘り、我宿に歸りしかども、たゞ其人の面影のみ、身にしむ秋の風さえて、ひとりまろ寢の床の上、知らぬ涙ぞおちにける。其夜の夢に、橋本の酒うる家に行て、後の川岸より門に入、直に女の部屋に至りぬれば、部屋の前には小さきつくり庭ありて、さま〴〵に疊たる岩組、峯よりくだる谷のよそほひ、麓より傳ふ道の續き、風情面白く、山より山のかさなれるに、洲濱の池は水清く、さゝやかなる魚おほくあそび、汀に生る忍草、窓に飛かふ螢火の、消え殘りたる秋の暮、鈴虫の聲かすかなり。軒には小鳥の籠ひとつ懸けて、たきしめらかしたる香の匂ひ、心もつよくこがるらむ。机には美くしき瓶に菊の花少しさして硯箱あり。床には源氏伊勢物語、其外おもしろく書たる双紙を積重ね、壁に寄せたる東琴は思ひをのぶるなぐさめかと、目とまる心地して立たりければ、女は是を見て嬉しげに近付き、打笑みて舟田が手を取り閨に入て、心に積る言の葉百夜も盡じと打侘び、互に契りをかはしまの、水の流れて終に又、末は逢瀨をならしばや、しばし人目を忍ぶ草、其關守こそつらからあなど、さ

まざまざ語らひける程に、人の別れを思ひ知らぬ、八聲の鳥もけうとげに、はや明方と打しきれば、灯火の色いと白く、窓の本に夢は覺めたり。是より毎夜夢のうちに行通ひて、契をなさぬ夜はなし。或夜の夢には、女琴を彈きて想夫戀の曲をなす。其爪音たへにして、響は雲路に至るらむと、いとゞ情ぞ色まさりける。或夜の夢に又かの家に行たりければ、女白き小袖を縫たりしに、舟田ともし火を搔あぐるとて、小袖のうへに灯花をおとして痕つきたり。又或夜の夢には、女白金の香合を送る。舟田水精の玉を與へたり。夢覺めぬれば香合は舟田が枕もとにあり、わが水精の玉はなし。大きにあやしみ思ひ、

君にかく逢夜あまたのかたらひを
夢としりつゝさめずあらなむ

と打詠めて、餘りに堪がたかりければ、舟に棹さして橋本にゆきつゝ、彼の家に立入り酒を求めしに、あるじ出て舟田を見てはなはだ喜び、内に呼びいれて殊更に持はやす。かくて物語しけるやう、それがしたゞひとりの娘を持つ、年いまだ廿に足らず。去年秋の暮に君こゝに酒飲み給ふ時、娘見まゐらせしより、思ひ初て終に病となり、

たゞ茫々としてねぶれるが如く、ひとり言する有さま酒に醉たるに似たり。醫師を賴みて治すれ共、露ばかりのしるしもなし。陰陽師にはらひせさするに、猶重くわづらひて心地たゞしからず、折々は舟田左近と名を呼ぶ事あり。しかも昨日いふやうは、明日は君必ずこゝにおはしまさんといひけれども、例の狂氣よりいふ事ならんと思ひ侍べりしが、君けふ來り給へり。是ひとへに神の告給ふ所ならん。願くは君是を妻とし給へ。侘てすむそれがしの跡殘りなく參らせむといふ。互に名字をあらはし、やがて領掌して娘の部屋に入ければ、部屋の躰庭の面、皆夢に見たるに違はず。女其まゝ枕をあげ心地たゞしくなりぬ。その顏容もの言ひ聲つき聊も夢にかはらず。かくて女語るやう、去ぬる秋のころ君を見そめまゐらせしより、其物思ひ胸に塞がり面影すでに身を離れず、夜每に君に契るといふ夢を見る事、いかにともいひしらずといふに、舟田が夢も其如く、小袖に灯花の落たる痕あり。琴を彈たる曲の名、香合の事みな夢に同じ夢也。是を聞に、驚き怪しますといふ事なし。まことに神の行通うて契り淺からず、わりな

きなからひとぞ聞えし。

○一睡卅年の夢

享祿四年六月に、細川高國と同名晴元と、攝州天王寺にして合戰す。高國敗北して尼崎まで落行つゝ道せばくして自害したり。家人遊佐七郎は、牢浪して芥川の村に隱れ居たりしが、京都に上りて如何なる主君にも仕へ奉らんと思ひ、中間一人めし連れて都に赴く。山崎の寶寺にまうでゝやすみ居たるに、しきりにねふりきざしければ、東の廊下に暫く臥侍べりし。夢に見るやう、寺の門前に出ければ、一人の夫男一つの籠に楊梅子を入れて休み居たり。遊佐立寄りて誰が家の者ぞと問ば、山崎の住人交野次左衛門が家に召つかはるる者也。交野殿は將軍家に屬して打死し給ひ、一人の娘おはします。西の郊の石尾源五殿の妻となり、源五殿は三好に打れ給ひ、今は孀にて歸り住給ふ。年いまだ廿一也。母は六十有餘にて才覺すぐれ給へり。一門の末ならば重ねて聟に取り、家督を讓り參らせむと仰ありと語る。遊佐これを聞て、吃と思ひめぐらせば、交野が妻は我が姨也。

久しく便りうしなひ、何方にありとも聞ざりける。扨は山崎に住給ふか、尋行て名のらばやと思ひ、男に具して尋行たりければ、姨にまがひもなく、互に名のり合ひけるに、姨嬉しさのあまり涙を流し、内に呼入れて一族の行衛を尋ね問に、それかれ多くは皆打死して、七郎ばかりわづかにながらへたり。姨のいふやう、我が頼りとては娘たゞ一人あり。和殿は又みづからが甥也。睦く戀しきぞや。京にのぼらずともあれかし。聟になして心安く見ばやといふ。遊佐嬉しく思ひやがて約束し、明日こそ吉日なれとて親しきともがらを呼び集めて、さま〴〵調て縁を結ぶ。妻の女房を見れば顔かたちみやびやかに美くしかりければ、いとゞ嬉しさ限りなし。婚禮の用意はなはだ花麗なり。日ごとに客を集めて酒宴におよぶ。遊佐も樂しみにほこりて思ふ事もなし。或日京都より兩使あり。將軍より召給ふ。急ぎ上洛しけるに、公方の御氣色こゝろよく、すなはち一萬貫の所知を下され河内守に任せらる。かくて京都に伺公する事二年、その間に公方の相伴衆になされ、威勢高く肩を並ぶる人なし。すでに御暇給はりて山崎に歸り、

要害の地を點じて、家造り夥しう取立たり。召使ふ上下の侍、出入ともがら數しらず。門外には繋ぎ馬のたゆる隙もなく、諸方よりつどひ來る使者日ごとに多し。早や三十年の星霜を經て、男子七人女子三人をもちたり。男子四人をば京都にのぼせて、將軍家に奉公せしむ。女子二人は津國河内の間に遣して、武家の名高き細川なにがしの新婦となし、兄弟を聟とす。内外にかけて八人の孫をまうけ、一家の繁昌この時にあたれり。かゝる所に思ひかけず、敵三千餘騎にて押寄せ、四方より要害に火をかけ、鬨をつくりてせめ入たり。妻子驚きて泣き叫び、家人は恐れて落うせければ、防ぐべき力なく、腹を切らんとする所に、敵はや打入りて引きくみいけどるほどに、これに組あうて押返し刎返すと覺えて、汗水になりて夢はさめたり。遊佐起あがりて、中間に今は何時ぞと問に、日は未だ未の刻と答ふ。只一時のあひだに卅年を經たり。思へば是邯鄲一炊の夢、よきもあしきも此世は夢也とさとりて、中間にはいとま取らせ、我身は直に發心して、高野山に籠りて道心堅固の修行者となりぬ。

○入棺之尸甦恠

いにしへより今につたへて世にいふ、およそ人死して棺にをさめ、野邊におくりて後に、あるひはうづむべき塚の前に甦り、或は火葬する火の中より甦るものあり。皆家に歸さず打殺す事、若は病重くして絶死する者、若は氣のはずみて息のふさがりし者、或は故ありて迷途を見る者あり。是等は定業天年未だ盡ず、命籍未だ削ざる者なれども、本朝の風俗は死するとひとしく、口を納め棺に入て、葬禮をいそぐ故に、たとひ甦るとても、葬場にて生たるをばもどさずして打殺す。誠に殘りおほし。されば異國にしては、人死すればまづ殯といふ事をして、直に葬送はせず。此故に書典の中に、死して三日七日十日ばかりの後に甦り、迷途の事共語りけるためしを多く記せり。それも十日以後はまた甦るべき子細もなし。頓死魘死などは心すべし。されば又葬禮の場にて甦りしをば家にもどさず、打殺すものなりといひ傳ふる事も故ありといふ。京房が易傳に、至陰爲レ陽下人爲レ上、厥妖人死後生といへり。死人久しくありて後に甦る事はこれ下尅上の先兆なりといふ。此故に甦りても打殺す事なりと聞ゆ。大内義隆の家

の女房死けるを、野に送り出し埋まんとせしに、俄に甦りぬ。打殺さんは無下にかはゆしとて連れて歸りしに、髪は剃り落しぬ。是非なく尼になり、衣を着て半年ばかりありて、又死たり。其年果して家臣陶尾張守がために、義隆は國を追出されたり。永祿年中に、光源院殿の家の下部俄に死けるを、二日迄置けれども生出ざりければ、若き下部ども尸を千本に送りて埋まんとするに、忽に甦る。打殺して埋まんといふに、此者手を合せ泣き叫びて、助けよといふ。さすがに不敏の事とて、つれてかへり部屋に置ければ、四五日の内に日ごろの如くなりたり。その年五月に三好松永反逆を起しぬ。尸は陰氣にして、甦れば陽に成たる也。是下として上を犯す先兆也といふが故に、葬所にて甦りし者は、二たび家にもどさず打殺すと也。此理はある事歟なき事歟。さもあれ、死人の一族は殘り多く侍べらんものを。

○幽靈逢夫話

野路忠太は江州の者也。妻は同じ國野洲の郡地下人の娘也。一人の娘をうみ

けれども、半年の後死して又子なし。永祿のすゑの年、商買の事によりて鎌倉に下りしに、自國他國亂れ立て道中の通路ふさがり、三年あまり歸り上らず。或夜の夢に我が妻櫻の陰に居て、花の散り落るを見て悲しみ泣く、又俄に井のもとを覗きて笑ひけりと、夢さめて恠しみ、易者にとひければ、花は風に依て散、井は泉路をかたどる。此夢よろしからずといふ。三日の後たよりにつけてきけば、妻風氣をいたはりて死せりといふ。忠太悲しさかぎりなし。とかくして江州に歸り、其跡を慕ひ妻が手馴れし調度を見るに、今更のやうに思はれ涙のおつる事隙なし。日ごろの心ざしわりなき中の其期に及びては、さこそ思ひぬらんと思ひやるにも、なにはにつけて歎きの色こそ深くなりけれ。寢ても覺めても面影をだに戀しくて、

思ひ寢の夢のうき橋とだえして
　さむる枕にきゆるおもかげ

と打詠じ、若わが戀悲しむ心を感ぜば、せめて夢の中にだにも見え來りてよかしと、獨言して日をくらす。比は秋もなかば月朗かに風淸し。壁に吟ずるきり〳〵す、草むらにすだく虫の聲、折にふれ事によそへて、露も涙も置きあらそひ、枕をかたぶくれどもいも寢られず。はや更かたに及びて、女のなく聲かすかに聞えて、漸々に近くなれり。よく〳〵聞ば我妻が聲に似たり。忠太心に誓ひけるは、我妻の幽靈ならば、何ぞ一たび我にまみえざる。娑婆と迷途とへだてありとはいへ共、其かみのわりなき契り死すとも忘れめやと。その時妻は窓近く來り、我はこれ君が妻なり。君が悲しみ歎く心ざし、黃泉にあれども堪がたくて、今夜こゝに來り侍べりと。忠太涙を流していふやう、心のうちに思ふ事筆にもなどか書盡さん。哥につらね詩に作るとても、言の葉の末には殘りおほし。願くは一たび姿を現はして、まみえ給はゞ恨はあらじとかきくどきしかば、妻なく〳〵答へけるは、人間と黃泉と其道別にして、逢まみゆる事難し。又現はれて見え參らせんには、君もし疑ひ恠み給はんと。忠太いよ〳〵悲しく思ふに、余志子といふ女の童を召つれて、妻のかたちほのかに現れ出たり。忠太問けるは、余志子は三とせのさき故郷に歸りて、むなしくなりけりと風の便りに聞侍べりしに、今如何にしてこゝに來りしやと。余志子答へけるやう、君の御事如何にぞやと起き臥し案じ參らせしかば、思ひの外なる病を受け、故郷に歸りても

心地やましさいや增さりて、終にはかなくなりまゐらせたりけれども、黄泉にして又此君打續きて來り給へば、それに參りて仕へ奉り、今もしたがひ參りたりといふ。忠太灯火とり内によびいれしにひとりの姥あり。あれは誰ぞといへば、妻の云やう、是こそみづからが乳母にて侍べれ。みづからむなしくなりしを悲しみて、今は賴むかげなしとて、身を投げむなしくなり、今宵もしたがひ來り侍べり。生てあるは陽の人なり。死すれば陰に歸り、道へだたり、すみか替れども思ひし心は替る事なし。冥官すでに君が誠の心ざしを感じ、今少しのいとまをたびたり。千年に一たび逢見奉る嬉しさ、やがて別れん事を思ふに又悲しくこそとて、涙は雨と降りにけり。忠太いふやう、さて死しゆきて後は、何をか珍味の食とするやと。妻いふやう、黄泉は臭腥さきを嫌ふ。たゞ殊更に用ひる物は粥なりといふ。忠太是をとゝのへてすゑ渡す。妻余志子姥三人ながら口に迎へて食せしと見えし。夜明けて後見れば、只其儘に殘りたり。妻のいふやう、六とせ其かみ襁褓の中にしてむなしくなりける子を見まくおぼすや。今はおとなし

くなり侍べりといふ。忠太いふやう、其死ける時わづかに二歳、來世にして年月を重ねて身にうけ侍べるかととふ。妻答へけるやうは、更に年月を身にうけて積る事人間にかはらず。さればこそ死して四十九日の中陰、一周忌より初めて五十年忌を弔ふ事、此世の年月にてかぞふる也といふに、死したる子現れ來り、父が前にひざまづく。その年七歳、かほかたちうつくしく利根才智のむまれつき、おとなしやかに見えたり。忠太淚を流し髮掻き撫で、これだに此世にあらば妻が忘れかたみとも見るべきを、汝死して後二たび子なし。汝こゝにあらばさこそおとなしく、我も嬉しう侍べらんに、今夜を限りに又も見まじきや。あな恨めしとゆかしき者かなとてかき抱かんとすれば、雲煙のごとくにて手にもたまらず、消失せて形もなし。忠太とひけるは黃泉にてはいづくに住給ふと。妻いふやう、君の先祖野路の姓のはじめ、第一代は一の座におはします。其かたち鬼王の如し。其次々は天地に滿歸りて塵にあらず。君の祖父祖母父母姉弟おなじ所におはします。みづからは姑の右のかたに坐し侍べりといふ。又問けるは、

かくすみ所定まりて、神霊物知る事侍べらば、いかでもとのかたちの中に立返りて生給はざるや。妻答へけるやう、人死して魂は陽に帰り魄は陰にかへる。司名司録の官ありて皆しるしとゞめ、かたちは土となる。更に鬼録に載せられて心のまゝに帰さず。譬へば夢の中には我身のある所を覺えず、魂魄ばかりさま〴〵の事を見るが如し。みづから死して後は死せし所も覺えず。葬禮の場をも知らず。かたちのあり所をも知らずといふ。歎き愁へて物語するほどに、夜もはや深過たり。又問けるやう、死して黄泉に集る男女互ひに夫婦となる事ありやといふ。答へて曰、ある事はあれども、道を知る男は二たび妻を求めず、妻死して後に又行逢て語らひ、貞節の女は重ねて夫を持たず、娑婆の夫死して後に又集りて夫婦となる。それも心だてよこしまに、みだりに悪を作る者は、死して後、男も女も地獄に落され、夫婦となる事かなはず。譬へば世の人科をおかせば牢舎に入られて、夫婦一ところに住む事かなはざるが如し。みづからをも西の國なる高家の人の妻にせむと計らはれしを、貞潔の心ざしあるゆゑに、逃れてひとり住侍べりといふ。忠太いとゞわりなく悲しくて、千夜を一夜に今宵は殊更夜も長かれとわびける中より、鳥の聲鐘の音、はや明方の横雲より、遠近人の袖見ゆるころになりしかば、妻なく〳〵小袖の衣裏をとき、形見に殘して、

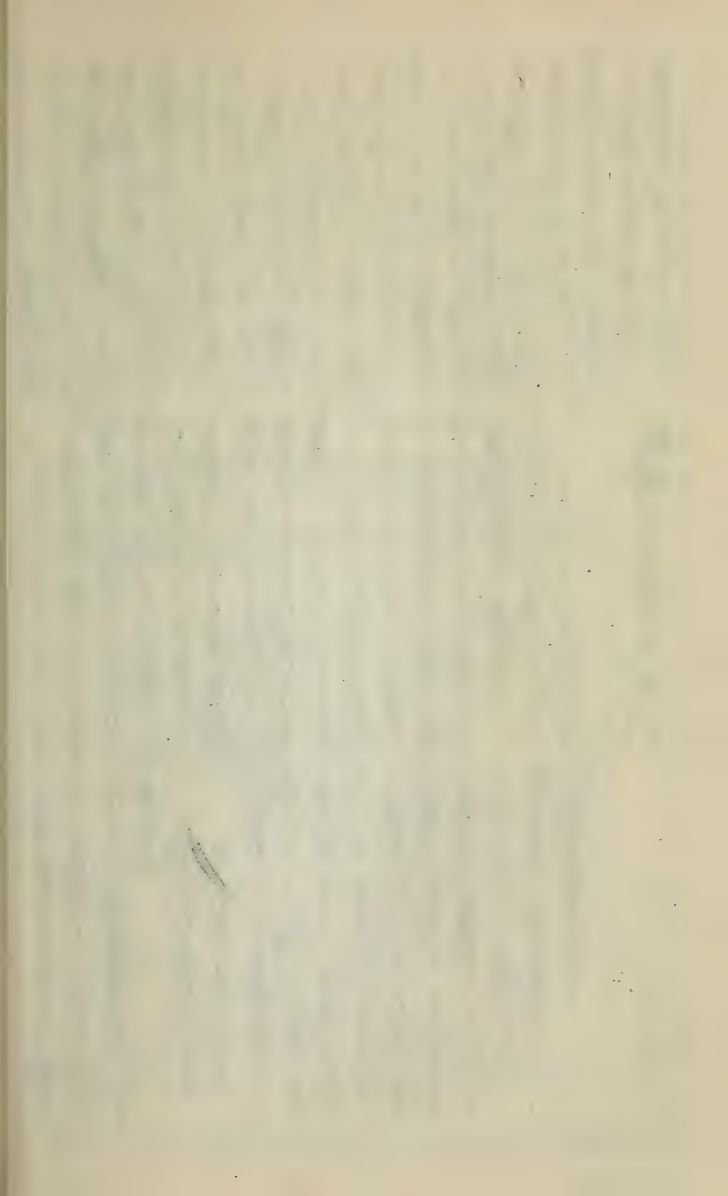
　わかれてのかたみなりけりふぢ衣
　　えりにつゝみしたまのなみだは

忠太涙と共に形見の物受とり、黄泉の中にも忘れ給はずば、是を見て慰めとせよとて、白銀の香爐を取出し、妻に與へつゝ、

　なき魂よことなる道にかへるとも
　　おもひわするな袖のうつり香

さて重ねてはいつか逢瀬の時成べきと問ければ、今より四十の年を經て、長き契りを待べき也とて、聲も惜まず泣き叫び、出で行く姿はおのづから、朝あけの霧間にかくれて失せにけり。忠太今の世の中あぢきなく、髮そり落し衣を墨に染め、諸國行脚して住ところを定めず。後つひには高野の山に登り、經讀み念佛して、妻の菩提をとふらひ、一座花臺の往生を願ひけり。

伽婢子巻之五

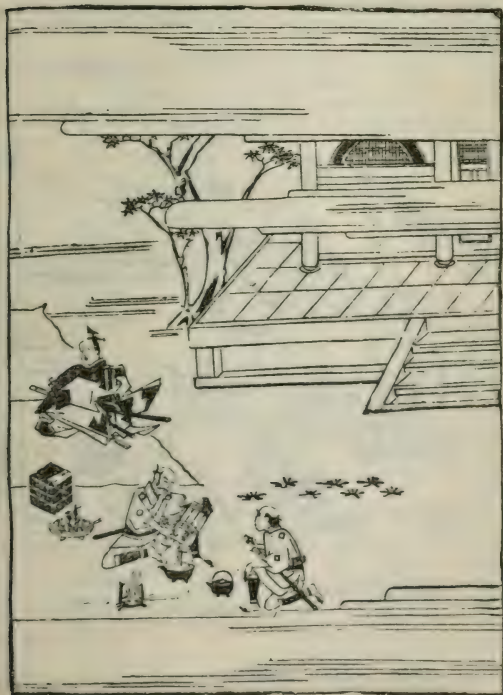
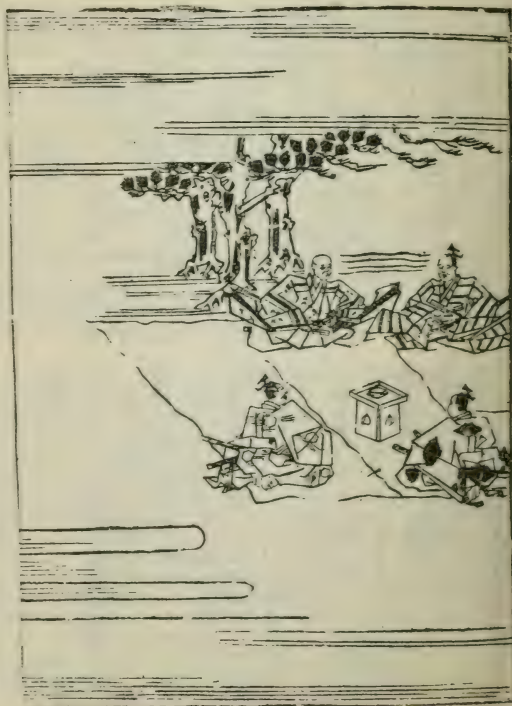
○和銅銭

京都四條の北大宮の西に、いにしへ淳和天皇の離宮ありける。これを西院と名づく。後に橘の大后の宮すみ給へりといふ。時世移りて宮殿は皆絶えてわづかに名のみ殘り、今は農民の住家となれり。文明年中に長柄の僧都昌快とて學行すぐれたる僧あり。世を厭うて西院の里に引籠り、草庵を結びて靜かに行はれしに、或日怪しき人尋ねて入來る。年五十ばかり、其姿はなはだ世の常ならず、いたゞき圓くして下に角ある帽子をかづき、直衣の色淺黄にて其織りたる糸細く、かろらかに薄き事蟬のつばさに似たり。みづから秩父和通と名乘りて、僧都とさし向ひ坐してさま／＼物語りす。我は元これ武州秩父郡の者、中比都に上り、それより本朝諸國の內、ゆかざる所もなく見ざる所もなしといふ。僧都心に思はれけるは、これまことの人にあらじと推量りながら、しば／＼問答して時を移す。眞言三部の秘經、兩界の曼荼羅、印明陀羅尼、灌頂の事までも、其深き理を陳ぶるに、僧都未だ知らざる事多し。それより世の移り行く有さま、昔今の事親あたり見たるが如くに語りけり。僧都問けるは、君の帽子は本朝の制法に似ず、外圓くして內方なるは何故ぞやと。和通答へけるは、凡そ天地萬物のかたち品々ありと雖、つゞまる所は圓き方なる二つの外なし。我外を圓かに心を方にす。天のかたちは圓く地のかたちは方也。圓きは物にかたよらざる所、方なるは物の正しき所也。されば我が道は萬物にかたよらずして、しかも萬物にはづれず、正くして曲ゆがまず。これをあらはして頭に戴けりといふ。僧都の曰、君の直衣ははなはだかろく細して薄し。是いづれの國より織出せると。和通答へけるは、是五銖の衣と名付く。天上の衣は三銖といへども、下天の衣は皆重き五銖六銖なりといふ。僧都、さてはいよ／＼人間にあらずと思ひて、重ねて問けるは、君まことは如何成る人ぞ名乘り給へと云に、此人打笑ひ、僧都の道心深きによ

りてこそ來りて物語はすれ、わが名を名乘るには及ばず、やがて名乘らずとも知ろしめされむものを。今は日も暮がた也、いとま申さむとて座を立て出る。其行く跡を認て見れば、庵の東のかた二十間ばかりにして、竹藪の前にて姿は見失へり。明日里人を賴みて、其所を掘らせらるゝに、三尺ばかりの下に一つの箱あり。其中に錢百文を得たり。其外には何もなし。僧都是を取りて見るに和銅通寶の古錢なり。つらつら思ふに、秩父和通は此錢の精なる事疑ひなしとて、地を掘りける里人をよびて、僧都物語せられけるやう、此人の形初めより怪しみ思へり。今是を案ずるに、昔本朝人王四十三代元明天皇の御宇、七月に武州秩父の郡より初めて銅を貢る。其時の都は津の國難波の宮におはしませり。是によりて慶雲五年を改めて、和銅元年と改元あり。此年始めて貢りし銅をもつて錢を鑄させらる。されば今この和銅通寶の古錢は、其時の錢なるべし。帽子の外圓く內方なるも、これ錢の狀也青き色のひたゝれは、これ銅の衣ならん。五銖の重さは、錢の重さをあらはし、和通と名のりしは、和銅通寶の

略せる名也。秩父の者と云ひしは、もと銅の出そめし所也。それより都に上り、諸國あまねく巡り見たるといひけるも、錢となり諸國につかひわたされし事なるべし。それ錢のかたち外の圓きは、天にかたどり、穴の方なるは地にかたどり、表裏は陰陽なり。文字の數四つは四方にかたどり、其年號をあらはして天下に賑はす寶とす。錢はこれ足なくして遠く走り、翅なくして高く揚る。容曲わろきも錢に向へば笑ひを含み、詞少なき人も、錢を見ては口を開く。杜預に左傳の癖あり。樂天に詩の癖あり。樊光は錢の癖ありといへ共、錢の曲癖は人毎にあり。鬼をしたがへ兵をつかふも、みな錢に過たる術はなし。欲深き者錢を見ては飢て食を求るが如く、貪り多き人錢を得ては病人の醫師に逢に似たり。まことに寶なり

とて打笑ひ、かの百文の錢を分ち里人に與へ、みづから眞言陀羅尼となへて供養をとげらる。里人それより家々賑はひゆたかになりて、僧都を敬ひかしづきしが、後に山名が亂に逢うて里人皆ちりぐになり、僧都も行がたなく、古錢も皆とり失なへりといふ。

（幽靈評二諸將）

甲州の郡内に鶴瀨安左衞門といふ者あり。そのかみは惠林寺の行者にて、後に安藏主と名付しが、武田信玄にとり入て、心ばせ才覺ありければ、俗人になされ小知給はり、鶴瀨安左衞門とぞいひける。永祿丙寅七月十五日、盂蘭盆供の營みしつゝ、甲府に出て家中拜禮の事相つとめ、日すでに暮がたになりて、惠林寺の快川和尚に對面せんとて、西郡に赴き侍べりしに、いかゞしたりけむ、召つれたる中間小者跡を見失うて、一人も來らず。鶴瀨只一人ゆく〳〵惠林寺に至りしかば、門外にて多田淡路守に行逢ひたり。鶴瀨思ふやう、是は信玄公秘藏の足輕大將にて、武勇力量すでに家中にゆるされ、名を近國の諸大將に知られ、信州戸隠山に於て鬼を切りたる程の者なるが、去ぬる癸酉極月廿二日に、正しく病死せられたり。それに只今行逢たるは、若夢にてやあるらんとあやしみながら立よりければ、いざ惠林寺の庭に五三人集り、聖靈祭りの送りを營むによきついでなり。立入て遊び給へとて打つれて、

門の內に入たりければ、寺の庭に莚しきわたし中間小者ばら多く人を待まうくるを覺えて、うづくまり居侍べり。暫くありて越後の長尾謙信の家臣直江山城守、北條氏康の家臣北條左衛門佐、武田信玄軍法の師範山本勘介入道道鬼出來れり。山本は上座にあがり、直江其次にあり。北條左衛門其下に坐して、さま〴〵軍法の事共たがひに物語りす。北條左衛門いふやうは、そも〳〵武田信玄は、智謀武勇を兼備へて思慮深く、軍立いつも堅固にして、兵氣たわまず勢ひを失なはず。敵に向うて戰ふ時は流水の如く、勝軍にいたりては猜天に星の粲然たるに似たり。氣象のいさぎよき事水精輪にたとふべしと雖も、みづから武勇に誇りて、諸將に和を求めず、ひとり戰國の間に挿られて、一生さらに敵の爲に苦められる。其の軍の備へ虛實の勢分を守るといへ共、更に奇正の術を兼ざる故に、小利を得て大に勝ことなく、戰ひあやふからずして又大なる失もなし。その威は高く輝きながら草創の功を遂げず、只わが領國の境を犯されざるばかりにして、終に其大業を立て給はずといふ。山本勘介入道いふやうは、いづれの諸將も皆一德

なきはなし、たゞ一術を守りて偏におぼれ、變化無方の理を忘れて、大功を遂げたまはず。されば長尾謙信は北越無雙の猛將なり。その性强毅にして健なる事肩を並ぶる人なし。その身は越後にありながら威勢を東海北陸に輝かし、敵と戰うては破らずといふ事なく、軍立尖にして變化奇正の術更に我物として、大軍をつかふ事又我手足を働すが如し。大敵前にあれども昆蟲かとも思はず、急に打て散らす事砂をまくが如くにし給ふ。誰か其鋒先に向はんや。されども只武勇をたくましくし給ふのみにして、さしもなき小軍につはものを費やし、後を顧みて内に備ふる固なきを以て、其身勇義をもつはらとし、軍兵忠信ありと雖もつひに大業なりがたしといふ。直江山城守つくづくと聞て、さればいづれの諸大將にも、はむる所には其德あらはれて青天にもあがるべく、そしる所には瑕出て深淵にも沈むべし。ほむるもそしるも共に一定しがたし。彼も一時也。是も一時也。たゞ天命に依らずしては大業は遂ぐべからず。其中に北條氏康は其むまれ付、もつとも温和にして能く人をなつけ、篤實にして又道を修め、軍立徐かにして本を固くし、敵に勝に刄を借らず、わが勢ひを量りて兵を費さず、天のさいはひを待てあやふき事をせず。この故に取事は遲しといへども得て之を失はず。常に權威を内に隱して謙讓を外に施すといへども、時に望みては亂將にしかず。氏康はたゞ和を好みて兵を惜しみ給ひし故に、武勇は更に信玄謙信におくれたるに似たり。されども守文の德のみすぐれて草創の功業をはげむ事の怠りあり。こゝを以てつひに大業を立給ふ事かなはずして、其威名いさゝか低たるに似たりといふ。其時多田淡路守進み出て、諸將の評議一端その理ありといへ共、我等いかでか名將の奧義をはからひ知らんや。定めて深き心あるべし。それ千丈の堤も螻蟻の穴よりくづるといへり。信玄謙信氏康は、今戰國の中諸國諸將の間にもつとも秀て、良將の名ありと雖、亦諸國の間に黨を結び權を立つるともがら甚多し。若其中に謀不意に起りて、小身の大將に倒さるゝ事あるまじき時節にあらず。こゝを以て信玄謙信氏康の三將は、鼎の足の如くそばだち、互に威を振ふといへ共、傍らに小身仕出の大將を懼れざるにあらず。近頃尾州織田信長、すでに草創大業の志ありて近國をしたがへ、漸々大軍に及べり。弘治丙辰の年駿河の今川義元、さしも

猛將のほまれありて、しかも大軍なりしを一朝に亡したり。信長深く謀り遠く慮ばかり、剛强武勇智謀兼備の信玄に對して、親しみ深く縁をもとめ、伯母を秋山伯耆守が妻となし、其姪を武田勝頼の室にいれ、使節ひまなく甲府に遣はし、さま〳〵音信を盡してひたすら君臣の禮の如く、信玄の機をとり追從せらるゝ事は、これ暫く信玄の武勇をなだめ、うしろを心安くして前を打從へんとす。一には光源院義輝公の御舍弟義昭公をとりたてゝ、義兵を擧ると號して、軍兵を集めて敵を打ち、二には軍の法に本末前後あり。まづ五畿內の弱兵をせめふせて勢ひを增し、東海北陸の强敵をばなだめて後に討たんとす。三には中國西海の弱敵には武威を鳴して大に威し、東北の剛敵をば讓くだりて宥め、すでに家中漫こり軍兵多く、人に先立て京都をしづめ給へり。今の世には大業定めて信長に立べし。信玄謙信氏康は、徒らに我領國に勞れ死給はん者をといふに、座中此事を感じける處に、上州蓑輪の城主長野信濃守入來れり。これは關東の上杉憲政の家臣、譜代の侍として智謀無雙の者なるが、武田信玄といどみ戰ふ事七年にして、終に病死せしかば、その子息右京進いく程なく、蓑輪の城を信玄に打取られて沒落したり。然るに信濃守今又此座に來り、左右を見まはしけるに、山本勘介入道は一の上座に居て、最無禮なり。長野は會釋もなく勘介入道が座の上にあがり、刀の柄に手を掛ていふやう、山本が傍若無人の有樣こそ心得られね。汝は如何なる大功をなして今かく高上のふるまひを致すぞやとて、すなはち山本を責ていふやう、そも〳〵汝に三の大罪あり。世の人更に知らず。此故に千年の苔の下までも、ほしいまゝに軍道鍛煉の名を盜めり。今我これを顯はして、汝が罪過を隱さすべからず。山本勘介更に色をも失なはずして、さらば疾々の給へ、つぶさに聞侍べらんといふ。長野いふやう、往昔信玄若かりし時、色に溺れて國家をわすれ給ひし時、板垣信形よく諫めて、心ざしやうやく改まり、敵を打ち國を併する謀より外に他念なかりし所に、信州諏訪の祝部賴重降參して旗下に屬し、甲府に來りし處に、是を打ちて城を奪はずば馬の足を立べき地なし。然らば信州終に手に入べからず。賴重をたばかり殺して、信州手づかひの地をもとめ給へと、汝これを勸め參らせ、あえなく降參の人を殺させたり。窮鳥懷に入れば獵者も殺さずとこそい

ふに、したがひ來る賴重を打事は無道不仁の心ならずや。若これは軍道の習ひ智略の一つともいふべき歟、情なき所為これ更に武道の本意にあらず。虎狼の心に齊しといふべし。それに賴重が娘容顏美麗なるを以て、信玄すでに色に惑ひ、召入れて妾にせむ事を思ひて、勘介に密談せられしかば、なにか苦しかるべきといひたりければ、迎ひ取りて妾とせらる。汝が佞奸甚だ惡むべし。人の眞性を破り正道を失なへり。眼前に首を白刄の下に刎られたる敵の娘を取りてわが妾とし、他のうれへを忘れておのれが愛に供ふる事は、これ仁者のする所にあらず。されば汝、其時何ぞ正理を以て諫めざる。かの妾の腹に勝賴誕生あり。太郎義信のため繼母として、しかも辯佞利根の女なれば、繼子義信を惡みてさまざま讒言す。信玄は智慮淺からぬ人と雖も、色に陷りて心を蕩れ、讒を信じて義信を殺し、其外譜代忠義の家臣飯富兵部を初めて八十餘人の侍、多年舊功のともがら科なくして殺されし事、ひとへに其源は、汝が奸曲を以て諫むべきを諫めず、非道にしたがうて口を閉ぢたる所也。是一。信玄の父信虎は強毅不敵の人にして、偏屈無願の性あり。信玄いまだ晴信といひし時これを追放して、次郎信繁に家督を讓らんとせられしを、今川義元は信玄の舅なれば是に心を合せ、信虎を楯出し、信玄家督を奪ひ取られたり。信虎は駿河に浪牢して氏康の養をうけ、かすかなる有樣にて月日を送られたり。後に信玄我身の不孝を思ひ知りて、信虎を甲府に呼返し、孝を盡さんと思はれしを、汝之を諫めて、信虎歸り給はゞ又惡心を以て家を亂さるべし。只其儘に捨置給へとて今に駿府に流浪させさせ、後代までも不孝の名を信玄に殘す事、是汝が奸曲不義の所也。是二。川中嶋の合戰の時、今日の軍の支配、勘介よく謀るべしとて軍媒を任せられしに、徒らに謙信の陣を西條山に見やりて、川端に備を立てず、夜の間に川を謙信に渡され、露ばかりも之を知らず、俄に驚きて備を立てしに、武田方の右は謙信のため左に受けて、打易き所なるを、義信望月なんどいふ尫弱の大將を右の方に備させ、一時の間に破られたり。謙信は急にとりひしがんとて、みづから眞先に進みて信玄の本陣を切崩されたり。西條山に向られし軍兵引返してこそ、信玄すでに危きをのがれ、萬死を出て一生を全くせられ侍べれ、典厩信繁諸角豐後初鹿源五郎を初て大勢打れたり。軍

は勝に似て。人數多く失ひ、汝も耻て打死せしは、是もと備へを誤る故也。何をか軍法鍛煉の師範とすべき。是三。然れば汝は三州の牛窪より出て、武道修行とて諸國を廻り、四國の尾形に逢て軍法を傳授し、城どりの繩ばりに大事を得たりといふ。そも〳〵汝が繩張の城今に至りて何國にありや。今川家に嫌はれて甲府に吟よひ、信玄に抱られて所知につき、之を花光して駿河に行たるは若輩の所行、世の笑種となれり。幸に武田の家に用ひられ、軍法師範の名を盜みて星霜は重なれども、信玄更に大業の功なし。然らば汝に於て又何の動功ありといはん。汝は我が敵族也。目前に見ながら相宥む、これ地府の大帝許されざるが故に、いかにともすべき道なしといふに、山本入道一言の返答にも及ばず、座をしりぞきて長野に讓る。長野重ねて云やう、諸家の名臣歷々おはすれども、中にも我は一城の預り也。此故に一の座を占侍べり。尾籠のふるまひはまげてゆるし給へといふ。多田淡路守、今はゆめ〳〵遺恨あるべからず。萬事休し、去ば一夢の如し。只酒のみて遊び給へとて酒肴取出せば、互に數盃を傾けたり。長野うたうて曰、

義重命輕如二鴻毛一
肌骨今銷沒二艾蒿一
山宜レ平重淵宜レ塞
殘魂尚誓節操高

北條左衞門佐うたうて曰、

泉路茫々隔二死生一
落魂何索貽二武名一
古往今來几是夢
黃泉畸レ耳聞二風聲一

直江山城守うたうて曰、

物換星移幾度秋
鳥啼花落水空流
人間何事堪二惆悵一
貴賤同歸土二一丘一

山本勘介入道は一文不通の者、只軍道に鍛煉して餘事を知らざりしが、今此席に連りぬれば、わづかに思ふ處いはずして止なんやとて、

平生智略滿二胸中一
劍拂二秋霜一氣吐レ虹
身後何譏論二興廢一
可レ憐怨魂嘯二深叢一

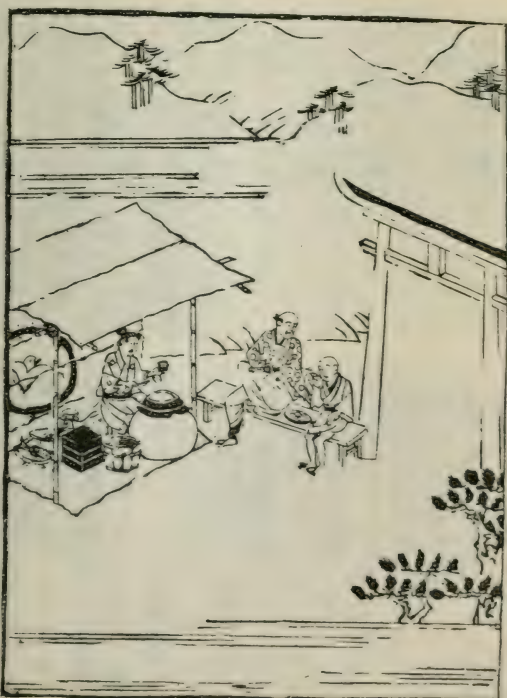
多田淡路守うたうて曰、

魂歸二冥漠一魄歸レ泉
却恨人世名聞權
三尺孤墳苔累々
暫會二幽客一惠林邊

鶴瀨これを見聞に恠しさ限なし。そも夢か、夢にあらざるか。庭は惠林寺の

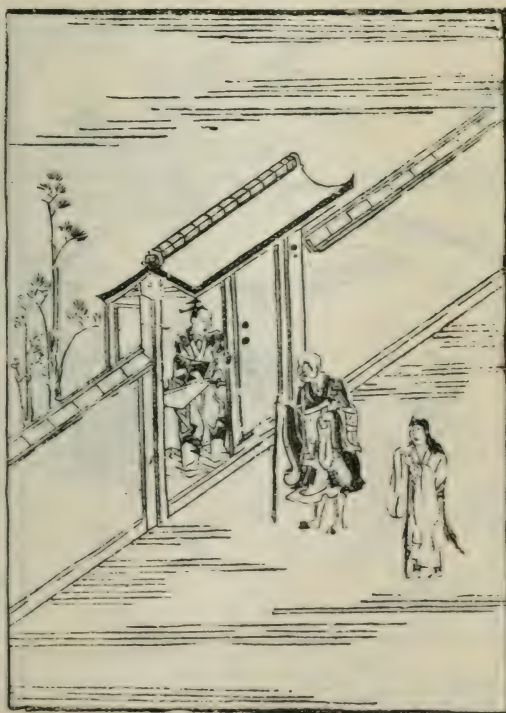
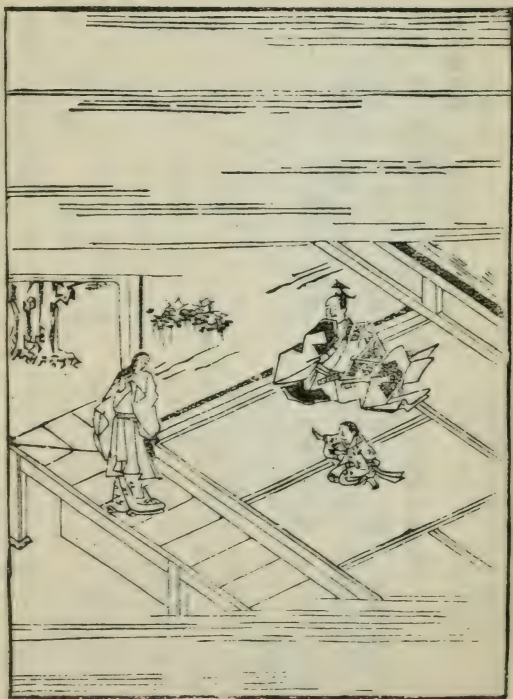
庭にして、其事は故人の事也。然らずは我死してこゝは又迷途か。子細を尋ねばやと思ふ處に、貝太鼓の音聞えしかば、座中のともがら心得たりとて、傍なる太刀かたなおつとり／＼、走出るとぞ見えし。一人殘らず跡方なく消失せて、鶴瀬たゞ一人惠林寺の庭に坐して、夜はほの／＼と明たり。あまりの不思議さにいそぎ甲府に立戻りて、信玄公に對面してひそかに此事を語るに、信玄あざ笑ひて、汝は狐にばかされて、かゝる化事を見たりけるかと無興し給ひしかば、鶴瀬大きに恐れて郡內に歸り、みづから筆にしるして箱の中に留めしとかや。

○燒亡有二定限一

西の京に富田久內といふ者あり。若き時よりなさけ深く、慈悲あつき心ざしあり。或日家を出て北野の天神にまうでたり。下向の時、茶店の床に踞て茶飲みける所へ、十二三ばかりと見ゆる小法師來りぬ。容の色靑ざめて瘦つかれたり。久內とひけるは、小僧はいづくの人ぞといふ。答ていひけるやう、某は東山邊にある者也。今朝より此處彼

處使となりて行めぐり、まだ何をも食はず、師匠坊主の命に從ふばかり身も心も苦しき事は、又もあるべからずといふ。久内聞てかはゆく覺え、餠買て食はせなんどしけり。かの小法師も久内もうちつれて茶店を出て、内野の方に出る。右近の馬場にして、かの小法師いふやう、まことは我は人にあらず。火の神の使者として、燒亡火事の役にあづかる。君はなさけ深き慈悲者なれば語り侍べる。明日は北野内野西の京皆こと／＼く燒ほろぶへし。君が家は燒くまじけれども、私に是をはからふ事かなはず。はや繩ばり分量の數に入たり。君早く家に歸りて、財寶家の具とりのけて他所に移り給へとて、我は又跡より遲く行かんとて失せにけり。久内不思議の事に思ひ、いそぎ家に歸り、財寶家の具ども持はこび他所に移しければ、人皆あやしみて子細を問ふに、更に語らず。強てとひければ、かう／＼の事と語る。之を聞人あざけりわらひて、何條狐にたぶろかされて、有べくもなき事を聞て歸り、あはてふためきて家の具を打はづし、資財雜具を取り運ぶ。さだめて普請の料を費やさんためかなんどのゝしり笑ひたり。今年三月の比、

西の京の住人等、東の京の住人等と酒麹賣買の事につき、座を組みて賣けるを、座を破りける故に公方へ訴へたり。其時の管領畠山入道德本この訴へを聞に、東の方に理ありければ、對決及びて、西の京の方法度をそむく科に落てまけたり。西の京の酒麹賣る奴原恨みいきどほり、其外のあぶれ者ども多く語らひ、北野の社に集りて立こもる。管領さま〴〵申さるゝ旨ありといへども更に聞いれず。是非に東の京の酒かうぢの者共を打果たさんとす。是によりて侍所京極なにがしにおふせふくめ、武士を遣はして、かのともがらを搦め捕りて牢獄に入れんとするに、とられじと防ぎ戰ひて、文安元年四月十二日、社に火をかけ自害しけり。折ふし魔風吹いでゝ、社頭僧坊寶塔廻廊一時に灰燼となり、餘煙民屋に燃つきて、西の京こと〴〵く野原となりぬ。

○原隼人佐鬼胎

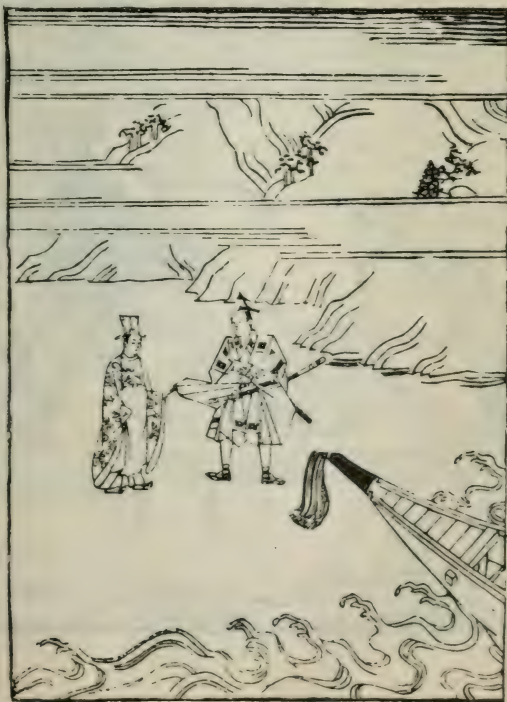
甲州武田信玄の家臣原隼人佐昌勝は、加賀守昌俊が子なり。父當國高畠といふ所より出て、信玄にめしつかはれ度度の勲功を顯しける。子息隼人佐に教

へけるは、鳥獸傍虫の類までおのく一つの得手あり。一藝なき者はこれなし。況や人とむまれ、殊更侍たらむ者は、弓矢の事につけては一つの得手をよく鍛煉して、是を以て主君の所用に立て、御恩を報じ奉るべし。いたづらに俸祿を給はり、飽まで食ひ暖に着て、邪欲をかまへ義理を知らず、一藝一能もなき者は畜生にも劣りて、是は天地の間の大盜賊なり。日月雲霧草木までおのおの皆その益あり。無藝無能にして、人のため益なく却て害になる者あり。かまへてよく心得よと遺言せしとかや。されば父が後に信玄に仕へて、忠節私なく軍功のほまれあり。其中に隼人はいつも諸軍に先立ち、敵國に深くはたらき入、時には陣どりの場を見たて合戰の場を考へ、山川谷峯知らぬ所を、案內者もなくて是を悟り、道筋小道までも皆踏分て、先登をいたすにつひにあやまちなく、諸侍みな疑ひを殘さずとなり。他國といへども陣所戰場よく見たて、閑道水の手を考ふるに更にあやまちなき事、神に通せしかと人みな怪み思ひけり。そのかみ原加賀守が妻は邊見某が娘也。加賀守は諸方に馳向ひ、陣中に日をわたり月をかさね、家にあ

る事まれ也。その家は上條の地藏堂のほとりにあり。或時妻産にのぞみしが、甚くるしみ悩みて終にはかなくなりしを、加賀守大に歎きながらすべき樣なく、法成寺のうしろに埋みて、塚の主となしけり。妻その死する時、法成寺の地藏堂に向ひ手を合せ、年月日比念願し奉る、かまへて本願あやまり給ふなとて、地藏の寶號を唱へてをはりぬ。加賀守も同じく此菩薩に歸依して、妻が後世みちびき給へと祈りしに、死して百ヶ日といふ夜半ばかりに、八旬ばかりの老僧眉に八字の霜をたれ、鳩の杖にすがり、水精の數珠つまぐり、加賀守が家の戸をたゝき給ふ。開きて見れば、死したる妻よみがへり、老僧に連れられて來れり。大にあやしみながら内に入て、さて老僧は如何なる人にてましませば、かく有難き御事ぞと問ければ、我は法成寺の内にすむ者也。こよひあからさまに堂より出しかば、塚にはかに崩れて内より女房の出たり。何者ぞと問へば加賀守が妻といふ。此故につれて來る。よく保養せよとてかきけす如くにうせ給ふ。不思議の事に思ひ人を遣はして見れば、塚は崩れてあり。さてはとて粥なんど食はせけるに、初めはうと〳〵として物の覺えなきがごとし。漸く七日のうちに日ごろの如くなりしかども、たゞ明らかなる所をきらへり。次の年男子をうめり。此子三歳の時、妻或日の暮がた涙を流していふやう、我はまことは人間にあらず。君と未だ緣深かりし故に、上條の地藏菩薩、冥官に仰せて、たましひをゆるし放ちて、三とせこのかたの契りを結ばせ給へり。今は緣すでにつき侍べり。いとまたびて歸るべし。あなかしこわが塚をすて給ふな。跡よくとふらひてたべとて、子をばおきながら行かたなく失にけり。塚を見れば崩れたりとおぼえしはまぼろしにて、草茫々として生茂り、地藏菩薩の御方便申すもおろかなり。信玄このよし聞及び給ひて、法成寺の地藏堂を作り改め、供養をとげたまふ。それより加賀守ふたゝび妻を迎へず、かの男子は原隼人佐なり。十八歳にて初陣せしより、よろづ神に通せし如く、奇特の事多かりしも、子細ある事なり。

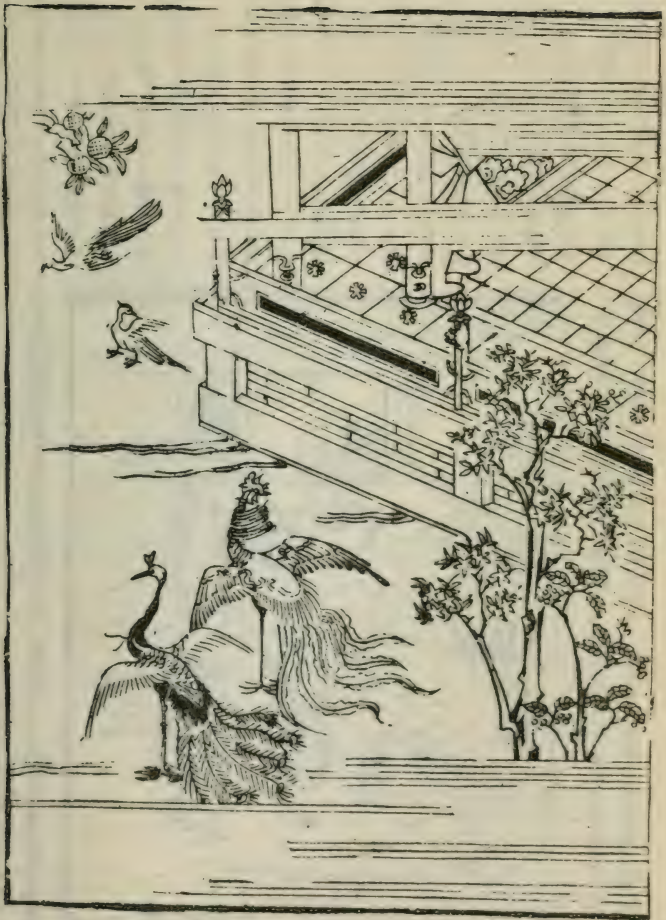
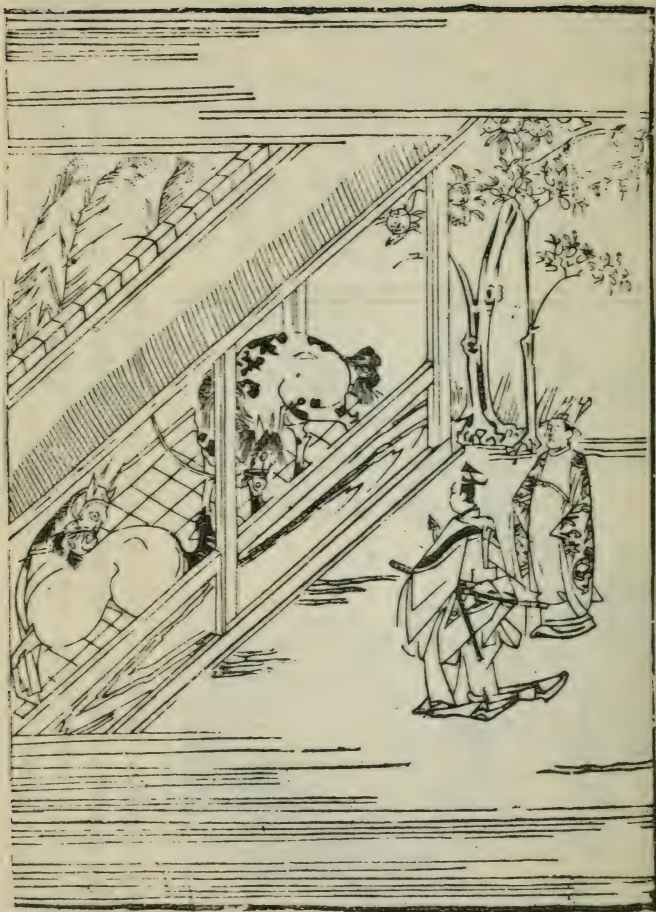
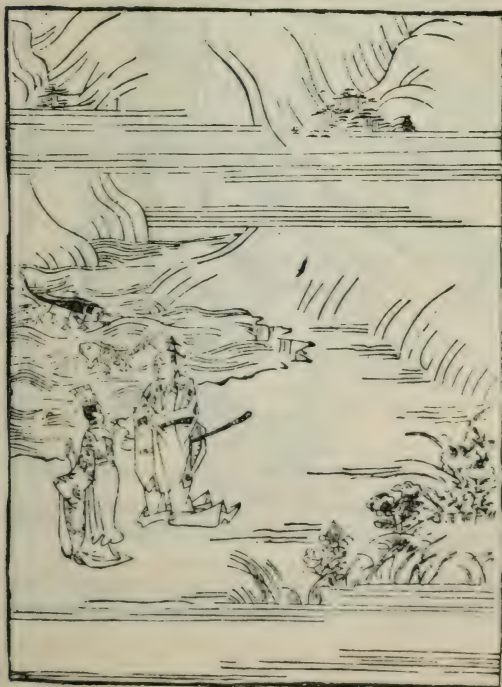
伽婢子巻之五終

伽婢子卷之六

○伊勢兵庫仙境に到る

伊豆の國北條氏康は、關八州を手に入れ威勢大にふるひて、しかも武勇のほまれ世に高し。ある時浦に出て遠く南海にのぞみ、澳の方をはるかに眺めやりて仰せけるやう、昔鎭西八郎爲朝伊豆の浦にながされ、夕暮かたに鳥のかけりて、澳をさしてゆくを見て、さだめて海中に嶋ぞあるらん。しからずば鳥のかけりて、夕暮かた沖におもむき飛べきやとて、舟を出して鳥の飛行方にこぎ行しかば、鬼のすむと云ふ嶋に到りぬ。これ今いふ八丈が嶋成べし。それよりこのかたは、誰人の渡りしとも聞えず。願くば誰か八丈が嶋にゆきて、その有樣見て歸る人あるべきやと仰せければ、坂見岡江雪伊勢兵庫頭兩人すゝみ出て、我等かしこにおもむき、嶋の躰よく見てかへり侍べらんと、いとやすくうけごひ、大船二艘をこしらへ、江雪兵庫兩大將として同心二十騎づゝさしそへ、吉日をえらびて海にうかび、南をさして押し出す、心のうちこそはるかなれ。伊豆のおきには七嶋ありと云り。いづれとは知らず嶋近く押寄せしところに、俄に風變り浪高くあがりて雪の山の如し。江雪はとかくしてひとつの嶋につきてあがりしかば、年ごろ聞傳へし八丈が嶋につき、嶋のありさま人のよそほひよく見めぐりて歸りぬ。兵庫頭は吹放されて南を指してゆく。夜るひるのさかひもなく十日ばかり行ければ、風すこし吹よわりひとつの嶋に流れよりたり。岸にあがりて見れば、岩石そばだちて、青きは碧瑠璃の如く、白きは珂雪の如く、黃なるは蒸栗に似て、赤きは紅藍花に似たり。其外種々の奇石、日本の地にしてはいまだ見ざる所也。草木の有樣又めなれざる花咲き木の實結べり。あやしき人磯近く出たるを見れば、かしらに羅の帽子をかづき、身にはもろ〳〵の草木おりつけたる直垂に、花形つけたるくつをはきたり。年のころ廿ばかりなるが、色甚だ白く、まみ毛高く鐵漿黑うつけて、かたちはもろこし人に似て、物いひは日本の言葉に通ず。兵庫頭を見て大にあや

しみ、如何なる者ぞと問ければ、兵庫ありのまゝに語る。此人いふやう、こゝをば滄浪の國と名づく。日本の地よりは南のかた三千里に及べり。是より觀音の淨土、補陀落世界も程近し。いにしへ淳和天皇の御時に、橘の皇后の仰せによつて、惠蕚僧都といふ法師ばかりこそ、かの補陀落世界には渡りけれ。そのついでに此嶋に船をよせて物語せられしと聞傳へたり。さしも遙かなる海上をしのぎてこれまで來れる、さぞや疲れ侍べらん。こなたへわたりて心を休められよとて、家につれて歸り、九節の菖蒲酒、碧桃の花蘂酒をいだし、玉の巵をもつてこれをすゝむ。兵庫頭數盃を傾けしに、神氣さわやかに覺えたり。あるじ物語する事、保元平治のあひだの有樣、今見るやうにのべきこゆ。その家の有樣金をちりばめ玉を飾り、家材雜具にいたるまで、みな此世の物とも思はれず。床の上に方二尺餘りの石あり。松風石と名づく。内外透通りて玉の如く、色は靑く黄なり。七寶の盃にのせて叉七寶のいさごを敷たり。その石谷峯の道分れ、瀧の白玉とび散るかとあやしまれ、たゞ水音の落たぎらぬぞ石の紋とはおぼえけれ。まことに絶

世の盆山也。石の腰より一本の松生出て、高さ一尺七八寸もありなむ。年ふりたるかたち、さこそ千とせの春秋をいくかへり知ぬらんと、昔の事も問はまほしきに、枝の間より涼しき風吹き出て、座中に滿ち、枝かたぶき葉うごき颯々たるよそほひ、九夏三伏の氣もおのづからさめぬべし。玳瑁の帳臺には馬腦の唐櫃あり。大さ三尺ばかり。その色茜の如くにして、鳥けだ物草木の圖いろ〳〵に彫つけたるは、更に人間の所爲にあらず。又かたはらに一つの瓶あり。大さ一石あまりを入べし。其色紫にして光かゞやき、内外透とほりて水精の如く、厚は一寸ばかり、輕きこと鴻の毛をあぐるに似たり。内には名酒をたゝへて、上清珍歡醴といふ簡を付たり。その傍に大さ二斗をうくべき壺あり。その色白く、光り輝けり。内に名香をいれて、龍火降眞香といふ簡あり。又百寶の屑を擣篩て壁にぬり、瑤の柱こがねのとばり、銀の檻高く見あぐる棲あり。降眞臺といふ額をかけたり。

庭のおもてには目なれもせぬ草木の花咲亂れて、二三月の比の如し。孔雀鸚鵡のたぐひ、其外色音面白く名も知らぬ鳥多く、木々の梢、草花の間に鳴さえづ

る。十五間の廐に立ならべたる馬共、或は毛の色碧なる、或は紺青色なる、その中に又連錢なる白き黒きさま〲の名馬、いづれも五寸六寸、みな龍馬のたぐひなり。その飼ところの秣は、茅に似て白き花あり。更に餘の草をまじへず。碧瑠璃の色をあざむく棗、秦珊瑚の光りをうつす栗、みなその大さ梨の如くなる、枝の間なく生こだれたり。垣の外を見れば金闕銀臺玉樓紫閣、鳳の甍、虹の梁、雲をおかして立並べり。音樂雲にひゞき、異香砌に薫ず。山際に行て見れば、峯より落つる瀧つぼに湛へたる水みどりにて、流て出る川瀬のかたはらに池あり、二町四方もありなん。其水はなはだ強くして金銀といへ共沈まず、石を投れども猶水の上に浮あがる。此故にくろがねを以て舟を造り、國人これに乗りて心を慰む。水底のいさごは皆金の色也。井出の山吹水にうつりおのづから金花咲よそほひ、今ぞ思ひ合せらる。水中に魚あり。其色赤くしてこがねの如く、皆おの〲四の足あり。其あたりは廣き野邊なり。金色の莖に紺青色の葉ある草多し。葉の形は菊に似て牡丹の如くなる花あり。花の色黄にして内赤し。白き糸の如くなる蘂ありて

糸房の如し。風すこしふけば、其花動きめぐりて蝶の飛ぶに似たり。國中の女はこれをとりて首のかざりとす。十日を經れども萎まずといふ。およそ國中の男女いづれもよはひ廿ばかりにて老人はひとりも見えず。其顔かたちのうるはしき事日本の地にはいと稀なり。兵庫同じくは此所にすまばやと思ひしかども、主君の仰せによりて舟を出し、風に放されてこゝに來り、世にたぐひなき事を見つゝ、此まゝ歸らずは不忠不義の名をよばれ、身の後までも耻を殘す事も口惜し。如何にもして古鄕に歸らむと思ひ、あるじにかく〳〵といひければ、あるじ大に感じて、さらば凌波の風を起して送りまゐらせん。是まで來り給ふしるしには、馬一疋鸚鵡一羽を舟に入れたり。それより暇乞して舟にのりければ、栗棗やうの物おほく

青磁の鉢にもりてあたへ、ともづなときて押出せば、順風徐々として吹起る。すでに帆を引上れば、一日の程に伊豆の浦につきたり。舟よりあがりてまづ城中に參りしかば、氏康ははや病死あり。氏政世をとりて國家を治めらる。兵庫大に歎き悲しみ、涙とともにかの嶋の物語りして、昔垂仁天皇は田道の間守

に仰せて、常世の國につかはし香菓をもとめ給ひし、是今の橘也。すでに採りて歸りしかば、帝は早や崩御まします。間守大に歎き悲しみ、わが心ざしの至らぬ故也とて、なき死侍べりといふ。氏康すでに病死ありて只今かへり來る事、これ心ざしを失ふ也とて腹切て死たり。兵庫頭が物語を書とゞめ置れてのちに世に廣まれり。

○長生の道士

安房國里見義廣は、武勇を以て國家を治め、其威やうやく盛りならむとす。そのころ朝夷郡より老翁一人めしつれて城中に來る。其年を尋ぬれば、さらに數百年に及ぶといふて年の數をば覺えず。髪鬚は白きを變じて黄金絲の如く、眼の色碧く耳長し。顏色はいまだ五十ばかりの男にて、髪は垂て坐すれば地にたまり、名を問へば岩田刀自と號す。後鳥羽院の御時に信州奈須野の狩に、三浦大輔に具せられて狩場に赴く。九尾の狐を殺せし事、砒霜の殺生石を砕きて人數多く毒に中られ、大熱狂亂して死せし事、今見るやうに語る。其時年十八歳、狩場の跡に父母兄弟皆死

せしかば、是をものうき事に思ひ山に籠りて道を修す。いつ方ともなく仙人とおぼしき人來りて藥を授けたり。一粒の靑丸を服せしより、身もかろく心もさわやかになりし所を、かの仙人我を召連れて空をかけり、太山の峯に行。その所はいづくとも知らず。七寶の床の上に坐せしめ、丹栗の赤き栗、霞漿の霞の漿をあたふ。我これに醉て死せしかば、玄天の甘露半合ばかりを飮せしに、醉さめて心いさぎよし。其時仙人語りけるやうは、汝鶴龜を見ずや。氣を伏し息をしづかにす。此故に神氣耗散せず命至りて長し。又病ある事なし。今より九十年の後、兩眼の色靑くなりて光りあり、よく闇の中にも物を見るべし。一千年にして骨を易、二千年にして皮を蛻け、毛を易べし。これより二たび形衰へず、よはひかたぶかず、命更に限りあるべからず。およそ世の人、内には七情の氣欝滯し、外には風寒暑濕に陷溺し、色をほしいまゝにし食を濫りにす。心火たかぶり君火亂れ、内に五臟六府をこがし、九百分の宍を爛かし、外には四十九重の皮、八萬の毛の孔空しくひすろぎ、十四の經十五の絡皆もちれゆるまり、三百六十の骨つがひこ

とく〲離れ、諸病これより生じ、壽命此故に縮まり、終に百年を保つ人世に稀也。其外もろ〱のうれへよろづの悲しみ、かはる〲心をまとひ縛る事、夏の蟲のともし火に入が如し。名のため利のために物思ひ絶る事なし。流れの魚の毒餌をはむに似たり。いたづらに魂つかれ精くづをれ、わづかに方寸の胸の間に妄念の波高くあがり、たがひにねたみそこなふ事たけきけだものよりもはげし。此故に佛經には世界を以て火宅と名づけ、道教には此身を以て大なるうれへの元とす。すでに是を免かるれば人の世の中を見れば、沸湯の如くすさまじく覺ゆ。何ぞ身をすてゝ其間に置くべきや。すでに三尺の形を練て一寸の心をみがく時は、天にのぼり地に入、雲に乘り水を走り、千變萬化更に無方にして飛行自在なる事、たとひ萬乘の君も及ばず。まして世の常の人誰か之に勝らむとて、其方を敎へられしに、我それより當國の山中に歸り、深く籠りて習ひ侍べり。食は松の葉をとり茯苓をくらひ、藥は又兎絲子茅根を求め、石をねりて膏を取り、霜を煮て飴となし、百花の露を凝して是をねり、しば〱服するに、長く五穀を斷。更に飢る事を覺えず。心を松風朗月に嘯き瀧水に慰むれば、欲もなく怒もなしといふ。義廣問はれけるやう、我も又この仙術をつとめば習ひ得べきやと。答へて曰、心を沈めてわが物とし、色を遠ざかり欲を離れ、味ひうまき食をしりぞけ、樂しみも悲しみも只これ一つにして心にとゞめず、德を施してかたおちなくば、自然に天地の惠みにかなひ、日月とひとしく壽ながく侍べらん。目にみだりに見ず耳みだりに聞かず、聲みだりに出さず、身みだりに使はず。行もとゞまるも立もふすも、只みだりにせず、常によく守るべしといふ。義廣きゝて、扨は是人間の交りは此道のさはり也。さはりをのけてつとめんとすれば鹿猿のごとく也。しからば長生して詮なしとて、さま〲食をすゝむるに刀自更に食はず。只酒よくのむといへども醉たる色なし。其形をかしげに見苦しき事を、若き女房達大に笑ひしかば、刀自打笑ひて、女房達くやみ給ふなとて指ざしけるに、十七八廿四五ばかりの女房達十五六人、俄に變じて姥となり、膚は鷄の皮の如く、背は鮐の鱗に似たり。髮白く色黑う腰かゞまりしかば、女房達大に驚き歎き悲しみて、涙は雨の如し。是ゆるし給へと手を合せ詫言す。刀自、さて懲り給へとて又指さしければ、もとの姿となりたり。

義廣大に怒りて、刀自を殺さむ事を謀られたり。刀自先立て是を知りつゝ、君此心ざしあり。國運久しかるまじ。今より五百月の後、必らず横さまに禍あらむと書おきて、坐を立かと見えし。二度その行かたを知らず。追て國中の山々くまなく求むるにこれなし。義廣曰、五百月は四十餘年也。我なんぞそれまでの命あらんやと。然るをよく〳〵見れば、百の字にはあらで箇の字也。果して五箇月の後、北條氏康のために鵠野臺にして敗績しけり。そも〳〵岩田刀自は生國如何なる所とも知らず。誰がしの子とも聞えず。又その終る所も後に知る人なしといふ。

○遊女宮木野

宮木野は、駿河の國、府中の旅屋に隠れなき遊女也。眉目かたち美しく、手能くかきて哥の道に心をかけ、情の色深かりければ、近きあたりの人これを慕ひ、風流のともがらこと〳〵く是に馴れざるを恨みとし、好事の者皆是に契らざるを耻とす。此故に中古このかたにはたぐひなき遊女なりとて、いにしへの虎御前になぞらへ力壽に比べて、たかきいやしき同じ心にもてはやしけり。八月十五夜若き人々此家に入來て、月をもてあそび哥よみけるに、宮木野かくぞいひける。

　眺むればそれとはなしに戀しきを
　　くもらばくもれ秋の夜の月

いく夜われおしあけがたの月影に
　　それと定めぬ人にわかるゝ

此哥まことに我身にとりてさもあらめと、一座のともがら或は笑ひ或は感じけり。其座にありける人の中に、藤井淸六といふ者あり。先祖は國司の家人にて京家の者なりしが、此所に住つきて地下にくだり、田地あまた持て富榮え、今その末に及ぶまで、府の間には富裕の人といはれ、殊更淸六は風流を好み情深き者也。父はむなしくなり母一人あり。みづから妻もなくひとりすみて、いとゞ物かなしき秋の月に嘯き、今宵しも此座につらなり、宮木野が此哥を聞くに、見めかたちといひ才智かしこきにめでゝ、旅やのあるじに價多く出し宮木野をこひうけて妻とせり。藤井が母是を聞て、府中には人にもさからぬ家督なれば、如何ならん名もある人の娘をも迎へて、我新婦とも見ばやとこそ思つるに、遊女を妻とせむはこれ本意なけれども、よしや我子の見るべき面倒を、今は如何にいふとも詮なし。早く呼入れよとて家に迎へとりて見る

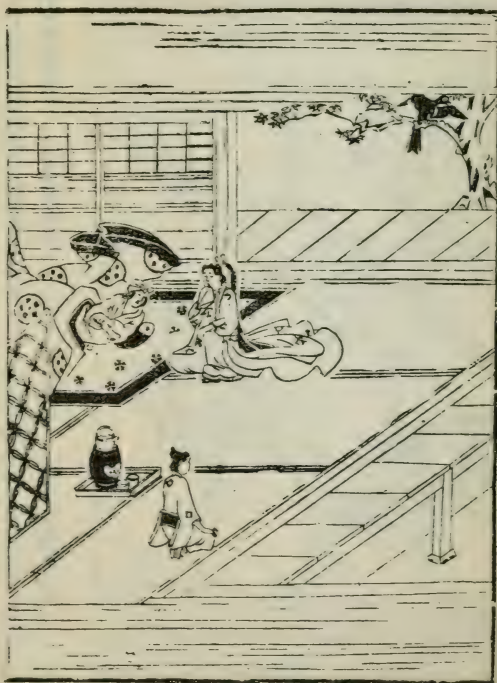
に、みめかたち美しきのみならず、心ざま優にやさしかりければ、母限りなく喜び、たとひ大名高家の娘なり共、生れつき人がましからずは何にかかせむ。この女は如何なる人の末にも侍べれ、たぐひなき女の道知れる人ぞや。我子のまどひめでけるこそことわりなれとて、世にいとほしみかしづきけり。宮木野も今はひたすら姑につかふること我まことの母の如く、孝行の道更にたぐひすくなうぞ行ひつとめける。京都に叔父あり。清六が母のため弟也。頻りに心地煩ひしかば、死べく覚えて人をくだしていひけるやう、清六をのぼせ給へ、いひおくべき事侍べりといふに、母かぎりなく悲しく思ひ、急ぎ上りて見よ、みづから女の身なれば飛立ばかりに思へ共そもかなはず。和殿は男なれば何か苦しかるべき。その有様見届けて給といふ。清六いかゞすべきと案じわづらふ。宮木野いふやう、老母の思ひ給ふところ、此たび京に上らずば、ひとつにはみづからに心とゞまりて叔父の事を忘れたりといはん。ふたつには母の心にそむく不孝の名を受け給はん。只上り給へ。さりながら老母すでに年高く病多し。君はる〲の都に行給はゞ、昔の人のいひ置し、事をつとむる日は多く、親につかふるの日は少なしとかや。西の山の端に入かゝる月の如く弱り給ふ母なれば、必ず一足も早く歸り給へとて、すでに門出の盃とりかはして、又逢べき道ながら、わりなき中はしばしの別れも悲しく覚えて、宮木野なみだをうかべて、

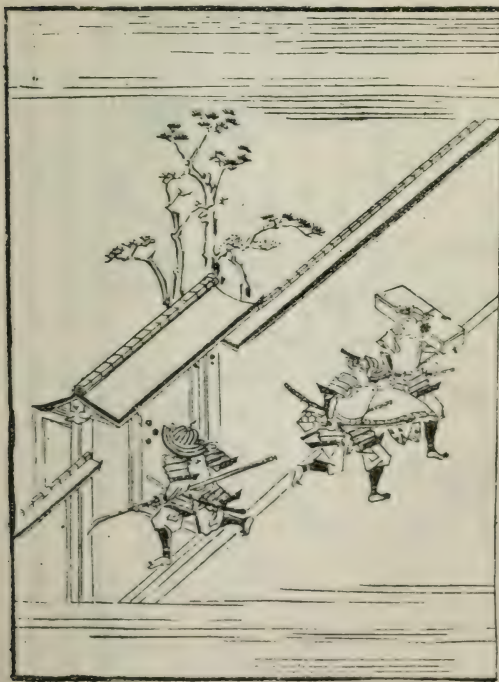
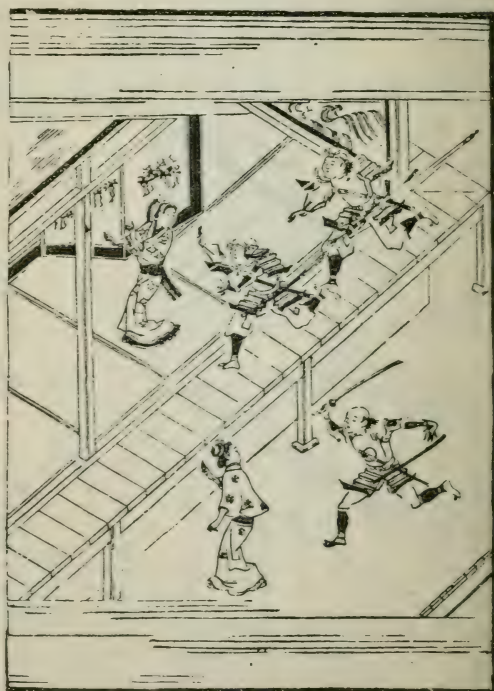
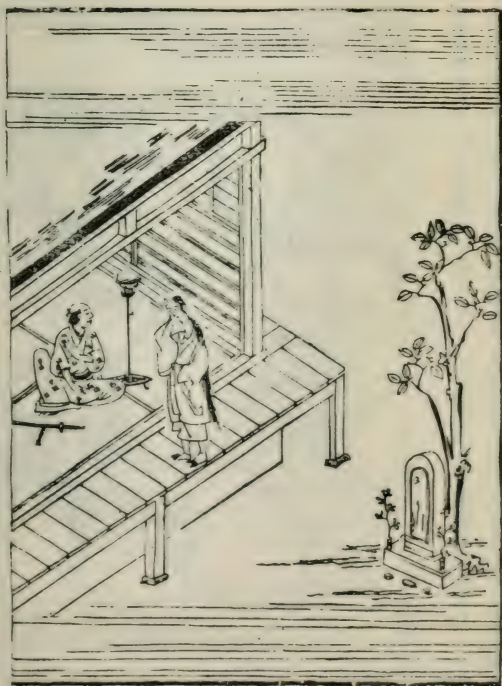
うたてなどしばしばかりの旅の道
　わかるといへば悲しかるらむ

と詠じければ、清六もかくぞ口すさびける。

つねよりは人も別れを慕ふかな
　これやかぎりの契りなるらむ

とて涙にむせびければ、母さゝて、あないま〲し。やがて歸るべき道を、是まで名殘をしみける事よとて、出したてゝ京にぞ上せける。已に都に上りしかば、叔父ことの外にいたはり、つひにはかなくなりぬ。子ありけれ共いとけなく侍べりしかば、妻の一族に財寶こと〲く預け、此子よくそだて給へとて跡の事取まかなひ、それよりやがて國に歸り下らんとせし處に、諸國のうち亂れたちて所々に關を据へ、往來の人を通路せさせず。或は國ならび鄕つづき、互に出あうて軍する事毎日に及べり。清六も心のまゝに道をも過得ず、旅やより旅やに移り、こゝかしこせし程に一年あまりになりけり。元より通

路たやすからねば、互に便りを絶て生死の事も聞えず。さる程に府中の母は我子の久しく歸らざるを心もとなく、朝夕に戀悲しみ、かゝるべしとだに知るならば、のぼすまじき事にて侍べりしを、悔しくも遣はして、生たりとも死たりとも聞ざる事こそ悲しけれとて、只泣きになきつゝ、重き物思ひのやまひとなり、床に臥して日をかさぬ。宮木野これに事へて夜晝の別ちもなく、藥といへ共みづからまづ飲で後に參らせ、粥といへどもみづから煮て進め、神佛に祈り、我身を替りにして姑の病をいやし給へと祈りけれども、更にしるしなし。半年ばかりの後今ははや此世の頼みもなくなりければ、姑すなはち宮木野をよびて、我子すでに都に赴き、世のみだれに道せばくして久しく便りなし。我又重き病に苦しむを、新婦として我に仕へ給ふ事、誠の子といふとも如何でかくあらん。孝行なる事世にたぐひなし。今は心に殘る事もなし。此恩を報せずして命むなしくなる也。和君必

ず子を產み給はん。我は孫をも見ずして死なむ。其子和君に孝行なる事、又今和君の我に仕へて、こまやかなる如くなるべし。あなかしこ。天道物知る事あ

らば、此言葉たがふべからずとて、そのまゝ絶入りてよみがへらず。宮木野悲しみ深く、涙の落る事雨の如し。葬禮の事取まかなうて、七日々々のとふらひ其分限に過たる此物思ひに、髪かじけはだへ痩せて、よその見るめもあはれに覺えし。永祿十一年武田信玄駿州に發向して、府の城にとりかけ、民屋に火を放ちて燒たてければ、今川氏眞は落うせらる。武田方の軍兵家々に亂れ入て、亂妨分捕して狼藉いふばかりなし。宮木野が眉目かたち美しかりければ、軍兵ども捕ものにして犯し汚さんとす。宮木野奥深く逃こもりみづから縊れて死侍べり。兵共その貞節をあはれみ、家のうしろの柹の木の本に埋みけり。幾程もなく、駿府は武田の手にいりてしづかになり、道開けて通路たやすく、海道の諸大將も和睦せし比なれば、藤井淸六やう／＼にして國に歸りければ、駿府のありさま替りはて我家には人もなし。柱傾き軒崩れ、草のみ茂くあれまさり、老母宮木野はいづち行けむとも知る人なし。門に出て見れば、年比めし使ひける男出來れり。是をよびて尋ぬるに、老母いたくわづらひ給ひけるを、宮木野我身に替らんと神

佛に祈り、晝夜付添うて看病せしに、其甲斐なく果給ふ。其後武田信玄のために府中を追おとされ、今川氏眞公は行方なし。宮木野は敵軍の手に身をけがされじとて縊れ死給ふを、兵ども其貞節を感じて、後の柿の木もとに埋みしと語るに、藤井かなしさ限りなく、血の涙を流し、なく／＼かばねを掘起して見れば、宮木野が顔かたちさながら生てあるが如く、肌の色おとろへず。藤井はもだえこがれ、絶入／＼歎け共甲斐なし。それより母の墓とひとつ所に葬りつゝ、墳に向ひて花香たむけて口説けるやう、君は平生才智かしこく、心の色深し。人に替りて身のおこなひよく道を守れり。たとひ死すとも世の常の人には同じからず。されば久しく音づれの絶しも我咎ならず。心にまかせぬ浮世のわざ也。黄泉の底までも物知る事あらば、一たび我にまみえ給へとて、明れば墓にゆき、暮れば家に歎きて、二十日ばかりに及ぶ。月くらく星あらはなる夜、藤井ひとり灯かゝげて坐しければ、宮木野が妾は影の如くにして出來り、君が心に念願する所を感じて、司録神にいとまを乞うて現れ來るとて、始終の事共なく／＼物語して、

すご〳〵と立居たり。藤井これを見るに悲しみ今更にて、わが老母に孝行ありし事、其身を殺して貞節をまもりし事まで感じて泣ければ、宮木野いふやう、みづからもとより官家高門の娘にあらず。あだにはかなきながれの身となり、人に契りて心をとゞめず、明がたに別れて名ごりも知らず。色をつくろひ花を飾りて旅人に眩ひひさぎ、身はさながら路の上の柳、垣のもとの花、ゆきゝの人に手折られむ事を思ふ。姿をなまめき言葉をたくみにして、きのふの人を送りては今日の客を迎へ、西より下れば西なる人の婦となり、東より上れば東の人の妻となり、うきたる舟のよるべ定めぬ契りをかはし、すみつきがたき戀にのみ月日を送りしを、君に逢てまことの妻となり、昔の習はしを捨てゝ正しき道をおこなはんとす。思ひかけずかゝる禍に逢事も前世のむくひ也。さりながら貞節孝行の徳により、天帝地府我を變じて男子となし、今鎌倉の切通しに富裕の家あり。高座の某と名づく。君こゝに來り給へ。明日生れ侍べる也。君に逢はゞ笑ひ侍べらん。これをしるしとし給へとて霧の如くきえうせたり。藤井いよ〳〵歎きながら、

七日の後鎌倉に行て高座の某が家に尋ね入て、此間生れし子やある、子細侍べり、見せて給といふに、まづ胎内に廿月あり。生れてより今に至り夜晝なきて聲絶ずとて出し見せしかば、此子莞爾と笑ひて、それよりなきやみて又聲たのしめり。藤井ありのまゝに物語しつゝ、一族の契約して、往來の音信たえずといふ。

○蛛の鏡

永正年中の事にや、越中の國礪並山のあたりにすむ者あり。常に柴をこり山畑を作り、春は蠶を養うて世を渡る業とす。蠶する比は猶山深く入て、桑の葉を買もとめ、夏に至れば又山中の村里を尋ねめぐり、糸帛を買あつめ、諸方に出し、あきなうて利分を求む。山より山をつたひて深く分入ところ、谷深く水みなぎりて渡りがたき所多し。或は藤葛の大綱を引渡し、苔の両岸の岩根大木につなぎ置く。道行人この綱に取つき水を渡る所もあり。然らざればみなぎる水矢よりはやくして押流され、岩角に當りてくだけ死す。或は東の岸より西の岸まで葡萄蔓の大綱を引張り、竹の籠を懸け、道行人を是に乘せ、向ひより籠を引寄する。その乘人もみづから綱をたぐりて傳ひ渡る。もし籠の緒きれおつれば、谷の逆巻く水に流れ、岩に當りて死する所もあり。五月の中比礪並の商人、糸帛を買ために山中深く赴きしに、さしも險しき谷に向ひ、岸は屏風をたてたるが如く、水は藍をもむに似て、大木はえ茂り、日影もさだかならぬに、谷のかたはらに徑三尺ばかりの鏡一面あり。其光り輝きて水にうつりて見えたり。かのもろこしに聞えし、楊貴妃帳中の明王鏡、汴州張琦が神佐鏡といふともこれにはまさらじ。百練の鏡こゝに現れしや。天上の鏡のおちくだれるや。いかさまにも靈鏡なるべし。岩間を傳ひて取りて歸り德つかばやと思ひ、其あり所をよく見おほせて家に歸り、妻に物語りければ、妻のいふやう、いかでか其谷かげにさやうの鏡あるべきや。たとひありとても身に替へて寶を求め、跡に殘して何にかせむ。もし足をあやまち水に落入らば、悔むとも甲斐なからん。只思ひとまり給へといふ。商人いふやう、更にあやまちすべからず。未だ人の見ざるあひだに早くとりをさめて德つかばやとて、夜の明るを遲しと刀を横たへ出て行。妻こゝろもとながりて、召使ふ男一人我子と共に三人、鐵垢鑓鉞なんどもち

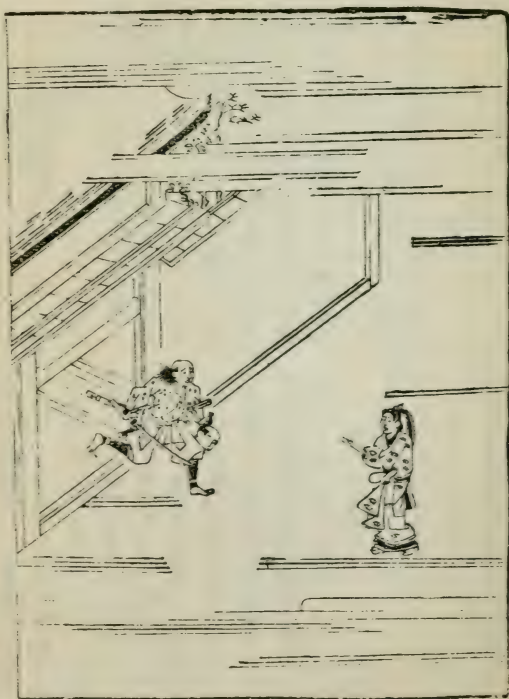
て跡より追て行。山深く入て谷に向へば、白き光り輝きまろく明らかなる大鏡あり。商人谷の岩かどを傳ひ、其光のあたり近く行かと見れば、大音あげてさけび呼ぶ事只一聲にて音もせず。妻と子と驚きて谷にくだりければ、商人は蠶の繭の如く糸にまとひ包れて、大なる蜘蛛の黒色なるが取り付きてあり。三人のもの立かゝりて鑓にてつきおとし、鉞にて切倒し刀を以て糸を割破りしかば、商人は頭の腦おちいり、血流れて死す。その蜘蛛の大さ、足を伸べたるかたち車の輪の如し。妻子なく〱柴をつみ火を鑽て蜘蛛を燒ければ、臭き事山谷に滿ちたり。夫の尸をばとりて歸り葬しけり。其かみより鏡に化して、をり〱人をたぶろかしとりけるとぞ。

○白骨の妖恠

長間佐太は濃州の者也。文龜丙寅の年、公方の軍役に驅れて京都に上り、役果てゝ後も國に歸らず、

わすれてもまた手にとらじあづさ弓
もとの家路をひきはなれては

と詠じて道心おこし、都の北、柏野の

かたほとりに、草の庵を結び、さすがに乞食せんもあまりなれば、北山に行て柴といふものを買受けて、都に出て賣しろなし、少しの利を求め、餅くひ酒かうて打飲みつゝ、庵にかへる時は尻うちたゝき歌うたひ、或時は房に行て庭の塵を掃治し、佛前の埃をはらひ、日暮て道遠ければ堂の軒に夜をあかし、明れば又柴をになひ賣りけり。澁染の帷子一重だに、肩すそ破れ侍れども、心にかゝるすべもなし。土岐成頼が家人石津の某といふものは、同國のよしみを以て、小袖ひとつ錢三百文を與へて、時々はこゝへおはして食事をも受け給へといふ。佐太是をとりて庵に歸りしが、四五日ありて錢も小袖も皆返していふやう、物をたくはゆるといふは、妻子のある人にとりての事ぞや。我は思ひ離れて妻子もなし。身ひとつは行先を泊りと定め、食事はあるにまかせ、物事に心をとゞめねば、樂しさいふばかりなし。然るを此小袖錢を庵におきぬれば、外に出ては早く歸らんと思ひ、出る時には戸をたて、盜人にとられじと用心に隙なく、此程のたのしみこと〴〵くうせはてたり。只これ程の物に心をつかはれむは、誠に

淺間しからずやとて返し侍べり。或日北山に赴き歸るさ遲く、蓮臺野にさしかゝりては夜半ばかりと覺ゆ。道のかたはらにひとつの古塚ありて、俄に兩方にくづれ開けたり。佐太は心もとより不敵にして、力も強かりければ、少しも驚かず立とまりて見れば、内よりひかり出て、あたり迄輝く事松明の如し。一具の白骨ありて、頭より足まで全くつゞきながら、肉もなく筋も見えず。只白骨のみかうべ手足つらなりて臥てあり。其外には何もなし。この白骨俄にむくと起上り、佐太にひしといだきつきたり。佐太はしたゝか者なれば、力にまかせて突きければ、のけさまにたふれて、頭手足ばら／＼とくづれちり、重ねて動かず。火の光も消えてくらやみになりたり。如何なる人の塚とも知れず。次の日行て見れば、白骨くだけ塚くづれてあり。後に佐太は其終る所を知らず。

○死難先兆

享徳年中に、細川右京大夫勝元が家人、磯谷甚七といふもの晝寢を致しけり。其妻面に出たれば、誰とも知れざる人右の手に太刀を引そばめ、左の手に磯谷が首をひつさげて走り出て去けり。妻大に驚き恐れて内に入て見れば、磯谷は前後も知らず臥てあり。妻は胸つぶれ手足なえて、只夢の如くに覺えたり。かくて驚かしければ、磯谷ねふりを覺まし起あがり、我夢に或人それがしの首うちきりてもち去とみたり。怪しくも心にかゝる也とて、やがて山臥を雇ひ夢ちがへの法をおこなはしむ。其月の末に主君勝元が、將軍家に御いきどをりをかうぶる事ありて、是を陳じ申さんが爲にとがを家人におふせて、是非なく磯谷が首を切らせ、これをもつて我身のとがをのがれたり。

伽婢子六之巻終

伽婢子巻之七

○繪馬之妬

伏見の里御香の宮は、神功皇后の御廟也。もとより大社の御神なれば、諸人あゆみを運びあがめまつる。常に宿願あるともがらは、繪馬を掛け湯を參らせて祈り奉るに、願ふ事むなしからず。この故に神前にかけ奉る繪のかず多く、繋馬挽馬帆かけ舟花鳥草木、又其中に美女の遊ぶ所なんど、樣々の繪あり。文龜年中に都七條邊の商人、奈良に行かようて商買する者あり。九月の末つかた、奈良を出て京に歸りける。秋の日のならひ程なく日くれて、小椋堤を打こえて伏見の里に付たれば、はや人影もまれになり、狐火は山際に輝き、狼の聲くさむらに聞えしかば、商人物すごく覺えて、御香の宮に立入り夜を明さむとす。拜殿に臥て肱を枕とし、冷なる松風の音を今夜の友と定め、幽かなる御灯の光をたよりとして暫くまどろみければ、人あり、枕元に立寄りて驚ろかす。商人起上りて見れば、靑き直衣に烏帽子着たる男ありていふやう、只今止事なき御方こゝに遊び給ふ。少し傍へ立のきて休み給へといふ。商人心得ぬ事と思ひながら、傍にのきて見居たれば、美女一人女の童を召つれ拜殿に昇る。むしろの上に錦のしとねを敷き、灯火かゝげ酒さかな取出し、かの女かたはらを見めぐらし、商人のうづくまり居たるを見て少し打笑ひ、如何にそこにおはするは旅人なりや。道に行暮て、それならぬ所に夜を明すは、侘しきものとこそ聞くに、何か苦しかるべき、こゝに出て遊び給へといふに、商人嬉しくて、恐れながら這出つゝかしこまる。只近く寄て打解け酒飲み給へとて、しとねの上に呼びて打向ひたる氣はひ、誠に太液の芙蓉未央の柳、芙蓉はおもての如く、柳は眉に似たりといひけむ楊貴妃は、昔語りに聞き傳ふ。一たびかへりみれば國を傾け、二たびかへりみれば城を傾くと云ひし李夫人は、目に見ねばそも知らず。これは如何なる人のこゝにおはしけむ。如何なる緣ありて此座にはつらなるらん。夢か夢にあらざるか知らず。我ながら魂浮かれて、

更にうつゝとも思はれず。女の童も十七八其顔かたちなべてならず。眉墨の色は遠山の茂き匂ひをほどこし、白き歯は雪にもたとふべし。腰は絲を束ねたるが如く、指は筍の生出たるに似たり。物いふ聲いさぎよく、言葉さすがにふつゝかならず。主君の女房盃とりて商人にさしければ、覺えず三獻を受けてのみければ、女の童箜篌を取出して彈く。女房は東琴取出させ、柱たてならべ調子とりて、さゝやかに歌うて彈けるに、商人魂飛び心消えて數杯を傾け、其比世にはやりし波枕と云ふ哥をうたふ。聲よく調ほり曲節おもしろきに、琴箜篌のしらべを合せければ、雲井に響き社頭にみちて、梁の塵も飛ぶばかり也。商人大に酔てふところを探るに、白銀花形の手箱あり。之を女房に奉る。又瑇瑁の琴爪一具を包みて女の童に與へ、手をとりて握りければ、女の童莞爾と笑ひて手をしめ返しけるを、主君の女房見つけて、妬む色外に現れつゝ、

あやにくにさのみたふきそ松の風
我しめゆひし菊のまがきを

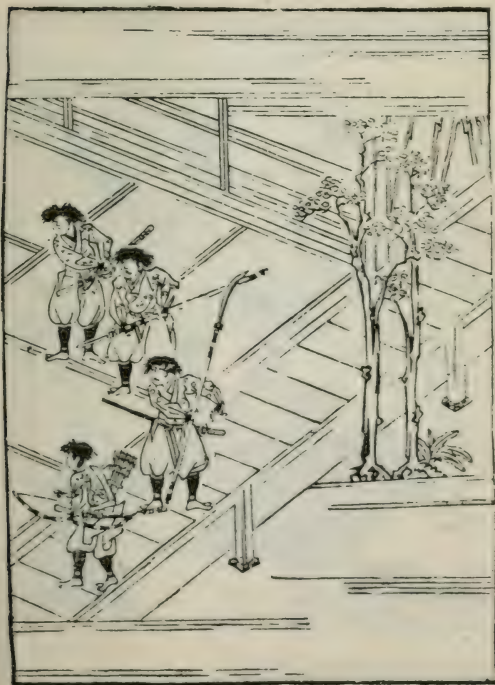
とてそばにありける盃の臺をとりて、女の童が容に投つけしかば、破れて血

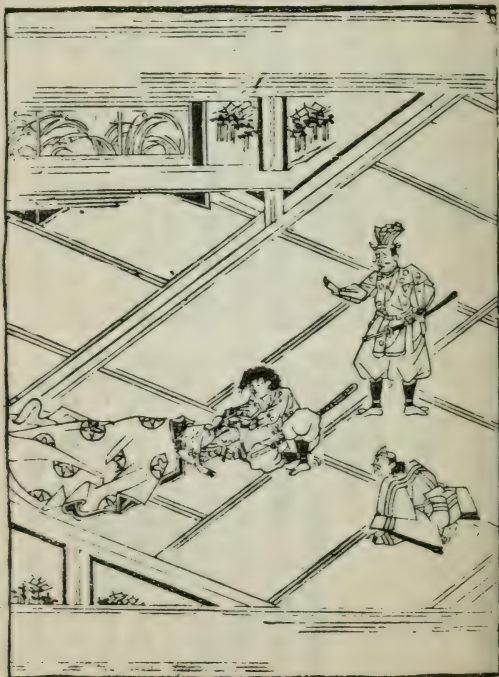
流れ、袂も衣裏もくれなゐになりければ、商人驚きて立上ると覺えし、夢は覺めたり。夜あけて後、懸並べたる神前の繪を見るに、錦のしとねの上に美しき女房琴を彈き、其前に女の童箜篌を彈きける。其かたはらに青き直衣に烏帽子着たる男坐して有。女の童のかほ、大に破れたる痕あり。夢のうちに見たりける容かたちに少しも違はず。疑もなくこの繪に書たる女の、夢に戯れ遊びけるが、繪にも情のつきては、女は物妬ある事こゝに知られたり。そも／＼この繪は誰人の筆といふ事を知らず。

○廉直頭人死司二官職一

蘆沼次郎右衛門重辰は、鎌倉の管領上杉憲政公の時に、相州藤澤の代官として病によりて死す。蘆沼が甥三保庄八

と云者其跡に替りぬ。蘆沼は一生の中、妻を持たず妾もなく、只其身を潔白に無欲をおもてとし、さして學問せるにもあらず、又後世を願ふにもあらず。天性正直正道にして百姓を憐み、少しも物を貪る思ひなし。それに引替へ、庄八大に百姓を虐げ、欲深く貪りければ、此人久しく續くべからずと、爪彈き

して惡み嫌ひけり。庄八或夜の夢に、怪き人來りて其面に怒れる色あり。付從ふ者十餘人手毎に弓鑓長刀もちたり。大將顧みていふやう、三保庄八が惡行つもれり。高手小手に縛めて首を刎ねよといふ。其時に伯父盧沼來りて、庄八が所行まことに人望に背けり。其科かろからずと雖ゐ、まげて許し給はらん。然らば髮を剃り侍べらんと云ふ。大將少し打笑ひ、汝が甥なれば憐み思ふところ理りなきにあらず。但し今よりのち日比の惡行を改めて、善道に赴くべき歟とありしに、庄八恐れて怠狀しければ、大將すなはち我が見る前にして髮をそれとて、剃刀を取出し、押へて剃落しぬ。かくて夢さめしかば、かしらを探りて見るに、髮はみな落て枕もとにあり。是非なき法師になされたり。妻子これを見て泣悲みけれ共甲斐なし。庄八は暇乞うて、心も起らぬ道心者となり、光明寺に籠りて念佛唱へ居たり。或夜盧沼入來れり。庄八入道夢の如くに覺えて、扨如何にして來り給ふと云へば、盧沼云やう、汝入道して佛法に歸依しながら、つひに我墓所にまうでたる事なし。明日かならず參りて卒塔婆を立てよといふ。さていかに

書て立べきと問に、硯を請うて書たり。其文字皆梵形にしてよむ事かなはず。されば人間と迷途と文字同じからず。是は光明眞言也。後に書くべきは我戒名也。我死して地府の官人となれり。汝日比惡行を以て私を構へ、百姓をせめはたり、定の外に賦斂を重くし、糠藁木竹に至るまで貪り取ておのれが所分となし、恣に非道を行ふ。此故に疎まれ人望に背き、天帝是を惡みて福分の符を破り、地府是を怒りて命の籍を削り、惡鬼たよりを得て禍をなす。汝かならず縲紲の繩に縛られ、白刃の鋒に掛り、身を失ひ命を亡ぼし、其あまり猶妻子に及ばんとす。我是を憐み出家になして禍に替へたり。然るを我恩を思ひ知らず、終に墓所にもまうでずと責ければ、庄八一言の陳ずべき道なし。酒を出して勸めければ、飲たりと見えて却て

故の如し。庄八とひけるやう、君已に地府の官人となり、又何事をか職とし給ふ。盧沼答へけるは、此人間にして一德一藝ある者、心だて正直慈悲深く私の邪なきは、皆死して地府の官職にあづかる。たとひ勝れて藝能あるも邪欲奸曲にして私あり、君に忠なく親に孝なく、誠を行はざる者は、死して地獄に

落つ。後世を願ふといへども、我宗に着して他の法をおとしむる者は、是やがて謗法罪なれば、たとひ強く修行すれども、死して地獄に落る也。然ればわれ常に慈悲深く百姓を憐れみ、君に忠を思ひ邪欲奸曲を恐れ、私をかへりみず正直正道を行ひし故に、今地府の修文郎といふ官にあづかり、天地四海八極の人間の善惡をしるし侍べり。靑砥左衞門藤孝、長尾左衞門昌賢以下我その數に加られ、修文郎の官八人あり。楠正成細川頼之は武官の司となり、相摸守泰時最明寺時頼入道は文官の司なり。其以前文武官職のともがらは、皆辭退して佛になり侍べり。今は文武の兩職になるべき人なし。されば毎日地府の廳に來る者、日本の諸國より市の如く見ゆれ共、皆不忠不義不孝奸曲なるともがら、我が知れる人ながら、私には贔負もかなはず、地獄に送り遣す。其ふたを出すも痛はしながら是非なきなりといふ。庄八とひけるは、生たる時と死して後とは如何ならんと。答へて曰、別に替る事なし、され共死する者は虛にして生たる時は實するのみ也。又問けるやう、然らば魂二たびかばねの中に心の儘に還り入ざるは、如何なる故ぞや。答へて曰、例へば人の肘を切落すに、落たるかいなに痛なきが如し。死してかたちを離るれば、其體は土の如く覺え知る所なし。又問けるやう、此春世間に疫癘はやり、人多く死す。是如何成故ぞといふ。蘆沼が曰、三浦道寸その子荒次郎は、正直武勇の者とて暫し地府に留め、武官の職に補せらるべき所に、謀叛を企て人をとりて我軍兵にせん爲に、恣に疫神を語らひ疫癘を行ひし所に、其事顯れて、北帝これを捕へて地獄に送り遣はし給へりといふ。又問けるは、生たる時にくき怨を死して後に害すべきや。答へて曰、迷途の廳には生るを守り死するを憐み、殺す事を嫌ふ故に、此世にして敵なれども、死して後には心の儘に殺す事かなはず。其中にもしはわが敵の亡靈を見て、是におびえて死する者は、元これ惡人也。地府より是を戒められ、其敵を遣はして命を奪ひ給ふもの也。今は夜も明けなむ。かまへて道心堅固なるべし。邪なる道に入て地獄に落る事なかれとて、立出るとぞ見えし、姿は消失せぬ。庄八今は浮世を思ひ離れ、念佛怠らず來迎往生を遂げにけるとぞ。

○飛加藤

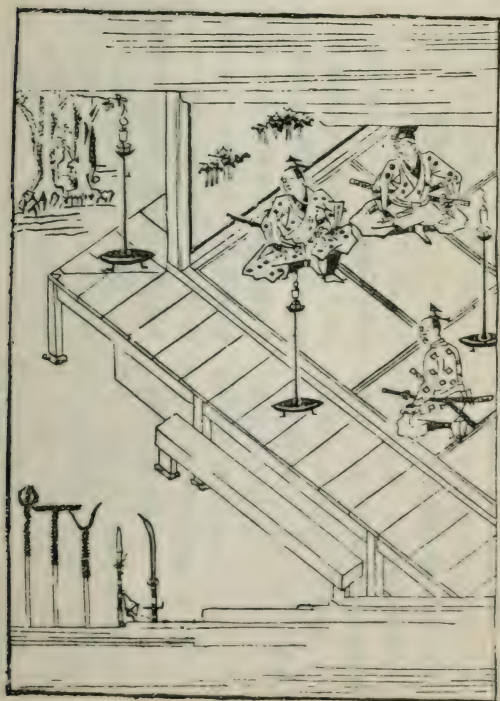
越後の國長尾謙信は、春日山の城にあ

りて、武威を遠近に耀かし給ひける所に、常陸國秋津郡より名譽の竊盜の者來れり。しかも術品玉に妙を得て人の目を驚す。或時さま〲の幻術を致しける中に、ひとつの牛を場中に曳出し、かの術師是を呑み侍べり。一座の見物きもをけし、奇特の事にいひけるを、其場のかたはらなる松の木に登て見たる者ありて、只今牛を呑みたりと見えしは、牛の脊中に乘り侍べりとよばゝるに、術師腹をたて、其場にて夕顔を作る。二葉より漸々に蔓はびこり、扇にてあふぎければ花咲出つゝ、忽に實なりけり。諸人かさなり集り足をつまだてゝ見るうちに、かの夕顔二尺許になりけるを、術師小刀を以て夕顔の蔕を切りければ、松の木に登りて見たる者の首切落されて死けり。諸人奇特の中に怪みをなし、眉を顰めたり。謙信聞給ひ、御前に召して子細をたづねられしに、幻術の事は底をきはめて得たり。手に一尺餘りの刀を持ては、いかなる堀塀をも飛越し城中にしのび入に、人更に知らず。此故に飛加藤と名を呼び侍べりといふ。さらば試しに奇特をあらはし見せよとの給ふ。今夜直江山城守が家に行て、帳臺に立置たる長刀取て來れとて、山城守が家の四方に隙間もなく番をおき、蠟燭を間ごとにともし、番の者男女ともに、おくはし皆まだゝきもせずして居たりけるに、内には村雨とて逸物の名犬あり。怪き者を見ては頻りに吠怒り、然も賢き狗にて夜は少しも寢ず、屋敷のめぐりを打まはり〱、猪のしゝといへ共物のかずとも思はぬ程の犬也。これを放ちて門中の番に添へたり。飛加藤已に夜半ばかりにかしこに赴き、燒飯一つ二つ持て行かと見えし、犬俄に斃れ死す。かくて壁をのり垣を越えて入けるに、番の者半ねふりて知らず。曉がたに立歸る。帳臺に有し長刀、並に直江が妻の召使ふ女の童の、十一になりけるをうしろにかき負て、本城に歸り來るに、女の童深くねふりてこれを覺えず。番の輩ねふるとはなしに少も知らず。謙信これを見給ひ、敵を亡すには重寶の者ながら、もし敵に内通せばゆゝしき大事也。この者には心許して召抱へ置く者にあらず。只狼を飼て禍をたくはふるといふもの也。急ぎ打殺せとの給ふ。直江すなはちわがもとによびて、召とりて殺さんと謀りけるを、加藤これを悟りて、出ていなんとするに、諸人是をまぼり居たればかなはず。加藤いふやう、慰みのため面白き事して見せ奉らんとて、錫子一對を取寄せ前に

おきければ、銚子の口より三寸ばかりの人形廿ばかり出て並びつゝ、面白く踊りけるを、座にありける人々目を澄し見けるほどに、いつの間にやらむ、加藤行先知らず失せにけり。後に聞えしは甲府の武田信玄の家にゆきて、跡部大炊助につきて奉公を望みしに、古今集を盗みたる竊盗に手ごりして、密かに打殺されしといへり。

○中有魂形化契

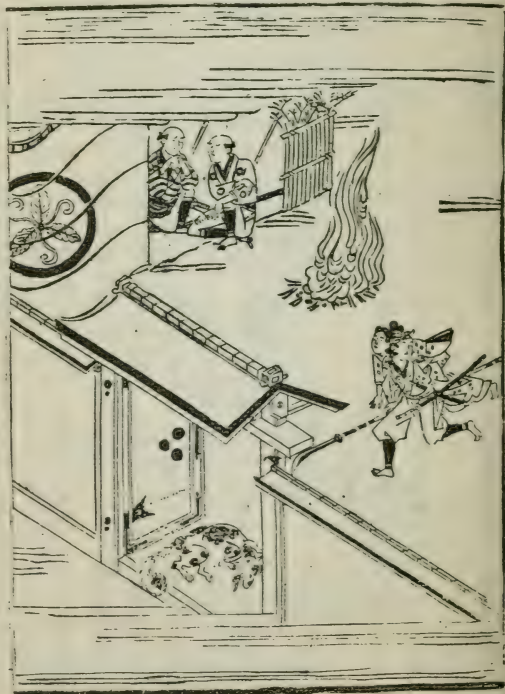
尾州清洲といふ所に、小山田記内といふ者あり。或夕暮に門に立て外を見居たりければ、年の程十七八と見ゆる女、顔かたち世の常ならず、美しくなべての人とも覺えざるに、只獨り西の方より東に行く。明る日の暮方門に出しかば、又かの女西より東に打過る。記内も又近きあたりにては美男の聞えあり。女つら〳〵記内を顧みて、心ありげながら打通る。斯て四五度に至りて、又夕暮に門に立たりしかば、女則來る。

記内立よりて女の手をとり戯れて、君はいづくの人なれば、日暮毎にこゝを打通り、いづ方に行給ふと問ば、女さしも驚く色なく打わらひ、みづからが

家は是より西の方にあり。所用の事ありて東の村に行也といふ。記内こゝろみに手を取り内に引入んとすれば、更に否とも云はず。やがて親しみつゝ、その夜はそこに泊りてわりなく契りつつ、夜の明方に暇乞しつゝ立歸る。又いつか來まさんと云へば、女は人目を忍ぶ身の、其日をさして必ずとは契り難しとて、

なほざりに契りおきてや中々に
　人の心のまことをも見む

と云ひしかば、記内は哥までやはと思ふに、かく聞ゆるにぞ、いとゞわりなく覺えて、返し、

いひそめて心かはらば中々に
　契らぬさきぞ戀しかるべき

かくてきぬ〴〵の別れの袖、又朝露にぬれそめて、などりぞいとゞ殘りける。四五日の後夕暮に又來りぬ。今は互に打とくる、其下紐のわりなくも、結ぶ契りの色深く、よひ〳〵ごとの關守も、恨めしきこゝちして、後には夜ごとに來りけり。記内いふやう、かほどにわりなく契る中に、なにか苦しき事のあらん。君が家こゝもとに近くば、我又君がもとに行通ひ侍べらんものをといふ。女答へけるは、みづからが家は甚狹く

していと見苦し。如何にして人を待うけ、一夜を明すべき用意もなし。其上みづからが兄は今はなき人となり、其妻やもめにて内にあり。此あによめの目を忍べば、中々心苦しく侍べりといふ。記内聞てげにもと思ひ、いよ〳〵人にも語らず、深くしのびて契りぬ。此女は又たぐひなき縫張に手きゝ也。夕暮毎に來て、夜もすがら記内が小袖やうの物洗ひすゝぎ、縫たてゝ着せ、或は麻績つむぎて、美しく細き布おり立て着せければ、見る人是は世の常の布にあらず、筑紫の波の花越後の雪曝といふとも、是程にはよもあらじと譽ぬ人はなし。後には見目よき女の童一人を召つれて通ひ來り、是も又手きゝ也。かくて半年ばかりの後は晝もとゞまりて、女の童と同じく絹を織り縫立て記内に着せ、家の中よろづ甲斐々々しく取まかなひけり。記内云やう、夜さへ忍ぶ身の晝だに歸り給はずは、もし嫂の思ひ咎むる事有べしといふ。女のいふやう、いつまで强ひて人の家の事さのみに忍びはたさむ。君の心も又如何ならん。末賴み難けれ共、ひたすら我身を君にすてゝ、かく爰には通ひ來る也といふに、記内いとゞ嬉しさ限りなく、めでまどひけるもことわり也。或夜女來りていつに替り、愁へ歎きたる色みえて、そゞろに淚を流して泣けり、記内問ければ、されば今迄は君に思はれ參らせ。みづからもわりなく賴みし中なれ共、別れ離るべき事出來て、其悲しに淚の落るといふ。記内大に驚き、君とわれ千とせを過るとも、心ざしは露替らじとこそ契りけれ。如何成故に別れ離るべきといへば、女は今は何をか包み參らすべき、みづからは飯尾新七が娘也。年十七にして病によりてむなしくなり、明日は已に第三年に當れり。死して中有にとゞまる事三年を限りとす。三年過ぬれば其業因に任せて、何かたになりとも生を引て赴く。今宵かぎりの別れと思へば、悲しくこそ侍べれとて、頻に泣き悲しみければ、記内は幽靈と聞ながらも、此程の情を思ふに怖ろしげはなく、只悲しき事限りなし。夜もすがら寢もせず、女房は白銀の盃ひとつ玉をちりばめたる花瓶の小さきにとりそへて、君もし忘れ給はずは、是を形見に見給へとて、

面影のかはらぬ月に思ひいでよ
契りは雲のよそになるとも

とてなく〳〵渡しければ、記内も色よき小袖に白き帶取り添へて、女に與へつゝ、

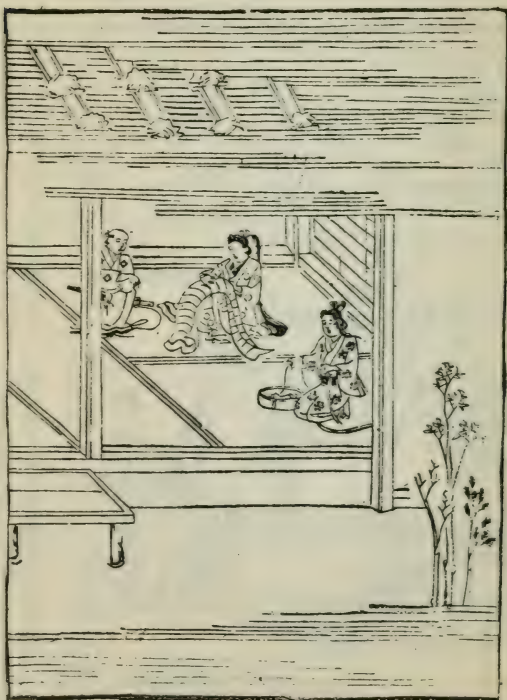
待いづる月の夜な〳〵其まゝに

ちぎり絶すなわがのちの世にとかきくどき泣あかし、鐘の聲遠く響き、鳥の音はや打しきれば、起き別れゆく袂をひかへて、さるにても無き影の埋もれ給ひし所はいづくと尋ねしかば、甚目寺のわたり也と答へて、立出ると見えし、跡方なくうせにけり。記内あまりに堪かね、甚目寺のほとりに至りけれども、そこと知るべき塚もなし。今すこしその所よくとふべきものをと思へど、悔むに甲斐なくて、

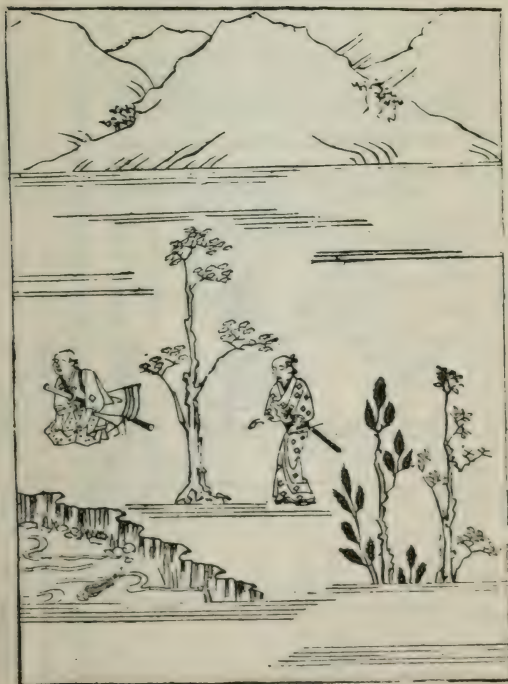
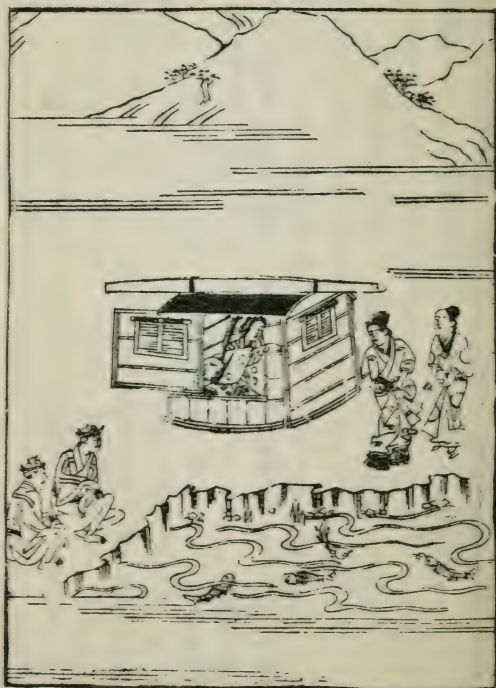
たのめこしその塚野邊は夏ふかし
　いづこなるらむもずのくさぐき

と打詠じ、なく〳〵日暮がた家に立歸り、其面影を思ふに戀しさ限りなく、終に病となり、日を重ねて藥をも飮まず、只とく死して此人にめぐり逢はんとのみいひて、程なく身まかりぬ。

○死亦契

無くて只獨りすみけり。源五が舅津田長兵衞といふもの一人の子あり。年廿大和の奈良に櫻田源五といふものあり。四五なり。彦八と名づく。源五彦八は年廿五になり、父母を失ひ、いまだ妻も従兄弟なりければ、親しく侍べり。或時

源五東大寺にまうでゝ歸るとて、猿澤の邊にて、奇麗なる乘物に女のりて、男一人女二人を召つれ、池のはたに乘物をたてさせ、煎餅を碎きて池に入れ、魚に食はせて慰みける。其さし出せる手の白く美くしき、指は筍の如く爪の色は赤銅色にて、肘のかゝり不束ならず。源五立とまりければ、内より乘物の戸を開き、暫く源五が顔をまぼり、已に立て歸る。源五これに隨うて行ければ、三條通といふするに、筒井某といふ者の家に入りたり。源五是を見そめて心惑ひ、さま〲たよりを求めて聞ければ、父は筒井順昭に屬して河内の軍に打死す。母やもめにて只この娘一人をやしなうて住けり。娘の乳母は、源五もとより知たる者也ければ、是に近づきていろ〲たのみけり。乳母も源五が美男にして然も有德なるを以て、是に逢せばやと思ふ。まづ一筆のたよりを傳へんとて、紅葉がさねの薄えふに、中々言葉はなくて、

いさり火のほのみてしより衣手に
　磯邊のなみのよせぬ日ぞなき

とかきて遣はしたり。乳母是を姫君に見せしかば、顔打あかめ袂に入れて立退きぬ。然るに如何なる者か知らせけ

ん、源五が舅津田この娘の事を聞て、我子彦八が妻にせむと思ひ、なかだちを入て娘の母にいはせたり。津田も武門の末也。世もよかりければ、うけごひて頼みをとりたり。娘はこゝち煩ひて、つや〳〵湯水をだに聞入れず。母云やう、津田彦八と云人に縁を定めたり。心を引立よ、近き比にかの方に遣しなんといふ。娘更に恨みたる色あり。乳母に語りけるやう、源五が許にこそ行かまほしけれ。其彦八とかや何せんに、只死したるこそよからめとて、猶薬をだに飲ます。母悲しさの餘り乳母に心を合はせ、源五にかくといひて、娘を盗み取らせたり。源五大に喜び、乳母と妻をつれて奈良をば立のき、郡山といふ所に隠れ住みけり。津田又ゆきて娘を迎取らんと云。母なく〳〵いふやう、此間誰人かかどはしけむ、乳母と共に

行方なしといへば、わが甥の源五が心を懸けしと聞たり。盗みて隠れぬらんと大に怒り腹立、其間に娘の母死したり。跡の事は母の弟是をまかなふ。源五夫婦餘所ながら野邊の送りに出つゝ、いと忍びたりけるを、津田彦八見付て跡をしたひ、郡山に行て家よく見屆け、立歸りて父長兵衛に語る。長兵衛すな

はち奈良の所司代松永に訴へて對決に及ぶ。源五いふやう、それがし前に契約して頼みを遣はして呼たりといふ。津田はなかだちを證據として頼みを遣はせしといふ。娘の母は死たり。いづれとも知りがたし。されども津田が頼みを遣はしける事は、なかだちたしか也。源五にも理有りといへ共、此娘をとゞむる事法にそむけり。只津田がもとに返し遣はせとあり。力なく女房は彦八に取られぬ。娘も乳母も此事を病として、打續き二人ながらむなしくなれり。源五が事をや思ひけむ。

　さりともと思ひしまでの命さへ
　　今はたのみもなき身とぞなる

彦八いと悲しく、妻と乳母が墓所をひとつ寺の地に作りて跡を弔ひけり。さるほどに源五は妻を取られて後は、よろづあぢきなく其面影を忘れ兼つゝ、せめては風のたよりの音づれだに聞えぬは、此女も彦八にわりなくなりて、我をば忘れぬらんと恨めしく思ひて、

　なびくかと見えしもしほの煙だに
　　今はあとなき浦かせぞふく

と打詠めをる。其暮がた門をたゝく。開きて見れば妻の女房の乳母也。櫛鏡入たる袋を前に抱へて、只今我君こゝに走り來り給ふといふ。源五うれしくて門を開き内に呼入しに、女のかたちそのかみにも替らず。餘りの事に夫婦手を取て嬉し泣になきけり。斯て其故を語る。君の事つゆ忘るゝ事なく、彦八の家にあるにもあられず忍出て逃げ來れり。日ごろの願ひ今已にかなひ侍べりといふに、源五堪がたく喜びつゝ、偕老のかたらひ今更なり。彦八が家人ある時郡山に行て、源五が門を見いれたりければ、乳母何心なく立出たるを見つけ、走り歸りて彦八に告げたり。彦八が父は去ぬる月死たり。彦八きゝて怪み、それは正しく死して埋み侍べりし。如何に世に似たる者こそあれ。人違へにてぞあるらんといふに、正しく見損せずとあらがひけり。彦八行て垣のひまより覗きければ、女は鏡をたてゝけさうし、乳母は其前にあり。彦八内に突入て源五に對面し、女も乳母も此春うちつゞきてむなしくなりしを、寺に送り同じ所に埋みしに、今こゝに來り住む事の怪しさよといふ。源五も奇特の事に思ひ部屋に行て見れば、女も乳母も行がたなくなりて跡も見えず。二人ながら云やう、さては幽靈の來りけるにこそ、此上は互に日比の恨みもなしとて、源五彦八打つれて寺にゆき、塚をほりて見れば、女も乳母も形ち少しも損せず、只生たる時のごとし。やがて

もとの如くに埋みて、源五彦八共に高野山に籠り、道心おこして二たび山を出す。

○菅谷九右衛門

天正年中に、伊勢の國司具教公をば武井の御所とぞ云ける。民部少輔具時は國司の甥にて、南伊勢の木作といふ所にすみ侍べり。此郎等に柘植三郎左衛門、瀧河三郎兵衛とて二人の侍あり。武勇智謀ある者なりければ、時にとりて名を施しけり。然るに國司具教その甥民部少輔、おなじく奢を極め國民をむさぼり、佞奸の者に親しみ、國政正しからざる故に、行末頼もしからずと思ひ、柘植と瀧川二人心を合はせ信長公に内通して、終に伊勢の國を信長公に屬せしめ、國司を亡ぼし、すなはち

勸賞をかうふり、立身して權を取り威を震ひけり。其ころ伊賀國に一揆起り、近郷のあぶれもの、武井の城の餘黨ども多く集り、要害を構へて楯こもり、土民百姓を惱まし國郡村里を掠めしかば、信長公、早く是をせめほさずば大なる難義に及び、諸方の手づかひ障とならんとて、軍兵を差向けられし所に、城中

強くして人數多く損じける中に、柘植瀧川二人ながら打れたり。是によりてあつかひを入られ、終に信長公に隨ひけり。其後一年ばかりを經て、信長公の家臣菅谷九右衞門、所用ありて山田郡に行ける道にて、柘植瀧川に行合たり。菅谷思ひけるは、此二人は正しく打死したりと聞しに、是は夢にてやあるらんと怪しみながら、立向ひ物語するに、柘植云やう、久しくて對面す。いざこゝにて酒ひとつのみ給へとて、召連たる中間に仰付けて、小袖ひとつ持せ酒屋に遣はし、質物として酒取よせ、むしろを借て道端の草むらに敷かせ、柘植瀧川菅谷三人打向ひて、數盃を傾けたり。瀧川云やう、昔もろこしの諸葛長民と云人は、劉毅が殺されし時これがために軍兵を催し、亂を作さんとして未だ思定めず、かくて曰、貧賤なれば富貴を願ふ。富貴になればかならず危き事に逢ふ。其時又元の貧賤にならばやと思ふとも、是も又かなふべからず。腰に十萬貫の錢を纒ひて、鶴にのりて揚州に登るといふ思ふ儘なる事はなし。武士と生れ、其名を後代に傳ふる程の手柄なき者は、必ず恥を萬事に殘す事いにしへ今ためし多し。遠く他家に求むべからず、織田掃部はさしも勳功を致せしか共、終に日置大膳に仰せて誅せられ、佐久間右衞門は、信長公草業の御時より忠節ありけれ共、忽に追はなたれて恥に逢たり。歷々の功臣猶かくの如し、まして其外の人更に行末知り難しといふ。瀧川がいふやう、下間筑後守は越前の朝倉に方人して、木目峠の城に籠りしを、朝倉うたれて後、平泉寺に隱れて跡をくらまし、醍醐發明の道人となりて、

梓弓ひくとはなしにのがれずは
　今宵の月をいかでまちみむ

と詠せしは、名を埋みて道に替たり。荒木攝津守が家人小寺官兵衞は、主君の逆心を諫めかねて、髻きりて僧になりつゝ、

四十年來謀二戰功一
鐵冑着盡折二良弓一
緇衣徧衫靡二人識一
獨誦二妙經一詢二梵風一

といふ詩を題して、世を逃れたるもたふとしや。此二人は其身逆心の君に仕へながら、終によく禍を免かれたり是智慮の深きに侍べらずやといふ。拓植うち笑ひていふやう、此輩は我等のため恥かしからずや。いで其伊賀の一揆ばら、謀はつたなかりし者をといふ。瀧川、いや其事は只今又いふべきにあらず。思へば口惜きに、たゞ酒のみ給へ

菅谷殿とて、互に盃の數かさなりて後、菅谷二人に向ひて、如何にかた〳〵、日來は數奇の道とても遊ばるゝに、今日の遊びに一首なきかといふ。さればとて打案じつゝ柘植三郎左衞門、

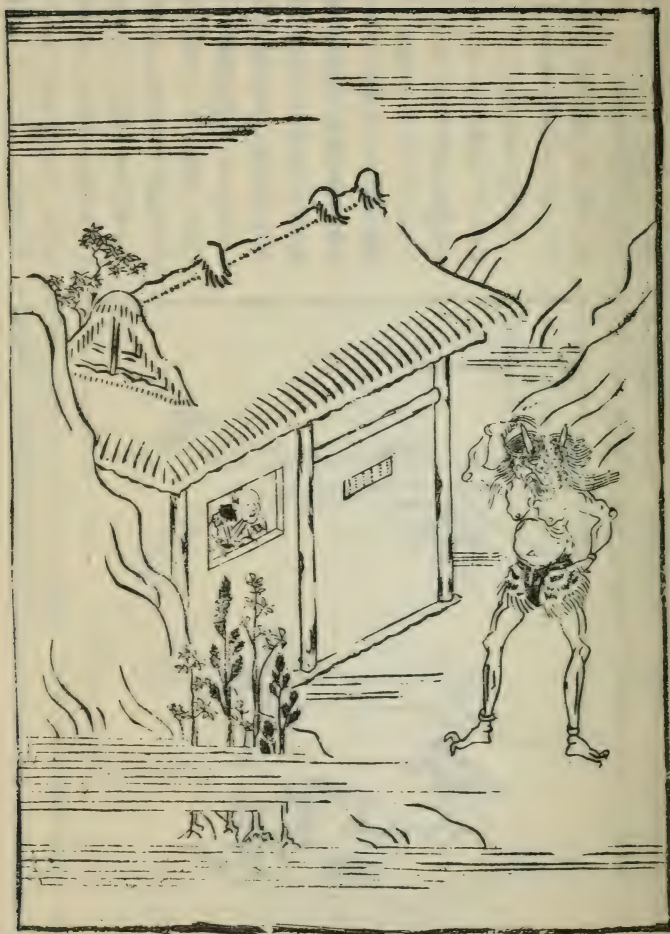
露霜ときえての後はそれかとも
くさ葉より外しる人もなし

瀧川三郎兵衞、

うづもれぬ名は有明の月影に
身はくちながらとふ人もなし

とよみて、二人ながらそゞろに涙を押拭ひけり。菅谷歌の言葉いとゞあやしく、又この有樣心得がたく驚き思ひて、いかに日ごろは武勇智謀を心に掛て、少しも物事によわげなき氣象のともがら、只今の哥のさま哀傷ふかく、涙を流しけるこそ怪しけれといふに、二人ながら更に言葉はなく大息つきて嘯きつゝ、酒已になくなれば、今は是までなりとて座をたち、暇乞して半町ばかり行かと見えしが、召つれたる中間ばらもろ友に跡なく消うせたり。菅谷大に驚き、伊賀にて打死せし事をやうやう思ひ出したり。日は山の端に傾き鳥は梢にやどりを爭ふ。人を遣はして酒うる家に質物とせし小袖を取寄せて見れば、手にとるやひとしくぼろ〳〵と碎けて土ほこりの如くになれり。菅谷いそぎ歸りて密かに僧を請じ、二人の菩提を吊ひけると也。

○雪白明神

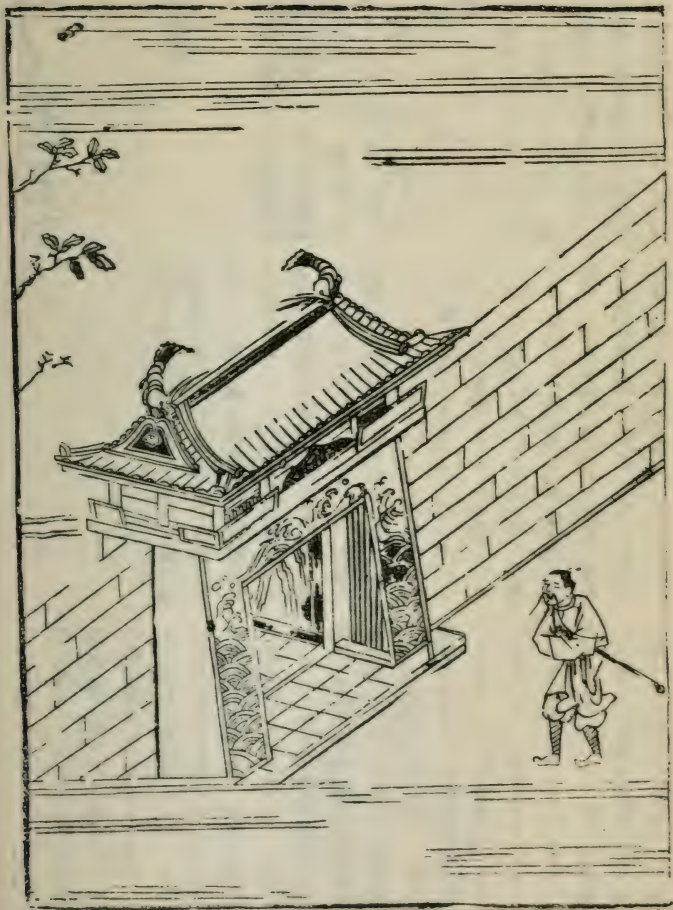
長享元年九月將軍源義煕公、みづから軍兵を率して江州に發向し、坂本に陣をとりて、佐々木六角判官高頼を攻めさせらるゝに、高頼ふせぎかねて城を落て、甲賀郡の山中に隠入たり。高頼が郎等堅田又五郎といふものは、武勇ありて力量人に勝れ、然も常に佛神を敬ひ、後世を願ふ心ざし淺からず。觀音普門品一返彌陀經一巻念佛百返を以て毎日の所作とす。已に大將高頼城を落ければ、又五郎も力なく、むかふ寄手に切かゝり、終に大軍の中を切ぬけて、安養寺山の奥に落行たり。かくて日暮たりければ、いづかたに出べき道も知らず。かたはらに一つの藁屋あり。谷陰に立ながら内には人なし。まづ此家に隠れ居たれば、軍兵廿騎ばかりの音して、まさしく後影は見えしぞ、さだめて伊賀路にかゝりて落行けむといふを聞けば、我を討とめんとする追手の兵也。されども隠れ居たる家には目もかけず、やう〳〵遠ざかり行く。今は心安しと思ふ處に、又人の打過る音の聞えしかば、ひそかに窓より覗見れば、一人の女

房その齢四十ばかりなるが、勢細く高し。褐色の中なれたる小袖着て、手に美くしき袋もちて、堅田又五郎殿はこゝに在するやといふに、又五郎物をもいはず忍び居たり。女房打笑ひて、何をか怖れて忍び給ふぞ。少しも苦しき事なし、我はこれ當國栗太郡におはします、雪白の宮の御使として、君が心安くせんとて遣はされたり。ゆめ〳〵疑ひ給ふな。君常に慈悲深く神佛を敬ひ、後世を求めて怠りなき故に、其心ざしを感じて雪白の明神守り給ふなりとて、すなはち持たる袋の緒をとき、燒餅とり出して食せ、小き瓶に酒を入れて取出して飲せけるに、又五郎大に飽みちて、かたじけなく有難き事譬へんかたなし。女房いふやう、此窓の前、庭の面に、横筋一つ書つけて、今宵夜半ばかりに怪しき物來りおびやかさん。君構へて恐れ動き給ふな。是をのがれて後は、行末更に惡しき事あるべからずとて、歸るかとみえし、銷が如くに失せたり。案の如く夜半ばかりに怪しき光ひらめき耀きて來る者あり。又五郎さればこそと思ふ。窓より覗きければ、身のたけ一丈あまりの鬼、赤き髮亂れ白牙くひちがうて、兩の角は火のごとし。口は

耳元までさけて、眼の光鏡の面に朱をさしたるがごとし。爪は鶴の如く、豹の皮を腰當とし、直に內に駈入らんとするに、かの女房庭の土に書きたる筋を見て、大に怒れるまなこのひかりいなびかりの如くひらめき、口より火を吐て立やすらひ、力足踏みて響みける。其有樣身の毛よだち、魂きえて恐しといふも愚か也。鬼すでに筋を越る事かなはず、怒りを抑へてかたはらに立寄りし所に、軍兵又十騎ばかり追來りて、又五郎は此家に隱れしと聞ゆ。出よ〳〵と責めけるに、かの鬼かけ出て馬上の兵を摑み、馬を踏殺して食ふに、其外の郎等共は蛛の子を散らす如くに、足にまかせてにげうせたり。夜已に明方になりたれば、鬼も消うせて物靜か也。立出て見れば馬のかしら人の手足、血まじりに散みだれ、よろひ甲太刀皆ひき散らしてあり。又五郎終に逃るゝ事を得て、それより伊勢にくだり、白子と云所より舟に乗り、駿州にゆきて今川氏親を頼みて身を隱し、後にその終はる所を知らず。

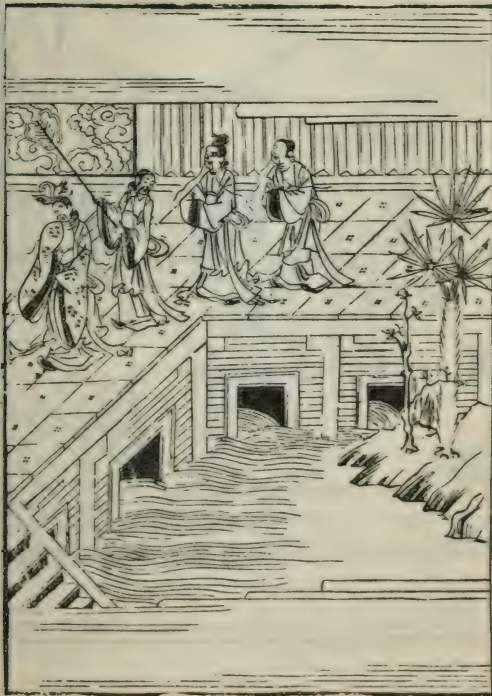
伽婢子巻之七終

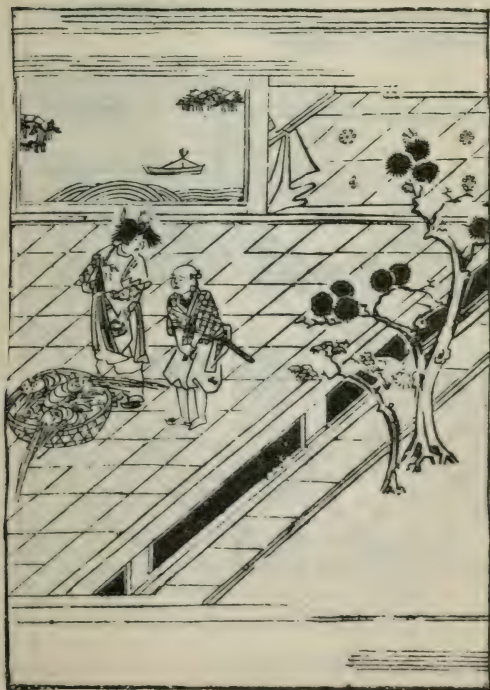
伽婢子巻之八

○長鬚國

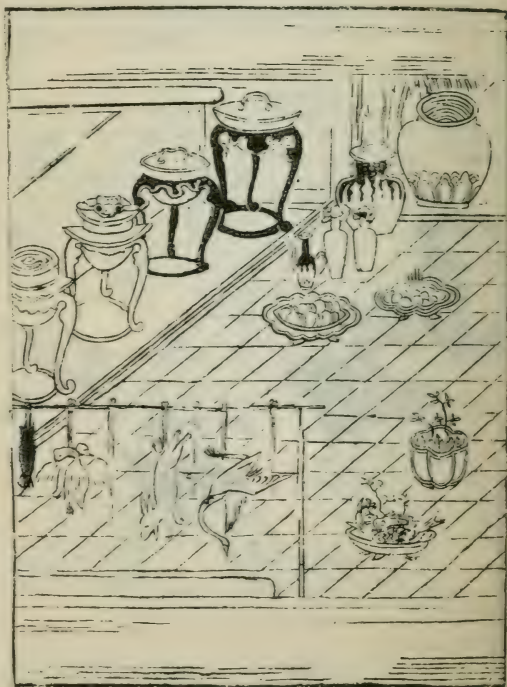
越前の國北の庄に商人あり。毎年松前に渡りて蝦夷と販賣に、多く木綿麻布を遣して昆布干鮑に替て、國に歸り出し賣るを業とす。或年舟に乘て松前に渡るに、俄に風變り浪高く、檣をれ梶くだけて吹放されつゝ、漸にしてひとつの嶋に寄せられたり。人心地少しつきて舟をあがりければ、五町ばかりにして人里あり。其所の人は髮短かく鬚長し。物いふ聲は日本の言葉に通ず。或家に立入て國の名を問へば、長鬚扶桑州といふ。國主を問ば、是より一里ばかりの東に城郭ありと敎ゆ。彼に赴き惣門を過て見れば、國主の本城とおぼしくて門の構へ築地高く、石垣は削り立たる如し。門のほとりに立よりければ、門を守るもの一同に出て大に敬ひ、奥のかたにいひ入たりしに、衣冠の躰世に見なれざる出立したる者はしり出て、殿中に請じ入たり。宮殿はなはだ花麗にして、きらびやかなる事いふばかりなし。紫檀くわりん白檀なんど入違へ、沈香金銀をちりばめ交へて立たり。錦のしとねを敷き、國主立出て對面す。大日本國の珍客只今此所に來れり。我等邊國のえびすとしてまのあたり請じ參らす事、是幸ひにあらずやと、一族にふれめぐらすに、皆おのおの來り集る。いづれも出たち花やかなれ共、勢短く髮かれて、鬚ばかりは長く生のび、腰少しかゞまりて見ゆ。座定まりて後に、緑の蔕ある色よき柹一つ、はらめる黄なる膚の栗、紫の菱、くれなゐの芡、青乳の梨、赤壺の橘を、瑠璃の盃水精の鉢にうづたかく積て出したり。膳には野邊の初雁、澤沼の鳧、鳴鶉、雲雀、紫莪、靑蓴、溪山の筍、靈澤の芹、數を盡して出しそなふ。蔔萄珠崖の名酒に茱萸黃菊を盃に浮べ、誠に妙なるあるじまうけ、其味ひ更に人間の飲食にあらず。されども海川のうろくづ蛤のたぐひは、一種の肴もこれなし。商人いぶかしくぞ覺えたる。國主の曰く、我に一人の娘あり。願くは君是にとゞまり給へ。配偶の緣をむすび奉らん。榮耀いかで極まり有らんといふに、商

人大に喜び、ともかうも仰せに隨ひ奉んとて、數盃を傾け侍べりしに、今宵は月已に滿て、光四方に輝きて明らかなる事白日の如し。これぞ我等の酒宴遊興を催す時なりとて、滿座のともがら舞かなで歌ひどよめく。かゝる所に姫君出給ふ。附したがふ女房達廿餘人、何れも花を飾りもすそを引てねり出たれば、沈麝の薫座中にみちたり。商人これを見るに、かたちはたをやかにうるはしけれ共、女にも鬚あり。商人甚怪しみて悅びず、古風の躰一首を詠みける。

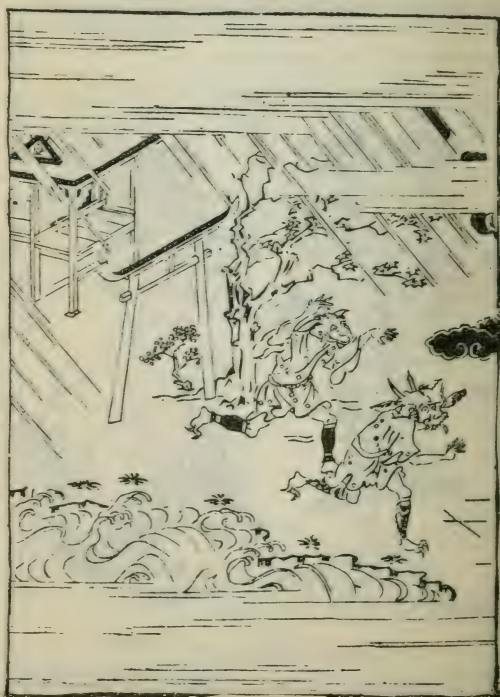
さくとても蘂なき花はあしからめ
妹がひげあるかほのうるはし

國主聞てえつほに入て笑ひしかば、滿座かたぶきて腹をさゝげたり。娘と女房達は世に耻かしげ也。此夜より商人に一官を進めて、司風の長とぞかしづきける。身の榮花にたのしみを極め、國中敬ひもてはやす故に、鬚ある妻になれそめて三年を過れば、男子一人女子二人をぞまうけたる。ある日家こぞりて泣き悲しみ、妻甚だ愁へ歎く。城中打ひそまりて色を失へり。商人驚きて妻に問ければ、泣々答へけるやう、きのふ海龍王の召によりて、我父已に龍宮城に赴き給へり。命生て二たび歸り給

ふべからず。此故に歎き悲しむ也といふ。商人大に仰天して、其は如何にもはかりごとあらば逃るゝ道侍べらむや。然らば我たとひ命をすつる共何か願るべきといふ。妻のいふやう、此事君にあらずしては、禍を逃れて安穩の地に歸り給ふ事かなふべからず。願くは龍宮城に赴き、東海の第三の迫戸第七の嶋長鬚國、已に大禍難に依て今より衰微に及ぶべき也。憐みを以て首長を放ち返し給はゞ、宜しく太平安穩の政道なるべしとよく／＼の給はゞ、龍神よこしまなし、必此歎きを引かへて喜びの眉を開かん。然らば一足も早く赴きて給へとて、聲もをしまず泣ければ、商人もなさけの色に心引かれて急ぎ出立、花やかに裝束して、十人の侍五人の中間二人の道びきを召連れ、龍宮城に赴き、舟に乘りてしばしの間に岸に着きて、濱おもてを見れば皆金銀のいさごにて、國人は衣冠正しく、かたち大にして天竺の人に似たり。樓門にさし入て見れば、七寶莊嚴の宮殿、其さまは堂寺の如し。玉のきざはしに進めば、龍神いで迎ふ。商人大に恐れ愼しめば、司風の長とは汝の事か、今何故に來れると問ふ。商人こま／＼といひければ、

龍神すなはち海府録事を召して勘がへさせけるに、龍宮城の境内に左樣の國はこれなしといふ。商人重ねていふやう、長髮國は東海第三の迫戸第七の嶋にあたれりと。龍神又勘辨せさするに、暫く有て録事すなはち本帳を考へて曰、其嶋は蝦魚の住所也。龍宮大王の此月の食料に當てゝ昨日召捕たりと申す。龍神笑ひて曰、司風の長はまことに人間ながら、蝦のために魅されたり。我は海中の王なりといへ共、食する所の魚鳥生類、皆天帝より布さづけられて、日毎に其數あり。たとひ人といふとも天帝の定め給ふ數の外に、奢りて生類を食する時は、必ず天の責を受けて禍ひあり。況や我等數の外に、漫りに食する事かなはず。さりながら今はるばるこゝに來れる人の心を破るべからず。數の定めを耗して參らせむとて、内に入て司膳掌に仰せて、商人をつれて料理臺盤所を見せしむるに、麞の胎ごもり、熊の掌、猿のこどり、兎の水鏡、五種の削物、七種の菓、飫則花形かざり立て、鳳髓、獅子膏、青肪、白蜜、其外海陸のうちあらゆる珍味、心も言葉も及ばれず。黄金の釜、白銀の鍋、あかゞねの鼎を並べ、傍なる籃の中に蝦五六頭あ

り。大さ三尺あまり、色はさながら濃紫にして鬚甚だ長し。此商人を見て涙を流す事雨の如く、頻りに踊躍りて、其ありさま助け給へと云はぬばかり也。司膳の司のいふやう、是こそ蝦の中の王なれと。商人きゝて不覺の涙を落す。龍神かさねて使を立、蝦の王を赦し放ち、商人をば送りて日本に歸らしむ。其夜の曙に能登の國鈴の御崎に付たり。岸にあがりてうしろを顧れば、送りける使は大龍となり、波を分て海底に隱れ、商人は本國に歸りて、筆に記して人に語り傳へしと也。

○邪神を責殺

常州笠間郡の野中に小社あり。後は筑波山の嶺しげりて日影くらく、前には澤水底深くして藻はびこれり。常に雲覆ひ小雨ふりて凄まじければ、人皆此神の靈はなはだ猛しとて恐れ仕へて、此社の前を通る者は散米御供神酒なんどを、此村里にして求め携へて、神前に供へて打通る。若しさもなければ忽に雨風荒く、雲霧おほひて神則ち祟りをなす。明德年中に濃州谷汲寺の僧、性海とて學行を勤るに心ざし深く、兼ては

北陸を修行し、相模の國足利の學校に行ばやと思ひ立て、寺を出つゝ越路に赴き、已に常州の地に至り此社の前に休む。本より諸國行脚の僧なれば、袋に一物の貯へもなし。只禮拜誦經して法施奉り、十町ばかり過行ける所に道に踏迷ひ、かなたこなたせし間に俄に大風吹起り、砂を揚げ石を飛ばし黒雲覆ひ霧立こめ、うしろより物の追かくる心地しければ、怖ろしく覺えて見かへりけるに、異類異形の者二百ばかり頻りに追掛くる。此僧、扨はばけ物のため、只今死すべし。力及ばぬ事と思ひ一心に觀音普門品を誦し、足に任せて走り迯げゝれば、風止み雲收まり空晴て、追かけし者も見えず。辛うじて鹿嶋明神の社へかゝぐり付たり。神前に跪き、般若心經七返普門品三遍を誦して神に祈るやう、先の社に法施奉りしをば受ずして、却て怨をなさんとせしは邪神の社か、如何なる子細なるべき。又是我身に誤りありて神の咎め給ふや。願くは明神此事を示し給へと念願して、日暮て身も勞れければ傍に臥たり。その夜の夢に神殿の內陣ひらけ、錦の斗帳をあげ玉の簾を中捲きて、內に明神坐し給ふ。左右には末社の神、位に隨ひ

てその所々に坐す。大灯明内外に輝きて白晝の如し。性海恐れて庭に下り、頭を地に付て禮拜す。俄に一人朱き裝束して烏帽子引こみ、きざはしに出て曰、汝神前に法施奉る。神威高く神慮快く受け給ふ處也。然るに汝今神前に訴へ奉る處、速く裁斷あるべしとて内に入たり。暫らくありて數十人空を翔りて行くと見えし。白髮の翁一人を召して來る。黒き帽子被り青き袴着たるを、庭の面に引すゑたり。奥より仰ありけるやう、汝も一方の神なり。何ぞ國家人民を守護せざる。剰へ敬ひをなす道ゆき人をなやまし、みだりに禍を現はし、然も此道人法施を以て神に回向す。是又何の供物といふともすぐる物あらんや。却て迫おびやかしころさんとす惡行のくはだて甚だ法に過たり。其科のがるべからずとあり。官人出て斷誡しむるに、老翁かうべを地に付けて言上しけるやう、それがし實に野社の神なりと雖も、大蟒蛇の爲に押領せられ、久しく社壇を奪はれ、わづかに傍なる樹の根をすみかとす。我力いたりて弱くかの大蛇を制する事かなはず。世を護り人を護るべき職を忘れ、只我身の置所だになし。されば此年ごろ雲を起し

雨を降らし、霧蔽ひ風荒く災をなして、人の供物を求むる事は皆此大蛇のしわざ也。某のとがにあらずといふ。官人責めて曰、さやうの事あらば何ぞ速く此所に訴訟せざるやと。翁答へていふ、此大蛇世にある事年久し。或時は妖て形を現はし、人を悩まし、或時は居ながら災をなす。其通力自在なる事いふばかりなし。山中に棲む鬼神野邊に留まる惡靈、みな是に力を合せ、毒蛇魍魅みな是に隨ふ。某こゝに参りて訴へせむとすれば捕へて押し入れ、更にすみかの外に頭をも出させず。只今めしければこそ是までは参り侍べれと。其時神殿より勅有、官人はやくかしこに至りて、其大蛇を召捕て來れと也。翁申すやう、妖怪通力已に備り、是に力を合する者多し。官人赴くとも物の數とすべからず。たゞ神兵大軍を差向けられ、攻伏せ給はずしては、たやすく從ひ奉べからずといふ。さらばとて大將の神に軍兵五千を差そへて、野社に向けられたり。三時ばかりの後數十の軍鬼ども、大木を以て白蛇の首を舁て庭に來る。その大さ五石ばかりを入る〻甕の如し。兩の角尖りて二つの耳は箕の如し。鬟亂れて糸の如く、口はうしろま

で裂て、怒れる眼は鏡の面に朱を指したるに似て、ふさがずして死したり。官人すなはち性海に向ひ、忝くも當社明神は當國第一の神司として、汝の訴よく裁許し給へり。とく〳〵とて座を立しむ。性海禮拜して座を立と覺えて夢さめたり。身の毛よだち汗水になり、奇特の事に思へり。夜明けてまた彼道に赴きて其所を見れば、社も鳥井も燒倒れて塵灰となり、あたりの木草皆碎け折れて荒れ果たり。あたり近き村に立寄りて問に、村人皆いふやう、今宵夜半ばかりに雷電おびたゞしく、風ふき迷ひ雨落ちて、其中に軍さする聲きこゆ。怖ろしさ限りなし。黒雲の內に火もえ出て、やしろ鳥井一同に燒崩れちり灰となり、一つの白き大虵其長廿丈ばかりなる、死してかうべなし。其外五丈三丈の虵共、數を知らず重り死して、臭き事限りなしといふ。是を考ふれば今宵夜半に、夢に見たる時分なり。性海それより相州足利に行て物語せしとぞ。

○哥を媒として契る

永谷兵部少輔といふ人あり 一條戻橋

のほとりに居住す。年廿一歳極めて美男のほまれあり。色好みの名を取り、才智人に超え常に學文を嗜み、三條坊門の南萬里小路の東に、北畠昌雪法印とかや儒學に長せし人の許に行通うて、學業を勸め講筵につらなる。神祇官のわたりに富裕の家あり。其かみは山名が一族なりしに、武門を出て都に居を古め、名を隱して密かに身を修め、すべて大名高家に通路を致さず。娘たゞ一人持たり。牧子と名づく。年十六七ばかり、顔かたち世にたぐひなく、繪書き花結びたちぬふことに手きゝて、しかもよろしからねども哥の道に心を懸け、情の色深く、花にめで月にあくがれ、紅葉の秋、雪の夕、折にふれ事によそへて、哥よみ嘯きて心を痛ましむ。ある時兵部書を懐ろにして、萬里小路にまうでける。道のついで牧子が家のつい地のもとに休みて、少しくづれたる所より内を覗きければ、時しも春のころ、柳の糸枝たれて櫻の花綻び、ひわ、こがら、爭ひ囀づり、其の傍に座敷しつらひ、簾掛けたるを半まきあげ、ひとりの女はし近く居て小袖縫ひけるが、針をとゞめ打傾きて、

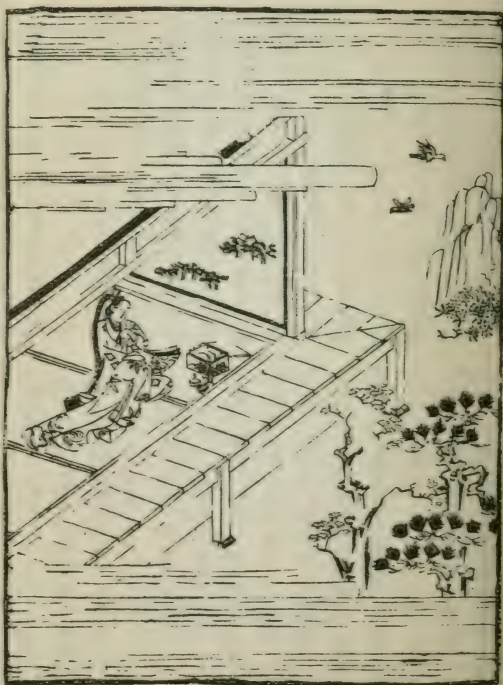
ほころびてさく花ちらば青柳の

糸よりかけてつなぎとゞめよ

兵部其妾を見て此哥をきくに、限りなくめで惑ひ、心も空になり足元たどたどしく、思ひの色深く染みて堪かねたるあまり、暫し立休らひて覗き居たりければ、牧子は是をも知らず庭に下りたちて、つい地のもとにめぐり來て兵部と目を見合せしかば、又なくあてやかなる美男なり。牧子是を見るに心移りて、此人にあらずは誰にか枕を並びの岡、時雨に染る紅葉ばの、色に出つゝかくぞ云ける。

我門のそともにさける卯の花を
かざしのために折るよしもがな

兵部いよ〳〵堪かね、聞書のためもちたる矢立取出し、哥二首を雜紙に書つけ、小石につなぎ添へて投入れ侍べり。

いのちさへ身の終にやなりぬらむ
けふくらすべき心地こそせね

入そむる戀路はすゑやとほからむ
かねてくるしき我こゝろかな

牧子これを取あげ、二返し三返し讀みて、いつしか心あこがれ、短冊取出し哥を書き、石につなぎて投出し侍べり。

あぢきなし誰もはかなき命もて
たのめばけふの暮をたのめよ

兵部これを取て家に歸り、其夕ぐれを

待けるぞ久しけれ。夜にいりてかの方に赴き、つい地をめぐりて見れば、櫻の枝一つつい地より外にさし出て、花田の打帶一筋、繩のやうなるを懸け置きたり。兵部心得てこれを手ぐり、築地を越えて下り立ければ、春の物とやおぼろの月、東の山の端に出て、花かげ庭にうつり、そら薫の匂ひにあはせていとどしめやかなり。是はそも人間世の外、三の嶋、十の洲に來にけるかと怪しみながら、忍ぶ夜の習、身の毛よだちて凄まじくも覺ゆ。女は宵より木のもとに待侘び、兵部を見て、

うつゝともおもひ定めぬあふ事を
夢にまがへて人にかたるな

兵部とりあへず、

また後の契りはしらず新まくら
たゞ今宵こそかぎりなるらめ

といひければ、牧子打恨みて、君と契り初め侍べらんには、千歳ののち、こん世も同じ契り絶まじとこそ思ひ侍べれ。如何にかく頼みなくはおぼす。みづから命かけて、心を餘所に移すことは夢あるまじきを、親のいさめてみづからを責め給ふとも、君ゆゑ死なば恨みはあらじ。

たのまずばしかまのかちの色を見よ
あひそめてこそふかくなるなれ

と俊成卿の詠み給ひけん哥の心を思ひ給へといふ。宮仕への女わらはに仰せて、酒取よせて兵部にすゝめたり。已に夜更け人靜まりて物音も聞えず。兵部密かに、こゝの家は誰人にておはすると問ふ。女物語しけるは、二人の親は山名の支族にて侍べり。久しく武門を離れて財寶ゆたか也。一族の中大名多く侍べれ共、交りちなむ事もなし。只身を修め名を隱して世を打過し給ふ。みづからたゞ一人娘にて又兄弟なし。甚だいとほしみ深く、別にこの花園をこしらへ部屋をしつらひ、春の花秋の月に心を慰め給ふ。親のおはする所は、少し隔りて侍べりなどいふに、兵部少し心安やかに覺ゆ。

世にもれむ後の浮名を歎くこそ
逢夜も絶えぬおもひなりけれ

女返し、

ながれては人のためうき名取川
よしや我身はしづみはつとも

かやうに語らひつゝ、かたしく袖の新枕、交すほどだに有明の、つきぬ言の葉とり〲に、はや告げ渡る鐘の聲、うちしきる鳥の音に、起き別れゆく露涙、雲となり雨となる、陽臺のもとぞ思はるゝ。兵部、

ちぎりおくのちを待べき命かは
つらき限りの今朝のわかれ路

女返し、

くらべては我身の方や勝るべき
おなじわかれの袖のなみだは

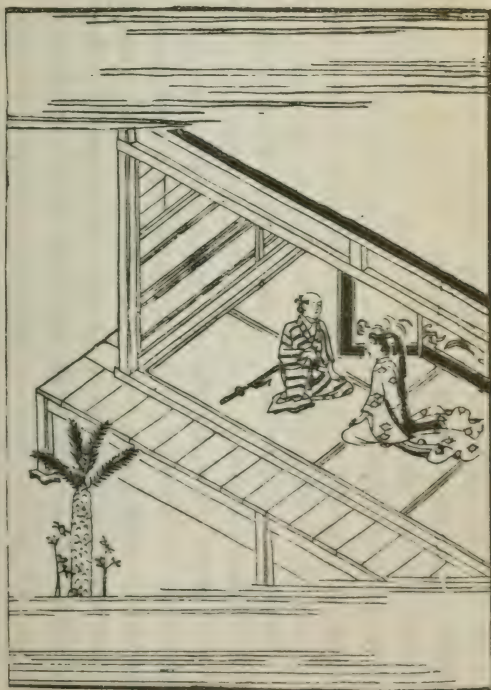
兵部は櫻の枝を傳うて、朝まだきに家路に歸りても、心そゞろに學道も身にしまず、暮るをおそしと出て夜毎に通ふ。或日兵部が父問けるやう、汝は學文に物憂き心の付き侍べるかや。朝に家を出て暮に歸り來る事は、是學問を勸めて其道を行はむ爲なり。然るを汝此頃は、日暮になれば家を出て、曉方に立歸る。是何事ぞや。必ず輕薄濫行のたぐひを求めて、人の壁をこぼち墻を踰して、正なき擧動するかと覺ゆ。その事顯れ侍べらば、身は生ながら泥淤に沈み、名はそれながら塵芥に汚され、世になし者となり果つべし。若又語らふ女、定めて高家の娘ならば、必ず汝が爲に門戸を汚され、其身淺間しくすたれ給はんのみならず、罪科は定めて我門族に及ばむ。其事極めて大事也。今日よりして門より外に出べからずとて、一間の所に押籠めて、殊の外に戒めたり。女はゆふべ／＼花苑に出て待けれ共、廿日餘り更に音づれなし。女思ふやう、飛鳥川の淵瀬さだめず、變り易きは人の心なれば、又ゆきかよふかた有て、我をば思ひ捨たるにや。又は病に臥して、いたはりつゝ侍べるやらむと、童を遣はして密かに聞せしかば、かう／＼押籠められ侍へりて、出入ともからもこととひかはす事かなはずといふ。女聞て歎きに沈み、重き病になりつゝ、思ひの床に起き臥し、湯水をだに聞入れず、時々は思ひ亂れし言葉の末、物狂はしきこともあり。肌へかじけ色衰へて物悲しく、只涙をのみ流す。さま／＼藥を求め神佛に祈れども、露ばかりもしるしなし。今はこの世の頼みもなく見えしかば、ふたりの姉妹ども、思ふ事ありけるやと問へども、定かに答へもせず。箱の底に兵部が哥ありけるを見出して大に驚き、童を近づけて問ければ、有のまゝに語る。親きゝて、たとひ如何なる人にもあれかし、いとほしき娘の思懸けたらむには、何か苦しかるべきとて、やがてなかだちを以てかう／＼と云はせければ、兵部が父のいふやうは、我子已に器用あり。學を勸めて官につかへ、親の跡をつがすべき者也。妻求めて身をくづをらすべきや。其事は未だ遲からずといふ。牧子が親重ねて云遣はすやう、日比に聞及ぶ、兵部少輔は今わづかに潜み隱るゝ共、終にこれ池にあるべきたぐひならず。されば我一人娘に縁を結ばれんには、我が家又誰か其跡を望まん。殘りなく讓りて兵

部を子とせむとて、はや吉日を選びて兵部を呼て聟とす。娘心地を取立ちて惱み巳に怠りぬ。兵部、

命あれば又も逢瀬にめぐりきて
　ふたゝびかはす君が手まくら

女限りなく嬉しくて、

初月(みかづき)のわれて見し夜の面かげを
　有明までになりにけるかな

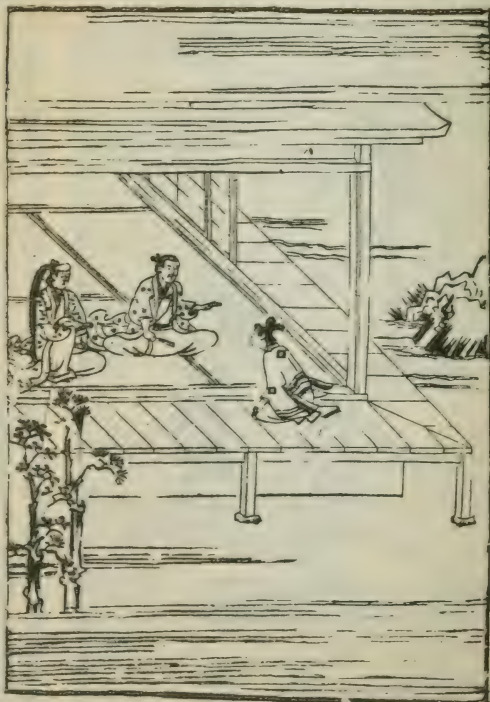
かくて比翼のかたらひ、今は忍ぶる關守の假もなかりし所に、細川山名の兩家權を爭ひて、應仁の兵亂起り、京都の大家小家皆燒亡び、諸國の武士都に集り、亂妨捕物狼藉いふばかりなし。女をば藥師寺の與一が手に捕物にして、その顔かたちの美くしきを以て、犯し汚さんとす。牧子大に呼ばゝりけるは、みづから死すとも、田舍人(ゐなかうど)の穢き者にはなびくまじ、たゞ殺せよといふに、軍兵等怒りて女をば刺し殺しぬ。兵部は兎角して逃(のが)れ隱れ、其年の冬暫く京都靜まりければ、都に歸り來れば家はやけて跡なし。妻が家に行て見れば人もなし。父は山名が手に屬して討死し、母は盜賊にはがれて殺さる。兵部たゞ一人牧子が部屋にたゝずみ、涙にくれて居たりしに、その夜夢の如く牧子歸り來る。是は如何にとて手を取組み涙を

流す。女いふやう、みづから君と別れちり〴〵になり、武士の手にかゝりあへなく殺され、尸を道のほとりに曝し、憐れと見る人もなし。みづから貞節の義に死せし事を、天帝憐み給ひ、君が心ざしに引れて、今現れ參りたりといふに、兵部悲しき中に、なき人に逢事の嬉しさを取加へて、涙は雨の降るが如し。夜もすがら語らふ。曉方になりければ、兵部なく〳〵、

思はずよまためぐりあふ月かげに
　かはるちぎりをなげくべしとは

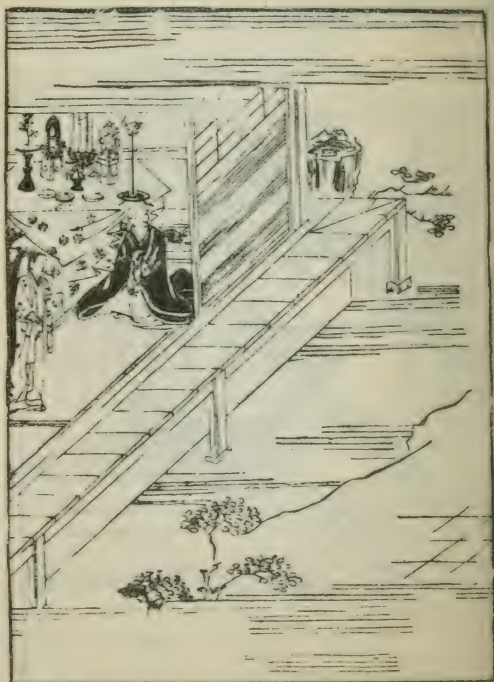
女返しとおぼしくて、

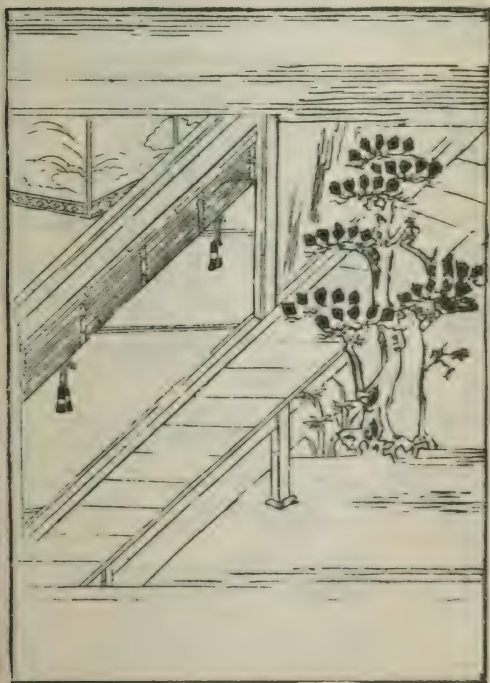
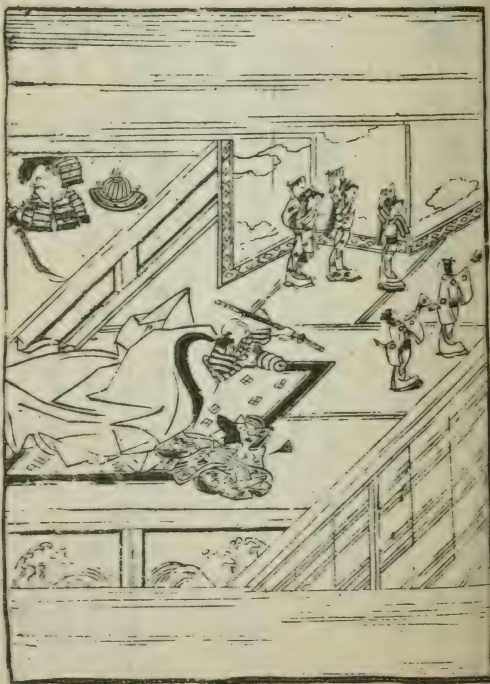
行末をちぎりしよりぞ恨みまし
　かゝるべしともかねて知りせば

そゞろに泣焦れて別をとり、影の如くになりてうせにけり。兵部は是より發心して東山の寺に籠り、幾程なく病に取結びて終にはかなくなりぬ。人みな聞傳へて、憐れにも奇特の事に思へり。

隅屋藤九郎は楠が一族として、畠山右衛門佐義就が手に屬し、嶽山の合戰に比類なき手がらを顯はし、終に打死して名を殘しけり。其子藤四郎同じく義

○幽靈出て僧にまみゆ

執に屬して、應仁元年御靈の馬場の軍に、畠山左衛門督政長が陣中より放ちける矢に中りて討れたり。父子二代已に義就に忠を盡しければ、其よしみ深く、河内國門間の庄を、藤四郎が舍弟藤次、生年五歳になりけるに知行させさせ、父藤九郎が妻と同じくすみ侍べり。其比諸國順禮のひじり、只一人此のわたりに來り、日已に暮ければ、宿借るべき村里を求めて、門間の邊近き田の畔に立やすらふ處に、笛の音かすかに聞え、漸々に近付を見れば、年の程十四五と見ゆる少年、いふばかりなく美くしきか、髮からわに上げ、薄化粧に鐵漿黑く色白く、眉細く作りたるが、白き淨衣に袴着て、只一人畔を傳うて來りつゝ、ひじりを見ていふやう、和僧は何故にこゝには佇み給ふと問に、ひじりは、是は諸國順禮の修行者にて侍べる。道に行暮て宿を求んため佇み侍べるといふ。少年すこし打笑ひて、世の中靜ならず、如何でか容易く宿かす人あるべき。たとひ出家也といへ共、若は敵の謀事かと、互に疑ひを致す時節也。あしく立めぐりて人に咎められ、あえなき命を失ひ給ふな。今は早や夜も更がた也。某が部屋に來りて一夜を明し給

へとて、聖と打連れて一つの家に行至り、表の門は番の者も臥ぬらん、こなたへ入らせ給へとて、裏の小門より密に内に入て見るに、こゝぞそれがしの常にすむ所とて、一間の部屋に入たり。内には持佛堂ありて阿彌陀の三尊を立て、前なる机には淨土の三部經あり。十二行の供物燈明かすかに花香を供へ、位牌の前には靈供そなへて、いと尊き有さま也　聖なにとなく殊勝に覺えて、暫く經讀み念佛す。少年のいふやう、まだ宵の事ならば御内の者に仰せて、非時の料よくしたゝめて參らすべきに、夜更け人靜まりてすべき樣なし。旅の勞れを休め、飢をたすくる御爲に、此靈供を參らせむといふ。聖は何か苦しかるべきとて、靈供の飯を二つに分て、少年と聖と食ひ侍べり。ひじり問ひけるは、こゝは如何なる人の御家ぞ、和君は御名を何とかいふと尋ねしに、少年答へけるは、それがしの父は隅屋藤九郎とて、武勇の譽れありしが、去ぬる嶽山の軍に討死せり。それがし兄弟二人其

跡を繼ぐといへ共、弟にて侍べるものは未だ幼少也。それがしだに年にも足らねば、唯まづ母に育てられて月日を送る事にて、名をば藤四郎と云ひ侍べ

り。今宵尊きひじりに宿かし參らするも、他生の縁淺からぬ故なれば、それがしたとひ空しくなるとも、後世をとうて給たまへとて、そゞろに涙を流しければ、ひじり聞て、如何にかくは仰せありける。君は誠に莟む花のまだ咲出ぬころほひ、さしも末久しく榮え給はん老さきある御身ぞかし。ひじりは年傾きたる者なれば、しらずけふもや、浮世の限りなるべきといへば、少年は、いやとよ、武士の家に生れて、名を惜み功を顯さむとするには、命は草の露、夕を待たでも消やすく、頼みがたく侍べればかく申すぞ。そこに持ち給へる過去帳に、それがしの名を書のせ給へとて硯を出す。聖は、あら心得ずや、年にもたり給はねば、何のわかちもなくかやうに望み給ふか。過去帳には死去たる人の名をこそ記せ、さらば御望みを背くも無下なり。逆修に書のせて武運の長久を祈り奉らんと云ければ、兒うち笑ひて、それは兎も角も御心に任させたまへといふ程に、此兒まなこざし俄に變り、苦しげに息つき出し、何ぞ只今ぞや心得たりしとて、傍にたてかけたる太刀おつとり、障子を開き立出るとぞみえし、跡もなくうせにけり。ひ

じりはきもをけし、立出て見れどかげもなく物音も聞えず。不思義の事に思ひながら、暮て歸るべき道も知らず、持佛堂の前に坐して夜を明かす。已に明方になりければ、藤九郎が後家其外家にありける一族、皆起出て持佛堂に參りて見れば、色黒く瘦かれたる法師一人佛前にあり。こはそも如何なる古盜人の忍び入たる歟、古狸の化けて居たる歟、からめ捕て子細を問へとひしめきたり。ひじりは少しも懼るゝ色なく、まづ靜まりて子細を聞給へとて、初め終りの事ども語りければ、さては藤四郎殿の亡魂あらはれ出給けむと、今宵位牌の前なる靈供を二つに分て、半は ひじりに參らせ半は我が食けるに、ひじりの食せしは皆になりつゝ、半はさながら位牌の前に殘りてあり。母は餘りの悲しさに位牌の前にひれ伏し、聲を限りに泣き叫び、さても去ぬる正月十九日、京都御靈の馬場にして、流矢にあたりて打れしが、今日已に百ケ日に及べり。此世に殘りて憂き物思する、みづからにはなどや見えこざるとて引かづきて歎きしが、あまりの事に堪かね、聖を憑みて髮を剃り、尼になりつつ、菩提を深く吊ひけると也。

（ ）屏風の繪の人形躍歌

細川右京大夫政元は、源の義高公を取立、征夷將軍に拜任せしめ奉り、みづから權を執り其威を逞くす。或日大に酒に醉て、家に歸り臥したりしに、物音をかしげに聞えて睡りを覺まし、かしらを擡げて見れは、枕本に立たる屏風に古き繪あり。誰人の筆とも知れず、美しき女房少年多く遊ぶ所を、極彩色にしたる也。其女房も少年も屏風を離れて立並び、身の丈五寸ばかりなるが、足を踏み手を拍ちて哥うたひ、おもしろく躍りをいたす。政元つく〴〵其哥を聞けば、さゝやかなる聲にて、

世の中に、恨みは殘る有明の、月にむら雲春の暮、花に嵐は物うきに、あらひばしすな玉水に、うつる影さへ消えて行、

とくり返し〳〵哥うて躍りけるを、政元聲高く叱りて、曲者共の所爲かなと云はれて、はら〳〵と屏風に登りて元の繪となれり。怪しきこと限りなし。陰陽師康方をよびてうらなはせければ、屏風の繪にある女の風流のをどりに、花に風と哥ふ。總べて風の字愼みあり、かた〳〵以て重き愼みなりといふ。永正四年六月の事也。其次の日政元、精進潔齋して愛宕山に參籠し、偏へに武運の長久を、勝軍地藏にいのり申されたり。廿三日の下向道に乘たる馬、已に坂口にして斃れたり。明れば廿四日我家に於て風呂に入けるに、その家人右筆せし者敵に內通して、俄に突入つゝ政元を刺殺したり。康方が風の字つゝしみありと云ひしが、果して風呂に入りて殺されしも、兆のとるところ其故あるにや。

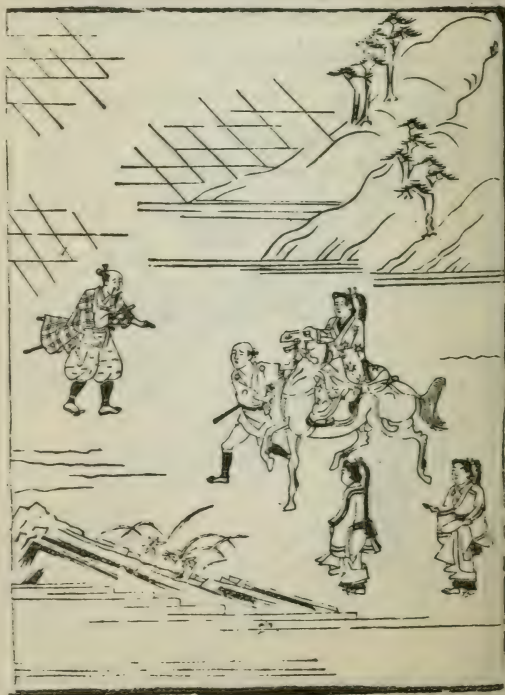
伽婢子卷之八終

伽婢子巻之九

○狐偽て人に契る

安達喜平次は江州坂本にすみけり。たまく公方に參候して歸る。僕二人に馬の口取らせ、中間二人を召しつれ、白河より山中越にさしかゝる。日已に暮れ方になる。道より南のかた神樂岡の西にして、年の比十七八と見ゆる女性顔かたち美くしきが、櫻花に小鳥のいろく縫たる紅梅裏の小袖のすそかいとり、草むらをあなたこなたして荊の上を打越え、道に踏み迷ひたるが如し。安達これを見て、如何なる高家の娘なるらんと怪しみつゝ、近く歩ませ寄りたれば、此女性袖を以て顔をおほひ、足元は石に蹉きしばくころびまろばんとす。安達人を遣はして、是は如何なる御方なれば、此日の暮方めしつるゝ者もなく、かゝる所に立めぐり給ふといはせけれ共物云はず。又重ねて人を遣はし我が乘たる馬を引せ、道行なずみ給ふも見奉るに痛はしくこそ覺え侍べれ。此馬に召されて、いづく迄も御すみかに歸り給へ、送りて奉らむと云はせければ、女性嬉しげに顧みて馬にのる。安達抱きのせしに、その輕き事うすものゝ如し。近く見れば世にたぐひなく、光り出るばかり麗はしきが、まみ氣高くかたちたをやかに、袖の薫りの香ばしさ、なにはにつけてもなべてならず。白玉か何ぞとあやしまれ、此人の爲ならば露と消ゆるとも、恨はあらじとぞ覺えける。安達は馬の尻に付き靜かに歩ませ、もとの道を京の方に歸りしに、一町ばかりにして、忽ちに女の童五六人田中のかたより走り出て、あな淺まし、此暮かたとりうしなひ參らせしかときもつぶれ胸とゞろき、かなたこなた尋ね參らせしぞやとて、馬に添うて南をさしてゆく事二町ばかりにして、年ごろ六十ばかりの男、息もつきあへず、先より尋ね奉りし、まづ御心安く侍べり。扨此御馬かし給ふは思ひ寄らざる御情かなといふ。安達いふやう、此御方道に踏迷ひ給ふ故に、御いたはしく思ひ奉り、某乘りたる馬奉り、是迄送り參らせたり。是より又坂本に下り侍べる也と云へば、

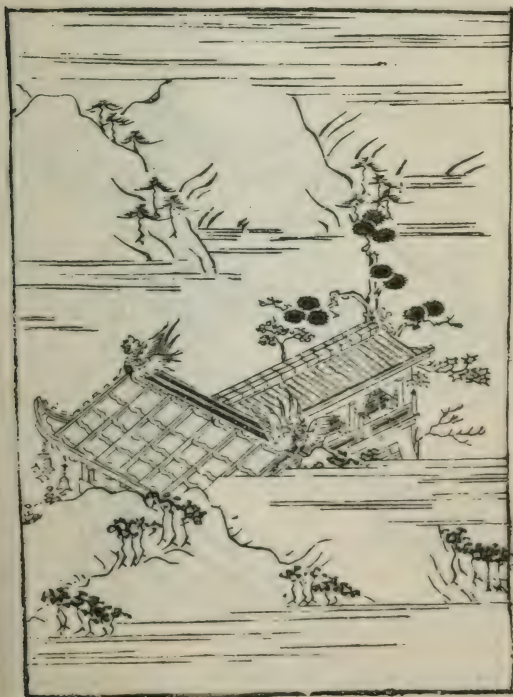
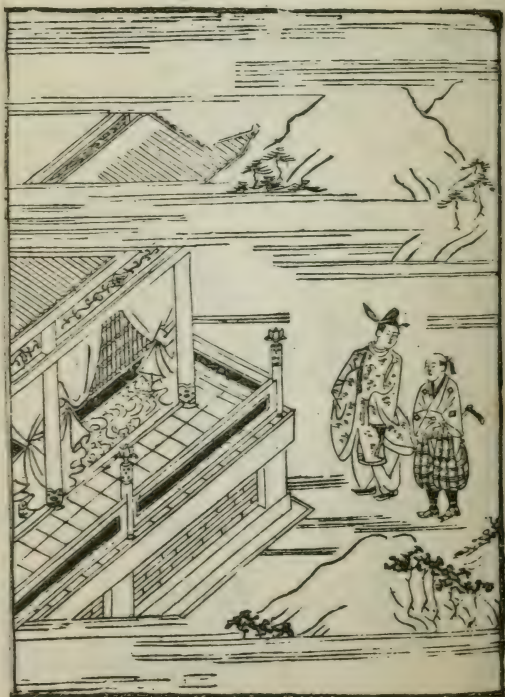
かの男いふやう、姫君今日は田中といふ所に遊び給ふを、座中酒もり久しくて、輿に乗じて獨り立いで道に迷ひ給へり。はや日も暮たり。坂本までは中中にかへりつき給はじ。よき便りなればこなたに入て一夜を明し給へといふ。安達それは誠に御芳志たるべしとて、南のかた三町ばかり行ければ、茂りたる一構あり。其内には家居つぎ／＼しく奇麗に立て、梅櫻桃李の花咲つゞき、藤の棚山吹の垣、池にはあやめかきつばたもえ出て、庭のおもて泉水のかゝり、世にある人の住かと見えたり。襖障子幾間も立切たる書院廊下を傳うて小座敷に行至る。その奥には、唐の日本の花鳥つくして書きたる繪の間あり。安達すでに玄舘より上りければ、あるじの女房其年四十ばかり、世にけだかく見ゆ。召使ふ女のわらは七八人を隨へ立出て、思ひも寄らずまれ人の客を受侍べり。姫たま／＼出て遊びし侍べり、酒に酔たる事を痛み座を逃げて道に迷ひ、君に行逢奉らずば、若は狼きつねのたぶろかし、若は盗人に脅かされなん。よくこそ送りてたびたまへ。それ如何にももてなし奉れとて、親しくもてかしづく。しばしありて酒肴取

したゝめて出す。あるじの女房盃を取り安達にまゐらせ、とても今宵は遊びあかして浮世の思出とせむ。姫が姨も是におはす、出て酒すゝめたまへといふに、廿四五ばかりの女房はなやかに出立て、打笑ひ立出しを見るに又世に稀なる美人也。安達、是はそも仙境に來れるか、天上にのぼれるか、如何なる雲の上といふとも今宵に勝る時はあらじと、嬉しくもふしぎ也。酒已に酣ほにして安達は數盃を傾けたり。主の女房いふやう、姨と双六うち賭定めて遊び給へとて、黒檀に紫檀、檳榔まじへちりばめたる盤のめぐりには、源氏の繪書き、水牛象牙黒白の石、蒔繪の筒に賽とり添へて出したり。安達と姨とさし向うて打けるに、賽の目を爭ひ、時々姨の手をとらへ、無理をいふも心ありや。遊仙窟に張文潜と十郎娘が、双六うちてかけものせし事を書ける筆の跡もなつかしくて、安達勝ければ沈香五兩を出し與ふ。姨又勝ければ安達出すべき物なく、かうがいを拔きて出したり。已に夜明方になり、東の山のはしらみ明けて人の音なふ聲聞ゆるころ、家の内俄に驚きあはてふためき、盗人の入來るぞやといふに、主の女房、

安達をうしろの門より推出せば、姨もゆきかたなく立隠れたりと覺ゆるに、安達一人かたくづれなる山際の穴の内より這ひ出たり。茅亂れ菫咲きて松の風高く吹、谷の水遠く聞えたり、かけものに渡したる莽はなく、取りたる沈香はさしもなき木の片なり。初め女性の道を踏み迷ひしを、安達馬より下りて、後につきて行かと見えて影もなく失せにしかば、中間小者ばらたづねめぐり、只こゝもとにて見失ひぬとて、あまりに尋わびて、大なる穴のあるを見つけて、鋤鍬をかりよせ掘崩しけるを、盗人入來ると驚きける也。こゝはいづくぞと人に問へば、神樂岡のうしろ也といふ。狐のたぶろかしけるにこそ。

○下界の仙境

昔太田道灌、武州江戸の城を築きて居住せらる。此地に水乏しき事を苦しみけり。其比舟木甚七とて富裕の町人あり。掘抜の井戸を作らんとて金掘を雇ひ、人歩を入れて掘らするに、凡半町四方、深さ百丈ばかりに及べども水なし。金掘底に坐し休みつゝ、靜に聞けば、地の中に犬のほゆる聲、庭鳥のな

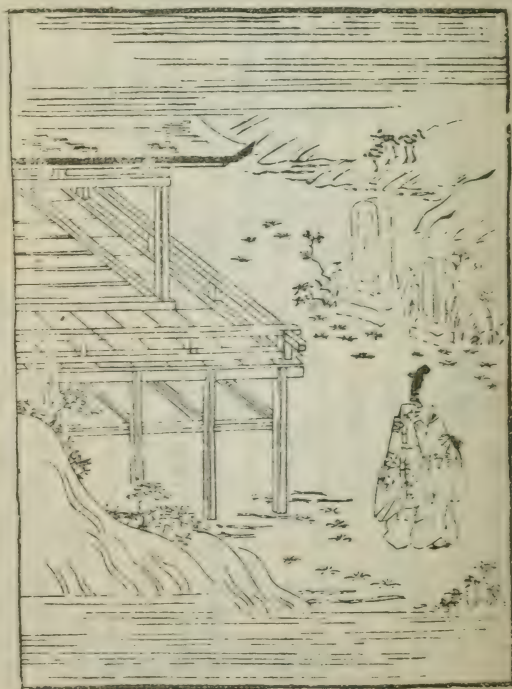
く音、かすかに響きて開ゆ。怪しく思ひて又四五尺掘りければ、傍に切通しの石の門あり。門の内に入て見れば兩方壁の如く、甚だくらくして見え分かず。猶道を認さぐりて一町ばかり行ければ、俄に明かになり、切とほしの奥の出口より空を見上ぐれば、青天白日輝き、下を見おろせば大なる山の峯に續きたり。金掘其峯におり立て、四方を見めぐらせば、別に天地日月明らけき一世界なり。其山に續きて谷に下り峯に登り、一里ばかりゆきて見れば、石の色は皆瑠璃の如く、山間には宮殿樓閣あり。玉を飾り金を鏤め、瑠璃の瓦瑪瑙の柱、心も言葉も及ばれず。大木多く生ならびて、木の形は竹の如く、色青くして節あり。葉は芭蕉に似て紫の花あり、大さ車の輪の如し。五色の蝶その翼大さ團扇の如くなるが、花に戯れ、又五色の鳥その大さ鳫の如く、梢に飛翔り、その外もろ／＼の草木、何れも見なれぬ花咲き實のり、岩のはざまより二道の瀧ながれ出る。一つの水は、色清き事磨立たる鏡の如く、一つの水は色白き事乳の如し。金掘やう／＼山を下り、麓より一町ばかりにして一つの樓門に至る。上に天柱山宮と云額を懸け

たり。門の兩脇に番の者二人あり。金掘を見て驚き出たり。身の長五尺餘り、容の美はしき事玉の如く、唇赤く齒白く、髮は紺青の絲の如し。みどりの色なる布衣、黒き烏帽子着たるが、走り出て咎めけるは、汝何者なればこゝに來れると。金堀ありの儘に語る。その間に門の內より、裝束きらびやかに容うつしく、艶やかなる事酸漿子のやうなる者二十人ばかり出て、けしからず臭く穢らはしき匂ひあり。如何なる事ぞとて番の者をせむるに、番の者恐れたる氣色にて、人間世界の金掘、思ひの外なる事によりて迷ひ來れりといふて、子細をつぶさに語る。其時奧より照輝ばかり緋き裝束に、金の冠を着たる人出ていふやう、大仙玉眞君の勅定には、其金掘をつれて遊覧せしめよとあり。先の廿人の輩うやまうてうけ給はり、番の者に仰付たり。まづ金掘をつれて、清き水の瀧に行きて身を洗はせ、色白き水の瀧に行て口を嗽がせたるに、其水甘き事蜜の如し。思ふさまに飲ければ、酒に醉たるが如くにして、暫くありて心すゞやかに覺ゆ。番の者引つれて山間をめぐるに、宮殿樓閣皆谷ごとに立つらなれり。只門外より見

いれて內に入事かなはず。斯て半日ばかりにして、山の麓に又一つの城に至る。樓門の上には黄金を以て、梯仙皇眞宮といふ額を懸けたり。水精輪の所成金銀の壁、瑇瑁の垣琥珀の欄干、白玉の鐺瑋璅の簾、眞珠の瓔珞、五色の玉を庭のいさごとし、いろ〳〵の草木名も知らぬ鳥、まことに奇麗嚴淨なることいふばかりなし。され共門の內には入られず。さこそ內には善つくし美つくして、言語たえたる事の有らんと思ひ、扨こゝは何處ぞと問ふ。番の者のいふやう、是皆もろ〳〵の仙人、初めて仙術を得ては、まづ此所に來りて七十萬日の間修行を勤め、其後天上にのぼり、或は蓬萊宮、或は藐姑射山、或は玉景崑閬なんどに行て、仙人の職にあづかり官位を進み、符籙印咒藥術を究め、飛行自在の通力を悟り侍べる

事也といふ。金掘問やう、已に是仙人の國ならば、人間世界の上にはなくて、下にあるは如何なる故ぞや。番の者答へけるは、こゝは下界仙人の國也。人間世界の上には、猶上界仙人の國ありとて見めぐらせ、汝早く人間世界に歸れとて、白き水の瀧につれて來り、又其水を飽くまで飲ませ、元の山の頂に

登りて、初めの大門の前にして、奥に奏し入ければ、玉の簡金の印を出されたり。是を取りて金掘を打つれ、もとの岩穴の口に出るに、門々皆開けたり。送りける番の者いふやう、汝こゝに來りては暫し半日の程と覺ゆるとも、人間にては數十年を經たりとて、元の穴に入ければ、又闇くして道も見えず、只風の音のみ聞えて、駿河の國富士の麓の洞より出て、大に驚き怪しみ、江戸に歸りて、太田道灌の事を尋ぬれば、それははや百年以前也。井を掘らせられし事は聞傳へたる人もなく、又其跡もなし。人改まり家立かはりて、本城は大に榮えたり。我家を尋るにいづくとも知れず、一族の末も聞えず。つらつら思ふに、長祿元年江戸の城始りて、今弘治二年丙辰まで一百年に及べり。金掘更に人間を願はず、五穀を斷ちて食せず、木の實をくらひ水を飲み、足に任せて修行す。數年の後富士の嶽にてある人行逢たり。後に其住所を知らず

○金閣寺の幽靈に契る

中原主水正は、美男の譽れありて色好

みの名をとり、生年廿六に及びて定まれる妻もなし。春の花に憧れては風を恨み、秋の月に嘯きては雲をかこち、官に仕へながら浮れありきて、心を物ごとに痛ましむ 大永乙酉彌生はかりに、思立て霞を分つゝ、北東の山路にさすらひ、暮ゆく春の名殘を慕ふ。北白川檜垣の森、櫻井の里氷室山、岩倉谷さつね坂、八塩岡比叡横川片岡の森、鬼が城大原音無の瀧、志津原朧清水市原野邊、暗部山を打めぐり鹿苑院に行至る 世に金閣寺と號す。征夷大將軍源義滿公、この地に家づくりして移り住み給ひしを、薨去の後直に寺となし給へり。庭の築山泉水の立石、まことに古今絶景の勝地として、たぐひなき所なり。中原こゝまで浮かれ來て、日已に暮て朧月東のかたに出れば、春宵の一刻其價を誰か千金とは限りぬらんと、

花に移ろふ月の光に、木の本も立去り難くぞ覺えし。里の家に宿は借りけれ共いも寢られず、砌をめぐり苔路を踏で金閣のもとに至りぬ。去ぬる應永十五年、義滿公の薨じ給ひしより既に百十八年、其かみさしもにぎ／＼しかりけるも、君おはしまさずなりけるより、すむ人もやう／＼稀になり、礎傾き

柱汚らて、僅に金閣のみ昔の色を殘したり。主水は軒に立寄り欄干によりかかりて、昔を思ひ今を感じて、ふけゆく月に打うそぶきづゝ、古木の櫻花少し咲たるを見やりて、

櫻花いざ言問はん春の夜の
月はむかしも朧なりきや

かゝる處にひとりの女、其齡十七八と見ゆるが、半者一人召具して閣のもとに來れり。桂の眉墨雲のびんづら、たをやかなる姿かたち、美しさ心も詞も及ばれず、いふばかりなくあてやかなるが、如何なる事ぞと忍びて見ければ、此女房いふやう、金閣ばかりは故の如くにして、庭のおもては風景變らず。但時移り世變りそゞろに昔の戀しきのみ、思ひつゞくるこそ悲しけれとて、泉水のほとりに休らひて、津守國基花山に行きて、僧正遍照が古跡のさくら散りけるを見て詠みける古哥を吟詠す。

あるじなき住かに殘る櫻ばな
あはれむかしの春や戀しき

主水正此吟聲を聞に、胸とゞろき魂きえて、心もそゞろに惑ひつゝ、うつゝなき中より、

さく花にむかしを思ふ君はたぞ
今宵は我ぞあるじなるもの

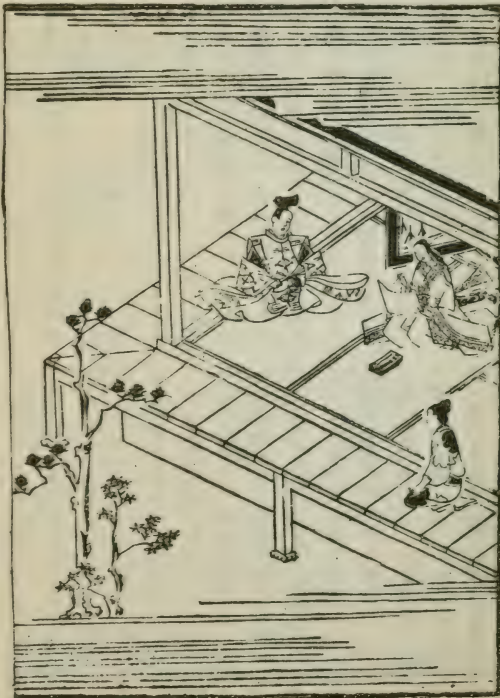
とよみて立向へば、女房更に驚く氣色なく、いとさゝやかなる聲にて、初より和君此所に在する事を知侍べりて、みづからこゝに來りて見え參らする也といふ。大にあやしみて其名を問へば、女答へていふやう、みづからは人間に捨られて已に年久し。此事を語り侍べらば、和君さだめて驚き怖れ給はんといふに、主水正此言葉を聞きて、扨は是人間にあらず。山近く木玉の現れしか、狐のなれる姿か、然らずば幽靈ならんと思ふに、形の美くしさに心解けて、露おそろしき事なし。如何でか驚き怖れ侍べらむ、只有の儘に語り給へといふ。女房いふやう、みづから畠山氏の家に生れ、いにしへ義滿公この所に引籠り給ひし時宮仕へせし者なり。年二十にしてむなしくなり、君の御憐み深くてこの院の傍に埋み給ふ。今宵は追福の御事によりて、從一位良子禪尼の御許に參りぬ。是は義滿公の御母にておはします。その座久しくて、今漸くこゝに出來り侍べりとて、半者に仰せて筵しとねを取敷かせ、酒菓をめし寄せ閣の庇に向ひ坐して、今夜の花に今夜の月、如何で空しく送り明さむとて、酒のみ語り遊ぶ。半者哥うたひ、盃の數重なれり。女房打かたぶきて、

明行かば戀しかるべき名殘かな

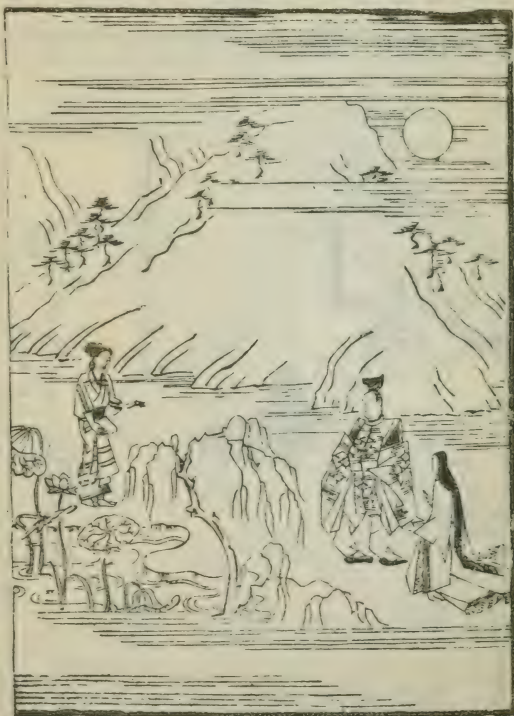
花のかげもるあたら夜の月

と詠みて打涙ぐみけるを、主水正心ありげに思ひて、

いづれをか花は嬉しと思ふらむ
さそふあらしとをしむ心と

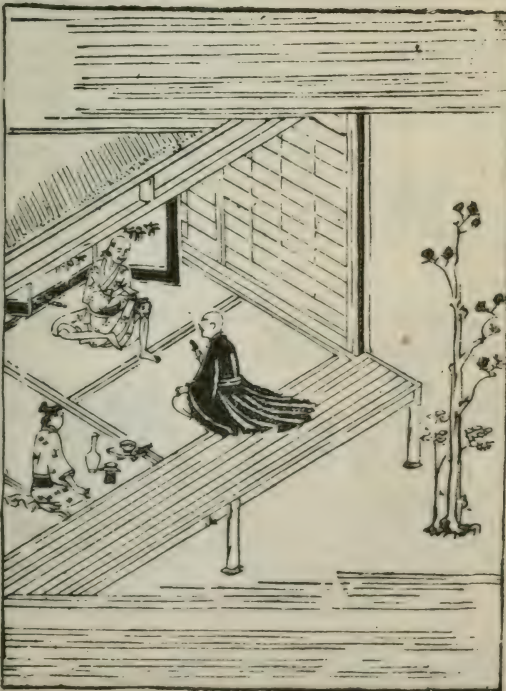
女房袖かきをさめて、君はみづからが心を引み給ふと覺ゆる哥ぞかし。世をさりて久しく埋もれし身の、又立返り君に契らば、死とても朽果てはせじと、睦まじく語らひける程に、月は西の嶺にかくれ、星は北の空に集まる頃、西の庇に移りて、女房わりなく思ふ色あらはれ、暫しもろ友に枕を傾けしに、春の夜の習ひ程なく時の移りて、鳥の聲三たび啼つゝ、花より白む横雲の嶺に棚びくころになれば、互に涙を拭ひて起き別れたり。晝になりてそこら見めぐらせば、院の傍に古たる卒都婆ありて、苔むしたる塚に朽殘り、塚の左に小さき塚並べり。是はしたもの其ころ悲しみて打積き焦れ死せしを、人々憐れがりて、同じ所の塚の主になしたると也。主水正憐れにも悲しくて、家に歸らん事を忘れ、又其夕暮に閣のほとりに立めぐれば、女房もあらはれ出て、手を取り組み涙を流して語るやう、みづから君が心の情を感じて、只其夜の契

をなし、かづらきの神かけて、晝を厭ふぞ心憂きなど云ひければ、男も何かをば厭ふとて、只うば玉の夜ならで、契をかはす道なしとや。よひ／＼ごとを待も苦しきに、誰を人目の關守になし、忍ぶ歎きをこりつむべきなど語らひ、是より夜毎にこゝに出逢ふ。廿日ばかりの後は晝も出て語り遊ぶ。主水も宮に仕ふる身なれば、都に歸りて日毎に行通ふ。終に或日雨少し降りけるに、晝行きて出あひ、女房を連れて京の家に歸りて、ひたすら常にすみ侍べり、其身持ようづ愼みて、物云ひ言葉のしな才智有り、主水が一族にまじはりを親しく、内外に召使ふ女童まで、恩を與へ惠みを厚くし、隣家の嫗までも隨ひいつくしみ、此女房に心をとけずと云ふ事なし。衣縫ふわざ物かきうとからず、かろ／＼しく他人にまみえず。まことに主水は淑女のよきたぐひを求めたりと、人皆羨みけり。かくて三とせの後七月十五日、女房いふやう、半者は、我住ける方の宿守せさせて殘しおきぬ。さこそ待わぶらめ、今日は金閣に行てこととひ侍べらんとて、酒とゝのへて主水女房打つれて行く。日巳に暮れて、月さやかにして東の山に出れば、池の蓮は南の池に開け、楓は枝垂れて露を含み、竹は風にそよぎけるに、半者出むかうていふやう、君巳に人間に返り遊ぶ事巳に三とせにして、たのしみを極めながら、御住かをば忘れ給ふかと、恨めしげに云ひければ、三人つれて閣の西の庇に行て、女房なく／＼主水に語るやう、君が情の深きに引れて、三とせの月日は、隙ゆく駒の影よりはやく打過て、猶飽くことなき契りの中らひ、今宵を限りに永く別れ參らせむ。みづから黄泉の者ながら、此世の人に馴るゝ事、宿世の緣淺からぬ故ぞかし。今は緣つき侍べれは別れをとり參らする也。若又是を悲しみて強ひてこゝに留りなば、冥府の咎めも如何ならん。君をさへ惱まし侍べらんも必ず遠かるまじとて、互に涙を流しつゝ袂も袖も絞りけり。巳に曉の八聲の鳥も打頻り、鐘の音響き渡りしかば女房立あがり、蒔畫の箱に香爐をいれて、これは此程の形見とも見給へとて、なく／＼別れて古塚の方に行く。猶あ名ごりを惜みて立戻り見かへりて、塚の如く消失せたり。主水胸焦れ身悶えて悲しき事限りなく、血の涙を流して慕へ共かなはず。家に歸りて僧を請じ、法華經よみて弔ひ、一紙の願文を書て供養を遂げ侍べり。其詞に、

維靈は、生れてよきたぐひ群にこ

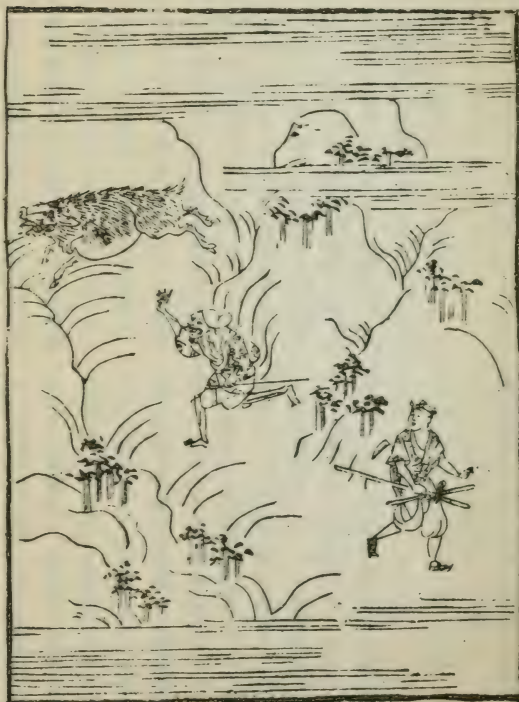
え、妍すがた仙に似り。花の鮮なる玉のうるはしき、みなこの靈の形にうつせり。往昔は金の扉に宮仕へ、如今は荒れたる墳に埋もれり。篠薄のもとに住み狐兎のゆゝに忍ぶ。花落ちて枝に返らず、水流れて源に來らず。日かげ傾き月めぐれ共、精靈は泯けず。性もの識ること長にいます。魂を返す術はなしに姿をあらはす功あり。玉のさし櫛くれなゐの襠は、色うるはしくにほひ殘れり。松の千歳常盤かはらず、喜びを同じく偕に老なんことを思ひしに、如何に逢て又別れたる。雲となり雨となりし朝なゆふなのうらみ歎くにその跡を失へり。しるしの墳に向へども、聲をだにまだ聞かず。後の逢瀬いつか繼ん。鵑の聲わづかに悲しみを助け、螢の光り只愁へを弔ふ。姿隱れなさけ絕て、むなしき空に霧ふさがり星くらし。心の底は糸のみだれ、涙の色くれなゐを染て、悲しみの中に經讀み花を手向く。靈よくうけ給へ。嗚呼悲しきかな痛ましき哉。こひねがはくはよくうけ給へ。

ともす火やたむくる水や香花を
魂のありかにうけて知れ君

主水正是より官職を辭退して、獨り淋しき床に起き臥し、只此人の面影のみ立離れず、歎きに沈み侍べりしが、二たび妻をも求めず、小原の奥に引籠り、終に其終る所をしらず。

○人面瘡

山城の國小椋といふ所の農人、久しく心地惱みけり。或時は惡寒發熱して瘧の如く、或時は遍身痛み疼きて通風の如く、さまざま療治すれ共しるしなく、半年ばかりの後に、左の股の上に瘡出來て、其形人の貌の如く、目口ありて鼻耳はなし。是より餘の惱みはなくなりて、只其瘡の痛む事いふばかりなし。まづ試に瘡の口に酒を入るれば、其まま瘡のおもて赤くなれり。餅飯を口に入るれば、人の食ふ如く口を動かし呑みをさむる。食をあたふれば、其間は痛とゞまりて心安く、食せさせざれば又はなはだ痛む。病人此故に痩せ勞れて、しゝむらいたみ、力落ちて骨と皮とになり、死すべき事近きにあり。諸方の醫師聞傳へ、集りて療治を加へ、本道外科皆その術を盡くせども驗なし。こゝに諸國行脚の道人此所に來りてい

ふやう、此瘡まことに世に稀なり。是をうれふる人は必ず死せずといふ事なし。され共一つの手だてを以ていゆる事あるべしといふ。農夫いふやう、此病だに愈えば、たとひ田地を沽却すとも何か惜かるべきとて、すなはち田地をば賣しろなし、其價を道人に渡す。道人もろ〳〵の藥種を買集め、金石土を初めて草木に至りて、一種づゝ瘡の口に入るれば、皆受けて是を呑みけり。貝母といふものをさしよせしに、その瘡すなはち眉をしゞめ口をふさぎて食はず。やがて貝母を粉にして瘡の口を押開き、葦の筒を以て吹入るゝに、一七日の内に其瘡すなはち痂づくりて愈たり。世にいふ人面瘡とは此事なり。

○人鬼

丹波の國野々口といふ所に、與次といふ者の祖母百六十餘歳になり、髮甚だ白かりければ、僧を賴みて尼になしけり。若き時より放逸無慚なる事ならびなし。與次已に八十あまりにして子共あまた有り。孫も多かりしを、かの祖母は與次を我が孫なりとて、常に心にかなはぬ事あれば、責いましむる事小

兒をおどし叱るが如くす。され共與次がたゐ祖母の事なれば、孝行に養ひけり。此うば年已に極りながら、目も明かにして針の孔をとほし、耳さやかにして私語事をも聞付け侍べり。年九十ばかりの時歯は皆ぬけ落ちたりしに、百歳の上になりて元の如く生出たり。世の人ふしぎの事に思ひ、いとけなき子持ては、此祖母にあやかれとて名をつけさせ、もてなしかしづき侍べり。晝の内は家に在りて麻をうみ紡ぎ、夜に入ぬれば行先知れず家を出る。初の程こそ有けれ、後には孫も子も怪しみて、出て行跡をしたへば、此祖母立歸り大に叱りどよみ、杖は突きながら、足はやく飛が如くに歩む。更に其ゆく所定かならず。身の肉は消え落ちて骨太くあらはれ、兩の目は白き所色變じて碧し。朝夕の食事は至りて少なけれ共、氣象は若き者も及ばれず。或時より晝も出て行くに、孫曾孫新婦なんどに向ひて、我が留守に部屋の戸開くな、必ず窓の内をさし覗くな。もし戸を開かば大に怨むべしといふに、家にある者共怪しみおもふ。又ある日晝出て、夜更くるまで歸らざりけるに、與次が末子酒に酔て、何條祖母の部屋の戸ひらくなと云はれしこそ怪しけれ。留主の紛れに見ばやと思ひ、密に戸を開けて見ければ、狗のかしら、庭鳥の羽、をさなき子の手首、又は人のしやれかうべ手足の骨、數も知らず簀の下に積重ねてあり。是を見て大に驚き、走出て父にかくと告げたり。一室に籠りていかゞすべきと評議する所へ、祖母立歸り、部屋の戸の開きたるを見て大に恨み怒り、兩眼まなく見開き輝き、口廣く聲わなゝき、走り出て行かたなく失にけり。恐ろしさいふばかりなし。後に大江山のあたりに薪こる者行あひたり。其さま地白のかたびらをつぼをり、杖をつきて山の頂に登る。其速き事飛がごとく、猪のじゝを捕へて押伏せたるを見て、おそろしく身の毛よだちて逃げかへりぬと語りし。かの姥なるべし。生ながら鬼になりける事疑なし。

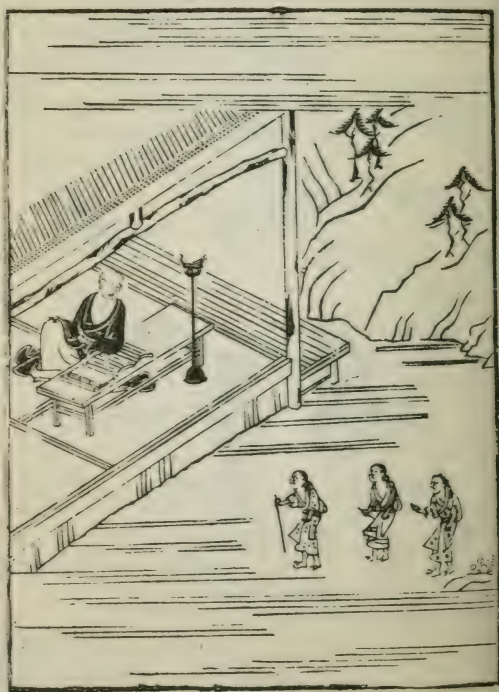
伽婢子巻之九終

伽婢子巻之十

○守宮の妖

越前の國湯尾といふ所のおくに、城郭の跡あり。荊棘のいばら生茂り、古松の根よこたはり、鳥の聲かすかに、谷の水音物すごきに、曹洞家褊衫の僧塵外首座とかや、この所に草庵を結びて、座禪學解の風儀を味ひ、春は萠え出る蕨をとりて飢をたすけ、秋は嵐に木の葉をまちて薪とす。近きあたりの村里より、檀越まうで來ては、その日を送る程の糧をつゝみて惠む事、折々はこれありと雖も、多くは人影もまれ〳〵也。されども書典を開きて向ふ時は、古人に對して語るが如く、座禪の床にのぼれば、空裡三昧に入て、おのづからさびしくもなし。ある夜ともし火をかゝげ机によりかゝり、傳灯錄を讀み居たりければ、身のたけ僅に四五寸ばかりなる人、黑き帽子をかぶり細き杖をつき、蚋のなくが如く小さき聲にて、我今ここに來れども、あるじなきやらん、物いふ人もなく、靜かに淋しきことかなといふに、塵首座もとより心法をさまりて、物のために動せざるが故に、これを見聞くにおどろき恐れず。かの化物怒りて、我今客人として來りたるを、無禮にして物だにいはぬ事こそやすからねとて、机の上に飛び上る。塵首座扇をとりて打ければ、下に落て、狼藉の所爲よく心得よとて、大に叫びつゝ門に出て跡かたなし。暫くありて女房五人出來れり。その中に若きもあり姥もあり。何れも身のたけ四五寸許也。姥がいふやう、わが君の仰せに、沙門たゞ一人、淋しきともし火の下に學行をつとめらる。早く行向うて物がたりをも致し、又佛法の深きことわりをも問答して慰めよとあり。此故に智辯兼備たる學士こゝに來りければ、何ぞあらけなく打擲して耻を見せたる。我君たゞ今こゝに來りて、子細を尋ね給ふべき也といふに、其長五六寸ばかりなる人、腕をまくり臂を張手ごとに杖をもちて、一萬あまり馳せ來り、蟻の如くに集り塵首座を打に首座は夢の如くに覺えて、痛むことといふばかりなし。その中にまた一人、あかき裝束して烏帽子着たる

もの、大將かと見えてうしろに控えて下知して、沙門はやくこゝを出て去べし。出去らずば汝が目鼻耳を損ずべしといふに、七八人首座が肩に飛びのぼり、耳鼻にくひつきければ、塵首座これを拂ひ落して、門の外に逃げ出つゝ、南の方の岡に登りて見れば、一つの門あり。これはそも見馴れざる所かな、まづこゝにたちよりて今夜をあかさんと思ひ、門外近くさしよりければ、うしろより一萬あまりの人立かへり、塵首座捕へて咄とつき倒し、門の内に引入たり。門の内にも七八千ばかりの人數、身のたけ五六寸ばかりなるが、すきまもなく立並びたり。大將又かへりていふやう、我汝を憐みて、伽をつかはし慰めんとすれば、かへつて損害をなす。その罪まさに手足をきりて償ふべしといふ。數百人手ごとに刀をぬきもちて立かゝる。首座大に怖れ惑うて、それがしおろかなるまなこをもつて、その恵みを知らざる事、その誤りまことに少なからず。後悔するにかへらず。たゞ願はくは、罪を赦したまへといふに、さては悔む心あり。さのみにせむべからず。なだめて追返せといふ聲聞えて、門の外へ突き出さるゝと思ふに、寺の小門

の前なり。堂に立かへりたりければ、灯火は消え殘り、東の山の端しらみてあけわたる。餘りの不思議さに、門のあたりを尋るに更に跡なし。東の方に少し高き郊のもとに穴有て、守宮多く出入するを怪しみ思ひて、人多く雇ひてこゝを掘らするに、漸々に底廣し。一丈ばかり掘ければ、守宮集りて二萬ばかりあり。中にも大なるもの、その長一尺ばかりにして色赤し、これすなはち守宮の王なるべし。村人の中に、一人の翁すゝみ出て語りけるやう、古しへ瓜生判官とて武勇の人あり。この所に城を構へてしばらく近邊を従へ、新田義治に心を傾けたり。その根源は、判官の舎弟に義鑑房とて出家あり。新田義治を見まゐらせ、極めてたぐひなき美童なりければ、これに愛念を起し、兄の判官をもすゝめて義兵を擧げしかども、遂に本意を遂ずして討死したり。義鑑房が亡魂この城に殘りて守宮になり、城の井の中にすみけるが、年經て後、その井のもとくづれたりといひ傳へし。さては疑ひなく井のもとの守宮、今すでにこの妖魅をなすと覺えたり。早くとり拂はずば、かさねてまた災ひあるべしといふ。塵首座一紙の文をかきてい

はく爰蟲あり、蛤蚧と名づく。かしらは蝦に似て四つの足あり。鱗こまかにして背にかさなり、色黒くして尾長し。石龍子をもつて部類とし、蝘蜓をもつて支族とせり。あるひは泥土水の底にかくれ、あるひは頽井の中にむらがる。然るに今この土窟に蟄して、ほしいまゝに子孫を育長し、その巨多こと何ぞ數ふるに百千をもつて盡さむや。月をわたり年をつみて、たちまちに變化妖邪のわざはひをなし、漫に人の神魂を銷しむ。これ何のことぞや。爾而生を蟲豸の間に托し、質を蚰蚓の屬によせて、暫く十二時蟲の名ありといへども、亦三十六禽の員に外れたり。よく蝎蝎を捕て蝎虎の美名あり。よく一日のうちに身の色變りて折易の佳號ありといへども、守宮のしるしを張華が筆に貽し、戀情のなかだちを王濟が書にしるす。これ皆嫉妬愛執をもつて爾が性とす。諒聞爾はそのかみ釋門の緇徒、一朝卒然として男色に眩めき、つひに行業をすてゝ武勇をはげまし、鬪閧して死して這蟲となれりといふ。嗚呼酥を執せし沙彌は酪上の蟲となり、

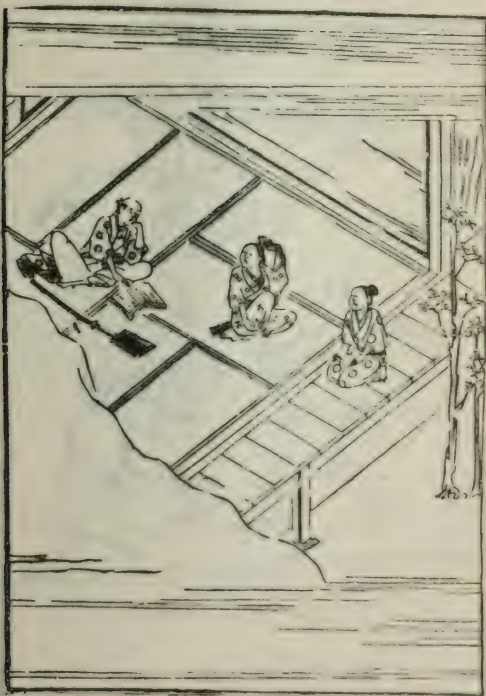
橋を愛せし桑門は橋中の蟲となる。これ上古の聆に傳ふ。爾色に淫してまたこの蟲となれり。その性既に色を繕ふの能あり。人の惡む所世の戒むる所、何ぞ慚愧の心なく、剰へかくの如くの佐異をなすや。早く心を改めて正道に赴き、生を轉じて其元に歸れ。

とよみければ、是にや感じけん、數萬の守宮皆一同に死たふれたり。人皆不思議の思ひをなし、たゞ此まゝ捨べき事ならずとて、柴を積て燒たて灰になし、一丘を築てしるしとす。それより後二たび佐異なし。

◯妬婦水神となる

山城の國の郡は橋より東にあり、宇治橋より西をば久世郡といふ。宇治橋の西のつめ北の方に橋姫の社あり。世に傳へていふ、橋姫は顔かたちいたりてみにくし。この故につひに配偶なし。橋の南に離宮明神あり。昔夜な〳〵橋姫のもとに通ひ給ふ。その來り給ふ時は、宇治の川水白波たかくあがりて、すさまじき事いふばかりなし。されば明神の哥に、

夜や寒き衣やうすきかたそぎの
　　行あひのまに霜やおくらむ

とよみ給ひしとかや。然るに宇治と久世と、新婦をとり聟をとるに、橋姫の前を通り、橋を渡りて縁をとれば、久しからずして必ず離別する也。このゆゑに今に到りて兩郡縁を結ぶには、橋より北の方槇の嶋より舟にて川を渡る事也。これは橋姫わが容貌の惡しくて、ひとりやもめなる事を怨み、ひとの縁邊を嫉み給ふ故なりといへり。それにはあらず、昔宇治郡に、岡谷式部とて富裕の者あり。その妻は小椋の里の領主村瀬兵衛といふ人のむすめ也。物嫉み極めて深く、召し使ふ女童まで、少し人がましきをば追出して、たゞ五體不具の女ばかりを家の內には集め使ひけり。餘所の事をも、男女のわりなき物語を聞ては、そのまゝ腹立ち怒りて食更に口に入れず。ましてわが夫の事は悋氣ふかくせめかこちて、門より外に出さず。岡谷もてあつかうて、去もどさんとすれば、我にいとまをくれて去たらんには、鬼になりてとり殺さんなど、すさまじく罵しりけり。年をかさぬれども子もなし。岡谷つねには双紙をよむ事を好みて慰とす。源氏物語の

中に、物嫉み深きためしには、六條の御息所は死して鬼となり、髭黒大臣の北の方は物狂はしくなれり。これ皆物ねたみ深きためしとて、後の世迄も名を殘せし。是等は恐ろし乍らも眉目かたち美しかりしといへり。たとひ悋氣深くとも、和御前もみめよくはありなむ。さのみにたけ〴〵しう嫉み給ふなといふに、女房大に腹立ち、みめわろきを嫌ひて、又こと女に心をうつさんとや。この姿にてみにくければこそ男も嫌ひ侍べれ、生をかへて思ふまゝに身をなし、心定まらぬ男を思ひ知らせんとて、髮はさかさまに立ち、口廣く色あかうなり、まなこ大に血さし入たるが、涙をはら〳〵と流し、座を立て走り出つゝ、宇治川に飛入たり。水練を入て求むれ共死骸も見えず。岡谷驚き、平等院にしてさま〴〵佛事とり行ひけり。

七日といふ夜の夢に、妻の女房來りて岡谷にいふやう、我死して此川の神となれり。橋を渡りて縁を結ぶものあらば、行末必ず遂さすまじとて夢はさめたり。これより橋を渡りて縁を結べば、必ず別離するといへり。舟にて川を渡すにも眉目わろき女には仔細なし。顔かたち美しき女の渡れば、必ず風あら

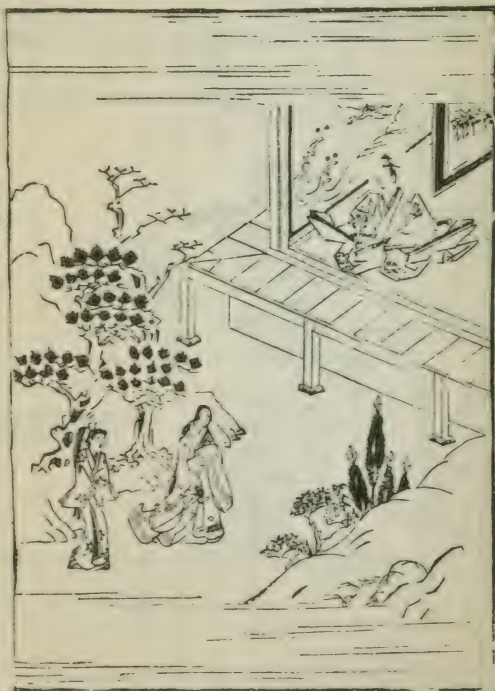
く波たちて舟危しといふ。此故に新婦を迎へて川を渡すに、波風なきときは新婦のみめ悪からんと、諸人これを知るとかや。

○祈て幽靈に契る

上野の國平井の城は、上杉憲政のすみ給ひし所なるを、北條氏康これをせめおとし、憲政は越後に落行て長尾謙信をたのみ、二たび家運を開かん事をはかり給ふ。平井の城には北條新六郎をいれおかれし處に、城中に一間の所あり。金銀をちりばめ、屏風障子みな花鳥草木いろ〳〵の繪を盡し、奇麗なる事いふばかりなし。庭にはさま〴〵の石を集め、築山泉水その巧をなし、築山に續きたる花岡には、春より冬にいたる迄、咲つゞく草木の花さらに絶間なし。是はそのかみ、憲政の息女彌子生年十五歳、みめかたち世にたぐひなき美人にて、心のなさけ色ふかく、殊にやさしかりければ、見る人聞人みな思をかけ心をなやます。憲政はいかなる高家權門の壻にも合せて、家門の縁を結ばんとおぼして寵愛深く、別にこの一間をしつらひおかれし所に、家人白石半内といふ小姓、たゞ一目見そめまゐらせ、心地惑ひて堪かね、風のたよりにつけて文ひとつまゐらせしに、此事あらはれ、半内ひそかに首をはねられたり。その後百日ばかり過てむすめ彌子、日暮がた俄におびえて絶入給ひ、つひに空しくなり給へり。さだめて半内が亡魂のしわざならんと聞傳へし。新六郎この物語を聞て、たとひ幽靈なりともかゝる美人に逢て語らはゞ、さこそ嬉しからまし。今生の思ひで何事かこれにまさらんと、しきりに思ひそめて、朝夕は香をたき花を手向て、人知れず戀慕の心つきて祈りけり。ある日の暮がたに、いづくとも知らず女の童一人來りて、新六郎に向ひていふやう、わが君はそのかみ此所にすみ給ひしが、君の御心ざしにひかれてこれ迄あらはれ、只今まゐり給はんに君對面し給ふべきやというて、きえうせしが、暫くありて異香くんじて、先の女の童につれて、一人の美女築山のかげより出來れり。その美しさ、此世の中にはあるべき人ともおぼえず、天上よりくだれる歟神仙のたぐひかと見るに、中々目もあやなり。新六郎、これは聞及びし彌子の幽靈なるべし。日ごろ我念願せし所ひとへに通じけり。鬼を一車にのすと云事はあれど、何かすさまじとも思はん。契をかはして思ひを述べん

には、人と幽靈とは同じからずと雖も、なさけの色は死と生とかはる事あらじものをと、女の手をとり引いれて、時うつる迄かたらひけり。女すでに立歸らんとするとき、自らこゝに來る事をあなかしこ、人に洩し給ふな。又暮を待給へと契りて、

底深き池におふてふみくりなは
　くるとは人に語りばしすな

とうち詠じ、庭に出てゆくかと見れば、そのまゝかたちは消え失せたり。次の日の暮がたに又來れり。曉かへりては夕ぐれに來る事六十日に及べり。ある日新六郎、家人を集てさまざま物語のついでに、女のいひし事を打ち忘れ、此事を語り出しけり。家人等奇特の事に思ひて、壁をほりてのぞきけるに、女來りて物語すれどもその姿は見えず。女の童と見えしは伽婢子にて侍べりし。

女ある夕暮來りて、大に恨み歎きたる有樣にて云やう、何とて洩し給ふなといふ言葉をたがへて、人には語らせ給ひしぞや。此故に契は絕て、かさねて逢事かなふべからず。これこそこの世の名殘りなれとて、

しばしこそ人め忍ぶの通ひ路は
　あらはれそめて絕はてにけり

となく〳〵詠じければ、新六郎涙の中より、

さしもわがたえず忍びし中にしも
わたしてくやしくめの岩はし

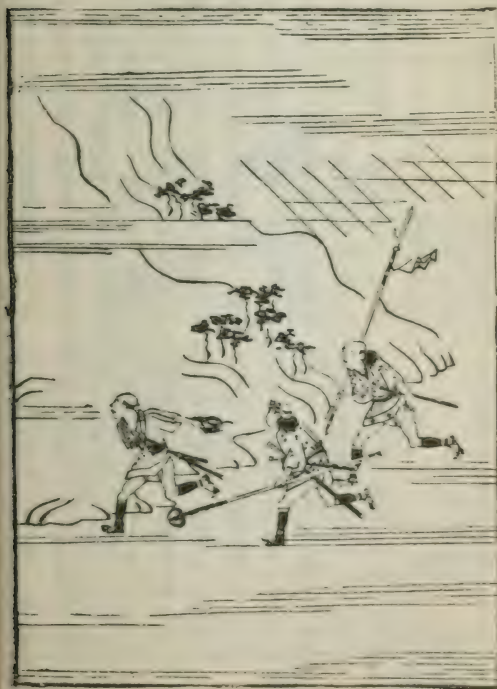
女はなく〳〵金の香合ひとつとり出して、君が心ざし變らで思し給はゞ、これをかたみとも見給へとて渡しけり。新六郎も瑪瑙琥珀金銀をまじへてつなぎたる、數珠一連をとり出し、これは見給ふべき物とはなけれ共、黄泉のすみかには身のたよりとも御覧せよかしとて、女の手に渡しつゝ、さるにても又あふべき後の契を、この世の外には何時とか定め侍べらんといへば、今より甲子といふ年を待給へとて、涙とゝもに、雪霜のきゆるが如くうせにけり。新六郎つきぬなごりの悲しさに思ひむすぼゝれ、心なやみ形ちかじけたり。醫師此事を聞て藥を與へしかば、月をこえて病いえたり。後にある人語りけるは、憲政の愛子こゝにすみて俄におびえ死せり。これは此むすめを思ひかけし小姓白石半内が、怨みて殺されし

亡魂のしわざなり。憲政こゝにおはせし間は、空くもり雨ふる時は、半内が幽靈いつもあらはれ見えしと也。此程はその事絶て、見し人もなしといふ。

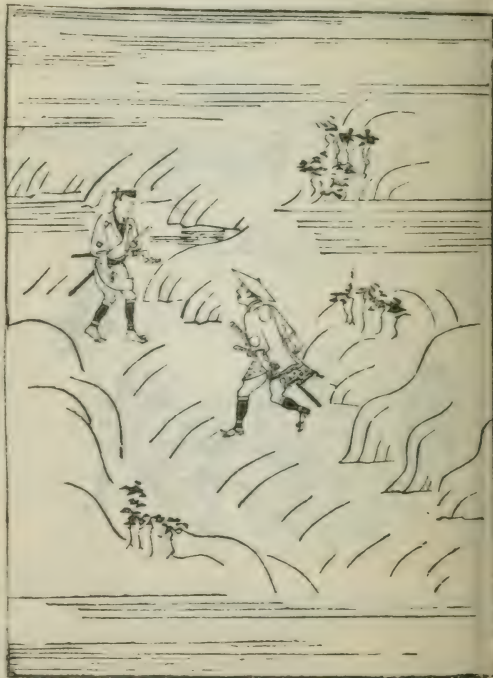
新六郎これを聞に、すさまじく思ふ心つきけり。或日空くもりて雨雲うちおほひたる暮がたに、年のほど廿ばかりの男、やせつかれたるが髪うち亂し、白きねりぬきの小袖に、袴着て紫竹の杖をつきて、泉水の端にすご／＼と立たるを見て、新六郎太刀を拔きて向ひければ、さえ／＼となりて失せにけり。これより僧を請じ、一七日のうち、水陸の齋會をいとなみて弔ひしかば、これにや怨も解けぬらん、重ねてあらはれいづる事なしとかや。

○竊の術

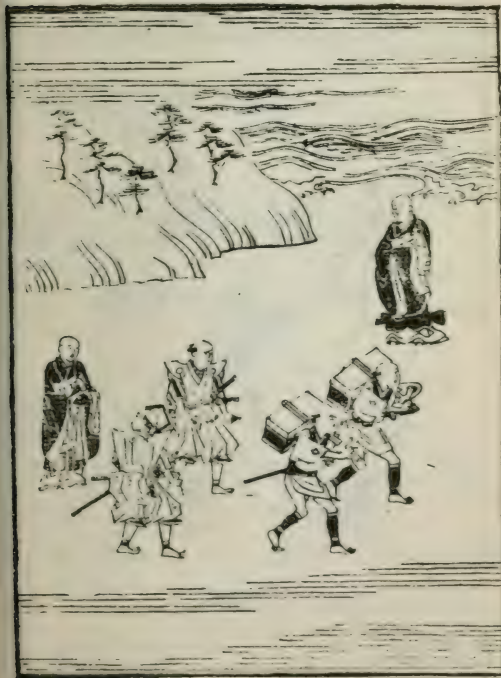
甲陽武田信玄、そのかみ今川義元の聟として、あさからず親しかりけるに、義元すでに信長公にうたれて後、その子息氏眞、少し心のおくれたりければ、信玄あなづりて無禮の事共多かりし中に、今川家重寶と致されし定家卿の古今和哥集を、信玄無理に假どりにして返されず、秘藏して寢所の床に置かれけるを、ある時夜のまに失なはれたり。寢所に行くものは譜代忠節の家人の子共五六人、其外は女房達多年召し使はるゝもの、外は、顔をさし入て覗く人もなきに、たゞ此古今集に限りて失たるこそ怪しけれ。又その外には、名作の刀脇指金銀等は一つもうせず。信玄大に驚き甲信兩國を探し、近國に人を遣しひそかに聞もとめさせらる。此所他人更に來るべからず。いかさま近習の中に盗みたるらんとて、大に怒り給ふ。古今の事はわづかに惜むに足らず。ただ以後までもかゝるもの、忍び入を、怠りて知ざりけるは無用心の故也と、をどり上りてはげしく穿鑿に及びければ、近習も外様も手を握りて怖れあへり。飯富兵部が下人に、熊若といふもの生年十九歳、心利てさが／＼しく、不敵にしてしぶとき生れつきなり。そのころ信州割峠の軍に信玄馬を出され、飯富おなじく赴きしに、旗棹を忘れたり。明日卯の刻には飯富二陣と定められしに、日は早や暮たり。如何すべきと案じ煩らひしを、熊若すゝみ出て、それがしとりてまゐらんとて其まゝ走り出たり。諸人さらに實と思はず。かくて二時ばかりの間に、やがて旗棹を取て歸り來る。さていかにして取來れると問はれしに、熊若いふやう、早くとりて來らんと思ふばかりにて、手形をも印をもとらずして甲府に走り行ければ、門をさし固め、中々人の通路をかたくいましむる故に、壁を傳ひ垣をこえ、ひそかに戸を開くに更にしる人なし。やがて

亭に忍び入てとりて來り侍べりといふ。飯富聞て、これより甲府までは東路往來百里に近し。是をゆきて歸るだにあり、ましてや用心嚴しき所を、人知れず忍び入ける事よ。定めて此間の古今集もこの者ぞ盗みぬらん。後に聞えなば大事成べしと思ひ、熊若をかたはらに招き、汝かゝるしのびの上手、道早きものとは今まで露も知らず。此ほど信玄の定家の古今を盗みたるは汝かといふ。熊若答へていふやう、それがしはたゞ道を早く行て、忍びをする事をのみ得たり。しかれば我いとけなき時より君に召し使はれ、故郷の父母いかになりぬらんとも知らず。願はくは我にいとま給はり、故郷に返して給はらば、其盗みたる者をあらはし奉らんといふ。それこそいと易けれ。いとまはとらすべし、かの盗人を捕ゆる迄は沙汰すべからずとて、割が峠歸陣の後、熊若をもつてこれを覘はせしに、西郡においてたゞ一人ゆく者あり。早き事風の如し。熊若立むかひ物いふ間に、後より捕へて押し伏せたり。熊若に欺かれて恥みる事こそやすからね。古今を盗みける事は、信玄公の閨を見んため也。あはれ今廿日をのびなば、甲府をば亡すべきものを、

運の強き信玄公かな。我は上州蓑輪の城主、永野が家に仕へし竊のもの、もとは小田原の風間が弟子也。わが主君の敵なれば、信玄公を殺さんとこそ計りしに、本意なき事かな。此上はとく〳〵我を殺し給へとて申しうけて殺されたり。古今集をば、都に出してうりけると也。熊若はいとま給はりて、西國に下りけりといふ。

〇鎌鼬 付 提馬風

關八州の間に、鎌いたちとて怪しき事侍べり。旋風吹おこりて、道行人の身にものあらくあたれば、股のあたり竪さまにさけて、剃刀にて切たる如く口ひらけ、しかも痛み甚だしくもなし。又血は少しも出ず。女蘐草を採てつけぬれば一夜のうちにいゆといふ。何者の所爲とも知り難し。たゞ旋風のあらく吹てあたるとおぼえて此うれへあり。それも名字正しき侍にはあたらず。たゞ俗姓卑しき者は、たとひ富貴なるも是にあてらるといへり。尾濃駿遠三州の間に、提馬風とてこれあり。里人あるひは馬に乗りあるひは馬を引てゆくに、旋風起りて砂をまきこめ、まろくなり

て馬の前にたちめぐり、車の輪の轉するがごとし。漸々にその旋風おほきになり、馬の上にめぐれば、馬の鬣すくすくとたつて、そのたてがみの中に、細き絲の如く色赤き光さし込み、馬しきりにさをだち、いばひ斷てうち倒れ死す。風その時ちりうせてあとなし。いかなる者の業とも知人なし。もしつじ風馬の上におほふ時に、刀をぬきて馬の上を拂ひ、光明眞言を誦すれば、其風ちりうせて馬も恙なし。提馬風と號すといへり。

○了仙貧窮 付天狗道

釋の了仙法師は播州賀古郡の人なり。いとけなくして父母におくれ、郡の草堂に籠りて出家し、十七歳して關東におもむき、相州足利の學校に三十餘年の功を積み、内外二典に渡り、神哥兩道にたづさはり、博學多聞の名をほどこし所々の談林に遊ぶ。論義辯舌ありて、諸人皆かたぶき伏して、更にこれに敵する事かなひがたし。然ればその天性逸哲佯狂の風あり。命分甚だ薄く、一重の紙衣をだに肩にまつたからず。墨染の衣は袖破れ、その日を暮すべき糧

に忘し。此故に學智の功はかきなりながら、長老上人にもならず、綱位の數にもあづからぬ平僧にて、年月を重ぬるまゝ名利の心さらに絶がたし。みづから深く嘆て曰く、了仙よく〳〵汝學問よく勉めて才智あり。心ざし邪なく名は世に聞えながら、いかに身一つを過わび、一寺の主ともならざるやと。又みづから解して曰く、安然は堂の軒に飢て桓舜は神の社に祈りし。これ道義の不足ならんや。役の小角は豆州にながされ覺鑁は根來に苦しみし。これ行德のおろそかなるにあらず。敎因は僧戶封祿ありて安海は綱位にいたらざりし。これ智と愚との故ならず。沙彌は溫かに衣て飽まで喰ひ主恩は飢寒にせまりぬ。これ才能の不敏なるによらんや。これすでに過去世の因緣なり。儒には天命といふ。了仙不幸にして此そしりをうく、何ぞ因果の理に迷うてみだりに名利を求めんやとて、みづから問答して心を慰みけり。され共學智に慢心あり、人のおのれを用ひざる事を憤る思ひ胸にふさがり、天文の末の年鎌倉にして病死しければ、光明寺のかたはらに埋みたり。所化の伴頭榮俊といふものは、學問の友として久しく斷金の契

をいたせしが、ある時藤澤邊に出ける道にして、了仙に行合たり。漆塗の手輿にのり白丁八人にかゝせ、曲彔ひかう朱傘おなじく白丁にもたせ、同宿七八人うるはしく出立、雑色に先を拂はせ、さゞめき來るよそほひ、往昔に替りて巍々堂々たる事、ひとへに國師僧正の儀式に似たり。了仙は九條の袈裟に、座具取そへて身に纏ひ、檜扇さし出し、和僧は榮俊ならずやとて輿よりおり下り、手をとり涙を流して昔今の物語す。榮俊いひけるは、君と別れ隔たる事わづかに半年ばかりの間に、よくみづから綱位たかく青雲の上にのぼり、封祿あつく朱門のうちに交り、衣服袈裟の花やかなる出たち、手輿同宿のさかんなる有様、まことに學智秀でたる所、心ざしを遂る時也。僧法師の本意はこゝに極まれり。羨しくこそといふ。了仙答へて曰く、吾今一職をうけて勉め行ふ。更に隠すべきにあらず。その形勢見せ奉らん。こなたへおはせよとて、光明寺の堂に行到る。人さらに見咎むる事なし。夜すでに後夜に及ぶ。了仙語りけるは、我つねに慢心あり。然れども更に非道をなさず。平生貧賤なる事を怨み憤りて、因果の理としりながらこれに

惑へるを以て、死して天狗道に落ち學頭の職に選ばれ、文を綴り書を考へてその義理をあきらめ傳ゆ、わが天狗道は魔道なりと雖も、鬼神に横道なきが故に、人をえらび器量によりてその職をつかさどらしむ。人間はたゞ賄を以てひいきをなし、追從輕薄の者をよしと思ひ、外の形を用ひて内をしらず。人のほむるを用ひて、其才能をいはず。是によりて公家も武家も出家も、同じく追從輕薄奸曲佞邪をもつて官位奉祿に飽滿て、よき人は皆その道の正しきを守る。此故に人をへつらはず輕薄なしこゝをもつて長く埋れて世に出す。騏驎はいたづらに糞車をかけられて草水に飢渇え、駑馬は時を得て豆粥に飽たり。鳳皇は枳棘の中にすみて、鵄梟は蘭菊の間にさえづる。こゝをもつて公家も武家も出家も賢者は、顔やせて髮かれつゝ、溝瀆のほそみぞにころび死すれども知人なく、愚人奸曲の輩は世にあらはれて時めく也。これより風俗惡しくなりて、治れる時は少なく亂るる日は多し。わが天狗道はたゞよくその器量をえらび、その職をあてがふに誤らず。凡そ世の人貴賤をいはず、少も慢心ある者は皆死して魔道に來る。その中に君に不忠あり、親に不孝するものは、必ず大きなる責を受け、善を積み德を施せし者は、皆その幸ひをかうぶる。輪廻因果のことわり皆僞りならず。天子公卿武士出家、世に名を知られたる輩、わが道に入て、或は大將となり或は眷屬となり、世の人の心だてによりて、或は障碍をなし或は守護をなす。それ太上は德をたて、その次は功をたつ。その次は言をたつ。これ死して久しけれ共朽ずといへり。我は德もなく功もなし。こゝに論場に言を立しも、今すでに無きが如し。その慢心のむくひを見給へとて、堂の庭に飛出たる姿を見れば翼あり。鼻高くまなこより光り輝き、すさまじき形に變せし所に、虛より鐵の釜ふらく／＼とおちて、其中に熱鐵の湯わきかへる。それにつゞきて法師一人くだり、銚子に熱鐵の湯をもりいれ、盃にいれて了仙に渡す。了仙怖れたるけしきにてこれを飲み入るゝに、臟腑もえ出て下に燒けくだり、地にまろびてうせにければ、堂にありし白丁も同宿も皆きえうせて、夜はほの／＼とあけ渡れば、光明寺中の堂にはあらで、榎の嶋の濱おもてに棄後一人坐したり。それより歸りて佛事いとなみ、道心深く後世を怖れ、諸國行脚して菩提心を祈りけり。

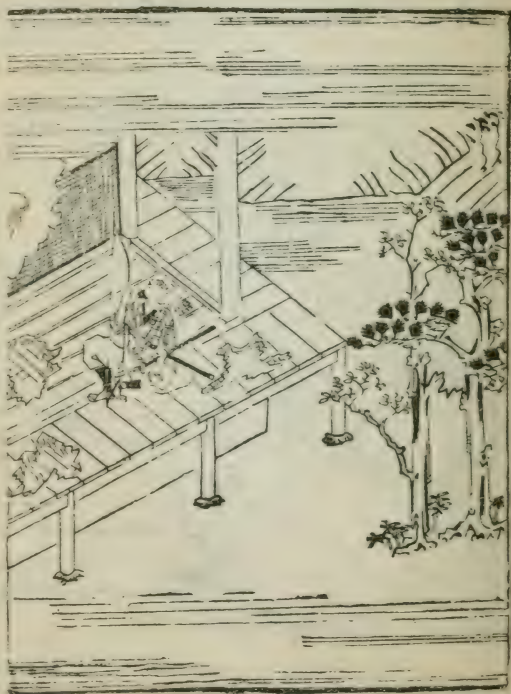
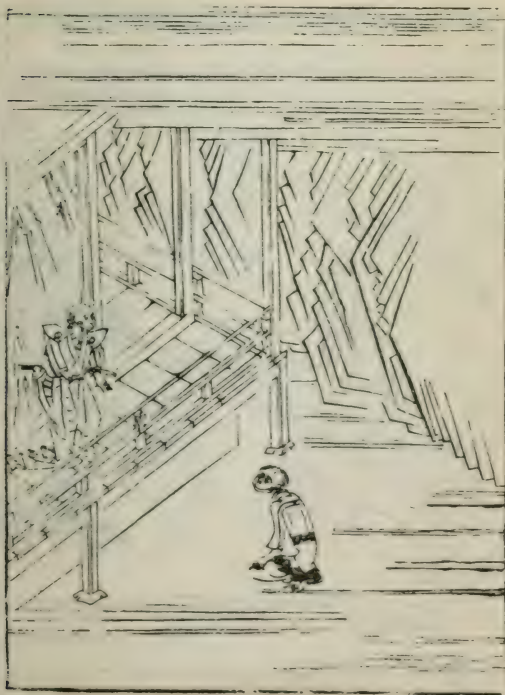
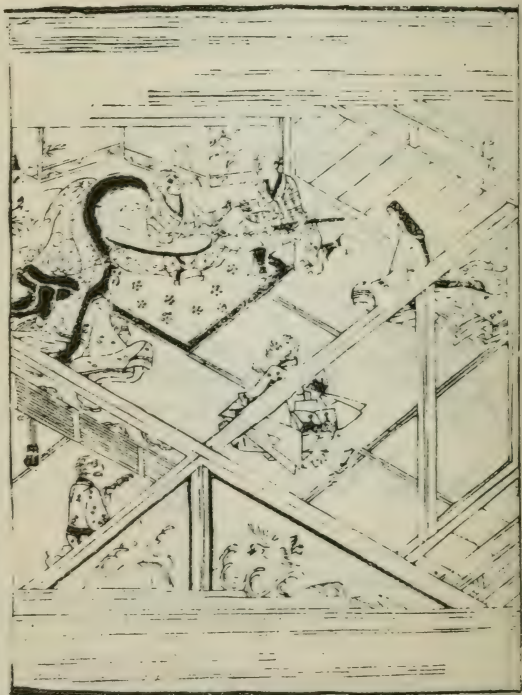
伽婢子巻之十終

伽婢子巻之十一

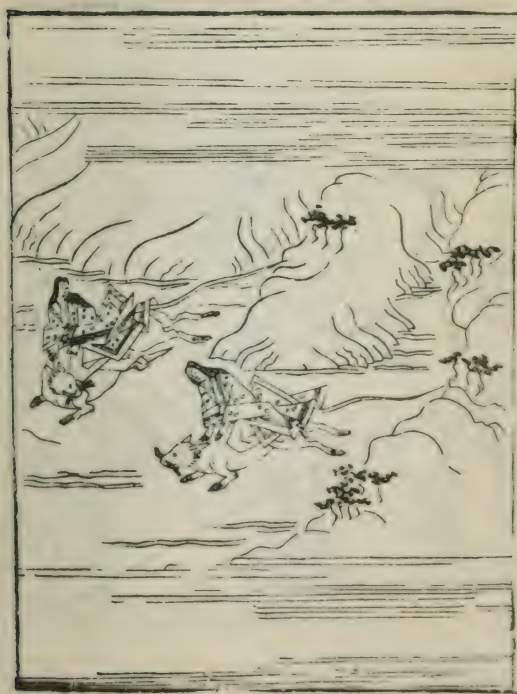
○隱里

播州印南といふ所に、内海又五郎とて武藝をたしなみ、弓馬の道に稽古の功を重ね、然もその心根きはめて不敵者なり。或時思ふやう、片田舍に世を過さんには、人のため名を知らるゝ事あるべからず。都にのぼり赤松を頼みて、公方に宮仕へ奉り、世の變に任せて立身せばやと思ひ立て、京都にのぼりしかば、赤松は身まかりたりと聞ゆ。さては力なし　後藤掃部が宇治にありといふ、こゝに行て頼まんと思ひ、足に任せて尋ね行。日すでに暮かゝり、道に踏迷ひて草原小坂をさし越え／＼、栗栖野といふ所に出たり。空くらく雲とぢて雨さへ少しづゝ降出たり。遠近人に物申すべき影も見えず。猿の叫ぶ聲かすかに聞え、狐のともす火あたりにひらめく。こゝに一つの堂あり。古へ太元帥の法おこなひける所とて、今も太元堂と名づく。柱朽ちて垣傾き、木の葉ちりつもり軒破れ、まことに物凄き所なれども、行先も定かならず、立歸るべき道も覺えねば、堂の縁にあがりて夜を明かす　亥の刻ばかりに東の山際より、松明ともして人多く來る漸々に近付つゝ太元堂に向ひて歩みよる。又五郎思ふやう、かゝる所へ夜更けて來る者はばけものなるべし。然らずば盜人ならんと怪しみ、密かに天井に登り息を靜めて居たりければ、廿人ばかりさゞめきて、堂にのぼり火をたてたり。其中の大將と覺しくて、花やかに出立たる者一の座上にあり。その外の者皆おの／＼坐したり。鑓長刀弓なんど、手毎に持たるをたて並べ、用心したる躰也。その貌を見れば皆猿のたぐひにして、更に人間にあらず。又五郎これは疑ひなきばけもの也、一矢射ばやと思ひて、携もちたる弓取直し、とがり矢をつがうて兵と放つに、誤たず上座にありける者の、肩のかゝりにしたゝかにたちたり。此者大に驚き聲をあげて、あゝ悲し是はそも何事ぞやと、いふ程こそありけれ、灯火を打消し、あまたの者共ふためき立て、ちり／＼に迯失せたり。物音靜まり跡も見えざ

りければ、夜の明るを待てあたりを見るに、血こぼれて引たり。又五郎行末を見屆けばやと思ひ、跡をとめて南のかた山を巡り、西をさして行ければ、大なる穴のはたにしてとゞまる。いよ／＼あやしみかなたこなたせし間に、今宵すこし降たるに土すべりて踏はづし、穴の内に落入たり。底深く岸高うしてあがるべきたよりなし。いとゞ暗かりければ、こゝにて死するより外はなしと、かたはらを探り見るに横に穴あり。靜かに歩みゆくに一町ばかりにして、明らかなる所に出たれば、月日の光り常のごとし。一つの窟に石の門ありて、數十人其門をかためて番を勤む。其有樣は今伎太元堂に來りける者にたがはず。番の者驚き問やう、何人なればこゝには來りけると。又五郎、是は播州より此ところ都に上り、醫師を以て身のわざとす。藥をもとめて山に分入侍べりしが、道に踏迷ひ、思ひ掛けず穴に落てこゝに來れり。都に歸るべき道を示し給へといふに、番の者ども聞て大に喜び、是はまことに天のあたふる幸也。我君きのふたま／＼城を出て遊び給ふ所に、流矢の爲に當りて疵を被り臥給へり。療治して給給へとて内に呼入た

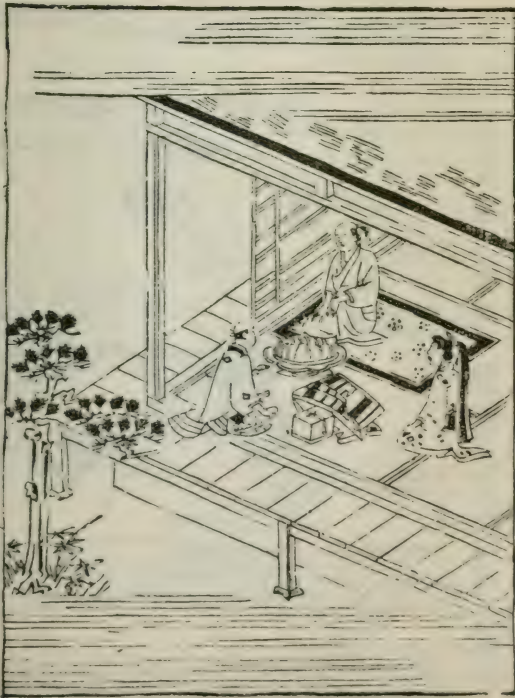
り、宮殿いらかを磨き、簾掛渡したる奥にいざなふに、かのあるじ苦しげなる聲にて、我たまたま出て遊ぶ處に、禍忽ち身に迫り運傾きて流矢に當り、毒氣すでに骨にとほり痛む事いふばかりなし。命又危し。願はくは一つの配剤を出して、此病を治し給へ。然らば我二たび甦りて、重ねて樂しみを受くべし。是まことの大恩也といふを見れば、毛はげて大なる猿也。幾年經たり共知られず。老さらばうたるいとゞ苦しげにて吟臥たり。兩のかたはらに二人の美女あり。美くしさ限りなし。又五郎立よりて、豚をとり疵をなでゝ、少しも苦しからず、やがていゆべし。我に名方の藥あり。是を服すれば病を治するのみならず、長生不死の靈藥なれば、命を保ちよはひを若やかになし、天地と共に久しからんとて、腰につけたる火打袋より、丸藥を取出して與へ、服せしむ。一類みなこれを喜ぶ。猿見に不老不死の藥と聞て、我等かゝる靈仙の人にあふ事うれ也。願くは我等にも給れかしといふ。袋を傾けて分ち與ふ。多くの猿ども爭ひうばうて是をのみけり。元より此藥は、鏃にぬりて獸を射るに、必ず斃るといふ大毒なれば、

何かはたまるべき、暫らくありて皆一同に倒れふして血を吐き、前後を知らず苦しみける所を、枕元に立かけたる太刀を取り、片端より切殺しけり。起上り立あがらんとすれども、毒にあてられてよろめきて、都合一類大小三十六疋の猿、一同に殺し盡されたり。二人の女房も伺じ化物の類なるべし、諸友に打ころさんといふに、二人ながら啼ていふやう、我らは更に妖魅の類にあらず。一人は醍醐といふ所の並浦のなにがしが娘、今一人は伏見の里に平田のなにがしといふ者の娘にて侍べる。思ひも寄らず恐しき者のためにばかされて、深き穴に沈み惑ふ。逃て歸るべき故郷の道も知らず、その儘こゝにて死なん事を求れどもかなはず、あさましき畜生のつかはれ者となり、六十日はかりこのかた、夜となく晝となく、悲しき物思ひを致し侍べり。君今是等を殺し給ふ。我等二たび人間に立歸り、戀しき父母に逢まゐらせなば、是ぞ大恩の主君なるべしといふ。又五郎すでにばけものは打殺しけれ共、人間に立歸るべき道をしらず。いかゞすべきと案じ煩ふ所に、白き裝束に烏帽子着たる翁十餘人、いづくより來るとも知ら

す現れ出たり。是は此所に久しくすみ侍べりし者共なるを、近きころより猿共に住家を奪はれ、食物財寳殘りなく押領せられ、身のたゝずみもなくなり、はるかの傍にすまゐして、妻子孫までも世の憂目を見る事、口惜しとは思ひながら、彼等に敵對すべき力なければ、時節を待て心をなだめし所に、君の是等を退治し給ふ。此故に我等二たび此地のあるじとなり、古への如くかへり住べし。大恩何事か是に勝るべきとて、手に〳〵黄金を包みて又五郎が前にさし置く。そのかたちも又人にはあらぬ曲者也。目はまろく口はとがり、鬚と眉毛は至りて長し。又五郎いふやう、汝ら久しく此地に住て神通ありと見ゆ。いかなれば猿に欺むかれてすみかを奪はれたる。扨汝等まことは何者ぞ、こゝをば何といふぞと尋ねしに、翁答へけるは、我等は壽五百歳を保ちて一たび變ず。彼等は八百歳を保ちて後に一たび變ず。此故に敵對する事かなはず。そも〳〵我等はこれ虛星の精靈として、大黒天神の使者也。此所は鼠の住所として世にかくれ里と名づく。更に人間に向ひて害をなさず。功を積み行を滿て天上に飛かけり、仙境に出入

して、自在神通のたのしみに誇る。然るを猿ども集りて年を重ねて惡行をなし、人の娘をとりておのれが心を慰み、物を害し禍をなす。その科あらはれて一類同じ所に亡びたり。天道すでに君が手を借りて殺し給ふ者也。天道の所爲にあらずは、君何として亡し給はん。君暫く目を閉ぢ給へ。我等送りて人間に返し參らせんといふ。又五郎目をふさぎければ、女二人と又五郎をうしろにかきおひ道を進めば、雨風あらく聲さわがしく聞えて目を開くに、一つの白き大鼠その外十四五ばかりの鼠、大さ豕の如し。地を掘穴を穿て野原に出たり。道ゆく人にこゝはいづくぞと問へば、木幡山の麓也といふ。二人の娘を親元に送り返せば、親大に喜びて又五郎を兩家の聟とす。又五郎それより武門の望みを離れ、富裕安穩の身となりぬ。後に又木幡山の野はづれを尋ぬるに、歸り出たる穴は跡もなく、松茅しげり草むら閉ぢたるばかり也。又五郎は後終に予もなく、其行がたを知らず。

○土佐の國狗神 付金蠶

土佐の國畑といふ所には、其土民數代傳

はりて狗神といふ者を持たり。狗神もちたる人もし他所に行て、他人の小袖財寶道具すべて何にても、狗神の主それを欲く思ひ望む心あれば、狗神則ち其財寶道具の主につきてたゝりをなし、大熱懊惱せしめ胸腹を痛む事、錐にて刺が如く、刀にて切るに似たり。此病を受ては、かの狗神の主を尋ね求めて、何にても其欲しがる物を與れば、病いゆる也。さもなければ久しく病ふせりて、終には死すとかや。中比の國守此事を聞て、畑一郷のめぐりに垣結まはし、男女一人も殘さず、燒ごみにして殺し給ふ。それより狗神絶えたりしが、又この里の一族のこりて、狗神是に傳りて今も是有りといふ。其狗神もちたる主死する時は、家を繼ぐべき者に移るを、傍にある人は見ると也。大さ米粒程の狗也。白黑ある斑の色々あり。死する人の身を離て、家を繼ぐ人の懐に飛入といへり。狗神もちたる人もみづから物うき事に思へ共、力なき持病なり。異國にも閩廣といふ所には、蠱もの咀おこづる事多く取扱ふといへり。國人に金蠶といふ持病もちたる人、是を他人におくり移す事あり。黄金と錦と釵のたぐひ、其外さまざ

ま重寶の物を道の左に捨置く。是を拾ひて家に歸れば、金蠶の病移り渡るといへり。其形は蠶にして色は黄金の如し。人にとりつきぬれば、初は二三ばかり漸々に多くなり、家の内に塞がり身をせむる。打殺しても更に盡きず。拾ひたる黄金錦などことごとく盡はてて後に、病少づゝ愈といへり。

○易レ生契

肥前の國松浦郡松浦の里に、豐田孫吉といふ者あり。未だ若くして父母におくれ、妻もなくて獨り住けり。其家貧しからず。いとけなき時より耕作商賣の營みをもせさせず、元よりたゞひとり子也ければ、親こと更にいとほしみて、儒學のかたはしに心を傾け、講席にもつらなるを以て所作とし侍べらしむ。或夕暮に門に出て見ゐたれば、かたち賤しからぬ女子一人南の方より出來る。年の程十六七と見ゆ。色よき小袖を重ねたるにはあらねど、姿かたちは人に勝れて見ゆ。豐田はしり出て袖をひかへ、とかく語らひければ、女は岩木ならぬ身の、いなとはいはじいな舟の、さすがにかゝる浪枕、ならぶる

袖をかたしきつゝ、夜もすがら語らひ、わりなく契りて、明方になりければ、名殘盡せず、女は起き別れて歸りぬ。日暮ければ女又來れり。豐田、其家はいづくぞ、親は誰人ぞと問に、更にさだかにも答へず。强てたづぬれば、みづから常に褐色の衣に、蔦の害草染たる小袖なれば、褐子とも蔦子とも名をば呼給へかしとて打笑へば、豐田、扨はこれ出ある家に召使るゝ女の、暮な暮なひそかに出て來るならん。此事もし顯れ侍べらば、ゆゝしき咎めも如何なるべしやと思ひて、更にも尋ね認ず。いよ〳〵睦しく、比翼連理の契あさからず。或夜豐田酒に醉て戯れていふやう、有の儘に其すみどころを語り給はざらんには、心まだとけずとぞ思はん。我はかくこそ思ひ侍べれとて、

　手枕のうへにみだるゝ朝寢髮

　下には人のこゝろとけずも

といひければ、女限りなく恨みたる氣色にて、かくぞ返しける。

　手枕をかはすちぎりに下紐の

　とけずと君がむすぼゝれつゝ

今は何をか隱し侍べらん。君とみづからは古へよりよく知る事侍べりし。然らずば如何にかく情深く契り侍べらむ。

まことは我は今の世の人にはあらず。君がため更にたぶろかし参らする者にも侍べらず。宿世の縁深き故ぞや。昔この松浦の里に、大友左衛門佐なにがしとて、ゆゝしき武勇の大名おはしき。みづからは杵島郡の者にて、よく歌うたひ碁うつ事を得て、人更にみづからに勝つ者なし。此故に十七歳のころ召されて、左衛門佐殿に仕へ参らせ、朝な夕な側を離れず寵愛淺からず。其時は君まだ其家の小姓にて、近く召使はれ給ひしに、容貌うるはしかりければ、自ら思ひを懸け心を通はし侍べり。かくて自ら餘りに堪へ兼つゝ、或日の暮方燈未だ取らざる暗まぎれに、

よそながら目には隠れど雨雲の
　へだつる中にふるなみだかな

と書て君が袂に投入れしかば、其次の日の夕暮に君また、

よそにのみ嶺の白雲きえかへり
　たえずこゝろにふるなみだ哉

とかきて自らが袖に投入給ひしより、年も同じ年、所も同じ所に、人目を中の関守になして、互に心ばかりを思ひ通はせ共、家の内外嚴しき掟のつらさのみ恨みられて、契るべき便もなし。後に傍輩の童に此心ざしを顯はされ、左衛門佐殿に讒せられしかば、則ち大に怒りて君と我と高手の縄をかけ、松浦川のはたに引出し、首を刎られ侍べり。君は今已に又人間に生れ給ひ、みづからはそれより此方、猶今までも冥途にあり。思ひそめたる心の末、百餘年の後も朽ちず、空しき靈の現はれ來て、割なき契を結ぶなり。昔を思へば今も悲しき憂目見たりける事の、いとどつらさは勝るぞやとて、涙を流す事雨の如し。豊田此事を聞に、又悲しさ限りなし。されば今是を聞くに、まことに二世の縁なれば、ます〳〵わり無く語らひて昔の思ひをはらさん。誰をか忍びて暮にこし朝に歸らん。只是に住てもろ友に夫婦とならんとて、豊田が家に留めて猶睦しきなからひ也。幽靈とは見ながら、宿世の縁わりなくて、露恐ろしとも思ひ侍べらず。豊田は更に碁うつ事知らざりしに、女こと〳〵く其秘妙を教へしかば、此比あたりに名を得し者、豊田にむかひて碁に敵する人なし。女つね〳〵は左衛門佐の事を語る。そのあたり今見るやうに覺えたり。左衛門佐或時女房達を召つれて、川の邊に遊びし所に、うるはしき男二人きらびやかに出たち、川の向ひを遙に行過ろ。女房達の中に一人云やう、男ならば是程美はしきをぞ、我思ふ人とも思はまし物をといふ。左衛門佐聞

て、此男の妻と成らまほしきかと云。其女房打笑ひ顔赤めて物もいはず。暫くありて新しき桶に蓋覆ひして女房達の中に出す。是先の男の許に遣すべき祝の物見よとあり。開きて見れば男をほめし女房の首打切て見せ侍べり。女房達手足ふるひ目くらみて、絶入りけるも多かりし。又或時鹽燒く浦に仰せて私には售せず、我領分の鹽を皆下直に買取り、京方の商人に賣けるを、何者かしたりけむ、左衛門佐の門に落書しける。

さなきだに辛きおきめを左衛門が
國の鹽やきにがりはてけり

左衛門是を聞て、いかさまにも鹽燒どもの所爲なるべしとて、鹽燒司三人を捕へて濱おもてに磔に懸けたり。又年毎の春になれば錢米を出し、國中の民百姓に借渡し、身上宜しき者には殊更に多く借て、秋に至りて大分の利を掛けて、元にそへて取返す。もし返すべき力なき者は、其所の有德人にかけて辨へさせ、或は妻子を他所に售つかはし、資財家屋敷みな沽却せしめ、年年に虐り取りもぎとる故に、國中大に衰微に及べり。何者か詠みたりけむ、

無理にかす利錢の米の數よりも

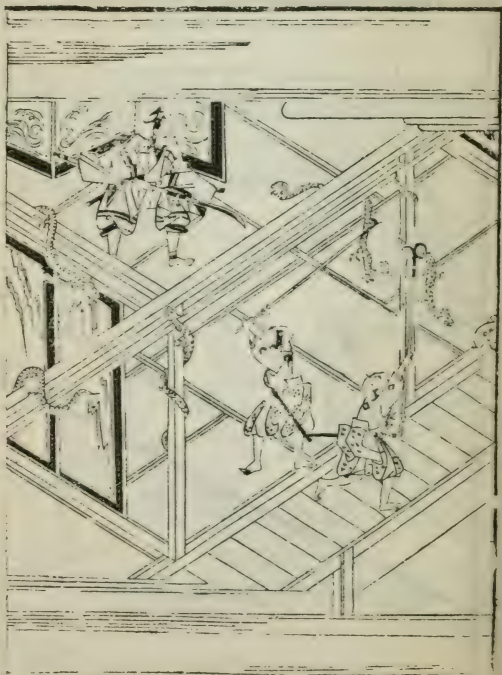
こぼす涙はいとゞおほとも

左衛門佐是を聞て、賤しき百姓共は、是程の事もよもつらねまじ、有徳人ばらの所爲にこそとて、城下に住ける有徳人十餘人闕所して追出し、其財寶ども皆奪ひとりぬ。或時左衛門佐、父の年忌にあたり、國中の僧を集めて齋を行ひしに、一人の僧遲く來れり。破れたる袈裟かけて衣甚だ古し。諸人あなづりて奥にも請せず、門の傍に居て齋を食はせたれば、齋過て其鉢を膳の上に覆て、彼僧は去けり。跡にて鉢を取上げんとするに少も動かず。諸人奇特の事に思ひて、集りてえいや〳〵と引動かせ共、太山の如くに重くして上らず。左衛門佐にかくといふに、自ら行てこれを上げられしかば、輕くあがりて其下に哥二首あり。

花ちりて梢につけるくだ物の
今幾かありて落んとすらむ

我人につらき恨みをおほ友の
家の風こそ吹きよわりけれ

左衛門佐これを見るに驚く心もなく、いよ〳〵國民をむさぼり、人を殺す事草を薙かとも思はず、恣に惡行を致せしかば、それより二年を待たずして禍來り、身を失ひ家を亡ぼしぬ。何事も

皆天道より定まる事と云ひながら、法に過たる科を犯せば禍必ず近く來る。然ればみづから昔の心ざしにひかれて、今かく契をなし侍べり。今より一年にして、迷塗の暇すでにきはまるべしと語りしが、月日程なくくれ羽鳥、あやなく過ぐる光陰、はや一とせになりにけり。女心地煩ひければ、醫師を頼み藥を與ふれども飲まずして、豊田が手をとりて、昔の語らひ君と縁深く、夫婦の情はこゝにして盡き侍べり。自ら幽冥陰氣の形を現はし、君に契り參らせ、いとほしみの恩を受けたり。思へば昔一念の愛執を起して、思はざる外の禍におち入たり。たとひなんぢは干潟となり岩は湯に沸とも、此恨みは更に消がたし。天傾き地崩るとも、此情は忘れじ。今已に宿世のよしみを續けて、後の世の緣を契る。是より我は黄

泉に歸るべし。其かみ殺されてより百餘年、此にび重ねて契る事一年、久くして又逢奉れり。思ひの雲ははれゆきたり。更に戀悲しみ給ふなとて打なきけるを、豊田は涙の中より、今暫し留り給へ。飽かぬ別れに後れて、殘る身をいかにとか思ひ置給はんと云へば、女なく／＼、

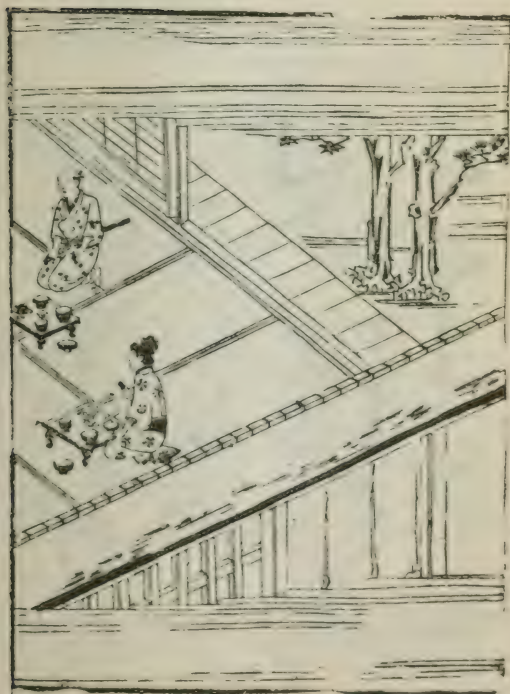
名ごりをも惜までいそぐ心こそ
　別れにまさるつらさ成けれ

と詠じて壁に向うて臥けるを、いかにいかにと呼べども／＼、はや事切れ果て、空しきからのみ床に殘れり。豐田悶え焦れ、泣き悲しめども甲斐なし。床に空しき衣をとりて、

移り香になにしみにけん小夜衣
　忘れぬつまと思ひしものを

さて棺に納め野邊に送らんとするに、棺甚だ輕かりければ開きて見るに、只衣のみ殘りて尸はなし。空しき棺を寺に埋み、佛事いとなみ懇に跡弔ひ、二たび妻を求めず。出家して四國九國を巡り、それより唐土の商人舟に便船して入唐しつゝ、その終る所を知らず。

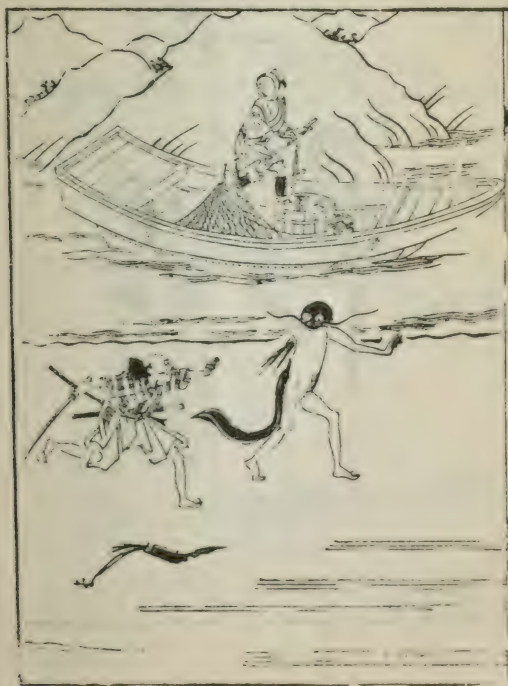
○七歩蛇の妖

京の東山の西の麓、岡崎より南の方、いにしへ岡崎中納言の山庄あり。久しく荒はてゝすむ人もなく、草のみ生茂りて茫々たる地なりけるを、浦井なにがし此地を買求めて家を作る。或人いふやう、此地は本より妖蟲の怪み有て、人更に住む事かなはずといふ。浦井是を信せず。家たちをはりければ、始て

移人たりければ、蛇の三四尺ばかりなる五つ六つ出て、天井の間に這ひめぐる。則ち下部に仰せて取捨てんとするに、此へびども鱗だち頭をそばだて、眼きらめきければ、僕共すさまじく思ひて退く。浦井大に怪しみて杖をとり突落し、桶に入て賀茂川に流す。次の日又蛇十四五出たり。又皆取すてければ、其次の日は三十あまり出たり。取捨つるに隨ひて益々多く出て、後には二三百に及ぶ。其大さ五七尺あまり、白き黒き、或は青き斑なる雨の耳そばたち、口は紅の如く、間又足ある蛇、其形龍の如くなるもの、日毎に倍々して、取れ共捨れども更に絶ゆる事なし。浦井不思議の事に思ひ、自ら香を焚き幣を立てゝ地祭をいたす。某此地を求め、金若干両を出して買得たり。是より此地は某がすむべき所なり。蛇何によりて障をなし怪みを現はすや。凡地の神には五帝龍王あり。其司る所各々職あり。如何でか其地に有て濫りに地の主を苦しましむる。龍王物知る事あらば、此蛇の怪異をはやく禳ひ給へ。然らずば神職の不敏ならん。然らば天帝の戒めのがるゝに道あるべからずと、書て讀上げたり。其夜地の底に物の騒ぐ音

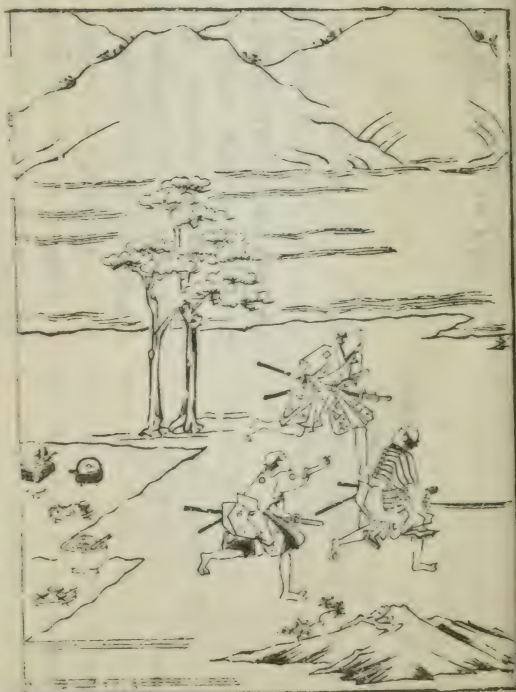
して、凄まじき事限りなし。夜あけて見れば、草むら悉く一夜の程に枯はて、大なる石ありて砕け傾きたり。家人等怪しみて青草の枯とまり、石の傾きたる所を掘返し、石を取退けしかば、長四五寸許の蛇はしり出て行く。其行所の青草目の前に枯焦るゝ。家人等追詰めて打殺しければ、蛇のたけ僅に四寸、色は紅の如く南の耳四の足あり。鱗の間は金色にして小龍の形に似たり。人に見するに、更にかゝる蛇は聞及ばずといふに、南禪寺の僧來りて曰、是は七歩蛇と名づく。もし人是にさゝるれば其儘死す。毒力烈しくて七足歩む。此事は佛經に見えたりとぞ語られける。是より後は蛇再び來らず。案ずるに多く沸出たる蛇共は、是七歩蛇の精なるべしといへり。

○鬼蛻吟

河内の國弓削と云所に、友勝とて鍛冶の侍べり。用の事ありて、大和の郡山に行て日暮方に立歸りしに、あまりに草臥侍べりしまゝ、山の傍に休み居たり。かゝる所へ或人馬に乘て、又一疋の馬には、鞍置ながら追立て打過る。友勝いふやう、是は河内の方へおわするやらん。さもあらば御馬一疋借し給へ、殊の外に道に勞れ侍べり。とても乘る人もなき馬なれば、我を乘せてたびてむやと云へば、馬の主、それこそいと易き事なれ。川の向ひの岸にて下りて給はらんには、それ迄は乘り給へといふに、友勝大に喜び打のりてゆく。川をのり渡して、岸に着き馬よりくだり、御なさけの程喜び奉るというて馬を返しければ、馬主鞭うち追立て、行方なく歸りぬ。友勝は日已に暮て後に、家に立歸りて見れば、妻の女房も子共其外兄弟一族悉く集り、膳を調へ食を設け、さま／＼もてなし遊び居たり。友勝歸りしかども人々見向きもせず。友勝我子共の名を呼び、我弟妹の名をよべども耳にも聞いれず、物語し酒飲み笑ひ戯む事もとの如し。友勝大きに腹立て、大聲を揚げどよみめぐれ共、更に知る人なし。餘りに腹を立て拳を握りて妻子を打擲すれ共、それかと思ひたる色もなく、友勝内におはしたらば、いよ／＼賑やかに侍べらんものをなどいうて酒飲ければ、友勝思ふやう、扨は我忽ちに空くなりて、魂ばかりこゝに歸り、妻子も一族も我をば見ざるらんと、泪を流して只泣になきければ、いよ／＼見る人もなかりければ、詮方

なく家を出て、村の外に出つゝ立休らひければ、さしも氣高き人、驪の馬にめされ冠を戴き、紫の直衣大紋の指貫着し給ひ、人あまためし連れ、鞭を以て友勝をさしての給はく、あれは未だ死まじき者の魂なり。思はざる外の事にさまよひ歩く者かなとのたまふ。こゝに赤き裝束に烏帽子着たる人來りて、弓削友勝は未だ定業來らざる者なるを、大和川の水神現れ出たるに馬を借たり。水神戯れて魂を引出し侍べり。只今本の身に返し納むべき爲に、我これまで參りたりとて、馬の前に跪きけり。貴人少し笑ひ給ひ、水神まことに道理もなき事に、人の命を誑かして、己が戯れとすることこそ安からね。明日必ず刑罰行ふべしとの給ふに、此者恐れたる氣色にて、急ぎ立寄て友勝を招きていふやう、馬上の貴人は是聖德太子也。常に科長の陵より出て國中を巡り、惡神を治め惡鬼を戒め人民を護り給へり。我はこれ水神の眷族としてこゝに來れり。汝を二たび人間に返すべし。暫く目をふさげとて、うしろに廻り推すと覺えて、大和川の西の岸に、夢の覺めたる如くにして甦り、起上りて家に歸りければ、妻子は待うけて大きに

喜び、今日は一門集りて遊びし侍べり。如何に夜更けては歸り給ふぞといふ。友勝聞て、我はかう〳〵の事ありけりと語るに、皆人聞て驚き怪しみ侍べり。

○魚膾の恠

大嶋藤五郎盛貞といふ者、應仁のころ牢浪して、能登の國珠洲の御崎に居住して時を待けり。其性常に生魚の膾を好み、是なき日は食進まず、人に語りけるやう、浮世にありて山海の珍味多しといへ共、膾の味に過たる物なし。終に又腹に飽かずと云ひしが、或日若き友達五六人入來り、濱邊にいざなひ出て遊びしに、風もなく浪靜かなりければ、浦人出て網を引くに、種々の魚多く漁り得て岸に漕歸る。大嶋是を見て、いざ買取て膾つくり料理調へ、今

日の思出せんとて、五籠六籠買取り、浦人の家に立寄り、料理の具かりよせ、濱おもてにむしろ敷、膾作り、大なる桶と鉢とに堆たかく入て、其外魚共種種にとゝのへ、五六人なみ居て飯食けるに、大嶋箸を取り膾を食ふ事一鉢ばかり、忽ちに喉に物の障るやうに覺えしかば、喝して吐出して見れば、大さ

豆ばかりなる骨也。其色薄色に赤して珠の如し、茶碗の中に入て、皿を以て蓋とし傍に打おき、又箸をとりて膾を食ざるに、未だ座中食し終らざるに、かの茶碗打倒れ、蓋も共に轉びけるを見れば、中に入おきたる骨の珠一尺ばかりになり、人の形と化して動き立たり。五六人の友達驚き怪み、目をすまして見ゐたれば、目の前に俄に五尺ばかりの男となり、赤裸にして大嶋藤五郎に取かゝる。大嶋側なる太刀を抜持て切つくれば、いなづまの如く閃き蜻蛉の如く飛めぐり、隙間を狙ひ拳を擧り、大嶋が首を擒と摸つ。又しばし戦うては、背を丁と拷つに、血流れて砂を染たり。大嶋終に太刀を打入てはたと切付しかば、腕首切落され、かきけすやうに失せたり。人々助太刀せんと犇めきけれ共、雲霧ふさがりて見え分かず、戦ふ音のみ聞えて、霧已に霽れて後、大島は朱になりつゝ、人々是見給へ、敵の腕首切落したり　ばけものは行方なく失侍べりと云を見れば、大なる魚の鰭を切落したる也。大嶋其儘絶入したりけるを、さま〴〵薬を與へしかば生出たりしか共、人心地もなく夢中の如くなりしが、漸愈てのち漸く元の如く性念つきたり。さて其時の事を問に、霧はかりおぼえずといふ。當座に語りけるにぞ子細は聞えし。これ魚の精現はれ集りて、此怪異ありけるにこそ。

伽婢子巻之十一終

伽婢子巻之十二

○早梅花妖精

信州伊奈郡開善寺の早梅花は、名におふたぐひなき名木にて、未だ冬至の前後より唉初て、清香四方に薫ず。近郷隣村の人、心ある輩は日毎に集り見る。元より信州は陰氣がちにして寒國也。冬は雪深く消ぬが上に又降り積み、嵐烈しく吹すさびて、なべての草木はいとゞ遲く萠出るに、此寺の早梅花は、げにも花の兄として、清寒に堪て綻び出つゝ、更に其時を違へず。誰か誠に賞せざらん。その比村上頼平の家人埴科文次といふ者、心ざま情深く、武を學ぶ暇には敷嶋の道を慕ひ、軍陣の砌にも陣所の風景面白きところにては、一首を綴りて思ひをのべ、諸軍の興を催させけり。斯るやさしき男子なりければ、人更に惡しくも思はず。其比甲州の武田信州の村上、兩家爭ひを起し陣を張り戰ひを決す。或時出陣のついで、開善寺の梅今を盛りと聞えしかば、文次夕暮方、中間一人具して陣中をしのび出て、かの寺にうかれ行つゝ、香を尋ねて花に嘯き、南枝向暖北枝寒、一種春風有兩般といふ古詩を吟じける。月すでに山の端にのぼり、花に映じてえならず覺えければ、

ひゞき行鐘の聲さへ匂ふらむ
　　梅さく寺の入りあひの空

と打詠じをる所に、此邊には思ひかけず見馴もせぬ女姓一人、女の童一人具して出來れり。年のころ廿ばかりと見ゆ。白きこうちぎに紅梅の下がさね、匂ひ世の常ならず月にえいじ、花に向ひて、

　ながむればしらぬ昔のにほひまで
　　おもかげ殘る庭の梅がえ

とよみて少時休らひ居たり。文次是を聞に、あやしみながら堪かね、近く立よりて袖を引きつゝ、今宵の月に光を爭ふは庭の梅のみか、君が姿と袖のかをりも、同じ心に覺え侍べりなんど戲るれば、女さしも驚きたる色なく、梅が香にいざなはれ月に嘯く此夕暮に、やさしき人に逢奉ることこそ嬉しけれとて、しめやかにもてなしける氣はひ、此世の人とも覺えず。文次則ち中間に仰せ

て酒うる家を尋ねさせ酒買求め、御堂の軒に坐して數盃を傾け、醉に和して語らひよりつゝ、

袖のうへに落て匂へる梅の花
枕に消ゆるゆめかとぞ思ふ

といひければ、女返し、

しきたへの手枕の野の梅ならば
ねての朝けの袖ににほはむ

と詠て、互にわりなく契りけるが、數盃を傾けし醉にふして、夜已に明方になり、東の空横雲たなびきければ、夢驚き眠さめて起あがりしに、文次只ひとり梅の木の本に臥て、女もめの童も何地行けむとも知らず。明渡る空に群鴉の鳴聲ばかり、月は西に落て名殘は我身にとゞまれり。昔もろこしの崔護と云人、或所の門の内に、桃の花盛りに咲けるを見たりしに、女二人來りて、諸友に酒のみ哥うたひしを、又來春も爰にて逢んと契りしが、次の年の春其所に行けるに、女更に見えざりしかば、門の戸の扉に、去年今日此門中、人面桃花相映紅、人面不レ知何處去、桃花仍レ舊笑二春風一と云詩を題して書付たりとかや。夫はもろこしのためし是は此國の事也。又後をいかにとか契らむ。人ならば又巡りも逢べきに、是は疑ひもなく、庭の

梅花の妖精なるべしと、袂に殘る移り香の、さながら梅花の薫りにたがはぬぞ奇特なる。かくて陣屋に歸りても、猶其面影の忘れ難く、夕暮になればそぞろに戀しく、涙の絶るひまなし。

梅の花にほふ袂のいかなれば
夕ぐれごとに春さめのふる

物あぢきなく、世にすむかひも有明のつきせぬ思ひにくづをれて、こりつむ柴の歎きせむよりはとて、其次の日打死しけり。

○幽靈書を父母につかはす

江州東坂本に、正木のなにがしが娘龍子は、いとけなくして才智あり。親もとより有德なりければ、いつくしみ育て、哥雙紙の道敎へたるに、いつしか容貌美しく、心ざまも情深し。其隣に芦崎なにがしが子に、數馬といふ者は龍子と同じ年にて、いとけなき時は一つ所に遊びけるを、時の人みな戯れて、此同じ年なる子は後必ず夫婦となすべしといふを、幼なき心に互に思ひしめて、此人ならではとひそかに許しけり。年たけゝれば出て遊ぶ事もなし。數馬は山にのぼせて兒となし、龍子は窓のもとに隱

れすみけり。數馬或時家に歸りつゝ、哥を書て遣す。

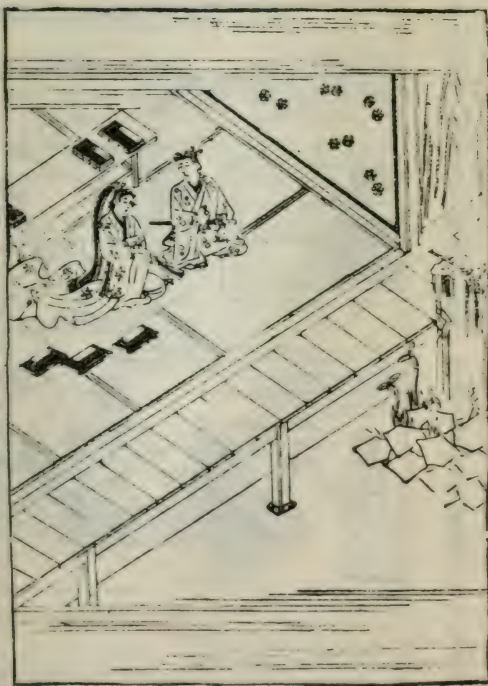
人しれず結びかはせし若草の
　花は見ながら盛りすぐらむ

しるらめや宿の梢を吹かはす
　風にかけつゝかよふこゝろを

龍子是を見るに、限りなく嬉しと思ふ中に、又思ひくづをれつゝ、返しとおぼしくて、

月日のみ流れゆく〳〵淀川の
　よどみ果てたる中の逢瀬に

今はかく絶にしまゝの浦におふる
　みるめをさへに波ぞたゞよふ

年十七になりしかば、親然るべき人聟にせんとはからひけるを、龍子更にうけごはず、湯水をだに斷て泣臥たるを、ひそかに間はせたりければ、西隣の數馬に約束しける事あり。是にゆかずば死すべし、他所には更に行べからずといふ。親この上はとて隣になかだちを入れ、かう〳〵といはせしか共、正木は有徳にて籬崎は貧しければ、數馬容かたちうるはしく、美男にて才智あり

とはいへども、いかで其緣を結ぶの相待ならんとて、親しば〳〵辭しけれ共、娘の思ひかけたる所也。又それ有德なるを以て緣を結ばゞ、金銀財寶を聟に

する也。婚姻に財寶を論ずるは、夷虜のえびすの道也といへり。我等更に財寶を聟にはとらず。數馬が人がら才智利こんなるを以て、聟にせんと云事也とて、しひて吉日を定め、其いとなみは娘の方より整へ、其日に至りて迎へつかはしければ、心の儘に夫婦となり、忍ぶべき關守もなく、嬉しさ限りなし。

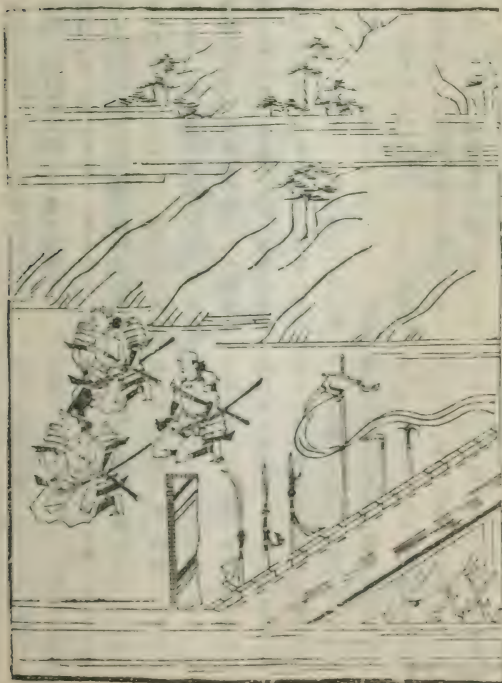
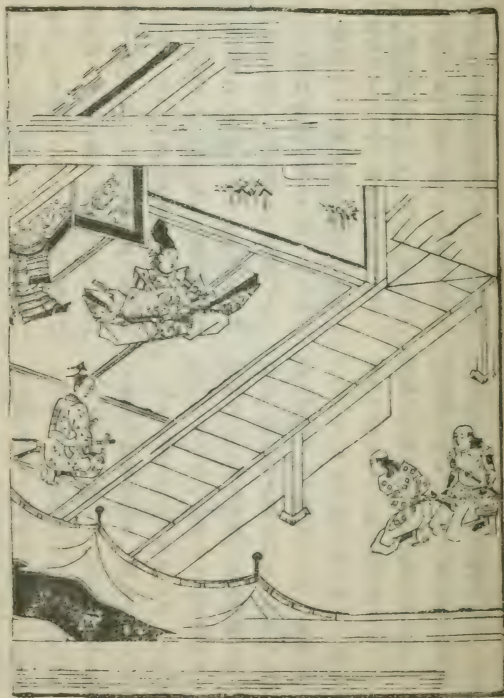
龍子、

ひとり寢のまどにさし入月かげを
　諸ともに見る夜半ぞうれしき

といひければ、數馬、

夜な〳〵はかこちて過し窓のもとに
　ともにながむるありあけの月

夫婦の契淺からざる事、比翼の鳥の空に飛び、連理の枝の地に結びたるも、譬とするにたらず。僅に半年ばかりの後に、織田信長江州に打出、山門此時にたてをつきしを、元龜二年九月十二日、叡山日吉山王に至るまで皆燒滅ぼさる。此故に坂本の民屋まで亂妨騷動して、四角八方に皆ちり〳〵になりたり。龍子は信長の家臣佐久間右衞門尉信盛が手にとりものとなりて、初めは行方を知らず。後に淺井朝倉ほろびて、江州物靜になり、人民おのれ〳〵が故郷に歸り住て、暫く安堵したり。數馬は妻の龍子が行衞を尋ねんとて、父母に別れをとり、もしめぐり逢はずば二たび家に歸るべからずと誓ひをおこし、比叡辻に出たれば、人のいふやう、正木が娘龍子は、佐久間に捕れて陣中にありと聞て、河内の國高屋の城に赴きしかば、交野の城おちて江州小谷に行たりといふ。又江州に行しかば京都にありと聞ゆ。方々その所定まらず、こゝかしこに馳向ひ、終に天正八年正月に聞けるやう、佐久間は大坂門跡の籠城につき、天王寺の陣に屯し、七ヶ國の軍勢を從へ居たりといふ。これより攝州大坂にくだり、天王寺の陣に赴きしかば、年月重なり諸國を尋ねめぐりしかば、衣は破れて鶉の毳の如く、かたちおもがはりして色黑く瘦せつかれ、野にとまり草に臥し露にやどかす袖の上、涙は更に置爭ふ。すでに天王寺の陣に行ければ、軍兵そばだち番手きびしく、數馬恐ろしながら立やすらひ、隙を窺ひて問はんとす。番の足輕共あやしみて、これはいかさま敵のはかりごとをもつて、陣中のありさま見せにつかはしぬらん。其儀ならば一足も逃すな、搦捕りて首をはね、見せしめのため札をそへて阿部野にさらせやとて、我も我もと走り出て、打ふせ押倒して高手小手にいましめ、大將佐久間にこのよしいひ入たり。佐久間聞きて、四人こなた

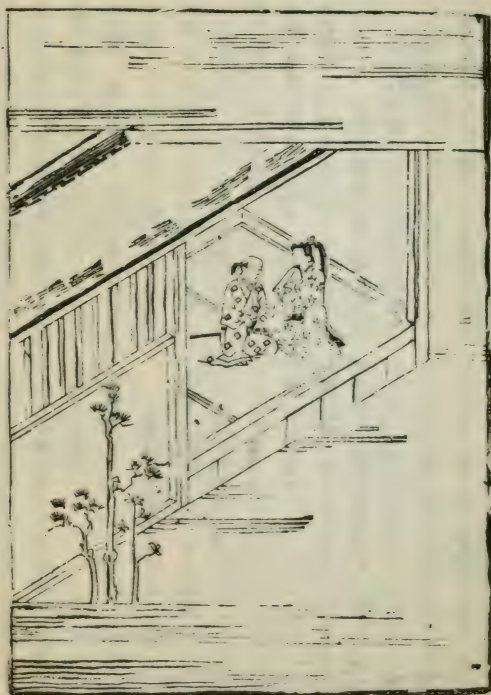
へつれて來れ。子細を尋て後にともかうもはからふべしとて、本陣に召よせ、信濃出向うて、汝は大坂籠城の者か。いかなる子細によりて此陣に來りうかがひける。ありの儘に白狀せずば、水火の責に掛くべしといはれたり。數馬少しも恐れたる色なく、只今此大事に及びて陳じ申にはあらず。ゆめ〳〵敵方より來りて此の陣中をうかゞふ者にはあらず。これは江州東坂本の土民、蘆崎のなにがしが子數馬といふ者也。叡山喪亂の砌り、一族悉く八方に別れちりて行方なく、此程漸く國中靜になり、地下の土民歸住みて安堵せし所に、我妹龍子一人歸り來らず。人に問へば君の陣中にありといふ。これより諸方に尋めぐり、只今爰に來り侍べり。願くは一目逢せてたび給へかし。然らば死すといふとも、何をか恨み侍べらんとて、涙をはら〳〵と流す。さて年はいくつ許と問へば、其時は十七歳、それより九年を經たれば廿六歳になり侍べりといふ。扨はとて陣中の女房共を尋ねしかば、年も名も國も所も同じく、數馬がいふに替らぬ女あり。哥よく詠み手書き、智惠利こんなりければ、信盛これを寵愛して置きたり。さたがふ所

なくそれなりとて縄をときゆるし、道場に呼入て龍子に逢はせしかば、龍子も我兄也といひて數馬に對面し、一目見るより、あれはそれかといひもはてず涙を流し、泣より外の事なし。信盛曰、久しく諸方を尋ねめぐり、關を越え咎めを凌ぎ、さこそ侘しく心つかれ力衰へぬらん。此陣中にして暫く休息せよとて、新らしき小袖一かさね出し、小屋の内に置て旅のつかれを休めらる。次の日信盛いひけるは、汝が妹よく雙紙を讀み哥をもつゞる。汝も定て手書き物讀むかと。數馬答へて、それがしいとけなきより山門にのぼり、佛經外典怠りなく學し、詩文のかたはしよろしからねどもつくり侍べり。手も亦をかしげながら、なべての人には劣り侍らじといふ。信盛大に喜び、我れいとけなき時より武藝に心をよせ、諸方の陣中に日を送り、學文手跡の事は手にも取らず。此故に今諸方の書簡、又は一篇の詩哥を贈られても、更に和韻返哥の事に及ばず。手の郎從の中にもこれなし。今幸ひに汝その道を得たり。我が陣中に居てその事の職勤めて得させよと也。數馬嬉しくて、ともかうも仰にしたがひ奉らむとて、はや二百貫の知行に

つけられ、上を受け下につたへ、書簡飛札みな信盛が心の如くとゝのへたり。軍中の諸兵いづれも、重き人に思ひかしづきて、おなづらはしき色なし。されども數馬は是を嬉しとも思はず、妻が行衛を尋ね求むる爲にこそ、身をも省みず命をも惜まず、これまでも來りけれ。一たび逢ひ見て後は重て見る事も叶はず。内外隔り互に心ばかりを思ひ通はし、忍びの涙を袖につゝみながら、月を越ゆるほどに、卯月の衣更になりければ、垢付たる小袖をぬぎて、人を賴みて妹につかはすといはせ、哥一首書て衣裏に包み入れたり。

色見えぬこれや忍ぶのすり衣
　思ひみだるゝ袖のしら露

龍子これを取て、衣裏の綻びを廣げしかば哥あり。大に悲しくて、聲を忍びの泪おさへ難く、返しとおぼしくて小紙に書つけ、夏のかたびら遣すといふて、衣裏もとに縫ふくめて遣りける。

いかにして行て亂れむ陸奥の
　思ひしのぶの衣へにけり

數馬此返しを見るに、胸悶え心消えて思ひ歎きしが、其つもりにや重き病に沈み、今を限りと聞えしかば、龍子は佐久間に申して兄の病重くして、今は限りと聞侍べり。願くは此世の名ごりに、今一たび見まゐらせばやとてなきければ、許し侍べり。急ぎ小屋の中に行たりければ、前後わきまへず吟ふしたり。龍子枕もとに立寄り、如何にみづからこそ只今爰に參りて侍べれといふに、數馬むく〳〵と起あがり、龍子が手をとり大息つきたるに、泪は雨の目に餘り、容に流れかゝりつゝ、物をも得云はで口ばかり動くやうにて、其儘絶入て空しくなる。佐久間あはれがりて、天王寺のうしろの山もとに送り埋み、僧を雇ひて弔はせけり。龍子はなく〳〵我住方に歸り、湯水をだに聞いれず、引かづきて臥しけるが、其夜より心地惱みて藥をも飲まず、只なきに泣つゝ、空に向ひ地に伏して大息のみつきて、次の日の暮がた佐久間にいひけるは、みづから家を離れ君にしたがひ參らせ、年を重ねて他國を巡り、親しき者とては一人もなかりしに、只兄のみ一人尋ね來て、これさへむなしくなり侍べり。此かなしさは生を替ても忘れ難く侍べれば、今は命も極まれり。みづから死なば兄のそばに埋みてたべ。黄泉のもとにして、せめて同じ所にめぐり逢ひ、年月の憂さつらさ語り慰む事もがなと、他國にさまよふ便りを求めむとて、その息絶えむなしく成たり。佐久間は世に痛はしく思ひて、其心ざし望みたる

に逢はず、數馬が塚の左に並べて埋みつゝ、龍子が衣裳殘らず寺に送りつかはし、あとよく弔ひけり。同じき六月に大坂門跡の籠城、あつかひになりて開退ければ、佐久間も天王寺の陣を拂ひて歸りしかば、今は少し物靜になり行かと覺えしに、龍子が江州の家に久しく召使はれし下人彌五郎、商人と成て世を渡るわざとし、大坂より和泉の堺にゆくとて、天王寺邊を打過ければ、東の方の山ぎはに新しく立たる家あり。數馬と龍子と門よりつれ立出て、如何に彌五郎にてはなきか、道のたよりに立寄れかし、故郷の事もゆかしきにとて呼びかけたり。彌五郎立もどり手をうちて、故郷には數馬殿の御父母は、とくむなしくならせ給ひ、その跡は舅にておはする權七殿こそ繼がせ給へ、龍子公の二人の御親は恙なくて、只御人の行衛を聞かまほしく朝夕は泣しをれて神ほとけに祈り給ふに、などやとく〳〵歸り給はぬと語る。龍子、さればとよ、故郷のゆかしさいふばかりなければ、世につかふる身は心の儘ならねば、それも叶はずといふ。彌五郎は急ぐ事のありて早く歸るべきに、文一つ遣はし給へと云へば、まづ今宵はこゝに

とゞまりてよとて、酒進め物食はせなどして、夜もすがら物語りしつゝ、はや明方になりければ、彌五郎は旅立空に出てかへる、親子文こまぐ\と書て渡しぬ。坂本に歸て正木夫婦に文を參らせかうぐ\と語りしかば、親かぎりなく喜び、急ぎ文を開きて見れば、文の言葉文字のくさり手の書流したる、疑ふ處もなき娘の文なり。其言葉には久しく年へて、たまぐ\彌五郎見え來たり、故鄕の事聞につけて嬉しきが中に、戀しさやる方もなく侍べり。朝な夕なそなたの空に棚引く雲霞も、思を起すなかだちとなり、秋來る鴈金も、便りの文は傳へぬかと侘られ、そゞろに落る涙の袖今はみな朽果て、彌五郎にまみえし嬉しさを、何に包まんとのみ思ほゆ。わが身は父のうみて母の育てける、深き惠みは海も數ならず。高きいつくしみは山も物かは。夫いざなひ妻したがふは、女の身の習ひ人の世の定め也。往日は山崩れ嶽傾き、日の色は煙におほはれ、みづうみの波は焔に燃ゆ。身を焚き命をのがれんとて、したしきがゆき別れ、塵の如くとび霰の如くわかれて、皆ちりぐ\になり、互にゆくさき知り難し。みづからは佐久間とかや恐ろしき武士にとられ、或時は交野の陣に肝を消し、或時は中嶋のいくさに胸を冷やし、國の數々從ひ巡り、なみだにのみ浮沈みし、恨を心に隱しおそれを身にうけて、春の月朧ろに秋の風凄ましく、寢られぬ枕の上には夜の衣をかへせども、夢をだに結はず、時移り事さりて我を尋ぬる人に逢へり。更に春を尋ぬるの遲き恨みはなしに、門の前の柳風に折られて二たび枝出つゝ、斷たる絃かさねて繋ぎければ、又君の賜ありて、づかふる道に立歸るべき私を忘れ、日重り月延て今日になりぬ。出ずれ絶えたる不孝のとが、恩を忘るゝに似たる事をば、枉げてゆるし給へなど書て、奥に

田鶴のゐるあしべの潮のいや增に
　袖ほすひまもなくぐ\ぞふる

二人の親是を見て、その比別れてよりたよりのつてをだに聞かず。今は世になき人の數にや入ぬらんと、心もとなく悲しと思暮せしに、まことに日比いのり申せし神ほとけの利生ぞやとて、嬉しなきになきけり。父のいふやう、急ぎこゝに迎へて年比の歎きをも慰め、見えもし見もせむとて彌五郎に案内せさせ、急ぎ天王寺に赴きしに、棟門立たる家ありと覺えし所には、只草茫々と生ひ茂り狐はせ巡り、道もなき山の麓に塚二つ並

びてあり。こゝかしこ見めぐらせ共、それかと覺しき家はなし。一町餘りの西に寺あり。こゝに行て僧に尋ねしかば、其塚は佐久間信盛の陣中より葬禮したる、蘆垣數馬正木氏龍子兄弟の塚なり。又そのあたりに、人のすむべき家はなきものをといふ。父驚き娘の文を取出して見れば、文字もなく墨もつかぬ白紙にてぞ有ける。父悲しさのあまり塚のもとに打倒れ、人目をも耻ず聲をばかりに泣居たり。我はるぐ\とこれまで來る事も、一目逢んと思ふにぞ、いかに此つかに埋もれて、跡を隱しけるこそ悲しけれ。老たる父が心を知らば、姿をみゝえて此物思ひを慰めよかしとて、其夜はそこにとゞまりしに、夜半ばかりに夢ともなく、數馬と龍子と現れ出て、涙をながしつゝ、そのかみの事共語り、跡よくとぶらひて給へと

いふ。父夢心地に、我こゝに來る事は、迎へて故郷に歸らん爲也。よしさらば空しき戸なりとも、つれて故郷に歸りなむと云に、いやとよ、此地に埋るゝも地府の定あり。又物部にしてすむによろし　故郷にうつし歸されんには、苦み重なる事侍べり、埋みし塚をば二たび餘所に移さぬものぞや、地府の定

めし御とがめその亡者にあたりて、苦しみを受る也、只此まゝ置てとぶらひ給へとて、父にとりつきなきけるよとおほえて夢はさめたり。なく／＼僧を雇ひて塚の前にして、供物をそなへ、經よみつゝ跡よくとぶらひ、涙ともろともに立別れて、坂本の故郷に立歸りし父が心、見る人きく人皆あはれがりて涙をながす。坂本に歸りても思ひのつもりにや、夫婦の親いくほどなく身まかりぬ。

○厚狭應報

陶尾張守晴賢は、大内義隆の家老として、不義をくはだて主君義隆を追出し、みづから山口の城に居て分國を押領す。其の威やうやく強くして大軍靡き從ひ、今は世の中恐るゝに足らずとぞ思ひける。周防長門の諸將諸侍等弓をふせかぶとをぬぎて、從ひつく事いふばかりなし。中に周防の國には吉城大嶋、長門の國には美禰見嶋の諸侍等、はじめは從はざりけるを、今は時世にまかするぞよき、忠義ありとても誰か身を安くしたる、無用の忠義に身をせばめられむより、只降參せよとて皆

その陶に降參す。その中に長門の國の住人厚狹彈正なにがしといふ者は、そのかみ義隆に恩をかうぶれり。一旦は降參すといへ共、是は當屋形をうかがふ謀なるべしと讒する者あり。陶げにもとおもひ厚狹をからめとりて、鎖をもつて柱に縛りつけ、四方に炭火を起し火あぶりにす。陶いでてこれを見る。厚狹甚だ苦しみ大きに聲をあげ、我すでに降參す、何の罪によつてかくからきめ見する。死してのちも物知る事あらば、此報なからめやとて燒爛れて死す。陶うちわらひ、火責の厚狹さてこりよといふ秀句して、その尸を野に棄たり。半年ばかりの後、常に陶が座の右に厚狹來りて見ゆ。陶大きににくみきらひしが、安藝の國宮嶋の軍に、毛利家の爲に打破られたり。その時厚狹甲冑を帶じ、鹿毛の馬にのりまつさきに進み、陶を馬より突落せしと、近き軍兵共はまのあたり見たり。これより陶終に合戰に利なくして、敗潰したりとかや。

○邪婬の罪立身せず

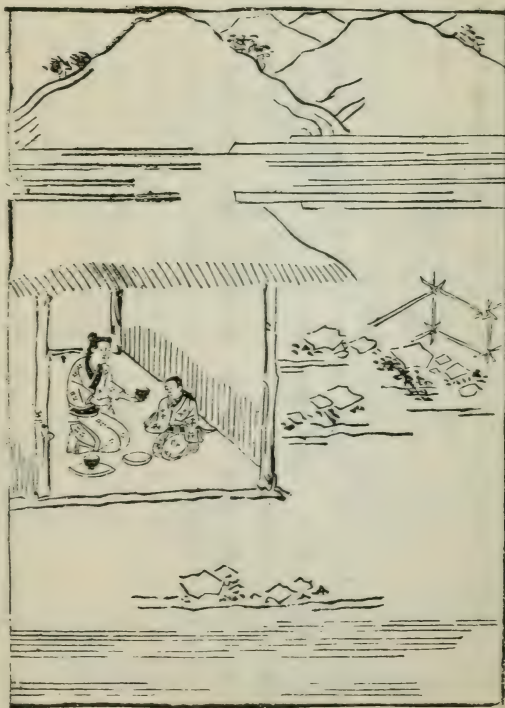
白石掃部正は、鎌倉の上杉家に仕へて

足輕大將なり。その子右衛門尉は年已に廿三、父にしたがひて同じく奉公を勤めんとす。より〳〵言上して、已に目見えせん事を定めらる。その借たえ家に娘あり。年十七八、みめ甚だうるはしかりければ、右衛門尉心を掛てさま〴〵つくろへども、家のあるじみだりなる事をばきびしくきらひて、夜ともても物音少し聞ゆれば、咎めあやしみて用心せしかば、遂に逢ふ事叶はず。右衛門尉たゞ此女にまどひて、奉公の心ざし傍になり、とかく透間を窺ひし處に、明日は上杉家の御目見えとて、親も嬉しく取まかなふ。其夜しも家のあるじ、一族の中に急用ありとて出行つゝ、夜ひとよ歸らず。右衛門尉よきひまぞと思ひ、ひそかに娘の部屋にしのびて心ざしを遂げ、喜びに餘りけり。かくて我臥戸に歸り、まどろみければ、

青き狩衣に烏帽子着たる男一人走り來りて、一紙の折紙を捧げ、明日必ず一千石の奉祿にあづかるべしと云所に、赤き装束に立烏帽子着たる男一人、跡より走り來り、大に怒りたる氣色にて夜の折紙を奪取り、右衛門尉はまさなきよこしまの私事せし故に、天帝大に怒り給ひ、奉祿の符を取返し給ふなりと

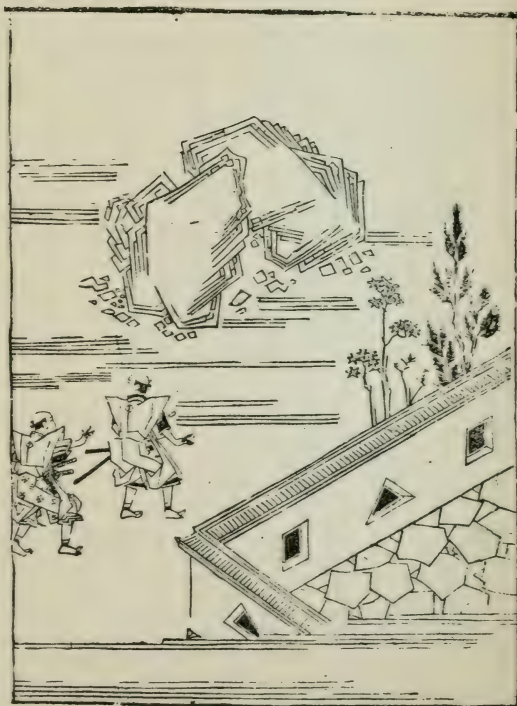
て、夢は覺めたり。次の日、右衞門尉父子うるはしく出立、遠侍に伺公せし所に、管領立出たまへば、なにとかしたりけむ、右衞門尉、深く眠りて前後も覺えず、管領の出給ふをも知らず。かゝる不覺人は物の用に立べからずと、諸人かたぶきいひしかば、終に召抱へられず。父掃部は是を恨みて、暇乞うて發心しけり。右衞門尉は、一期の內身上片付かで、流浪逐電の者となりぬ。されば人の身上かたつくべきが片付ざるは、更に世を恨み人をかこつべからず。只我身に省みて、我すまじき事をすれば。天道憎みて、官位奉祿皆心に叶はずといふ。

○盲女を憐て報を得

永祿戊辰十二月に、武田信玄軍兵を率して駿州に赴き、今川氏眞を脅かし城下の民屋を燒たて、氏眞を追落して駿府を奪取給へり。城下の諸民慌てふためき資財雜具を取運び、我先にとにげ惑ふ。其間に大軍押來り、家々に込入り財物を掠め、落人を打伏剝取り、手に持たる物皆奪ひ、切たふし追落し、男女なき叫ぶ音聲の聲に和して、天地も崩

る丶ばかり也。かくて燒靜まり城落て、氏眞は行がたなく、信玄勝利を得て府中の掟をいたされしかば、地下人はら家に歸る。か丶る所に町家の燒跡なる溝の中に、年七八歲ばかりなる女子ありてなき叫ぶ。父よ母よ姊よ、我を捨ていづくに行給ふぞ、我には食も湯もたべぬか、あな悲し、あな怖ろし、飢て渴たるぞや。あな苦しとて、聲をばかりになき叫ぶを見れば、目のしひたる女子也。隣の家に住たるやもめの女房歸り來りていふやう、あなかはゆや、此娘は、三歲の時疱瘡をうれへて眼に入つ丶、兩目ながら盲たり。二人の親此娘の智惠かしこきを憐み、常には法華經の藥草喩品、觀音普門品を敎へて誦せしめたり。殊更にいとほしみ育て侍べりしを、此頃父は、三浦右衛門に惡まる丶事ありて、非分の科を被り、牢舍させられて牢屋にして死す。母是を恨みて、病つきて打續き死す。姊これを育て侍べりしに、今度のみだれに流矢に當りて死す。城落て後は一族散々になりて、此娘の事知る者なし。か丶る者を見捨侍べらば、溝に倒れて飢死べしとて、淚と共にいだき起し、元より孀なり、亂に逢うてあらゆる物皆失ひ、此盲女を養ふべき力はなけれ共、いとかはゆく見捨て難く、我背中に舁負ひ薦張の小屋に置つ丶、粥少しづ丶食せ、いかに和御前が父母は、かう〳〵の事にて疾死せり。姊は此程のみだれに矢に當りて死す。みづからかはゆく見捨がたさに、こ丶につれて歸り育て侍べるぞやといふに、此盲目是を聞より悶え焦れて歎き悲しみ粥をも食はず、夜晝啼叫び終に絕入て死けり。孀の女房大に憐み歎きて、薪を拾ひ燒殘りし燼を集めて火葬したりければ、盲女子の帶に金子二兩をつけてあり。孀の女房是を取て、佛を供養し佛事いとなみ、黃金の有限り皆佛道に布施したり。斯て十日ばかりの後に、我家の內にして黃金十兩を拾ひ得たり。此由信玄聞傳へ給ひ、か丶る心ざしある女房は未だ世に稀也。我身のわびしきに加へて、盲女を養ひ、又黃金を得て我德分とせず、佛道に布施する事たぐひなき廉直の女也。奉行頭人に是あらば、昔の靑砥左衛門に替るべからず。天道憐みて黃金十兩を與へ給ふなるべし。是を公義に召取らば冥慮も恐ろしとて、信玄より家を建て孀の女房にとらせらる。是故に德付て、ともかうも緩やかに世を渡りけると也。夫世の人其家富榮えて、金銀豐なる時は、禮法をも知り義理をも勤む。正直にも見ゆるもの也。家衰

へ身貧しければ、おのづから無禮になり、義理を棄て徳に就き物を貪るは、世の常の人の心ぞかし。されはかゝる亂れに逢て、家は燒くづれ資財は失ひ我身すがらになり、其日だに暮し兼ね實に侘しき中に、かの媢の女房慈悲深く盲女を育ひ、又死したるを棄ず、薪を拾うて火葬し、黄金を得て佛事を營む。更に我身の爲にせざる事、誠の心ざし誰か感せざらん。此故にこゝに記して教の端とす。今の人若し利を見て義を忘れ、德によりて邪をなさば、此媢の女房のため、耻かしき罪人ならずやといふ。

○大石相戰

越州春日山の城は、長尾謙信の居住せられし所也。謙信已に死去せらるべき前かど、城の内に大石二つあり。或日の暮方にかの二つの石、躍り上り〱頻りに動きけるに、人皆恠しみ見侍べり。忽に一所にまろび寄てはたと打合、又

立のきて躍り動き、又打合たり。大石の事なり。如何なる故とも知がたし。只恠しき事に思ひければ、人々いかにともすべき様なし。夜半過るまで戰ひて、

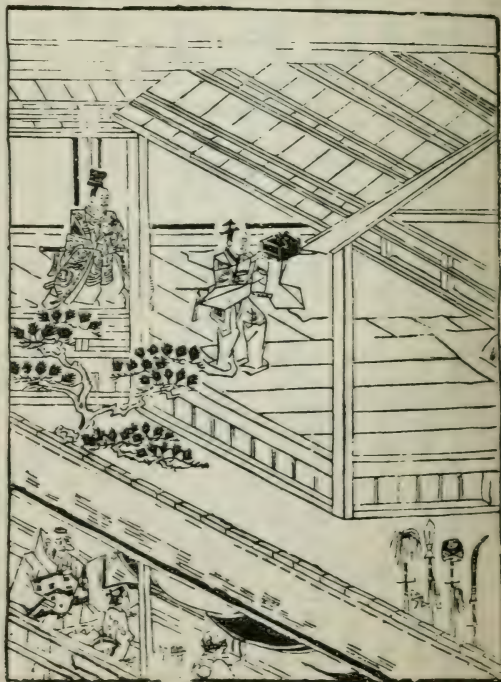
其石缺損じて散飛ぶ事霰の如し。終に二つの石、諸友に砕て扨止みにけり。夜あけて見れば其あたりに血流れたり。是只事にあらずと思ひ恠しみける所に、謙信病付給ひ終に空しくなり給へば、兄弟跡を争ひ、本城と二の曲輪(くるわ)と両陣たてわかりて軍ありける。其しるし成べしと後に思ひ合せしとぞ。

伽婢子巻之十二終

○天狗塔中に棲

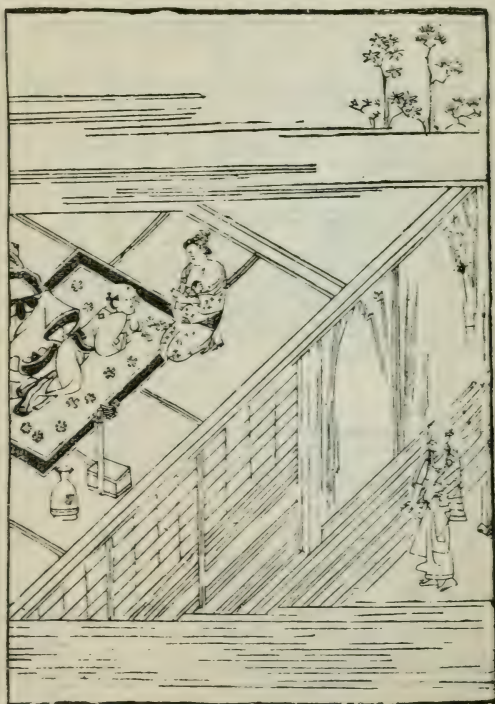
寛正五年四月に、都の東北糺の川原にして、勸進の猿樂能あり。觀世音阿彌、同じく其子又三郎を太夫として狂言師役者多し。此比の見物なりとて、京中の上下足を空になし、諸人蟻の如く集り、星の如くつどひて是を見物す。將軍家も三たびまで、棧敷構へさせて御覽あり。大名小名似合々々に、絹小袖金銀を出し與へらる。其積上ぐる事日毎に山の如し。或日將軍家には出給はず、大名がた風流を盡す。若殿原達棧敷を並べて、其前には家々の紋印したる幕打たせ、芝居には上下の諸人堰合ひ揉合ひて座を爭ふ。其間に樂屋の幕打上げ、三番叟の面箱捧げ、しめやかに階がゝりをねり出てたり。諸人靜まりて見居たる所に、棧敷の東のはしより火燃出て、折ふし風烈しく吹ければ、百餘間の棧敷一同に燒上る。內に持運びたる屛風簾、其外破子樽臺の物、にはかの事なれば取退くるに及ばず。後には舞臺樂屋までも同時に燃上りしかば、見物の諸人あはてふためき、我先にと出んとする程に、四方嚴しく結まはしたる垣なれば、鼠戸一つにてせき合ひ揉あひ、踏倒し打轉び、女わらべは手足首を踏折られ、蹴わられ、傍には首髪小袖に火燃えつき、燒死する者も多かりし。甲斐甲斐しきものありて、四方の垣を切ほどきしにぞ、やう〳〵にのがるゝ人多かりし。かくて燒靜まりしかば、將軍家の仰せによりて、諸大名承り、一夜のうちに元のごとく、舞臺棧敷外垣までも作り立らる。まことに大名のしわざははからひがたしと感じながら、女わらべ地下の町人ばらは、きのふに懲りて行ものなし。されども諸國の大名小名、御內外樣中間小者ばらまで皆行ければ、棧敷も芝居も猶にぎやかに込合たり。され共喧嘩口論もなく無事に仕舞せし處に、其燒けたりし夜より、都のうちに迷ひ子を尋ぬる事、十四五人に及べり。或は東山北山上加茂わたりの子ども、かの騷動に方角を失ひ逃げまどうて、足にまかせて行迷ひたる者共なれば、皆尋ね出して歸りしに、上京今

出川邊に、町人の子に次郎といふもの、年十二にして行方なし。親悲しがりて、人多く雇ひ諸方を尋ね、山々寺々を巡り求るに是なし。廿日ばかりの後に、東山吉田の神樂岡に、忙然として立て居たるを見付て連て歸りしに、四五日の程は物をも食はず、只湯水ばかりを飲て、うか〱として物をもいはず坐し居たり。其後やう〱人心地つきてかたりけるやう、糺川原に出たれば、五十あまりとみゆる法師の云やう、汝猿樂の能を見たく思はゞ我袖にとりつけとて、左の袂に取付かせ垣を飛越えたり。汝物いふなとて、或大名の棧敷につれてのぼられしに、大名も御内の侍も、更に見咎めず物もいはず。かくて何にても喰べきかと仰られ、酒肴菓子まで取て給はるを打喰ひけれども、人々見もせず咎もせざりし處に、棧敷の並たる家々の幕打廻し、大に奢りたる體なりければ、此法師、あなにくやあな見られずや。何の事もなき奴原の驕くひそらし、我は顔なる風流づくし、鼻の先うそやきたる有様かなとひとりごとして、汝は此者共のうろたゆる躰を見たく思ふか、いでさらば、動き亂れてうろたふる躰見せんとて、我をかきいだき舞臺

のやねにあがり、なにやらん唱へられしかば、東の棧敷より火燃出て、風吹まとひ、百餘間の棧敷一同に燒あがり、貴賤男女上を下へもて返し、騒ぎ亂れうろたへまどうて、あやまちをいたし疵をかうぶり、死する者甚だおほし。舞臺も樂屋も燒ければ、法師我をつれて川原おもてに出つゝ、扨見よやとて手をたゝき大に笑て、今は心を慰みたり。是より我住かに來よとて、法勝寺の九重の塔の上に昇り、内に入たりければ何もなし。只獨古錫杖鈴を、怖ろしき繪像の佛のやうなる、羽ある者の前に置れたるばかり也。或日は我を塔の中に置ながら、我ばかり出て地にくだり、法師の姿にて人に行逢ては、或は腰をかゞめて禮をなし、或は頭を打はりなどして通り、又は人の容に唾を吐かけ、又は人の背を突て打倒しなどするに、其人共更に目にも懸けず、咎めもせず 或は兩方より來る人の首髮もとゞりを摑て、二人を一所に引寄するに、此二人俄に刀を拔て、打合ひ切合ひ、手を負うて朱になるもあり。日毎にかゝる事共いくらといふ數を知らず。其外江州勢田の橋に行て螢を見、賀茂の祭松尾の祭禮、此頃見るといふ事あれば、つれて行つ

つ見せられたり。我問やう、出て行給ふ道に人に逢て禮をなし給ふは、誰ぞといへば、それは道心高く、慈悲正直に信心あつき人也。此人邪欲名利の思ひなし。善神身を離れず諸天從うて守り給へば、恐れて禮をいたせし也。又かしらをはりて通りしは、或は金銀財寶多く持て貧しき人を侮り、生才覺ありて愚なる者を下し見る、少しの藝能あれば、是に過じと自慢する奴原は、面の惡さにかうべをはりて通る。又脊中を突倒しけるは、小學文ある出家の內には、道心もなく慈悲もなく、重邪欲に餘り、外には學文だてして人を侮り、徒に信施を喰ひ且邪を貪り、非道濫行なるが憎さに突倒したり。又兩方を引合せて喧嘩せさせし人は、少しの武勇を自慢して、人をある物かとも思はぬ面つきの見られねば、惡さに喧嘩させたり。又つらおもてにかすはきを吐かけしは、是牛を食ひ馬を食ひ、或は家に飼置ながら、其犬庭鳥を殺し食ふ者、己は是を榮耀と思へ共、餘りのきたなさに唾吐かけたり。牛を食ひ飼鳥を食ふものは、疫神たよりを得て疫癘起り易しといへり。總べて何の道何の人といふ共、正直慈悲にして信ある人は恐ろしきぞ。たとひ高位高官の人も、邪欲非道慢心あるは、皆我等が一族となし、便りを求めて心を奪ふなりとて、今より後々の事まで語られしとて、つぶさに物語りせしか共、其外の事は世を憚りて沙汰する事なし。かくて今は暇とらするとて、塔の上よりつれて下り給ふと覺えて、其後は覺えずとぞ語りける。世の中の事共後々の有樣、物語せしに違はずといへり。それより法勝寺の塔には、天狗のすむといふ事をいひはやらかしけるに、應仁の亂に燒くづれたり。

○幽鬼嬰兒に乳す

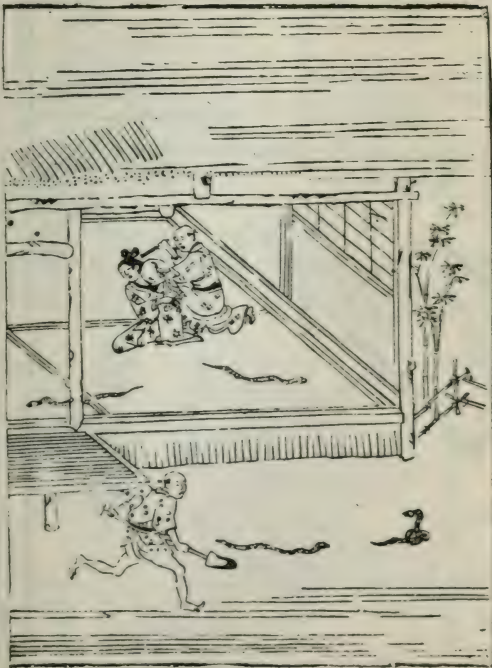
伊豫の國風早郡の百姓、ある時家中大小の人打つゞきて死す。其外村中の一族殘りなく死去て、只兄弟二人生留まりぬ。傳尸勞瘵の病はまことに滅門に至るといふ、定て是等其ためしなるべし。兄弟愁に沈みし所に、弟の妻又空しくなる。獨りのみ明し暮すうちに、此春生れたる子あり。母に後れて乳に飢つつ、よる晝なきける悲しさ、見るにつけ聞につけて、淚の絕る隙なし。妻死して卅日ばかりの後に、弟の妻其家に來りぬ。初めは恐れしかども、夜毎に來りしかば、後にはいとゞ睦じくして、さすがに捨難く、夜もすがら物語りする事常の如し。兄此由を聞に誠しからず、

弟を戒めて曰、汝が妻死して未だ中陰の日數をだに過さず、はや何方よりか女を呼入、夜毎に語り明かす。是世の人のため誹を受け、耻を見るのみならず、兄をだに是程の事いさめざるかと、人のいはんも恥かし。今より後は、せめて妻の一周忌過るまで、こと女を召入るゝ事あるべからずといふ。弟淚を流して曰、夜毎に來る者は死したる妻の幽靈にて侍る。初め俄に門を扣く。我子に乳なくしてさこそ飢ぬらん。此事の悲しさに歸り來る也といふ。門を開きて內に入たりしかば、赤子を抱きあげ髮かき撫て、乳を含め侍べり。初の程こそ恐ろしくも覺えけれ、後は睦じくて夜もすがら語りあかし、夜明くれば去失侍べる。更に日比に違ふ事はなしといふ。兄聞て思ふやう、一門悉く死絶て、只我等兄弟二人のみ殘る。然れば此ばけ物一定我弟を誑ろかし殺すべし、其時に至りては悔むとも甲斐あるまじ。ばけ物と雖も妻と化して來る上は、弟更に思ひ切るべからず。我是を殺さば

やと思ひて、長刀を橫たへ、弟にも知らせず忍びて門の傍に居たり。案の如く亥の剋ばかりに、門を開きて立入者あり。兄走りよりて丁となぎ伏たり。彼者

聲をあげ、あな悲しやとて逃げ去ぬ。夜明て見れば血流れて地にあり。兄弟其血の跡を認て行に、妻を埋みし墓所に至る。弟の妻が尸、墓の傍に倒れて死す。墓を掘りて見れば、棺の内には何もなし。元の如く妻が尸を納め埋みしが、赤子も死けり。幾程なく兄弟ながら、打續きて死失ければ、一門跡絶たり。

○蛇癭の中より出

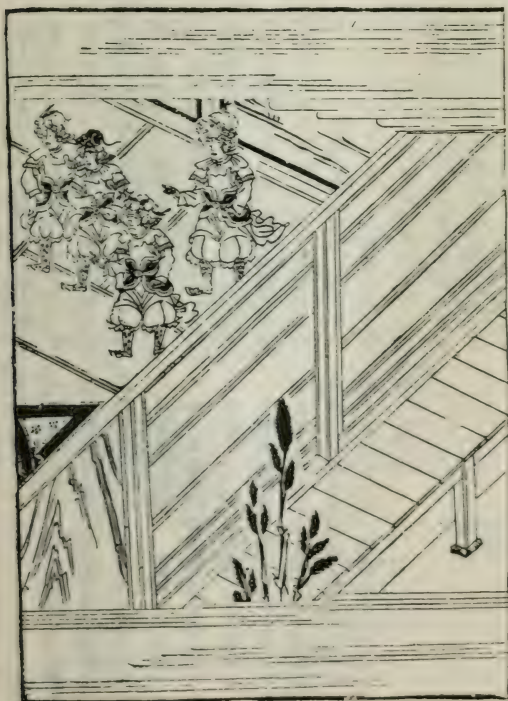
河内の國錦郡の農民が妻、項に癭出たり。初は蓮肉の大さなるが、漸く庭鳥のかひごの如く、後には終に三四升ばかりの壺の大さなり。かくて三升の後に二升を入る瓶の如し。甚だ重くして立てゆく事かなはず。もし立時には、かの癭を人に抱へさせて行。更に痛む事なし。より／＼は癭の中に、管絃音樂の聲

踏えて、是に心を愍むに似たり。其後癭の外に、針の先ばかりなる細く小さき孔數千あきて、空曇り雨降らんとする時は、穴の中より白き煙の立事絲筋

の如くして、空に昇る。家の内の男女皆怖れて、此まゝ家に留め置かば、禍とならんも知らず、只遠く野山の末にも送り捨よといふ。此妻なく／＼男に語

るやう、わが此病、まことに誰か嫌ひ惡まざらん。されば遠く捨られたらんには必ず死すべし。又是を割ひらきたり共死すべし。同じく死すべくは、割開きて中に何かある見給へといふに、夫げにもと思ひ、大なる剃刀を求め、よく磨て妻が項の瘻のかしらを、竪さまに割侍べりしが、血は少しも出ず、疵の色白らけて中より躍やぶり、飛て出たる物を見れば、長二尺ばかりなる蛇五つまでつき出たり。其色或は黒く或は白く、又は靑く又は黄也。鱗立ち光り有て庭の面に這ゆきしかば、家人皆驚き打殺さんとす。夫更に制して許さず。時に當りて庭の面に一つの穴出來て、蛇皆其中に入たり。其穴深くして底を知らず。かくて神子を頼み、梓にかけて此事を尋ねしかば、神子口走りていふやう、其かみこの妻妬み深く、內に召使ひける女のわらはを、夫寵愛せし事を腹立惡みつゝ、女の童が首本に嚙つきて、喰切りければ、血の流るゝ事瀧の如し。鐵漿黒くつけたる齒にて嚙ければ、疵深く腐り入て、終に女の童空しくなれり。其の恨み深くして今此蛇となり、妻が項に宿りて怨を報じ侍べり。たとひ今取出されたり共、終には殺して怨を晴さんものといふ。側に居たる人のいふやう、其事は返らぬ昔になり侍べり。心をなだめて輿へよ。其爲には僧を請じて、跡よく吊ひ侍べらんと云へば、神子又口ばしりけるやう、其時の恨み誠に骨に透り、幾たび生を替るといふとも忘るべき事にはあらず。され共跡吊ひて得さすべしといふが嬉しきに、是にぞ心を慰み許し侍べらん。とてもの事に望む處あり。かなへて得させんやといふ。側なる人如何なる事也共かなへて得さすべし。とく〳〵いへと云に、神子うちうなづき淚を流し、此世に生て有し時より、尊き物は法花經なりと思ひ侍べりし。今猶尊く覺ゆるに、一日頓寫の經書て、回向して吊ひてたべや。又其疵には胡桐淚を塗り給へとて去にけり。言葉の如く僧を請じて、一日頓寫の經書て深く吊ひしかば、妻が心地も涼しくなりぬ。さて胡桐淚を尋求めて塗ければ、瘻の疵終に愈たり。妻それよりして、物妬みの心を止め侍べりとぞ。

○傳尸禳去

寶德年中の事にや、中山中將親通朝臣の娘、尼になりて西山に住す。只かりそめに虛損勞瘵の病に罹り、潮熱咳嗽盗汗して漸々に瘦衰へたり。勞瘵の病は

腹中に蟲ありて生ず。其形或は定まらず。總て鍼藥灸治の及びがたく、十人にして九人は死す。これを傳尸蟲と名づく。一人此病にて死すれば、其兄弟一族に移り渡て、門を滅し跡を絶す。已に傳りて三人にうつり渡れば、其蟲手足耳鼻そなはり、よく立てゆく。形人の姿、鬼の形に類すといへり。さる程にかの尼公、頻に病重く、今は人心地もなくなり、已に死せんとす。尼公の妹あり。行て看病する處に、尼公の身の中より、白き繩の如くなる物飛出て、絲を引が如くなる白き氣あり。妹の袖の中に飛入て見えず。立上り拂ひ揮へども更になし。尼公終に其暮方に死す。妹其日より心地煩ひ出て、尼公の病に少しも違はず。姉の尼公より傳はりたる病とて、家中上下愁へ歎き、さま〴〵養生するに露ばかり驗しなし。如何すべきと愁へなげき、藥の力を以ては愈す事かなふまじ。佛神の御計らひを頼むべしとて、白檀を以て長一尺二寸の藥師の尊像を作り、又殊更に祇園の午頭天王に祈誓して、此病いやしてたべと歎き祈り申されしに、或日の夕暮に、病人少しまどろみける夢に、怪しき人來りて、明日一人の沙門鈍色の衣に、紅の袈裟かけて

鉢に來るべし。是に賴みて祈りせさせよといふと見て夢醒たり。次の朝年の比五十ばかりの出家、誠に戒律正しく保つと覺えて、道行事いと靜に、中山殿の門に入來り、錫杖打揮りて頭陀せらる。やがて內に請じ入て、かう〳〵夢想の事侍り、此病禳ひしてたべと云出しければ、此僧答へけるは、我は戒律を守り、抖擻行脚を辟とする身也。更に不淨下口の食を求めず、只淸淨頭陀を行じて活命するのみ。か丶る神子々々しき事は、思ひよらずといはれたり。かさねて申されしやう、僧は大慈悲を以て人を助け、我身を忘れて他を利益するを本とす。今一人の命を救うて諸人の喜ぶ處、其功德すくなからむや。其上夢想の告によりてかく望み侍べりと、再三しひて歎きしかば、僧も理に折れて、此上は力なし。然らば白絹一端を遣し

給へ、是を以て病を禳はんといふ。それこそ易き事とて、生絹一端を奉りければ受取、僧はやがて出て歸る。さて御寺はいづくと問へば、祇園のあたり也とて定かにもいはず。其夜姫君夢に見けるやう、佛像一躰門の內に入來り給へば、十二の善神隨ひ來り、一つの簡を以て、十二の神代る〳〵、娘の頭より手足

まで殘りなく撫給へば、身の中より白き糸筋の如くなる物出て、天をさして昇ると見て、夢醒てのち心地凉しく、かうべ輕く食進みて、爽かなる事日來に替れり。次の日彼僧來りて、生絹に物書きたるを與へて、跡をも見せず失せにけり。奇特の思をなし、封を開きて見るに、藥師の尊像を墨繪に書たり。枕元に掛て朝夕香を焚き、禮拜して敬ひしが、姫君の病程なく愈たり。生絹の藥師をば家の寶物とせらる。誠に奇特の事也。彼僧は祇園にして誰とも知らず。是定めて午頭天王なるべし。天王はこれ藥師の垂跡、かた〲以て佛力のふしぎ、行者の信心によりて利益空しからずとかや。

○隨轉力量

武州小石川傳通院の所化、釋の隨轉は房州の人也。幼少の時より出家して、後に小石川に來り、學文を勤るに、貧賤にして朝夕に乏しければ、甲信二州の間、野州上下に乞食して歩く程に、勸學論義更に精ならす、力甚だ强くして談林に敵する者なし。時の所化達皆異名を付けて明上座といふ　もろこし神秀禪

師の座下に、明上座とて大力の法師あり。六祖の惠能大師、大庾嶺に赴き給ひしを、明上座追かけて、傳授の袈裟を取返さんとせしに、惠能其袈裟を石の上に打置たり。明上座是を取らんとするに、山の如く重くして揚らず。惠能の曰、此衣は信を以て表す。力を以て爭ふべきや。是明上座本來の面目を見よといはれしに、言下に得道したりといふ。隨轉が力の强きばかりにて、論義學文の弱き事を笑ひて、明上座とは異名しけり。或時信州の山中を通りしに、盜人に行逢ひたり。足に任せて逃けれ共、頻りに追かけしかば、隨轉手ごろの松の木を引撓めて、尻掛けて休み居たり。盜人追來りしかば、逃のびんとするに息切れたり。今は平包の錢皆奉らむ、命は許し給へ。まづ此木に腰掛けて、息つぎ休み給へといふに、盜人心を許し、同じく松の木に腰を掛けし所を、隨轉立退きたれば、松の木起きあがるに、盜人彈かれて、遙の谷底に投落され、石に當りかうべ碎けて死にけり。かゝる大力の法師也。越前の朝倉家の旗下に、摩伽羅十郎右衞門は、北國無雙の大力と聞傳へて、隨轉かしこに赴き力を競べたり。隨轉は緣の上にたち、摩伽羅

鴫居の際に立て、手を捏り上に引揚げんとするに、随轉更に動かず、緣の板を踏抜き鴫居は半ばより折れたり。兩方對々の力、人皆肝を消して目を醒ます。或時随轉論義の場に出て、只一問答にて閉口せしかば、相手の僧打笑ひ、此論義は學を以てす。力を以て爭ふべきや。これ随轉明上座本來の面目を失うたりと耻しめたりければ、大きに赤面して口惜く思ふ處に、其次の日町屋に出て、朝より夕まで所化鉢と呼ばゝれ共、更に與ふる人なし。甚だ怒りてあぢきなき出家して耻見んよりは、俗になりて時を得んには如かじとて、鉢を地に投げて打破り、袈裟衣を引裂て川に流し、越前に行て摩伽羅が手に屬し、終に姉川の軍に打死しけり。還俗の罪は甚深しといふ事を恐れて、常は日毎に念佛怠らず。最後の時に至りて、口より白き雲の如くなる物棚引出て、西をさして空に上りぬ。忙しき合戰の最中なりければ、是を見たりし人僅に二三人、後に語り傳へしとかや。

○蝨瘤

日向の國諸縣といふ所に商人あり。背に手の掌ばかり熱ありて燃るが如し。

廿日ばかりの後に熱冷めて、又痒き事いふ許りなし。漸く腫上り盆をうつぶせたるが如し。大に腫るゝに随ひて、猶痛みは少もなく、只痒き事堪難し。此故に食事日に随ひて進まず、瘦衰ふるまゝに骨と皮とになれり。遍く諸方の醫師に見せ本道外科手を盡くして、内藥を與へ膏藥を塗れ共、少しも驗しなし。其比南蠻の商人舟に、名醫の外科章全子といふ者渡りて、此病を見ていふやう、是更に世に希なる病也。此故に人多く知らず。是蝨瘤と名付く。皮肉の間に蝨湧出て此患へを致す。我よく是を愈すべしとて、腫物のめぐりに縛をかけ、其上に藥を塗りたり。扨語りけるやう、世の人或は其身に蝨の湧出る事、一夜の内に或は三升五升に至り、衣裳に滿ち／＼血肉を吸ひ食ふ。痛み痒き事いふばかりなし、されども病人の身にのみ有て、他人には取つき移らず。是は又間々ある事にて療治の手だて、世の醫師是を知たり。今此しらみは、肉の間に生じて皮より下にあり。人更に知り難し。今夕必ず驗し有るべしといひける。其夜瘤のいたゞき破れて、蝨の湧出る事一斗ばかり、皆よく足あり。大さ胡麻の如く、色赤くしてよく匍歩く。是より體輕く心地よく覺えしが、蝨の出たる痕に細き穴一つありて、時時其中より蝨出たり。是も其數しり難し。章全子が曰、此病は世に藥なし。百年の梳を燒て灰になし、黄龍水を以て塗べし。是より外の療治なし。我少し是有。惜しむに足らずとて一匕ばかりを取出し、痕の上に塗り侍べりしかば、一七日の内に愈たり。

○山中の鬼魅

小石伊兵衛尉は津の國の勇士也。天正五年十月、河内の國片岡の城に籠りしが、城の大將松永、日比の悪行重疊し、寄手の大軍旗色いさみて軍氣さかん也ければ、此城更にはか／＼しかるべからずと思ひ、夜に紛れて只一人城を落て、弓削といふ所に隱し置たる妻の女房を引つれ、夫婦只二人夜もすがら立田越にかゝり、大和の國に赴きけり。其妻懷妊して此月産すべきに當りければ、身重く足たゆく、甚だ勞れて峠までかかぐり着き、道筋にては、もし軍兵共の見咎むる事もや有べきと思ひ、道筋より半町ばかり傍に入て、息つぎ休居たりければ、跡より女の聲にてなきなき來る。歩むともなく轉ぶともなく、やう／＼峠まで登りて呼はるを、よくよく聞けば年ごろ召使ひし女の童也。女房につけ置しを、落人の身なれば人

多くてかなひ難く、弓削に打捨召つれずして來りしを、跡より追來りたる者也。心ざしの痛はしく可愛ゆくて、如何に我らは未だこゝに在るぞと聲を掛けしかば、女の童は世に嬉しげにて、君情なくも打捨て落給ふ。みづからたとひ湯の底水の底までも、離れ參らせじとこそ思ひ奉りしに、只二人のみ落させ給へば、みづからあるにもあられず、跡を慕て參り侍べりといふに、心ざしの程憐れに嬉しく覺えて、今は又たより求めたる心地しつゝ、三人一所に休み居たる所に、妻俄に產の氣つきて苦しみ、終に平產したり。夜半ばかりの事にて月は未だ出ず、暗さは暗し、夫の小石、とかくすべき樣をも知らざりけるを、女の童、かひがひしく取扱ひしにぞ、此者來らずは如何すべき、よくぞ跡より慕ひ來にける。誠の心ざし有者なれば、今此先途をも見屆くる也。あはれ男をも女をも人を召使ふには、かほどに主君を思ひ奉る者をこそあらまほしけれと、夫婦共に今更感じ思ひけり。扨妻は木の本により掛らせ、生れたる子は女の童懷に抱きて、三人さし向ひつゝ、夜明けなば山中の家を尋ね、心靜に隱れて保養すべしと思ふ。產養

すべき事もかなはねば、腰に付たる燒飯取出し、妻に食はせて氣を助け居たり。女房は木の本に寄かゝりながら、女の童が方をつく〲見居たりければ、懷に抱きたる赤子を、舌を出して舐けり。怪く思ひて、猶よく目を澄まして見れば、女の童が口大きに耳元まで裂けて、赤子の頭を口に含み、ねぶるやうにて食ひける程に、はや首をば皆食ひ盡くし、肩を限り右の手を食ひければ、妻いと騷がず、夫を驚かしけり。小石は暫し睡り侍べりしが、目を覺まし此有樣を見て、密かに刀を拔きはたと切付けたりしかば、女の童鞠の如くはずみて梢に飛上り、其のまゝ凄まじき鬼となり、又地に飛下り、十間ばかり向ひなる岩の上に立て、赤子の足を食ひけり。小石詮方なく走り掛つて切けれ共、只夢の如く影の如くにて、太刀も當らず。しばし追廻りければ、鬼はや其間に赤子は皆食ひ盡して、蝶とんぼうの如く飛上り、行方なく失せにけり。力なく跡に立歸り　元の木の本に來て見ればゞ、又妻の女房を取られたり。よべ共よべ共答ふる聲も聞えず、いづち取られけむ行先も知らず。小石血の涙を流し、知らぬ山中をあなた此方尋ねしに、夜

已に明方になりて、道筋より三町ばかり奥の傍なる岩角に妻が首を載せ置たり。如何成者の仕業共知がたし。小石是を見るに悲しさ限りなく、涙と共に其處に埋みて、大和の郡山より南の方大谷に所縁有ければ、こゝにたどり行て暫く隠れ居たりしが、兎に角にはかなき世を思ひしり、後世を大事と心づきて發心しつゝ、高野山の麓、新別所といふ所に籠り、沙彌戒を保ち、尊き行ひして年月を送りし。後に其行方なし。

○馬人語をなす恠異

延徳元年三月、京の公方征夷将軍従一位内大臣源義熈公は、佐々木判官高賴をせめられんとて、軍兵を率して江州に下り、栗太郡、鈎の里に陣を据ゑられ、爰にして御病悩重くおはしましつつ、同じき廿六日に薨じ給ふ。其前の夜、十五間の馬屋に立並べたる馬の中に、第二間の厩に繋れたる鹿毛の馬、忽ちに人の如く物いうて、今は叶はぬ

ぞやといふに、又隣の川原毛の馬聲を合せて、あら悲しやとぞいひける。其前には馬取共なみ居て、中間小者多く居たりける。皆是を聞に、正しく馬共の

物いひける事疑なし。身の毛よだちて怖ろしく覚えしが、次の日果して義烈公薨じ給ひし。誠にふしぎの事也。

○恠を話ば恠至

昔より人のいひ傳へし怖ろしき事、恠しき事を集めて百話すれば、必ずおそろしき事、恠しき事ありといへり。百物語には法式あり。月暗き夜行灯に火を點じ、其行燈は青き紙にてはりたて、百筋の灯心を點じ、一つの物語に、灯心一筋づゝ引とりぬれば、座中漸々暗くなり、青き紙の色うつろひて、何となく物凄くなり行也。それに話つゞくれば、必ず恠しき事怖ろしき事現はるゝとかや。下京邊の人五人集り、いざや百話せんとて法の如く火をともし、めんく皆青き小袖着て、なみ居て語るに六七十に及ぶ。其時分は臘月の初つかた、風烈しく雪降り、寒き事日比に替り、髪の根しむるやうにぞゝとして覚えたり。窓の外に火の光ちらくとして、螢の多く飛が如く、幾千萬ともなく終に座中に飛入て、丸く集りて鏡の如く鞠の如く、又別れて砕け散り、變じて白くなり固りたる形、わたり五尺ばかりにて天井につきて、疊の上にどうと落たる。其音いかづちの如くにして消え失たり。五人ながらうつぶして死に入けるを、家の内のともがらさまぐ扶け起しければ、甦りて別の事もなかりしと也。諺に曰、白日に人を談ずる事なかれ。人を談ずれば害を生ず。昏夜に鬼を話る事なかれ。鬼を話れば恠いたるとは此事なるべしと、物語百條に満ずして、筆をこゝにとゞむ。

伽婢子巻之十三終

寛文六丙午暦三月吉日

寺町通圓福寺前町

秋田屋平左衛門板行

稲波利子

狗張子序

洛陽本性寺の了意大徳は、きはめて博識強記にして特に文思の才に富り。生平の著述ははだ多し。晩年に及で筆力ますます老健なり去年庚午の春、往に編集せる伽婢子の遺せるを拾ひ、漏たるを捜りて、狗張子若干巻を作りその續集に擬んとす。其年の冬に至り、既に七巻を

撰び輯む。翌年辛未の元旦、意らざるに遽然として寂を示す。都部驚歎して深くその才を惜む。顧に凡そ人の常情、その德義を哀慕すといへども幽明途殊にして復みるべ、からざれば、かならずその生平の文字筆墨を尋て面晤に換るのみ。それ此書は了意大德晩年思ひを究め精を研きて筆作せる眞跡にして、是實に大德

遺訓の形見なるをや。是故に今その眞跡一字もあらためず、梓にちりばめ世に行ふ。凡此書の作、みな本朝の奇事近代の異聞、その文詞の富華に旨趣の深奥なる、讀もの細かに翫ばゝ、唯其見聞を廣し談話を資るのみにあらず。兼て勸善懲惡の益あらんといふ。

元祿四年辛未十一月日

義端謹序

狗張子目録

第一巻

第四巻

味方原軍 付 摩が所を幽霊訪ふ事
田上氏雪堤落 付 明河僧勧冥途に趣く事
樹濤和泉守名をると賣事
花巌音楽と聞て舞躍事
関久と浜悲道より人を殺し家の滅却せす
筒島権七蝶帝乃契りの事
霧岩妖猫の事
小嶋加納悋貪の報 付 安養寺地獄変相

第五巻

杉谷源氏 付 男色の辯

第六巻

塩田平九郎怪異を見る事

藤氏杜彦八が子天狗と成物狂ひす

板垣信形討死 付 天狗奇特を現す事

松藤四郎左衛門が亡魂八幡に詣る事

第七巻

杉田彦左衛門天狗に殺さるゝ事

今川駿河守の細工人郭に座船を造る事

蜘蛛塚の事

飯森左助漂流人島 付 亭主が畫巻見の事

五條の天神 付 入江壽玄疫病を奪とる事

鼠の妖怪 付 甲子天を畏る事

死後の貞烈

狗張子巻目録終

狗波利子序

あめつちひらけ初まりしよりこのかた　人その中に生れて　時うつり年あらたまり、後に生れし人は、わが見ぬ世の事を昔といふならし。昔もその時は今ぞかし。今をすぎて生れし人は今をもまた昔といふべし。むかしと今とさらにかはる所なし。月日星のめぐり、雨露のうるほひ、山はたかく海はふかし。松の葉のほそく蓮の葉のまろき、鳥けだもの昆蟲、色も形も水も火も、只いにしへにたがふことなし。久しきをつたふるには、かすかにしてこまやかならず。ちかきをつたふるには、正しくしてつま

ひらかなり。をろかなるは闇てまどひ、見ぬをうたがふ。かしこきは心にをさめ、本をあきらめ鳥の跡にのこして、数をたれいましめとす。千代よろづ世にわたりて絶ることなし。されどもひろきあめがしたに、かたりうしなひしるしのこせる種々かぎりしられず。今わづかに聞おぼえし事もあるに、心にのみこめて思ふ事いはぬも、むねふくるゝ心ちして、手なれし狗はりこにむかひ、ともし火と影とかたりなぐさむも友とするにすくなからずや。

元禄三年かのえ午むつきの十五日

洛本性寺昭儀坊

沙門了意

狗波利子巻之一

○三保の仙境

駿河國宇度の郡三保の松原は地景めでたき名所なり。北のかたは富士のたかね雲を凌ぎ、空にそびえて幾千丈とも知がたし。頂には小々竹生たり。蒸のぼる煙はその色青く、山の腰より下つかたには小松のおひてつねに緑なり。鹿子まだらに降つむ雪は、春夏ともにきゆる時なし。浅間大ぼさつのすみ給ふところ、もろこしよりは此山を、ほう萊山と名づくとかや。萬葉集山部赤人の歌に、

ふじのねにふりつむ雪はみなづきの
もちにけぬればその夜降けり

みなみのかたはあら海なり。西は宇度の山千手観音の靈地なり。田子の入海蘆高山清見が關も遠からず。釣する海郎の夜もすがら、浪をこがせるいさり火の影、岩ねにかかるしら波、尾上にわたるゆふ嵐、汀にあそぶ鷗鳥、水にむれゐるありさま、草むらにすむ蟲の音までも、とり〳〵にあはれなり。新古今集越前が歌に、

沖つかぜ夜寒になれや田子の浦
海士のもしほ火たきまさるらん

三保の松原は西よりひがしへ、海中にさし出たる事四十餘町なり。古しへ天女のあまくだりて、羽衣を松の枝にかけてさらしけるを、漁父これをひろひて返さゞりければ、天女ちからなくすなどりの妻となり、年へてのちに羽衣を返しければ、天女よろこびていふやう、妻となり夫となるも、さきの世に少の縁あるゆゑなり。今は是までなり。我は天上に歸るべしとて、仙人の道をこま〳〵とをしへて、天女は雲ぢにのぼりけり。すなどりは名ごりををしみながら、道をつとめおこなひ得て、つひに仙人となり、富士足柄のあひだに行かよひ、猶今の世までも折々は人にまみゆ。よはひもかたぶかず、かぎりしられぬ命をたもちけると也。能因法師が歌に、

宇度濱にあまの羽衣昔きて
ふりけん袖やけふのはふり子

とよみしは此事なり。

○足柄山

過にしころ、興津といふ所に由井源藏とて、そのかみは鎌倉伺公の人の末なり。時世につけて家もおとろへてすみけり。おなじ友だちに藤山兵次、浦安又五郎、神原四郎とて、いづれも年わかくて友なひけり。古き人の物がたりに、富士足柄の山にはむかしより仙人ありて、心ざしふかき人には出逢て物がたりしてをかしき奇特もありと

いふ。四人是を聞て、いさや我ら山に入ておこなひ、その仙人にあうて長生の道を得ばやとて、うちつれて足柄山にわけ入つゝ深き岩屋をすみかとし、峯にのぼり谷にくだり、蔦をまとひ苔をしき、はだえを雪霜にさらし、骨を嵐にまかせ、霞を吸ひ咒をとなへ、夜晝三とせをかさぬれども、露ばかりもしるしなし。神原四郎はわづらひ出して里に歸る。藤山浦安いひけるやう、家を忘れ慾をすて、身をかへりみずおこなうて三年になれども　すこしのしるしもなし。あたらとし月を空しく暮して老はてんより、故郷に歸りて　いかならん君にもつかへ　身をたて家をおこし、榮花の春に逢ふべし。目にもみずあて所なきおこなひに、骨をるほどに君につかへなば、あがるまじき身にもあらず。無用の長生不死、いまさら望むも詮なしとて、故郷へぞ歸りける。由井源藏は、此みとせおこなふ仙の道も、神君の意に叶はねばこそしるしもなけれ。かくうたがひのあらんには、たとひいくとせ行なふとも更にしるしはあるべからず。われは命をかぎりにうたがひなくおこなはんとて、たゞわれ一人山にとゞまり、いよいよ修練精行せしかば、神仙あらはれて、丹藥祕術をつたへつひに大道をさとりけり。故郷に歸りし三人は、知行につきてつとめしに、家をおこし身をたて、奉行頭人に經あがり、世のもてなし、人のほむる榮花ひらけてめでたかりけり。ある時三人いとまの隙に三保が崎に出て、磯ちかくあそびてゐたるに、ひとつの小舟をこぎてその

前を過る。海郎の世わたる釣舟かとみれば、それにはあらで、舟の中には蓑笠着たる老人あり。棹をならしてゆく、そのはやき事風のごとし。三人これを見る、まさしく由井源藏なり。聲をあげてよび返し、扨も久しく逢ざりしあひだに、和君は獨り山にとどまりて、おほくの年をかさねながら、淺ましくおとろへ何の甲斐あることもなし。それ風はつなぐべからす、影はとらふべからず。ゆくへなき事に二たび歸らぬ年をつみて、老はて給ふ殘りおほさよ。我ら三人は故鄕に歸り、君につかへて奉行頭人となり、世におそれられ人にうやまはれ、妻をむかへ家もさかえて、たのしみおほし。源藏は今その有さまにて、さこそ物ごと心にも叶ふまじ。何にても不足の事は我ら調へてまゐらすべしといふ。源藏うちわらひて、君はうかび我は沈めり、魚鳥といへどもそれ〳〵心にかなふ道あり。世に用ゆる所の物は、ほど〳〵につけて事かけず、此山のあなた苔のしたみちに、桃の園櫻の林あり。その門の内ぞわがすむ庵なる。見ぐるしけれどいざ來て見給へと、三保が崎より足柄山にわたりて、四人うちつれて峯をこえ谷をわたるに、一むら立たる桃櫻の林のすゑにあやしげなる門あり。內に入ければ荊茅はら道もなし。一町ばかりを行に大門あり。樓閣重々、玉の甍、虹の梁、道のかたはらには翠の竹、さすがに高からず、青葉の間に白雲あり。風ふき來れば枝かたぶきて、絲竹のしらべひゞきて聞え、樓門の內には見もなれぬ花の木、名もしらぬ草

の花、ふかみどり浅むらさき、赤き白き咲つゞきたるよそほひ、更に人間のさかひにあらず。匂ひ四方にかほりみちて、たましひさはやかに、心たゞへう〳〵として、雲にのぼる思ひあり。内に入て庭のおもてを見わたせば、うゑ木のこずゑには、五色の鳥とびかけりさへづる聲のおもしろさは此世の物とも思はれず、迦陵孔雀の鳴に似たり。池の内には清き水たゝへて、金しろ銀の鱗、およぎめぐり浮しづみあそぶもめづらし。ならひたる木のえだに、赤き栗、綠の棗、大きなるは三二寸に及べり。しきわたしたる眞砂、立ならびたる岩のあひだより、靜に木の流れたるも、さはがしからずぞみえたる。かくて見めぐるあひだに、髮からわにあげたる童二人出て、こたたへとてよびいれたり。書院の内には、かざれる棚には琴瑟笛、箏のをりごと、香爐香合、西湖の壺、蜀江の錦をつゝみとし、眞紅の緒にて結びたり。曲彔の上には豹の皮をかけ、床に三幅一對の唐繪をかけたり。暫くありて由井源藏、そのさまけだかく出たち、三人にむかひて禮儀たゞしく座につきてのち、かくさはがしき世につかへて心のやすきいとまなく、なまぐさくけがらはしき食物に腹をやしなひ、重欲の焔に身をこがし、うれへの煙にこゝろをなやまし、此とし月をおくり給ふは、さこそくるしく侍べるらん。しばしこゝにて思ひをなぐさみ、心をはらし給へといふに、三人ながらおどろきあやしみて、とかくのこと葉はなく、只手をつき首をふせて、うなづ

くより外はなし。童子四人うつくしく出たち、膳部きよらかにすゑわたす。種々の珍味いろ〳〵のさかな、數をつくして出しけり。猩々のくちびる、熊のたなごころ、鹿のはらごもり、麞の羹ものは、その名を聞つたへたるばかりにて、これやその類なるべからんと、思ひあやしむもいふばかりなし。日すでに暮になりて、九花のともし火をかゝぐるに、花やかに出たち、小袖うちぎきよらにして薫みちたる遊女十人すゝみ出て、夜もすがらいまやう朗詠うたひ舞けるありさま、つら〳〵見れば、此比海道に名をえたる遊君どもなり。是はいかにとおもふに、その中に春とかやいふ女は、東琴の上手にて柱たてならべ引ならすつま音、歌にあはせて、

花のえんのゆふ暮、おぼろ月夜にひく袖、さだかならぬ契りこそ、心あさくもみえけれ

とうたふは雲にひゞきて、ひくは空にみちたり。むかし源氏花のえんの夜、内侍のかみとわかれの時、あふぎをとりかへて出給ふ。そのあふぎの歌に、

世にしらぬ心ちこそすれ有明の
月のゆくへをそらにまがへて

こよひかゝる御たいめんは、思ひの外なればさだかならず、しどけなき御事と、心あさくやといふ歌の心ばえ、時にとりてもてなしあるところなり。三人ながら此歌に、心はすこしうかれたり。

みほの松かぜふきたえて、おきつ浪もあらじな。水にうつろふ月どともに、なが

めにつゞくふじさん所がらなる琴の唱歌かなと、いとゞうきたつ爪音。風もしづかに海原の浪もおさまり、雲きえて詠めにあかぬ月影の　うつるもことさらおもしろく、みほよりふじのみえわたるけはひ、何にたとへんかたもなし。源藏かくぞよみける、

夜もすがらふじのたかねに雲きえて
清見が關にすめる月影

三人ながら興に入て、やう〳〵夜もはや明がたになり、野寺のかねの音は聞えねど、鳥の聲はまのあたりにつげわたる。名ごりはつきぬことながら、又こそ尋ねまゐらめとて、いとまごひしてたち出つゝ、半町ばかりにして跡をかへりみれば、霧ふさがり雲とぢて、松のこずゑ吹おくる風に、岸より舟にのり家に歸り、こよひ十人の遊女は、いかゞして由井源藏がもとへはまゐりけるぞと問せけるに、十人ながら今夜の夢に、やごとなき人の御もと、御名あるかたがたに逢奉り、酒もりせしとおぼえてさめ侍り、その所はいづくともしらずと、おなじさまにこたへけり。きはめたるふしぎかなとて、かさねて使をつかはして尋ねさするに、家もなく門もなし。三人ながらわづかなる知行を給はり、是をいかめしき事に思ひけるも、今さらにくやみけれどそのかひなし。

○富士垢離

近き比より京も田舍も、富士垢離といふ事のはやりて、日毎に河水にひたり垢離をとり、淺間大ぼさつを念じ奉り、よくおこなへば奇特あり。いか成やまひをもいやし、身のまづしきを德つきて、ゆるやかになるとかや。大ぼさつのれいげんあらたにましますとて、世にもてはやし奉る。攝津國ゆするぎとかやいふ里に鳥岡彌二郎といふもの、おもき病をして、くすしのちからにもあまりてすべきやうなく、淺間の行人を賴みて、願だてしていのりければ、ほどなくほんぶくして、このよろこびにふじまうでを思ひたち、先達をもつて山にのぼる。まことに三國ぶさうの名山なり。峯は半天にさゝげ、遙に雲に入て、夏の夜なれども雪霜降つみ、ふもとの山々は春めきわたりて、みどりの色こまやかなり。つゐにすがり路をつたふに、千尋の壁にのぼるがごとし。雲霧は足のしたにたなびき、遠山は猶かすかにへだたり、おぼろにして影のごとし。よぢて上るべき藤葛もなし。砂にむねをつき、はふ〳〵峯にいたり嶽におよぶ。むかし常陸房海尊とかや、源の九郎義經奥州衣川高館の役に、一族從類みなほろびけるに、海尊一人は軍勢の中をのがれて、ふじ山にのぼりて身をかくし、食にうゑてせんかたのなかりしに、淺間大ぼさつに歸依して、守りをいのりしに、岩の洞より飴のごとくなる物わき出たるを、なめて心むるに、味ひ甘露のごとし。是をとりて食する

に飢をいやし、おのづから身もすくやかに心よくなり、朝には日の精を吸て霞にこもり、つひに仙人となり、折ふしはふもとにくだり、里人に逢てはそのちからをたすけ、人のたすかる事今におよびて、世にかくれてありといふ。然るに彌二郎、遠き旅路につかれて心たゆみ足をあやまち、峯ちかき所にて風に吹たふされ、ころびおつる事玉をはしらかすが如し。かゝる所に年の程六十あまりの法師、にはかにあらはれて彌二郎をとらへとゞめ、あやふき命をたすけたり。彌二郎ひきたてられ、かの老僧にむかひ手を合せておがみつゝ、いかなる沙門にておはしますぞや。御庵はいづかたぞ。御名をば何と申すやらんと問ければ、我は此ふもとにすむ法師なり。世をのがれたる身の、名のるまでには及ばず。下向の道にはたよりもよろしければ、立よりてやすみ給へとやくそくして、山よりくだるかとみえしが、すがたはゆくかたなくうせにけり。彌二郎かくてげかうの道に、ふもとのあたりを尋ねしに、かたはらにちひさき門あり。蔦かづらまとはり、草のみふかくさだかならぬをわけ入ければ、さきの法師出むかひ、一町ばかり行ければ、よしある庵のうち、佛壇をかまへ、本尊は大日如來

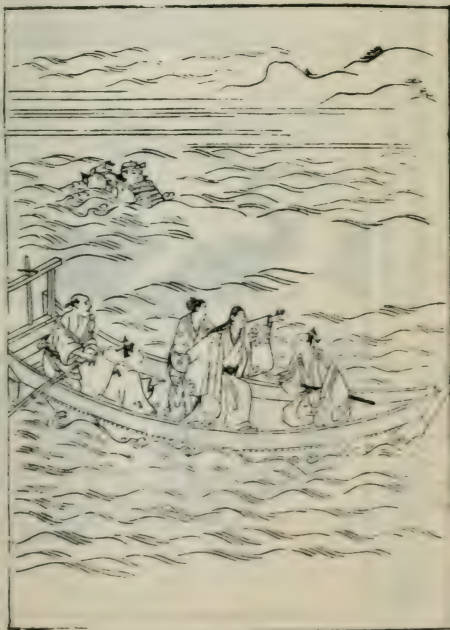
ひかりあたりにかゞやけり。山よりおろすあらしには、おのづから梵音をとなふるかと聞え、海よりこゆる波にはまた、錫杖を誦するかとおぼゆ。妄想の雲はれて、無明の睡りをさますとかや。勸行の功力に感じて庭には時ならぬ花さきつゝ、烟さえ霧は

れて、うき世のほかのすみかなり。歸らんことをわすれて、しばらく物がたりせし所に、法師かたりけるやう、我はもと東國のものなり。久しく奥州衣川のあたりにありて、心の外なるわざはひのありしを、わづかにのがれて此所にかくれ、身をおこなひたましひを練て、年の過る事をおぼえず。獨りたのしみをえて、をりふしはむかしを思ひ出て奥州にも行通ふことあり。もとよりわびてすむ故に、まゐらすべき物もなし。旅のつかれにこれなりともめせとて、わり子の内より枸杞の葉の飯をぞすゝめける。彌二郎ふかく情をかんじ、さるにても御名ゆかしくこそ、名のりてきかさせ給へといふ。法師は眉をひそめて、名のるにつけてはあやしかるべし。まことはわが名は殘夢といふ。人に交はらねば、時うつり世のかはるをもしらず。今の世の中はいかにといふ。彌二郎語りけるは、そのかみ尊氏公世をおさめて十三代に及べり。諸國の勇士そばだちおこりて、たがひに怨をむすび境をあらそひ、國を合せ功をつのり、駿河には北條の氏康、甲斐に武田の晴信、ゑちごに長尾の景虎、ひたちに佐竹、會津に蘆名、越前に朝倉、周防に陶の晴賢、安藝に毛利、出雲に尼子、豐後に大友、ひぜんに龍造寺、伊勢の國師、近江に淺井、佐々木、畿内南海のあひだには、三好が一族おなじく家人松永、その外諸國郡郷のうちに武勇ある輩其數をしらず。小身なるは大家の旗下となり、弱きはつよきにおしたふされ、臣として君を棄り、父子怨を結び、兄弟敵となり、

利欲をもつぱらとして佞奸をかまへ、忠孝をわすれて狼心をさしはさみ、運にのるときは、庸夫も國のあるじとなり、勢を失なへば、貴族も卑賤にくだり、榮枯地を替、盛衰日をあらたあ、諸國一同に亂れて、軍(いくさ)更に止時(やむとき)なく、そのあひだの殘害いく千萬とも知がたし。しかる所に織田信長公、尾州よりおこりて猛威をふるひ給ふ。まづ暫らくたがひに變を見あはせて、四海の波しづかなるに似たり。此後また世の中、いかになりゆくべしとも知がたしとぞかたりける。殘夢法師つく〴〵と聞て、安否は運による事に、、天理神明にまかすべし、智惠勇力才覺にては叶はず。たゞ慈悲正直をもつて本とす。日もはやかたぶきて、落くる風の音もすさまじ。此所は夜に入ぬればおそろしき事あり。人の心をおどろかすに、はやく旅屋(はたご)にかへり給へとて、おくり出して、又庵の内に歸るかとみえしが、空のけしきくらみかゝりて物すさまじ。彌二郎足ばやにゆく〳〵かへり見れば、庵はなく成て、人のさけぶこゑ烟にまじはりて空に聞ゆ。先達(せんだち)いふやう、こゝはふじのふもと、地ごく修羅のありさま、くもる夜はあらはれみゆ。すみやかに歸り給へとて、彌二郎をつれて我宿にぞ歸りける。

○守江の海中の亡魂

豐後國守江の浦の海上には、亡靈ありて人をなやます事たび〳〵なり。そのかみ慶長五年九月に、石田治部少輔(ぢぶのせういう)謀反して、美濃國關が原にして軍(いくさ)あり。東軍のために打ま

け、治部少輔一味の西軍勢みな悉おちて國に歸る。黑田勘解由入道は、安喜の浦に陣をかまへて、番船數十艘を海上に出して、落下る勢をとがめらる。島津の舟とてくらき夜に打とほる。番船つよくとがめしかば軍になり、薩摩船より砲𤇆火矢をなげそこなひ、みづから味方の舟に落ければ、船中卅八人一同に燒沈みけり。其中に中村新右衛門尉といふもの亡靈となり、沖中往來の人をなやますとかや。寬永の末つがた夏のころ、安藝國倉橋嶋のなにがしが娘、日向の國佐土原といふ所にすみわたり、故鄕に歸るとて、この沖中にして俄に物のけつきてさま〳〵の事口ばしりけるを、何ものなれば、かゝる船の中に來りて、人をなやまし狂はするぞやと問ければ、娘口ばしりて我はそのかみこの沖中の軍に、海にしづみて死ける中村新右衛門といふものなり。亡魂今もこゝにさまようて、うきぬしづみぬくるしみをうくれども　我をとぶらふものなし、あまりの苦しさに、今此女性に寄て恨みをいたすものなり。わがために法事をいとなみてたべとて、涙を流しければ、船中おどろきて、安喜の湊に船をつけて、浦人に問ければ、年々此浦を過る旅人に寄て、物に狂はする事たび〳〵ありといふ。さてはとて僧を請じて、二夜三日の佛事をいとなむあひだに、關が原軍の事、此浦にてのたゝかひの事、娘物がたりせしに、聞人あはれがりて涙を流す。かくて法事の過る前かた、有がたや此佛事の功德にて、くるしみすこしゆるやかに成ける事よとて、娘の狂

氣はさめたり。それより後はばうこんもうかびぬらん、このごろはたえて人にも寄つきて狂ひける沙汰もなし。

○島村蟹

細河高國の家臣島村左馬助は、武篇を心にかけし者なり。わづかなるあやまちありて殺されたり。亡魂すでに蟹となり、攝州尼が崎におほく生出たり。世に島村がにと名づく。餘所のかによりは、ちひさくしておもてのかたに皺おほくみゆ。さればにや顔のしわみたる人を、しまむらがにのやうにといへるは、此事なりとかや。昔平氏の一門、長門の國壇の浦にして海にしづみしその亡魂、こと〴〵く蟹となりて、長門國赤間が關にあつまり、今の世までもおほく有けりと聞つたへし。

横ばしる蘆まのかにの雪ふれば
　あなさむけとやいそぎかくるゝ

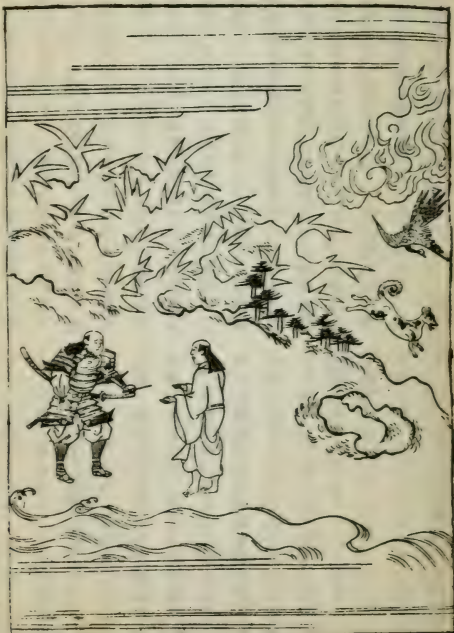
と古き歌にも讀けり。一念のまよひあればゝ、いかなるものにも生れかはる輪廻の有さまなりと、佛も説おき給へり。治承の古しへ源三位賴政むほんして、宇治川をへだてゝ源平の軍あり、うたれたるものゝ亡魂螢になりて、平等院のまへに今の世までも年毎の四月五日には、數千萬の螢あつまりて、光りをあらそうて相たゝかふ。化して異類となると、賈誼がこと葉空しからずや。

○北條甚五郎出家

長尾謙信の家老北條丹後守は、越後の國橡生の城代として、大剛の名あり。其弟甚五郎は年いまだ二十あまりなり。兄におとらぬ勇士なり。天正元年の春二月、心地わづらひ俄に死けり。平生佛とも法ともしらず、死するや直に琰魔王界におもむく。大王出ての給はく、汝世にありし時、いづれの功德をいたせしや。罪科は山のごとしといへども、壽の算いまだあり。ゆるして二たび人間にかへすべし。去ながら汝が母すでに地ごくにあり、よびよせて對面せさすべし。よみがへりなばよく跡をとぶらふべきなりとて、司錄に仰せてめしけるに、まことにやせつかれたるありさま、みしにもあらぬを手かせ首かせをいれて、庭のおもてに引すゑたり。母は甚五郎を見て淚を流し、我世にありし時は、人の色よき小袖をうらやみ、馬物の具鎧太刀までもよくしてあたへ、和殿を世にたてゝいかめしく見ばやとのみ思ひくらし、佛法の事は外の事に聞なし、むなしくなりて賴べき功德も善根もあらばこそ、死しては直に地ごくにおもむき、つるぎの山をこえ、あかがねの湯につき入られ、しばしのあひだもくるしみのやすらかなる事なし。汝は二たび人間に歸るときく。わが跡よく〳〵とぶらへやと、いひもはてぬにおそろしき獄卒、その母を引たてつれて、ゆく〳〵泣さけぶ聲はるかに聞えしかば、甚五郎悲しさ身にあまりて、淚

のおつる事雨の如し。琰王仰られけるやう、汝よく見て歸り、その跡とふ事をわするべからず。とく／＼歸れと仰ける所に、もろ／＼の鳥けだものきたりあつまりて、甚五郎を目がけて怒りけるを、琰王のたまはく、婆婆に歸らば汝等がために功德をいとなみ、皆人間に生をうくべし。はやくゆるして歸せやとあり。もろ／＼の鳥けだものはみなしりぞくに、あかく斑なる狗ひとつ殘りて、甚五郎が衣をくひとめて放たず。いかにと問給ふに、こたへて申すやう、我業因つたなくして狗と生れ、此家にとらへられたり。甚五郎は常のいとまには鶉鷹のあそびに日をおくり、鷹のために我をくゝりて、さらばころしもやらず、股の皮を剝かけて、用ひるにしたがひて切鎹て鷹の餌にせらる。その痛くるしむ事、心もこと葉も絶て、誰に訴べきたよりもなく悲しき中に死けるは、いつの世にわするべき。そのうらみをはらぜんためなりといふ。琰王さまざまなだめて、司命に仰て歸し給ふ。路にして忍の長七とて、この程敵にうたれし傍輩に逢たり。長七すでに甚五郎が袖をひかへて、我は只今地ごくにおもむくなり。我が父母に、跡とぶらひて給はれと言傳せしと届てたべといふ。いかに届け侍べるとも、しるしなくてはまことしからずやと云ければ、腰よりひとつのかうがいを取出し、これをしるしにとて、なく／＼わかれけり。送りける司命のをしへけるやう、たとひとぶらひのため經をうつし佛をつくりても、非道に得たる金銀にていたしては、さらに

亡者の功徳に成がたし。その亡者の秘蔵に思ひし物こそ、たしかにはとゞけとぞかたりける。甚五郎道にすゝみ、大なる穴に行かゝり、此中に落るとおぼえてよみがへり、忍がことづてたりしかうがいは手にあり、その家につかはしければ、長七うたれしそのかばねをはうぶりし時に、棺に入て送りし物なり。何のうたがひなしとて、父母なく〳〵とぶらひ、くやうをいたしけり。甚五郎は今は出家の身とならばやと、つらつら打案ずる中に、弓矢とる身の習ひ、かかる世の亂れをうしろになし獨りのがるゝは、君のためには不忠となり、親のためには家をうしなふの不孝の子なり。天神地祇もさこそはにくみ給ひ、世上の人にも笑はれ恥かしめを死後までも名をさらすなるべしや。さりながら恩をすてゝ無爲に入をば、まことのはうおんなりと佛もとき給へば、世の望みを忘れ慾をはなれ抖藪行脚の身とならば、人も思ひゆるし、君も捨給ふ習ひ也。させる所帶もなく妻子もなき我なり。髻に何の心をか殘すべき。後世こそ大事なれ。とかくの事は用なしとて、さまを替て家を出つゝ、諸國をめぐる修行者とぞ成にける。

狗張子巻之二

○交野忠次郎發心

河内の國かた野の里に、水崎忠次郎宣重と聞えしは、もとは駿河國今川家にありしが、牢浪して河内に來り、交野のわたりに引こもり、思ひかけず妻をかたらひてすみけり。本より武家の奉公人なれば、耕作商買の所作もしらず、只然るべき君を頼みて、軍陣に手がらをもふるひ、世にたち名をもとらばやとのみ思ひてあかしくらすほどに、身上ことの外にまづしく、朝ゆふべの烟をたてかねたり。ある夜のあかつき忠次郎ねぶりさめて、妻にかたりけるは、いか成先世のむくいにや、かゝるまづしき身となりはて、わびしき目をみせ侍べる事、返すぐ\も面目なき有さまなり。もし世にも出るなつば、又おもしろき世にも逢瀬のあるべしとかたる。妻聞て、かゝるわびしき所にきて、幾世をへたりともいかめしき事のあるべしとも思はず。營とてすべき業もなし。かくて年月をおくりて後は、道のかたはら細溝の中にたふれて、飢死するより外は有べからず。せめては野ばらのすゑ、往來の道すぢに出つゝ、手ごろのものゝ行過るをうかゞひ、うちころしてはぎとり、迫たふしてうばひとり、我にもゆるやかなる心をもつけて給とぞいひける。忠次郎うち聞て、我年ごろは侍の道をたてゝ、まさなき事は露ばかりもせじとこそ嗜みけれ。さりともかゝるわびしき中に、情をかけてふかく契りしあひだを去別れんも悲しく、妻がこと葉につきて思ひたちつゝ、夜のをくるを待かね、朝霧のまぎれに刀をわきばさみ、人ばなれとほき野のすゑ、草むらにかくれて待ける所に、年のほど十七八かと覺えし女性の、ちひさきめのわらはに小袋をもたせてうち過るを折ふし後さきに人氣もなし。刀をぬきてかけ出つゝ、そのまゝうちころし、二人の女のきる物はぎとり、小袋ともに持そへて家にはしり歸り、よき仕合いたしぬとて妻にあたへ、年のほど十七八かとみえたる、世にうつくしき女性なりけるぞや、いかなる里の誰人の妻なるらん、いたはしながらうちころしけるあはれさよとかたるに、妻これを聞ながら、あはれとも思へるけしきもなく、井のもとのあたりにゆきて、水をくみつゝうれしげにわらひながら、小袖につきたる血をあらひける顔つき心ねのおそろしさ、鬼のごとくおもはれ、あきれたる中にうとみはて、半時にてもわが妻とてそふべきものか、情なの心やと、是をぼだいのたねとして、もとゆひおしきり家を出で、あしにまかせて諸國を修行して、三年にあたる比ほひ、大和國よし野に

めぐりきて、日すでに暮しかば、山本の里に宿をからばやと思ふに、道のほとりに軒あばらなる茅屋のうちに、ともし火かすかにみえし。立よりて戸をたゝくに、内よりわかき法師の出て誰人ぞと云。諸國修行の聖にて候。日の暮たれば宿かし給へといふ。やすきほどの事、一夜をあかし給へとて内によび入たり。粟飯とり出で、是にて旅のつかれをやすめ給へとて、我身は持佛堂にうちむかひ念佛しけるあひだに、涙をぬぐふ事幾しきりなり。忠次郎入道此有さまをみつゝ、やう〳〵粟飯くひはてゝ持佛堂にまゐり、もろ友に念佛しけるが、何となく物あはれにおぼえて、そゞろに涙のおちけるを、念佛はてゝ後、あるじの法師と只二人、うちむかひ物がたりせしまゝ、さて只今念佛のあひだに、しきりに涙をおとし給ふは、いか成子細の候やらんととひければ、あるじのほうしこたへけるは、かたるにつけては悲しさの、かゝる身になりてもわすれがたき事の侍べり。我はそのかみ三好日向守の家人なり。いとけなくして父におくれ、母かたの祖父は有德なりける故に、その家にやしなはれ、人となりてのち武家ものうき世の中なれば、只わが名跡をつぎて世をやすくせよとて、ちかきあたり田宮の里にすみわたり、北條村より妻をむかへしを、いくほどなく盜人のためにころされて、悲しくも口をしさ今更にかぎりなし。その俤のわすられず、あまりの事にはかの盜人のありかをきかば、たとひ虎ふす野べ、鯨よる浦といふ共只一人ゆきむかひ、妻の敵はうつべきものをと、別れをしたふ涙さへ、しばしがほども留らず。袂のかはく隙もなし。かゝる時に世をすてずは、生死のちまたも覺束なく、まよひの夢もさめがたかるべし。うき世の中はこれまでなり、佛道に身をすてゝ、はかなき妻のぼだいをもとぶらひ、來生にはさりともひとつはちすの契りをむすばんとおもひ定め、此山もとにこもりて、念佛して居侍べり。今日はこと更に、別れしつまの三とせに歸るを思ひ出て、佛に花香を奉り、むなしき跡をとぶらふ中に、

うらめしく又なつかしき月日かな
　別れみとせのけふと思へば

すつる身ながらも猶わすれかねて、かく思ひつゞけ侍べり。そなたにもおなし世をそむきし人なれば、逆緣ながらとぶらひてたべとぞかたりける。忠次入道つく〳〵と聞て、

年ふればわすれ草もや生ぬらん
　みとせのけふと思はれもせぬ

此もの語を聞につけて、恥かしき事こそ侍べれ。その女性をころせしものはそれがしなりとて、初終の事つぶさにかたり、我もこれゆゑ世をそむきて、諸國をめぐる身のとりわきこよひ此庵にきたりしは、運のきはめとはいひながら、嬉しう侍べり。そのうしなひし折からは、さこそ悲しく口を

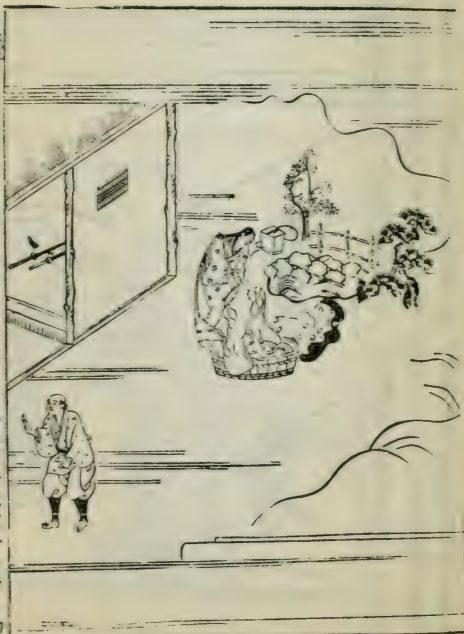
しからめ。かたきは我なり、とく〳〵かうべをはねて、本望とげ給へとて、首をのべてさしむかひけり。あるじの法師手をうちていふやう、年月念佛の隙には、妻のかたきのあり所をしらさせ給へと、神ほとけにもいのり侍べりしに、こよひしもこゝにめぐり來れる事も、心ざしのまことあるゆゑぞかし。今はねがひの花ひらけ、妄念の雲晴たり。此事なくばそなたも我も、いかでかぼだいの道にいらん。佛種は緣よりおこると佛のとき給ふはこれなるべし。今はうらみものこりなく、よろこびの種となり、一味の雨の沾ほひける。九品のうてなのえんをむすび、おなじ蓮の契りとなりし嬉しさよとて、二人の法師ひたひをあはせて、歡喜の涙おきどころなし。此上は何かへだてのあるべき、しばらくこゝにとゞまり、念佛申てとぶらひ給へとて、十日ばかりは二人おなじくおこなひしが、忠次入道いとまごひして出けり。後にそのゆくゑをしらす。あるじの法師も、それより四年ののち七日ばかりやまひせしを、あたりちかき村人、かはる〳〵きたりてかんびやうせしに、さのみにくるしき色もなく後世の事物語りいたして、つひにりんじふめでたく、念佛の息もろ友に正念に往生す。人々とりまかなうて、塚にうづみしろしの木をうゑて、男女あつまり念佛して、とぶらひけりとかや。

○死して二人となる

小田原城下のうらに、百姓のすみける一村

あり。家中の侍も少々すみけり。北條早雲の時に、西岡又三郎とて、中間わづらひて死けり。夕さり夜ふけがた、野原に埋みをさめんとて、傍輩どもあつまりて、日の暮るを待ける所に、見なれぬ男の來りて、人人には會釋もなく死人の前に坐して、聲をかぎりに啼ける。あはれなるまでに聞えしかば、さだめてちかき親類又はしたしき友なるべしと思ふところに、死したる屍骸にむくとおきあがる。此人もおなじく立あがり、摶あひ打あひけり。物をばいはずかたたこなたせしまゝ、あつまりし人々は、大におどろきながら、すべきやうなくして、戸をさしこめ出のきけり。二人とぢこめられ、戸より内にて打あひつゝ、日の暮がたにしづまりければ、人々戸をひらくに、二人おなじ枕にふしてあり。勢のたかさすがたかゝり、顔の有さま鬢鬚、その身に着たる衣服までも、すこしも替ることなし。常に狎たる傍輩も、いづれをそれと見知べからず。棺をおなじく二人をひとつにして、塚を築て埋みけり。

○武庫山の女仙

天正年中に、京都七條わたりに、小野民部の少輔とて、もとは然るべき人のすゑと聞えし。世におちぶれて京のすまひも物うくて、津の國冠の里にしたしき人を頼み、かしこにくだりて住けり。さびしき田舍のすまひ、我とひとしき友もなく、春の日のうらゝかなるにいざなはれて、心にまかせて武庫の山もとにいたり、

見渡せはすみのえ遠しむこ山の
　浦づたひして出る舟人

とうちずむじて、谷ひとつわたりてあなたの茂みにさし入けれは、年のほどはたちあまりの女只ひとり立てあり。花をたづねてあそぶにもあらず、妻木をひろふ賤のめともみえず。身には木の葉をつゞりながらもいやしからぬ有さま。民部あやしく思ひて、近くあゆみよりつゝ、君はいかなる人なれば、かゝる山中に只ひとりおはすらんと問ければ、女うちゑみて、我はもとより此山に、年月をかさねしものなり。昔をかたりて聞せまゐらせん。古しへ神功皇后は、高麗もろこし新羅の國をうちしたがへ、此日のもとに歸陣あり。弓箭鉾劔よろひ甲、あらゆる武具を此山にうづみ給ひしによりて、武庫の山とは名づけられけり。そののち天長のみかどの御時に、第二の妃この山に入給ひ、如意輪觀音の法をおこなひ給ふ。故に如意の尼と申奉りけり。こゝは辨財天の住所、廣田の明神つねにまもり給ふ。白き龍に變じてあらはれ、石となりて御形を殘し、猶今も此山にましませり。空海和尚この所にして、如意寶珠の法を修せられしに、辨財天女あらはれ給ひ、我此山にとゞまりて、あらゆる貧人のためにたからをあたへんとちかひ給へり。如意の尼すでに伽藍を建立し、如意輪の陀羅尼を誦し、空海和尚を請じて、秘密灌頂をうけ給へり。此年天下大に日でりせしかば、守敏空海雨ごひのいのり有けるに、如意尼もとよりもち給ひし浦島子が箱を、空海これを

借て大祕法をおこなひ、雨ふりて天下をうるほし給ひけり。此山の上に大なる櫻木有て、朝ゆふべには、光さしてかゞやきけるを、空海に仰せて、此木を伐て佛像をつくり、浦島子が箱をば、佛の中につくりこめ給ふ。御后此山に入給ひし御時、二人の女官をめしつれ給ふ。一人はこれ從四位上和氣眞綱のむすめ豐子といひ、今一人は相馬將門のむすめ將子といふ。今の我身これなり。如意尼につかへ奉る事、露ばかりもおこたりなし。我は常に瀧の水をくみて閼伽のそなへとす。ある時瀧の水のもとに、いとけなき兒のいまだ二歲にもたらざるやうにて、色白くうつくしきが匍出で、我を見てうれしげに笑ひけるを、いとをしく愛して、時のうつりておそく歸りしかば、いかにけふはおそかりしととがめ給ふ。かうかうの事侍べりと申す。その子いだきて歸りて見せよと仰せけるを、又瀧のもとにゆきければ、いたいけらしく匐ひ出てわらひけるを、かきいだきて歸るに、門に入しかば、此子むなしく成て、枯木の根のごとくにておもく覺えしを、如意尼近くよせて御らんじければ、幾世へたりともしらず、大なる茯苓といふものなり。是はそのかみ聞及びし仙人の靈藥なり。これを食すれば、白晝に天にのぼるとかや。かぎりなき命をのぶる藥なり。飯に蒸て奉れとあり。柴三束を燒つくしてすゝめ奉る。みづからきこしめし、二人の女官にも給はり。みなのこりなく喰つくしけり。これより心はれやかに、身も涼しく日をかさねて、如意尼と

昱子もろ友に天に上り給ふ。我は心すこしおくれて、つれてものぼり得ず、此山にとどまり、松の葉を食とし、數百年をおくりて、夏とても熱からず、冬もまた寒からず。谷峯をわたれども苦しくもなし。身はかろく形おとろへず。さて今はいか成君のおさめ給ふ御代成けるやと問に、民部はかかるきどくの物がたり、又ためしなき御事なり。天長の年よりこのかた、世かはり人あらたまり、數百歳をへだつるあひだに、人王は百七代にあたらせ給ふ。年號は今は天正と改元あり。世の中亂れて暫らくも靜かならず。國さはぎ民くるしみ、上下ともにおだやかならねば、只浮雲のごとし。あな浦山しの有さま、眞の地仙にておはしけりとて、首を地につけてをがみけるあひだに、女仙は行がたなくうせにけり。民部ふしぎに思ひ、ふもとの里に入て、只今此山中にてかゝる人に逢けり。年ごろも此人に行逢たるためしありやとたづねければ、あるじ大におどろきて、されば此家の祖父、八十有餘なりしが、むかしわかかりし時に、柴刈とて山に入しかば、何とはしらず廿あまりの女の、顔うるはしくつやゝかなるが、身には木の葉をつゞりかさね、岩のうへにたちてありしを、あれはといふ聲を聞て、飛ともなく、嶺にのぼりてうせさりぬとかたられ、きつねむじなのばけたるにやといはれしを聞おき侍べり。それより後には、見たる人も侍べらずとぞいひける。民部きどくの事をもみつる物かなと、思ひつゞけて歸りぬ。

○原隼人佐謫仙(たくせん)

原加賀守は武田譜代の家臣、世にかくれなき武勇の侍大將なり。秋山伯耆守が妹を妻としてそひけるに、久しく子といふ者もなかりしに、ある時たゞならずわづらひ出しけるを、醫師(くすし)を賴て、さま〲にれうぢすれどもしるしなし。ある人來りて、是は正しく懷妊なり。さのみに藥をあたふるに及ばずといひければ、さてはめでたき事なりとて、月のみつるを待けるに、すでに十月(つき)に成ども子も生れず。やまひいよ〱おもくなり、十六月にあたりて、母つひにはかなくなりたり。惠林寺におくりて、塚の主とぞなしける。其夜しも月あかゝりけるに、塚の內に小兒のなく聲聞えしかば、寺僧あやしみて塚をひらきければ、うつくしき子の今生れて、母のかばねにすがりつきて啼(なき)けるを、父のもとへいひつかはしければ、いそぎ迎へとり、乳母(おち)めのとをつけて生立(おひたて)しに、たくましく生(おひ)たち、程なく成人して、器量こつがら人なみならず、心ねしぶとく利根(りこん)なり。年十五より初陣して、度度の軍に手がらをあらはしければ、信玄も祕藏(ひさう)のものにぞ思はれける。ある時信玄仰せけるは、汝が父加賀守は、前代從五位下(の)左京大夫信虎公の時より、武勇のほまれ忠節のはたらき、武田譜代の侍にて、かた〲心やすく思ふなり。その子として、父が餘蔭に靠(よ)かゝりて、自分のはたらきにおこたる事なかれ。武道の功者に近づきて、よき事を聞習ふべし。智惠ありとも聞(きく)事少けれ

ば、物知事博からず。その上には國法よく守るべし。國法軍法をそむくものは、臆病不忠の科人なり。主君の御影にて、命をつなぎ妻子をはごくみ、心やすく身をたてながら、其家の法をそむき、御恩をはうずる心ざしを忘れ、わたしくの遺恨をもつて身命をうちはたすは、主君の御用にもたゝず。只國家の盗人ならずや。かゝる不覺人は、生てあれども義理をしらず恥をもしらぬ故に、大事の虎口をにげくづして、味方の負をさするものなり。先祖親祖父はたとひよしとても、子孫かならずよかるべきにはあらず。自分の行跡よき働なくば 世に名は聞ゆべからず。隼人佐は、父にはことの外にすぐれてみゆ。兎に角に心を正直に、家ををさめ百姓をあはれみ、忠節を宗とすべしとぞ給ひける。然るに隼人佐は、武勇才智遠慮分別首尾さうおうのものゝふ也。こと更に自門他家に比類なき一能あり。父はもと甲斐國高島といふ所の人なり。

武篇に名だかく、方向の陣どりを得ものにて、樂のたうといふ事を仕いだし、たび〳〵勝利をあらはせり。子息隼人佐にむかひ、それ侍は何にても、弓矢の道にひとつの得ものあるやうに、つとめてたしなむべしといひおきけり。さればにや隼人佐は他國にゆきても、たつきもしらぬ山中の道、いまだふみみぬ所をも見つもりしてふみわくる事、陣どり合戰の場、山河のあひだ、更にその國の案内者をからず。隼人がよきと申すは、諸卒大小上下心よくうたがひなく、みなしたがひゆくにたがふ所なし。昔平家

の一門都を落て、津の國一の谷の城にこもりし時、九郎義經責くだり、鵯越におもむき、此山中に案内知たるものやあるとの給ひしかば、武藏國の住人平山の武者所すゝみ出で、季重よく存知候と申す。土肥畠山とり〴〵に、武藏國の人はじめて此山をとほり、津の國播磨のさかひなる山の案内、いかでか知べきと笑ひしに、平山いふやう、鹿のつく山は獵師がしり、鳥のつく野は鷹師がしり、魚のよる浦は漁のしる。芳野泊瀬の花の色、須磨やあかしの月影は、その里人はしらねども、數奇ものは知ならひなり。色をも香をも知人ぞしるといへり。桃李ものいはず、下おのづから蹊をなすとかや。敵をまねく城のうち、軍をこめたる山中には、剛のものこそ案内者よとて、鞭をあげて先陣にすゝみけりといへり。其道に心をいれてよく工夫いたさば、などかいたらざらん。いにしへもろこし胡國の路に、皆仲が老馬を先に立て歸りしは、ためしなき事にもあらず。天正八年かのえ辰九月下旬に武田四郎勝頼東上野に出て巡見せられけるに、太湖山地延の城より仕かけたる軍に、武田方徒膚にて戰かひ、城はのりとりけれども、人數はおほくうたれたり。中にも侍大将原隼人佐は、城兵七八人にむからてたゝかひしに、小溝に足をふみいれ、頂より眉間をかけて切つけられ、深手なりければ打たふれしを、曲淵庄左衛門肩に引かけ、城外に出て郎等にわたし、甲府に歸りてやがて死けりと世には沙汰ありけれども、まことには隼人佐心にくやむ事あり、

武田の家長篠の後をとりしよりこのかた、家老諸侍みな死うせて、隼人佐わづかに只獨り生殘り、長坂釣閑、跡部大炊の兩人が佞奸に押れて、武田の家運すゑになりし有さま、傾ちかきにある事を知て、遠く范蠡がいにしへを思ひ、張良がむかしをしたうて、山ふかくわけ入つゝ仙術の道を尋ね、長生の方をもとめ、つひに大仙に逢て、そのおこなひを習ひ、白晝に天にのぼる。其のち山人に行あうて、武田の家のほろぼされし事を聞て、うれへたる色ふかく、我はそのかみ原隼人佐昌勝といはれしものなり。本は天上にありけるを、少あやまる事ありて下界に流され、武田の家にしばらく身をかくして居たりしを、罪ゆるされて天上に歸りしなりとて、足もとより雲をおこし、あまつ空にのぼるとみえしが、隱々としてうせにけり。

○形見の山吹

都の南泉河のあたりに、菅野喜内とて、色このみける人あり。文祿年中の事にや、春もすゑになりゆけば、あだにちりゆく花の名ごり、いづくにか又のこれる木ずゑもありやなしやと、あらぬ太山を思ひ、靑葉まじりの遲櫻もあらましかば、初花よりも猶めづらかならんものをと、すみかをうかれ出て瓶の原鹿瀨山をうち通る。

都出てけふみかの原泉河
川風さむし衣かせ山

と古き歌まで思ひつゞけて、木津の里に行かゝる。年のほど十七八とおぼしき女の、すだれの間よりさしのぞきける顏ばせ、むかし女三の宮、手がひの猫のつなにひかれて、御簾のかげよりのぞき給ひ、かしは木の衛門もはつかに見そめまゐらせける。たがひの心ぞかよひける、ためしもかくこそありつらめ。家居もさすがに故ある人のすみわたりぬらん、軒端は物ふりたりけれどもいやしからぬ有さま。喜内はこれを見そめしより、心亂れたましひうかれ、近きあたりに立よりて、あの軒ばふりたる家は、誰人の住ける所ぞととへば、大内義隆の牢人高梨三郎左衛門とて、今は身まかりて後家と娘と只二人、めのわらはをめしつかうて、かすかなるすまひ、御いとほしく侍べるとかたる。喜内聞て娘の名をとへば、彌子と申て今年は十八なりといふ。喜内はたへかねて何をかつゝむべき、かりそめに見そめしおもかげ、我身をはなれず思みだれ侍べり。せめて此事を露ばかりしらせてたべ、しからば何事の御おんといふとも、これにはまさらじといひければ、あるじの妻もとは京の人なるが、情ふかく頼まれ、御文まゐらせ給へ、とゞけて奉らんといふに、喜内うれしさかぎりもなく、肌に着たる白き小袖の衣裏をときて、書おくりけるに、中々こと葉はなくて、

君にかく戀そめしがとしらせばや
心に忍ぶもじずりの跡

その夕暮、あるじの妻行て物がたりすとてひそかに文をわたしけり。彌子たもとにいれてねやに入つゝ、此歌をみるに、荻の葉につたふ風のたより、萱草のすゑいかならん。露のかごとにいひしらぬ文も、恥かしさをいかゞせんと、いと物わびしく、あはれなるかたにおぼえけれども、ふきもさだめぬうら風に、なびきはつべき煙のすゑも、つひにはうき名にたつべしと、心づよきを關守になして過ゆく程に、喜内は宿に歸りながら、いつとなくねもせで夜をあかしおきもせで日をくらし、返しありやと待けれども、よどむや水のいなせ川、いなせの返しもなかりしを、あるじの妻ひそかにゆきて、御返しはいかにと責ければ、彌子恥かしながら、

　あまのたく浦の鹽やの夕煙
　　思ひきゆともなびかましやは

といひければ、かう〳〵つれなくおはすといひつかはしければ、喜内いよ〳〵こがれまどひて、

　戀しなば煙をせめてあまのすむ
　　里のしるべと思ひだにしれ

今はこの世のかぎり、たとひむなしくなりゆくとも、心は君があたりをたちはなれじなんど、おそろしきまでかきゝどきて、

　面影はほのみし宿にさき立て
　　こたへぬ風の松にふく聲

只つれなき御心に思ひなげかれて、音にたてゝなく蟲のたとへまで、いひしらぬ文の數、千束にあまる程に成ければ、彌子もあはれとおもふなさけの色深くうちしほれて、親しさけずは「あづまぢや佐野のふなばしさのみやは堪ては人の戀わたるべき」と思ひしづめる有さまなり。さてかくぞよみける、

　世々かけて契るまでこそかたからめ
　　命のうちにかはらずもがな

とかきてつかはしければ、喜内この歌を見て限りなくよろこび　その夜をさだめて、あるじの妻に案内せさせ　垣のひまより忍び入て障子をひらきければ、一間なる所にともし火かすかに、おもはゆくうちそばみ居たるにかたらひよりて、日ごろの物おもひ、心をくだきける事より、行すゑまでの契りをかたるに、彌子はこと葉すくなう聞えて、

　ことの葉は只情にもありなまし
　　みえぬ心のおくはしられず

とかこちけり。喜内ふかく恨みて、

　あひそめし後の心を神もしれ
　　ひくしも繩の絶じとぞ思ふ

かりそめになれにし後は、人め忍ぶの露を分て行通ひしに、はかなき世のならひ、彌子が母わづらひ出して、むなしく成たり。悲しさいふばかりなく、うちこもりけるに、霜に枯行草の上に、雪ふりかさなるとかや、喜内が父は尼が崎にありけるを、關白秀次公にめされておもむくとて、喜内をよびよせもろ友に行たり。幾ほどなく秀次

公は、高野山にして生害せられ給ふ。このぞめきに木津の里の音づれもうちたえしかば、

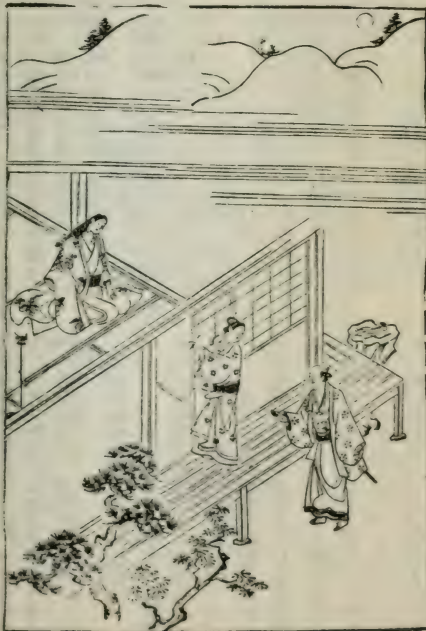
我やうき人やはつらき中川の
　水の流れも絶はてにけり

かく思ひつゞくるうちに年もくれ、春過夏もたちける程に、物思ひのかさなる故にや、彌子いつとなく心ちわづらひて、つひにはかなく成たり。今は此世の名ごりも頼みすくなく成し所へ、喜内のかたよりとて文おこせたり。かなたこなた露隙もなき事ども、さまぐ\かきつゞけて

關守のうちぬるほどとわびし夜も
　今はへだつる恨とやなる

といひつかはしけるを、彌子ふしながら涙とともによみて、

ふみみても恨ぞふかき濱千鳥
　跡はかひなく殘る夢の世

とよみて、そのまゝ絶入てつひにむなしく成たり。あたりの人痛はしがりて、近き野べに埋て、塚の主とぞなしたる。すみあらしたる家なりければ、はしらもかたぶき軒もりて、浅ましきくづれ屋となり果けり。かくて三とせの春秋をおくりむかへて、喜内は泉川に立歸り、あるじの妻はいかにと尋ねしに、此ほど身まかり侍べりといふ。彌子が家にゆきてみれば、軒くづれ柱たふれ、草のみおひしげり、すみける人の跡もなし。あたりに立よりて聞ければ、日比の有さま殘りなく語るに、あまりのかなしさに、そのすみ一間のくづれたる壁を引のけしに、椸にかけたる黄染の小袖の、

竿にかけながら地におちて、朽たる跡より山吹の生出て、恨みがほなる花の色の、ところ〴〵に咲たるを見るに、朽てももとのいろをわすれぬ形見の花とおもはれて、喜内はいとゞ悲しく、血の涙を流して啼けれども、くちなし色の花の名ごりは、こたふるこゑもなし。さてもなき世のありさま、かくぞ思ひつゞけける、

　山吹の花こそいはぬ色ならめ
　　もとの籬をなく〳〵ぞとふ

猶も心のおき所なく、墓にまうでて見めぐれば、人の通ふ道ともおぼえず。山かげなれば日すでに暮かゝるに、野寺の鐘入相の聲も心ぼそく、もえ出る草葉も袖も露しげく、吹おくる風も身にしみて、涙ともろ友に念佛申て、

　埋もれしその面影はありながら
　　塚には草のはや茂りぬる

かゝる世の中のあだにはかなきを、今もし思ひこりずば、又いつの時をか待べき。世にしたがへば望みあり、かなはねばうらみあり。かりの色にまどひて、執心ふかく思ひみだれては、中々輪廻の妄念なるべし。そむきておこなはゞ、戀しかるべき彌子にも、來世にはさりとも、ひとつはちすの緣をむすぶも頼みありと、宿に歸りて家の柱に、

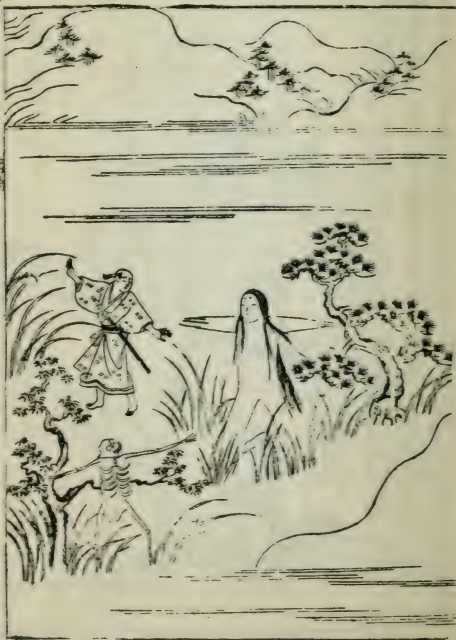
　なげきつむちから車のわが身世を
　　たちめぐるべき心ちこそせね

とかきつけて、朝とく出るとみえしが、遁世してゆきがたなくうせにけり。

狗張子巻之三

○伊原新三郎蛇酒を飲

元和年中に伊原新三郎といふもの、久しく牢浪して、ある日宿を出で、三州みかたが原に出たり。夏の日の暑氣甚だしきに、梢に吟ずる蟬の聲涼しくして、不覺にあゆみゆくほどに、日すでに山のはにかたぶきて、風やはらかに吹おこる折から、道のほとりに林あり。木のまよりみれば、あたらしく作れる家四つ五つ見えたり。餅酒をあきなふ店とおぼゆ。立よりてやすまんとするに、年のほど十五六なるむすめの、顏うつくしきが立出で、こゝは武家がたの出てあそびし給ふ所なり。暫やすらうて御通りあれかしといふ。こと葉つき愛らしく、家に入たれば又餘の人もなし。新三郎たはぶれかゝれば、此娘はしたなくもいはず。父も兄も内にはあらず。何かはゞかるべきとて、いとなつかしけにぞなれかゝるを、新三郎よろこびて、ともし火とるほどに暮たり。さだめていまだ何をもめさで、つかれ給ふらんにとて、餅とり出してすゝめけり。酒はなきかといへば、よき酒のありとて、奥に入て盃とりそへて出しけるを、新三郎もとより飲人なりければ、娘と友にふたつ三つのむに、なく成ければ、また取に

たちけるを、新三郎さし足して、奥のかたを見るに、大なる蛇を釣さげて、刀をもつて、その蛇の腹を刺て、血したゝるを桶にうけて、何やらん入て酒になしけり。新三郎心まどひておそろしくなり、いそぎ戸を出てはしる。娘跡より追かけてしきりによばふ。東の方に聲をあはせて、あたら物を取にがしけりといふ。新三郎跡を見かへれば、その長一丈ばかりなるもの追て來る。すでに林の中に入ければ、何とはしらず白き事雪のごとくなる物、木のもとより立あがる。林の外に人の聲ありて、こよひ此ものを捕にがしなば、明日は我ら大なるわざはひを受べし、それのがすなとよばはる。新三郎ますますおそろしくて、やうやうに町はづれまでかゝぐりつきて、家の戸をたたく。戸をあけて内に入しかば、しばしはあへぎて物もいはず。暫らくありて、かうかうの事ありとかたる。あるじおどろきていはく、その林のあたりには、茶店もなく家居もなし。さだめて妖物にあうて、おそろしきめを見たまひぬらん。とほき所の人は、をりをりかどはかされて、夜もすがらなやまされ、歸りて後にはわづらひいだす人もあり。新三郎ははやくのがれて、ことゆゑなきこそめでたけれといふ。餘りのふしぎさに、新三郎宿に歸りて人あまたかたらひ、その酒のみし所に行て見るに、家もなく茶店もなし。人氣まれなる野原のすゑ、草むら茫々と滋りて、物すさまじくさびしき中に、草にまとはれて、長二尺ばかりの婢子の、手あし少缺損じたるあり。これや

娘に妖ぬらんとあやしむ。そのかたはらに、その長二丈ばかりなる色くろき蛇、すでに腹のあたり割やぶれて死してあり。それより東のかたには、人の骸骨一具あり。宍むらは雨露にさらされて、手足筋骨はつづきて白き事雪のごとし。みなことごとく打くだきて、薪をつみて焚すて、塊の水にしづめけり。新三郎は日ごろ中風の氣あり。癩がかりて侍べりしが、蛇酒を飲ける故にや、やまひは根をぬきて癒たりとぞ。

○猪熊の神子

元和のすゑの年、京都四條猪の熊に、年老たる神子あり、一人の娘をもちたり。神道の理はりは露斗もしらず。神の御たくせんとて、あらぬ事をいつはり物をとり、數珠をひくといふ事をいたし占兆をいひ、おろかなる女わらはをたぶらかし、雨ふり風のふくにつけても、神の御つげなりとて人をおどしすゝめ、きたうをせさせて、小袖帶などまでもたぶらかしとり、佛法の事は耳にも聞いれず。とかくして世をわたる事、すでに七十餘年をおくりむかへ、娘は位おはする家に宮づかへをせさせて、此神子ことの外に老おとろへ、今は世の中の事よろづ心ぼそく、かゝる所作も空おそろしくおほえ、いくほどもなき命も賴みすくなく、來世の事も心もとなし。さればとて今までせし業も、打すてがたく思ひ歎きつゝ、北野の朝日寺にまゐりて、我身此世のなりはひは、身すぎのために人をたぶらかし、利得を望み諂ひいつはり、正直の道にそむ

く事、神のめぐみ佛のをしへにはづれたるもの。只ねがはくは死して後の恥を隱し、たましひをたすけて給はれと祈り奉る。まことの心骨にとほりて、涙のおつる事雨のごとし。それよりは隙あれば、常にまうでておがみ奉りけり。月日重なりて、神子俄に病おこり、此世の限りと思ひければ、娘のもとへ使をつかはしけり。年比は神子の娘といはれんには、人もおとしめあなづらんは口惜かるべしと、里の有樣深く隱して音づれのたよりも絶々に忍びけるを、此たびは生身のをはり、此世のいとまごひなれば、人には忍びて、はやく歸り給へといひつかはす。娘おどろきて、いそぎ行ければ母大によろこび、目をひらき嬉しげに見ながらそのまゝ絶入けり。年いまだわかきむすめなり。かゝる事いかにすべき才覺もなく、只泣しづみて、是いかゞせんと口説けれども、家居まばらなる柄なれば、たやすく問かはす人もなし。日も夕暮に成て、わかき法師四五人來りて、これは朝日寺にて常に見なれたる人ぞかし。死侍べらば尸を隱してたべと、ふかく頼みけるまゝ來れるなりとて、甲斐々々しく取したゝめ、棺を用意して尸をおさめ、阿彌陀が峯に行て火葬にし、此人の事來世も心やすく思はるべし。我らよく／＼跡をもとぶらひてまゐらせんとありしかば、娘悲しき中にも有がたく、さて御寺はいづくにて、御名は何と申すやらんと問奉れば、朝日寺の正觀房と尋ねよとて出て歸り給ふ。白きうす衣に蒔繪の香合とりそへて參らせたり。次の日に成て、朝日寺にまゐりて尋ねしかども、この寺にかやうの僧はなしとこたへたり。あやしくおもひながら、堂中にまゐりておがみ奉れば、きのふまゐらせしうす衣は、觀音うちかづきて、御ひざの上に香合はのせておはしましけり。娘これをおがみ奉るに、有がたさかたじけなさ、此御本尊すでに母を葬ぶり給ひし事はうたがひなし。來世もかならずすくひ給はん。現世後生ともに、すて給はぬ大慈大悲の御ちかひかなと、歡喜の涙おき所なし。かくて下向ののち、常にあゆみをはこびて、母のぼだいをいのり奉りしに、娘またよき幸ありて、和泉の境にくだり、しかるべき人の妻となり、子どもあまたまうけて家さかえけり。

○甲府の亡靈

武田勝頼は、織田信長公に沒落せられ、城壘は一片の煙となり、草のみ生茂り、狸のふし戸、狐のすみかと成たり。そのあたりには、百姓の家所々に立たりしも、むかしにもあらずさびわたりて、物すさまじき有さまなり。折々はあやしき事も有て、人をおどろかし侍べるとかや。諸國修行の僧好雲房とて、もとは竹田の人なり。世をいとうて家を出つゝ、諸國をめぐりけれども所に關をすゑ、渡りには奉行をそへて、心

やすく往來も成がたし。此甲府にめぐり來て、日の暮ければあやしの茅屋に宿をかりけるに、あるじのいひけるやう、旅の僧に宿をかし奉らんはいとやすし。夜ふけてあやしき事のあり。それだにくるしかるまじくは入てとまり給へかしといふ。好雲聞て本よりすつる身のならひ、たとひ命は失なはれ侍べるとても、何かくるしかるべし。宿なき野のすゑ山ぢのあひだには、岩ね木のもとふるき社のかたはらにも、一夜をあかす事おほし。まして主のおはするには、不足なしとて内に入ければ、亭のおく、菅ごもの上におきて、粟飯したゝめてすゝめけり。松の火をあかしに、ともし火のかはりとし、さて物がたりするやう、そのかみはゆゝしき城にて要害きびしく、堀の外には諸侍の屋敷軒をならべてたちつゞき、にぎやかなりし所なりけるを、今は沒落して、かゝる淺ましき賤がふせ屋のみ、わづかにすみわたるばかりなり。むかしの人の執心殘りて、あやしき事の侍べるなり。おどろき給ふなとぞかたりける。かくて夜もふけければ、主は内に入て、好雲只獨り念佛し、心をすまして臥けり。かゝる所に一人の女、年のほど十七八とみえしが、枕もとの障子をひらき内に入て立たり。顔うつくしく、こぼれかゝる鬢のあたり、その肌は雪にあらそひ、すこし打ゑみて、秋の空いと靜かに、闇の中物さびし。蛬夜もすがら月のもとに吟じ、更ゆくまゝに風そよぎて、桐の葉もふみわけがたく成まゝに、此夜をいかにあかしかねつゝ、これまでまゐりぬとて、

草の葉も露も我身の上なれば
　ほさぬ袖だに月やどるらん
とうち詠めて、いかにお僧は、夢もさめ給はぬやといふに、好雲物をもいはざりしかば、女又云やう、こよひ敷たへの賤が菅蓆床もむなしく、さえゆく月の影も惜きに、酒ひとつ汲て、旅の心をもなぐさめばやとそゝのかせども、更にものをもいはず。女又いふやう、さのみにつらくくちなし色の、たえて物をものたまはぬかな。たとへば戀路の闇にまよふ人の、まだ下紐のとけぬにもまた一こと葉は聞ゆるぞかし。いかにとかくのいらへもなくておはすらん。
　いかにかく問どこたへぬくちなしの
　花も染れば色に出るを
又聲うちあげて詠ずる詞に、
　黄帝上天時　　鼎湖元在レ茲
　七十二玉質　　化二作黄金質一
好雲聞ながら、心にもかけず物をもいはざりしかば、女座をたちて歸るとみれば、形は跡なくきえうせたり。初は好雲が心を引て、亂るゝ思ひをとらんとせし所なり。後の詩のこゝろは、昔黄帝は鼎湖といふ所にして、龍にのりて天にのぼり給ひしに、七十二人の玉女は、その身生ながら化して、黄金のたからとなりしを、地中に埋まれしといふ事なり。これは此城の跡に黄金を埋みおかれしを、今我に心をうつしたはぶれ給はゞ、そのあり所をしらせ侍べらんといふ心ばへなり。人の心を亂す物は色と財とのふたつにあり。好雲世をのがれでよくおさめたる故に、何のわざはひにもあてられざるこそ有がたけれ。今は心やすしとおもふところに、夜すでに丑みつばかりになりしかば、月もやうやうかたぶくころ、庭のおもてさはがしく聞えてそのたけ九尺ばかりの男、その手に曝かうべ五つ六つもちて、枕もとの障子をあらけなく引あけて内にいらんとす。好雲むくとおきて手まへにおきたる棒をとりて、よこざまに薙ければ、妖物うちたふるゝとみえし。しやれかうべともにうせにけり。主おき出て火をともし庭に出て見れども、何の殘りたる事もなし。夜もやうやうあけがたになり、東のかた横雲たなびきければ、好雲も旅だつ空に出ていにけり。後にそのをはる所をしらず。

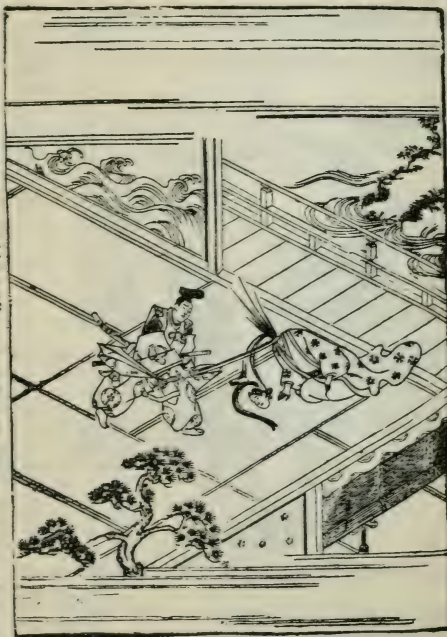
○隅田宮内卿家の怪異

人の家のほろびんとしては、かならずあやしき事のありといふ。されども心をつけさるには、しられぬ事も有ものなり。後に思ひあはするもあり。村上義淸の家臣隅田宮内卿は、聞ゆるものゝふなり。天文十五年二月に、武田信玄人數をもよほし、信濃國小縣戸石の城におしよせて軍のありしにも、信玄ひさうの侍大將甘利備前守をうちとり、手がらをあらはしける大功のものなり。しかれども運の末に成けるゆゑにや、

よろづ心にかなはず。かゝる世の中にいつまでありても、只おなじ有さまにて、立身をすべき道もなしとおもひくづをれて、病ありとて暫く引こもりて居たりけるに、家のうちにけしかる妖物ありて、その姿はみえず。朝夕の飲食物は、人なみに乞とりてくらひけり。内にめしつかはるゝ者ども、若宮内卿うはさの事をかたれば空よりいましめて、汝ら主君の事そしり侍べらば、宮内につげて、世のをきめにせさすべしといふ。これによりてよしあし更に沙汰する事をとゞめたり。夫婦物がたりしてこのばけ物の事をかたれば、いかに我が上の事をいふぞや、あしくいはゞ家のため禍になるべしと、其聲をかしく打なまりて聞ゆ。朝夕とりあつかふ道具衣類、今までありとみるもたちまちになくなり。家うち尋ねても行がたなし。とばかりすれば目の前にあり。家うち上下これに倦じて、山ぶしをやとひて祈禱をせさするに、符を張ばかたはしよりまくりすて、盛物をとゝのへて壇をかざれば引くづしけるほどに、山ぶし腹をたて、いらたかをおしもみ、神咒をとなへ印をむすべば、その手の指とぢつきてはなれず此うへはとて山ぶしは出ていにけり。神子をたのみて梓にかくれども、いか成ものとも名のらず、弓の弦を打きり〱、空のあひだにわらひけるこゑ聞えて、そのしるしなし。さらばとて巫を頼みていのらするに何とはしらず、巫のうしろつめたくおぼえて取出せば、大なる木枕をさし入たるなり。祝言をとなへて御幣をふりたていのり

ければ、妖物屋の梁にのぼりていひけるやう、汝ら我をうろさがりてあらぬ者をよびよせ、きたうの有さまをこがましや。その儀ならば、只今此家をくづさんとて、梁の上錐にて挽切やうに聞えて、夜に入てますますはげしかりければ、火をともして梁木のあたりをみすれば、火を吹けしいよ〳〵つよく挽きる聲あり。家うちこと〴〵く外に出しつゝ、更に火をともしてみれば、梁はもとのごとくにして、その跡もなし。妖物手をうちてわらひけり。貴僧を請じて經よみつゝ、家に五辛をとゞめられしかば、妖物は靜まりしかども、これや家のさとしなりけん、宮内卿は心そゞろにはやり出て、笛吹峠の軍に討死して、跡たえにけり。

○大内義隆の歌

大内の義隆は、其家いにしへ推古天皇の御時より初まり、周防の國山口といふ所に城郭をかまへ、中國の大名となり七ケ國をしたがへ、從二位左京大夫に經あがりけるを大におごりて佞人にまどはされ、政道よこしまになり、色にふけり酒に長じて、老臣陶尾張守に國をうばはれ、二十四代の家系をうしなひ、生害せられけり。世の盛なりし時は、京都よりれき〳〵の人々あまたよびくだし、花の春紅葉の秋、雪のあした月のゆふべ、歌よみ詩つくり、酒宴遊興に隙なく侍べりしに、たちまちにほろび給ひける事と、心ある人はいたはしく思はぬはなし。そのころ義隆忍びて通ふ女房のもとへ、文をかきてつかはされしを、その使聞あやま

りて、本御臺の御かたにもちてまゐりつゝさしあげけるに御臺此文を見て、義隆の通はれける女房のもとへ、かくよみてやりける。

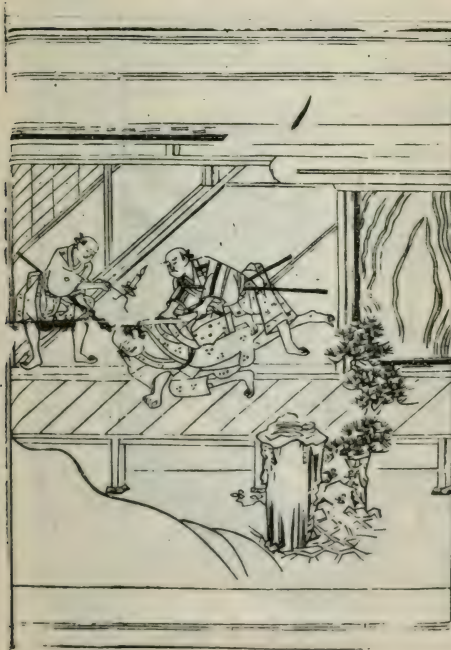
頼むなよ行末かけてかはらじと
　我にもいひし人のことの葉

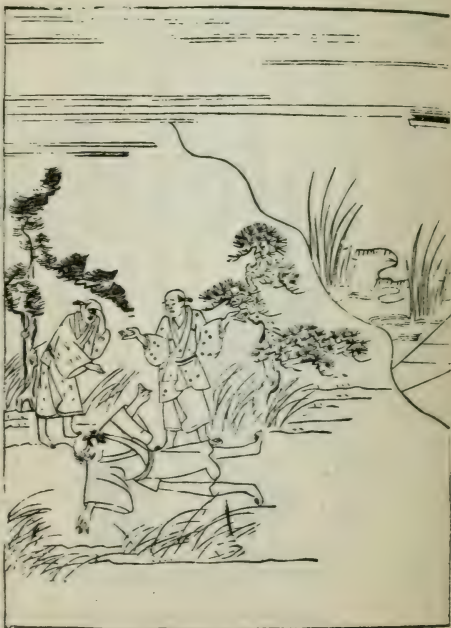
又義隆の御かたへ、

おもふ事ふたつありその濱千鳥
　ふみたがへたる跡とこそみれ

義隆此歌を見て、御臺の心のうち大に恥かしく、その使をばあへなく手うちにせられ、それよりして御臺のかたへ通路を切給ひしが、すでに沒落の時はともなひて、泣々城をば出られけるが、頼むかたなく、義隆以下主從十一人一同に腹切て、大内家たちまちにほろびしかば、御臺をはじめて近くめしつかはれし女房、たがひにさしちがへてかさなりふしける在さま、あはれなりし事共なり。暫じがほどは、死ほろびし深川の大寧寺の内に、夜ごとに女の聲にて泣ければ、寺の僧衆無遮の法會をおこなひ、經よみてとぶらひしかば、その啼こゑもとゞまりけり。

○深川左近亡靈

左京大夫大内義隆の家臣黒川市左衛門尉俊昌は、大力武勇の侍なり。山口の城外にあり、つら〳〵思ふに、世の人死しては二たび聞通はすべきたよりなし。さきにむなしく成たるもの歸り來りて、生れ所をも語り吉あしをもしらせなば、せめて恨みも有まじきにと悔居けるを、その傍輩に深川左近

といふものあり。我も内々は出うたがひあり。來世の事はありやなしや、いづれさきだちたらんもの、かならず來りて告しらせ侍べらんと契約して、年月をふるあひだに、左近病してさきに死したり。數日を過る所に黒川たゞひとり坐して書院にあり。日すでに暮はてゝ月又くらかりしかば、ともし火とらせ、うそぶきてありし所に、庭の面に音なふものあり。黒川殿おはするや、家の内何事かあるといふをきけば、まさしく深川が聲なり。あなめづらしや深川どの、こなたへといふに、ともし火を消給へ。ちかくまゐりて物がたりせんとあり。黒川ともし火を吹けしたれは、深川内に入て、過にし事どもをかたる。その物ごし詞つき、深川が世に有し時に少も替らず。來世の事を問ければ、いかにも後世はある事ぞや。罪ふかければ地ごくにおとされ、次に深きは餓鬼道にいたり、罪障のふかきあさきに差別ありて、もしは畜生にゆき生るゝもあり。いづれすこしなれども、罪科のむくいなしと思ひ給ふな。我よりさきに身まかりし者、修羅のちまたにうかるゝもあり、二たび人間に歸るもあり。善惡のことわり露斗も違ふことなしと、かたるあひだにたちまちに、けがれてきたなき匂ひの座中に薫じ

けれは、黒川あやしみて、くらまぎれにうちはらへば、深川が身に手のあたりければ、ことの外につめたくおぼえたり。亡靈ならばかゝる形はあるまじかりけり。妖物のわざ成べしとおもひ、心を靜めて猶ちかく居よりて、手々もつておしうごかすに、

大かたおもし。すでにして深川は、今はいとま申て歸らんといふ。平に留まり給へといふに、頻に歸らんといふ。漸やく明ぼのに及ぶ。火をともしてよくみれば、深川にはあらで、その長七尺ばかりなり大の夫の尸なり。死して久しく日數を經たり。そのうへ晷天にあたれりとみえて、股のあたりは爛れたり。臭き事いふばかりなし。その尸をば遠き野ばらにすてたり。あたりの在郷より人おほく出て、此尸を見つけて、あな浅ましやわが兄なり。家の内にて宵のほどに死したるを、忽に失なひけりとて、尸をとりて歸り、さうれいを營みけり。

○蜷川親當逢亡魂

都の東山鳥部野は、古しへ空海和尚の御師範石淵の勤操僧正遷化し給ひけるをはうぶりしより、今に及びて葬所の名をすてず。人のあだなきためしには歌にもよむ事なり。上の山をあみだが峯となづく。露けき野ばらも時世かはりて、その所だにたゞしからず。永享年中の事にや、將軍義教公は京都の公方として天下をおさめ給ふ。家臣蜷川新右衛門尉親當は、かくれなき武篇の勇士なり。そのころ鳥部野には妖物ありといひはやらかし、女童はおそろしがりて實もゆかず。新右衛門聞て、みづから心ねをためさんとて、ある夜只ひとり長刀打かつぎ、鳥部野のあたりにいたる。さなきだに物のあはれは秋にこそあれ、風も一しほ身にしみてゆくへもいとゞ物悲しく、虫の音までも、更ゆく秋をかこちがほなり。草葉も色かへて露しげきに、かくぞ思ひつゞけける。

　鳥部野の草葉色づく秋の夜は
　　こと更虫の聲もかなしき

奥ふかく行けるに、人を葬り薪をつみて燒ける火にむかひて、一人の女座してあり。親當行かゝり、女のうしろに立てかゝる。野ばらの人げもまれに、すさまじきをおそれもせず、獨り座しておはする、その心ありやと問ければ、女こと葉はなくて、

　夏虫のもぬけのからの身なればや
　　何か殘りて物におそれめ

といひければ、親當重ねていはく、かくこたふるは何ものぞと問に、女はおもても見かへらずして、

　岩松無聲風來吟

とて、かきけすやうにうせぬるを、蜷川すこしもおそれずして、もゆる火のまへに立よりて、女の居たりける跡をみれば、しやれ首のくだけたる有しかば、長刀の柄にかけて、火の中にうち入、暫く念佛ゑかうしてかへりけり。人ばなれたる野中に、虫の聲のみ聞えて物すごきに、きつね火をちかたにみえて、松の木ずゑをわたる聲より外には、又ことなるものもなし。そのあひだに東の山のはに、月しろあがりしをたいまつにして、靜に家にぞ歸りける。

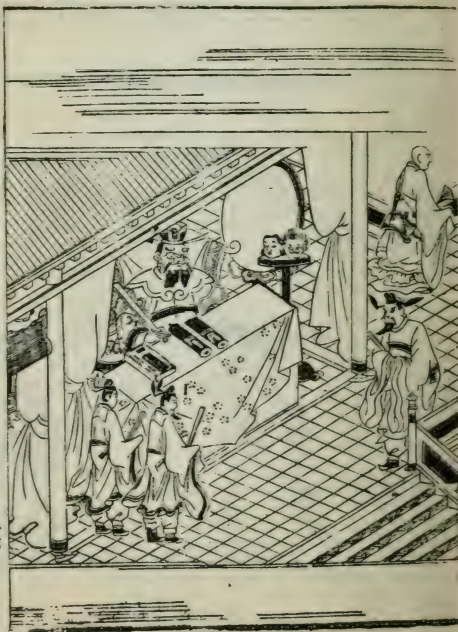
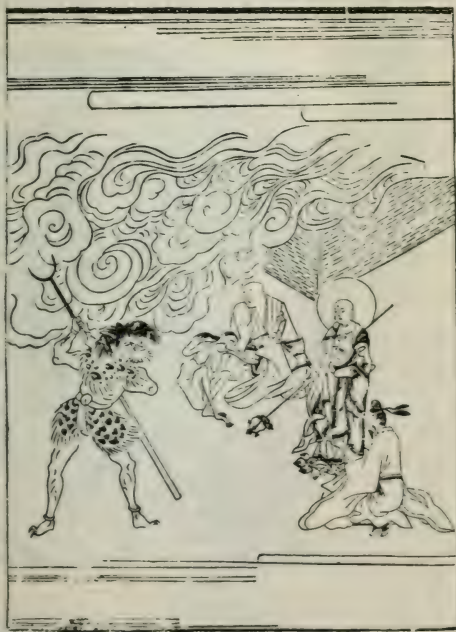
〇味方原軍

永祿天正のあひだ天下亂れ、近里遠境たがひにあらそひ、隣國郡邑を幷せとらんと挑み戰ふ。臣として君を謀り、君は又臣をうたがひ、兄弟敵となり、父子怨をむすび、運にのりては數國をうばひ、勢ひつきぬれば牢浪し、榮枯地をかへ、盛衰日にあらたまれり。そのあひだに死するものいく千萬とも限りなし。兵亂打つゞき、京も田舍も靜なる時なし。かくては世の中に人種も絕はてんとぞ思はれける。元龜三年十二月廿二日、甲斐の信玄五萬よ騎にて、遠州濱松におもむき、味方原に押つめらる。德川家には信長公より加勢として、平手監物、大垣卜全、安藤伊賀守以下九頭をつかはさる。岡崎白洲賀まで、甲の星をならべて取つゞきたり。水野下野守、瀧河伊豫守、毛利河內守を初めて、備を堅して待かけたり。かゝる所に信玄のかたより小山田兵衛先陣にすゝみ、德川家の先手內藤三左衛門と合戰を初め、小山田追くづされて引しりぞく。山縣三郎兵衛つゞいてかゝるを、酒井左衛門尉につきくづされてあやうくみえしを、四郎勝頼横相にかゝりて防ぎけるに、北條氏政の加勢大藤式部少輔、德川がたより

打かけし鐵炮に、むないたを打ぬかれて、馬より倒におちて死ければ、徳川家勝にのりて突てかゝる。本田平八、榊原小平太、安部善九郎、大洲賀、菅沼、櫻井、設樂、足助の人々、すきまもなく責つけしかば、武田がた切立られ、濱松とみかたが原との間に、犀ががけとて深き谷あり、武田の軍勢此谷底にまくり落され、いやが上に重なり己が太刀かたなにつらぬかれて、死するもの數しらず。信玄も陣を拂て歸らる。亡魂谷底に殘りて、夜な夜な啼さけびけり。徳川家より僧に仰て、五色の絹にて燈籠をはらせ、さまざまの作物、もろもろの花、色々の備物、七月十三日より十五日まで盂蘭盆會を營み、念佛踊を始められしに啼叫聲止にけり。それよりこのかた賓燈籠と名づけて、毎年の七月には、かならず魂祭おこなはれ、賓燈籠の念佛をどりありとかや。

○田上の雪地藏

元龜二年二月の半、餘寒はなはだしく、青嵐はしたなく吹すさび、大雪うつすがごとく降つみたり。四方の山々みな白たへに、さながら白銀世界となり、木々のこずゑは花ならずして色をかざり、春ながら又冬の空にたちかへるかとおぼえたり。近江の國田上といふ所の子どもあまた、雪をよろこびつゝ出てあつまり、雪轉してあそび、その中に雪地藏を作り、花香の形までおなじく雪にて作りたてつゝ、岩のうへにすゑて

くやうの有さまをいとなみけるに、年のほど十二三ばかりの童を、くやうの導師とさだめけるに、かの童くやうの意趣を宣て曰、そもそもこの地藏ぼさつの尊形をつくりて、くやうする心ざしは、もとよりこれ眞の雪なり。六道のちまたに雪地藏を本尊とする、此ぼさつの御ちかひの事をば、日の長閑にならん時に、殘りなくとき申すべしとたはぶれたり。かりそめのたはぶれ事に似たれども、雪佛雪祖の理にかなへりとや。この童然るべき種にやありけん。後に法師になりて、ならびなき說法の師となり、明阿僧都とかや聞えし。學匠のほまれあり。天台の教相形のごとく學して、講師をもつとめしに、あるとき心地わづらひて俄に絕入けるを、脇のしたあたゝかに、脈道のをどりければ、さうれいをもせず、弟子ども守居たるに、一日一夜をへて、よみがへりて語りけるは、過し夕暮二人の冥官に引立られ、ある所にいたる。玉の階を渡り、瑠璃の地をあゆみゆくに楼門あり。内に入しかば、寶殿のいらか黄金の垂木、鳳の瓦虹のうつばり、此世には見なれもせぬうゑ木の梢に花咲みだれたり。若これ天上にあらずば、又いづれの浄土なるらんと、あやしみながら見めぐらせば、御殿の左のかたに幢あり、その上に人の頭ふたつをのせたり。右のかたには、黄金のうてなに大なる鏡をたて、四方に幡をたてゝ、半天にひるがへる。青衣の官人玉の簾をまきあぐれば、内に七寶の床あり、垣より外には、囚人手がせくびがせをいれられ　大におそれ

かなしむ有さま、哀れなる事限りなし。ここにおいて琰魔王宮なりとは知けり。琰王出て王の床に坐し給へば、冥官二人明阿僧都を請じて床に坐せしめ、新造の精舎くやうのためこゝに迎たり。くやうをのべて法事をおこなひ給へとあり。僧都中門の廊にかゝる所に、わかき法師の來りて、我は是そのかみくやうせし雪地藏なり。汝かりそめに開眼せし功德に依て、辯舌學道を得たり。琰王感じて精舍のくやうに迎給へり。汝に此如意をあたふるなり。此をあげて妙法を説のべんに、辯舌泉のごとくに涌て、とゞこほる事あるべからずとて去給ふ。僧都すでに精舍に入て、高座にのぼるに、琰王を初めとして、もろ〳〵の冥官司錄、おのおの位にしたがうてつらなる。説法初まりて、大空智々の眞際をのぶるに、聽問のともがら歡喜しけり。此上は何にても望ある事を申給へとあり。僧都、我出家の身として名利を離れたれば、別に望む所なし。ねかはくは母の生所を見せしめ給へ、乳哺長養の恩をはうぜんと思ふばかりなりと申せしかば、琰王勅をくだして檢するに、僧都の母今叫喚地ごくにあり、冥官一人をそへて、地ごくにゆかしむ。銅の築地、鐵の門、もえのぼる猛火の音、鳴下る雷のひゞき、罪人の啼さけぶ聲、肝たましひもきゆる斗なり。冥官くろがねの門に迎ひ、戸びらをたゝくに、獄卒門をひらくに猛火ほとばしる。明阿上人の母を問に、炭頭のごとくなる物を、鉾に貫きてなげいだす。涼しき風吹ければ、炭頭うごきつゝ、頃之して

人の形となる、僧都の母なりけり。是を見るに悲しき事限りなく、ことの葉絶て泣しづめり。地藏菩薩あらはれての給はく、我此母の歎くをみるに、すくはんとするに力足ず、はやく娑婆に歸りて法華經を書てとぶらふべしとありけるを、夢のごとくにおぼえてよみがへり、母のために金字の法華經を書寫し、金色の地藏の形像を作りてくやうするに、其終の日の夜夢に見けるは、母の顏よろこばしく、都率天に生るゝなりと、夢さめて僧都も喜びの眉をひらき、いよいよ道心ふかく修行おこたらず、かの地藏は田上の草堂におはせしを、うちつゞきたる世のみだれに、燒うせ給ひしとかや。

○柿崎和泉守亡魂

越後國長尾輝虎謙信の家臣柿崎和泉守は、世にかくれなき武篇の侍大將なり。一とせ甲斐の信玄河中島の軍の時も、柿崎を先手として、手柄のはたらきありける故に、謙信いよ〳〵秘藏し給ひ、越中國にさしおかれ、北越の諸侍みなじたしみつきて、その進退にしたがひけり。柿崎ある時京都へ賣馬をのぼせしに、きはめたる逸物沛艾の名馬なり。織田信長公これ柿崎が馬なりと聞て、あたひをたかく買とり、又その上に柿崎かたへ御書をつかはして、重ねてもかやうのよき馬あらば、何時にても上せらるべしと書て、呉服一重さしそへて給はる。柿崎いかゞ思ひたりけん。此事謙信に聞せざりしを、程經て聞付給ひ、大に怒りて柿崎を城中へよびよせ、是非なくころし給ひけり。その亡魂口をしくや思ひぬらん。折折出て謙信にまみえて、いかれるありさますさまじかりしかば、さすがに武勇の大將にて、物ともしたまはずとはいへ共、いく程なく謙信は、天正六年三月九日、卒中昏倒して人事をかへりみず、痰喘聲をなし、喉のうち鼾睡のごとく、面赤くして粧がごとく、汗つゞりて珠に似たり。家中の上下手をにぎり足を空になし、四方の醫師あつまり、牛黃淸心蘇合圓、神仙妙香通關散をもつて、風痰を追くだし眞氣を補ひ、人中合谷に灸治をくはへ、百會膻中に鍼を刺といへども、露斗も驗なく、同じき十三日つひにはかなく成給ふ。春秋四十九歲とぞ聞えし。時の人みないふ。科もなき忠節の家臣をころし、その恨によりて、いまだ武略弓箭の盛りに、柿崎がためにとりころされ給ひけりとぞ、いひつたへける。

○死骸舞をどる

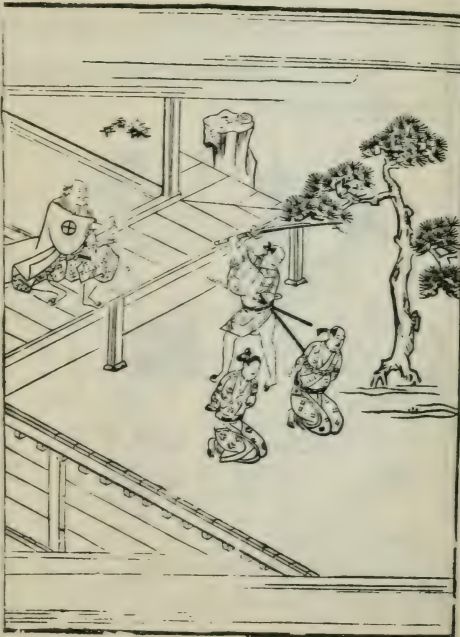
文祿二年の春、山崎の庄屋宗五郎といふものの妻は、河內國高安の里の者なり。もとより放逸無慙にして、後世の事露ほども心にかけず、年經て住けれども子もなし。日蓮宗の流れを汲ながら、題目一返をもとなへたる事もなし。家の事田地の事牛馬の事、めしつかふ者にもあはれみを思ふ情もなく、物いひはしたなく、つらめしくいひの

のしり、朝ゆふに只世話を煎て、年月を送りけり。たま〳〵人ありて、後生の大事をかたりいだせば、めにもみえぬ來世の事より、まづ此世こそ大事なれ。人をたふして後生だてせんよりは、ねがはぬこそましなれと、口にまかせておそろしげにのゝしりければ、下百姓のをとこ女ともにつまはじきをしてにくみけり。かゝる人にものがれぬ無常の習ひ、かりそめにわづらひ出してむなしくなりにけり。葬禮は明日こそすべけれとて、屍の前には香をたき、うときしたしきそのまはりに居て、寐もせであかすに日もすでに暮て燈火をとり、しめやかに物悲しくおぼえけるに、遥に西のかたに音樂の聞え、漸々にちかくひゞきわたりて、庭の面に來る。人々殊勝の事に思ひけるに妻の死骸うごき出たり。音樂すでに家の棟の上にあるが如し。妻の尸むくとおきて、樂の拍手に合せて立あがり、手をあげ足をふみて舞をどる。人みな肝をけして、跡にしざりてまぼり居たりければ、樂の聲又家をはなれ、門より外へ出しかば、妻の尸もふしまろびながら、おなじく門に出つゝ、樂の聲のゆくかたにしたがうてあゆみゆく、家うちおそれさはぎて、松明よともし火よとひしめき、月だにくらき折ふしなり。

宗五郎もあきれまどひてせんかたなし。庭の前なる桑の木の枝を、手ごろにきりて杖につき、酒うち飲て醉のまぎれに、跡をおうて尋ねゆくに、半里ばかり野原のするに墓所あり。はえ茂りたる松原のうちに、樂の聲しきりに聞ゆ。やうやく近づきて見や

れば、松のもとに火ありてあかくてらす。屍はそのまゝへに立て舞をどりけるを、宗五郎杖にて打ければ、屍はたふれ火もきえ、樂の聲もとゞまりぬ。屍をかき負て歸り葬ぶる。何故とも知ことなし。

○非道に人を殺す報

寛永五年の秋八月の事にや、周防國野上の庄に關久兵衛尉兼元とて武勇の侍あり。そのかみ天正十八年に伊豆國山中の城軍の時、比類なき手柄をあらはし、高名あるをもつて、中國にありつきけり。めしつかひける下人夫婦有しが、さしたる科にもあらぬ事を、よこしまにいひかけて、無理に打ころしけり。夫婦ながらさいごにのぞみて、我らさしたる科もなきに、ころさるゝ事力なし。年來私なくめしつかはれしかども、今かくうきめをみる。此うらみいたりてふかし。來世の事なくば是非に及ばず。未來にも魂のあらば、思ひしらせまゐらせんというて、首をうたれたり。家の西のかた十町ばかり、廣野に埋みけり。死して七日にあたりける夜より、その塚に火のもえ出て、子の刻になれば鞠のごとくになりて、野道をつたうて關が家にゆく。初めは軒にかゝりて、火の色青く、光りすくなかりけるに、百箇日過てより、火の色さかりに赤くなり、塚をはなれ出て關が家に飛來り、門の戸はつよくさしかためたるを、戸より内に入かとみえし。關が子たちまちにおびえおどろき絶入けり。家内きもをけし、さわぎあひけるうちに、その火やがて出て歸れば、關

が子正氣に成て甦がへる。蟇目を射れども用ひず、僧を頼み經をよみ、山臥をよびて祈らせ、御封屋札をおしてふせげども、少もしるしなし。毎夜の事なれば、家うちつかれ草臥たり。二人の子は病出して、さながら驚風のごとし。醫者にかけて養性すれども、漸々よはりて、兄弟おなじ日に死けり。しかれども塚の火は留まらず、妻又歎きの中よりわづらひ出し、狂氣のやうになりて狂ひ死けり。闕もちからなく、自空長老とて活僧の有しを請じ、塚に卒都婆をたてて塚をまつりしかば、亡魂これにやしづまりけん。火はもえやみしかども、闕もいくほどなく死ければ、跡つひに絶たり。

○塚中の契り

西國大伴家の侍淺原平六は、世に名を聞えし武篇のものなり。二人の娘をもちたり。平六が弟平三郎は身まかりて、これもむすめの有しを、みなし子なれば捨がたく、平六が家にそだちて、三人のむすめおなじほどになりけるを、平六まづ我が娘ばかりをありつけて、平三郎がむすめの事は、何の用意もなく沙汰にも及ばざりければ、うちうらみてよめる。

をし鳥のとりどりつがふつばさにも　いかに我のみ獨りすむらん

此娘心ちわづらひて、何とはなしに痩つかれて、つひにはかなく成たり。城の東の野に葬ぶり、塚に埋みて、僧をくやうし經よみ、念佛してとぶらひけり。同じ家の隣は筒岡權七とて、年いまだ二十あまりなり。

父はやく死して、その跡かはらず奉公をつとめしに、美男なりければ、傍輩いづれも娘をもちたる人は、望みて婿にせんとあらましけるに、いづちともなくうせにけり。母はこがれまどひて、今を頼みて四方を尋ぬるに行がたなし。物のためにかどはかされぬらん。東の塚原草村のあひだを尋ねよとて、人を埋みすてたる古塚をもとめける。折ふし雪ふりて、野は白たへにつもりけるに、女の塚のあたらしきに、くろき小袖のすその、土より外に出てみえたり。さればこそとて引出しければ、土の底より權七が聲として、何ものなれば人のかたらひをさますらんといふ。いづかたより聞入たるらん。棺の中に女と權七とひとつにふして、女の屍は猶生たる人にことならず。臥たるしたに杉原に書たるものあり、取あげみれば歌なり。こと葉はひとつもなくて、

流れてのうき名もらすな草がくれ
結びし水の下さはぐとも

獨ねをならはぬ身にはあらねども
君歸りにし床ぞさびしき

又權七が手にて書ける歌、

契るてふ心のねより思ひそむ
軒の忍ぶの茂りゆく袖

笛による男鹿もさぞな身にかへて
思ひ絶せぬ習ひ成らん

此歌ども取そへて宿に歸りしかども、權七は只もう〳〵として人心地もなし。山ぶしを頼みていのらせしかば、日をへてもとのごとく成たり。半年ばかりの後に、めしつかふ小女に彼亡魂のうつりて、あら恨めしつゝみし事のあらはれて、うき名のもれし恥かしさよ。前の世の然るべき緣ある故にしばし契りをかはしまの、水のあはれともいふべき人もなし。はやく忘れし人に、二たび契るゆゑありとて、涙を流しける。その夜俄に權七むなしく成ければ、彼亡魂二世を契る約束やありけんとて、女の塚にひとつに合せてつきこめけり。

○霞谷の妖物

伏見開道稲荷の北のかたに小橋あり、世に朽木橋と名づく。橋のつめに農人喜衛門といふもの、年比住わたりけり。藤の森に知人ありて、麻の種をもとめにいきけり。とかくするほどに日すでに暮になりて、酒には醉て心おもしろく、うら道より野どほりに家に歸るとて、小歌うたうてゆく〳〵みれば、手燭に蠟燭をたてゝ立たり。あやしみながらちかくあゆみよりて見るに、法師二人あり。身には衣をも着ず、手には數珠もなし。一人は色青き小袖を着し、今一人はその比はやりし龜や島の小袖をはぎ高にきなし、喜衛門を見て、けしかる男かな。農人とみえて、鋤をかたげたりな。夜此道をゆくもの、たやすくはとほすまじ。こなたへことて、喜衛門がかひなをとりて引たてゝゆく。法師のたけは九尺ばかりにて、しかも力のつよき、聲をたつれども出あふ

人もなし。引たてられて山に入つゝ、奥ふかくゆきて、霞の谷にぞくだりける。傍なる洞穴につきいれて、二人の法師その口にさしむかひてまもり居たるを、いかにもすべきやうもなし。柴かる人もみえず、立出んとすれば、更につきいれてうごかさず。二夜三日ものをもくはず、守り居る法師のおそろしさに、洞のうちにうづくまりて、いかにせんと案ずる間に、法師もつかれぬらん、坐しながらねぶりけるを、すきまを見て手にもちたる鋤を取なほし、洞よりかけ出で、左右に二人ながらなぎたふし、足にまかせてはしり歸り、閨の内にかけこみ、夜の物引かづきて臥たり。宿には喜衛門の行がたなくうせたりとて、あたりのともがらあつまりて、尋ねに出べき用意せし所へ、はしり歸りしかば、いかにせし事ぞと、枕もとによりて問けれどもいらへもせず。とかくして夜もあけしかば、やう〳〵にしておきあがり、かう〳〵とかたるに、さては霞の谷にて妖物にあひけり。洞の有さまこそ心もとなけれ。ゆきて見よとて、あたりのわかきともがら十人ばかり、弓やちぎり木さび鑓を手ごとにもちて、霞の谷に行てみるに洞の口兩わきに、長一尺ばかりの蟇と、おなじほどの龜と、ふたつながらうちたふれて死してあり。鋤にてうたれたる痕あり、此ものの妖たる事うたがひなし。其後こと故もなかりき。

○木島加伯

京都誓願寺本堂の南のかたに、隔子の内に佛壇をかまへ、地獄の變相を繪圖にあらはして懸たり。安養寺とかや名づく、京田舍の子どもの死たる、その衣類またはもてあそびし物を、家におきて見るもかなしく、親の思ひの堪がたさに、こゝにおくりて佛に奉り、せめてなげきをわするゝやと、ものすれども、恩愛のうれひはいやまさるなり。或人いとをしき子におくれて、かなしさのまゝ、その子の衣を安養寺につかはして佛にくやうし、後にまゐりて是をみるに、撫子を摺繡にしける衣なりけり。涙とともにかくぞよみける。

なでしこの花の衣はうつ蟬の
もぬけし殼とみるぞかなしき

元和年中に、長門國萩といふ所に、木島加伯とて慾心無道の人、此人世には黃金五千兩の分限とぞ沙汰しける。孫に子ありしかども、みな死はてゝ、今は家をゆづるべき女子だにもなし。年はかたぶきぬ。夫婦只うき世の思ひでに、心のまゝにたのしみをきはめ、年をあそび暮し侍べらんとて、めづらしき肴名ある酒をもとめ、腹に飽酔に和しながらも、他人にはあたへず、ふうふのみひたひをあはせて、飮食てたのしみとす。其夜鬼のかたちのごとくなるもの來りて、夫婦の喉をつかみていはく、汝いかなれば我らの脂をしぼり、剝とりける金銀をもつて、身のえいえうにつかひすつる事の

悪さよといふを、加伯、今より肴をくはじ、酒をものむべからず、衣類の美をもかざるまじ、家をもつくるまじ、わびてすむ身とおなじものにして世をすごすべしと、さまさま怠状するに、鬼は立のくとおぼえて、夢のやうに覺ながら、猶おもかげははなれず、おそろしさかぎりなし。これより後も、若は花の下月の前に、肴をもとめ酒をおきて、興を催しあそばんとすれば、鬼又きたりて責いかりければ、加伯いまはせんかたなく、ある貴とき僧に逢てこの事をかたる。僧のいはく、それ大欲をもつて、理の外の財寶をむさぼるものは、佛の道にそむき神の掟にたがふ。天地の中に我身をたつる所なく、その守りを失なふが故に、禍かならず來り、悪鬼すなはちつきそふをもつて、よこしまいよ〳〵かさなり、もろ〳〵のうれへ悲しみ絶る事なし。只慈悲をもつて物をめぐみ、佛ぼふ僧の三寶をうやまひ、信をおこして後の世の事よくもとめて、何事をもむかしをくやみ、今の心をあらためられよ、とねんごろにすゝめられければ、夫婦ながら心とけて、年比の事を懺悔し、それより都にのぼり、誓願寺にまゐり、堂塔を修造し、一心念佛の行者となり、安養寺にかけられたる地ごくの變相を見て、いよいよ後世を大事と思ひ、夫婦ながら髪をそり、すなはち夫婦の座像をつくらせ、壇上にたておきたり。今も猶その有さまをかたりつたへて、木像をみるにつけて、發心する人もありとかや。

〇母に不孝の子狗となる

永正年中に、都の西鳴瀧といふ所に、彦太夫とて百姓あり、有德にはあらねども、又世をわたるに人なみの身すぎをいたせし田畠よくつくりて住けり。その生れつき無道にして、神佛の事更にうやまひ貴とむ心なし。さるまゝにあたりちかき寺にもまゐりたる事もなく、乞食非人の來るをも、あらけなくのゝしり、すこしのめぐみをほどこしあたふる事をしらず、母をやしなふに、不孝なる事いふばかりなし。只明暮つらめしくあたりて、わづかにも心にたがふ事あれば、ことの外にいひ恥かしめ、母の年のかたぶきて、よろづつたなきを見ては、はやく死して隙をあけよかし。婆娑ふさげに無用の長生かなと、のろひいましむる事毎日なり。母これを聞に物うさ限りなく、汝は誰うみそだてゝ、かくは罵ゆらん。つれなく命の生ける事よと、我身を恨みて涙をおとさぬ日もなし。母やまひにかゝりて、食のあぢはひ心よからず、新婦をたのみてひとへの衣をうりて、そのあたひを彦太夫にわたし、これにて魚を買もとめてくれよといひしを、魚のあたひは取ながら、魚は更にもとめあたへず、隣の人あはれがりて鯉の羹ものをつくりて來りあたふるに、母にはまゐらせずして、おのれぬすみてみなくひつくしけり。たちまちに腹をいたみ、まさ〴〵藥をもちゆれども、そのいたみ少もやみたるけしきなく、吟臥てくらき閨のうちに籠り、夜晝五日のうちうめきけるを、人行ていかにと問に、その身變じて狗となり、蹲まりて恥かしげにみえけるを、食ものをあたふれどもくはず、百日を經て死にけり。不孝のむくい目の前にありとたがひにおそれおどろき、親ある人は皆かう〳〵をいたしけるとぞ。

〇不孝の子の雷にうたる

慶長の初め、大宮七條のわたりに、丸や彌介とて商人の有ける。二人の子をもちたり。彌介はむなしくなり、兄は彌二郎とておやの跡をつぎ、身體ともかうもいたし、弟は彌三郎とて、三條堀河にすみて、耕作を營みするに、手まへの貧しさ、朝な夕なを明暮すだにもわびしさ限りなし。母はやもめになり、年かたぶきたり。兄彌二郎いひけるは、我家ばかりにてやしなふべき事にあらず、弟のかたにもゆきてやしなはれ、兄弟ふたり十日がはりにさだむべしとて、朔日より十日のあひだは彌二郎がもとにあり、中十日は堀河に行て、下の十日は又大宮より歸る。かやうにせし内にも、まづしき弟のかたはありやすく、兄のもとはふがうにして、新婦さへすげなく侍べる故に、母もすみうき事に思ひけり。ある時母いまだ弟のもとにありて、上の八日その家失食して、まゐらすべき物なし、さだめたりし日數、いま二日あれども、この體なれば兄

彌二郎かたへゆきて給はれといふ。九日の朝母を出したてゝ、七條大宮にやりけり。兄彌二郎門に出むかひいまだ二日は、彌三郎かたにあるべき事なるに、何しにはやくは來れるぞ、とく〳〵歸りて、二日をすぎてのちにこそとて、門の內へもいれたてず、母は悲しくて新婦にむかひて、弟のかたには食物絕て、我ははやく來れり。今二日の事、何かさのみにとがむべきといふに、いや〳〵さだめのごとく、日ぎりをきはめて來られよ、一日にてもかなふべからずといふ折ふし、朝飯の出きたりとみゆ、道も遠ければ、それを少あたへよ、つかれをなぐさめて、弟がもとへ歸らんといふに、新婦は返事をもせず、飯の上に物をおほひて隱し、彌二郎はあらけなくもつらめしくもいひのゝしりて、追もどしければ、母なく〳〵出て、彌三郎が方へたちもどるに、いまだ五町ばかりも過ざるに、天にくろ雲おほひわたり、雷しきりに鳴わたり、彌二郎が家に落て、新婦は門口まで引出してうちころし、又いかづちおちて、彌二郎がかうべくだけて、隱しける飯をば町中にうちまき、淺まし共云計なく、一時のうちに家たえたり。

狗張子巻之五

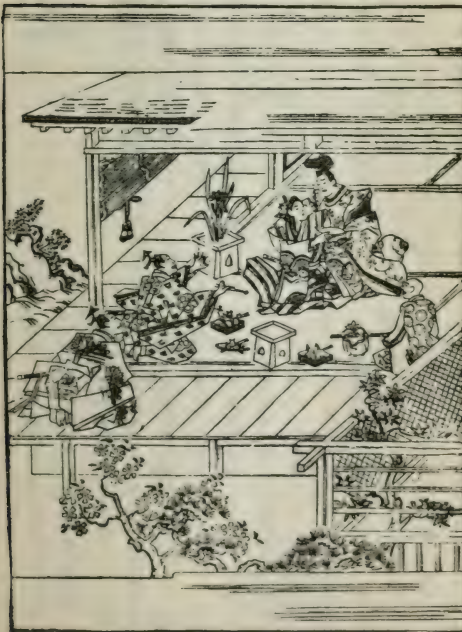
○今川氏眞沒落

附三浦右衛門最後

駿河國今川義元は、織田信長公に討れ、その子息氏眞その跡をつぎ、國を守りて恙なかりし所に永祿の初年より、家風ことの外におとろへ、武道の事はすたれて風流の奢をきはめ、武藤新三郎とて、白面の佞幸あり。氏眞限りなく愛まどひて、日夜席を同して、酒宴遊興に月をわたり、亂舞淫樂に年を送り和歌の道、鞠のたはぶれにいとまなし。新三郎漸やく成長しければ、三浦右衛門佐になされ、又茶湯の會をくはだて、風顚山居の幽景をしたひ、路次がかり築山のありさま、泉水の遣水うゑ木の枝つきまで、かゝりあれと作りなし、三浦が心にかなふをもつてよろこびとし、和泉の境に聞えし紹鷗がもちたる高麗茶碗を三千貫に買とり、連歌の名匠宗祇のひざうせし白梟の香爐を五千貫を出してうけ求め、その外夢窻國師の天龍寺の青磁の花入、忍性上人の鎌倉の柿色の眞壺、あるひは茄子の肩衝緑葉の香合、又は香匙火筋卓机、にいたるまで、唐の日本の名物とだにいへば、財寶を惜まず買もとめ、綾錦を裁縫て袋とし、沈檀玳瑁をけづり瑩きて室とす。そのつひゆる所いく千萬とも限りなし。天より降にもあらず、地より湧にもあらず、土民百姓をむさぼり、賦斂おもく課役しげく、責とり虐取て積あつめ、これをちらしつかふ事砂をまくがごとし。譜代忠功の侍といへども、少の科あれば所領をおさへ職を追あげ、家中の制道內外の事は、みなこれ三浦がはからひにてありしかば、權威高くかゞやき、上下諂はてヽ、大かたもてあつかうてぞおぼえける。三浦が申す旨に依て、武田信玄のためには氏眞はまさしき甥ながら、中あしくなり、今川の老臣朝比奈兵衛大夫と三浦右衛門佐と心よからず、諸侍みな三浦をにくみうとみけるほどに、武田がた此有さまを見すかし、永祿十年十二月六日、武田信玄三萬五千餘騎にて、駿府にをしよせける。氏眞聞つけて庵原左馬頭を先手として、岡部小倉七千餘騎、氏眞は二萬五千餘騎を率して出向はれしに、朝比奈心替りして引入しかば、諸陣何とはしらず、引はらひて駿府に歸る。氏眞の旗本色を失なひ、落支度をいたせしかば、力なく清見寺の本陣皆くづれて、府中に歸られけり。諸侍みな色をたて別心をおこし、たがひに目を見合せ、一言の評議にも及ばず、只今敵のよするにも、防がんとおもふ義勢もなし。氏眞は城にこもりて打死せんと思ひ切給ふ所に、三浦申けるやうは、砥城の山家

へ引こもり、時をまちて軍をおこし、本意をとげ給へと申すゝむるに依て、小原備前守、朝比奈備中守、長谷川次郎左衛門等がはからひにて、わづかに五十騎ばかりにて、懸川の城に入給ふ。城中七千餘騎、いづれも聞ゆる兵共なり。武田がたその跡におしかけ、駿府の館に火をかけしに、折ふし嵐はげしく吹て、雲煙とやけあがる。さしも年比つくりみがきし大廈のかまへ、一時に灰燼と成はてたり。次の日御館の焼跡に、かくぞよみて立たる。

甲斐もなき大僧正の官賊が
　欲にするがのおひたふすみよ

三浦右衛門は一朝に威をうしなひ、軍といふ事のおそろしさに、手ふるひ足わなゝき、物の心も辨まへず、鎧甲馬物の具きらびやかに、氏眞とつれて駿府の城をば出たりしかども、ゆくさき道せばく、いかにもして身をかくし、命をたすからばやと思ひ、さしも重恩をうけたる主君を打すて、只一人かけおちしたり。世が世の時にこそ、駿河遠江三河のあひだには、いか成大身舊功の輩も、三浦にむかひては手をつかね腰ををり、媚諂ひ機をとり色をうかゞひしに、數年の積惡こゝにあらはれ、天に背くぐまり地にぬきあしすといふがごとく、世を忍び人にかくれ、苫をいたゞきて江をわたり、薪を負て焼野を通るおそれをなし、馬をはやめて通る所に、すはや落人の行ぞと呼はりしかば、村々より出あふ百姓ども、掘たる鑓長刀をもちつれてはしりよる。これは三浦右衛門ぞ、あやまちすなと

こと葉をかくれば、何條その三浦をとらへて、年比のうらみを思ひしらせよといふ。只剝むくりて赤裸になし、突出して恥をさらさせよといふ。前後とりまはし、己來年主君の寵にほこり、百姓をむさぼり、我らの妻子家財までも沽却せさせ、責とりこぎとり、ある時は簀卷水牢、ある時は打擲蹂躙、又は人夫をさしてつらめしく責つかひしそのむくいは、來世までもなくこゝにて思ひしらせ、なぶりごろしにせよやとて、馬より引おとし、鎧甲下の小袖まで引むくり、剝とり赤裸になしければ、三浦は百姓どもにむかひ手を合せ、その小袖ひとつは得させてたべといふ。わかき者どもは、しやつに物ないはせそ。高手小手にくゝりあげ、木のもとに結つけて、おもふまゝに打ころせとのゝしりけるを、年よりたる者どもはかはゆげに、さのみはなせそ。只ゆるして追やれとて、繩をときてつきはなす、三浦は命斗はたすかりけれども、赤はだかなりければ、破れたる菅笠を前にあて、ちぎれたる古薦を腰にまとひ、泣々夜もすがら道にもあらぬ田の畝をつたひ、そこともしらぬ山路をたどれば、手は荊にかきさき、足は石に蹴破り朱になりて、やう〳〵三河の高天神の城にかゝぐりつきて、小笠原與八郎を頼みけり。與八郎はじめのほどは、世の變をうかゞひ、三浦を呼いれ、小袖刀脇指まで出しあたへ、暫らくいたはる體にもてなしけるが、氏眞すでに懸川を開のきて小田原へ行つゝ、人數ちり〴〵に成しと聞えしほどに、小笠原與八郎たちまち

に心替り色に出たり。城飼郡を押領し、三浦右衛門をからめとり、とし月わがまゝをはたらき、諸人に慮外無禮をいたし、士民を困窮せしめ、傍輩の諸侍一門の貴族といへども、己が心に叶はねば、知行をおさへ職を打あげ、凡下のものをもわが機に入ぬれば取たてつゝ、君をくらまし家をみだり、上下恨みをふくむ事いふ斗なし。今すでに主君の運かたぶき、國家ほろぶるにいたりて、恩をわすれ君を見はなし、天地佛神の冥慮にはづれ人望にそむく、悪逆無道の恥しらずを、命いけておき娑婆ふさげになさんより、疾して迷途につかはし、閻魔の裁許にまかせんとて、人夫どもに仰せて、廣庭に引出させければ、三浦右衛門大におどろき、是はそも情なきはからひかな。親とも兄とも頼入てぞ思ひしに、せめて命斗はたすけ給へとて、霰のごとくなる涙を雨の如に流して、よばひさけび歎ければ、小笠原が侍足助長七といふもの、朋輩にて傍に立より、さらば何とぞ申いれて、命ばかりはたすけてとらすべし。その代には鼻をそぎ片耳を切て許すとも、それとても命が惜きかと問ければ、たとひ耳鼻をそがれてなりとも、命をだにたすけられなば、限りなき御恩なるべしとこたへたり。是を聞ける人々、悪き奴が心ばせかな、あのきたなき根性故にこそ、重恩の主をすてゝこれまでは落来りけれ。とく／＼首をはねて、不忠不義の佞臣のこらしめにせよやといへば、三浦右衛門身をもみ足ずりして、聲をばかりに啼さけび、おきふし歎けるを、最

後は只今ぞ、念佛申せといへども、前後ふかくに取みだして、太刀のあて所も定まらず、太刀取も不敏ながら、うつぶきに踏倒し、掻首にぞしたりける。尸骸を野べにすてたりければ、蔦烏あつまり、眼をつかみはらわたを啄ばみ、犬狼むらがりて、手足を引ちらし肉をあらそふ。往來の人是を見ては、哀とはいはずして、因果のむくいはかくこそあらめと、弾指して打通る。運に乗じて威をふるふ時は、大龍の雲にのぼり猛虎の風に嘯がごとく成しも、一旦に果報盡て、屍を草むらにさらし、恥を殘すこそ哀なれ。

○常田合戰甲州軍兵幽靈

甲州東郡惠林寺のおくに眞言の寺あり。上求寺と名づく、本尊は不動明王なり。强盛忿怒のさうがうは、放逸無慙のともがらをいましめ、本來究竟の智劒は、般若實理の性をしめす。六賊四魔おのづから降伏し、四生五趣あまねく利やくし給ふ。その時の住持は、頼胤阿闍梨とて智行兼備の德たかく、四曼相即の花の本には白馬いなゝき、三密觀行の月の前には靑龍雲に吟ず、至極上乘のこゝろの底には五部相應の玉をみがき、瑜伽中臺の胸の内には三朶卽是の香をつゝめり。効驗掲焉の明匠也とて、諸人たふとびうやまひけり。伽持護念護摩灌頂その功をあらはし、谷のひゞきに應ずるごとし。武田信玄は國主なり。その本卦すでに豐の卦にあたり、本尊はすなはち不動なりとて、ふかく信仰のおもひをかたぶけ、い

つゝ出陣の時は、まづ上求寺にして護摩を修せられ、御館しづかに軍勢無為、大將勝利のきたうをいたされ、信玄みづから參詣ある事、毎度の成例なり。天文二十一年三月に、越後の長尾景虎入道謙信は、千餘騎にて信州の地藏峠のこなたまで働らき出られ、長尾義景三千餘騎先手として押出たり。武田信玄一萬三千の人數をもつて馳向ひ、たがひに陣をはり、足輕を出して迫合けれども、はかゞゞ敷軍もなし、謙信いかゞ思はれたりけん、陣をはらひて越後に歸られたり。義景靜に引て峠にあぐるを見て、武田がた飯富兵部、小山田備中、郡内の小山田左兵衛、蘆田下野、栗原左衛門佐、眞先にすゝみて義景を喰とむる。義景はすこしもおどろかず、甲州がたを坂中まで引つれ、手勢三千を只一手につくり、大返しに取て返してたゝかふに、武田がた立足もなく、坂より下へまくりおとされ、散々に切くづされ、小山田古備中はうち死し、栗原、郡内の小山田は、深手負て引かねたるを武田方旗本の前備甘利左衛門、馬場民部内藤修理かけよせて、向ふ敵を打はらひ突たふして、栗原小山田をば肩にかけて、味方の陣につれて歸りしが、二人ながらいくほどなく死けり。されども義景は、武田の大軍に人數七百十二人うたれ、わづかに三騎に成て引歸す。武田がたにも三百七十一人うたれ、手負ひは數しらず、軍は勝に似て、歴々の侍大將を失なひけり。此度の軍立にも、護摩を上求寺に修せられしに、護摩木ふすぶり灑水こぼれたりしかば、頻風

阿闍梨あやしくおもひながら、ふかくつゝしみて人にもかたらず。しかる所に二十六日の亥の刻ばかりに、鎧武者三百騎斗、上求寺の門をつきひらきてかけ入たり。小山田古備中が聲かとおぼしくて、軍兵を支配す。寺中にあり合たる同宿小法師原おどろきあはてゝ、椽のした天井の上にかくれたり。賴胤は篤實の老僧にて少もおどろかず、軍勢の打入たるは、さだめて甲州方敗北して逃こみたりとおもひ、窓よりさしのぞきたれば、大庭に備をたて、くるしげにみえたる武者ども立ならびたる所に、跡より又六七百騎もあるらんとおぼしくて、鎧武者こみ入たり。打あひつきあひおし出しこみいりてせめ戰ふ。鋒より出る火は、澤邊の風に吹みだるゝ螢よりなほかゞやき、馳ちがふ汗馬のいきほひは、雲井にとゞろくいかづちのごとし。かくて兩陣鬨の聲をあげたりしかば、甲府の地下人この聲におどろき、すはや味方打まけて、敵軍追つめ打入たるぞとて、俄にさわぎたちて、親は子の手をひき子は親をたすけ、資財雜具をかつぎになうて逃かくるゝ。御館の留守居典厩信繁、穴山伊豆守手の郎等同心被官三百人、太刀よ長刀よ馬物具よとひしめき、しかも空すこしくもりて闇の夜なり。くらさはくらし、松明手毎にともし、上求寺にはせつきたりければ、門はきびしく閉て、軍は大庭のおもてに打合音しきり也。人々下知して戸びらを打やぶりかけ入ければ、今まで兩陣一千餘騎にあまりし軍兵ども、入亂れたゝかふとぞみえしが、雪霜のきゆ

るごとく、皆一同に消うせて、只松風の音のみ梢に殘れる斗なり、賴風阿闍梨あまりのふしぎさに、戸をひらき立出て、典廐穴山に對面し、始め終りの有さまものがたりあり、いかさま只事にあらず、味方おくれをとりたるかと、手をにぎり肝をひやし、御館に歸り軍兵をもよほし、軍立の評定夜もすがら極められし所に、微明に飛脚到來してこそ、甲府は靜まりけれ。うたれし敵味方、まさしく修羅の卷におもむき、嗔恚我慢の業因にひかれて、かゝるくるしみをうけぬらん。願現願生のまよひの有さま、さこそは悲しかるらめ。信玄やがて歸陣あり、敵味方うたれたる者どものため、上求寺において佛事をいとなみ、僧衆をくやうし、七日のうち經よみて、跡をとぶらはれしかば、此後はこと故なかりしとかや。

○男郎花

越前國朝倉家の扈從小石彌三郎は、顔かた

ち世にすぐれ、智惠かしこく心だて物しづかに、情の色深く愛らしき者なりければ、傍輩皆いとをしき人におもひけり。家の足輕大將洲河藤藏とて、武篇かくれなき者あり、彌三郎を思ひこめて、やるかたなくおぼえて、

身にあまりおき所なき心ちして
　やるかたしらぬわが思ひかな

かく思ひつゞけてなぐさむるに、心只空にのみあくがれ、せんかたなく色に出つゝ、たよりあるかたに賴みて文つかはしける。

蘆垣のまぢかき中に君はあれど

忍ぶ心や隔なるらん

思ひ堪なば、中々しぬばかりなりと書つかはしければ、彌三郎これをよみて、限りなく心に染てあはれにおぼえつゝ、返り事せしことの葉のおくに、

人のため人め忍ぶもくるしきや
身獨りならぬ身をいかにせん

といひつかはしければ、藤藏いよ〱心をどひ思ひ亂れ、今はひたすら色に出つゝ、

いかにせん戀ははてなきみちのくの
忍ぶ斗にあはでやみなば

もらさじとつゝむ袂のうつり香を
しばし我身に殘すともがな

神にかけ命にかけて書つかはしけるに、彌三郎深き情の色に誘はれ、その夜忍びて逢にけり。千年を一夜にかたりあかし、名殘のきぬ〲別れて出たり。藤藏かくぞよみける。

ほどもなく身にあまりぬる心地して
おき所なき今朝の別れぢ

彌三郎聞て返し、

別れゆく心の底をくらべばや
歸るたもととゞまる枕と

又いつといふ契りもさだめず、こと更今の世のありさま、靜ならぬ折ふしなれば、けふありて明日をもしらず、今朝の別れや限りならましと、そのおもかげのしたはるゝも、つきせぬうらみは數々なりと、たがひに泣しほれたるばかりなり。次の日軍おこりて、朝倉義景人數を出して臼井峠に馳向ふ、武田方せり合たゝかふに、洲河藤藏うたれしかば、彌三郎大に悲しみ、命いきて

も何せんとて軍法を破り、旗本よりして只一騎かけ出つゝ、打死しけるこそあはれなれ。二人のかばねは味方に取返し、日比わりなくかたらひし事、家中にかくれなかりしかば、人々あはれがりて、ひとつ塚に埋みけり。日を經てその塚より名もしらぬ草の生出て、その莖立たるに夏にいたりて花咲たるを、是は男郎花とて、世にすくなき草花なり、さだめて彌三郎藤藏一人の亡魂のしるしに、生たる物なるべしとて、なさけをしる人は、根をわけて庭にうゑしより世にその草のたねおほく成にけり。

○掃部新五郎遁世捨身

上杉憲政の家人掃部新五郎は、手よく書て歌の道をこのみ、情ふかき武士なり。色このむとはなしに、わが心にかなふ人あらばかたらひ契りて、後の世までも思ひはなれぬ心ざしをとげばやと思ひわたり、さだまれる妻もなし。かくて月日を送るあひだに久我の住人名草の徳太夫とて、物ごとやさがたなるものあり。その子徳之丞は生年十四歳、田舍人の子といひながら、眉目うつくしくそだちあがり、心ざま優に、立ふるまひいやしからず、新五郎これを見そめてかぎりなく、緣をもとめて近づき、手ならひ指南疎からず、四書五經までも退屈なくをしへ侍べりしかば、父徳太夫も秘藏の客と思ひて、内外なく隔てぬにこそ侍りける。とかくせしほどにたがひに思ひしみて、徳之丞新五郎とわりなくかたらひけり。歌の道までも心ゆくばかりによみなし。心ざしをつらねて月日を經るまゝに、彌生の比にや家の軒ばに忍といふ草の生出たるを見て、新五郎かくぞよみける。

　ことの葉に出てはいはじ軒におふる
　　忍ぶ斗は草の名もうし

徳之丞心はやく思ひあたりて、

　我もかく人も忍びていはぬまの
　　つもる月日をなどかこつらん

　ことの葉の末の松山いかならん
　　波のしたにも我は賴まん

とほくかたらひふかく契りて、徳之丞すでに十七歳、卯月の初つがたより何となく煩らひ出し、さまざま療治をいたせしかども露ばかりも驗なし。新五郎も身をもみて種々養性をくはへ藥を用ゐるのみならず、神佛に願だてし祈りをかくれども、つひにそのしるしなく、今ははや此世の賴もきれはてつゝ、時待するより外なし。親一族手をにぎりいかゞせんとも思ひよる方もおぼえず。かゝる所に徳之丞むくとおきあがりくるしげなる中に新五郎が手をとりて、

　すゑのつゆ淺茅がもとを思ひやる
　　我身ひとつの秋の村雨

といふかとすれば息はや絶にけり。新五郎はかなしくあはれに心まどひ、おなじ道にと歎きけれども甲斐なく、野べの送りをいとなみ、苔のした塚のあるじとなし、塚の前にて髻をきり、宿にも歸らずすぐに遁世

して、

　のがれてもしばし命のつれなくば
　　戀しかるべきけふの暮かな

とよみて、足にまかせて出にけり。西國のかたにおもむき、聞及びたる靈佛靈社殘りなくおがみめぐり、やう〳〵年もあらたまり、卯月のすゑつがた故郷に立歸り、人しれず徳之丞が塚に行てみるに、草茫々として露のみ瀼々たり。あはれ昔に成はて、おもかげはわすられず、涙ながら念佛する所に、塚のむかひに徳之丞が姿あらはれて、影のごとくせう〳〵として立たり。新五郎入道、あれはそれかと近くよるに、かきけすやうにうせたり。心をしづめ經をよみて、跡よくとぶらひ、なく〳〵又立かへり東國のかたに行けるを、世の中靜ならず、行さきおぼえしかば、今はながらへても何にかせんと思ひうむじて、

　露の身のおき所こそなかりけれ
　　野にも山にも秋風ぞふく

と書て松の枝にむすびつけて、あなしの池に身をなげて死けるこそあはれなれ。まのあたりしる人ありて、かばねを水よりとりあげ、徳之丞が塚の前に、ともに土中に埋みしとかや。

○蜎蟲祟をなす

元和年中の事にや、西國の侍柳岡甚五郎某とて、武篇に名をえしもの、大友が手に屬して、歯がねをならし時めきけるを、軍に手を負つゝ、その身合期しがたく牢篭し

て、山しろの里にすみけり。その子を孫四郎と名づく。年いまだ十二歳なりけれども心ざまおとなしく、おなじほどの子どもにも、つれてあそぶこともなく、物しづかに生立あがり、手ならひ物よみに心をいれて、更にいやしげなる業なし。あたりちかき輩みなこれをほめ感じて沙汰し侍べり、しかも容顔美麗にして、人なみにははるかにすぐれたり。後には身をたて家をもおこすべしと、親もよろこび思ひけるところに、元興寺の僧宥快と聞えし法師、都にのぼるとて路のついでに、しれる人ありて、山しろの里に立より、孫四郎が姿を見そめしより、心ざし切に思ひしみて、京へものぼらず、しばらくこゝにとゞまり、たよりをもとめてかくぞいひつかはしける。

江南柳寃綠　尙愛二枚葉陰一
頻莅二黄鵡冥一　暫堪レ待二春深一

葉をわかみまだふしなれぬくれ竹の
　このよをまつは程ぞ久しき

と書てやりければ、孫四郎おさなき心にもあはれとや思ひけん、文をばふかく袂にかくし、返事せんすべもしらずながら、朝夕思ひくづをれつゝかくぞ讀ける。

おなじ世にいきて待とは聞ながら
　こゝろづくしのほどぞはるけき

宥快は此歎をつたへ聞しより、心空にあくがれ、修行學道の事は世の外になり、寺をあくがれ出で、山しろの里に行通ひ、人めをもわすれてあたりちかく忍びありきけり。親聞つけて、情もしらず腹立て、にくき法師の有さまかな、孫四郎年まだたらぬ

をみだりにそゝのかし、とかくするこそ安からね。わが子更に門より外にはいだすべからず、おとなしく生立なば、いかならん大名高家へもまゐらせ、武篇のはたらき人めをおどろかし、大身に經あがり、我がおとろへたる家をもおこさばやとこそ思へ、寺にこもり兒喝食となり、後には乞食法師の腰抜若黨になりなば、命生て何にかはせん。身を立る事のかなはずば死たるこそよけれ。その法師あたりへもよすべからずと、をどりあがりていひのゝしりければ、孫四郎悲しき事限りなし。親にそむかじとすれば、なさけもしらぬ有さま、烏けだものに同じかるべし。

いかにせんあまのを舟のいかり繩
　　うき人のためつながるゝ身を

獨りかこちてあかし暮すと聞えしかば、宥快ほうしは思ひに堪かねて、

あまのたく藻鹽の烟あぢきなく
　　心ひとつに身をこがすらん

口をしき世の有さまかな。ながらへてあればこそ、物うき事もつらき事も、我身にこりつむ柴舟の、こがれてのみあかし暮さんより、死してうらみをはらさんものをと、一すぢに思ひさだめて、房のうちに引こもり、斷食して居たりければ、同學の僧來りて戸をたゝくに、しばしは音もせず、やゝありてあらゝかに障子をひらき、立出たるすがたを見れば、痩つかれたるすがた形、兩の目は血を刺たるごとく、くぼ／＼とおちいり、頭の髮は此間に色變じて白くなり、筋ふとく骨あらはれ、すさまじき事いふ斗なし。同學の僧さしよりて、いかに淺ましくも執心ふかくみゆるかな。さなきだに生死のまよひはれがたくして、世々の聖賢だにおそれ給ひ、身命をかへりみず、行なひすまして得道し給へり。その外おほくの修行者達、捿家をはなれ山にこもり、或は諸國を抖擻し行脚の身となり、妄念をとゞめ煩惱をひすろげて、まことのおこなひをいたし、菩提をもとめ功德をつみてこそ、輪廻をのがれ解脱のさとりに入といふに、大事の未來を餘所になし、浮世の戀慕に思ひしづみ、魔道に落て永きまよひに沈まん事、人界に生れし甲斐もなく、六道のちまたにさまよひなば、悔とも歸るまじ。只この一念をひるがへし、狂氣をとゞめて克念へ、凡夫を轉じて聖者とならんは唯今ぞかし。鑊湯劍林遠からず、劍の山ちかきにありと諫しかば、宥快聞て涙を流し、世に有がたき法門を聞せ給ふはさる事なれども、思ひ結びし業因は、ゆめ／＼とけ侍べらず、千たび百たび心を返せども、返され侍べらぬは力なし、迚も此世は久しからず、重ねて受べき輪廻の妄執はさだめて過去世の因果なるべき。柳岡甚五郎は生々の怨家たるべし。たとひ死て劍の山には上るとも、よしや是までぞ。年比同學の情に、只今出て此世のいとまごひをするぞや。心ざしあらば跡をとへかし、とく／＼歸り給へとて、

障子を引たてもとのごとくこもりければ、僧も力なく涙とともに歸られたり。かくて七日といふに、盥盤の前に打たふれて死けり。僧衆あつまりて屍を野べに出し、荼毘の煙に燒あげ、經よみ念佛してとぶらひけり。その夜孫四郎夢ともうつゝともしらず、宥快法師闇に入來るとみえし。それより病出し、時々は熱氣にをかされ、おどろき騷ぐ事あり、醫師を頼みさま〴〵いたはるに更に驗なし。漸々につかれて、つひにはかなく成たり。父母の歎きたとへんかたなし。泣々葬禮して屍を土中に埋み、卒都婆をたて經よみてとぶらひけり。孫四郎今、引入とおぼえし時に、まさしく宥快ほうしが聲として、孫四郎殿いさ〳〵といふ音の、家の天井に聞えしこそおそろしけれ。三十五日をすごしける。ころは五月の初つがた家のうら天井承塵戸にも柱にも、毛蟲のわき出たり。五月雨の降つゞく故に、朽たる木竹よりわき出るやとおもひけるに、それにはあらで甚五郎が家にかぎりて、餘所にはひとつもなし。拾ひよせ掃あつめて、堀にすて河に流す事數石に及ぶといへども、跡よりわき出てつくる事なし。後には此毛蟲にさはる人は、是にさゝれて疼痛み、日を經ては蛻けて蝶になり、むらがり飛で、人の類にとまり、衣裳に取つき、夜はともし火にたかりてうち消し、あるひは食物の中にころび入ければ、いかさま是は只事にあらず、宥快法師が亡魂のなすわざ成べしとて、元興寺に申つかはし、同學の僧を頼みてとぶらはせしかば、彼僧も痛はしくおぼ

えて、祭文を作りて佛事をいとなみ、ねん比にこそ弔らひけれ。

維歳元和二年龍集丙辰今月今日、元興寺住僧宥快入二名於釋門一凝二志於學道一、觀智温雅之德、修行練磨之功、實出離之要基也、一朝魔風扇動而禪座散落、妄塵飛蕩而定水垢濁、神裂魂碎、死而爲レ蝟、嗚呼哀哉、細爾小蟲爲レ害不レ少、汝毛攢起如レ豪、剌端兩岐若レ鼠喩二晉桓溫之鬚一、比二淮陽王之矢一、熱則展如二水蛭一、寒則縮似レ卷矣、蓋惟生死輪廻之巷、流轉因果之報、罪福各如レ符、纖芥咸無レ差、三界四生區別、六道七類凡殊、一念之愚執、一心之惑倒、變而爲レ迷、化而爲レ物、賈誼所謂化爲二異類一焉、清涼所レ謂精神化爲二土木金石一焉、此故八幡娘孃子爲二女郎花一、松浦佐夜姬成二堅頑石一、愛戀染着則情與二非情一無レ所レ不レ爲焉、嗚呼哀哉、汝之業力、假令雖二强盛一、今所レ行、隨求陀羅尼、光明眞言庸誦供、式加持、應下速轉二迷情一疾翻二魂精一到中安稽之楽城上、謹奉尚享。

かくおこなひ加持してとぶらひければ、二三日の間に蝟ことごとく絕て、あとかたなくぞ成にける。亡魂のうかびける事うたがひなし。

○杉谷源次 附 男色之辨

文祿三年の事にや、伊勢の國國司の家に、深見喜平とて才覺利口の侍、よく奉公をつとめて、知行三百貫までとりあげ、外樣をゆるされ奥までもめしければ、漸やく重きものにぞ成にける。奥がたの扈性杉谷源氏といふ者は、すぐれて眉目うつくしかりければ喜平心をかけて、とかくいひけれども聞いれず、あまりの事に文をかきて、源次がたもとになげ入たり。中々こと葉はすくなくして、

伊勢の海あら磯によるうきみるの
　うきながらみるはみぬにまされり

あなかしこ人にもらすな、忍ぶの杜のこと葉もれなば、影淺き井手の玉水、心のそこも波にあらはれては、末までもいかゞせんと書やりけるを源次いかゞ思ひけん、只かりそめのやうに、傍輩に泄し語りしかば、家中にかくれなく聞渡りて沙汰あり。喜平は人のみるめ恥かしく、源次が返事せぬまでこそあらめ、人に泄しけることそ安からね、さだめて我を失なはんと謀るとおぼえたり。命ながらへば、いか成見ぐるしき果にやならんとねたく恨み、源次朝とく起あがり、寐屋より出る所をあへなく打ころし、みづから腹切て死けり。諸共に塚に埋みしに、夜な／＼その塚に火もえて、日暮ればそのあたりは、人の通ひも絕たり。國司此事を聞給ひ、惡き有さまながら、執心のほどもいたはしく、僧をやとひて、塚の前にて經よみとぶらひければ、その火それより、もえず成たり。國司法力の奇特を感じて、彼僧をめして法門など聞給ふ。ついでに男色の事は、經論にもみえ侍るかと問れしに、僧こたへてかたられしは、佛經の中には、わきて男色といふ說はなく、邪淫戒のうちに、非道淫戒をあげられしに、自からこもり侍べり、もろこしには周の穆王の慈童を寵じ、漢の高祖の籍孺を愛し、惠帝の閎孺を執し、哀帝の董賢を幸せられ、衛の彌子瑕漢の鄧通、みなこれ男色にまどへ

ろためしなり。史記に佞幸の傳あり、太平通載に權幸の篇あり、晉書には、西晉の武帝咸寧太康の年より、男寵の事大に興りて女色よりも甚だし。あるひは夫婦離別にいたり、おほく怨をおこす事ありと記せり。是いにしへより佞幸のともがら、その終りを善するものは少なし。夫財をもつて交はる者は財盡て交はり絶え、色をもつてまじはるものは、花落て愛碍ろぐとかや。人常に若き時なし。年の暮やすき事は、たとへば流るゝ水のごとし。行て又歸らず、たとひうつくしくみやびやかなるすがたといへども、いく程なく過去て留まらず、すみやかに衰ふ。猶朝顏の日影待まの有さまならずや。梁の沈約が懺悔の文には、追尋す少年のときは、血氣まさに壯なり、習累の纒ところ排豁ただし、淇水上宮まことに幾もなし。桃をわかち袖を斷、またおほしといふに足り。此實に生死の牢穽、いまだ洗ひ拔易からずといへり。宋の世にいたりて學問をことゝし、此道稍おとろへたり。本朝のむかし眞雅僧正は業平を戀て、「常磐の山の岩つゝじいはねばこそあれ」とよみおくられし、中古に瓜生判官の弟義鑑房が金崎にて打死し、鱗岳和尚の田野にして打死せし、みな男色のまどひに陥いりたる故なり。近比は股をさし肘を引て血を出し、心さしの實ある事をあらはせり。古き歌に、

思ふこゝろ色にはみえず身を刺て
朱の千入を君それとしれ

をかしげなる歌よみ詩をつくりて、愛まどひ侍べり、文にもあらず、武にもあらず、非道の色に身をすて命を失なふもの　女色よりも甚だし。忠をわすれ徳をけがし、家をたふし身をほろぼす斗、僧俗にわたりてかくのごとし、まことに愼むべき事なりとぞ語られける。

狗はりこ巻之六

○鹽田平九郎怪異を見る

攝州花隈の城主荒木攝津守は織田信長公に楯つきしかば、瀧川左近將監に人數をさしそへ責させらる。野村丹後守を初めて、雑賀の者ども二百餘人みなうたれて、城には火をかけ燒くづしけり。鹽田平九郎といふもの、只一人のがれ出て故郷に歸り、暫く世の有さまをうかゞひ見るに、行するゑとても賴みがたく、ともかくにもはてしなき身を、いたづらになさんよりは、後世の大事をもとめばやと思ひさだめ、もとゞりきり衣をすみにそめ家を出つゝ、心のおもむくかた、足にまかせて野くれ山くれ村里をめぐり、國々の風俗所々の有さま、聞つたへし名所舊跡をがまぬ靈地もなし。又そのあひだに、富てゆたかなるあり、わびてすむ人もあり、はしたなき情ふかき、いづれしなぐ\ひとしからず、或時はたづきもしらぬ山中をたどり、樵に麓の道を尋ね、或時はそこともわかぬ野べにまようて、草かりに里をもとめ、又はすみか稀なる長路に日を暮し、宿かさぬ所に行かゝりては、木のもと塚原に夜をあかし、筑紫がた肥後の國阿蘇の深谷にいたりしかば、まのあたりなる地ごくのありさま、もえのぼる焰のすゑ煙につれて天を焦し、鳴くだるいかづちの音、山も更にくづるゝがごとし。罪人のよばひさけぶ聲谷の底に聞えて、いく千萬とも知べからず。かゝる事を見てもおそれず聞てもおどろかずば、誰とてもかくあるべしと、懺悔の涙は留めがたし。げにすつる身なればこそ、かやうの事を見聞につけて思ひ知かなと、ひとり心に觀じて、それより猶ゆく道の末はるかなる薩摩がた、硫黄が島にわたりて、俊寛が古しへこの島に流されて、あはれをのこす物がたりを、今見るやうにぞ思はるる。浦半の海士のしわざとて、釣舟に棹さして千尋の浪にたゞよひて日も夕暮のよび聲は遠近に聞えて、うしほをはこび柴をとり、鹽やく煙の心ぼそく、玉藻を拾ひ磯菜をとり、世わたる業はいづくとても、安からぬこそ物うけれ。四國二島のあひだをめぐりて、やうやう播磨がたしかまのかち路を經て、又故鄕に歸り、指を折てかぞふるに、十八年にぞ成たる。替りゆく世の中に知人もなく、村里のすみかも、そこともしらずあらたまりつゝ、花隈伊丹の燒跡、こゝは昔の城の跡、あかしにもあらずみえければ、そゞろに哀れにおぼえて、

かへりこぬ昔をおもふ袂には
　秋ともなしに露ぞおきける

日も夕暮になり、野寺の鐘の聲かすかに聞えしかば、

見ろまゝに過にしかたは入逢の
　鐘や昔の跡に聞ゆる

かくて花隈のかたをあゆみゆくに、心のままに荒はて、淺茅の生茂り、薄がもとに秋をわぶる蟲の聲々もあはれなり。四方の山々いたく暮はてゝ、又問よるべきよすがもなし。草原の中に、ふるき軒ばの有けろに入たりければ、すむ人もなし。軒かたぶき、板戸破れ、上漏下濕て淺ましげなるに、うづくまり居て靜に經よみ念佛す。月漸やく東の山のはに出る比、誰とはしらず三人つれて入來る。平九郎入道思ひかけず、壁にそうてひそかに見れば、そのさまいやしからず、物語する事又世の凡俗にはかはりて、理はりにかなへり。その中に一人云やう、さても此世の中、大永天文の比より、諸國たがひにそばだち、つよきは弱きをしたがへ、大なるは小さきを倂せ、天下すでに四分五裂して、軍の絕る時なし。此あひだ甲斐國には武田信玄、北越には長尾謙信、北條織田の家々、人數をあつめ謀ごとをたくみにし、ひたすら戰國の七雄、三國の亂れといふとも、今の時にはよもまさらじ。いつか一統の世と成べきといふ。また一人の云やう、天下の治亂は、時運の變災天地の妖怪なり、或は飢饉あるひは疫癘の天行事もみな此たぐひなり。時いたり運さだまりて、德たかくおこなひよき人の手にこそ入て、天下は一統すべし。そのあひだに家をとりたて、黨を結び軍兵をまねきて、地をあらそふ人あれども、天理にかなはずしては、中比亡びて絕るもあり。まことに吉

凶は天理に依て人事にあらず、されば信玄謙信北條の氏康は、みな他界せられ、世つぎは有ながら、いづれも父には似ずとかや。中にも武田四郎勝頼は、武勇は諸家にすぐれたれども、愚闇にして才智にともしく、みづから武勇に慢じて、諸方の敵をば生たる蟲かとも思はれぬは、やがて亡びのもとゐならずや。一端は大將の武威つよく、敵に勝事あれども、愚にして智恵なく、或は敵の謀ごとにのせられ、又は奢をこのみ人を見しらず、或は佞奸輕薄の者を好とおもひ出頭させ、智謀ふかき臣を讒して疎み遠さけ、我が武勇に慢をおこし、我意にまかせてすさまじき軍をして、味方のよき者皆打ほされ、いくほどなく國を失なひ身を亡ぼす事、古今に例おほし。天正年中、奥平美作守同じく子息九八郎、勝頼の行跡を見限り、甲府を背きて長篠の城に楯こもる。武田勝頼大に怒て、一萬八千餘騎を率して押よせらる。德川家後詰のため、信長公に加勢をこうて、前後七萬六千餘騎長篠におもむき、三重に柵をかまへて待かけらる。勝頼一萬四千餘騎、先陣山縣三郎兵衛を初めて、三重の柵に防がれ、三千挺の鐵炮に、的になりて打ころされしかば、一族同心にいたるまで、一萬三千餘人死けれども、敵方には名ある侍は一人もうたれず、勝頼は只三騎にてのがれて甲府に歸らる。此後は織田德川兩家の武威の天下にかゞやきて、出る日のごとく、武田がた諸方の壘に取かけ責おとせども、後詰すべき人數もとゝのはず、すてころさるゝ故に、武田の家衰ろ

へ、末久しくは有べからずと思はぬ人はなし。つひに信長公のために責られて、天目山のふもとにして、武田の一家みな死絶しこそ哀れなれ。凡軍は三才相應するをもつて要とす。天の時は地の利にしかず、地の利は人の和にしかずといへり。勝頼此たびの出陣には、往亡日にあたれり。德もなく義もなく智謀くらき上に、血氣の勇にまかせて時日をえらばず、父信玄は軍を大事にかけ、山本勘助が丸日取、前原筑前守が相傳せし月切の日取、小笠原源與齋が八方懸の口傳、いづれも秘術の大事なりとて、丸日取の圖を軍謀團の裏に書てもたれたりとかや。こと更五月は中夏にして、南のかたに旺す。廿一日は辰巳午の三時に、破軍の劒杵北のかた或は艮のかたにむかふ。然るに勝頼の陣南にむかうて備をたて、しかも辰巳午に軍を初めたる、みなこれ天の時に違へり。其上長篠の城に取かけ、本陣を道虚山に取たり。道虚日はよろづに忌事なり。名詮自性の理り、いまだ戰はざるに敗北の兆あり、天の時を失なはれたり。信長方わざと廣みを前にあて、切田堀切片拆なる殺所を殘し、柵を三重にふりけるは、勝頼を小曳て川を渡させんがためなり。待て戰ふべき所ぞかし。斥候をも出さず、無理に懸りて軍せしは、地の利にそむけり。其上去年東美濃はつかうの時より、旗本外様近習衆と、諸牢人方信濃衆と、三方の內證不和になり、長坂釣閑と內藤修理と中あしくなり、勝頼は家老方を惡み思へり。內外大小はだ〳〵になる。軍事の評定にしまりなし。

それに强み過たる大將を釣閑からばりして家老の諫を譏し申せし、國の大なるを恃み、人數のおほきにほこり、武威をあらはさんとする。これ家運のかたぶきたると見て、家老諸侍はみな打死せしもの成べし。其時の落書に

　信玄の跡をやう／＼四郎殿
　　敵の勝頼名をばながしの

此後またいかならん世に、うつり行べきもしらずと語りければ、又一人の云やう、無用の長物がたり、餘所の盛衰はさればいかにもあれかし。めん／＼身の上の事、行すゑこそあやしけれといふ。まことに我らの事を忘れて、よしなき物がたりせんより、心をのべて慰むにはしかじとて、其中に色白く、おもて丸やかなるが、一篇をぞ吟じける。

　高低竪起孤輪月　扇動縱横興涼風
　弄罷委棄埋濕土　獨皮腐骨故情窮

又一人、その身ほそやかにおもてにゑくぼあり、吟じけること葉に、

　當時得意龍吟調　一曲飛聲渉碧霄
　今日庭中破碎竹　方慕穿林舞謡嬌

又一人、その體肥ふとりて長ひきく、髮髭垂亂れたるが、吟詠していはく、

　苕掃埃塵更靡追　愁懷疲羸鬢髯喪
　如今憔悴荒村客　衰朽冷僻倚短墻

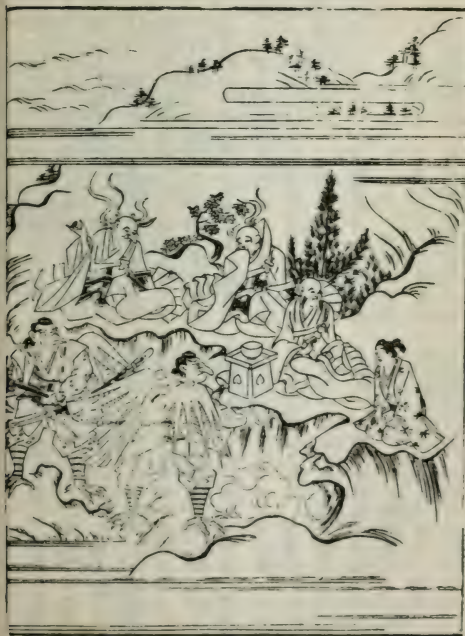
かやうに打吟じて、此心をのぶる樂しみは、千とせ過るとも忘れじというて、あそびたはぶるゝを、平九郎入道つく／＼と聞て、いかさまにも懷舊の心ばせあり。詩の心もことばたゞしからず、故あるものどもなる

べしと思ひて、身をつくろひて一聲念佛しけるに、三人ながらともし火とともに、雪のごとくきえうせたり。夜もはや明がたに成しかば、ふしぎの事に思ひて、あばらやを立出つゝ、あたりちかき人の家にゆきて、此あばらやにはあやしき事はなきかと問に、その家は人のすむにもあらず、あれはてたるに、折々は人の聲聞えて、わらひどよめく事侍べり、定て狐狸のわざかと思ひ侍べる。あたりの家にけしかるわざをいたすにもあらずとかたる。平九郎入道聞て、われは諸國行脚の僧なり。こゝにめぐり來て日暮しかば、かりそめに此あばらやに入て、夜をあかさんとせしに、かう〳〵の事あり、めん〳〵一首の詩をつくる、そのことばすぐれたるには侍べらねど、一篇の心ばせこそあやしく聞なし侍べりとて、あるじの男其外若き者どもをかたらひ、あばらやの内をさがしけるに、破れたる團と破たる笛とちいさき帚木と、まことに古きが、土にうつもれ、塵にまみれてありしを、これらの精魅のあらくれ出たる物なるべし。詩の心も是にて聞え侍べり、されどもこれを燒すつる事はあるべからずとて、三色のものを他所の山ぎはにひとつに埋みけり。それより後はあやしき事もなかりしとなり。

○天狗にとられ後に歸りて物がたり

慶長のすゑの年、藤の社に彦八とて、常に田畑をかうさくし、ふし見木幡の人、もし明神に御湯神樂をまゐらすれば、彦八出て太鼓をうち、御託宣あるには、よろしくあどをもいたしけり。その子は次郎と名づけて、社家にかゝへおきて、宮地の掃除をもせさせ木の葉をかゝせけり。心だておくれたるやうなりけれども、正直なるものにて、十六七までは、いとまある時は、ふしみかいだうの子どもに友なひけり。ある時行がたしらずなりければ、親悲しがりて、稲荷山の奥、霧が谷霞の谷までも尋ねさがしけれども、跡もなし。かくて五年の後次郎歸りて、大なる松の木の枝に跨がりて居たりしを、彦八見つけて、次郎にてはなきかといふ聲のしたより下りつゝ、親とつれて家に歸り、初めのほどはその有さま、さながら山の猿のやうにて、手足もよごれ、頭の髪は榛のごとく亂れ、物をもいはざりしを、母とかく湯をあびせ髪あらひ、食物もよろしきやうに、あてがひくはせてやしなひければ、十日ばかりの後より、人心地つきて物いひ出たり。あたりの人もよき事やとてあつまり來りて、いかに次郎、久しく餘所に住て故郷の戀しくもなかりしやと問、次郎是より語りけるは、今年かぞふれば我年廿二になる、他所をめぐりし事、およそ五年に及ぶかとおぼえたり。其比は八月の初めつがた風やう〳〵涼しく、田面の穂なみ出がたになり、畝をつたうて行わたるに、いづくともしらずたふとげなる僧の、紅染

の衣の上に紫の袈裟をかけ、手には水精いらたかの數珠をもち、いかに次郎よ、我ゆくかたへ雇はれ來れ、あしうはせじとあり。畏まりめしつれられて、いづくともなく空を飛やうにして、京の東如意が嶽といふ山の峯に休みて、御僧もろ共に岩に尻かけて居たりけるに、あやしき小法師ばら、手ごとに食物もち來り、御僧にも奉り我にも食せけり。何といふ物とはしらず、味はひうまき事限りなし。やう／＼日暮がたになり、御僧仰られしは、おどろくべき事有べし、汝かまへておそるゝなよとあり。いか成事のあるらんとおもふ所に、同じさまの僧七八人まゐられたり。空より鐵の釜おちさがり、岩ほのまへに金輪にのりてすはりけり。その次に鼻たかく眼大にして、兩の脇に翼ある法師三人、いづれも足は鳥のごとく、柿色の衣に太刀をはき、たまだすきあげ脛高にかゝげ、甲斐々々しき體にて、白がねの茶碗に鐵がねの杓を釜にさしいれ、銅がねの湯を盛て、七八人並居たる僧衆にまゐらするを、僧衆うたて憂たる色あらはれ、茶わんを取て飲けるに、僧衆一同にふしまろび、頭の上より黒煙たちてもえあがり、空のあひだにはばく／＼と鳴ひゞく音して、すさまじさ限りなし。暫くして僧衆は、もえ株のやうに黒くふすぼり、とばかりありて夢の覺たるごとく、又おきて坐せしかば、本のごとくの僧となり、たがひに禮儀正しく散わかれて歸りけり。初めの御僧次郎にむかひて、此有様かまへて人に語るなと、よく口がためし給ふ。我漸やく飢もなく只眠來るを、今宵は臥てつかれを休め、明日は微明より起あがるべしとて、岩やの内に入らる。夜あけてより此僧につれられ空にあがりて飛ゆく程に、霞をひらき雲をわけて、こゝはいづくにて候と問ば、播磨の國姫路といふなり。日はまだ卯の刻ぞ、うゑたらば物くはせんとて大なる家の内につれてゆき給ふに、振舞ありとて人おほくひしめきけれども、僧をも次郎をも見とがむるものなし。次郎に心にかなふもの取くはせ、それより出て雲をかけりつゝ、青海ばらを足のしたに見て、遙に高くあがりてゆくかなと思ひ、直下とみおろせば、所々住あらしたる家ども、海にさし入たるに作りかけ、ほのかにみゆる一村里の苫やかた、みるめを刈ほすまでも心ありがほなり。蘆の屋近からず、鹽屋のけぶりのたちのぼるけしき、うす墨に書たるやうにもおもはるゝ。西のかたは海はる／＼とみえわたり、並たてる松の木のまより、帆かけたる舟ども沖に行かふさまも、波にうつろふいさり火の影、日はすぐに海の中に入はつるかとあやしまれながら、たかき山におり立たり。こゝはいづくぞと問申せば、伯耆の國大山なりとかや、谷をこえて大なる樓門あり、あゆみ近づきて案内せらる。すさまじげなる法師出て、こなたへと申す。僧は次郎とともに門の内に入けるに、あるじの僧

出らる。年のほど五十斗とみえしが座になほりて、さまぐ〜の物がたりせしあひだに、四五人まゐりあつまる。そのさまいづれもみな臈たけ徳たかく見えたり。其中にあるじの僧申されけるやう、それ生死の一大事は、たかきもいやしきものがれがたき道なり。おこなひすましてありとみゆるも、一念の妄執をおこす時は、やがて我らのかたに引入るたよりとなる。さればこそ昔今徳行たかき輩、おほくは魔道の眷屬となれり。我らがそのかみのまよひも、皆またかくのごとし。今の世に學道すぐれ、徳行高しといふもの、さらにまことの大道にはかなひがたし。知ざるを知れりと思ひ、得ざるを得たりとおもふ。我は人にはおとるまじと、すぐれたるを悪み、まさるをそねみ、我慢増上慢、山よりもたかく海よりもふかし。我らあながちに便りをもとめ伺がふに及ばず、魔道の網にかゝる人のみこれおほし。また更に他の障碍にも依ず、みづから大道をさまたぐるぞかし。修禪寺の惠山長老は、唯識法相の宗義をあきらめ、華嚴涅槃の理に達して、常の講談をつとめ、數百人の弟子を領ぜられけれども、その心ざし、わが宗流をたてゝ、他の宗義をおとしめ、心に彼我をいだき、上覺寺の行蓮上人は、説法に名をほどこし、諸方の男女を勸化し、一切經を書たて、佛像おほく作りてくやうをいとなみ、世には佛のやうにたふとびしかども、一生のあひだ、只經論をあつめ佛像をつくり、他の財物を求め、すでにもとめ得ては、むさぼる心のおこりて、功徳は有

に似て却て貪欲の煩惱となれり。靈光寺の明寂法師は、そのかみ武門の高家なりけるを、たちまちに武職をすて、佛道にいりけれども、その俗家にありし時は、理をまげ法を破り、百姓の財産をうばひ、人を痛めて取あつめたる金銀を、寺に入て堂舍をたてらる。これらの輩みな我らの障碍に依らず、死して魔道に入侍べり、是のみならず又諸方の出家といはるゝ者幾千萬とも數しらず、行もなく智もなく、旦那を諂らひいつはりをかまへ、欲のふかき事俗よりもまさり、腹のあしき事在家に過て世をわたる法師、死しては地獄に落て、信施のむくいをつぐなふ。或は儒道を學ぶものは、淸旦浩然の氣をやしなふといふ事は夢にもしらず、詩をつくり文を書とては、心にもなきいつはりを筆にあらはし、又常の道はおこなはずして、人をたぶろかし、祿をけがし、手を出して盜みせぬばかりに月日を送る。天理に背き神德にたがうて、死しても本德に歸る道なく、三惡道におつるものなり。在家は世わたり身を過るあひだに、後世の道をねがふとはすれども、愛欲にひかれて眞實の思ひなく、おほくは地ごくにおつとかや。今の我らもかゝる心ざしより、魔道に入て堪がたき苦しみをうけながら、慚愧懺悔の心をおこさず、却て佛敵法敵となる淺ましさよといふかとすれば、八人の僧はいふにおよばず、數多の法師原まで、おそれわなゝき立さはぐほどに、みなともに宮殿の柱につながれてはたらき得ず。そらより猛火もえくだり、宮殿樓閣一同にも

えあがり、おめきさけぶ聲とともにやきくづれて、殘る人はなし。次郎ばかりはつたがれずして、遠く谷かげににげのがれたり。とばかり有てさきに僧來りて、次郎をつれて山を出つゝかへりみれば、さしも作りたらべし山中の宮殿樓門は跡もなし。是より次郎は僧に連られ、又空をかけりて西國のあひだ殘らずめぐりて、又京ちかく歸るとて、播磨の灘にて便船を請れしを、舟子どもはしたなくいらへてのせざりければ、僧すでに歩よりゆく〳〵、いでおのれらに思ひしらせんとて、沖のかたにむかひて印を結ばれしかば、俄に黒雲おほひ大風吹おこり、海のおもてくら闇のごとく、波たかくあがり、雪の山をつき砂の山をかさね、數多の舟ども磯にてひるがごとく、垢をかへ苫を打いれて、磯近くよせんとするに叶ひがたく、舟の内には伊勢のかたにむかうてをがみ、觀音經をよみ念佛す。やう〳〵日の入がたに、風やみ浪しづかに成て、おほくの舟どもよみがへりたる心ちして、室の津にかゝり、兵庫の浦まで吹よせられ、辛じて命たすかり、悦ぶ人もおほかりけり。僧は又それより程もなく山崎まで來りて、夜の明がた次郎に物くはせ、都に入て西の岡より北山をめぐり東山に出ければ、五條川原に能ありとて、都の人貴賤上下足を空になして、芝居に入あつまる事雲霞の如し。棧敷には色々の幕うちならべ、誰とはしらず歴々の人ども見物するを、僧は次郎をつれて見めぐりけれども、とがむる人もなし。能はすでに初まり、名だかき上手共入替り入替りいたしけるに、諸人心を空になし、萬事を忘れて見居たるを、僧すなはち次郎に語りて、此やつばらあまりに物の心も失ひたるに、諸人の目をさまさせんとて、舞臺の上に坐して、何やらんとなへられしに、忽に三條西の洞院より燒出て黒煙舞あがり一面に成てもえわたる。風あらく吹しきて焰とびちりければ、町つゞきをこえて、我かしこにもえあがる。すはや火事よといふほどこそ有けれ、幾千萬ともなき見物の諸人等、上を下にかへし、棧敷よりころびおち、芝居楽屋鼠戸ひとつになり、我さきにとこみあひ押あうて、ふみたふし臥まろび、女童のなきさけぶ聲、物あひ更にわかれず、とかくして火も靜まり、僧は次郎をつれて、あゆむともなく飛ともなく都を出て、さゞ浪やしがの山こえ 比良小松今津海津をうち過て、越前の敦賀に出たり。いたらぬ隈もなく見殘す所もなく、飢をもしらず寒からず、東國のかたあまねく廻りて、富士の高嶺、淺間が嶽、田子の入海、清見が關、箱根の山より駿河の國、鎌倉山の昔の跡、聞つたへし名所は、めぐり殘せる方もなし。春もたち夏もすぎ秋の空冬の時も、心にくるしむ事もなし。暫らくも身を留めず、天がしたを打めぐり、山河海のおもて空をかけてゆくさきには、折々只おそろしき事奇特の事、心の外の旅の間に、年の

暮月日のたつをも覺えず、五年の光陰を過て、こたびこゝに歸り來るも、ながきいとまにあらずと、さま〴〵語りしが、廿日斗は家にありて、見なれぬ奇特を諸人にあらはし見せて、又行がたなく成たり。此ほどの形見とやおもひけん。檜木笠檜木の棒、ちぎれたる篠懸を殘しおきたり。父彥八も年よりよはひかたぶきて、いく程なく身まかりけり。殘しおきける篠懸は、地下人等瘧をふるひて病ふせりけるを、彼のすゞかけを枕もとにおきねれば、やがておこりの落ければ、方々借つたへて秘藏せし、後に行がたなく失なひけり。檜木笠ひの木の棒は、古き家のならひ、雨もりて朽はてたりとかや。

○板垣信形逢㆓天狗㆒

板垣信形は、甲斐の信玄いまだ武田大膳大夫晴信と號せし時より、武勇の名たかく、諸方の軍に手柄をあらはせし者なり。晴信秘藏の勇士なりければ、家の重寄も他人にすぐれたり。されども忠節ありて思慮なく、勇にして頑なる故に、楚忽なる事おほしとかや。或時信形おもてに出たるに、年のころ五十あまりとみえし山伏一人來りて齋料をこふ。そのさま世の常の人ともおぼえず、眼ざしすさまじく色くろうして長たかく、筋ふとく骨あれて、まことに行法に苦勞したるものとみえたり。信形心にあやしみ內に呼いれて、客僧はいづくの人ぞと尋ねしに、是は出羽國羽黑山の行人なり。去年は大峯葛城におこなひ、それより熊野にいたり年ごもりして、此ごろ玆もとに下れり。やがて羽黑山に歸り、一夏をおこなひ申さんとて、かた〴〵齋料をこふ事にて候といふ。信形重ねて問けるやう、御房只一人にて候や、又同行の侍べるかといふ。山ぶしこたへていはく、同行あはせて十人候。それも打ちりて、家々齋料のためにめぐり候と云。信形いふやう、見ぐるしく候へども、今夜は是に御宿申すべし。同行の山伏達をも、これへよびよせ給へといふ。山ぶし聞て、近ごろ有がたう候。さらば同行をもよびさふらはんとて、門に出つゝ、腰につけたる螺の貝を手にとり、よせ貝とおぼしくて、暫らく吹ければ、山ぶし九人俄にあつまり來る。其中にも前の山伏は先達とみえて、九人の山ぶしはいづれも年わかく、しかもつゝしみうやまふ體なり。日も暮がたに及びしかば、ともし火をとり、非時の料したゝめ、さま〴〵もてなしけり。信形年比は物ごとつゝしみふかく侍べり、いかゞ思ひけん、山ぶし達を馳走のためとて、子息彌二郎を初めて、被官の中間五三人その座に呼出し、すでに酒宴に及び、客僧も主も數盃をかたぶけたり。先達の山ぶしいふやう、思ひかけさる御芳志にあづかり、心をのぶるのみならず、旅のつかれを休候こそ有がたけれ。我ら一生もろ〳〵の行法をつとめ、諸方の名山靈地、をよそおこなふ所に

みな奇瑞をかうぶらずといふことなし。さればわれらの成就する所、常にはふかく愼てあらはさぬ事なれども、此上は何をかさのみに秘すべき。それ何にても奇特をいたしてあるじにみせまゐらせよといふ。下座の山ぶし畏候とて、座中の膳にありし箸ども取あつめ、何やらん唱て印を結び、座の傍なる暗き所に投たり。暫しありて長一尺ほどの鎧武者百人斗くり出たり。信形も彌二郎も目をすまして見居たりければ、座敷の眞中に魚鱗に備へて立たり。先達の山伏云やう、迚もの事に軍をさせて御目にかけよと申す。次の座の山ぶし座をたちて、鉢に入たる薯蕷子をとりて、うしろの方に蒔ければ、又鎧武者二百ばかり、鶴翼に備へておし出つゝ、兩陣たがひにいどみ戰かふに、ちいさき聲にて曳々應々と、おめきさけびて突合切あふ有さま、人間の軍するに少もたがはず、首をとり刺違へ暫らく戰うて、兩陣颯と引のくかとみえしかば、箸のさきに薯蕷子をつきさし〳〵打たふれたるものなり。信形あまりのおもしろさに、某は當家譜代の者にて、近年諸方の强敵を對治するに、いつも先手をうけ給はり、むかふ所打かたずといふことなし。敵がたたとひ金石をもつてふせぐとも、破らずしてはかなふまじと、身命をかへりみず、つひに後れをとりし事なし。世には武勇の者は稀にして、臆病者のみおほしと思ひとりて候。軍法も日どりも方角もいらず、只武勇なれば小勢にても、大勢の臆病者は突崩すに、手間もいらずとこそ覺え侍つれ。子に

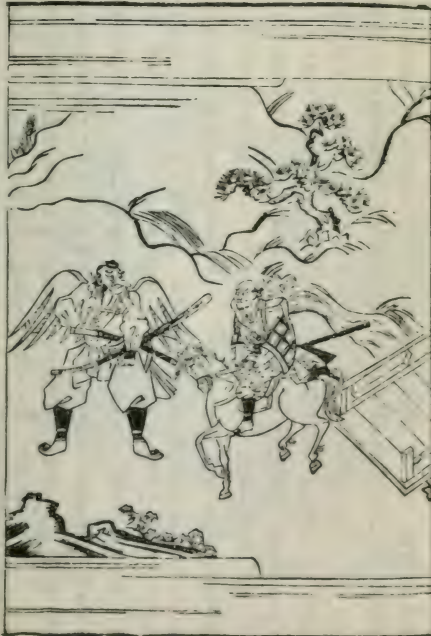
て候彌二郎は、少心の後れたれば、某が鋒先には似申すまじ。あはれめづらしき術法の軍にたよりとなるべき事あらば、つたへて給かしとぞ申されける。先達の客僧聞て、何にても軍のたよりに成べき事、有まじきにては侍べらず。去ながら座中の輩をのけ給へ、あるじ一人にをしへ申さんといふ。さらばとて彌二郎も中間をもみな旁へ出して、劍術兵法の傳受をぞいたしける。下座の山ぶしうけ太刀して、信形に指南する木刀竹刀取出し、打合突あふ音しきりにして、夜すでにほの〴〵と明わたる。中間若黨ども、障子の隙よりしのびてのぞきみれば、山伏とおもふ者は人にはあらで、或は鼻のさき高くそばだち、或は口のほど鳥の觜のごとく、又は身に翅あり、異類異形の者どもなり。これはそもいか成事ぞとて、中間若黨ども太刀よ長刀よとひしめき、障子をあけてこみ入ければ、十人の山ぶしどもはいづちへか行けん。みなきえうせて、信形は前後もしらず勞れ臥たり。精進奇麗の膳部肴以下は、少も喰はず捨ちらし、酒はこぼし流し、縁の上には鳥の足跡のごとくなるが、よごれて踏たる有さま、疑がふ所もなく天狗どものあつまりけりと、家中の上下はおそれつゝしみけり。信形は其日の暮がたに、やう〳〵睡さめて起あがりけれども、只もう〳〵として有けり。元來したゝか者なりければ、別の事はなく、何條かやうのためしは、武家にはある物なり。おどろきおそるゝに足ずとはいひながら、他所へ披露はせさせず、隱密してありしかども、後に聞えて評議あり。信形此頃武篇の名世にたかく、むかふ所軍にかたずと云事なければ、武勇に慢をおこし、敵方には手足もなきものゝやうに思ひあなどり、家人原も同じくほこり、慢心を起せし故に、かゝる妖怪をもうけたり。是より信形心だて上氣になり分別あしく、軍法の備もちがひ、危き怪我をいたし、終に信州上田原の軍に打死しけるも、心のたがひし故なりとかや。

○亡魂を八幡に鎭祭る

寛永のはじめつがた、吉川某の家人松岡四郎左衛門と聞えし者は、武篇にほまれあり。心ざししぶとく、正直の武侍なり。しかるを傍輩の讒によりて、打首にして殺されたり。すでに死期におよびて云やう、口惜くも、あらぬ讒言に依て命を失なふ事はちからなし。せめて腹をだにきらせず、打首にせらるゝこそ無念なれ。來世たましひきえて果なば是非なし、きえずしてある物ならば、此うらみは報ずべきものをとて、歯がみをして首をぞ討れける。七日の後四郎左衛門が亡靈あらはれて、生たる時の姿のごとく、讒せし者は親子ながら、打つゞきて死絶たり。それのみにかぎらず、道に行あふともがら、男女老少立どころに死するもの、一千餘人に及べり。僧をやとうて經を

よみ、種々事とぶらへどもしるしなし。埋みたる塚をかざり、陰陽師に仰せて、まつらるれどもしづまらざりければ、社をつくりて八幡と號し、祭を初めて祝ひ鎮めしより、亡魂のうらみとけて、そののちはながく静まりぬ。

○杉田彦左衛門天狗に殺さる

武藏國榛澤郡に、杉田彦左衛門といふ者あり。心操不敵にして物におそれず。年二十のころより、日光の今市、月毎三たびの市に必らず行むかひ、歸り足には山賊して道行人を追たふし、或ははぎとり或は打ころし、家の內財資豊かなり。十七八人ゆるゆると世をわたり、不足なる事なし。ある年の九月に、今市より馬にのりて歸るに、板橋のあひだにして、日光山の孫太郎といふ天狗あり。その身を化して長九尺ばかりの山伏となり。大道に立ふさがる、乘たる馬は身ぶるひしてすくみてすゝまず。彦左衛門刀の反をまはし、柄に手をかけ、汝は日光の孫太郎か、その道あけよ、馬を通さんといへば、山ぶしかたはらに退ざまに、さもあれ來年四月十五日には、必らず汝をとるべきものをとて、たちまちにすがたを見うしなひけり。彦左衛門元來したゝかものなりければ、物ともせず、駒に鞭うつて宿に歸る。何となくすさまじきやうにおぼえて、それよりは日光へもゆかず、年も暮て春になり、二月の末つがたより心地よろしからず、かなたこなたするあひだに、四月

になりていよ〳〵わづらひおもく、つひに十五日にいたり、くるしみ甚だしく、大熱狂亂して死たり。國西寺の國道和尚を引導の師として、稻荷の家より葬禮をいだしけるに、風あらく雨の降事はうつすがごとく、墓所ちかく成しより、いなびかり荐りにして、はたゝ雷すでに棺のうへにおちかゝるやうにおほひて、空に聲ありて、その尸骸をこなたへ御わたしあれといふ。和尚は、一たび契約して師旦となれり。たとへいか成事ありとも、此屍はわたすまじとて、菊一文字の脇指をぬきけるを、いかづちおちかゝり脇指をもぎとりねぢゆがめて去ければ、かばねはとられもせず空晴たり。心しづかに引導し、跡よく彌とぶらひ申されけり。その脇指はなほ今もこの寺の什物なり。後に和尚の語られしは、杉田彦左衛門はその心ねふてきにして、力つよきしたゝかものなり。おのれがつよき心よりして、人をば物とも思はず、佛神天たうの冥慮をも憚おそれず、ほしいまゝに惡行をいたし、人をころし財物をうばひ、只よこしまをもつて身のかざりとす。此故にかゝるあやしき事をも感じけり。妖は妖よりおこるといへり。邪氣勝ときは正氣をうばふとかや。我が心すなはち邪氣のもとゝなる故に、やがて正氣をうばはれて妖怪にあふなり。まなこに一翳あれば空花散亂すといへり。虚空もとより花ありて散にはあらず、まなこにやまひありて、こくうのあひだに花のちるをみるがごとし。正氣正念の時には、外の妖邪は犯す事なし。佛法の中にをしゆるところ、世間の五塵六欲の境界にこの心法をうばはれて、ゆきがたなくとり失なひ、常にまようてくるしみをうく、そのこゝろをとりもどして、とゞめ得たる所にこそ、靈理ふしぎの正見正智は出生すべけれ。此正念を萬境にうばはれて、蟬のぬけがらのごとくならば、もろ〳〵の妖邪は、しばしば犯すにたよりちかし。たとへば守りおろそかなる家には、盜人の入易きが如し。又それ天地廣大の中には、奇怪ふしぎの事あるまじきにもあらず。人に魂魄あり、その精氣正心なれば、正理にして非道なし。正念にして非義なく、德おのづから備るをもつて妖邪をかさず。みづからおこなうて、正心正念を返しもとむる事のかなはざる愚人は、神に祈り佛を頼みて、うやまひたふとびて信を生ずれば、神力佛力に依て、おのづから正念に成なり。そのかみは關東がた、人死すれば火車の來りて尸をうばひとり、ひき割て大木の枝に懸置たる事もおほかりしを、今は佛法のをしへひろく、諸人みな後世をねがひ佛神をたふとび、ふかく信心をおこし、正直正念に成たる世なれば火車の妖怪も稀に成侍べり、只おそるべきは我らの惡行まうねんなり。地ごく鬼畜も餘所よりは來らず、みづから招く罪科なり。此たび仕損じては、一たび返らぬ一大事ぞ。ふかく信じてねがひもとむべきは、佛果菩提の道なりとぞ、ねんごろにすゝめられける。

狗張子巻之七

○細工の唐船

永享四年九月、將軍義教卿富士山御詠覽のため、東國駿河の國に進發を催さる。此事前年より思召立れ、駿河の國守今川駿河守範政に、かねて仰付らるといへども、執權斯波細川畠山等各諫言をすゝめて、今天下しばらく武威の化に服すといへども、大亂の後にして、國おとろへ民疲れて、しかも南方の強敵いまだことごとく亡びず、かゝる時節は好事もなきにはしかず。たゞこひねがはくはおぼしめしとまり給へと、たびたびいさめ申すにより延引に及べり。しかれども多年の御深望たるにより、終に思召止らず。駿河守は此事前年より承知しておもふやう、將軍はじめて此地にきたり給ふ、饗應よのつねにしてかなふべからずと思案して、家臣共をよびあつめいひけるは、來年九月の比、京都の將軍富士川御詠覽のため、此地に來臨あるべきよし、先だつて御教書あり。しかるに此請待いたすべき御主殿の前に、大きなる泉水あり。此水の上にて、何かめづらしき御慰の事はあるまじきやとせんぎ有ければ、末座に一人ありて、それがし細工に妙を得たり、あはれ一年の御いとま給らば、國本へまかり歸

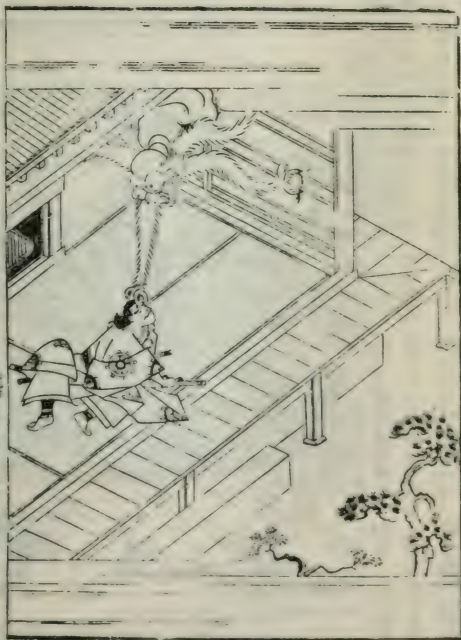
り、何ぞ御なぐさみにもなるべき事工夫仕らんと申ければ、駿河守それこそやすきあひだの事、國にかへりいかにもして細工仕り見候へとて、いとまをたびけり。細工人よろこび國にかへり、一間所へ引こもり、たゞひとりあけくれ工夫をつひやしてこしらへける。すでに同年九月、將軍駿河守が館に御入りあり。やがて御主殿に請待し恭敬の心おこたらず、珍膳佳肴數をつくして饗應す。將軍も感悅甚しく、夜は舞樂の宴を催し、晝は高亭に登りて、富士山を詠覽し給ひ、

みずばいかに思ひしるべきことの葉も
　およばぬ富士と兼て聞しも

かく詠じ給へば駿河守返歌、

君がみむ今日のためにやむかしより
　つもりは初し富士のしらゆき

かくて將軍の御機嫌を見合、かの細工人に仰せて、細工の物を取よするに、何とはしらずひとつの大きなる箱を獻上す。將軍これはいかにとてひらかせ見給ふに、長さ三間横五尺ばかりの結構にこしらへたる唐船にてぞありける。むかし隋の煬帝の數千の大船を作り、あまたの宮女もろ共に舞樂を奏し棹歌して、かの西園の名木奇花をたづねしありさまも、かくやとおぼえておびただし。龍頭鷁首あざやかに、玉樓金殿かゞやけり。すなはち前なる泉水に泛しかば、數多の人形動きいで、桂の櫂蘭の槳滄海に棹さして船うたうたふ。そのけしきげにも巧に操り。しばらくありて色黑き人形共、横になしたる帆柱をそろり〳〵と引あげて

おしたつれば、おほくのつなをたぐりつゝ、日よみのていとうちみえて、まがくしする人形もあり。又年のほど七八十ばかり、これより明州の津までは八百里、海底にいりたる大石もやあるらん。又大風の變をあんじ、破軍武曲文曲のひかり、北斗のほしに參商の二つの星を考へ、時變運氣に心をくるしめ、凝然として立たる人形もあり。さて管絃のはじまると見えて、うるはしく裝束したる伶人の人形、それ〴〵の樂器をもち、おもしろきふき物鐘をならし太鼓をうち、六律六呂の調子をそろへ、太平樂を奏すれば、またうるはしき美人の人形五六十人、けつこうなる裝束し、音樂の調子にあはせ舞踏して、しづかに簾中に引入れば、又さもしほらしきから子の人形百ばかり、てん手に拍手うちそろへ、還城樂のさしあし、ばとうの上のばちがへり、げにありありと舞うたりけり。音樂躍歌の聲、玉のやうらく風にひゞきこがねの瓦は日にひかり、こゝろも言葉もおよばれず。凡五六百の人形、みなそれ〴〵のはたらきありて、一時ばかりの藝をつくすと見えたりしが、そののちちひさき人形一人帆柱のもとにて、何やらん火うちのやうなる物を取出し、二つ三つ打とおもへば、鐵炮のどうぐすりを入はねさせける程に、その音大にひゞきておびたゞし。數多の人形ひとつものこらず打はらひ、唯泉水のしらなみのみぞ殘りける。滿座大きにおどろき、たゞ忙然とあきれたるばかりなり。將軍興をさましたまひかの細工人を召しけるに、彼鐵炮のさはぎ

に亡さりて、尋れどもしれざりける。これはいかさま天下ふたゝび兵亂起りて、人民うせほろぶべき前表ならんと、みな人さたしあひければ、將軍も駿河守も共に眉をひそめて、ふかく隱密すべき旨仰出されければ、その一兩年の中は、さだかに知る人もなかりけるとぞ。

○蜘蛛塚

むかし諸國行脚の山伏覺圓といふ者あり。紀州熊野に參籠し、それより都にのぼり、先淸水寺に詣んとす、五條烏丸わたりにて日漸暮たり。こゝに大善院とて大きなる寺院あり。覺圓幸なりと寺僧に請うて一夜をあかさんとす。寺僧すなはち相許して、堂のかたはらなるいかにもきたなき小屋を借しけり。覺圓大きにいかりて、一夜ばかりの宿、僧徒の身として此修行者に、かゝる不德心は何事ぞやといふ。寺僧打わらひてこれまつたく修行者をあなどるにはあらず。實は此本堂には、年久しく妖ありて住めり。凡そ三十年の内三十人、その死骸さへ見えず。このゆゑに本堂をば借さずといふ。覺圓聞て、何條左樣の事あらん。夫妖は人によりて起るといへり、豈此知行象備の行者を犯す事あらんやと。寺僧は再三諌

むといへども、あへて用ひざれば、やむことを得ずして本堂の戸をひらき、あらましに掃除して誘なへば、覺圓しづかに佛を禮し念佛して、心を澄し坐し居たり。しかれども彼寺僧の詞のすゑおぼつかなく思ひ、腰の刀を半ばぬき出し、柄を手に持ながら

ねぶりゐるところに、夜すでに二更に及ぶ比ぞつと寒くなり、堂内しきりに震動して、風雨山をくづすがごとし。その間に天井より、大きなる毛おひたる手をさし出し、覚圓が額をなづ。すなはち持たる刀をふりあげてうときる。物にきりあてたる聲ありて、佛壇の左のかたにおつ、夜まさに四更にいたる比、又さきの手をさしのぶ。此度もすかさず刀をふりあげてはたときる。やうやく夜あけて、寺僧心もとなく思ひたづね來る。覚圓前夜の様子をかたるに、寺僧奇異の思ひをなし、急ぎ佛壇のかたはらをみるに、大きなる蜘蛛死してあり。ながさ二尺八寸ばかり、珠眼圓大にして爪に銀色あり、寺僧ます〳〵驚き、堂の傍にこれをほりうづめ塚をつきぬ。かつまた此山伏の行徳いちじるき事を感じて、しばらく此所にとゞめ、一通の祭文を書しめ、かの塚をまつり、ふたゝび妖怪なからん事を祝す。今にいたるまでその塚ありて、蜘蛛塚といふとかや。

○飯森が陰徳の報

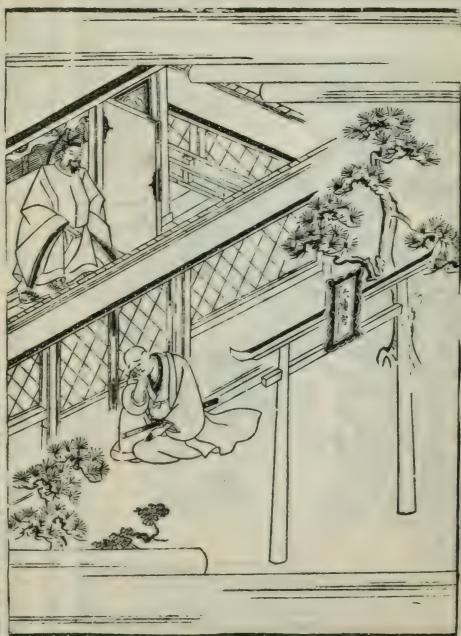
豊臣秀頼公の侍大将鈴木田隼人佐は、中西國の敵を押ゆる番船の下知を仰付られ、穢多が城に居住せらる。其家臣飯森兵助といふ人、盗賊奉行として二心なく、鈴木田に忠功をはげます。天性心すなほにして慈悲ふかく、其意貧して弱きをあはれみ、富て憍れるを制す。故に人自然と其裁斷に服して、欺くにしのびず。或時ひとり政所に臨で訴訟の事を判斷す。一人の囚人あり、その名を土井孫四郎といふ。罪狀まぎれなきによりて、面縛して誅伐せんとす。孫四郎ひそかに兵助にむかひて、我はもと不義をなせるものにあらず、名ある武士なり、智謀勇力よのつねならず、あはれ君よく我科を察して、命をたすけ再び故郷に歸し給へかし。しからばかならず君がために力を盡して、その厚恩を報ぜんといふ。兵助つら〳〵かれが面顔魂をみるに。凡人にあらず、詞色雄長にして臆せず、まことに豪傑の士なり。兵助心にこれをたすけんとおもひ、わざと作りて聞ぬ體して許さず。その夜更すぎ人しづまりて、ひそかに獄屋の役人をよびて、かの囚人をゆるし歸さしめ、すなはちその役人も亡失させて屋敷を出しぬ。翌日獄中囚人一人にげいでて、又役人もにげうせぬと披露す。鈴木田大におどろき、これしかしながら兵助が越度なりとてしばらく出仕をやめて閉居せしむ。その比徳川家康播州大坂に在陣し給ひ、蜂須賀阿波守に仰付られ、穢多が城を攻させらる。城中勝利を失ひて敗北す。兵助も馬にのり士卒を下知して、命を惜まずふせぎ戦ふといへども、天軍無勢にしてかなはず、つひに城を攻落され、鈴木田やう〳〵一方を切抜、萬死をいでゝ一生を全し、秀頼公の館に歸參しぬ。それより兵助旅客牢浪の身となり、あなたこなた漂泊せしが、後には

糧盡嚢空して、困窮賓にはなはだし。辛吟とさまよひて播州の地に至る。或大なる在郷にゆきかゝり、その郷の代官職の人の姓名をきけば、土井孫四郎といふ。我むかし放しやりたる囚人の姓名と同じ、兵助ふしぎにおもひて、その屋敷をたづねて案内乞。孫四郎大きにおどろき、急にはしり出て迎ふ。よくみればうたがふべくもなきむかし放しやりたる囚人なり。むかしの事共語り出つゝ、まことに命の親なり。ひごろなつかしくおもひしに、よくこそ尋來給へとて拜謝奔走し、すなはち別に座敷をきよめてすゑ置、晝夜酒宴を催し、相ともに寢臥して歡をきはむ。凡そ十日あまりに及ぶといへども、つひに我居宅にかへらず。ある夜孫四郎その居宅にかへれり。兵助折ふし厠に行けり。此厠と孫四郎居宅と、たゞ壁ひとへを隔てぬ。しづかに事の樣をきけば、孫四郎妻の聲として、君此間ことのほかにもてなし給ふ客は誰人ぞや。此十日あまり晝夜つきそひてかへり給はず、いぶかしといふ。孫四郎こたへて、むかしあの客の大恩をうけて、危き命をたすかり、今かゝる榮花をきはむるも、これひとへにあの客の陰徳によれり何をもつて此大恩を報ぜん樣をしらずといふ。妻のいふ、君はおろかなる事をのたまふものかな。それ人の一生盛衰浮沈、古今めづらしからず。時を得ては人を制し、運窮りては身を屈す、なんぞ今更過去しむかしの事をかへりみん。諺にも大恩は報ぜずといへり。かつ君むかし難にあひ、囚れにかゝり給へる事誰知もの

なし。しかるに今かゝるふるまひし給ひ、もし他人にもれきこえなば、かさねての恥辱なるべし。はやく時機にしたがひて、いかにも思慮し給へといふ。孫四郎返答もせざりしが、やゝ久しくありてげにもなんぢがいふところ尤なり。我智謀をもつてよきにはからはん。かならず色をさとらるゝ事なかれといひて止ぬ。兵助聞すまして、大きにおそれおのゝき、衣服荷物悉くすて置直にその家をはしり出て、馬をかり鞭をはやめて逃去、その夜の初更の比までに、十里あまりを過て攝州堺に到る。ある旅店に宿をかりぬ。その體はなはだあはたゞし。兵助が僕これ何故ともしらずあやしみ問ふ。兵助しばらく座を定め胸をさすりて、具に孫四郎がたちまち大恩を忘て、かへりて野心をさしはさむ次第を語り、ためいきをついて憤激す。僕これを聞て涙をながし、その陰徳を感ずるあひだ、忽ち旅店の床の下より、痩枯たる男一人刀を抜持て出あらはる。兵助膽を消して驚く、この男のいはく、我は軍中忍びの達者にて、しかも仁義の侍なり。さきの孫四郎我をたのみて君が頭をとらしむ。しかれどもふしぎに今の物がたりを聞て、かの孫四郎が放逸無慚なる事を知り、君はまことに智仁兼備の君子なり。あやういかなあやまつて殺さんとす。我義において君を捨じ、君しばらく寐入事なかれ。すこしのあひだに君がために、かの孫四郎が頭をとりてかへり、君が鬱憤を散ぜしめんといふ。兵助恐懼して、よきにはからひ給れといふ。此男刀を手に提げ門を出るとみえし、屋をつたひ高塀を超えて、そのはやき事飛がごとし。既に夜半にいたり立かへりて、敵の首を打おほせぬとよばはる。火をとぼしてよくみれば、すなはち孫四郎が首なり。その男すぐに暇乞て歸り去る。その跡たちまちみえず。それより兵助は諸國抖擻して、後には都にのぼりて兵衛の師範となりて、その身を終りしといふ。

○五條の天神

京都五條西洞院の西に、五條の天神ましませり。これ大己貴の命をまつれるなり。むかし命、少彦名命と天下の政務を議り給ひ、かつ人民疫癘疾苦のために、その療養の方をさだむ。その天下後世に仁惠ある事、神農黄帝の下にあらずとかや。故に代々の執權奉行職の人、殊に尊信し給ふといふ。應永年中此わたりに壽玄脩とて醫師ありけり。わかきより學窗に眼をさらし、黄帝岐伯の玄旨を探り、秦越人の深意をたづぬといへども、いまだその堂奥に達せず。かつ身の不遇なる事を歎きぬ。すなはちこの天神にいのりて、信仰のこゝろおこたらず、歳時にはかならず祭りて敬ふ事、年すでに久しくなりぬ。ある夜夢見らく、朝とく宿を出て天神の祉にまうで、恭敬の頭をかたぶくる所に、厚く天神社壇の戸びらをおし

ひらき、まのあたり壽玄𦨞に告てのたまはく、なんぢわれをいのり其誠をつくす、何んぞ感應なからんや。なんぢ今身の不遇にして困窮をなげく、しかれどもこれすなはち却てなんぢを福する所なり。それ日本は神國也。天子はすなはち天照太神の繼體にして、その統道をあらためず。かるがゆゑに神道を尊崇し、王法を興隆し仁政を施し、朝憲を正うすべし。嚮昔王法神道に合する世には、世すなほに民淳して國家安寧なり。風雨時にしたがひて、飢饉餓死の愁なし。況や謀反弑逆のわざはひをや。後世にいたりて、元暦に安徳天皇、承久に後鳥羽院、元弘に後醍醐天皇、これみな君徳あきらかならず、叡慮はなはだ短して、天下を我敵のために奪はれ、宸襟つひに安からず、或は變衰の花空しく壇浦の風にまよひ、悲泣の月いたづらに台嶺の雲に隱る。いかんぞ王者十善の徳をもつて此極に至るや。これ神道の本をわすれて、政道人望にそむけば也。こゝにおいて王法はじめて衰へて、神道も亦廢しぬ。又かなしからずや。しかつしよりこのかた今の世にいたりて、人道ます〳〵みだれ、子として父を弑し、臣として君をうかゞふ。上道のはかるなく、下忠義のこゝろをうしなふ。人君國守としては、仁義に暗く慈悲の心なく、賦斂重く課役しげうして、國民を貪とり家人を剝盡して、畢竟我身の樂とす。收斂無道の富に誇り、亂諸不次の賞をたのむ。能もなく智略もあさく、行跡非禮不義にして、善惡邪正をえらばず、阿諂者を賞翫し、忠孝

なる者をかへつて罪科に行ふ。たま／＼武藝學問に志有人も、利祿名聞のためにして、忠良のこゝろざし露ばかりもなし。凡武藝學問は、みな聖經賢傳の旨をあきらめて、我忠功を遂すそのみ。何ぞ名利を事とせんや。あまつさへ切磋琢磨の功ををへずして、新法小利にはしり、先賢の古術をすてて、もつぱら奇兵詭譎を先とし、また正兵の極致ある事をしらず。又終日聖賢の書をよむといへども、行跡かへつて直ならず。仁義のこゝろなく、學問をもつて利慾にかへ、君に諂ひ友を妬み、素より誠なければ、利を見て義を忘れ、大慾無道にして、一生遊興に長じ、富貴榮花をうらやみ、衣類美麗を好む。かくのごとく君下を貪りとりて、その身の榮耀をきはめ、臣又上に佞媚して、一家の奢侈をつくす。凡その費る所の財寶貨用、天よりも降らず地よりもいでず。これみな人民の膏澤をしぼりとり收斂したる所なれば、ゆく／＼天下ふたゝびみだれて人民益窮し、四夷八蠻たがひに國をあらそひ、大なるは小を并呑し、強きは弱きをしのぎ、盜竊爭鬪區にして、又そのあひだに飢饉疫癘流行て、天下手足を措に處なからんとす。なんち今かゝる時節に生れたり。なんちしひて身の不遇を歎きて、一且の利祿を僥倖すといふとも、久しく保つ事あたはずして、却て災あらんとす。しかし貧に安じ跡を藏んには、かつなんちに一つの靈方を敎ん。水上の浮萍よく疫癘を愈す功能あり。多くもとめ貯へて、其時を待べしと、今の世のありさま將來の事變、鑑

にかけてわたまふとおもへば、夢はさめて夜はほの〴〵とあけにける。壽玄齋感心膽に銘じ、盥嗽盛服して急ぎ天神に詣ずれば、夢の面影あり〳〵と、社壇の戸びらすこしひらけ、異香四方に薫郁たり。それより壽玄齋世のなり行ありさまをみるに、夢中の告にたがはず、永享の年に及て、京都鎌倉確執の事おこり、鎌倉持氏朝臣京都將軍に恨る事ありて謀反す。京都度々大軍を起し、討手にさし向らる。持氏父子敗績して自害す。これより諸方戰爭おこりてしづかならず。國家衰廢天運否塞して、大に疫癘流行て人民おほく死亡せり。壽玄齋かの天神の告を思いで、試に浮萍を調和してあたふるに大かたいえずといふことなし。人みなその神効に服して、これ正に醫王善逝の變作なりとて、おそれつゝしむ事よのつねならず。其後今川上總介が父の疫病を愈しければ、上總介なゝめならずよろこび、俸祿過分に與へて招き、つひにわが國に供なひ下りて、身終るまで尊敬しけると也。

○鼠の妖怪

應仁年中、京師四條の邊に、德田の某とて巨きなる商人あり。家富榮えて貨財倉庫に盈り。其比世大に亂れ戰爭やむ時なく、ことに山名細川兩家、權をあらそひ野心を起し、度々戰ひに及びしかば、洛中これがために喚動し、人みなおそれまどひ、たゞ薄氷を蹈んで深淵にのぞむおもひをなす。德田某もこれによりて、都の住居物うくおもひ、北山と賀茂のわたりに親屬のありけれ

ば、ひそかに頼つかはし、すなはち賀茂の在所の傍に、常磐の古御所のありけるを買もとめ、山莊となして、しばらく此所に隱遁せんとす。しかれども久しく人も住ぬ古屋敷なれば、いたく荒はて、軒かたぶき牆くづれて、凡幾年經たる屋敷ともしれず。徳田まづあらましに掃除打して徒移しぬ。京にある親屬つたへ聞て、みな來りて賀儀をのぶ。主人よろこびて、賓客を堂上に請じて饗應し、終日酒宴を催し、歌舞沈醉してあそび、夜に入ければ、賓主共に大に醉出て、前後もしらず打臥しぬ。その夜夜半ばかりに、外より大勢人の來る音して、急に表の門をたゝく、主人あやしみ門をひらきみれば、衣冠正しく裝うるはしき人、先立て入ていふやう、是は此屋敷の舊の主也。我一人の子あり、こよひはじめて新婦を迎へ侍り、その婚禮の儀式を執行はんとするに、わが今住所はせばくきたなし。たゞ今夜ばかり此屋敷をかし給へ、夜あけなば早早立去りなんと、いまだいひもはてぬに、はや大勢入こみて、輿よ馬よとひしめき、挑灯大小百あまり二行につらね、まづさきへ飾り立たる輿、打續て乘物かず〳〵かき入る。その跡よりは供の女房いくら共なく笑ひのゝしりて來る。又年のほど六十有餘の老人、大小の刀を帶て馬にのり、歩行の侍六七十人引連て、前後をかたく守護すと見ゆ。その間に結構に塗りみがきたる長持挾箱、屛風衣桁貝桶のたぐひ、かずかぎりなく持つれ。貴賤男女凡二三百人、堂上堂下に並居て大に酒宴を催し、珍膳奇羞山海

のある所を盡し、かつまひかつらたうて興に入るまゝに、主人や賓客を招き出しかゝる目出度折から、何かくるしかるべき、こゝへ出てあそび給へといへば、主人も賓客も酔に和し興に乗じ座敷にいづ、まづその新婦とおぼしきを見るに、年まだ十四五ばかりとみゆ。すこしほそらかに色しろくまたたぐひなき美人なり。次第に並居る女房たち、いづれも艶なるかほかたち花のごとくに出立て、みな一同に立さわぎ、新婦の手をとりたわぶれて、こよひはいかで強ざらんと、大なる盃をすゝむれば、新婦いとたへがたきけしきにて、あなたこなたにげかくるゝを、おひとらへんとさわぐまに、風はげしくふきおちて、燈のこらずふきけしぬ。主人賓客はつとおどろき、しばしして又火をとぼしみるに、人一人もなし。やう／＼夜もあけてよく／＼見れば、宵にことごと敷物はこびたる道具とおもひしは一つもなく、却て主人の日比秘藏しける茶の

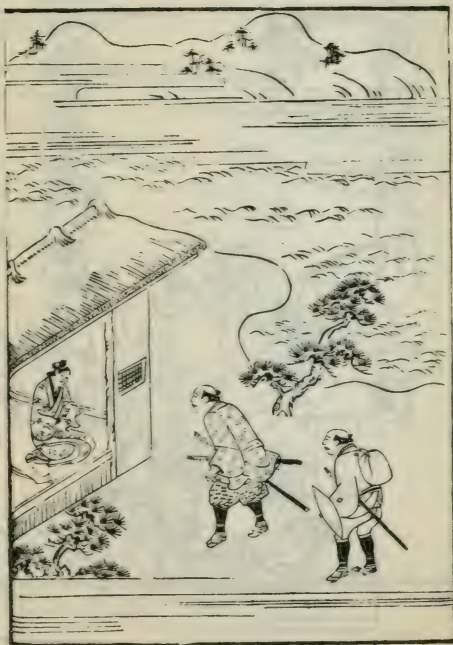
湯の道具より、碗家具雜器にいたるまで、みなこと〴〵く引ちらし、くひさきかみちらし、そこなひやぶらさるものなし。そのうち床にかけおきたるふるきかけ物、牡丹花下に猫のねぶれる所かきたる繪あり。名きえ印かすみて、誰人の筆ともしれず。これ一幅斗ぞ露ばかりも損ぜずありける。みな人よからぬ怪異なりとて眉をひそむ。こゝに村井澄玄とて博學治聞の老儒あり。主人に向ひいふやう、これふかくおそるゝに足ず。老鼠のいたす妖怪なり。それ猫は鼠のおそるゝ所なり。かるがゆゑにその繪とい

へども、あへて近づかざる事かくのごとし。かゝる例傳記に載るところすくなからず。是其氣自然と相いれずして畏服す。所謂物其天を畏るといふものなり。その類一二を擧てこれをしめさん。われかつて或古記をみるに、むかし或里の中一つの村に、童子大きなる蛙數十、汚池叢棘の下にあつまるを見る。進んで是を捕んとす。熟視れば一つの巨蛇棘の下に蟠りて、恣に群蛙を啖ふ。群る蛙凝りかたまりて、啖はるゝを待てあへて動かず。又或村の叟、蜈蚣一つの蛇を逐ふをみる。行事はなはだ急かなり。蜈蚣漸く近けば蛇また動かず、口を張て待つ。蜈蚣竟にその腹に入り、時を遂て出づ。蛇既に斃れぬ。村の叟其蛇を深山の中に棄つ。十日あまり過て、往てこれをみれば、小き蜈蚣數知らず、その腐たる肉を食ふ。これ蜈蚣卵を蛇の腹の中に產けるなり。又むかし一つの蜘蛛、蜈蚣を逐ふ事甚急なるを見る。蜈蚣逃れて籬槍竹の中に入る。蜘蛛復入らず。但足をもつて竹の上に跨り、腹を搖かす事あまた度して去る。蜈蚣を伺ふに久しく出ず。竹を剖てみれば、蜈蚣已に節々爛斷て黨醬のごとし。これ蜘蛛腹を動かす時、溺を灑て是を殺せるならん。物の其天を畏るゝ事かくのごとし。今鼠の猫の繪をおそるゝやまた同じ。豈久しくその妖怪を恣にする事を得んやと、かさねて主人に敎へて、其鼠の穴を狩らしむ。屋敷より一町ばかり東の方に、石のおほくかさなりて小高き所あり、その下に大きなる穴あり、その中に年經たる鼠かぎりなくむらがれり。みな捕へ殺してすぐに埋ぬ。其後は何の事もなかりけるとぞ。

○死後の烈女

福島角左衞門は、生國播州姬路の者なり。久しくみやづかへもせずして居たりしが、其比太閤秀吉の內福島左衞門の大夫とは、すこし舊好あるゆゑに、これをたのみしかるべきとりたてにもあひ、奉公せばやとおもひ、故鄕を出て都におもむく。明石兵庫の浦を過て尼ケ崎に出て、やう〳〵津の國高槻のほとりに至りぬれば、しきりにのんどかわきぬ。路のかたはらをみるにちいさき人家あり。その家たゞ女房一人あり。そのかほかたちのうつくしさ、またかゝる邊鄙にはあるべきともおもはれず。窻のあかりに向うて襁を縫ふ。角左衞門立よりて湯水をこふ。女房やすきほどの事なりと、隣の家にはしり行て茶をもらうてあたへぬ。角左衞門しばし立やすらひ、その家の中を見めぐらすに、厨やかまどの類もなし。角左衞門あやしみて、いかに火を燒事はしたまはずやと問ふ。女房家まづしく身をとろへて、飯を炊きてみづから養ふ事かなはず、あたり近き人家にやとはれてその日を送る。まことにかなしき世わたりにて侍ると語るうちにも、襁を縫ふそのけしきはなはだ忙しく、いとまなき體と見ゆ。角左衞

門その貧困辛苦の體をみて、かぎりなくあはれにおぼえ、またそのかほかたちの優にやさしきにみとれて、やゝ傍により手をとりて、かゝる艶なる身をもちて、この邊鄙にまづしく送り給ふこそ遺恨なれ。我にしたがひて都にのぼり給へかし。よきにはからひたてまつらんと、すこしその心を挑みける。女房けしからずふりはなちていらへもせず。やゝありて、われにはさだまれる夫侍り、名を藤内とて布をあきなふ人なり。交易のために他國へいづ、わが身はここにとゞまりて家をまもり、つゝしんで舅姑に孝行をつくし、みづから女の職事をつとめて、まづしき中にも、いかにもして朝暮の養をいたし、飢寒におよばさらん事を謀る。今已に十年に及べり。さいはひ明日わが夫かへり來る。はやとく立さり給へといへば、角左衛門大きにその貞烈を感じ悔媿て、僕に持せたる破篭やうの物をひらき、餅果もの取出し、女房にあたへ去りぬ。

その夜は山崎に宿しけるが、あくる朝かの女房の所に、所要の事かきたる文とりおとしけるゆゑ、跡へもどりける所に、道にて葬禮にあへり。いかなる人にやとたづぬれば、布商人藤内を送るといふ。角左衛門大いにおどろきあやしみて、その葬禮にしたがひて墓所にいたれば、すなはち昨日女房にあひし所なり。今みれば家もなく跡もうせて、たゞ草蕭々たる野原なり。その地をほり葬る所をみれば、藤内が女房の棺あり。棺のうちにあたらしき襦一襲、餅果ものありのまゝ見ゆ。又そのかたはらに古き塚二

つあり。これを問へばすなはちその舅姑の塚なりと、その年數を問へば、十年に及ぶといふ。角左衛門感激にたへず、送りし者に右のあらましを語り、鳥目などくばりあたへて、ともに送葬の儀式を資け、かつ跡のとぶらひの事まで念比にはからひて、その後都へのぼりける。あゝこの女房死すといへども婦道をわすれず、舅姑に孝行をつくして夫をまつ、いはんやその生る時は知りぬべし。かの世の寡婦室女、いやしくもその夫をわすれて再嫁し、或は邪僻姪亂にして、終に媿る心なきもの多し。この女房の風儀をきかば、すこしく戒る所あらんか。

狗波利子巻之七終

元祿五年壬申正月吉日

京東洞院夷川上町

林　九兵衛

同梓

同堀河通高辻上町

伏見屋藤右衛門

有繪

怪談全書

怪談全書巻目録

一之巻

○袁氏　○蚍蜉

○聶隱娘　○張遵言

四之卷

○郭元振　○侯元

○賴省幹　○玉眞娘子

○陰摩羅鬼　○金鳳釵

五之卷

○三娘子　○薛昭

○巴西侯

怪談全書目錄終

林道春

望帝　前書已有之不及再書

鼈令ト云フモノ荊國ノ人ナリ。死シテ其屍ナガレテ江水ニウカビ、又人トナリテ、蜀ノ國ヘユク。蜀ノ王望帝ニマミユ。直人ニアラザレバ望帝、位ヲユヅリテ、鼈令ヲ宰相トシテ、ヤガテ王トシテ、望帝ノガレユク。死後ニ化シテ鳥トナル。其名ヲ杜宇トシ、又杜鵑ト號ス。杜鵑、子ヲウムトキ諸鳥ミナソノ子ヲカフ。是ハムカシ蜀ノ王ノ魂ナリトテ、ウヤマヒアハレム故ナリ。或ハ杜鵑、己ガ卵ヲ諸鳥ノ巣ノ内ニ入レテ、カハシムトモ云ヘリ。蜀王本記ト云フ文ニミエタリ。倭歌ニ鸎ノカヒコノ中ノホト、ギストヨメルモ、コノ事ニヤ。

詰汾

柘跋詰汾ハ、北方ノエビスナリ。山澤ヘ出テ狩ヲスル時、天ヨリ一ツノ車ノ下ルヲ見レバ、ミメヨキ女アリ。ミヅカラ天女也ト云ヒテ、詰汾トアウテカタル。翌日天女云ヒケルハ「我ハ天命ヲウケテキタレリ。明年一メグリノ時、再會スベシ」トテ、相別レテユク。詰汾約束ノゴトク、又サキノ所ヘ行イテカリス。彼天女アマクダリテ、一人ノ男子ヲアタヘテ「是君ノ子ナリ。子孫代々帝王トナルベシ」ト云ヒヲハリテ去ル。其行方ヲシラズ、此男子、ツヒニ王トナリテ、神元皇帝ト號ス。故ニ世ニイヒ傳ヘケルハ「詰汾皇帝ニハ、シウトナシ。神元皇帝ニハ母方ナシ」ト口ズサメリ。古今メヅラシキコトナリ。此神元皇帝ヲ魏ノ王ノハジメトス。天下ヲ二ツニワケテ江南ヲ南朝トシ、江北ヲ北朝トス。北朝ノハジメハ北魏ナリ。北魏代々王トナリテ十二代ツヾキ、百五十年ノ間、國ヲタモテリ。後魏書ニモ北史ニモアリ

王忳

後漢ノ王忳ト云フ人、或時ニ京ヘノボリケル路次ノ旅宿、人ナキ所ニトマリケルガ、一人病ニ臥セル者アルヲ見テ甚ダアハレミケレバ、病人ノ云フヤウハ「ワガ命、片時ノ間ナリ。腰ニ若干ノ金アリ。與フベシ。ヨキヤウニトリ

オキ給ヘ」トアリシカバ、王恂、イヨイヨアハレト思フ。彼病人死ス。王恂其金ヲワケテヨク葬リ、相殘レル金ヲ棺ノ下ニヲサメテオク。コレヲシル人ナシ。王恂、後ニ亭ノ長トナリテ行クトキニ、タチマチ馬一匹ハセ來ツテ、亭ノ中ニ入ル。其日大風吹イテ一ツノ繡被ヲオトス。王恂アヤシミテ其所ノ守護ニ申ス。守護コレヲ王恂ニアタフ。其馬ニノリテ京ヘ到ル。其宿ノ主人見テ「コノ馬、イヅクヨリ來ルヤ」ト問ヒケレバ、王恂、馬并ニ繡被ノコトヲ告ゲ、クハシク彼病人ノコトヲカタリケレバ、主人コレヲキキテ「コレ奇特ノ事ナリ。君陰徳アリテ、カヽル事アル也。カノ病人ハ我子金彦ト云フモノナリ。我シラズシテ恩ヲムクヒズ。天ヨリ君ガ陰徳ヲアラハスナリ」ト云フ。王恂コレニヨリテ名ヲアゲ官位ニノボル。後漢書ニアリ

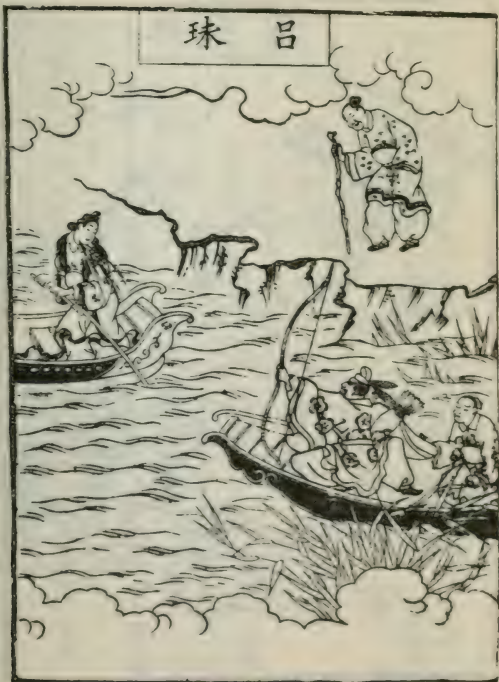
伍子胥 此亦有前書不可再書也

伍子胥ハ呉王夫差ノ臣也。呉越合戰アリテ越王ヲイケドル。越王ノ臣范蠡、サマ〴〵ノ謀ヲメグラシケレバ、呉王ツヒニ越王ヲユルス。伍子胥諫ムレドモキカズ。越王本國ニ歸リ、西施ト云フ美女ヲスヽム。呉王是ヲ愛シテ政ニオコタレバ、伍子胥又イサム。呉王キカズシテ、イヨ〳〵マドヒテ醉ヘルガ如シ。伍子胥シキリニイサム。呉王イカリテ伍子胥ヲ殺シ、鴟夷ト云フ皮ブクロニ入レテ水ニシヅム。其靈果シテ水神トナル。其シヅメラルヽ處ハ錢塘ト云フ江ニテ、毎年八月、大イナル潮ノサス所ナリ。其時、伍子胥形ヲアラハシ白馬素車ニノリテ、水上ニウカビ出ヅ。コレヲ見ルモノ、皆オドロカスト云フコトナシ。伍子胥出ヅレバ潮甚ダ急ニ、ナミタカウシテ、堤ヲヤブリ、岸ヲクヅスヿ多シ。コレニヨリテ、伍子胥ヲ英烈君ト號ケテ祭ルナリ。其岸ノ上ニ廟ヲ立ツ。伍子胥死シテ後、越ヨリ終ニ呉ヲホロボス。呉越春秋井ニ方輿勝覽ニミエタリ

淳于棼

唐ノ淳于棼ガ家ノ南ニフルキ槐樹アリ。棼其木ノ本ニテ、友人ト酒ヲ飲ンデ醉伏ス。友人ツレテ家ニ歸ル。棼夢ニミルヤウハ、黑キ衣キタル使者兩人來リテ「槐安國王ノ使者也。ムカヘタテマツルタメニ來ル」ト云フ。棼車ニノリ使者ト同道シ槐樹ノ本ニイタリ、穴ノ中ニ入ル。大イナル城アリ。其門ニ大槐安國ト云フ額ヲカケリ。一人ノ奏者出テ、「駙馬遠來」ト云フ。駙馬ト

ハ王ノ婿トナルベキ者ヲ指シテ云フ詞ナリ。即チ棼ヲ引イテ殿上ニ入ル。主人ノ王トオボシクテ、白衣アカキ冠ヲキタル人、一人出デテマミユ。棼コレヲ禮拜ス。王ノ曰ク「我娘瑤芳ヲ君ニアタフベシ」トテ、數十人ノ女、音樂ヲ奏シ火ヲトモシ、棼ヲ導イテ金翠ヲカザレル障子ヲ重々開キ、一所ニイタル。一人ノ女アリ。金枝公主ト名ヅク。其形天人ノゴトシ。金枝公主ハ即チ瑤芳ガコトナリ。禮ヲナシ契ヲムスブコト日久シ。アルトキ王ノ曰ク「我國ノ南柯郡政ヨカラズ。君ヲ其所ノ太守トナスベシ」即チ官人ニ命ジ、金玉錦ヲ出シ供奉ヲツクロヒ車馬ヲトヽノヘ、瑤芳ヲソヘテ同道セシム。其母モイデテ餞シ送ル。瑤芳ヲイマシメテ曰ク「淳于棼、氣ツヨウシテ酒ヲコノム。汝其夫婦タリ。ヨクヤハラカニシタガヒ、ツカヘヨ」ト云フ。既ニイヒヲヘテ、南柯郡ニイタル。人々出テ迎フ。棼政ヨキニヨリテ郡中治レリ。其間二十年ニ及ベリ。王コレヲヨミシテ棼ニ官位ヲ授ク。五男二女ヲウメリ。榮華ナラビナシ。此時瑤芳病死ス。棼悲ミテ是ヲ盤龍岡ニ葬ルトキニ、王モ夫人モ臣下ヲ召シツレ路次ノ

行儀ヲ引キツクロヒテ來ツテ是ヲ弔フ。棼旣ニ王ノ婿ト成リ威勢甚ダ盛ンナリ。此時俄ニ人ノ申ス「仔細アリテ、王棼ヲ故鄕ヘカヘスベシ。親類ニ對面シカルベシ。生メルトコロノ男女ハ、我孫ノコトナレバ、心安カルベシ」ト云ツテ、二人ノ使者ヲ指添ヘ、棼ヲ送リテ本ノ穴ヨリ出ヅ。夢サメテ見レバ童子帚ヲ持チテ庭ヲハキ、友人客人ハ榻ニ坐セリ。日イマダ暮レズ。棼客人トオナジク彼ノ槐樹ノ本ヲ尋ネ見レバ、一ツノ穴アリ。其内ヒロク、ホガラカニシテ人ノ出入スベキホドナリ。其上ニ槐多シ。城廓ノ形、宮殿ノ體ニ似タリ。蟻多クアル事數ヲシラズ。其內ニ白キ羽赤キ頭ノ大蟻アリ。卽チ槐安國王ナリ。又一ツノ穴ヲ通ツテ南ヘ指シタル枝ノ方ニ蟻多シ。卽チ南柯郡ナリ。又一ツノ穴ワダカマリテ龍蛇ノ形ノ如シ。高サ一尺バカリノ塊アリ。卽チ盤龍岡ナリ。棼アヤシク思ヒテ急ニソノ穴ヲフサガシム。其夜、風雨俄ニオコル。夜アケテコレヲ見レバ蟻ミナウセテ行方ヲシラズ。

陳翰ガ大槐宮記ニ見エタリ

呂球

呂球ト云フ人ハ東平ト云フ所ノ人ナリ。富人ニテ貌ウルハシ。船ニノリテ曲阿湖ニ到ル。風ニ値ウテ行クコトアタハズ。船ヲマコモノ間ニトヾム。一人ノワカキ女、船ニノリ來テ菱ヲトルヲ見ルニ皆荷葉ヲ衣トス。呂球問ウテ「汝ハ人ニアラズヤ。何ユヱニ荷葉ヲキル」ト云フ時ニ女オソル、色アリ。答ヘテ「古人荷葉ヲサシテ裳トスル事ヲ、君ハシラズヤ」ト云ヒテ、船ヲ廻ラシ棹ヲサシ去ラントス。呂球イソギ弓ヲ引キ矢ヲハナッテコレヲ射殺ス。即チ一ツノ獺ナリ。其船ハミナ浮萍ヲアツメテ船ノ形ニツクレリ。扨又ムカヒノ岸ニ一人ノ老女アリ。呂球ガ船ノスグルヲ見テ問ヒケルハ「君サキニ湖中ニテ菱ヲトル女ヲ見ズヤ」ト云フ。呂球「ソノ女ハヤガテ我ガアトニアリ」ト云ヒテ又矢ヲハナッテ老女ヲ射ル。即チ古キ獺也。呂球コノ二ツノ獺ヲ得テ船ヨリアガル。其所ノ人、皆申シケルハ「此邊ニ菱ヲトル女アリ。其貌人ニスグレタル故ニ、ヨリ〳〵來ツテ人トチギリヲムスブ事多シ。今其獺ノ化ケタル事ヲ知ル」ト云フ。幽冥録ニ見エタリ

偃王

徐國ノ王ノ宮女、懷姙シテ卵ヲ生メリ。コレヲアヤシミ不吉ナリトシテ、水邊ニスツ。一人ノ老母アリ。其家ニ犬アリ、犬ノ名ヲ鵠倉ト云フ。水邊ニ出テ彼卵ヲクハヘ來ツテ、老母ニ示ス。老母奇特ノコトナリト思ヒテ、アタ、メケレバ卵ヒライテ小兒アリ。マサシク偃セリ。骨ナクシテ、ウツブセルユヱニ偃ト名ヅク。徐國ノ君コレヲ聞イテ、コレヲ呼ンデソダテ養フ。成人シテ智慧アリ。慈悲ノ心アリ。徐國ノ君位ヲ讓リテ政ヲ行ハシム。即チ偃王ト名ヅク。鵠倉病死セントスル時、俄ニ角ハエテ九ノ尾アリ。元來龍ノ化シテ犬トナリタルナラン。偃王是ヲ埋ミヲサム。後ノ世ニ狗龍ト號スト云ヘリ。事文類聚ニ載セタリ。偃王ハ周ノ穆王ノ時ニ當ツテ亂ヲ發シケレバ穆王兵ヲツカハシテコレヲ亡ス

韋叔堅

桂陽ノ大守韋叔堅年若キ時イマダ官位ニノボラズ。家ニ犬アリ。人ノ如ク立チテユク。家人見テ「凶事ナリ。コロサン」ト云フ。叔堅「コノ犬メヅラシ。人ノマネヲスルコト凶事ニアラズ」ト云フ。其後、叔堅冠ヲヌギテ榻ノ上ニカク。犬コレヲ戴イテ走ル。人ミナオドロキ「コロサン」ト云フ。叔堅キイテ「犬アヤマリテ冠ニフレアタル。何ノ咎カアラン」ト云フ。又アルトキ犬

カマドノ前ニテ火ヲタクマネヲス。人イヨ〱アヤシム。叔堅見テ「我家ノ人、イマ田ニイデテ耕作ス。犬其人ノ隙ナキヲ見、火ヲタクナリ」ト云ヒテ、毎度アヤシマズ。カヽルトコロニ、犬ホドナク自ラ死ス。ツヒニタヽリナシ。叔堅果シテ高位ニノボル。風俗通ト云フ文ニ見エタリ。古人ノ詞ニ「怪ヲ見テアヤシマザレバ、其怪オノヅカラ止ム」ト云ヘリ。ゲニサモアルベシ。

馬頭娘

蜀ノ國ノムカシ蠶叢ト云フ王アリ。五帝ノ内ノ少昊ノ時ニ當ツテ、蜀ノ國ニ女アリ。其氏ヲ知ラズ。其父人ノタメニトラヘラル。其家ニ馬アリ。女其父ヲ思ヒ悲ミ、モノクハズ。其母コレヲウレヘテ諸人ニ誓ヒケルハ「父ヲ得テ歸ラン者ニハ、コノ女ヲアタヘテ妻トセシメン」ト云フ。彼馬コノ事ヲキイテフルヒ躍リ、縄ヲ引キキリ馳セテイヅ。日ヲヘテ父ノ所ヲ尋ネテ到リケレバ、父卽チ馬ニノリテ復ル。コノ馬イナヽイテ物ヲクハズ。母前ノ誓ヲ以テ父ニカタル。父是ヲ聞イテ「人ニ誓ヒテ馬ニ誓ハズ。如何ゾ、人ヲ畜類ニアハスルコトアランヤ。縦令我苦ヲスクフ功アリト

モ、誓言ハタテガタシ」ト云フ。馬ハナハダアガキクルフ。父怒ツテコレヲ射殺ス。其皮ヲハイデ庭ニハリツク。俄ニ風吹キテ其皮ムクレアガリテ、彼女ヲ巻イテ、何方ヘユクトモ知ラズ飛去ル。十日許過ギテ、皮マタトビ來ツテ桑ノ木ノ上ニトヾマル。其女化シテ蠶トナリテ、桑ノ葉ヲ食ヒ絲ヲ吐キイダス。絲ヲ以テ絹ヲオルコトノ始ナリ。或トキコノ女、其馬ニ乘リ雲ヲ凌イデ天ニノボル。相從フ男女數十人アリ。父母ヲカヘリミテ「我身義理ヲ忘レザルニヨリテ、天ヨリ命ジテ天人トナス。必ズ心安ムベシ。重ネテ天降リテ什邡綿竹徳陽三所ニスムベシ」ト云フ。是ヨリ毎年蠶ヲイノル者四方ヨリ群聚ス。其後所々ニ此女ノ像ヲ造リ、馬ノ皮衣セテ馬頭娘ト名ヅク。蜀ノ圖經ニ見エタリ

韓朋

韓朋ガ妻ミメヨシ。康王コレヲ奪ヒトル。韓朋大ニ恨ムトキイテ、王コレヲトラヘテイマシム。韓朋イヨ〳〵怒ツテ自害ス。彼妻、ヒソカニ己ガ衣裳ノモロキヤウニ調ヘテ、王ニ従ヒ高キ臺ニノボリ、忽チ身ヲナグ。諸人驚イテ

衣ヲ引イテアゲントスレバ、衣チギレテ臺ノ下ニオチテ死ス。其帶ヲトリ見レバ、我屍ヲ韓朋ト一所ニ埋メラレンコトヲ願フト書附ケタリ。王甚ダイカリテ別ニ穴ヲホリテ埋ム。夫婦ノ墳二ツ相望メリ。幾程ナキニ、梓木二ツノ墳ノ上ニ生ジ、根ハ下ニ交リ枝ハ上ニ連ル。連理ノ木ト申スベシ。又鴛鴦アリテソノ木ニ飛入リ、朝暮常ニナキカナシム。時ノ人コノ鳥ハ韓朋夫婦ガ魂魄ノ化シタルナリト云ヘリ。（搜神記ニ見エタリ 韓朋又ハ韓憑トモ號ス）

元緒

呉王孫權ガ時ニ永康ト云フ所ノ人、山ニ入リテ一ツノ大龜ヲ見テ、トラヘシバリテ持チテ歸ル。龜俄ニ人ノモノイフゴトクニテ「アシキ時ニ出合ヒテ、人ノタメニトラヘラル」ト云フ。諸人キイテコレヲ怪シム。コレヲ呉王ニタテマツラントテ船ニノセテ行クトキ、越里ト云フ所ニ止ル。船ヲ大イナル桑樹ノ本ニツナグ。其夜桑ノ精ノ聲アリテ、龜ノ名ヲ元緒ト呼ンデ「汝何故ニカクノゴトクナルヤ」ト問フ。龜答ヘテ「我トラヘツナガレテマサニ烹殺サレントス。然レドモ何程ノ山ノ薪ヲキリテニルトモ我ヲ殺スコトアタハジ」ト云フ。桑ノ曰ク「孫權ガ臣下ニ諸葛恪ト云フ人アリ。博學ニシテ物ヲヨク知ル。必ズ我ヲクルシムルコトナカレ」ト云フ。龜聞キテ「多言シテ若モレバ汝ガ身ニ災オヨバン」ト云フ。既ニシテ閑ニオトナシ。都ニイタリテ孫權ニ進上ル。孫權是ヲ大イナル鼎ニ入レテ煮サシム。多クノ薪ヲ燒イテニレドモ龜本ノゴトシ。諸葛恪ヲ呼ンデコレヲ問フ。諸葛恪「コレハ年久シキ桑ノ木ヲ薪トシテ烹殺スベシ」ト云フ。時ニ龜ヲタテマツル者、先ニ龜ト桑ト問答スルコトヲ言上ス。孫權卽チ彼桑ヲキリヨセ龜ヲ煮ルトキ、ヤガテタヾレテ煮殺サル。コレニ依リテ、龜ヲ煮ルニハ桑ノ薪ヲ用ヒ又龜ヲ名ヅケテ元緒ト云フナリ。（異苑ニ見エタリ）

歐陽紇

梁ノ武帝ノ大同年中ノ末ニ、歐陽紇ノ兵ヲ率キテ南方ヘ赴キ長樂ト云フ所ニ至リ、亂ヲ平ゲテ深ク險阻ニ入ル。紇ガ妻色白ウシテ顏ヨシ。其所ノ人ノ曰ク「君何ユヱニ美女ヲ携ヘテコヽニ到ルヤ。此地ニ鬼神アリ。必ズ美女ヲ盜ム。往來ノ人マヌカレガタシ。能クマモルベシ」ト云フ。紇キイテ疑シキナガラモ、夜ニ入ッテ兵ヲヨビテ家ヲトリマハシ、其女ヲ奧深クカクシテ下女

十餘人ヲナラベ番トス。其夜事ナシ。明夜ニ及ンデ、風吹キテ天クモリ夜半スギテシヅマル。守ル者クタビレテ假寐ス。忽チ物ニオソハル、如クニシテ、目サムレバ女既ニ見エズ。門戸ノ扃ハモトノ如クニシテ、出ヅル所ヲ知ル事ナシ。門外チカク深山ナレバ尋ヌベキヤウナシ。夜明ケテ後モ其跡ナシ。紇甚ダイタミ怒ツテ「女ヲ得ズハ帰ルベカラズ」ト誓ヒ、イツハリテ病アリト云ヒテ軍兵ヲトヾメ、毎日四方ヲ尋ネ嶺ヲ越エ溪ヲ傳ヒ、險シキヲ凌イデ是ヲモトム。月ヲ經テ百里バカリノ外ニテ、叢ノ上ニテ彼女ノ履一ツヲ得タリ。雨露ニヌレタリトイヘドモ履ノ形疑ヒナシ。紇彌カナシミ彌尋ヌ。健カナル兵三十人ヲエラビ、武具ヲ持セ糧ヲ負セ深山ニワケ入ル。十日餘アリテ、我家ノ外二百里計ト思シキ所ニテ、南ニ當ツテ一ツノ山アリ、高クシゲレリ。其下ニ溪水アリテ流廻ル。木ヲ編連ネテ巖竹ノ間ヲ渡ル時ニ、女ノ笑ヒモノ云フ聲ハルカニ聞ユ。苔ヲナデ葛引キテ上レバ、アヤシキ木、メヅラシキ花アリ。緑ノ苔盛リニ生ジテ青キコト毛氈ヲ敷クガ如シ。東ニ向ツテ石門アリ。女數十人ウツクシキ衣裳ヲキテ、遊ビ戯レ歌

ウタフ。人ヲ見テ驚ク氣色ナク、立チトドマリテ「何ユヱニ來ルヤ」ト云フ。紇ツブサニ其故ヲカタル。彼女互ニ相見テ嘆イテ「其婦人ハコヽニ來ツテ旣ニ三月過ギタリ。今病ニ臥シテ床ニアリ導イテ見セシメン」ト云ヒテ、其門ニ入ル。木ヲ以テトビラトス。其中廣ウシテ堂ノ如クナル所アリ。床ノ上ニ綿ヲシク。紇ガ妻ハ石ノ榻ノ上ニ伏セリ。ムシロヲ重ネ茵ヲ重ネ、サマ〳〵ノ食物充滿ツ。紇チカヅキ見ルトキ、妻一目ミテ手ヲ振ツテ「急ギノケ」ト云フ。其外ノ諸女申シケルハ「我ラ君ノ妻トコヽニアリ。其久シキモノハ十年ニ及ブモアリ。此鬼神ハヨク人ヲ殺ス。百人兵具ヲ帶シ來ルト云ヘドモ、制スルコトアタハジ。鬼神今他行セリ、其カヘラザル前ニハヤクノクベシ。モシ美酒二斛犬十疋麻數十斤アラバ、我ラ君ト相謀ツテ鬼神ヲ殺サン。重ネテ來ラン時ハ、晝ヨリ後ニイタルベシ。早クイタル事ナカレ。今ヨリ十日ヲ以テ日限トス」ト約束シ速ニカヘラシム。紇聞イテ急ギ退出ヅ。即チ酒ト犬ト麻トヲ得テ、約束ノゴトクニユク。先ノ諸婦人、ヒソカニ出テ語リケルハ「鬼神酒ヲ好ム。必ズ酔フトキハ、己ガチカラヲタメサントテ

五色ノ練ヲ以テ、手足ヲ床ニ結付ケシム。一度ニヲドレバ絹皆チギル。若三幅ヲ合セテ縛ルトキハトケガタシ。今絹ノ中へ麻ヲ入レ、縄トシテコレヲ縛ラバ、鬼神ノカニテモ解クベカラズ。彼ガ一身ミナ鐵ノゴトシ。只臍下五六寸常ニコレヲオホヒカクス。此所武具ヲ用ユベシ。」ト紇ニ云ヒ聞カス。又其側ノ一ツノ巖ヲ指シテ「是ハ鬼神ノ食物ヲヲサムル所ナリ。此トコロニカクレテ、鬼神ノカヘルヲ伺ヒ待ツベシ。酒ヲバ花ノ下ニ置キ、犬ヲバ林中ノ所所ニ置クベシ。時分ヲ待ツテ、マネカバ出デヨ」ト云フ。紇其教ノゴトク息ヲシヅメテ相マツ。申刻バカリニ練ノ如クナルモノ飛來ツテ、洞ノ裏ニ入ル。暫クアリテウルハシキ鬚アル男、長六尺餘リ、白キ絹ヲ衣、杖ヲツイテ數多ノ女ヲ引具シテイヅ。犬ヲ見テヲドリカカリテ、是ヲトラヘテヒキサキ食フ。飽クマデ食フトキニ諸女我サキニト酒ヲス丶ム。歡ビ戯ル丶コト甚ダシ。漸ク飲ムコト六七斗バカリニテ酔ヒケレバ、諸女其手ヲ引イテ洞ニ入ル。歡ビ笑フ聲洞ノ外ヘキコユ。ヤ丶アリテ、婦人出テ紇ヲ招ク。紇スナハチ具ヲ持チテ入ル。大ナル白猿ヲ見ル。其四足、床ニツナガレタリ。人ヲ見テ縄ヲトカントススレ𪜈、解クコトアタハズ。其眼ヒカリテ電ノ如シ。紇ガ兵競ヒカ丶リテコレヲ伐ツ。鐵石ニアタルガ如シ。戈ヲ以テ其臍ノ下ヲサス。双深ク入リテ血ノ出ル事流ル丶ガ如シ。卽チ大ニサケビ歎イテ云ク「天ノ我ヲコロセルナリ。豈汝ガ力ノ及ブトコロナランヤ。汝ガ妻既ニハラメリ。其子ヲ殺スコトナカレ。賢王ニ遇ウテ必ズ其家ヲ大イニセン」ト云ヒ畢ツテ死ス。紇其アル所ノ財物ヲ探リ求ムルニ、世間ニ希ナル物マデモアラズト云フ事ナシ。寶劒二振名香數斛アリ。盗ミトル所ノ女三十人ミナカホヨシ。總ジテ若キ女ツカマレテアル者、十年スギテ色衰フルトキハ行方ヲシラズ。コトニアヤシキ事ナリ。毎朝手アラヒ帽子ヲカブリ白キ衣ヲ著、白キ羅ヲウハオソヒニシ、寒ヲモ知ラズ。身ノ白毛ナガサ五六寸餘リアリ。又古文ノゴトクナル字ノ木札ヲヨム。何事ト云フヿヲ知ラズ。ヨミヲハリ石ノ上ニサシオク。又劒ヲ舞シ身ヲ振フコト電光ノ如ク、其影マロキヿ月ノ如シ。定レル食物ナシ。常ニ菓ヲ食ヒ尤モ犬ヲクラフ事ヲ好ム。ソノ血ヲ吸ウテコボサズ。午ノ時過ギテ他山へ飛行ク。半日ノ間ニ往來スルヿ數千里、晩ニオヨビテ必ズ歸ル。日々カクノゴトシ。求ムル所カナラズ得ズト云フヿナ

シ。一夕ニ數多ノ諸女ト通シ戯ルヽコト多シトイヘドモ、殘ラズ眠ルコトモナク、物云フコトモ懇ナリ。シカレドモ其形ハ大ナル猿也。此物既ニ千年ノ封命ニテ、今玆ニ死ナント云フヿヲカネテ知ルトナン。紇財物珍物諸女ヲトリテカヘル。其内ニ己ガ妻ナリト知ルモノアルニハ、コレヲカヘシアタフ。紇ガ妻明年子ヲウメリ。其形猿ニ似タリ。梁ノ世ホロブルトキニ、陳ノ武帝兵ヲ以テ紇ヲ殺ス。紇平生江總ト云フ人相伴フ。故ニ紇ガ子ヲカクシヤシナヒテ、難ニマヌカル。紇ガ子サガシクシテ、後ニ成人シ文字ヲ知リヨク物ヲカキテ其名ヲアラハス。（江總ガ白猿傳ニ載セタリ）

怪談全書卷之一終

怪談全書巻之二

李瑄

唐ノ元和年中ニ李瑄ト云フ者、永寧里ヨリ安化門外ニ到ル。其路次ニテ一ノ車ノ過グルヲ見ル。銀ヲ以テ飾リテ甚ダウルハシ。白牛ニカケタリ。相從フ女二人、白馬ニ乘リ白衣ヲ著テカホヨシ。李瑄人ノ子ナレバ法度ヲ知ラズ、相シタガヒ行ク。日暮レントスルトキニ騎馬ノ女申シケルハ「君イマ我等ヲ見ルヤ皆賤シウシテ醜シ。車ノ內ニアル人コソイトヨケレ」トイヒケレバ、李瑄「見ンヿヲ求メン」ト云フ。彼女馬ヲハヤメ車ニ近ヅキ、笑ツテ李瑄ヲカヘリ見テ云ク「我スデニ車ノ內ヘ申シキ。付イテ來リタマヘ」ト云フ。李瑄慕ヒユク。異香ノ芬々タルヲキク。日クレテ奉誠園ニ到ル。カノ女イヒケルハ「車ノ中ノ人、コノ東ニ栖居ス。君ハ暫クココニヤスラヒ玉ヘ。己ヤガテキタリ迎ハン」ト云フ。李瑄馬ヲ路次ニ留メテコレヲ待ツ。暫クアリテ、一人ノ女門ヲ出テコレヲ招ク。李瑄己ガ人馬ヲ安邑里ニ遣シテ宿セシム。夜ニ入ツテ年十五六許ノ女ミメヨキガ、白衣ヲ着テ出テマミユ。李瑄歡喜ノ餘リ止ツテ一宿ス。夜明ケテ出レバ、己ガ人馬キタリテ門外ニアルヲ見ル。卽チ暇乞シテ歸ル。李瑄家ニカヘリテ俄ニ腦痛ム。暫クノ間ニ益痛ム。辰巳ノ刻ノ間ニ至ツテ腦敗レサケテ死ス。家人アワテ驚イテ「昨夜宿セル所ハイヅクゾ」ト問ヘバ、供奉ノ人具ニ云ヒケルハ「李瑄ハ異香ヲキクト申サレケレドモ、我ラガ鼻ニハ腥キ匂ハナハダシカリキ」ト云フ。家人イソギ人ヲ相具シ昨夜ノ處ヘ行キテ見レバ、枯レタル槐樹ノ中ニ大蛇蟠リタル跡アリ。其樹ヲキリテホリウガテバ大蛇ハヤニゲテ見エズ。數多ノ白キ小蛇アリケルヲ皆打殺ス。又李瓚ト云フ人、蛇ノ化シテ女トナリテタブラカシケル時ハ、家ニ歸ツテ病ニ臥シ、モノ云フウチニ、衾ノ內、ソノ身冷ニキエウスルトキ、人其衾ヲカヽゲテ見レバ水タマリテ、李瓚ガ頭バカリキエ殘リケルトナン。說淵ニ見エタリ

歙客

歙客潛山ヲ行過グルトキ、蛇ノ腹腫レフクレテ、草ノ內ヲハヒモコロヨフ。一ツノ草ヲ得テコレヲ咬ミワリテ、腹

ノ下ニ敷イテスリケレバ、脹滿イエテ常ノ如シ。虵走リサル。客ノ心ニ此草ハ脹滿腫毒ヲ消スル藥ナリト思ヒトリテ、箱ノ中ニ入レオク。一夜旅宿スルトキ隣ノ家ニ旅人アリテ病痛ム聲キコユ。客ユイテコレヲ問ヘバ「腹ハリテ痛ム」ト云フ。卽チカノ藥ヲ煎ジ一盃ノマシム。暫クアリテ苦痛ノ聲ナシ。ヤマヒイエタリト思ヘリ。曉ニ及ンデ水ノ滴ルコエアリ。病人ノ名ヲ呼ベドモ答ヘズ。火ヲ燒シテコレヲ見レバ、其人ノ血肉皆トケテ水トナリ、骨バカリ殘リテ床ニアリ。客オドロキアワテ、未明ニ走リ行ク。夜明ケテ亭主コレヲ見テ其故ヲ知ルコトナシ。其ノコル所ノ藥入レタル釜ミナ黃金トナル。不思議ノコトナリ。潜ニ彼人ノ骨ヲ埋ム。年ヲ經テ敎ヲオコナハレケレバ、彼客歸リ來ッテ此事ヲ語ルユヱニ、世人傳ヘキケリ。春渚記聞ニ見エタリ

彼虵ハ小兒ヲ飲ンデ腹フクレタルナルベシ。此草ハ人ヲケスクスリナルベシ。本草綱目ニ海芉ト云フ草ヲ練リテ黃金ニ作ルト云ヘリ。其草ノ事ニヤ。

張守一

張守一大理トナル。大理ハ訟ヲ聞キ罪科ヲ定ムル官ナリ。守一慈悲アリテ死罪ニ行フベキ者ヲ云ヒコトワリ、ユルシ放ス者オホシ。或トキ白髮ノ翁アリ。

來ッテ守一ヲ拜シテ云ク「己ハ生ケル人ニアラズ。大理ノアハレミニヨリテ、死罪ヲユルサレタル者ノ父ナリ。其恩ヲ報ズベキ樣ナシ。若シノゾミ求ムルコトアラバ是ヲカナヘン」ト云フ。此時天子勅アリテ脯ヲ諸人ニ賜ハルコトアリ。其所ノ男女多ク出テ見物ス。守一ソノ中ノ美女ヲ見テ、コレヲ得ント思ヘドモ便ナシ。前ノ翁ヲ呼ンデ「如何スベキ」ト問フ。翁「コレハ安キ事ナリ。然レドモ參會フコト七日ノ間過グベカラズ」ト云フ。卽チ閑ナル所ヲエラビ幕ヲハリ帳ヲ設ク。軈テ彼女キタル。驚イテ「コヽハ何レノ所ゾ」ト云フ。守一ト翁ト其側ニアリ。女ヲ欺イテ「此所ハ天上ノ淨キ所ナリ」ト答フ。ヤガテ守一ト相通ジ悅ビ交ルコト甚ダシ。七日ニ至ッテ翁キタリテ其目ヲ掩ウテ送リカヘス。守一潛ニカノ女ノ家ヲ伺ハシムレバ、其家人言サク「我家ノ女子病ナク頓死シテ、人ヲ見知ラザルコト七日アリテ蘇ル」ト云フ。彼翁ハ幽靈ナリ。此女ニトリツキケルナルベシ。異聞錄ニアリ

姚生

唐ノ姚生ト云フ人、御史ノ官ヲヤメテ蒲邑ト云フ所ニ居ル。子一人甥二人アリ。壯年マデ愚ナリケレバ、教フレドモアラタメズ。條山ノ陽ニ庵ヲ結ビテ三人ヲツカハシ、世間ノ交ヲトヾメテ學問セシム。姚生戒メテ「一年ニ三度ソノ藝ノスヽムヲタメシ見ン。若シ學問スヽマズンバ杖ニテ打ツベシ。必ズオコタルナ」ト云フ。三人山ニ入リ、其二人ハ書ヲ見ルコトナシ。只イタヅラニ日ヲオクル。數月アリテ其一人申サク「試ミラレン時イタレリ。如何」ト云ヘドモ、二人承引セズ。アル夜燈ヲトモシ書ヲヨム。時ニ其裘ノスソヲ引クモノアリ。襟スデニタルレバ引ク者アリ。カヘリミレバ、チヒサキ豚ナリ。其形白ウシテ玉ノ如シ。壓書界方ヲ以テコレヲ打ツ。壓書界方ハブンチンノ事ナリ。豚オドロキ走ル。三人トモニ火ヲタテ尋ヌルニ堂內戶ザシケレド豚ノユク處ミエズ。明日騎馬ノ人來ッテ門ヲタヽキ、箠ヲハサミ入ッテ三人ニ向ッテ云ヒケルハ「夫人ノ使者ナリ。昨夜我小兒、アヤマリテ君ノ衣ニ入ル。イトハヅカシ。君ニウタレケレドモ其疵ハヤイエタリ。氣ヅカヒスルコトナカレ」三人族謬ス。訝リ思フ處ニ、又カノ小兒ヲ抱來リ乳母カシヅキノ者數人キタル。其衣裳ヨクウルハシ。夫人傳語アリ。「小兒恙ナシ。故ニコレヲミセシム」ト。眉ヨリ鼻ニ至ルマデ赤絲ヒキタルガ如シ。界方ノ廉ノアタレル

跡ナリ。三人イヨ〱恐ル。使者乳母コレヲ慰メントテ詞ヲヤハラグ。暫クアリテ夫人自ラ來ルト云フ。三人退キニゲントスル時、奴僕幷ニ紫衣ノ者數十人バカリ至ル。屛風シトネ蓆、カヾヤクバカリナルヲ持來ツテ、異香サカンナリ。一ノ車ノ幕ヒキ青キ牛ニカケタル飛來ル。騎馬數百前後ニ相シタガヒ、門ニ至ツテ車ヨリ下レリ。卽チ夫人ナリ。三人再拜ス。夫人ニコヤカニ笑ツテ「小兒不慮ニ來ツテウタルレ𪜈苦シカラズ。其恐アラント思フ故ニ、我來ツテ慰ム」ト云フ。夫人年三十餘形シヅ〱トシテ神妙ナリ。何人ト云フコトヲ知ラズ。「三人皆妻アリヤ」ト問フ。「皆イマダ娶ラズ」ト答フ。夫人キイテ「我三女子アリ。生レツキ惡シカラズ。三人ニアハセン」ト云フ。三子再拜ス。夫人卽チ三子ノタメニ家ヲ二ツ作ル。程ナク結構シ成就ス。明日カノ三女車ニ乘來ル。供奉ノ奇麗目ヲ驚カシ、ヒカリカヾヤキ香氣芬々タリ。三ツノ車ヨリオル。皆年十七八、夫人コレヲ引イテ堂ニノボセ、又三子ヲ呼ンデ婚禮ヲナス。酒肴菓子種々多シ。世間ニアル類ニアラズ。此夕三子三女トモニ夫婦トナル。夫人コヽニオイテ三子ニ云ヘラク「人ノ寶トスル處ハ命ナリ。願フ所ハ富貴ナリ。此事百日モラサズハ、三子ヲ長命ナラ

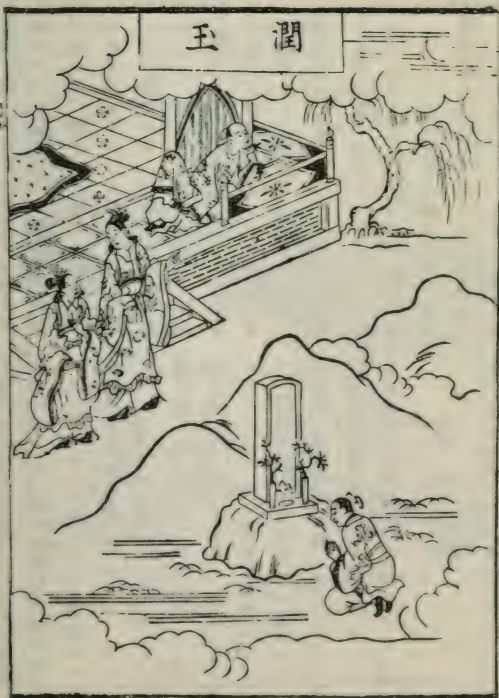
姚生

シメ高位ヲキハメシメン」三子拜謝ス。「但コノ婚禮ニヨリテ學問スタレバ、姚生ガ杖ニアタランヿヲ愁フ」ト云フ。夫人キイテ「三子心ヤスカルベシ。學ニスヽマンヿカタカラズ」ト云ヒテ、文宣王ト大公望トヲ招請ヒ文武ノ道ヲナラハシム。三子ヤガテ學業ノボリテ心サガシクナリ、又タマシヒサワヤカニ開ケテ諸事クラカラズ。天下ノ大臣トモ大將トモナルベキ才智アリ。カヽル所ニ姚生ガ使者粮ヲ贈ル。其體ヲ見テ大ニ驚キ、ハシリ歸ル。姚生ソノ故ヲ問フトキ、使者具ニ三子ノ屋宅華麗ノ形、相シタガフ人々多キ事ヲカタル。姚生キイテ「是タヾゴトニアラズ。必ズ山中バケ物ノ迷ハセルナラン」ト云ヒテ、急ギ三子ヲ呼ブ。三子ユカントスル時夫人コレヲ戒メテ「必ズイフ事ナカレ。縦ヒ姚生杖ニテ打ツモ愼ツテモ、モラスナ」ト云フ。既ニシテ三子到ル。姚生ソノサガシクナリタルト見テ、「汝ラ山ニアリテ物ノ怪ニツキタルナラン。何ナル鬼神ナルヤ」ト問フ。三子不レ答。マタ問ヘドモ云ハズ。頻ニナジレドモ不レ語。ツヒニ杖ヲ以テイクラモ知ラズコレヲ抔ツ。三子苦痛ニタヘカネテ、具ニ始終ヲモラス。姚生宅ニ三子ヲトラヘオク。姚生ガ家ニ一人ノ老儒アリ。姚生コレヲ呼ンデ告グ。其人オドロキテ「大ナル奇事ナリ。君何ゾ三子ヲハタランヤ。三子コノ事ヲモラサズハ、大臣將相トナリテ人臣ノ位ヲキハムベシ。今既ニモラセリ。命ナル哉」ト云フ。姚生「何ユヱゾ」ト問フ。時ニ「我コノ比、織女婺女須女ノ三ノ星ヲ見ルニミナ光ナシ。是三ノ星人間ニ下リテ三子ニ福ヲ與ヘントス。然ルニ三子今コノ天機ヲモラセリ。三子僅ニ禍ヲマヌカレナバ幸ナリ」。其夜老儒姚生ト共ニ三星ヲ見ルニ光ナシ。姚生卽チ三子ヲユルシテ遣ハス。三子山ニ歸ツテ三女ニアフ。三女ハジメヨリ少シモ見知ラザルサマナリ。夫人コレヲ責メテ「三子何ユヱニ我言ヲ用ヒズシテ、人ニカタリモラセルヤ。三子ト永ク別ル」ト云ヒテ、一盃ノ湯ヲ飲マシム。三子コレヲ飲ンデ愚ニ暗クナルコト本ノ如シ。一ツモオボエ知ルコトナシ。先ノ儒者又姚生ニ語ツテ「三星猶人間ニアリ。此地ニ遠カラズ」ト云フ。又潜ニ其親類ニカタリケルハ「此三星今河東ノ張嘉貞ガ家ニアタレリ」ト云フ。ソノ家終ニ三世將相タリ。説淵ニアリ

潤玉

梁ノ世ニ吳興ノ沈警ト云フ人アリ。ヨク詩ヲ作ツテウタフ。人皆ウヤマフ。梁ノ世亡ビテ周ノ代トナリテ官位ニ昇

リ、秦瀧ト云フ處ヘユク。道ニ張女郎ノ廟アリ。張氏ノムスメ死シテ其靈ヲ祭ル處ナリ。旅人多ク酒肴ヲソナフ。沈警ハ水ヲタムク。日スデニクレテ旅宿ニアリ。月ヲ見テ歌ウタフ時、簾外ニコレヲホムル聲アリ。誰ト怪シム所ニ二人ノ女スダレヲアゲテ入ッテ、「張女郎ガ妹ノ使ナリ」ト云フ。警、謝セントスルニ、ハヤ女二人來ッテ、「遠路ノ旅イカン」ト勞フ。警「我旅宿ノサビシサニ聊詠吟シテ慰メリ。不思議ニ女郎ノ來臨セントハ」二女相トモニ笑フ。大女申サク「我ハ張女郎ガ妹ナリ。廬山ノ男子ノ妻ナリ。小女ハ衡山府君ノヨメナリ。我妹ナリ。今來ッテ張女郎ヲトブラフ。偶他行セリ。山中カスカニシテ閑ナル夜ナリ。我家ヘキタレ」ト云ヒテ、警ガ手ヲ取リテ門ヲ出、同車シテ行ク。車ヲ引ク馬、ハヤキコト飛ブガ如シ。ハナヤカナル家ニ至ル。警一ツノ水門ニトヾマル。吹キクル風ノ匂サカンナリ。其アタリノ粧ヒ金玉ヲ以テカザリセリ。暫クシテ大女郎小女郎共ニ羊ノ車ニノリテ、水閣ノウシロヨリキタル。

潤玉

酒肴ヲソナヘテ警ヲモテナシ管絃ヲナス。尋常ノ音曲ニアラズ。又琴ヲヒキ歌ウタフ。大女トナフレバ小女モウタフ。警モ亦助レ音ヲ音樂漸クヲハルトキ警屢小女ヲ目ガレセズシテ「潤玉思

フベシ」ト云フ。潤玉ハ小女ノ名ナリ。大女コレヲキイテ「履モチキタレ」ト呼ベバ、人履ヲ取リテ出ヅ。門ヲイヅルトキ、大女云ヒケルハ「潤玉沈警ト同ジクイネヨ」ト云フ。警大ニ悦ンデ内ニ入ル。オモト人ハヤ臥具ヲ設ク。二人ノ歡甚ダ深シ。私語半ナル時オモト人進ンデ申サク「月ニ妬ノ色アリ。織女ニタノモシゲナシ。天河アケナントス。時イクソバクゾヤ。物語ヲヤメテシヅマリ玉ヘ」ト云フ。警ト小女郎ト共ニ臥ス。イト眠シ。夜アケントスル時、小女オキテ警ト共ニタテバ、大女既ニ門ニ立ツ。警卽チ小女ヲ抱イテカヘス。纔テ別ヲ告ゲテ互ニ涙ヲ流ス。警指環ヲ小女ニ贈ル。小女金縷結ヲ警ニ返報ス。大女瑤ノ鏡ヲ警ニオクル。其相トモニ贈答スル詩多シ。二女警ト門ヲ出テ、車ニノリテ張女郎ノ廟ニ至ツテ、互ニ手ヲ把ツテ啼イテ別ル。警スナハチ館ニ歸ツテ懷中ヲサグレバ、瑤鏡金縷結アリ。警コノ事ヲ主人ニカタル。聞クモノ皆アヤシム。其後再ビ廟中ニ至ツテ、神座ノウシロニテ碧牋ヲ得タリ。小女郎ノ沈警ヘヨセタル書ナリトナン。說淵ニ見エタリ 太平廣記ニモアリ

中山ノ狼

晉ノ大夫趙簡子中山ニ獵ス。鳥獸ヲ得

ルコト多シ。一ツノ狼アリ。人ノ如ク立チテ嗁ク。簡子箭ヲ放ッテコレヲ射ル。狼其矢ニアタリナガラ走ッテニグ。簡子怒ッテコレヲ逐フ。風塵クラク吹イテ人馬ヲワキマヘザレバ、狼ノアル所ヲシラズ。時ニ東郭先生驢馬ニノリ、書ヲ嚢ニ入レテ路次ニテユキ逢フ。狼人ノゴトク物云ヒテ「東郭先生我ヲタスケヨ。急ギ其嚢ノ裏ニ入ラン」ト云フ。先生書物ヲ取出シ、狼ヲ嚢ノ裏ニ入ル。頸ヲシバメ尾ヲマゲ四足ヲツヾメテコレヲカクス。獵人ノオヒ來ルモノ其近シ。先生嚢ノ口ヲクヽリ、驢ヲ引イテ路ノ邊ニノク。簡子狼ヲ尋ネ來リテ、先生ニ向ッテ「汝狼ノアル所ヲ知ルベシ。申サズンバ汝ヲキラン」ト云フ。先生平伏シテ「知ラズ」ト答フ。簡子車ヲメグラシテ歸ル。漸ク程遠クナリケレバ狼イヒケルハ「早ク嚢ノウチヨリ出ベシ。縛ラレタル繩ヲ解クベシ、矢ヲ拔クベシ。」先生嚢ヲ開イテ狼ヲ出ス。イカリホエテ云ヒケルハ「先生我ヲタスクトイヘドモ、我甚ダウエタリ。先生ノ身ヲ惜マズ。我ニクハレテ我命ヲ救フベシ。若シカラズハ、獵人ニ殺サレンモ、飢エテ死ナンモ同ジ事ナリ」トテ、口ヲ開キ爪ヲ振ッテ先生ニ向フ。先生アワテヽ手ヲ擧ゲテコレヲ禦グ。驢馬ノ後ニノキテ退ク。狼コレヲ禦グ。互ニ草伏レテ息ツギアヘリ。先生心ニ思フヤウハ、日モシ晩レバ狼ノ同類來リテ、我ヲクラハンコト疑ナシ。コヽニオイテ狼ヲ欺キテ「凡人ハ老人ニ逢ウテ疑ヲ決ス。我ヲクラハンコト理非如何カ問ハン」ト云フ。狼歡ンデ同道シユク。狼ウエテ舌ヲ出シ、早ク先生ヲクラハントテ、路次ノ老木ヲ指シテ、「トヘ」ト云フ。先生「コレハ無智ノ草木也。問フモ益ナカルベシ」狼シキリニ「トハバ必ズ答ヘン」ト云フ。先生コレニ問フ。老樹コエアリテ云ク、「狼汝ヲクラフベシ。我ハ是杏ナリ。主人一ツノサネヲ植エテ、生ジテ三年實ヲ生ズ。ソレヨリ主人家人マデニ我實ヲクラフ。又我實ヲ賣リテ利潤ヲ得タリ。今大木トナル。主人我枝ヲキリテ薪トシ、又我ヲ斬ッテ材木トセントス。主人我ヲ植エタル恩アレドモ我ヲキリソコナフ怨アリ。然ラバ先生狼ニ恩アレドモ、狼マタ先生ニノゾム所アラン」ト云フ。狼聞イテヲドリカヽリテ先生ヲクハントス。先生「コレハ草木ナリ。人ノ老イタル者ニ問ハン。急ニクラハレンヤ」ト云ッテ、又同道シ行ク。狼一ツノ牛ヲ見テ「コレニ問ヘ」ト云フ。先生「コレハ畜類ナリ。タトヒ問フトモ益ナカラン」ト云フ。狼シキリニスヽム。先生マタ事ノ子細

ヲノベテコレヲ問フ。老牛答ヘケルハ「狼汝ヲ喰フベシ。如何トナレバ我ガ少キ時力ツヨシ。主人我ヲ愛シテヨク養フ。耕作スルトキ力ヲ出ス。又我ニ車ヲカケ、重キ物ヲ積ンデ引カシム。一年中ノ衣食我ニヨリテ調ヘ、年貢課役ワレニヨリテ償ス。今我ガ老イタルヲ見テ野外ニスツ。骨ヤセテ石ノ如ク、涙イデテ露ノゴトク、涎タレテ拭ヒガタシ。皮毛ハゲテ疵イマダイエズ。主人其妻ト相謀ツテ、我肉ヲバ脯ニスベシ。皮ヲバ滑ニスベシ。骨角ヲバ切磋キテ器ニスベシ。ヤガテ屠ルベシト聞ユ。然ラバ我主人ニ功アレドモ、主人却ツテ我ヲ殺サントス。先生狼ニ恩アリトモ、狼先生ヲ食フベシ」狼聞イテ又進ンデ先生ヲ食ハントス。先生「何トテアワテタルヤ。只イマ老人白髪ニテ杖ヲツキ來ルアリ。コレヲ問ハン」ト云フ。卽チ進ンデ跪キテ此事ノ始終ヲ語ル。其上草木ニ問ヒ老牛ニ問フ事ヲモ申ス。老人コレヲ聞イテ杖ヲ以テ狼ノ脛ヲ扣キ「汝アヤマテリ。人ノ恩ヲ受ケテソムクハ惡事ナリ。速ニ退クベシ。退カズンバ汝ヲ打殺サン」ト云フ。狼色ヲ變ジテ云ク「老人ソノ始終ヲ知リタマハズ。先生ハジメ我ヲ助クルトキニ、我足ヲ嚢ノ裏ニオシコメテ息ヲ出スコト不レ能。マタ詞ナガクタリコト云ヒテ趙簡子ト問答シ、我ヲ譏ルコト久シク時刻ヲウツス。其心ハ我ヲ嚢ノ裏ニ殺シテ我ヲ市ニ賣ラントスルナリ。然ラバ先生ヲ食フベシ」老人コレヲ聞イテ、先生ニ向ヒテ「カクノゴトクンバ、狼ノ云フトコロイハレナキニアラズ。互ニ問答シテ勝タント云フ事不審也。其フクロニ入ルトキノ形、苦シカリキヤ見ント思フ。今再ビ嚢ニ入レ」ト云フ。狼ウナヅキテ「入ラン」ト云フ。先生嚢ニコレヲ入レテ縛ルコト始ノ如シ。老人咡イテ云ク「匕首アリヤ」先生「コレアリ」ト云ヒテ匕首ヲ出ス。老人先生ニ目ヲ成シテ狼ヲ刺サシム。先生猶豫シテ刺スコト能ハズ。老人大ニ笑ツテ、「コノ狼恩ヲ背キ汝ヲ食ハントス。然ルヲコレヲ殺シカヌルハ慈悲ナリト云ヘドモ、大ナル愚ナリ」ト云ヒテ、手ヲ擧ゲ、先生ト共ニ刄ヲトリテ、狼ヲ刺殺シ、路ノ上ニステヽ去ル。匕首ハ劍ノ名ナリ。説海ニアリ

魚服

唐ノ乾元二年ニ、薛偉ト云フ人病ニ伏シテ七日、忽チ息タエテ死セルガ如シ。頻リニ呼ベドモ答ヘズ。心胸スコシ溫ナレバコレヲ葬ルニ忍ビズ。人皆トリマハシテコレヲ守ル。二十日過ギテ生キテオキアガル。其守ル人ニ向ツテ、

「我目ヲマハスコト、幾バクノ日ゾ」「廿日ニナリヌ」ト答フ。マタ問フ「各此間鯉魚ヲ殺スヤ。其鯉魚ハ卽チ我ナリ」ト云フ。諸人驚キテ其子細ヲ問フ。薛偉答ヘケルハ「我病氣ノ時熱氣甚ダシウシテ耐ヘガタシ。涼シカランヿヲ求メ、杖ヲ銜イテ行ク。既ニ出テ快キヿ籠中ヨリ鳥ノ出タルガ如シ。漸ク山ニ入ル。草伏レテ水邊ニ到ル。水ノ清キヲ愛シテ水ニ入ツテオヨギ遊ブ。側ニ一ツノ魚アリ。相共ニ水ヲ泳グ。暫クアリテ人ノ形ナル者、鯨ニ乘ッテ出來ル。相シタガフ魚多シ。『河伯ノ使者ナリ』ト云ヒテ我ト同ジクアソビ戯ル。此時我身ヲ見レバヒレウロコ生ジテ既ニ魚ノ如シ。諸方ノ名所ノ江湖アマネク行カズト云フ所ナシ。我ヲ名ヅケテ東潭ノ赤鯉ト號ス。俄ニ飢エテ物ヲハマンヿヲ思フ。時ニ趙幹ガ鈎ノ餌香シカリケレバ、コレヲハマントス。然レドモ我ハ人ナリ。カリソメニ魚トナリタリ。鈎ヲノムベカラズト思ヒテ、ステヽ行ク。又荐ニ飢エタリ。我ハ官人ナリ、縱鈎ヲ呑ムモ、趙幹何ゾ我ヲ殺サンヤト思ヒテ餌ヲハム。趙幹我ヲ引キアグ。我荐ニ聲ヲアグレモ、趙幹キクコトナク、縄ヲ以テ我腮ヲ繋イデ、岸ノ上ノ蘆ノ間ニカケタリ。コノ時張弼キタリテ申サク『裴少府大魚ヲ求ム』ト。蘆間ニ大魚アルヲ見テ携ヘユク。門ニ入レバ圍碁スルヲ見テ、呼ベドモ答フル者ナシ。只長大ノ魚キタルト云フヲ聞ク。ソレヨリ階ニノボレバ鄒滂雷濟二人ハ博奕ウチ遊ブ。裴察ハ桃ヲ食フ。皆大魚到來スト喜ブ。ヤガテ厨ヘ遣シ鱠ニセヨト云フ時、王士良庖丁ヲ持來ッテ我ヲ俎板ノ上ニ置ク。我又サケンデ云ク『王士良ハ我ガ庖丁人也。何ユヱニ我ヲ殺スヤ』ト云ヘモ、士良敢テ聞カズ、我頸ヲキリ落ス。時我スナハチ甦ル」ト云フ。諸人是ヲ聞クニ大ニ驚キ、嘆ゼズト云フ事ナシ。趙幹ガ鈎リタルモ張弼ガ來ツテ魚ヲトルモ、裴少府ガ求メタルモ鄒滂雷濟ガ博奕シタルモ、裴察ガ桃ヲ食ヒタルモ王士良ガ庖丁セルモ、皆同日ニアリシ事ナリ。是ニヨリテ時ノ人キク者皆是ヲ怪シム。コレヨリ鄒滂雷濟裴察三人ハ、身ヲ終ルマデ鱠ヲ食マズ。薛偉病平愈シテ後、ツカヘテ華陽ノ丞相トナル。説海ニ見エタリ

人化シテ魚トナリタルヲ魚服ト云フナリ。

怪談全書巻之二終

怪談全書卷之三

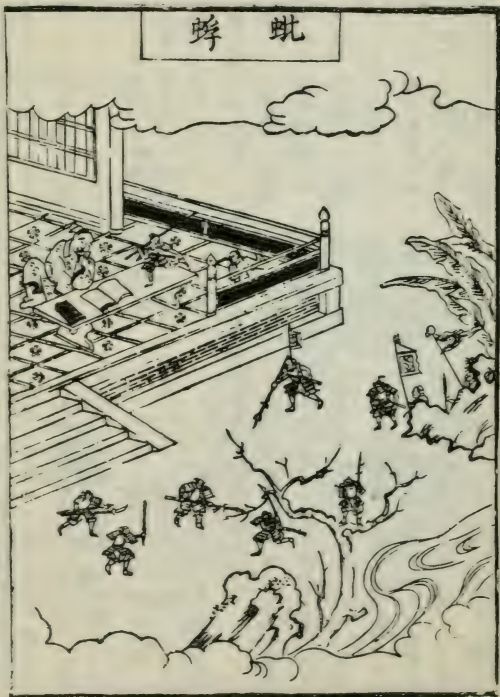
袁氏

唐ノ代宗ノ廣德年中ニ孫恪ト云フ人、洛中ノ魏王池ノ邊ニ遊ブ。一ツノ大ナル家アリ。路人「コレハ袁氏ト云フ女ノ家ナリ」孫恪ユイテ問フニ答フル者ナシ。側ニ簾カケタル小キ房アリ。恪入ッテ伺フ。忽チ一女ノ戸ヲ開キ出ルヲ見ル。甚姣シ。恪主人ノ娘ナリト思ヒテコレヲ伺フ　時簾ヲ挑ゲテ恪ヲ見テ驚イテ内ニ入リ、青衣ヲ著タル女ワラハヲ出シテ「何故ニコヽニ來ルヤ」ト云フ。恪「路次ヲ過グルトテ不慮ニ來テ惑ヒヌ。是ヲ謝セヨ」ト云フ。青衣入ッテ告グ。女子出テマミユ。恪ソノカホヨキヲ見テ青衣ニ語リテ「誰ソ」ト問フ。「袁長官ガ女ナリ」ト答フ。「未ダ人ニ嫁セズ」ト答フ。暫クアリテ又出テマミユ。彌姣シ。女童ヲ出シテ茶菓ヲスヽム。「恪ハコレ旅人ナリ。暫ク休息スベシ。求ムル所アラバ青衣ニ告ゲヨ」ト云フ。恪喜ブ。恪本ヨリ妻ナシ。卽チ青衣ヲ媒トシテ袁氏ヲ妻トス。恪本ヨリ貧シ。袁氏ガ寶ヲ多ク得テ、車馬衣服カヾヤク許ナリ。其朋友是ヲ疑フ。恪終ニカタラズ。三四年マデ洛中ニ留ル。恪ガ親類張閑雲ト云フ者恪ト對面ス。一夜一所ニアリ。張閑雲ツラ〳〵見テ潛ニ云ヒケルハ「恪顏色ヨカラズ。物ノ怪ツキタルヤ」ト云フ。恪答ヘテ「何事ナシ」ト云フ。閑雲申サク「人ハ陰陽ヲウケ魂魄ヲ納ム。陰陽衰ヘ魂魄戰フトキハ其色忽チ外ニアラハル。イト淺猿シ」ト云フ。恪驚イテ袁氏ヲ娶ル事ヲ告グ。閑雲聞イテ「此事ナルベシ。速ニハカラヘ」ト云フ。恪答ヘケルハ「袁氏今親類ナシ。又サカシウシテ能アリ。既ニ其恩ヲ受ケタリ。如何ゾハカラハン」ト云フ。閑雲怒ッテ「邪氣ノ恩何ゾ受クベケンヤ。我ニ寶劍アリ。物ノケ是必ズ滅ス。ソノ驗イチジルシ。是ヲ以テ示サバ彼邪鬼カナラズ滅セン」ト云フ。恪其劍ヲ携ヘテ室内ニカクス。袁氏早クサトリテ、怒ッテ云ヒケルハ「汝ガ貧シカリシヲ我貨ヲ與ヘ既ニ夫婦トナル。今恩ヲ思ハズ義ヲ知ラズ。畜類ト云フベシ」恪恐レテ赤面シ「是我本意ニアラズ。張閑雲ガ敎ヘタルナリ。願ハクハ誓ッテ

二心アラジ」ト云ヒテ涙ヲ流スコト雨ノ如シ。袁氏ソノ劒ヲトリ出シテコレヲ打折ル。モロキコト蓮藕ヲクジクガ如シ。恪イヨ〳〵恐レテニゲハシラントス。袁氏笑ツテ恪ヲトヾメテ「訝ルコトナカレ。我既ニ君ニ従ツテ同居コト數年ヲ經タリ。心安カルベシ」ト云フ。其後、出テ閑雲ニ逢ウテ「我虎ノ口ヲ免レタリ」ト云フ。閑雲「ソノ劒ハ何クニカアルヤ」ト問ヘバ、恪具ニ其故ヲ語ル。閑雲仰天シテ「我ガ知ル所ニアラズ」ト云ウテ恐レテ二タビキタラズ。十餘年ヲ經テ袁氏子二人アリ、ヨク家ヲ治ム。其後恪長安ニ行イテ仕ヘテ官ニ至ル。袁氏ト相共ニ赴ク。瑞州ニ到ルトキニ袁氏申シケルハ「此アタリノ江ノ畔ニ決山寺アリ。其寺ノ僧ト相別レタルコト數十年、此度カノ寺ニ行カン」ト云フ。恪即チ齊蕗ヲ供ヘテ寺ニ入ル。袁氏悦ンデ二人ノ子ヲ携ヘ老僧ノ房ニ行ク。導ク者ナケレモ能ク案内ヲ知ルガゴトシ。袁氏碧玉環ヲ以テ彼僧ニ授ケテ「是ハ院中ノ舊物ナリ」ト云フ。僧コレヲ悟ス。飲齋スグル時、數十ノ猿臂ヲツラネテ松ニ下リ、啼キサケンデ苔ヲモミテ躍ル。袁氏哀メル色アリ。筆ヲトリ詩ヲ作ツテ壁ニ記シ了リ、筆ヲ抛ゲテ二人ノ子ヲナデテサメ〳〵ト啼キ、恪ニ向ヒテ「是ヨリ永ク別ル」ト云ヒテ、其著タル衣ヲ引裂キ化シテ老猿トナリ、飛ンデ木ニ躍ツテ去ル。山ノ高キ所ニ至ツテ又跡ヲカヘリミル。恪驚キ嘆イテ魂ヲ失フガ如シ。暫クアリテ二人ノ子ヲ抱イテ嘆キ哀ム。コヽニオイテ老僧ニ問フ。老僧昔思出シテ申シケルハ「愚僧沙彌タリシ時コノ猿ヲ養フ。玄宗開元年中ニ勅使高力士此寺ニ來リ、猿ノサガシキヲ愛シテ絹ヲ以テ猿ニカヘテ行ク。都ニ歸リ玄宗ニタテマツル。玄宗コレヲ上陽宮ニカヒナツケシム。安祿山ガ亂ニ猿ノ行クトコロヲ知ラズト聞イテ、今日再ビ其アヤシキコトヲ見ル。此碧玉環ハ常ニ猿ノ頸ニカケ置キタリシ物ナリ」ト云フ。恪イヨ〳〵ナゲキ、船ヲ粧ヒ二人ノ子ヲ携ヘテ歸ル。（大平廣記ニ見エタリ）

蚍蜉

徐玄之ガ宅ニバケ物アリ。玄之其所ノ花木多ク珍シキヲ愛シテ栖居ス。アル夜書ヲ讀ム。時ニ小キ武者數百騎、床ニ上リ毛氈ノ上ニテ鳥獸ヲカリトルマネヲナス。又旗指シタル武者數百騎劒ヲ帶ビ弓持チタル者多ク、又幔幕簾鍋釜器物持チタル者多ク出來ル。其中ニ赤キ冠、紫衣著タル者其供奉人甚ダ多シ。机ノ右ニ到ル。鐵冠著タル者聲

ヲ擧ゲテ「殿下今魚ヲ紫石潭ニ見ントス」ト云フ。其紫衣ノ者馬ヨリ下リ左右數百人ト石硯ノ上ニアガル。紫石潭ハ玄之ガ硯ノ名ナリ。幕ヲ張リ莚ヲ敷キテ酒宴ス。管絃ヲ催シ歌舞ヲナス。玄之アヤシンデ熟々見レバ其形分明ナリ。又硯ノ中ヨリ數多ノ魚ヲ釣リイダス。或ハ鱠ニシ或ハ羹ニス。紫衣ノ者盃ヲトリテ、玄之ニ向ヒテ「我貴クシテ王ノ位ニ昇ル。汝貧賤ナリ、學ンデ白髮ニ至レドモ飢エタル色アリ。我ガ臣下トナリ酒宴ニアヅカレ」ト云フ。玄之急ギ書卷ヲ持ツテコレヲ掩ヒ、燭ヲトリテ燒ク。一ツモ見ル所ナシ。其夜玄之ガ夢ニ甲冑ノ者多ク來ツテ云ヒケルハ「蚍蜉王子羊林ノ澤ニ獵シ紫石ノ潭ニ釣ヲ垂ル。時ニ玄之狼藉シテ王ノ車ヲ驚ス」ト云ツテ、大將褒虹ト云フ者、白キ絹ヲ以テ玄之ガ頸ヲツナギテ行ク。忽チ一城門ニ入ル。主人ノ王怒ツテ「玄之我子ヲ驚ス。刑罰ヲ行フベシ」ト云ヘバ、大史令馬知玄進ンデ是ヲ諫ム。其詞ニ「王子ミダリニ出テ漁獵ス、不敬ナリ。玄之ハ罰ナシ」ト申ス。王怒ツテ知玄ヲ斬ル。此時大雨俄ニフル。蚩飛ト云フ者書狀ヲ捧ゲテ諫ム。王ノ心トケテ蚩飛ヲ大夫トシ馬知玄ニ位ヲ贈リ、

其子頲ヲ太史令ノ官トシテ、絹五百端米三百石ヲ賜フ。蚔又書ヲ奉リテ諫ム。王是ヲ見テ悅ビズ。時ニ王悪シキ夢ヲ見ルコトアリ。卽チ恐レテ玄之ヲユルシテ車ニノセテ歸ス。旣ニ榻ニ登ルト見テ、玄之目サメテ汗流レ衣ヲ濡ス。夜明ケテ、家人ヲ呼ビアツメ西ノ窻ノ下ノ地ヲホルコト、深サ五尺餘ニテ蟻ノ穴アリ。三斛入ル、許ノ缶ノ如シ。卽チ火ヲ付ケテコレヲ燒ク事、殘ス所ナシ。是ヨリ其宅ニ凶事ナシ。蚔蜉ハ蟻ナリ。異虹モ馬蚔玄モ蚩飛モ蚔モ皆蟻ノ名ナリ。説海ニ載セタリ

聶隱娘

唐ノ德宗ノ貞元年中ニ魏博ノ大將聶鋒ガ娘ヲ聶隱娘ト號ク。生レテ十歲ノ時乞食ノ尼來ツテ隱娘ヲ見テ、是ヲ悅ビコレヲトラント請フ。鋒怒ツテ尼ヲ叱ス。尼申サク「縦ヒ押衙ガ鐵櫃ノ内ニアリ𪜈盗ミトルベシ」ト云フ。夜ニ入ッテ隱娘ヲ失フ。父母大ニ驚キ、人ヲシテ尋ネシムレ𪜈見エズ。相對シテ涙ヲ流ス。五年以後ニ尼來リテ隱娘ヲ送リカヘシ、鋒ニ告ゲテ「此女ニ敎フルコト旣ニナリヌ」ト云ヒテ尼ノ行方ヲ知ラズ。父母幷ニ人々或ハ悲ミ或ハ喜ブ。其習フ所ヲ問フ。隱娘答ヘテ「只經ヲ讀習フ。別ノ事ナシ」ト云フ。鋒疑ヒテ頻ニ問フ。隱娘申サク「眞實ヲ云フ𪜈其疑ハンコトヲ恐ル」鋒又「眞ニカタレ」ト云フ。卽チ云ヒケルハ「隱娘ハジメ尼ニ導カレテ幾バク里程ヲ行クコトヲ知ラズ。大ナル石穴ニ到ル。中朗カニシテ人ナシ。猿ノ類甚ダ多シ。彼尼先ニ二人ノ女アリ。各十歲。ミナサトク姣シ。物クハズ。嶮シキ石壁ノ上ヲ飛走ルコト猿ノ木ニ登ルガ如シ。尼藥一粒ヲ我ニ與フ。又寶劍一振長サ三尺許ナルヲ與フ。其刄ノ鋭キコト毛ヲ吹キカケテモ斬ルベシ。二人ノ女ヲトヽメテ石穴ヲ守ラシメ、我ヲ携ヘテ都市ニ赴ク。其人ノ科ヲ一ツニカゾヘテ其頭ヲ刺シキタレ。人ニ知ラシムルコトナカレト云フ。又羊角ノ匕首ヲ授ク。刄ノ廣サ三寸許白晝ニ都市ノ中ニテ人ヲサセ𪜈是ヲ知ル者ナシ。其頭ヲトリテ袋ニ入レテ歸ルトキニ、藥ヲカクレバ其頭忽チ消エテ水トナル。尼又云ク「ソコノ人ユヱナウシテ人ヲ殺スコト多シ」ト。一夜其所ヘ至リ其頭ヲトリテ來ル。尼又云ク、「汝ガタメニ腦ヲヒラカン」トテ匕首ヲ用ヒ入ル。腦少シモソコナフ所ナシ。尼其匕首ヲ拔イテ申サク「汝ガ術旣ニ成就ス。家ニカヘルベシ。後ニ二十年アリテ又逢ハント云フ」ト委シク語レバ、鋒キヽテ恐ル、事甚シ。時ニ行方シラズシテ、夜明ケテ歸ルコトアリ。鋒其行

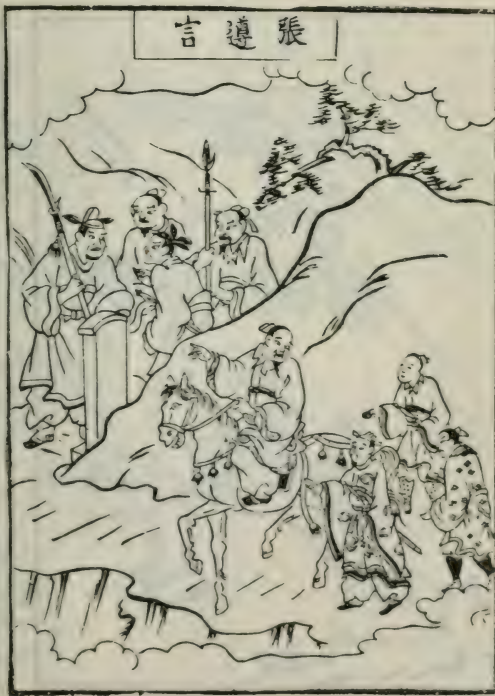
クサキヲ問ハズ。ヤウ〳〵疎キヤウニナリヌ。或時鏡ヲトグ少キ人アリテ來リケレバ、隱娘「コレヲ我夫トセン」ト云フ。鋒コレヲユルス。夫ユタカニ衣食ヲ與フ。數年ノ後鋒死ス。鋒ガ主人魏師其事ヲキヽテ金帛ヲ與ヘテ呼ブ。數年過ギテ元和年中魏師ト陳許ノ節度使劉悟ト中ヨカラズ。隱娘ヲ遣シ其頭ヲキラシメントス。隱娘ヒソカニ陳許ヘユク。劉悟モ奇特ノ智謀アリテ此事ヲサトリ、武士ヲ召シテ急ギ城北ヘ行向ヒ「一男一女ノ白黑ノ衛ニノリテ來ラントキニ挨拶シ、我相見ンタメニ伺ハシムトイヘ」ト云フ。武士其ヲシヘノ如クニシテ是ヲ迎フ。衛ハ馬ヲ云フナリ。隱娘夫婦云ヒケルハ「劉悟ハ凡人ニアラズ。我ガ來ルヿヲ知レリ。マミエン」トノゾム。劉悟コレヲ勞フ。隱娘拜シテ「スデニ罪ヲ君ニ得タリ。迷惑ス」ト申ス。劉悟キヽテ「左樣ニハアラズ。人々其主君ノタメニツカフルハ皆世間ノ常ナリ。我ト魏師ト何ゾ別ナランヤ。コヽニ留ツテ我ガタメニセヨ。必ズ疑フコトナカレ」ト云フ。隱娘卽チ劉悟ハ魏師ニマサレルヿヲ知ッテ、陳居ニ逗留ス。劉悟「其求メアルコトヲカナヘン」ト問ヘバ「毎日二百錢ヲ得テコト

タリヌ」ト云フ。一日俄ニ衞ノアル處ヲシラズ。潜ニ彼ガ布裹ノ中ニ、紙ニテ作レル白黒ノ衞二枚アルヲ見ル。既ニ一月餘アリテ劉悟ニ告ゲケルハ「魏帥猶ヤム心ナシ。今夜必ズ精々兒ト云フ者ヲ來ラシメテ、君ヲモ殺シ我ヲモ殺サントス。我謀ヲ以テ精々兒ヲ殺スベシ。君ウレフルコトナカレ」ト云フ。劉悟本ヨリ大氣ナレバ恐ルヽ體ナシ。夜半過グル程ニ一ツノ白色飛ビヒルガヘリテ、燈ニウツロヒ床ノ四方ニ打チ合フ。暫クアリテ一人、首ト身ト二ツニ切レテ空ヨリオツ。隱娘進出テ「精精兒既ニコロサレヌ」ト云ヒテ、コレヲ堂ノ下ヘヒキ出シ、薬ヲカケヽレバ、屍トケテ水トナル。隱娘マタ告ゲケルハ「後夜空々兒ト云フ者キタッテ君ヲ害セントス。空々兒ガ神變ハ我ガ及ブ所ニアラズ。鬼神モ其跡ヲトメガタシ。空ヨリ空ニ入リ形ナクシテ影ヲケス。我モフセギガタシ。但君ハ于闐國ノ玉ヲ頸ニカケメグラシ衾ヲ以テオホフベシ。我ハ化シテ蠛蠓ト云フ微塵ノ如クナル小虫トナリテ、君ノ腹中ニ入ッテ待ツベシ。其外ハ逃ルヽ所ナシ」ト云フ。劉悟コレニシタガフ。夜半近クナル時ネムラントスレバ、劉悟ガ項ノ上ニ物ノヒヾク聲アリ。カン〳〵ト高クキコユ。隱娘忽チ劉悟ガ口中ヨリ躍リ出テ、悦ビテ云ヒケルハ「君恙ナシ、イトメデタシ。空々兒ガ人ヲウツコトハ、縦ヘバ逸物ノ鷹ノ鳥ヲ撃ツガ如シ。一タビウツテアタラザレバ即チ遙ニトビ去ル。其ウチハズセルヿヲ恥ヅルナリ。一時バカリニ二千里遠クユクナリ」ト申ス。其頸ニカケタル玉ヲ見レバ、匕首ノアタリタル疵アリ。誠ニ危キ事ドモナリ。劉悟イヨ〳〵隱娘ヲ敬フ。元和八年劉悟京ヘノボル。隱娘相從ハズ、去ッテ行ク處ヲ知ルコトナシ。劉悟死シテ後、隱娘驢馬ニノリテ京ニ來ッテ、其柩ノ前ニ向ヒテ啼イテ去ル。開成年中蜀ノ國ノ棧道ニテ隱娘ガ白衞ニノリテ往來スルヲ見ル人アリ。其カタチ始ノ如シ。其後ニ隱娘ヲ見タル人ナシ。何國ヘカ行キケン。（大平廣記ニ載セタリ）

張遵言

南陽ノ張遵言ト云フ人、商山ヘユク。館中ニヤドル夜、クラキ所ニ桓ノ下ニ一ノ白キ物アリ。人ヲシテ見セシムレバ白犬ナリ。猫ノ大サホドニテ爪牙モ白ク玉ノ如シ。毛色ウルハシクカヾヤケリ。遵言コレヲ愛シテ、名ヅケテ捷飛ト云フ。トビハシルコト飛ブガ如シ。常ニコレヲ目前ニオク。其僕張志誠ト云フモノニ、袖ノ中ニ入レテヨクナヅケカ

ハシム。其ハミ物皆捷飛ガ意ニカナフヤウニセシム。一年餘アリテ志誠怠ルサマナレバ、遵言自ラソダテ、毎度イヅクヘナリトモ、行ク時袖ニタヅサヘ、飲食イヨ〳〵怠ラズ晝夜ハナル、コトナシ。四年過ギテ遵言梁山ヘユク。日クレ天曇リテ風雨ニ逢ヒケレバ、奴僕ト共ニ大木ノ下ニヤドル。忽チ捷飛ヲ失フ。大ニ驚イテ、志誠ヲシテ尋ネシムレモアラズ、四方ヘ手ヲ分ケテ、求ムレドモ見エズ。俄ニ一人ヲ見ル。白衣ヲ著其長八尺餘、形ウルハシ。時ニクラケレドモ此人月中ニ立ツガゴトク分明ナリ。「何ナル人ゾ」ト問ヘバ、答ヘテ「我ハ蘇四郎ト云フ者ナリ。卽チコレ捷飛也。君今災難ニカヽリテ死スベシ。我スデニ君ノ恩ヲ受ケタルコト四ケ年、其情フカシ。君ヲ救ハンタメニ來レリ。然レドモ十餘人ヲソコナフコトアルベシ」ト云ヒテ、遵言ガ馬ニ乘ツテユク。遵言、徒歩シテ從フ。十里バカリアリテ一ツノ塚ニ到ル。白衣ニ冠キタル者三四人、身ノ長一丈アマリ、弓劍ヲ持ツ。蘇四郎ヲ見テ伏拜シテ向フ。「何故ニ來ルヤ」ト問フ。時ニ白衣ノ人、答ヘテ「是ハ大王ノ帖ヲウケテ張遵言ヲトラフ」ト云フ。イヒヲハリテ遵言ヲ見

付ケテニラム。遵言恐レテ倒レントス。四郎云ヒケルハ「猥藉スルコトナカレ。我遵言ト伴フ。暫ク去レ」白衣ノ人嗁悲ム。四郎遵言ト同ジク行去ル。又十里バカリ過ギテ六七人ノ夜叉ヲ見ル。皆兵具ヲモツ。其形銅頭鐵額イトオソロシ躍リハゲミテアラクタケシ。四郎ヲ見テヲノヽキ伏拜ス。四郎叱シテ「何故ニコヽニアルヤ」ト問フ。夜叉皆申サク「大王ノ帖ヲウケテ張遵言ヲトラフ」トイヒ終ツテ遵言ヲ睨ム。四郎云ヒケルハ「遵言ハ我舊友ナリ。トラフベカラズ」夜叉等同時ニ伏シテ地ヲハヒマハリ、涙ヲ流シ申シケルハ「先ノ白衣ノ四人カノ遵言ヲトラヘ來ラザルニヨリテ鐵杖ニテ五百宛ウタレ死生知ルベカラズ。今我ラモ遵言ヲトラヘズンバ皆罪ニアタリテ殺サレン。アハレ遵言ヲタマハリツレテ行カン」ト請フ。四郎怒ツテ夜叉ヲ叱ス。夜叉シサリテ倒死セントス。既ニシテ叉シキリニコレヲ請フ。四郎云ク「小鬼モシシカラバ誅スベシ」ト。夜叉嗁キサケンデノク。四郎コヽニオイテ「遵言ハヤ無事ナリ」ト云フ。又七八里ホド行ク。兵杖持チタルモノ五十餘人出テ、四郎ガ前ニ列リ拜ス。四郎「何ユヱニ來ルヤ」ト問ヘバ、其答

フルコトサキノ夜叉ノ如シ。又申サク、「サキノ夜叉牛叔郎ト名ヅクル輩七人、遵言ヲトラヘザル罪ニヨリ法ニアテラル。我等モ恐ルヽコト甚ダシ。願ハクハ四郎、我ラガ罪ヲ救ヒ玉へ」ト請フ。四郎コレヲキイテ「オノ／＼我ニシタガヒ來ラバ、命ヲタスカラン」ト云フ。程ナク大黑門ニ到ル。マタ行クコト數里ニシテ一ツノ城アリ。使者馬ニ乘ツテ王ノ旨ヲ申サク「四郎遠ク來ル。我コノ比ツカサドル法アリテ、出テムカヘズ。先ヅシバラク南館ニイコヒ玉ヘ。軈テ拜シ迎フベシ」トテ、館中ニ入ル。王使者度々來ツテ「張遵言ヲモヨビ玉へ」ト云フ。暫クアリテ相從ヒ行ク。宮殿ノ體マコトニ帝王ノ居ナリ。王衣冠ヲトヽノヘ、出テ四郎ヲムカヘテ拜ス。四郎答拜ス。其詞カル／＼シクシテ唯々ト云フ。王進ンデ揖シテ階ニ上ル。四郎卽チ階ニ上リテ少シ揖ス。遵言ヲカヘリミテ「如レ此ニシテ可ナリ」ト云フ。王又四郎ヲ遵ヘテ三重オクノ殿ニ入ル。每レ殿カザリヒカルコト盛ニシテ種々珍物ヲ設ケタリ。四重殿ニテ飮食ヲソナフ。器物以下皆世間ノアル所ニアラズ。配膳ヲハリテ王ト共ニ明樓ニノボル。四方ノ柱ミナ珠ヲ以テカザレリ。既ニ酒ヲスヽム。王云ヒケルハ「聊カ醴酒ヲタスケンコト如何アルベキ」ト、四郎キヽテ「苦シカルマジ」ト云ヘバ女ノ樂人七八人ソノ外酒宴ニアヅカルベキモノ十人餘出來ル。皆ミヤビヤカナル形ナリ。王モ四郎モ衣服ヲアラタメ、快ク物ガタリスルコト人間年若キモノヽゴトシ。一人ノ美女アリ、四郎戲レケレバ、其女怒ッテ「我ハ劉根トイヘル仙人ノ妻ナリ。仔細アリテココニ到ル。君何ゾ容易クタハブレゴトスルヤ」ト云フ時、四郎少シ怒ッテ巵ヲ以テ盤ヲ打ツコト一聲ニテ、柱ノ上ノ珠穀々トスベリ落ツレバ、暗クナリテ見ルトコロナシ。遵言良久シククラクラトアリテ醒メタリ。本ノ處ノ樹下ニ、四郎ト馬ト一處ニアリ。四郎云ヒケルハ「君既ニ災難ヲマヌカレタリ。卽チ別レントス」遵言申サク「我今深キ恩ヲウケテ、生ヲ全ウスルヿヲ得タリ。四郎ノ由緒ヲ知ッテ感戴スル所アラン」ト云フ。四郎キヽテ「我コレヲ云フヿアタハズ。商州龍興寺ノ縫衲老僧ニ問へ」ト云ヒヲハリテ、飛ンデ空ニノボリテ去ル。夜明ケテ遵言急ギカノ寺へ行キテ尋ヌレバ、東ノ廊ニ衲ヲ縫ヘル老僧アリ。禮拜シテ問フ。拒ンデ語ラズ。遵言ネンゴロニ尋ネケレバ、夜更ニ及ンデ云ヒケルハ「君ガ尋ヌル所淺カラズ。蘇四郎ハ大星ノ精ナリ。大王ハ

仙府ノ謫官ナリ」道言又事ヲトヘドモ老僧答ヘズシテ「君既ニ災難ヲハナレタリ。ハヤク歸レ」ト云フ。道言明朝再ビ行イテ尋ヌレバ、既ニ其處ヲワキマヘズ。（説淵ニアリ。大平廣記ニモ見エタリ）

怪談全書卷之三終

怪談全書巻之四

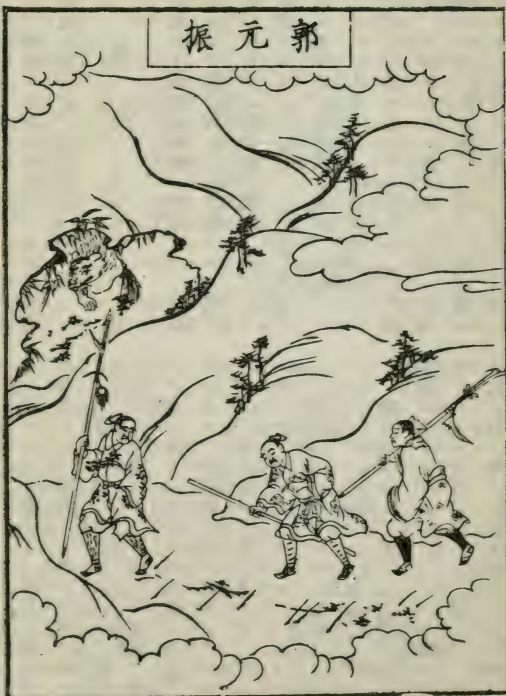
郭元振

郭元振ハ唐ノ世ニカクレナキ名將ナリ。大臣宰相トナリシ人ナリ。後ニ代國公ト號ス。玄宗ノ開元年中、元振年ワカキ時ニ、晋國ヨリ汾ト云フ處ヘユク途中、夜ニ及ンデ道ヲ失フ。遙ニ燈ノ影ヲ見テ人家アリト思ヒ、行クコト八九里バカリシテ、一ノ宅ニ到ル。其門廊下堂上ニテ燈明カニシテ食物ヲツラネオク。ヨメ入スル所ノ體ニ似タリ。然レドモ人ナシ。公、馬ヲ廊下ノ前ニ繫ギテ堂ヘ昇ル。何人ノ居處ト云フコトヲ知ラズ。俄ニ一ノ女子ノ啼ク聲ヲ聞ク。堂中ニ咽ビ叫ブコト甚ダシ。公問ウテ「汝ハ何モノゾ。鬼カ人カ」ト云フ。女答ヘテ、「我ハ人ナリ。此里ニ烏將軍ト云フ神アリ。毎年婦ヲ與ヘテ配ス。若シカヽラザレバ災難アリ。故ニ姣ク少女ヲ擇ンデ遣ス。我父、今里人ノ錢五百貫ヲ受ケテ我ヲウリ、今夕男女多ク送リ來ツテ酒宴シ、我ヲ醉ハシメテ此堂中ニステオキ、門ヲトザシテ歸リ去ル。既ニ父母ニ弃テラレヌレバ、必ズ死ナンコトヲカナシミ、啼キナゲクナリ。君若シ我ヲタスケタマハヾ、君ニツカヘ奉ラン」ト云フ。公コレヲキヽ、大ニ憤リテ「其神ノ來ルハ何時ゾ」ト問フ。「子ノ刻バカリナラン」ト答フ。公アハレミテ「我ハ大丈夫ナリ。力ヲ出シテ救フベシ。ゲニ叶ハザラン時ハ共ニ死スベシ。汝ヲ惡鬼ノ手ニ殺サシメジ」ト、タノモシゲニ云フ。女子スコシ泣止ム。公卽チ西階ノ上ニ坐シ、其馬ヲ堂ノ北ニツナギ、一人ノ僕ヲ前ニ立テオク。彼バケ物ヲ待タシメンタメナリ。程ナク火トモシタルモノ、車馬ニノリタルモノ、紫衣キタルモノ來ル。走出テ「相公、コヽニアリ」ト云ヒテ進ム。又黃衣ノモノ二人來ル。是モ走リ出テ、「相公コヽニアリ」ト云フ。公聞イテ心ノ中ニ、我必ズ宰相トナランコトヲ、鬼神スデニ知ルト思ウテ、此バケ物ニカタント悦ブ。此時カノ神來リ入ル。サキダチタルモノ「コヽニ相公アリ」ト告グレバ、弓矢戈劒ヲモチハサミテ東階ノ下ニツク。公卽チ僕ヲ以テスヽミテ「郭元振對面セン」トイハシメテ、

挨拶ス。神キヽテ「元振何ユヱニコヽニ到ルヤ」ト問フ。公答ヘケルハ「神今夕メデタキ婚禮アリト聞ク故ニ、來ツテ賀セントス」神悅ンデ、坐シテ公ニ向フ。飲食シテ歡笑フ。公語ラク「神常ニ鹿ノ脯ヲ喰フヤ」神ノイヘラク「此處ニマレナリ。珍味アヒガタシ」ト答フ。公イフラク「我スコシキノ脯アリ。天子ノ御厨ヨリ得タリ。刲ツテス、メン」ト云ヘバ、神コレヲ悅ブ。公、起ツテ脯ト小刀トヲ取ツテ、ケヅリテ小器ニスヱテ取ラシム。神其手ヲノベテ取ラントス。公見テヨキ時分ナリト思ヒ、其脯ヲ投ゲ其手ヲトラヘテ、腕ヲキリ落ス。神アット云フ聲バカリシテ走ル。相從フバケ物モ、一時ニ驚キ散ズ。公衣ヲヌイデ彼手ヲマトヒ包ミテ僕ニモタシム。四方ヲ見メグラセドモ、寂ニシテ眼ニカヽルモノナシ。公其門ヲヒライテ、カノ女子ニ向ツテ「バケ物ノ腕キリ落シタリ。其血ノ跡ヲトム。バケ物必ズ死スベシ。汝ハヤク命ヲマヌカレタリ。出テ飲食

セヨ」ト云フ。女子出來ル。年十七八許ニシテ姣シ。女子拜シテ云ヒケルハ「誓ツテ君ノ妾トナラン」天ヤウヽヽ明クレバカノ腕ヲ見ルニ猪ノ蹄ナリ。

カヽル所ニ哭泣ノ聲キコエテ、人々來ルヲ見レバ、女子ノ父母親類幷ニ里人ノ棺ヲ舁來ツテ、屍ヲトリヲサメンタメナリ。公ト女子トノイキテアルヲ見テ、アヤシミ問フ。公具ニ子細ヲ語ル。里人ノ老人皆怒ツテ「此地ノ靈神ヲソコナフ事、何事ゾヤ。コレ此處ノ鎭守ナリ。年久シク祭ツテ女ヲアハセ奉ル。若シ少シモ懈レバ、風雨オコリ雷電アリテ災ヲナス。如何ゾ旅人ノ身トシテ、我ラガアガムル明神ヲヤブルヤ。公ヲ殺シテ神ヲ祭ランカ、但シ縣吏ニ訴ヘテ公ヲトラヘンカ。」ト、云フコトカマビスシ。公キヽテ申サク、「各年老イタレド事ニヨリテ初心ナリ。神徳アレバ人ニ福ヲ與フ。患アルモノヲバ救フ。コレヲ鎭守トス。每年久シク人ヲ牲トスルハ惡鬼ナルベシ。バケ物ナルベシ。眞ノ明神ナラマシカバ、猪蹄アルベカラズ。カヽル淫妖ノ邪獸ハ、天地ノ間ノ大罪ノ畜類ナリ。我今正理ヲ以テ是ヲ誅ス。今ヨリ此處ニ女ヲタムクル患ナカルベシ」ト云フ。諸人、コレヲキヽテ、ゲニモト思ヒテ公ノ敎ニシタガヒ、兵具幷ニ鍬鉏ヲモチ、彼血ノヒキタル跡ヲタヅネ、二十里許行イテ、大ナル塚穴ニ到ル。血ノ

郭元振

跡分明ナリ。カコミテコレヲ掘リ、穴ノ口ニ薪ヲツミ火ヲツケテ焼ク。ソノ光ニヨリテ伺ヘバ、穴ノ中廣ウシテ大ナル宅ノ如シ。一ツノ大ナル猪、前足ナク血ニ塗レテ臥セリ。烟ヲツキ走リ出テ倒レテ死ス。里人各喜ビテ公ヲ賞シ、音物ヲサヽゲテ饗ス。公コレヲウケズ「我何ゾ猟師ノワザヲセンヤ。只ソノ害ヲ除クマデナリ」ト云フ。彼女子即チ父母親族ニ申サク「我本ヨリ殺サルベキ罪ナシ。五十萬ノ銭ヲ貪ツテ、畜類ニ與ヘテ殺サントス。公ノ力ニヨラズンバ必ズ死スベシ。父母ニ殺サレントシテ、公ニイカサレタリ。今ヨリ此地ヲ去ツテ、公ニ從フベシ。」ト云ツテ、涙ヲ流シテ公ニシタガフ。公サマ〴〵スカシケレド止ラザレバ、即チ其意ニ任セテ召具シ、後數多ノ子ヲ生メリ。公ノ大臣ノ位ニ昇リ宰相トナルベキコトヲ、鬼神既ニ知ルトキハ、人貴賤ハ前方ヨリ定マルト見エタリ。宰相トナルベキホドノ人ヲ、悪鬼邪鬼モ妨ゲズ。説淵ニアリ又唐小説ニモ見エタリ

侯元

侯元ハ上黨郡銅鞮縣ノ樵夫ナリ。家貧シウシテ薪ヲ賣ルヲ以テ業トス。唐ノ乾符ノ巳亥ノ年其縣ノ西北ノ山ニ入リテ薪ヲキリ、谷ノホトリニ休フ。其側ニ大石アリ。形屋宅ノ如シ。侯元コレニ向ツテ大息ツイデ、己ガ苦勞スルヿヲ恨ム。時ニ石サケヒラケテ洞ノ如ク、其中ニ一人ノ翁アリ。白髪ニテ烏帽子ヲ著、杖ヲ衝イテ出ヅ。侯元驚キアワテ、禮拜ス。翁コレヲ見テ「我ハ神君ナリ。汝何ヲカ歎クヤ。富貴ヲ願ハヾ、我ニシタガヒ來レ」ト云フ。翁洞ニ入ル。侯元從ヒユク。數十歩許ニテ別ノ世界ノ如ク珍シキ草木アリ。怪シキ山水アリ。谷ヲ過ギテ門ニ入ル。ウルハシキ家アリ。侯元ヲ引イテ飲食セシム。世間ニテ見ザル所ノ物ナリ。翁退イテ後、童子二人出テ、侯元ヲ引キイレ浴セシメ、新シキ衣冠ヲ著セテ亭ニ登ル。又莚ヲ地ニ敷イテ跪カシメテ、翁秘訣ノ事ヲ侯元ニヲシヘサヅク。侯元本ヨリ愚ナリシガ、コヽニ至ツテ一タビ聞イテワスルヽコトナシ。翁戒メテ云ヒケルハ「汝少シノ幸アレド、イマダ敗ルベキ氣殘ル所アリ。能ク敬ムベシ。若シ不義ヲ謀リ無道ヲ企テバ、必ズ亡ビン。今暫ク歸ルベシ。モシ再ビ逢ハントオモハヾ、信ノ心ヲ以テ來ツテ石ヲ扣クベシ。對フルヿアラン。」侯元禮拜シテ出ヅ。一人ノ童子ヲシテ、コレヲ送ラシム。既ニ洞ヲ出レバ、其大石、穴フサガリテ本

ノゴトシ。侯元ガキリオケル薪スデニ見エズ。家ニ歸レバ、父兄驚キ喜ンデ、「既ニ一旬ニナリヌ」ト云フ。其衣服ノウルハシク、氣分ノハゲシキヲ見テコレヲ怪シム。侯元此事カクシガタキコトヲ知ッテ、家人ニ云ヒ聞セテ、閑ナル室中ニ入ッテ其術ヲ鍛錬ス。一年許ニテ成就シケレバ、萬ノ物ヲ變化シ、鬼神ヲヨビ草木土石ヲモ動シ、シダラカシテ騎馬トシ兵具トス。コヽニオイテ、其處ノ年少ク勇メル者ヲ聚メテ武者トシ、旗ヲ列ネ鼓ヲ鳴シ行列ヲ調ヘ、既ニ國主ノ如シ。ミヅカラ賢聖ナリト稱ス。官ヲ立テヽ左右ノ大將トシ、軍兵ノ名ヲ稱ス。毎月朔日ツノ形ヲツクロヒ、行イテ神君ヘ參詣ス。神君、イマシムルニ「必ズ兵亂ヲナスコナカレ」ト云フ。庚子ノ年ニ至ッテ、數千ノ兵ヲアツム。其處ノ人恐レテ、大將高公濘ニ告ゲ訴ヘ、卽チ兵ヲモッテ侯元ヲ撃ツ。急ギ馳セテ神君ヘ申ス。神君對ヘケルハ「我先ニ既ニ云ヒ敎ヘキ。旗マキ鼓ヲトヾメテ向フベシ。心ヲシヅメテ、カロ〲シク戰フコトナカレ」ト云フ。侯元コレヲ聞キテ、ウケガフトイヘドモ、其心ニ思フヤウハ、我奇特神變ノ術アリ。小敵スラ禦ガズンバ、大敵ヲバ如何センヤ」ト云ヒテ、里ニ歸ッテ兵ヲ聚メテ用意セシム。其夜高公濘ガ軍兵寄セ來ル。侯元千餘人ヲ率キテ衝ウテカヽル。初勝チ後ニマタ擒ラレテ、上黨ニ到リ獄中ニトラハル。守ル者甚ダキビシ。上黨ハ高公濘ガ居ル所ナリ。一朝侯元ヲ見レバ、枷ノ中ニ燈臺許アリテ侯元ナシ。術ヲ以テ繩ヲトキ枷ヲトイテ遁レ出テ、夜半許ニ銅鞮ヘカヘリ、急ギ神君ヘ參詣シテ己ガ罪ヲ謝ス。神君怒ッテ「汝果シテ我敎ニソムク。今日不慮ニ免レタリト云フトモ、行クサキ必ズ刑罰ニアハン。我門徒ニアラズ」ト云ッテ、カヘリミズシテ洞ニ入ル。侯元歎キ憂ヒテ出テ、重ネテ行イテ頻リニ石ヲタヽケドモ、石モ開ケズ、答フル者モナシ。侯元ガ術漸ク衰ヘタリ。然レドモ其徒黨アルユヱニ、其年ノ秋、兵ヲ起シテ幷州ノ大谷ニ至リテ濫妨狼藉ス。幷州ノ騎馬武者來ッテ、コレヲ圍ム。侯元ガ術、終ニ奇特ナシ。侯元ヲトラヘテ、コレヲ陣中ニ打チキル。其徒黨、皆ニゲ去ル。說通ニ載セタリ

後漢ノ張角張魯ガ妖術ヲ以テ人ヲマドハシ聚メ、五斗米師ト號シテ大亂ヲ起シ、晉ノ孫恩ガ邪術ヲ以テ、兵ヲアツメ謀叛シ、戰負ケテ水ニ入リテ死シタルモ、此類ナルベシ。誠ニイマシメ懲スベキコトナリ。

頼省幹

宋ノ世ノ頼省幹ハ無雙ノヨクダウ者ナリ。頼建寧ト云フ處ノ人也。邪術ヲ以テ人ヲ殺シテ鬼ヲ祭ル。其家ニ蛇ヲカヒ養フコトモアリ。其鬼ヒソカニ兼テ頼ニ吉凶ヲ告グル故ニ、其ウラナフコト違ハズトナン。浙中ト云フ處ニテ、年十歳アマリノ女子ヲ求メテヤシナヒ置キ、コレヲ鬼ニソナヘテ祭ル。此母常ニ心經ヲヨム。故ニカノ女子、陀羅尼ノ呪ヲ讀ンデワスレズ。或時カノ女子ヲ牲ニソナフ。身ヲキヨメ粧ヒテ人ナキ室中ニ入リ、其戸ヲトザシオク。女子必ズ死スベシト思ヒ切ツテ居ルホドニ、夜半許ニ天井ノ窻ヨリ光物カヾヤキ來ル。女子恐レテ、一心ニ他念ナク急々ニ揭諦揭諦ト唱フ。其口ノ中ヨリ光出ケレバ、彼バケ物少シ退ク。又進ミ來ル時、女子イヨ〳〵急ニ唱フ。口ノ中ノ光大ニシテ、バケ物ノ光ト相當ル。バケ物ハタトタフレテ起キアガラズ。其室往來ノ街ニ近キ處ナリ。夜番ノ武士通ル足音ヲキヽテ「アナオソロシ。人ヲ殺ス者アリ」ト高聲ニ叫ブ。武士キヽツケテ人ヲ呼ビアツメ、壁ヲヤブリテ女子ヲ引出シ、壁ノ下ノ物ヲ見レバ、大ナル白蟒死シタリ。卽チ頼ヲトラヘ、其家人ヲカラメテ責問フ。遂ニ白狀ス。頼ガ額ヲキザミ墨ヲ入レ罪ノシルシトシテ、海外ノ遠處ヘ配流シ、其家ヲ沒收ス。（說略ニ見エタリ）

凡ソ人ノ心一ニシテ眞實ノ敬アレバ、鬼神モオソルヽ道理アリ。況ンヤ蛇蟒バケ物ノ類ヲヤ。呪文ニヨリテ然ルニハアラズ。性理字義ニ此理ヲ云ヘリ。

又唐ノ傅奕ハ高祖太宗ノ時ノ人ナリ。西域ノ沙門キタリテ、幻術ヲサシハサミ、口ヨリ火ヲ吐出シ、人ヲマドハス。天子キヽテ怪シミ給ヘバ、傅奕申サク「我ニ向ツテ火ヲ吐カシメ御覽ゼヨ」ト奏ス。彼沙門火ヲハキカクル時、傅奕タヾシク立ツテ「乾ハ元亨利貞」ト唱フルニ、沙門忽チ倒伏シテ、オキアガラズ。是ニヨツテ妖ハ人ニヨリテ起ル。邪ハ正ニカタザルコトヲ知ルト云ヘリ。（唐書ニアリ）

玉眞娘子

程廻ハ伊川ノ末孫ナリ。宋ノ紹興八年、臨安ノ後洋ノ街ニ居住ス。其門ニ簾ヲ垂レテ路ノ隔トス。或トキ燕ノ如クナル物飛來ツテ、外ヨリ入リテ堂壁ニツク。家人コレヲ見レバ、一人ノ美女長五六寸アリテ甚ダウルハシ。人ヲ見テサワガズ。物云フコヱ細クカスカナレド、聞キテ皆ワキマフ。自ラ「我

ハ玉眞娘子ト云フモノナリ。偶コヽニ來ル。人ノ祟ヲナスコトアラズ。能ク我ニツカヘバ「福アラン」ト云フ。家人即チソノ壁ニ付ケテ小龕ヲ作リ、香火ヲソナヘテツカフマツル。玉眞アラカジメ吉凶禍福ヲ語ル。皆シルシアリ。是ヲ聞キ及ブモノ、多ク來リ見ル。家人ニ錢百ヲ授ケテ龕ヲヒラカシム。往來絶ユルコトナシ。一年許アリテ飛去ル。其行ク所ヲ知ラズ。説略ニアリ 玉眞ハ一女ノ名ニアラズ。神仙ノ女ヲホメテ云フ時ニ玉眞ト號ス。娘子ハ女子ノコトナリ

陰摩羅鬼

宋ノ世ニ鄭州ノ崔嗣復ト云フ人アリ。郭城ノ外ノ寺ニ入リテ、法堂ノ上ニ休息シテ眠ル。俄ニ物ノ聲アリテ、崔ヲ叱ス。崔驚イテ起キテ見レバ、鶴ノ形ニテ色黑ク、目ノ光ルコト燈火ノ如クニシテ、羽ヲフルヒテ鳴聲タカクアラシ。崔恐レテ、廊下ヘノイテ伺ヘバ忽チ見エズ。明朝コノ事ヲ寺僧ニカタル。僧答ヘテ「コヽニ左樣ノバケ物ナシ。但シ十日以前、死人ヲ送リ來ルコトアリ。カリニ收メ置キタリ。若シソレニテモアランヤ」ト云フ。崔都ニ至ツテ開寶寺ノ沙門ニ告ゲケレバ「藏經ノ中ニ、初メテ新ナル屍ノ氣變ジテ如レ斯。コレヲ陰摩羅鬼ト號ク」ト云ヘリ。清尊錄ニアリ

金鳳釵

元ノ武宗ノ大德年中ニ楊州ノ吳防禦ト云フ人、家ニ多クノ財寶アリ。崔君ト隣里ノ友ナリ。崔ガ男子ヲ興哥ト云フ。吳ガ女子ヲ興娘ト云フ。互ニ襁褓ノ內ヨリ夫婦ノ契約ヲナス。崔一ツノ金鳳釵ヲ遺シテ、タノミノシルシトス。金ニテ鳳凰ノ形ヲツクル笄ナリ。崔遠キ他國ヘユク。十五年マデ歸ラズ。音信ナシ。興娘スデニ年十九ニナリヌ。母コレヲ他人ニヤラント云フ。父キカズ。興娘待チカネテ病死ス。コレヲ葬ルトキ、母カノ金鳳釵ヲ持チテ屍ヲナデテ「是ハ汝ガ夫ノ家ノ物ナリ」ト云ウテ、棺ノ中ニ入ル。カヽル所ニ兩月アリテ崔來ル。吳コレヲ迎ヘテ懇ニモテナシケレバ、崔申サク、「我父他國ノ官トナリテ死シ、母モ又死ス。コレニヨリテ遲ク到來ス」ト云フ。吳涙ヲ流シテ云ヒケルハ「我ガ娘緣ウスク、君ヲ思ヒ病ヲ得テ、二ケ月前ニ身マカリヌ」トテ、崔ヲ導キ興娘ガ牌前ニ到ツテ、コレヲ祭ル。扨テ云ヒケルハ「我娘ノナクナリタルトテ隔心スルコトナカレ」ト云ヒテ、即チ門ノ邊ノ小宅ニ居ラシム。半月バカリニテ、清明ノ節ニ逢フ。コレハ春三月

ノ時分ナリ。此時、世俗皆墓マキリスル例アリ。呉家人ヲ悉ク召シツレ墓へ行ク。興娘ガ妹アリ、名ヲ慶娘ト云フ。年十七ニナリ、又同道シテユク。崔ヲ殘シテ留守セシム。日既ニ暮レケレバ、崔、ソノ門ノ左ニアリテ相待ツ。一ツノ輿アリ。前ノ輿スデニ門ヲスギ後ノ輿トホル時、崔ガ前ニテカラカラト聲アリテ、一ツノ物ヲ落ス。崔コレヲ拾ウテ見レバ、金鳳釵ナリ。內ヘ入ラントスレバ、門戶スデニサシタリ。己ガ小屋ヘカヘリ、燈ヲトモシ坐セリ。興娘死シタレバ、久シクコヽニ居ガタシト、恨ミ憂ヒテフセラントスル處ニ、戶ヲタヽク聲アリ。問ヘバ答ヘズ。トハザレバ又敲ク。崔立ツテ戶ヲアケテ見レバ、一人ノ美女アリ。其裙ヲカヽゲテ入ル。崔驚イテ「何人ゾ」ト問フ。女答ヘテ「我ハ興娘ガ妹ノ慶娘ナリ。サキニ金鳳釵ヲ落ス。君ヒラフヤ。共ニイネンタメニ來ル」ト云フ。崔ウケガハズ、再三ニ至ル。女怒ツテ「我ガ父、久シクネンゴロニ饗ス。今夜深ケテ我ヲ援ケズ。コレヲ父ニ申シ訴ヘテ、汝ヲ罪ニアテン」ト云フ。崔オソレテ從フ。曉ニ及ンデ、女出テ去ル。コレヨリ日クレテ來リ、夜アケテカクレ去ル。崔ガ居處ヘ朝夕カヨフコト、一ケ月半ニ及ベリ。アル夜

慶娘サヽメゴトシケルハ「君ハ門邊ニアリ。我ハ深閨ニ住ム。寸善尺魔アルコトハ古今ノタメシナリ。イヅ方ヘナリモ、相共ニヒソカニ行カン」ト云フ。崔キヽテ從フ。崔オモヒケルハ我父年來メシ使ヒシ金榮ト云フモノ、鎭江ト云フ處ニ居住シテ、家貧シカラズト風聞ス。尋ネテ行カントテ、慶娘ト同ジク曉イソギ出テ舟ヲカリ、鎭江ノ丹陽ヘ赴キ、コレヲ求ムレバ金榮ガ宅ニ至リヌ。金榮コレヲ見テ崔ヲミシラザレモ、其父ノ由緒ヲキヽテ、是我主人ナリトテ、馳走ネンゴロナリ。堂內ニ居ラシメ、飲食衣服、事カクコトナシ。漸ク一年過ギテ、慶娘申サク「初ハ父母ノシカランコトヲ恐レテ、潛ニノガレ出キ。今年スデニ改リヌレバ、人ノ親ノ子ヲ思フ心淺カラジ。歸ツテ家ニイタラバ、父母喜ンデ怒ルベカラズ。父子ノ間ハ斷絕ノ理アルマジ」ト云フ。崔ゲニモト同心シ、同道シテカヘル。慶娘マヅ崔ヲヤリテ申サシメ、金鳳釵ヲ授ケテ「モシ不審アラバ、是ヲ出シテ示セ」ト云ヒヲシヘテ、己ハ舟中ニアリ。崔舟ヨリアガリ、吳防禦ガ門ニ入ツテ事ノヨシヲ云ヒケレバ、吳イソギ出迎ヒテ「最前、アイサツ宜シカラズ。故ニ暇乞ナク行キタマフコト、心ニカヽリ侍リキ。唯今ノ來儀本望ナ

金鳳釵

リ。」ト申ス。崔身ヲカヾメ平伏シテ、「己ガ罪、宥シタマヘ」ト頻リニ云フ。呉「コレハ何事ゾヤ」ト問フ處ニ、崔答ヘテ、慶娘ヲサソヒイデタルヿヲ語ル。呉キヽテ大ニオドロイテ云ク「我女慶娘、病臥シテ、床ノ上ニアリ。既ニ粥ダモ飲マザルコト一年許。門外ヘ出ルコトナシ。何トテ妄語スルヤ」崔ガ云ク「慶娘今船中ニアリ。疑アラバ人ヲヤリ見セヨ」ト云フ。呉コレヲ信ゼザレドモ、家ノ童ヲ遣シ見セシムレバ、慶娘ハ見エズ。彌崔ヲ疑フ。崔其袖ヨリ金鳳釵ヲ取出シテ示ス。呉忽チ驚イテ「コレ我ガ亡ヘル女興娘ガ棺中ニ入レテ收メタル物ナリ。如何トシテカ爰ニ來ルヤ」ト云ウテ、怪シミ思フ。慶娘俄ニ床ヨリオキアガリ、堂ニ到ツテ其父ヲ拝シ、申サク「興娘不幸ニシテ身マカリテ、孝ヲ行フコトアタハズ。屍ヲ郊原ニ埋マレタリ。サレドモ崔君ト縁イマダ盡キズシテ、爰ニ來レリ。妹ノ慶娘ヲシテ、縁ヲツガシメント願フ處ナリ。シカラバ我病イユベシ。若シ然ラズバ、ワガ命、タヾ今絶タン」ト云フ。家人皆甚ダオドロク。其形ヲ見レバ慶娘ナリ。其詞ヲ聞キ、其タチフルマヒヲ見レバ、姉ノ興娘ナリ。父コレヲ詰ツテ「汝已ニ死シタリ。何ゾ再ビ來ツテ人ヲ惑ハスヤ」ト問フ。時ニ答ヘテ「我罪ナクシテ死スル故ニ、冥官后土、コレヲアハレミ、世縁ツキザルヲ以テ、一年ノイトマヲ賜ハリ、キタリテ崔君ト此縁ヲナス」ト云フ。父聞イテ、コレヲユルス。卽チ父ニ向ツテ拝謝シ、又崔ガ手ヲ執リテサメ／＼ト泣イテ、「暇乞ナリ」ト云ヒ泣イテ地ニ倒ル。コレヲ見レバ死ス。急ギ湯藥ヲ口ニソヽギ、時ヲ移シテ甦ル。其病イエテ、容貌行歩、常ノ如シ。サキノ事ヲ問ヘバ、一ツモ知ラズ。夢ノ醒メタルガ如シ。遂ニ吉日ヲ撰ンデ、慶娘ヲ崔ヘ嫁シテ夫婦トス。崔イヨ／＼興娘ガ情ヲ感ジテ、彼釵ヲ賣ツテ、香燭楮幣ヲ買ヒテ道士ヲ雇ヒ、楊州ノ后土廟ニテ祭ラシム。崔ガ夢ノ中ニ興娘ヲ見ルニ「生死隔ツトイヘドモ忘ルベカラズ。我妹ニヨクヨカレ」ト云フト見テ、夢サム。崔コレヨリ絶エテ見ルコトナシ。最モアヤシキコトナリ。 剪燈新話ニアリ

怪談全書巻之四終

怪談全書巻之五

三娘子

唐ノ汴州ノ西、板橋店ト云フ所ニ、三娘子ト云フ女アリ。孀ニシテ居ルコト三十餘年、子モナク親類モナシ。數間ノ屋ニ居テ、食物ヲ賣ルヲ以テ業トス。然レドモ家甚ダ豊ニシテ驢馬多クアリ。往來ノ諸人、車馬モタザル者ハキタリテ、驢馬ヲ買フ。其アタヒヤスウシテ是ヲ賣ル。コレニテ旅客オホク聚ル。元和年中、許州ノ趙季和ト云フ人、東都ニ行カントスル時、コノ所ニ寄宿ス。旅人六七人、サキダチ到ル。趙季和ハオソク到ル。三娘子ヨク饗ス。諸客ヨロコンデ酒ヲノム。季和ハ下戶ナリトイヘドモ、其座中ニ交ル。亥ノ刻バカリ、皆ツカレテ臥セリ。三娘子入ッテ戶ヲサシ燈ヲケス。季和獨イマダネイラズ。壁ヲ隔テ、、三娘子ガ物ヲウゴカス聲ヲ聞イテ、透間ヨリコレヲノゾケバ、火ヲトモシ箱ノ中ヨリ鋤耒ヲトリ出シ、一ノ木牛、一ノ木人形、各六七寸バカリナル物ヲ、竈ノ前ニオキ水ヲ吐ク。其木人形ハシリ行キ、牛ヲ牽來テ耒ヲ以テ床ノ前ノ地ヲ掘リ耕ス。又箱ノ中ヨリ一包ノ蕎麥ヲトリ出シコレヲ植ユ。ヤガテ花サキ、ソバ熟ス。是ヲカリドリテ、七八升アリ。又小キ臼ニテスリテ粉トナス。卽チ木牛、木人形、幷ニスキクハヲ箱ノ中ヘ收ム。蕎麥ヲトリ燒餅六七枚ニ作ル。シバラクアリテ、鷄鳴ニ至ツテ、諸客出ントスルトキ、三娘子早クマヅ興キテ、カノ燒餅ヲ床ノ上ニ置キ客ニ食ハシム。季和コレヲ見テムナサワギシ、暇乞シテ出ヅルマネシテ、潛ニ門外ヨリコレヲ伺ヘバ、諸客皆燒餅ヲ食フ時ニ、地ニ倒レテ驢馬ノ鳴クマネシテ卽チ形變ジテ驢馬トナル。三娘子アマタノ驢馬ヲ牽イテ馬屋ノウシロヘ入レテ、諸客ノ財寶ヲ悉クトリ納ム。季和ツクヾ\見テ人ニ語ラズ。珍シキ術ナリト思ヘリ。月ヲ經テ後、季和東都ヨリ歸リ、コノ所ニイタラントスル時、豫メ蕎麥ノ燒餅ヲ作リ、其大小、サキニ見タル所ノゴトクス。板橋店ニ至リテ、マタ宿ヲ假ル。三娘子、悅ビテ饗スコト始ノ如シ。此日、季和答ヘテ「明朝早ク出ヅベシ。燒餅ノ點心セヨ」ト云フ。三娘子「コレハヤスキコトナリ。ヨクシヅカニネ

ムレ」ト云フ。夜半過ギテ、季和ヒソカニ伺ヘバ、三娘子ガスル所、先ノ日ノ如シ。夜明ケテ三娘子、食物菓子ヲソナヘ、燒餅數枚ヲ並べ置ク。別物ヲトラントスル時、季和ソノ隙ヲ見テ、走ッテ三娘子ガ餅一枚ヲトリテ、己ガ餅一枚ニトリカヘテ、季和物食フ時ニ三娘子ニ向ッテ「我モ亦燒餅アリ。主人ノ餅ヲ殘シテ、他ノ客人ニクラハシメン」ト云ヒテ、先ニトリカヘタル己ガ餅ヲ見知リテ食フ。三娘子茶ヲサヽゲテ來ル。季和云ヒケルハ「己ガ餅一ツ主人、試ミニ食ヘ」ト云フ。主人「クラハン」ト答フ。季和先ノ替ヘ置キタル主人ノ餅ヲ、我手ヨリ出シトリテ與フ。主人コレヲ口ニ入ルヽトヒトシク、三娘子ウツブキ臥シ驢ノ鳴クコヱヲナシテ、卽チ變ジテ驢馬トナル。其力スクヤカナリ。季和コレニ乘ッテ出ヅ。ソノ木ニテ作レル人ト牛トヲトルト云ヘドモ、其術ヲ知ラザレバスルヿアタハズ。季和、コノ驢ニ乘ッテ所々ヲ往來スレドモ、ツマヅクコトナシ。毎日アリクコト百里計ナルベシ。其後四年、コノ驢ニノリテ華山ノ廟ノ東ニ到ル。五六里許ノ路次ニテ一人ノ老人ニアフ。老人、手ヲ打ッテ笑ッテ「板橋ノ三娘子、何故ニ驢馬ノ形トナルヤ」ト云ヒテ、驢ヲトラヘテ季

三娘子

和ニ云ヒケルハ「彼人、罪アリトイヘドモ、君ニ逢ウテ、ハヅカシメラル、コト甚ダシ。アハレナルカナ。今ヨリユルシハナテ」ト云ヒテ、老人、兩手ヲ以テ驢馬ノ口鼻ノ邊ヨリ、コレヲ引キサキケレバ、三娘子ソノ驢ノ皮ノ内ヨリ躍出ヅ。卽チ本ヨリノ三娘子ナリ。老人ニ向ツテ禮拜シ畢ツテ、走去ル。其行ク所ヲ知ラズ。（説海ニ見エタリ）

薛昭

唐ノ元和ノ年ノ末、薛昭ト云フ人アリ。或ル人、仇ヲ報ヒ、人ヲ殺シテ來ル。昭其人ヲカクシ、金ヲ與ヘテニガス。此事アラハレテ、縣ノ廉使、追ヒキタリテサガス。昭アラハレテ流サル。路次ニテ田山叟ト云フ舊友ニ逢フ。年老イテイクツニナルト云フコトヲ知ラヌ人ナリ。昭ニ向ツテ「君ハ義人ナリ。母ノ敵ウチタル者ヲカクセリ。我同道シユカン」ト云フ。又申サク「此藥一粒ヲアタフ。能ク病ヲ除キ、不食ドモ飢ユルコトナケン。コレヨリサキ、道ノ北ノシゲリタル林ニカクルベシ。禍ヲマヌカル、ノミニアラズ、美人ニ必ズ逢フベシ」ト云フ。昭走ツテ入ル。此處ヲ蘭昌宮ノ舊迹ト號ク。追者尋ヌルコトアタハズシテ去ル。ソノ夜、月アキラカナルニ美女三人來ツテモノガタリシ、酒ヲ飲ム。昭コレヲキイテ、田山叟ガ云ヘル美人ハ是ナルベシト思ヒ、急ギ出ヅ。三女オドロキテ「何人ゾ」ト問フ。昭ツブサニ事ノ故ヲカタル。卽チ同座シテ茵ヲシク。昭ソノ三女ノ名ヲ問フ。其長ヲ雲容張氏、其次ヲ鳳臺蕭氏、其次ヲ蘭翹劉氏ト云フト答フ。酒酣ナル時、劉氏申サク「今夜ノ客ニタマサカニ逢ヘリ。雙六打ツテ勝チタラン者ムツブベシ」ト云フ。雲容ガ采ノ目カチタリ。卽チ薛昭ト枕ナラベヨト相サダム。又互ニ盃ヲ飲ミアウテ婚禮ノ儀トス。昭拜謝シテ問フ「女郎ハ何國ノ人ゾヤ。何ユヱニ此處ヘ來ルヤ」ト。雲容答ヘテ云ヒケルハ「我ハ楊貴妃ノ侍兒ナリ。霓裳羽衣ノ曲ヲマナビテ、玄宗皇帝ノ門前ニテ舞フタリキ。楊貴妃、詩作ツテサヅケラルレバ、ソレヲ歌ヒテ繡嶺宮ニ侍リ、皇帝モ詩ヲ次ギタマウテ寵愛セラル。時ニ玄宗、申天師ト道術ノ事ヲカタリタマフヲ、貴妃ト我ト潜ニキヽ、又茶藥ヲ申天師ニススムルコトモアリキ。天師我ガ求ムルニヨリテ、絳雪丹一粒ヲサヅケラル。是ヲ服セバ縦ヒ死ストモクツベカラズ。魂魄トヾマリテ後百年アリテ、生ケル人ニ逢ウテ相交ル。再ビウマレ地上ノ

仙トナラント云フ。我死シテコヽニ埋メラレテ後、今既ニ百年ニナリヌ。申天師ノ詞ノシルシ、今夜ノコトナルベシ。昭聞イテ「申天師ノ形ハイカヾアリシヤ」ト問フニ、其答フル所ノアヤシキ貌、即チ田山叟ト異ナラズ。昭大ニ驚イテ、田山叟ハ即チコレ申天師ナルコトヲ悟レリ。三女相共ニ詩ツクリ歌フ。昭モマタ和シテウタフ。歌ヒ終リテ、ヤウ／＼鶏鳴ヲ聞ク。三女スヽメテ枕ニツカシム。昭起ッテ雲容ト共ニ室中ニ入ル。甚ダ狭シ。閾ヲコエテ漸クヒロシ。鳳臺蘭翹ノ二女トモニ暇乞シテ去ル。燈アキラカニシテ、侍女立並ブ。帷帳ヌヒモノヲハル。昭ト雲容ト同ジク臥シテ互ニヨロコブ。既ニ日ヲカサネテ、朝暮ヲシラズ。雲容申サク「我スデニ蘇生ス。サレド衣服フルク破レタリ。新衣ヲ得ント思フ。我臂ニ掛ケタル金ヲモチテ、行イテ衣ヲ買ヘ。」ト云フ。昭恐レテウケガハズ「縣吏ニトガメラレン」ト云フ。雲容申シケルハ、「オソル、コトナカレ。我ガ白絹ヲ持行クベシ。若シトガムル人アラバ、コノ絹ヲ首ニカヅクベシ。見ル人アラジ」ト云フ。昭コレヲ受ケテ出テ三卿ノ市ニ趣キ、衣服ニ代ヘテユク。夜ニ及ンデサキノ穴ノ邊ニ到ル。雲容出テ、門邊ニ待チテ笑ッテ引イテ

薛昭

入ルトキ「我ガ棺ヲ開カバ、即チ起タン。」ト教フ。昭ソノヲシヘノ如クニシケレバ、雲容眞ニ甦ル。其アリシ處ヲカヘリミレバ、帳モ宅モ皆ナクナリテ、一ツノ大穴ニ葬具アル迄ナリ。其内ノ寶物ヲ取リテ出ス。雲容ト相トモニ、金陵ト云フ處ヘ行イテ棲居ス。其貌オトロヘズ。二人トモニ申天師ガ藥ヲ服スル故ナルベシ。申天師ガ名ヲ元ト云フ。説淵ニアリ

巴西侯

唐ノ玄宗ノ開元年中ニ、蜀ノ國ノ人張鋋、盧溪ト云フ所ヨリ故郷ヘ歸ル路次、巴西ト云フ所ニテ日スデニ暮レヌ。馬ヲハヤメテ行カントスルトキニ、人アリ。路ノ邊ノ山路ヨリ出來ツテ申サク「我主人、客ノ日クレテ宿ナキヲ聞イテ、ムカヘタテマツラントテ、己コレマデ到ル」ト云フ。張鋋問ウテ曰ク「汝ガ主人ハ此トコロノ太守歟」答ヘテ曰ク、太守ニアラズ。巴西侯ナリ。」張鋋即チシタガヒ行ク。山ニ入ルコト百歩計ニシテ、一ツノ門アリ。朱塗ニシテ甚ダ高シ。人多ク、甲著タル者メグリマモル。國君ノ家ト云フトモ、コレニ過グベカラズ。又行クコト數十歩ニシテ一所ニ到ル。彼使者、張鋋ヲ門外ニトヾメテ「先ヅ入ッテ主人

ニ申サン。暫ク待テ」ト云フ。漸久シウシテ出テ鋋ヲ導イテ入ル。主人裘ヲ著、貌甚ダアヤシク、堂ノ上ニ立テリ。ウツクシクヨソホヘル者、左右ニ侍ル。鋋入リテ拝ス。主人揖ス。即チ曰ク「我コレ巴西侯ナリ。此山ニ住ムコト數十年、タマ〳〵客ノ通ルヿヲ聞イテ、ムカヘ奉ツテ暫クトヾメテ、モテナサン」ト云フ。鋋拜謝ス。即チ酒宴ヲ設ク。其器皆珍シキ華麗ナル物ナリ。コヽニオイテ人ヲ遣シ、六雄將、白額侯、滄浪君、五豹將、鉅鹿侯、玄丘校尉ヲ招イテ云フヤウハ「今日、マレノ客來ツテ、酒宴セヨ」ト云ヒヤル。六人ヤガテキタル。黑衣ヲ著タル者モアリ。一々禮拜ス。白額侯ハ錦ヲ著、白キ冠ヲイタヾキ、形ハナハダタケシ。滄浪君ハ青キ衣ヲ著、五豹將ハマダラナル衣ヲキル。鉅鹿侯ハツヽレヲ著テ頭ニ三ツノ角アリ。一人ヅツ拝スルゴトニ巴西侯モマタ答拜ス。各東西南北ニ列坐ス。酒ヲ飲ミ音樂ヲ奏ス。又十餘人ノ美人出テ、歌フモノ舞フモノ管絃アリ、酒半ナル時ニ、白額侯カヘリミテ、張鋋ニ向ツテ「我、今日イマダ夜食セズ。客ヨ、我タメニ食セシメンヤ」ト云フ。鋋答ヘテ「我、イマダ君ノ食物ノイハレヲ知ラズ」ト云フ。白額侯ガ曰ク「只客ノ身ヲクラハ

巴西侯

シメヨ。別ノ味ヲ求メズ」ト云フ。鋋恐レテ退カントス。巴西侯コレヲ見テ「イハレナシ。此酒宴ノ悦ニ何ゾ客ノ心ニサカフコトアランヤ」ト云フ。白額侯笑ッテ曰ク「我タハムレテ云フノミナリ。誠ニ左様ニハアラズ」暫クアリテ洞玄先生ト云フモノ來ッテ門ヲタヽキ「物申サン」ト云ウテ、黒衣キテ頭ナガク身ノ形廣キ者一人、入ッテ拜ス。巴西侯呼ンデ坐セシム。ヤガテ「何故ニキタルヤ」ト問フ。洞玄先生答ヘケルハ「我ハヨク占フ者ナリ。主人ノ憂ヒスランヿヲ知ル。カルガユヱニ、コレヲ申サンタメニ來ル」ト云フ。巴西侯「ソノ憂フル所ハ何事ゾ」ト云フ。時ニ「座上ノ客人、謀ルコトアリ。今コレヲ除カズンバ後ニ必ズ害アラン」ト云フ。巴西侯怒ッテ「此悦ノ酒宴ニ何事ノ憂アラン。是ヲ殺セ」ト云フ。洞玄先生重ネテ云フヤウハ「我言ヲ用キバ、各皆、安隱ナラン。我言ヲ用キズンバ、我モ死ナン、各モ亦死ナン。後ニ悔ユトモ叶フベカラズ」ト云フ。巴西侯怒ッテ、終ニ洞玄先生ヲ殺ス。夜半ニ及ンデ、コトゴトク皆酒ニ醉ウテ榻ニフセリ。鋋モ亦ウタヽネス。天マサニアケントスル時、忽チ目サメテ見レバ、我身、大ナル石龕ノ内ニ伏セリ。ソノ中ニ繡ノ帷幕ヲ張ル。種々ノ寶ノモテアソビモノアリ。一ノ大猿、形人ノゴトクニシテ醉ヒテ地ニ伏ス。是巴西侯ナリ。又一ツノ熊、前ニ伏ス。コレ六雄將ナリ。又其マヘニ白キ項ノ虎、醉ウテ伏ス。コレ白額侯ナリ。一ツノ狼アリ。是滄浪君ナリ。又、一ツノ豹アリ。是五豹將ナリ。又一ツノ鹿、一ツノ狐アリ。ソノ前ニ伏ス。コレ鉅鹿侯、玄丘狡尉ナリ。ミナ同ジク醉伏シテ正體ナシ。又一ツノ龜、ソノ龕ノ前ニ死ス。卽チ先ニコロス所ノ洞玄先生ナリ。鋋コレヲ見テ大ニ驚キ、急ギ山ヲ出、馬ヲ馳セテ里人ニ告グ。里人相集リ、百人アマリ弓箭ヲトリテ山ニ入リテ、其所ニ到ル。猿忽チ驚イテ嘯キサケンデ「洞玄先生ガ諫ヲ聞カズシテ、今果シテカクノ如キカ」ト云フ。諸人其龕ヲトリマキ悉クコレヲ殺ス。ソノ隱シテタクハヘタル所ノ珍物ヲ記シ、事ノ子細ヲ太守ニ申ス。コレヨリソノ憂ナシ。説淵ニ見エタリ大平廣記ニモアリ

怪談全書巻之五終

右怪談全部羅山子作之

元禄十一年戊寅八月吉日

江戸上野仁王門筋中町
中野孫三郎

京五條橋通
福森兵左衛門

板行

古今奇談 英草紙

古今奇談前編

英草紙

浪花書林

稱觥堂
崇高堂

隣家の方正先生余が文房に飲む。傍に英草子の藁あるを把つて、纔に其目を見て是を置いて云ふ、足下倦れたれども尚青雲の志あり、此遊戯の書に目を厭ふべし。余酒氣を帶びて笑うて答ふ、先生の言是なり、余また此書の爲に說あり。彼の釋子の說ける所、莊子が言ふ處、皆怪誕にして終に敎となる。紫の物語は言葉を設けて志を見し、人情の有る處を盡す。兼好が草紙は惟假初に書けるが如くなれども、世を遁るる事の高きに趣を歸す。今の世大道を照すに人乏しく、

光をつゝむ人はなほ更なれば、明教につかんと欲する人も、其懐璧の圓ならぬを玼瑕としてこれを顧みず。或はをしへを受くる者も、琢磨の意淺ければ眠を生じ易し。金玉の言耳悦ばしからぬ謂歟。近路千里の二人の主は、余が物覺えてより竹馬に鞭打ちし、夕影隣を遷されし朝も、行くに留るに形影の離れざるがごとく、素姓も亦余に齊しき一畝の民にして、耕いとまなきに、雨日の閑の時々、此草紙を記して同社中の茶話に代ふるの本意とす。原より名山に藏して

後世を待つの物にあらずといへども、此書義氣の重き所を述ぶれば、昔より牛喘を問うて時の政を知り、馬洗の音を聞きて阿字をさとり、風の音に秋の深きをしり礎のひゞきに冬の近きを思ふためしあれば、鄙言却て俗の徼となり、これより義に本づき、義にすゝむ事ありて、半夜の鐘聲深更を告ぐるの助とならんこと、近路行者千里浪子の素心なる哉。こゝに足らざればかしこに餘りあり。此の二人生れて滑稽の道を辨へねば、聞を悦ばすべきなけれども、風雅の詞

に疎きが故に、其文俗に遠からず。草深き人となれば、市街の通言を知らず、幸にして歌舞伎の草紙に似ず。賜覧の君子、詞の花なきを以て英の意を害する事なくして、雨生の幸ならんのみ。

寛延己巳の初夏十千閣の主人十千閣上に筆を操る

太平逸民

が故に其文俗に遠からず草深き人となれば市街の通言を知らず幸にして歌舞伎の草紙に似ず賜覧の君子詞の花なきを以て英の意を害する事なくして雨生の幸ならんのみ
寛延己巳の初夏十千閣の主人十千閣上に筆を操る

古今奇談英草紙惣目録

近路行者　著

千里浪子　正

第一篇

後醍醐帝三たび藤房の諫を折話

第二篇

馬場求馬妻を沈て樋口が聟と成話

第三篇

豊原兼秋音を聴く国の盛衰を知る話

第四篇

蓮川源左主山にて一道を得る話

第五篇

紀任重陰司に到て滞獄を断る話

第六篇

三人の妓女趣を異にして各名を成す話

第七篇

楠弾正左衛門が草履を戴して敵を制する話

第八篇

白水翁が売卜直言奇を示す話

第九篇

高武蔵守婢を出して媒を辞る話

以上九篇

古今奇談英草紙第一巻

一　後醍醐の帝三たび藤房の諫を折く話

萬里小路藤房卿は宣房卿の子なり。幼より好んで書を讀み、博學强記和漢の才に富みて、早く黄門侍郎となる。建武の帝命じて尙書を講ぜしめ給ふに、よく其旨を解き得たりしかば、帝深く其才を愛し、常に左右に侍せしめ給ふ。元弘の變に帝武家にとらはれさせ給ふ折からも、藤房是に從ひ奉る。御開運の後つひに上卿となる。此時速水下野守といふもの、もとは參河の國の住人にて、足助重範が一族なるが、官軍沒落してより東國に逃げ下り、こゝかしこにせぐくまり、公家一統の時を待ち得て都に登り、萬里小路藤房卿について天氣を窺ひしに、速水が幸にやありけん、何事にや叡慮うるはしき折からにて、不便に思召され、一个の莊を宛て行はれ、一首の古歌を賜ふ。

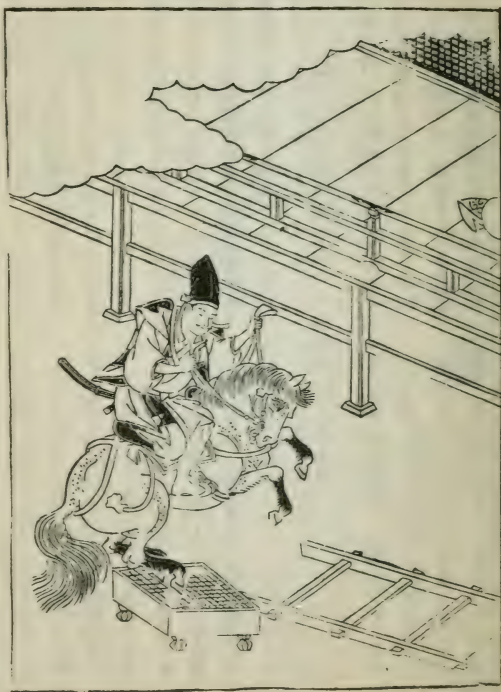
　あづま路にありといふなる逃水の
　　にげかくれても世を過すかな

藤房此哥を見て、博識の人なれども、いかゞしたりしや、此哥知り給はで、是古歌なるとは思ひもよらず、帝の新製の哥なりと思ひ、「逃水のことばふしんはれず。かれが姓を咏み入れられしとは見えたれども、逃水といふつゞきいかならん。其上速水の速の字に逃ぐるの意なし」と難じたりければ、帝大に御氣色損じ、次の日藤房を召して、「東の哥枕見てこよ」と、追ひやり給ふ。藤房何の罪とはしらねども、叡慮にまかせ旅だちて、いつかへりいつあふさかのせきならん、しられずしらぬ旅の行衞の心ほそく、ゆき〳〵てむさし野のはてなき道にかゝり、見わたせば、其廣きこと雲をしのぎ、霧にへだてゝ、たゞめのおよぶ所にかぎれり。春の末草葉のしげりしあひだ、はるかにむかうに流るゝ川あるは、かの調布さらす玉川にこそとおもへど、問ふべき人なく、川を目につけて行けども、曠野の內遠近も目當違ひて、ゆけども〳〵、川ははるかむかうにありて同じ程なるはいかにと思ふ內、からうじて一人の田夫に行逢ひたり。「やおれむかうに見ゆる流は何とよぶ川ぞ」と尋ね給へば、此田夫云ふ、「此あたり、西は秩父根東は海北、南の向が岡、都筑が原より、北は河越にいたり、此あひだをむさし野といふ。縱横十郡に跨れ

り。其内にたゞ三つの川あり、玉川久米川入間川なり。年とらず川などいへるは、あるにかひなき細き流れにて、節分の夜は、きはめて水ながれざる故、かく名くるとなり。それゆゑ水にとぼしく、野に出づるもの、器に水を貯へ持ちて渇をうるほす。此あひだに川もながれも目にさへぎることなし」と答ふ。藤房、「むかふに見ゆる川よ」と指ざし給へば、田夫顧みて笑うて云ふ、「あれは川にては侍らはす。あれこそ山峯に雲を出すがごとくにて、地氣のなす所、いつとても春夏の際遠所より見る所、水の流るゝやうに見ゆれども、水にあらず、其所に行けば見えず、行けども〳〵むかふへ行くやうなれば、むかしより迯水と名づけぬ」といふに、藤房心づきて、「迯水の名古き事にや」と問ひ給へば、此野夫云ふ「年老いたるものどものかたり傳へしは、是も名所の内にて、あづま路にありといふなる迯水のと、古哥に詠みおかれしよし承はりぬ」と、ねんごろにかたりて別れぬ。藤房こゝにおいて、主上の速水に賜はりし哥は古哥にて、迯水は古き歌名所なることをはじめて悟り、むさし野の草葉がくれに行く水のとある古哥にも思ひ合され、詠林のしげき、いまだ我覺えざる名歌多かるべしと、自ら眼の狹きことを恥ぢて、哥まくら見よとの叡慮も、これをおもひ知らしめんためなるべしと、こゝより都にかへりのぼり、父宣房に此事をかたれば、宣房卿いふ、「爾これほどの麁忽あらんや。其哥は俊頼朝臣の歌にて、近比去る家に深く祕せらるゝ扶桑といへる集にも出でたり」と聞きて、藤房いよ〳〵我麁忽を知り、内に參りて其過を悔ゆるに、主上も、かれに思ひしらしめん爲なれば、今はとて免されにけり。藤房かへり登る時、大内裏すでに造營をはじむ。藤房これを諫め奉らんとすれども、事已にとゞむべきにあらず。これのみならず、帝此時太平に志怠り給ひ、馬場殿を建てゝ逸遊度なく、女謁盛んに行はれ、朝野怨を含むもの甚だ多し。近比佛教を信じ給ひ、僧徒また禁宮に出入するものすくなからず。上の好むことは下倣ふならはせなれば、士民ともに佛を信用し、村落の小院までも、說法壇を設けて法を說く。後は心重からぬ僧徒多くなりて、男女の席亂がはしく、よからぬ風俗多かりければ、藤房諫を奉りて、異國本朝ともに佛教に溺して國危かりし故事を說き出し、詞をつくされしに、元より才學辯利なる帝、これを聽き入れ給はず、却つて藤房にむかひ、「梁武帝の佛に淫して民膏を費し、國の衰へとなりしは、佛法にかぎらず、淫する時は皆害あり。佛法も、國の

害になる程寄依せねば、障有るまじきことぞかし。また佛家の方便の國政に益なきこと僧が説をまたず。彼僧徒、説法壇を開きても、或は天下の害となるべきことを演ぶる時は、いかに其まゝにさしおかんや。まだしも往古の僧哲は、氣性强かりしかば、公政をも恐れず。今の僧徒は佞諛のもの多く、猶以て國法を害することなし。近世は僧に雅俗の別出で來りて、中にも俗なる僧の、弟子を指教して宗儀の深意を釋し、佛語を表裏より推して悟らしめ、終に佛身を成就するあれど、今の俗僧の、俗男女に説き聞かしむる所は、理を淺く説くをもつぱらとして、滑稽笑話の類なれば、二度童にかへりたる婆翁、理屈はなしと同じ耳に聞けば、誰か聞きこんで發心するものもなく、説法者も聽衆に憚らず、書籍は膝前に披きながら、目はひたすら空焼のかたにむかふ。檀上に躍り狂うて法衣の袂をかゝげ、雇はれし寺の喜捨を募り、巧みに自己が衣料を乞ひ、觀音の小像を賭にして福引するにいたる。此體の放下同前の佛説を聽くもの、一人として大義のわきまへあるものなければ、人をたぶらかす程の邪智もなし。僧が心の底は、天下の人を皆學者にもして、理に明らかならしめんと欲するならん。左ある時は、恐らくは僧徒の外に不耕して喰ふもの多くなりて、其中には學問の理を假りて非をかざるもの、或は公の事につけて管見の議論をなし、人民の心を迷すやから出來り、彼にも此にも理屈行はれて、政道の害となれば、僧徒は物の數ならず。秦の始皇が儒者を埋殺せしも深き意あるべし。天下の上に立つものは、民百姓を伶俐發明にあらしめんと思ふ事はさら〳〵なし。偏に律義にして國法を奉じ、小善といへども爲すべき人柄にあらせ度く思ふばかりなり。今の俗僧の説く所は、民百姓の惡發明にのみなり行くを、愚なるかたに引きもどす一助ともなるべし。儞今すこしく心を高うして見るべし」と、綺言の辯ずる所謂なきにあらねば、藤房卿再主上に說き得られ、閉口して朝を退きぬ。事理に明なる君なれども、逸遊日々にさかんなれば、此朝廷治り果つべくも覺えず、折あらば、再三折檻の諫を奉らんものをと思ひくらされける。一年雲州鹽冶判官が許より、龍馬なりとて月毛の馬を進奉す。「其形頭は雞のごとく、背は龍に似て、四十二の拳毛脊筋に連り、兩の耳直に立ちて竹を剝ぐがごとく、雙の眼鈴を掛けたるかと怪しまる。今朝卯の刻雲州富田を發して、酉の刻京着す。其道七十六里、鞍の上座せるがごとく、風をきりて走る故眼ひらきがたし」と奏す。則左馬寮に

養はしめ、馬場殿に幸なりて、此馬を叡覽あり、本馬孫四郎重氏を召されて曲馬を乘らしむ。乘人の心に應ずること尋常ならず、誠に天馬ともいふべし。叡慮悅ぶこと類なく、「我朝に天馬の出づること朕が世是れ初なり。吉凶如何ん」と御尋ある時、左右皆云ふ、「是嘉瑞なり。周の穆王の世八疋の天馬來り、是に乘つて天地の間に周遊すといへり。天馬は麒麟の類なれば、是聖明の德の顯るゝ所なり」とぞ賀せられけり。折しも藤房の卿參られけるに、主上天馬の吉凶を勅問ある時、藤房申されけるは、「天馬の本朝に來れる、其例なければ、善惡は勘へがたし。然れども、此馬吉事の用には立つまじきか。漢の文帝の時千里の馬を獻ず。文帝是を受けず、帝王、吉に行けば日に三十里、凶に行けば五十里、鸞輿前に在り、屬車後に在り、われ獨り千里の駿馬に乘ずとも、從ふ者なくして帝王何國にゆかんやと宣ひけるとなり。周穆八駿に駕して遠遊を好み、明堂の禮に怠りしは、周の世の衰ふるはじめなり。今大亂の後、民費え人苦みて、天下いまだ安からざるに、人主の誤を正すべき執政もなく、群臣言に阿つて國の危きことを申さず、大內裏を造り、馬場殿を建て、民に課役

をかけ、宸襟を休め奉りし功臣を賞し給へども、恩賞其功にあたらず、忠功空しく怨を含むもの多し。他日天下に不慮の事あらん時、天子此龍馬に駕して南山北嶺に避け給ふとも、群臣は從ふことあたはず、只遠國に急を告ぐる時用ふる所あらんのみ」と、是をよき次として諫められければ、諸臣色を變じ、旨酒の高會も無興にして、主上逆鱗の氣色ましく〜て、「爾見淺くして天馬を不吉とす、爾かの穆王の八駿倶に皆同じ馬なるや、或は其能各異あるか、何の書に是を出すことを知るや」藤房一時此こと思ひ出でず、たゞ云ふ、「周家の本紀是をしるさんのみ」主上頭を搖らせ給ひ、「八駿各其能異なること拾異記に是を出せり。周穆の八駿第一を絕地と名く、馳するに蹄地を踐まず。第二を翻羽と名く、行くこと飛禽に越えたり。第三を奔霄と名く、夜萬里を行きて迷はず。第四を超影と名く、日の足を逐うて行く。第五を踰輝と名く、毛の色光明炳輝。第六を超光と名く、形一つにして十の影あり。第七を騰霧と名く、雲にのりてよく走る。第八を挾翼と名く、身に肉の翅あり。穆王此八疋の馬にたがひにのりて、天地の間に行かざる所なしと書き傳ふ。今此一馬、かの八駿

の能を兼ねたりとも、朕いかんぞ是を遠遊の爲に用ひて朝政を誤らんや。名劍といへども、敵を斬り身を殺すの吉凶たがひあり。皆其用ふる人の禍福善惡に依るものなり。儞の狹き量を以て天下を概することなかれ。むかし魏の任城王曹彰、駿馬を愛して愛妾と換へたり。後世美談として樂府に製して是をもてはやす。武を重んずるものは馬を愛すべし。今の時馬を愛するは武をわすれざるの時に當れり」藤房常に主上の准后の美色に迷ふて政に害あることを惡めば、帝の言に應じて云ふ、「主上よく愛妃を馬に換ふることを得るや。馬に追風千里の能あり、美女に沈魚落鴈の容あり、恐らくは君二つながら棄つることあたはざらんことを」帝藤房に心病を言ひ當てられ、心に深く恥ぢて、此時只博識を以て是を壓さんと欲し、「儞沈魚落鴈の四字の出づる所を知るや」藤房言す、「沈魚落鴈の字は、唐の宋之問が浣紗篇に云ふ、鳥驚きて松蘿に入り、魚畏れて荷花に沈むと詠ぜしより出でて、美人は魚鳥も是に愍するを云へり」帝大に笑ひて宣ふ、「儞知らず、沈魚落鴈を美人の佳稱とするは、元是れ誤なる事を。此詞漆園氏の語に出でて、毛嬙麗姫は人の悦ぶ美人なれども、魚は人のけはひだにすれば深くかくれ、鳥も人だに近よれば高く飛んで去る。人は愛すれども魚鳥は其捨別なきことをいへる詞なり。後世轉じ誤りて美人の稱とす。儞故事を引きて朕を動さんとならば、今暫く恩の下に年を積むべし。今日此馬場殿は遊閑の地なるゆゑ、儞が罪を問ひ定めず。朝廷にありて此過言を出さば、罪を問ふべきこと免れがたし」と、詞嚴に宣ひて、其日の御遊は抑やみぬ。藤房卿第に退きて歎じて曰ふ、「治世の期、吁やんぬるかな。今主上智は奢に用ひ、辯は非を飾ふに足る、下官不才の言動すべきにあらず」と。遂に自ら官を辭して北山の下に去つてかへらず。帝驚き思召して、父の宣房の卿に詔して、是を求め還さしむれども、竟に其行く所を知らずなり給ひぬ。

二　馬場求馬妻を沈めて樋口が聟と成る話

天文の頃、江州觀音寺の城は佐々木家代代の要害にて、城下の民人も國主の勢葬す。然れども貧富は人の命なれば、此城下といへども乞丐甚だ多く、又乞丐を管領して丐頭と稱するものあり。數代此ある餘光を蒙りて、隣國に手ざす諸侯もなければ、國中安靜にして、商賈家業に怠らず、市町賑敷く、國民枕を安んじて

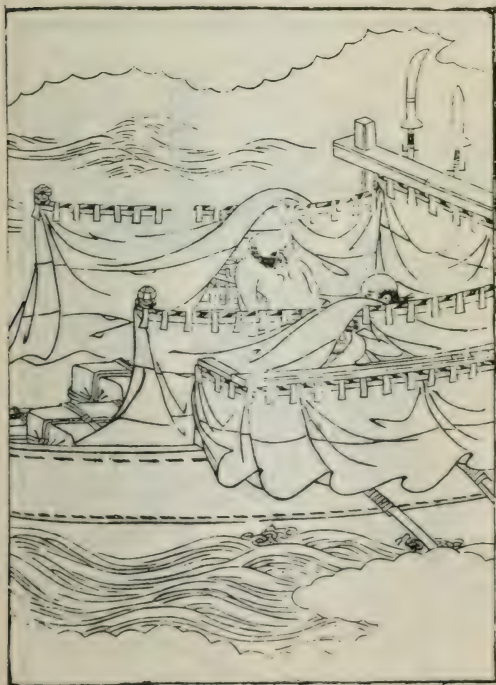
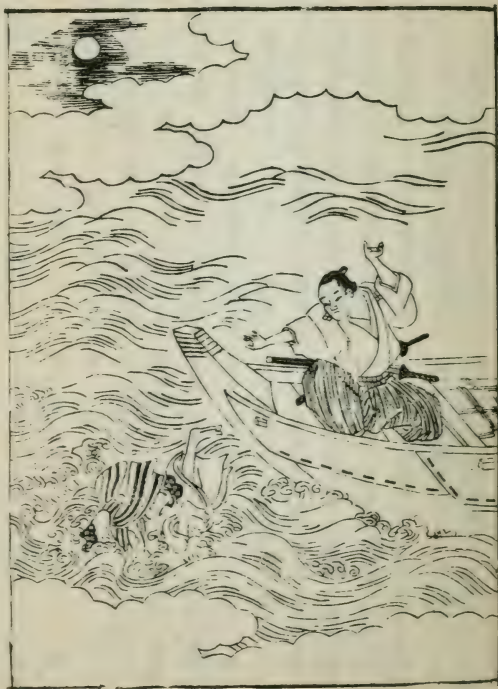
頭をたし來りて、代々通り名を小二郎と云ひ、多くの乞食より毎月常例の役錢をとり納め、或は雨雪の頃、人の施なき時は、頭より粥を煮て養ひ、頭の門内に集り居て、草履草鞋を造りて例錢の便とす。如此の事數年、丐頭の家漸々貯積みて、家富むに隨ひ、猶業を改むる事を思はず、地を求め田を得るに及びても、此丐頭の名目をのがれねば、百姓町人に交る事あたはず、市に立ち途を行きても、己が手下の乞食より外は、少しの敬ひする人なし。只門をとぢ、家内に在りて、氣隨言ふに如かず。世上にいやしまるゝ娼家伎優の類にさへ、入れられず、別の目を以て見らるゝこそ口惜しけれ。この時代に當る小二郎、名を元義といふ。生得少しの志氣ありて、丐頭の職を我甥大六に讓りて、是を小二郎と改名させ、其身は入道して法名淨應と呼び、貯へたる財寶田畠まで、皆別家に隨身して移り、少しも乞丐の事にあづからずといへども、世の人言ひ改めず、淨應を見れば、前の丐頭とぞ申しける。淨應年五十に餘り、妻は七年以前に逝きて、男子はなく、一人の女あり。阿名を幸とよぶ。顔かたちは家がらにも生れ增り、類ひなくうつくしかりければ、淨應寵愛する事掌中の珠のごとく、たちぬふことのいとま、和哥の道に心をよせさせ、其頃はいまだ下ざまにもてはやさゞる得がたき草紙ども讀み習ひ、勢語は諸家の說を窺ひ、其趣を極め、源語は孟津を問ひ河海に至り、其外諸家の集、勅撰の類、しかるべき哥書に渡らざるはなし。淨應女の才を自慢して、町人百姓の中にて然るべき壻をと心がけけれども、家風の事知らざるもの無ければ、誰入贅せんといふものなく、阿幸十八歲に至るまで緣の事とゝのはず。爰に隣家のもの言ひ次ぎて、老蘇の里に、馬場求馬とて一人の浪人、先祖故ある者にて、少しの才學有れども、父母に早く後れて、家貧しく、三十に近づけども定まる妻もなく、たとひ他家に入贅して成りとも、家傳の職を成就し、今の時節、家名を起さんと願ふ人あり。息女を妻すべき志はなきや、といふ。淨應家系あると聞き、何さま是を女に妻せて、彼が家を引き起さば、我家も倶に面目を雪ぐ事あらんと、心案決定して、彼隣家の翁を賴みて馬場に口入せしめ、淨應が家筋少しもつゝまず語り聞かせて、「足下器量ありて小儀にかゝはらず、彼家に據りて時を待つの志あらば、我媒して參らせん」といふ。馬場心に思ふやう、我今衣食とぼしく、婚娶の事はさて置き、このまゝに埋れ果つべく覺ゆ、時この亂世に當りて、權門貴族さへ功を計へて家を論

ぜず、況や我身をやと、遂に志を決して老人の詞に随ひ、吉日をえらみ、淨應が家に入家して、幸と夫婦と成りけり。世にすぐれたる美妻を設けたる上、衣足り食ゆたかにして、事々懐に稱はざる事なし。淨應器量ある聟取りたりと悦び、席をはらうて饗應を催し、近隣の往來する人家、又は求馬が日頃の朋友を招請して、交る〳〵六七日の亭主をぞなしける。一族の丐頭當小二郎、此由を聞いて大にねたみ憤り、彼と我とは一類にて、彼も元は丐頭なり、彼が家に婚を取らば、我も一盃の喜酒に預るべきに、婚儀なりてすでに一月、饗應又六七日、尚一寸の招状を送らず、彼が壻、たとひ國の守の執柄にもせよ、我一族にまぎれなし、淨應常に我を遠ざくる心有るがゆゑ、此失禮にいたる、さらばかれを一惱しなやませて、この怒を漏さんと、手下の前後しらぬ乞丐を五六十人引連れ、一齊に淨應が家に來る。門前の喧しさは何事にやと、淨應門首に出でて見る時、さも有るべし。物の多く集りしを壯觀とはいへども、癩椀破席を持ち連れしは詠めともならず。破襦袢を肩にて結びつぎ、竹杖破椀を手に携ち連れたる中に、顔を代赭

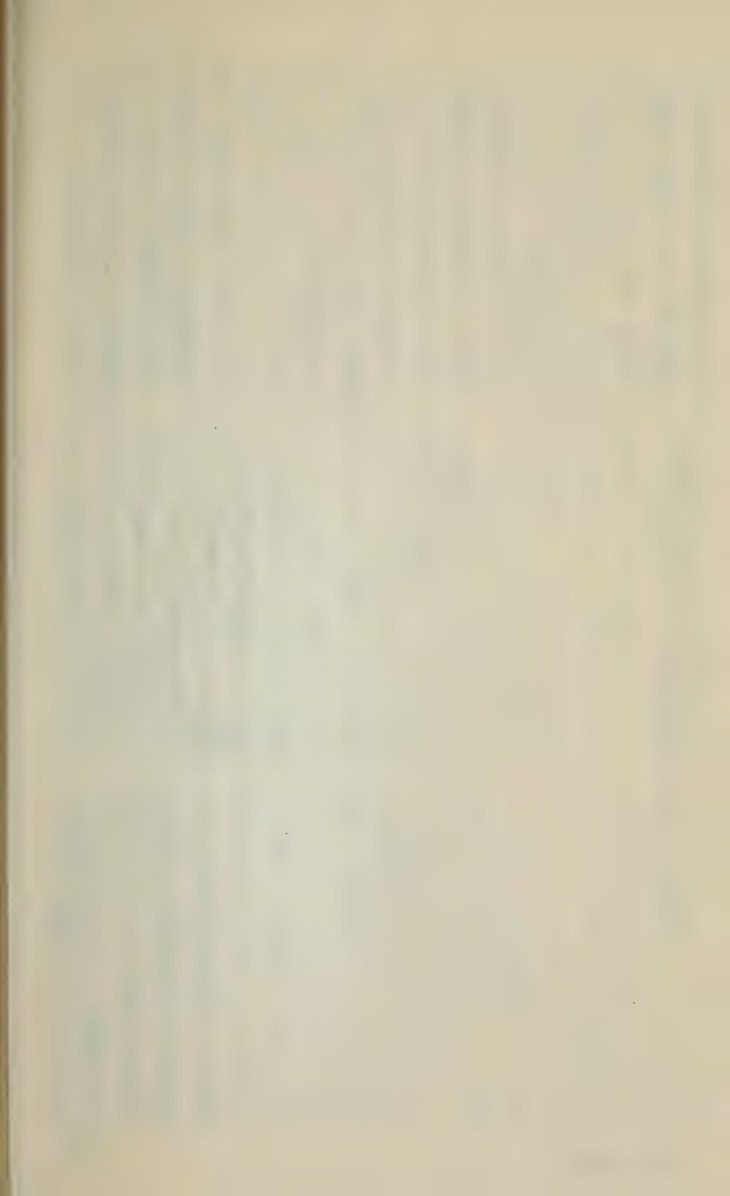
石に彩色きて疫神を塗り、蛇を首筋に纒せ、竿頭に破椀を廻らし、拍子を打つて平家をうたふ、おのがさま〴〵なり。是等の外道窮鬼は鍾馗の手をかりても退くる事難し。

小二郎眞先に酒宴の席に亂れ入り、先づ手を下して、我一と酒肴を取り喰ひ、「聟どのに對面せん」とよばはる。五七人の喜客も肝をつぶし逃け出づる。求馬もきようがる事に思ひ、朋友につれて逃けかくれぬ。淨應すべき樣なく、小二郎に向ひ、「今日は壻が招きたる人々にて、我招く所にあらず。近日汝をも招きて酒を汲むべし」と、衆乞丐にも酒をのませ、鳥目をあたへてかへしぬ。幸は一間にありて、涙にくれて夜を明し、求馬も朋友の家より歸り來る。淨應も壻にまみえて面に羞を含み、お幸と共にわが門風の惡しきを恨み、とにかくに、一日も早く求

馬が出身の便を得て、他國にも移り行き、この門風をかくさんとぞ願ひける。求馬は元來軍機武術の家なれば、何とぞ復び軍師の家を起さんと、和漢古今の典を涉獵し、累世家傳の書に心を勞し、我家の傳に付いても發明するに至る。是みな衣食の念に勞なく、一味に心を用ふるのいたす所なり。今の世の中、軍術を詢へて

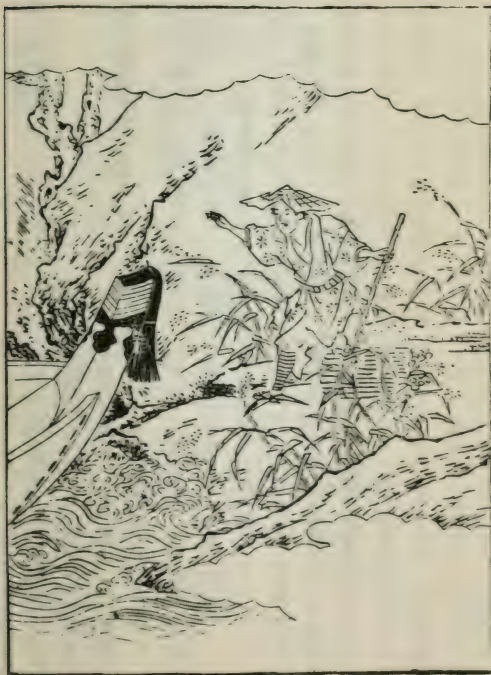
緣に就くもの多しといへども、當時高名の軍家わづかに一兩輩を除きて、外に將壇に登りて、我目より見上ぐるものなしとみづから心にゆるし、仕官の望急にして、其便を聞き繕ふに、當時將軍家の姻家として寄重き大名若狭國武田家より召されて、千二百貫の扶持を賜り、奉公の約相濟み、來早春御國に引き移るべき由の嚴命なり。是も偏に父祖馬場何某が世に名をしられたると、ひとつには養父淨應が餘光によるものなり。世の人見るべし、人心反覆常なき事、是則ち常なるかな。求馬此時に至りて心に思ふ樣、早く今日ある事を知らば、此丐頭の女婿とはならじものを、是れ我終身の瑕なり、妻又賢慧にして七出の條を犯さねば、今更是を絶つ事もならずと、是に心を苦しめ、妻女の緣によりて名をなすの助となりしことは、いつしか春氷と解けて睦月中旬、既に若狭に趣く。發足の日になりて、淨應宴を設けて行を送る。此時丐頭丐子恐れをなして門に近よらず。観音寺より若狭にいたるは、湖上の便船よければ、書籍雜具等を舟に積み、馬場夫婦從者と共に乗り移り、岸を離れ、其日夜に入りて長濱の邊にいたり、向風なりとここに船を泊めたるに、頃しも新春十五夜、

月影晝のごとし。求馬舳さきに出でて月を見る。從者皆寢靜りて、四邊を顧るに人なし。心澄むに隨而復丐頭のことを想ひ出し、忽ち一個の惡念起つて、是非此婦人を殺して、終身の辱を免れんと、お幸が眠を呼び覺して舳さきにさそひ出で、「今宵こそ一年の滿月の始なれ、賞せずんばあるべからず。ことさら限なき影の水に映ぜしは、陰り易き秋影に讓らず」と、妻が思ひより無きをうかゞひ、力を極めて、一推に水中に推し落し、急に水手を呼びおこし、「肝要のことあり、快く船を開くべし、褒美をとらせん」といふに、何かはしらず、舟方共櫓を取りいそぎて、一直に船を二十町ばかりやりぬ。求馬此所にてはじめて妻女の水に落ちしことをかたり、「彼月を見んと欲し、過ちて水に落ちたり。ちからの限り救はんとしつれども、はやく沈みて見えず、思ふに早晩魚腹に葬りなん、不便さよ」と、顔に袂をおほひ、舟方ともに賞錢を與へければ、皆々聞かねども其心をさとりて、誰か再び此事を問ひ定めず。船すでに北浦につきて、夫より城下にいたり、紹介の人に就いて主君に相見し、兼て賜はり置きし設けの宿所に移りて住みける。爰に當家に肩をならぶる者なき一の人、樋口三郎

左衛門といふものあり。此一兩年公役にかゝりて京都に在りしが、頃日歸國したるに、家のきりうどなれば、當家の諸士悉く來りて其無事を賀す。馬場も參向して、初めて對面せしに、懇意の會釋どもありしとて一ッの面目に思ひ、時ならず此家に行きて其安を問ひけり。樋口、馬場が若うして才識のすぐれしを愛し、彼がいまだ獨身なるをあはれみ、馬場が宅邊に近き梅山何某をまねきていふやう、「我妾腹の女子京都に生ひ立ちしを、此度倶して歸りぬれば、是を馬場に嫁せんと思ふ。彼若けれども、こゝろ高ければ、うけがふべきや否やを恐るゝ」といふ。梅山いふやう、「彼寒門より出身して、當家に出づることを得たり。貴君の緣者となることを得ば、蒹葭玉樹によるがごとく、何の幸かこれに過ぎん、必定此事調ふべし」といふ。樋口悅びて、「左ある時は足下を煩はす。馬場に此由を通じて、好音を聞かせ給へ」といふ。梅山何某馬場が第に行きて此由を告ぐるに、馬場如何ぞ依允はざらん。「權勢ある人の我を女婿に望まるゝこと身の幸なり」と、梅山が媒介によりて、期をえらみ、財帛をそなへて聘を納む。婚姻の吉期にいたり、馬場親迎の儀を行ひ、岳家に至る。此時馬場心中九霄雲裡に登る心地、懽喜形容すべからず。玄關に入り案內につれて次の間に通る時、兩邊より七八人の使女ばらばらと立ち出で、馬場を中にとりまはし、細き籬竹を手に〱執つて、頭肩のわかちなく打つ。思ひがけなく、驚けども、女なれば手むかひもならず、雨點のごとくに打たれて、慌てゝ身を縮め、一堆と成り、「誰かある、是とゞめて給はれ」と呼はる時、奥の一間より嬌聲宛轉とひびきて「道しらずを打ち殺して益なし。ゆるしてえさせよ」と聞ゆれば、使女どもも打つことをやめて、七八人がよつて耳を扯き、肩を挽き、足を地につけしめず、擁みて奥に引立て行き、新人の面前に引きすゑたり。馬場口中につぶやきて、「我に何の罪ありて如此に翫弄するや。執權家の勢を賣弄ふにあらずや」と、頭を舉けて看る時、燭臺白晝のごとくかゞやき、行器に腰打ちかけて立ちたる婦人は、原の妻女幸が姿に少しも違はず。馬場膽驚き、「亡妻の怨靈なるか、是我が鬼夢なるにあらずや。さもあらばあれ、覺えある我罪なり。今更謝するに詞なし」と、額に汗していふ。傍の女ばら皆袖を掩うて笑ふ。其時樋口奥より出で、「賢婿疑をやめよ。是こそ、某歸國の船中、水にたゞよひたるを救ひあけて、養ひ置きし我愛女なり」馬場ますく〱おどろきをかさね、手を拱いて、「我惡事なり、何事もゆるし

給へ」と、頭をたゝみに著くれば、樋口云ふ、「此事それがしが知らざる所、如何ともいひがたし」お幸怒れる涙を堪へて罵つて云ふ、「薄情の人我父親の助によつて、家業を成就することを得て、恩を思はず、われを水に沈めたれども、天の憐ありて、今の恩人に救ひあげられ、養うて義女とす。今日何の顔あつて儞に見えん」と、聲を放つて哭く。馬場羞慚面に滿ち、閉口言なし。只頭を低れてあやまりゐる。樋口お幸を勸めて云ふ、「今賢婿如斯く深く罪を悔ゆ。此以後敢て儞を輕慢むることあるまじ。わが面に免じて恨を散ずべし」樋口が妻室も立ち出でて、とも〴〵になだむ。原より幸が恨み罵る本心、夫を捨つる心にあらねば、こゝにおいて詞をやはらげ、此席において婚儀を執行ふ。樋口曰ふ樣、「賢婿常に岳家の卑賤を恨み、夫婦愛を失ふにいたる。今某縁者となれ共、祿うすく任卑しければ、恐らくは賢婿の意に滿つまじ。たゞ貴賤の字を論ぜず、英雄の志を以て交るべし」といふ。馬場我心中に深く恥ぢて、面皮を紅めて、ひたすら倘罪を謝し、夫婦打ち連れて宿所にかへりぬ。此後馬場夫婦和好類なく、樋口夫婦に待すること眞父母のごとく、又觀音寺より淨應をむかへとりて、奉養して孝を盡し其終を送る。馬場と樋口と、兩家由緒ある家と成りて、共に榮えぬとかたり傳へたるとなり。

古今奇談英草紙第一巻終

古今奇談英草紙第二巻

三　豊原兼秋音を聴きて國の盛衰を知る話

豊原太夫將監兼秋は、元弘の始、後醍醐帝鎌倉の逆臣を避けて笠置の石室へ臨幸なりし時、諸卿と共に供奉に加はり、御輿など擔きたる事ありしが、笠置沒落の時、兼秋も六波羅へ捕られ、糺明せられしかども、供奉したる計にて、させる罪科なければ、祿を放ちて京城を追はれ、紀の本宮に下りて、少の由緒ある方へ身を寄せ、在るに甲斐なき身となりて二年を送りぬ。元來家の傳ありて、音樂に妙なりしかども、此年比の騷劇に紛れて、偶に絲竹を操るさへ、かゝる漂泊の身の故にや、絲管の音さへ快く出でざれば、みづから操るに懶く打過ぎたり。元弘三年の夏の孟、清女が更なりと稱せし月の比に、心の趣く事ありて、鳳管を取り出し、呂律を調ぶる内にも、當初御遊に參りて目出たかりし事共を思ひ出でて、懷舊の涙つゝみあへず、再び還幸を拜み奉る事も有るやはと、還城樂を竊きすましけるに、いつにかはり、快き音の出でければ、何となく心いさみして、音聲に心をとゞめて想ふやう、此一兩年はしたゞみたる音のみ出でて、我運命の拙き事を淺間敷思ひたりしに、今宵主上の事を懷ひ奉りて調べける此管、此比に覺えざる妙なる音の出づる事、考ふるに、近比主上聖運を開かせ給ふ事あるべし、都にいたりなば、其動靜の知れぬ事あるまじと、思ひたつより心忙敷、其夜に旅の調度とり認めて、明早に本宮を出で、夜を日に足して上りし程に、已に泉南の地にいたれば、此彼に人の打ち寄りて、いかめしく語るを聞けば、隱岐の帝配所を御のがれ坐して、書寫に御詣あり。今日しも兵庫に仙輿を蹕めらるゝよしを、民の心にもうれしげに語るを聞くより、兼秋は、途を變へて兵庫にいたり見れば、御迎の爲とて諸國の武家司所せくばかり參り集りたり。此日鎌倉の亡びたるよし、御座所まで告げ奉りしとて、歡びの聲街に充つ。兼秋天へも擧れる心地して、諸卿の內年比懇意の方に就きて龍顏を拜し奉りしに、思召し立ちし最初、御輿に隨ひし者なれば、御氣色もうるはしく、夫より都へ還幸なりて、復び公家一統の天下となりて、大功の輩に忠賞を行はれけ

る刻、兼秋も原の森にかへされしかば、再び時に逢ひたる心地したり。其年の秋伊豫國河野備後守通治が方より內奏せし事の叡慮に叶ひて、宣旨下されける其使に、心しりたる者をとて、兼秋承りて下りぬ。宣旨の使なれば、重く饗應されて、歸洛にも、多くの人馬を以て送らんとす。兼秋これをとゞめ、過ぎし比より足の病發り出でて、馬輿に堪へ兼ねつれば、船にて歸り登りたきよしをいふ。大事の御使なれども、已に事調へてのかへるさなれば、海上もくるしかるまじと、花やかなる大船にて兼秋を送り登せける。船中の調度樣の物までも、心を用ひていさゝか疎略なし。一片の風帆千層の碧浪を凌ぎ、見盡したらぬは、遙山に翠を疊み、遠水の青きを積めるなり。既に讃岐國屏風が浦にいたる。比しも八月十五夜、海天一碧の月を見んと、山崖の下に舟を泊め、暮るゝを待つ內、偶然風狂ひ浪湧き、大雨注ぐが如し。多時ならずして風恬めば浪も靜り、雨止みて雲開け、一輪の明月かゞやき出づ。雨後の月、其光常に倍して、山に添ひ海に映じて、月色いふばかりなし。兼秋旅箱の中より琴の囊を取出して、囊を開き前に置き、先づ香を焚きて琴を取り、調子を搔き合せて祕密の

一曲を彈ず。曲未だ終らず、此琴聲忽ち變りて刮刺的と響く程に、新たなる琴絃の一根斷れたるを見て、彙秋大に驚きて、凡そ琴の祕曲を彈ずる時、音律を識りたるもの盜み聽く時は琴聲忽ちに變ず、都會の地、京城の片邊ならば、かゝる所にても音を識るものもあるべし、四國の海に臨みて、荒れたる山下、通ひ路さへなき所、那んぞ琴の曲を偸み聽くものあらん、若しは主上に弓引くものありて、宣旨の使を窺ふものあるか、しからずば、或は盜賊の、此船の財寶を心に掛けて、潛みかくれて、候更を待つなるべし、海上には賊船と見ゆるものもなし、「誰か有る。岸に登りて探り檢るべし。樹木の深所に在らずんば、蘆葦の叢中にひそみあらん」と下知をなせば、隨者送の侍迄、おつとり太刀にて崖に跳り上らんとする時、忽ち岸上に人の聲して、「船中の人々騷ぎ給ふな。某盜賊刺客の類にあらず」と現れ出づるは、頭に箬笠を戴きたる樵夫なり。船中まづは仔細あらじと靜つて、其樣子を問へば、彼樵夫いふ樣、「某柴を

打ちて日を晩し、驟雨に値うて雨具なければ、巖の畔に潛みて在りしが、雨晴れて歸らんとするに、珍敷雅操を聞きて、足を住め聽きとれてありしが、何とて早

く終り給ひしや」兼秋人に笑うて、「山中柴を打つの人、我琴を聴き得る事あらんや。儞誠の樵夫にあらじ。察するに盗賊の張本なるべし。早く其所を立ち去るべし。未だ罪なければ、命は助け得さするなり」と、船中少しも心をゆるさず。樵夫崖上より聲を擧げて、「大人の言葉とも覺えぬ物かな。十室の邑には必ず忠信あり。門内に君子在れば門外にも君子來る。大人は此荒れたる山下の雨の後、聽く人なしと思ひ給へども、すでに此荒れたる山下の雨の後、爰に琴を撫する人あるはいかん」兼秋彼が言ばの俗ならざるを聽きて、船端に出て、「いかに樵夫、絃の音を聽きて興ありとは聞くべけれども、琴の品曲の趣を知るにはあらじ」樵夫云ふ、「我知らずして心をとゞめんや。詩と樂とは一體兩名、音を樂とし、詞意を詩とす。大人の彈じ給ふ琴の音は、今の世に傳はる隋唐の音にあらず、東漢以上の音なり。今宵彈じ給ふは南宮の譜の後詠、博雅四帖の曲なり。是を詞にあらはす時は、

秋月蘆江白　初驚冷露時

寒衣尙未了

這の三句にいたりて絃斷れたり。第四句某よく記得え侍る。

郎喚儂底爲」

兼秋是を聞きて心の中に想ふやう、誠に此道は、其むかしあやしき草の庵より傳はりし事もありつれども、今の世にては貴人の手に而已もてはやして、村夫野人には疎き物なる上、琴は中にも其傳絶え絶えにて、我家より外に知るものなし彼いかゞして聞きとりたるや、或は若し外の家にも傳ありて傳へたるや、彼を呼んで盤問ふべしと、聲を擧げて、「崖上の人果して俗子にあらず。崖と船と問答便ならず、此船へ來られよ」といふ。此樵夫辭する氣色なく、木の根を傳ひて船に乘り移る。誠に樵夫と見えて、簑を被、芒鞋穿きて、手に尖擔、腰に板斧あり。船中の下郎どもは、彼が物語の故實ある事を知らねば、彼のもの我主人に見參して、何をか物がたるやらんと、たがひにひそみ笑ふを耳にもかけず、樵夫は徐に簑を脱ぎ、藍布袷の腰のかゝげをおろし、簑、笠、擔、斧を船の端に置きて芒鞋を脱ぎて艙に入り來る。兼秋官卑しといへども、身宣旨の使なり。樵夫に對して禮を施さば、恐らくは官服を汚すべしと思へども、已に船に請ひ下したれば、いかんともすべき樣なく、只手を擧げて會釋す。樵夫すこしも謙讓せず、直ちに平座して、人を何とも思はぬさまに、兼秋微し瞋怪を起し、わざと其姓名をも問はず、茶をも與へず、良久しく互に物をもいはざりし

が、象秋彼を流目に見やりて、「崖の上にて琴を聽きしは其方にてありしや。僊琴の由來する所を知るや。琴は何人の造る所、是を撫して何の德ありや」と、盤問ふ時、船頭呼つていふ、「風順になりて月明晝のごとし。船を出すべし」といふを聽きて、樵夫早座を起つて、「大人の御尋を申さば、隙どりて順風の便を誤り給はん」象秋、「はかるに、僊知る事あたはじ、しからば語るべし。船の遲きはいとはず」樵夫座にかへりて、「左ある時は徵しく是を演べん。夫琴の類數種あり。琴箏琵琶和琴を我朝總てことと呼ぶ。こはおの轉音にして、こととは音なり。引きならせば音あるといふことばなり。足下の學び得給へるは琴のことなり。是唐土伏羲氏の琢する所、梧桐は鳳凰の棲める樹にて、樹中の良材なればとて、一つの木を伐らしめらる。其樹高さ三丈三尺あり、三十三天の數にかなふ。天地人の三才に據つて、是を截つて三段となす。上の一段を叩けば、其聲太だ淸みて、輕きに過ぎたりとて是を廢て、下の一段を叩けば、其聲太だ濁りて、重きに過ぎて用ひず、中の一段を取つて是を叩けば、其聲淸濁相齊く、輕重相兼ねたりとて、是を長流水に浸す事七十二日、是七十二候の數なり。剴りて樂器となす。其長さ三尺六寸一分、周天三百六十一度を取る。前の方濶の八寸あるは八節の數、後の方濶四寸あるは四時を象る。厚の二寸は兩儀を象る。金龍頭、玉女腰、仙人背、龍池、鳳沼、玉軫、金徽の名あり。徽の十三あるは十二月と閏月となり。其はじめは五絃有りて、外には五行の金木水火土、内には五音の宮商角徵羽を按じたり。周の文王一絃を添へ給ふ。其音淸幽哀怨、是を文絃といふ。後に武王一絃を添へ給ふ。其音激烈發揚、是を武絃といふ。合せて七絃、宮、商、角、徵、羽、文、武なり。後世唐の太宗二絃を加へて九絃とす。我朝へ傳はりしは、唐より以前なる故、七絃の古體なる、是猶尊むべし。此琴を撫するに、香を焚き意を正しうして撫す。美善の所にいたりては、虎狼聞いて吼えず、哀猿聽いて啼かず。堯舜の御世には、五絃の琴を操つて、南風の詩を歌うて天下大に治る。是琴の德ある所なり。又和琴は日本琴といふ。忝くも日の神天磐戸に籠らせ給ひし時、御琴神天香弓六張を用ひ、其弦を鳴して神樂に和せしより起るといへり。其製六絃にして、琴甲反りて上に向ひ、弓狀のごとく、楓の枝をとりて柱とし、牙骨螺鈿の飾を用ひず、膝に安きて彈ずること古風にや、萬葉集に、人の膝の上我枕せんとあり。それがし竊に思ふに、和琴といへるも、唐土の琴のいまだ武絃を

加へざる時、我朝の神代に傳來せし雅樂の具と思はる。上古より有り傳はりし故に、やまとことといふなるべし。又或は和琴、笛などは、正しく神代の樂舞と共に造り出されし物にて、異國を俟ざるものか。我朝神道の樂舞は別に其傳ありて、伊勢出雲熊野三輪などには、むかしより殘りしと承りぬれども、近比は聞き及び侍らず。上古には、神を降すに皆此和琴を鳴せり。今の世に内の御神樂に合奏す。神人和悅妖邪遠く去る、是和琴の妙所なり。箏のことは秦の蒙恬が造る所、今世に傳はる十三絃の物なり。上の圓きは天の象、下の方あるは地の象、中の空なるは六合の象、十三の柱は十二月に閏月を加へたる象也。柱の高さ古へは三寸あり、是三才の象、長さ六尺あるは六律の象也。今樂器に是を合奏す。雄略天皇の朝、秦の酒公是を彈ぜしよし、其比はいまだ雅音を離れず。欽明天皇の世に舞樂初めて渡り、推古天皇にいたりて音樂ことごとく備はり、隋唐の音に合せたるより、箏も雅音を失して、今の燕樂音に混したり。近比筑紫大内の家にては、雅樂の曲に模擬して、大和ことの葉の頌歎を添へて作り出されしを、此比は翫ぶ人も見えたり。雅樂には、音のみありて其詞絕えたれば、かく成り行くべき事と思はるゝなり。琵琶のことは、唐土の濫觴、西域より出でたるものにて、形滿月の象にて、長さ一尺五寸、三五夜の數に象る。四絃は四時とす。我朝古代に翫びたること、諸の物がたりにも多く見えたり。是も壽永以來平語を彈ぜしより、貞敏が學びし廉承武が傳も衰へたり。唐土魏晉の世に、竹林七賢の内、阮咸といふもの、琵琶、琴の學びがたきものの僞に、其體を變じて四絃とし、十三の柱を加へて、作どころを分ち知らしむ。其以來彌變じて、近比琉球國より渡りし提琴、三絃琴といへるものを見るに、是亦琵琶の變體也。我國に其傳を知るものなければ、世に行はれず。其音を聞くに、甚だ清亮にして、其曲の品によりて、淫聲に流るべきものなれども、今の世の雅樂といへるも、前唐の燕樂にて、酒宴の席、閨の中にても奏せし音なれば、此琴も、後世我朝に弘まりなば、末代に至りては、樂器にもなるべき物なり。其餘、新羅琴、百濟琴の名あれども、悉くかたるに及ばず」と、利口流るゝが如く演べければ、兼秋是を聞きて、想ふに等閑の者にあらず、雅樂の大概を知るものか、恐らくは是記聞の耳學問なるも知るべからずと、又問ふ、「唐土にも音を知るものは、其彈ずる音を聽きて其人の思念する所を知る。我今思ふ所あらば、儞琴音を聞きて是を知るや

否や」樵夫云ふ、「大人試に撫弄し給へ。小生隨分聽取るべし。若し言ひ當てずともとがめ給ふな」といふ。兼秋斷えたる絃を整へ、沈思半晌、其意を高山にあらしめ、琴を撫する事一弄、樵夫賛めて云ふ、「琴聲美なる哉、洋々たり。大人の意高山に在り」兼秋答へず、又神を凝して再び琴を鼓す。其意を海水に在らしむ。樵夫又賛めて云ふ、「美なる哉、湛々たり。志海水に在り」此兩句を言ひ當てられて、兼秋琴を推しのけて、樵夫を上座に直し、禮をなして、「思はざりき、砂中金あり。貌を以て人を論ずべからず。願くは姓名を聞かせ給へ」といふ。樵夫も此時にこそ身を屈めて答へて云ふ、「小生姓は横尾名は時陰、親なるものは、其むかし大和介といつて、代々天王寺に住みて、八幡太郎殿より琵琶の傳を授かりし家にて、時陰は家の通名なり。近年世の中騷々敷津の國にも住侘びて、三十年以前に此國に下り、所緣にたよりて民間に潛み、淺間敷活業をなせども、此音樂の道は、故實などいみじき事ども覺えて、その事此事などは、樂匠の家にも取り失ひたると申す事多く、我等父子田かりに出でたるやすらひにも、鎌のつかを笛竊く樣にして手ざしを敎へしかば、我も心を用ひて授かり、親の覺えたる程は殘る所なく覺え侍る。琴の傳は今の世に絕えたれば識人なしと思ひたるに、今宵珍ら敷音色に耳をとめて聞きぬれば、我は琴を知らねども、管の譜に合せて曲を聽きとりたり」と語るを聞きて、兼秋、「さればこそ聞き及びたる堪能の家にておはすれ。たとへ其家にても、たゞ絲竹の程、拍子をよく覺えたるばかりにて、君がごとくに音を知るものは未だ我朝に聞き及ばず。我も琴を彈ずれども、君がごとくに音を聞とる事は及ばず。是天姓の聰明にして、傳への爲すべきにあらず」時陰云ふ、「琴は古代の音なるゆゑに、其音に頌歌ありて聽くべし。今の絲竹にては、譜なきものの聽きとらるべきにあらず。全體皆興ある音なれば、存亡吉凶いかんぞ音に聽きとるべき」兼秋云ふ、「足下のごとく音を識る人ありてこそ、我琴の甲斐もあるべし。此以後結んで兄弟となり、足下の傳はられし事も聞き、我が傳へし故實も語りて、再び足下の家をも興すべきはかりごとをなさん」と、互に心を傾けて、時陰は二十六歲にて、兼秋一歲長じたればとて、兄と敬ひぬ。後世に、懇意なるものを知音といふも此理なるべし。扨時陰の居所はと尋ぬれば、時陰いふ、「こゝより遠からず、此所多度の郡の內なり。それがしが住所はここを去ること一里ばかり、鵜足の郡に屬して山中村といふ。賢

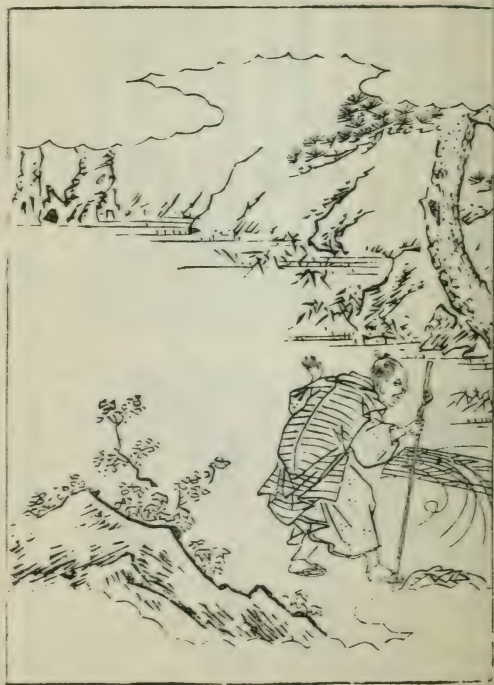
兄公のことにあらずんば草廬に案内申して、我雙親へも逢はせ奉りなん」といふ。兼秋何をがなと從者に命じて、酒を酌みて歡待する内、東方白くなりて、水手都て起き出で篷縄を調ふ。時陰も暇を乞ふ。兼秋更に一盃を進めて云ふ「賢弟に相見ゆる事、恨むらくは甚だ遲くして、別るゝ事何ぞ甚だ早きや。たがひの胸中語り盡すべきにいとまなし。此船に乘りながら、高松迄も來り給へ。人を以て送りかへしなん」といふ。時陰云ふ、「某も左思へども、二親年老いて、今宵道に滯しさへ待ち侘びなんと、罪ありて覺ゆれば其事叶はず」といふ。「然らば跡より都へ來りたまへ」「其儀も親のゆるしの程はかり難ければ」といふ。兼秋云ふ、「賢弟又孝子也。然らば明年それがし來つて賢弟を尋ぬべし」時陰云ふ、「賢兄明歳何の時來り給ふ。我道に出でて迎へ奉るべし。道の通路塞りぬれば、書信の往來も便あらじ。今其期を聞かせ給へ」といふ。兼秋指を屈して、「昨夜中秋十五夜、天明たれば十六日、我來るはかならず此中秋雨夜の内に卽ち此所に來るべし。若し時を違へなば、人と言ふべからず」と堅く約して、互に涙を灑ぎ、別るゝに臨んで、兼秋一封の金子を出して時陰に與へ、「足下の兩親は某が爲にも親なり。是を以て供養の資とす、輕きを嫌ふ事なかれ」時陰辭せずして是を受け、岸に登りてかへり去る。兼秋が船も、順風に任せて大物に著岸して、是より送りの船を還し、都にかへり登りぬれば、天氣うるはしく、不時の祿など賜はりて休息しけり。光陰矢の如く、年人を待たず、春去り夏來り、中秋の節ちかくなれば、兼秋は時陰がことを忘れず、公に暫のいとま申し請けて、津國迄出でけるが、四國の何某が送り船の還るを賴みて便船し、順風に滯なく、八月十五日に彼の屛風浦に著きぬ。水手に告げて、去年時陰に逢ひし所かと覺しき所に舟をつけて、明けなば岸にのぼるべしと、こゝに船泊りしけるが、月明白晝のごとくなれば、想ふ去歲知音こゝに逢ひし時、雨止んで月明なり、今年重ねて來りて又良夜、他岸の邊にて待つべしといひしが、其影も見えぬは、約を忘れたるにては無きか、實にや此所に泊る船外にも多く有るべし、我今日の船去年の船に異なり、我弟如何ぞ分たん、去年は我琴を彈じて彼を得たり、今宵も琴を彈じてこゝに來れる事を知らすべしと、絃を調へ、軫を轉して、纔に搔き合せけるに、商の絃哀怨の聲あり。兼秋手を停めて操らず、商絃哀聲深切なるは、吾弟必らず憂に逢ひて引き籠りおるなるべし、去歲年高き父母ありといふ、父を亡ふにあら

ずんば母に後るゝか、彼至つて孝子也、事に輕重あれば、服忌の近きが故に我約に違ふならん、天明けば彼が家に行きて尋ぬべしと、琴を收めて寢ねたれども、眼も合ひかねて、明くるや遲しと船より上り、船にもいとま遣し、行李とり持たせ、五六輩の從者を引き連れて、香燭料に送らん爲、一枚の金を封じて、其外都の土產取り添へ持たせ、樵徑を傳うて、賤のをしへにつれて一里計り行きしが、里に入つて一條の大路に出でたり。山中村へ行くには、東へや行く西へや行く、所の人の來れかし、問ひ明らめて行くべしと、路傍の石に踞けて、少く憩みける間、左の方の路より一人の老人、鬢鬚白きが、左に藤の杖を擧げ、右に布包袱を携へ、徐に步み來る。象秋近くよりて、「山中村へはいづれの方へ行くやらん」と問ふ。老人云ふ、「東も西も山中村へ行く路なり。左へ行けば上山中村、右へ行けば下山中村なり。此里、衢一條にて、十町ばかり兩傍に人家連れり。旅人は山道より來り給へば、此衢の正中へ出で給へり。是よりは、右へも五町左へも五町、旅人の尋ね給ふは上の村か下の村か」と問はれて、象秋默然として想ふに、我弟聰明の人、いかんぞ細かに居所をいはざると、案じ貞なれば、老人云ふ、「一定夫は居所をいふ人、上下を分たずに、只山中村と計り申せしなるべし。此村中に貳百家の莊戶有り。大都皆世を避けたる隱遁の輩也。老夫此所に住む事年あり、村中に知らざる人なし。御尋の人の姓名はいかなるや」といふ。象秋云ふ、「我が尋ぬる人は橫尾時陰といへり。名をつゝみ、世を避けたる人なれば、村中にては何と呼ぶやらん」。此老人時陰の二字を聽きて、雙眼より淚をはらはらとこぼして、「旅人、別の所ならば行き給へ。時陰を尋ね給はゞ行き給ふな」といふ。「こは何故」と問へば、老人聲を放ちて大に哭し、淚ながらにいふやう、「時陰は我倅にて、我家原伶倫なり。去年八月十五夜、採樵に出でて遲くかへり、都がたの樂匠とやらん、上の使にまかりて還るに行逢ひ、めづらしき琴の曲を聽きて、互ひに道をかたり、意氣相投じて、兄弟の約をなせしと、其人の贈られし金子にて、衣を買うて翁が老體を養はしめ、彼人にすゝめられて、再び家職を興さんと心をはげまし、朝に柴を打ちて重きを負ひ夜は音律の事に工夫をこらし、此故に心力耗廢して怯疾に染み、數月以前に身まかりき」象秋是を聽くより淚泉のごとく、大叫一聲して地に倒れたり。老人、「扨は家兒の物がたりせし豐原將監殿にてはなきか」といへば、從者共、「然り」と答ふ。象秋從者に扶け

起されて、人心地はつきたれど、ひたすら胸を打つてやまず、吐息して云ふ、「昨夜約を違へしかと思へば、すでに泉下の人となりしか。時陰と我と一體なれば、某ある上は時陰存生すと思ひ給へ。さもあれ、何くへか葬り給へる」老人云ふ、「我兒臨終の時、死後必ず屛風浦の崖の邊に葬り給へ、我豐原兼秋に其所に會せんといふ約あり、其言葉を違へじと思ふなり、と遺言にまかせ足下の來り給へる小路の傍、右の方に一丘の新土あるは卽ち時陰が冢なり。今日百日の忌なれば、老夫此香餠を持ちて墳前に到る所に、思はず足下に逢ひ奉りぬ」兼秋云ふ、「しからばそれがしも倶に行くべし」と、老人にかはりて、布づつみを從者にとり持たせ原來りし路に來れば、果して新丘あり。兼秋衣冠を取り出して著し、花を供じて墳前に拜をなし「我弟、聰明なれば死後にも神をとゞむべし。吾心中を察せよ」と、辭を放ちて再び泣き沈みたり。此山前山後の百姓山賤ども、見なれぬ衣冠の人橫尾が丘に參詣せしと聽きて、遠近集りて是を見る。兼秋備ふべき供物もなければ、行李より琴を把り出し、墳前に座して膝に置き、涙とともに彈じければ、此百姓ども、琴韻の鏗鏘たるを聞きて、與

趣なきものと、掌を鼓つて大に笑ひ去りぬ。兼秋彈じをはり、「彼ら何をか笑ひしや」と問へば、老翁云ふ、「邊鄙の人音律をしらず、琴を見て樂しみの具なりと思ふが故に、雅樂の清音を聞きて耳に入らず、興なきものに思ひて笑ひ散りたるなり」兼秋云ふ、「今の曲さへかくのごとし。賤識の琴の祕曲は猶さら馬耳風ならん。賤山がつにても興ありと思ふにあらずんば、此曲衰ふるもむべなり。今彈ぜしは、それがし心にうかみて手に應ずる一曲、大和ことのはに演べて、大内家の箏の組にも略似たり。其詞を聽き給へ」とて、

「此秋を、むかしになして人もがな。はかりしられぬ雲がくれ、新つかのかげ音もなし。

たよりも知らぬ此山中に、我ふりすてて一聲ばかり、それかとぞ聞くよぶことり。

是時陰を弔ふ詞なり」と、かたりをはりて、兼秋帶劍を拔き出し、琴を二つに割り斷れば、玉軫飛んで金徽零亂たり。翁驚き、「これはいかなる動作ぞや」といぶかる。兼秋嘆じて云ふ、「琴の曲久しく廢れて、漢土は元より、我朝にも知る人なく、其僅にそれがしのこれり。某是を棄つる時は、此曲永く絶えて、後の

世に琴の正音なる事をしる人も有るまじ。時陰已に空くなつて、其音を聽き知る人なければ、我再び操りても其詮なかるべし。琴の廢るべきも時運の命なるかな」翁始終を聞きて大に感心し、「家兒知己を得て未だ肝膽を吐かずして違ふ。惜しむべし、悲しむべし。さもあらばあれ、一先我家へ來り給へ。我家は上山中村の梢にあり」象秋云ふ、「それがし所存あれば、一度都にかへり、萬とりしたゝめ、程なく罷り下り、時陰になりかはり、雙親の終りを見とゞけ奉らん。其故は主上御位に復し給ひてより、假初の御遊に琵琶箏など彈じさせ給ふにも、燕なる曲のみ造らんと望ませ給ひて、ことしげき世を治め給ふべき君にあらず。是古へより傳へいふ、桑間濮上の音起りて國亡びしといふも此心なり。久しからずして都も又一變すべし。我も二君に仕へんよりは、早く身を潜めて、天年を樂しむべき所存なり」と、翁に辭して、其まゝ都にかへり登りしが、彼是につけて日を送る内、果して兵革起りしかば、さればこそと讃岐に下り、山中村にいたり、老人夫婦につかへ、時陰にかはりて其終りを送り、象秋も我子供を百姓となし、其身は入道して世を見かぎり、四國は南朝心服の國なれば、道の通路自由にて、折節は吉野の皇居へも參りけるとなり。

四　黒川源太主山に入つて道を得たる話

父子兄弟は一木の連枝なれば、不和ありて是を絶てども、父子兄弟といふ名は削られず、枝を折り梢を斬りはなしても、是其木の枝なりと、きりたる木口にあらはれ、親しみを切りたる親に恥辱あれば、子も是を恥とし、不興せし子なれども、行衛見苦敷は親の面伏なり。夫婦の間は是にかはり、天台にあらず義台にて、他人と他人がわたくしに約束して、寄り集りしものなれば、義理と信をのけては、何も無きもの也。相義して合ひ又相義して離るゝ事あり。離るゝ時は他人よりも疎し。諺に云ふ、

夫妻本是同林鳥　巴到天明各自飛

是を和げて聞く時は、

をつと妻は同じ林にやどる鳥明くれば
おのがさまざまに飛ぶ

此故に義理にも親しうせねばならぬものにて、ことに女は兩夫に見えぬ貞教ありて、夫に後れては鬼妻ともいふは　亡者の妻といふ心也。しかれば此所を思ひて、夫も一入憐むべき事也。しかれども、女は生活の業を知らねば、或は親の志に從

ひ、又は子の不便さに引かれて、心の外に再夫に見ゆるもあり。又天性の淫婦あり。丈夫の在りても、偸淡の悪事、其ほか如何敷ことどもあれども、夫は閨中の愛に溺れ、枕上の言に迷うてさとらず、婦の言によりて、不孝とも不忠ともなるもの、高明の人にも多くこれあれども、達者豈しからんや。後奈良院天文年中、羽州象潟に黒川源太主といふ人あり。若き時、秋風道人と號する人に従ひて長生の術を學び、常の產あるまゝに、家事を家人に托して、其身は世上の事にあづからず。近國の名山景勝の地に周遊してふ氣を長養し、百事緩悠にして物に愛憎なし。其氣象高きが故に、けつく世上のならはしに漏るゝ事はなさず、女色をも親まず遠ざけず、人のすゝめたれば妻を設けしが、婦の緣薄くして原の妻は病死し、次の妻は過ありて離異したり。近頃娶りたる妻女は名を深谷と呼びて、越後國岩舟何某が女にて、源太主を德ある者とて妻せし也。貌先の二人にまさりて、生得伶俐なるより、源太主に事へて自ら睦敷、夫婦共にこゝに移り彼に行き、所定めず、風水よき所は、山深きをいとはず住居す。然も夫婦一僕只三人の外は人なしといへども、いかなる故の有るにや、此源太主の居所へは熊狼も近よらず、盜賊もうかゞはず、道を得たる異人也と傳聞きて、相見せんとて來る人多ければ、やがて外の地に居を移して人に交らず。一年金花山の奧に移り、桑門の住荒したる古庵に住みけるが、一日里へ出てかへるさ、山下を行く道の傍一所の墓地あり。化人場頭樹木自ら木立も殺氣くて、數々の印の石、多くは苔に埋れたるまゝに、拂ふ人ありとも見えぬあり。源太主歎じて云ふ、「老いたる若き、愛せる惡める、賢き愚なるを分たず、爰に歸くもの幾人ぞや。人は塚となれども、塚復人を生ぜず」と、獨り言して歩み行く。こゝに新に築ける碑石の傍に、素姓賤しからざる婦人ありて、塚の傍に植ゑたる桃の實生なるに、根に培ひ水を注ぎ、心を用ふる有様、印の木とも做すべき爲かと、殊勝に覺えてよく見れば、結句碑石の前には手向たる水もなく、花瓶に供ぜる草もなし。源太主婦人に向つて、「其實生を何とてかく叮嚀に生育て給へる」と尋ぬれば、此婦人、さすが田舍とて、飾れる詞もなく、「是こそわらはが夫の家にてあり。存生の時、うらなく相なれしかば、いまはに臨みてわらはを捨てかねて、言葉をのこしていふやう、我死して後異人に見ゆるとも、三年を過ぐるまでは待てよかし。實生の桃を家の前に植ゑて、花著きなば何方へも嫁すべしと、呉々

言ひのこして、兩月餘り以前に世をさりぬ。自ら思ふに、此桃、陰地に植ゑて、いつしか花を見る事あらん。親兄などの日々に再緣の事をせまりいふにやるかたなく、此桃の速に長ぜん事を祈るなり」とかたれば、源太主笑を含みて想ふやう、世上の婦人多くはかくのごとし 詞にあらはるゝと顯はれぬとの違あるのみならん、彼むつまじく相なれてさへしかり、もし反目のものはいかなる心にやあるらんと、「いかにや、婦人のごとく性急にしては、亡夫の遺命恐らくは守りがたからん。亡夫の詞そむかじと思ひつゝも、左程待ちぐるしきならば、寺院僧家に托りて、三年に當る追悼を、期に先だつて執行ひ、それをかぎりとして事終るべし。都の方にては、此頃多く爲る事ぞかし」と、敎へに心づきて、女大に悦び、是に上ある易き事やあると、桃の木を拔きすて、源太主に一禮して立歸りぬ。源太主も此女の性急なるに興さめて、拔き捨てたる桃の木を携へて、山中の觀宅にかへり、端座しても猶嗟歎してやまず。女房深谷傍に在りて、「道すがら何事のありて、かく世を觀じたる有さまの見え給ふ」と問へば、源太主彼婦人の事をかたり聞かせ、此桃卽ち其物なりと聞きて女房眉を皺め、「扨も／＼世の中には薄情なる者もあるかな。婦人の風下にも立つべき者にあらず」とさげすむ。源太主口に隨つて、

在すときかくはいひつゝ空くなれば
桃の花さへ遲き世の中

女房これを聞きて、「女は一すぢなるものにて、世上の女一槪に左樣の人柄なるにはあらず」。源太主又云ふ、

虎の畫をゑがけど骨はゑがかれず
面は知れど心しられぬ

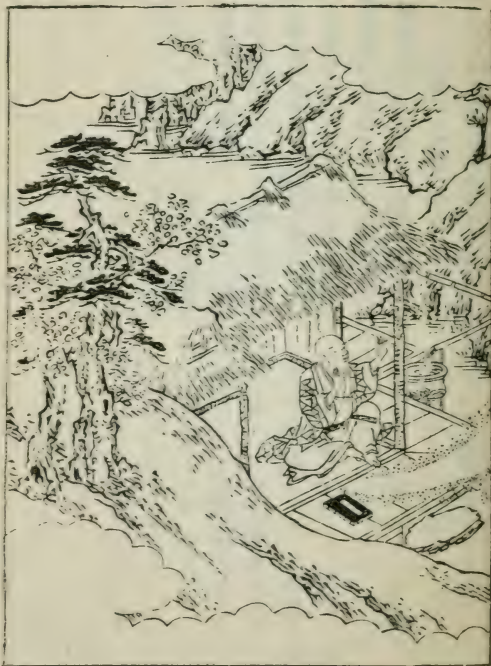
女房大に腹を立て、桃の木を二ツに折りて源太主に擲ち、「同じ人間にても曲れる直きあり。わづか一人を擧げて例とするの道理あらんや」源太主云ふ、「我今にても世を去らば、儞未だ其花のごときすがたにて、よも三年を獨りは守らじ」女房云ふ、「二君に仕へず、二夫に見えぬは皆人の知る所、不幸にして身の上に輪り來らば、身を終るまで寡を守ることかたからず」源太主頭を振つて背はず。女房云ふ、「女にこそ志を守るものはあるらめ。主のごとく、一人死すれば一人を娶り、一人を出しては一人を納るゝあきらめよき所爲にはあらず。ながらへ果てぬべき世ならぬに、人のこと草におちて、名を後身に汚さんや」と、顏を損じて憤る。源太主打點頭、「左樣に思はずしては源太主が配ならず」と云つて、其言やみぬ。是より山中曆日なし、安閑無事に日を暮す。されば美色は命根を斬る斧なる

とかや、源太主色慾に心長じて養生の術破れ、重き病を得ぬ。日比源太主に從つ、て養生の道を問ひ授かりし、二萬の道龍といへる醫師を呼びて、治療を施すといへども、日々に重くなり行けば、女房深く憂へて、晝夜枕を離れず、心を用ひて介保しけるに、たゞ惡敷方にのみなりもて行けば、一月計の後、源太主重き枕を擧げて、「我病もいまはたのもしげなく、末期たゞ近きにあり。過ぎし頃の桃の木、簷に植ゑて養はしめば、此ほどは能長じなん」といふ。深谷涙ながらにいふ、「丈夫心を迷はし給ふな。わらはも略女の道を知る。一を守つて二心なし。左程疑ひ給はゞ、今目下に死して赤心をあらはさん」と、潔き詞を聞きて、源太主うれしげに打笑みて、「左あらば我死すとも快く目を閉づべし。我死しなば、葬りをはりて後我舊里へも告げ知らすべし。形衣服此儘にて棺に收め、死して十日の間は、必ず棺を家にとゞめて香を供じ、十日の後、葬所は此山下風水よき所に葬るべし」と、云ひ罷つて息絶えたり。深谷屍に偎添うて、絕ゆる計にかなしみ、あるにかひなく、老いうつけし僕嘉六太に命じて棺を買はしむ。二萬道龍は師弟の分あればとて、一入別れををしみ、遺命に從ひて、臨終の體其まゝに棺に入れ、居間の中央に直し置き、道號を玄通先生と諡り、靈位香燭を設けたり。深谷は日夜に泣きくらして人心地もなく、ふかきなげきの色外にあらはれて、見る目も當てかねたり。道龍も每日來りて靈位を拜し、墓地の用意葬家の辨ずべき事など沙汰しける。深谷も、道龍が此頃心を用ひて萬とりまかなふを、便りなき折柄、うれしと思ふより、常はたゞ能く利口人なりとのみ思ひし人も、心の趣ありて見る時は、物ごし動作迄に心の愛でて、後人もいまだ定れる妻なし、我もかく主なき身となりぬれば、せめて二年三年も過ぎなば、此人をこそ二度の夫とも見まほしく、あはれ、結ぶの神の、心して御はからひこそほしけれと、下心には思ひける。かくて一七日早明日こそと思ふなる日、道龍來りて、玄通先生は近來道術の達人なり、書き遺されし跡もあらば、授かり度よしを望めば、深谷何をがなと書櫃の中を搜りて、源太主が著す所の養生新論幷に南華經の譯解兩部の書を與へければ、道龍押戴きて、「是しかも亡師の自ら書する所、筆の澤尙新なり。師は父にもまさりて、一丈を隔てゝ影を踏むといへば、今より我母ともかしづき奉らん。かならず御心を隔て給ふな」と、誠ある詞に、深谷首をふりて、「わらはいまだ五々の齡にして、君がごとき年長じたる、似氣なき子を持

おて何とせん。妹と見られなば、さも有るべし」といへば、「それがしいまだ妻女をも設けず。わかき御身を妹に具せば、世の人の何とかいふらん」と、打ちわらひて立歸りぬ。山中といひ、ことさら草家の打潜まりたる折から、一人にても人の多かれと、道龍が僕九郎をのこし置きぬ。此夜深谷嘉六太に命じて粥を煮せしめ、其間九郎を呼んで、酒など賜はりて彼が心をとり、「儞が主人、いかなれば是迄獨身にて住み給ふやらん」と問へば、九郎打ちわらひ、「此村彼鄕とりどりに言ひよる人あれども、美目えらみ深くて調ひがたし」といふ。「扨はいかなる女ぞ心に入るべき」と問ふ。九郎、「申すも慮なき申しごとに侍れども、御すがたに似たる人柄をこそのぞみ申されぬと覺え候也。これいかにとならば、そもそも某主人に從ひ、御住家へ參り初めてより、常に宿にかへれば、けふしも深谷の親しき詞ありし、きのふはいかにや、言葉の數なかりつるなど、心あり氣に申し出で侍れば、さてこそ御すがたに似たる人あらば、事調ひなんと覺ゆる也」とかたる。深谷便よしと、膝をすりよせて聲を低うし、「其方も久しく見なれし事なればかたるなり。われもいまかく若き獨身となりぬれば、亡夫の三年の忌服過ぎなば、再び人に見ゆる身なり。儞が主人は、心ざまも知りて誠ある人なれば、何とぞ行すゑまでも頼み度き所存なり。儞此心をつたへて呉れなんや」と頼みこしらふれば、九郎鼓舌して「世は思ふに任せぬ物かな。御身獨身となり給ふ事の、今十日計もおそかりしぞかし。一日二日以前に、隣鄕の人の申しかたらひて、心にいりたる事のありしにや、錦木の千束一度につもりて、あさてこそ呼びむかへんと、あすなん幣物を送るとて、某も明日早く歸りむかふべきよしに申せし也」と聞きて、深谷心驚き、失ふ所あるがごとく、しばし言葉も出でざりしが、「よし左もあるとも、いまだ呼びむかへざるうち也。ことにわらはに心ありしと聞けば、今宵立歸りて、いそぎ此事を告げてくれよ。もし事調ひなば、重く引出物せん」といふ。九郎首を傾けて、實にも此事調ひなば、我も身の上惡しからじと、粥の熟するを待たず立歸りぬ。深谷も臥所に入りながら、其夜は目も合ひかね、明くれば疾くより起きて手洗ふ所へ、九郎が來るを見て、「事調ひがたし」といふ。「何事の故にや」と問へば、九郎云ふ、「主人の言葉尤も理なり。一ツには師匠の棺いまだ家内に在りて、ことに間所なき家なれば、棺の邊りにて此體の事いふべきにあらず。二ツに

は源太主存生類なくむつまじくて、ことさら源太主は器量あり、道ある君子なり。はるかに劣りたる我なれば、後かならず見落さるゝ事ありなん。三ッには後室の心には角思ひ給へども、いまだ御故郷の兄親などのいませば、此人々の心もはかり難ければ、後にうけがはれざる時は何とせん。ことに此ごろにいたりては、御方の若き獨身を見れば、心の動くこともはかりがたし。近くにつまを迎ゆるまでは、山へは行かじ、とかたく申して、今宵しるしを送るよしなり」と、首を投げてかたる。深谷いよ〱心せまり、「いかに九郎、今申しつる三ッの事は、一ッも心にかゝらざる事ども也、しかれども左程に事急になりてはいかゞすべき」と、眼の内うるみて見ゆるに、九郎云ふ「事急なれば、とかくして今日の所延引すべき爲なれば、葬事につきて急にはからひを借り度き事ありと主人を招きよせ、酒などすゝめて、後室口づから餘儀なく宣はゞ、心の傾むかざる事あらんや」と聞きて、賓にもと、九郎に言傳して、道龍を請じやり、嘉六太を呼びて、手づから此棺を舁きて下家におろし、居間を拂はせ、我身も下に色よき小袖を著て、酒肴を調へて相待つ。其日も日中に至る。人待つ心のやるかたなく、嘉六太を催しにつかはしけれども、是さへやう〱日暮に九郎諸共歸り來り、「道龍は、山へ参るとて出でぬれども、道すがらの事辨じてまゐらるべきよしに侍る」といふ。深谷は侍ちわびる上にも、心にかゝる今宵の納幣はいかゞなりたるやと、是も心の落ちつかず、一所に座しためず、幾度か門に出で、窓にもどり、思ひ餘りて身のかこたれ、思はずも涙落ちて、懶げに燈を點ずる比、からうじて道龍入り來りぬ。深谷踏所を忘れて一間に請じ入れ、「ことなう待ちわびて、けふしも日の長かりし」といふ。道龍唯、「道に隙どりて」と計、外の言葉も出さず。やゝあつて、「けふ召しよせられしは何の事あるや」と問ふ。深谷何といひ出すべきとも覺えねども、今宵の事をさしとめて、世にせはしき戀路なれば、顔にたかるゝ火もあつからで、「此ごろ召しつかひの中言に御こたへのほど、理ありて覺え侍れど、其事悉くさはりなし。亡人の棺はすでに下家にうつし出したり。我夫婦となりし始、互ひに相愛しての事にあらず、かれは家業を嫌ふ大浪子の世事しらず、足下にも養生の道を授かり給へども、かれが身さへ色慾をつゝしまず、早く死にたれば、是印ある道にもあらず。又近頃山下にて、婦人の墓を祭れるに遇うて、此婦を誑かし、いかなる事をやなしけん、約束のかたみ

とも爲すべきとて、取りかへりし桃の樹、わらは打ち折りて捨てたり。如此なれば、すこしも心の殘る亡夫にあらず。又わらはは程ある越後國に兄はあれども、雙親はをとゝせ世を早うしぬ。餘國へ嫁する事は我が望まざる事なりしを、親の命なれば、やむことを得ずこゝに送られ來れり。我身の上、今更何の障をなす人あらん。君だに惡しからず思ひ給はゞ、九郎に言ひ送りし事のよきはからひこそほしけれ。さあらば遺りたる筆の跡までも、おのづから御身につたはるべき物なり。今宵則ち吉日なり。約束の酒を酌まん」といふ。道龍も心の動きしにや、「左あらば此うへは子細あらじ。いかにも御心に任せんなれども、いますこし日數の移る迄待ち給へ。葬家の服を婚儀にも用ひがたし。いまはし」といへば、深谷、「さらば色を直して見せなん」と、上の小袖を脱ぎ去れば、下に色よき紅梅の絹をかさね、用意の酒肴を排べ、吉酒を酌みかはし、「去るべきえにしにやあらん、よきころの夫婦也」と、一人言しつゝ臥具を鋪き設け、對の枕に寄らんと立ち起る時、道龍俄に眉をしわめ、一足も動かれず、其座に倒れ、兩手にて胸を摩りて、「心痛堪へがたし」と叫ぶ。深谷驚き抱きかゝ

へ、いかにと問へど言葉いでず、口より涎沫を流し、面土色のごとく、奄々として絶えんとす。深谷九郎を呼んで是を問へば、九郎大に周章して、「こは何とせん。主人平生此病あり、一二年に一度は必ず發す。藥の治すべきにあらず。只一品の祕藥ありて、是を用ふれば立所に治す。宿所にはあるべけれども、其藏所知れず。取り來る隙には命も絶えなん」と、男泣になげく。「夫はいかなる祕藥ぞ」と問へば、「此物至つて得がたし。生ける人の腦髓を取つて、熱酒にて是を飲ましむ。常に國守の府上に便りて、死罪人の腦髓を得て、是を治し來りぬ。今日こそ此持病の、命を取るべき時節なり」となげく。深谷云ふ、「生ける人の腦髓こそ得がたくとも、死せる人の腦髓は用に立つまじきか」といふ。九郎云ふ、「四十九日の内の死人は、用ひれば功ある事もあるよし聞き置きぬ」といふ。深谷云ふ、「亡夫死して未だ日あらず。此の腦髓はいかん」といふ。九郎、「夫こそ某がよからんとも申し難し」と憚る體、深谷思ふに、萬一道龍我心を引き見ん爲の作病にや、左あらばいよ／＼我心中の誠をあらはさではあるべからずと、「是こそ容易の事かな。婦人身を以て夫につかふ。此身尙惜しから

ず、なんぞややがて朽ちぬべき骨を惜しまん。此隙に熱酒を用意せよ」と起きあがり、柴を砍る板斧を取り出し、右に斧を提げ、左に松を燈して、下家に跑り行き、棺の蓋を只一打に打破り、蓋を開くや否や、此屍欠伸してずつと立ち上る。深谷肝を化してあつと飛びのき、妖怪の著きしにやと よく／＼見れば、面色生けるにかはらず。さすがの女房身も戰はれ、思はず斧を取り落しぬ。源太主寛々と棺を越え出でて、「其松にて道を照せよ」と、女房を先に立て、家の内へ歩み來る。深谷遍身汗になりて、家内に道龍が病發りて倒れ居ればいかゞすべき、よしく／＼、事言ひ開き難き時は、何方へも遁れ去らんと、心ならず一間に入れば、二人は見えず。かしこくも隱れたりと心落ちつき、源太主にむかひ、「わらはは御身の息絶えしより、日と夜と忘るゝ事なく、今棺中に物の音するを聞きとゞめて、古より言ひ傳へしよみぢがへりにや、ことに道を得たる主なれば、其事有るまじきにもあらずと、急ぎ棺を開きしに、果して生きかへり給ひぬ。此悦び何にたとへん」源太主、「よくも心づきたるかな。去りながら我棺を何故下家に移したるや」女房口に隨つて云ふ、「今日しも此一間を拂はん爲、かりに出したる也」「我死して十日に滿たず。何事ありて、色よき小袖を着て、化粧のあらたなるは何故ぞ」女房云ふ、「先刻より棺中響あるを聽きて、凶服を去つて吉兆を招く也」「然らば此寢間に一雙の枕ありて、杯盤の狼藉なるはいかん」深谷こゝに至つて答ふるに詞なし。源太主問ひきはめず、傍なる熱酒を取つて飲みつくし、「此酒人の腦髓に和して飲めば心痛を除くべきに、飲むべき人の見えぬはいづくへか行きけん」といふ。深谷胸に釘打つごとく、羞慚面に滿ち言葉出でず。源太主、「それがし、道龍主從を呼び出して見すべし」と、外のかたを招けば、道龍主從二人走り來りぬ。近よるかと思へば消え失せて見えず。こはふしぎと思ひ見かへれば、源太主が形も見えず。是元來源太主が通じ得たる仙家の戲術、分身隱形の法也。かゝる所へ二萬の道龍訪ひ來りて、「過ぎし比師の言ありて、二月の後迄山へ來る事なかれと警められぬ。二月過ぎぬれば、安否の心元なく、伺候仕りし」と慇懃に演ぶるを見て、深谷大に悔みて、女の淺間敷事を恥ぢて、みづから帶を梁にかけ、即座に縊れ死しぬ。是ぞ眞個の死にして、傷ましくぞ見えける。嘉六太も是を見て、山下をさして逃げ去りぬ。後にのこりし道龍は、あきれ果てて立つたる向ふに、源太主形をあらはし、深谷が死せしを見てすこしも

なげかず、屍を解きおろし、我出でたる棺に収め入れ、家の中央に置きて、口に隨つて咏をなす。

兼言も斧の柄よりぞ朽ち盡きぬ
　入りにし山の甲斐ぞありける

又一頌を作つて曰く、

儞死我必埋　我死儞必嫁
我若眞個死　一場大笑話

源太主手を鼓つて大にわらひ、菴に火をさして、棺と共に灰燼となし、灰の中より養生新論を捜り出したるに少しも焦れず。手づから道龍に授けて別をなし、其身は峯より峯にうつり、猶山深く入りて、去る所を知る人なし。我朝にても其道を修し得たる人は、かゝる奇特の事もありしと也。

古今奇談英艸紙第二巻終

古今奇談英草紙第三巻

五　紀任重陰司に至り滞獄を斷くる話

世の中の事、何事も天命に非ざる事なし。命の裡にある事は、求めずして自然に至る。命の裡に無きことは、精神を勞しても至らずと知るべし。其身天に對して是非を論ずべきに由なし。果して皆世々の宿業因縁なるやと、獨り此事を憤る一個の才子、弘安年中後宇多帝の時に、紀の任重なるもの有り。資性聰明にして一目に十行を讀下す。詩文は家の藝なれば、北野藤森の骨髓を極め、國の風なれば、和歌の道にも又疎からず。其玄祖はいづれの朝につかへて、明經の博士にして、讀書を上りし家なれども、世下り家衰へて、雙親には幼にして離れ、任重成長にいたりては、些しの家産もなく、才ありながら、しかるべき祿にも主づかねば、自ら五斗米に腰を折らねども、嚢をもる〻錐尖人の目にさへぎり、博識の人なりと近隣の尊びありて、米穀野菜の微物もこ〻かしこより贈り來りて、纔に口腹に充つるばかり、虹のごとき吐息はすれども貧窮に屈せず、ひたすら閉ぢ籠りて書を讀み、隣家の餘光に據りて日を送る。原より大見識ありておもふやう、當時北條家の横暴長久の事にあらず。天命改らん事程あるまじと、心を責めて兵策軍籍に眼をさらし、三軍の指揮にも暗からぬ器を成せども、年比五十を過ぎても空しく出身の便を得ず、常に心中怏々として足る事なく、こ〻に世を憤りて或夜一詠をなす。其前書に曰く、

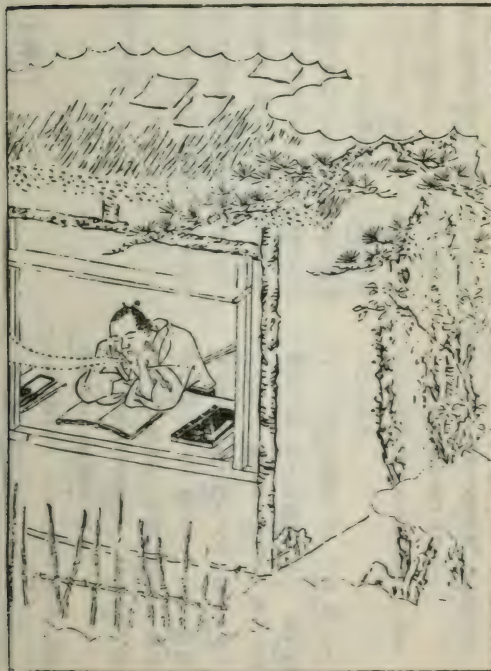
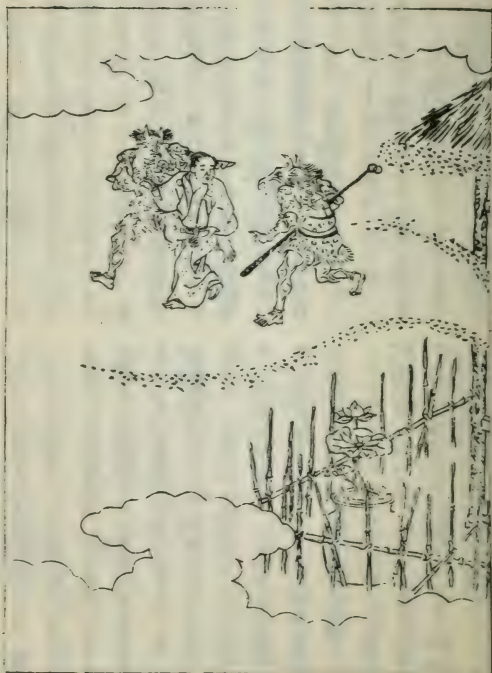
天、才ある人を生じて、又是を擧げ用ふる人を生ぜず。日西に傾きて、草むらの影いよ〳〵深くうづもれ、彼紫錦を著、肥馬に跨る人は、胸に一物なけれども、嚢に餘る貨あり。富めるは雲にのり、貧しきは泥におつ、賢き愚なる、其位を顛倒する、天道私なしといはんや。

むさしのや行けども秋のはてぞなき
　いかなる風の末にふくらん

書しをはりて詠ずる事數反、餘情盡きず、又古體一章を賦す。

蘭草自然香　生於大道傍
腰鎌八九月　共在束薪中

なほ〳〵怒を發して、燈火を以て此詩歌を焚き、一烟とならば立ち升らぬ事ある

まじ。天帝知る事あらば、我に對して言あるべからず。想ふに、帝釋は高きに座して、閻羅王をして刑罰を主どらしむ。閻羅善をすゝめ惡をこらし、因果によつて生を請けしむ。其裁判公正ならざるのいたす所か。我生得鯁直、我もし閻羅となり、地府の決斷を爲さしめば、善惡、理非、淨玻璃を須たずして明白成るべし」と、獨言して、机に倚つて眠る。忽見る、七八個の青面獠牙たる鬼卒、机の下より湧き出でて、任重を睥睨け、「儞いか計の才ありて、天を怨み地を尤む。今儞をとらへて、閻魔王の面前に還去つて、儞に口を開かしむる事なからん」任重頭を擧けて、「儞が閻君公正ならず、仰仰敕人の誹毀を怪しむや」衆鬼一齊に前みより、手を扯き脚を扯き、黑索子を以て、任重が頭に套して揮いて行く。是元來任重怨詞を咏じて燈下に焚きたるを、夜遊神體察て、天上玉帝に奏せしかば、玉帝大きに怒り給ひ、「世人の爵祿貧富は氣運の然らしむる所、彼が了簡のごとく、賢なるもの上位に居り、不肖なるもの下賤にをり、才あるもの顯榮え、才無きもの淪落、如此の時は天下世々太平、世の中に是非の論なし。彼者凡識壞からず、却て天を尤む。速に罪を問うて妄語

の儆とすべし」時に太白金星奏していふ、「紀の任重、言葉無禮なりといへども、此人才高くして運蹇く、抑鬱不平によりて此論あり。善に福し淫に禍するはこれ常理なり。彼が言ふ所當らずとせず。」玉帝宣ふ、「彼腐儒者、閻羅王と作つて刑罰を更め正さんといへるは狂妄ならずや。閻羅豈凡夫の儆すべきの職ならんや。陰司案牘山のごとく、十殿の閻君食を給するに暇あらず。彼者何の本事ありて一々に更正する事を得ん」金星また奏して曰く「彼口に大言を出す、必ず大才あるべし。下官陰司の事を見るに、果して不平の事無きにあらず。百年來の滞獄、未だ裁判決せざるものありて、地獄中の怨氣立升つて天庭を衝く。臣が愚見に依る時は、任重を陰司に到らしめ、權に閻羅王の位に半日替らしめ、陰司の寃狂公事、彼をして判断せしめ、若し決斷明白成る時は、功を以て罪を恕し、公明ならざるとき、卽ち罪に行ふ時は、彼が心大いに服すべし」玉帝奏に准ひ、卽ち金星を陰司に遣し、閻君に命じて任重をとらへ到らしめ、權に王位の坐を借し、只一夜六時をかぎりて、彼に公事を聽き獄を決せしめ 決斷公明ならば、彼來世極富極貴、今生抑鬱の苦に酬い、

儻し判問の才なきとき、鄷都地獄に墮して、永く人身を得ざらしむべしとの欽旨也。閻君天旨を畏りて、即ちこゝに無常小鬼を差して、任重を拘へて地府に至らしむ。任重小鬼に捧れて懼るゝ色なく、森羅殿前に到る時、小鬼跪けと喝す。任重問ふ、「上面に坐するは何人にて我に跪けといふ」左右の者曰く、「是すなはち閻羅天子也」任重大に喜び叫つていふ、「我閻王に對面して、胸の中の憤を吐かんと思ふ事久し。大王、儞位貪く、左右の傍判官多く、千牛頭萬馬頭あり。我は單身にて孑然ありさま、王、威勢を以て壓す事をやめ、平心にて理を論じ、理に勝つ者を強しとせん」閻君云ふ、「寡人忝く陰司の主となり、凡の事皆天道に依つて執行ふ。儞何程の德能ありて、我位にかはり、何事を更め正さんと欲するや」任重云ふ、「儞閻君、天道を奉じて道を行ふと說け共、天道は人を愛するを心とし、善を勸め、惡を懲すを公とす。如今世の中に、善惡を辨へず、慳吝にして、握つて放す事知らぬ輩は、財積んで山のごとく、又施をなし、善事をなす者は、手中空令。刻薄にして、人を害するものは、富貴の位に居り、肆に惡をなし、忠厚にて人を扶持くるものは、世を狹く暮して、其願を遂げず。善人惡人に欺瞞かれ、才あるもの無才の者に壓し凌がる。寃あつて訴へがたく、屈められて伸ぶる事なし。皆閻君の判斷宜しからざる所、我に陰司の訴を聽かしめば、此樣の不平の事はあるまじ」閻君笑うて云ふ、「天道報應遲きと速きと、明なるがごとく暗きが如く、其上定りたる天道自然の權衡ありて、輕重を過る事なし。先づ慳吝なるものは、眼から火の出る程欲きものも得求めず胸の焦げるほど人に遣り度き物も施す事あたはず、出す事無きゆゑに、入る物積んで山のごとし。善事をなし、施を好むものは、出づる事多ければ、手の中空しけれども、金銀の光を見せて、自由を得る事、恰も仁をすれば富まずとは聖言なるを、儞も人世にて見聞すべし。貧賤の者は子多く、子多ければ家絕えず、數子の中に必ず家を興すものも間あり。富貴の者金銀の光を見せて、物事足り滿つれども、多くは後嗣を欠く事あり。單瓣の花あるものは實多く、千瓣にて花見事なれば、實乏しきにて知るべし。是らは一生の內當座に濟む算用なり。其内に、惡人富貴を得て子孫絕えざる者は、惡報は終に子孫にのこりて苦を受け、其子孫の績くは前世の善緣と知るべし。善人にして貧賤なるは、前生の慳吝にして、福田を種ゑざるゆゑ、來世必ず饑窮の報を見ると知るべし。天

の尊きさへ、高きにあれば、見る事久遠にして、應報の遲速あり。況や人間より天道の事を測り知らんや。汝が紛々の議論は、元其方が見識の薄きより出づる事也」任重云ふ、「閻君、陰司報應爽はずと宜へども、果して然らば、先年よりの案卷をもつて一々我に看せ給ふべし」閻君云ふ、「それまでもなく、上帝の旨あり。此閻羅王位を六個時辰僭に替らしめ、告を放れて決斷せしめ、斷明白ならば、僭來世富貴を得ん。裁判する事あたはざる時は、永く地獄に落ちて、人身を得ざるべし」言ひ罷つて、閻君御座を起つて後殿に入り、任重を喚んで裝束を着けしむ。鬼卒等升堂鼓を打ち起てゝ、權閻君殿に升ると報ぐる程こそあれ、善惡の諸司、六曹の法吏、判官、小鬼、齊々整々として兩邊に分れ立つ。任重頭に天平冠を戴き、身に蟒衣を穿ち、腰に玉帶を束ね、手に玉簡を執り、閻羅天子の氣象に扮出ちて、昂然として屛風後よりめぐり出でて法座に升る。諸司吏卒參拜已に畢りて、冥官吏卒に命じて、旣に放告牌を掛けよと呼はる時、任重想ふ樣、死して地府に至る萬國の生靈限り無きに、只限ある六時の管事、倘し判問落著を結ばざる時は、我が無能に落ちて罪を取らん。「いかに判官等、新なる告を放るゝに及ばず。僭等是迄の告狀の內、疑ひ難ずる事あつて決せざるものあらば、寡人判斷して陰司の榜樣に備へん」判官宣し上ぐるやう、「南贍部州豐葦原、後鳥羽帝文治建久の比より今に至つて、尚決斷を得ざる三通の告狀、卽ち爰に有り」と、案上に呈上す。任重開き看る時、

幼を欺きて令二入水一告事
告人　南贍部州日本國養和之幼主言仁
被告　同邦同國平氏清盛妻　二位尼

功を賞せず骨肉を傷ふ告事
告人　南贍部州日本國源姓　範賴　義經
被告　同邦同國　源將軍　賴朝
其臣　廣元

功臣を忌みて家を令二斷絕一告事
告人　南贍部州日本國畠山氏　重忠
被告　同邦同國　北條　時政
其女　政子

任重覽畢つて、呵々として大に笑ひ、「是程の大事如何ぞ極め決せず、果して陰司決斷滯るにあらずや。今夜都て判斷して、一々明白ならしめん」と、直日の鬼卒を呼んで、三通の告狀を一齊に喚び出さしめ、原告被告檢次にならびて聽審。判官高聲に原告被告の名を呼ぶ

告人　安德君　在りや
謹んで曰く此に在り
被告　二位尼　在りや
謹んで曰く此に在り

任重詞を聞いて、「二位尼は、幼主に御づて共に入水せしは忠心といふべきに、此訴はいかに」安德君訴へて云ふ、「朕平氏に守護せられ、西海に下り、平氏勢盡きて一類海に沒する時、朕外戚は平氏なれども、正しく帝坐を汚せし身なれば、兵の手に渡りたりとも、命はめでたからんに、二位の尼腰に寶劍を帶し、按察の局に朕を抱かしめ、水の底に都あり、供奉しなん、といひて海に入り、わきまへなき朕を、己が死ぬる連累にせしは何事ぞ。あまつさへ後の世の說に、朕が母賢禮門院入内の後、惡人の女なりとうとまれて、父帝の御目かゝらざりしに、兄宗盛と通じて出生したる朕なりといふ心うさよ。我を宗盛の胤とせしは、源氏の朕にせまりて入水せしめたる罪を輕くせん爲、源氏贔屓の者の作りし物語より出でし事なるべし。宗盛の最期見苦敷を見て、平氏の恥を掩はんため、傘張法橋が子なりといひしも是に同じ。あはれ閻羅君、此寃屈を伸べて賜るべし」任重云ふ、「安德君の云ふ處一々理に當る。二位尼答ふるに詞なかるへし。我想ふに、外戚淸盛の計ひにて、安德君の女體成る事をつゝみかくして、男宮と披露して位に卽けたるもの故に、人手に渡し奉りては女體あらはれ、平氏の罪重く、後世の議論を恐れて、是をかくさん爲、倶に沈め奉るならん。我すでに落著あり。ひかへて待つべし」次に喚ぶ、

告人　のりより　よしつね　在りや

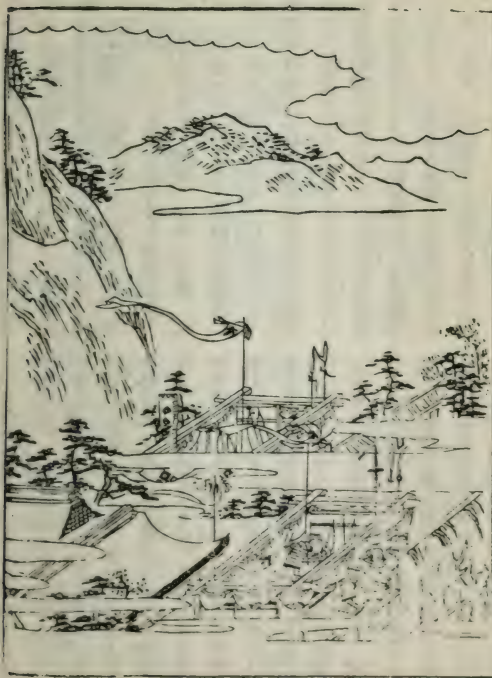
謹んで曰く此に在り

被告　よりとも　ひろもと　在りや

謹んで曰く此に在り

任重云ふ、「義經が告ぐる所理ありといへども、爾親兄の諱をまもらず、王城の制官たる時、兄頼朝に辭せずして、先達て位席にすゝむ。後に頼朝の不興を蒙りし時、都を開くに及ばず、自ら縛して囚となり、頼朝に逢うて罪を面謝せば、頼朝何ぞ手足の情を想はざるべき。あまつさへ上使土佐正俊を斬つて謀叛人の志を顯し、天意にて一統に歸する世を、同姓より亂らんとせし故、平氏を收めしときの手際に相違して、行衞を知らずなり果て、終を邊鄙に取る。今こゝに却て兄を訴へ出づるはいかに」義經申して云ふ、「あはれ御前、某が告ぐる處一々聽き分けて給はるべし。某舍兄と異腹といへども、父の骨肉に紛れなし。奧羽に時を待ち、大庭野の陣にて兄に見参してより、兄の代官として、範賴と倶に閫外の權を王どり、義仲を江湖にとりひしぎ、平氏を西海に斬り沈め、家の仇を討ち、國の罪を問ふ。京都に在制して衆心を鎭す。元より業を興すの所爲なれば、手柄とも

思はねば、功に誇るべきやうなく、身を容るべき郡國の沙汰を待ちて、太平を樂しみ、倶に武備の助となりて、天下を磐石の安きにおかんと思ひの外、兄の心狹く、惣追捕使に心をや掛けんと、軍をかへす日も、腰越より進ましめず、尙も大江廣元梶原景季等が言を聽きて、土佐正俊を都に登せ、刺客を行はしめんとす。過つて我爲に捉へられしに、某一時の憤怒によつて土佐が首を刎ねたり。是によつて、鎌倉より不日に大軍の登る風聞あれば、是まで味方と思ひし諸國の司も、義經敵と成りしと聞きて、我を見る事路上人のごとく、我從者の外に味方なければ、遂に文治元年十一月二日すご〳〵都を開き、津國河尻にいたりて多田源氏に道を遮られ、懸け敗つて通るといへども、從者過半を損じて、大物の浦より四國へ渡らんと思ふもむなしく、時節冬の最中なれば、出帆の便りを得ず。其際に東軍の逼らん事を恐れ、從者と引きわかれ、跡をくらまして大和吉野に入る。從ふものは聟有綱、辨慶、景光、白拍子靜、纔に四人、爰にも足とまらず、辨慶とわかれ、獨身となり、南都、紀伊、伊勢、近江、所定めず蹐まり、或時は京都にひそみかへり、叡山、鞍馬、仁和寺にかくれ潜まり、幾度か追捕使の害を遁れ、陸奧の方へ落ち下らんと便宜をうかゞへども、海陸の通路を塞がれ、心ならず文治三年まで都にとゞまり、北國の關々も義經の改め怠り、血氣の大將今まで何國にかあらん、時節、越前越後を經て、巧みに關を越え、奧州にいたり、再び秀衡を頼み、名を義行と替へて、當初は鎌倉にも知られざりしが、秀衡歿後に此事かくれなく、泰衡等心變じて、遂に文治五年四月晦日衣河の館に自害してより、百年以來此恨を報ぜず。今日、權閻王の明斷を願ふ」任重云ふ、「儞、當初副將軍たれども、三軍只儞の名のみ知つて、範頼の名を覆ふ程の勢ありながら、都を零落する時、大事を謀る知臣もなかりしか、頼朝黃瀨川まで出馬ありしかば、人家の犬を追ひ出すがごとく、棒の擧るを見て都を逃げ出でしはいかに」義經云ふ、「曾て一人の軍士あり、江田源三といふ。平氏を亡して後、中途にして我を捨てゝ去る」任重鬼卒を呼んで源三を喚び到らしめ、問うて云ふ、「儞始あつて終なく、半途にして逃る、軍師の職を盡さゞるは何ゆゑぞ」源三いふ、「義經生得性急にして、人に親しむ事踈く、己を誇り、人を蔑にするの癖あり。是故に人の思ひ附く事少し。終には威勢の衰へん事を慮り、征西の折から、毎度彼に進めて、和田畠山は當時の大家、就裡重忠は博識多才、親み

て恥辱ともならぬ人柄なれば、相かまへて睦敷くし給へ、梶原景時は侍別當の所司、軍士の奉行として、武衛よりの附人なれば、大小の事皆示し合せ給へ、木曾殿討手の時も、一族との合戰にいさみ進みて、心ざまを武衛に忌まれ給ふな、一兩度も辭退し給へなど、千萬心を添へしかども、一つも用ひず。あまつさへ、壽永三年左衛門尉に任ぜられし時、使者を鎌くらに進じて、去ぬる六日左衛門少尉に任ぜられ使の宣旨を蒙るよし申す。其時武衛甚だ悅び給はず、使者に對して仰せけるは、範頼義信等は、內々我方より內奏を以て受領の事を吹擧せし故、左も有るべし、彼が事は存ずる子細有りて、未だ其沙汰に及ばず、察する所遮つて所望申上げたるなるべし、是を以て日比の無禮思ひやると、其怒詞にあらはるる時、大江廣元賴朝の後に在りて、聲を低げて云ふ、平家未だ西海に在つて戰爭半也、將士を懷け重んずべき時節なるに、小事を怒り給ふな、と心を付けしかば、賴朝早く悟り、言を執り直して、兄にもまさりて速に任官を進められしは、內にも類なき忠勤を思しめしての事なるべしと、事もなげにて使をかへされしかども、是より彌賴朝の疎ふかし。我亦其時一計

をすゝめて云ふ、上皇後白川院、頼朝が權威を忌み給ふ御志あれば、院の御所に近より、法皇の御計ひを假りて、身を立つる計あるべし、と心を付けぬれども、西海の狼藉を疎みて、院の御氣色よろしからねば、其事のなるべきにあらず。後來身を安んずる地なからん事を察して、中途より見限り、それがしは山林に引籠り候也」任重道ふ、「義經如何ぞ明白なる敎に從はざる」義經云ふ、「余童形の時、洛に吉岡鬼一法眼といふものありて、深く陰陽の理を鑑み、偏く軍籍の奥を極む。人相を察る事都下に名あり。彼が相を求むるもの門に市をなす。曾て某を相して、壽七十一歳、功名榮貴に終ると云へり。是ゆゑに、天道に任せて人の心に佞らず。誰か知らん、零落千摩、僅に年三十一歳、彼鬼一禍福を云ひて驗なく、虚名に乘じて人を誑し、人の一生をあやまる。恨むべし〳〵」任重鬼一を喚んで是を問ふ。鬼一云ふ、「人の壽命、延ぶべきあり、折くべきあり。星學者流常に壽命の定め難きは是故なり。義經七十一歳、是算上の理の據る所、かなしきかな、彼が機を殺す事太だ深く、陰陽を損ずる事多きが故に短折をいたす。某算命の違ふに非ず」任重云ふ、「義經幾件陰德を

損ふ。一々云ふべし」鬼一云ふ、「先義經奥州へ志し、師の坊覺日の父、下野の住人深栖陵之介光重と同伴の約をなし、其身は金商人橘次と先達て首途して、三河の國矢作にて、十日計滯留して、光重を待ち合されし内、宿の長が娘とかたらひ、假初の契りをこめ、夫より下野に着して、深栖の館に半年計有る内、彼女はあだなる詞をふかく思ひとりて、數々消息を送るといへども、義經馬耳風ともせず、詞の答だになかりしかば、一筋なる女心に深く恨み憤りて、半年の間にむなしくなる。寃魂いづくにか散ぜん。青春十年を折く。檀の浦平軍敗れて後、女院の御船に參會して國母を犯し奉る。又十年を損ず。其身の不義を忘れ、却て兄を追討の院宣を申し下す。是によつて又十年を損ず。將家の常にして免れざる事ながら、義仲追討より以來、生を殺す事幾千萬をしらず。又十年を損ず、併せて四十年の壽命、此罪によつて削らる」義經云ふ、「大江廣元は、其身武衞の師範として、鎌倉の流を汲み、先王の道に叶る。文あり才ある身として、同胞の間を傷ふは何事ぞ」任重廣元を喚び出して問ふ時、廣元云ふ、「某は其時、賴朝の爲天下の爲の計を思うて、義經の爲にせず。彼の廷尉朝日將軍を戮し、平氏を八島につくす、其間數歲ならず。功をなす事の速なる、廷尉の英武にあらずんば誰かよく及ばん。我其時思ふに、廷尉は聰明なり、必ず功を武衞に讓つて自ら驕る事なからん、左ある時は其身も安全なるべしと。思はざりき、跋扈の動止甚しく、若し不虞の事あらば、檻外に虎を養ふ也。たとへ賴朝一代患を成さずとも、子孫に於て油斷ならずと、睚眦もの辭をつくるは此故なり。夫程の事見えぬ人柄にはあらぬに、一比ら梶原景季堀川の亭に到つて、行家追討の事を達し、是を以て其動作を計り見たりしに、再度に及びて漸對面して、然も病中といひながら、應對甚だ不遜なりし故、景季元より小人なれば、是を憤り、武衞の御前にて沙汰よろしからず。殘忍なる兄の心を知りながら、毒ある佞人と知つて、是を懷くる事もなく、却て其心に逆ふ。是皆老成ならざるの致す所なり」任重いふ、「義經の逐はるゝ、畢竟看來れば賴朝の罪なり。賴朝答ふるに詞なかるべし。廣元も、賴朝に姦智而已を敎へて順道の謀を進めざるは、罪なしといふべからず。源氏再興、義經の身命を捨てたる功高うして賞なきのみならず、零落殺死。轉世此寃を報ぜしむべし」と、案を寫し、一邊にひかへさせ、又範賴を喚んで其告を聽く。範賴云ふ、「某鈍才なれども、兄の代官として、

義經と倶に西海に下り、平族を亡し、賴朝の惣追捕使、皆我輩の力なり。誰か思はん、苦を同じうして樂を同じうせず、治世の後、伊豆の國に逐ひ下され、狩野宇作美に預けられ、言甲斐なき死を遂ぐる、此恨はるゝ期なし」任重云ふ、「儞が訴義經と同意なり。再び言ふ事なかれ」

次に喚ぶ、

告人　畠山重忠　在りや

謹んで曰ふ此に在り

被告　時政政子　在りや

謹んで曰ふ此に在り

任重云ふ、「畠山重忠、儞何の罪あつて家を亡さる」重忠云ふ、「某功あつて罪なし。源家の再興、多くは我らが佐くる所。賴朝逝去の後、政子素姓婬亂にて、諸大名の子供の美貌なるものを、内使にて招きて、酒宴の偶となさんと欲す。内監何某是を止めて、故なくして少年の大名を召さば、忽ち人の議論ありて、罪我等迄に及ばんといふ。こゝにおいて政子想ふやう、古老の臣は、賴朝の世より多く内外の政務に預る。是を招くは所謂なしとせずと。卽ち隱密の大事ありと、内々の使者を以て某を呼ぶ。某使者と倶に、桐が谷の小門より入つて、内玄關にいたる時、政子一間を出でてむかへ、奥へ請じて酒三獻を酌む。政子淫心起つて、左右の侍女をはるかに遠ざけ、目を以て情を寄す。某彼が大事を議するを名として道なき事をなさんとするをさとりて、席を正しうして敢て近づかず、謹んで曰く、某大事に預りて來る事を知り、御前の女中皆避遠ざかる。元のごとく次の間にさしおかるべし。恐らくは閨閫の謗あらん。政子怒色面にあらはれ、儞小義に拘つて大事を謀るに足らずと、座を起つて入る。我も又不ㇾ辭して歸る。此事我は堅くつゝみ、口外せずといへども、政子深く恥ぢて我を恨み、時政の室牧の方と計つて讒訴をかまへ、嫡子重保が事より起つて、我身も倶に亡ぼさる。是多く政子が謀る所」政子傍にありて告げて云ふ、「閻君、他一人の詞を聽く事なかれ。凡そ世上男の女に戲るゝは常理なり。女の男に戲るゝは理の常にあらず。重忠我傍に人無きを見て、一時不良の心を起し、戲の言を出し、我爲に叱せられて走り歸りぬ。此故に、我後來言を托して無禮の罪を問ひし也」重忠云ふ、「我源家に從ふといへども、數萬町を領し、大厦高堂玉食錦衣、西京の美色後堂に充つ。何ぞ無儀の老婆を慕はんや。彼政子は、元來伊豆の流人山木兼隆が聘を受けて、既に定りたる丈夫有りながら、父時政都在番の留守の内、佐殿に密通しけるが、時政歸國して此事を知り、六波羅の聞えを憚り、

直に山木が許へ送りつかはし、一度兼隆が許へ嫁したれども、佐殿の事を忘れかねて、山木の館を逃れ出でて佐殿に從ふ。心の操定らざる事かくのごとし。重忠幼より聖賢の書を讀み、人の道の大概を知る。無儀の志露程もなし」任重いふ、「重忠申す所眞情、政子が口詞はぬり隱せし所あり、必ずしも言ふに及ばず。重忠は大功の臣、忠節比類なし。是皆北條が家より謀る所、後代北條の天下を以て二つに分ち、儞等三人に與へて生前汗馬の勞に報ゆべし」任重善惡の兩判官を喚びて帳簿を捺へしめ、「決斷明白、恩は恩を以て報い、仇は仇を以て報い、分毫を錯らず。其連告の者までも一場に落著せしめん。何州何郡何鄕、姓は何、名は誰、幾時生れ幾時死す、細々と記錄して、罪人逐一發し去つて夫々の胎に投ぜしむべし」判官筆を把つて、任重の言葉に從つて帳簿に寫しとる。任重云ふ、「安徳君は日本國公卿阿野公廉の家に托生して廉子と稱し、帝寵を得て准后にいたり、後來南朝の國母となるべし。たゞし業因を引いて、義貞護良が爲に害をなすことも有りなん。二位の尼は是も西園寺家に托生し、實兼の女となし家の先例によつて、入内して后に立つべけれども、廉子に寵を奪はれ、親しく帝を觀ることを得ず、國色韶顔空しく深宮に埋もれ、婦人の薄命此怨情にこゆることあるべからず。是を以て安徳君の報を贖はしむ。義經、儞身命を惜まず、家の仇を討ち、君の宸襟を安んず。功勞ありて志を得ず。然れども不義の行跡多く、陰徳を損ずる事あり。儞を發して、日本上野國住人新田六郎朝氏が家に生を托して、義貞と名乘り、高氏と俱に鎌倉を亡ぼして天下を分つの勢あり。後左中將に至つて総を能せざるは、前生不義の罪の報ゆ所。範頼又功あれども殺さる。來世其價を報ぜしむ。然れ共我平治以來の書を見るに、征西の時、儞上將となり、義經副將となる。副將は一器量あるゆゑ、毎度計策を仕中れども、儞上將の才なく、却て義經が軍慮の妨をなす事多く、却て義經をねたみ忌む事賴朝よりは甚し。脣亡ぶれば齒寒き事をしらず、義經が零落にゑみを含む不仁の志あり。今儞を同邦河內國楠正遠が家に生じて、幼名多聞丸、後多聞兵衛正成と名乘り、後醍醐帝に賴まれ、高氏義貞と共に北條家を亡し、一度帝を世に出し奉り、攝河の間に據りて、新田足利と三鼎の勢をなせども、前生上將の才なき身として、其任にあらざるを、ゆづる事なく兄貌して上將を譲りたる所あれば、後生義貞の下に附きて、彼が命を聽きて、才有りながら自己の神機妙算を伸

ぶる事あたはざらしむ。重忠は、儞是れ武文二道の君子、功あつて罪なし。儞を下野の國足利讃岐守貞氏が家に出生せしめ、高氏と名乘り、北條は家の緣者ながら、機を見て志を變じ、北條に叛きて官軍に加はり、新田と天下を分ち、後來四海を一統するにいたる。是忠心に報ずる也」重忠云ふ、「北條家の緣者となりて、萬一彼が勢盡きたる時志を變ぜば、義を知らぬそしりありて、思ひ附く武士あるまじ」任重云ふ、「我幾人の智者を生じて儞を助けしめん。江田源三は前生の智術を依舊に、重忠と同じ腹に托し、其弟に生じ直義と名のり、兄の爲に天下をはかり、計策を含み、或は遁れ或は進み、兄弟內議して師直を誅するまで、皆爾を助けしむる也。又吉岡鬼一は義經を相して、七十一歲榮華に終ると考へたれども、義經只三十一歲、彼が陰陽を折く事ありとも、是卽ち命中に有るべき事なり。儞が術の不練なるによる。今儞を高階の一族に生を托し、師直と名のり、足利家の權柄を執り、追日天下を定め、四十一歲にして刀下の鬼となり、陰陽龜卜相人の術を以て人を迷はす胡言の罪を報ずる也。形を替へ、法衣を服しても、凶死を免れざるは前業のなす所。時政、儞を再び北條の家に入つて平貞時が嫡子と生ぜしめ、高時と名乘り、亂るべき世を續きて心を勞し、終に鎌倉にて亡さる。前世功臣を謀り殺すによつて、來世一族まで亡さる。政子、儞を搢紳源家師親の家に投胎して、後醍醐帝の宮女とし、民部卿の局と號し、大塔の宮の母堂にて、其身一度帝の寵幸を忝うしながら、一生志を得ず、南山に零落して、宮直義に弑せられ給ひて後、憂に沈みて世を去る。是高氏が殺すにかゝる。重忠を謀り殺す罪を報ゆる也。廣元は同邦播磨國赤松何某が家に生ぜしめ、法號圓心と號し、楠に次いで官軍に功有れども、治世の後賞せられず、元の佐用一郡を湔う住所に沙汰せられて、功勞の甲斐なかるべし。賴朝、儞宿善によりて日本の惣追捕使となり、家を興すといへども、度量窄く、人を容るる事あたはず、二人の弟が訴、皆儞が罪なり。今儞を民部卿三位局の腹に投じて、王子と生れながら、外戚賤しきがゆゑに、山に登り天台の座主となり、三千の衆徒を管領し、法燈をかゝぐる身とはなれども、前緣盡きず、還俗して護良と名乘り、父帝の志に從へども、北條家の權勢に頭を出す事ならず、南紀の際に蒙塵して千磨百難、怨敵亡びて後征夷大將軍になり、理を以て言はゞ天下を握るべき身の、却て獄に繫がれ、直義が命じて淵邊が爲に首を切らる。儞が殘忍

なる報なり」三通の告狀悉く落着して、罪せらるゝも、賞せらるゝも、皆屈服す。任重鬼卒に命じて云ふ、「今此一場の怨鬼ども、前因によつて同邦に往生るれども、應報のあるものどもなれば、我ことばを心耳に殘さしむべからず。早々發出して地府に滞らしむる事なかれ」任重判斷明白に畢りければ、衆官人心服せざるはなし。判官一々細に注し、筆を擱く時、鷄鳴いて曉を告ぐ。任重殿を退き、冠服を卸し、舊の浪人姿となり、決斷する所の案卷簿籍、閻君に進看す。閻羅王嘆服して、此由を上界に呈奏す。玉帝深く賛して宣ふ、「百年來の滞獄、彼者六時の間に決斷し、天地私なく、果報爽はざらしむ、誠に天下の奇才也。任重天を經にし地を緯にするの才、今生屈抑して時に遇はず、來世彼を新田義貞の弟となし、脇屋義介と名乘り、兄の職を襲ひて南朝礎の臣となり、志は得るべけれども、善事の報にあらず、才學を以て轉生する者なれば、始終思ふ儘なる世は經さすべからず」と玉帝の御旨下る。閻羅王開讀し罷り、筵席を備へて任重が行を送る。任重告げて云ふ、「人界に常に地獄極樂の說をなす。想ふに、極樂は無苦世界といへば、名目はありて空成るべし。五行の氣皆天

にあれば、其所に立ちのぼりかへり、本源の氣と倶に形なくなるを言ふなるべし。形ある時は苦ある事常理なり。左あらば極樂は、問ふに及ばず有るべき所ならず、地獄といへるは閻君惡人を懲すの所なるべし。其有樣我に見せしめ給へ」といふ。閻君笑うて云ふ、「儞博識明智、是を悟らざるはいかん。人界に、天地人を三才といふ。皆其裡を出でず。極樂は天堂とも云ふ。人の魂氣、物の爲に凝らずして、火盡き煙となりて空に升り、氣と倶に消化して、天の空なると倶に空となつて、些しも形とすべきものなくなるを、極樂とも、彌陀の本身ともいふ。僧徒は、此空を現世より期したるもの也。貴所の見る所に近し。こゝにいたる人も亦少からず。しかれども、かく取る所もなく消果つると聽きては、身勝手なる末世の衆生、與なきことに思ひとりて、たとへうきふし多き世なりとも、人界へ生れ來らば、復び眉を開く事もあるべしと、殘念のはしを起さんことを聖の不便がりて、佛菩薩の名を徇へ出し、九品の淨土を説きて、是を願ふべき到り所と定められたると覺ゆ。彼滑り迷ふことありて、空と一つに消化することあたはざる魂氣は、凝り濁りて重き事あるがゆゑに、皆々地

府に沈み來れ共、隨次に生れ往きて、其内報應を散じ、解脫して天堂に升るあり、又新に寃根を結び、長く因果を引いて流轉するありて、暫くも地府に留る事なし。壽永以來の數人のごときは、甚だ稀なる滯獄なり。貴所の尋ねらるゝ地獄といへるは、極重惡人をいたらしむる所にて、是も人界に在りて、山野里巷に四肢皆土につきて地を走り、羽翮を高く張り、飛行して食を求むる禽獸に生を托し、多くは獵師の獲物となり、皮を剝がれ、工人の手にわたれば、馬具敷物となり、蹈皮となり鞋底となり、肉をわかちては脂をとられ、煮られて盤に登り、膽を割かれて醫藥に備へられ、皮肉片々として所を異にし、戰馬となりて、數箭を蒙りて乘捨てられ、手柄にもならぬ命を捨て、死代りて海物となりても、釣網鼎俎の憂を免れず。蟲類となりては、淺間敷生を受くる。是類皆地獄にあらずや」任重手を拍つて、纔めて地府の規矩を拜服し、已に閻王に別をなし、我舍のもたれし机に、忽然として身を起し、雙眼を開きて、「我のみ地府の事を一々忘れず、奇怪奇怪」と獨言して、隣家の翁を呼んで夢の奇なるをかたり聞かせ、かく玉帝の命あれば、久しく延はりがたしと說罷りて、目を瞑ぎて逝す。是亦定業にや。隣家の翁憐んで、其屍を邊近き林中に葬りぬ。幽冥の事奇怪なりといへども、彼數人の寃魂の云へる處、一々理の有る所は强ふべからず。

古今奇談英草紙第三巻終

古今奇談英草紙第四巻

六　三人の妓女趣を異にして各名を成す話

老いたると若きと、貴きと賤しきと、男と女と、互に其志の相反すること、言古りたれども、再び是を說かん。夜は臥さずして晝眠り、子を愛せずして孫を愛し、近比の事は記えねども、遠き事をよく忘れず。悲に淚なく、笑ふ時淚あり。近きもの見えず、却て遠き物よく見ゆ。打撲にいたまず、平日却て痛む。白き面黑くなり、黑き髮白く變ず。是老人の少年に反する所なり。夜は臥すべきに飲宴に明し、朝は起くべきに日高けても臥し、心は放鬆なるべきにこれを勞し、勞すべき身は却てゆるやか也。使ふべき錢は使はず、使ふまじき錢をつかふ。病なけれども常に藥を服し、病あるとき藥を服せず。人の未だ做さざる時是を做し、人皆做すときは却て做さず。人を請ずるときは來れかしと思へども、人に請ぜらるゝときは却て行かず。蔬菓、甆器は價の貴きを用ひ、必用の物具は價の賤しきを論ぜず。是貴人の賤人に反する所なり。長子より少子を愛し、男子より女子を愛し、人を信とせず、佛神を信とす。少錢を惜みて多錢を惜まず。息婦の時姑を怨み、姑となりて却て息婦を嫌ふ。物忌はすれ共呪咀の怪しきことを好み、早く老樂を得んと欲して、又人道の老いぬるを怕れ、丈夫の擧動は嚴敷防閑すれども、丫鬟が淫奔意に挾まず。是婦人の男子に反する所也。婦人の中にも妓女と良家と程異なるはなし。良家は其丈夫の美醜賢愚を論ぜず、是につかへて、案を擧ぐる事眉と齊しくし、些しの外情ありても婦道の藥物となる。遊女は引手多き嫖客の中、意にあたる人に誠を卜め、人を閱ること多きを規模とす。良家は丈夫の靜貞を取り、妓家は其興あるを取る。良家は、情を寄する人あれども、肌を汚さざれば、事ありとせず。妓家は枕席を交ふれども、意中の人にあらざれば、心肝とせず。其遊女またおのがさま〲、意の趣差有り。いづれの治りし世の事にや、諸國の關の閉もなく、歌枕見る人、遠遊を望む人、諸國に往來する商賈も、進退自由にして、海道の驛亭旅店までも賑ふ比、備後の國尾の道といふ所に、名高き三人の遊君あり。本は都の生れなるが、父母の

零落に隨つて爰に來り、其類あるに倣うて、遂に兄弟三人、遊女となりて父母を養ふ。姉を都產と呼び妹を檜垣と呼び、季を節路といふ。三女とも、其顏色、歌舞、群妓の上に出でて、是と高下を爭ふものなし。中にも容色は都產まさり、南枝まづ時めきて、遠近の雅人此爲にこゝに來る人多く、一度其顏を見て榮とする人は皆名ある人々なり。此故に富有の商賈といへども、其意を動す事あたはず。都產、送迎の暇を偸みては、閨房深く籠り、姉妹の間といへども、言語ふこと多からず、笑を舉ぐることなし。琵琶は新聲を入調するに堪へたれども、操るに懶く、上代能書の跡を翫びて、筆の道に心をとどめ、古き草子を乞求めて、見ぬ世の風俗を樂むより外、移り行く世の人の好所をも取らず、棄つるをも捨てず、唯寒中の花の未だ開けざる風情あり。傍より是を問へば、「我身の世わたるさま、我本心の志にあらず。世の中の士農工商、其業々をなして身を養へども、我儕のごとく、心寄らぬ人に笑を獻じ、言を巧にして、其財を取るを以て勤とす。つらつら思ふに、愧づべきこと限なし。父母を養ふことは、良家の婦となりてはならぬ事にや。良人に從ふ時は、入りては舅姑に事へ、家の祭祀を主り、出でては顧みる人に誰某が婦なりと稱せられ、死して其家の祭を受く。是を捨てゝ婦なるものの本意あらんや」と、すべての妓女とは心ざまかはれり。一とせ大和國の人に、廣瀨十郎といふもの、葦田府に叔父ありて、物學の爲こゝに來り、尾道に通ひて都產に好みをなしける。都產一度此人を見るより、我夫と思ふべきは此人なりと心に取定めて、うらなく相馴れしかば、廣瀨も妻乞ふ若ざかり、彼が誠ある心にほだされ、魚と水との離れがたきがごとく、およそ花に坐し月に醉ふも、皆手を携へて行き、戀々として兩に相捨てず。されど迎ふる人多き身なれば、其志の變ぜんことを、廣瀨が常にかすりて聞ゆる每に、深くかこちて、

花すゝき君が方にぞなびくめる
　思はぬ山の風はふけども

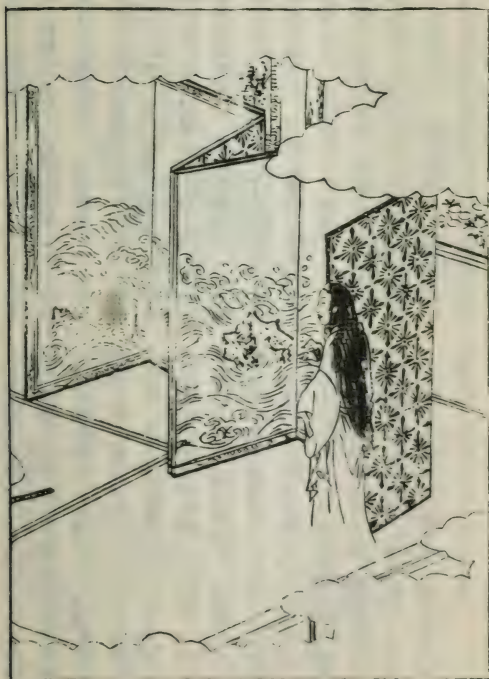
かく心の底を顯はし、先に屢往來せし知音の客來れどもこれをむかへず、廣瀨が外は皆病と稱して會せず。如此こと久しければ、檜垣姉に向ひて、其生業に疎なると、一つには父母への孝にもそむき給ふとうらみ聞え、倘廣瀨と好を絕ち給はずんば、廣瀨を官府にうつたへて、彼がかたより絕たしめんといふ。都產假にたゞ點頭きて、一言の答なし。廣瀨此よしを傳へきゝ、妹の毒ある言葉に恐れて、夫より復び都產に會せず。一日廣瀨

濱邊に出でて逍遙しけるに、此日都產も遊客に誘はれ こゝに來り合せ、廣瀨を見るより早くすがりとゞめて、「此比の中絕えしこと、君が情薄きにもあらず、我心にも任せざればなり。過ぎし此終身の約をなせしは、骨となりても忘るべきかは。今日の恨を屑ずとすることなかれ。たとへ志を得ずして死するとも、我骨を執つて君が先塋の傍に埋みて給はるべし。我平生に、假のちなみありし中に、離れて復合ひしためしの多かりしは、たゞ其財をすかし取るのみ、いまだ嘗て此身を以て許したることなし。我此黑髮、曉に夜にこれを養うて寶とすること玉のごとし。餘の人に與ふることは思寄るべくもあらねど、君が爲惜む所なし」と、自ら振解きて、一縷を剪つて廣瀨に遺る。廣瀨感悅して再會を期し、かねて心ならず別れ歸る。此日都產を誘ひて此に來る遊客、目前都產が憚る方なき仕わざを見て、忙然れ果てゝ都產に不采、かれをうちすてゝ歸り去り、再び都產が門にのぼらず。此とり沙汰街に充つれども、都產すこしも憚らず。廣瀨が頃病に臥すと聞きて、日々消息をつかはして、ひそかに其安否を問ひ、其速に癒えんことを慮るより外、客を迎ふること心上にあらず。廣瀨病癒えて、程なく本國より歸諭を促し來るに、やみがたく、都產にもかくと告げて旅立ちける。都產は一里の外、船場に出でて別をなし、別酒を店中に飲みて、都產云ふ、「君才智あり、我麗艶あり。才と色と相得て捨てがたきは自然の理なり。君の意と我心と、是を神明に誓ひ、是を松操に結ぶこと久し。君異日少しの間を得給はゞ、再びこゝに來り給へ。我命だにあらば、朝と暮と君を待たん」ここにおいて、二人天に盟ひて香を焚き、其灰を酒中に致して共に是を飮み、其夜此所に同じく宿して久曠遠別の情を演べ、日出で別るゝに臨みて、相與に大に慟き、女が石ともなるべき心の中を察しやりて、來る年の此月比はかならず來らんと約し、淚ながら舟にうつり、大和にかへりしより、親は年老い、家事又多く、人を待たぬ年の足早く、一年は早いつしか過ぎて、また來んといひしも空ごとにやなりぬらんと、人見ぬ折節は淚を洒ぎくらす。備後より來る人、都產が許よりの消息を傳へ來りて、都產は病にのみ臥してありと聞きて、封を疾く開き見れば、書きつらねたることばのすゑに、

　　ちぎりし月のうちに見えねば
　人を待つやどはくらくぞなりにける

又一聯の句あり。

　春蠶到死絲方盡
　蠟燭成灰淚始乾

廣瀨消息のやうを見て大に傷感し、返言に、書きつくして病をいさめ送りけるが、其後は便も聞えず。あるひ廣瀨我家の西面の柱によりかゝりて立ちたるに、向ふの屛風の間より半面を出すを見れば、正しく都産なり。こはいかにぞやと立寄る内、早くも見えず。廣瀨思ふに、都産もしや已に世を去りて、こゝに形をあらはすにあらずやと、掛念安からざるに、四五日ありて、都産が侍兒若葉、旅人に道の同伴を頼みて大和にゆき、廣瀨が許に尋來り、都産が已に死することをつげ、「其死せんとする前時、我に囑して云ふ、われ十郎殿を見ずして死することこそ本意ならね。彼人平生に愛する所は我手髮眉眼なれども、此物贈るに堪へず。今また一縷と手の指甲數枚を剪つて僑に托する間、我死しなば、僑便船を求めて大和にいたり、十郎殿の家に行きて、此二物を寄せて、約束のごとく彼家の塚の傍に埋みて、家の祭にもあづかることを、幾重にも〱傳へて興れよかしと、言ひ遺して終りぬ」と、袂を顔にあてゝかたりなげく。廣瀨も我をわすれて、聲を放ちて悲泣するに、兩親も驚き、出でて此始終を聞き、世に類なきことに思ひ、都産が末期の望にまかせ、甲髮を先塋の次

に葬り、印を建てて、我家の靈簿に亡名を寫し入れぬ。廣瀬も一生妻をむかへず、都産が志に酬いける。都産が妹檜垣、姉の死期の有さままで見及びて思ふやう、一たび烟花に落ちしものの、切に從良を願ふは、其恥を顯はすに似たり。遊女は、貴人高位といへども、待するに其分別をなさず。其高きこと世に類なし。豈自ら是を賤しとせんやと、心の趣も姉にかはりて、吹彈、歌舞、皆倫を離れて、なほ書を善くし、畫を善くす。中にも能く墨竹を畫くを以て、人かれを小竹と呼びなす。およそ當國に來る遠客、少年の子弟、花と柳との街に立ち入るもの、檜垣を識らざるを身の辱とす。常に雛妓、小鬟をあつめて、我入調せし曲を敎へ、今樣、平家の類を串きうたひ物として、催馬樂の類をもてあそび、插櫛、櫻人を琵琶に彈じて、獨り是を樂しみ、折節は草を鬪し、香を競ふ。我好きと思へる模樣の小袖は、數多く調へて、雛妓小鬟に贈りあたへて、一樣にこれを着けしめて自ら快しとす。我畫く所の團扇、一街の人是を得ざるものなし。人に物を惜まざれども、我上等の衣服首飾、常に債の家に當て遣りて是を恨みとせず。巧に來客の心を取り、一たび會ふもの日々彼を忘るゝこと

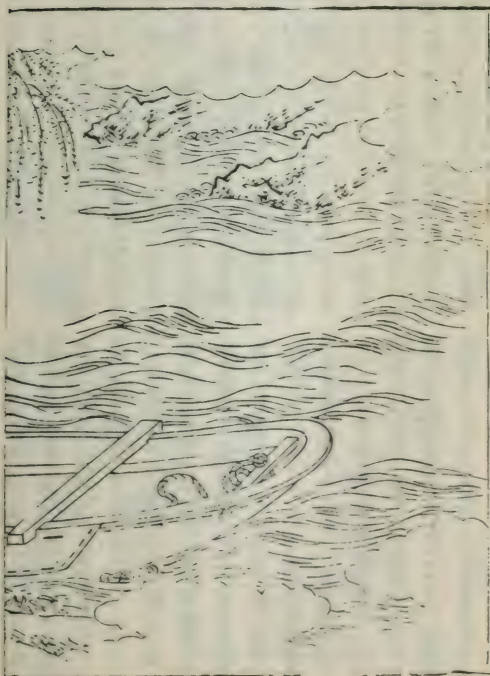
なかりしが。伊勢國、飯野民部といへる名高き人、此國に親屬ありて、其許に來りて滯留のつれ／＼、檜垣に深く馴れて、朝暮來らずといふことなし。檜垣も尋常ならず見えけるが、ある早朝に、民部檜垣が許に來り見るに、檜垣がさまいつにかはりて、髮を被り、目を哭きはらして、憂の色深し。いかなることやらんと問へど、「此事我家の內事にして、君があづかり聞く事にあらず。」民部云ふ、「儞が身の上の喜憂我が聞かざることを得んや。」檜垣云ふ、「去りながら此事、遲きと速きと、遂に情人に告げざることを得ず。先年我父零落して泉州堺に在る時、彌左衛門といふものに百金の債あり。彌左衛門今貧窮によりて、是を乞ひ討むること甚だ急なり。我父親、すべきやうなく、我身を債の代につかはして、堺に在つて妓をなさしめんと欲す。我此所に年來時めきて、僅の債の爲に他國に移りては芳名復び揚らず。彼の堺の地は、異國の商客多く船をとどめ、花街是が爲に興旺すと傳へ聞く。異國は大人すら人品日の本におとれりと聞く。まして商賈の徒の動作思ひやるべし。我身是が戲兒となるは恥づべきの限なり。命は惜しからねども、死して親の助ともならねば、進退心に任せず。此故に憂ふるなり」とかたる。民部聞き終りていふ、「それがし不肖なれども、儞がため其數の債に乏しきことなし。是を贖ふ時は儞が憂免るるならずや」檜垣頭を搖つて云ふ、「此ことかり初ならず。再三ことばがためして、已に我を送り去らんと決す。今變ずるとも、肯易くうけがはんや」民部いふ、「我歸國の日逼れり。歸路必ず堺に至る。彌左衛門とやらんを尋ね行きて、懇懃に此ことを求めば事調ふべし」といふ。檜垣是を聞いて纔に點頭し、「若し左ある時は、我芳名永く衰へず。君の恩を忘るゝ事なからん」と、忽ち愁眉を開きて顏を擧げ、悅び面にあらはれ、民部をとゞめて、和盤托出して是を款待す。民部は、檜垣が事によりて發帆の日を促し、すでに日ならずして歸程に登る。檜垣送りて其船にいたり、別酒を酌みかはし、「しばし見ぬさへ戀しき人を、遠く放ちやりて、明日の心いかならん。名花は散りやすく、名月陰り勝なる世の中」と、一陣の涙を流し、「我儔の涙深きは、却て貴ならずや見ゆらん」と再び泣かず。「回る春こそ」と再會の約をなし、民部も涙ながら出船して、海路ことなく堺の津に着きて、旅店に休息し、彌左衛門が所を尋ね行きて對面し、かゝる次第を條儀なくいふに、彌左衛門世に迷惑なる有さまにて、「それがしすでに檜垣を高褚に轉賣して、彼

來りなば、其所へ送るべき約にて、歴手の金をとれり。それがしうけがふとも、妓家に聽かざる時はいかん。しかれども、貴客の檜垣を憐みて、かくとり計らひ給ふ所も據なければ、君と共に妓家に行きて、ひたすら是を求めん」と、民部諸共高渚に至り、妓家の長に對面して、兩人共に此ことを乞ひ求む。妓家も民部が人柄にや讓りけん、「貴人の斯くの給ふ上は」と、約券を取り出して彌左衛門に還し、歴手金五十兩取戻し、「伊勢の御方は賴もしき御心入かな」と、式臺して送りぬ。民部、彌左衛門が家にかへり、百金を渡し、檜垣が父より先年つかはせし債券を取戻し、歴手の五十金は百金の外に增して、佗料となりしかども、此事の調ひたるを上なく悅び、債券に文こま〴〵書き添へて、家人を使として、檜垣が許へ送りやり、其身は先達て東國にかへりぬ。使の者尾の道にいたり、檜垣に消息を達せしかば、檜垣悅ぶ事かぎりなく、此使に錢などあたへ、返り筆懇にしたゝめてやりぬ。扨此ことの悅びにとて、我が欲しき新衣を裁して、好む所の花鳥を縫ひ出させ、舊衣を出して新妓の徒にあたへぬ。十日ばかりありて、堺より彌左衛門來りて、百金を檜垣にわたして云ふ、「增したる五十金は費用の外、我々が配分してこれを納む」といふ。此彌左衛門先年より諸國へ絹を販ぎにまはるものなるが、檜垣に賴まれて、此ことを成就したるなり。檜垣此百金を、新衣の料と債家の首飾を贖ひ出して、殘る金あることなし。又一年奧國の商賈、一世一度の船盟にこゝに來り、檜垣に泥みて、歸國の時、又再び此地へ來るべき身ならねば、檜垣が別を惜しみ、千金を以て檜垣が身を贖ひ、具して國に歸りぬ。檜垣も、若かりし日の心地もせねば、誘はれ行きて、幸彼家に妻妾もなく、女の心も安堵すべきに、もとより良家を望まぬ檜垣なれば、半とせばかり在る程に、大病發し、血を吐いてやまず、折々は今も絕ゆべき有樣に、此主大きに驚き、所詮檜垣が此の病復癒ゆべからず。古鄕につかはし、父母に對面させて、心易く終らせんと、人多くつけて、道の程こま〴〵申しつけて送りかへしぬ。檜垣は道の中も人心地なければ、尾の道に歸りて、父母の驚、街中の人のうはさにも、檜垣は死してかへりしなど、あはれげにいひつたふ。奧州より送りの者も、野邊送せし心地して、足もためず立ち歸る時、檜垣何となく身を起し、「皆々心を勞し給ふな。わらはは些しの病もなし。病の根元を見せ申さん」と、懷より小き酒瓶をとり出し、傾くれば、赤き色の流れいづる。「是蘇朴汁なり。

我是を飲みて吐くゆゑに重き病なりと、何某が我を送りかへしぬ。假病のはじめより、此の酒瓶を人に見せじと、心ぐるしくせしかひに、久しからずして父母に逢ふことのうれしさよ」と、此日より客を迎ふることむかしにかはらず。已に年四十に近けれども、傍より其老を見ず。此時父母も打續き世を去り、檜垣も幾ほどなく重き病にかゝり、此度こそ實の血を吐きて終に愈えず。逝かんとするの前日、比丘を請うて經を誦せしめ、些しく佛拜の儀をなして後、再び佛號を唱へず。沐浴し、上下の服を皆白布に用ひかへて、同社後進の妓女小髮等をあつめ、笑語平日のごとく、死期の願念もなく、一つとして心にさゝはることあらず。琵琶を操り、雛妓と合奏に曲を彈じ、半にして琵琶をさしおき、「儞が四の絃、調子呂たるぞや」といひて、瞑然として絕えぬ。

季の妹鄙路嘆じて云ふ、「姉が終をとる事、功を積める高僧といへども、此境界に及ばんや。しかれども、僧家は是を慕ふべし、妓家の風俗より見れば、遊女の終を取ることの正しき、是を美談とするに堪へず。二姉皆死して名あり。我豈聞ゆることなからんや。遊女の終は跡を隱すを以て高しとす。鄙路とかやいひしは、今誰が妻となるなどいはれて、其丈夫の富貴と人物とに着せしか、或は日影西に傾きて、さそふ雲水に隨ふかなど、或は假初に俊聰に愛でても、其人尋常の人柄ならば、是又我見識のかぎり知れて口惜しからん。夫さへあるに、後々子あり孫あり、膝のしたより祖母と稱せられんもうとましく、又は老いはつるまで志を得ず、水汲むきはになりて人に見られんよりは、行衛なくならんはなんぼう本意ならん」といへり。生得に俠氣ありて、志男子に勝れり。妓となるの初、寡婦の武道を識りたるものありて、邊近く住みけり。鄙路これに就いて術を學び、常に射をなし、劍を打つことを手ずさみとし、道路に是非を見る時は、かならず其弱きかたを助く。義によつて命をかへり見ず。其國に住める浪人の一子に、安達東藏といふもの、鄙路と一兩度の好あり。二年ばかりも言絕えて、城隍に詣する比、東藏參詣の道にて、不慮に三四人の惡少に出逢ひ、言葉いさかひ、雜言を聞き兼ねて、一人を切殺し、殘るは手痛おほせて追散らし、我も面に疵うけて其場をのかれ、道すがら花街に入り、鄙路が所に行き、顏の疵痛癒ゆるまで隱して給はれと賴む。鄙路、彼が言絕えたる身ながら、賴むをいなむは勇なきに似たりと請負ひて、東藏を粧臺に隱し置き、一月計の後、東藏鄙路に對して頃の恩を謝

し、先に好みてより年月音せざりし言葉づくりす。鄙路一言の答なく、「足下をかこひ養ひしは、我が父母なく姉妹なく、心易き身の上なれば、一時の俠をなすなり。儞世を廣くなるとも、此後再び我家に來ることなかれ。千回來るとも儞に對面せず。儞鬪傷の場に匹夫の雜言を忍ぶことあたはず、却て故なき賣女に身を隱されて、其恥を想はざるはいかに。疾く疾く去るべし」とて、追ひ出せり。人是を聞いて男子に勝れりといふ。夫より後國の守の扶持人安那何某が一子平四郎といふもの、年齢二十餘、一たび鄙路に會してより、晝夜家にかへらず、父母の聞くを慮り、病を養ふと稱して、花街と河を隔てゝ、一所の宅をえらみ、こゝに住し、夜ごとに河をわたりて鄙路に會す。鄙路も、彼が微弱ながら生得温柔にして物に拘らざるを愛して、時ならず美酒海鮮を贈り、自ら去きて庖厨をとゝのふ。いとまある時は、中夜といへども渡船を越えて、彼が所に去きて宿し、恩情略趣あり。平四郎、一味に鄙路を娶りて夫妻たらんと思ひつめて、常に心の底を鄙路に語る。鄙路笑うて、「年月舊きを送り新しきを迎へ、片刻の偶をなすもの幾人ぞや。此國に名ある人、我が一歡をなさざるはなし。我が此身商人の婦となるもなほ醜聞に堪へず。況や武家の室とならば、生立ある儞を恥しむるなり。再び此事をいふことなかれ。左あればとて、此後儞に對して疎きことなし」といひて、從良のことはとりあはず。こゝにまた、此國に名高き武士、三上五郎太夫とて、生得殘忍にして、姓に二字は稱れども、憐愍の二字を知らず、權威に任せて我意を行ひ、國中に横行し、惡せざることなき不良人あり。鄙路が美色を愛して、平生往來をなし、他を贖ひて婢妾となさんと欲すれども鄙路本心にあらざれば、固く諾せず。五郎太夫、彼が諾はざるは平四郎と相愛するゆゑなりとて、此二人が中を隔てんと、渡守勘平をかたらひ、鄙路が中夜濟を渡る時、勘平船を柳の垂れしけりしかげに棹しゆき、鄙路を抱きとゞめて情にあづからんといふ。鄙路心に怒るといへども、此夜平四郎が痛所あるよし告げ越したれば、一寸の遲なはらんことを恐れ、假に勘平を瞞きて、「こよひ心にさはりありて從ひがたし。他日かならず一宵の約にそむかじ」と、汗衫を脱ぎてしるしにあたへ、かれをすかして川を越えしが、夫より再び中夜こゝをわたらず。三上此汗衫を勘平より得て、ここかしこに曝して平四郎をはづかしむ。平四郎も鄙路も、是皆五郎太夫が所爲なることを知り、二人が中の笑ひ種として、

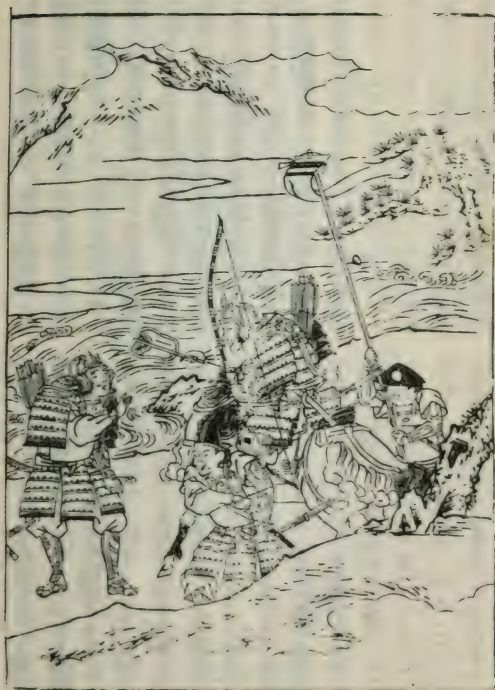
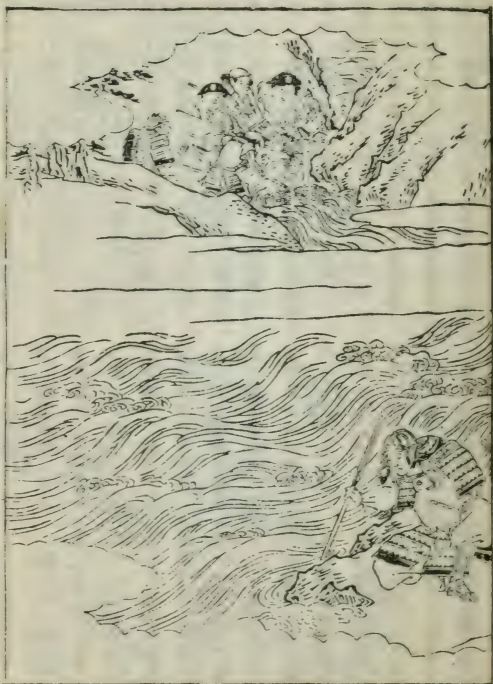
すこしも恥とせず。三上此後は、一向平四郎を失はんとはかる志常にあり。鄙路又是をさとつて、我身三上に遠ざからん計をのみなしける。一夕平四郎が来るべき約ありながら、時に及べども来らず。明くる遅しとその道に行きて見れば、「無残や」など人のいひつどひ、渚の川中に切られて死にしは、見覚えある衣服、平四郎に紛なし。早くも彼が父親聞きつけ来りて官府に訴へ、死骸を舁きてかへりぬ。誰が仕業ともしる人なけれど、鄙路か心中には、是三上が所為なることを知り、其夜空くもりて、星影さへ暗きに、三上が来る道に待ちうけ、兼て平四郎が預け置きし一腰を携へ、赤き頭巾着たるを夫と見るより、「三上の主にあらずや」と問へば、「左云ふは鄙路か」といふ聲紛なければ、脇腹と思しき所を抜打にはらひつけしに、三上抜合すひまもなく、右の脇よりはすに切上げられ、しばしは立つよと見れば、やがて倒れて兩段となりぬ。鄙路死骸にむかつて、「亡靈あらば能く聞け。我一生人に身を許したることなければ、夫の仇を報ずるにもあらず。餘所に見てもすむべきなれど、我故に命を失ひしを知りながら、外ごとにもてなさんは、我心に恥づる所あればなり」と、

刀を押拭うて懐にかくし、又渡場さして馳行き、船を渡らんといふ。濟守勘平鄙路を見て、「今も降り來ん空の暗きに、いづくへ行き給ふ」といふ。「思ふかたへ」と計答ふ。勘平、夜深け四に人氣なきを見て、前の約束をわすれず、船を横にさしわたして、僻所にいたりて、「平四郎已に世をさり、儞情人に乏しからん。我と終身の約をなさばいかん」といふ。鄙路只笑うて答へず。勘平船を搖りとゞめて、「空くもり、渡りの人もなし。過ぎつる約に赴かん」と戯れ寄る時、鄙路懐より直に刃物を抜き出し、かれにむかつておどしの空うち、ひうと鳴る音、光に驚き飛びのきて、「過仕給ふな」といふ。鄙路右に刀を携ち、左に勘平が帯を取りとゞめて動さず、「我儞に問ふ事有り。平四郎夜前三上が手にかゝりて此川に切り沈めらる、儞しらざることあるまじ。實に告けばゆるさん、しからずば儞をなぶり殺にせん」といふ眼ざしかはり、ばらけし髪そらざまに立ちあがり　女とは思はれず。勘平いふ、「人を殺せし人、五郎太夫としれたる上は、此事實に申さん。夜前五郎太夫黄昏より此船に來つて、幾人を濟せども、彼は船に殘つて去らず。平四郎が船に乗るにおよんで、外に乘合せも

なきを幸に、中流にしてしたゝかに切りつけ、水に斬りしづめたり。我是をしるといへども、一些も我所爲に係らず」鄙路云ふ、「儞船に讐人をのせて、渡る人をうかゞはせ、儞が船中にして是を殺させ、夜明け夜に入れども官府にも申出でずして、尙儞にあづかることなしと思ふや。」勘平答ふることあたはず、只「此こと必ず外揚し給ふことなかれ」といふ。鄙路云ふ、「儞既に實を吐く、再び儞に聞くことなし」と言ふ下より、むかふ袈裟に、手の裡滯らず、聲起つるまもあらせばこそ、とゞめを刺して水に推落し、手なれぬ棹をとりて、雨しきり風さへつよく、棹のたて所もしらで漂ふ船を、辛勞じて漕ぎつけ、岸にあがるより、飛ぶがごとく逃れ去り、其行く所をしらず。夜明離れて、三上と勘平が殺されし吟味ありて、其夜鄙路が行衞なくなりしは彼が所爲にやと、これを追ひ求むれども、いづち行きけん、影も見えず。其家を捜し見るに、平生すこしの物も貯へねば、書畫、弓箭、長刀の類の外一物もなし。唯篋中に多くあるは千錢家の當劵のみ。是によつて鄙路が俠聲益著れ、其比遠近の話柄となる。姉妹三人、各志の違あれども、概ね遊女の氣性を出でず。後都の北山かげに、七人の比丘尼、共に庵を結びて住みけるが、其內一尼、此三人の遊女の始終をよく知りてかたる尼あり。此尼或は鄙路が跡を隱せるものか、搜り知るべからずとかたり傳へたり。

七　楠彈正左衞門不戰して敵を制する話

出羽の國大山の城は、中比迄武藤氏代々是を領し來れり。先祖は武藤小次郎資頼といつて、平家の侍監物太郎頼方が弟なり。平氏滅亡ののち、囚人となりて三浦介に預けられけるが、其比頼朝卿甚だ射禮を好み給ひ、平胡簶の差樣、丸緒の著樣等分明ならざるの所に、小次郎資頼射術の達人なりしかば、彼矢の故實を傳へ知るよし申すと聞えしかば、何さまかれは京家のものなれば、射禮に精しかるべしとて召し出だされ、射禮をつとめけるに其品よかりしかば、頼朝御感の餘りに出羽國大山を賜うて入部せしより、代々此所を相傳して、十八代に當る主を義氏と云ふ。此時義氏武勇にほこり、每度諸方へ無益なる軍の手つがひありて人民を憐まず、惡行のみ甚だしかりしかば、士卒等もうとみ果てゝ、惡屋形とぞ稱じける。しかれども義氏天性力量ありて、弓矢打物に妙を得て、みづから敵に當るゝ時は、

これに近づくものなし。隣郡川北といふ所に、七黨とて頭立ちたる士七人あり。むかしは武藤家に膝を屈したれ共、近比は七黨ともに義氏の無道をうとみ、武藤家に附かず、七黨心を一致にして、各我分地を守りける。義氏常にこれを憤り、つひに是を討ち亡さんと、東禪寺右馬介といふ相傳の家來を大將として、軍勢をさしむけらる。此比の七黨、皆器量ある勇士なれば、右馬介も輕々しくよせられず、餘奈坂といふ所まで軍勢を押出して、こゝに陣をとりて、敵の動靜をうかゞひける。七黨の徒これを聞き、會合して防戰の計策を議す。此七黨の中に楠彈正左衛門といふものあり。元來先祖は河州正成が一族なるが、南朝の皇子家良親王信濃宮と稱じ奉りしに隨ひ、常陸國小田の城に籠り、小田沒落の時、宮に引きわかれ奉り、此所に來り住せしより、子孫絕えず此彈正左衛門にいたる。平生些しの謀略ありて、物に驚かぬ大丈夫なるが、此評議の先をとつて、各にむかつていふやう、「義氏の武勇、中々力を以て敵すべからず。しかれども、大家にたてづく七黨、かゝる事のあらんは、われにおいてつねに其格悟あり。それがし些しの計をほどこし、心をつくして敵を防ぐべし、各我指圖を受け給ふや」といふ。兼て其器量あるを見及び居れば、「いづれともよろしくはからひ給へ。足下の下知にまかせて力をつくすべし」と、一同に詞をそろへて心服す。「しからば、田川何某は物馴れたる人なれば、急に東禪寺が籏印、さしもの等を似せこしらへ、こよひ間道をめぐりて大山の本城にとりかけ、東禪寺右馬介、義氏をうらむることありて諸卒と共に謀反すと披露し、戰をいどみ、よいかげんにして引きとるべし」と、細に云ひ含むれば、田川下知にまかせ、俄に東禪寺が籏印をこしらへ、みづから右馬介が體に出でたち、其夜間道より出でて大山の城へ押寄せ、鬨をつくり、「屋形に腹めさせんため、東禪寺右馬介途中より取つてかへしたり」と呼ばはる。義氏甚だいかり給ひ、「あれ追つちらせ」と、下知の下より、究竟の兵二百ばかり、拔きつれて斬つていづる。田川一戰にも及ばず敗北して、散々の體にて逃げかへる。東禪寺右馬介は、城に軍ありと聞き、引つかへし城に入らんとするに、やぐらより雨のごとく矢を射出し、城中にのこせし右馬介が妻子の首を切つて投げ出したり。右馬介大に驚き、例の主君の惡行にこそと、相傳の恩義も讐とかはり、衆人と力を合せ、義氏を殺害して人民の助とせんと、其場を去らず、一責せめけれ共、義氏みづから下知をなして防ぎ戰ふに、

右馬介も力つかれ、一まづ其場を引き退きぬ。義氏は右馬介が心の變じたるを見て、今は川北の七黨を自親にせむべしと、出陣の用意を觸れわたし、其勢壹萬二千餘と聞えける。川北には、惡屋形自身むかふと聞きて、人民おぢおそれひしめきあふ。此時楠彈正左衞門は、田川大庄寺をはじめ七黨の兵を、多くはこゝかしこにわかちやりて、以ての外無勢なれども、すこしもさわがず、川北分内の百姓共に、「一軍おこらぬうち、隨分作物を取り收めよ」と、すこしのこりし兵も民家につかはして百姓を助けしめ、十分にとりこませ、中々戰ふ氣色なければ、いかゞしたる心底にやと、七黨の内酒田何某、楠に對してこれを問ふ。楠云ふ、「今作物秋收の時なり。十分にとり收めてこそ敵と戰はめ。作物むなしく損ずる時は、戰に勝ちたりとて、利ありとすべからず。元來義氏の勇猛にかたれぬことを知るゆゑ、はじめより力をもつてかれに敵對する所存にあらず。必竟は、川より北へ敵をわたしさへせねば手ざすに及ばず。明日は敵川をわたらんとすべし。明日一日敵をわたさねば、義氏に一生川北の地を踏ますまじく覺ゆる」といふ。「其計やある」と尋ぬれば、「われすでに其そなへあり、

必ず心を勞し給ふな」と、人なみならぬ彈正左衞門が詞を賴に、酒田は少し安堵しける。明の日、義氏は一萬餘騎を先後にわかち、川をわたらんと岸に出でて見れば、淸川の水滔々と漲りて、大水岸をひたす。これにてはわたり得じと、些し退きて水の落つるを待つ。其日の暮比水もかさおちて、今夕やわたらん、明朝やわたらんと、俵を組み連ぬる所に、本城に殘せし佐藤刑部がかたより急使を馳せて、「屋形の出陣をうかゞひ、東禪寺右馬介又本城へとりかけたり。いそぎ御馬を還され、兩方よりはさみ責め給ふべし」と告げしかば、義氏驚き、先こゝより取つてかへし、備を立てゝ掛られしかば、右馬介二方に敵をうけ、手下多くうたれて落ち失せぬ。義氏城に入つて休息し、諸軍も勞を養ふ。是によつて、しばらく川北討罰は延引しける。是元來楠があらかじめ思慮を廻らして、大庄寺何某に人數をさしそへ、ひそかに湯殿山の東につかはし、最上川の水上、わづかに巾せばき所をえらみ、大木を斬つて倒しかけ、水をせきとゞめ、山に添うて湛へ置き、敵の川を渡らんずる日の未明より、水せきの大木取流せしかば、淸川俄に水出でて、一日の洪水を成す。また兼て東禪寺が許

へ使をやりて、「其元手勢を以て、今度義氏出陣の跡を襲ひとり給へ。しからば川南をわけどりにせん」と申し送りしかば、右馬介其詞に應じて、急に本城へとりかけし故、義氏つひに川をわたらで引つかへしたるなり。こゝに川北に屬せし侍に、草刈大藏といふものあり。是が妻女容色すぐれたり。むかしより、財多きは盜を引き、妖冶あるは淫に悔ありといへり。七黨の內に田川次郎左衞門といふもの　かくれなき好色人なりしが、いつしか此草刈大藏が妻女に人しれず密通して、女と手段をめぐらし、つひにおのれが館にかくして出さず。大藏田川が所爲なることをよく知つて大にうらみ、卽時に川北を去つて大山に來り、義氏を賴みて奉公無二をつくし、「願はくはちかぢかに川北征罰あれかし。命ををしまず田川に近寄り、欝憤を晴れんものを」と、常に齒をくひしばつてこれを待つ。され共義氏は、相傳の家來東禪寺さへ心がはりする時節、川北は未だくだし得ず、近比は何とやらん氣おくれして、いづかたへも手ざしすることをひかへ、安然として鋭氣をやしなはれける。其比日本の高山をあまねく巡拜し、出羽國の三山を拜して、尙奧へ通る修驗者、相摸坊尊海といへる山臥、人の憂をいのりて功驗ありとて、村里の人民是を崇敬すること生不動ともいふべし。義氏日來はかゝることをあざけりさみせし人なれ共、進退に心決せざる折ふしなれば心迷ひ、此事を聞き傳へ、使をつかはし、尊海を請うて城中にいたらしめ、家運を祈らせ、對話の上にて、自身の掌文を相せしめて、「吉凶を占ふべし」とある。尊海これを辭して占はず。それをいかにと、左右の人を以て問はしむるに、彼いふ、「それがし本國を出でてより、愛慾の志を以て祈禱は施せども、占卜の道は深く愼みて施さず。其故は、占の表我口より出づれば、其人の禍福吉凶一言の下に決す。其ゆゑに輕々敷占はず。やつがれ是まで占を施す人わづかに兩人、其名姓はあらはしがたけれども、倶に近國の大人なり。卜料の式、黃金十枚を收む。其禮備はらざれば卜をなさず」といふ。義氏此山伏のへつらはぬさまに信を增し、强ひて占を求め、黃金十枚を備へ出す。尊海先づ此黃金をとり收めて、やう〳〵義氏の掌文を相、眼耳鼻口こまかに相しをはり、稱贊して、「貴人なるかな」といふ。義氏の支干を問ひ、卦を設け、一算するに至つて大に驚き、面色をちがへ、ことばもなく座を立つて去らんとす。義氏これをとゞめて、「卦のあらはす所何の吉凶をか主る。はゞからず申すべし」といふに、尊海頭を低れて答へず。

義氏左右近習のものどもを遠ざけ、「ひそかにいふべし」と宣ふ時、尊海眉をしわめて、「屋形の禍急なるがゆゑに、是をいふことをはゞかりぬ。今日より七日の間、甚だ重き御つゝしみなり」といふ。迷へばいよ／＼迷ふならひ、義氏聞くよりふかくおそれて、「命數の限りは是非もなし。たゞし此凶兆を避くるに術ありや」と問ひ給ふ。尊海云ふ、「禍をさくるの道、唯御座所を別所へ移してさけ給へ。今日をはじめとして、毎日四方二里の外に忍び行きて心をすまし、安居し給へ。さわがしき世の中なれば、かならず人にしられ給ふな。今日南方よりはじめて、東北にめぐりて出で給ふべし」と叮嚀に說きさとして、修驗者は辭して出でぬ。義氏尊海が詞にまかせ、其日より南方十二町の外にひそみ出でて、しづかなる崗林などに安座し、夜に入りてわづかに城にかへり、明の日は東方にひそみ遊び、三日めは北に出で、四日めには西のかた高館山のふもと、新山の森といへるふかくしげりし森にゆきて心をすまし、つゝしみかへつてゐられける。相隨ふ心服の人には、佐藤刑部、高坂中務、草刈大藏などいふものの外、七八人の下部のみにて、忍びやかなるかたたがへなり。日すでに西山に落つる比、義氏心氣つかれて、しばし鋪皮の上にねむり給ふ內、太刀おとするどきに眼をさまし見給へば、草刈大藏、高坂中務二人が刀の下に、佐藤刑部を切り伏せたり。「こはそも如何なる意趣にや」ととがめ給ふ時、いつよりこゝに來たりけん、森の奧より、楠彈正左衞門を先として、田川、大庄寺、酒田、山中、佐竹、竹中の七黨、いづれも腹巻の上に素袍引きかけ、ばら／＼と立出で、手に手に鐵砲をかゝへておつとりまはし、今も火ぶたを切らんありさま、草刈大藏、高坂中務も敵の一味と見えて、召しつれし下部とともに、七黨の後にさがつてひかへゐる。中にもくすの木彈正左衞門はるかに手をつきて、「いかに御屋形、御惡事のつもりて、御運もいまがかぎりなり。われ／＼如きが手玉にあたらせ給はんより、いそぎ御腹めされ候へかし。さすれば御一族の內を見立て參らせ、御家は傳はるべし」と、思ひがけなくつめよせられ、義氏あたりを見給へども、味方と思しきもの一人もなければ、災禍の內におこりたれば、今はこれまでと、腹十文字にかき切つて、

打つ太刀のひらりと見ゆる影よりも
はかなき世をば去るは物かは

これを辭世として果て給ひぬ。猛將のをはりぞいかめしき。七黨立ちよりて、御骸を其所に埋め、七黨手づから土をおほ

ひ、川南の郡中に札を立て、民に此よしを告げ、百姓の業怠ることなからしめ、塊をも動さずして義氏の無道を打つて、人民を安んじける。皆楠がいさをしなり。武藤の家は義氏の御舎弟兵庫殿と申せしをとりたて、大山の先知ををさめさせ、是を十九代の屋形となしける。

古今奇談英草紙第四巻終

古今奇談英草紙第五巻

八　白水翁が賣卜直言奇を示す話

文明の比、泉州堺に白水翁といへるものあり。よく人の禍福吉凶を決し、成敗興衰を指すこと差はず。常に大鳥の社の邊に行きて卜を賣る。一日一人の士こゝに來りて其卦を問ふ。白水翁其年月日時を聞きて、卦を鋪下し、考を施して云ふ、「此卦占ひがたし。早く歸られよ」といふ。此士心得ぬ體にて、「我卦何のゆゑに占ひがたき。察するに、卦のいづる所よろしからず、あらはにしめしがたきことあるか。いむことなく示されよ」といふ。翁もとより言葉を飾らず、「拙道が卦による時は、貴君當に死し給ふべし」此士いふ、「人死せざる道理なし。我幾年の後か死すべき」翁云ふ、「今年死し給はん」「今年の中、幾の月に死すべき」「今年今月死にたまふべし」「今年今月幾日に死するや」「今年今月今日死にたまふべし」此人心中に怒を帶びて再び問ふ「時刻は幾時ぞ」「今夜三更子の時死に給はん」此人おぼえず言葉を厲しくしていふ、「今夜眞に死せば萬事皆休す。若し死せずんば明日儞をゆるさじ」翁いふ、「貴君明日恙なくば、來つて翁が頭をとり給へ」此人彼が詞の強きを聞きていよいよいかり、翁を床より引きおろし、拳を擧げて打たんとす。近邊のものはしり集りてなだめ、此士をこしらへかへし、翁にむかひ、「儞しらずや。彼人は此所に執りはやす侍なり。彼人の氣色を損じては、爰にあつて卦店をひらき難からん。かへすがへすも、儞應變なき人かな。人の貧富壽夭は數の定る所ならんに、卦には如何に出づるとも、すこしは詞をひかへてこそよからん」といふ。翁一口の氣を歎じて云ふ、「人の心に應ぜんとすれば卦の言にそむく。卦の實を告ぐれば人の怪をおこす。此所にとゞまらずとも、己自ら留る所あらん」と、卦鋪を拾收めて別處に去りゆきぬ。彼卜を求めし侍は、當所郡代の別官をうけ給はる茅渟官平といふものなるが、家にかへりても、白水翁が言葉心にはさまり、面に憂ある容を、女房小瀨、「何ごとにや。上司の氣色ばしあしかりしか」と問ふ。官平云ふ、「さやうのことならず。今日陰陽師にうらかたを問ひしに、我命今年今月今日三更に

死すべしとかたく云ひぬ。」小瀬これを聞きて眉をさかだて、「左様の當なきことをいふいたづらものを、など追ひ拂ひ給はざる」といふ。「我も惡しと思ひしかども、人の勸によつてゆるしぬ。彼ものみづから罪をおそれ逃げ去れり。我今日死せずんば、明日かれを尋ねて、虛言の罪を正さん」といふ。小瀬打ちわらひて、「それほど現然たる人の、何ゆゑに今夜死すべき。个樣のけがらはしき言葉を、酒を飮みてわすれ給へ」と、其日もくるゝやくれず、官平は酒氣を帶びて假寢するを、小瀬は使女安をよびて、主人の假寢風入らせじと、二人して官平を扶けて正しく寢ねさせ、小瀬は使女と二人物がたりして「主人今日陰陽師のうらかたを聞きて、今夜三更に死すべしといひぬ。儞も聞きしやいなや。」安いふ、「われも今日傍より聞き侍りしが、何ゆゑに主人の死し給ふ事あらん。これ信とするにたらぬことなり」といふ。小瀬いふ、「我儞と今夜寢ずして、針線に夜を明し、死するか死せぬかを守るべし。儞睡る事なかれ」と、笑ひながらいふ。「かやうの時いかんぞねむらん」と、言葉の下よりゆら〱と眠る。「いかに、睡らぬ約束のはてぬに」と、ねむれば呼びさましよびさまして、

更鼓を聞けば三更なり。「是ぞ其時なり。陰陽師のいたづら言、何の故なくて死する理あらん。最早たがひに寢ねよらん」といふをりふし　忽ち官平が寢間を飛びいで、中戸に走りいづる響におどろき、ねむりゐる安を呼起し、ともに手燭を點じて、外門の戸のひらくを追つかけ出でて見れば、官平白き服を著て前へ走る足疾く、女の足に及びがたきあひだ、橋の上へあがると見えしが、水に飛びこむひびき高く、漸橋のうへにいたり見れ共、海に近き川の、水多き折ふしなれば、形もさだかならず流れ行く。二人の女は橋の上になげき臥して、「何ゆゑに身を沈め給ふ。狂氣ばし仕給ふか」とさけぶ內、かのさわぎに夢をさませし近隣の人、跡より追ひ來りて此體を見、小瀨をなだめて宿所にともなひかへり、始終を小瀨が物語に聞きて、「彼うらかたの見通したることばを、日のうちにもわれ／＼に聞かせ給はゞ、近邊申しあはせ　夜をねずして守らば、家を走りいづる時、とらへとどめぬことあらじ物を、殘念さよ」と、明の日近隣のものども死骸を求むれども、いつしか海に落ちて見る所なし。官平は狂氣の死と沙汰してやみぬ。小瀨は使女と倶に、亡夫の靈位を設け、追善をなし、

すでに百日もいつしか過ぐる比、小瀬が親里より、再縁のことを進むれども、うけがはず。再三に及んで、小瀬父親にむかつて心底を明し、「此家にありて、入舎の丈夫を迎ふる事ならば、せめて家をたつるを以て心やりとせん。他家に嫁し行くことは、決して本意にあらず」といふ。父親も實に尤もと、娘の言葉について、然るべき家督人を聞き定むるに、同じ國守の郡役をうけ給はる岸の何某が弟に、權藤太とて、郡方の取計にも能く馴れたるものありて、官平とも常に出合ひしものなるが、此事をきゝて、「茅渟の家に入つて相續せん」といふ。兩親得心の上は否むべきにあらずと、何ごとも親のはからひにまかせ、權藤太を呼び入れ夫婦となり、名を官平と改めさせ、郡鄕の役儀其儘につとめ、茅渟の家を相續しける。夫婦のあひだもよろしく、前の官平は年少し耄けたるに、是は似合敷夫婦なり。女房は德とりたりと人々申し合ひける。或夜夫婦寢ねんとして、睡がちなる使女を呼びて、酒を溫めさせける。安睡たきまゝに、不肖ながら竈の邊によりしに、俄に此竈ゆるめきて、地を離るゝこと一尺ばかり、人ありて竈を頭にいたゞき、頭髮を披りかけ、舌をはき、眼に血の涙

を注ぎ、安々と呼ぶ。使女是を見るより、大に叫んて地に倒れ、面皮黄に變じて起き上らず。夫妻急にたすけおこして、水をそゝぎ、わづかに甦りたり。「儞何に驚きてかくのごとくなるや。」安いふ、「われ何心なく火を燒く所に、先主人かしらがみを亂し、目のうち血を流して、我をよび給ふと見て、其後は覺えず」といふ。小瀬大にいかり、「儞夜中にかまどを燒くことを嫺がり、わざと物恐れをなすと見えたり。酒溫むるに及ばず、早く睡よ」と叱りて　夫妻臥室に入る。小瀬獨言して、「此使女も、年比經ぬれば、斯く嬾嫿になりて、物の用にたゝず。我道理あり」と、それより急に安をいづかたへも嫁せんと欲し、よきころの家をきゝよりしに、しかるべきえにしにや、早くも事なりて櫛笥など調へあたへて、同じ郡の、段介といへる商人に嫁しやりぬ。此段介酒をこのみ、賭をこのみ、三月を過ぎざるに、臥被までを賣りつくして、安をせめて、「茅渟の家に行きて助力を乞ひ來れ」といふ。一兩度は行きて、三五兩の銀子を乞ひ請けぬれ共、後はあたへず。わづかの銀子盡くれば、また安をせむる。ある夜おのが醉へるまゝに、夜中をも安をせめのゝしりて、すこしの錢を乞ひ來れと

いふ。安も、所詮此家に住みはてがたし、よし〳〵乞ひ得ずばこゝへは歸らじものと、茅渟の家をこゝろざして、門前にいたりしが、時刻深けたれば、敲き起して怒に觸れんもいかゞと、立ちもとほる折ふし、「儞に金子をあたふべし」といふ聲に、ふり返り見れば、屋のうへに立ちたる人あり。「我は是先官平なり。此帒の內に金子あり、儞にあたへて貧を助く。また此紙にうつしたるは我末期の一句也」と、地下に投げあたへて、消えうせぬ。安恐ろしながら、貧窮の時節、金子の二字に肝つよく、ひろひかへりて、不思議に金子を得たることをつとにかたり、「此金子を入れたるは、先主人の常に腰につけられたる火打帒なり。思へば入水の時もこれを帶びられたりと覺ゆ」段介も、つねぐ女房が、「竈の下に先主人を見たる」といふを、あやしく思ひくらすうへなれば、いよ〳〵不審しく思へとも、指しておもひよるべきこともあらねば、なまじひなる問はずがたりして、適得たる金子まで手につかぬことも出來なんと、この故に段介も人にかたらず。しかるに國守の或夜夢み給ひしは、髮を披り、頭に井げたをいたゞきたる人、眼中血の淚をながし、一紙の願狀を奉る。其文唯二句あり。

要レ知二三更事一　可レ開二火下水一

國守夢覺めて此兩句を忘れず吟じ給へども、其意を解せず。こゝにおいて、此二句を書き付けて市門に掛けしめ、能く此意を解くものあらば、賞金を與ふべしとなり。國中村落の小文才あるものどもあつまりて、兎や角と論ずれ共、字はよく解しながら、何の爲に此句あることを知らず。段介此掛札を見て大きにおどろき、是こそ妻女安が金子と共にもらひかへりし、先主人の末期の言葉に差なしと、やがて國守の門に上りて、此句のあやしきことを申上ぐれば、其書きたるものを持ち來れとの御意に、畏りて立ちかへり、入れ置きし所より尋ね出し見るに、こはいかに、たゞ一張の素紙のみにて一字も見えず。如斯にては、我麁忽を申し出でたる落度ともなるべし、然れども、初よりの事を申上げて聞きとせんと、此素紙を持ち出でて、妻女が見たるあやしみのあらましを演べけるに、儞が妻の出身はと尋ねられて、「かれは幼少より茅渟官平の家に生ひ立ち、今それがしが妻女に倶しぬ。妻女主人の許にあるときも、竈のもとに怪みを見たるよし申せし」とかたる。國守打點頭かせ給ひ、此あやしみかならず茅渟官平が家のことなるべしと、官平夫婦を召し出して、心おほえなきやとたづね給ふ。夫婦とも、「かつて思寄なし」と申

上ぐる。國守ひそかに官平が宅へ數人をつかはして、竈を毀ち見させられけるに、衆人、何事にやといぶかしながら、官平が留守の家に行き、竈を取りのけぬるに、其下に一塊の石あり。是を舁きのけて見れば一つの井なり。井の内をさぐり見るに、一つの屍ありて生けるがごとし。見知りたるものありていふ、「これこそ先の官平なり」といふ。衆人此屍を舁きかへりて上覧に備ふ。官平夫婦是を見て、懼れ得て面色土のごとく變ず。國守、「死骸をあらためよ」とあるに、死骸の項に布をまとひて、絞めころしたる有樣なれば、衆人皆駭然たり。やがて當官平夫婦に此事を責問はれければ、つひには白狀しける。此當官平、權藤太と申せし時、小瀬とひそかに不儀をなし、人知るものなし。先官平卦をうらなうて家にかへる時、權藤太彼家にかくれ居て、三更の前後、醉ひふしたるをうかゞひ、勒殺して井の中に隱し沈め、權藤太髪を披けて、面をかくし、走り出で、橋の邊にいたりて、大石一塊を把つて橋のうへより投げ下し、身を投げたる體にもてなし、其身はかくれかへり、ひそかに小瀬と計りて、竈を井のうへにうつさせ、井を別所にうがちて、人の思ひがけなく彼家に入贅して夫婦となりしまで、二人の白狀死罪のがれず。段介には一枚の金子を賜はりて、賞すべしとの詞の信をたがへず。權藤太が惡計は、人のいましめの古語となりぬ。

九　高武藏守婢を出して媒をなす話

淨御原の天皇、生得乞兒の相ましませしかば、皇子たる時、此相を果さん爲、僧は乞食に類することありとて、薙染して近國に潛行し、これを以て大友皇子の鼠を避く。是則ち乞兒の相空しからずといへども、後遂に御位に卽かせ給ふ。漢の文帝の寵臣、鄧通、南風を以て恩幸比なし。許負といふ相人、鄧通が面を相して、縱理紋口に入るはかならず餓死すべしといふ。文帝聞召して、「人を富貴にすること我心のまゝなるに、たれか鄧通を窮せしむるものあらん」と、蜀道の銅山をたまはりて、錢を鑄ることを心のまゝに許し給ふ。此時鄧氏が鑄たる錢天下に布渡りて、富をいへば皆鄧通をたとへとす。後來文帝登駕、太子卽位して景帝といふ。鄧通が先帝に媚を獻じて錢法を壞りしを罪として、其家產を籍して取上げ、鄧通を空屋に幽へて其飲食を絕つ。果して餓死す。丞相周亞夫また縱理紋口にあり。景帝彼が威名の高きを忌み、あらぬ罪を尋ねて獄に下し給ふ。亞夫怨恨して、食

を絶ちて死す。此兩人、富も貴きも人に勝れながら、餓死の相逢には免れず。勸善の話に多く説く、極貴の相ある人も、惡を積めば、陰徳を損じて富貴に至らず。また極惡の相ある人も、善を積めば、禍を返して福と成るといへり。是懲惡のことばにして、古代人を相するに謂はざる所、相家の深妙は尙高きに有るべし。惡相を變ずる程の善をなす人、はじめより惡相見ゆべきや。善相を失ふ程の惡をなす人、はじめより善相と見ゆべきや。人相は善人惡人によるべきものならず。今日不善の人に出身發跡する人あり。善人にも下賤にうづもれ果つる人あるを以て見るべし。足利の高祖尊氏、天下を創業する時、執事高武藏守師直なるものあり。譜代の家臣なるが、彼幼少の時、家弟師泰と郊外に出でて、鷹を放つて獵をなす。偶旅行の僧此所を通りて、はからず兄弟を見て歎じて曰く、「此兄羨むべく、又傷むべし」といふ。兄弟其故を問ふ。彼僧云ふ、「貴人の相あれども、終を善くせぬ相あるゆゑ、かくはいふなり。功名の下久しく居りがたし。久敷居らざれば大事を做さず」と、言ひ殘して去る。師泰は其ゆゑを知らねども、師直早く其言葉を悟つて、高名の下を去つて山林に隱れ、身を全うするは、中華智士の做すところ、身命を輕んじて、主君の業を建て、我家を興すは、日本義士のする所、今の時節、身命を全うして名を做すことあらんやと、遂に意に挾ます。師直柄を執るにいたりて、新田の一族は北越の雪と埋れ、楠氏の餘類は南山の雲に散りて、官軍最初の赤松圓心、多々部の蝨に據りて却て楠氏に備へ、足利の爲に西國の喉口を守り、鎌倉に中將義詮あり、洛に副帥直義いまして權威を助く。海內略一統に歸して、畿內漸く無事なり。こゝにおいて、尊氏佛法に歸依して大刹を建て、財寶を喜捨すること數をしらず。師直是を諫めて、「戰鬪暫く穩なれども國家多事、宜敷不虞に備ふべし。漫に金銀を費すの時にあらず」尊氏我意のむかふ所に一味にして、これを聽き納れず。あまつさへ、佞智をすゝむる小人多く出頭して、當時師直が內外に權強きを、尊氏を始として邑むの意あり。師直自ら想ふ樣、我威權おもきうへ、夙夜國家の爲に勤勞す。如斯にては、却て忌み猜むものあつて、恐らくは禍を生ぜん。こゝにおいて、口に國家の事を言はず、瞽者、遊君をあつめて日夜酒宴にくらし、美女をあつめて足らずとし、大名國守に求めて美姿を納れ、情を酒色に肆にして餘年を樂むといふ。當時將軍よりも人の恐るゝ執事なれば、在京在國の大名より、其求に媚びて、白

拍子と名づけ、遊君と名づけて、送り來るもの數をしらず。師直來るものはこばまず是を納るゝ。こゝに丹波の國に名をしられたる侍に、額田次郎左衞門といふものあり。額田治部少輔といへるものの子なるが、弱氣にて親の不興を蒙り、他國に行き去る。親の許にある時、是も同國に名ある荻野彦六といふ人の女、勝子といへるを、次郎左衞門が妻女に約諾して、聘禮すでに定り、親の許せし結びに、つゝしみをわすれ、互に消息のとりかはしして悅びあひしに、次郎左衞門、斯く勘氣をうけて行衞しれずなり、彦六が娘も早十六歲に及ぶ。生得花を堆ね玉を琢ける美質、哥咏絲竹に妙なりしかば、國守何某より、彦六に乞うて、此勝子を師直が召仕にご遣しける。勝子は次郎左衞門を定る夫と思へば、主親の命に從ひ、しばらくみやづかへには出づれども、死する共操は折らじと、心に深く誓ひて都に入り、執事の方へいたりしに、元より美女多き館にて、百花の中の一花なれば、執事是にも心をとゞめず。かくて次郎左衞門は母親の追悼に折を得て、不興のゆるされありて、國にかへりて後、荻野が女子のことを聽きて大に憤り、聘禮定りたる女子を他家の婢につかはす法やある、此こと武士の見捨てがたし、彦六と打果さばやと思へど、もし此事により師直が怒に觸れては、我父一族の爲にもなるまじと、胸をさすつて暮す內、父治部少輔も世を去り、家勢彌衰へ行けば、中々本意を遂ぐるかたへは尙遠く思はれ、さすれば人に知られたる此國に住まんも面ぶせなりと、一族に長の別をなして都にのぼり、西の京邊に假住し、出身の便を窺ふあひだの經營に、幼より覺えたる藝なれば、畫工を業として日を送る。其畫人にすぐれて氣象高かりければ、吹擧する人ありて、直義の御所に召され、畫の業を以て日々伺公しける程に、いつしか近習に召しおかれける。元より武門出身なれば、心も剛に、賴しげありければ、直義の分地備前の國、郡吏の缺所あるに着けられて下るとて、鳴尾の浦に廿日ばかり風待して出船しけるに、わづかに播州の海上にいたりて海賊に出であひ、多勢に敵しがたく、からうじて身ひとつのがれ、脚船に乘りうつりて陸に上りしが、金錢は元より、賜りし添文まで失せければ、進退すべきやうなく、袖乞同前にして京都に歸る。其際わづか一月ばかりの內、變化はかりがたく、直義錦小路の宅を出奔して行衞しれず。反逆の志やましますらんと、とりぐの說衛に充つ。たよるべきかたなきまゝに、先に住せし西の京に行き、隣家の茶坊にあはれみを

乞うてやどり、明の日すこしの知音をたづね行きて、執事の館へ内縁をもとめ、右の次第を達せんとすれども、直義ましまさず、添翰の失せたるは證據なしとて、取次ぎて得さする人なく、此日もすごすご茶坊にかへり、せんかたなげなる有さまを、主人も笑止がる折から、武家の侍と見えて、一人の年たけたる男、袴のももだちたかくとりたるが、茶坊にやすらひながら、次郎左衛門がさまをつくぐく見て、「足下には何方の人にて、旅人とも住人とも見え給はぬ」と問ふ。次郎左衛門いふやう、「御尋なければ扨やみぬ。御尋あれば此始終を聞いて給はれかし。かたるに憂さもおこたりなん」といふうちも眼のうちうるめり。此侍云ふ、「足下の身の上いかなる愁やある、細にかたり給へ。語れば心も慰むぞかし。あるひは御心得にもなることあらば申さんものを」

と問はれて、次郎左衛門姓名をあかし、海賊に逢ひたる以来の困窮をかたる。此侍いふやう、「船中盜に逢ひたるは足下の罪にあらず。錦小路殿ましまさずとも、何ぞ執事の家にいたりて此事を告げ給はさる。執事行跡と志と甚だ異なり」次郎左衛門いふ、「それがし錦小路殿の身うちのものゆゑ、執事の家へ執次いで得さ

する人なし。たとへ執事に達したりとも、人の妻女を取り上ぐるほどの無道人、たのみ甲斐あるべからず」といふに、此侍きゝとがめて、「しらず、執事果して此事ありや。」次郎左衛門いふ、「某は世の中に住み果つべくも覺えねば、憚る所なく物語るなり。某幼年より約諾せし妻女、いまだ婚をなさゞるうち、執事の妾となりしゆゑ、其事より起りて、かく浪々の身とはなりぬ。執事の美女をあつめらるるより われらが縁も奪はれたり」此侍きゝて、「其女子の出所は何國ぞ。やつがれ年ごろ執事の家に出入して、多く執事の内事をうけたまはる。多くの召つかひ皆よく見知りたり。足下の申さるゝ女子あるやなしや、たつね參らすべし」といふ。次郎左衛門實に女が出所をつげ、「貴君此消息をきかせ給はゞ、我死すとも快く目を閉づべし。」此侍次郎左衛門が始終の不遇をあはれがりて、「明日此時刻にはまた此邊へまうで來れば、其時こそいかにも女がおとづれをきかせ申さん」と、たがひに別をなして去りぬ。次郎左衛門おもひまはせば、此侍かならず執事の家人なるべし。我執事をうらむるのことば、もし執事の聽にたつせば、怒を犯さん事踵をめぐらさず、禍の來らんこと立

所にまつべしと、或は悔み或は恐れ、心のうち好生安からず、一夜眠りて眠あはず。明の日、心ならず執事の館近邊に行きて、其動靜をうかゞひ見るに、門前市をなす。伺候の人のかたりあふを聽けば、「執事今日すこしの勞ありて評定所に出で給はず」其音問として、諸家よりの使者門にむらがり、一日の不豫すら是をさしおかず、出で入る諸士星のごとく、數しらぬ中にも、きのふの侍とおぼしきものなし。しばらく徘徊して執事の繁華をうらやみ、宿にかへり、午飯を食し、きのふの時刻にいたれども、人影も見えず。扨はかの侍、好き額の應對して、假に諾けがひたるならんと嗟歎する内、燈點し、想ひ寢の枕とらんとする時、兩人の武士ありて、さわやかに出でたちたるが、供人引き具して此所に來り、外面より、「額田次郎左衛門やおはする。執事の召され候なり。疾々倶して罷りなん」といふ。昨日の侍にこそと、透間よりのぞみ見れば、夫にはあらで、紛もなき高家の侍、しかも末々の人柄ならず。さればこそ禍はやく起りたりと、間所なき奥に逃げこもりて出でぬを、宿の主は執事の召すといふに驚き、强ひて額田を押し出し、此人なりといふに、次郎左衛門いふやう、「それがしいまだ執事に相見せず。殊に此襤褸の便服をつけて、いかで執事の御前に出づべき」兩士聞きあへず、「執事の嚴命、一刻の遲參こそ無禮なれ」と、兩人して額田が手を執つて、飛ぶが如くにいそぎて今出川の館に至り、「こゝに侍たれよ」と、額田を大玄關にすゑおきて、兩士は臺盤所より內堂に入りぬ。程なく出で來つて、「執事今日館に在つて儞をまち給ふ」と、兩士案內して、白砂をめぐり、塀重門より入つて奧庭に行く。其間燈籠ありて道を照し、めぐり〳〵て一町ばかり、次郎左衛門戰々慄々として、小書院ともいふべき所にいたりしに、銀燭の光煌々として、執事褥ばかりにて、端ぢかく座してあり。後に一人の少人太刀の役に候ず。近習の士七八人左右に居流れ、天下の柄をとる骨柄一目に著く、次郎左衛門魂天外に飛び、地に平伏して仰ぎ見ることあたはず、流るゝ汗背を浸す。執事左右に命じて、次郎左衛門に坐を賜うて、見向通りにすゝましむ。此時額田額を擧げて、徐目に執事を見れば、髮のかゝり優美なれども、見まがひもなく昨日の侍なり。こゝにおいて、いよ〳〵驚惕して兩掖の汗をなし、低頭して息をつめ、生きたる心地なかりけり。是元來、執事常に閑なる時は、すがたをやつし、街上に出でて世の謠說を搜り聞く。昨日次郎左衛門に逢うてより、館にかへり、勝子

を呼び出して相見するに、果然として十分の顔色あり。執事かれに問うて、「儞が夫妥にあり。一見を願ふか」と問はれけるに、勝子涙をながして、「隔りてより夜と日とわすれず。しかれども、今館にある我身、對面すること、君のゆるしなくて賤が心にまかせんや。」執事其言の正しきにかんじ、司庫の家人に命じて、婚儀料千貫をそなへさせ、又直義の分地備前國への下文を調へ、兼て事備はりて、今こゝに額田を召しよせしなり。額田は執事の美意を知らず、只あわてゝ胸安からず。執事ことば穏にして、「儞が昨日のものがたりを聞きしより、惻然としていたましく、食もくだり兼ねたり。儞に久曠の歎あらしめたるは、偏に我罪なり」次郎左衛門はるかにすさつて、「鄙人困窮して智短く、心神顚倒、昨日の無禮言語に絕す。願はくは、執事の海量これを許すことを容れ給へ」執事いふ、「今日吉日なり。それがし媒人をなし、足下の婚を完うすべし。行費の資千貫、備州への下文こゝにあり。婚儀成つて後、于飛して任に趣くべし」額田たゞひたすら頭を地につけて拜す。忽ち多くの使女にかしづかれ出づる勝子が容貌、額田もいかなるものにやと猶豫する時、執事自ら酌を把り、土器をそなへて、婚儀を調へらる。障子のあなたに壽の謠物、數人の聲にひゞきわたる。額田夫婦、肺肝に銘じて執事の恩情を謝す。執事いふ、「我いやしくも天下の政務にあづかる身なれば、此後故なくして對面なりがたし。早く夫婦とも西國に下りて時をまつべし。物騒の折からなれば、道の程は大内筑前守の下向に同伴して下るべし」と、二人を乘物にて宿所へ送りかへさしむ。次郎左衛門宿にかへり見れば、宿の門前に賀使の袖をつらね、執事の媒ありし婚姻なることかくれなく、諸家より送り來る絹布財寶、宿の庭に充滿ちたり。程なく執事より贈りきたる長櫃に千貫の助資を盛り、備前への下文一個の文匣にしたゝめいれたり。額田面目身にあまり、悅重疊する折から、大内筑前守より家の子をつかはして、「執事のねんごろに御頼ありし程に、明朝御供申すべきあひだ、御心置なく早々わたらせ給へ」と言ひおくる。此良期をあやまるべからずと、夫婦とも大内に同伴して備前に下りぬ。こゝにても、執事の緣者とて人の心よせ重く、後直義と將軍と合體の時を得て、尙も眉目を開き、むかしにまさりて昌えけり。

古今奇談英草紙第五巻終

寛延二年龍集己巳九月出來

書林

江戸通本町三丁目
西村源六

大坂心斎橋順慶町
柏原屋清右衛門

同　南久宝寺町
河内屋八兵衛

古今奇談
英草紙後編

繁野話

古今奇談後編

浪華書林

稱觥堂
揚芳堂

近路行者三十年前、國字小說數十種を戲作して茶話に代ゆ。千里浪子其中に就て、英草紙九種を摘みて書林に授たるは、廿年に早なりぬ。其このかた行者の行藏常ならず、市に隱れ、山に棲み、卜を賣り、字を鬻ぎ　舊游に違ふ事多し。去年春復浪華に過る。書林予に緣て其餘稿を求む。行者默して、誠に其事あり、今其有無をしらずと。往に通家に寄せたる筐の中より、冊子をとり擧け、紙魚を拂ひ、與へんとして、其榛蕪

を恐れ、間談を恥ぢて沈思する所あり。それを尋へるが如くして求め取り、一觀するに、其首なる雲のたちゐる談は、是をこそ一方の雲の賦と號くべきか。守屋の連不言の裏に意ふかく、厩戸の理もよく展びたり。手束弓の故事に任氏の傳奇を繫ぎ、邪色の人を蕩すことを覺す。白菊の巻は白猿梅嶺の舊趣を假り、占卜の前數に因ることを說き、女數の名實全たからんことをはけましむ。唐船の彌言は聚散の

悲喜を盡し、望月の寓言に龍雷の表裏たるを斷る。江口の始終は杜十娘を辭して、俠妓の偏性をかたり、子弟の戒となすなる宇佐美宇津宮の戰略は、軍機の得失顯らかに、南朝の絕えざる昔物語見ゆ。彼是九種、倂に長談なりといへども、卑說慍談、名區山川、古老の傳聞、土人の口碑、此に述べずんば世に聞ゆまじきを、是が演義して、長き日の興にも備ふべし。實にや鶯の谷より出づる聲なくばと此草紙を愛れど、彼

しるべなき暗に月をおもふ愚の心もて、華房の枝葉しげ〳〵なる野話なればとて、作者の自厭はるゝも　大方の誹に先だつ自明ならんかし。僕千里浪子に形影の好あれば、其ひとたび梭せられしを可して、一語を贅する事、已むべからざるの業なるかな。

明和乙酉の冬

十千閣主人撰

古今奇談繁野話總目録

近路行者著

千里浪子正

第一篇

雲魂雲情を告て太平を誓ふ話

第二篇

守屋の臣残生を草莽に引話

第三篇

紀の関守が霊弓一旦白鳥に化する話

第四篇

中津川入道山伏塚を築しむる話

第五篇

白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話

第六篇

以上九篇

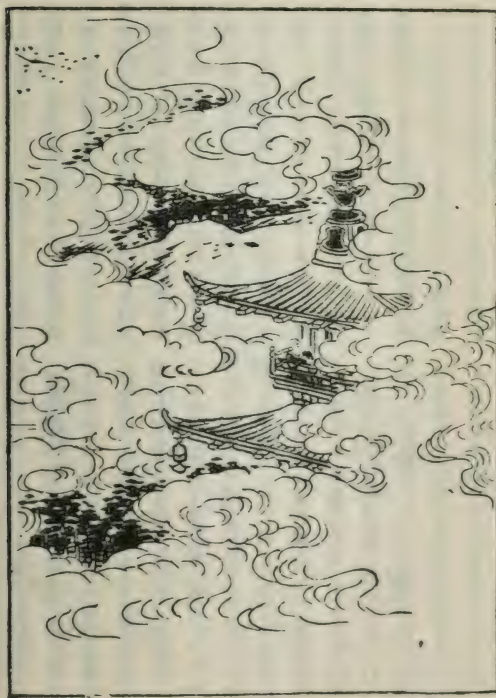
古今奇談繁野話第一巻

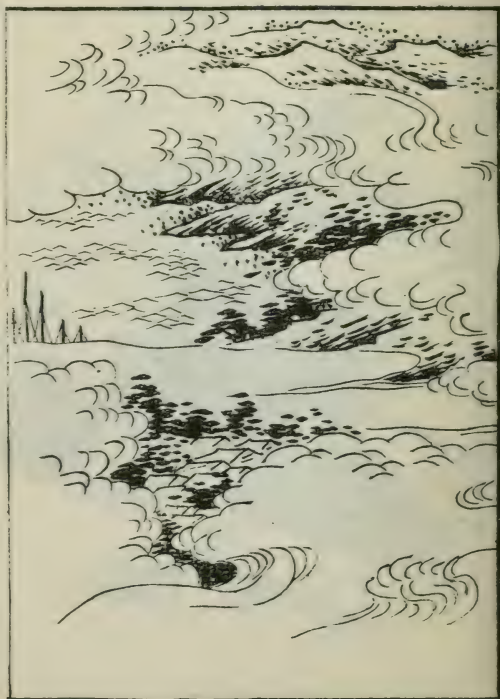
一　雲魂雲情を語つて久しきを誓ふ話

雲を體とし水を心とし、平生消しつくす種々の心、世塵に着せぬ桑門の身にも、唯忍ばしく見まほしきは、祖師の法蹟、飛鉢の遺地、拜しめぐりて精進の助ともなさんと思ひたつ沙門は、年比程ちかき和氣の法華堂に籠りたりしが、大永の初の春たつや、霞と共に出でて、秋風を歸る期とし、順路にあらふる高峰々々を眺望して、富士の麓に過りながら、若かりし日は登臨の志やまざりしが、年經ぬる身は何事も思ひやりて心ゆくもをかし。往きかへる路の曉昏は、空の色雲の容のみ目に親しく心に染みて、朝たつ雲に花洛を出でて、夕ゐる雲のあしたゆくも、なにはしるけき此寺の僧侶に知音ありて數日の勞を休め、一夜此寺の浮屠の五層に登り、佛像の上に坐するは恐れなきにしもあらねども、人の臨むべき爲の樓窓ならめ、隱るべき爲の欄にこそと、秋涼の通夜讀誦しけるに、かばかり高ければ、世とへだたりたる心地し、雲路近きかとうたがふ、人の心ほどけやけきはなし。上弦の月中ぞらに高けれど、雨氣くもりて咫尺も朧なり。夜目にそこはかとなく見わたすに、月のすむらん高津の宮さへさだかならず、大に興を掃ひ眠を催す。塔の頂に物おとして、「珍しや偏達陰陽の命を分ちてより、四方に位してたがひに遠く望むばかりにて、南よりは直北に行くの雲路稀に、北よりの雲路は半にして絕えがちなり。わきて九郎は海邊に住みて、南に出づれば海氣に消され、行き逢ふ時まれなり。けふしも右旋左旋の風に吹きめぐらされ、此雲水の因あるによつて、衆雲と共に一片づつにてもこゝに停ることを得たり。世の中に、雲心なく呼名ありとも覺えざりしに、薄雲村雲と品おほくわかつ、人たるものゝこざかしさよ。我を丹波太郎と呼ぶは、北に立つ奇峰中にもかさみて見ゆるがゆゑか。看々數坐の樓臺を組みたて、變化定まり無きゆゑ、乾達馬城にもたとへて、蜃樓に混ぜらるゝも、底の心は其趣あらんかし。たゞ高き風によこをられ、東西になびくをいかんせん。又春夏のそらに雨氣を帶びたる村雲、秋冬にむれ飛ぶうき雲、ただいま吹きはなたれたる山烟などの、近

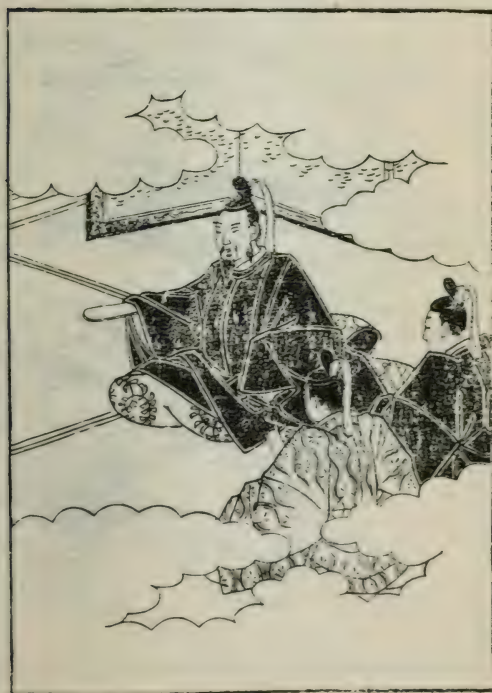
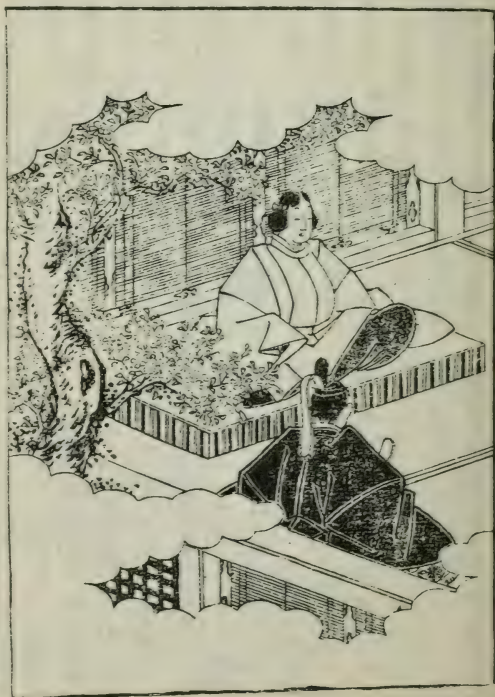
き風に吹きまはされて、北より西に、南より東へめぐるは、我同姓にあらず。我たつそらは遙に遠く、吹く風さへ同じからず」「それがしを奈良次郎といふは、東に立てる形、恐らく奇峰の體を得たりと思へども、腰はそきゆゑ太郎に及ばざるか。但ならび立ちて夫婦の如きこと我雲のすがたなり」「やつがれを泉の小次郎とよぶは、南の樓臺遠くして、人望雨所よりおとりたるゆゑなり。常に海風に障へられて、立つこと稀に、奇峰のたゝずまひ獨立なるゆゑ、世の人、泉の小次郎が妻を奈良次郎に奪はれたりと、有情の身に引きたくらべてかたるもゆゑあるかな」「三方は同じ白峰姓なれども、遂に馴れてかたる時あることなし。扨それがしを魔耶九郎と名付けしは、太郎次郎の次第にあらず。元より素姓各別にて、後は六甲の左右にまたがり、首は常に魔耶、多々部の山頭にむらがり、東西ながく幾重にも積むゆゑ、浪花の人目には黒みがちに見ゆるゆゑ、黒きといふの名なるべし。返照に薫ぜられて、雲の邊に金色を生じ、彩色の手づまも及ばぬ色を設けし時にこそ、浪花人はいかゞ見るらんと、我心にいかめしく思ふなり。時として、北雲我しりへを襲ふことあれば、我六甲の高きを恃とし、卑くおりしきて彼を南海に出でしめ、我は山に據つてうごかず。在間三郎、出づることまれに、かたち直なれども、雨師の小將なり。思ふに進退は國處によつて異なれども、我輩の情はいづくも同じくて、恐らくは人世の知らざる所ならん。かゝる折から、且は雲水の主をもなぐさめのため、おのれおのれが思ふことを、一言づつにてもかたりて、せめて心遣とせん。實にも思へば、無くてもよからんものは我輩なるを、徳堯禹より亨しと古人の譽められしを　思ひ出す時々は羞かしき汗のしぐれをなす。天の戸あきて朝に霞すは、是をこそ我日の出の時を得たるなり。いづこをさしてか春雲鶴に似て飛び、何を宿として岫を出づるの句あるや。曉のすがたを山かづらとながめらるゝはいと覺束なし。されどこれらは人の目にも好景ならん。西北の嶺に衣きせては、單しといへども行人の足を催し　東北の隈に深く聚れば雨かと疑はれ、高く六甲を越ゆれば日和かはらんとし、海上に陰けては漁利を害す。或時は北へ東へ右にめぐつて、遠方の雨に應じ播の空に陰暗る。夏の日北方の雲展びざれば、東南の山に據つて急雨を行る。凝りのみまさる秋のあつさ、すこしむらがりても衆生の心いさめども黒雲頭上に暗くしては遊船の檝を回さじむ。況や雨のうへに三日覆へば、厭はる

るも口惜しからずや。秋の最中の清き夜に、一ひら二ひら、風のまに〳〵月にかかれば、月をもてなすかと見え、雨にともなひて陰りふたがる時は、極惡人の部類に入り、詩客の宿題、歌人の擬作、空しく腹中に朽たしめ、晦ならずして月に無の字を添へしむるこそ、罪ふかく覺ゆれ。風に驅られて往來に惛憊るは、まかせたる身の我に由らざれば、暮ちかき早風には、何を周章ていそぐらんと、人も見とめ、行雲よりも月の行くやうなるもうるさき。雲の集る處を靄といふ。日の邊に赤き雲を霞といふ。俗には混じて分別なし。又我素姓は地黃氏の類族にて、目にこそ見えね、地上三尺より我が占むる所なるを、世の諸人は大空の一屬のやうに思はるれど、其系圖大に違ひて、大空氏は其德を常にして久かたに、蒼天、昊天、旻天、上天と四季の名かはれども、みどりの色かはらず、其形深くして限りを見せず。我らは平地より八丁と量られても、所定めず無くなれば、かくるゝ所さへしらず。風は形なけれども吹き行きて吹きかへるに、我は一日の間に消息定まらず。一向日のたてぬきに照りて、日本晴とやらんいふ時は、一黨みな消の化を得て無苦界に遊ぶ。古人の雲を賦したる辭に、冬の日は寒をなし、夏の日は暑をなすとは、露ばかりも我にはあづからぬ物を、我造す物の世の助ともなるは、雨而已なり。是も其土地雨氣に應ずる時いたらざれば行ることあたはず。或は他方の雨の爲に行雲を見て、此方の天氣を卜ふ人は、雲情を取り違へること多し。時ありて水を取るに、鹽海、湖水の分ちなけれども、鹽氣を去ることは我雲中の祕事なり。龍に從づて起るは、眞龍卽ち風雲の類屬なればなり。雲なきにふる雨を奇水と名づく。多く是遠方の龍雨なり。又春の靄氣の空に滿ちたるが、夏に向うて溶け降る。是に誘はれてさみだれ雲となりては、心の雲鬱々しきをいかんせん。ゆるやかなる時は絮のごとく、棋のごとく、鳥の距の如くさがりたるあり。只直下の人は足なし雲と見れども、遠き空を横ぎりて行きかふには、一陣〳〵其脚をあらはす。形は風に順へども、現れ消え聚り散ることは陰陽の布くにまかす。風の有無の界にある時は、吹きのこされて長く一疋の練を引く。又織姬のはたて廣く水まさの文をなすは、風の中ぞらにたゆたふなり。霰をあつめ雪をちらしては、山のすがたを簾中に見せしむ。左に旋つて賤の臼ひくかたちなるは天氣の常なり。あなたの雲北へ行き、こなたの雲南を指すは、風かはらんとして其あひだにめぐるなり。上なる雲東に行き、下なる雲西

にむかふは、風上下にめぐり聊雨氣の動くなり。空より吹きおとす風は、其地勢によつて吹きもどることあり。浪花の朝はかならず谷風吹いて出船を送り、晩に秦風千帆を入らしむ。天然の大津、實に輻輳の攝地なるかな。風の勢は四方の山形に因るがゆゑ、土地に隨つて異なり。唐土の書に名稱多しといへども、方角を四時に合せたれば、此邦に用ひがたし。東南の風を黄雀風といふも、時六月にあらざればいふべからざるが如し。本朝處處の俗稱多かれども正しからず。昔より乾の風をあなしといふは、此風吹けば雨なし、水氣までも吹きはらふ。しなとの風ともいふよし。北國來風とかや、吹きあての横ぎりたる、遠く來りてもつよし。眞風は西南の山なき間より、海にも吹きおとさず、眞一字に吹き送る。其すがた淸らに涼し。風雲の行は四方ともに眞正ならず、斜がちに隅かけて吹くゆゑ正風は稀なり。四方より吹く風を隅風と名づけ、吹くときは雲の心さへおだやかならず。實にや雲雨風煙は畫にもゑがかれず。風はやみ、むらちる雲の形勢をゑがかんとて絹に白粉を落して、口にて吹き、ちるまゝに形をなすを吹雲と名づけ、細にゑがかんと欲せば、羅章の傳を心に含み

て、眞讃の雲の筌蹄とすること、八雲翁より人世に傳へたるよし。我ながらかくとはしら雲に、人こそかしこかりけり。今こそ年來の雲氣を吐きて、心にかゝる雲なし。百とせの後つかた、太平長に時を得て、祥雲、瑞氣常にたな引き立ちて、福利海に滿ち、人文林をなし、限なき東風惠みふかく、我らごとき浮雲も端袖をひるがへし、常に四方に立ちそひてたえず奇峰を出し、靜なる世の觀にそなへ、厥時を忘るゝことなかれ」と、聲きのゝめき、漸々として四方に分れ去れり。沙門夢さめて思ふに、雲水の主とは我を指すにはあらで、此に妙なる彫刻の莊嚴なるべし。珍しくも雲魂の談を聞いて、人にもかたり問ねて、此津の四方に靉てる雲の、昔より各其名あることを初めて知られぬ。左もあれ夢に白雲と遊びし心空なる妄言、聽く人も妄聽し玉はんか。

兎にも角にも書きすてける。

二　守屋の臣殘生を草莽に引く話

敏達天皇の御代、疫疾大に流行し、蒼生を害すること少なからず。此時物部の守

星の臣、大連の職に在つて、諫行はれ言聽かれ、大に威名あり。因て言を進めて曰く、凡善敎の世界に行はるゝや、此國の善政は其國に往き、彼國の善敎此國に來るは、貨を交易するがごとく、互に取り用ひて恥なしといへども、地を易へては行はるべき事あり、行はれざる風あり。我國上古より宜しきに就くの禮樂あるうへ、新羅、百濟、王化に歸順してより、漢土の禮樂、書に傳へ人に傳はりて、堯舜行ひ孔子述ぶるの道、其緒を開けり。然れども禮樂は世代により變ぜざることを得ず。文武周公、復生ずとも時宜に從ふべし。況や本國、風土習染の異なる、悉く從ひ用ひがたし。近年佛國の敎傳來して、敬信するもの多し。其國遙に隔りて西東にあり、いまだ其土風の善惡をしらず。先朝にあつて中臣の鎌子、愚父なる尾輿等、疫疾の事によつて奏して申したり。本朝元より百八十の社稷の神ありて、祭事おこたらず、天下平なり。何の欠くことありて夷神を用ひ給はん。彼佛は夷狄の法、施を好みて世法に驗なし。其事皆實あらず。寂滅をつとめて生成を伐ばす。漢土の上古は、君臣皆長壽にして百歳に下らず。佛法其地に入つて年代尤も促る。漢土に佛入らざるの前は、詩

書雅頌の音あつて、萬民自ら多福なり。我日東に儒教來らざる以前は、人の量泛く壽もまた長かりし。今夷國の神を信じ、本國の神を輕んじ給ふゆゑ、國神怒りて疫疾を致すならんと、朝廷につらねし數言、時の弊を救ふの激論なりといへども、今日其言を用ひ、佛をしりぞけ國津神に謝し玉はゞ萬民安きにむかひ、宸襟樂しかるべし」とぞ申しける。時に馬子大臣、幷に豐日王の長子厩戸王子、幼年なれど、聰明人に秀でたるが、すゝんで守屋に對ひて云ふ、「大連の言ふ所心を用ひずといふべからず。しかれども、佛は夷狄の法、用ゆべからずといふこと、いまだ深く考へざるに似たり。我邦上古、西より遷りて東し、神武皇西鄙より起つて宇内を御す。漢土舜王なるもの、諸馮に生れ、東夷の人、文王は岐周西夷の人なれども、皆法を彼土の後世に垂れたり。佛は淨飯國王の子、其國漢土に隣る。漢土と我邦とは、北ならず、南ならず、世界の中國にあり。大に觀る時は分別すべからず。已に漢制において取り用ひらるゝことあり。佛敎もならべ用ひて萬民を利し玉ふべき事なり。又佛法實なき事ならんや。凡そ理を以て說くもの、其理に違せざる時は、其實を見ることあたはず。佛は

其富貴を捨て、道の爲に身をわすれ、患難飢寒を免れんが爲にもあらず。何の因る所ありて空妄不實の事を說かん。世の凡夫不實の事をなせば、年月を經ずして、衆人惡みて是を棄つ。有識の賢者其妄を知らざらんや。其道妄ならば、其教何ぞ漢土我國の今日につたはり、天神鬼神心を傾くるにいたらん。又妄なれども、佛の妄は證すべきなしといふものは、不通の論にして、愚者の見る所、其人如何ぞ虛實の體をしらん。世の人、我に異なるを憎むの意あるは、大智にあらず公道にあらず。其憎愛を以て取捨せば、後世必ず互に相排斥して、勢二つながら立たずと思ひ、佛家は儒生を愚人とし、儒生は僧家を妄人とし、若し僧家人を品せば儒生を舉げず、儒生史を記さば僧人を列ねず、互に溫柔の和を失はん。又佛敎入りて命數を促すといふこと、忌滯の說にて、已に書の無逸に言はずや。時より厥後亦克壽きこと有ることなし。或は十年、或は七八年、或は五六年といふ文あり。彼時は、漢土いまだ佛の名をも聞かざるの時にして然り。佛徒の中にも壽なるものあるをや。漢土に佛語入りて後は、言語集雜にして、頌誦變ずることもあるべし。其國に通ずる時は、音移り語雜はること、自然にして免れざる所なり。佛語入りて萬民福なしといふは、福たるの利をしらざるに似たり。早く開くる花は早く謝し、榮を常と思へるがゆゑ衰をかなしみ、財祿多くして血脈續がぬあれば、眷屬に富みて養ふに足らぬあり。煙を分つ家多きは身につくすことあたはざるの福なり。世人足ることを知らざれば貧におとれり。手を以て物を與ふるにあらずんば、利益にあらずと思へるか。王者の民は、喜の色見えずして惠のうちに生活す。佛の利する所其域に近からん。大連、熟再思を加へ給へ。今漢土に聖教既に來るといへども、三韓の傳へにして親切ならざるを惜む。丸は直に漢土に使臣を遣し、面授口傳して我國を利せんと思ふこと常にやまず、大連の高明、しらず如何とか思はる」大連少しも慍る色なく、從容に答へて、「聰明の論じ給ふ所、世の惑を開くに似たり。小臣御陛に當つて詳に論ずるに及ばず。臣が愚見は、唯知廣まり文華しげりて、質朴の國風を失はんことを恐るゝのみ。王子大臣、よく〳〵高見に明斷し玉へ。餘は多言に及ばず」といふ。帝元より佛を好まず、守屋が一言を取るべきとして、佛敎を停め佛像を流し、僧徒を禁ぜらる。しかれども、疫病いよ〳〵さかんなれば、佛を流すの祟にやと恐るる人多かりけり。豐日王嗣ぎて立つ。是用明帝なり。厩戸皇子時を得て威名あり。

守屋の臣が權勢稍移らふ。用明崩じて、守屋の臣、御弟穴穗部皇子を位に立てんと計る。穴穗部皇子威勢を賴んで愼まず、炊屋姬を殯宮に見んとして、七たび門に呼ふ。此ゆゑに衆心屬せず。馬子遂に內命を含んで穴穗を害し、諸皇子と群臣に謀つて、守屋が河內の家を圍む。守屋眷屬家人を率ゐて、稻城を築きて戰ひ、三廻敵軍を却還かしむ。廐戸皇子後軍にあつて戰を力む。守屋が軍此に利あらず、一族從者悉く恩のために死し、其身も矢にやぶられ、動作自在ならず。合軍に告けて、「速に迯れて身を脫るべし。我はこゝに命をとゞめん」といふ。家の子漆部の巨坂、强て守屋が服を賜りて死に代らんと乞ひ、弟小坂主人を諫めて脫れしむ。守屋總軍と同じく、皂衣に服を換へ、馳獵たるもの體にして城を離れ、廣瀨の勾にいたつて、是よりおのがさまゞゝのがれ散る。守屋主從只二人、晝は葦原にかくれ伏し、夜は道を行きて、伊勢路をめぐりて淡海に入り、我采地に年ごろなれて召したる邑の長にたよりて、彼が宅の後なる山の岩窟にひそみかくれ、創を養ひ全きことを得て、代の移り行くさまをも見んと命を存らふ。此處山の懷にして、人の通ひ來る路もなく、荻のみ生ひふたがりたる中に庵引きむすびて、高名を草菜に埋む。世人是を知るものなし。是ぞ隱中の隱者、自ら荻生翁と稱し、此所に老矣を期す。いつしか世のなか推古帝にうつりて、廐戸皇子嗣の太子として政を攝り玉ひ、佛法時を得て興り、大刹を建立し、僧尼を成就す。使を唐に遣し、隋唐の式に從きて、冠服を制し、位階を定め禮を肇め樂を正し、國に疾疫なく五穀豐熟し、海內の治安前代に超えたり。小坂時々里に出でて、世の動作を聞きて歸り告ぐる。守屋聞きて、一たびは憤り一たびは喜んで云ふ、「廐戸政を用ひて、君安く民和樂せば、我において他議なし。儞出でて遠く都にいたり、民間に立ち交はり、實に民人の澤を被むるや、佛行はれて國安きか、窺ひ見て我に聞かせよ」といふ。小坂憔悴せる形に弊れ垢づきたる衣をつけ、乞食して大和の都に經過す。里遠くしては常に飢ゑがちなるに、寒氣に犯され、片岡なる所になやみ臥したり。太子此時法興寺に去きて經營を見るが爲、常に微行して前をおはず。此所を過ぎて哀と見給ひ、左右に顧みて彼に衣食を賜ふべしと命ず。從へる官人飢人の傍に來りて呼んで云ふ、「飢人、上の惠を思へ。攝政王衣食を賜ふ。既に村の長に命ぜり、今至るべし」といふ。飢人强ひて起坐して云ふ、「賤者飢ゑて目力貿々然にいたれども、いまだ投げあた

ふるの食をくらはずして此つかれにおよぶ。今得がたき御恵なれども、大公目前一人の飢寒を見て衣食を賜ふ。天下の飢人いくばくありとも、ことぐ〜くそれに衣食を賜ふことを得べきや。是近きに親しく、遠きに疎く、公道を缺き玉ふにあらずや」官人不興して答へず。すなはち歸り參りて其樣を申す。太子奇特のことに思召して、御詞を下し給はりて、「飢人聞け。其見る所を先にするは人情の常なり。況や執政一人の心は億萬人の心なるをや。我に、近き飢人を惠む心あれば、遠き國の司叉其心なからんや」飢人地に拜して畏れ伏す。太子宮に歸らせ玉ひて、「實にや此飢人凡常のものにあらず、唯其飢に斃れんこと傷むべし」と、爲に咏ず。

死なでるるや片岡山に飯に飢ゑて
ふせる其人哀をや成しゝ

人をして見せしめ玉ふに、邑長すでに衣食をあたへて、飢人生きかへりたるがごとく、官人太子の御咏をかたりて仁德を稱す。飢人世に有がたき體にて、官人に對してかくとなん。

生かるがや民の小川はたえばこそ
我大君のみそなはすれば

使歸りて此よし啓す。されぱこそ異人な

りと、重ねて人をして飢人を召し玉ふに、使至る時、賜へる衣を其地にとゞめて、其人は影もなし。はやくも小坂は出所の顯れんことを恐れ、其所をのがれ去り、境をへだてゝ逍遙くほどに、歩みつかれければ、乞兒の群れたる中に交りて、道の傍に惱み臥したり。程なく所の雜仕する人來り、群れたる悲人の數をかぞへて食をあたへ、此臥したる悲人を見て、衣をあたへ、「僻遂に起きずんば、すたべの具を得させん。心安かれ」と云ひて去る。衆乞丐等面々相對し語つて云ふ、「前の日攝政王、片岡にして飢人を惠み玉ふのこと、諸有司はやくも聞きつたへて、大饗の料を減じて、今日よりかゝる惠を沙汰せらるゝ有難さよ」とかたる。小坂是より遂に淡海に歸り去り、翁に對して太子の仁惠をかたる。翁歡喜して云ふ、「攝政王、仁は國を化し、惠み死骨に及ぶ。民永く

其賜をうけん。我悦びこれに加ふることなし。我今日國の念を忘る」と。其後は敢て世上の事を問はず。後厩戸王薨ぜらると聞いて、傷み惜みて止まず。年を經ては里民と往來し、彼に教へて、水を放ち土を開き、利益すること少からず。皆人里に出で玉はんことをすゝむれども、山中老境に應ぜりと、性を養ひ百歳の長

壽を保ち、皇極の朝に至つて、厩戸の御子山背王、入鹿が爲に亡され、其嗣を絶てりと聞いて、歎じて云ふ、「此人の子にしていかんぞ此事ある。彩雲早く散じ、美器もろきにあらずや」小坂云ふ、「此比世の人是が爲に說あり。太子預め墓地をえらみ、其雨旁の地脉を斷ちて收めざらしめ、子孫あらせじと兼て期せられし志願なるよしいふ」翁聽きて笑つて云ふ、「葬地の吉凶によつて子孫の盛衰を論ずるは、堪輿の流弊、風水家の說にして、人を惑すこと其害大なり。我國其事の行はれざるを以て一の幸とす。いかなれば、墓を築きたる身として、其墓を守るべき子孫の禍を願はんや。是太子佛を信じ世に功ありて、其子孫續かざるを、佛法福なしと愚人の疑はんことを恐れ、僧家此說を妄作流言して、其事を掩はんとするものならん。家運は大數の定まる所、夏殷周の三代も時あつて盡きぬ。入鹿今勢を得るとも、豈久しからんや」といふ。果して程なく、馬子三代の繁華、入鹿に至つて孑遺あることなし。翁世の變易を見つくし、時代遙に後れて今は憚る所なしと、はじめて里人に告げて云ふ、「我は先朝の大連物部守屋の臣、世をのがれ此地に生を引いて今日にいたる。我を此地に祭らば、國に水旱の憂なく、安寧永久なること、湖水の盡きざるがごとくなるべし」と。遺託によつて、逝去て後小祠を建てゝ、荻野明神と祝ひ奉り、祭祀おこたらず。大連の匿れたる巖窟も、今に依然として遺れりと、かたり傳へたると承る。方正道人、厩戸王、守屋の臣を諷詠する詩あり。

雪裡柳條順克柔
石梁度人斷時休
臨史何取口碑實
紅白就分荻與萩

古今奇談繁野話第一巻終

古今奇談繁野話第二巻

三　紀の關守が靈弓一旦白鳥に化する話

往古いづれの世にや、紀泉のさかひ、雄の山の關を、山口庄司次郎有友といふもの、家につたへて是を守る。多くの家僕日次を挨めて關をつとむ。庄司次郎生得心武く、平日獵を好みて外の樂しみを要めず。又祖上より家に藏せる一張の寶弓あり。鹿鳥の類、矢ごろにだにあれば、射あてずといふ事なし。中る時は皆羽を飲んで一箭に斃る。近村四野の禽獸、此弓に獲らるゝこと幾世幾年をしらず。家に尊きを以て、たとき弓とも、たつか弓とも呼びなせり。庄司次郎家門古く、一族處々に多かるなか、今は音問たえ〳〵なる、大和の國人橘の村雄といふ人の末子雪名、親の氣色かうむつて家を逐はれ、妻を具して紀の國に來り、山口にたよりて扶助を乞ふ。庄司次郎賴もしき男にて、抱へ惠み卹し敵とするに、雪名生得すなほにして、温柔鄕の人なれば、庄司悦び思ひて、宜き人求めたりと、居るときは膝をくみ、出づる時は馬をならべて獵す。或時は關所の横目に、我代勤となして、便なる事多し。雪名が女房小蝶、年わかく、生れ淸らかなり。紡績の業におこたらず夫の衣服にそなへ、しかじか賜はるべき祿とてもなく、唯糊口ふばかりなるに、其居所の取りかこみたる、いといさぎよく、洒掃に心を用ひ、萬わびしからず、賤めきたるさまの見えぬは、雪名が國を出づる時、嚢中に物ありてこそと人皆思へり。庄司次郎初めて雪名が居所へ訪ひ行きたれば、雪名悦び心のかぎり饗應すれども、奴僕とてもなければ、何をまうけせん。妻も心苦しく、竈にあたりて、須臾に十餘枚の蒸餅を造り、淸き漆器に檞葉敷きて盛り出し、雪名諸とも慇懃に是をすゝむ。庄司是を食ふに、其制うつくしく、味田舍の品にあらず。是に茶を下して物語す。妻も時々客位のかたに向ひて、「かゝることなん、なでうあるべき」「是は得がたきことにこそ」など と、物語を引き立て興ずる氣はひ、靜間なるが中に媚ありて、なみの素娃にはあらじ。雪名も此女の爲にこそ親にもうとまれ、故鄕に得たまらでと思はるゝ。是より常に來りて四方の雜談をかたりきこゆ。夫婦が心へだてなくしたしみけるほ

どに、いつしか庄司次郎不良心おこりて、これかれ戯れによせ、情を含みたる詞の端きらめけど、女何とも思はぬさまなり。雪名元より耳にとゞめず。ある時、雪名が閨に行きたるを窺ひ知つて此所に來る。女房、獨りありて便なしとや思ひけん、扉の引きよせたるあひだに身をかくし、音せでゐる。昔より、美女のかくるるは見えんが爲といふなる、又は心得ずや有りけん、白く小やかなる足尖の、扉の下より見えきたるに、こゝにこそとさぐりより、やをら抱きとゞめて是を凌ぐ。女服せず、力を極めてこれを拒ぎ、聲たかく奮ひて、「かゝるふるまひ、あるまじ」といふ〳〵、女のちからにたへず、汗ながれて雨のごとく「君がいざなひに從ふべし」といつはりて、庄司を推し開き、歎息一聲して、「哀むべきことにこそ」といふ。其顏色慘然として人の心を傷ましむ。庄司あやしみて、「誰をか哀むべき」と問ふ。女云ふ、「外ならず、是雪名の哀むべきなり。われ一婦人の爲に、父に逐はれ、親屬にうとまれ、朝夕に相頼とし、憂きに樂しきにかたらひ誘ふものとては、われならで誰かあるや。かく人に口もらふ身となりては、それをだに保つことあたはざるは、あはれむべきにあらずや。君は此所の勢家として、われに勝加婢妾多くあれども、眼中にあらで、朝暮獵りくらして樂とす。豪華の至りなり。今雪名は色に隱れたる貧士にして、我身君の爲に犯されば、是れ富貴を以て貧人を奪ふなり。豈大丈夫と言ふべけんや」庄司此語を聞きて野心頓に收り、女を引き立て、手を拱きて云ふ、「我一時の暴惡、前後を忘れし初事ぞや。尊嫂これを流水に附して、胸中に流ましむる事なかれ。我若此事に二念を引かば、日比好める獵を、病にかゝり、爲すことあたはざる物なり」と、苦に斷り聞えて出でぬ。其後雪名が氣色を窺ふに、少しも聞きしらぬさまなり。女も前にかはらでかたり笑ふ。抑は女が我爲に、面目をつゝみけることうれしけれど、過ぎつる誓も壞れやすきは此道、實なるかな、猛き人の、腰をれともなるならひ、庄司次郎いつしか心よわりして、日比の殺生もおこたりて、獵狗は里の犬と群れあそび、心しりの獵奴等も休息に退屈す。それのみならず、雪名にかたらひて風月の道に心をよせ、花を賞し、景を翫ぶ。人なきひまに女云ふ、「むかしは婦節重からぬやうなるに、後世義氣にはげまされて、おの〳〵天とし戴ける丈夫ありて、あはでの浦のみるをだに心にまかせず、是を外にして君の求め玉へる緣あらば、われに赤繩の術あり。君が爲に成就すべし」庄司云ふ、

「我年來射獵を好み、日々奔走して、いまだ婚を議するの念なし。錦部の高向大夫、女子あり。容儀の聞え高し。殊に彼は其所の舊家なれば、結びて婿家とならんに、たがひに恥かしからず」小蝶云ふ、「わらは心得あり、必ず事成るべし」庄司次郎悦びてねんごろにあつらへてかへりぬ。雪名かくと聞きて、たやすくうけがひたるゆゑを問ふ。妻笑つて、「其道遠からず、近きに有り。我前日眼痛ありし時、行きて治を求めたる醫女刀根子、かの高向の女子の眼疾を療じてより、常に親しくまうで行くよしなれば、是を紹となして、あわをによりて合せんこと、仕そんずまじき物」と、刀根子許に行きて托み詞へければ、刀根子錦部に行きて、能き折からに臨み、「姫を山口殿へ取り結び給はんや。是相當の縁ならん」といふ。太夫聞きて、「山口は古家なり。我懇望する所なれども、今の庄司は無益の殺生に獵りくらす徒者のやうに人いへば、我心に欲せず」刀根子云ふ、「實に此事ありといへども、今は全く獵をとゞまり、常に過ぎにし事を悔いて、優にやさしき手すさみに心をとゞめらるゝよし。けにも久しく獵のよそほひを見はべらず」といふ。「左あらば我婿に取りて恥なきをのこなり」と内意解けて、山口庄司老黨をやりて音問を通じ、程なく婚姻を調へける。是によりて、庄司一入あつく萬事の沙汰しけるほどに、雪名夫婦衣食缺くことなし。庄司好絹をえらみて、小蝶の衣服の料に贈れども、生得新衣を褻する事を好ます、その絹布皆刀根子におくり、他が舊衣と換物にして服用す。是なん常の人には異なりとぞ人もいふなり。爰に和泉國の舊族、登美の夏人といふ富民あり。親なるものゝ代より堅く殺生をいましめて、夏人に至りても、只生けるを助くるを以て心とし、他人の殺生をも說きさとして休めしむ。女房は、後の母の、前に嫁したる所にて出生せし女を具して此家に嫁し來り、夏人に配せたるにて、誠に髮を結びたるよりの夫婦、別きて女の心かしこく、夫をたすけて家を治め、水と魚との和合、住みこしことをかぞふれば、十といひつつ七とせの秋、ならび寢ねたる夫の夢に、妻かなしみかたるやう、「年ごろかく相なれて、中途に捨て奉るは、物の情しらぬに似たれども、我は母なる人の志をつぎ、一類の爲に遙なる所に行きむかへば、今より長く別れ參らせん。此一品を紀念にとゞめ置く。我思ひをなして手なれ給へ」と、涙を枕にそゝぎて立ちあがり、右見左見回顧て、放出のかたに出づると見て、夢さめぬれば女はなく、枕上に見馴れぬ一張の弓をたてたり。淺ましと足ずりし

て、落つる涙の水かさとなり、空魂ならばかへりくるがに、是はたゞ火をうち消したるがごとくにて、何をしるべに尋ぬべき。其日を菩提の日となし、供養おこたらず。この弓を傍に立ておきて、朝に執つては暮に携へ、心かれせず手馴れける。かくて二年の月日かへり來て、けふなんかたみの主の去りし日なりと、朝とく起きて席をはらひ、此弓を客位に立てよせて、早膳を供じ、われも同じく對ひ食する所に、此弓忽羽うつおとして、白き鳥に變じ飛び出づる。食膳かいやり、追ひ出で見れば、南をさして飛行く。其方を目につけつゝしたひ行くほどに、日も暮にちかく紀泉の堺にいたる。傍なる大木の高枝に住りたる白き鳥有り。是ならんと見あげたるに、やがて飛下り、夏人が手に留るにいたりて、原の良弓と形をかへす。あやしくも夢かと疑はれ、しばらく其處に佇立やすらふ所に、雄の關の侍ども兩三人來かゝりて、持ちたる弓を見とめ、取圍みて大にとがめ、「其弓何として汝が手に入りたる」となじり問ふ。夏人有りのまゝをかたる。侍どもさらにうけがはず、「かゝるあやしき分説こそ心得がたけれ。先庄司殿へ申して、其上のはからひこそ」と、夏人を中に取込めて行

くほどに、いかにするやと安き心なし。かくて庄司次郎は、彼濁れる心の底すみがたく、月日往くほどに、ひたすら我富貴を見せなば、女の心に羨むこともあらんと、折節によせて雪名夫婦をまねき、重寶重器をつらね、山海の珍味をあつめて饗宴す。一日殊更心を盡して設をなし、夫婦をむかへけるに、女も粧を凝らして入り來り、既に客殿にいたりて席に進み、上段の壁にかけたる猛虎の、竹を倒し風に咆吼する勢、眼光人を射るがごときに、小蝶一目見て、あとさけびて庭に飛びしが、忽ち狐と化し、築垣をこえ行がたしらずなりぬ。雪名周章て驚くといへども、此すがたを見て、人目を恥ぢて追ひとらへんともせず。身に着けたる小袖は、帶むすびながら脫の殼、單皮はふみそろへて緣に遺り、髮のかざりも落ちりて、むざんかぎりはなかりぬ。人々唯あきれにあきれて、面見合ひたるのみなり。庄司次郎、今は何をかつゝまんと、我が野心のすぎこし次第ことぐ〵く雪名にかたり、女が出身を尋ぬるに、雪名いふ、「此女房は、其はじめ遠國より賣り來るを、親なるもの買ひとりて婢となす。我これにちなみて、親のさづけんといふ妻をうけがはざるゆゑ、かくうとまれて遠くさま

よび来るにおよぶ」庄司次郎云ふ、「さもありなんかし。此虎の繪は、新筆なれども、百濟川蟲の秀逸、高向太夫祕藏なりしを、壻引入れに得させし物なり。恐れて本體を露すこと、畫眞のまつたき所あるや」と、語るなかばへ、關の者ども夏人を取りかこみ來て、右の弓を持參す。庄司見て大に驚き、雪名にむかひ、「其弓こそ我家に祖上より傳へし良弓、尊敬してたとき弓と云ふ。靶唐樣なれば、とつか弓ともいふを、家の子等いつしかよこなまりて、たつか弓と稱せり。この弓を以て獵するに、得ものなしといふことなし。近比は惜みて深くをさめおき、苟且に用ひることなし。況や、久しく殺生におこたりて、箱をもひらかず。此比都より、白狐の裘の用として、近國に命じて、殊に予家射獵をよくするを以て、年經る狐を求めしめ玉ふにより、昨日箱を開くに弓を見ず。家人の内に盜みとりし者あるやと、搜り求むこと急なり。其方を見るに、盜賊とも見えず。怪しき分說とるにたらずといへども、今目前に見たることもあれば、世の中怪事斷じ捨つべきにあらず。其男はとゞめおき、本國に人を遣りて、其身許をも聞くべし」と、其日は皆々興を掃ひて散じける。其夜庄司が夢に、小蝶來りて云ふやう、「我母といふも同じ狐にして、登美の長者が爲に眷屬の命を免るゝ事幾度ならず。其報として、彼が家に掃攘をとり、猶も雄の山の關守が殺生に耽るを制止せんとの念ありて達せず。我其念を續ぎて、先汝が寶弓を取隱し、我身のかはりとして、重く夏人に預け、大和なる雪名をさそひ出し、此所に來り、僞が魂を迷はしめて、漸く殺生をとゞめ、望たんぬと思ふ事かなへば、又白狐を獵らせらるゝことのうたてさよ。しかしながら、是れ人の言傳にて、狐裘何の寶となすべき。膝下の皮を縫ひあはせて、色白きやうなれども、體に重くして服御に堪へず、肌へ不平なり。年經て白狐となりしは、毛落ち皮枯れて、裘となすに美觀なし。此よし公に告げて、狐白裘の用なき事を啓し給へ。去るにても、靈なるかな彼良弓、遂に他家にとゞまらず、自ら飛んで山口の家に歸る。神なるかな掛畫、虎風眞に逼りて、我が多年の通變を破る。是皆物の定數にして、我力に及ばさる所なり」と、其夜同じ夢の物がたり、庄司次郎、雪名、夏人もたがはぬ一詞なれば、元來一狐の所爲によりて、三人種々の心機を勞しぬる、其根本は庄司次郎、おのれが殺生より事おこりたればとて、此弓を長く庫藏にをさめ、其位にあらずして無益の獵をなすは、公を潛するなりと、みづからくやみしりて、

再び殺生に遊ばず。雪名、夏人も迷惑はれながら、女房を慕ふ心のやまざりければ、同じ思ひに、庄司有與かくなん咏じける。

引きかねしたつかの弓の束のまも
　思へば苦し遣ればすべなし

雪名も、かくおもひつゞけて、

なげきつゝいるやいづさやたつか弓
　紀の川上の白鳥の關

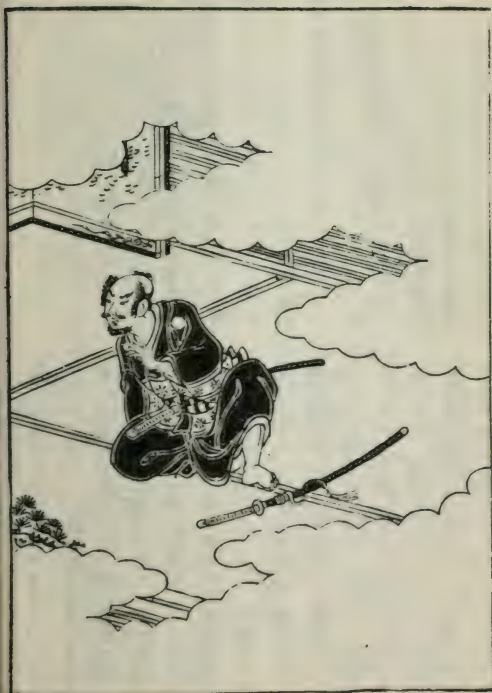
夏人、

朝もよひ跡ふみとめて紀の川の
　たゆるひまなき我涙かも

二人は本意をうしなひて、大和和泉にかへりぬ。彼雄の山の關を白鳥の關とも呼びなせるは此謂によるとかや。

四　中津川入道山伏塚を築かしむる話

足利の世漸く一統ならんとす、貞治應安の比、勢州多度の鄕に、櫻崎左兵衛といふ人、文武雙全の聞えありて、遠近從遊の人多し。其中に、三年ばかり入來る浪人、宇多次郎といふ者、其人心輕く、人の顏色を見ずして多言なるが、一日人なきに乘じて問うて云ふ、「世の人のいふなるは實や。南朝の功臣、武名四海に達し、攝、河、泉の受領し、從三位中將を贈られし判官楠公、湊川に假腹切りて跡を隱し、任をのがれて、今變名する所則ち先生なりといふ。小生も年頃心を着けて見奉るに、常倫の器にあらず。御大事の時節に參り合はずといへども、おのれは最初の官軍、矢田十郎義登といひしものなるが、宮流刑の節身をのがれ、生國なれば此地に來り、近きあたりに幽にすめり。爾來、土も木も足利の風に偃して、南朝日に衰へ、其舊臣たる者、朝夕齒をくひしばるにたへざるべし。先生にも遺恨に思召さば、其徒なきにあらず。帥の律師則祐、今攝の中津川に館をかまへ、赤松附屬の地を看る。僕と無二の舊遊、心に南朝を忘れざるべし。奥に備後の三郎高徳存生して、時々文通おとづれて、只南方の衰敗をなげく。九州の菊地、勢微なれども義心屈せず。新田義治の方、其所をしらねども、蟄居存命なり。今にても肩弩の人あらば、其後に從きて馳集る者時を同じうせん。賢慮いかゞ」と問ふ。櫻崎實に迷惑の體にて、「世上の人我を楠と沙汰する事、疾より我耳にも入りたれども、出所明白なる某、恐るべきにもあらず。跡かたもなき雜説にて、貴方を始め、世の人軍情を知らぬ故なり。蜀の諸葛、幾度も祁山に出でしは、必ず勝つの術あるにあらず。魏の勢日々に洪大なれば、此方

無爲にして、取靜めたるのみにては、氣を呑まれて危きに近きゆゑ、勢を張つて、國家の氣を養ふ計策、かゝる相國の身となりて、いかばかり心苦しからん。いかなる英雄にもせよ、是程の知惠あれば、敵を計るに足れり。我軍略是ほどあれば、是にて此軍に勝つべき手當十分なりといふやうはなし。其上時變あり、兵變ありて、千慮の外に出づるをや。愚老聞き傳ふるに、昔土師の何某に、始めて橘の姓を賜はりたるは、葛城王の外戚なるを、故ありて其姓を繼ぎ玉ひて、八代好古の大納言より枝を分ち、楠殿にいたりては、小身微力なれども、官軍の大指に屈られ、根ざし久しき土地の理を得て、大敵をふせぎ、軍機を我物として、變化、鬼神のごとく見ゆれども、是皆其時に從つて、疾疾の中より智計を練り出し、一族士卒の精忠により拒ぎおほせ、智に及ばざる所は、理をせめて命にまかせ、一人に敵するも、日本國を引受けても、死するは一身一命、賴まれ奉りしより此生を君に捧げ、節操たゆまず、心力を王師に勞し、恢復の時を得て、足利殿謀反の初に、一たびは西海に走らしめ、叡山より還都なし奉るまで、盛名を落さゞること、一つは時運のすゝむによるものなり。以來

政そむけ、賞罰均等ならず。新田殿英雄なりといへども、家勢初より微にして、高氏に對せず、既に家運傾くの北條すら手ごはかりしに、大事勃興するの足利、天命の歸する所、明眼より見れば、勝つべきの敵にあらず。元より軍利手に握りたるものにあらざれば、此にいたつて精氣をつかし、時を見かぎりたる戰死なり。己に嫡子正行、生得多病にて、病に死せんよりは王事に從はんと、二十六才にして飯盛山の下に戰死したるは殘念なれども、今にて見れば、死戰の圖をはづさぬを知るべし。士たるものは、初に其主人をえらぶべきこと一生の大事なれば、黃石公が直と履を墮して張良に取らしめたるは、其踏む所に心を用ひよとの敎を隱したる所爲なり。樟殿、初は天命の歸する所を知つて頼まれ奉り、終は命の革るを見て死を以て君に報ず。公の靈あらば、談者の愚を笑ふべし。但し濫に楠節を窺ふものあるべし。是は人情なれば、公とは乎びがたし。古代樟の字、俗に栫と省したるを、楠の字に混じたるとも聞けり。抑また南朝舊恩の餘類ありて、時惡むべきにあらず。しかれども、此時を以て見るに、南朝の根基とせる大和紀の路一統して、基本巢穴なし。今蜂起の徒の

事を成すべきにあらず。扨足下にも年比詣で來るちなみなれば、思ひ立ちたる事の成るか成らざるか、占うて參らせん」と、杖にすべき角なる木を二つ取り出し、「是こそそれがし常に子弟に示す隱器なり」と、掛けたる長刀を下して宇田次郎に授け、「足下心中に誠を降して、石突を以て直下に突き通し試み玉へ」次郎鐏を下になし、心中に念ずる所あつて、力にまかせ突き下す。此角木貫き得て徹れり。又一個を取つて突き下すに、此度は、鐏のるぎて角木依然たり。次郎問うて云ふ、「此占如何が主どる」左兵衛云ふ、「其貫き通りたるは、内虚にして箱の如し。志力强き時は通るべし。後の貫き得ざるは、中外なく純木なり。孫武子が實するもの伐ずといふもの是なり。打たば必ず其兵を損す。是もたゞ、陣に臨んで一時の實をいふなり。今の世の如きは、實常となり、打つべきの時にあらず。或は此占、虚なるかた堅くして通らず、實なる方貫けるが如き變卦あるを待たずんば、事成就ずべからず。人情常なく、初勇氣あるも、一たび利を失ひては、勢折け、始終を保ちがたし。兵書に、始は處女の如く後は脱兎の如しと云へり。脱兎は、處女の既に破身したるを口惡に言ひたる其比の穢談なるを、孫子取つて譬とせりと、新田殿雜談に語りたまひし由。强弩の勢も、放したる末にては、魯縞の薄きを通さぬと同意なり。足下の如く、思ひはやりにはやるもの、勢を用ひすごして、必用の時には氣勢なきものなり。此上かやうの事思ひとゞまり、愚老が諫に從ひ玉へ」と、理をせめて蒙を開くの詞に、次郎赤面しても心服せず。彼がうけがはざるは是非もなし。我密事をかたりて此まゝに歸りがたしと、彼長刀の鞘をはづし、なぎつけんとする時、左兵衛早く後の一間に入りて、戸を引き立てたり。一重の障は物かは、突き通さんと突く長刀の、鐏本より屈るを見れば鉛刀なり。かゝる所へ、門生數人入り來りたれば、何氣なく貌を正しくし、思ふに眞劍を我には授くまじきことなりしと、立ち出でなんとする時、左兵衛出で來て再びいふ、「次郎、個見よ。淸平の世、これを用ゐれば、大人は德を害ひ、小人は必ず凶なり。用ひずして安き時は鉛刀に論なし。動くは止るにしかざるべし。是愚老が足下を送るの辭。今より永く絶すべし」といふ。次郎甚だ恥ぢ入り、面を低れて、鼠の逃ぐるが如く其處を去りながら、左兵衛が動作、愈尋常の人柄ならず、世の人口疑なしと、我心迷ひてかく思へること、是情人眼中に西施を出すといへる類なるべし。宇田次郎、すでに口外せしうへは、早く

思ひ立たんと、夫より其身山伏の姿に扮ちて、渡邊の住吉坊は古き知音なればとて、彼所に行きて、其邊動靜をさぐり聞き、何とぞ則祐入道に一面せんと、中津川に立ちこえけるに、壘高くかゝげ、高門大鋪嚴に設け、處々に水を盛れる舟を置き、蔦口の鉤數多插みて火災に備へ、門内の白砂見入れるに奥ふかく、對面のことも迂闊に申し入れがたく、看門の者に向ひ、「某は圓能と申す修驗道也。先年密教に參ぜし時、御主人に朝夕伏侍せし以來、本山にありしが、上京の路次、懐舊捨てがたく、推參仕る。此趣取次ぎて玉はるべし」といふ。看門心得て、やがて入つて達する程に、入道誰なるやと、廳に請ひ入れて、立出で見やりたるに、年隔りぬれども見覺えある矢田義登なり。「能うぞや恙なかりし」と、詞を親しくし、茶を吃せしめ、酒食を饗し、往事かたるにつきず。「住吉坊に宿すれば、又こそ參らん」と、其日は何事なく辭してまかりぬ。日を隔てゝ再び行きしに、少しも疎意なく相待して、酒食席を同じく吃し、昔にかはらぬ氣立を見て、義登膝をすり寄せて申すは、「南朝の股肱並に宮の眤近、跡をくらまし、頭を出す人なし。時うつり代かはり、感傷にたへず」といふ。入道も嘆息して、「宮の御謀反、實は叡慮より出でて、却つて咎を宮にゆづらせ玉ふ、例の手のうらかへす君命なりしぞよ。是しかしながら造化の自然、かたるに所なし」義登云ふ、「むかし日夕に欝憤をおさへしこと、おのれは今に忘れず。貴君には如何」といふ。「我も人情の免れざる所なれども、隱居して世に當らざる身は、日に月に其情うすく、夢にだも周公を見玉はざりしおもむきにひとし」義登云ふ、「僕は片時も回復の念やまず。あはれ昔日のよしみを忘れず加担あらば、日ならず事を擧げん。貴君には見認り玉はん、今勢州に櫻崎左兵衛と變名するは、正しく楠判官と見えたり。彼が三男正勝、衰へたれどもなほ千劒破を守る。奥路に兒島高徳あり、四國に義宗ひそみたり、熊野、十津川内心變せず。誰にても、一たび義を衒ふる程ならば、期せずして集るもの多からん」といふ、ことばの中より入道面色かはり、「義登しばらく待たれよ。此事我館にて談ずべきことにあらず。必ず無用たるべし」義登面慍つて云ふ、「貴殿、身の逸樂に安んじて舊きを捨つること、人の禽獸に異なる所を知るや」と、早惡言に及ぶ。入道聞くに忍びず、既に太刀取りなほさんとせしが、自ら氣を降し、胸をさすりて云ふ、「拙老此處にあるは、退隱に似て、實は足利殿の爲に耳目をなすなり。異樣なる山伏來りて我に逢

はんといふさへ、家人等疑を起すなるに、かゝる論談に時を移しては、兩人愼なきに似たり。只今儞を送る體にて、住吉坊の方へ行きて談を交へん」と、義登を促して座を立たしめ、其身は一個の僕奴をも具せず、脇の門より出で、南に向つて打連れける。道すがら云ふやう、「義登、儞と我と舊識なりといへども、志の懸隔すること君子匹夫の違あり。匹夫は君子の心を知らずといへども、君子は匹夫を見る事易し」義登心怒りて、「我いかなる所か是匹夫なる」入道云ふ、「天下の善をなせば天下を利す。是君子なり。一分の善をなせば天下に害あり。是匹夫なり。近年、天意騷亂に倦みて治世に入り、蒼生よみがへりたる思ひをなし、四方に弓兵を動すものなきに、儞一人存念を立て、自ら憤を快くせんと欲して亂を唱ふ事、逐ぐべきにあらねども、火起れば風加はつて、微しの勢を得ば、上下を震驚し、人民業に就くことを得ず。天兵一たび臨んで、片甲も留めざるにいたり、儞は一旦の義勢を振ひて、後末の名欲に死するとも、笑を含まん。儞が爲にいざなはれたらん幾百の人命を落し、處を失はしめ、其罪皆儞に歸す。老夫日々世の安寧を庶幾ふ心より見れば、匹夫たるこ

とを免れず。擧頭三尺神明あり、隔壁一層人耳多し。再び此志をいふことなかれ。今拙老を無二の力と思ひてかたらへども應ぜざるがごとく、世の人も久しからん物を」とかたりつれて、已に融寺の南門を行き抜けて、住吉坊も程ちかくなれど、かく頼もしげなき入道と同道して行きなば、彼坊も我を無道人のやうに思ふべしと、元來短慮の義登、よし〳〵入道を打捨にすべしと、兎餓の尾と古渡湊の間、人遠き所にて、詞をも掛けず、せはしく切りつけたり。入道心得、飛びのきて抜きあはせ、よせつ開きつ二三度せしが、入道烏足を速くはこびて、したゝかに切りつけ切倒し、「傷ましながら、世の爲に害をのぞく。自ら僞が愚を恨めよ」と、刀の血押拭ふ所に、向うなる神祠の籔かげに、一人の農夫、鍬を杖につきて咏めゐたるが、走り來りて笠取るを見れば、中津川に新參の下部なり。「殿の單身にして出で玉ふを見て、心ゆりせず、見えがくれに御供せり」といふ。其體如何にも心得がたく、入道怒りて、「いはれざるおのれが猿知恵、生けておかば、始終を世上にもらさん。刀次手に懸くるぞ」と取つて引きよする。事急なるに及んで、此男制止かね、「我は陪臣にあらず。麁忽し

玉ふな」といふ。入道つきはなして間をおき、すこしも油斷せず。其時此男、懐中の嚢より安堵の御書を出して、手にとりて見する。「御墨付紛れなく、何々の郡を充て行はるゝ某は、彦野部新左衛門尉爲充、上意承り、南方衰へたれども舊臣多し。中津川入道、今京都の干城をなすも、其本心いまだ知るべからず。よつて某來つて貴侯の家に竊候をなす。今事急なるがゆえに姓名を披露す」と云ふ。赤松刀を收め、會釈して、矢田十郎に說きたる利害の趣を語れば、彦野部も甚だこれを公論と稱し、「足下の本心如此なれば、貴宅に足をとゞむべからず。取りしたゝめて御いとま申さん。此事穩便」と、同件して中津川にかへりぬ。入道矢田が志を憐み、住吉坊並に所の者に命じて、其地の堺田に埋め、土を築き、石を鎭となす。時の人是を山伏塚とよびけるとなん。

其後靈蛇あつて、此塚に出沒するを見る人多し。又靈火あつて此邊に出遊す。怪しといへども害をなさず。偶これを見たる人は、必ず其の志願を成就すと云ひ傳へたり。

古今奇談繁野話第二巻　終

古今奇談繁野話第三之巻

五　白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話

古人云ふ、鬼神と山魅の類と、幽現の別あり。山魅、木客、罔兩、猿狐の類は皆形體あるの物、時あつて形を隱し、時あつて形を現す。是にさへ、靈明を使ふに巧拙の分あり。巧なるは物を役使し、人の敬を發さしむ。拙きは、靈を假して人に役せらる。鬼は人沒して土中に歸るの名なり。骨肉は土に屬し、其氣の發揚して空にあるを鬼の神といふ。體なく、聲なし。是も倘異常あり。常なるは、祭れば降つて饗け、祭る人の心に交り、近くして其跡なし。異なるは、人に托して語り、人に附きて靈ならしむ。形體なきゆゑ、恐るる所なく、身の慾なく、靈を示せば專ら人のためにす。中にも愚なるは、倀鬼の虎に使はれ、狗神の人の爲に貪る類あり。凡そ生ける人竝に種々の有情の物、皆神ありて、物に附き人に托し、はるかに死鬼の神よりも靈なり。唯身を先にして、人の爲を後にす。是生者の天情にして、世の人多く免れず。故に自身は其神の通づるを思ひしれども、他人は知るに及ばざるなり。上古山川草木いまだ開闢けず、人居も密ならず、山魅の類人に近く、形を現じて人間に來り交る。人皆山魅の爲す所を知る。後世人民繁息し、山を開き、海を築きて、その食を足し、險しきを通し、水を引いて、その運輸にたよりす。人行くの處自ら蹊を成し、地平かなれば、人あつまりて居とす。龍蛇犀狼恐れて人に遠ざかる。山魅罔兩尤も靈なれば、なほなほ深く避けて人間に近づかず。後の人、多く目に見ざるが故に、鬼と魅との分をしらず、混じて一とし、又古の怪事を聞いて、今見ざるを以て、疑をおこすもあり。古に有りしを以て、今もありとして、理を誣ひるもあり、又古あるの事は今もあり、今なきの事は古もなしといへるは、時變をしらざる夏蟲の見なり。毛類は文なきがゆゑ、天然に近く、間長生もあり。求めずしてよく前知し、巣居風をしり、穴居雨をしる。深山大澤何の怪かなしとせん。昔東國に往來する商客、木曾の妻籠といふ所に脚を傷はり、數日滯留し、寒暑の異同も長夜の談に盡き、地名產物も計へつくしたる折柄、其里に祖上より久しく住める老人、座にありて云ふ、「此

所を妻籠と名づくること、さま〴〵いはれある中に、老が先人どもかたり傳へたる長物語の侍る」とて、田舍人の口鈍く語り出せるは、事怪く、くだ〳〵しけれども、誠に千年の妖霧こゝに至つて盡き、萬歲の深山是に自て開くの談にあらずや。清和天皇の時、美濃守源朝臣顯を信濃守に轉任せらるゝことあり。其時備中の國窪屋大領が弟、三須守廉、權門の吹擧によつて信濃掾になりて、國なる妻女を催し登せ、さるべき家人等を召具して東國の路に赴き、日數歷て、飛彈と信濃の界なる、岐蘇の深坂にかゝりぬ。小笹原分け行く袖に露けくて、險しき路五步登れば五步下る。人馬共に疲勞す。理かな、むかしは美濃と信濃と、通路不便なりしを、文武の時岐蘇山道を開かれ、岩を碎き、棧を通じ、當時何年に及べども路定りがたく、元より此山中烟瘴深く、妖怪出沒し、往來多からず、人氣猶開けず甚だ惡所なり。道の南北山中に、人跡いたらざる所多し。いづこの程にや、獅々谷といふ所あり。後世其所さだかならず。其懷に一ツの洞あり、隱れ神の岩窟といふ。常は霧立ちこめて見えず、方格定めがたし。數十年の內、たま〳〵あらはれ、洞の中に宮殿有るを見ることあ

り。山下の人つたへいましめて、これを見る時は、早く其所を走り去る。若しためらひて見とめんとすれば、忽ち空より大石落ちかゝり粉碎となる。此洞に一つの怪物あり。出づる時は一片の雲となりて飛行す。故に人より名をつけて飛雲といふ。其本身は猢猻の精なり。神代よりこゝにすみて、神通廣大、變化きはまりなし。朝夕霧をふらして、山深き所を人に見せず。欲しき物を攝り除む事心に任せざるなく、時々人をたぶらかし、害をなせども、佛神もこれを制することあたはず。美酒に非ざれば飮まず、美服に非ざれば著けず。陰陽採補の術を得て、長生の道を煉り、近國諸山の妖怪山精皆これが部下にしたがへ、猛獸を役し、耳報の術を得て、洞の中に居ながら、百里四方の動靜を聞き知ること、掌上咫尺の如し。こゝに一日西南の方より、此路を通る一行の旅人あり。其中に一つの張輿あり。飛雲これを察するに、輿の内嬌き婦人あり。容貌閑雅に、あてなる顔花のごとく玉に似たり。其支干を推察するに、既に十六歳にして丈夫にかしづき、今年二十三歳におよぶ。いざや攝り來り、酒宴の興を添へんと、卽時に山神に命じて、往還の路上に一つの旅館を化現せしめ、

「外に宿驛なければ、かならずこゝに宿るべし。深夜にいたつて、女を攝りて洞に入るべし」山神承はりて結構をなし、俄に白日を暗夜となす。守廉山路に倦みつかれて、日もくれぬと此所に來り宿る。從者奴婢居ながれて休息す。飛雲宿の老翁と化して、心よくもてなし、客の間に出でて物語し、「此翁今年八十餘歳、耳は頭のうへに雷落ちかゝりても聞えねば、物その用に立たねども、殿の爲に申すべき事こそあれ。これより向は山なほ深く盗賊狼の害多し。具せられたる女房の御方は、此翁が許に預り奉りて、殿向へ御着ありて、多人數を以て迎へとらせ給へ。此間、美目よき女を奪ふなる、山賊のあるをしらせ給はぬにや」といふ。守廉冷笑ひて「われ不肖なれども弓の本末を知り、本國にては、武きものゝ指數に折られたる身にて、いかに左程まで山賊に用心すべき。殊に天聽の命を蒙り、此國の鎭として、我帯び來たる所の老黨若黨は、一人當千の家の子なり」と、勢つよき詞に、亭主も其席を退きぬ。若黨雜人は端に臥し、使女の輩は脇の間に臥しぬ。守廉は妻の白菊と正面の間に宿り、山中の靜なる夜のさまめづらしく、寢物がたりして笑ひ興ずる所に、さそふがごとくに眠きざし、しばしと思へど寢にけり。しきりの風の音に目を覺し、傍を見れば、早く女房を見ず。清厠にや出でけんと、戸ざしのあたり見めぐらせば、いつしか家と覺しき物はなく、戸ざしと見えしは立木の隈、使女家人等も皆草の上にまろび伏したり。こはあさましと、急によびおこせば、家の子らもはじめて心づき、前後を見れども一つの民家もなく、月光明らかにてらし、遠寺の鐘聲を聞けばいまだ初更なり。守廉夢の心地して、いかなる妖怪のたぶらかして、旅宿を假に現じて、女房を奪ひ行きしや。山精などいふものゝ所爲にやと、忙れ迷へども今いかんせん。樹下に露をしのぎて其夜をあかし、民家ある所に立ちもどりて人馬をとゞめ、家人を東西へ分ちやり、さぐり求むれども、何を見出したることもなく、「此山中にてはかゝる事なん間に多かるとこそ聞け、恩愛の道は勿論、女房を妖怪にとられ、本國の一門に、何の面目ありて再會すべき」と、物狂はしき迄に憤れども、公事身にあり、怠慢しがたしと、其所を發して國の府にいたり、國司に謁を取り、前の掾に代りて、幸に目の舊きまゝ殘れるに、密々身のうへをかたり、所務を目にあつらへおき、もりかどは人に對面なしがたき病ありと披露し、引籠りたる體にて、心腹の家の子三人を從へ、女房の生死を見屆けずんばやむべ

からずと、獵するものゝさまして、岐會の難所をこゝかしこ、道なき所まで探り迷ふ。白菊の方は變化に攝られ、洞のうちにいたりても、しばしは現とも思はざりしに、人ごこちつきて、扨は鬼の洞にとりよせられけるよと思へば胸つぶれて、涙湧きて流る。偸目に見めぐらし、帳臺を見やれば、媚ける女房幾人も伏侍ひて、大將よと思しくて、顏赤く鼻尖り、身のたけ一丈ばかり、門の仁王のごときが、綾の衣服にまとはれ、帳內をゆるぎ出で、白菊の傍にむつれ近づき、「緣あればこそ此所にもむかへつれ、此洞のうち、別に一つの世界にして、こゝに來たる婦女は、年を積みても顏色かはらず。御身もなけきをすて、我によく奉公し、長生を樂しめ」と、手をとりて細やかにかたらへば、白菊は、彼が異樣に恐ろしきに、氣も魂も雲間に飛ぶばかりなれど、目に見えぬ鬼のとりしめなく、そゞろにわなゝかれるには事かはり、心をつよくなし、變化に向ひ、「自らはさら〳〵此所の樂しみを願はず、速に死せんことを念ず。非道の振舞あらば、舌を喰ひても死すべき」と、はけしき詞は惡ましからん、白き耳根に黑き髮のこぼれかゝり、泣き低れし顏の化粧の、泪に洗はれたるさま、惱める西施、泣ける虞氏、昭君出塞の憂容、楊妃馬嵬の愁眉もかくやと思はれ、まことに天然の國色。急にせまらば、身をや失ちなんと、女房等におほせて、誘めなつけしめんとす。多くの女房いで來り、いざとて帳臺に引かんとす。白菊是を拒みて、「我官人の妻として、由なき所の帳內に入るべからず」と、勢氣をつかひ座に據つて動かず。飛雲笑つて、「生人に熟言ふべからず。我は北窓に一睡して前夜の勞を息めん」とゆるぎ行きぬ。女房の中にも、此花、阿野、ちかくよりて、白菊の方をいたはりなだめ、さま〳〵にすかしこしらへ、「斯なるうへは、長くかなしみて詮なきことなり。昔より、卑き軒端にてはかしらをさげずして過ぎがたし。われ〳〵も皆厭かぬ中をさかれ、こゝにとられ來て、逃れ出でんとすること幾度なれど、山中の方格しれず。行き〳〵ては舊の路へもどり、遂に出づることあたはず、既に五年の春を見たり。御身の今變化を初めて見たる思ひのごとく、かゝるむくつけき貌にあらずとも、元より女は男の美醜を論ずべきものにあらず。此變化里に出でて遊ぶ時は、其さま優に貴く、國司の形粧をなし、其人柄すぐれてうるはし。左あればとて、いかに心くだりて從はんや。朝夕に馴るればこそあれ。彼が心に從へば、彼もまた心を用ひてめぐみあはれむ。さればこそわれ〳〵が如き

も、死すべき命をぬすみ、かひなき生をむさぼり、いかなる風のすゑに吹き、一水の海に歸するを待つ身とはなりぬ。また從はざれば苦しみをあたへ、つらく懲しめ、遂に妖術に惑し誘ふ。見來たるに、早く從ふを好き心得といふべし」と、和らかにすゝむれど、白菊答へだにせねば、女房ども詞つきて「並の人心にはあらず」と申しきこゆ。飛雲今は大にいかりて、白菊を下家に下し、洞の中の用水を遠きに汲みとらせ、衣服を洗ふ賤の役をなさしむ。白菊却てこれをうれしきことに思ひ、日々谷に下つて、水を汲み衣をあらひ、このいやしき業をなすとも、身を汚すにはまさりぬと心に足りて、故郷の土神を祈り、再び家に歸らしめ給へと、拜せぬ日はなかりき。洞の中、日數は覺えねども、月の圓きを月の半とし、三月計の後、飛雲其容色の苦しみに衰へんことを慮ひ、しばし賤の役をゆるして貌を養はしむ。一日南廂に宴を設けて節を壽き、白菊を酌に當らしむ。寵愛の綠樹、此花、梁瀬、呉の竹など宴に侍り、其餘の女、綠に舞ひ竹に歌ひ興ある席に、白菊しきりに眠を催すうへ、變化が女ばらに相狎れて戯るゝを、目の不祥、見まじ／＼と俯すにつれ、酌をくはへながら、ふら

ふらねむりて酒をこぼすもしらず。飛雲はらあしく罵り、拳をあげ撲たんとせしが、「此罪科に、此座より直に、谷二つあなたの瀧を汲んで來れ」としかりやりぬ。白菊は實にもあやまちせりと身の罪をしり、桶を肩にして、蹊をめぐり、流れに沿ひ、よしや淵に躍りてと思へど、此世ならでもあふせあるや。命こそ物を成就する種なり。變化が今かく無道にして勝つ人なきも、年經たるしるしならん。うらみ死なん命をつぎて、道なき人の果を見てましと、はこふ足なみの、みなぎるもとの淀めるを、二つの桶にくみのぼせ、たゆき手を休むる所に、珍らしやそのこのかた、世の中の人とてはふつうに見え來ざりしに、向うの峭をつたひ、道なきに葛を引きて登り來る人あり。弓矢かき負ひ、太刀刀おびたり。獵人ならんと、近づくを見れば、夫守廉なり。いかに、

こはうつゝか、うつゝならぬかと、早くも取りすがうて、女まづ泣いて詞出でず。守廉且喜び、且かなしげに、「我は別れてより、家をすて、祿を擲ちて、此山つゞきの麓の里にさまよひ行衞を尋ぬること既に三月にあまれり。今日こゝに來り逢ふこと、夫婦の緣盡きざるか」と、たがひに染々泣きかたる。「扨しも何

物の所爲なるぞ」と問はれて、身の憂きことは飯倉の、山にもまさるつらさをかたり、「かゝる變化にてこそあれ。洞は、是より西に見ゆる高峯の懐になん侍る」と、語るを聞いて守廉「此まゝおことを具して逃げ歸るとも、神通の妖怪、十里とはのびさせまじ。退治せんことも、佛神の力をからでは、いかに本望達せんや。人多く催し、後の十五日にこゝに來り、おことに出合ひ、案内させて洞に斬り入るべし。其あひだは、氣色を察られず、心をとめてつゝしみ、身を汚さぬ方便こそあらまほし。今此所に時うつらば、變化いかにうたがはん。我は早く立ち別れん」と、行くを放ちかねて暫時と惜むに、男も心よわり、草の上にかへり坐し、つくづくと女房のさまを見て、「容色は衰へねども、絶えて櫛せぬを擧げてやらん」と胡簶より鬢櫛とり出し、谷水に髪のすさみをうるほし、歸り遅しととがむるとも、よしやよしの、中たえし、妹背の山の茂り添ふ、木の葉敷寢に寄らんとする時、笑ふ聲の高きに夢うちさまされ、見れば有りし宴會も闌にして、淺ましや、變化の膝によりかゝりてあり。夢に夫と思ひしは、これなりしかとおそろしく、拂ひのけば女房等、どよみをあげて笑ひ、是を酒宴の興とせり。飛雲も十分醉深く、扶けられて伏所に入りぬ。跡にのこりし女房等に、夢の次第を語らるれば、皆云ふ、「我輩の計に落されしも、多くかゝる類なり。さき程酌に立つて眠り、主の怒りに逢うて次へ出され、隨便桶を荷ひ、酒宴の席へ出で給ふより、我々も怪敷思へども、言葉禁制せられしゆゑ、傍より見たるばかりなりしが、御身主を見てなつかしげに、桶をすてゝよりそひ、髪を擧げさせ、別るゝに臨みて一同に笑を許され、始めて聲をあげしなり。これ皆彼人のあざむきまどはす戯れなり」此花云ふ、「斯く云ふわれもこゝに來て、花鳥の音色、霜雪に其時を思ひわきて、十年にも及ぶべし。故郷にいつくしみせる父母、かなしと思へる兒をのこしたれば、離れて存るべき命かはと、心に誓ひしも、思ふには負けたるに、彼人のあはれみて、われを故郷に送りかへし、夫や子兩親にも、逢ふと見つるに悦みしが、或夜諸寢の夢破れ、見ればかはらぬ此洞の内、悔しさいふばかりなけれど、凡人の力にはかりがたく、又是なる映葉は、父の家より壻がねの迎へらるゝ輿を路より横ぎられ、はじめはむこ君の家にあるとのみ思ひくらされし類もあり。遲きと速きと、遂に其計術に落ちざるものなし」と、語るを聞きて白菊も舌を吐いて言葉なし。飛雲も女を馴つけんと思慮をくるしめ、言を

巧にして說きいざなへども、女の心にゆるさぬは、方圓の器にしたがふ水の、形はよわくして取り定めがたく、こゝにまろびやすきものは、かしこにもとゞまらず。又は千鈞の弩の、一重の絹を穿ちかぬる理なるべし。

白菊の下

却說も守廉は、妻女を失ひてより、岐蘇の谷峯につゞきたる險所をさぐり、飛驒信濃の山中を、こゝかしこに三日六日足をとゞめ、いつをかぎりとか獵りくらす。春は生ひすがふ木ずゑをわたす棧に、散らぬ花を踏み分け、谷水の淸きに夏をば外に聞きわたり、幾らの峯を凌ぎては、空も一つにうつ蟬の、聲する程ぞ今朝見れば、木曾の伏屋の竹ばしら、撓める雪に路を塞がれ、又立ちかへる山々の花、燃えんとするに心せかれ、思ひめぐらすに、此近國の山深きに住む妖怪變化の所爲なるべければ、いまだ女が命だにめでたくば、尋ね得であるべきか。先近きより遠きに及ばんと、信濃一國の幽谷を捜り、元より屈竟の家の子兩三人、心を一致にして、餉をつゝみ、苔に臥し、松を打つて把火とし、巖の下、重る根、茂林、藪原を極め、谷神の棲む處、山祇の戸ぼそまで驚かして細見すれども 熊の館、猪の窩の外は、妖怪の住むべき所も見えず。峯よりおるゝ賤の男に、物語を仕かけて搜り問へども、「深き山中なれば、おそろしき物も、あやしき所もありなん。通ふべき路の外は、われどももいまだ見とゞけぬ所のみなり」といふが中にも、事知りたる顔に、麻ぎぬの袖、まくり手にして、「木客といふ魂消る物こそあんなれ。朽木積める葉に精入り、目一つにしてうごめきゆく。力つよく智慧なし。道に障らざれば物を害はず、時氣によつて現れ、時氣によつて滅す。是をこそ眞の化物とやいふべき。又木きる叔父がかたりしは、昔より此山にかすみの洞といふものありて、春の頃晴天に、常にはあらぬ高峰を現じ、其懐に棟高き殿構せる洞穴 俄にあらはれ見ゆることあれども、またゝくひまにかすみ立ちこめて、いづちとも其所見定めがたし。これを見れば恐しきことあるよし。山かせぐものは、一生の内それにあはぬやうにと念ずることなり。されども百年に一度は現るゝといひ傳ふとかや。四五十年このかた おのれが物おほえてよりは、其洞を見たるものなし。仙人の住所と申し傳へ侍る。いかにもあれ、是より奥は常に霧ふかくして道なく、東西南北を別きがたく、樵夫山叟も入ることを得ず」と語る。守廉聞くにつけても心おとりすれど、よしや道なくとも、

行かわぬことのあらんやと、把火先を照させ、霧ふかきまで、勉強て分け入りて見れ共方格しれず。からうじて里あるかたにめぐり出づるのみなれば、事ゆくべき共思はれず。一日絶壁に行きなやみたる邊りにて、一つの怪しき物こそ見えたれ。大巌の上に坐せるが、長は七八尺もあるべし、色あかく猿に似て、又人面のごとく、人を見て笑ふ。其聲鳥のごとく晋の章人に似たり。笑ふ時は上脣額につく。人を見て恐れず去らず。從者どもこれを組みとめんとす。守廉制して、「これこそ聞き傳ふる狒々といふ獸なり。猴千年にしてなるともいへり。此物の所爲なるもはかりがたし。此物を捕獲まほしけれども、其力萬鈞を擧ぐると聞けば、力を以て勝つべからず。我むかし弓法に其傳を得たり」とて、ひそかに矢をつがひ、這厮が笑ふ時を窺ひてへうど射る。巧にも上脣を額へ托けて射通したり。一聲さけびて、巌のうへよりころびおち、矢を負ひながらにげゆくを、のがすなと、跡をとめつゝゆけば、峯ひとつこしたる谷陰に、岩窟ありて血傳ひたり。外より把火投げこみ、見入るゝに、彼獸倒れて動かず、たゞ頻に號びて衰へたり。主從つと入りて、やがて大石を搦きて頭を打ちひしげば、一聲さけびて、其石を手まりのごとくはるかの所迄なげやりて死にたり。窟の内を見めぐらすに、岩のさし出でたる上に太刀一腰あり。銹び朽ちてぬけず、希有のものなり。倘もさぐり見れど、鹿兎の引きさきくらひ散したる、こゝかしこに有るのみなり。たゞいま難所を走りたれば、主從共に大につかれて、「日も傾きぬ。此窟に宿せん」と皆いふ。守廉頭をふつていふ、「祭するに、狒々は必ず雌雄ある獸なり。今殺せしを見れば雄なり。今にも雌が歸り來らば、此つかれたる我々ふせぎ難かるべし」是を聞きて、皆々怕れはしりまどうて出でぬ。全我妻の事、此物の所爲とも思はれず。益なき殺生して雌を失はせたりと、我身に思ひたぐへて、猶も行かるべき程は分け入りて、餉盡くれば里に出でて人家に休息す。兎に角に、霧立ちのぼる奥へは、人力にて至るべき道なければ、さすがの大丈夫も心屈して、心地例ならず、思ひつかれしも理なり。こゝに浦島が寢覺の床に、はじめは草庵を結ばれしが、後は其徒集り、貲きつゞけて殿門備はり、三依道人と呼ぶ翁すめり。持行する孔雀明王の法は、白馬佛教を漢土に駕せざる以前に、子玄仙人西域に遊びて是を傳へてより、今爰に傳流し、病を祈り、禍を攘ひ、拔苦與樂の驗をあやまたず。而相玄文の占卜は、往を說き來を示して違はず。

信心を擲ちて醍醐を求むるもの日々に絶えず。此一七日は三種の密法を修せらるるとて　參詣の人群集す。守廉違例逍遙の爲此寺に來り、道人日中の壇を下りらるゝを待ちうけて拜をなし、「某ははるか西國のものなるが、此國にて妻女を妖怪に取りさられ　生死の樣を究めん爲、山に棲む事三年を經たり。再會の期あるや否や、考を下し玉はれ」と、懇に賴み聞えたり。道人守廉を近づけ、面相し、沈吟して云ふ、「いまだ時至らず。命を全くして待ち玉へ。且尊閫の生土年齡いかん」守廉云ふ、「我と共に吉備の產、失せたる時二十三歲、今年二十五歲なるべし」道人爲に卦を敷く。數の言に云ふ、「其道を永くせば、得ざれども咎なく、此人存命疑なし」又問ふ「其怪いかなる物ぞ占ひ知るべしや」道人卦を設け、頭を搖つて云ふ、「大幽之門　窺而無間。其密なること見るに方なし。我智識に當りがたし」守廉拜をなし、內玄關に退き、點心を食し、休息す。其日も未の刻さがり、暮の壇に參詣多き中に、前供人を拂ひ、門外に留り、乘物のめぐり近習打圍み、玄關に舁きすゑ、烏帽子引きたて立出づる威風骨柄、小可の人にあらず。後乘は召つかひと見えて、美麗の婦人かしづきて客殿に通り、此大名道人を拜して、「何某は諏訪の一屬、小身なるものなり。忍び詣なれば名のらず。先我に卦を給はるべし」道人其の支干方位を問ふ。「我は此國の舊家なるが、幼にして孤となり、大君の家に寄食し、生辰を記えず。假に甲子を以て是に充つ」道人卦を敷きて、心驚きて云ふ、「天賜之光、於謙有慶。貴人德ありて隱るゝゆゑ福つきず。壽命は海山と共に久しく、よろづ心に叶はざるなし。凡人の卦にあらず」貴人大に悅び、「道人のことば、いかんぞわれ當らん。しかれども、我年來萬事意の如くなれば、道人の卦にもるゝ事なし。いかんせん、人界愛着ふかく、色慾の迷ひ多し。恐らくは德を損ずる所あらん」又召つかひの婦人を相せしむ。道人面相して、「命數めでたし」と、再び其支干を問ふ。「酉にあたる」と答ふ。道人卦を設けて云ふ、「內に懷うて替くること差ひ、永く貞祥を失ふ。火の木にあるや、炎ゆることを改めず。中年以來、人の婢となりて其家に終らん」大名近侍に命じて、金錢、卷絹を引かせて云ふ、「道人を煩はす一事あり。近頃一つの任せざる心願あり。今日敬愛の法會に趣きて、此願を祈らんと存ずるなり」道人云ふ、「やがて晡時の壇に登れば、倶に法會に參して祈り玉へ」と、茶菓を供じて待たる。既に壇に登り、讀經

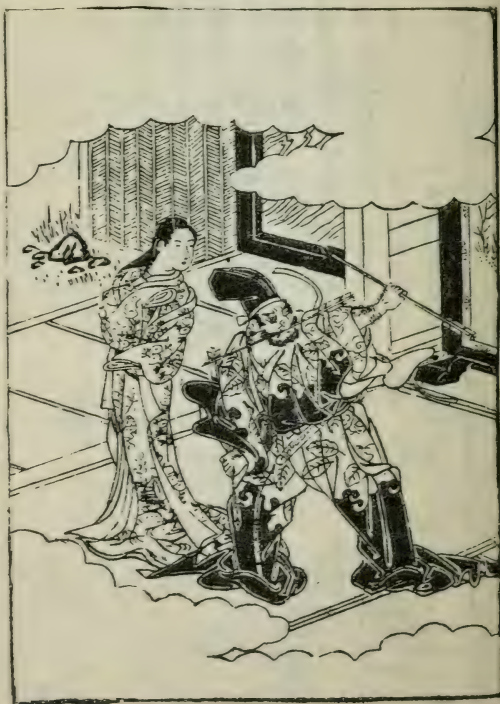
の宣巻をはり、香をひねりて、「南無十方の諸天、此一炷の香、四海安静、五穀豊登、三の教昭明に、聖の君歡多かれ」又一炷撚りて、「十方施主、福德延命、拔苦與樂」又一炷を燒きて、「今此甲子の貴人、如意滿足ならしめ玉へ」と、懇に祈り求めらる。參詣の衆、籤を拈りて、其數の辭を求む。貴人の籤六十三の歌に云く、

法の庭よき日詣でてあすよりは
紅の衣を褻衣にせん

女房の拈りたる九十四籤に云く、

あなたふとけふの御法にあふ人は
千年の命有りとこそきけ

道人壇を下りて、卷數を注して參らす。貴人頂戴して、悦び斜ならず下向ある。道人徒弟に命じて玄關に送らしむ。守廉は、歷々の武家參詣と見たれば、彼が歸るを待ちて道人に賴むべきことあれば、間を隔てゝ立ちかくれ、今ひそかに窺へば、大名の後に從ひ出づる婦人こそ、正しく失せたる我女房なり。大に驚き、變化にはあらで、此大名の仕業なりけり、誰にもあれ、眼前の怨敵脫さじと、物陰よりねらひを定め、兼て手練の一手、三箭連珠のごとく、ゑい、や、はあ、のひやうしに、つらねてはなつを、大名手ばやく左の手にて握りとゞむ。續いて來るを右の

手につかむ。間もなく來る三の矢を、口にくはへて嚙みとゞむ。すかさず、しきりに射る矢を、悉く拂ひのけ、一つも身にあたらず。守廉着忙つて、拔き設けて切つてかゝるを、大名きつと見むく眼のひかり、一身に劒刺す如く、覺えず居ずくまりて動き得ず。白菊は、もりかどなりとは見たれ共、是も又神通にやと、言葉なくてためらひゐる。大名怒の相を現し、「儞女房に念ふかく、還も職に就かざるか。女よく仕へなば、廿年の後は放ちかへすべし。奉公あしくば、一生かへす時あるべからず。よく思ひ取りて、速く官府に歸れ。大德達、又こそ參らめ」と、女を引きつれ乘物に、うつるとひとしく多くの家人、中を飛ばせて足はやし。「いかに、其まゝかへさじ」と追うてゆく守廉が面を摺るばかりに、小家の如き大石空よりどうと落つる地ひゞきに、肝つぶれて尻ゐにへたり、起きたつ時早く影も見えず。餘人の目にも、瀧の邊まで行くかと見えし、忽ちに見えずといふ。守廉、其夜は寺内に一宿して氣を養ひ、彌怪物の業と知り、目に見ながら、女房を取りかへさゞるを殘念に思へど、「是も眞の白菊ならぬもはかりがたし」と、道人にもかたりて、心惑ひするも理なり。かくて

白菊は、はからず夫に逢ひながら、言葉なく別れ、道すがら思ふに、此變化いかなる德ありて、名知識の占にも、惡人の相はなく、凡人ならぬとあれば、神の化現にこそあらめ。守廉が力量、弓矢も近よることあたはず。我女の身として、計挍の有るべきやうなし。彼また、能くつかへなば歸さんと言ふ。身さへ汚さずんば、帳臺の賤役をもとりまかなひて、結句敵さるゝ時あるべしと、歸路に休らふ乘物にむかひて、是迄の不是を侘びなげく。飛雲も詞おだやかに、「身に近く齊眉をなさば、我ことばむなしからず。さあればとて、爾が貞心を強ひて奪ふべきにもあらず」とぞ申しける。白菊洞に歸りてより、女ばらに立ちまじりて、一應の事をもつとめければ、我通力に驚きて、女が心和ぎたり、遠からずして本意とげなんと、悅ぶ事かぎりなく、猶も女ばらに向ひて、我出身を語つて云ふ、「我は神世より此所に棲みて、已に二千年。昔大山祇の神に說きさとされて天孫に從ひ、此邦守護の神の數にも入るべかりしを、身の不德をかへりみて辭退し、我山半を分ちて奉り、半を我隱れ家とし、常に霧をふらして人間に見せしめず、永く引きこもりて世の事にあづからねば、我を隱れがみとも呼びて、勤役のことなし。皇孫に對して反く心なければ、其餘の事は咎にあづからず。むかしより數多の女を攝り來り、召しつかひたれど、七人の閨婦、千石の粟は、天蒼氏の賜ふ常の產なり。婦女の輩も、元年々にかゆべきを、愛着の爲に私して、久しく洞に留むるにいたる。年經て送りかへすべきも、多くは命數たもたず。昔より山內山下の里々に、牲と名づけて、少女を供ぜしは、皆我請けたる所なれども、多くは是れ村女なれば、われも欲せざるより、自然に其事たえたるなり。古は、我も常に形を化現してよき男となり、女ばらに思はれんとのみはかりしかども、我德をいだきて形づくりするは、無下に卑きわざなれば、里に出でて遊ぶ時ならでは容儀をかへず」と、是迄かたらぬ物がたり、實にも等閑の人ならずと、白菊をはじめ多くの女房、敬ふ心もおこりなんかし。ここに寺內に宿せし守かど、明くれば道人にいとまごひす。道人對顏して大にいぶかり、「今日貴所の相を見るに、きのふと大に變じて、眉ひらけ、色悅ぶべし」守かど云ふ、「昨日今日、いかんぞ相の變ずることかくのごとくなるや」道人云ふ、「われも又其ゆゑをさとらず」と、再び蓍を抽き、卦を敷きて云ふ、「鵜鶘氷を慘みて彼南風に翼けらる。是春風氷を解くのこと、足下夫婦完聚の占文なり。怪しむ

べし怪しむべし」と、眼を閉ぢて神を出し、半刻ばかりにして眼を開き、守廉にさとしていはく、「物皆前數あり。此怪物、支干甲子なれば、丁酉を得て滅すべき機あり。儞が妻の丁酉は火の運、甲子は金の運なり。微火を以て大金を消す、一生の厄とす。是大數の行きあひて、其寃業を消却せんとする時至れども、婦人貞實にして、たやすく從はず。おのれに害あるものを深く好めるは、寃業のなす所、神通にも及ばず。敬愛の法に頼つて女を從へんため、昨日法會に參じたり。變化の悪行貫盈すといへども、此緣をとげざれば、いつまでも亡ぶる時至らず。今卦の變じたるを以て見れば、今や前緣を遂ぐることあるか、是亦敬愛の法の應驗あるか、不可思議の妙をしらず。夫婦再會の後、是を以て心に挾み玉ふことなくんば、再び拙道足下の爲に法力を施さん」守廉云ふ、「何條その念の候べき。我丈夫の身として、彼を降すことあたはず。いかに言んや女をや。此年月志を守りたるは、尋常の女の及ぶべきにあらず」道人尤もと點頭きて卽ち壇に登り、髪を披下け、寶劒を把つて口中咒詞を念じ、檄を香爐内に燒き、大喝一聲す。忽然として殿中昏黑、一陣の怪風起る。守かど壇邊に俯伏して、見れども見る所なし。只聞く道人の聲にて、「燒雷公、今日此山精を撃つべし。雷公の難んずるは、彼に勝つことあたはざるが故ならん。今日大數到る。撃たば必ず得ん」言下、忽ち壇上より閃電起つて、一陣の霹靂雲間に震ふ。漸く殿中晴れて日氣を見る。道人守かどに敎へて云ふ、「雷の聲せし方格を求めゆかば、必ず驗あらん」守かど一躍し、急ぎ從者を具して峻敷を淩ぎ、雷の響きたるかたをさして登ること半日。昨日迄霧立ちこめし谷峯、いつしか晴れわたりて、思はざるに通ふべき道あり。平なる所は沙こまやかに、傍に名もしらぬ木草の花どもいろ〳〵に、景色かまゆるが如し。是飛雲が常に諸女と優遊する所なり。道の勞なく登り下りて、數多の山頭を過ぐる所に、白菊數人の女房と共に逃れ來るに行逢ひて、再會の悦びたとふべからず。扨、「いかゞせし」と問へば、白菊うれしさの涙をはらひ、「今朝、雨なき空に鳴神の、物おそろしく洞の上に落ちかゝり、變化を撃ち殺せり。因てわれ〳〵里をさして出づるに、ふしぎに霧はれて此道に出でたり」といふ。守廉大に悦び、女ばら白菊ともに、家人を分ちて里に送りやり、その身は山深く入る程に、道は見えざりし山の半腹に、廣き岩窟あり。其内に、石をたゝみ、木を横たへて、館の結構あり。正殿雷の爲に破られ、是こそ變

化よと覺しくて、其長一丈あまりの異形の獸、雷火に燒かれて、褥の上に死せり。即ち首を切りて取りもたせ、子細に見まはせば、正殿を引きまはして、廻廊の如き家づくりし、畫ける障子もて間をわかつ。これ婦女の銘々局せし所なり。正殿の窓の下に、銀にて飾れる劍一振あり。鍔を見れば陽の形なり。鞘をぬきて見るに、今時のものにあらず。劍のかざり、寸尺、いつぞや狒々が岩穴にて得たりし劍によく似たり。思ふに此怪物と雌雄にやありけん。其外絹布財器數多あれどもこれをとらず、洞の内に火を放ちて、燒きつくして立歸り、國司に參りて始終を語り、虛病せし分說をなす。國司も希代の事に思ひて、人にも語られけり。白菊、家に歸りてより病に臥し、重く惱みけるが、三依道人の靈符を求めて平癒せり。夫婦寢覺の床にいたりて、道人に謝し、布百疋を進らす。道人今や世財を受けて用なしと、只一匹を留めて服用とし、倘示していはく、「世の人陰陽の理にうとく、强ひて求め、强ひて恨む。寃家相得ざれば、其蕾開けず。思ふこと遂ぐれば、花咲きて散るにちかし。是天地の消息なり。其内に、少しの遲速、强弱、幸不幸有り。掾內の貞堅なるも、洞に入りて後、日々に死の一字をゆるかせに思ひしこと、是即妖術に魅せられたるなり」夫婦聽きて、彌敬服して退く。是より木曾山中霧のふさがりなく、山深きにも至るべし。樵夫、杣人、賤の男女迄、悅ばずといふことなし。女を失ひたる木曾の深坂、これより妻籠の名あるよし。馬籠といふ所は、其時從者を宿せしにや。兎角のあひだに月日過ぎて、早くも掾の任滿ちて、備中の本國に歸りぬ。菊のかた、年月の磨離を熟思ひ出づるに、かゝる變化の寢所ちかく役せられ、婢妾の隊につらなりしこそ、初の念よわりて潔からず、大に貞操に恥づる所あり。終身の瑕瑾これなるのみか、又いきどほるべきのことにあらずやと、怪物の首を館の後に懸けて、自ら弓をとりて、日々これを射て、三年おこたらず恨をもらされしとかや。其所を後世猿掛の岸とぞ申すよし。こゝ去つて西國のことなれば、それをこそ老は知らずと語りつゞけたりとなん。

古今奇談繁野話第三巻　終

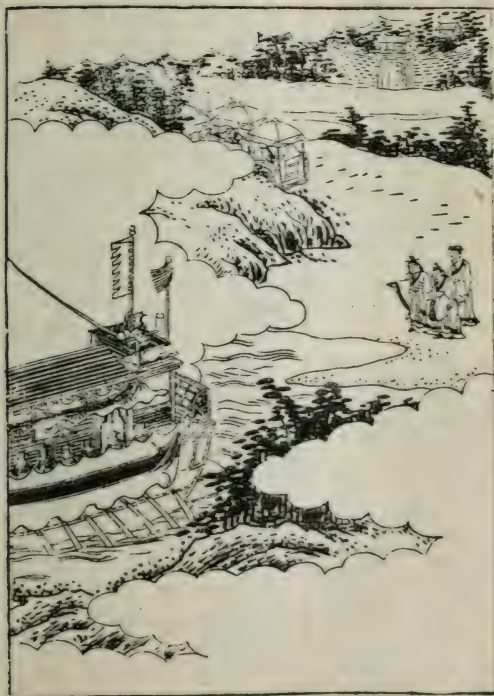
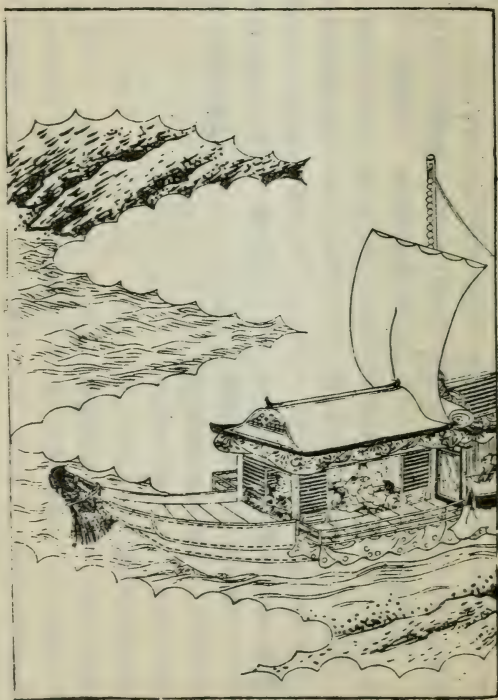
古今奇談繁野話第四の巻

六　素卿官人二子を唐土に携ふる話

才ある人は必ず行なし。大才の人約束の套へ入りがたく、瓶は井より小なるがゆゑ井に陷るのたとへありて、放逸の門をひらく。古今律令の設くる、其垣を廣くして、知愚老幼も犯さぬ程の所に置きたるものを、其度をこえて人を損じ、身も保たざるは、守る才なしとやいふべき。明の弘治正德の比、寧波の鄞とやらんいふ所に、朱縞字は素卿といふ者あり。少年より、亡頼無行にして一屬にうとまれ、世路の便りをうしなひ、妻子を遺し棄てて、壯心にまかせ、商船に附搭して大日本に來り、泉州堺に足をとゞめ、少年の時學びたる文筆を賣弄して、攝州山州の間に往來し、しば〳〵京師に徘徊す。異國人の爲すところ、悉く奇にして珍かなる事のみなれば、都人多く迎へて奔走す。右京兆何某、其邸に召しおき、命じて詩を咏ぜしめ、文を作らしむるに、いづれ我邦の人の習はざる所、他は是より雄なれば、世に愛づる事多く、又漢土歷代の故事ども、記憶えたるまゝ語る程に、稱して博識多能となし、遂に室町の御所に抬擧し、拜謁をゆるされ、歷々の師となり、大に意を得て、富貴を思へば、唐土にありしには遙にまさり、膏粱に飽き、第宅に富み、財帛前に滿ち、婢妾後に群す。泉州以來、男兒兩人を出生して、其供育我幼き時にもまされりと思ふにつけても、故國にのこせし兩人の男子、母と共に今頃はいかゞなりしやと記掛下りず。其時義植公、洛に入りて足利家の職を襲ひ、永正八年信使を唐土に遣はさる。幸案內者なればとて、朱縞を使に充てらる。過し比西の京の邊に聖廟を建てられしかば、孔子を祭るの儀を請ひ得て歸るべしと命ぜらる。朱縞望む所と內心大に悅び、字を用ひて素卿と披露し、堺の湊に乘船の設美をつくし、すでに纜を解かんとするの時、送り來りし兩子十一十二歲なるが別れを惜み、兼てはよく覺悟しけるが、此際にいたりて俄に云ふやう、「唐土は父の本國なれば、行き玉はゞ、必ず歸り玉ふことあるまじ。われ〳〵兄弟も携へて行き玉へ」と、かなしみ乞ふ。素卿云ふ、「我日本に來りて榮貴を得ぬれば、一たび故郷に行きて、舊日の面目

を清めんと欲する迄の本意なり。いかんぞ此土に歸らざるの理あらん。公の使にまかるに、我兒をつるゝ事あるべからず。公道を知らざる未練のことかな」と、詞をするどにおとせども、聞き入れず、「御ゆるしなくんば、われ二人が命を失ひて後に、御心にまかせ玉へかし。死して別るゝはせんすべなし。同じ世に添ひ奉らず、青冥の長天、綠水の波瀾、夢魂だも至らずといふなる所を隔てゝあらんは、死別にははるかにおとり侍らんものを」と、袂を取りて放たず。素卿此言を聞きて涙をながし、「理なるかな。人身の世にある、七十稀なり。其間親子の楽ること幾時かある。遠く隔りて生きたるは、世にすむ名のみ斗りなり。我職を守り、身を忘るべき仕官の身にもあらず、人を治め世を利する能あるにもあらず、いかばかりの榮を貪つて、幼き者にかなしみを見せんや。罷々、親子一所に行かずんば、此任を辭し、田野に就きて民たらんものを」と、此趣急に京都に達し、二子を帶びんことを哀しみ請ひ奉る。是元より官途を踏むものの言ひ出でらるべきことにあらず。兩兒をとゞむるは、彼が二心なき爲の質たれども、今日の其體、詐にあらざるがゆゑ、兩兒を具して行くべきをゆるされたり。素卿御恵を有りがたく存じ、兩兒を書童の樣にとりなし、船を出し、海上に月をかさねて、明の正德六年、彼土寧波に著岸す。是唐の代の明州の津なり。錦の袂を故郷に翻し、京師に至りて信を通じ、竝に孔子を祀るの儀注を請求むといへども、國書の中に求むるの語なきを以て許されず。素卿機智をつかひ、賂を厚くおくり、閹人內官に就いて內奏をなし、飛魚服を賜けりて、是を榮として歸程に趣く。寧波に至りて數日滯留したる內、私に鄞縣にゆき、故と日をくらし、庶人の服して、有りや無しやとおぼつかなくも、我棲みし處に行きて見れば、家は依舊ながら、荒れのみまさりて、門戶破れ扉だになく、人住めるとも思はれず。懷舊の感傷にたへず、徘徊する所に、十二三なる小童、繿縷の裾を挽きて外より來り內に入る。素卿あとにつきて入り、「行人路に疲る。片時の歇息をたまへ」と、石砧に踞けて見めぐらすに、四壁はありしまゝにて、床褥家伙一つもあることなし。沙鍋破甌、草を敷きて臥床とせり。「小童には父母ありや」と問へば、「父は胎內にある時亡命し、母は五歲の秋に死す。一族あれども、貧を惡みて疎んじ、鄰の解語が憐ふかく我兄弟を養ひたり。それさへ過ぎし比疫を病みて世を去り、隣家の趙三、錢四、勾當して、化人場の灰となしぬ。

孤は日ごとに近き溪水に行きて、水を上せる船を引きて、數錢を得て飢を助け、兄なる存糸は、人家に傭賃して、夜ふけて家にかへる」と、世に淺ましげなるさましていふ。素卿鐵石の心腸も刺すがごとく、目を開きて見るにたへず。「扨其父なる人の生死はしれずや」と問ふ。小童涙をはら〳〵とこぼして、「今は日本に」と斗り云ひて、面をたれたるさま、素卿惣身慄ふばかり、しばしは涙にむせかへりて、「世には哀なる事多き。聞くさへ涙ながる」と、他家の事に取りなしても心にたへかね、言ひ明らめて幼きもののかなしみを晴してんとこそ思へ、隣家をはゞかり、假に且其時を忍へ、斯くいふ内も、存糸かへり來らば、見あらはさんと起ちあがり、「父の命だに全くば、やがて歸り來ません」と小童を言ひなぐさめて早くも出で去り、旅館にかへりて後、遂に一封の書を故鄕の親族朱澄に寄す。朱澄書を得て、朱縞が今の身のうへを知り、鄞の有司に告げて云ふ、「日本の使臣宋素卿と聞ゆるは、族子朱縞がことなるを、此たび朱の字を宋と見誤りたるよしなり。彼は出身しか〳〵のものにて」と、始終を申して、後議を避くるの遠慮をなす。時の邊臣、外國の心を失はんことを恐れ、寬恕を專らとし、鄞の令にゆるして竊に其對面を遂げしむ。朱澄やがて旅館に來て素卿に見え、舊をかたり人情をなす。素卿是に金銀を交與して、兩子の事を托みあつらへ、一面人をはせて兩子をよびむかへ、今こそ親子の對面はゞかりなく、悲喜交かたるにつきず。既にして、素卿和國の兩子を携へ、歸船に趣かんとする時、存糸、素有は、希有に再會して程もなく別るゝことをかなしみ共に連れ玉へと、ひたすらなげき告ぐ。素卿これを撫して云ふ、「爾二人は唐土に生ひたちて、今しらぬ國までゆかんといふも、兎に角に父と一所にすむべきの念のみならん。實にや人の子の、わきて不便にかなしく思ふは、小兒の比のことなるを、父は若年の比行跡よからず、一族の諸君にうとまれ、爾らをすつるのみか、父母の國、墳墓の地を去り、他國にあつて異客となる。日本に貴き恩遇を得て歸ることをわすれ、古仲滿が跡を踏みて兩國の恵を蒙らんとす。爾ら我を慕ふといへども、我六十を過ぎて、いくばくの年か此世にあらん。我日本に榮ありといへども、外國の人親しみなく、誰に孤を托むべき。思へば和國の兩子も、病と外揚して此地にとめ置くべし。四人むつまじく、ともに唐土の人となれ。父は兩端を踏むゆゑに、後程の吉凶はかりがたき身のうへなり。まして、他國に久しきは我初の志

にあらず。幾程なく歸り來りて一所に住むべし。此度父と一所に行かば、重ねては連れ來ることをゆるされまじ。其間朱澄の許にとゞまりて、物學びおこたることなかれ」と、さとし勸むるも副使に聞せじとひそみかたる。男兒等も、父の久しからず來んといふを力に、纔のこり留りける。素卿は海昌の津より船出する。四子も車にのりておくり來り、彼土の官人有司、みな別酒を酌みつくして、素卿船にのらんとす。四人の子、父を中にかこみて、「大人、千萬保重」といふより外は、詞ふさがりて手をわかてり。こぎ出でて行くを、車はなほとゞまりて、船を見んとて、帯絹よりのべ出し見る顔の、いとゞ小さくなるまで見おこせたるが、車さへみえずなれば、船もいまは見うしなひてんと、胸つぶるゝやうなるも理なるかな。程ちかき所も、別れはつらきならひなるに、まして危き波濤を凌ぎ、千里のこなたに來たる身の、なほざりならぬなげきならんかし。やがて一日を來りてこそ、旅の心に立ちかはりぬ。かくて恙なく歸り參りたれば、信使調ひたるを以て賞賜多く、恩遇舊日に勝りけり。此て義晴公家の業を嗣ぎ玉ひ、世の中騒々しければ、慮を遠くおよぼし、大永二

年信使を明に遣はさる。時に細川高國管領に任たり。僧の瑞佐に素卿を添へらる。其の折節、周防の大内義興より、僧の宗設並に謙道を使として信を通ず。是は大内家、先年より別に勘合の印ありて、毎度遣す舊例なり。其使兩人、すでに素卿より先に到つて、倶に寧波に留る。彼土の先例に、凡蕃貢、外國の使至れば、先其貨を閲して筵席に請ふ。商客等は、主人家其貨の多きを上席に居らしむ。貢使は、其着岸の前後によつて座をさだむ。素卿彼地案内たるを以て、市舶の大監に賂うて數種の珍物を饋る。此ゆゑに、市監先に瑞佐が貨物を閲し、宴席に、先瑞佐を請うて首坐に着かしめ、宗設を次の座に居らしむ。宗設大に怒り、先例に違へりとし、瑞佐と忿爭になりて、席間に相掴つにいたる。しかれども、此席互に兵器を帶せず。何の仕出せることもなし。諭し救はゞ無事なるべきに、大監ひそかに刀劍を瑞佐に授けて戰はしむ。宗設が一隊、逃げて旅館にかへり、刀槍を取つて再び戰はんと騷動す。總督備倭都指揮劉錦、是を聞きて、出でて兩方を制す。宗設が手下の者、憤にたへず、劉錦を斬殺し、大に猖れまはり、寧波近邊、海郷の鎭を掠め、船を奪うて逃れ去る。

近鎮より、兵を出して亂を靜め、急に北京に聞して、彼朝の所斷を經て其罪を論じ、市舶大監を斬に處し、素卿が私通の罪、亂階をなせし上、其亡命を憚らざるを以て、重き律に論じて、遂に死刑に行はる。謙道瑞佐は、外國の人にして、殊に使臣なれば、其罪を問はず、本國に還らしむ。此禍は元市舶より起ればとて、これより後、此所の市舶を禁制せらる。

其事は明人の記錄にも每載せたり。素卿が鄞江の一屬は、初に訴へ出でたるを以て系累に及ばず。四人の子は如何なりけんかし。機智ありて、愼なき者は、素卿を以て誡となすべし。去るにても、其親子別れを取りし別離の情、世の人をして酸鼻せしめ、和樂唐船の曲本、見る人今に至つて愛ふ。

七　望月三郎兼舍龍窟を脫れて家を續ぎし話

醍醐帝の御宇、若狹國高懸山に妖賊據り棲みて、其張本自ら眉鱗王と稱號し、賊徒を集め、公の命を拒む。其近邊の人民害を受くる事甚し。國司數々是を攻むるといへども除くことあたはず、朝廷より近國遠國におほせて助力せしめ玉へども賊徒強力のもの多く、あるひは其合戰難儀なるに及べば、賊主眉鱗王齋戒して妖法を修し、自ら出でて戰ふ時は、一身忽ち百千に變じて人を殺す。是によつて官軍勝を取る事あたはず、十分勝つべきの場にいたりても、必ず兵を折く。官軍の中、信濃武士に、望月太郎清春、同次郎貞賴、同三郎兼舍、兄弟三人一隊を結びたりしが、味方の引くにつれて敵間遠くなり、退屈してこそ見えける。三郎兼舍は、清らかに、柔和なる面體なるを、初より面を黑赤に染めて、諸軍皆生得と思へり。今素面を露し、清春、貞賴に合圖定め、家士丹一平六ら五十斗りの人數に、變によつて應ずべき心得を示し合せ、故と悄々に敵の要害にいたり、「一角申すは此國北郡の者どもなるが、案內に具せられて、心ならず寄手の陣に候ひぬ。寄手此比の敗軍に鋒を消し、陣を拂ひ、退きて救を禁廷に乞ふよしなれば、引きわかれ御味方に參りたり。御許容あらば、次の軍に先手を仕り、粉骨すべし。御許なくんば、御勝利の後の安堵を賜つて、北郡に歸り、休息すべし」とぞ申しける。門卒等、「是、我々が計る所にあらず。此にまつべし」と、嚴敷此人數を執かこみ、此略を書きて號箭に結びつけ、後の嶽にむかひ、射出したり。暫くありて、向うの巖頭より掛梯を釣りおろし、兵士二三

十わたり來る。一個々々虎の如く熊の如く、傔舎が人數を睨みめぐらし、「儞等頭たるもの一人、懐中を捜り見たらうへ、無刀にして、中陣に參りて軍師に對面せよ。其餘は爰にとゞまるべし」と云ふ。傔舎時に色青くなし、身を慄して、「後日はかくべつ、只今一人はなれて御本陣へ參ることは、いかにしても心ぼそく存ずれば、頭たるもの八人の內、はなれては參るまじ」「つかはすまじ」と、皆々詞をそろへ、「とかく歸りて休息するに如かず」と、恐懼れたる有りさまなれば、「是程の弱卒、奥へ入れたりとも何かあらん。いざ來れ」と、賊徒が前後に引包みて、梯をわたり、岸頭に鐵門のかためを過ぎて、軍師の陣に參る。軍師石丸、虎椅にかゝり對面す。望月が衆、詞はじめのごとし。石丸竊候の徒に見せしむるに、「寄手の武士の內には見なれず。定めて實情ならん」といふ。石丸契約の盃賜らんと、高さ尺ばかりなる鐵塊の、うへのくぼかなるに酒を酌みて、輕く一獻を擧げて傔舎にあたへ、自ら酌を取りてけるに、傔舎頂戴せんとせしが、得とり擧げで、二三度取りおとし、掌をさすり、見苦しくも口をよせて吹ひほし、「此盃の重さはかりがたし」と、顔を赤めて退くに、其餘は猶擧ぐるものなく、皆々地に置きて飲みければ、軍師をはじめ、手を打つて笑ふ。「いざや、此ものどもを上の御所に申して、あすの軍の手合、上意を談じて歸るべし」と、小卒を添へて猶奥にやりぬ。其道二重の門あり。開閉嚴しく、夜を警むるものおこたらず、「火あやふし、火あやふし」と、木々合々よばひめぐる。其次に自然の石門、一人ならで通るまじき狹き所をすぐれば、夜直の莪徒、多く板屋の下に群れゐたり。軍師の使を見て、「しばらくそれに待たれよ」と奥に行きしが、立ちかへりて、「只今大王潜行して坐さず。皆々軍師の府に行きてためらふべし」といふ。傔舎思ふに、扨は暗道ありて他行するか。こゝにあらぬこそ幸なれと、急度案じて味方に暗號し、面々一度にかゝりて、中にも頭と思しきが帶びたる太刀を奪取り、早く兩三人速に切り倒し、直に其太刀を取用ひて切つてまはる。其勇勢、弱々しかりしには大に相違して、賊徒うたるゝもの多く、見ごりしてのがれちる。傔舎が人數、一度に本陣に切り入り、處々に呼はつて、「明日は朝廷の加勢來りて、儞ら一人もゆるさじ。只今官軍につくものは、命をゆるし、爰に積める財寶名々分ちやり、朝敵の罪をゆるし、去るとも降るとも、心ままなるべし」といざなひければ、內郭の者どもは、過半眉鱗王が無狀なるに安き

心なき折からなれば、「御下知に従はん」といふ程こそあれ、石門をとぢてこゝにこもる。兼舎此時相圖の哱囉を吹き、假の方便に、「みりん王打取りたり」と、奥より軍師の郭を責むれば、石丸大にあきれ、掛橋をおろし、木戸の方へ逃げ出づる。木戸にとゞまりし數十人のもの、相圖の螺をつぎければ、麓に出張せし太郎、次郎。すはやと責めのぼる。石丸先後に敵をうけて、遂に太郎、次郎に降りける。兼舎は、暗道の案内させて、みりん王うたんとおもへど、此騷動に、恐らく、其道より逃げ行きて告ぐるものあらば、此道へは歸り來らじ。「若し歸り來らば、手をそろへて打取るべし」と、老黨新藤六に申し含め、「猶内郭よくかためよ」と、自身は暗道の案内聞きつくし、表の陣へいそぎ行きぬ。賊主眉鱗王と申すは、出生の時に眉に鱗有りしかば、むつきのま

ま山中に捨てられて、後は親しらず人となりて、力強く、膽太く、山賊の頭領となり、生れし時の奇怪を人の言ふまゝに眉鱗王と號し、衆にすゝめ擧げられて、そゞろに大事を起したるものにて、深慮計策あるにもあらず、先年手下の老賊に呪術を行ふものあり、それを傳へて、鬼を役し靈を使ふことを習ひ、軍中に用ひ

て、山に據り、林に托して、眩術をなし、頻りの勝軍に心怠り、清淨をつとめず、後の山村に妻をなんかくし置きて、折節は暗道を通ひける。こよひしも妻の許に行き、酒のみゐる所に、身ぢかきもの二人三人周障て來り、「内郭に敵入りて變あり。此處へも捜り來るべし。御用心」と告ぐるに驚き、只五六人を從へて、溪をつたひて落ちゆく。間道の歩はかどらず、里ちかくなりて夜は明けたり。從者皆云ふ、「われ〳〵は、寄手の加勢のさまにもてなし行くべきが、いかにしても、御姿のきら〳〵と、かくれなく見へ給ふ難儀さよ」といふ。眉鱗王「實にも隱れかぬるは朕が身なり。潜みたる行の折からなれば、早く龍衣を脫せんとおほせども、換へて參らすべき御衣なし。宸襟これが爲に惱む」といふ所へ、水に添ひたる路を、きたなげなる僧の、朝氣の雨を簑にふせぎ、鉦子頸にかけて、里に頭陀すると見えけるを、やがて取りとゞめ將て參り、「忝くも是こそ山中の君にてわたらせ給ふ。僞が衣服を召さるゝ間、錦の御衣に換へて參らせよ」此僧大に驚きおそれて聞き入れぬを、さま〴〵に云ひてぬがせたり。扨大王の上襲、下襲、着換へらる。下に御したる白綾の袙を、榛染の

ひとへなるに召しかへ、上なる潜僞の日月袍は、白布袷のあかつきたるにかはり、密金葉のきせながを、五倍染の僧衣の、然も破れたるに召しかへ、身はかはれども、猶頭に潜僞の金冠たかく載きたるは、いかに似なき御姿かなと、僞官人等思はず笑を吹き出す。やがて雪帽子にいたゞきかへ、髮を帽子の内に束ね擧げて、烏頭の御劍にかへて、小々やかなる鉦を取りてかけたるに、大の男の乳のきはにさがりてふらめき、村籐の弓を禿びたる鐘木に取りかへたる御有りさま、水に映して、我ながらせはしきなかにもをかしく、隨ふものども腹痛き迄に笑ひ倒けたり。みりん王猶口を改めず、「群臣必ず笑ふことなかれ。創業の君は難多し。蒙塵させたまふときは、賤の服を御すること例あり。いま僧となるは淸見原の吉例なれども、此あひだに醜賣家さへもなし、まへより、うるはしく物めさねば、いといたう飢ゑたり。此川をわたらば、岸の鼻の嫗が店にて、べた〳〵のかちんにてもめして參らせよ。いかに下素の僧、其烏頭の御劍は、先祖大山邊のみことより傳來の家寶なり。治世の後持ち來らば、此山半片を賜はり、僧徒の撿校たらしむべし」と、空だのみなる潛上、大言して、渡頭をさして急ぎける。招々たる舟子も、朝まだきに、猶船のなかに鼾の高きを、呼起して「船仕れ」といふ。舟子目を揩り、欠伸しつゝ船をよせ、軍人なるを見て腰を屈め、きたなき僧の後れてのらんとするを、「次の便船をやるべし。見ぐるし」と叱りとゞむ。乘りたる軍人口々に、「僧なんくるしからず。いかに、早くのりね」といふに力を得て、のりうつるを、「ともべにをれ」とゐすくませ、船を出し、岸につく時、五人の兵は早く上る。舟子竿を取つて、再び川へ押出す。此僧いぶかり、「我をいかに上ぬぞ」と、すさまじき目をにらみ出す。舟子棹をすてゝ、「扨恐ろしき眼つきかな」と、つとよりて雙手にしかと組む。僧も力を出し、からがひしが、船の上、足の踏所定らず、力なくも組みふせられたり。舟子繩を出して搦めつくるを、岸にあがりし五人、船を見てあせりさけぶ。邊の農人出で來りて、五人の兵を擒にす。是農人にあらず、傔舍の家人丹二、丹三等なり。舟子は卽ち傔舍なり。生捕を牽かせて、兄の陣所にいたる。太郞、二郞是を見て、手柄を弟にこされ、安からず思ひ、かゝる僧衣のものを、いかんぞ眉鱗王といふべき。いぶかし」とうけがはざる所へ、最前の衣をはがれたる頭陀の僧、錦袍弓劍を持參して其様をかたる。此僧こそ藥師堂の新發意、傔舍遣して、敵ちかく細作をな

さしめたるなり。遂に粂舍が手柄に極る。山寨の金銭重器を衆に分ち賞する中に、彼鐵の盃あり。粂舍生捕の中にて、此盃に數盃を傾け、輕々と酒もりす。兄兩人石丸が說を聞いて、賊營の側に古き人穴ありて、賊首の眷屬かくれゐる、是をのこし置くべきにあらずと、三人再び山に登り、彼窟に臨み見るに、直にして井のごとく、石を投ぐるに其底ふかし。「人をやおろし見ん」などいうて、立ちもとほるやうにて、粂舍を不意に突き落してけり。土を以て穴の口を塞ぎ、始終を兩人が功とし、眉鱗王を引かせて凱陣し、粂舍戰死と披露し、二人恩賞を受けて、領地を安堵せり。粂舍は穴に落ちて、一たびは絕入すといへども、漸正氣つき、打損じたる腰膝難儀ながら、岩中に明りのあるかたを、拔穴にやと、ゐざり〱て行きけるに、幽に天色を見る處あれども出づべき道も無ければ、何の賊徒かこゝにかくれん、是兩人の惡心にて、我を陷れたるよとさとり、かくては終に餓に及ぶべし、穴の内に、食に當つべき物やあると、胸つぶれたるに、來るていも見えずして、ほのぐらき中に老人ありて、「粂舍、儞憂ふことなかれ。穴を出づべき便こそあれ」と力をつくるに、少しは心だのみせられて、此老人を拜して、「穴を出づる事を得ば、實に再世の恩なるべし」と、兄兩人の姦智を訴へ告ぐ。老人云ふ、「世の人心頼みがたきは古より珍しからず。我は久しく爰にあれども、百年二百年には此穴を出でず。近日此穴を出づべきものあれば、必ず儞を送り出すべし」粂舍彌悅び敬ふ。老人黑き餅を出して、粂舍にあたへて、「饑をしのぐべし」といふ。粂舍是を喰うてより、また饑を覺えず。「去るにても、いかなる神仙にて渡らせ玉ふ」と問へば、「我には古より其名をつくるあたはず。鱗蟲の長なる龍を以て呼ぶ。能く幽に、能く明なるは、鱗屬の及ぶ所ならんや」粂舍、扨は千年山に住むなるといふ、是龍穴の主なるべしと察して、「我世に出でなば、一郡の主たるを失はず、翁の嗜み好む物あらば、常に此穴に進めん」といふ。翁頭を搖つて、「我は淸虛にして、沆瀣を飮食とし、嗜好なく畏惡なし。彼燕血を嗜み、苦楝を畏るゝは、是蛟蜃の類のみ」粂舍問ふ、「眞龍の好む所はいかなる」翁曰く、「只睡を好みて、長ければ千年、短ければ數百年、洞穴に偃臥して、鱗甲の間沙土聚り積み、鳥木實を銜み來て其上に遺せるが、鱗上に雨葉を生じ、太き事抱合すに至り、盤根甲を折きて、方て睡を覺し、遂に修行をはげまし其體を脫して虛無に入り、其神を澄して寂滅自然に歸す。

形と氣と、其化する隨なるを得て、胚胎なきがごとく、凝結ばざるがごとく、恍忽に杳冥たり。此時や、百骸、五體、芥子の門にも入るべく、還元反本の術を得て、造化と功を爭ふなり。しかし此說は、龍を有形の生活にして、工に勢をいふ、畫工の三停九似の法を設くるがごとし。聞ゝ人も面白く奇にして、左もありなんと思はるゝ。是を定形なき物にして說くときは、眞龍の體は雷と表裡せしものにて、雷は中天頓欝の陽氣水を引いて雲雨を釀し、其水氣に逼られて、圍りて純火を生じ、雨水の氣に觸れて、迸り射て物を撃つ。物をうちて消せざれば、凝含みて子母炮の勢ひの如く、いよ〳〵觸れていよ〳〵迸り、消滅してやむ。是陽激して、陰に戰ひ勝ちたるなり。陰陽相搏ちて芒毛を生じ、又獸をも生ずべし。龍は地中積欝の陽氣、地下の陰氣に和せず、地外の陽の時に動かされて發し登る。水氣を引いて、雲烟を起し、雷電をもいたす。半ば雲に入りて旗の如く掛り、雲端に伸縮の貌あるは、其氣暢びんと欲して振ふなり。既に暢びて消散する時は一氣に和す。一氣に和する時は、本來に歸して形なく、釋氏の寂滅の空にかなへども、老子は虛無を以て有を養ふの教ゆゑ、其

發揚して退藏の德を失ふををしみ、彼龍の如しと譬ふるは、時ありてきら〳〵現はるゝにあらず、上に升るべきもの地下に潛藏して、陰陽にも動かされず、いつまでも密藏して、發せざる所を云ふなり。儒敎とやらんは、空有の二ツに着せぬ世法なるべし。物に滯る時は、釋氏の空を以て消し、動きやすき時は、老子の虛無を以て息む。三敎併せ用ひて世道安からん。俗說に、豐城の劍、延津に入りて龍となるといふ。劍は鍛煉して作るゆゑ、自然の物にあらず。豈能く龍と變ずる事を得んや。佛說に龍女天龍を說きたるは、敎化の及ぶ所廣きをいふなり。又、龍城にいたり、龍女に會ふの說は、文人筆を弄するの虛談にして、益これ文章なり。間現在に其事あるも、皆水物の妖に魅せられたるにて、眞龍の事に與らず。易に、乾の象として、似げなき坤の馬に配せられしは、却て我眞龍を知られしやしらずや、覺束なし。今化生して形を現ずることは、儞を助くるの造化なり。我形常に有るにあらず。儞此穴の泥を身にぬりて、晦冥の時を待たば、體を損ぜず、上升の氣に乘じて穴を出づべし」と、細に告げて、早くも其形なし。數日の後、穴の中黑暗にして、雲烟沸くが如く、其氣蒸す

が如し。山岳震動、天折け地崩るゝがごとく、閃電しきりにかゞやき、岩中の大石動いて揚らんとす。兼舎、身自にまかせず飛揚す。是出づべき時至ると、傍の岩を攀ぢてのぼれば、穴の口を出づるといへども、冥々の裡、其勢とゞむべからず、大虚にも上らんとす。手に觸るゝ木の枝をいだきて、夢現のさかひを知らず。俄にして雲晴れ見れば此身大木の梢にあり。急ぎ地に下りて路に出づれば民居あり。是すなはち賊寨の後の山村なり。「我はみりん王を捕へたる望月三郎なり。軍中にて穴に落ちいり、今こゝに出でたり」と、民家に勞を息む。山民等驚き敬ひ、「みりん王が取り掠めたるを免れし」と悦びかたり、「こゝなる隠妻も、いまは跡をくらまして行きがたなし」と申す。兼舎山を出でて都に上り、無道の兄なれども、弟の身として、其罪訴ふべきにあらず。只我一分の居所を賜はらんこと、なげき申しければ、異議なく舊領にかへさる。両人の兄は、自ら恥ぢて身を隠し、蟄居しければ、其有つ所皆兼舎に屬して、家業相續す。承平の初、將門退治の命に應じて軍功あり、江州半國を守護し、甲賀郡に館を構へ、近江守と稱す。後は伊賀近江に跨りて大領を務めけるとなり。龍穴に入りし奇談は、千歳人口に遺りて、兒童に至るまで是を話柄とす。荒唐なるかな、其言や。

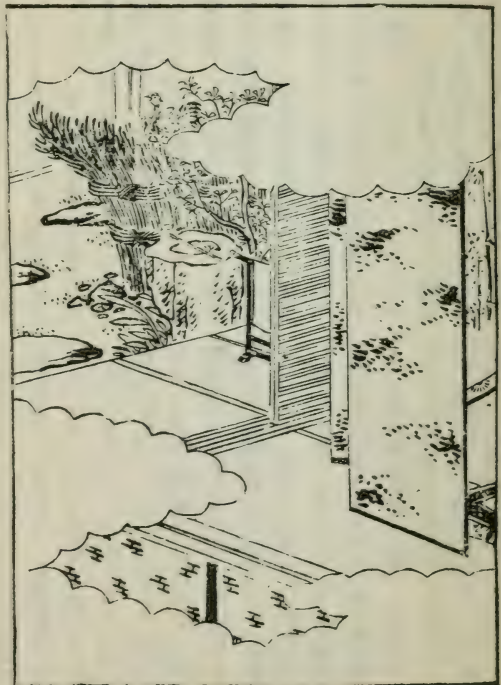
古今奇談繁野話第四巻終

古今奇談繁野話第五巻上

八　江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈むる話

往昔江口の色里といへるは、岸に沿ひながれに臨みて家づくりし、後の世の所せくにはあらで、かしこに三瓦、こゝに兩舍、蒲柳引き結び、藪をたゝみてめぐらしたる墻の門より、桃笑ひ、柳媚びて、春宵に景を翫び、長夏に涼を納れ、いさなひいざなはれ來る人はむべなり、霜凝る夜にも胸を焦し、月にそむき、星にさぐり、雨に雪に身のいたはりをしらで通ひ來るは、うかれ人の愚痴を病めるなり。水干に袴きて、章臺に馬をはやむるは、下司めきたる人の、所ひろく通へるなり。やんごとなき御方の、九重の霞を分けて、君みんとて、打ひそまりてわたらせ給ふあれば、祿さだまらぬ人の、おのが通ひ來るをいかめきことに思ひて、符ことば街にひとき、次郎三郎かしづきよばひもて來るも疎ましく、いづれ風月の爲に役せられて、その趣、忍ぶ忍ばざるの際にあるならまし。わきて此里の詮とするは、都に往きかふ河船を招きとどめて、緣ある纜を結ぶ手にしばしの情を賴む。つくしのはて、吉備のこなた、數かぎりなく都にゆきかへり、神崎、橋本に遊君の家多かれど、此里に泊る船多く、はじめはしるしらぬあやなき人の、後は思ひのしるべとなるも、これほどの事の、宿世の宛ならぬはなし。漢土のむかし、東門闉闍の女、雲の如く、茶の如く、管仲が女閭七百を開きしより後つかた、漢やまとの末の世まで是を免されて、親はらからのために身を棄つる籔澤は、即ち遠人旅客を慰するの設けとなりて、世に女の數少かりせば、人の爭ひおこらん、非禮の地を設けて非禮を安んずるの計ならんか。川竹の瀬はかはらずして、流れの身はもとの人にあらず。地に數ある遊女の家、文殊、普賢、白妙など、世に知られて、此里のかざしとなれる華名なれば、幾世重ねて其名をば絶えざらしむる習ひなり。其比は鎌倉の時代、西國には倘國司の知行有りて、國司代などいふものを置きて取りまつろへ、郡司を知らせたる國人に、箱崎の太夫正方といふものあり。それが子に、小太郎安方とて、生れ清げに、心さま優に、鄙には似ざりけり。「いまだ世を知らざる日に、王城の

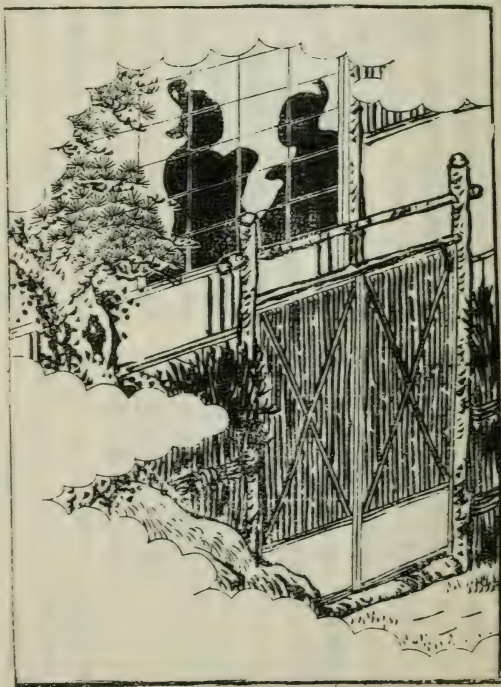
尊きをも拜み、國司の館へも參り馴れ、心ゆるく上國の風景遊覽してこよ」と、親の慈心より、萬に欠く事なく取りしたためて登せけり。京に旅宿して、折節には館に伺候し、詣づべき所詣であるきけるに、珍らかならぬ所なく、水清く、人柔かにして寄り添ひやすく、田舍より京に入りたるものの、國を忘るゝこと少なからず。旅宿の友にちなみよりたる、播磨の住人、岸の惣官成雙といふ人、常にかたり興じて、花街の品定など聞えけるに、江口の遊君、其才色優長なるを聞きて、ゆくての遊興に歸路を促し、江口に趣き、「眼に見るのみを甲斐とするは眼嫖とそしり、みもせぬ君を見きとないへば、口嫖と笑ふも口惜しけれ。名ある君と青樓の酒を酌みて、古郷の語り句にせん」と、室木の刀自が許に日をかさねける。其時に、白妙といへるは、十三歲より遊客をとゞめ、九年の煙花に物馴れて、よく人情の向ふ所を知り、貴賤の顧厚く、是がため、身を擲ち罪を得る若人あまたなれど、たゞ此君を見んとて、日を爭うて來る。里の諺にも、「妙が座には下戶も千飮し、妙を見れば粉面皆黑し」とぞいひはやしける。小太郎白妙を初めて見るに、臉は蓮蕋の鮮なるが如く、眼は秋水

の潤ふがごとく、嫦娥月殿を離れ、飛燕新粧によれるすがたあり。かゝる艶色の、墻の花の中に盛出づるも、生したつるの巧なるやと、初は名ある君かぞへて見んと思ひしも、此に凝りとゞまりて、温柔の性は妓女の心も穩に、撒漫の手は鵠兒を喜ばしむ。白妙と情意相投げうちて、はじめより別るゝ期の來らんことを恐る。元より白妙煙花を出でんとするの心あり。小太郎が志のあだ〳〵しからぬを、深く心に占め思ひて、終身相從はんことをいどみ求む。小太郎は、只父なる人の怒りを恐れて、白妙がことばに同意せず。底解けやらぬ氷室の草も、繫らばなどかしけらざらん。朝々睦月、夜々乞巧、終日妻と呼べば殿と稱して來る。恩愛を海にくらべては恩の底をしらず、情義を山に譬ふれば義倘高し。只兩人が中に風流を卓にして、其餘巨室大賈、白妙を見んとすれど

も得ず。小太郎錢財を用ひること大差大日に空乏して、刀自の笑顔漸々に變ず。使、刀自笑を獻ずることたえまなく、此國なる小太郎が父親、男兒が都にありて客人こそ我家の搖錢樹なりと奔走すれど、行跡つゝしまずと聞きて、書をよせて呼必ずや情人の篋中に聚寶盤なく、嚢中日び回せども、月の半月の末と、延び捱れ

て歸心なし。後は父の怒りはなはだしと聞く程に、愈恐れて愈かへらず。昔より、利を以て交るものは、利盡きて疎く、利足りて變ず。男女の眞情は懐の冷かなるにつけて、心の裡いよ〳〵熱する習ひ、刀自、白妙に知惠つけて、他を逐ひ遠ざけんとすれども、只耳つぶしてあれば、今は直に小太郎に對し、種々無興をいひ他が怒りて出で去らん事を催せども、性得温柔の人、いよ〳〵詞やはらかに、激するさまなければ、只ひたすら白妙をののしりて、「我輩の衣食は、客に穿ち、客に喫ひ、東窓に舊きを送り、西軒に新しきを迎ふ。彼人こゝに來りて一とせに餘り、新客はもとより、知音も路斷えて、わが家に鍾馗あれば、一匹の小鬼もより來らず。少女等は年足らず、一家の人口水もまた飽くに足らず」白妙いふ、「此門戸の作業、尼公の言をまたず、わらは知る所なり。彼人初より空手にあらず、大錢を費して方纔てかくのごとし。今忽ちに無情の言葉を出しがたし。左なきだに、我輩をかだましく人のいふなるものを」戸自云ふ、「和君心よわく、彼を追ひ出すてだてをなさゞる時は、我家の衣食何によりて得ん。今はたゞ此貧客に談じ計り他器量あらば、幾貫幾匹を納れさせ、和君彼に跟ひて出で行くべし。我外に長となすべき女兒を討めて過活とせん。他其器量なくば、わ君いかに思ふとも空ごとなり」「我老、短見に言葉な出しそ。彼人今窮しけれども、本國に家あり。幾貫を辨じ來らば、其時悔ゆとも甲斐なからん」刀自、兼て小太郎が衣服太刀かたなまで賣りつくし、質となしてすこしの物なく、本國は不通なるを從者どもに聞きつれば、彼がわきまへ得ざるをしりながら、「わ君が身の價相當の數あらば、我に二念なし」といふ。妙顏をそむけて、「彼が手に物なきをしりつゝも、わらはは説きがたし。尼公直に説きて、端的をしり玉へかし」「我是を説くに何のためらひあらん」と、後尅二人が向ひ居たる席にて、此事を説ひいだすより、小太郎赤面して答ふる所をしらず。白妙も、傍にそらむね病みてありしが、「いかに尼公、たゞ其數を説き玉へ」といふ。刀自心に算計りて云ふ、「長の齡、時過ぎたれども、倘芍藥の色あり。別人ならば、緞貳百疋を求むべし。此殿今乏しき時節なれば、百疋を求む。それも三日を限りて、左手に價を取り、右手に人をわたさん。二日過ぎなば、我家に來り玉ふなよ」小太郎默然として言を出さず。白妙取言して云ふ「かかる限りの近くては、爭でかなし來らん。十日の限を延べて、約をなし玉へ」刀自思ふに、此窮人、百日を限るとも、なん

の錢を得べき。日を延して錢を得ずんば、尙恥づる所ふかく、鐵皮に面をつゝむとも、よく我家に來らんや。日數經ば、女も新人有つて、かれにうとくなるへしと、限をゆるくして「さあらば十日をかぎり辨じ得ずんば、かたく我家に入ることをゆるさず」白妙、小太郎がかたを見やりて、「この殿其價を辨じ來るとも、恐らくは、尼公違變あらん」刀自、百匹ならばと心にゆるして、「老が身六十に近く、日夜繡佛に長齋す。いかんぞ信を背かん」小太郎心にたのみなけれど、成雙に恥をすてて請ひ借らば、辨ぜぬ事あらじ。若し銀をかり來りて、約に變あらば、成雙いよ〳〵我を笑はんと、詰りて云ふ、「恐くは、我をあざむき、錢を辨じ來るとも空ごとならん」刀自「さあらば執照を參らせん」と、老氣を張つて、十日限りの契約をうつしあたゆ。小太郎是を取つて、しぶ〳〵立ちいづれど、いかんぞ極めて辨ずべき。別るゝに臨みて白妙云ふ、「五日過ぎなば、事のやうを必ず聞かせ玉へ。我に腹黑きことはなき物を」と いふことばの耳にのこりて京に行き、岸の惣官が寓居にいたり、辭をさげて、身價のことをはかる。成雙誠あるをのこなれども、小太郎が浮華多きを見て心得ず、江口の白妙は名出でし妓女なり。いかんぞ絹百疋にゆるさんや。これ華費の財をからん僞なりと思ひて、たゞ「當時乏し」とこたへて、尙「人にも求めおほせん」とて、酒くみ、もてなしてかへしぬ。其より外に計るべき人もなければ、江口にかへり、あらぬ人の家にとゞまりて五六日にいたる。白妙此よしをさぐり聞きて、「日數の内くるしからず。來り給へ」と、恥ぢて來らじとするを 人してせちに迎へ、「辨ずべき物はいかゞ」と問ふ。小太郎眼瞼に涙をたゝへて、「世の人薄情、いまだ辨じ得ず」妙云ふ、「さもあるべし。かなしきことかな。今夕共に其事を計るべし」と、刀自には「事 半 調ひたり」と披露して二人酒うちのみて小太郎を慰め、「扨實に少しの辨ずべきなきや。或は是をよき別れの時至ると思して、人にもはか〴〵しく求め玉はざるか」小太郎涙を落し、「山崎の築紫の津に、家ふるき好みあれども、有るにかひなき棹子なり。それをよそにしては、成雙一人をこそたのみつるに、かくなんいひし」とかたる。その夜はいとわびしげにて臥しぬ。曉天にいたりて、白妙小太郎をゆりさまし、我頭に鋪くところの枕を取つて他にあたへて、「此絮の内に幾兩の砂金をつゝみかくす。是わらはが年月集むる所、殿持ち去きて絹に當てなば、半の用にあたらん。其餘は隨分岸殿に求め、數に充てゝ、限りの日をあ

やまらず來り給へ」小太郎悅びて、枕をつゝみ、都に行き、成雙に對してこのやうをかたり、枕を解きたるに、絮のうちにかくせる砂金、算へ計るに五六十疋の當あり。成雙いふ、「花柳に遊ぶもの、趣を得て早く身を拔くといふこと、嫖經の聖言なり。然れども好色の腸は別にして、俊傑も改むることあたはず。幸に此妓賓情あり。足下をあざむくものならず。我一臂の力を助けん」と、とかくして百疋の價を辨じあたへ　砂金は、雜事の費用あらんと、其まゝに返し、「吾足下の情弱なるは厭はしく思へども、賓に是白妙が情の憐むべきが爲なり」小太郎成雙に謝して江口にかへり、白妙に逢うて、「物調ひぬ」といふ。妙聞きて、「先日一錢も調はざるに、今日如何ぞ全き數とゝのひたる」小太郎成雙が言葉のしだいをかたる。白妙合掌喜びて云ふ、「我二人の願を遂げしむるは岸君の力なり」と、深く其志を感ず。其日なほ日數の九日なれば、心ゆるく妙が房に宿す。妙云ふ、「此身價交易するやいな、即時に殿に就きてこゝを去るべし。出舟のそなへをなし、彼砂金を南鐐に換へて行費とし給へ」など、此ほどの心もだえゆりて寢ねける程に、明朝いたう失曉れてけり。日高きに

起きて、朝もよひする所へ、刀自來りて、「今日、限の十日なり。約せし事いかん」小太郎、「辨じ得たり」と、「緡百疋の當に花降銀二十枚、卽ちこゝにあり」と取出す。刀自小太郎が銀あるを見て、今さら悔める氣色なり。時に白妙云ふ、「我此家に來て十年、生活によつて致せし金錢幾千にのぼる。今日我身の從良するは悅び玉ふべきなるに、親口數をきはめて、今其數のごとし。尼公もし信を失はゞ、殿此銀持ちまかで玉へ。我も目前に水に入りて、人と財と二つながら失ひ玉はん」と、日比に似ぬ怨言を聞きて、刀自半晌詞なかりしが、「よし〳〵事すでにこゝにいたる。わぎみ去くならばゆけ。平日の衣服調度、此房にある物、一つも念とすることなかれ」と、口に答ふべきなく、憤みいかり、小太郎白妙を房のそとへ推出し、鎖を下す音高く、詞をもかはさず、厨後に行きぬ。此時九月のはじめ、白妙起きてよりいまだ梳洗せず、垢衣のまゝにて、あきれながら、尼公の背後を拜みて、「年月の撫養のうへ、此一身を賜らば、外に何の望あらんや。我平生心しりの姉妹あり。かしこにて事をはからん」と、小太郎と共に其家を出で、川下の小雪が家に行きて、「名殘惜まん爲に來りたり」

といふ。白妙が寝衣のまゝ、髪も梳せぬを見て、小雪大に驚き、「いかにや、いかに」といふ。白妙、我刀自の怒つよき動作をかたり、やをら梳洗をはれば、小雪小袖を取り出し、白妙にあたへ、二人をかたり慰め、其夜は其所に宿せしむ。妙こそ田舎人に具すると聞きて、里にある程の諸妓悉く來て、吉々利々榮耀など歌ひ舞ひ、各藝を盡し、醉をすゝめ、「妙ごぜ、風流の領袖、從良に其人を得玉へり」と壽きこゆ。小雪云ふ、「二人此を去つて、進退の心得定るやいなや」小太郎云ふ、「老父近日いかりつよく、今又妓を娶り歸ると聞かば、なんらのやうだいをかなさん。是ゆゑに倘萬全の計を得ず」小雪云ふ、「父子は天性、豈能く終に絕つべきや。今倉卒に其顏を犯しがたし。古鄕近き所に浮居して、殿一人先かへりて、したしき友に求め、父君のゆるしを得て後、妙ごぜを迎へ玉はゞ事安からん」白妙聞きて、「我口よりはいひ出でがたきに、よくぞや」とうれしげなり。「扨しもこゝに久しくあらば、室の木に聞えて、何とかはらあしくのゝしらん」とかくする程に夜も明けぬれば、從者楫取「早去りなん」と騷ぐに、小太郎もろとも船に移る。明月、雲井、其外の妓女も、皆船ばたに手をかけ、水に臨んで別れをなす。小雪手づから一つの提厨を贈り來り、「二人國に歸り給へども、安身の期定めがたし。長途のつれ〴〵を慰むる、畫軸競香、骰、弄種々、是此里衆姉妹の餞の物、此中に收めおく所なり」白妙是を受けて、謝辭ねんごろに申し聞え、「此所の君達は、われも人も、皆さそふ水にまかせるならひ、わが身は、わきてかかる田舍にゆけば、又あふべきと思ふも期しがたく、これをかぎりの別れともならん。いづれの君も、身のいたはりなく、千とせのせんざい、かはらで、たのもしげある世をしめ玉へ」と、此涙こそいつはりならず、わかれかねたる出船を、もそろ〱とこぎ出す。去くも留るも浮れめの、定めなき身ぞかこたれけらし。

かくて二人は大物にいたり、筑紫の便船を求め、所々に風を候ちて、船中の九日、菊もなければ、妙が戲れに一枝を畫きて、其上に贊の詞さへ男と見ゆ。

解印歸來欲臥家
東籬無菊首堪嗟
丁寧莫索塵中種
恐是路傍娼客花

安方見るに、墨がきの霜葉、奇にして白菊とやいはん。「儞自ら謙して、其語靈菊に及ばず。我是を添へん」とて、

船の上にともなふけふのかひに見る
筆の露おく妙の白菊

妙吟して、「筆の露いかに珍らしくや。すがたさへ御製めきたり」と笑ふ。日數經て、周防の室積にいたり、船を下り、此

地こそ古里の便宜なれと、風景ある所に寓居を點じて、箱崎の親しき方に、ひそかにつけやりて、親の氣色をもうかゞひ聞かせ、晴れたる日には程近きに遊行し、雨の日はこもりゐて酒のみかたるほどに、すこしは我家のこゝちしけり。こゝに人あり。江口の西なる柴の島に、柴江酒部輔原縄とて、由緒ある浪人、何の生業にか、此室積に數日客寓しけるが、人家の内より、白妙が男につれ徘回するを見て、元より舊縹の因ありて、里にある時は、路の柳、いつも折るべく思ひしに、今人に具せられ、此田舍に下りしを見て、俄になつかしく、本意なく、跡を見とめさするに、其所まぎるべくもあらず。柴江いかにもして白妙にたより、身の上をも聞かまほしく、朝夕に心をつけて、其所を立ちもとふるに、白妙が寓より出で來る人こそあれ。柴江これを呼びとゞめて、「申すべきことあり」と、我知りたる人家にいざなひ、「あれなる夫婦の人は、足下の爲にいかなる人ぞ」「彼者は小人が從兄に侍る」「さあらば用心のため申すなり。彼若き人あやまてる人とは見えねども、此際海賊のかくれすむ多きとて、我も公の命を受け、ひそかに此所にあつて、海賊をさぐり捕へんが爲なり。若き人其心して住み玉はずば、あやしめられ玉はん笑止さに申すなり」と、つき〴〵しくいへば、此男堅固の田舍人にて、頭を叩きて悦び、「懇志を賜はり、如何が謝し奉らん。彼若きものは、豐前にて郡領が一子候ふが、召具せる賣女だに決絶なさば、家督をも連續させなんを、國なる親は一生對面せなくと勃恚せるに、小人も當津に參着し、問答數日に及ぶ。膽の細き生得ゆゑ、承納せるかと見えても決斷なし。何とかかまへて女を棄却けさせ、獨身にて帶携いたし、父の不興を調へ得させたき」と、涕を落し、底を傾けて語る。柴江假意に感じほめて、「親族を思ふこと深切なる主かな。女の寄所は、おのれ身に負ひて計らはゞ我門葉の内にも妻を授らせるものあれば、いかにもよきようすがさだめらん。我にゆだねてさはりなくば、露こゝろおき玉ふな。此事は内意なれば、二人に深くつゝみ玉へ」と、柴江が旅店をもかたりて別れぬ。此人は和多の然重とて、安方が母かたの一族なり。柴江が頼もしくかたり、女の授け所まではかり聞えけるに、一ッの力を得て、猶も柴江に問ひはかり、一夜小太郎を我旅亭にいざなひ來り、「いかにもして此事を轉じ玉はずんば、箱崎の家も血脉たえ、不孝御身一人に歸すべし。尊大人平生嚴重なる人にて、貴方の都にて遊興に耽ると聞くさへも、愛を絶つべき所存なれば、今女

を具して所々漂流ふと問きなば、打斬つても捨つべく思さん。一層親友多しといへども、當時家勢盛なれば、一人として尊大人の意を迎へざるはなし。誰か賢兄の爲に袒をせらん。たとへ詞を出す人ありとも、尊父のいかりを見ては、却て其人も賢兄をそしりて退く事なり。さあれば家業を他門の子にゆづりて、賢兄一生故郷に歸去來ことかたく、いつはてしなき旅宿のたゝずまひ、長らへの計にか、貯を空くなし、糧つくるにいたつて、進退いかにせらんな」小太郎、此時手中の物大半費し、行くすゑいかゞと思ふ折からなれば、覺えず點頭きて悔めるさまなり。爲かす又いふ、「そも／＼婦人は水性、丸くも角にもなり、況や娼家の女ばら、眞情も一時なり、假定も一時なり。彼高名の妓女、相識の人天下に幾ばく、或は西國にねぐろ男ありて、賢兄は假にちなみ、契帯きたり、餘人に行くの地歩とせるも知るべくや。今またかゝる尤き婦人を人に托へ、獨居にあらせ、賢兄ばかり家にかへり、うしろめたく時を待つとも、輕薄の子弟世上に多し。後俏を賣弄して、心の閉をゆるがせ、言を諾り、求めに便りし、操を撓めて折らんとし、墻をこえ、隙を揆りて、必ず事を仕出かさん。色にたはれて家をすて、親を離る浮浪不義の人は、天地の間に立ちがたきぞ。熟々思ひたどりて善心に回らせられ」と、詞を盡し說く程に、元よりすなほなる小太郎、理の當然に伏し、自失れてひざをよせ、「是我不義なるのみか、拙きに出でたり。今是を免れん計はいかに」ととふ。「外に計なし。女を他に適かしめ、獨身にして歸られなば、おのれ尊父の怒をも申しなだめ、無くせし太刀鞍もあがひもどし、女が身もよき計ひあらん」小太郎思ひ切つたる顏色にて、「女と是まで昵みしこと、世の道の間ならねば、頓に離るゝ事かたかるべし。少しく其端を開きて、彼が有りさまを見るべし」と、海山の思ひを胸にたゝへて、足なみも覺えず寓にかへりぬ。

古今奇談紫野話巻五上終

古今奇談繁野話第五巻下

江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈むる話　下

婕妤が恨は更なり、人を待つを常とする女の身こそつらしな。増して心細き旅の宿り、白妙は小太郎が歸り遲きに心下せず、酒を盪めて待つ處へ、やゝら歸り來りて、其顏色樂しまず、酒をも飮まず枕につく。白妙寄り添うて「何故にや」と問へども、長き息をつぎて語らず、只睡入にもだえ臥す。白妙心ゆりせず、其動靜に心をつけて寢ねず。中夜にいたりて、「今夜和田殿と何をか爭ひ玉ふ」と問へば、小太郎被を擁きてきと起き、言はんとして言はざること幾度　泪　腮につたひながれ、聲を內に飮みて胸をさする。白妙いよ〳〵驚き、小太郎をわが膝に抱きて、言を軟かにして云ふ、「假初に馴れて、二年の程は久しきにあらねども、千辛萬苦をなめてこゝにいたり、火にも水にもなりてしたがひ奉らんと、心をつくす殿の身の上に悲傷ありて、いかでしらずして過さんや」小太郎聲をふるはし、「逢ひ見しより我を心に罩めて、今日に至るまでの情、わするべきにあらず。我反覆これを思ふに、親なるもの嚴威にして物を容れず。儞を具してあらば、不興ゆるす時なく、我と儞と流落して、夫婦の偶も保ちがたく、父子の義も絶えはてぬべし。今夜爲かず我を責むること、理の答ふべきなく、寸心剖くがごとし」白妙聞きて、一桶の水を頭よりそゝぐがごとく、「さあらば殿の心いかん」「我と儞との間に髮を入るべきすきまなければ、局にあたつて手の打つべきをしらず。爲重我爲に一計をなす。たゞ儞從ふまじきことを恐る」白妙云ふ、「心得ぬことかな。好きはかり事ならば、何の從はざることあらん」小太郎云ふ、「爲かず兼てこの計をなさん爲、儞の身を安んずべき緣を求むるに、津國の人、儞を引具して身のよせ所あらしめ、其謝禮として、都のはれに持參したる家傳の太刀刀、烈祖勇武の寶鞍、錢にあてたる品々還り來るべしと云ふ。我それを持ちて國にかへり、老父其遺失なきを見ば、不興もゆるすべくやと計ひ設けたり。さあれば、儞も終身より所あり、我も父母に歸すること、兩便の計ひなれども、儞を棄つること忍びがたし」と、かたりもをはらで淚さめ〴〵下る。白妙、傷き

し小太郎を合撲と押しのけて、冷み笑ふこと一聲、「思はざりき、殿かゝる英雄の魂あらんとは。傳へ聞く、紅き拂もちたる妓女よく托むべき主を知り、韓鄿王を卒伍の中にえらみむつびし梁夫人は、たれも〳〵眼慧しといふなれど、我輩のえらふ所は、多く其堺にあらず。たゞ、温柔混沌人を得て終身の偶とし懇懃を勞せず、嚴重なるを憚らず婦女の古訓ならねども年來川竹の浪枕を安め、下半世の放心せんと希ふのみ。今や、殿の父子の義全く、妾他姓に歸して身を托する所あらは是こそ始は情に發り、終は禮に止る、實に兩便の策なり。染色は濃きより淡きにゆきがたく、人は深きより淺きにゆきやすし。いざさらば、いさぎよく此はからひを應承ひて、此便を取りはづし玉ふな。但し其太刀鞍、するする殿の手にをさまりて後、此身別人の許に行くべし。かならず其人に欺かるゝことなかれ。わらは今日より君と房をわかち、行く時に臨んて別を取り參らせん」と、すこしもうれはしげなく、其日より端の家に閉ぢこもり、人に面せず。白日にも燈を點じて机により、法華を拜寫して悶を遣る。小太郎は、僞かずに女のうけがひたるよし告げて、「快く事をはかりたまへ」といふ。僞かずやがて柴江が旅宿に行きて なほも頼みきこえ、「官人の虛言はあらじと存ずれど、彼太刀馬鞍衣服の類は、急に落手すべきや」といふ。柴江心中に笑みて、「心やすかれ。人をだに遣はゞ、早速尋ね得てん」と、卽時に奴僕に好くあつらへて、津の國へやりぬ。二十日ばかりの後、「其物皆さぐり得たり」と返り聞ゆ。僞かず來りて、小太郎に「重寶は到來せり」といふ。小太郎窓の外より「其物調ひたり」とおとづるゝ。白妙此時すでに寫して譬喩品にいたり、不覺不知不驚不怖の句にあたりて筆を閣き、迷へば法華を失ひ、悟れば法華を得る。五字の題名、八萬の字に準ふ、苦になんぞ全部を期せんと、机上に留め置き、外面のありさまをうかゞひ見るに、僞かずは、萬胸いたけに、打ちしめりてふれまへども、けつく小太郎は面色悅ばしく、白妙が出づるを見て、外の言はなくて、「かゝれば、我も此所に一日もひとりあられんや。同じ日に歸船を促さん」と、躍り走りて船の設す。柴江も、跡にて事の變ぜぬ僞に、女を得ば卽日船を出すべき心にて、「明日はおのれも異所に去るなれば、女を船へ送られよ」といひ遣る。白妙、其夜をこめて、燈をてらし、梳洗して、今日こそ此一生を托するはじめ、世の常にあらずと、脂粉香澤こゝろを用ひて、化粧の芬芳人を拂ひ、光彩あたりを

てらし、天仙のごとく、「小太郎が乘船よせたり」と聞いて、小太郎に先だちて船にいたる。柴江が船も其所によせて、數歩を隔てゝつなぎたり。爲かずは小太郎おくれて濱に來り、爲かずは柴江が船にいたり、小太郎は我船に來りて、白妙に顔を向けかねて、背きゐたる心のうちはいかならん。思ひきや、江口を出づる時、かゝる時の來らんとは。興移り、情衰へ、義折け、恩絶ゆるにいたりては、行末初に引きかへたること、世の中に多かんめれ。爲かず來りて、「婦人の匳具を送り玉へ。それを信として謝物をいたさん」といふ。白妙身邊なる描金提蹄を指して、「わらはが調度此餘なし」と、僕に命じて隣の船に送らしむ。柴江すなはち、彼太刀鞍韮に小太郎が晴著の小袖まで、櫃の蓋によそほひ盛りておくり來る。小太郎見るに、我重寶に紛れなし。やがて女が見のうへの去書と取替へてけり。白妙も見覺ある調度なれども、一違はずやある」と小太郎を見やれば、彼は只いたゞき〳〵て喜しげに見ゆ。白妙船端に出でて柴江が船をまねき、「やがて其船へ參るべきが、今遣したる箱の中に小太郎殿の護身の香嚢あり、これを戻し度候ふ間、暫くこなたへ」といふ。柴江すきまよりみるに、白妙が艶麗昔に減ぜず、尚も愛敬づきたるに心あがりして、何かためらはん、從者に命じて箱をおくりやる。白妙鑰を取り出し、開けば内に抽替あり。先第一層を抽出し、内に冊りたる草紙二品を小太郎に授けて、「是は去りにし歌よみの白妙が集めたる、古今新集并に八重垣の私抄、われに記念にとゞめしを、今又殿に奉るなり」「其外なるは何ぞ」と問ふ。白妙かぞへて云ふ、「太秦の牛頭香、亞剌敢の雀腦香、奇南沈水香數種、九華丹、絳雪丹、紫靈反魂の靈丹、共に是海上の仙藥、世の珍とする所、今留めて益なし」と海中にざぶと投げ入れたり。爲かずも小太郎もあやしみ驚き、柴江も見やりて目をはなたず。白妙第二層を引き出し、紅と紫の包袱を開けば、金條環、八寶器、珊瑚の枝を出せる、瑯玕の緒紋に琢きたる、球琳、琨瑤、火珠、琥珀、回々の自鳴鐘、方寸の中に時をひゞかせ、地中海の金綫龜、小合の中に游ぎて好く舞ふ。燕窩の安達貝、扶桑の蠔附子、餠荅猴玉の類その數多し。白妙、收めて袱紗におしつゝむかと見れば、是も海中に投げ入れたり。艶なる女の、船端に出でてする事なれば、此時岸の高きに人多く集り見て、惜むべし惜むべしと云ふも、何のゆゑかくするともしらず。白妙下の層を引き出せば、内にまた一重の匣あり。其中は上等の夜明珠、火齊珠、劒玉、鎧玉、通天犀、人魚

膽、鳳琢、龍珠、其價定めがたき種々なり。衆人見て、皆其珍奇を稱賛す。是をも投げんかと、僞かず押しへだて、小太郎も熟と見て、終身の養ひ、その設あることを知り、大に悔み、僞かずも忙迷ふ。白妙柴江が船に向ひて、聲高く罵つて云ふ、「賤妾小太郎殿と里を出づるまで、容易の事にあらず。人の愛を貪り、恩を割くなる仇人、われ死して神あらば、必ず其人を放つまじ。その面を見ずといへども、今日其ありさまを思ふに、蘆もまばらに葉がへすなる蒸の渡の邊に、柴江酒部の輔といふ人あり。主づく所領とてもなく、何の所徳ありてか、家榮え富みて、人の田宅重資などを質として、利を納ること年々に夥し。時々我住みし里へも來り遊ぶことあり。人はしらずとや思ふ。此人今公より求めらるゝ海賊の張本なる事紛れなし。國々に所定めず、常に經歴すと聞くなるが、定めて此比此所にや候らん。此太刀鞍の早く出來るを見れば、若し其人ならんか。左ある所に行きて、下半世のやすき事あらんや。今小太郎殿志定まらず、情の方にくじけやすく、行くすゑとても頼もしげなきこそ、うらみてもなほうらめしけれ。里の姉妹の贈物と假に申しぬれども、是こそ年來願

の諸君、都部の客商の恵み贈れる百寶にて、情人と終身の生活とぼしからぬ設なれども、今とゞめて用ゆる所なし。我箱の中に玉あれども、情人の眼中に珠なし。是皆妾が薄命の展びざる所、妾すでに烟花を出でては、復び舊を送り新を迎るの念なし。逢ふことのたえば命もたえなんと思ひし初心にかはらで、妾は殿にそむかず、殿こそ妾にそむけり」衆人の見る所、小太郎羞ぢ入つて涙を流し、白妙にむかひ過を謝せんとす。白妙推し開きて、「此時にいたりて、一旦彼船へ參らで免るべきやは」と、寶匣を抱きて船ばたに出で、「さらば其船へ參らん」と、深きかたに向つて跳り入りたり。船中急に救はんとする時、白波滾々て影もなし。正に是こそ

盛粧躍レ海目無レ涙
去處俠魂伍二緑珠一

此やいふべき。傍人皆牙をかみて小太郎を笑ひのゝしる。柴江も海賊を言ひあらはされ心驚き、直に船を出し、其所を去り、南海に行かんとするに風定らず。大洲の沖に船がかりする所に、兼て海賊柴江を捜る鎌倉の密使、國人を役して、船と陸とに取りかこみ、今の女が指しをしへたる、艫頭に紅衣かゝりたる船こそ、

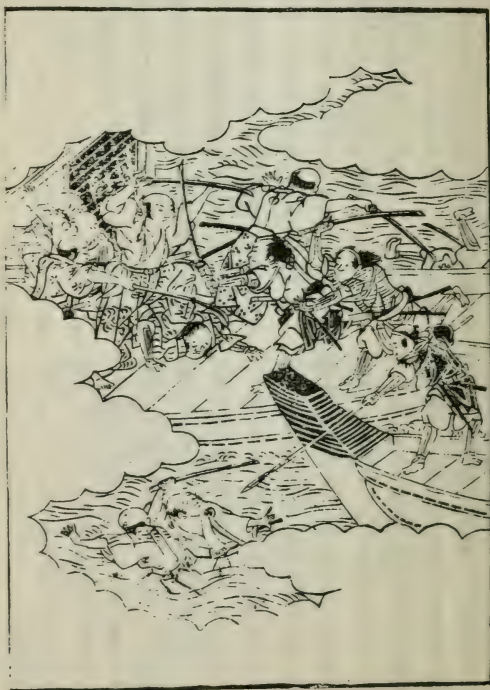
召捕つて正せやと、柴江をはじめ、一人も殘らず搦取つて去りぬ。彼小太郎は船中にあつて大に恥ぢ入り、心地くるはしく見えしが、きつと悟りて思ふに、女が深情にそむきたるは殘念なれども、彼は浮花の身のうへ、我も若年の浮氣放蕩、彼は彼が俠に死し、我はわが侵きにかへる。しりて惑ふは我ばかりかは。今さら遁世などせば、いよ〳〵人に笑はれん。父の不興を侘びて、家にかへるべしと、太刀刀、萬の調度、國を出でし時のさまにかはらで古郷にかへれば、爲かずも小太郎がために詞をつらね、父正方も、何とやらん、此冬は年の衰を覺えて、老の坂には麒驎も猪み、戀の山には孔子倒るべく、男が若きしわざ、一旦のいかり解くるのみか、上國の人になれて俗情に疎からぬを悅び、やがて家務をゆづり、司を知らしむ。扨岸の惣宮成雙は、小太郎が其後信なきをいかゞと思ふ內、我も國に歸るの期きたりて、大物の岸に船に移りたるに、さし添の少刀を水に落したり。小物なれども家の傳來、取りあげて得させよと、漁人をやとひ搦かせけるに、さし添の外に一ッの箱を取りあげ、是俱に此殿の落せし物なりと思ひてさゝげたり。成雙いかなるぞと開き見れば、皆夜光珠の類にして、一角、魚膽、鳳瑑、龍珠、名をしるす所皆無價珍寶なり。彼漁人褒美の酒に醉ひて、成つらが前に額づき、その樣女の動作し、「我は江口の白妙や」とて、小太郎が始終を遂げざると、柴江が惡心をかたり、「むかし我小太郎殿の心を見ん爲に、半金を求めしめたるに、君わらはが眞情をさとりて、速に其數をそなへて、事成就せしめたり。此恩を謝せん爲、いま漁人に托して百寶を致す。聊美意に酬ゆ」とかたりて、跡は詞つづかず、女の樣體なく、他事をなん醉言しける。成雙白妙が靈なることを知つて寶貨をうけ收め、水陸を設け、供養して、幽魂を慰しける。痴ならざれば情にあらず、死せざれば俠にあらずとは、情義を鼓吹するのことば、兩人が身によく當れり。世の風月に遊ぶもの此一篇を看破きて、情のある所與のとゞまる所を知らば人の笑ひを惹かぬ戒ともなりなんかし。

九　宇佐美宇津宮遊船を飾つて敵を討つ話

南朝中務親王の御子兵部卿尹良親王は、遠州にて御誕生あり、後に吉野へ參り玉ひて、元中三年大將軍を賜はり、應永四年、新田、原田、桃井其外の宮方相議して、上野國に迎へ奉り、岡本、山川、十一家の人々供奉し、駿河國富士が谷、田貫次郎

が館に入らせられ、よつて宇津の親王と呼び奉る。此田貫が女子は新田義助の妻室なりしかば、その好みによろうへ、富士十二郷の諸士、脇屋殿の舊好を存じて、味方に參り、守護し奉る。同五年甲州武田右馬助館に入らせ玉ひ、それより上州寺尾の城に移り玉ふ。其間合戰度々におよぶ。同三十年、寺尾には御子良王を殘し置き、御身は信濃國宇野六郎が城にうつり、其翌年參河國足助に移らせ玉ふ。道中並合の大河原にて、飯田太郎、駒場次郎、三百餘騎にて待請け、不意に出でて支へ奉る。宮方命をすてゝ戰ひ、飯田駒場を打取りけれども、味方に、原田、羽川、熊谷を始め、二十五人討死して、士卒も散々になり行きければ、宮のがれがたしと思召して、在家へ入らせ玉ひ、火を放ちて御生害あり。其後は良王も、寺尾に御座堅まらで、桃井が落合の城に移り玉ふ。其折節、尾州津島、大橋何某は、尹良王の姻屬なれば、此方へ入らせ玉へと申しこさる。各々相議して、道の便宜をえらみ、甲斐、信濃を歴玉ふ所に、去んぬる比討たれし飯田が一族、兄を討たれたる駒場三郎、供養の軍せんと、多勢をそろへて襲ひ奉る。桃井貞綱ふみとどまり、討死しける。良王其ひまに落ちのび玉ひ、笛吹峠を過ぎさせ玉ふ。此所にて敗卒等追ひつき、又追々御加勢として來る人數ありて、二百斗りになりぬ。かゝる所へ、津島大橋氏より御迎として、常川信矩二百の人數にて來り合せければ、味方も生き出でたる心地す。是を聞きて、駒場飯田も上杉今川に告げて加勢を乞ひ、其通信をまち、軍を圍めてためらひける。上杉今にも寄すべきとの風聞に、宮方は早く間道より津島に立ち越えんといふ人のみ多かりしに、宇津宮藤綱衆人にむかひていふやう、「扨もかく打つどきて、身かたの爲によき事は出來で、先公の御難以來、楯と頼みし原田桃井、忠死あり、新田義則入道行衛しれ玉はず、味方の大事此時に迫りたり。しかるに、是迄の合戰のやうを見るに、道の間は、只のがれんのがれんとのみ心得て、敵を打つべき道理をなさず。殘念のことに存ずるなり。今日此所を逃げまどうて津島にゆかば、官軍を見あなどり、道のあひだにも敵おこり、石の卵を壓す思ひをなし、たやすく攻めよせて、合力し玉ふ大橋殿まで損付くるのみか、其末は移し奉るべき所も覺えず。さらば其時戰はずしてやむべきか。斯行先も〳〵受太刀のみになりて、此方より打手なくては、つひに受けはづして、口惜しき負をするものなり。今度は君を御迎ひの人に供奉させ、先へうつし參らせ、此面々、邊近き所緣を募りて

勢をかり、飯田駒場が居所へ攻よせるこそ遙なれ、慕ひ來らば、便りよき所に待ちうけて彼に當り、十分の勝を得ずとも、互格の戰ひならば、大に敵の氣を折くべし。並合の軍は、味方に戰ふ志なく、敵は案内の地に不意を打つて我軍を苦しめたり。あらかじめ其心して戰はゞ、此藤綱においては、十に五つは勝つべし。十に十は互格の軍せんと思ふなり。諸君も賢慮有れかし」といふ。何れも軍機に馴れたる歷々なれば、皆尤もと同じ、「去るにても、今川の勢、駒場を助くるといふなるを、いかゞして防がん」と云ふ。宇佐美左衛門定輸進んで云ふ、「是は味方を二手に分けて、一手は今川をおさへ、こらへるあひだに、一手は駒場を追ひかへさん。此小勢二つに分ちがたければ、皆々舊識知音のかたに乞ひて人數をかり玉はば、百二百無きことはあらじ」と判じければ、諸士面々親疎をかんがへ、近き所に人はしらかし、「今こそ君の御大事なれ。年來の恩遇に合力して玉はれ」と、十七家の人々より觸れたりければ、由緒厚きかたよりは、即時に加勢來りぬ。其外家人持ちたるものも、物騒の時節、家僕乏しく、はかぐ\しからねども、「かれは弓をこそ能く引け。これは場數見たり」と

て、こすが中にも、鎧なきは鎖かたびらに布袴のせきひもむすび、馬に乘りたるは少く、人並に軍すべきもの數の半なり。其外新田殿昔日のちなみを思ひ、聞き傳へに、招かずしてはせ來るもの、かれこれ二百人に充てり。殘軍を合せて五百人にはやなりぬ。「軍配は宇佐美、宇津宮兩人執り玉へ」と衆議定り、扨今川は大勢なれども、是を押ゆるはゆるやかなり。駒場は小勢なれども、大事の軍なり。兩軍師は、只其のむづかしきかたを我うけ玉はらんとはげまるゝによつて、兩將鬮をとりたるに、宇佐美北のかたに向ふべきに極りて三百を授かる。桃井利貞兩將に談じていふ、「此對陣、敵の氣を奪ふばかりなれば、兎角に人を損せぬ工夫ありたし」といふ。兩將も「其旨に候」と、宇佐美定輸、卽日出馬に臨み、宇津宮にむかひて、「戲に似て事古りたれども、勝利のためし、今度の軍の必竟とする所、互に書きて取りかへ見んはいかゞ」藤綱「尤も」と、疊紙に書き付くれば、定輸も疊紙取り出し、一字をうつして取りかはし、一時に聞き見れば、藤綱は勢の字を書きたり、定輸は天の字あり。藤綱云ふ、「是軍機の祕なれば、六耳に傳ふべからず。下に一字を添へて問ひ奉るべし」宇佐美

「實に〳〵」といひて、藤綱が勢字の下に張の字を書き添へてもどしければ、藤綱は定頼が天の字の下へ便の字を添へてかへしぬ。兩將顏を見合せ、いかにもと點頭き　馬上の禮儀して出で立ちけり。かくて今川兵五助は、駒場が後詰せんと、すでに鹽尻を越ゆる所に、物見かへりて、「東の山ぎはに、南軍と見えて、其勢は林にそうて、多少はかりがたし」といふ。今川聞いて、「それこそは宮がたの宇佐美なり。百騎にも足るまじきを、林によりて、限り見せじとするこそ可笑けれ。かれらに押へられて此にためらふべき弓矢にあらず。一時に打ちつぶして通れや」と、五百餘騎を推し出して敵近くにいたり、吶喊んで戰をいどみけるに、宇佐美は戰はんともせず、一騎ものこらず後の山に取りのぼり、元より案内見つくしたる陣所なれば、備を鳥雲にたて、こゝかしこ便りよき所に射手を出し、素引してあだ矢を放さず、大將山の小高き所にありて敵味方を見くだし　小旗をうごかし指揮す。道は大木を倒して塞ぎとゞめ、山に向はゞ大石を轉ばさん結構なれば、今川方陣脚をしりぞけて、弓の手を敵間ちかくはたらかせ、射させけれども、巖石に楯をかきつゞけて事ともせず、近よる者を見ては、楯のかげより矢比に射ておとすにぞ、衆軍ためらひてよりつかず。宇佐美は、後より吹く深山おろし、味方のしのぎかねるを見て、「暮れなば、風に背きて陣がへすべし。石壁の下に風をよきてこらへ玉へ」と云ひなぐさめ、暮にいたる程、いよ〳〵風はけしきを見て、もとより味方風かみに陣せし事なれば、足輕を下知して、敵ちかく走りまはり、根笹茅原に火をさしたり。たちまち火さかんにひろごり、敵のかたに燒けかゝる時、宇佐美下知して、楯をたゝき、岩ほをうちて、鯨波をどつと上げたりければ、今川方、火に氣をとられ色めけども、大將物馴れて少しも慌がず、「敵は燒打にせんと議すらん。逃げんとせば、此陣忽ち敗るべし。出でて敵をむかへ合戰せよ」と、衆をはげまし、先にすゝんで茅をなぎすて、火をふみこえて敵にむかひたるに、鯨の聲聞えしばかりにて、敵壹人も見えず、遙むかうに、敵の引くなる把火のひかりあり。「扨こそ敵はこれを鹽にして引くぞ。追打にせよ」と、大木を引きのけ踏みこえ、はやる人數を今川とゞめて、「かゝる險地にて敵のかゝらぬは、迂闊に此方よりかゝるべからず。追はゞ用心して進むべし」と、一町ばかり行く所に、吹き來る風諸勢の眼に入りて、痛さすが如く　眼を開きがたし。面々手を顏にあて、痛を喚びて進みかぬる所に、宇

佐美が勢雨方より出でて、究竟の歩武者切先をそろへて切つてかゝり、暗號を定めて働けば、今川勢心ならずひらきなびき、「敵は順風揚毒の計を用ひしぞ。一先引けや」と、大將先に立つて引く程に、士卒踏みとゞまるものなく、散々に仕つけられ、頭だつものも多くうたれぬ。宇佐美、兼て小高き所こゝかしこに積置きたる柴を燒きあげたれば、白晝のごとく險道をてらし、士卒を指揮して、斬つて落したる敵どもを、はしりまはりて驗を取らせける。敵六十餘人を打取つて、「うれしや一石にあまる胡椒番椒、よき價を求めて賣りたり」と、どつと大笑して凱陣しける。こゝに宇津宮藤綱は良王を大門山の南の間道より津嶋にすゝめ來り、今は心安しと、二百人を二手に分ち、一枝は桃井右馬亮、七十騎をしたがへ、宇佐美が陣を助くるよしにて西北に行き、明神の森に伏し居る。藤綱百三十騎をしたがへて、手配言合せ、よく〳〵ならし敵間を見て間道を押行きける。駒場が勢貳百人斗り甲州道に來り、此所に士卒をやすめて、敵の樣をさぐり聞くに、「宮方きのふは多かりしを、今川おさへの爲にわかちて、老人いたで負ひたるは此手にのこり、勢をやしなひ、かしこの勝負を見て、いかにも身の進退を定めんとす。其人數いまは百斗りに過ぎじ」とぞ告げたりけり。「あなむざんや。今川の大勢に、二百斗りの人行きたりとて、一かけも合さるべきか。のころやつばら、一々生けどりにすべし」と、すでに其所を發せんとする時、よこ道より、どつとおめいて百餘の兵押しかゝる。駒場彼より寄せんとは思ひもよらず、殊に急に取りかけられ、此所は足場よからず、二町斗り退き、山の尾を後にあてゝ備を定めんとする時、東の森より桃井が伏おこり、民家の人の聲を雇ひて、おびたゞしく喊をあげたり。敵かばかり大勢なるべしとは思ひがけず、駒場が人數見くづれして引いて行く。藤綱、桃井、備を合せて押行く程に日は暮れたり。駒場は大辻の小堂を楯にとりて陣し、在家をこぼち、篝に燒きてゆだんせず。藤綱 桃井は對陣とりて守る。其夜いまだ明けざるに、宇佐美が勝を得たる一軍、本陣の戰ひ心もとなく、馬なき者は後陣に一隊をくませて、ゆる〳〵と押させ、騎馬八十騎を率ゐて道を馳せつけ、聽子につきて、直に敵の後をふさがんとぞかゝりける。駒場が陣には、今川敗軍の告を聞いて力を落し、敵つのらぬ内にとて引いて行く。物見の士かへりて、「向うの切通しのあなた、岐路の平地に伏勢あり」と申すに、「後なる敵の挾まぬ内に、力をつくして斬り脱けよ。此時生きんと

思はゞ、却て一人も免れまじきぞ」と、士卒をはげまし、用心して行く所に、大木の下に馬を立てたるは宇佐美左衛門、聲を擧げて、「今膽を寒して通るは駒場が一軍か。兎群兎に異ならんとして市に出づれば搏たれ、魚群魚に異ならんとして岸に上れば斃る。身の程しらぬ者どもの逃足こそいたはしければ、官軍の勇士達の迯つて給ぶぞ」と、五六十騎の健卒さつと馳せ出づれば、駒場迯耳に聞かせて答へもせず、道の塞らぬを幸にと、くづれ立つて迯げて行く。官軍は擬勢ばかりにて敵を慕はず。總軍と一所に合うて、行くべき道すぢなれば、すきまなく追うて行く程に、敵は居所にも得こもらで、山ふかくこもりぬ。人々殘念々々と口々にのゝしり、そなへたゞしく、參州路へ打ちこえけり。藤綱「今こそ勢を張りおほせたり」といへば、宇佐美は「我も天の便り得て、味方損せず、大勝を得たり」と、互に其手段をかたり悦び、加勢の衆にむかひ、「つぼみ際の軍、御合力を以て仕おほせたり」と、詞を厚くして是を謝し、加勢の武士五人三人づつかへし遣はしぬ。勝利の餘勢近國にふるひて、道の間手を出すものなく、氣色いさましく、津島に參りければ、宮御悦喜大かたならず。

大橋の人々も其武器を感じられけり。是より近國味方に參るもの多く、宇佐美、宇津宮士卒の調練おこたらず、常に川をわたり、遠がけして、鷹がりなどと出で働くこと毎度なり。駒場が一類遠く聞きて、「此ごろの出陣は、士卒には宵よりしらさで、鷹狩など云ひて鳥を出し、道より城攻にかゝる表裡多ければ、早晩隣國に發行し、我かたにや寄せなん」と、其備をなし、上杉今川にも告げやりて、用心しけるとなん。初はよせん〳〵とせし敵がた、却て宮方を心づかひしける。萬の勢の形は皆かゝることぞかし。十七家の英雄、心を一にして守護し、此所以ての外に安靜なれば、當所天皇の社内に、尹良王の靈を若宮にいはひまつり、始て祭禮を執行ふ。十一家の人々より船十一艘を出し、家の紋の幕を走らせ、數の提燈に姓氏官名を書きしるし、船中に笛、つゞみ、銅拍子をならして戯樂をなし、民家漁人までも船をかざりうかみける程に、此島の繁昌四方にかくれなし。宇佐美宇津宮は、かゝる折とても、城中を守り油断せず、朝夕城をめぐり、島をまはり、人の氣色にも心をつけ、毎日心腹の家人をしたがへて、内郭、外郭、要害あらはに、人のよぢ出づべきと思ふ所には、

かすかに箒痕をつけ、或は砂をならしなどして、人にはしらさで、かく用意しけるに、或朝、たつみの方高く險きに添うて引かせたる柵の際、人のすりたるあとあり。あやしみ思ひて、心を付けけるに、五日十日の間、必ず其邊箒目に足印あり。されば城中に敵の犬こそあれ、いづれよりのすつばにやと案ずるに、近きあたり敵となるべきは、早尾の堂が崎か、扨は佐屋の臺尻なり。定めてそれらが窺うて入りたる竊候ならんと心づき、一日諸家を集めて評議して云ふ、「番豆崎何某、佐屋と早尾と同日に攻むべき手つがひなり。兩所より加勢を乞ふとも、必ず御ひかへ玉はるやうに、と申しこしたり。味方此節外への手つがひする所存なければ、其條御心遣ひあるまじくと申遣したり。かく披露におよぶからは、今日明日の間にあるべし。彼若しかく我方に油斷させて、此方へ取りかける事もはかりがたし。士卒の面々其心得あるべし」と内々に觸れたり。扨明日物なれたるもの兩人を分ちて、早尾と佐屋とへ物調へに遣しける。早尾に遣しぬるは調へてかへりぬ。佐屋へ遣したるは得ずしてかへり、「今日彼所に、強く人改して他所人を入れず、用心の體なり」といふ。さればこそ、此城へ佐屋よりすつぱを入れけるとさとり、宇佐美、宇津宮内謀して、却て敵のうらをかく手段を計りけり。元來此佐屋に臺尻大角、大竹千幹進といふ兩人あり。津島を手に入れんと思ふ事多年なり。近比宮移らせ玉ひて、勢さかんなるゆゑ、手を出し兼ねてあるに、駒場、飯田の兩家より、力を添へんとあるに思ひたち、日比に忍びを入れ置きて、其動靜を窺ひけるが、次の年彼島の祭禮に、諸士の船遊に出でたる其不意に打つべしと工みこしらへける。既に水無月の祭日にいたりて、今年は去年にまさり華美をつくし、十一艘、船をならべて酒もりし、大吹大攂にてうかれ遊ぶ。漁人らも船にうかみて、上と樂みを同じくす。城は大橋中務のみとゞまり、今年は神影を城内にむかへ奉るべしと、前日より内堀所々に材をわたし、道ひろくかまへて掃ひ清め、すでに當日も晩に向ひて、川の面賑ひあへる時、大竹千幹が五六十騎、百姓の體にて、五人三人道を迂り、島にいたり、處々に伏おきて、我は城をめぐり物見しけるに、此日は内外の郭兩門とも大に開き、女房童よき衣きてこゝかしこにむれて、流れに臨み、大樹の下により、うたひあそぶ。千幹進、物遠き堤のかげに味方を待ちあはせ、一所になりて、やす〳〵郷手の門に入り、先其邊に火をさし、喊をつくる。早くも彼すみ此くまより火消の者出

できたり、水はじきそろへて火を打消し門をひしと閉ぢて、船にありと見えし宇津宮、宇佐美兩方よりあらはれ出で大勢にて取りかこみ、半は斬りたふし多く絡めとる。大竹はうち死す。降るものはゆるして、敵の樣を尋ね問ひ、手だてを奪ひて、卽時に敵を傴引く計策をなし、城中に柴を燒きあげたり。臺尻は五六艘に人數を匿し、所々に分ちおき、祭事見物の體にて、日の暮るゝを待ち居たるが、合圖の煙を見て、我船に號の燈籠を高く擧げて、味方の船に調じあはせ、城の追手を目あてに漕ぎ寄する。只今降りたるもの、那燈籠高き船こそ大將よと告げしらすに、宇佐美、宇津宮手勢を卒して、二艘の快船に、合圖の笛鼓早拍子をうたせて、燈籠ある船を目あてに向へば、十一家の船提燈晝とかゞやかせ、早拍子を合せて會ひ集り、元より肌具足堅固にかためて、臺尻が船を眞中に取りこめて、大將士卒分ちなく、悉く海に切り沈め、其時十一艘同音に、「臺尻うつた。みさいな」とはやしける。臺尻が殘りの兵船、後よりすゝむ所に、本船の大變あるを見て、たがひに招きあひ、今は生きてかへる面目なしと、家の子等死を一決して、三百餘人岸にあがり、切つてかゝる。城がた、よせ立てじとふせげども、夜軍になりて敵つよく、思はずひらきなびくとき、眞闇になつて城に斬つて入る。城門色めきて、二の郭へ士卒を引取らんとあわてさわくを、付入りにせんと進む三百餘人、忽ち作りたる道陷りて、深き泥の内にたゞよふ所を、大橋中務兵卒を下知して、熊手に引きあげ絡めとる。半ばは泥の内に自殺して失せけるぞはげしけれ。藤綱宇佐美この機をすかさず、船を飛ばせて臺尻が居城に逼り、諸大將後詰して一時に乘りおほせ、早く土地の仕置を出し、捷を津島に獻じけり。駒場が助勢も、からき場を引きとりて逃れかへり、是より再び手を出さず。宮の御座所は年月に興旺し、南朝の餘音猶此處に響きて、臺尻うつたといふことば、拍子物の名となりしも、久しき世の調ならん。

古今奇談繁野話第五之下巻　大尾

明和三丙戌年正月

江戸　通本町三丁目
西村源六

心斎橋筋順慶町
柏原清右衛門

大坂　南新町壹丁目
菊屋惣兵衛

高月抱波

今古怪談

雨月物語

全五巻

書籍行　野梅堂梓

雨月物語序

羅子水滸を撰して、而して三世唖兒を生み、紫媛源語を著して、而して一旦惡趣に墮する者、蓋し業に偪るところとなすのみ。然り而して其文を觀るに、各ゝ奇態を奮ひ、唫哢眞に逼り、低昂宛轉、讀者をして心氣を洞越たらしむる也。事實を千古に鑑せらるべし。余たま〳〵鼓腹

の閙話あり、口を銜いて吐出す。雉雊き龍戰ひ、自ら以て杜撰となす。則ち摘てこれを讀む者固より當に信と謂はざるべき也。豈醜脣平鼻の報を求むべけんや。明和戊子晩春雨霽れ月朦朧の夜、窻下に編成す。梓氏に畀するを以て、題して雨月物語といふといふ。

剪枝畸人書

口吐出。雉雊龍戰。自以為杜撰。則摘讀之者。固當不謂信也。豈可求醜脣平鼻之報哉。明和戊子晩春。雨霽月朦朧之夜。窻下編成。以畀梓氏。題曰雨月物語云。剪枝畸人書

雨月物語巻之一

白峯

あふ坂の關守にゆるされてより、秋こし山の黄葉見過しがたく、濱千鳥の跡ふみつくる鳴海がた、不盡の高嶺の煙、浮島がはら、淸見が關、大礒小いその浦々、むらさき艶ふ武藏野の原、鹽竈の和ぎたる朝げしき、象潟の蜑が笘や、佐野の舟梁、木曾の棧橋、心のとゞまらぬかたぞなきに、猶西の國の歌枕見まほしとて、仁安三年の秋は、葭がちる難波を經て、須磨明石の浦ふく風を身にしめつも、行く〳〵讃岐の眞尾坂の林といふにしばらく笻を植む。草枕はるけき旅路の勞にもあらで、觀念修行の便せし庵なりけり。この里ちかき白峯といふ所にこそ、新院の陵ありと聞きて、拜みたてまつらばやと、十月はじめつかた、かの山に登る。松柏は奥ふかく茂りあひて、靑雲の輕靡く日すら、小雨そぼふるがごとし。兒が嶽といふ嶮しき嶽背に聳ちて、千仭の谷底より雲きりおひのぼれば、咫尺をも鬱悒きこゝ地せらる。木立わづかに間きたる所に、土墩く積みたるが上に、石を三かさねに疊みなしたるが、荊蕀薜蘿にうづもれてうらがなしきを、これならん御墓にやと心もかきくらまされて、さらに夢現をもわきがたし。現にまのあたりに見奉りしは、紫宸淸涼の御座に、朝政きこしめさせ給ふを、百の官人は、かく賢しき君ぞとて、詔恐みてつかへまつりし。近衛院に禪りましても、藐姑射の山の瓊の林に禁めさせ給ふを、思ひきや麋鹿のかよふ跡のみ見えて、詣でつかふる人もなき深山の荊の下に神がくれたまはんとは。萬乘の君にてわたらせ給ふさへ、宿世の業といふものゝ、おそろしくもそひたてまつりて、罪をのがれさせ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつゞけて、涙わき出づるがごとし。終夜供養したてまつらばやと、御墓の前のたひらなる石の上に座をしめて、經文徐に誦しつゝも、かつ哥よみてたてまつる。

　松山の浪のけしきはかはらじを
　　かたなく君はなりまさりけり

猶心怠らず供養す。露いかばかり袂にふかゝりけん。日は沒りしほどに、山深き夜のさま常ならね、石の牀木葉

衾いと寒く、神清み、骨冷えて、物とはなしに凄じきこゝちせらる。月は出でしかど、茂きが林は影をもらさねば、あやなき闇にうらぶれて、眠るともなきに、まさしく圓位々々とよぶ聲す。眼をひらきてすかし見れば、其形異なる人の、背高く痩せおとろへたるが、顔のかたち、着たる衣の色紋も見えで、こなたにむかひて立てるを、西行もとより道心の法師なれば、恐ろしともなくて、こゝに來たるは誰ぞと答ふ。かの人いふ。前によみつること葉のかへりを聞えんとて見えつるなりとて、

松山の浪にながれてこし船の
やがて空しくなりにける哉

喜しくもまうでつるよと聞ゆるに、新院の霊なることをしりて、地にぬかづき涙を流していふ。さりとていかに迷はせたまふや。濁世を厭離し給ひつることのうらやましく侍りてこそ、今夜の法施に随縁したてまつるを、現形し給ふは、あゝがたくも悲しき御こころにし侍り。ひたぶるに隔生即忘して、佛果圓滿の位に昇らせ給へと、情をつくして諫め奉る。新院呵々と笑は

せ給ひ、汝しらず。近來の世の亂は朕なす事なり。生きてありし日より、魔道にこゝろざしをかたぶけて、平治の亂を發さしめ、死して猶朝家に祟をなす。見よ〳〵やがて天が下に大亂を生ぜしめんといふ。西行此詔に涙をとゞめて、こは淺ましき御こゝろばへをうけたまはるものかな。君はもとよりも聰明の聞えましませば、王道のことわりはあきらめさせ給ふ。こころみに討ね請すべし。そも保元の御謀叛は、天の神の敎へ給ふことわりにも違はじとて、おぼし立たせ給ふか。又みづからの人慾より計策り給ふか。詳に告らせ給へと奏す。其時院の御けしきかはらせ給ひ、汝聞け、帝位は人の極なり。若し人道上より亂す則は、天の命に應じ、民の望に順うて是を伐つ。抑永治の昔、犯せる罪もなきに、父帝の命を恐みて、三歲の體仁に代を讓りし心、人慾深きといふべからず。體仁早世ましては、朕皇子の重仁こそ國しらすべきものをと、朕も人も思ひをりしに、美福門院が妬みにさへられて、四の宮の雅仁に代を簒はれしは、深き怨にあらずや。

重仁國しらすべき才あり。雅仁何らのうつは物ぞ。人の徳をえらばずも、天が下の事を、後宮にかたらひ給ふは父帝の罪なりし。されど世にあらせ給ふほどは、孝信をまもりて、勤、色にも出さゞりしを、崩れさせ給ひてはいつまでありなんと、武きこゝろざしを發せしなり。臣として君を伐つすら、天に應じ民の望にしたがへば、周八百年の創業となるものを、ましてしるべき位ある身にて、牝鷄の晨する代を取て代らんに、道を失ふといふべからず。汝家を出て佛に婬し、未來解脱の利慾を願ふ心より、人道をもて因果に引き入れ、堯舜のをしへを釋門に混じて朕に說やと、御聲あらゝかに告らせ給ふ。西行いよゝ恐るゝ色もなく座をすすみて、君が告らせ給ふ所は、人道のことわりをかりて、慾塵をのがれ給はず。遠く震旦をいふまでもあらず、皇朝の昔譽田の天皇、兄の皇子大鷦鷯の王をおきて、季の皇子莵道の王を日嗣の太子となし給ふ。天皇崩御給ひては、兄弟相讓りて位に昇りたまはず。三とせをわたりても、猶果つべくもあらぬを、莵道の王深く憂ひ給ひて、豈久しく生きて、天が下を煩はしめんやとて、みづから寶算を斷たせ給ふものから、罷事なくて兄の皇子御位に即かせ給ふ。是天業を重んじ、孝悌をまもり、忠をつくして人慾なし。堯舜の道といふなるべし。本朝に儒敎を尊みて、專王道の輔とするは、莵道の王百濟の王仁を召て學ばせ給ふをはじめなれば、此兄弟の王の御心ぞ、即て漢土の聖の御心ともいふべし。又周の創、武王一たび怒りて、天下の民を安くす。臣として君を弑すといふべからず。仁を賊み義を賊む、一夫の紂を誅するなりといふ事、孟子といふ書にありと、人の傳に聞き侍る。されば漢土の書は、經典、史策、詩文にいたるまで渡さゞるはなきに、かの孟子の書ばかり、いまだ日本に來らず。此書を積みて來たる船は、必しも暴風にあひて沈沒むよしをいへり。それをいかなる故ぞとといふに、我國は天照すおほん神の開闢しろしめししより、日嗣の大王絶ゆる事なきを、かく口賢しきをしへを傳へなば、末の世に神孫を奪うて、罪なしといふ敵も出づべしと、八百よろづの神の惡ませ給うて、神風を起して船を覆へしたまふと聞く。されば他國の聖の敎も、この國土にふさはしからぬことすくなからず。且詩にもいはざるや、兄弟牆に鬩ぐとも外の侮を禦げよと。さるを骨肉の愛をわすれ給ひ、あまさへ一院崩御

給ひて、殯の宮に肌膚もいまだ寒えさせたまはぬに、御旗なびかせ弓末ふり立て、寶祚をあらそひ給ふは、不孝の罪これより劇しきはあらじ。天下は神器なり。人のわたくしをもて奪ふとも得べからぬことわりなるを、たとへ重仁王の即位は民の仰ぎ望む所なりとも、德を布き和を施し給はで、道ならぬわざをもて代を亂し給ふ則は、きのふまで君を慕ひしも、けふは忽ち怨敵となりて、本意をも遂げたまはで、いにしへより例なき刑を得給ひて、かゝる鄙の國の土とならせ給ふなり。たゞ／＼舊き讐をわすれ給うて、淨土にかへらせ給はんこそ願はまほしき叡慮なれと、はゞかることなく奏しける。院長嘘をつがせ給ひ、今事を正して罪をとふ。ことわりなきにあらず。されどいかにせん。この島に謫れて、高遠が松山の家に困められ、日に三たびの御膳すゝむるよりは、まゐりつかふる者もなし。只天とぶ鴈の小夜の枕におとづるゝを聞けば、都にや行くらんとなつかしく、曉の千鳥の洲崎にさわぐも、心をくだく種となる。烏の頭は白くなるとも、都には還るべき期もあらねば、定めて海畔の鬼とならんずらん。ひたすら後世のためにとて、五部の大乘經をうつしてけるが、貝鐘の音も聞えぬ荒礒にとゞめんもかなし。せめては筆の跡ばかりを、洛の中に入れさせたまへと、仁和寺の御室の許へ、經にそへてよみておくりける。

濱千鳥跡はみやこにかよへども
身は松山に音をのみぞ鳴く

しかるに少納言信西がはからひとして、若呪咀の心にやと奏しけるより、そがまゝにかへされしぞうらみなれ。いにしへより倭漢土ともに、國をあらそひて兄弟敵となりし例は珍しからねど、罪深き事かなと思ふより、惡心懺悔の爲にとて寫しぬる御經なるを、いかにさゝふる者ありとも、親しきを議るべき令にもたがひて、筆の跡だも納れ給はぬ叡慮こそ、今は舊しき讐なるかな。所詮此經を魔道に回向して、恨をはるかさんと、一すぢにおもひ定めて、指を破り血をもて願文をうつし、經とともに志戸の海に沈めてし後は、人にも見えず深く閉ぢこもりて、ひとへに魔王となるべき大願をちかひしが、はた平治の亂ぞ出できぬる。まづ信頼が高き位を望む驕慢の心をさそうて、義朝をかたらはしむ。かの義朝こそ惡き敵なれ。父の爲義をはじめ、同胞の武士は皆朕がために命を捨しに、他一人朕に弓を挽く。爲朝が勇猛、爲義忠政が

軍配に臨日を見つるに、西南の風に燒討せられ、白川の宮を出でしより、如意が嶽の嶮しきに足を破られ、或は山賤の椎柴をおほひて雨露を凌ぎ、終に擒はれて此島に謫られしまで、皆義朝が姦しき計策に困しめられしなり。これが報を虎狼の心に障化して、信頼が隱謀にかたらはせしかば、地祇に逆ふ罪、武に賢からぬ清盛に逐ひ討たる。且父の爲義を弑せし報偪りて、家の子に謀られしは、天神の祟を蒙りしものよ。又少納言信西は常に己を博士ぶりて、人を拒む心の直からぬ、これをさそうて信頼義朝が讐となせしかば、終に家をすてゝ宇治山の坑に竄れしを、はた探し獲られて、六條河原に梟首けらる。これ經をかへせし諛言の罪を治めしなり。それがあまり、應保の夏は美福門院が命を窮り、長寛の春は忠通を祟りて、朕も其秋世をさりしかど、猶嗔火熾んにして盡きざるまゝに、終に大魔王となりて、三百餘類の巨魁となる。朕けんぞくのなすところ、人の福を見ては轉して禍とし、世の治るを見ては亂を發さしむ。只清盛が人果大にして、親族氏族こと〴〵く高き官位につらなり、おのがまゝなる國政を執行ふといへども、重盛忠義をもて輔くる故、いまだ期いたらず。汝見よ。平氏も亦久しからじ。雅仁朕につらかりしほどは終に報ゆべきぞと、御聲いやましに恐しく聞えけり。西行いふ、君かくまで魔界の惡業につながれて、佛土に億萬里を隔て給へば、ふたゝびいはじとて、只默してむかひ居たりける。時に峯谷ゆすり動きて、風叢林を僵すがごとく、沙石を空に卷上ぐる。見る〳〵一段の陰火君が膝の下より燃上りて、山も谷も晝のごとくあきらかなり。光の中につら〳〵御氣色を見たてまつるに、朱をそゝぎたる龍顏に、荊の髮膝にかゝるまで亂れ、白眼を吊りあげ、熱き嘘をくるしげにつがせ給ふ。御衣は柿色のいたうすゝびたるに、手足の爪は獸のごとく生ひのびて、さながら魔王の形あさましくもおそろし。空にむかひて相模々々と叫ばせ給ふ。あと答へて、鳶のごとくの化鳥翔け來り、前に伏して詔をまつ。院、かの化鳥にむかひ給ひ、何ぞはやく重盛が命を奪りて、雅仁清盛をくるしめざる。化鳥こたへていふ、上皇の幸福いまだ盡きず、重盛が忠信ちかづきがたし。今より支干一周を待たば、重盛が命數既に盡きなむ、他死せば一族の幸福此時に亡ぶべし。院手を拍つて怡ばせ給ひ、かの讐敵こと〴〵く此前の海に盡

すべしと、御聲谷峯に響きて凄しさいふべくもあらず。魔道の淺ましきありさまを見て、涙しのぶに堪へず、復び一首の哥に隨縁のこゝろをすゝめたてまつる。

よしや君昔の玉の床とても
かゝらんのちは何にかはせん

刹利も須陀もかはらぬものをと、心あまりて高らかに吟ひける。此ことばを聞しめして感でさせ給ふやうなりしが、御面も和らぎ、陰火もやゝうすく消えゆくほどに、つひに龍體もかきけちたるごとく見えずなれば、化鳥もいづち去きけん跡もなく、十日あまりの月は峯にかくれて、木のくれやみのあやなきに、夢路にやすらふが如し。ほどなくいなのめの明けゆく空に、朝鳥の音おもしろく鳴きわたれば、かさねて金剛經一巻を供養したてまつり、山をくだりて庵に歸り、閑に終夜のことどもを思ひ出づるに、平治の亂よりはじめて、人々の消息、年月のたがひなければ、深く愼みて人にもかたり出でず、

其後十三年を經て、治承三年の秋、平の重盛病に係りて世を逝りぬれば、平相國入道、君をうらみて鳥羽の離宮に籠めたてまつり、かさねて福原の茅の宮に困めたてまつる。頼朝東風に競ひおこり、義仲北雪をはらうて出づるに及び、平氏の一門こと〴〵く西の海に漂ひ、遂に讃岐の海志戸八島にいたりて、武さつはものども、おほく鼇魚のはらに葬ぶられ、赤間が關壇の浦にせまりて、幼主海に入らせたまへば、軍將たちものこりなく亡びしまで、露たがはざりしぞおそろしくあやしき話柄なりけり。其後御廟は玉もて雕り、丹靑を彩りなして、稜威を崇めたてまつる。かの國にかよふ人は、必幣をさゝげて齋ひまつるべき御神なりけらし。

菊花の約

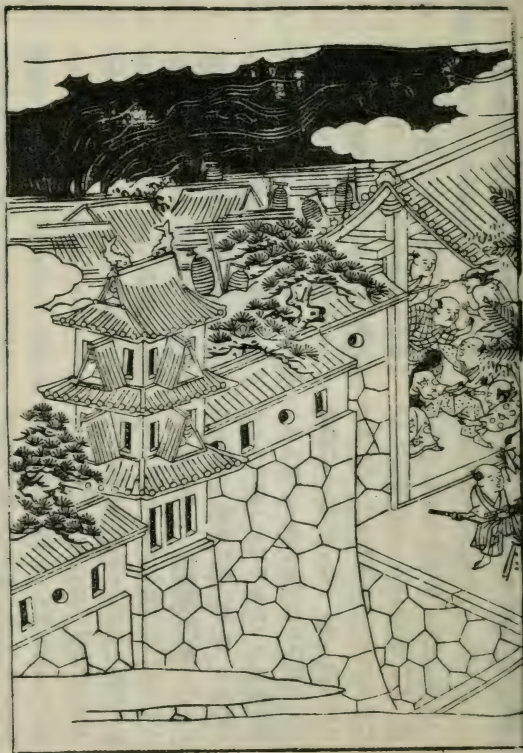
靑々たる春の柳、家園に種うることなかれ。交は輕薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも、秋の初風の吹くに耐へめや。輕薄の人は交りやすくして亦速なり。楊柳いくたび春に染むれども、輕薄の人は絶えて訪ふ日なし。

播磨の國加古の驛に、丈部左門といふ博士あり。淸貧を憩ひて、友とする書の外はすべて調度の絮煩を厭ふ。老母あり。孟氏の操にゆづらず。常に紡績を事として、左門がこゝろざしを助く。其季女なるものは、同じ里の佐用氏に養はる。此佐用が家は頗富みさかえて有りけるが、丈部母子の賢きを慕ひ、娘子を娶りて親族となり、屢事

に托せて物を贈るといへども、口腹の爲に人を累さんやとて、敢へて承くることなし。一日左門同じ里の何某が許に訪ひて、いにしへ今の物がたりして興ある時に、壁を隔てゝ人の痛楚む聲いともあはれに聞えければ、主に尋ぬるに、あるじ答ふ、これより西の國の人と見ゆるが、伴に後れしよしにて一宿を求めらるゝに、士家の風ありて卑しからぬと見しまゝに、逗めまゐらせしに、其夜邪熱劇しく、起臥も自はまかせられぬを、いとほしさに三日四日は過しぬれど、何地の人ともさだかならぬに、主も思ひがけぬ過し出でて、こゝち惑ひ侍りぬといふ。左門聞きて、かなしき物がたりにこそ。あるじの心安からぬもさる事にしあれど、病苦の人はしるべなき旅の空に、此疾を憂ひ給ふは、わきて胸窮しくおはすべし。其やうをも看ばやといふを、あるじとどめて、瘟病は人を過つ物と聞ゆるから、家童らもあへてかしこに行かしめず。立ちよりて身を害し給ふことなかれ。左門笑うていふ、死生命あり。何の病か人に傳ふべき。これらは愚俗のことばにて、吾們はとらずとて、戸を推して入りつも、其人を見るに、あるじがかたりしに違はで、倫の人にはあらじを、病深きと見えて、面は黃に、肌黑く痩せ、古き衾のうへに悶え臥す。人なつかしげに左門を見て、湯ひとつ惠み給へといふ。左門ちかくよりて、士憂へ給ふことなかれ。必救ひまゐらすべしとて、あるじと計りて、薬をえらみ、自方を案じ、みづから煮てあたへつも、猶粥をすゝめて病を看ること同胞のごとく、まことに捨てがたきありさまなり。かの武士左門が愛憐の厚きに泪を流して、かくまで漂客を惠み給ふ、死すとも御心に報ひたてまつらんといふ。左門諫めて、ちからなきことは、な聞えたまひそ。凡疫は日數あり。其ほどを過ぎぬれば壽命をあやまたず。吾日々に詣でてつかへまゐらすべしと、實やかに約りつゝも、心をもちひて助けけるに、病漸減じてこゝち淸しくおぼえければ、あるじにも念比に詞をつくし、左門が陰德をたふとみて、其生業をもたづね、己が身の上をもかたりていふ。故出雲の國松江の鄕に生長りて、赤穴宗右衛門といふ者なるが、わづかに兵書の旨を察めしによりて、富田の城主鹽冶掃部介、吾を師として物學び給ひしに、近江の佐々木氏綱に密の使にえらばれて、かの館にとゞまるうち、前の城主尼子經久山中黨をかたらひて、大三十日の夜、不慮

に城を乗りとりしかば、掃部殿も討死ありしなり。もとより雲州は佐々木の持國にて、鹽冶は守護代なれば、三澤三刀屋を助けて、經久を亡したまへとすゝむれども、氏綱は外勇にして内怯えたる愚將なれば果さず、かへりて吾を國に逗む。故なき所に永く居らじと、己が身ひとつを竊みて國に還る路に、此疾にかゝりて、思ひがけずも師を勞はしむるは、身にあまりたる御恩にこそ。吾半世の命をもて、必報ひたてまつらん。左門いふ、見る所を忍びざるは、人たるものゝ心なるべければ、厚き詞ををさむるに故なし。猶逗りていたはり給へと、實ある詞を便にて、日比經るまゝに、物みな平生に邇くぞなりにける。此日比左門は、よき友もとめたりとて、日夜交りて物がたりすに、赤穴も諸子百家のことおろ〳〵かたり出でて、問ひわきまふる心愚ならず。兵機のことわりをさ〳〵しく聞えければ、ひとつとして相ともにたがふ心もなく、かつ感で、かつよろこびて、終に兄弟の盟をなす。赤穴五歳長じたれば、伯氏たるべき禮義ををさめて、左門にむかひていふ。吾父母に離れまゐらせていとも久し。賢弟が老母は即吾母なれば、あらたに拜みたてまつらんことを願ふ。老母あはれみてをさなき心を肯け給はんや。左門歡に堪へず。母なる者常に我が孤獨を憂ふ。信ある言を告げなば、齡も延びなんにと、伴ひて家に歸る。老母よろこび迎へて、吾子不才にて學ぶ所時にあはず青雲の便を失ふ。ねがふは捨ずして伯氏たる教を施し給へ。赤穴拜していふ、大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足らず。吾いま母公の慈愛をかうむり、賢弟の敬を納むる、何の望かこれに過ぐべきと、よろこびうれしみつゝ、又日來をとゞまりける。きのふけふ咲きぬると見し尾上の花も散りはてゝ、涼しき風による浪に、とはでもしるき夏の初になりぬ。赤穴母子にむかひて、吾近江を遁れ來りしも、雲州の動靜を見んためなれば、一たび下向りて、やがて歸り來り、菽水の奴に御恩をかへしたてまつるべし。今のわかれを給へといふ。左門いふ、さあらば兄長いつの時にか歸り給ふべき。赤穴いふ、月日は逝きやすし。おそくとも此秋は過さじ。左門いふ、秋はいつの日を定めて待つべきや。ねがふは約し給へ。赤穴いふ、重陽の佳節をもて歸り來る日とすべし。左門いふ、兄長必ず此日をあやまりたまふな。一枝の菊花に薄き酒を備へて待ちたてまつらんと、互に

情をつくして赤穴は西に歸りけり。あら玉の月日はやく經ゆきて、下枝の茱萸色づき、垣根の野ら菊艶ひやかに、九月にもなりぬ。九日はいつよりも蚤く起き出でて、草の屋の席をはらひ、黄菊しら菊二枝三枝小瓶に挿し、嚢をかたぶけて酒飯の設をす。老母いふ、かの八雲たつ國は山陰の果にありて、こゝには百里を隔つると聞けば、けふとも定めがたきに、其來しを見ても物すとも遲からじ。左門いふ、赤穴は信ある武士なれば必ず約を誤らじ。其人を見てあわたゞしからんは、思はんことの耻づかしとて、美酒を沽ひ鮮魚を宰て厨に備ふ。此日や天晴れて、千里の雲のたちゐもなく、草枕旅ゆく人の群々かたりゆくは、けふは誰某がよき京入なる。此度の商物によき德とるべき祥になんとて過ぐ。五十あまりの武士、二十あまりの同じ出立なる、日和はかばかりよかりしものを、明石より船もとめなば、この朝びらきに、牛窓の門の泊は追ふべき。若き男は却物怯して、錢おほく費すことよといふに、殿の上らせ給ふ時、小豆嶋より室津のわたりし給ふに、

なまからきめにあはせ給ふを、従に侍りしものゝかたりしを思へば、このほとりの渡は、必ず怯ゆべし。な恚み給ひそ。魚が橋の蕎麥ふるまひまをさんにと、いひなぐさめて行く。口とる男の腹だたしげに、此死馬は眼をもはたけぬかと、荷鞍おしなほして追ひもて行く。午時もやゝかたぶきぬれど、待ちつる人は來らず。西に沈む日に、宿り急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて心酔へるが如し。老母左門をよびて、人の心の秋にはあらずとも、菊の色こきはけふのみかは。歸りくる信だにあらば、空は時雨にうつりゆくとも何をか怨むべき。入りて臥しもして、又翌の日を待つべしとあるに、否みがたく、母をすかして前に臥さしめ、もしやと戸の外に出でて見れば、銀河影きえ〳〵に、氷輪我のみを照して淋しきに、軒守る犬の吼ゆる聲すみわたり、浦浪の音ぞこゝもとにたちくるやうなり。月の光も山の際に陰くなれば、今はとて戸を閉てゝ入らんとするに、ただ看る、おぼろなる黒影の中に人ありて、風の隨來るをあやしと見れば赤

穴宗右衛門なり。踊りあがるこゝちして、小弟蚤くより待ちて今にいたりぬる。盟たがはで來り給ふことのうれしさよ。いざ入らせ給へといふめれど、只點頭きて物をもいはでぞある。左門前にすゝみて、南の窓の下にむかへ座につかしめ、兄長來り給ふことの遲かりしに、老母も待ちわびて、翌こそと臥所に入らせ給ふ。寤させまゐらせんといへるを、赤穴又頭を搖りてとゞめつも、更に物をもいはでぞある。左門いふ、既に夜を續ぎて來し給ふに、心も倦み足も勞れ給ふべし。幸に一杯を酹みて歇息せ給へとて、酒をあたゝめ、下物を列ねてすゝむるに、赤穴袖をもて面を掩ひ、其臭を嫌み放くるに似たり。左門いふ、井臼の力はた款すに足らざれども、己が心なり。いやしみ給ふことなかれ。赤穴猶答へもせで、長嘘をつぎつゝ、しばししていふ、賢弟が信ある饗應を、などいなむべきことわりやあらん。欺くに詞なければ、實をもて告ぐるなり。必しもあやしみ給ひそ。吾は陽世の人にあらず。きたなき靈のかりに形を見えつるなり。左門大いに驚きて、兄長何ゆゑにこのあやしきをかたり出で給ふや。更に夢ともおぼえ侍らず。赤穴いふ、賢弟とわかれて國にくだりしが、國人大かた經久が勢に服きて、鹽冶の恩を顧みるものなし。從弟なる赤穴丹治、富田の城にあるを訪ひしに、利害を說きて吾を經久に見えしむ。假に其詞を容れて、つらつら經久がなす所を見るに、萬夫の雄人に勝れ、よく士卒を習練すといへども、智を用ふるに狐疑の心おほくして、腹心爪牙の家の子なし。永く居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約あることをかたりて去らんとすれば、經久怨める色ありて、丹治に令し、吾を大城の外にはなたずして、遂に今日にいたらしむ。此約にたがふものならば、賢弟吾を何ものとかせんと、ひたすら思ひ沈めども遁るゝに方なし。いにしへの人のいふ、人一日に千里をゆくことあたはず。魂よく一日に千里をもゆくと。此ことわりを思ひ出でて、みづから刄に伏し、今夜陰風に乘りてはるばる來り、菊花の約に赴く。この心をあはれみ給へといひをはりて泪わき出づるが如し。今は永きわかれなり。只母公によくつかへ給へとて、座を立つと見しが、かき消えて見えずなりにける。左門慌忙てとゞめんとすれば、陰風に眼くらみて行方をしらず。俯向につまづき倒れたるまゝに、聲を放ちて大に哭く。老母目さめ、驚き立て、左門

がある所を見れば、座上に酒瓶魚盛りたる皿どもあまた列べたるが中に臥倒れたるを、いそがはしく扶け起して、いかにととへども、只聲を呑みて泣く泣くさらに言なし。老母問うていふ、伯氏赤穴が約にたがふを怨むるとならば、明日なんもし來るには言なからんものを、汝かくまでをさなくも愚なるかと、つよく諫むるに、左門漸答へていふ、兄長今夜菊花の約に特來る。酒殺をもて迎ふるに、再三辭み給うていふ、しかじかのやうにて約に背くがゆゑに、自刄に伏して、陰魂百里を來るといひて見えずなりぬ。それ故にこそは母の眠をも驚したてまつれ。只々赦し給へと潜然と哭入るを、老母いふ、牢裏に繋がるゝ人は夢にも赦さるゝを見、渇するものは夢に漿水を飲むといへり。汝も亦さる類にやあらん。よく心を靜むべしとあれども、左門頭を搖りて、まことに夢の正なきにあらず。兄長はこゝもとにこそありつれと、又聲を放げて哭倒る。老母も今は疑はず、相叫びて其夜は哭きあかしぬ。明くる日左門母を拜していふ、吾幼きより身を翰墨に托するといへども、國に忠義の聞なく、家に孝信をつくすことあたはず、徒に天地のあひだに生るゝのみ。兄長赤穴は一生を信義の爲に終る。小弟けふより出雲に下り、せめては骨を藏めて信を全うせん。公尊體を保ち給うて、しばらくの暇をたまふべし。老母云、吾兒かしこに去るとも、はやく歸りて老が心を休めよ。永く逗まりてけふを舊しき日となすことなかれ。左門いふ、生は浮きたる漚のごとく、旦にゆふべに定めがたくとも、やがて歸りまゐるべしとて、泪を振うて家を出で、佐用氏にゆきて、老母の介抱を懇にあつらへ、出雲の國にまかる路に、飢ゑて食を思はず、寒に衣をわすれて、まどろめば夢にも哭きあかしつゝ、十日を經て富田の大城にいたりぬ。先赤穴丹治が宅にいきて、姓名をもていひ入るに、丹治迎へ請じて、翼ある物の告ぐるにあらで、いかでしらせ給ふべき謂なしとしきりに問ひ尋む。左門いふ、士たる者は富貴消息の事、ともに論ずべからず。只信義をもて重しとす。伯氏宗右衛門一旦の約をおもんじ、むなしき魂の百里を來るに報すとて、日夜を逐うてこゝにくだりしなり。吾學ぶ所について士に尋ねまゐらすべき旨あり。ねがふは明かに答へ給へかし。昔魏の公叔座病の牀にふしたるに、魏王みづからまうでて、手をとりつも告ぐるは、若し諱むべからずのことあら

ば、誰をして社稷を守らしめんや。吾ために教を遺せとあるに、叔座いふ、商鞅年少しといへども奇才あり。王もし此人を用ひ給はずば、これを殺しても境を出すことなかれ。他の國にゆかしめば、必ずも後の禍となるべしと苦に教へて、又商鞅を私にまねき、吾汝をすゝむれども王許さゞる色あれば、用ひずばかへりて汝を害し給へと教ふ。是君を先にし、臣を後にするなり。汝速く他の國に去りて害を免るべしといへり。この事士と宗右衛門に比へてはいかに。丹治只頭を低れて言なし。左門座をすゝみて、伯氏宗右衛門鹽冶が舊交を思ひて、尼子に仕へざるは義士なり。士は舊主の鹽冶を捨て尼子に降りしは士たる義なし。伯氏は菊花の約を重んじ、命を捨て百里を來しは信ある極なり。士は今尼子に媚びて骨肉の人をくるしめ、此横死をなさしむるは友とする信なし。經久強ひてとゞめ給ふとも、舊しき交を思はゞ、私に商鞅叔座が信をつくすべきに、只榮利にのみ走りて、士家の風なきは即尼子の家風なるべし。さるから、兄長何故此國に足をとゞむべき。吾今信義を重んじて、態こゝに來る。汝は又不義のために汚名をのこせとて、いひもをはらず抜打に斬りつくれば、一刀にてそこに倒る。家眷ども立騒ぐ間に、はやく逃れ出でて跡なし。尼子經久此よしを傳へ聞きて、兄弟信義の篤きをあはれみ、左門が跡をも強ひて逐はせざるとなり。咨輕薄の人と交は結ぶべからずとなん。

雨月物語一之巻終

雨月物語巻之二

浅茅が宿

下總の國葛飾郡眞間の郷に、勝四郎といふ男ありけり。祖父より舊しくこゝに住み、田畠あまた主づきて、家豐に暮しけるが、生長りて物にかゝはらぬ性より、農作をうたてき物に厭ひけるまゝに、はた家貧しくなりにけり。さるほどに親族おほくにも疎んじられけるを、朽をしきことに思ひしみて、いかにもして家を興しなんものをと左右にはかりける。其比雀部の曾次といふ人、足利染の絹を交易するために、年年京よりくだりけるが、此郷に氏族のありけるを屢々來訪ひしかば、かねてより親しかりけるまゝに、商人となりて京にまうのぼらんことを頼みしに、雀部いとやすく肯ひて、いつの比はまかるべしと聞えける。他がたのもしきをよろこびて、殘る田をも販りつくして金に代へ、絹素あまた買ひ積みて、京にゆく日をもよほしける。勝四郎が妻宮木なるものは、人の目とむるばかりの容に、心ばへも愚ならずありけり。此度勝四郎が、商物買ひて京にゆくといふをうたてきことに思ひ、言をつくして諫むれども、常の心のはやりたるにせんかたなく、梓弓末のたづきの心ぼそきにも、かひ〴〵しく調へて、其夜はさりがたき別れをかたり、かくては、たのみなき女心の、野にも山にも惑ふばかり、物うきかぎりに侍り。朝に夕にわすれ給はで、速く歸り給へ。命だにとは思ふものゝ、明をたのまれぬ世のことわりは、武き御心にもあはれみ給へといふに、いかで浮木に乘りつも、しらぬ國に長居せん。葛のうら葉のかへるは此秋なるべし。心づよく待ち給へといひなぐさめて、夜も明けぬるに、鳥が啼く東を立出でて、京の方へ急ぎけり。此年享徳の夏、鎌倉の御所成氏朝臣、管領の上杉と御中放けて、館兵火に跡なく滅びければ、御所は總州の御味方へ落ちさせ給ふより、關の東忽に亂れて、心々の世の中となりしほどに、老いたるは山に逃げ竄れ、弱きは軍民にもよほされ、けふは此所を燒きはらふ、明は敵のよせ來るぞと、女わらべ等は東西に逃げまどひて泣きかなしむ。勝四郎が妻なるものも、いづちへも遁れんものをと思

ひしかど、此秋を待てと聞えし夫の言を頼みつゝも、安からぬ心に日をかぞへて暮しける。秋にもなりしかど、風の便もあらねば、世とともに憑なき人心かなと、恨みかなしみおもひくづをれて、

身のうさは人しも告げじ
　逢坂の夕づけ鳥よ秋も暮れぬと

かくよめれども、國あまた隔てぬればいひおくるべき傳もなし。世の中騒しきにつれて、人の心も恐しくなりにたり。適間とぶらふ人も、宮木がかたちの愛たきを見ては、さま〴〵にすかしいざなへども、三貞の賢き操を守りてつらくもてなし、後は戸を閉てゝ見えざりけり。一人の婢女も去りて、すこしの貯もむなしく、其年も暮れぬ。年あらたまりぬれども猶をさまらず。あまさへ去年の秋京家の下知として、美濃の國郡上の主、東の下野守常縁に御旗を給びて、下野の領所にくだり、氏族千葉の實胤とはかりて責むるにより、御所方も固く守りて拒ぎ戰ひけるほどに、いつ果つべきとも見えず。野伏等はこゝかしこに寨をかまへ、火を放ちて財を奪ふ。八州すべて安き所もなく、淺ましき世の費なりけり。勝四郎は雀部に從ひて京にゆき、絹ども殘なく交易せしほどに、當時都は華美を好む節なれば、よき徳とりて東に歸る用意をなすに、今度上杉の兵鎌倉の御所を陷し、なほ御跡をしたうて責討てば、古郷の邊は干戈みち〳〵て、涿鹿の岐となりしよしをいひはやす。まのあたりなるさへ僞おほき世説なるを、まして白雲の八重に隔たりし國なれば、心も心ならず、八月のはじめ京をたち出でて、岐曾の眞坂を日ぐらしに踰えけるに、落草ども道を塞へて、行李も殘なく奪はれしがうへに、人のかたるを聞けば、是より東の方は所々に新關を居ゑて、旅客の往來をだに宥さゞるよし。さては消息をすべきたづきもなし。家も兵火にや亡びなん。妻も世に生きてあらじ。しからば古郷とても鬼のすむ所なりとて、こゝより又京に引きかへすに、近江の國に入りて、にはかにこゝちあしく、熱き病を憂ふ。武佐といふ所に、兒玉嘉兵衞とて富貴の人あり。これは雀部が妻の産所なりければ苦にたのみけるに、此人見捨てずしていたはりつも、醫をむかへて藥の事専なりし。やゝこゝち清しくなりぬれば、篤き恩をかたじけなうす。されど歩む事はまだはか〴〵しからねば、今年は思ひがけずもこゝに春を迎ふるに、いつのほどか此里にも友をもとめて、揉め

ざるに直き志を賞ぜられて、兒玉をはじめ誰々も頼もしく交りけり。此後は京に出でて雀部をとぶらひ、又は近江に歸りて兒玉に身を托せ、七とせがほどは夢のごとくに過しぬ。寛正二年畿内河内の國に、畠山が同根の爭ひ果さゞれば、京ぢかくも騷しきに、春の頃より瘟疫さかんに行はれて、屍は衢に疊み、人の心も今や一劫の盡くるならんと、はかなきかぎりを悲みける。勝四郎熟思ふに、かく落魄れてなす事もなき身の、何をたのみとて遠き國に逗り、由縁なき人の惠をうけて、いつまで生くべき命なるぞ。古郷に捨てし人の消息をだにしらで、萱草おひぬる野方に、長々しき年月を過しけるは、信なき己が心なりける物を、たとへ泉下の人となりて、ありつる世にはあらずとも、其あとをももとめて壠をも築くべけれと、人々に志を告げて、五月雨のはれ間に手をわかちて、十日あまりを經て古郷に歸り着きぬ。此時日ははや西に沈みて、雨雲はおちかゝるばかりに闇けれど、舊しく住みなれし里なれば、迷ふべうもあらじと、夏野わけ行くに、いにしへの繼橋も川瀬におちたれば、げに駒の足音もせぬに、田畑は荒れたきまゝにすさみて、舊の道もわからず、ありつる人居もなし。たまたまこゝかしこに殘る家に、人の住むとは見ゆるもあれど、昔には似つゝもあらね、いづれか我住みし家ぞと立惑ふに、こゝ二十歩ばかりを去りて、雷に摧れし松の聳えて立てるが、雲間の星のひかりに見えたるを、げに我軒の標こそ見えつると、先喜しきこゝちしてあゆむに、家は故にかはらであり。人も住むと見えて、古戸の間より燈火の影もれて輝々とするに、他人や住む。もし其人や在すかと心躁しく、門に立ちよりて咳すれば、内にも速く聞きとりて、誰ぞと咎む。いたうねびたれど正しく妻の聲なるを聞きて、夢かと胸のみさわがれて、我こそ歸りまゐりたり。かはらで獨自淺茅が原に住みつることの不思議さよといふを、聞き知りたれば、やがて戸を明くるに、いといたう黑く垢づきて、眼はおち入りたるやうに、結げたる髮も脊にかゝりて、故の人とも思はれず。夫を見て物をもいはで潸然となく。勝四郎も心くらみて、しばし物をも聞えざりしが、やゝしていふは、今までかくおはすと思ひなば、など年月を過すべき。去ぬる年、京にありつる日、鎌倉の兵亂を聞き、御所の師潰えしかば、總州に避けて禦ぎたまふ。管領これを責むる事急なり

といふ。其明雀部にわかれて、八月のはじめ京を立ちて、木曾路を來るに、山賊あまたに取りこめられ、衣服金銀殘なく掠められ、命ばかりを辛勞じて助かりぬ。且里人のかたるを聞けば、東海東山の道は、すべて新關を居ゑて人を駐むるよし、又きのふ京より節刀使もくだり給ひて、上杉に與し、總州の陣に向はせたまふ。本國の邊は疾くに焼きはらはれ、馬の蹄尺地も間なしとかたるによりて、今は灰塵とやなり給ひけん。海にや沈み給ひけんとひたすらに思ひとゞめて、又京にのぼりぬるより、人に餬口ひて七とせは過しけり。近曾すゞろに物のなつかしくありしかば、せめて其蹤をも見たきまゝに歸りぬれど、かくて世におはせんとは、努々思はざりしなり。巫山の雲漢宮の幻にもあらざるやと、くりごとはてしぞなき。妻涙をとゞめて、一たび離れまゐらせて後、たのむの秋より前に、恐しき世の中となりて、里人は皆家を捨てゝ、海に漂ひ山に隱れば、適に殘りたる人は、多く虎狼の心ありて、かく寡となりしを便よしとや、言を巧みていざなへども、玉と碎けても瓦の全きにはならはじものをと、幾たびか辛苦を忍びぬる。銀河秋を告ぐれども君は歸りたまはず、冬を待ち、春を迎へても消息なし。今は京にのぼりて尋ねまゐらせんと思ひしかど、丈夫さへ宥さざる關の鎖を、いかで女の越ゆべき道もあらじと、軒端の松にかひなき宿に、狐鵂鶹を友として今日までは過しぬ。今は長き恨もはれ〴〵となりぬることの喜しく侍り。逢ふを待つ間に戀ひ死なんは、人しらぬ恨なるべしと、又よよと泣くを、夜こそ短きにといひなぐさめてともに臥しぬ。窻の紙松風を啜りて、夜もすがら涼しきに、途の長手に勞れ、熟く寢ねたり。五更の天明けゆく比、現なき心にもすゞろに寒かりければ、衾被かんとさぐる手に、何物にや籟々と音するに目さめぬ。面にひやひやと物のこぼるゝを、雨や漏りぬるかと見れば、屋根は風にまくられてあれば、有明月のしらみて殘りたるも見ゆ。家は扉もあるやなし、簀垣朽ち頽れたる間より、荻薄高く生ひ出でて、朝露うちこぼるゝに、袖濕ぢてしぼるばかりなり。壁には蔦葛延ひかゝり、庭は葎に埋れて、秋ならねども野らなる宿なりけり。さてしも臥したる妻はいづち行きけん見えず。狐などのしわざにやと思へば、かく荒れ果てぬれど故住みし家にたがはで、廣く造り作せし奥わたりより、端の方、稲倉まで好

みたるまゝの形なり。呆自れて足の踏み所さへ失れたるやうなりしが、熟おもふに、妻は既に死りて、今は狐狸の住みかはりて、かく野らなる宿となりたれば、怪しき鬼の化して、ありし形を見せつるにてぞあるべき。若し又我を慕ふ魂のかへり來りてかたりぬるものか。思ひし事の露たがはざりしよと、更に涙さへ出でず。我身ひとつは故の身にしてとあゆみ廻るに、むかし閨房にてありし所の簀子をはらひ、土を積みて壠とし、雨露をふせぐまうけもあり。夜の靈はこゝもとよりやと、恐しくも且なつかし。水向の具物せし中に、木の端を刪りたるに、那須野紙のいたう古びて、文字もむら消して所々見定めがたき、正しく妻の筆の跡なり。法名といふものも年月もしるさで、三十一字に末期の心を哀にも展べたり。

さりともと思ふ心にはかられて
　世にもけふまでいける命か

こゝにはじめて妻の死したるを覺りて、大いに叫びて倒れ伏す。去りとて何の年、何の月日に終りしさへしらぬ淺ましさよ。人はしりもやせんと、涙をとゞめて立ち出づれば、日高くさし昇りぬ。先ちかき家に行きて主を見るに、昔見し人にあらず。かへりて何國の人ぞと咎む。勝四郎禮ひていふ、此隣なる家の主なりしが、過活のため京に七とせまでありて、昨の夜歸りまゐりしに、既に荒廢みて人も住ひ侍らず。妻なるものも死りしと見えて、壠の設も見えつるが、いつの年にともなきに、まさりて悲しく侍り。しらせ給はば敎へ給へかし。主の男いふ、哀にも聞えたまふものかな。我こゝに住むもいまだ一とせばかりの事なれば、それよりはるかの昔に亡せ給ふと見えて、住みたまふ人のありつる世はしり侍らず。すべて此里の舊き人は兵亂の初に逃げ失せて、今住居する人は大かた他より移り來たる人なり。只一人の翁の侍るが、所に舊しき人と見えたまふ。時々あの家にゆきて、亡せたまふ人の菩提を弔はせ給ふなり。この翁こそ月日をもしらせ給ふべしといふ。勝四郎いふ、さては其翁の栖み給ふ家は何方にて侍るや。主いふ、こゝより百歩ばかり濱の方に、麻おほく種ゑたる畑の主にて、其所にちひさき庵して住ませたまふなりと敎ふ。勝四郎よろこびて、かの家にゆきて見れば、七十可の翁の腰は淺ましきまで屈まりたるが、庭竈の前に圓坐敷きて茶を啜り居る。翁も勝四郎と見るより、吾主何とて遲く歸り給ふといふを見れば、此里に久しき漆間の

翁といふ人なり。勝四郎、翁が高齢をことぶきて、次に京に行きて心ならずも逗りしより、前夜のあやしきまでを詳にかたりて、翁が壠を築きて祭りたまふ恩のかたじけなきを告げつつも涙とゞめがたし。翁いふ、吾主遠くゆきたまひて後は、夏の比より干戈を揮ひ出でて、里人は所所に遁れ、弱き者どもは軍民に召さるゝほどに、桑田にはかに狐兎の叢となる。只烈婦のみ主が秋を約ひたまふを守りて、家を出で給はず。翁も又足蹇ぎて百歩を難しとすれば、深く閉てこもりて出でず。一旦樹神などいふおそろしき鬼の栖所となりたりしを、稚き女子の矢武におはするぞ、老が物見たる中のあはれなりし。秋去り春來りて、其年の八月十日といふに

死りたまふ。惆しさのあまりに、老が手づから土を運びて柩を藏め、其終焉に殘したまひし筆の跡を壠のしるしとして、蘋蘩行潦の祭も心ばかりにものしけるが、翁もとより筆とる事をしもしらねば、其月日を紀す事もえせず。寺院遠ければ贈號を求むる方もなくて、五とせをすごし侍るなり。今の物語を

聞に、必ず烈婦の魂の來り給ひて、舊しき恨を聞えたまふなるべし。復びかしこに行きて念比にとぶらひ給へとて、杖を曳きて前に立ち、相ともに壠のまへに俯して聲を放げて歎きつゝも、其夜はそこに念佛して明しける。寢られぬまゝに翁かたりていふ、翁が祖父のその祖父すらも、生れぬはるかの往古の事よ。此郷に眞間の手兒女といふいと美しき娘子ありけり。家貧しければ、身には麻衣に青衿つけて、髮だも梳らず、履だも穿かずてあれど、面は望の夜の月のごと、笑めば花の艶ふが如、綾錦に裹める京女﨟にも勝りたれとて、この里人はもとより、京の防人等、國の隣の人までも、言をよせて戀ひ慕ばざるはなかりしを、手兒女物うき事に思ひ沈みつゝ、おほくの人の心に報いすとて、此浦曲の波に身を投げしことを、世の哀なる例とて、いにしへの人は歌にもよみたまひてかたり傳へしを、翁が稚かりしとき、母のおもしろく語り給ふをさへ、いと哀なることに聞きしを、此亡人の心は、昔の手兒女がをさなき心に幾らをかまさりて悲しかりけんと、

かたる〳〵涙さしぐみてとゞめかぬるぞ、老は物えこらへぬなりける。勝四郎が悲はいふべくもなし。此物がたりを聞きて、おもふあまりを田舍人の口鈍くもよみける。

古の眞間の手兒奈をかくばかり、
戀ひてしあらん眞間のてこなを

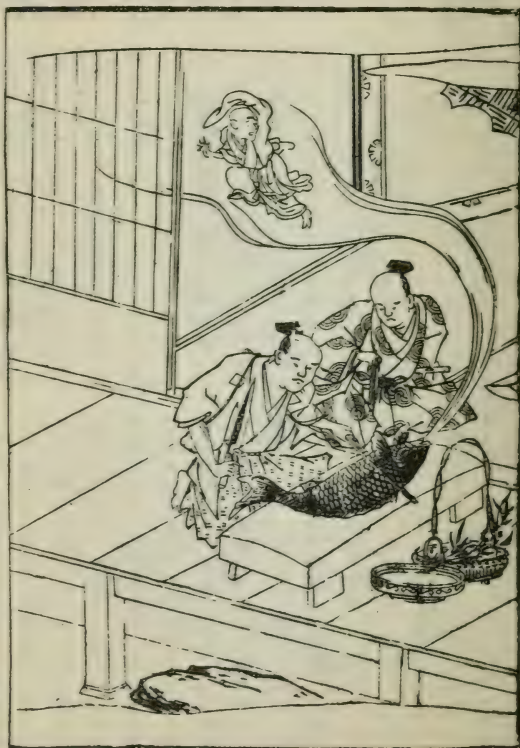
思ふ心のはしばかりをもえいはぬぞ、よくいふ人の心にもまさりて、あはれなりとやいはん。かの國にしば〳〵かよふ商人の聞き傳へてかたりけるなりき。

夢應の鯉魚

むかし延長の頃、三井寺に興義といふ僧ありけり。繪に巧みなるをもて名を世にゆるされけり。常に畫く所、佛像、山水、花鳥を事とせず。寺務の間ある日は湖に小船をうかべて、網引釣する泉郎に錢を與へ、獲たる魚をもとの江に放ちて、其魚の遊躍ぶを見ては畫きけるほどに、年を經て細妙にいたりけり。或るときは繪に心を凝して眠をさそへば、ゆめの裏に江に入りて大小の魚とともに遊ぶ。覺れば即て見つるままを畫きて壁に貼し、みづから呼びて夢應の鯉魚と名付けけり。その繪の妙なるを感でて乞要むるもの前後をあらそへば、只花鳥山水は乞ふにまかせてあたへ、鯉魚の繪はあながちに惜みて、人每に戲れていふ、生を殺し鮮を喰ふ凡俗の人に、法師の養ふ魚必ずしも與へずとなん。其繪と俳諧とともに天下に聞えけり。一とせ病に係りて、七日を經て忽に眼を閉ぢ、息絶えてむなしくなりぬ。徒弟友どちあつまりて歎き惜みけるが、只心頭のあたりの微し暖なるにぞ、若やと居めぐりて守りつゝも、三日を經にけるに、手足すこし動き出づるやうなりしが、忽ち長嘘を吐きて、眼をひらき、醒めたるがごとくに起きあがりて、人々にむかひ、我人事をわすれて旣に久しき日をか過しけん。衆弟等いふ、師三日前に息たえ給ひぬ。寺中の人々をはじめ、日比睦まじくかたり給ふ殿原も詣でたまひて、葬の事をもはかり給ひぬれど、只師が心頭の暖なるを見て、柩にも藏めで、かく守り侍りしに、今や蘇生りたまふにつきて、かしこくも物せざりしよと怡びあへり。興義點頭きていふ、誰にもあれ一人、檀家の平の助の殿の館に詣りて告さんは、法師こそ不思議に生き侍れ。君今酒を酌み、鮮き鱠をつくらしめたまふ。しばらく宴を罷めて寺に詣でさせたまへ。稀有の物がたり聞えま

ゐらせんとて、彼の人々のある形を見よ。我詞に露たがはじといふ。使異しみながら彼館に往きて其由をいひ入れてうかゞひ見るに、主の助をはじめ、令弟の十郎、家の子掃守など居めぐりて酒を酌みゐたる。師が詞のたがはぬを奇とす。助の館の人々此事を聞きて大に異しみ、先づ箸を止めて、十郎掃守をも召し具して寺に到る。興義枕をあげて路次の労をかたじけなうすれば、助も蘇生の賀を述ぶ。興義先づ問うていふ、君試に我いふ事を聞せたまへ。かの漁父文四に魚をあつらへたまふことありや。助驚きて、まことにさる事あり。いかにしてしらせたまふや。興義、かの漁父三尺あまりの魚を籠に入れて君が門に入る。君は賢弟と南面の所に碁を囲みておはす。掃守傍に侍りて、桃の實の大いなるを啗ひつゝ、奕の手段を見る。漁父が大魚を携へ來るを喜びて、高杯に盛りたる桃をあたへ、又盃をたまうて三獻飲ましめ給ふ。鱠手したり顔に魚をとり出でて鱠にせしまで、法師がいふ所たがはでぞあるらめといふに、助の人々此事を聞きて、或は異しみ、或はこゝち惑ひて、かく詳なる言のよしを頻に尋ぬるに、興義かたりていふ、我此頃病にくるしみて堪へがたきあまり、其死したるをもしらず、熱きこゝちすこしさまさんものをと、杖に扶けられて門を出づれば、病もやゝ忘れたるやうにて、籠の鳥の雲井にかへるこゝちす。山となく里となく行き〳〵て、又江の畔に出づ。湖水の碧なるを見るより、現なき心に浴びて遊びなんとて、そこに衣を脱ぎ去てゝ、身を跳らして深きに飛び入りつも、彼此に游ぎめぐるに、幼きより水に狎れたるにもあらぬが、慾ふにまかせて戯れけり。今思へば、愚なる夢ごころなりし。されども人の水に浮ぶは、魚のこゝろよきにはしかず。こゝにて又魚の遊を羨むこゝろおこりぬ。傍にひとつの大魚ありていふ、師のねがふ事いとやすし。待たせたまへとて、杳の底に去くと見しに、しばしして、冠装束したる人の、前の大魚に跨りて、許多の鼇魚を率ゐて浮び來り、我にむかひていふ、海若の詔あり。老僧かねて放生の功徳多し。今江に入りて魚の遊躍をねがふ。權に金鯉が服を授けて水府のたのしみをせさせ給ふ。只餌の香ばしきに昧まされて、釣の糸にかゝり身を亡ふことなかれといひて、去りて見えずなりぬ。不思議のあまりにおのが身をかへり見れば、いつのまに鱗金光を備へて、ひとつの鯉魚と化しぬ。

あやしとも思はで、尾を振り鰭を動して、心のまゝに逍遙す。まづ長等の山おろし、立ちゐる浪に身をのせて、志賀の大灣の汀に遊べば、かち人の裳のすそぬらすゆきかひに驚されて、比良の高山影うつる、深き水底に潜くとすれど、かくれ堅田の漁火によるぞうつゝなき。ぬば玉の夜中の潟にやどる月は、鏡の山の峯に清みて、八十の湊の八十隈もなくておもしろ。沖津島山、竹生島、波にうつろふ朱の垣こそおどろかるれ。さしも伊吹の山風に、旦妻船も漕ぎ出づれば、芦間の夢をさまされ、矢橋の渡する人の水なれ棹をのがれては、瀬田の橋守にいくそたびか追はれぬ。日あたゝかなれば浮び、風あらきときは千尋の底に遊ぶ。急にも飢ゑて食ほしげなるに、彼此に漁り得ずして狂ひゆばし食を求め得ずとも、なぞもあさまくほどに、忽文四が釣を垂るゝにあふ。しく魚の餌を飲むべきとてそこを去る。その餌はなはだ香し。心又河伯の戒をしばしありて飢ますゝ甚しければ、守りて思ふ、我は佛の御弟子なり。しかさねて思ふに、今は堪へがたし。た

とへ此餌を飲むとも、嗚呼に捕られんやは。もとより他は相識るものなれば、何のはゞかりかあらんとて、遂に餌をのむ。文四はやく糸を收めて我を捕ふ。こはいかにするぞと叫びぬれども、他かつて聞かず顔にもてなして、繩をもて我腮を貫ぬき、芦間に船を繋ぎ、我を籠に押入れて、君が門に進み入る。君は賢弟と南面の間に奕して遊ばせたまふ。掃守傍に侍りて菓を啗ふ。文四がもて來し大魚を見て、人々大に感でさせたまふ。我其とき人々にむかひ、聲をはり上げて、旁等は興義をわすれたまふか。宥させたまへ。寺にかへさせたまへと連に叫びぬれど、人々しらぬ形にもてなして、只手を拍つて喜びたまふ。鱠手なるもの、まづ我兩眼を左手

の指にてつよくとらへ、右手に礪ぎすませし刀をとりて爼盤にのぼし、旣に切るべかりしとき、我くるしさのあまりに大聲をあげて、佛弟子を害する例やある。我を助けよ助けよと哭叫びぬれど、聞入れず。終に切らるゝとおぼえて、夢醒めたりとかたる。人々大いに感で異み、師が物語につきて思ふに、

其度ごとに魚の口の動くを見れど、更に聲を出すことなし。かゝること、まのあたりに見しこそいと不思議なれとて、従者を家に走しめて、殘れる鱠を湖に捨てさせけり。興義これより病癒えて、杳の後天年をもて死りける。其終焉に臨みて畫く所の鯉魚數枚をとりて湖に散せば、畫ける魚紙繭をはなれて水に遊戯す。こゝをもて興義が繪世に傳はらず。其弟子成光なるもの、興義が神妙をつたへて時に名あり。閑院の殿の障子に鷄を畫きしに、生ける鷄この繪を見て蹴たるよしを、古き物がたりに載せたり。

雨月物語二之巻終

雨月物語巻之三

佛法僧

うらやすの國ひさしく、民作業をたのしむあまりに、春は花の下に息らひ、秋は錦の林を尋ね、しらぬ火の筑紫路も知らではと械まくらする人の、富士筑波の嶺々を心にしむるぞそゞろなるかな。伊勢の相可といふ郷に、拝志氏の人、世をはやく嗣に譲り、忌むこともなく頭おろして、名を夢然と改め、從來身に病さへなくて、彼此の旅寢を老のたのしみとする。季子作之治なるものが、生長の頑なるをうれひて、京の人見するとて、一月あまり二條の別業に逗りて、三月の末吉野の奥の花を見て、知れる寺院に七日ばかりかたらひ、此ついでに、いまだ高野山を見ず。いざとて、夏のはじめ青葉の茂みをわけつゝ、天の川といふより踰えて、摩尼の御山にいたる。道のゆくての嶮しきになづみて、おもはずも日かたぶきぬ。檀場諸堂靈廟、殘なく拝みめぐりて、こゝに宿からんといへど、ふつに答ふるものなし。そこを行く人に、所の掟をきけば、寺院僧坊に便なき人は、麓にくだりて明すべし。此山すべて旅人に一夜をかす事なしとかたる。いかがはせん。さすがにも老の身の、嶮しき山路を來しがうへに、事のよしを聞きて、大きに心倦みつかれぬ。作之治がいふ。日もくれ足も痛みて、いかゞしてあまたの道をくだらん。弱き身は草に臥すとも厭なし。只病み給はん事の悲しさよ。夢然云ふ、旅はかゝるをこそ哀ともいふなれ。今夜脚をやぶり、倦みつかれて山をくだるとも、おのが古郷にもあらず。翌のみち又はかりがたし。此山は扶桑第一の靈場、大師の廣德かたるに盡きず。殊にも來りて通夜し奉り、後世の事たのみ聞ゆべきに幸の時なれば、靈廟に夜もすがら法施し奉るべしとて、杉の下道のをぐらきを行き〳〵、靈廟の前なる燈籠堂の簀の子に上りて、雨具うち敷き座をまうけて、閑に念佛しつゝも、夜の更けゆくをわびてぞある。方五十町に開きて、あやしげなる林も見えず、小石だも掃ひし福田ながら、さすがにこゝは寺院とほく、陀羅尼鈴錫の音も聞えず。木立は雲をしのぎて茂みさび、道に界ふ水の音、ほそ〳〵と淸みわたりて、物

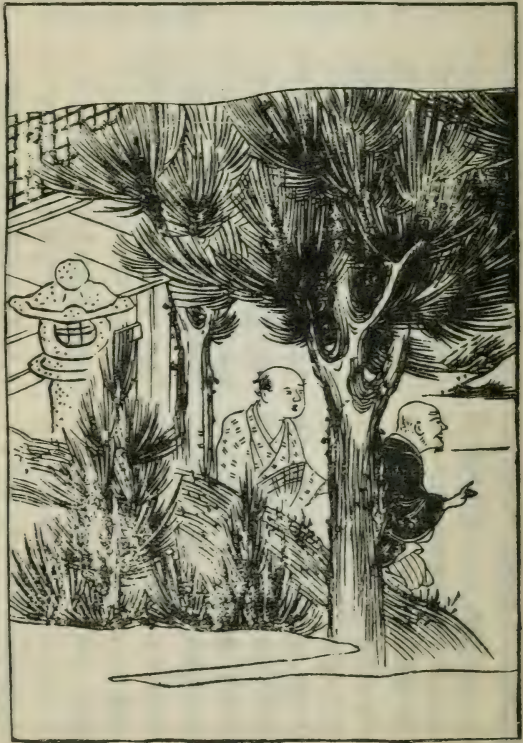
かなしき。寢られぬまゝに夢然かたりていふ、そも〳〵大師の神化、土石草木も靈を啓きて、八百とせあまりの今にいたりて、いよ〳〵あらたに、いよいよたふとし。遺芳歴踪多きが中に、此山なん第一の道場なり。大師いまぞかりけるむかし、遠く唐土にわたり給ひ、あの國にて感でさせ給ふ事おはして、此三鈷のとどまる所　我道を揚ぐる靈地なりとて、杳冥にむかひて抛げさせ給ふが、はた此山にとゞまりぬる。壇場の御前なる三鈷の松こそ、此物の落ちとゞまれし地なれと聞く。すべて此山の草木泉石靈ならざるはあらずとなん。こよひ不思議にもこゝに一夜をかり奉る事、一世ならぬ善縁なり。儞弱きとて努々信心怠るべからずと、小やかにかたるも、清みて心ぼそし。御廟のうしろの林にと覺えて、佛法々々となく鳥の音、山彦にこたへて近く聞ゆ。夢然目さむる心ちして、あなめづらし。あの啼鳥こそ、佛法僧といふならめ。かねて此山に栖みつるとは聞きしかど、まさに其音を聞きしといふ人もなきに、こよひのやどりまことに滅罪生善の祥

なるや。かの鳥は清淨の地をえらみて棲めるよしなり。上野の國迦葉山、下野の國二荒山、山城の醍醐の峯、河内の杵長山、就中此山にすむ事、大師の詩偈ありて、世の人よくしれり。

寒林獨座草堂曉
三寶之聲聞㆓一鳥㆒
一鳥有㆑聲人有㆑心
性心雲水倶了々

又ふるき歌に、

松の尾の峯靜かなる曙に、
あふぎて聞けば佛法僧啼く

むかし最福寺の延朗法師は、世にならびなき法華者なりしほどに、松の尾の御神、此鳥をして、常に延朗につかへしめ給ふよしをいひ傳ふれば、かの神垣にも巣むよしは聞えぬ。こよひの奇妙既に一鳥聲あり。我こゝにありて心なからんやとて、平生のたのしみとする俳諧風の十七言を、しばしうちかたぶいていひ出でける。

鳥の音も秘密の山の茂みかな

旅硯とり出でて、御燈の光に書いつけ、今一聲もがなと耳を倚くるに、思ひがけずも遠く寺院の方より、前を追ふ聲の嚴しく聞えて、やゝ近づき來り、何

人の夜深けて詣で給ふやと、異しくも恐しく、親子顔を見あはせて息をつめ、そなたをのみまもり居るに、はや前驅の若侍、橋板をあらゝかに踏みてこゝに來る。おどろきて堂の右に潜みかくるゝを、武士はやく見つけて、何者なるぞ。殿下のわたらせ給ふ。疾く下りよといふに、あわたゞしく簀子をくだり、土に俯して跪る。程なく多くの足音聞ゆる中に、沓音高く響きて、烏帽子直衣めしたる貴人堂に上り給へば、從者の武士四五人ばかり、右左に座をまうく。かの貴人人々に向ひて、誰々はなど來らざると課せらるゝに、やがてぞ參りつらめと奏す。又一群の足音して、威儀ある武士、頭まろげたる入道等、うち交りて、禮たてまつりて堂に昇る。貴人只今來りし武士にむかひて、常陸は何とておそく參りたるぞとあれば、かの武士いふ。白江熊谷の兩士、公に大御酒すゝめたてまつるとて、實やかなるに、臣も鮮き物一種調じまゐらせんため、御從に後れたてまつりぬと奏す。はやく酒殽をつらねてすゝめまゐらすれば、萬作酌まゐれとぞ課せらる。恐まりて美相の若士膝行りよりて、瓶子を捧ぐ。かなたこなたに杯をめぐらしていと興ありげなり。貴人又曰はく、絶えて紹巴が說話を聞かず。召せと宣ふに、呼びつぐやうなりしが、我跪りし背の方より、大いなる法師の面うちひらめきて、目鼻あざやかなる人の、僧衣かいつくろひて、座の末にまゐれり。貴人古語かれこれ問ひ辨へ給ふに、詳に答へたてまつるを、いと〱感でさせ給うて、他に祿とらせよと宣ふ。一人の武士、かの法師に問うていふ、此山は大德の啓き給うて、土石草木も靈なきはあらずと聞く。さるに玉川の流には毒あり。人飮む時は斃るゝが故に、大師のよませ給ふ哥とて、

わすれても汲みやしつらん旅人の
　高野の奥の玉川の水

と、いふことを聞き傳へたり。大德のさすがに此毒ある流をば、など涸せては果し給はぬや、いぶかしき事を、足下にはいかに辨へ給ふ。法師笑をふくみていふは、此歌は風雅集に撰み入れ給ふ。其端詞に、高野の奥の院へまゐる道に、玉川といふ河の水上に、毒虫おほかりければ、此流を飮むまじきよしをしめしおきて、後よみ侍りけると、ことわらせ給へば、足下のおぼえ給ふ如くなり。されど今の御疑僻言ならぬは、大師は神通自在にして、隱神を役して道なきをひらき、巖を鐫るには土を穿つ

よりも易く、大蛇を禁め、化鳥を奉仕へしめ給ふ事、天が下の人の仰ぎたてまつる功なるを思ふには、此歌の端の詞ぞまことしからね。もとより此玉川てふ川は、國々にありて、いづれをよめる哥も、其流のきよきを擧げしなるを思へば、こゝの玉川も毒ある流にはあらで、哥の意も、かばかり名に負ふ河の此山にあるを、こゝに詣づる人は忘るゝも、流の清きに愛でて、手に掬びつらんとよませ給ふにやあらんを、後の人の毒ありといふ狂言より、此端詞はつくりなせしものかとも思はるゝなり。又深く疑ふときには、此歌の調今の京の初の口風にもあらず。おほよそ此國の古語に、玉蘰、玉簾、珠衣の類は、形をほめ清きを賞むる語なるから、清水をも玉水、玉の井、玉河ともほむるなり。毒ある流をなど玉てふ語は冠らしめん。强に佛をたふとむ人の、歌の意に細妙しからぬは、これほどの訛は幾らをもしいづるなり。足下は歌よむ人にもおはせで、此歌の意異み給ふは、用意ある事こそと篤く感でにける。貴人をはじめ人々も、此ことわりを頻りに感でさせ給ふ。御堂のうしろの方に、佛法〳〵と啼音ちかく聞ゆるに、貴人杯をあげ給ひて、例の鳥絶えて鳴かざりしに、今夜の酒宴に榮あるぞ、紹巴いかにと課せ給ふ。法師かしこまりて、某が短句公にも御耳すゝびましまさん。こゝに旅人の通夜しけるが、今の世の俳諧風をまうして侍る。公にはめづらしくおはさんに、召して聞かせ給へといふ。それ召せと課せらるゝに、若きさむらひ夢然が方へむかひ、召し給ふぞ近う參れと云ふ。夢現ともわかで、おそろしさのまゝに、御まのあたりへはひ出づる。法師夢然にむかひ、前によみつる詞を公に申し上げよといふ。夢然恐る〳〵、何をか申しつる。更に覺え侍らず。只赦し給はれといふ。法師かさねて、秘密の山とは申さゞるや。殿下の問はせ給ふ。いそぎ申し上げよといふ。夢然いよ〳〵恐れて、殿下と課せ出され侍るは、誰にてわたらせ給ひ、かゝる深山に夜宴をもよほし給ふや。更にいぶかしき事に侍るといふ。法師答へて、殿下と申し奉るは、關白秀次公にてわたらせ給ふ。人々は木村常陸介、雀部淡路、白江備後、熊谷大膳、粟野杢、日比野下野、山口少雲、丸毛不心、隆西入道、山本主殿、山田三十郎、不破萬作、かく云ふは紹巴法橋なり。汝等不思議の御目見つかまつりたるは、前のことばいそぎ申し上げよといふ。頭に髮あらばふ

とるべきばかりに凄じく、肝魂も虚にかへるこゝちして、振ふ〱頭陀袋より清き紙取出でて、筆もしどろに書きつけてさし出すを、主殿取りてたかく吟じ上ぐる。

　鳥の音も秘密の山の茂みかな

貴人聞かせ給ひて、口がしこくもつかまつりしな。誰ぞ此末句をまうせとのたまふに、山田三十郎座をすゝみて、某つかうまつらんとて、しばしうちかたふきてかくなん。

　芥子たき明すみじか夜の牀

いかゞあるべきと紹巴に見する。よろしくまうされたりと、公の前に出すを見給ひて、片羽にもあらぬはと興じ給ひて、又杯を揚げてめぐらし給ふ。淡路と聞えし人、にはかに色を違へて、はや修羅の時にや。阿修羅ども御迎に来ると聞え侍る。立たせ給へといへば、一座の人々忽ち面に血を灑ぎし如く、いざ石田増田が徒に、今夜も泡吹かせんと勇みて立躁ぐ。秀次、木村に向はせ給ひ、よしなき奴にわが姿を見せつるぞ。他二人も修羅につれ来れと課せある。老臣の人々かけ隔りて、聲をそろへ、いまだ命つきざる者なり。例の悪業なせさせ給ひそといふ詞も、人々の形も、遠く雲井に行くがごとし。親子は氣絶えてしばしがうち死に入りけるが、しのゝめの明けゆく空に、ふる露の冷やかなるに生き出でしかど、いまだ明けきらぬ恐しさに、大師の御名をせはしく唱へつゝ、漸日出づると見て、いそぎ山をくだり、京にかへりて薬鍼の保養をなしける。一日夢然三條の橋を過ぐる時、悪ぎやく塚の事思ひ出づるより、かの寺眺められて、白晝ながら物凄しくありけると、京人にかたりしを、そがまゝにしるしぬ。

吉備津の釜

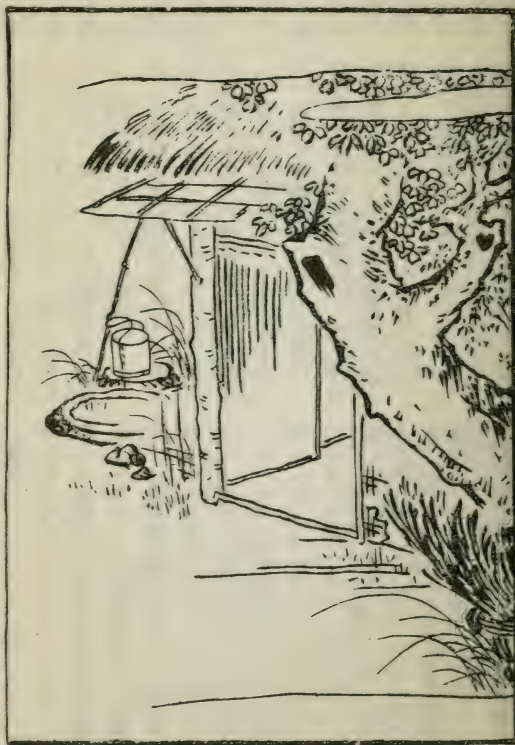
妒婦の養ひがたきも、老いての後其功を知ると。咨これ何人の語ぞや。害の甚しからぬも、商工を妨げ物を破りて、垣の隣の口をふせぎがたく、害の大いなるに及びては、家を失ひ、國をほろぼして、天が下に笑を傳ふ。いにしへより此毒にあたる人、幾許といふ事を知らず。死して蟒となり、或は霹靂を震うて怨を報ふ類は、其肉を醢にするとも飽くべからず。さるためしは希なり。夫のおのれをよく修めて教へなば、此患おのづから避くべきものを、只かりそめなる徒ごとに、女の慳しき性を募らしめて、其身の憂をもとむるにぞありける。禽を制するは氣にあり、婦を制するは其夫の雄々しきにありと

いふは、現にさることぞかし。吉備の國賀夜郡庭妹の郷に、井澤庄太夫といふものあり。祖父は播磨の赤松に仕へしが、去ぬる嘉吉元年の亂に、かの館を去りてこゝに來り、庄太夫にいたるまで、三代を經て春耕し秋收めて、家豐に暮しけり。一子正太郞なるもの、農業を厭ふあまりに、酒に亂れ色に耽りて、父が掟を守らず。父母これを歎きて私にはかるは、あはれ良人の女子の貌よきを娶りてあはせなば、渠が身もおのづから脩まりなんとて、あまねく國中をもとむるに、幸に媒氏ありていふ。吉備津の神主香央造酒が女子は、うまれだち秀麗にて、父母にもよく仕へ、かつ歌をよみ、箏に工なり。從來かの家は吉備の鴨別が裔にて、家系も正しければ、君が家に因み給ふは、果吉祥なるべし。此事の就らんは老が願ふ所なり。大人の御心いかにおぼさんやといふ。庄太夫大に怡び、よくも說かせ給ふものかな。此事我家にとりて千とせの計なりといへども、香央は此國の貴族にて、我は氏なき田夫なり。門戶敵すべからねば、おそらくは肯ひ給はじ。媒氏の翁笑をつくりて、大人の謙り給ふ事甚し。我かならず萬歲を諷ふべしと、往きて香央に說けば、彼方にもよろこびつゝ、妻なるものにもかたらふに、妻もいさみていふ、わが女子既に十七歲になりぬれば、朝夕によき人がな娶せんものをと、心もおちゐ侍らず。はやく日をえらみて、聘禮を納れ給へと、强にすゝむれば、盟約すでになりて、井澤にかへりごとす。即て聘禮を厚くとゝのへて送り納れ、よき日をとりて、婚儀をもよほしけり。猶幸を神に祈るとて、巫子祝部を召しあつめて、御湯をたてまつる。そもそも當社に祈誓する人は、數の祓物を供へて御湯を奉り、吉祥凶祥を占ふ。巫子祝詞をはり、湯の沸上るにおよびて、吉祥には釜の鳴音牛の吼ゆるが如し。凶しきは釜に音なし。是を吉備津の御釜秡といふ。さるに香央が家の事は、神の祈けさせ給はぬにや。只秋の虫の叢にすだくばかりの聲もなし。こゝに疑をおこして、此祥を妻に語らふ。妻更に疑はず。御釜の音なかりしは、祝部等が身の淸からぬにぞあらめ。既に聘禮を納めしうへ、かの赤繩に繫ぎては、仇ある家、異なる域なりとも易ふべからずと聞くものを、ことに井澤は弓の本末をもしりたる人の流にて、掟ある家と聞けば、今否むとも承はじ。ことに佳婿の麗なるをほの聞きて、我が兒も日をかぞへて待ちわぶる物を、

今のよからぬ言を聞くものならば、不慮なる事をや仕出でん。其とき悔ゆるともかへらじと、言を盡して諫むるは、まことに女の意ばへなるべし。香央も従來ねがふ因なれば深く疑はず、妻のことばに從きて、婚儀とゝのひ、兩家の親族氏族、鶴の千とせ龜の萬代をうたひことぶきけり。香央の女子磯良、かしこに徃きてより、夙に起きおそく臥して、常に舅姑の傍を去らず、夫が性をはかりて、心をつくして仕へければ、井澤夫婦は孝節を感でたしとて、歡びに耐へねば、正太郎も其志に愛でて、むつまじくかたらひけり。されどおのがまゝの奸けたる性はいかにせん。いつの比より鞆の津の袖といふ妓女に、ふかくなじみて、遂に贖ひ出し、ちかき里に別莊をしつらひ、かしこに日をかさねて、家にかへらず。磯良これを怨みて、或は舅姑の忿に托せて諫め、或日は徒なる心をうらみかこてども、大虚にのみ聞きなして、後は月をわたりてかへり來らず。父は磯良が切なる行止を見るに忍びず、正太郎を責めて押籠めける。磯良これを悲しがりて、朝夕の奴も殊に實やかに、かつ袖が方へも私に物を餉りて、信のかぎりをつくしける。一日父が宿にあらぬ間に、正太郎磯良をかたらひていふ、御許の信ある操を見て、今はおのれが身の罪をくゆるばかりなり。かの女をも古郷に送りてのち、父の面を和め奉らん。渠は播磨の印南野の者なるが、親もなき身の淺ましくてあるを、いとかなしく思ひて、憐をもかけつるなり。我に捨てられなば、はた船泊の妓女となるべし。おなじ淺ましき奴なりとも、京は人の情もありと聞けば、渠をば京に送りやりて、榮ある人に仕へさせたく思ふなり。我かくてあれば、萬に貧しかりぬべし。路の代、身にまとふ物も誰がはかりごとしてあたへん。御許此事をよくして、渠を惠み給へと、ねんごろにあつらへけるを、磯良いとも喜しく、此事安くおぼし給へとて、私におのが衣服調度を金に貿へ、猶香央の母が許へも、僞りて金を乞ひ、正太郎に與へける。此金を得て、密に家を脱れ出で、袖なるものを倶して、京の方へ逃げのぼりける。かくまでたばかられしかば、今はひたすらにうらみ歎きて、遂に重き病に臥しにけり。井澤香央の人々、彼を惡み此を哀みて、專ら醫の驗をもとむれども、粥さへ日々にすたりて、よろづにたのみなくぞ見えにけり。こゝに播磨の國印南郡荒井の里に、彥六といふ男あり。渠は袖とちか

き従弟の因あれば、先づこれを訪うて、しばらく足を休めける。彦六正太郎にむかひて、京なりとて人ごとに頼もしくもあらじ。こゝに駐られよ。一飯をわけて、ともに過活のはかりごとあらんと、たのみある詞に、心おちゐて、こゝに住むべきに定めける。彦六我が住む隣なる破屋をかりて住ましめ、友得たりとて怡びけり。しかるに、袖風のこゝちといひしが、何となく惱み出でて、鬼化のやうに狂はしげなれば、こゝに來りて幾日もあらず、此禍に係る悲しさに、みづからも食さへわすれて抱き扶くれども、只音をのみ泣きて胸窮り堪へがたげに、さむれば常にかはることもなし。窮鬼といふものにや。古郷に捨てし人の、もしやと獨胸苦し。彦六これを諫めて、いかでさる事のあらん。疫といふものゝ惱ましきは、あまた見來りぬ。熱き心少しさめたらんには、夢わすれたるやうなるべしと、やすげにいふぞたのみなる。看る〳〵露ばかりのしるしもなく、七日にして空しくなりぬ。天を仰ぎ、地を敲きて哭き悲しみ、ともにもと物狂はしきを、さま〴〵といひ和めて、かくてはとて遂に曠野の烟となしはてぬ。骨をひろひ壠を築きて、塔婆を營み僧を迎へて菩提のことねんごろに弔ひける。正太郎今は俯して黄泉をしたへども、招魂の法をもとむる方なく、仰ぎて古郷をおもへば、かへりて地下よりも遠きここちせられ、前に渡なく、後に途をうしなひ、晝はしみらに打ち臥して、夕夕毎には壠のもとに詣でて見れば、小草はやくも繁りて、虫のこゑすゞろに悲し。此秋のわびしきは、我が身ひとつぞと思ひつゞくるに、天雲のよそにも同じなげきありて、ならびたる新壠あり。こゝに詣づる女の、世にも悲しげなる形して、花をたむけ、水を灌ぎたるを見て、あな哀、わかき御許の、かく氣疎きあら野にさまよひ給ふよといふに、女かへり見て、我が身夕々ごとに詣で侍るには、殿はかならず前に詣で給ふ。さりがたき御方に別れ給ふにてやまさん。御心のうちはかりまゐらせて悲しと潸然となく。正太郎いふ、さる事に侍り。十日ばかりさきに、かなしき婦を亡ひたるが、世に殘りて憑なく侍れば、こゝに詣づることをこそ、心放にものし侍るなれ。御許にもさこそましますなるべし。女いふ、かく詣でつかうまつるは、憑みつる君の御迹にて、いつ〳〵の日こゝに葬り奉る。家に殘ります女君のあまりに歎かせ給ひて、此頃はむつかしき病にそませ給

ふなれば、かくかはりまゐらせて、香花をはこび侍るなりといふ。正太郎云ふ、刀自の君の病み給ふもいとことわりなるものを、そも古人は何人にて、家は何地に住ませ給ふや。女いふ。憑みつる君は此國には由縁ある御方なりしが、人の讒にあひて、領所をも失ひ、今はこの野の隈に侘しくて住ませ給ふ。女君は國の隣までも聞え給ふ美人なるが、此君によりてこそ家所領をも亡し給ひぬれとかたる。此物がたりに心のうつるとはなくて、さてしもその君のはかなくて住ませ給ふは、こゝ近きにや。訪ひまゐらせて、同じ悲をもかたり和まん。倶し給へといふ。家は殿の來らせ給ふ道の、すこし引入りたる方なり。便なくませば、時々訪はせ給へ。待ち詫び給はんものをと、前に立ちてあゆむ。二丁あまりを來て、ほそき徑あり。こゝよりも、一丁ばかりをあゆみて、小暗き林の裏にちひさき草屋あり。竹の扉のわびしきに、七日あまりの月のあかくさし入りて、ほどなき庭の荒れたるさへ見ゆ。ほそき燈火の光、窓の紙をもりてうらさびし。こゝに待たせ給へ

とて、内に入りぬ。苔むしたる古井のもとに、立ちて見入るゝに、唐紙すこし明きたる間より、火影吹きあふちて、黒棚のきらめきたるもゆかしく覺ゆ。女出で來りて、御訪のよし申しつるに、入らせ給へ。物隔てゝかたりまゐらせんと、端の方へ膝行り出で給ふ。彼所に入らせ給へとて、前栽をめぐりて、奥の方へともなひ行く。二間の客殿を人の入るばかりあけて、低き屏風を立て、古き衾の端出でて、主はこゝにありと見えたり。正太郎かなたに向ひて、はかなくて病にさへそませ給ふよし、おのれもいとほしき妻を亡ひて侍れば、おなじ悲をも問ひかはしまゐらせんとて、推して詣で侍りぬといふ。あるじの女屏風すこし引きあけて、めづらしくもあひ見奉るものかな。つらき報の程しらせまゐらせんといふに、驚きて見れば、古郷に殘せし磯良なり。顔の色いと青ざめて、たゆき眼すざましく、我を指したる手の青くほそりたる恐しさに、あなやと叫んでたふれ死す。時うつりて生き出づ。眼をほそくひらき見るに、家と見しは、もとありし荒野の

三昧堂にて、黒き佛のみぞ立たせましま す。里遠き犬の聲を力に、家に走りかへりて、彦六にしか〳〵のよしを語りければ、なでふ狐に欺かれしなるべし。心の臆れたるときは、かならず迷し神の魘ふものぞ。足下のごとく、虚弱き人のかく患に沈みしは、神佛に祈りて、心を收めつべし。刀田の里にたふとき陰陽師のゐます。身禊して厭符をも戴き給へと、いざなひて陰陽師の許にゆき、はじめより詳にかたりて、此占をもとむ。陰陽師占へ考へていふ、災すでに窮りて易からず。さきに女の命をうばひ、怨猶盡きず、足下の命も旦夕にせまる。此鬼世を去りぬるは、七日前なれば、今日より四十二日が間、戸を閉て丶、おもき物齋すべし。我が禁を守らば、九死を出でて全からんか。一時を過るともまぬかるべからずと、かたくをしへて筆をとり、正太郎が背より手足におよぶまで、篆籀のごとき文字を書き、猶、朱符あまた紙にしるして與へ、此呪を戸毎に貼して、神佛を念ずべし。あやまちして身を亡ぶることなかれと敎ふるに、恐れみ且よろこびて、家にかへり、朱符を門に貼し、窓に貼して、おもき物齋にこもりける。其夜三更の比おそろしきこゑして、あなにくや。こゝにたふとき符文を設けつるよとつぶやきて、復び聲なし。恐ろしさのあまりに長き夜をかこつ。程なく夜明けぬるに、生き出でて、急ぎ彦六が方の壁を敲きて、夜の事をかたる。彦六もはじめて陰陽師が詞を奇なりとして、おのれも其夜は寢ねずして、三更の比を待ちくれける。松ふく風物を僵すがごとく、雨さへふりて常ならぬ夜のさまに、壁を隔て丶聲をかけあひ、既に四更にいたる。下屋の窓の紙に、さと赤き光さして、あな惡や。こゝにも貼しつるよといふ聲、深き夜にはいとゞ凄しく、髪も生毛も悉く聳立ちて、しばらくは死に入りたり。明くれば夜のさまをかたり、暮るれば明くるを慕ひて、此月日頃千歳を過ぐるよりも久し。かの鬼も夜ごとに家を繞り、或は屋の棟に叫びて、忿れる聲夜ましにすざまし。かくして四十二日といふ其夜にいたりぬ。今は一夜にみたしぬれば、殊に愼みて、やゝ五更の天もしら〳〵と明けわたりぬ。長き夢のさめたる如く、やがて彦六をよぶに、壁によりていかにと答ふ。おもき物いみも既に滿てぬ。絶えて兄長の面を見ず。なつかしさに、かつ此月頃の憂さ怕ろしさを心のかぎりいひ和まん。眠さまし給へ。我も外の方に出でんとい

ふ。彦六用意なき男なれば、今は何かあらん。いざこなたへわたり給へと、戸を明くる事半ならず、となりの軒にあなやと叫ぶ聲耳をつらぬきて、思はず尻居に坐す。こは正太郎が身のうへにこそと、斧引き提げて大路に出づれば、明けたるといひし夜はいまだ暗く、月は中天ながら、影朧々として風冷やかに、さて正太郎が戸は明けはなして、その人は見えず。内にや逃げ入りつらんと走り入りて見れども、いづくに竄るべき住居にもあらねば、大路にや倒れけんと、もとむれども、其わたりには物もなし。いかになりつるやと、あるひは異しみ、或は恐る〳〵ともし火を挑げて、こゝかしこを見廻るに、明けたる戸腋の壁に、腥々しき血灌ぎ流れて地につたふ。されど屍も骨も見えず。月あかりに見れば、軒の端にものあり。ともし火を捧げて照し見るに、男の髪の髻ばかりかゝりて、外には露ばかりのものもなし。淺ましくもおそろしさは筆につくすべうもあらずなん。夜も明けてちかき野山を探しもとむれども、つひに其跡さへなくてやみぬ。

此事井澤が家へもいひおくりぬれば、涙ながらに香央にも告げしらせぬ。されば陰陽師が占のいちじるき、御釜の凶祥もはたたがはざりけるぞ、いともたふとかりけるとかたり傳へけり。

雨月物語三之巻終

雨月物語卷之四

蛇性の婬

いつの時代なりけん、紀の國三輪が崎に、大宅の竹助といふ人ありけり。此人海の幸ありて、海郎どもあまた養ひ、鰭の廣物、狹き物を盡して漁り、家豐に暮しける。男子二人、女子一人をもてり。太郎は質朴にてよく生産を治む。二郎の女子は、大和の人の娶に迎へられて、彼所にゆく。三郎の豐雄なるものあり。生長優しく、常に都風たる事をのみ好みて、過活心なかりけり。父是を憂ひつゝ思ふは、家財をわかちたりとも、即て人の物と爲さん。さりとて他の家を嗣がしめんも、はたうたてき事聞くらんが病しき。只なすまゝに生し立てゝ、博士にもなれかし、法師にもなれかし、命の極は太郎が羈物にてあらせんとて、強ひて掟をもせざりけり。此豐雄、新宮の神奴安倍の弓麿を師として行き通ひける。九月下旬、けふはことになごりなく和ぎたる海の、暴に東南の雲を生して、小雨そぼふり來る。師が許にて傘かりて歸るに、飛鳥の神秀倉見やらるゝ邊より、雨もやゝ頻なれば、其所なる海郎が屋に立ちよる。あるじの老はひ出でて、こは大人の弟子の君にてます。かく賤しき所に入らせ給ふぞいと恐まりたる事、是敷きて奉らんとて、圓座の汚なげなるを淸めてまゐらす。霎時息るほどは、何か厭ふべき。なあわたゞしくせそとて休らひぬ。外の方に麗しき聲して、此軒しばし惠ませ給へといひつゝ入來るを、奇しと見るに、年は廿にたらぬ女の、顏容髮のかゝり、いと艶ひやかに、遠山ずりの色よき衣着て、丁鬟の十四五ばかりの淸げなるに、包みし物もたせ、しとゞに濡れてわびしげなるが、豐雄を見て、面さと打ち赤めて、耻かしげなる形の貴やかなるに、不慮に心動きて、且思ふは、此邊にかうよろしき人の住むらんを、今まで聞かぬ事はあらじを、此は都人の三山詣せし次に、海愛らしくこゝに遊ぶらん。さりとて男だつ者もつれざるぞいとはしたなる事かなと思ひつゝ、すこし身退きて、こゝに入らせ給へ。雨もやがてぞ休みなんといふ。女しばし宥させ給へとて、ほどなき住ゐなれば、つい並ぶやうに居るを、見るに近まさり

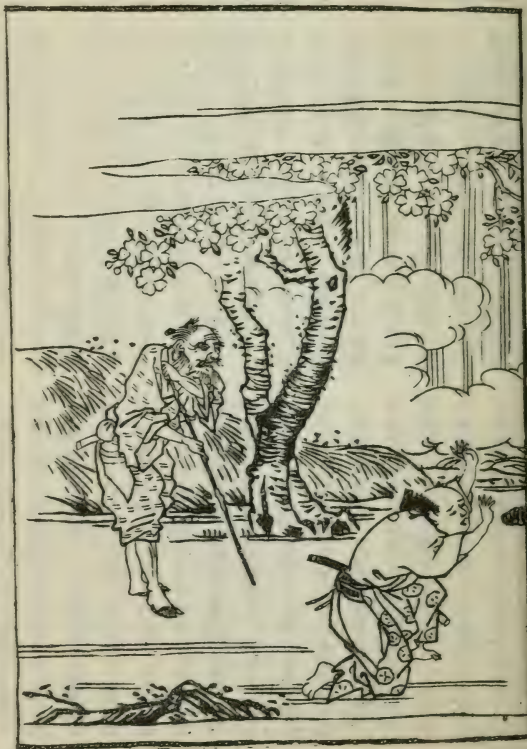
して、此世の人とも思はれぬばかり美しきに、心も空にかへる思して、女にむかひ、貴なるわたりの御方とは見奉るが、三山詣やし給ふらん。峯の溫泉にや出立ち給ふらん。かうすざましき荒礒を何の見所ありて、狩りくらし給ふ。こゝなんいにしへの人の、

くるしくもふりくる雨か三輪が崎
　佐野のわたりに家もあらなくに

と、よめるは、まことけふのあはれなりける。此家賤しけれど、おのれが親の目かくる男なり。心ゆりて雨休め給へ。そもいづ地旅の御宿りとはし給ふ。御見送せんも却りて無禮なれば、此傘もて出で給へといふ。女、いと喜しき御心を聞え給ふ。其御思に乾してまゐりなん。都のものにてもあらず。此近き所に年來住みこし侍るが、けふなんよき日とて、那智に詣で侍るを、暴なる雨の恐しさに、やどらせ給ふともしらで、わりなくも立ちよりて侍る。こゝより遠からねば、此小休に出で侍らんといふを、强に此傘もていき給へ。何の便にも求めなん。雨は更に休みたりともなきを、さて御住居はいづ方ぞ。是より使奉らんといへば、新宮の邊にて、縣の眞女兒が家はと尋ね給はれ。日も暮なん、御恵のほどを指戴きて歸りなんとて、傘とりて出づるを、見送りつも、あるじが簑笠かりて家に歸りしかど、猶俤の露忘れがたく、しばしまどろむ曉の夢に、かの眞女兒が家に尋ねいきて見れば、門も家もいと大きに造りなし、蔀おろし簾垂れこめて、ゆかしげに住みなしたり。眞女兒出迎ひて、御情わすれがたく待ち戀ひ奉る。此方に入らせ給へとて、奥の方にいざなひ、酒菓子種々と管待しつゝ、喜しき酔ひごこちに、つひに枕をともにしてかたるとおもへば、夜明けて夢さめぬ。現ならましかばと思ふ心のいそがしきに、朝食も打忘れてうかれ出でぬ。新宮の郷に來て、縣の眞女兒が家はと尋ぬるに、更にしりたる人なし。午時かたぶくまで尋ね勞ひたるに、かの丁鬟東の方よりあゆみ來る。豐雄見るより大に喜び、娘子の家はいづくぞ。傘もとむとて尋ね來るといふ。丁鬟打ちゑみて、よくも來ませり。こなたに歩み給へとて、前に立ちてゆく〳〵、幾ほどもなく、こゝぞと聞ゆる所を見るに、門高く造りなし、家も大きなり。蔀おろし、簾たれこめしまで、夢の裏に見しと露たがはぬを、奇しと思ふ〳〵門に入る。丁鬟走り入りて、傘の主詣で給ふを誘ひ奉るといへば、いづ方にますぞ。こち迎へませといひつゝ立出

づるは眞女子なり。豐雄、こゝに安部の大人とまうすは、年來物學ぶ師にてます。彼所に詣づる便に、傘とりて歸るとて、推して參りぬ。御住居見おきて侍れば、又こそ詣で來んといふを、眞女子強にとゞめて、まろや、努出し奉るなといへば、了鬟立ちふたがりて、傘强ひて惠ませ給ふならずや。其がむくいに強ひてとゞめまゐらすとて、腰を押して南面の所に迎へける。板敷の間に床疊を設けて、几帳御厨子の餝、壁代の繪なども、皆古代のよき物にて、倫の人の住居ならず。眞女子立ち出でて、故ありて人なき家とはなりぬれば、實やかなる御饗もえし奉らず。只薄酒一杯すゝめ奉らんとて、高杯平杯の淸らなるに、海の物山の物盛りならべて、瓶子土器擎げて、まろや酌まゐる。豐雄また夢心してさむるやと思へど、正に現なるを却りて奇しみゐたる。客も主もともに醉ひごこちなるとき、眞女子杯をあげて、豐雄にむかひ、花精妙し櫻が枝の水にうつろひなす面に、春吹く風をあやなし、梢たちぐく鶯の艶ある聲していひ出づるは、面なき事のいはで病みなんも、いづれの神になき名負すらんかし。努、徒なる言にな聞き給ひそ。故は都の生なるが、父にも母にもはやう離れまゐらせて、乳母の許に成長りしを、此國の受領の下司縣の何某に迎へられて、伴ひ下りしは、はやく三とせになりぬ。夫は任はてぬ。この春、かりそめの病に死し給ひしかば、便なき身とはなり侍る。都の乳母も尼になりて、行方なき修行に出でしと聞けば、彼方も亦しらぬ國とはなりぬるをあはれみ給へ。きのふの雨のやどりの御惠に、信ある御方にこそとおもふ物から、今より後の齡をもて、御宮仕し奉らばやと願ふを、汚なき物に捨て給はずば、此一杯に千とせの契をはじめなんといふ。豐雄もとよりかゝるをこそと、亂心なる思ひ妻なれば、塒の鳥の飛立つばかりには思へど、おのが世ならぬ身を顧れば、親兄弟のゆるしなき事をと、かつ喜しみ、且恐れみて、頓に答ふべき詞なきを、眞女子わびしがりて、女の淺き心より、嗚呼なる事をいひ出でて、歸るべき道なきこそ面なけれ。かう淺ましき身を海にも沒らで、人の御心を煩はし奉るは、罪深きこと、今の詞は徒ならねども、只醉ひごこちの狂言におぼしとりて、こゝの海にすて給へかしといふ。豐雄、はじめより都人の貴なる御方とは見奉るこそ賢かりき。鯨よる濱に生立ちし身の、かく喜しきことといつかは聞ゆべき。即ての

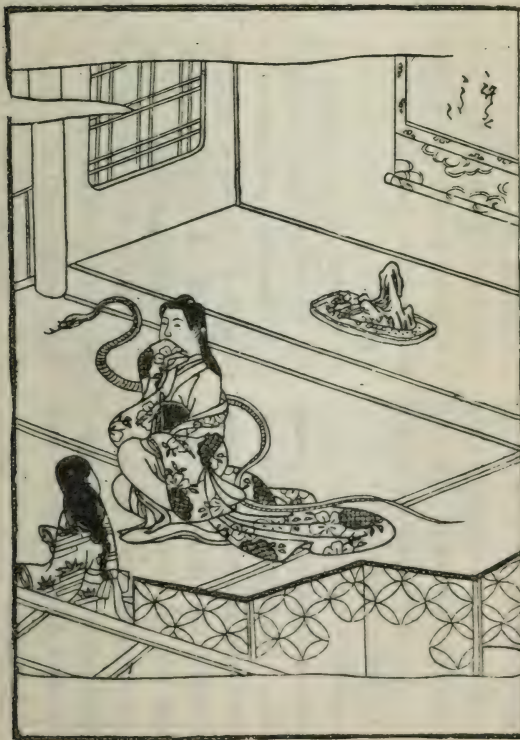
御答もせぬは、親兄に仕ふる身の、おのが物とては爪髮の外なし。何を祿に迎へまゐらせん便もなければ、身の徳なきをくゆるばかりなり。何事をもおぼし耐へ給はゞ、いかにも〳〵後見し奉らん。孔子さへ倒るゝ戀の山には、孝をも身をも忘れてといへば、いと喜しき御心を聞きまゐらするうへは、貧しくとも、時々こゝに住ませ給へ。こゝに前の夫の二つなき寶にめで給ふ帶あり。これ常に帶せ給へとてあたふるを見れば、金銀を餝りたる太刀の、あやしきまで鍛うたる古代の物なりける。物のはじめに辭みなんは祥あしければとて、とりて納む。今夜はこゝに明かさせ給へとて、あながちにとゞむれど、まだ赦なき旅寢は親の罪し給はん。明の夜よく僞りて詣でなんとて出でぬ。其夜も寢がてに明けゆく。太郎は網子とゝのふるとて、晨て起出で、豊雄が枕閨の戸の間を、ふと見入りたるに、消え殘りたる灯火の影に、輝々しき太刀を枕に置きて臥したり。あやし、いづちより求めぬらんとおぼつかなくて、戸をあらゝかに明くる音に目さめぬ。太郎

があるを見て、召し給ふかといへば、輝々しき物を枕に置きしは何ぞ。價貴き物は海人の家にふさはしからず。父の見給はゞいかに罪し給はんといふ。豊雄、財を費して買ひたるにもあらず。きのふ人の得させしをこゝに置きしなり。太郎、いかでさる寶をくるゝ人、此邊にあるべき。あなむつかしの唐言書きたる物を買ひたむるさへ、世の費なりと思へど、父の默りておはすれば、今までもいはざるなり。其太刀帯びて大宮の祭を邀るやらん。いかに物に狂ふぞといふ聲の高きに、父聞きつけて　徒者が何事をか仕出でつる。こゝにつれ來よ、太郎と呼ぶに、いづちにて求めぬらん、軍將等の佩き給ふべき、輝々しき物を買ひたるはよからぬ事、御目のあたりに召して問ひあきらめ給へ。おのれは網子どもの怠るらんと云ひ捨て出でぬ。母、豊雄を召して、さる物何の料に買ひつるぞ。米も錢も太郎が物なり。吾主が物とて何をか持ちたる。日來は爲すまゝに置きつるを、かくて太郎に惡まれなば、天地の中に何國に住むらん。賢き事をも學びたる者が、

など是ほどの事わいだめぬぞといふ。豐雄、寶に買ひたる物にあらず。さる由縁有つて人の得させしを、兄の見咎めてかくの給ふなり。父、何の譽ありてさる寶をば人のくれたるぞ。更におぼつかなき事、只今所縁かたり出でよと罵る。豐雄、此事只今は面俯なり。人傳に申し出で侍らんといへば、親兄にいはぬ事を誰にかいふぞと、聲あららかなるを、太郎の嫁の刀自傍にありて、此事愚なりとも聞き侍らん。入らせ給へと宥むるに、つい立ちていりぬ。豐雄刀自にむかひて、兄の見咎め給はずとも、密に姉君をかたらひてんと思ひ設けつるに、速く責なまるゝ事よ。かう〳〵の人の女のはかなくてあるが、後身してよとて賜へるなり。己が世しらぬ身の御赦さへ、なき事は重き勘當なるべければ、今さら悔ゆるばかりなるを、姉君よく憐み給へといふ。刀自打笑みて、男子のひとり寢し給ふが、兼ていとほしかりつるに、いとよき事ぞ。愚なりともよくいひとり侍らんとて、其夜太郎に、かう〳〵の事なるは、幸におぼさずや。父君の前をもよきにいひなし給へといふ。太郎眉を顰めて、あやし。此國の守の下司に、縣の何某と云ふ人を聞かず。我が家保正なれば、さる人の亡くなり給ひしを聞えぬ事あらじを、まづ太刀こゝにとりて來よといふに、刀自やがて携へ來るを、よくよく見をはりて長嘘をつきつゝもいふは、こゝに恐しき事あり。近來都の大臣殿の御願の事滿たしめ給ひて、權現におほくの寶を奉り給ふ。さるに此神寶ども、御寶藏の中にて頓に失せしとて、大宮司より國の守に訴へ出で給ふ。守此賊を探り捕ふために、助の君文屋の廣之、大宮司の館に來て、今專らに此事をはかり給ふよしを聞きぬ。此太刀いかさまにも下司などの帶くべき物にあらず。猶父に見せ奉らんとて、御前に持ちいきて、かう〳〵の恐しき事のあなるは、いかゞ計らひ申さんといふ。父面を青くして、こは淺ましき事の出できつるかな。日來は一毛をもぬかざるが、何の報にてかう良からぬ心や出できぬらん。他よりあらはれなば、此家をも絶されん。祖の爲子孫の爲には、不孝の子一人惜しからじ。明日は訴へ出でよといふ。太郎夜の明くるを待ちて、大宮司の館に來り、しか〳〵のよしを申出でて、此太刀を見せ奉るに、大宮司驚きて、是なん大臣殿の獻り物なりといふに、助聞き給ひて、猶失せし物問ひあきらめん。召捕れとて武士ら十人ばかり、太郎を前にたてゝゆく。

豐雄かゝる事をもしらで書見ゐたるを、武士ら押しかゝりて捕ふ。こは何の罪ぞといふをも聞入れず縛めぬ。父母太郎夫婦も今は淺ましと歎きまどふばかりなり。公廳より召し給ふ。疾くあゆめとて、中にとりこめて館に追ひもてゆく。助、豐雄をにらまへて、儞神寶を盜みとりしは例なき國津罪なり。猶種々の財はいづ地に隱したる。明らかにまうせといふ。豐雄漸此事を覺り、涙を流して、おのれ更に盜をなさず。かう〳〵の事にて縣の何某の女が、前の夫の帶びたるなりとて得させしなり。今にもかの女召して、おのれが罪なき事を覺らせ給へ。助、いよゝ怒りて、我が下司に縣の姓を名のるものある事なし。かく僞る刑ます〳〵大なり。豐雄、かく捕はれていつまで僞るべき。あはれ、かの女召して問はせ給へ。助、武士らに向ひて、縣の眞女子が家はいづくなるぞ。渠を押して捕へ來れといふ。武士ら、かしこまりて又豐雄を押したてゝ、彼所に行きて見るに、嚴めしく造りなせし門の柱も朽ちくさり、軒の瓦も大かたは碎けおちて、草しのぶ生ひさがり、人住むとは見えず。豐雄是を見て、只あきれにあきれゐたる。武士らかけ廻りて、ちかきとなりを召しあつむ。木伐る老米かつ男ら、恐れ惑ひて跪る。武士他らにむかひて、此家何者が住みしぞ。縣の何某が女のこゝにあるはまことかといふに、鍛冶の翁はひ出でて、さる人の名はかけてもうけ給はらず。此家三とせばかり前までは、村主の何某といふ人の賑はしくて住み侍るが、筑紫に商物積みてくだりし、其船行方なくなりて後は、家に殘る人も散々になりぬるより、絶えて人の住むことなきを、此男のきのふこゝに入りて漸して歸りしを奇しとて、此漆師の老が申されしといふに、さもあれ、よく見極めて殿に申さんとて、門押しひらきて入る。家は外よりも荒れまさりけり。なほ奧の方に進みゆく。前栽廣く造りなしたり。池は水あせて、水草も皆枯れ、野ら藪生ひかたぶきたる中に、大きなる松の吹倒れたるぞ物すざまし。客殿の格子戶をひらけば、腥き風のさと吹きおくりきたるに、恐れまどひて、人々後にしりぞく。豐雄只聲を呑みて歎きゐる。武士の中に、巨勢の熊檮なる者膽ふとき男にて、人々我後に從きて來れとて、板敷をあらゝかに踏みて進みゆく。塵は一寸ばかり積りたり。鼠の糞ひりちらしたる中に、古き帳を立て、花の如くなる女ひとりぞ坐る。熊檮女にむかひて、國の守の

召しつるぞ。急ぎまかれといへど、答もせであるを、近く進みて捕うとせしに、忽ち地も裂くるばかりの霹靂鳴響くに、許多の人逃ぐる間もなくて、そこに倒る。然て見るに、女はいづち行きけん見えずなりにけり。此床の上に輝々しき物あり。人々恐る〱いきて見るに、狛錦、呉の綾、倭文纏、楯、槍、靫、鍬の類、此失せつる神寶なりき。武士らこれをとりもたせて、怪しかりける事どもを詳に訴ふ。助も、大宮司も、妖怪のなせる事をさとりて、豐雄を責む事をゆるくす。されど當罪免れず。守の館にわたされて牢裏に繋がる。大宅の父子多くの物を賄して、罪を贖ふによりて、百日がほどに赦さる丶事を得たり。かくて世にたち接らんも面俯なり。姉の大和におはすを訪ひて、しばし彼所に住まんといふ。げにかう憂め見つる後は、重き病をも得るものなり。ゆきて月ごろを過せとて、人を添へて出でた丶す。二郎の姉が家は、石榴市といふ所に、田邊の金忠といふ商人なりける。豐雄が訪ひ來るを喜び、かつ月ごろの事どもをいとほしがりて、いつ〱までもこ丶に住めとて、念頃に勞りけり。年かはりて二月になりぬ。此石榴市といふは、泊瀬の寺ちかき所なりき。佛の御中には、泊瀬なんあらたなる事を、唐土までも聞えたるとて、都より邊鄙より詣づる人の、春はことに多かりけり。詣づる人は必ずこ丶に宿れば、軒を並べて旅人をとゞめける。田邊が家は御明燈心の類を商ひぬれば、所せく人の入りたちける中に、都の人の忍びの詣と見えて、いとよろしき女一人、了鬟一人、薫物もとむとてこ丶に立ちよる。此了鬟豐雄を見て、吾君のこ丶にいますはといふに、驚きて見れば、かの眞女子まろやなり。あな恐しとて内に隱る丶。金忠夫婦こは何ぞといへば、かの鬼こ丶に逐ひ來る。あれに近寄り給ふなと隱れ惑ふを、人々そはいづくにと立騷ぐ。眞女子入來りて、人々あやしみ給ひそ。吾夫の君な恐れ給ひそ。おのが心より罪に墮し奉る事の悲しさに、御有家もとめて、事の由縁をもかたり、御心放せさせ奉らんとて、御住家尋ねまゐらせしに、かひありてあひ見奉ることの喜しさよ。あるじの君よく聞きわけて給へ。我もし怪しき物ならば、此人繁きわたりさへあるに、かうのどかなる晝をいかにせん。衣に縫目あり。日にむかへば影あり。此正しきことわりを思しわけて、御疑を解かせ給へ。豐雄漸人ごこちして、爾正しく人ならぬは、

我捕はれて、武士らとともにいきて見れば、きのふにも似ず淺ましく荒れ果てゝ、まことに鬼の住むべき宿に一人居るを、人々捕へんとすれば、忽ち青天霹靂を震うて、跡なくかき消えぬるをまのあたり見つるに、又逐ひ來て何をか爲す。すみやかに去れといふ。眞女子涙を流して、まことにさこそ思さんはことわりなれど、妾が言をもしばし聞かせ給へ。君公廳に召され給ふと聞きしより、かねて憐をかけつる隣の翁をかたらひ、頓に野らなる宿のさまをこしらへし。我を捕んずときに鳴神響かせしは、まろやが計較りつるなり。其後船もとめて難波の方に遁れしかど、御消息知らまほしく、こゝの御佛にたのみを懸けつるに、二本の杉のしるしありて、喜しき瀬にながれあふことは、ひとへに大悲の御德かふむりたてまつりしぞかし。種々の神寶は、何とて女の盜み出すべき。前の夫の良からぬ心にてこそあれ。よく／＼思しわけて、思ふ心の露ばかりをもうけさせ給へとて、さめ／＼と泣く。豐雄或は疑ひ、或は憐みて、かさねていふべき詞もなし。金忠夫婦、眞女子がことわりの明かなるに、此女しきふるまひを見て、努、疑ふ心もなく、豐雄の物語にては、世に恐しき事よと思ひしに、さる例あるべき世にもあらずかし。はる／＼と尋ねまどひ給ふ御心ねのいとほしきに、豐雄肯はずとも、我々とゞめまゐらせんとて、一間なる所に迎へける。こゝに一日二日を過すまゝに、金忠夫婦が心をとりて、ひたすら歎きたのみける。其志の篤きに愛でて、豐雄をすゝめて、つひに婚儀をとりむすぶ。豐雄も日々に心とけて、もとより容姿のよろしきを愛でよろこび、千とせをかけて契るには、葛城や高間の山に夜々ごとにたつ雲も、泊瀬の寺の曉の鐘に雨收まりて、只あひあふ事の遲きをなむ恨みける。三月にもなりぬ。金忠、豐雄夫婦にむかひて、都わたりには似るべあらねど、さすがに紀路にはまさりぬらんかし。名細の吉野は春はいとよき所なり。三船の山、菜摘川、常に見るとも飽かぬを、此頃はいかにおもしろからん。いざ給へ、出立ちなんといふ。眞女子うち笑みて、よき人のよしと見給ひし所は、都の人も見ぬを恨に聞え侍るを、我身稚きより、人おほき所、或は道の長手をあゆみては、必ず氣のぼりてくるしき病のあれば、從駕にえ出で立ち侍らぬぞいと愛たけれ。山土產必ず待ちこひ奉るといふを、そはあゆみなんこそ病も苦しからめ。車こそも

たらね、いかにも〳〵土は踏ませまゐらせじ。留り給はんは豊雄のいかばかり心もとなかりつらんとて、夫婦すゝめたつに、豊雄もかうたのもしくの給ふを、道に倒るゝともいかでかはと聞ゆるに、不慮ながら出でたちぬ。人々花やぎて出でぬれど、眞女子が麗なるには似るべうもあらずぞ見えける。何某の院は、かねて心よく聞えかはしければ、こゝに訪ふ。主の僧迎へて、此春は遲く詣で給ふことよ。花もなかばは散り過ぎて、鶯の聲もやゝ流るめれど、猶よき方にしるべし侍らんとて、夕食いと淸くして食せける。明けゆく空いたう霞みたるを、晴れゆくまゝに見わたせば、此院は高き所にて、こゝかしこ僧坊どもあらはに見おろさるゝ。山の鳥どもゝそこはかとなく囀りあひて、木草の花色々に咲きまじりたる。おなじ山里ながら、目さむるこゝちせらる。初詣には瀧ある方こそ見所はおほかめれとて、彼方にしるべの人乞ひて出でたつ。谷を繞りて下りゆく。いにしへ行幸の宮ありし所は、石はしる瀧つせのむせび流るゝに、ちひさき鮎どもの水に

逆ふなど、目もあやにおもしろし。檜破子打散して喰ひつゝあそぶ。岩がねづたひに來る人あり。髪は績麻をわがねたる如くなれど、手足いと健やかなる翁なり。此瀧の下にあゆみ來る。人々を見てあやしげにまもりたるに、眞女子も、まろやも、此人を背に見ぬふりなるを、翁、渠二人をよくまもりて、あやし、此邪神、など人を惑はす。翁がまのあたりをかくても有るやとつぶやくを聞きて、此二人忽ち躍りたちて、瀧に飛び入ると見しが、水は大虚に湧きあがりて見えずなるほどに、雲、摺る墨をうちこぼしたる如く、雨篠を亂してふり來る。翁人々の慌忙て惑ふをまつろへて、人里にくだる。賤しき軒にかゝまりて、生けるこゝちもせぬを、翁、豊雄に向ひ、熟々そこの面を見るに、此隠神のために悩され給ふが、吾救はずばつひに命をも失ひつべし。後よく愼み給へといふ。豊雄地に額着きて、此事の始より語り出でて、猶命得させ給へとて、恐れみ敬ひて願ふ。翁されぱこそ、此邪神は年經たる蛇なり。かれが性は婬なる物にて、牛と孳みては麟を生み、

馬とあひては龍馬を生むといへり。此魅はせつるも、はたそこの秀麗に奸けたると見えたり。かくまで執ねきを、よく愼み給はずば、おそらくは命を失ひ給ふべしといふに、人々いよゝ恐れ惑ひつゝ、翁を崇まへて遠津神にこそと拜みあへり。翁打笑みて、おのれは神にもあらず。大倭の神社に仕へまつる當麻の酒人といふ翁なり。道の程見たてゝまゐらせん。いざ給へとて出でたてば、人々後につきて歸り來る。明の日大倭の郷にいきて、翁が惠を謝し、且つ美濃絹三疋、筑紫綿二屯を遺り來り、猶此妖災の身禊し給へと、つゝしみて願ふ。翁これを納めて、祝部らにわかちあたへ、自は一疋一屯をもとゞめずして、豐雄にむかひ、畜儞が秀麗に奸けて、儞を纏ふ。儞又畜が假の化に魅はされて、丈夫心なし。今より雄氣してよく心を靜まりまさば、此らの邪神を逐はんに、翁が力をもかり給はじ。ゆめ〳〵心を靜まりませとて、實やかに覺しぬ。豐雄夢のさめたるこゝちに、禮言盡きずして歸り來る。金忠にむかひて、此年月畜に魅はされしは、己が心正しからぬなりし。親兄の孝をもなさで、君が家の贅ならんは由縁なし。御惠いとかたじけなけれど、又も參りなんとて、紀の國に歸りける。父母太郎夫婦此恐しかりつる事を聞きて、いよよ、豐雄が過ならぬを憐み、かつは妖怪の執ねきを恐れける。かくて鰥にてあらするにこそ、妻むかへさせんとてはかりける。芝の里に芝の庄司なるものあり。女子一人もてりしを、大内の采女にまゐらせてありしが、此度いとま申し給り、此豐雄を聟がねにとて、媒氏をもて大宅が許へいひ納るゝ。よき事なりて、即て因をなしける。かくて都へも向の人を登せしかば、此采女富子なるものよろこびて歸り來る。年來の大宮仕に馴れこしかば、萬の行儀よりして、姿なども花やぎ勝りけり。豐雄こゝに迎へられて見るに、此富子がかたちいとよく、萬心に足らひぬるに、かの蛇が懸想せしことも、おろ〳〵おもひ出つるなるべし。はじめの夜は事なければ書かず。二日の夜、よきほどの醉ごこちにて、年來の大内住に、邉鄙の人ははたうるさくまさん。かの御わたりにては、何の中將、宰相の君などいふに添ひぶし給ふらん。今更にくゝこそおぼゆれなど戯るゝに、富子即て面をあげて、古き契を忘れ給ひて、かくことなる事なき人を時めかし給ふこそ、こなたよりまして惡くあれといふは、姿こそかはれ、正しく眞女子が聲なり。聞く

にあさましう身の毛もたちて恐しく、只あきれまどふを、女打ちゑみて、吾君な怪しみ給ひそ。海に誓ひ、山に盟ひし事を速くわすれ給ふとも、さるべき縁のあれば、又もあひ見奉るものを、他し人のいふことをまことしくおぼして、強に遠ざけ給はんには、恨報いなん。紀路の山々さばかり高くとも、君が血をもて峯より谷に灌ぎくださん。あたら御身をいたづらになしはて給ひそといふに、只わなゝきにわなゝかれて、今やとらるべきこゝちに死に入りける。屏風のうしろより、吾君いかにむつかり給ふ。かうめでたき御契なるはとて、出づるはまろやなり。見るに又膽を飛し、眼を閉ぢて、伏向に臥す。和めつ驚しつ、かはるぐ\物うちいへど、只死に入りたるやうにて夜明けぬ。かくて閨房を免れ出でて、庄司にむかひ、かうぐ\の恐しき事あなり。これいかにして放けなん。よく計り給へといふも、背にや聞くらんと、聲を小やかにしてかたる。庄司も妻も面を青くして歎きまどひ、こはいかにすべき、こゝに都の鞍馬寺の僧の、年々熊野に詣づるが、きのふより此向岳の蘭若に宿りたり。いとも驗なる法師にて、凡、疫病、妖灾、蝗などをもよく祈るよしにて、此郷の人は貴みあへり。此法師請へてんとて、あわたゞしく呼びつげるに、漸して來りぬ。しかぐ\のよしを語れば、此法師鼻を高くして、これらの蠱物らを捉らんは、何の難き事にもあらじ。必ず靜まりおはせとやすげにいふに、人々心落ちゐぬ。法師まづ雄黄をもとめて、藥の水を調じ、小瓶に湛へて、かの閨房にむかふ。人々驚ち隱るゝを、法師嘲みわらひて、老いたるも、童も、必ずそこにおはせ。此蛇只今捉りて見せ奉らんとてすゝみゆく。閨房の戸あくるを遲しと、かの蛇頭をさし出して法師にむかふ。此頭何ばかりの物ぞ。此戸口に充満ちて、雪を積みたるよりも白く、輝々しく、眼は鏡の如く、角は枯木のごと、三尺餘の口を開き、紅の舌を吐いて、只一呑に呑むらん勢をなす。あなやと叫びて、手にすゑし小瓶をもそこに打ちすてゝ、たつ足もなく、展轉びはひ倒れて、からうじてのがれ來り、人々にむかひあな恐し。祟ります御神にてましますものを、など法師らが祈り奉らん。此手足なくば、はた命失ひてんといふぐ\絶え入りぬ。人々扶け起すれど、すべて面も肌も黒く赤く染めなしたるが如に、熱き事焚火に手さすらんにひとし。毒氣にあたりたると見えて、後は只眼のみはたらきて、

物いひたげなれど、聲さへなさでぞある。水灌ぎなどすれど、つひに死にける。これを見る人いよゝ魂も身に添はぬ思して、泣き惑ふ。豐雄すこし心を收めて、かく驗なる法師だも祈り得ず、執ねく我を纒ふものから、天地のあひだにあらんかぎりは、探し得られなん。おのが命ひとつに、人々を苦むるは實ならず。今は人をもかたらはじ。やすくおぼせとて閨房にゆくを、庄司の人人、こは物に狂ひ給ふかといへど、更に聞かず顔にかしこにゆく。戸を靜に明くれば、物の騷がしき音もなくて、此二人ぞむかひゐたる。富子豐雄にむかひて、君何の讐に我を捉へんとて、人をかたらひ給ふ。此後も仇をもて報い給はゞ、君が御身のみにあらじ、此鄉の人々をもすべて苦しきめ見せなん。ひたすら吾貞操をうれしとおぼして、徒々しき御心をなおぼしそと、いとけさうしていふぞうたてかりき。豐雄いふは、世の諺にも聞けることあり。人かならず虎を害する心なけれども、虎反りて人を傷る意ありとや。儞人ならぬ心より、我を纒うて、幾度かからきめを見するさへあるに、かりそめ言をだにも、此恐しき報をなんいふは、いとむくつけなり。されど吾を慕ふ心は、はた世人にもかはらざれば、こゝにありて人々の歎き給はんがいたはし。此富子が命ひとつたすけよかし。然我をいづくにも連れゆけといへば、いと喜しげに點頭きをる。又立出て庄司にむかひ、かう淺ましきものゝ添ひてあれば、こゝにありて、人々を苦め奉らんは、いと心なきことなり。只今暇給はらば、娘子の命も恙なくおはすべしといふを、庄司更に肯けず。我弓の本末をもしりながら、かくいひがひなからんは、大宅の人々のおぼす心もはづかし。猶計較りなん。小松原の道成寺に、法海和尚とて、貴とき祈の師おはす。今は老いて室の外にも出ずと聞けど、我が爲にはいかにも〳〵捨て給はじとて、馬にていそぎ出でたちぬ。道遙なれば夜なかばかりに蘭若に到る。老和尚眠藏をゐざり出でて、此物がたりを聞きて、そは淺ましくおぼすべし。今は老朽ちて驗あるべくもおぼえ侍らねど、君が家の災を默してやあらん。まづおはせ。法師も即て詣でなんとて、芥子の香にしみたる袈裟とり出でて、庄司にあたへ、畜をやすくすかしよせて、これをもて頭に打被け、力を出して押しふせ給へ。手弱くあらばおそらくは逃げ去らん。よく念じてよくなし給へと、實やかに敎ふ。庄司よろこびひ

つゝ、馬を飛してかへりぬ。豊雄を密に招きて、此事よくしてよとて袈裟をあたふ。豊雄これを懐に隠して、閨房にゆき、庄司今はいとまたびぬ。いざたまへ、出立なんといふ。いと喜しげにてあるを、此袈裟とり出でて、はやく打被け、力をきはめて押しふせぬれば、あな苦し。爾何とてかく情なきぞ。しばしこゝ放せよかしといへど、猶力にまかせて押しふせぬ。法海和尚の輿やがて入り来る。庄司の人々に扶けられて、こゝにいたり給ひ、口のうちつぶ〳〵と念じ給ひつゝ、豊雄を退けて、かの袈裟とりて見給へば、富子は現なく臥したる上に、白き蛇の三尺あまりなる蟠りて、動きだもせずてぞある。老和尚これを捉へて、徒弟が捧げたる鐵鉢に納れ給ふ。猶念じ給へば、屛風の背より尺ばかりの小蛇はひ出づるを、是をも捉りて鉢に納れ給ひ、かの袈裟をもてよく封じ給ひ、そがまゝに輿に乗らせ給へば、人々掌をあはせ、涙を流して敬ひ奉る。蘭若に帰り給ひて、堂の前を深く掘らせて、鉢のまゝに埋めさせ、永劫があひだ、世に出づることを戒め給ふ。今猶蛇が塚ありとかや。庄司が女子はつひに病にそみてむなしくなりぬ。豊雄は命恙なしとなんかたりつたへける。

雨月物語四之巻終

雨月物語巻之五

青頭巾

むかし快庵禪師といふ大德の聖おはしましけり。總角より教外の旨をあきらめ給ひて、常に身を雲水にまかせたまふ。美濃の國の龍泰寺に一夏を滿たしめ、此秋は奧羽のかたに住むとて、旅立ち給ふ。ゆき〳〵て下野の國に入り給ふ。富田といふ里にて、日入りはてぬれば、大きなる家の賑しげなるに立ちよりて、一宿をもとめ給ふに、田畑よりかへる男等、黄昏にこの僧の立てるを見て、大きに怕れたるさまして、山の鬼こそ來りたれ。人みな出でよと呼びのゝしる。家の內にも騷ぎたち、女童は泣きさけび、展い轉びて隅々に竄る。あるじ山枴をとりて走り出で、外の方を見るに、年紀五旬にちかき老僧の、頭に紺染の巾を被き、身に墨衣の破れたるを穿て、裹みたる物を背におひたるが、杖をもてさしまねき、檀越なき事にてかばかり備へ給ふや。遍參の僧今夜ばかりの宿をかり奉らんとて、こゝに人を待ちしに、おもひきや、かく異められんとは。瘦法師の强盜などなすべきにもあらぬを、なあやしみ給ひそといふ。莊主枴を捨て、手を拍つて笑ひ、渠等が愚なる眼より、客僧を驚しまゐらせぬ。一宿を供養して罪を贖ひたてまつらんと、禮ひて奧の方に迎へ、こゝろよく食をもすゝめて饗しけり。莊主かたりていふ、さきに下等が御僧を見て、鬼來りしとおそれしも、さるいはれの侍るなり。こゝに希有の物がたりの侍る。妖言ながら人にもつたへ給へかし。此里の上の山に、一宇の蘭若の侍る。故は小山氏の菩提院にて、代々大德の住み給ふなり。今の阿闍梨は何某殿の猶子にて、ことに篤學修行の聞めでたく、此國の人は香燭をはこびて歸依したてまつる。我莊にもしば〳〵詣で給うて、いともうらなく仕へしが、去年の春にてありける。越の國へ水丁の戒師にむかへられ給ひて、百日あまり逗り給ふが、他國より十二三歲なる童兒を具してかへり給ひ、起臥の扶とせらる。かの童兒が容の秀麗なるを深く愛でさせたまうて、年來の事どもも、いつとなく怠りがちに見え給ふ。さるに茲年四月の比、かの童兒かりそめの病に臥しけるが、日を經

ておもくなやみけるを、痛みかなしませ給うて、國府の典薬のおもだたしきをまで迎へ給へども、其験もなく、終にむなしくなりぬ。ふところの璧をうばはれ、挿頭の花を嵐にさそはれしおもひ、泣くに涙なく、叫ぶに聲なく、あまりに歎かせ給ふまゝに、火に焼き、土に葬ることをもせで、瞼に瞼をもたせ、手に手をとりくみて、日を經給ふが、終に心神みだれ、生きてありし日に違はず戯れつゝも、其肉の腐り爛るるを吝みて、肉を吸ひ骨を嘗めて、はた喫ひつくしぬ。寺中の人々院主こそ鬼になり給ひつれと、連忙しく逃げさりぬるのちは、夜々里に下りて人を驚殺し、或は墓を發きて、腥々しき屍を喫ふありさま、實に鬼といふものは、昔物がたりには聞きもしつれど、現にかくなり給ふを見て侍れ。されどいかにしてこれを征し得ん。只戸ごとに暮をかぎりて堅く閉してあれば、近曾は國中へも聞えて、人の往來さへなくなり侍るなり。さるゆゑのありてこそ、客僧をも過りつるなれとかたる。快菴この物がたりを聞かせ給うて、世には不可思議の事

もあるものかな。凡人とうまれて、佛菩薩の敎の廣大なるをもしらず。愚なるまゝ、慳しきまゝに世を終るものは、其愛欲邪念の業障に攬かれて、或は故の形をあらはして恚を報ひ、或は鬼となり蟒となりて祟をなすためし、往古より今にいたるまで、算ふるに盡しがたし。又人活きながらにして鬼に化するもあり。楚王の宮人は蛇となり、王含が母は夜叉となり、呉生が妻は蛾となる。又いにしへある僧卑しき家に旅寢せしに、其夜雨風はげしく、燈さへなきわびしさに、いも寢られぬを、夜ふけて羊の鳴くこゑの聞えけるが、頃刻して僧のねぶりをうかゞひて、しきりに齅ぐものあり。僧異しと見て、枕におきたる禪杖をもてつよく撃ちければ、大きに叫んでそこに倒る。この音に主の嫗なるもの、燈を照し來るに、見れば若き女の打倒れてぞありける。嫗泣く／＼命を乞ふ。いかゞせん。捨て、其家を出でしが、其のち又たよりにつきて、其里を過ぎしに、田中に人多く集ひてものを見る。僧も立ちよりて何なるぞと尋ねしに、里人いふ、鬼に化したる女

を捉へて、今土に埋むなりとかたりしとなり。されどこれらは皆女子にて、男たるもののかゝるためしを聞かず。凡女の性の慳しきには、さる淺ましき鬼にも化するなり。又男子にも隋の煬帝の臣家に、麻叔謀といふもの、小兒の肉を嗜好みて、潜に民の小兒を偸み、これを蒸して喫ひしもあなれど、是は淺ましき夷心にて、主の語り給ふとは異なり。さるにてもかの僧の鬼になりつるこそ、過去の因縁にてぞあらめ。そも平生の行德のかしこかりしは、佛につかふる事に志誠を盡せしなれば、其童兒をやしなはざらましかば、あはれよき法師なるべきものを、一たび愛慾の迷路に入りて、無明の業火の熾んなるより、鬼と化したるも、ひとへに直くたくましき性のなす所なるぞかし。心放せば妖魔となり、收むる則は佛果を得るとは、此法師がためしなりける。老衲もしこの鬼を敎化して、本源の心にかへらしめなば、こよひの饗の報ともなりなんかしと、たふときこゝろざしを發し給ふ。莊主頭を疊に摺りて、御僧この事をなし給はば、此國の人は淨土にうまれ出でたるがごとしと、涙を流してよろこびけり。山里のやどり、貝鐘も聞えず、廿日あまりの月も出でて、古戸の間に洩りたるに、夜の深きをもしりて、いざ休ませ給へとて、おのれも臥戸に入りぬ。

山院人とゞまらねば、樓門は荊棘おひかゝり、經閣もむなしく苔蒸しぬ。蜘網をむすびて諸佛を繋ぎ、燕子の糞、護摩の牀を埋み、方丈廊房すべて物すざましく荒れはてぬ。日の影申に傾く比、快庵禪師寺に入りて錫を鳴し給ひ、遍參の僧今夜ばかりの宿をかし給へと、あまたたび叫べども、さらに應なし。眠藏より痩せ槁れたる僧の、漸々とあゆみ出で、咳びたる聲して、御僧は何地へ通るとてこゝに來るや。此寺はさる由緣ありて、かく荒れはて、人も住まぬ野らとなりしかば、一粒の齋糧もなく、一宿をかすべきはかりごともなし。はやく里に出でよといふ。禪師いふ、これは美濃の國を出でて、みちの奥へいぬる旅なるが、この麓の里を過ぐるに、山の靈、水の流のおもしろさに、おもはずもこゝに詣づ。日も斜なれば、里にくだらんもはるけし。ひたすら一宿をかし給へ。あるじの僧云ふ、かく野らなるところはよからぬ事もあなり。强ひてとゞめがたし。强ひてゆけとにもあらず。僧のこゝろにまかせよとて、復び物をもいはず。こなたよりも一言を問はで、あるじのかたはらに座をし

むる。看る〳〵日は入り果てゝ、宵闇の夜のいとくらきに、燈を點げざれば、まのあたりさへわかぬに、只澗水の音ぞちかく聞ゆ。あるじの僧も又眠藏に入りて音なし。夜更けて月の夜にあらたまりぬ。影玲瓏としていたらぬ隈もなし。子ひとつともおもふ比、あるじの僧眠藏を出でて、あわたゞしく物を討ぬ。たづね得ずして大いに叫び、禿驢いづくに隱れけん。こゝもとにこそありつれと、禪師が前を幾たび走り過ぐれども、更に禪師を見る事なし。堂の方に駈りゆくかと見れば、庭をめぐりて躍りくるひ、遂に疲れふして起き來らず。夜明けて朝日のさし出でぬれば、酒の醒めたるごとくにして、禪師がもとの所に在すを見て、只あきれたる形にものさへいはで、柱にもたれ、長嘘をつぎて默しゐたりける。禪師ちかくすゝみよりて、院主何をか歎き給ふ。もし飢ゑ給ふとならば、野僧が肉に腹をみたしめ給へ。あるじの僧いふ、師は夜もすがらそこに居させたまふや。禪師いふ、こゝにありてねぶる事なし。あるじの僧いふ、我あさましくも人の肉を好めども、いまだ佛身の肉味をしらず。師はまことに佛なり。鬼畜のくらき眼をもて、活佛の來迎を見んとするとも、見ゆべからぬ理なるかな。あなたふとと頭を低れて默しける。禪師いふ、里人のかたるを聞けば、汝一旦の愛慾に心神みだれしより、忽鬼畜に墮罪したるは、あさましとも哀しとも、ためしさへ希なる惡因なり。夜々里に出でて人を害するゆゑに、ちかき里人は安き心なし。我これを聞きて捨つるに忍びず、特來りて敎化し、本源の心にかへらしめんとなるを、汝我をしへを聞くや否や。あるじの僧いふ、師はまことに佛なり。かく淺ましき惡業を頓に忘るべきことわりを敎へ給へ。禪師いふ、汝聞くとならばこゝに來れとて、簀子の前のたひらなる、石の上に座せしめて、みづから被き給ふ紺染の巾を脫ぎて、僧が頭に被かしめ、證道の歌の二句を授け給ふ。

江月照松風吹。

永夜淸宵何所爲。

汝こゝを去らずして、徐に此句の意をもとむべし。意解けぬる則は、おのづから本來の佛心に會ふなるはと、念頃に敎へて山を下り給ふ。此のちは里人おもき災を、のがれしといへども、猶僧が生死をしらざれば、疑ひ恐れて、人々山にのぼる事をいましめけり。一とせ速くたちて、むかふ年の冬十月の初旬、快菴大德奥路のかへるさに、又

こゝを過ぎ給ふが、かの一宿のあるじが莊に立ちよりて、僧が消息を尋ね給ふ。莊主よろこび迎へて、御僧の大德によりて、鬼ふたゝび山をくだらねば、人皆淨土にうまれ出でたるごとし。されど山にゆく事はおそろしがりて、一人としてのぼるものなし。さるから消息をしり侍らねど、など今まで活きては侍らじ。今夜の御泊にかの菩提をとぶらひ給へ。誰も隨緣したてまつらんといふ。禪師いふ、他善果に基きて遷化せしとならば、道に先達の師ともいふべし。又活きてあるときは、我がために一個の徒弟なり。いづれ消息を見ずばあらじとて、復び山にのぼり給ふに、いかさまにも人のゆきゝ絶えたると見えて、去年ふみわけし道ぞとも思はれず。寺に入りて見れば、荻尾花のたけ人よりもたかく生ひ茂り、露は時雨めきて降りこぼれたるに、三の徑さへわからざる中に、堂閣の戸右左に頽れ、方丈庫裏に緣りたる廊も、朽ち目に雨をふくみて苔むしぬ。さてかの僧を座らしめたる簀子のほとりをもとむるに、影のやうなる人の僧俗ともわからぬまでに、髭髮もみだれしに、葎むすぼほれ、尾花おしなみたるなかに、蚊の鳴くばかりのほそき音して、物とも聞えぬやうに、まれ〳〵唱ふるを聞けば、

江月照松風吹。
永夜清宵何所爲。

禪師見給ひて、やがて禪杖を拿りなほし、作麼生何所爲ぞと、一喝して他が頭を撃ち給へば、忽ち氷の朝日にあふがごとく消えうせて、かの靑頭巾と骨のみぞ草葉にとゞまりける。現にも久しき念のこゝに消じつきたるにやあらん。たふときことわりあるにこそ。されば禪師の大德、雲の裏海の外にも聞えて、初祖の肉いまだ乾かずとぞ稱歎しけるとなり。かくて里人あつまりて、寺内を淸め、修理をもよほし、禪師を推したふとみて、こゝに住ましめけるより、故の密宗をあらためて、曹洞の靈場をひらき給ふ。今なほ御寺はたふとく榮えてありけるとなり。

貧福論

陸奥の國蒲生氏鄕の家に、岡左內といふ武士あり。祿おもく譽たかく、丈夫の名を關の東に震ふ。此士いと偏固なる事あり。富貴をねがふ心常の武邊にひとしからず。儉約を宗として、家の掟をせしほどに、年を疊みて富み昌えけり。かつ軍を調練す間には、茶味翫香を娛まず。廳上なる所に許多の金を

布班べて心を和むる事、世の人の月花にあそぶに勝れり。人みな左内が行跡をあやしみて、吝嗇野情の人なりとて、爪はじきをして惡みけり。家に久しき男に、黄金一枚かくし持ちたるものあるを聞きつけて、ちかく召していふ、崑山の璧もみだれたる世には瓦礫にひとし。かゝる世にうまれて、弓矢とらん軀には、棠谿墨陽の劍、さてはありたきもの財寶なり。されど良劍なりとて、千人の敵には逆ふべからず。金の德は天が下の人をも從へつべし。武士たるもの漫にあつかふべからず。かならず貯へ藏むべきなり。儞賤しき身の分限に過ぎたる財を得たるは、嗚呼の事なり。賞なくばあらじとて、十兩の金を賜ひ、刀をも赦して召しつかひけり。人これを傳へ聞きて、左内が金をあつむるは、長啄にして飽かざる類にはあらず、只當世の一奇士なりとぞいひはやしける。其夜左内が枕上に、人の來る音しけるに、目さめて見れば、燈臺の下に、ちひさげなる翁の笑をふくみて坐れり。左内枕をあげて、こゝに來るは誰ぞ。我に粮からんとならば、力量の男どもこそ參りつらめ。儞がやうの耄けたる形して、ねぶりを魘ひつるは、狐狸などのたはむるゝにや。何のおぼえたる術かある。秋の夜の目ざましに、そと見せよとて、すこしも騷ぎたる容色なし。翁いふ、かく參りたるは魑魅にあらず人にあらず。君がかしづき給ふ黄金の精靈なり。年來篤くもてなし給ふうれしさに、夜話せんとて推してまゐりたるなり。君が今日家の子を賞じ給ふに感でて、翁が思ふこころばへをも、かたり和まんとて、假に化を見し侍るが、十にひとつも益なき閑談ながら、いはざるは腹みつれば、わざとにまうでて、眠をさまたげ侍る。さても富みて驕らぬは大聖の道なり。さるを世の惡ことばに、富めるものはかならず慳し。富めるものはおほく愚なりといふは、晉の石崇、唐の王元寶がごとき、豺狼蛇蝎の徒のみをいへるなりけり。往古に富める人は、天の時をはかり、地の利を察めて、おのづからなる富貴を得るなり。呂望齊に封ぜられて、民に產業を敎ふれば、海方の人利に走りてこゝに來朝ふ。管仲九たび諸侯をあはせて、身は倍臣ながら富貴は列國の君に勝れり。范蠡、子貢、白圭が徒、財を鬻ぎ利を逐うて、巨萬の金を疊みなす。これらの人をつらねて、貨殖傳を書し侍るを、其いふ所陋しとて、のちの博士筆を競うて謗るは、ふかく穎らざる人の語なり。恒

の產なきは恒の心なし。百姓は勤めて穀を出し、工匠等修めてこれを助け、商賈務めて此れを通はし、おのれ〳〵が產を治め家を富して、祖を祭り、子孫を謀る外、人たるもの何をか爲さん。諺にもいへり。千金の子は市に死せず。富貴の人は王者とたのしみを同じうすとなん。まことに淵深ければ魚よくあそび、山長ければ獸よくそだつは、天の隨なることわりなり。只貧しうしてたのしむてふことばありて、字を學び韻を探る人の惑をとる端となりて、弓矢とるますら雄も、富貴は國の基なるをわすれ、あやしき計策をのみ調練ひて、ものを戕り人を傷ひ、おのが德をうしなひて、子孫を絕つは、財を薄んじて名をおもしとする惑なり。顧ふに名とたからと、もとむるに心ふたつある事なし。文字てふものに繋がれて、金の德を薄んじては、みづから淸潔と唱へ、鋤を揮うて棄てたる人を賢しといふ。

さる人はかしこくとも、さる事は賢からじ。金は七のたからの最なり。土に瘞れては靈泉を湛へ、不淨を除き、妙なる音を藏せり。かく淸よきものの、

いかなれば愚昧貪酷の人にのみ集ふべきやうなし。今夜此憤を吐きて、年來のこゝろやりをなし侍る事の喜しさよといふ。左内興じて席をすゝみ、さてしもかたらせ給ふに、富貴の道のたかき事、己がつねにおもふ所露たがはずぞ侍る。こゝに愚なる問ひ事の侍るが、ねがふは詳にしめさせ給へ。今ことわらせ給ふは、專ら金の德を薄しめ、富貴の大業なる事をしらざるを罪とし給ふなるが、かの紙魚がいふ所もゆゑなきにあらず。今の世に富めるものは、十が八まではおほかた貪酷殘忍の人多し。おのれは俸祿に飽き足りながら、兄弟一屬をはじめ祖より久しくつかふるものの、貧をすくふ事をもせず。となりに栖みつる人のいきほひをうしなひ、他の援さへなく世にくだりしものの田畑をも、價を賤くしてあながちに己がものとし、今おのれは村長とうやまはれても、むかしかりたる人のものをかへさず。禮ある人の席を讓れば、其人を奴のごとく見おとし、たまたま舊き友の寒暑を訪ひ來れば、物からんためかと疑ひて、宿にあらぬよしを應へさ

せつる類、あまた見來りぬ。又君に忠なるかぎりをつくし、父母に孝廉の聞あり。貴きをたふとみ、賤しきを扶くる意ありながら、三冬のさむきにも一裘に起き臥し、三伏のあつきにも一葛を濯ぐいとまなく、年ゆたかなれども朝に晡に、一椀の粥にはらをみたしむ。さる人はもとより朋友の訪ふ事もなく、かへりて兄弟一屬にも道を塞られ、まじはりを絶たれて、其怨をうつたふる方さへなく、汲々として一生を終ふるもあり。さらばその人は作業にうときゆゑかと見れば、夙に起きおそくふして性力を凝し、西にひがしに走りまどふ蹺蹺さらに閑なく、その人愚にもあらで、才をもちふるに的るはまれなり。これらは顔子が一瓢の味をもしらず。かく果つるを佛家には前業をもて說きしめし、儒門には天命と敎ふ。もし未來あるときは、現世の陰德善功も來世のたのみありとして、人しばらくこゝにいきどほりを休めん。されば富貴のみちは佛家にのみその理をつくして、儒門の敎は荒唐なりとやせん。靈も佛の敎にこそ憑らせ給ふらめ。否ならば詳にのべさせ給へ。翁いふ、君が問ひ給ふは往古より論じ盡さゞることわりなり。かの佛の御法を聞けば、富と貧しきは前生の脩否によるとや。此はあらましなる敎ぞかし。前生にありしとき、おのれをよく脩め、慈悲の心專らに、他人にもなさけふかく接りし人の、その善報によりて、今此生に富貴の家にうまれきたり、おのがたからをたのみて、他人にいきほひをふるひ、あらぬ狂言をいひのゝしり、あさましき夷ごころをも見するは、前生の善心かくまでなりくだる事は、いかなるむくいのなせるにや。佛菩薩は名聞利要を嫌み給ふとこそ聞きつる物を、など貧福の事に係らひ給ふべき。さるを、富貴は前生のおこなひの善かりし所、貧賤は惡しかりしむくいとのみ說きなすは、尼媽を蕩すなま佛法ぞかし。貧福をいはず、ひたすら善を積まん人は、その身に來らずとも、子孫はかならず幸福を得べし。宗廟これを饗けて子孫これを保つとは、此ことわりの細妙なり。おのれ善をなして、おのれその報の來るを待つは直きこゝろにもあらずかし。又惡業慳貪の人の、富み昌ゆるのみかは、壽めでたくその終をよくするは、我に異なることわりあり。霎時聞かせたまへ。我今假に化をあらはして話るといへども、神にあらず佛にあらず。もと非情の物なれば、人と異なる慮あり。いにしへに富める人は、天の時に

合ひ地の利をあきらめて、産を治めて富貴となる。これ天の隨なる計策なれは、たからのこゝにあつまるも、天のまに／＼なることわりなり。又卑吝貪酷の人は、金銀を見ては父母のごとくしたしみ、食ふべきをも喫はず、穿べき物をも着ず。得がたきいのちをさへ惜しとおもはで、起きておもひ、臥して忘れねば、こゝにあつまる事まのあたりなることわりなり。我もと神にあらず佛にあらず。只これ非情なり。非情のものとして人の善惡を糺し、それにしたがふべきいはれなし。善を撫で、惡を罪するは、天なり。神なり。佛なり。三ッのものは道なり。我がともがらのおよぶべきにあらず。只かれらがつかへ傅く事の、うや／＼しきにあつまるとしるべし。これ金に靈あれども、人とこゝろの異る所なり。また富みて善根を種うるにも、ゆゑなきに惠みほどこし、その人の不義をも察めず、借しあたへたらん人は、善根なりとも財はつひに散ずべし。これらは金の用を知りて、金の德をしらず、かろくあつかふが故なり。又身のおこなひもよろしく、人にも志誠ありながら、世に窮められてくるしむ人は、天蒼氏の賜すくなくうまれ出でたるなれば、精神を勞しても、いのちのうちに富貴を得る事なし。さればこそいにしへの賢き人は、もとめて益あればもとめ、益なくばもとめず。己がこのむまに／＼、世を山林にのがれて、しづかに一生を終る。心のうちいかばかり淸しからんとはうらやみぬるぞ。かくいへど富貴のみちは術にして、巧なるものはよく湊め、不肖のものは瓦の解くるより易し。且つ我がともがらは人の生產につきめぐりて、たのみとする主もさだまらず。こゝにあつまるかとすれば、その主のおこなひによりて、たちまちにかしこに走る。水のひくき方にかたぶくがごとし。夜に晝にゆきくとて休むときなし。たゞ閑人の生產もなくてあらば、泰山もやがて喫ひつくすべし。江海もつひに飮みほすべし。いくたびもいふ、不德の人のたからを積むは、これとあらそふことわり、君子は論ずる事なかれ。ときを得たらん人の儉約を守り、つひえを省きてよく務めんには、おのづから家富み人服すべし。我は佛家の前業も知らず、儒門の天命にも拘はらず、異る境にあそぶなりといふ。左内いよ／＼興に乘じて、靈の議論きはめて妙なり。舊しき疑念も今夜に消じつくしぬ。試にふたたび問はん、今豐臣の威風四海を靡し、五畿七道漸しづか

なるに似たれども、亡國の義士彼此に潜み竄れ、或は大國の主に身を托せて世の變をうかゞひ、かねて志を遂げんと策る。民も又戰國の民なれば、耒を釋て、矛に易へ、農事を事とせず。士たるもの枕を高くして眠るべからず。今の體にては長く不朽の政にもあらじ。誰か一統して民をやすきに居らしめんや。又誰にか合し給はんや。翁云ふ、これ又人道なれば、我知るべき所にあらず。只富貴をもて論せば、信玄がごとく智謀は百が百的らずといふ事なくて、一生の威を三國に震ふのみ。しかも名將の聞は世擧りて賞ずる所なり。その末期の言に、當時信長は果報いみじき大將なり。我平生に他を侮りて、征伐を怠り、此疾に係る。我が子孫も即て他に亡されんといひしとなり。謙信は勇將なり。信玄死しては天が下に對なし。不幸にして遽く死りぬ。信長の器量人にすぐれたれども、信玄の智に及ず、謙信の勇に劣れり。しかれども富貴を得て、天が下の事一回は此人に依ざす。任ずるものを辱しめて命を殞すにて見れば、文武を兼ねしといふにもあらず。秀吉の志大なるも、はじめより天地に滿つるにもあらず。柴田と丹羽が富貴をうらやみて、羽柴といふ氏を設けしにてしるべし。今龍と化して太虛に昇り、地中をわすれたるならずや。秀吉龍と化したれども、蛟蜃の類也。蛟蜃の龍と化したるは、壽わづかに三歲を過ぎずと。これもはた後なからんか。それ驕をもて治めたる世は往古より久しきを見ず。人の守るべきは儉約なれども、過ぐるものは卑吝に陷つる。されば儉約と卑吝の境よくわきまへて、務むべき物にこそ。今豐臣の政久しからずとも、萬民和はゝしく、戸々に千秋樂を唱はん事ちかきにあり。君が望にまかすべしとて、八字の句を諷ふ。その詞にいはく、

堯蓂日杲　百姓歸レ家。

數言興盡きて遠寺の鐘五更を告ぐる。夜既に曙けぬ。別を賜ふべし。こよひの長談まことに君が眠をさまたぐと、起ちてゆくやうなりしが、かき消して見えずなりにけり。左内つらつら夜もすがらの事をおもひて、かの句を案ずるに、百姓家に歸すの句、粗其意を得て、ふかくこゝに信を發す。まことに瑞草の瑞あるかな。

雨月物語五之巻大尾

安永五歳丙申孟夏吉旦

書肆

京都 寺町通五條上ル町 梅村判兵衛

大坂 高麗橋筋壹町目 野村長兵衛

今古
小說

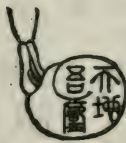
唐錦題辭

小說は夷堅齋諧を祖とし、宋の孝皇、侍從に命じて、日に民間の奇事を探りきかしめて、太上を慰め給ひしより、通俗演義の一種始て盛に行れ、元の施羅の二子、巧みを究め妙を盡し、大に斯道を述べたり。明に至りて、ます〱盛にして、其書かぞふるにいとまあらず。作意の巧拙、文章の高下、等しからずいへども、名公鉅師、好んでもてあそぶ者多し。坐する時は經書を讀み、臥す時は小說を讀む。多識蓄德の助けなれば、君子發する事なしとかや。讀書の者、稗官諸家を博く見ずんば、

粱肉を嗽ひて膾醋をすて、堂皇に坐して臺沼を廢するがごとしといへり。華人の厚く嗜む事かくの如し。我國においては紫媛、小説に翹楚たる者と謂つべし。源氏物語の首尾貫通、人情世態を寫し得て逼切なる、文章の艶麗なる、今古に獨り卓然たるものにして、水滸三國と敵するにたへたるのみ。諸名公の評註紛として翫味のこる所なし。其餘、うつほ、竹取のたぐひ、宇治大納言の編著は、唯、臘を嚼が如くなりと古人もいへり。また紫媛に並ぶ作者の出でざるこそ恨なれ。近頃岡嶋、陶山、岡の

さんハ粱肉を嗽て海錯をすて堂皇ニ坐して
臺沼を廢することしといへり華人の厚く嗜む
事かくのごとし我國ニおゐてハ紫媛小説ニ翹楚
たる者と謂つべし源氏物語此首尾貫通人
情世態を寫し得て逼切なる文章の艶麗なる
今古ニ獨り卓然たるも乃ニして水滸三國と敵
するニたへたる乃ミ諸名公の評註紛々として翫
味乃こる所なし其餘うつほ竹取のたぐひ宇
治大納言乃編著ハ唯臘を嚼むがごとしと古人
もいへりまた紫媛ニ並ぶ作者の出ざるこそ恨
なれ近頃岡嶋陶山岡の諸名士小説を深く好ミ

諸名士小説を深く好み、俚言俗語に博く通じ、譯解のあきらかにして殘りなきは、往昔よりいまだなき所なり。是によつて海内靡然として中華の小説をもてあそび、且まれに本邦の小説をあらはせども、事新奇なれば文辭至て拙く、文辭やゝみるに堪たるは中華の小説を其まゝに譯せしなれば、識者の観に備ふるもの更になし。僕此道を深く嗜むといへども漢文にうとく和文は更に通ぜざれども、雨のあした月のゆふべ、同好の友打寄りて互に語りぬる奇事異聞の多くあるがうちに、尤も佳なるもの九條

を撰みしるして四巻となし、しかのたゝまくをしきとよみし古歌にもとづき唐錦と題し、几邊にあつまる婦人童子のもて遊びものとなさむ爲なれば、拙き繪を加へて喚を求るのみ。時に安永八年己亥初秋、曉霞樓上に筆を弄するもの桂園主人なり。

今古小説唐錦　目録

第一巻

第二巻

第三巻

酔墨散人盗魁を捕ふ話

萩本丈婦寄縁を結ぶ話

第四巻

土屋是蔵妻の恨を報ゆる話

三刀屋武蔵知勇を顕す話

孝子白頭にして縁を守る話

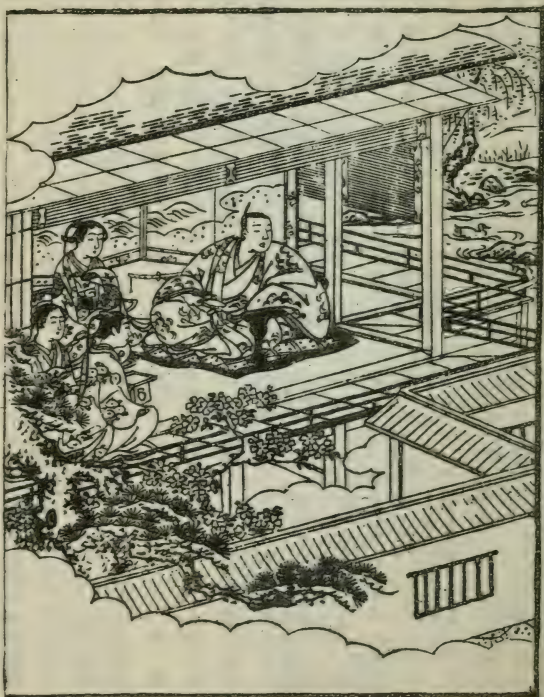
終

今古小說唐錦卷之一

足利義敎異人に遇ふ話

我が國の文華次第に開け盛んにして、偉人傑士相ついで出で、諸技百工おの〱其態を盡し、妙をきはめずといふ事なし。中にも醫道は、上世に名譽をふるひし人ありといへども、和國一派のことのみにして、異國の書籍に乏しく、怪病異病を治することをしらず、空しく夭折するもの多かりしに、今や博識大才其術に秀でたるの士、潤色して日にくはしく明かになりて、萬民天年を全くするに到れり。足利將軍義敎ときこえしは、風雅文藝をこのみ給ひしかども瞽者を悦び、釋門にありし時より淫慾の念ふかゝりしに、還俗してより志を得て士庶をえらばず、容色すぐれたると聞く時は權威を以て招き、妾となすもの數人に及びけれども、長く寵愛を保つものなかりしに、千葉胤直が倍臣何某が娘、花鳥といふものを召されしに、年未だ二八ばかり絶世の美貌、脂粉を施さずして自らなる妖艶、仙女の如くにして、貧しき家にありて麻布の衣をまとひたる時だに、見る人魂を飛ばせしに、將軍の閨房に入りしより、錦繡珠玉の中にかしづかれ、風流の新粧たくみを盡しければ、漢主の李夫人唐帝の楊太眞に溺れしごとく、義敎の寵恩厚く親族の末にいたるまで、思はざるに大祿の士となりしに、花鳥生れてより異症あり。更に五穀の屬を食せず、人間の美食を甘んぜず、唯木實をのみ好みくひければ、酒宴の席につらなりても盃を傾くること能はず。不興なりと、是のみ將軍の心にかなはずをしませ給ひ、病にやあるらんと治方を普く尋ぬるに、老大の醫官はもとより、博覽の儒師といへども其所以をしるものなし。因幡の國に栗をのみ食せし女ありて、美麗なりといへども生涯嫁せずして終りしと、兼好がつれ〳〵草に記したるに同じと噂するのみなりしに、其比醍醐山中に隱遁する、夢龍道人といふ者あり。老莊の道にあそび、物にかゝらはず世に諂はざりければ、高位貴官の人に偶、途中にて逢ふ事ありて、其人賢なれば大音にて稱讃し、小人なればあたりを憚らず罵り耻かしむ。捕へんとすれば、垣を飛び門をこゆるさま、翼

あるが如く、走ること速かにして更に近づくものなし。道人花鳥が異症あることを聞傳へ、ある日室町御所の門前にたゝずみ、「將軍の愛妾に奇病あるよし、我、是を治するの妙法をしれり。一つの望をかなへたまはらば、其法を教へて効驗をあらはすべし。」と、高聲に呼りければ、諸士、其不禮をとがめ、叱し去らしめんと杖を以て出づるに、醫官何某なる者、これを聞きてうたがはしく思へども、相貌、凡庸ならざるを奇とし、傍なる密所に誘ひ、「汝が今の詞に違はず効をあらはしなば、所望の事は宜しく推擧し得させん。其法をくはしく語るべし。」と有りければ、道人莞爾として、「婦人五穀を食ふことを欲せざるは病にして、瘀血の胸膈に滯りしよりなす所の異症なり。唯、一味の藥を以てたやすく療すべし。我が望といふは將軍の傍近く至りて、一たび拜謁せんことを欲するなり。更に俸祿貲財の望あることなし。事ならばこれを免許したまはんや、否や。」と問ふ。醫官、いぶかしながら近臣にかくと通じければ、將軍も

最愛の花鳥が事なれば、効を顯せし上にては拜謁を許さるべきこと、いと安しと有りけるにぞ、道人の曰く、「一味の藥といふは鵝の生血なり。若し鵝なき時は綠頭鴨の頭の生血をとり服する時は、忽ち瘀血を吐きて愈ゆる事妙なり。我是を考へ知りて、前年一人の同症を治せり。いまだ古哲の發明せざる所也。」と、說く所あざやかなりければ、實にもやと、折しも冬なりければ、直ちに綠頭鴨をとらへ來り、頭の血をとり花鳥に飮ましむるに、奇なるかな、時もうつさずむねあしくなりて、器より移すがごとく瘀血數升を吐出しければ、各奇異の思ひをなす。其後、花鳥は暫くなやみふしけるが、調理の藥を用ひて常に復し、是より次第に米穀を食し、終に世人とひとしくなりければ、將軍悅喜限りなく、「彼が望のとほり拜謁を許すべし。」と、嚴命下りければ、道人は常のごとく亂れたる髪をゆはず、破れたる衣をまとひ、飄然として神仙の如く威儀堂々と、列坐せる諸士の中を徐歩して將軍の座に近づかんとするに、近臣怒つて、「隱遁の

身たるとも、何ぞ禮服を着せずして懶惰なる姿のまゝ、大樹を拜し奉らんとするや。」と叱りけるを、義教、「苦しからず。」と制して、近く招き、「汝が博識によつて、知れがたき愛妾の異病を治せし事、悦ぶにたへたり。」とのたまひつつ、皮にて作りし一つの鞭を出し、「是は近ころ、蠻國より傳へ得たりし寶鞭にして、秘藏するといへども、何の皮にて作りしものなるや、未だ辨ずる者なし。もし汝知る事もあらんやと思ひ、尋ぬる也。」と有りければ、手に取つて暫く細覽し、「是はこれ、西域に犬の如き獸あり。水を含みて馬目にはきかくれば、馬瞑眩して死せんとす。故に馬はすべてこれを畏る。名づけて馬見愁といふ。唐の宣宗の時、國人其皮を獻ず。帝群臣に賜ひ、編みて鞭をつくる。一揚すれば、即ち走ること飛ぶが如くにして止まず。不須鞭と謂ふよし。朵蘭雜志に見えたり。」と答へけるにぞ、おの〱其强記博聞に驚き、將軍の悦喜いよ〱斜ならず。「物とらせよ。」とあるに、近臣、黃金を臺にならべて道人が前に置けども、更に見もやらず。「無爲自然をたのしむ我なれば、貲財と瓦礫を同じくおもふのみ。大樹に謁し奉らんと望みしは、此爲ならず。我が祖父は當家に仕へて、恩惠を得しこと深き者なるゆゑ、近日一大事の起るべきを兼て知りたるゆゑ、今將軍に告げて豫めこれをふせがば、事なかるべしと思ふゆゑなり。」と、衆臣を退かせ近臣一兩人、御傍に殘りたる時、聲を潛めて語りけるは、「君の運命つたなくして逆臣の爲に殺され給はんこと、あらかじめ考へ知れり。これを免れ給はんとならば、前非をあらため、女色を遠ざけ、驕奢を禁じ、心をゆだねて政務を正しあらため、小人を退け給はゞ、難をまぬがれ給ふのみならず、足利の家長久の基たるべし。」と、忠誠面にあらはれ、懸河の辯をなして諫言しけるにぞ、將軍も理に伏し暫く詞もなかりしが、「女色を遠ざけよといさむる身として、今、花鳥が異病を治せしはいかに。」と難じ給へば、道人笑つて、「愚かや、君に近づくべき便なきまゝ、幸の事なりとかくは計らひしと心付き給はずや。」と憚る所なくのべれば、義教はいよ〱顏を赤らめて、家姓を問ひたまへども敢て語らず。「某がごときものは天下の棄物なれば、先祖をかたりて恥しめを蒙るにたへず。唯よく某が忠言の僞りならざるを明察し、行ひを改め給はんことを祈るなり。」と謝して、御前を退

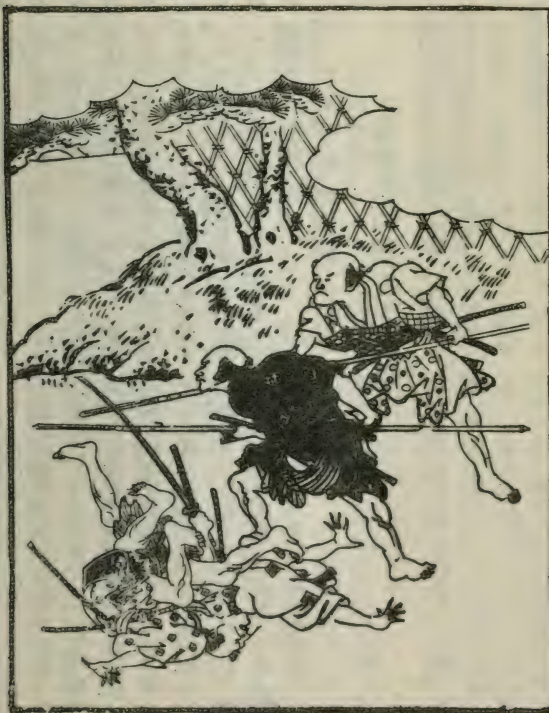
き出でけるが、此時、赤松滿祐入道性具は、所領の備前、播磨、美作を分ちて、一族赤松伊豆守貞村に授けられんと將軍の內意有るよし、我が子彥次郞教安に聞き大に憤り、將軍を害せんと竊に謀をめぐらす折なりしかば、早く夢龍道人が讒言のことを告げしらす者ありて、性具は心やすからず、腹心の良等勇强なる者四五人を招き、「かの道人、早く隱謀を漏れ聞きしにや。いかさま怪しき曲者なれば、我が爲に害となるべきもはかられず。早く殺害するにはしかじと思ふなり。彼又飛びかけりてたやすく捕へ難きと、兼ねて人のいへるを聞くゆゑに汝等をえらみ遣はすなり。人しれず仕課せ來るべし。」と委しく云含めやりけるが、醍醐山中の栖にいたりみれば、わづかなる草庵の窓の下に、道人は香を炷き默然と眼を閉ぢ、心をすまして坐したりける。四方より圍んで手捕にせんとせしに、道人は心得たりと飛電の如く身をかはし、ひらりと飛んで谷に下り岩上に立つて冷笑ひ居たり。尙も捕へんと力限りに働けども、只眼前に有りながら手にあたらず。大勢を催し重ねて捕ふべしと、再び向ひけれども草庵には人もなく、唯壁上に

大澤焚而不レ能レ熱
河漢冱而不レ能レ寒

と莊子の語を書置きたりけれ共、更に其心をしるものなし。其邊を探りもとむるに、行衞知れざりければ、赤松が郞等は詮方なくすごすごと歸りける。道人の諫を用ひられず、將軍の行跡ますます正しからざりけるが、程なく嘉吉元年六月二十四日、赤松が館にて害せられたまひけるぞ愚なれ。

圓鐵法師舊友を救ふ話

情の薄き交りを泛交と謂ひ、情の厚き交りを石交と謂ふ。泛交は水にうきたるが如く定めなきの意にして、石交は石の磨滅すべからず轉移すべからざるが如く、相期し相約することの違はざるをいふなり。世下りて人情日にうすく、無事なる時にみれば、雷陳管鮑の如き交り也と見え侍れど、患難の時にいたりて相救ふことなきをみれば、世には唯泛交のみなるぞ嘆かしけれ。永祿の比、攝州有岡の城守伊丹大和守につかへし、吉見三郞秀察といふ者あり。童子の時より力量萬人に卓越して、勇氣盛んなるのみならず、正直に

して善を助け惡を制し、信義を專らとする豪傑なりしに、大和守惰弱にして武備に怠りけるを嘆き、海内戰鬪ならざる地もなく、我を立て彼を奪はんと、互に間隙を窺ふ時たるに愚なる行跡と、度々諫言に及びけるを、却つて疏み惡まるゝ體にみえければ、譜代恩顧の主人にてもあらざりければ、たゞちに仕を辭して有馬山の邊なる故郷にかへり、再び仕ゆべき志もなく、壹人の老母ありけるに孝行をつくし、日に山野を馳せまはり獵をなして衣食の助けとなせしに、又其隣村に常盤登之助といふ浪人あり。勇猛正直なる事秀廉に同じく、ともに獵を業としけるゆゑ常に出合ふこと多きまゝ、終に厚き交りと成りて兄弟の約をなし、手を携へ袂を連ねて相離れざるは、影の身にそふが如くなりしに、秀廉が老母心地あしゝとて臥しけるが、藥石効なく已に終に臨む時、秀廉に向ひ、「凡そ生あるものの習ひ、命ををしまぬはなきものを、汝仕へをやめてより生業なきまゝ、朝暮多くの鳥獸の命をとりて世をわたること久し。佛も深く戒め給

ひて因果應報の理むなしからず。汝が未來の程恐しと思ふ心、常になきにしもあらねど、外に口腹を養ふべき便なきまゝに謂はで打過ぎしが、今此世をさらんとするに付いて、作れる罪の程いよ〳〵淺ましく思ひ歎くなり。今また汝、徵をやむるとも町人農夫の手態をきらへば、再び主人をえらみ仕へなば、騷亂の世の中なるゆゑ甲冑を離るゝいとまなく、長く修羅の衢に迷ひ苦しみを重ねんより、浮世を出でて善行のみを修し後生善所を祈り、九族天に生ずるといふ佛の御弟子とさまをかへて、我々が菩提をとひなば上もなき孝行なり。」と、苦しきなかに枕をあげてしみ〴〵と教訓しけるに、秀廉は涙に沉みて返答さへ出でず、腸を斷つうちに、母は忽然と眠るが如くに世を去りければ、なく〳〵葬りの禮法、萬かたのごとく取りまかなひけるに、登之助も病中より日毎に安否をとひけるが、憂を慰め力をたすけて共に追薦をなせしに、秀廉は兼て出家の志はあらざりけれども、至孝の心より母の遺言背き難しと、大和守に仕へし時に、

心やすく詣でてし老蓮寺といふ蘭若に、圓澤禪師とて德行世に勝れたる僧の弟子にならばやと、登之助に語りけるに、「母の遺訓によつて思ひきはめし孝心の出家、止むべきにあらず。今より地を隔てゝ住めば、相遇ふことも稀なるべし。」と手を分つに忍びず。秀廉を送りて老蓮寺にいたれば、圓澤禪師、其來由を委しく尋ね、「殊勝のことなり。」と、ゆゑなく師弟の約有りければ、秀廉、即座に髮を剃つて法名を請ひければ、「汝、正直勇猛の性質なれば、定めて道心も堅固にして金鐵の如くなるべければ、我が一字を上につけて圓鐵と呼ぶべし。」とあるに、秀廉は心にかなひたる名なりと悦び、家に有りし武具を賣りて袈裟衣にかへ、坐禪工夫の外他事なかりしに、登之助は秀廉に別れて家に歸りけるに、兼て壹人の兄ありしが、駿州の今川義元につかへけるに讒者の爲に災を蒙り、籠居しけるよしの書簡來りければ驚き、いかなる事にや氣遣はしさの餘り、直ちに駿州へ赴きけるに、一味の惡黨なりと、共に疑を蒙り兄と同じく今川の元に留められけるが、終に無實の罪、辯じがたく、兄弟ながら獄屋につながれ、やがて死刑に處せらるべきと極まりける。圓鐵はかくとも知らず、老蓮寺にありて久しく登之助が音問を聞かざれば、なつかしく思ひ故郷へ歸り其家を訪ひけるに、登之助が妻なる者に逢ひ、かくの次第をきゝて大に驚き歎息し、兄弟の約盟をもなせし無二の朋友、生前に今一度對面せばやと思ふ心切にして、急ぎ駿州に赴かんと寺に歸りけれども、師に暇を乞はゞ遲くなる事もやあらんと、日を送る事年の如く心せかれて、もし力を助けて救ふべき樣ならば、兎も角もせんと思ふより、幸ひ老蓮寺にありし、鐵にて作りたる數十斤の重さなる禪杖を竊かにかり持ちて、夜にまぎれて己が坊をいで、脚健かなるにまかせ日毎に數里の途を歩みけるに、一日食を與ふる家なく、ことなう飢ゑ疲れて、とある山中に思はず倒れ臥しけるに、其邊なる武士と見えて、多くの僕を從へ花麗に出立ち、意氣揚々として來りしに、圓鐵が臥したるを見て、「彼、僧形たりといへども、行ひ惡しく飄零して飢に苦しむ成るべし。肉合すこやかに骨組あらく見えたれば、此比我が求めし刀を試むべきによきものなり。彼も此世にて乞食をなさんより、一刀に死したるこそ勝るべし。」と、嘲りけるを聞きて、圓鐵怒りけれども、さらぬ體に

て起直り、「足下の詞にたがはず、飢凍えに苦まんより、死したるかた勝れりと思ふなり。生前のうちに何とぞ思ふまゝに、一たび飽食せんと望めども、今に至るまで腹に食のたることを知らず。あはれ、思ふ程食をあたへ給ひなば、今にても一命をまゐらせん。」と、實しやかに語りければ、心淺き者にや有りけん。其武士打笑ひ、「さらば、思ふまゝに食をとらせん。刀を試むるに及んで走る事なかれ。若し又食をあたへて後、逃れんとはかるとも捕へて殺さん事安し。いよ〳〵食を命にかへて求むるや。」と、詞をかたくして、一人の食をあたへければ、圓鐵常さへ人に勝れし大食なりけるに、十分飢ゑたる折なれば、唯一口に喫し了り、「五六人の食をあたへたまはずんば飽く事なし。」と、僕が携へし食器を手に取り、猛虎の犬羊を喰ふがごとく、暫時に喰ひ盡し器を投げやりて、「恩施忝し。少しく飢を忘れたり。」と、打笑ひ行過ぎんとするに、武士大に罵り、「食にだに飽かば命を捨てむと約せしを、違へんとする惡僧、からめて刀を試みん。」と下知すれば、僕等群りかゝつて繩を掛けんとするを、苦もなく投げちらし行かんとすれば、武士いよ〳〵怒り、たまりかねて馬を飛下り、後より刀を拔いて切付くれば、持ちたる鐵の禪杖にて打拂ひけるに、僕も皆々刀を拔きつれ前後を遮れば、「無益の殺生よしなしと思ひしかども、己れらごとき惡黨は命を奪うて世の爲となれば、佛もとがめ給はじ。」と、禪杖を取直すと見えけるが、主人とみえし武士は、忽ち頭を微塵に打ちくだかれて死しければ、僕は大に恐れをのゝきて逃げ散じければ、獨り呵々と打笑ひ、悠悠として衣にかゝりし血を傍なる流れにてあらひ、夫より又路をいそぎて、程なく駿州にいたり、今川の居城のあたりに徘徊し、風聞を聞合すに、義元暗愚にして小人を用ひ、賢者を退け罪なきを殺し、登之助が兄も忠ある者なれども、讒言によつて主人を亡す陰謀ありといひなし、一族までも殘らず刑せらるにより、折ふし來り合せし登之助は、此事に預らずといへども、讒者後難をおそれ、共に害すべしと、已に引出し切らるゝ日にも成りしかば、近邊の庶民群集してこれをみる。圓鐵は禪杖を携へ、人の中にひそみゐたりしに、多くの人をいましめ引渡すうちに、登之助は無實の罪に坐せらるゝ憤りを面に顯はし、牙をかんで來るを見るより、圓鐵は怒りたちまち動いて、

獅子の吼ゆるが如くたけりて、鐵禪杖を水車にふりまはし、警護の武士を四角八方に打ちちらし、「いかに登之助、汝が橫死を救はんと圓鐵是まで來りしぞ。心やすく思ふべし。」と呼はれば、登之助は思ひよらず夢の心地にて大に喜び、踊りあがつて惣身の力を出だせば、いましめの繩はらりと解けたりければ、打倒されし者の刀をうばひ、「兄をも助けたし。いよ〳〵力を合したまへ。」と、圓鐵と幷んで血刀を打ちふり、關張が勇をなして、面もふらず散々に戰ひければ、討たるゝ者數を知らず。やう〳〵に兄を伴ひ圍を出でんとせしが、後には弓鐵炮を放ちけるゆゑ、兄は急所をうたれ倒れふしけるを肩にかけ、圍を切拔けて山林に逃走り、日も巳に西山に落ちけるに炬を多く照して猶も追來りしが、辛うじて逃れ課せたれども、兄は深手にたへかねむなしく成りければ、登之助も菩提の心を起し、圓鐵と共に圓澤禪師に從ひて僧となり、生涯交りを變ぜず、骨肉よりもむつましく、兩人ながら悟道發明して、老年にて卒しけり。戰國のならひ、山賊野伏の徒、老蓮寺に來りて狼藉をなせば、兩僧出でてふせぎ退けけるによつて、老蓮寺の二虎と呼びて恐れをなしけるが、度々の兵火の災ひを免れ得ず、今は絕えて礎の跡のみ殘れり。

今古小說唐錦卷之一終

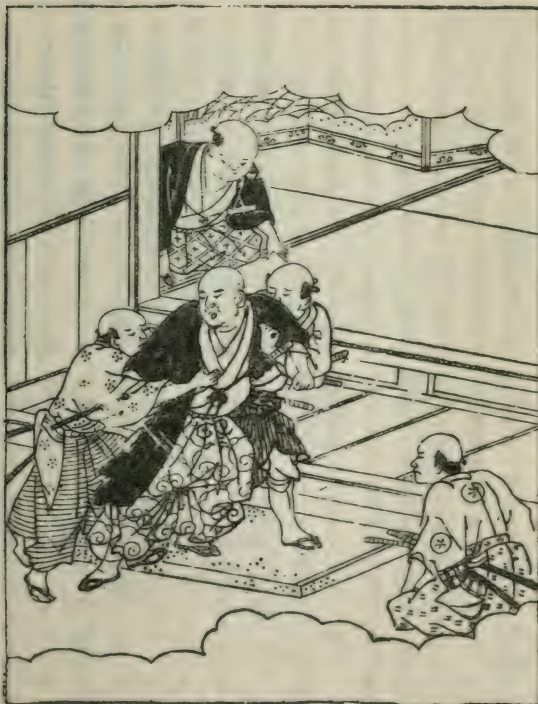
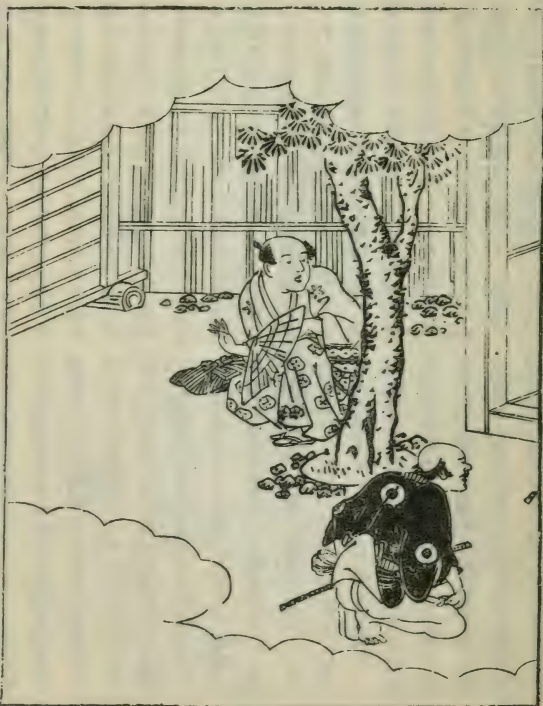
今古小説唐錦巻之二

佐々木曹五茶師紹芳を討つ話

世事紛々如二奕棊一、輸贏變幻巧難レ窺。但存二方寸公平理一、恩怨分明不レ用レ疑。恩を須臾も忘れざる者は忠臣孝子、恩を常に忘るゝ者は亂臣賊子となれば、人と呼ばれ禽獸となるは、此二つによるのみ。天文の頃、泉洲堺の津に佐佐木曹五と云ふ者あり。世々素封にして貲財倉庫にみちければ、衣食の美をきはめ婢僕の多きにかしづかれ、自ら家産を營まず。唯書を讀み酒を樂しみ常に遊人逸民と交り、奢侈風流に日を送りけれ共、仁心ふかく俠氣ありて、貧しきを賑はし危きを救ふ事多かりしに、細川常植に仕へし森澤吉次といふ浪人あり。自ら武藝に熟練し兵書に明かなりと自負すれども、主人最期の戰にも隨はず、淺ましくも忍び落ちて、露の命を保たむと恥を忘れ名を汚し、爰彼所と飄泊し凍餓の辛苦にくるしみけるが、堺に來りてはからず佐々木曹五と相識になりしに、亂離の世なれば庶民にいたるまで、皆武藝をはげみならうて、落武者盜賊の亂暴狼籍をふせがんとするゆゑに、曹五も頗る心をつくし奧旨に達せんと思ひけるに、吉次が辯舌にまかせ兵法劍術を論ずるをきゝて、世に希なる達人の樣に思ひなし、且もとは大家に仕へたりし人の、かくまでに落魄に及ぶ事のいたはしさよと、禮敬して別墅にとゞめ置きて武術を習ひけれども、詞には似ず未練にして、後には曹五が方遙かにまさりけれども、厚情は始にかはらず懇にもてなせしに、同じ地に紹閑とて世に聞えし數奇者あり。曹五と親しく交りて、常に茶事の風流をかたりあふを羨ましく思ひ、吉次も紹閑の弟子と成りて學びけるに、此技には才ありて萬しほらしかりければ、紹閑も殊に愛して、教導殘す事なかりければ、諸人もてはやして我もうへなき樂しみに思ひ、終に茶人と成りて新たに居をトし、名を紹芳と改め、門人も次第に付きて、大名高家にも折々招かれて寵賞にあづかりぬ。大内義隆に招かれて紹閑周防に下りけるに、當時西國にならびなき繁榮の大内なれば、もし寵にも預からば生涯の富貴を得んと、羨ましく思ふより、紹芳も從ひ下らんといひける

に、紹閑も、「彼一族には風雅の士多く、我一人下る時は、同じ時にかなたこなたより招かれ、いそがはしさのあまり、やゝもすれば禮にそむき約をあやまつ事多し。汝も共に下らば、我にかはりて勞を助けんなれば、よろづに便よかるべし。」と肯ひければ、紹芳も悦び、相從ひて周防に下りけるが、義隆の意にかなひ厚祿をたまはり、近臣の列につらなりて諂び媚びしかば、花月遊宴の席、從ひ陪せずといふことなく榮燿にほこり暮しける。佐々木曹五は其後、毛利元就に勘氣をうけて流落せし、桂隼人義成といふ者に逢ひて、數日家に留め厚くもてなして兵書を講論しけるに、一日住吉に詣でるとて出で行きしに何地へ行きしやらん、再び歸らず。何の故たることを知らず、怪しみゐたりしに、庫中にありし黄金をこめし箱一つ紛失して、外より忍び入りて盜みし體にも見えず。能く案内知りたる者の態とみえて、婢僕をひとり〳〵強く尋ね問へども、更に證跡なく、近頃召抱へたる藤六と呼べる僕が曰く、「桂隼人出で行きし前の日、頻りに庫の傍を徘徊してあやしき體なりし。」と心付くるに、曹五も彼は廉直なる士と思ひ居たれども、乏しきまゝの欲心にて顯れん事を恐れ、我に告げずして出で行きしなりと、始めて疑を起し、餘の婢僕に尋ぬれば、口さがなくもおの〳〵、覺えなき事もありし樣に讒謗しけるによつて、隼人が盜みしにこと決し、よしなき者に厚く交りし心の淺はかなるを、世にも笑はれむと後悔して、是より尋ね來る人ありても、家にとゞめ置く事稀なりける。自ら家產を營まざるゆゑ次第に貲財乏しくなりて、剩へ回祿の災を蒙り、貧苦日を追うてまさり、久しく召しつかひし恩顧の婢僕も皆ちり〴〵になり、忠を守りて獨り殘り留まりし、要人といふ僕と妻と三人に成りても、尚糊口の計をなし兼ねたりしが、紹芳は大內に仕へて富貴の身と成りし由を、遙に聞傳へ、「彼落魄たりし時、厚く情をかけたること、骨肉の親しみよりまさりたれば、今のありさまを語りなば、よも見捨てはせまじ。彼地に下り兎も角も情に預からばや。」と語るに、妻は、「賴みがたき人心、はる〴〵と下りて、若し昔の恩を思はざる時は、いよ〳〵辛苦を重ぬべし。文にて今の歎きを通じ賴み給はば、有無知れぬべし。」と止めけれ共、「戰鬪の世の中なれば、文の便も心に任せ難ければ、先我一人周防に下り財をかりて歸り來るか、

又彼國の山口は洛にも勝れし繁昌の地なりと聞けば、山口にて生業をいとなむことも有らむ。左あらば、汝を迎ひの人を上すべし。紹芳が今の富貴は我が惠みよりなれる所なれば、千に一も舊恩を報ぜざることはあらじと思ひきはめ、やがて吉左右を知らせん。心つよく待つべし。」と慰め、日を撰みて起程し、なれぬ鄙の旅路、はるかなる海山を過ぎ行くの辛苦を思ひやり、歸る日いつと定めがたき別れに、主從三人、六つの袖を絞り、影見えぬまで遠く見送り見かへるは、正に是、世上萬般辛苦事、無レ非三死別與二生離一、とのべしに違はず。餓ゑて喰ひ渇して飲み、曉に行きおそく宿して、漸く周防の山口に着きぬ。聞きしに違はず、巷陌の市聲喧しく、諸識百工あらずと云ふことなく、佛堂神社美麗をつくし、よろづ洛陽を學びたれば、曹五も眼を驚かして暫く徘徊し、旅亭によりて紹芳が事を尋ぬるに、寵賞今に衰へず、時めくよし荅へければ、先づ少し心定まりて宿所に問ひ行き案内をこへば、僕出でて、「何方より」と尋ぬるに、しかじかと謂ひければ、「主人は今、御館に參り給ひ、歸りは暫く程あり。」といふ。「さらば待ち合はし候はん。」とかたへに腰かけて見廻すに、げにも過分の高祿をたまはるとみえて、屋宇つきづきしく、庭園清幽にして、奥には男女の笑ふ聲きこゆるも、饒かなるしるしとうらやまれ、古への我が盛んなりし時も思ひ出でて、心緒萬端なり。其姿の賤しくかじけたるを見て、出でてもてなす人もなく、只獨り默然として黃昏に及ぶころ、紹芳は美服をまとひ、酒宴に侍せしにや酩酊の體にて、僕に助けられて歸りきたる。内に有りし已前の僕出でゝ、かくと告ぐれば、「何、佐々木氏の來訪とや。遠路を隔てたるに能くこそ尋ね給ひつれ。」と自ら手を取りて奥に誘はむとして、昔にかはりて衰へし有樣、僕をもつれず一人來りしと見て、訝る氣色ながら座上に招じて、互に疎濶の情をのべて、茶菓のもてなし、やゝ時移りて、曹五は薄命貧窮の次第をくはしく語り、「君は今官途につかへ給へば、あはれ舊交の情によりて少しの扶助をなし轍鮒の苦しみを忘れさせたまはらば忝なからん。外に賴むべき方もなければ、はるばる來りて憐みを請ふなり。」と涙を流して餘儀なく賴みけれども、紹芳は耳聞かさるが如く他事をのみ語りて、更に其求めに應ずるの詞を出さず。曹五は怒氣已に動きけれ共、折やあし

かりけんと思ひかへし、再び來りて嘆き頼むべしと、旅亭に歸らむことを告ぐれども、始めのもてなしにも似ず留めもやらず。「又こそ見參せん。」とのみいひて、門にも送らず奥に入りければ、曹五は大きに望を失ひ、掌にありし寶珠を失ひ口に含みし美食を奪はれたるが如く、悶々鬱々として、旅亭に歸り打臥して、「早くもかくとしらば、數日の旅勞を經て、何ぞこゝに到らん。昔日の恩を露ほども思ふならば、鶯應奔走して許多の財を分つべきに、禮を知らず義を忘れたる禽獸。」と獨り罵りながらも、きのふは醉中にて前後を忘れたるゆゑにもやあらむと、翌日、朝とく到りければ、僕出でて、「主人は早、御館に參りたまひし。」といふに詮方なく門を出でて、其邊を徘徊するうちに、紹芳はさきに見しごとく花麗の裝ひにて、僕を從へ意氣揚々として門を出でて出仕する體を見て、曹五は怒氣再び起り、走り寄つて罵り恥づしめんと思へども、急なる君の召によりて對談すること能はざるによつて、留守と稱ぜしにやと、又思ひかへ

して怒をしづめ、旅宿にかへり寝食を忘れて、不平の思ひに堪へず。翌日の曉三たび到りけれども、同じく内にあらずと稱じて逢はず。それより幾度いたりても同じ答へにて、後には僕も詞をかはさず。乞丐人の如くあしらひければ、曹五も今は忍びかね、踏込んで紹芳を殺害せんとはやれども、又故郷の妻の身の上を思ひやり、或は多くの僕にさゝへられなば討洩すこともあらんやと、躊躇して決せざりし所へ、思ひよらずも、家に殘したる僕の要人旅亭に尋ね來り、曹五を見るよりも詞はなくて涙に咽びければ、いかにやと驚きあやしみ、「妻は恙なきや。」と尋ぬれば、懐中より一封の書を取出し與ふるに、いよ〳〵心ならず、ひらき見れば妻の手跡にて、別れしより程なく重き病を得て、いまはの時に書き遺せ

し文にして、字々斷腸ならずといふことなければ、讀みも終らず泣きしづむ。要人漸く涙をおさへ病中の次第をかたり、「唯君の旅中はいかゞおはすらん」とのみ、息ある中はの給ひて失せ給ひぬ。かりに御死骸を葬り置きて、取

りあへず是まで參りし也。紹芳は昔を忘れずたのもしく申し候や。」と尋ぬれば、曹五は、「今更、汝に語るもはづかしながら、角まで恩義を忘れし人面獸身の者とは知らず、妻の留めしをも用ひず、遙々と爰に來り、無益の勞をなせしのみならず、辱めを蒙りて口惜しさ限りなく、其上この憂ひに逢ふに付けても、恨み骨髓に透れば、紹芳を殺害せんと思ふなり。存生へて詮なき命なれば、多勢にさゝへらるゝとも思ひ切つて働きなば、よも仕損ずる事有るまじと覺悟をなせしなれば、汝は再びよき主を賴みて、安身の計をなすべし。是まで困窮の中に、獨り辛苦して忠を盡し仕へしこそ、かへすがへすも嬉しけれ。此世にては其報をなすことあたはざれば、死後の靈魂は汝が影身にそひて守るべし。」と語りければ、要人も厚き詞を謝し、ともに紹芳が無道なるふるまひに怒りを起しけれども、彼は今義隆の寵愛に預かると聞けば、僕從の徒多く、助け救ふもの大勢なるべければ、主人の命も逃れがたきを悲しみ、「人は只、堪忍を守り命を保ちなば、再び世に出で志を得ることもあるべければ、勾踐韓信などの故事をも思ひ出でて、しばしの恥かしめを忍び給へ。」と、さまぐ\理を說きて諫めけれども、迚も思ひ止まる氣色なかりければ、僕も、「多年恩顧の主君におくれ、再び仕へて榮を願ふ志なければ、共に紹芳をねらうて鬱憤を散じ候はん。」と、いさぎよく謂ひければ、曹五もいよ〱其忠心の切なるを感嘆し、「さまで恩もなき我を左程に思ふは前生よりの因緣ならめ。」と、それより主從は紹芳が家の邊を徘徊し折を伺ひけれども、其のけしきを悟りけん、途中にて見ることもなかりければ、むなしく日を過しけるに、大内義隆は陶尾張守晴賢が叛逆によつて、大寧寺に於て自害ありければ、日頃深く恩惠を蒙りし一族郎等はもとより、寓居して親しかりし公卿殿上人までも、同じ迷途の路に赴かれしに、人畜の紹芳は師匠紹閑と同じく周章騒ぎて、見苦しくも命を助からんと泉州を志し、崎嶇たる山路をこけまろびて馳せけるに、天誅逃れ難く、端なくも曹五主從にはたと行逢ひければ、さらぬ顏にて行過ぎんとするを、曹五は早く引留め、「此頃より己れに逢はんと窺ひしかども、心のごとくならざりしに、幸ひ成るかな、大内の騒動あれば恥を知らざる人畜、極めて此道を落ちて泉州へ歸るべしと察せしゆゑ、とくよりこれ

に待ち請けたり。深き恨みは今更語るに及ばず。」といひも果てず、氷の刃を抜いて斬りつくるに、紹芳は武門に生れし身なれども、あまりに恐れあわてゝ、闘争の中を落ち來りしゆゑにや、刀を帯せずしてありければ、手をあげて罪を謝せんとすれども、膽落ち魂飛びて、聲出でずふるひわなゝく所を、一討と思ひしかども、苦痛をさせて思ひしらせんと、先右の腕を打落しければ、あつと叫んで逃げ行かんとするを、要人引きもどして打倒せば、起上つて又逃げんとする時、左の腕を切落されたれば、立つ事あたはず。苦しみうめきて轉けまはりけるを見て、主從は他日の鬱憤一時に散じ、熱して冷水を飲むが如く愉快に堪へず、久しく忘れはてし一笑を始めて催しけり。暫くありて紹芳は將に息絶えると見えければ、兩人頭と脚とを持ちて、やつと聲をかけ、巖石峨々と聳えたる澗底へ投込みければ、粉碎と成りて死したりける。曹五、思ひしよりもやすく紹芳を害したれば、それよりも妻の死骸を假に埋め置きたりとの事なれば、早く故郷へ歸り、よく葬りて心ばかりの追善をもせばやと、要人をともなひ沙界へ歸りけり。誠に紹芳が如く、恩を忘れ義に背きて舊交を棄つるもの、世に稀ならず。おの〳〵應報をまぬかるべけんや。

桂隼人寃を雪ぎて舊恩を報ずる話

桂隼人なる者は毛利元就の臣、桂能登守元澄の一族なりしに、元就、尼子晴久と合戰の時、拔駈して能き敵を討取りけれ共、軍令に背きて罪をゆるされず、勘氣を蒙り所々に流落し、劍術を敎へて久しく曹五が元に留りけるが、住吉に詣でて、桂能登守主君の代參したるにあひ、前非を悔いて主人の勘氣をゆるされんことを、さまぐ〳〵賴みければ、能登守も軍功を求めむとして犯せる罪なれば、外の科には同じからず、主君も深き悪しみは有まじと思ひ、「伴ひかへらん。」と謂ひけるに、隼人は悦び、曹五に久しく留められ厚くもてなして、飄泊の憂ひを救ひし禮謝をのべて歸國せんと思ひけれども、能登守は、「戰鬪にひまなき折からなれば、一時も早く順風に纜を開かむ。」と急ぎけるゆゑ、曹五に辭せずして其まゝ歸國したりけるに、軍功秀でし元澄が一族なれば、事なく許されて以前の食祿をたまはり、所々の戰場に從

ひ忠勤怠らざりければ、次第に昇進して寵臣の列につらなりける。元就、義隆の危難を救はむと、軍勢をつかはされけれども、已に大寧寺にて生害と聞きて、軍勢は引返せしが、桂隼人も其人數の中にありて、途中はからずも曹五主従が衰へ果てし姿にて、向うより来るに逢ひ、「こは奇しや。如何成故に爰に来りしや。前日の謝辭をものべん。」と、馬より飛下り近寄つて聲をかくれども、曹五は面は見合しながら、返答もせず行過ぎければ、跡をしたひて尋ねしかども行方を見失ひければ、昔にかはり衰へたる様に恥ぢて、詞をかはさざりけるにやと思ひながら、主君の命にて出でたる事なれば時を移しがたく、諸軍に従ひて歸りける。曹五は沙界にかへりけれども、貧苦日にまし鬱悶のあまりにや病に染みて、要人が魚を荷ひて街に賣りあるき、纔かの錢を得て、さまぐ〵心を盡し介抱するのみを便りにて、かなしき月日を送りけるに、一日、要人は例の如く街に出でて魚を賣り、豪富と見えたる商人の門に暫く憩息し居たるに、その家の主

と思しく奥より出づる者をみれば、以前曹五に僕たりし藤六なれば大いに驚き、如何にして俄にかゝる福者に成りしやとあやしみ、内に入りて、「要人を見忘れたまひしか。久しく候、藤六殿。」といふに藤六も、「珍しや要人殿。先こなたへ。」と、座に招じけれ共、卑しき姿なれば、家僕の面前を恥ぢてや、こゝろよくもてなさず、早く歸れかしと思ふ氣色なれ共、忠心切なる要人なれば、主人ます／＼貧窮の次第をかたりなば、彼も同じ古主の事なれば、よも餘所にはせまじと、周防に下りて飄零せしより、不幸なる始め終りを委しくのべ、「舊日の恩を思はれなば、共に力を添へて、こゝろよく主人を介抱せん事をはかりたまはんや。」と、すゝむれ共、藤六はそらうそぶきて、とかうの詞を出さず。要人、再三理を說きさとす事やまされば、藤六忽ち聲をあらゝげ、「一旦主人と仰げども、早く家衰へて我を使ふ事あたはず。少しも恩惠を蒙りしにあらず。其後、我も暫く艱難せしに、一己の才覺を以てかゝる富有の身と成りたり。舊主に何の報

禮をかなさむ。無益の詞を費やさんより、早く去りて再び來ることなかれ。」と罵れば、要人も怒氣に乘じ、「世には人畜こそ多けれ。」といひて歸らんとせしに、藤六此詞にいよ／＼怒り、拳をあげて頭をうちければ、要人も亦うちかへし、互にいどみあふを見て藤六が僕等、要人をとらへ門外に引出し、狼藉者にもてなし散々に打擲しければ、要人も口惜しさ類ひなけれ共、主人の歸りを待ち詫び給はんと思ふより、「我があやまち也。免し給へ。」と詫びて、やう／＼に起上り涕泣して歸りけれども、此事を語らば主人の怒りをおこし、病の障りにやならんと其氣色を隱して打過ぎけり。一日、曹五が家を尋ね來たる士あり。僕從多く召しつれ威儀濟々として、荒涼たる破屋の外にて馬を下り、自ら案内を請ひければ、曹五は誰ならんと訝かしく、病牀を這ひ出でて顏を見れば桂隼人なりければ、物をも謂はず不興氣にしてゐたりしに、要人も魚を賣り終りて外より歸り來るをみて、隼人は前年寓居の時より見知りたれば、詞をかくれ共、是も同じく不興氣なる顏にて、返答もせず内に入らんとすれば、如何樣蹺蹊あるべしと、僕を遠ざけ獨り要人に對して、「我前年流落の時、恩惠を蒙りて久しく寓居せし謝辭をのべん爲、主君の代參として住吉明神に詣でし序、爰に尋ね來れども、曹五汝ともに何とやらむ悅ばざる氣色にて、詞をかはさず。前にも周防大內の加勢に赴く途中、圖らずもめぐり逢へども、今日の如くにして避け隱くれたり。本國に歸る時、別れを告げざりしを怒りての所以なるか。住吉にて一門の者にあひ、順風やまざるうち伴ひて早く出船せんと急ぎしゆゑ、是非におよばず、其まゝ隨ひ下りし也。其外に恨みを請くべき覺えなし。つゝまず蹺蹊をあかされよ。」と、尋ね問ふこと頻りなれば、要人も、扨は此人の態には有らざりしやと、始めて心付き、「前年、君の歸りし跡にて、庫中にありし一箱の黄金、失ひて行衞しれず。外より盜賊の入りし體も見えざれば、家內の婢僕をさま／＼にすかして、尋ねとへ共證跡なかりしに、藤六といふ者、君折々、倉庫の邊を徘徊し給ひて、あやしげなる體を見たれば、其一箱を盜み取り、顯れん事をおそれ別れを告げずして、逐電ありしものならんと謂ひしより、多くの婢僕己れ己れが疑を逃れんと思ひしにや、皆君の所爲ならんと申せしより、終に主

人も君とのみ心を決して、よしなき人に交りをむすびしと後悔ありて、其後、外より尋ね來る客あれども、家に留め置き給ふこと稀なりし。」と委しく語りければ、隼人も大きに驚き、「更に其惡事をなしたる事なけれ共、折あしく俄かに歸國せしゆゑ、疑ひを受くるも我が不幸なり。」と暫く默然として詞なかりしが、「我が所爲ならんと始めて謂ひし僕は、今此の地にはあらざるや。」と尋ぬれば、要人が曰く、「其僕は藤六とて、主君に別れてより俄に福有の商人と成りて、今猶、此地にあり。」と答ふ。隼人、其所を委しくたづね、「やがて再び來り、此冤を雪ぐべし。」と出で行きけるに、數刻を移して、自ら二つの箱を携へて來り、一つの箱を曹五が前に直し、「是は前年失へし、君が黃金を入れし箱ならずや。」と問ふに、よく見れば曹五が家名を記し、蓋に員數をかきたる如く黃金を中にいれたれば、「違ふことなし。」といふに、隼人又一つの箱を開けば、藤六が首を今切りたりと見えて、鮮血の滴る儘をいれたるにおどろいて、其所以を問へば、隼人が曰く、「我が態也と、始め謂ひし僕の藤六とやらん、此家を出てより俄かに福者と成りしと聞きしゆゑ、心得ず思ひ、其の僕が家に行き、僕を捕へ刀を胸元に押しあて、恨みもなき我に無實の罪を課せし汝こそ盜賊ならん。有樣に白狀せば免さむ。少しにても僞らば、すぐに刺殺さんと嚴しく責め問ひしに、藤六ふるひわなゝきながら、前年其箱を盜みしは我なれ共、其時君の俄かに出で行きしを幸ひと罪をゆづりし也。其黃金によつて今はかゝる福者となれば、盜みし箱も今にありて員數を其儘に返さん事安ければ、何卒命を助けよと泣き詫びしかば、已前の箱を出させ、蓋に記せし員數の如く黃金をいれさせて後、首を討ちて來りしなり。今は疑をはらされよ。」と謂ひけるに曹五要人は其明智を感じ、舊日の好みを忘れざるを悅び、厚く謝してかへしける。曹五は其の後次第に富貴の身と成り、要人を養子となして、子孫長くさかえけるとぞ。

今古小說唐錦巻之二終

今古小說唐錦巻之三

醉墨散人盜魁を捕ふる話

相逢盡道休レ官去、林下何曾見ニ一人一。と靈徹が賦せしに違はず、實に名利を厭ひて隱遁する者は、古へより稀なり。今、世に隱士と稱ずる者多くは、多病にして官途の勤勞にたへず、暗愚にして世路の經營に拙く、罪を得て人に面を對し難く、又は命薄くして貧乏に苦しみ、利欲の念深しといへども、强ひて隱棲に身を終る徒のみなり。正中の頃、長崎高資に仕へし藤井伊豆といふ者あり。忠勤怠らさりければ、主寵薄からず。家饒なりといへども、四十過ぐるまで一子なく、夫婦多年神佛に祈誓して是を求むれ共、應驗なかりければ、一族某の子を螟蛉として、名を藤井三郎亮都と呼びけるが、幼童の頃より聰明人に勝れ、讀書を好み十歲にして詩を賦し文を作り、歌を詠じ書畫を善くす。かりの戲れにも群兒を集めて、書を講ずる體をなし、又案によつて筆を弄す。人皆神童と稱しける。藤井の家に來りてより文藝のみならず、弓馬の術に心を凝し、長崎の家の子良從には、肩を并ぶる者なきに到る。伊豆に久しく仕へる何某なる者あり。家に老母有りければ、婦を迎へて介抱せしめ、我は暇なきまゝに家に歸る事も到つて稀なりしに、年經たる猫を飼ひ置き老母甚だ愛しけるが、偖老母を害して老母の姿に變じありしを、妻見付けて斬殺しけるよしを告げ來りければ、皆、其婦人の勇氣を感じけるに三郎獨り是を信ぜず。平生姑嫁の間むつましかりしやと問ふに、甚だ不孝にして、常に姑を婢僕の如くあしらひけるよし語る者ありければ、三郎竊かに其女を招き、先其手柄を賞美し、委しく其始末を尋ね、聞き畢つて曰く、「たとへ妖怪にもせよ、姑の形に變ぜしなれば、夫に告げ知らせて其後に事をはからふべきに、婦人の不敵にも卽時に妖獸を殺せし事、甚だ疑はしく、又兒女の徒かくのごとき怪談を古く語りつたふれども、決して其理なき事にして、少しも信ずるに足らざる事也。」と、明に辯論し、「汝平日姑につかへて、甚だ不孝なるよしを聞きたれば、おそらくは汝が害して事を猫に託し、罪を隱さ

んとするならん。有りのまゝに其所以をかたるべし。かゝる淺はかなる姦計にて、世を欺かんとするは愚也。」と難ずるに、流石女のことなれば、忽ち面色變じて土のごとく、戰栗して一句の詞を出さゞれば、夫を呼び縛して庭前の樹につり上げて責問ひければ、婦漸く口を開いて曰く、「我が夫常に奉公の暇なく、家に歸る事稀なれば、僕と密通してありけるが、姑に見咎められ夫に告げんことを恐れ、家に年ふる猫のありしに依つて、僕としめし合しかく謀りしなり。今はとく〳〵命をめさるべし。」と、白狀に及びければ、夫は大に怒り、「斯くまで強き惡人なりとは知らず、慈母を預け置きし我が過ち、今更悔ゆともかへらず。君の明智によらずんば長く欺かれて、終には我も汝が手に橫死せんも斗り難し。」と、家に歸りて其僕も共にからめて殺害したりける。此時亮都は年未だ十六歳なり。年長ぜば如何なる大智の人にやならんと、賞嘆せざる者もなかりける。伊豆も我が家を興さんものは是ならんと、末頼もしく萬隔てなくいつくしみけるに、其後養母四十あまりにして、ふしぎに一男子を産みければ、伊豆が喜び淺からず。名を四郎亮善と呼びて、夫婦の寵愛限りなき餘り、生長するに隨ひ三郎を除きて、四郎に家を嗣せばやと思ふ心出で來て、萬等閑にもてなしけれ共、三郎は少しも心に挾まず、四郎を愛すること同胞の兄弟にも勝れ、父にかはりて文武の道を教導し、已に二十あまりに成りける時、三郎は父母にむかひ、多病にして世事に懶ければ、家を四郎に續せて隱遁の身となり、心の儘に逍遙し、生涯を終らんことをのぞみけるに、父母はもとより願ふ所なれども、義子をさし置いて實子に家を讓らん事、道にあらざれば、「勉めて家を嗣ぐべし。四郎は外に能き主君を撰み仕へさすべし。」と假に制すれども、更に承引せされば、終にその望みに任せける。四郎もこれを聞いて、「腹を異にすといへども、昆弟の禮に背けり。」と家を嗣ぐことを固く辭し、さま〴〵詞をつくして止めければ、ある夜何處ともなく出で行きて、跡に一紙を殘し置きけるを取つて見れば、外に詞はなくて一篇の詩を記したり。

偏性羸軀世味疎
官門辭去覺神舒
避跡蓬蒿何所適
未看山水未看書

人を四方に分ちて行衞を探らしむる

に、數日を經て嵯峨の僧房に隱れありしを知つて、漸く伴ひ歸るといへども、已に剃髮して世を遁るゝの志、いよ／＼堅確なれば詮方なく、多病也と披露し家嗣を四郎に定めければ、亮都は大に喜び、是より姓名を隱して自ら醉墨散人と號し、洛外に幽棲を卜し、騷人韻士に交りて詩酒を樂しみ、普く四方の勝區名地を遊歷し、嚢中錢盡くれば書畫をなして市上に賣るに、其雅名高きを慕ひ、爭うて買求むる者多ければ、自ら饑寒の憂へをしらず。然れども、貴人高官の家に招きて書畫をなさしめんとすれば、錢盡くる時なりとも更に到ることなく、優遊自得して日を送りしに、其頃、盜賊數十人の黨を結び、洛中に徘徊して公家、武家、庶民の分ちなく、恣に狼藉しければ、高時より嚴しく令を下し、賊巢をさぐり求むれども更に知れず。大勢の武士夜々、小路々々を巡見すれども、猶靜謐ならず。盜賊等はいかゞ思ひけん、一夜醉墨が棲に入りけれども、長物なければ散人は知りながら起きも上らず、高鼾して天明に到るまで睡り居たりしに、往還の人壁破れ戸の碎けたるを見て、賊の入りしを覺り、「主人は未だ知らずや。」と笑ふ聲に、散人は眼を開き口にまかせて、

惜しむべき花なき宿はおのづから嵐
を餘所に眠る曉

と、一首の歌を以て答へければ、好事の者、其風流を感じ語り傳へて、一時の雅譚と成りにける。其頃北條家に希代の物あり。蠻國より來る所にして、黄金にて造りし二尺餘りの鯉魚なり。腹中に機關をまうけ、水に放てば鰓を動かし尾鰭をふりて、流れに隨ひ遊泳浮沈する勢ひ、活けるに少しも異ならず。妙巧人作ならずと見えければ、高時愛翫秘藏して寶藏にこめ置きけるに、賊黨、寶藏の壁を破り忍び入り、多くの寶貨を奪ひけるに、金鯉魚も共に失ひければ、高時大に怒り諸士にいよ／＼嚴しく令を下し、草を分ち土を穿ちて賊黨を探り尋ね、高札を所所に立てゝ、若し盜魁を訴へ出づる者あらば、黄金百枚を褒美として與ふべきよし記して、洛中の騷動大方ならず、庶民晝夜に心を安んずる時なし。數月を經れども、小賊を爰彼處にて貳人三人捕ふるのみにして、賊首を更に知る者なく、詮儀さま／＼なれども其功空しく、武家の面々もあぐみ果てゝありけるに、醉墨散人は弟亮善が元に到りて、「我世塵を厭うて已に隱遁の身となれば、かゝる事に預るべきにあらざ

れ共、盜賊恣に横行して庶民業を安んぜず。武家の旁々も此騷ぎを止め得ざるを見るに忍びず。故あつて賊首なる者を見顯はせしゆゑ、告げ知さん爲來れり。」と語るに、亮善大に喜び主君高資に言上し、散人が計に隨ひ、刀量すぐれ心きゝたる組子數十人を撰み姿をやつさせて、人知れず賊首の家の四方を圍ませせける。賊首は五條の橋の邊に住みて、二十斗りの書生なり。平生家に有りて、終日書を讀む聲、戸外に聞えて、夜も深更に及ぶまで休まざれば、街を往來ふ人の知るも知らざるも、其勤學に怠らざるを感じ、いかなる人の子孫なるやと羨むのみにして、隣近の者まで少しもあやしみ疑ふことなかりしに、散人案内として獨り先に立ちて、何げなき體にて内に入りけるが書生もかくとは知らず、かねて

醉墨を知りければ座上に招じて閑談するうちに、散人家内の體をよく窺ひて合圖の謦欬をすれば、心得たりと組子の面々、前後より進み入りければ、書生驚いて傍に置きし刀を取つて立上る所を先に進みし組子、左右よりむずと組

付くを、苦もなく投倒し身を踊らして、裏なる高塀をひらりと飛越えるありさま、蝶鳥よりも輕し。塀のあなたにも、早組子數人扣へ居たれば、すかさず捕へんと働くに、書生も刀を拔いて斬拂ふ。勇鋭あたりがたく、已に逃れつべく見えたる時、散人進み出で、「某、家を出でてより久しく忘れ居たる武藝を試み候はん。」と微笑しながら、手に兵器を持たずする〳〵と走り寄るぞとみえしが、やす〳〵と書生の刀を奪ひ取つてくみふせければ、大勢折重つて終に繩をかけ長崎の館へつれかへり、跡にて其家内を尋ぬるに、天井に幾許となく黄金をこめし箱を積重ね、牀下庭前にいたるまで、おびたゞしく財寶を藏しおき、高時が秘藏の金鯉魚も有りければ、拷問に及ばず、いよ〳〵賊首なること明らけく、それより餘黨もことごとく捕へられ、六條河原にて梟首ありしかば、諸人始めて安堵の思ひをなしにける。ある人、散人に問うて曰く、「かゝる希代の賊首、洛中に住むことを人皆さとらず。隣近の者だも更に心付かざるを、如何にして見顯はせ

しや。」といふに、散人答へて曰く、「古人の說に寶貨を多く藏す家は、瓦上の霜きはめて薄しといへり。我はからずも彼書生が屋上を見れば、外の人家より霜うすきがゆゑ、訝しく思ひ朝々來つてこゝろむるに違はざれば、かゝる破屋に寶貨の多かるべき樣なしと、內に入りて書生を見るに、偸盗をなすの相あればいよ／＼疑ひ、もし世を騒がす賊首にやと、歸り去るが如くにして、竊かに床下に忍入り、夜讀書の聲絶ゆる時に及び、出でて窺ひ見れば、書生黑き裝束して裏なる塀を飛越え出でけるゆゑ、行衛をみんと跡につゞいて塀に上りけれども、軒を走り棟を踰ゆること、駿馬の平地を馳するよりも早く、影を見失ひしゆゑ再び其家に入つて隈々を探るに、多くの財寶をかくせし中に、賊黨の名を記せし一巻ありしをみて賊首なることを知りしたなり。」と語りける。高札に記せし如く、高時より褒美の黄金百枚を賜はりければ、散人の曰く、「我は唯洛中の騒動を見るにたへず、諸人の災を除かん爲のみに賊首を顯はせしなれば、更に褒賞を望むこととなし。」と固く辭しけれ共、「一且諸人にしめせし政令なれば、違ふべからず。」と許容なければ、詮方なく拜受して、其まゝ貧賤孤獨なる者に黄金を分ち與へて、少しも殘し留めず。其後、隱遁の身も洛近くにありては、尙心むつかしと關の東に赴きしに、其終る所を知る者なし。

萩本夫婦奇縁を結ぶ話

夫婦の契は天より定る所にして、人力の謀り求むるによらず。縁あれば千里を隔つれども相投じ、緣あらざれば面を對すれ共偶せず。文祿の頃、津の國生田の邊に萩本式部といふ者あり。父は都の人にて時めきたる武士なりけれども、故ありて爰に身退き、世を幽かに送り人に交らず、好むに任せて敷島の道を友とし、つれ／＼を忘れけるゆゑ、式部も幼年の頃より父の教をうけて、心を月花によせければ、鄙にはまれなる艶男なりける。年已に廿を過ぎければ、婦を迎へんと遠近に求むれども、式部は色好みにて貌をえらみ、又歌をよまざる女はかたらはじなんといひて、然るべき方もなく年を經るうちに、父母も身まかりければ、「早くむかへよ。」と親族より進むれども、「心にかなふ女に逢はざるうちは年老ゆとも迎へじ。」と堅くいなむに、

再びこれを謂ひ出づる者もなかりしに、程近かければ中秋の頃、同じ友をさそひ明石の浦に行きて船を浮め、逍遙してくまなき月を吟賞し、盃の數重なりければ、式部は獨り渚に上り徘徊して醉をさましありけるが、折節、一陣の冷やかなる風に隨つて、前にちり來るものあり。何やらんと取上げ見れば短册なり。拙なからぬ筆にて、

明石がた沖行く舟も數みえて

とばかり、上の句を記しければ、誰人の詠ぜしにやとゆかしく思ひつゝ、心にうかむまゝ、

波路くまなき秋の夜の月

と下の句を付けて獨り興を催し、再吟して有ける後より、艶しき女の聲にて、「風に短册をちらし、はからずも拙き口ずさみをみせまゐらせ、恥かしく思ひ候ひしに、面白く下の句をつゞらせ給ふにより、互に玉の光をそへてうれしく候。君は此邊に住み給ふや。」といふに驚き、頭を回して看れば、身に錦繡はまとはざれども、天然の國色嬋娟たる二八ばかりの婦人にして、月下に獨り彳みたるありさま、嫦娥の天下りしにやと心迷ひ魂飛んで、しばし見とれたりしが、「某は生田の邊に住む萩本式部と申す者なり。君は誰人の息女なりや。」と問へば、女笑を含みて袖に面を覆ひ、「自らは此邊なる賤しき民の娘に候へども、幼より和歌を深く好み、田舍にて學ぶ方なきを常に嘆き、三神に祈り奉りて、何とぞ此道の敎を辨へ侍らんことを願ひ候なり。今宵しも月の隈なきにうかれて此所に來りしに、君も吟詠に心を寄せ給ふことの深きを、今のありさまにしりて、床しさの餘り女の戒めをわすれ、詞をかはしまゐらせしはしたなさを笑ひたまはん。」と、語る所に人音しければ、女は傍に立退きしに、此女の婢と見えて尋ね來りたる樣にて、伴ひ歸りければ式部は名殘を惜しみ跡をしたひ行く程もなく、見苦しからぬ家の内に入りければ、邊の人に尋ぬれば、「古への牟禮の兵衞が末孫にて、父は牟禮の何某とて、農家ながら豐に世をわたる者なり。娘は藤浪とて、國中に並びなき美人なれば、迎へんと望む人多けれども、父母夫をえらみて未だ何方にも送らず。」と問はざることまでも委しく語りければ、式部は喜び謝して家にかへり、夫より便りを求めて數通の艶書を送りけるに、始めより靡く心は有りながら、父母の許しなきを憚りて返しもせざりしかど、淺からぬ思ひに惹れて、終に末の松山浪越さじと契り、いまだ

逢瀬の時を得ざれども、互に文を送らざる日なければ、父これを知りて大に怒り、「富榮ゆる婿をとりて、生涯をゆたかに送らしめんと多年夫婦心を盡して、送るべき家を撰む慈愛の志を思はず、影もなき浪人にいひかはすこそ奇怪なれ。」と、嚴しく制して文の通路をも斷ちければ、娘は明暮、唯涙にふし沈みて飮食を廢し、父母の敎へに隨へば、一旦の契りにそむきて女の道ならず。女の道を守らんとすれば、不孝の罪逃れがたければ存命へて詮なき身と、一筋に覺悟をきはめ、一通の文を殘して浦浪に身を投げんと、ある夜忍び出でければ、父母は大に驚き、人數を催し尋ねけるに行衞しれず。明石の浦なる松枝に藤浪が小袖をかけ置きたれば、爰にて身を沈めしやと、海士を入れて海中を探るに死骸は見えざりけれ共、常に愛して頭にさしゐたる鴛鴦の簪を、海底より拾ひ上げければ、入水せしに極まりしと、父母の悲嘆はさらなり、式部はこれを傳へ聞くより、昏絶して暫くは人心地もなく、數日、狂人の如く泣暮しけるが、忽ち無

常を観じ、浮世の望盡きて姿を墨染にし、追善の爲に諸國修行せんと思ひ定め、人々の留むる袖を打ちはらひ、家を親族の者に譲り出で行きけるに、播州の書寫山に登り、爰にて剃髪せんと、ある僧院を頼み宿しけるに、其院は檀越多く布施の財物少なからずとみえて、本堂鐘樓、綺羅をみがき、方丈も廣くして數の間所をまうけたり。院主、事あつて他行有りければ、剃度も兩三日延引しけるに、式部は佛を拝し經を讀誦するの暇、方丈を爰かしこと見廻りしに、折節、有合ふ僧もなければ、徒然のあまり奥深く行き見れば、別に離れたる密室あり。額をかけて、修二秘法一之處、不レ許レ入二餘人一と記したれば入る事能はず。暫く佇みゐたりしが、此中には如何なる佛を祭り有るやらむと、頻りに見まほしく思ふ心生じて禁じがたく、傍に人なきを幸ひと、身を潜めて室に入り、窺ひ見れ共更に異成事なく、奥に壇を高くまうけて、見なれぬ一幅の佛像を掛けたり。拝し畢つて、何の佛なるやと近よつて見ゐたるに、折節一陣の狂風

吹來つて佛像の畵を捲き上げければ、後に人の入るべき程の穴あり。大に怪しみ壇に上つて穴の中をうかゞふに、暗々として更に辨じがたく、あまりに首を下げけるゆゑにや、忽ち倒まに穴の中に落入ること五間斗りと思しく、驚きながら手足の痛みを忍び、早く這ひ上らんと探り廻りけれ共便りなく、惘然とあきれ果てたりしに、少し明りさしければ、其方にむかひて這ひ行きけるに扉あり。開き見れば内には燈明らかにして、方五間ばかりの室なり。杯盤酒肉を取散らして、酒宴を催せし跡の如くなり。障子をひらきて奥をみれば、一人の女を柱に縛り付け置きたり。近寄つて熟視れば、こはいかに、入水し終りしと聞きし藤浪なれば、おどろくの餘り、心神恍惚として夢の如く、幽魂の姿をかりに顯はせしか、又我が身も黄泉に來りしにやと、辨へかぬる斗りなりしに、女も共に驚き、「君は式部殿にてはましまさずや。」と問ふに、「然り。」と答ふれば、女涙を流し、「此世にて再び君にまみゆる事は有るまじと、深く悲しみしに、緣盡きずしてふしぎに逢ふ事の嬉しさよ。」と語るに、式部初めて心定り、縛を解きやりて尋ねけるは、「明石の浦にて、入水のしるしに松枝に衣を掛け置き、又汝が簪を海底より拾ひ上げたれば、空しくなりしとのみ、今まで思ひ極めたるに、いかなる故にて此所にありしや。」と謂ふ。女の曰く、「一旦、君と二世のかたらひをなすといへども、父母の怒り強く文の通路をもとめられ、ことに外へ送らんとのみ思ひたまふ氣色成りしゆゑ、女の操にそむく悲しさのあまり、不孝の罪をわすれ海に沈みむなしくならんため、君にはじめてまみえし明石の浦浪に飛入りしに、折節潮の干かたにて水淺く漂ひし所に、海賊と思しく恐しき男、船に乘り來りしに我を引上げて、はからずもよき德付きたりと喜んで、我を家に伴ひかへり、遊君に賣らんと斗りしに、書寫山の僧に財を多く出して、竊かに妾を求むる者あるよしを語る者ありしかば、幸ひ也と、我を櫃のごとき物に入れて、こゝにおくる。口に轡をいれ手足を強く縛りたれば、泣くに聲出でず、走るに道なく、其苦しみいふばかりなく、僧も始めの程はいたはりて、心にしたがはん事をさま〴〵口說きしに、我、更にうけがはされば、大に怒りて又かくのごとく縛り置き、心にしたがはずんば命をとらんと、氷の刃を身に近づけ、晝夜爰に來りて強く責むれ共、も

とより死せんと思ふ上なれば、殺されん事は少しもいとはず。いつまで責むるとも更に身を汚さじとのみいらへすれども、又命をも取らず、いつまでかかるうき目みんより、舌くひきりてむなしくならんと思ひながら、今日までながらへしは、いまだ君と夫婦の縁盡きざるしるしにや有るらん。僧の來らぬうちに、早く何地へも伴ひ行き給はれかし。」とくどき嘆くに、式部も其辛苦を思ひやり落涙したりしが、いかにもして早く爰を逃れ伴はんと、挑げありし燈を取りて隈々を照しみれば、始め來りし穴の外に、又一つの穴有りければ善惡は辨へざれども、先是より行き見んと藤浪が手を取り、暗々たる間二三丁も過ぎつらんと思ふ所にて、漸く日の光り見えしかば、首を上げてうかゞふに、水なき古井の中に出でたり。木の根岩角をたよりに攀ぢのぼり見れば、深き澗底なり。此時少し息をつぎけれども、尙僧の追ひ來る事もあらんやと、道ある方へ足に任せて走りけるに、書寫山の麓なる往還の人絶えざる道に出でければ、式部が故郷に伴ひ深く忍ばせ置き、始めて夫婦のかたらひをなし、互にありし憂をかたりなぐさみ、奇緣の絶えざるを喜ぶ事限りなし。かくて數月を經て中秋の頃に成りしかば、夫婦明石の浦にて夜船をうかめ、始めて見そめしはかしこなり、身を沈めんとせしはこゝにてありしなどいひて、酒酌みかはして餘念なく月をもてあそびゐたりしに、前なる渚にもまた夫婦とおぼしく、老いたる人ふたり立ちて悲歎する體なるをみてあやしく近よりて見れば、藤浪が親牟禮の夫婦なれば、なつかしさのあまり、詞はなくて藤浪は聲をたてゝ泣くに、夫婦はおどろき「我にすがりて泣き給ふは、何所の人なるぞや。」と訝るに、「藤浪を見忘れ給ふや。」といふに、父母はつく〲と顏を見て、「誠に我が娘なり。此海に沈みし亡魂のいまだ浮かみもやらず、かりに姿をあらはせしならん。汝が空しく成りしより、夫婦はしばしも忘るゝ隙なく、思ひくらし泣き明し、折々は身を沈めし此所に來りて、もし姿をみする事もやと、はかなき事も願ひし甲斐ありて、暫しにても相見る嬉しさよ。」と啼哭すれば式部も共に感涙を流し、有りし事共くはしく述べ、「兼てより折を伺ひ、夫婦打ちつれまみえ奉りて、不孝の罪を謝し侍らんと思ひゐたりしに、今宵の奇遇に任せてゆるし給はらんや。」と拜伏しけるに、父母も心解けて喜ぶ事限り

なく、直ちに伴ひ歸り、大に親族を會し賀莚を開きければ、其頃世に普く語り傳へて興じける。式部は後に東山義政につかへ、風雅の才あるを以て、寵を蒙りさかえけるとぞ。

今古小説唐錦卷之三終

今古小説唐錦巻之四

土屋是藏妻の恨みを報ゆる話

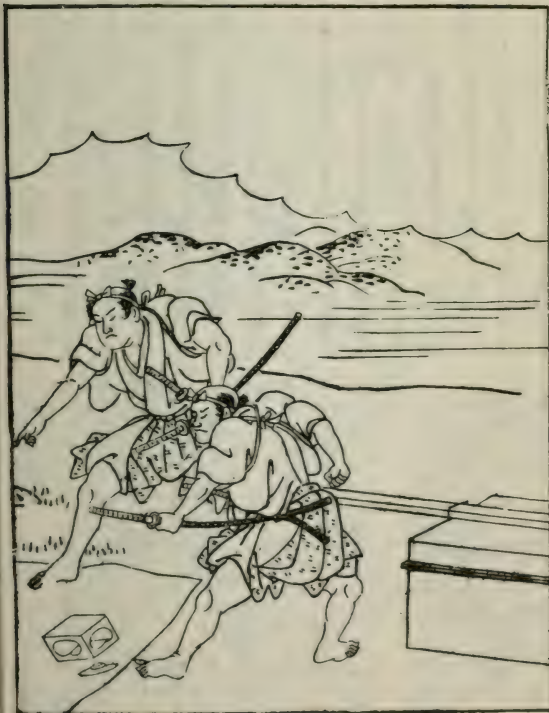
或曰く、「嫉、妬、媢の三字、共に女に從ふ。然れども婦人の妬は、男子の最もよく妬むに如かず。婦人の妬むは一つ、男子の妬むは名目多し。才を妬む、寵を妬む、勢を妬む、己に勝れる者を妬む、己に等しき者を妬む。己名をなさんと欲して、人の先なさむことを妬む。己、名をなすことあたはずして、人の名をなすことを妬む。」誠なるかな此言。女の妬むは害小にして、男の妬むは害至つて大なり。近頃の事とかや、奈良の都に土屋是藏とて、多くの財を家に積み、諸國に布を商ふ富民あり。年未だ弱冠にして產業に賢ければ、早く父に代りて能く家を治めけるに、定れる妻なかりければ、呼迎へんと良緣を求めけるに、福有の譽れ高く是藏が伶俐なるうへに勝れたる美男なりければ、娘を持ちたる者すべて送らんことを願ひ思はざるはなかりけるゆゑ、氷人の門に入らざるの日なきばかりなれども、是藏は「生涯の花とながむるものなれば、なみ〳〵の女は迎ゆまじ。容貌才智の全きを。」と深く撰みければ、心にかなふ方なくて空しく年を經にけるが、ある時同じ年比なる親しき友三四人かたらひて、初瀬の觀音にまうでける。もとより祈願あるにもあらず。折から、麗らかなる春の山路ながめ多きに任せて、こゝかしこにて歩をとゞめ、酒を酌み輿に乘じて、花の雲近くなるに、やがて寺よと思ふ時、向うより花麗なる衣服を着餝りし女の多く來るをみて、何れも面を見合せ袖を引いて、「無言の花よりも、この有情の花見こそ。」と、笑ひざさめくも少年の常態なり。程なく行違ひて是をよくみるに、婢僕多く從へて五十ばかりなる婦の娘とおぼしく、二八ばかりなるを伴ひたり。其容貌の妖艶なる世に稀なる所にして、沈魚落雁の粧ひ、未だ嫁せざると見えて、皓齒佳貝の如くなるを笑へる時にあらはせば、いよ〳〵看る人の魂を飛し神を惱ましぬ。是藏は世にかゝる美人も有るものかは、斯くのごとき人を迎へてこそ、本意ならめと、思ふ心頻りなれ共、未だ詞に出さゞりしに、同遊の友もみな妻を迎へざる少年のみなれば、何所の

娘やらん、我が妻にきはむべし、彼家に行きて婿にならんなど、戯れに爭ひ語れば、是藏は早く心付きて、従へ來りし僕を片蔭に伴ひ、「竊かに今行過ぎし女の跡をしたひ行きて、住所を尋ね來るべし。」とさゝやきいふに、僕も心きゝたる者にて、「畏まり候。」と外の事にて去る體にもてなし、獨り道を引きかへして、見えがくれに從ひ行きけるに、程近き石榴市と云ふ所なる、門宇巍々たる家に入りければ、邊の人にこれを尋ぬれば、「百濟の何某とて家系正しき人なり。」とかたるを聞きて、走り歸りかくと告ぐるに、是藏喜びて家にかへると、其まゝに便りをもとめて、百濟の元に婚姻の事を云ひやりけるに、定まりし緣にや有りけん、速かに議定りて土屋に嫁しければ、是藏が喜べることは更なり・娘も其美男にやめでけん、夫婦の中、殊にむつまじく、比翼連理とも謂ふべかりしに、ある日の曉がたに、土屋が家の後なる高塀をつたふ者あり。往來の街なりければ、盗賊ならんと見咎むるものあり。捕へて官に送らんとひしめきけるに、近隣の人も集まりて、終に手ごめにせんとせしかば、其者の曰く、「我は更に盗賊にあらず。ゆるし給へ。」といふ。「盗賊にあらずんば、何の爲に塀をつたひしぞや。」と、とへば、「恥しながら、盗賊のうたがひをうくるに忍びず、是非なく語るなり。我は近頃此家へ來りし百濟が娘に、前年より深く云ひかはせし忍び男なり。偶起き忘れて、かへるさを旁に見咎められたり。」といふに、各一笑を催す間に、人を押し退けて、其者は何所ともなく逸散に迯げ行きければ、此噂世に廣くなりて、是藏は大きに驚き且怒つて、「容のみならず、貞正柔順の女と思ひゐたりしに引きかへ、我に深き恥辱を與へし淫婦、見るも穢らはし。」と、散々に詈つて、離別せんとするに、女は身にとりて更に不義の覺え露ほどもなければ、我に恨みある者の所爲なりと悟れども、世の人口を覆ひがたければ、自害せんとかなしみけるに、「もとより此忍び男は初瀬へ同じく參りて、共に百濟の娘を見初めし徒の深く妬みて、離別させんとはかりし手だてに僞りこしらへしもの也。」と、竊かに告知らす人ありければ、是藏、又怒を加へて拳を握り牙を嚙んで、何とぞ此鬱憤を晴さんと思へども、證跡なければ詮方なく、むなしく日を送りける所に、ある時この姦計をなせし徒集りて酒宴をなし、酔に各前後を忘

れ、「たぐひなき美人を妻にせしと、是藏がしたり顔する惡さに、知謀を以て不義の惡名を蒙らしめたれば、いかに深き中なりとも、世の人口を恥ぢて終に離別せん、心地よし。」と笑ひかたる時、思ひかけずも是藏は、白き衣服に鉢卷たすきをし、裾高くからげて刀を帶し、同じ出立なる究竟の男貳人に、長持を荷はせ來りければ、皆々其出立の異なるに驚き、心におそるゝといへども、更ぬ體にて云ひけるは、「何事によりて、かゝる裝束をなし來り、我が酒宴の興を破り給ふや。」と云ふに、是藏が曰く、「汝等我が妻を迎へしを妬み、姦計を以て恥辱を與へし怒りに堪へず、殺害して鬱憤を散ぜんため來れり。妻は不義の虛名すゝぎ難きを悲しむのあまり、已に自害しうせたり。此死骸に汝等が首を手向け、其上にて我も切腹せんと覺悟したり。」と長持の蓋を開けば、さしもに美麗なりし花の容、血潮にまみれて臥しければ、何れも面色土の如く、戰栗しながら猶も、「我々がなせし態にあらず。」と僞りければ、是藏は二人の從者と共に、氷の刃を拔きはなし、「この期に及んで欺かんとするは未練なり。早く合掌して首の落つるを待つべし。」と罵れば、逃げんとするに道なく、淚を流し手を摺り、這ひ屈みて、「命を助けたまへ。」と嘆き詫ぶるありさま、餓鬼の獄卒に逢ひたるが如くなれば、是藏は快しと大に笑ひながら、刀を振り上げけるに、是藏に從ひ來りし兩人の男、「しばし」と留め、「かくまで臆したる鼠の輩を殺すも、刃を汚すに似たり。命の代りに頭を剃り、長く世の笑種になし給はんことは如何あらん。」といふに、是藏も打點頭き、「女童に劣りたる者を、今殺すもよしなし。命を助けて僧形となさば、妻の追善にもなりなん。扨々能くも揃ひし凱子かな。」と嘲れども、いづれも命を助かるといふ嬉しさに、「庶民なれば恥辱を厭はじ。兎も角もなし給へ。」といふに、是藏紙筆を取りよせ、「いよ〳〵剃髮して命を助からんと欲せば、我に謝する一書を認むべし。」と、一人に筆をとらせ、自ら文を好みて、

足下成レ婚。僕等妬レ之、行二姦計一欲下令二令室蒙一不義之虛名上。今害シテ僕等一欲レ解レ怒。然依二從者之言一忽免レ死剃レ頭謝レ罪。足下寬仁銘二肝膽一長不レ忘。頓首百拜。

と書しめ、後に姓名を記し血判を取りて懷中し、後刀をもつて髮を剃落し

「何れも殊勝の法師達かな。」とたはむれつゝ、妻の死骸をいれ來りし長持を荷はせて歸りける。跡には銘々面を見合せ頭をなで、命替りの俄入道、宿へ歸るも恥かしく、人目を忍びて髮の長ずるを待つうちに、世の噂を聞けば、是藏が妻の自害せしといひしは僞りにして、身に茜の汁を多くぬりて、死骸と見せたるにして、書かせし謝書を人立ち多き所にはり置いて、恨みを報ぜし事を世にひろくせしとあるに、又驚いて口惜しさ限りなく、か程迄に恥かしめられて、存命へんとするは我ながら淺ましと、さしもの臆病者も命をすてゝ仇をなさんと評議して、ある夜一度土屋が家に忍び入らんとせしかど、是藏心をゆるさず、かゝる事もあらんかと、强勇なる者を家に抱へ置いて守らしむるゆゑに、其便を得ず、日數ふるにしたがひ、勇氣も次第にくじけて、其儘に打過ぎけるとぞ。よしなき妬みより、大なる恥辱をかうむり、長く世に譏りを殘しぬるぞ淺ましけれ。

三刀屋武虎知勇を顯す話

尼子修理太夫晴久自ら大將として、二萬八千餘騎を催し作州へ發向し、勝軍の鋭氣に乘じて直に播州へ押し入り、十七箇所の城を攻落し、刀田の太子堂に衆徒等の籠りしを破らんとせし時、朝霧深くして案内知らぬ山路に、諸軍惘然として東西を辨へざりしかば、敵は爰彼所の熟路に依つて防ぎけるゆゑ、思の外なる敗北しける虚を伺ひ、浦上左衞門宗景、與國の勢を催し襲ひければ、ます／＼勢ひ疲れて引退きしに、晴久の常に甚だ秘藏ある小鍛冶が短刀を、良等某なる者に持せ置きしに、其者討たれて、短刀は浦上が手に入りければ歸陣の後、晴久これを聞いて、深く惜むのあまり、「誰にてもあれ、短刀を奪ひかへし來るものあらば、恩賞は望むに任すべし。」と有りけるに、座中の諸士に、未だ兎角の答する者もなかりしに、晴久の愛童、三刀屋武虎と云ふ者、此時纔かに十六歳なりしが、獨り進み出でて、「某に命ぜられな

ば、何卒して取返し参るべし。」といふ。諸士互に面を見合せ、年に應ぜぬ大言を吐く者かなと、心中に嘲り居たりしに、晴久も打笑ひ、「汝平生風流優長なるのみにして、更に武勇の志あることを見ず。今是を望むは、小鼠猛虎の鬚をぬかんとするに同じきものなり。」とあるに、武虎が曰く、「平生はともあれ、かく望み奉るうへは、紛骨碎身すとも、仕課せ参るべし。」といへども、晴久更にとりあへず、座をたゝれければ、武虎は一通の書を殘し置きて、それより竊かに播州に赴き緣を求めて浦上宗景が小姓となり、もとより聰明なるものなれば、宗景が性質をよく察し、詞に先だつて萬の事をなすに、皆心にかなひ晝夜の勤仕少しも怠りの色なかりければ、宗景も又なき者に寵愛しけるが、夏日三伏に至り家に傳はる珍貨良劍を一間につらねならべ、自ら傍に座して武虎に命じ、箱を拂ひ袋を開かしめて虫を除きけるに、かの小鍛冶が短刀も共に有ければ、奪ひ取らんと欲すれども、宗景更に座をかゆることもなければ間隙を得ず。日も次第に傾けば、かゝる折を失ふべからずと、忽ち計を生じ、次の間に退く體にて人なき所に出で、かわける柴垣に火を付け置いて、更ぬ體にてもとの一間にかへり居たりしに、程なく燃え上りて煙多く立ちのぼれば、すはやと城中鼎の湧くが如く騷ぎ立つれば、これをしづめんと、宗景も刀引提げて座を立ちければ、武虎、得たりと短刀を懐にしていでんとする時、早くも火消えたりと告げて宗景の足音しければ、是非なく初のごとくにならべ置きて、終に其日は手を空しくして暮しければ、宗景は短刀を箱におさめて庫中に入れけるゆゑ、其後は便りを得ず、徒らに月日を過しけるに、宗景が娘に忍とて艶しきものあり。年は未だ二八に滿たざれども、武虎が美貌を愛し、竊かに心を通はしければ、武虎も早く其色目をさとり、むつれよりて深くかたらふ體にもてなし、短刀を奪ひかへさんと、或時僞り語りけるは、「某一人の老母あり。久しく瘧病にくるしみ、醫療さま〴〵に手を盡せども、更に驗なし。傳へ聞く、古への小鍛冶正宗が如き妙手の打ちたる劍は、靈ありて能く狐魅瘧病などを除くよし承りぬ。因つて當家の庫中にをさめある名劍を借り奉りて、老母の苦しみを助けんと思へども、主君に告げんも恐れあり。又深く秘藏したまへば、ゆるし給ふまじきも斗りがたければ、あはれ君

の情にて庫の鍵をぬすみ出したまはらば、寶劍を老母に戴かせ病を除きなば、速かに始の如く藏め置き候はん。」と詞を巧みにたのみけるに、女心の淺はかなるがうへに、深く思ひこみし者のいへる事なれば、何の辨へもなく請がひて、宗景が酒に醉ひて臥したる時を伺ひ、枕の邊なる鍵をぬすみ取らんとせしに宗景眼をひらき忍を捕へ「汝何者に賴まれて、寶庫の鍵を取らんとするや。つゝまず語るべし。」と膝に敷きて責め尋ぬれば、忍は涙ながら「更に人に賴まれしにあらず。庫中にある軍用の黃金をとりて、美しき首飾衣裳を求め候はんと思ひ、淺ましきふるまひをなし侍りぬ。父上の惠みに罪をゆるしたまへ。」といふに、宗景は醉中なれば怒り常にまして、委しくも糺さず、「武士の娘に似合はぬ惡行かな。生け置かば一門の恥なり。」と忽ち腰の刀を拔いて、さし殺しけるぞあはれなる。武虎も事あらはれなば討つて出でんと、物蔭にうかゞひ、刀に手をかけ居たりしに、忍が實情を語らざる故にや、疑ひ咎むる者もなく、又數月を送

るうちに、宗景が領地の百姓等、一人の盗賊を捕へ來る。宗景自ら罪科の次第を拷問するに、其賊、「往還の街に旅店を開き人を留め、財寶ある者とし見れば、藥酒と號して好むも好まざるも盃をすゝむ。飲めば必ず五體麻木して、如何なる剛强なる人も、恍惚として働くことを得ざるの毒酒なり。其毒にあたりし時、指殺して財寶を奪ふ事數年なり。」と白狀す。宗景、「其毒酒の方は何を用ひたりや。」と尋ぬるに、賊の曰く、「烏頭に蝮蛇を合せ抹となし、熱酒に投じて用ひし也。唐土にては蒙汗酒と呼ぶよし、外國に往來せる海賊より傳へ聞きたり。」と答へけるに、武虎これを物蔭より聞いてひそかに喜び、烏頭蝮蛇を求め置き折を伺ひしに、或夜、宗景、郎等數人を奥に招き酒宴をなしけるに、武虎は宴已に闌にして、各爛醉に及ぶ頃、酌人にかはりて酒を熱くあたゝめ、悟らざる樣に彼毒藥をくはへ進めるに、皆爛醉のうへなれば心もつかで引受け〳〵飲む程に、忽ち五體麻木して精神暗み、主從ともに座上に倒れければ、武虎は宗景が傍に有りし寶庫の鍵を取り、案内熟したる事なれば、速に短刀を取出し懐中にかくし出でんとするに、酌にありし者は酒を飲まず有りければ、「こはいかに」と咎めければ、唯一刀に斬倒し何氣なき體にて出で行きたるに、外の郎等は奥にて酒宴最中なりとのみ思ひゐたれば難なく城中をしのび出で、晝夜にはせて尼子の館に立歸り、短刀を出しければ晴久を始め諸臣、其智勇を感歎せざるものなく、厚く褒美して高祿を與へけるとぞ。浦上宗景はさまでの毒藥にもあらざれば、解藥を用ひて恙なかりけれども、年少の者に欺かれて、大なる不覺を取りたれと、生涯、是を恥ぢ悔みけるとかや。惜哉、武虎は其後病にて早世し佳名ひろく傳はらさりしとなん。

孝子白頭にして婚をなす話

攝州兵庫の津に犬養寛齋といふ者あり。父は三好家の浪人たりしが、寛齋は武夫たる事を好まず。醫業を學びけるに、風流溫雅にしてよく人と交りしかば、未だ吐納の功を積まされ共、招き迎ふる家多く、田舍なれば外にはか〴〵しき醫家もなきゆゑ、自ら良醫のごとくもてはやされ、衣食ゆたかに暮しけるに、同じ所に一人の老女あり。男子有りけるが早世して、其

嫁と唯貳人くらす者なりしに、老女病を得て寛齋が藥を服したりしが、死すべき症もあらはれざるに、ある夜俄に沒しければ、寛齋も驚きあやしめども、若年なれば我が術の精しからざるゆゑに、治を誤ちたりしにやと恥ぢ居たりしに、思ひかけずも寛齋が家に、國守よりの捕人來りければ、「いかなる罪やらん。自らなせし過もあらず。」と斷れども用ひず。寛齋を縛りて決斷所にいたる。奉行寛齋を叱して曰く、「汝仁術を業としながら、何ぞ不孝の婦に荷擔して、姑を害せしむるの大罪を犯したるや。」寛齋いよ／＼驚き恐れ傍を見れば、前日藥をあたへし老女の嫁をからめて、引きすゑたり。惘然として答ふべき所以を知らず。唯奉行の顔をうち守り居たりしかば、奉行女を指し重ねていふ樣、「かれ密夫をかたらひ、老母の教訓せしを怒り、病に臥したるを幸ひと縊り殺し、淫行を恣にせんとするの強悪を知りながら、訴へ出でされば、汝も又かれにくみせしならん。」と、此時寛齋は始めて其故を知り、更にかゝる悪事ありとも知ら

ざるよしを述ぶれども、老女の死せし時に死骸を見て、横死病死を分つこと能はざる失ありけるゆゑ、終に坐せられて獄屋につながれ、數日ありて女密夫は死罪に行はれ、寛齋は他國に追放せられはる。寛齋が妻は折しも重病に臥して人事を辨へざりしかば、四歳三歳の男女の子二人と共に、國守の仁惠によつて恢復に及ぶまで其家に置きしかば、夫に隨ひ行くこと能はず。數月過ぎて漸く常にかへりければ、夫の行衛を普く尋ぬれども知れざれば、一門の方に寓居して、二人の子を養育する。春秋流水よりも早く程なく男は十五歳、女は十四歳にぞ成りにける。男は主水と呼びて、寛齋が實子たれども、女は栞と名付けて、襁褓の中よりやしなひし親族の子にして、末は夫婦になさんと約し置きたるなり。二人の子孝心いたつて深く、見る人其母につかへるの深切を感嘆せざるはなく、つねに父にたづね逢はんことを神佛にいのり、父の名を記せし位牌をまうけ、朝夕にまつりて拜することおこたらず。主水ある時、母にむかひ語る樣、「我幼なき時、父にわかれしよりいづくに住みたまふや、安否いかゞとしばしもわするゝことなし。たよりなきとても行衛をたづねざるは、不孝のいたりなり。もはや十五歳にも成り候へば、諸國をめぐり、力のおよぶかぎり尋ね候はん。御いとまたまはれかし。」と思ひこんだる氣色なるに母も涙をながし、「汝が孝心淺からざる事、感ずるにたへたりといへども、いまだ少年にして日數さだめぬ長途の旅に趣かば、つかれわづらはんもはかりがたければ、今すこし年長ずるを待ちて、尋ねめぐるべし。其間に音信もあるべし。」などすかしなだめけるに、主水は返答もせず泣きしづみゐたりしが、母の家にあらざる折を見合せ、栞にむかひ、「父の行衛を尋ねんと、母にいとまをねがへどもゆるしたまはず。しかりとてむなしく家にあらんも心ならねば、母に忍びて旅行せんと思ひきはめしなり。汝は家にとまりて、母によくつかへまゐらせ、怠る事なかれ。父の行衛だにしれなば、早くおとづれをなすべし。恙なき歸りを待つべし。」といふに、栞もおとなしく、「左程に思ひたちたまふ事なれば、母上の制し給ふを用ひ給はざるもことわりなり。その孝心を天道もあはれみ給ふべければ、などかたづねあひたまはさらむ。母上につかへ奉る事は、すこしもおこたり候はじ。心を安んじて、はやく親子ともなひてかへり給は

んことを神佛にいのり候はん。」と答へけるに、主水はひそかに旅の調度を取りしたゝめ、夜半にまぎれて出で行きけり。母は跡にてかくと知るより、おどろきかなしんで、あたりを尋ぬれども逢はず。それよりは唯、明暮あんじわづらふのあまり、おもき病を得たりけるに、栞かひ／＼しく介抱し、家次第に貧しく紡績裁縫にわづかの錢をもとめ、おのれは食せざるの日ありとても、母にはすこしも凍餓の愁ひをしらしめず。母も年を經て、病は少しく癒えたる如くなれども、身體痩衰へて、起居を自らなす事あたはざるに、よく仕へて少しも倦まざる事、已に十年にあまる頃、始めて主水よりの文來りけるに、母娘は浮木の龜のよろこびをなし、ひらきみれば、あまねく諸國をめくりし後、肥前長崎にて父に尋ねあひたれば、商人船に便船していつの日、長崎をたつべしと記したるに、日をかぞへ路程をはかりて、待ちわぶる事數月をかさぬれ共歸り來らず。遙か後にいたりて、父子の乘りたる船は難風にあひ、海にしづみしや外國に吹流されしにや行方をしらずと、慥に告ぐる者ありければ、母娘は又憂をそへ歎き暮すこと數年、いよ／＼音信もなければ、海に溺れ死したるならんと思ひさだめ、母は髪を剃り衣を墨にして、佛事作善のみに心を凝らせども、栞は外に嫁て行末を頼むべしとすゝむれども、「我を幼きより養ひ取り給ひしは、主人殿と夫婦にせんためなれば、いまだ婚禮をなさゞれども、一度夫を持ちし身なれば、操をかへてふたゝび夫をもつ事はゆるしたまへ。」と更にうけがはず。容貌も醜からざれば、文を送り媒をたのみて、さま／＼口說く者多かりけれども、貞節金石のごとく、少しも動かしがたければ、恥らひて再びたはぶれをいふ人もなく、年已に五十九歲におよび、母は八十にあまる時、忽ち同じ里の人多く來りていふ樣、「此家の父子歸り給へり。はやくむかへに出で給へ。」と。母栞はさらに信ぜず、「たはぶれて欺き給ふな。」とかへりみもせずありけるに、程なく家に二つの輿をかき入るゝに、何事やらんと驚き見れば、八十あまりと六十ばかりの翁二人、輿より出で母娘にむかひ、「前年長崎にて不思議に父子對面し、すぐに打ちつれ歸國せんと、商人船に乘りしに難風にあひ、蠻國に漂着し、所々の嶮路危所をしのぎ、やうやく大明に至り、年を經しうちに、彼地にて產業を營みしに、はからずも富貴の身と成

りしゆゑ、船をつくり數の寶を積みて歸朝せり。」といふ顔は、むかしにかはりけれども、まがふべくもなき寛斎主水なりければ、母栞は夢うつゝともわきまへず、互に聲を揚げて泣くより外に詞出でず、ありあふ人々もともに袂をしぼり、孝心のふかき貞節のかたきを感嘆せざるはなし。かくて互に千辛萬苦を語るに詞盡きず。生をへだてしと思ひしに、再び夫婦親子、恙なく逢ふのみならず、唐土より數の寶を持ち歸りたれば、富貴、肩を齊うする者もなく、懽喜すること譬ふるに物なし。二子年老いたりといへども、其禮をなさでは有るべからずと、父母は日を撰み主水栞に婚をなさしむ。誠に諸白髪にてはじめて、夫婦のかたらひをなすは、古今未曾有の奇談なりと、時の人語りつたへて讃美しけるとぞ。

直ぐなる御代の風俗、異國より君子と呼べるも、宜なるかなと、目出たく筆をとゞむるのみ。

安永十年辛丑正月

書鋪　京寺町三条上ル町　菊屋安兵衛

今古小説唐錦巻之四終　大尾

頃日攝の山水に遊びて、伊丹を過り風雨に阻められ、淹留數日旅館の寂寥に堪へず。時に偶〻其鄕人椿園子著す所の小說、唐錦と題する者を得て之を讀むに事々新奇にして備さに人生變化の岐を寫し、極めて悲歡離合の致を摹す。謂つべし、愚を導き俗を諭す書たりと。愛翫の餘り終に作者に請ひて、剞劂に命じ、廣く世に行ふと云ふのみ。安永九年庚子正月。穀旦平安隱士升圃書す。

頃日遊攝之山水過伊丹阻風雨淹留數日不堪旅館寂寥時偶得其鄕人椿園子所著小說題唐錦者讀之事〻新奇而備寫人世變化之岐極摹悲歡離合之致可謂爲導愚諭俗之書矣愛翫之餘遂請作者命剞劂廣行于世云爾安永九年庚子正月穀旦平安隱士升圃書

古今奇談

古今奇談續編

莠句冊

浪華書林　五堂合梓

古今奇談三十種は、近路の翁、延享の初に稿成したるを、頃に至りてその梓を數に充てなむと計るよしを聞きて、むかしの春は英と虚稱し、ふりぬる秋にはしげ〲と荒ましがりて、尙その梢は況て如何にと予に聞えさする。指枝の障りも無く、梯の設も既に備りぬと、梓する人の答へければ、罷々、榮なし實なしと、擧つらふべきにもあらずとてなむ隨されぬ。前のためしに端書せよと托言す。思ひきや、世の年波を渡競べて、また此に與ることを喜び、

涉獵したる跡を省れば、古き萍賓の答へ、小蝶の夢のさとし、のみか、梵典に孔雀の妻思ひ、歡喜丸の雩得たる矴にも、いづれを漣の文に見せつゝ、人の棲瀬を窺ひ、我が網に沒れて後に大海に放さん工夫にや。此にも早く空言の戯れ起り、初に辛く後に甘むずる物がたり若干見えたり。其類を爲々凝して、元の胡の作り得たるとや人の謂ふなる、梁山西遊の百段にも展びたるは、大御國の鎌倉の時代に當るべきに、彼より三百歳の前に、日本紀の

さへある物がたりあり。浮浪として道學の君子は眼を掩はるれど、其風に諫めたる際々を認めて、博士の君子は洞かなる由なり。されば實を種ゑて培ふにもあらぬ、枝と葉を攀ぢたる偶言は、翫ぶ人の眼界量にこそ餘情は薀るべきをや。求塚の後の巻には、三つの所を倶に男となすを經とし、神代の事のしら絲に黏して緯をとり、蘇小狡娘の巧令を潤色となす。太間の池は今攝と河に分れ、堤築の衣子繩手あり。人柱の雉子畔あり。岐路の爲に枝を折る。

吉野猩々は徐渭が四聲猿を襲ひ、群る嘖を南山の猿楽に漏すも、古人の唇に筆暢びざる石あり。王佳山の遺蹟は、むかし其地を閲したる文翁の親しく語られたる、緒餘を繼ぐとか聞えたり。たゞ是、浮れ言に陸沈れつる道芝の、自恣に亂れたるを、心の使者に刈せむとて、花の山、莠の畝にも跡をとめ、歩に信せたるさへや、費を楮にまで移して、空に食しむる謂れもて、羊草とも標せるや。本來、後に生てふ名なればならむ。

天明癸卯の冬

十千閣叟題

古今奇談莠句冊惣目録

近路行者著

千里浪子正

第一篇

八百比丘尼人魚を放生して寿盃を語

第二篇

小野阿通磨踊戯に譬て筆法を悟る話

第三篇

求冢俗説の異同。冢神の霊問答の話

第四篇

玉林道人雑談して回乢を屈る話

第五篇

絶間池の演義。強頭の勇衣子の智ありし話

第六篇

吉野狸人間に遊て歌舞を作る話

第七篇

大高何某義を厲し影の居に賊を射る話

第八篇

猥瑣道人水晶を辨し五岳の音を識る話

第九篇

白介の翁運に乗して大に發跡する話

以上九篇

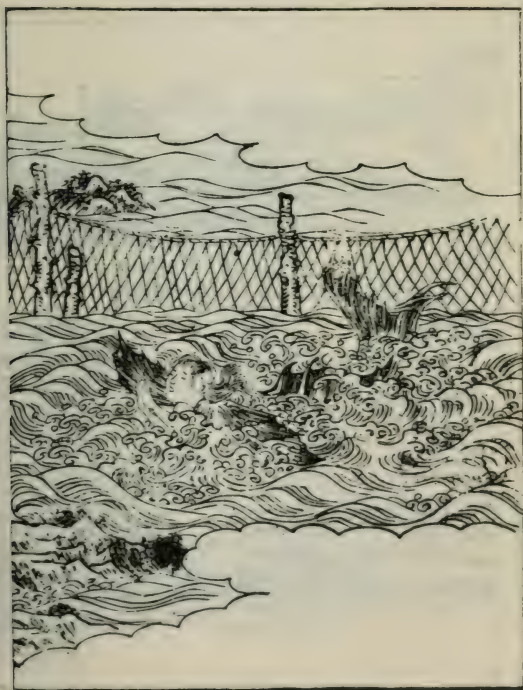
古今奇談莠句冊第一巻

㈠八百比丘尼人魚を放生して壽を益す話

壽福は人の庶幾ふ所、養ひて保つべく招きて得べしとも先言あるよし。漢土に仙人と名あるは、家を離れ山に棲み、名山に入りて藥を採り丹を煉り、雲物を慕ひ樓氣を好む。早く養生の人を迷惑し、秦の世に文成徐福の道士、蓬萊、方丈、常世の國を遠く東海に求めて信を深くす。漢土は其國、山に據りて、人情、海島を希稀とするに因りてなり。後に宗旨を老子に泥じて濫りに道家と稱し、其道場を觀と名づく。佛家の寺の如し。住持するを眞人と稱す。三淸の像を設け、老子を奉ずること釋迦の奉に同じ。法事供養を醮祭と唱へ、神將を召すの急々如律令は漢の世の官府語なり。その作業早く密敎を襲ひ取りて、權實表裏を互違にするや。佛に西を往くべきの地とするは日月の沒る所に從ふか。道には生發を尊ぶ故に東海を企望す。倶に天道に因るなり。道家三淸の天は三々樂界に準へ、道は有と爲して昇り、佛は無を示して往く。その有は常に無をとなへ、無は假りに生を說くのみ。其外に洞天靈地の別所を設け、進達の仙質階級して至る所とす。その道經仙籍は、古代に陰道陽方の八家、雜子歩引の十家あり。石室洞穴の秘藏は、仙傳に其目を備へて其書あるも多くは擬撰なり。黃帝の尊きより藍菜和の乞婆にいたりて、常に異なるものは皆仙に列ぬ。王母は妖に似つ。鐵拐は丐に似て、仙人の樓閣は畫圖を見るも覺束なく、李白樂天の思ひよらぬ類も仙傳に收め錄したる多かり。道に倚りたる中に、葛洪洞賓思邈は博識にして具眼の偉人なり。仙家より强ひて異跡を搯られ、却つてその人を疑はしむ。其さへ葛洪は八十一、遠く去つて師を尋ぬると托し、思邈は百餘にして無何有の鄕に遊ぶと告ぐ。只其終焉を稱せざるが其宗旨の常例なり。まして葛の抱朴の言に云ふ「知ある者誰か長生を惡まん。周魯の聖人は已に其道を知りて昇仙し、今仍死せざるべし。世の人皆不死の道を知らば、子孫の圖をなさず、忠孝を思はず、必らず人倫を亂らん。故に周魯密かに自ら用ひて、秘して人に告げずと。是皆道を主張するの巧言、今此に國津神に本地を合するが如く、其一見識に

て言及せば言ふべからざるにはあらず。三ッの教さへや、人の建立したる道は大道小徑共に便に取る。安きを行くあり、近きに趣くあり、一同せぬところ天道なるべし。天道その一ッに偏らんとせば、人事に妨礙あること豈小々ならんや。謂ひたる壽は養生にかゝれども、命に得と不得とあり。福は功勞によりて、富の成と不成とあり。二ッとも養ひ守らば天然を失はざらん。又、百歳の上に久しければ失期の妖と目するは、例の名をおほせる漢人の故態なり。彼老子は道家の一流にて其言なく傳へたる人の書あり。今の五千言にはあらじ。古より青牛は此大國に渡らず。神仙家流は東方の福地を美み仰ぎ、徐福熊野に留るの由來起る。又本朝に語り傳へたる仙人あり。實に仙ならば、蟠桃の會に上座なるべし。人丸算、都良、香も收入れられて悦ぶや笑ふや。法道の鉢を飛ばすは生を衒るなり。久仙の雲頭を落つるとは、道心の肩を拋べるなり。是等はともに佛教傳の不可思議流にて、西王母の派脈にあらざるべし。思ふに飢ゑず寒からぬの本意は、衣食の欲薄く世塵を離るゝをいふ。服薬無け

れども病なく、滋食せねども衰へざるは、是こそ地仙にて楞嚴十種の一ッなるべし。人の言を信として人を欺くは多く善人なり。冬寒く夏暑きには誰か耳を側てん。其比は欽明の御宇とかや。若狹なる小濱の漁人　朝夕に往來る三方の海を、四方吹く風に放されて方格を失ひ、波に漂ひて三日許の後、一ッの嶋に飄到す。岸に上りていさゝかの小家も無く、海に臨んで甍を重ねる大門巍然たり。海を生活る身の、放されて行くべき島々も聞きつたへたれど思ひいでず。彼竹生島にやと思へど、海路異なればそれには非じと、心ならず歩みよれば、朱門碧瓦金字の牌に少女宮の字あり。一人を見る。結髪の上に黒く透きたる冐ものしたるが、漂着を憐み、引いて樓門の內に至らしむ。一殿の結構磚甃玉の如く、水草の文を鏤り、五采蒼を飾り、万像を鏤む。飛禽翼を張りて遙に上楹に翔り舞ひ、弋者の念なく、走獸舌を吐きて高く危椽に相逐ひ、墜轉の慮なし。千門萬戸、莊嚴一の如くにして、一境諠聲聞えず。漁人兢兢として階に進んで席を賜ふ。饗膳を拜し象箸を把り玉椀の內を見るに、肥美こ

そ人肉に似たれば、漁人訝りて箸を下しかねたり。庵人と思しきが云ふ、「是は人魚肉なり。颶放たれて心膽を苦しめたる人、是を喰へば氣力常に復る。實に島主惻隱の及ぶ所也」と。漁人聞いて仍喉に下りかね、其畬をすこしく啜うて粱飯を食し、肉をば包みて懐にす。風已に定りて、恩を謝し舟に回る。門者送り出でて舟の向ふべき方格を指して敎ふ。漁人其指さす方を見やりて後をかへり見れば、其人影も島山もなく、渺たる蒼海其際を知らず。夢かとぞ訝り迷ふ。風にしたがひ浪に托すること三日ばかり、天の河原に行きやかよへると思ふも遙なる雲の濱に着きぬ。是こそは遠敷の郡なり。ふみ初めてより迷ふべきにもあらず。家に歸れば妻子遲迎へて悅ぶ程に、颶風の難をかたり、懐の肉を出して、「是、見よ」といふ。時に女子の十歳なるが、珍味として早く食ひ盡す。能く喰ひたりと興じて事過ぎぬ。此女子其後より漸々と健に病苦を覺えず。心意快稱改るが如し。是なん年長ずるの兆と思へり。廿とせ過ぐれども嫁しゆくことをきらひ漁人既に百歲の後は姥と呼ばれて、七十

八十にいたれど老を見せず。面貌白皙に清らなれど、艶媚の婦態あることなし。日々にます〳〵清潔を好み俗塵を厭ふ。里人目けて白比丘と呼ぶ。時改まれど其身衰へず。爰にいたりてこそ、幼年に父の與へし仙肉の驗にやと思ひしることもありし。延長三年、醍醐帝疱瘡の御惱に、高驗の者に御祈りを命ぜらる。比丘尼が除拔の符に、「若狹國、四百歳の女」と書きたる迄は、過ぐる年を覺えしが、其よりは星霜をも數へず、後は住居定めず、他國に行くといへども、常に其國に在るが如し。其比高濱にて異魚の六尺ばかりなるを得たり。其頭は人面にて眉耳備はり、肉白く髮赤く長し。紅鰭の間に手あり、指に幕蹼あり。下半身は魚形なり。大魚に逐はれしと見えて、磯邊に潛み淺瀉に滯りて、去る事を得ず。漁人水中に就て網をせき入れて圍み飼ふ。此魚時々頭を

水より出し、涙をたれ恩を乞ふに似たり。漁人等云ふ、「是正しく人魚なり。喰ひて長命を保つと聞く。肉を分ち價を高く賣らん。」と、人家を慕る。富有の家是を買はんとするに、馴れぬ食品なればためらひて、「白比丘尼こそ人魚服したると

人いへば、彼人に問ひて眞僞を定めて、後買はん。」といへり。浦人比丘尼に告げて、「肉を分ちて參らせん。見定めたまはれ。」といふ。姨姑は佛の戒禁を守るにもあらず。幼年に食して味もわすれぬれば、今ひとたび食せんことを思ひ、高濱にいたりて見るに、此魚潑躍り頭をさゝげて姨姑にむかひ、涙を落す事珠の如し。姨姑心に思ふやう、「此魚必ず肉を分たれん。憐むべきことなり。地仙となるものは、一千三百の善事をなすと聞いて、未だ施さず。我是を食ふとも、究めて年を延ぶるとも知るべからず。いかにしても放ち得させん。」と、浦人に向ひて云ふ。「我、幼少の時、異魚の肉を食したれども、人界にはいまだ其魚を見ず。名同じく物異なる多し。山生とよぶ魚は鯑魚なり。其微小なるは守宮に混れやすし。海法師は烏賊の醜にして脚に多子あり。鼈の入道は鯢なり。今此魚其類にて、國土異れば是をも人魚といふ。皆眞の魜魚にはあらず。但し鯢に牝牡あり。晨旦は魚のすむこと河海を分たず。海邊の人牝牡を得て大池に養へば、交合すること人の如く子を生ず。此魚を見るに牝なり。凡そ服食は牡雄の肉に非ざれば益なし。味も美ならず。我は食ふべき念なし。浦の人々必ず用心せよ。此牝魚を殺さば牡魚憤り猖獗れて、衆魚を驅りやりて大に魚網の害をなし、近邊の濱、困窮に及ぶべし。今此魚に托へて、此浦の漁利多からしめよとて放さば、却つて一鄕の潤色なるべし。」とかたる。浦人ども、且恐れ且伏して、便ち魚に向ひ、「儞を放ちやらば、此所獵の利多からしむるや。」といふ。大魚頭を出して喜び躍るやうなり。やがて鬪網を去りてければ、早く潑刺とをどりて深きに入りしが、三たび浮きて頭をさゝげて浦を見る。已にして其月より此地の獵業大に益して、其浦の尺八魚、小松原の鼻折鯛までも多かりければ、浦人いよ〳〵比丘尼に信をなす。姨姑は三方の幽所に草舍を造りて棲みけり。其地の惡少年の暴れたるもの三四人、密に計り合せ、「長生の人の人道は如何んなる、試みよ。」とて、比丘尼往來の道に當つて常に伺ひ等つ。一日果して取とめて左右より夾み抱く。比丘尼顏も驚かず、兩の脇に挾みて走ること疾風の如く、徒黨の惡少追へども追ひ及ばず。比尼尼兩人をからみながら海中へ飛入り、倶に沈みて見えず。實にや大海死尸を容れず。明朝、惡少の兩尸を干潟に打擧げたり。惡少の家より守護に訴へ出づるに及んで、尼姑は、「きのふもけふも庵に靜坐して、夢にも是を知らず。」と申す。隣近にさぐり問ふに、詐ならねば、比丘尼に問ひ窮むべきにもあらず。其後

も惡少等、比丘尼に害心あれば、いまだ手を下さゞるに白比丘來つて挾みて海に入る。此故に畏れて仇するものなし。背言して謂ふ人あり。「世に聞き傳ふ。魚類も修煉久しければ、尾脫し鰭鬣落ちて人身に化すといへば、比丘尼卽ち人魚の精なるや。」と雜談すれど、誰か分つべき。百年は幾かへりして後醍醐帝、南朝の尊諡を聞いて、昔符を奉りし時の帝諡に同しと云ふにぞ、又四百年は經けりと人も知り、此時大に信ぜられ、長生の心得を向ふ人ありて云ふ。「老君の言に谷神あり。呼べば應へ、呼ばざればこたへず。此故に盡きることなし。是谷神不死とて長生の訣とせるは取るべきや。」姨姑云ふ、「老君の言は學ばざれば我知らず。山谷は無動の物、人身は活動の物、人動かずんば腐せん。谷は物を容れ養ふの所、谷神とは神を養ふの意にて、よみもこゑも左にはあらじ。神を養ふの外、長生の訣なし。俗人の願ひと眞人の願ひと表裡すれば、長生するとも滿足にはあるまじきなり。我此浦に生れて、網に禁なく隙細ぎりの禁は、利の爲にはあらず。是をもて國の豐なるを知る。貧國より福地と指して、人々坐ながら仙人なるにより、其賤しき仙道はこゝにもてはやらず。但し我のみならず、長生の人は性質より別あらん。無慾床に臥し、節食丸を服するにも因るべからず。」とこたへぬ。またこゝにお濱の土地、潺湲の處に昔より橋なくて、行人常に揭げて渡る。是に石を架さんと希へども、庸易ならぬことにて久しく默しぬ。姨姑傳へ聞いて云ふ。「我相當の石を見定め置きたり。日並好き時に、頭に戴きて架すべし。」と。これを聞く人皆戲言と思へり。此地を去ること四里ばかり隔てゝ和田といへるに、平盤の石ありて壁立せり。姨姑常に行きて、此石の下に坐して拜し、頭を地に叩きて言ふ所あり。近きに住める人、其故を問へば、云ふ、「問はずとも告げんと思へり。此石能く言ふ。其言に、我此地を興旺ならしめんと思ふに、功德の善因なし。我を搬き去つて小濱の揭渡に架さば、そこはかの行人、脚を濕さず、後來に限りなき利益あらん。左ある時は、此處福地とならんときこえたり。諸人方便をめぐらすべし。」といふ。人心の動くこと、常に把定なし。和田の士人比丘の言を信じ、卽日石の下に群り工夫を用ひ引きめぐらし、迻石歌に力を合せて、兩日の間に小濱へ移し、彼流れに架すに、鏤りて適へたるかと思はる。姨姑悅びて、「我、數石を戴きて、遂に此にわたしぬ。」と、戲れけるとかや。この比丘の終りを知る人なく、其棲むといふ窟窩の跡、今もあり。長生

彼が如きはそれ久し。物久しければ靈あるや、其仙は知らず。古くひじりと訓せたるは、秦國の餘風なり。

㊁小野の阿津磨踊戯に譬へて筆法を語る話

草體の假名、國字となりて行はるゝや、其便宜なることと國の實なるべし。往古遣使に具して物學びに唐土に入りたるを、敎へに行きしと我勝ちに言ひたるあれど、此大國の彼土より勝如りたる事、小事を以て論ずべからず。弘法大師生質の能書にて、彼土に筆法を得給へるは殊更なり。世に三跡と並べ稱するは、皆絶倫の藝なるよし。別て道風なるものは高名にて、能書の人これをしたひ、中比に小野と名のる人おほし。いづれ德ある人の氏族久しきは、血脉のみにはあらじ。筆の道好める人の語られし事あり。むかし、繁榮の地に、小野篤眞とて能書あり。道風の正しき筆道を悟り、草體に妙に、一揮三五字、神勢を失はず。又、漢土、官府署寺の書法を能く覺え、是を家の法則とす。近ごろ、古今の能書に數へ入るべきは、惟此人をこそと評するも、虛譽にはあらざるべし。それが弟子に丘下阿津磨とて女筆あり。性得、筆藝の器あり。敎を執りて絶妙にいたる。女流、是を師として學ぶ。人柄よく心聰く、其人の量に應じて鑒本を以て導くゆゑに、習ふ人進みやすく、その門に市をなす。常に弟子にさとして云ふ、「おのれ、若き折から此道の妙をいのり、三島の社に參籠す。通夜の夢に、白日と思ふが冥くなり、雲間に恐しき蜿龍動き、屈曲して宛伸る其勢、定形なく、その狀、眼に定むることあたはず。已にして晴れたり。髩邊結ひたる神人出で來りて、筆の道得たるやと問ふ。夢心に敬して云ふ。只、畏怖れて見定め得ずと答へつれば、神人云ふ。左あらん事よ。其うごくや、頭のかたまがるかと見れば尾にうねり、伸る屈るの暫も息むことなく、取定めがたき活物の妙處、工夫せよと。おのれ、時に思ふに、彼偶龍を弄する者は、よく會得して今見たる勢をなせり。形容定らざるを體とすれば、初に法を立てゝ學び、後に其法に縛められぬ時は、成就すべきや。今、其法を得せしめ給へと、拜し乞ふ。時に、神人、袂より大の鱗一片を取出して、是を見よ。根は平にして、頭丸きに似て積土の形影あり。是を三稜なるものに心えさするが法なり。漢の蔡邕、楷正の字を工夫して、石室にて異人に授りたると託せしも、素幅は方正なる物なれば、斜角の物を以て筆を下すの法に立つる。是等に倣ひ、後世に巧者の人擬造して、規矩

の三折を借り、圓き正中に三稜の規を入れて三ッに斷し、内の斜角を楷書の法とし、外の三鈎の一鈎を取りて草法となす。是即ち上代の假名法に、落荷とて蓮の花瓣の散りて、其窩み反りたるさま新月の如くなる。是を幾つも連り續け、法として古人の字形を習ふ。本源は皆同じかるべし。形似をまなぶには、本朝の能書に三跡は更なり、兼明、王尊、圓王の心ゆくまゝに書きたる筆跡、山寺の行成なる物は、いきほひ殊に似せるとも及ばぬ所おほかんめり。文字しらぬ蠻夷も請ふべき事、疑ひなし。かく云ふ我は、偏が懇なる幸魂の神鏡に影かりたるぞと、示されてより、現に此言を忘れず。好ける人こそ、興じも笑ひもし給はん。」と、常に鄭言せり。其門に業を受ける女師、多く小野姓を許され、聰と呼び通と字り、遊君の野風は雅名ならぬに、手などよく書きければこそ。又一流の敎あり。「すべての字形、美に偏れば筆勢脱け、醜に偏れば觀を少く。一字の内に美醜ありといふも、邊を醜にし旁を美になすにもあらず。美醜を互に爭はせて、筆法に從ひ字をなす。美は易くして、勢を失ひやすく、醜はなしがたくして、よく氣象を養ふ。一字は美に、一字は醜に、交へ書くにやと、心え違ひたるもあり。色はにほへの假名は草體の國字にて、片假名に對して丸かなともいふ。草の内の草にて、草體を心えざれば、字形に杜撰あり。字形を得ても字勢を得ざれば、藝といふべからず。其勢の活動は、此頃都鄙に踊りといふ戯れ行はるゝ。是を草體の態に譬ふべし。田樂より起りて舞の畧といへど、恐らくは舞の濫觴なるべし。婦くして常に言ばも聞えぬ閨秀が、我を忘れて邪とさけび、いまだ字も習はぬが右よりい文字を踏み、百歳の家翁、手脚覺えず參差にひらき、身は三ッわくみ年は一とせたらぬも、腰を斜に振り、双脚を外に踏み出す。此うかれたる時にも程拍子を失はざるゆゑ、野なれども藝と目すべし。それも一場一周匝の短句あり。粟田、松坂も越ゆべき長篇あり。先づ幅紙の廣狹と、書くべき字の大數を經營りて、其一場の踊の緩急に視合せ、筆を執りたる間精氣を張りて弛べず。精氣ゆるまざる時は間に一度二度、衆態の拍子に差ひても見脫すべし。精氣衰ふれば見るに堪へがたし。左をさすかと思へば右を指し、右の手收らんとしては左出づ。一畫をはりて後、又一畫を出すやうにては、老筆の態にて廉角しければ、此態は手すゝめば足隨いてすゝみ、手退けば脚隨いて退くは邊旁の分ちなり。手の文なすによりて足の強弱、人目に違あらず。しかも足の

流れぬぞよき。其妙處にいたりては、踊見えて其人を忘る。腰に態を生ずるは娼伎に流れて雅を失ふ。字の腰といふべき程の事はあり。筆の腰と人の云ふは、書手の與らぬ事なり。左を先にさし右を先にさすは犬大の類なり。田舍は昔より拍子三ッとなく掌を打つを度とす。都會の地は態度優に抑揚籠り、三ッ四ッの間に忙しき結あり。左に卷嵐し右に卷嵐すは、横心連火の字なり。手尖を一たび拂ふが一度なり。拂はぬもまた同じ。文字は長き短きも、疎なる繁りたるも定めがたし。三ッ四ッと拂ふ其手をとゞめても心に其節度を含みて勢を脫さず。大娘劒器のたとへも外ならず。筆を下すの際に幾蠶といふ定りあらんや。又、擊ちあふ人の已に一刀着けたりとも、猶鋒を利かたに構へて是までと思ふことなく、留らずんば幾たびも斬るべき心にて、劒鋒を無心に振らず。茶理を翫ぶ人の、輕き茶匕を重きが如く見ゆるに同じ。重劃にして字數多くとも、其始の右を指し左を指すの所へ立ちもどりて、足踏なほす心なくしては、字體退々しく、草書は迂闊にすれば、先に書きたる字形に勢を定

められて、立ちかへることなしがたきこともあり。それ方に、巻帖、條幅、屏障長文にいたりては、自然に序破急の體出で來りて、中程には拍子も約束も取りはづす程の所にいたらねば、其人相應の墨色も生ぜず、發興むことなし。是しかし能書の事にて、踊もおのれ如き田舍嫗のよく知るべきにはあらず。又連綿とやら板に鏤む下がきか、物がたりやうの好く寫し取りたる體に成りては、草體の甲斐なくこそ。ほそくは書き得まじき筆もてほそく書きたるが美じとあれば、太くは書き得まじき筆もて、かきたるはなんぞよからん。そのより處ありてよく書き得たるは、うはべの筆消えて見ゆるも、今ひとたびとり並べて見れば、動いて出る所あり。筆を運らすに帶といふものありて、本形は離れて、筆には續きたる所あり。彼鷺頸の屈伸にも緣り似たるかたちあらん。」と。大氏示すこと趣あり。心を用ひたるとこそ見るものかな。斯くて久しく時めき行はれけるが、年も積りければ、應對も厭はしく、今は故鄕に歸りて心まゝに生を遂げんと、多くの門弟子に辭別をなし、雜具を知る人にゆづりあた

へ、餞別の贈り物宅に充ちたる其半を携へて、居住を辭し、婢僕彼是隨へて發足しける。近江なる日野の產なれば、道中にて美濃と近江へ岐るべき太郎次郎といふ驛にいたり、しばらく午睡せんとて屛風しつらひて臥したり。殊なう時うつりければ、使女呼びさまさんと屛風の外より、何心なく見たるに、酣鼾の音高くひびきて、寢たる姿常にかはり、耳動き口尖りて、恐しきまゝ皆の者を呼びて是を告げ、怪しみひそめくほどに、阿津磨目をさまし、やがて素足にて後に出で、其あたりの竹藪の中に入り、影もみけしたり。藪の內を探れど目に見る所なし。其日暮るれども歸り來らねば、指してゆく日野とやらんへ皆赴きて、けふもあすも尋ぬれと、しるべの家も由緒の人もなし。かゝれば其よしを何くにか訴へ、其旅裝に貯への財寶は、遠く送りし從者の料に配分して、離散しけるとなり。丘に首するの本來を失はず。かしこくも本形を現せずんば、從へる婢僕等、人の疑ひを蒙らん。其言たるや、睫を摸で焦螟を容るゝことなかれ。其物たるや、尾を露して不朽を求むるならん。

古今奇談莠句冊第一卷終

古今奇談莠句冊第二卷

㈢求冢俗說の異同冢の神靈問答の話

攝津國の菟原とも菟會とも呼べる鄕に、昔より求冢とて三ッありて同じ名なり。住吉村なるを茅渟づか鬼づかともよびて男とす。鬼は男のまがへるにや。東明村なるは、只處女冢といふ。味泥村なる處女冢を菟原男とす。其冢の狀、前の方長く出たるを俗に車づかと呼ぶ。馬鬣封のなだれたるが轅の象あればならん。冢の置けるさま、東の住吉は西面し、西の味泥は東面して、中なる東明の冢に左右より拱くが如し。三冢の間、相去ること各ひとしく十數町。一冢の週廻、倶に各八十間の上に餘りあり。上世の廟陵の荒れたるにや。今覆はるといへども、末代其名顯るゝの期あらんか。古來文人皆俗談に據りて藻を作り、葦の屋のうなひをとめの奥槨と詠じたるさへ、事古りて物語の柄となれり。一とせ丹州の中野何某なるもの、友なる關の何某に連れて、高沙の邊を遊賞し歸るがてに、此の中の陵を慇懃に拜して過ぎけるが、忽ち關氏獨言常ならず。云ふ、「それ、冢陵は葉戸の地にして、其氏族恩義の外は與らず。祭れる靈社は別にして、日を撰みて神を降し祭禮す。歸命の日さへ祭らず。是を平人の冢と思へるか。」中野其言に對して云ふ、「是如何なる貴人の跡ぞ。」關云ふ、「我も知らず。」云ふ、「しらずして、何ぞ人を咎むる。」云ふ、「我は此男の拜するによつて降りたる冢の神なり。其始は稀に此冢を拜する人あるが爲に、降されて我任と思へり。先つかた、遙の海島より我を降して、かしこにのぞめり。彼祝詞に云ふ、其奥槨は饒速日命、其地は御子孫を海の伯として家を占め給ふ。其跡を認めて津守といひ住吉と名づけ、國社在す。茅渟の玉出に向ひて、共に海の幸を守り給ふ。世々遙に祈りて海利を蒙り、今此に勸請し奉らんとして、其地勢を知らず。冢の御神を請ひ奉つて其地の象を受けて、山水似たる地を撰んで經營を志す者なりと告ぐる。是もまた知れがたき故に、求冢といふ類かと、人に據りて其問にこたへ畢んぬ。」といふ。中野云ふ、「さやうに遠き所より、一たびも詣で來ず。祈りて加護を得ることやある。」答へ

て云ふ、「凡そ神道は遠きに應驗あり。徳の弘まる所なり。御格子の外よりこそ信は籠るべく、内に何の見奉る事なくして靈應あることこそ、いと〳〵もたふとけれ。今の白幣は供物にて明器なれど、みわすゑ田なもの供へて御帳降げたる時、神の嘗め給ふとも、御し給はぬとも、誰か偏に定め說かん。是卽ち神の籠る理にて、其神を安んじ祭るの道なりとす。中野云ふ、「神靈を顯さずんば、後は田に鋤かれて平地とやならん。」云ふ、「それも昭穆のすゑにいたりては、其家さへ祭らず。桑田碧海の變、土地の沿革は誰をか恨むべき。冢の石に鎌を厲ぎたるをいかりしは俗談なれど、冢の神はいかで處好からん。おほぞらなるものは賞罰も思ひしらずなん。靈ありて降す人、常に絶えずとも、神は特々各別にこそ降らめ。」とかたりて地に伏す。半時にして覺め來り獨言の應答を兩人語りあひて、「我思ひよりや出でけん。」と、奇特の事に思ひ、里にかへりて人々にもかたりぬ。古きうたに

　たましひはをかしきこともなかりけり
　よろづの物はからにぞありけり

かゝることは聲もなく香もなく、いふもいはぬも誰か心をとめん。世の事は酒色財氣によれる事こそ、憐も、興も、ありこし斷をも思ひ知るべき。其むかし中の冢ちかく宿りたる人、いかなる古跡とも知らぬに、亭の主が心して見せたる册子に、むかし津の國に住める人、一人もちたるをとめに呼ひわたるをのこ二人、かたち志のまさるにあはんと思へど、かたちもよはひもせつなる心も、ましおとりなく、おやなるもの定めかねて、生田川に浮きたる鳥を射あてたるにあたへんと約するに、ふたりして同じ鳥の頭と尾を射たりければ、女思ひわづらひて、名のみ生田の川におちいりぬ。ふたりも同じ所に沈み、一人は足をとる、一人は手をとらへて、倶に死にけり。男のおやども來りて、女の冢を中にして、左右に二男の冢を造りし始終は、いつの世がたりともさだかならず。伊勢の御の哥に、

　かげとのみ水の下にてあひ見れど玉なきからはかひなかりけり

此客人、「あすの行くべき道おほく、昔思ふに遑なし。」と隣不省を大器に滿引して、

　をとゝひやきのふさへ遣るけふの酒むかしのをとめふらばふり袖

又古き跡とむる旅人、西なる味泥の冢にて、田の畔に立てる人に問へば、「言長々し。我いほりへ。」といざなひて、「俚談さへ、早昔となりぬ。此郡家なる庄官の女子、處女とはいまだ人を見ざるの名、二七ならずして閨秀のきこえあり。父母

秘藏して深閨をいださずといへども、音に聞きつゝ早くも思ひそめて、此家に壻とならん、かの家の娘に迎へんといふ多かれど、或は家門相當らず、人品相識らず、年月往きかへりて、氷の上下より說合する人の踵を接ぐはきら〳〵しきもとめにて、禮を越え恥を捨てゝ、筆に托へ墨によせ、忍びて求むるみだれ人の、めづらの人は見まれ見ずまれ、戀ふるこそ物くるはしく、世に才子佳人の常に近くて逢ふよしもなきは、すぐせいかにとわびしからん。かいまみたるは目をうつせばうとくなるべし。牽くも挑むも兩意投せざるは、一日よりうつろひなんをや。山鳥守宮の故事に競され、得ざるを愧とし、戀といふ題目の表に立ちたる國風の、深切にひたすらなるが體ならめども、浮きたる物を詞にて究むるなり。設けて色想觀に入つて、出でて目を明きて見つ。心に問ひても見ば、一筋にはあらじ。いづれ男女の時過ぎたるは好ましからぬことにて、茅渟の住吉なる男、處女を戀ひておこたらず。許人にあつらへて艶書を送ることしげ〳〵なり。空も陰りがちに衣さむき比、菊の枯枝につけて住吉よりと、丸くむすびて行の字にて封したるをひらけば、むらさきのうすえふをかさねてつつみたる中に、同じ色のうすえふをかさねて、斜に百すぢ引きたる下繪して、筆だてうるはしく、

〽身をしらでながむるそらの時陰るゝは袖の淚の末の水かさかとなげかしく、うき身なりともたゞよひてこそ、此世ならではいつのよにかはと思へば、よそに見し峯のしら雪、今は我身をうづむ夕ぐれ、あすは露ともけぬべきを、きえ侘びたるが流れに添はゞ、磯の藻くづもあはれとは見るらんかし。

處女も興じてうけびく心いできければ、侍女あけぼの、心えて返し、

〽袖のしぐれの水かさとなるべきは、餘所にのみ見給ひししら雲の、雨ふくみたるにはあらずなん。のちのながめは物にさそはれて計りがたくこそ。いそのもくづの見るめにも浮草の根なく、あすはあなたの岸に倚るべきも、所からとて猶其きしに生えなんかも。

おのが心の下もえをあらはに、又こそ紅葉の枝につけて、同じ色のうすえふに書きたり。

〽あはすのうらの見るをだにうたがはせ給ふ。のちのながめはぬれてこそ知るらめ。此世ならぬ逢瀨は、返す〳〵おぼつかなく候へば、あはでのうらのあわとなりてもあはんとこそ、なか〳〵しづみかねたる三ッせ川、淚の水尾もたえなばたえねと、書きながし參らす

こそ。
處女も重るいどみにうごかされて、まめにいらへよと打ちまかせければ、あけぼの折から筆を厭ひて、いさや川とばかり返しこたへけり。かくて音信たえず。父母に申して、遠からずこなたに迎へて家をとゝのへんと、許し答ふ。然るに同じ菟原に生田を兼ねて司る庄司何某、郡家に婚を求め家に娶らんと、慇懃をつくし告げ求む。隣れる所の家勢あるに傾きて、むすめにかくとなん告ぐる。處女胸さわぎて、急ぎ密に茅渟に告げ知らせければ、あらはには言絶えぬれども、先に壻たらんと言ひよりたるを、再び起して家に娶らんと使を以て是を求む。兩方の切なる求に、父の翁いづれへも返し得ず。家業すぐれたらんに許さめ。射藝を競べて定めんと日を約し、生田の川にひら張して、兩の男それ〲に装束し弓とり殺おひて、水にも火にものぞまんと立ちむかひ、きそひて勝負を試みける。菟原の男の射たる浮鴨、左より右に射通して正殺の矢目も正しきに、茅渟の男は目當の鳥を射損じて、大に恥ぢて退きぬ。かゝりければ、父の翁處女を菟原に許しぬ。處女は家にありて、此勝負に胸ふくれ、茅渟の人こそ萬に勘能なれば、必ずかちなん。此暮にこそ心をゆり、目も合はん。また思ふに、競へることは思はぬまけあればと、千に百に念じわびたるに家の子來りて、くらべ弓は菟原殿こそ勝ち給ひぬと申すに、胸つぶれふむ力なくうちたふれ、いかにせんと思ひわづらひ、よし〱父に請ひてふたゝび競はせんこと、なんでうあらんとあさくも心に賴む。父歸りて、うばらに許しぬ。吉日遠からず告げんといふ。處女聞きて我窓に入り、衣引きかづき涙そゝぐが如く、世の事は量るべからず。今や先の願ひの如くならず。人の心、巖の堅きことあれば、蒲葦身も縒りて繩と耐かりし。愚かにも、我身を我と思ひ、我が許したる罪を我がおひて、菟原にむかへられゆかば轜の中に死になんと獨ごち泣きて、青鸞と棲まずんば、孔雀雨に飛ばんの悲しみ身にせまりたり。母なるもの、處女の深き志を聞くに堪へかね、いかに安き心あらんや。家こぞりてひそまりたる折から天臺より下山せし荒法師言の君圓性、幼名阿達池丸とよび、氣力を賣弄し大石を飛し大木を拔き、時の意興に遂へば、師長の法師も打ちたゝかれければ、山衆一致して逐ひ出しやる。筑紫へ還らんとて此所を經歷し一宿を求む。郡家の妻はかかる思ひの身にあれば、便ち諾ひて迎へ入れ、湯を引かせ點心をすゝめ歡ひもてなし、是怨敵除の祈りにもと供養す。此

偺内のやうのうちひそみたるを見て、いく日の前に歸寂の人ありやと問ふ。母氏つゝみかねて處女が身の難をかたる。僧云ふ、茅渟の男、幾ばかりの才能ある。來書を見んずるといふ。處女恥ぢがはしからぬ文をえらみ出したり。上がきにあなことゞゝしと書きたるもあり、荻の葉ならばとかきしも見ゆ。圓性一覲して是恐らくは實に其人の自筆にはあらじ。艶書に人を雇ひたるも、是を其人の墨色と相るに、其人もまめにはなくこそ。文の詞も古きを襲ひて、肺腑より出づるとも見えず。其求むる所、美色に非ず美産にあり。俗情輕薄、誠とすべからずと云ふ。母氏心得て、才幹ある人をえらび、茅渟に遣りて其人がらを窺ひ聞せけるにさきにいひよりたる茅渟男にはあらで、其家の倚人にて、出身明かならず。通ふ女、朝夕に定らず。人の家に壻たらんと欲すれども、いまだ其家を得ずとのあらましなり。圓性聞いて、さればこそ此戀色にあらず財にありけり。閨秀の迷はされたるもふびんなれば、茅渟の男は我にまかせ給へ。來らば取りひしぎてすてめとぞいひける。かくて茅渟の男、先に超えて奪ひとらんと、みづから輿を搩かせ來り、人數を道にひかへさせ、獨自一個、ひそかに女の許にいたりしが、障子の下にゐて、さすがうるはしくも得出でず、袖ばかり出したり。始より一目も見ぬことなれば、使女あけぼのをかざり障子を隔てゝかたらしむ。法師傍にありて、筆をもて敎へてこたへきかす。男云ふ、今日御身を迎へかへらずば、尸を爰にとゞめんと畏す。法師大に發作りて怒るさまなれば、彼男をやあやまたんかと、家人等肝をひやす。法師答へていはしむ。此ごろ、傳に聞くに、御身通ふかた一方ならずと。今より恐る、海陸の言早くも起らんことを。男云ふ、それいさゝか思ひあたる事あり。輿だに入り給はゞ、逐ひ去るにいとやすし。女云ふ、それは逐はるゝ人の身に、さぞなげかしからん。さりとも、二心なき誓の文を今ここにて一帋かゝせ給へと、文かく四寶をつらね出し、物すきより見れば、彼男俄に赤面して、二度の誓約はせぬ物にこそと、身を退くやうなり。女云ふ、是厭事にあらず。今こそ通ふかた多きを探り知りぬれば、誓を給はれと、強ひて乞ひけるに、是非なく筆に信せて紙を染めるを見れば、過ぎつる數々の通はし文には墨さへ似もせず、詞さへつゞかず。かんなも濫りなりければ、果して最初の人にもあらず。假に詐を以て詐に對し、使女を代としてあざむきやり、世にかんなのはしりがきするものは、技痒にたへかねて

人に忌るゝは、因果の緣るところなるべきに、人の手をかりまどひて憂るせきやつかな。此家の難は是までならんか。彼等は風流綠業、今や殺生に及べりと、袖を拂ひて去りをはんぬ。菟原男は、女を茅渟に得られぬと聞いて、やすからず。郡家の親をまでうらみ、茅渟男が迎へかへるを逐ひ行きて、御前の松原にて及びつき、仇を見る眼は別にして、遺恨やみがたく、やがて刄傷におよび相打して同じく斃れぬ。輿の中に代りたる使女は冤れたれども、兼ねて文書きたるを自ら悔みたれば、遂に住吉川に投げて沈みぬるを撈ぎあげて、三家の族相はかりて、三人の志、元より合ふべきにあらねば、使女を古さとの東明に瘞み、菟原男を味泥に埋み、茅渟の男を住吉の前に冢せり。處女は志を失ひ、三死皆我に起ると髮を切つて、人に適かず。この三冢を拂ひ守りて怠らず。此故に三冢共に處女冢と呼ぶ。そのかみは衣服、大刀、やなぐひまでこめて、家にも限りの竹ゆひてげれば、茅渟男よせ來る時ありても、かれに負けることなし。」と、倦ますかたりて、其庵も幻に失せければ、其冢の靈ならんと、是を

や萬葉の哥に、
つかのうへの木の枝なびけりきくがご
とちぬをとこにもよるべけらしも
東の家は社頭に近く、往昔急雨に籠められて、庇によりたる行脚の旁に來る人あり。「服は祝めきたれど、かけたる結は日かげにあらぬ織物なれば、山伏にやと分ちかねたる。」と尋ぬれば、「今はかたよりたるは業に害あり。兀陰陽の道を叙ぶるは我が神道なり。龜卜の道は其變をさとし、修驗道は其變を禱る。陰陽の應は萬物皆これによらざる事なし。五行はもと實用なるを、今專ら理に假りて、木金土の應をとなふ。それ五ッの數は手の五指に起りて、大古物を分置するの數となり、西鄙の別國の古に、政を五行に分ちて司らしめたる。此にたとへば、宮基の土地より大八洲に及び、浮渚を平地となして田を開き、頓丘、畝丘、城壘、築積の土功まで、土の官を大なりとす。金は劍、鏡、鋤、鉄、廣矛、横刀、鐘官、錢廠、是を專らとし、火は羽鞴、鍛煉、草茨、柴燒の業、非常の災を急とし、時節の火を改むは木なり。木は山林、伐木、宮室、樓臺、高く太しき柱、廣く厚き板、高橋、浮梁、是を要と

す。水に屬する官、土に並びて大なり。百川の朝する所、海の幸、鹽の利、可怜、巨濱の呑舟大魚、貝珠、流玉までをや。況して瑞穗の國に、今は太古と語りにしつゝ知るべのかぎり思ひよるに、滄海原は先に素盞嗚の大任にて、其に從へる海伯の一家あり。其先は、諸尊西海に洗拔して置かせ給へる諸神の末裔にて、浪速の三奈太に據りて其令遠く行はれ、水鄕を專らとし、海伯に長たり。宮居を玲瓏の御館と稱す。其后宮住吉姬、質美閑雅たり。君の恩愛水と魚との如く、外には言を進めて政を補ひ、內には嬪御を率ゐて和を養ひ、下に臨むに惠を厚くし九ッの一ッをや納めけん。屬邑其溫德を被るといへども、事物の中を持せざるや天道に照々たり。寬政流れて一鄕の民惠を常として、逸樂に怠り失禮者多かりければ、家に長たる菊理の臣あり。同志謀りて云ふ、西土の占卜の言に、大貞、小貞、其德を異にすと。君の吉は惠に偏にして止まる所なく、臣の吉は支へて惠の過分ならざるを勉む。今中道を行ひ仁惠を永くせんとするに、後宮の柔仁に相合はねば、二柱合躰の遺風、一方を背きがたく、臣等が微忠伸ぶることあたはず。今の計は聊か其寵を隔てゝ移る時を得て、舊制を濫らんはいかに。中に小竹多の臣は伶俐きをのこにて、上國に丁夫たりし時狹邪の情を知りたれば、今は是を用ゐて君の顧眄を分たん。世の輕盈婀娜は君の左右に充ちて、色授け目許すもの乏しからず。其選を品外に取りて、目秀頰媚びて容俏き質を求むるに、菟會の民の家に手摩で足摩でて乳育てたる處女あり。是を調養へさせ雲鬟高く束ね、淡粧輕抹深閨の態格を去り、吹彈歌舞琴瑟人を樂ましめ、脂粉の姸は雲を巽に起し、綺羅の艶は茶の秋を揩る。漸々養ひ成りて發行するに及んで、高貴を物の屑とせず。招けば平田川田の疇にも禮を失はず。稚彥味嗜をも情に留めず。やがて盛んに民間に行はれ、わび人はねにもなきつゝ、かたりつぎ云ひつぎて、其名宮中に達す。海伯主是をひとたび見んとすれども、位階隔りて、みぬめの浦は山の名にして、戀しきをたゞ目に見けん凡下の羨まれつるに、海民の年々に執行ふ浪速の濯除は七瀨の一ッなれば、世に聞えて海濱そよめき噪ぎ、例の俳伎を此日菟會處女を飾りて、劇杵を執りたる手玉もゆらに、此浦人の弱き等が笛鼓、突拍子合せて、御稻舂女好實實哉、爲妹子之爲眞妹、萬代萬載とはやしもてゆく。君微行して一たび見給ふに、我姬を獨り絕麗と思へり。今此女こそ遠く勝れり。乙織女の雲を離れて降るかと、愛で給ひ

て、宮に還りて是を召さるれども、處女も家を憚りて參らず。頻りに召さるれば、「我たぐひは階殿へ上るべき物にあらず。」といなみて、初こそさあれ、頻りて召さるゝに參らざれば、禮を犯し公道を亡するかなとて、君の恚に觸れければ、下司是を押して誓殿にいたる。君身ら臨んで見給ふに、戯俳せし假の姿には似もせず勝りて、其ことばに、「舊知の送迎、先に約重りて暇の日なし。」と申して、さらに恐るゝ色なし。君愈憤りて、「儞其身の國津罪をしらず。今日のこと生きてかへらんと思ふか、殺されんと思ふか。」處女云ふ、「世に是を愛しては其者の生きんことを欲し、是を惡みては其死なんことを欲す。生かすと殺すとは、君の旨にありて、わらはが知らざる所。」と答ふ。君いやましに神蕩け、「世に女はありけり。」と、其儘に宮內に留めんと思召しけれど、官府の體樣に非ず。且つ彼をゆるして其家に送りかへし、其夜暗に水宮に召されて、深戶に櫛を加へ給ひ、一連三日此にこもらせ給ふ。是より大に寵光を得て、日に夜に外宮にわたらせ御座す。其方の諸臣等傳ひ參りて、君の親近を辱くし、群臣便を得て、遂に政を一同し、日の神の教諭至らぬ隈なく均等の令命を及ぼしけるに、さこそ后宮の旨に違へることも聞え、君の心は一日より疎くなるに心焦れ、外宮に歸館を促して請ひ聞え給へど、稻脊が脛の徒に倦めるばかりなれば、菟會ひとり女にして妾は女にあらずやなど、遂に反目に及び給ふ。君もさすが水宮に耽閣するを憚りて、蜻蛉の水に點ずるほどに心遣りなく、寵愛偏に菟會に進む。中冓の事は外に不出といへども、姬の戚家陳努の臣其夜夢みて、內宮のやうを探り聞きて君恩のたえ〴〵なるを知り、后宮に參りて諫をすゝむ。「是例なき事にあらず。妃此故に君公を恨み怨言重る時は、却て賊の爲に梯するなり。今夕にても君公內に入らせ給はゞ、顏を和げ菟會を召して左右に侍せしめ、妃は身卑りて席を專らとせずして君の去來に任せ給へ。數日の後こそ、又はかり事を奉らん。」と云ふ。姬溫柔にして能く其言を用ひ、菟會を挿いて近く侍へしめ、御同して君に奉ず。菟會こゝに姬の容を見て、是こそ美妙の空虛姬かと心中に驚き憂ふ。君の心大に暢びて、朝かれひ物めすまで、姬と菟會と席を促せて昵す。是より君稀にも內に入らせ給ふ時には、姬は遜り退きて、しきりに菟會が好く賢きを數へ給ふ。一月の後陳努の臣參りて、其やうを聞きて大に悅び、又言を進めて、「妃今より姿を飾らず。艶服を去り、素面平服し、衆くの侍婢と雜

りて君に伏侍し給へ。」姫是に從ひ、君入り給へば雅服して其使役を聞くより外なし。君こゝに姫の自ら卑うするを憐み、蒐會をして同じく使役ふを佐けしむ。姫是を受けず、ひたすら蒐會を推して左右に進めやるのみなり。一月の後陳努の臣參りて云ふ、「時節曲水の御遊ちかし。其日にいたりて妃舊衣を去り、新に裁ちたるさへぐを服して粧ひ、脂澤を施し、臣が家に顧を下し給へ。」と啓す。姫其節にいたりて、新衣清潔脂粉芳澤を凝して陳努にいたる。内氏璘女近く侍へ、妃を我粧臺に屈請ひて、鏡を攬りて姫の面上の濃淡を示し、重ねて鳥の子に丹粉浸せるを眼隈頬の際に施し、向ひ座して御姿を見あげ見くだし、「長袖の制、時に背けり。」と、線をぬき去り邊を寬くし、事巳りて席を下り左右きて云ふ、「妃還りて君を見ば、早く奥にこもりて寢につけ。君來るとも、心恙むと辭して見ることなかれ。三たび來らば一度はこれを迎へ、君狎れて殿こもらんとすとも、吝むが如くして對ひ給へ。」と、深くさとせり。姫還りて君に禮す。君眼を凝して顧眄ること異なり。姫は只席間の談して、倦む

が如くして宮に歸る。時うつらず、君內に來りて、請ひて語らんと聞え給ふ。姫是を謝して見ず。宮婢をして圍み繞らしめ、君を慰めてやる。次の日また內に來る。姫なほ辭して迎へず。明日君入りて其怠を責めきこゆ。姫云ふ、「妾已に獨眠に習れて幽栖常となる。君の左右は菟會女侍へ奉りて、興乏しからずと思ふにつきて、禮を失ふに言葉なし。」と、罪を斷り給ふ。其夜君內に入りて坐して出でず。姫出でて欵待纔に笑面を開かる。君相狎るゝに及んで、新見參を調戯るが如し。君出でんとして云ふ、「暮れなば入りて籠らん。」姫仰ぎて君を熟視て云ふ、「妾久曠をわたりて、只是夢かとぞ思ふ。狂か喜か定まらず。思ひきや、內宮久しく拂はず。君頻りに辱さば、妾起きて洒箒をとり、殿ぎよめして、後日こそは。」と啓す。君三日を渡ること年を越えるがごと入らせ給ひて、歡笑後宮に動く。明の日陳努の璘女參りて、此やうを聞いて賀して申す、「妃は天然の美質、近つ國を壓すべし。何ぞ菟會女に下らん。歎らくは媚道に疎し。貴人の體にあらずといへども、君子の憐みを求むるには少

所あり。」と、二人粧閣にこもりて、姫に教へて目を張弛めて人を視せしめて云ふ、「皆顰に過ぎたり。」微しく笑はしめて云ふ、「靨、頰前にあれば好し。さもなきは右にゑむべし。左に好からず。」と、秋の波のなゝめに見り、瓢の犀の微しく露るゝまで其巧を悉し、其餘牀第の事は自ら人和ありと申す。姫其教にしたがひ朝な夕な鏡を照して自ら試み習ひ、なほ荒められたるに御懲して、恩を迎ふるの心昔にまさりければ、君大に姫の奉承を悦び、朝笑暮歡、居るに起つに離れず。姫はなほ菟會女に深く親み、對宴には必ず並び坐して、君の席を專とす。君ここに至つて、菟會女を見るに、醜きこと質おのづから別あり。寵幸日に衰へ、只の婢女の群に視ふのみ。小竹多の臣疾く早く其機を知りて、「内宮に人ありけり。」と菟會女に含めて、漸々に事を托して君のかへり見を遠ざかり、出でて外宮に居て家より請ひて侍御を辭退せしむれども、姫是を留めて、其奉祿を落さず。かくて海伯の主、千歳の後、住吉姫と菟會女と常に伴ひかたり、今は昔、たがひに身のために勢氣を張りたるを、この百態は畫にかける餅とやいふべしと。姫こゝに新君に諭して、陳努、篠田、内に外に國に成功あるを譽めて、其家に厚く賜ひ、君の冢の東西に二臣の冢を營ましむると、妄想の夢がたりなれど、三冢共に男なりけり。左あれど馬鬣封なる物はさばかりの跡ならんか。或は其冢の大なるは上世の禮制、詳密ならざるの故にや。此に美より媚の人を迷はすを、

右といひ左といひて行く人の迷ひに枝をる道ならば道

古き典侍治子の咏あり。またかなふべし。

ましおとりなくてやはてん君によりおもひくらぶの山はこゆとも

酒は飲まされば醉ふべからず。借りの亂れも内よりするにあらず。色は假如也。其人と時と定めがたく、孟子物がたりの色にはあらじ。財とは此に寶器のみならず。戀もしつ欲もして、得たるも得んとするも、皆財なり。氣こそわきていみじき物なれ。飢ゑてもくらはず、死しても恨みず。寵を爭ひ、移るを恥とし、堪へるも耐へざるも、人の直なるは此内にありて、駒の手綱のひかへらるべき物かは。此の馬鬣封に心とむるも氣なるべし。

㊃玉林道人雜談して回頭を屈する話

生土を去つて因縁の地に移るは、仕官藝林、商賈あり。況して雲儈の樹下石上、

所定めざる、氣槪人に背けて、惡みを受けて厭はず、倚傍ひがたきを、却て慕ふ人も殊勝なり。又發起たゆみては、一たび閉ぢたる八重むぐら蔓厭くなり、喬木に攀倚り、荊棘を撰まぬを惡むも、鳥居させぬ繩張狹くこそ。「剃髮して大事を忘れずは、善かるべし。」と云る大德はいひぬ。其大事こそ一かたにはあらじ。こゝに人を容れぬより世を避けたる、其法號は失記れたり、時の人回頭和尙とよぶ。常に人に對して、「回頭よ。」と說くのみ。人戯れて、跡見よ娑婆訶とあだ名す。實にもよく塵情は離れけん。佛號禮參の業も見えず。淸早に室を掃ひ牕を開きて、向へる山の鬱蒼を爐煙の中より遠望し、深夜の枕を側てゝ、一鼎の沸勃を聞きて獨坐の況とす。宣なるかな、飮の茶に止る、是より易しとするはなく、室の陝きさへ、左右するに速かなればならん。少輔持春細川氏、友仇の音問たえず。是こそ玉林道人とて、文筆兼ねて記臆よく、焚香、瓶花、宴禮、茶理に涉りて、優長なること忙しかりし世にも捨てず。後に大禪師に參して大氐を覺悟したる人なるが、此回頭の性急なるを取るべきとして、よく對應すれども、くろめてくろまぬ性質にて、常に放言すらく、「東求の牖に倣ひ室を丈にすれば、井田の僧都かと思ふ。爐は尺より狹くすべからず。我身は舊の身にして、馴るれば能く自在を得るなり。不勘の人には敎へたるもよし。心を用ひるは柄酌を執ると閣くとの際にあれど、手狎れて見ゆるもよしやあし。我師なる人は茶匕を不可往と題して、是程までに圖は迯すなり。是より往くべからずの心。茶器を幸形と銘せられしは、肩廣く平にしてすそほそく、此山も亦往くべからず。二ッとも楞伽に據られしは厭しくこそ。常に長緒結べる手つきのことく／＼しき二ッ三ッをさへや一ッ書きたる人物は、香を焚きて拜をやなすべき。禪床に螢の光を借りて、明窓淨器と樂しみ、浮世一日の閑を得ては、逢着して閑談す。是はあやなく暗窓褻器衆に同じうす。自ら興とするか、人の興とするか、隱れて人に事ふるの道か。」と、其師さへ容れねば、玉林山人其性急を笑ひて、「皆道理あり。但し靜動淨穢は興に引かれて厭はず。軍中に百服十服の茶、古く記す。世の俗情は歸徹なきもの。いかに幼より家を出でたる人のはかり知るべき。一分の見は必す腹が背にならん。和尙も回頭み給へ。己も回頭みなん。」と答へらる。時に回頭自身の眞像と自書したるに賛を乞ふ。玉林即ち書す。

敵打或攖事　稀有化魑魅
自作自己觧　狐嚙不動戯

「そしると、な思しそ。」といふ。回頭一吟して、腹を抱へ席上に滾び痛笑りて、「聖人の邪なき、奇なるかな。謗らるゝとて何とせん。俗に混ずれば俗談もすべし。素人に據れば自己の國字解添へて詩も賣り、天狗に佛像を書かしむる事も、表見せねば請けぬ俗もあり。此賛こそ本望の至りなり。此潤筆には寶鐸に申しいれさせ、針の飯を進めん。」と云ふ。其席上に、「百尺竿頭に一歩を進む」といふを題にして、玉林、「この題就きがたし。」と詩成らず。回頭書す。

竿頭濫觴浄妙坊　履回二擬寶一牛弱殿
豈啻有レ皮内有レ餡　莫レ作二放下一様看一

「是を悦ぶ人もあり。人を揶するには、何を爲すべきも自己はかられず。殊勝の大徳顔して、眞如の波の起ぬ日もなしと唱へては、足を留めず。脱けてあだ名たつなみやれ此うらにと唱ふなり。靈仙の釋迦の御前に契りてしといへば、面を背く。君來ずばねやへも入らじとかこつに利益あり。實に是も傾城を知らねば、其情さへ覺束なし。さるにても妓女を拜みて、悟道したる僧英もありし。」と、一幅の歩を練る游女に、玉林の書を求む。少

輔卽ち一對十二字を添へらる。

有智丟二溫柔鄕一　多情挨二孤老閧一

回頭云ふ、「溫柔卿は趙飛燕の故事。溫柔の卿ならずや。孤老は顚郎なるべし。妓女其遊壻をさして云ふ所なり。丟と挨とは愚は知らず。」云ふ、「溫柔卿弘めて鄕の字をも用ゆ。俚語は人の多く用ふるが主となりて、正す人なし。孤老はもと姻婭なり。省につきて孤老の字好く適へば、多く用ゐるに義を奪るゝか。此丟は一去にてすてゝかへらざるの義なり。挨は狹きにはさまれたるなり。」回頭默して、又一聯を發句して對を請ふ。「俗中に山人あり。愚は知らず。如何なるか、是山人。

耳欲レ攀レ高　他力村學認二假山人一

玉林、對して、

心要レ掘レ藏　自賢財主買二假古董一

「山人とは隱に名を假る君子なり。好畫に賛つけて賞翫を妨げるは、假山人なるべし。貴人は一室に光あり。扨思へば、此對は贗物の出會なるかな。」一日回頭逍遙して少輔の館に詣る。近習引いて書齋に請ふ。書童伏侍して茶果を進む。此齋中、名人の書畫玩器皆古雅に、書櫝二百許累ね積む。已に主人出でて談を交ふ。回

頭旁を見めぐらし云ふ。「大家の富蔵、是にかぎらじ。但し書籍多く持つ人は見ぬ物にて候。」少輔云ふ、「實に是知言の如し。掛幅の東坡の書、語は西風昨夜過ニ園林一 吹落 黄花 満地金。是菊の句なるべし。いで此句を題として國風せん。」とて、互に先を譲る。回頭、

けさ見れば垣根に敷ける黄群濃はきのふの風に散りやそめつる

「腰や離れぬばかり。」と云ふ。少輔吟じて、「高調明白なり。但己は理窟なり。」

霜のうちに咲きて拱く秋はあれど嵐の庭にちる花は無し

回頭云ふ、「菊は散らぬものか。秋菊の落英を餐すとは楚辭なり。匯史に、花辨結密なれば落ちざる。扶疎なるは風に遇へば散りて地に落つとしるす。花こそちらめ根さへかれめやとよまれ、散りぞしぬべきあたら其香をとつゞけ給へり。」少輔答へて、「楚辭の落英は花にはあらず。菊の蘂は食ふべきものなり。其ちらめちりぞしぬべき。倶に逆へ計るのことば、直ちに散りたるをよまず。但し開くと落つるとは花の初終なり。菊には直ちに散るといはぬが安かるべし。此二句は楊州の菊花こそ散りて地に落つる王荊公が作を、歐陽が知らで難ぜしか。知りても難ぜしか。已に其說あり。是は上人の博識だふれか。」回頭顔解けて、「げにさこそ。」と云ふ。少輔興に乘じて、「此列べし書櫥の內、何れなりとも一冊を取りて、開く所の行二三字を誦し給へ。已暗に其句を足すべし。」回頭笑ひながら書童に命じて故意と偶なる塵を積みたる三層の下より取らしめ、主客に簽題を掩して言はしむ。書童一所を開きて云ふ、「すがめなりけり。」少輔云ふ、「その上文は、酒ならんと思ひければか。」回頭云ふ、「源平の記の五節の暗撃の段に、伊勢平氏はすが目なりとはやされたり。」少輔云ふ、「伊勢國司の記に、忠盛は平氏にて此國の人なり。多度の神に一千度參詣して、満ちなん夜に一ッの壺を賜びてけり。うれしくて酒ならんと思ひければ、酢瓶なりけり。それより目を煩ひつれば、けくに官階心にまかせしとなん。されど孫の世に亡びけるとぞ。是より所の例、目出度きことぶきに酢を用ひずと書かれたり。」回頭、「今一試せん。」と乞ひ、書童に命じ櫥を更へて一冊を取らしむ。書童、誦して云ふ、「如意君安樂否。」少輔筆を執つて書す。「嬭已喫レ之矣。字數合へりや。」回頭云ふ、「愚思ふは、野史に則天后、薛敖曹を愛して如意君と稱す。折から人を楽して、其安を問はしむるの辭か。然れども喫の字、意屬はず。思ひあたることとなし。」少輔云ふ、「是は漢末拾遺なり。靈帝

の時長沙武岡山に深き大穴あり。大小二ツの野干、此に棲む。皆よく變じて美婦人となり、男子を誘ひ來りて偶をなす。小しく意の如くならざれば、分ちて是を喰ふ。或時劉璽といふ男子をたぶらかし、穴に至つて同居す。兩妖奉じて如意君と稱ず。二妖互に出でゝ食を求むるに、一妖は看守して逃去るを拒ぐ。後には常として其本形を露しければ、劉璽心に恐れを抱く。一日、大妖出でて食を求め、歸るに及んで、洞の外より如意君安樂なりや否やと問ふ。小妖内より答へて、竊みて已に之を啖へりと云ふ。是により兩妖爭ひ、追ひ逐はれて滿山を譟す。樵人しのび聽きて、其詳しき事を語るとなり。世の拾遺記には、此文逸れたり。是董卓、曹操を兩妖にたとへ、劉璽は卽ち漢の帝位なり。野干は狐に似て、善く木にのぼる獸と聞く。人を食ふは此種類なるべし。如意君の名を敖曹となして、則天の年號を如意と改めし穢談は、高敖曹が咏に、狐長棒槌兒の句あるより、大陰の人の名を敖曹とせし野乘なり。」回頭聽きて「無益の事は忘れがたし。先生大記憶なるかな。」と稱して興に入り、茶果を吃して歸り去る。幾日へだたりて、少輔遊獵の歸るがてに、獲りたる小禽を從者に提げさせ、回頭の庵に入りて息はんと眠藏のかたへ來り、閾を跨ゆる時、和尙怒れる色見えて手鎗の鞘を脫し、腰にかまへて突出すを、鞭にて隔てゝ「是今樣の活人鎗か。活人箭は羽も禿びて的にとどかねば、片手の音も聞かず。百動一止に如かず。」と便ち安座す。回頭も鎗を投げて「此鎗に死活の轍はなし。時々は發作りて腹立てゝ見せねば、人が欺侮るぞよ。獵の還りに、いかに僧家へはと不言ねばかりにして、跡の文談が說き出さるゝものなり。莫妄想の天窓べし、三尺前を見せぬつもり、倦うもなり親しくもなる。地球は大極の塊ぞかし。何ぞ意はん、掌上の珠化して眼中の沙と作らんとは。是定なき所。足下と愚は始より苦を以て交る苦友といふべし。故あるかな、茶を吃して、厭かず話ること。愚遠く移らば、足下も久しからず俗を離るべき機あり。」と云ふ。回頭素性粗暴にして、常に才ある人を見れば、呼びて聖人といへり。少輔憂さがりて「聖の字、泛く借りて、聖言といひて賢言といはず。聖藥といひて賢藥といはず。しかれども人に用ゐる時は重し。究むれば、古今前に一人なく後に一人なく、假りて人主の稱に用ひるも時の數なり。其圓珠經の一言半句、俚談に雜へ說くべきにあらず。」と示す。言下に伏して、「聖は慕ふ所に非ず。」と、卽日自己去聖と別號し、再び失言せ

す。居所を更ふることしば〳〵、世の靜ならぬに隔りぬ。幾程なく永亨の比、少輔持春僧となり参禪して、島下の味舌の西なる偏岡の端に、幽棲すとなんかたり傳ふ。此所にて其秀逸に、朝に鹿を聞きて、

　啼きあかすおのが泪のしぐれにやぬれて朝だつさをしかのこゑ

古今奇談莠句冊第二巻終

古今奇談莠句冊第三巻

㊄絶間池の演義強頸の勇衣子の智ありし話

戀侘びて落つる涙の積るかな、あはで絶間の池と成るらん。此絶間の池は攝の東成に屬し、今は池涸るれども、猶一の絶間と稱す。昔は此千林の地、河内茨田郡に附けり。逢ふことは絶間の池の垣つばた隔つる中と成りやしぬらん。此絶間の池は一の絶間より二里ばかりへだてゝ、太間村にあり。衣子の絶間といふ。太間は脫間の轉ぜるなり。兩の絶間、共に茨田の郡なりしが、今は國を異にせり。絶間の事は國史に顯然たり。此邊攝の北郡に及んで靈場處々の中にも、開城皇子、山陰の中納言といふ類は、實跡の考ふべきなく、其外にも勅願の名分も埋れ、大檀那の面目も覆はれぬと思はるゝ多かり。或は其人微にして名とするに足らず。或は罪あるを避けて其名を變じ、上代の事は人に遠ければ、近世に托なして人の聞くを近くするもあり。物を弘むるの心は同じかるべし。長柄の橋柱、兵庫の築島に緣起せる古跡、一處ならず。ものいはじのうたは、甲斐田の長者の娘の人柱のむすめなるがよみたると。其物がたりは小兒を共し、眠を誘ふの戯れとなり。西成の北、島の上下の地に埋れ木の太しきを掘り得れば、所擇ます、其橋柱の遺す所とす。其橋は嵯峨天皇の時、勅して西生に造られ、平安の京より往來して、大江の渡の邊にいたるの大路に便宜したる橋なるべし。豐崎の名柄濟は百五六十年の前にあり。大内村なる應神帝の大隅宮は五百五十年をへだてたり。彼是帝都の設けにはあらざるべし。古昔此邊は水常に淀みて汎濫の歸する所なく、仁德の御宇專ら浪華の水道を治め給ひ、二重の堤を築きて滯水を三國川にめぐらし名柄川を浚くす。しかれども此邊猶常に水淀めば、殊に河内の國は本凢河内と名づけて、水淫の地なり。西北の巨川を防ぎたる堤を茨田堤といふ。霖雨洪水に必ず壞れ損し、決口兩所有りて、幾たび築きても土を保たず。同じ御代に欽明ありて、古堤の繩準をも改めて堅固に造らせ、其外恩地川なども掘らせらるゝの朝議ありて、人はいまだ普く知る知らぬに、其水道の水際に穴居せし陰獸、早くも巣を

林下山溪にうつして、所を得かねたる狸の醜、人家に食を竊み、其靈妖を弄ひ、長人を現し小兒と變し、小石を拋げうち沙を撒し、人を驚怖し、田畔を踏み荒し此に孩兒を誘ひ匿し、彼に農婦を迷したぶらかす。土地の人且は惡み且は恐る。茨田の守の庄治が家に五ッの磁器あり。祖父なるもの武夫にて、新羅御征罰の御軍に從ふ。彼國大に恐れ敬ひて、王の師を迎へ奉り、位ある人は衣馬采帛を具へて位ある人を請待し、平人賤奴は盒飯壺酒をおくりて賤奴を勞問す。熊川と云ふ處にて、酒飯に具して贈りたる褐色盞五ッ、外面の牛を銹過けて、大國の素燒よりは珍らかに、後紀の爲に隨身して歸り家に傳來し守の五器と人もしりて、客人あれば是を飯器にも用ひけるが、いかにしてか家の子ぐわん太、取收れる時に一器を失ひたり。主人の氣色もよろしからず。甚だ畏れ悲しみ、後園の井に自ら投げたるを、家人兼ねて心得て、早く撈ひあげて幸に死せざれども、以來重き病に臥したり。破れながらにも其質あらば、燒銹の補ひもなすべきに、「過の跡を掩はん爲に、其質を匿したるや。」と、詰り問へ

ども、露知らぬよし申して、いと心苦しげなり。主人、「熟思ふに、物を翫べば志を失ふとやらんは、如レ此際をいふにや。惜しき器物は褻にも晴にも用ゆべきいはれなし。されど用ひざればくちをしくも思ふ。まして磁陶の碗き、饗應に用ゆるからに損するを悔みぬるべきにあらず。是は原我過なり。偏すこしも心に挾むことなく快復せよ。」と慰めければ、いかに其憂のみにもあらざりけらし、遂に病みて失せけり。其後いづくとも定めず、家中に人の啼聲あり。人音靜りてたしかに聞きつけたるに、何か言ばあるやうなるは、元太が聲にも似たるやうなり。魂のこりてけりと、畏れて秡除の法とやかくす。雨くもりくらき夜は、家人一所にこぞりて畏れあふ。時を定めず、まれに一聲二聲すれど、夜深けて聞くに、かすかに物すごくて背のさむく覺ゆる。

心をとめて聞きなせば、裏のかたより、「五器はないか。五器はないか。」といふやうなり。心つよきも、出でて聞きとどめんとする時は、音せぬ折もあり。聲すれば、身は縮めながら耳をそばたつるに、後の井の邊りにあるやうなれば、い

よ〳〵ぐわん太が靈魂なりとおそれて、日暮るれば屋後に行くものなし。其比西ぐにより來りし千穂の岐夫とて、秡除の事を能くしければ、郷民其土地の社に祓させける。此男、其夜守の家に來りて一宿しけるに、其夜は稀に一聲す。明朝後の園にいたりて見めぐらし、井の内をとくと見、退いてしばし其氣色を窺ひ、入りてひそかに主人にかたる。「實に井の内に怨氣こもり、末代家の死靈となりて子孫に害をなさん。其五器も惡名つきて賞翫なるべからず。重寶を捨てざれば家の難を救ひがたし。其五器を人にあたへて、家の安堵をはかり給へ。」と申す。主人此怪異を心に忌みてより身さへ病を得ければ、いとゞ畏れ驚きて、此五器を取出して岐夫に托せ與ふ。岐夫服を改め、白紙數枚を用ひて白幣の切りかけして、ぐわん太が亡年を聞いて幣の中心に書記し、一室を淨め上座に此幣を刺立て、謹みて招魂の業をなし、恭しく坐して、「神已に降れり。」と、五器の箱をそなへ置き、蓋を去りて取出し、一ッ二ッとかぞへて五ッあれば、「是こそはじめ改めし人の誤り。五ッの器はそろひたる物を。」と取入れて、摸と蓋をしてける時に、立てたる幣帛ひうと鳴り振動き靈魂あるが如く、已にして云ふ、「災今こそ脱れたり。」と、此五器を封して速に簷下を掘りて埋めさせ、さて刺したる幣を取りて主人と共に井に臨み、井中へ投入れたり。此幣帛井中にて猶水上に動くやうにて見る內、井底にしづみたり。主人是を見て、眼前に信を取る。卽時に人を呼びて、此井を埋めしむ。此暮より啼聲聞えず。家内も事靜かに、主人の病も快復に及びたり。さるにても岐夫のかぞへたる時は、分明に五ッありしかと思はるれど、とかく物恐しく、ありと見せたるは此人の手段にやとてやみぬ。爰に大戸の木菟の宮は、詣づる人常に絶えざる大社なるに、いつの比よりか、其邊に怪物あらはれ、白日にも人を迷はすとて、未さがりの後は、行通ふ人なし。社の後なる一壇高き所に望臺あり。半は屋ありて、梁上に願書を掛け紙馬を挿む。臺に上り西面すれば、攝泉の青海眼下に湛へて、百國の千帆、望に入りて到る。四國の山幽に眉の如く浮みて、甚だ景致あるに、近比は人跡稀に生ひしげりて、臺の根を埋み腰に及ぶ。世の言くさと憂さくも、土地の氏族計りて、一人の術師を請ひ來つて、怪物を除き逐はん事を委ぬ。其人を卑奈の麻人といふ。近き大里巨麻の邊に人家に倚宿し居を定めず、厭禁の法を以て物の怪を祓ひ、藥方神咒を用ひて病を療め、牛馬の疫までを救ふ。其効著明な

りと人々もてはやらすが、日夜社邊に立ちめぐりて法をなすに、妖怪も勢衰へたれ共いまだ全く除かず、時としては異相の物に逢ひたりとて、人驚怖す。術師法を換ゆれば、怪物もまた其姿を變じて人意の外を欺く。大戸の莊家に多志身といふ大農の寡婦、一子を乳して二十ばかりなるが、近比奇疾を得て三月ばかり、日を逐うて痩せ勞れけるうへ、近日一症を添へて、毎夜大熱發狂し戸外に走り出でんと躍ること幾度す。家族あつまり夜眠せず守る。いさゝか眠らんとすれば、早く狂ひ出でて放出に臥す。看人終夜、片刻の安心なし。たゞ曉天にいたれば、安靜にして倦れ睡る。一族諸類、傍看につかれて窘りたる時しも、麻人を請ひ來つて祓させける。麻人來り見て、「早く我を請招かば、此勞にはいたらじ。我が祝法を守らば、今宵より安臥せしめん。」と、手に取るやうに申すに、其教に任せければ「祓具とて神に奉る例なり。是世の財帛にあらず。其身上の物を奉る。手端の吉棄物とて、左右五指の爪をとらせ、頂巓の吉棄物とて、其いたゞきの髮一剃をおろして、共に包み納め、是を以て神に告ぐべし。」と、神祝を授け枕鎭呪文を頌へ、病婦の耳鼻に吹入れて歸り去る。其夜はいさゝかも發狂せず。安睡既にいたる。家人皆喜びいさみて、術師の高驗を奇なりとす。已に七日にいたれど發狂なければ、わづかに家人の夜眠安きことを得たり。其比相模の國人に强頸の村主とて、大力の聞えありて本手の相撲なりければ、内裏の節會にも遇ふべき志願ありて、攝河の間に來り寓す。妖怪の徘徊するを見て、晝夜心を用ひて土人を下知し野猫の栖處をさぐり獵出して、棒打手捕にして殺すこと數を知らず。又茨田の武良司衣子とて、生れ付物に聰く、百事考へ至るがゆゑ、土地の人德者と稱す。我長をなす下の民戸に指揮して、狸を拒ぐの利害を教へ、機器を制して響を以て是を畏す。是によつて家近くはあふれず。强頸は本郡の邊に妖怪猖れるを聞いて、「いで捉へて騷々敷を鎭めん。」と、乾糧を腰にし木菟の邊にいたり、あちこち逍遙して宮の後の望臺に臨みて歎じて云ふ。「如レ此勝景を寂寞の地となすは、此怪物いかばかりの業をなす。」宿して見とゞめんと思ふに、望臺のうへは四方一目なれば物蔭なし。瑞籬の内こそと見定め宣いて、立去るやうにて日を暮し、夜に入りて人しらず宮に來り、瑞籬の蔭に潜み居たり。二十日ばかりの月のぼりて、物相分明なる比、しと／＼と足音して近く來るを見れば、髮を振り被き赤裸にて素足なる異人、大に包めるを脊に負ひて棒を

杖き、かち〳〵と望臺に登り、負ひたる包裹をひらき褥を敷き枕を置けり。扨は是もこゝに宿して、妖怪を捉へん爲異形に立出でたるなるべしと思ふに、此斷南面正坐して兩の手をさま〳〵に結び、身を轉じて月中を睨みとめ、兩の手に秘訣を握り、兩脚を參差に縦に踏み横に踏み、皆法則あるが如し。口中咒言し、念念喝喝す。倏忽として一陣の怪風吹き通りてあたゝかに、西南の方より空中を來る物あり。是彼怪物ならんとよるを見れば、亂れ髪をはら〳〵と吹かせたる婦人と見えて素裸なるが、風に乘るが如く、糸もて空より吊りたるやと、ゆら〳〵として臺上に下る。此斷指さして「喝」と叫ふれば、怪風散じ此物顚と倒るゝを、抱きて褥の上に安置し　枕を以て其頭に枕せしむ。其體尾籠をなさんとするに似たれば、妖怪等が如レ此雜體て人を愚弄すると、躍り出でて、「妖怪やるな。」と大音するに、一繫を吃ひ、便ち望臺を下りて迯れ去るを追うて、宮の前まで行くうちに見失ひたり。今は長追すべからず。跡にも一妖のこりたりと、急ぎ望臺に立還れば、此斷我より早く望臺に返りゐて、置きたる棒を拽きて大に怒り、「儞何斷ぞ。横より來りて密會を妨ぐる。」と、棒を振つて打來る。强頸も「扨は知れものこそあれ。」と、打つを物ともせず、あなたこなたへ拂ひよけて、遂に棒を奪ひとりて、すかさず一打するに、此斷眉間を擊たれて一棒に眩き倒れ、其儘に起きあがらず。看々嗚呼神退りましぬ。かゝる時に宮の前より松火を揭げて男女四五人「望臺こそ心えね。」といふ聲して、むらむらと噪ぎ來る。强頸早く聲をかけて、「來るものはいかに。」と問ふ。「人を失ひて搜ねるなり。」と申す。「それは男か女か」。「若き[illegible]なり。」といふ。「さらば、あれに臥したるは女にこそ。」といふ。衆人立ちより見て、「是こそ。」と悅びて泣く。「裸こそ心憂けれ。」と、家人が布の單を脫ぎて肌を覆ふ。女ただ熟睡のさまなり。山口の滴水を手に結びて顏に注げばやをら夢のさめたるが如く、「是は宮の望臺なり。知らず、いかにしてこゝには來りしぞ。夢心にもいぶせかりし。」となげく。强頸「其打殺したる斷は見知りたるや。怪物なるべし。」と、一同にたちより裸躰なれば見知りじるしもなし。被きたる髪をかきあげて、よく〳〵見れば破へさせつる術師なり。思ひかけず驚きて、其故をさとりかねたる體なり。時に强頸「己は、儞らも怪物かと思ふ念はれず。子細に申せ。言ば分らずば其女も返すまじ。」といふ。皆詞を同じくして、「此婦人は我どもが家の主婦なるが、正月末よ

り病を得て、近比は狂亂を發し、夜々大熱燒くが如く一身に一糸も着けさせず。只ひたすら戸外に飛出でんとす。抱へとゞむるに、力つよくして女のおよぶべきにあらねば、男女數人これを壓へて曉にいたれば熱去つて熟睡す。この比は身も痩せおとろへ、小主人は三歳なり。一族の心を傷ましむ。其術師は春比より近郷に徘徊して、祝法しるしありとて、七日以前請ひ來たり、髮と爪を剪らせて寃解の棄物とし、神咒を授け禁藥を服せしむる。其夜より發狂靜まり、今よひ七夜に及べば、今は物の氣も怠りけんと、衆人心ゆるみて眠るとも覺えぬに、戸を引放ちて出る音す。燈は消えぬ。心迷ひて門に出でたれど、行かたの東西定めかね、十方へ分れてたづね行く。我々は此望臺の心もとなく尋ね來りて、主人を迎へ歸るがうれしきに、此術師はいかにして此に死したるも知らねど、思へば初より物の怪をつけたるも、狂はしくなりしも、心ゆりして怠りしも、術人の所爲にやと思ひ合せらる。」と語る。強頸聞いて、「妖怪よりも人こそ怪しけれ。」と笑ふ所に、彼家の男女數人走り來り、「母御はありし寢所に、依舊安らかにねて在すを、折節燈火なきに家內が取り亂して、皆外に出でて噪ぎののしり、內の守をおこたりおつかの事かな。其隙に化物の來らざりしこそ、天道のひかへなるべし。」と、いふ言のをはらぬに、此婦人忽ち衆人の中を躍りこえ、毛類とあらはれ尾を曳きて跡なくかけ去る。強頸も再び忙れながら、「後の憑據に其家を認めおくべし。」と、一同に家內へ立ちかへる。此時內なる病婦は眠さめて、夢にも是を知らず。熱も解けて、心快然たること常の如し。「變化の據る所謂れあり。長病に家人の勞れたる間と、術師の奸計をなす邪念の虛に乘じて、病家は連累にこそ。術師の怠漫をあざむく妖怪なるべきに、術師の落命は、惡報人の手を假りたるなるべし。」強頸かへりて、是を人にかたり笑ひ柄とす。衣子傳へ聞きて、「爪髮を取りて婦人を勾引するの邪術は、我神國にて其效あるべからず。元より婦人の髮爪を人に與へて受戒などする事は雜禮の至りなるべし。世に我心を信にし、丹精を盡して神靈の應あるは、人氣の至る所なればなり。其里巷の間に行はるゝは姦術幻術の二ッなり。妖術は何と妄談すとも、大東武烈の國に行はるゝ事なし。漢土に勝るの一ッなり。元來是は惡むべきことなるを、姦人有つて幻術をかりて妖術の姿に取りなし、人を誑惑し、體質あるやうにして人を呼ぶ。必ず同志の人、其中に混在れゐて其事を奨け、其奇特を執證して人に弘む。事破れて後見

れば皆昭しめて誘ひ、畏されて從くものあり。幻術は前漢の時黎軒國の眩人を貢とし、戯を表にし妖には非ず。如レ此き時節は姦人所を得て混雑すれば、一二を正すべし。」と、守が家の五器の事を聞きて、心を添へて埋みたる簷下を掘らせ見るに、箱の内は石の包みたるを入れたり。元の所に埋ませて、其節埋めたる人を問ふに、其家の農監なり。是に岐人の居所を問ふに「其後は知らず。」といふ。問ひ究むべきにもあらずして過ぎぬ。しかるに岐夫の方より竊に人を使し農廻を呼出して「先比埋めたる箱に素陶にても其數入れ置くならば、年經りて變じたりとも詞有るべければ、此素陶を入れおき候へ。」と、密々にもたせこしたり。「遲かりつる。今は爲んかたなし。但し歸りて主人に申候へ。約をなせし山刀は未だ参らず。五器はいまだ賣り得ざるにや。」と言傳へせり。此使は卽ち衣子がすかし問ふ所、主人聞きて、やがて官府に申して、岐夫が在所をさぐりて窮問す。五器は已に大和の富民にあたへて、布百端に代へたり。農廻は岐夫に誑されて一器をかくし、夜啼をなし箱を取りかへたるまで一味なりければ、兩人重き刑に附せらる。井の底の幽聲を出さんと思ふ時は、頭を懷襟に深くさし入れ、垣に添うて言をなすこと、たゞ二三聲なれど、家内の畏伏を知り、其人氣を見て此術を施す。究竟に見顯されたる時は、戯にするとも言ばあるべしと、皆岐人が敎へたるとぞ。妖怪行はるゝにより、此類の姦徒其所に聚りて、後は狸も傍觀をやなしぬらん。是のみならず、河をへだてたる大内の古宮の邊に、前の村司三野といふ庄家あり。三野沒後十六十三の兩女を遺し、祖母老いたれども是を育し、人に配せて嗣がせんと思ひはかる。兩女とも紡績の業もよくし、縫女の術も傳へ習ひ、はらからむつまじく、窓のもとに針線の外他事なし。しかるに折々、さかしげに人ちかき少年兩人、垣の外に來りて、「物申さん。」と招く。兄弟は答もせずしてありしが、一日暮ちかきに例として來りければ、「其歸る方を見よや。」と、兩女とも出でたるままに、日暮るれども歸らず。老母心ならず、小婢に問へども露も知らず。こゝにおいて常に招く少人のことをかたる。いで其少年の所はいづこと求むるに、據りどころなし。古宮の垣を守る末の者いふ、「きのふの暮つかた、其許の息女兩人ともに垣の壞れより内を窺ふを、其内は狸なんどこそと畏せしが、其後は知らず。」といふ。三野のやからこれを聞いて常にも此古宮は狸すむといふなるとて、隣の人おほくつどひよりて、垣守に許さ

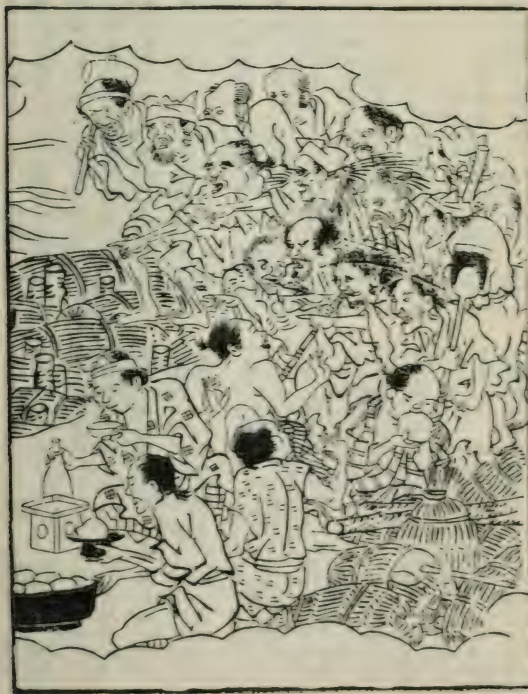
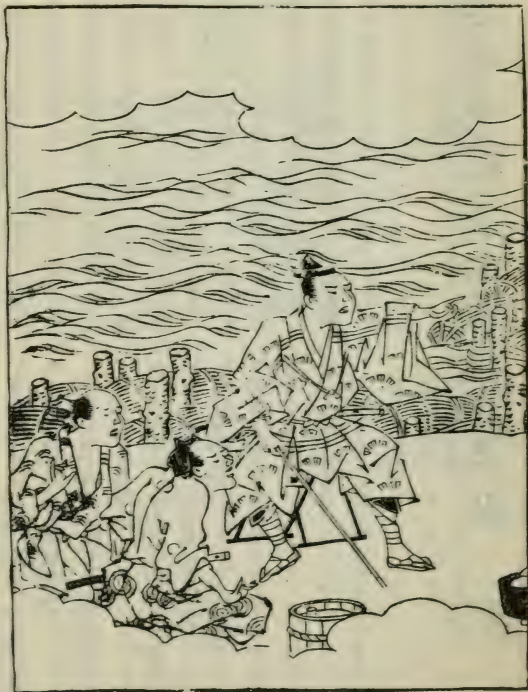
れて内にすゝみ入り、曲々さぐり求むるに、人氣あるとも見わたらず。また凡下恐れ多く進み入りがたき隅々もあり。中にも三野の庭の子なる奈與太とて今年十八歳、生れて肝太く、世に鬼幽靈などの事を、何事もたぬき〳〵といひて物恐れせぬが、「それがし、此所に一宿して、目にさへぎる物あらば、手どらへにして見すべし。」と、其夜は衾をいだき宵より行きて、鹿逐ふ棍棒を枕として、板敷の端に臥したり。二更の比にいたり、屋上天井にて何とやら噪がしく、程なく舒々と足おと響きて近よる。奈與太おもひまうけたれど、さればこそと、覺えず胸をどり身もすくみてふる〳〵も、何でう狸の恐るべきと、齒を咬みて見やりたるに、燈なけれ共くまなく明らかなり。唐人のさましたる德ありげなるが、人近くも立ちよらで、「それは門前の者か。何ごとぞ、こゝに入りて臥したる。其所は大連小連の直廬せる所ぞ。早く退き出でよ。殊に此比は珍らかに女客來れば外の人を留めがたし。」と、いふまゝにかへりゆく。跡をふみて見まくも單身のいぶせさ、「是までよ、まかでるぞ。儞化物伯も二郎も顯し來て繩にかけるぞ。」といふ所に、「いひ」と嘶いて、踏おと高く來るこそ、長き顏馬の如く、斑染めたる直垂着たるが、手を擺つて、「早く出でね。我家に新婦を迎へたればゆるしなし。ためはゞ、大津神に喰はしめん。」と、其怒る面見やりかねても、知れたるたぬきなれと、まかり出るやうにて端にうつりたる時、くちなしの濃き腰巻し面を俯せて、なまびたる女房近くよりて、「かくまで斷り聞ゆるに身じろぎなくは、からめてはみ物にせん。」と黑繩をたぐりよせたるは烏蛇の首たてたるなり。今はたまりかね走り出づるを、「やるな」と逐ひ來るに、心あわてゝくつぬぎに滾びたるまゝに、物もおぼえず絕入りぬ。隣家の此あかつき奈與太を心もとなく、見つがんとて是まで來りあひ水をそゝぎて、やう〳〵われかの現なきにも、たゞ後に立つやうなりしと、懲もなく隔子のさまより見やりたれば、彼女房はなほ其まゝに立ちて、見おこせたる面は笹はら踊る野猫に似て、鰐口の鈴のやうなると見るほどに、俄に宮の內眞暗になりて見る所なし。夜はいつしか明けはなれ、賴にしたる枇杷の棒さへおきまどはして宅にかへり、大に勞れて物くはでこもれり。明の夜は健なる誰かれどち、えらみ合せて十人ばかり行きて入り、物がたりなどしてあるに、夜すがら物も見えず。人多ければ其甲斐なしやと、次の夜奈與太外に心剛なる一人をかたらひ、卵ばかりの小石を數々袖に

して、手に〳〵棒を杖きゝ、目に物を見ばたゞちに打つべしと約束して、こよひは南殿の東の對の端に向ひ坐してあり。二更過ぐるころ、わたどののはし、どどろ〳〵となりて來る異形のさま、言ばにのべがたし。皆其身より光を發ち、中央に坐したるは、其首二ッ並び四臂ありて四足、此比人のいふひんだのすくなかと見ゆるが、わらひ談りて、「衆兄弟おのれが變生にて配なきをあはれみ、爲に兩女を迎へて婚をなさんとす。如何せん兩新婦齒同じからず。別に年齊しき女子をえらみて、我一身二體の配偶とせん。左あるまでは、此婚儀遲延すべし。」と、そらごとのやうに笑ひかたる。奈與太其言を聞きて大に怒り、「いかに狸」と袖なる小石をとつて中央の兩面に投げつけたり。當りしとも見えぬに、彼云ふ、「野人近きにあり。恐らくは素質を損はん。骸奴出でて逐ふべし。」と命す。早く躍り出づる。其長一丈ばかり、腹と思しき所に眼鼻口備はり、右手に鉞をとり左手に干を振り、打來る石をへだてはらふのみにて、我かたに逼り來るにもあらず。殺伐の色無ければ、猶豫して、化の數をつく

すかなと心を鎭めて動かず。中央の人「今は巴を召して呑せよ。」とて匿れ入りぬ。巴とは何なると見るうち、あを色のからきぬからあやのうちきして、よくふくらかなる女房の、かほばせやすらかに眼細く耳長きが、振りむかひて「俑たち是要處ならず。必ず肝を失ひ玉ぎらん兩人しかと心を定め氣をくだして、「化けられる程をばけよ。」と、棒を動さんとする時、此女の鼻俄に暢出づること一丈ばかり、兩人の棒を鼻に巻きてからみける。其力敵すべからず。二人は杖を失ひ便りなきに、天井屋上崩るゝばかり、頂垂れたる頭は囷のやうに、眼は車の輪をならべめぐらし、洞のやうなる口を開き、下なる鼻長き女より先づ呑まんと、くれなゐの舌尖、簑をあふつが如くうごきて、滴たる涎沫泉のごとく、毒氣霧となりて顔を打つ。兩人魂を飛し惶て逃出づるも毒氣に薫ぜられ、御階のもとに倒れ伏して正氣なし。今宵も幸に近き人家の若もの數人、兩人を見つがんとて來り合はせ、是を扶けてかへりぬ。それより敢て入る人なし。只三野の老姑は孫女のことのみかなしがりて、「此古宮の内にこそ

あるらめ。」と、泣きくらすも理かな。「此上は大郡の宮にうつたへ申して計らはん。」と催しけり。先に農の時過ぐる比より、堤築の營み已に始り、諸郡の長たるもの、各人夫を率ゐて役に趣き、王事に勉むるの土功、月を累ねて成らんとするに、彼兩所の脫間、土沙とまらず淵となり、幾たびも空に力を費す。此故に監使頭人等申すは、「昔よりかゝる水功の築きかねたるは、生人を沈めて活動の暫時に土とまり根脚となり、土沙を受くるの法あるよし。」を奏するにつきて、諸國におほせて死刑極る罪囚をえらまる。時に朝廷に衆議ありて、「凡そ刑人は罪を犯して國の妖孽なれば、それを國の利用する堤に用ひらるゝは、吉利を求むる謂にあらず。まして水に趣かしむるは、其刑其罪にあたらざるもあらん。其水底に水神ありて、堤防の成るを惡み、土を拒みて脫間をなさしむるにも似たれば、刑人を潔しとせず、却て怒らん。白馬玉璧を沈めらるゝには劣るべし。」と、區々の評議を、主上聞達あり。深く憂ひ給ふ。一夕の御夢に、河伯參り告げて、「我を祭るに、相模の國人强頸茨田の連衣子二人を用ひて築き給はゞ、決口合ふべし。」と申請ふ。明の日速に二人におほせて、水神の祭をなさしめらる。元より心剛なる强頸なれば、欽命を承るより隨便下の脫間に行きて、「國用を利し、君王の事におもむく、一身何ぞ惜むに足らん。力量あるものに非ずんば、用に耐ふべからず。」と、積みたる土俵を兩肩と兩脇にさしはさみて、「いざや築け。」と人夫に調しあはせ、決口の水底に躍り入る。こゝに衆人力をつくし、聲をかけあひて土俵を投ぐる程に、半時ならず脚をつけて、夜をつぎて築きあげたり。明けなんとするに、「此勢氣を脫すな。是より上の決口を築かん。」とて土功の人夫俄に增すこと三千ばかり、卽ち上の堤に押來り、兩所の人夫一隊となり、競ひて衣子を取つて沈めんと、口々によび叫ぶ。衣子は一莊の長なるものにて、常に忠に能く水を拒ぐゆゑ衆人善く馴けり。時に衣子は逍遙几に踞けて顏色常の如く、きのふ祭り供じたる酒飯を賜り下して、我部の人夫に分ちあたへ、加勢の夫に向ひて言をも出さず、目をまたゝかず見つめてあれば、加勢は酒飯にも得つかず、人數ぜん〳〵消ゆる如くに減少す。便ち指して一人を捉へしめ、淸水を注げば忽ち老狸と變ず。衣子杖を以て撲ちて、「孽畜、妖通ありて靈通なし。擊殺さんと思へど、吉日なればこゝにて放ちやる。此後儞が類族をいましめ、此堤に穴することをゆるさず。」此老狸、人の如く言ふやう、「いかで

公命に違ふべき。但し我がものどもは、先年より水道に穴ほらず。皆々先代より大隅の宮の御園に棲み、今空御所となれども、猶床の下に聚りて、まもりをもつとめ居りたるに、近來妖人ありて匿れ棲み、異形の神怪を使役して、我類を驅り出せり。我やから據りどころを失ひ、小兒等はいまだ穴にすみなれぬもかなしく、類どもこゝかしこ人家にたより、老婆となり少人と化して食をぬすみかすめ、及ばずながら人に勝たんとする念を起せり。」と申す。衣子これを聞きて老狸をば放ちやり、「今日土運に當つて、土功成るの時いたれり。元來此堤水勢を計らず。決口の東卑くして、常に水淀みかへるがゆゑに土留らず。水神人を取るの靈あらば、此二ッの瓢を取沈めよ。此瓢を取沈めることあたはずんば、何ぞ水神を靈ありとし賴むべき。我は無用の死には沈むまじ。」と、饋盛りたる二ッの瓢を決口に投入れたるに、しばし漂ひて大水にゆられ、瀛々と河かみにのぼり流る。「あれみよ。淀める水の歸る勢知るべし。いざ此瓢につきて築け。」と、四手を振りて下知しければ、衆人いさみて力を併せ土沙の俵を投入れ、一時ならず脚つけたり。一同に喊を擧げて成就を賀す。先づ假の土沙桶をつけて、其日は人夫を勞ひ息はせ、「彼狸の仇をなして堤を穿たば、新に成るの時安心すべからず。」と、急ぎ宮所に參りて掃もりの司に請下し、大隅の古宮を能く閉さんと官人を請じ、堤築く人夫をうつして不虞に備へ、大内へ趣く。彼恐れおほき御座所はその時うつされて大殿の邊のみ殘れり。衣子も俱に禮服して、ひさしにすゝみ入り、聲高くよびて、「此宮に躱るゝ妖怪あらば、出できて面せよ。」といひつゝも、「何ものかこゝにとてあらはれ出でぬべき。雜人召して隈々捜らせん。」と計るに、たゞ見る東の渡殿のつまなる局の戸、内よりひらけたり。すは彼腹に目あるたぐひこそと思ふに、織物の袿に鬢ふかせたる、年のほど伯びたるが、袖に一ッの篋をさゝげ、はしを寛やかに歩み、袴をさえ〳〵とふみならして入り來る。正しく向ひゐて、襟にはさみたる扇しきて敬恭して篋を閣き、「今は事顯に面伏なり。わらはこそ先代の御晩年、百濟貢女の中に、弓月の秦女とて縫所の別當なりしが、此宮に住みなれて後、今の大郡に隨從し奉り、職事煩冗にたへず跡をくらまし、竊に此故宮に匿れ住み、折からは出でて縫女のわざを人家の小女に敎へ導き、靜間自在に所を得たりし。」と、其言ば分明なれど、是猶變化現るならんと疑はる。庭上に立ちたる門前の者、「三野の類、また化けたり。

からめて賴許の遁所問はん。」と鞭をさする。宮もりの司は、恐れて驚きもしつ、さることもこそと思へりけれど、「然るに妖怪の聞えあるはいかに。」と詰り問ふ。采女云ふ、「個身を護せん爲、先祖弓月王渡來の聖徳を尊敬して、朝拜夕禮おこたらず。舊く棲みたる狐狸野猪皆恐れて遠く去る。人として此空宮へ深く入らんとすれば、必ず驚怖を得て走り去る。其妖怪のさまは、わらはも知らさる所あり。三野の二女は其家舊く通交すれど、近ごろこゝに在りとは知られずして、行きて縫のわざをしへたるに、女子等紡績のわざにおこたり、薄暮に幽僻の地に立ちもとほり、行の露多きを知らず。故に我此所にとゞめて教訓す。何ぞ久しく留むべき。」とて、便ち是を呼ぶ。荒れたる女官の戸の口より、兩女は何と心えたることもなく、此姫の所に遊ぶとのみ思ひて出てきたる。衣子兄弟に問ひ究む。云ふ、「はらから縫物しけるに、垣を隔てゝ招く少人の歸るかた見んとて出でしが見失ひて、此古宮の築垣の壞れより内を見入れたるに、うつくしきからねこの草にまとはれころぶを見て、垣をこえてすゝみ

捉へんとする。此猫の頭三ッ四ッに數まして恐しかりければ、歸らんとするに壞れたる所を失ひたり。此姫の出で來りて「こちこよ。」とてふかくすゝみ行きて、常に見なれぬ珍らしき事に一日とも覺えず。其あひだに雜物の事など聞え給ひて今にいたる。」といふ。已に宮女なること分明なれば、かもり司も所をおき、衣子は次にすさり詞をひかへて愼めども、きはめざれば事ゆくべいやうなく、わづかにすゝみ袖かいあはせて、「御方の聖經とのたまはすは、いかなるたときにや。」と問ふ。「是は漢土のむかし、夏の禹王洪水を治めて後水陸の妖怪を閲し、其形狀を擧げて、内には山海經に圖し官屬に視し、外には九鼎に鑄つ鏤りつして、門前に列べ、人民に彼象を先に知らしめて、鬼神の姦に勝つの術、山林に入りて迷はず。魑魅罔兩我本形を人に知られては害をなすことあたはず。且山海水源を知りて水利の瑞典なり。疑を散ずる爲なれば倆見さふらへ。」と、持ちたる金函の蓋を去つて拜覽せしむ。衣子膝行りて手にささげ見る。是便ち金字の山海經幷に圖像あり。頃雜人を畏さん爲に出現せる異形

は、皆此經の圖に似たり。此圖に無きものは、世に野猫のたぶらかしと思ひ合せける。其帖の背紙に水利の術九條を記す。衣子是を一覽して大に水學を發明し、心中に感じ悦ぶ。後の世其郡に百濟王女の經冢とは、此經をうづみて息城の鎭となせりとも傳へたり。弓月秦女は捕もりと同じく大郡の宮に歸り參り、山海經の水利の功用あるを吹擧する人ありて、跡くらませし罪を宥されぬ。衣子は三野の兩女を其家に送りかへし、彼經によつて工夫をこらし水勢をさとり、積きて決口に人夫を聚め、土落ちぬ先にかためよとて伏見の竹をきり、葛城の杉を斬らせ 樺を栅みし、鵜殿の葦を移させ、磐手の巵子を撒きて土腿をふせぎ、棒たゝき千反して、狗尾結纒を布き、稗をまかせ、脫間築きおほせて準繩を改正して下知す。長き木津川の土をもて來る水道の難義なるうへ、此國北西水に包まれ常に浸淫すれども、此河内は陽國なり。陽國の河は床常に高くなり、堤は年々に低くなる物ぞ。腹を厚くつけまして土を重ねるにおこたるべからず。河堤には植物せぬもよし。柳は土を瘠せさせ、薄は土を沙となすとぞ。扨水勢を折くには水を斜に受ける。其所に應じて、亂杭、石籠、竹笆、激石を設けて水を撥ねさせ、堅固の抵當調ひければ、笠置川より迫下す桃花の水、琵琶湖を吹來す搖落の風にもゆるがぬ世の寶となりぬ。落成已に叡聞有りて、强頸が人柱に入りたるを傷ませ給ひ、「朕、なんぞ生民を 牲 に用ふべき。凡そ雜事にあたりては、力あるもの智あるものをえらむためしなれば、彼二人を用ゐて水神を水際に祭らしめ、土功を成さん爲なるを、便なくも强頸が勇に死したる。」と惜ませ給ふ。後に思ひ合すれば、生贄と披露して傳へあやまりしは、狸などの仇を報いたるや。强頸の脫間は其水流し跡池となる。後の世の野談牧唱に、

　强頸の身はさながらの人柱 衣子に習はゞ沈まじ物を

衣子の古堤は、今太間の東北より池田村にいたるの間、わづかにのこれりとかや。其繩引て直なる所を、衣子繩手といひたるよし。後世さだかならず。今の古堤をやいふらん。

後の人の口遊に、

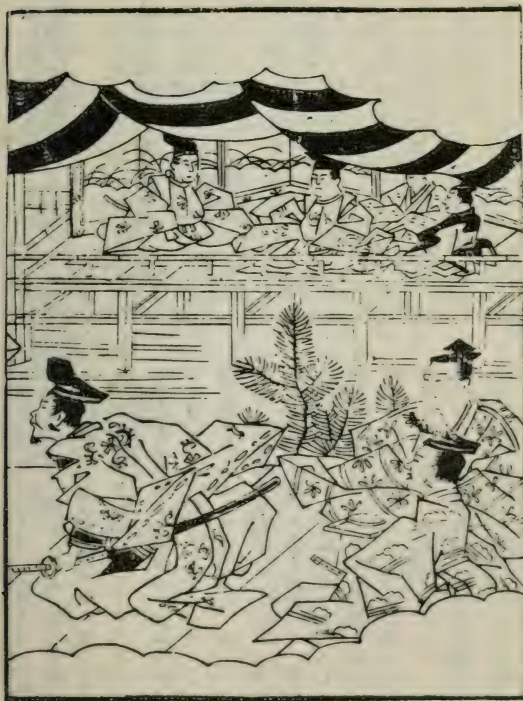
　衣子のまことあらでは胸あはじかづける袖の廣き心か

古今奇談莠句冊第三巻 終

古今叢談秀句冊第四巻

㊅吉野猩猩人間に遊びて歌舞を傳ふる話

好き人に見せばやと賞し、花の山となしけんと美せし跡とめて、花見んとて其境に臨みて、花の有りや無しやは、誰も眺望の忙しきに遑をとられ、其際を思ひ分ぬに、或は雲とかや多かるべきと思ふ人の、此面彼面の花を見て無興なるは、見せばやの人には非るべし。右に左に山水の吉野一かたならず。山の山もりに問ふべき吉野こそ、問ふ人の始しられず遼なり。花は神の代より芳ひつらん。瓦葺けるもの丶こ丶に所卓めたるより、異種を養ひましたるもあらんか。散りやすからぬは此山中の種にはあらずこそ。奥の花は一時ならず、咲けばちり、散ればさくらと口號あるは、近ごろの花見なり。むかしの麓路は、象谷より卑きに添ひ曲り、登りて今の金の鳥居にもいたりし。其間谷の片側をのぼりくだりてめづらかならん。南朝となりて輦路漸く開け、軌道日に平に、花も數添ふにはあらじ。水に臨める勝地は宮瀧西河に卓め盡し、本源は巳が淵とや。山より出でて山を環れる水の咽んで流る丶、瀯々の音は耳と語るが如く、川上の諸流皆こ丶に落ちて遙に紀に達す。峯中には急流の瀧瀑布の懸かるもの其數多し。金の御嶽の名は地主、金峯の社によるとこそ聞くに、いつしか密厳成就の地と標して、石沙も掬ふべからさること古くかたり傳ふ。檜の木笠いたゞき連れて峯がちなる道を深く分入る。其俗道ならぬも、西より來れば六ッ田の淀めるほとりを、よるべの水とやなすべき。よりその石とかやいづくにか、近くなよりそとしらせまほし。山氣に育はる丶怪獸珍禽、幽谷にかくろひ、大首にして馬尾あり、鬣は蹄に踏むべく、髮被りたる間より斜なる眼光きらめけるは、是なん義經の乘り捨てたるが仙となり、時ありて岸に嘶鳴くとぞ。南の深きには鎧へる虫とかや、飛動幻のごとく、むさゝび年經たるそれが、また世を歴りたるにもあらめとか。雲を友とし風を食とせる、青といふ怪獸あり。撃つて倒せば風を得て忽ち甦る。古昔禽獸の拒に備を得ざる時しも、人を攫みて木に掛けたるは大鷲にやありし。それが功滿ちたる

を壓へて、頭巾戴かせ篠掛披かせて、護法に役せられて後は、人を傷けずと悟しあるも空聞せらるれど、實にもと思ふ人もあるなり。山深きにも蟒蛇棲まぬは、金氣を厭ふにや。其境の靈なる、神仙の宿りも徒にはあらずこそ。天武の袖振山は勝手の上に襲ひ、五回ひるがへすは天瞻にのみ見給ひ、日藏の笙の岩窟は國見山に列り、此にこもれる身の何の涙の雨ぞ。在五、西河の幽谿に仙し去り、都良旭日の邃窟に脫體せりと、倶に昔より俗傳ふ。都藍、長生を煉り轉乗法華を勵し、中院谷に忠信が骨を粉き、掛拔塔に義經の名を擲く。圓位の高致ある頭陀の實を苔の滴水に炊き、靜女の妙技なる法樂の舞を縲絏の中に奏す。岩余の躑躅、雄略の行宮は花の爲に辱うせず。平城七代の帝家、顧を垂れ給ふ。名區異跡を數へて探らんとせば、詣で來る人も倦みやしつらん。靈洞奇窟は修驗の九穴と數ふるのみならず、暗窟の難を避くべき多く、漢土の離災城は物かは。凡そ洞穴の成るは土の穿げたるに起り、又金ある山は必ず壙あり。人智の逸き、いつを始と知ることなし。高城山は護良王の據り給ひ

實城の行宮は建武、年を累ねて據所となりし。中殿の跡は當時の宮たちを揆したりと聞けば、何許の御階か、司召して加階賜ばりし。此の庭にや、陣を結びて政を頒ちたる。山烏なるものは、幽林にかつかうと鳴いて寥しさまさるを、還幸と逆へ聞きて、耳を悦ばせし大宮人の感慨深く、そのかみ、賊を殲すの叡慮遂げず、此所に迫められ給へる宸襟、さこそと思ひやり奉られ、世の中はよしやとかりそめに駕をとゞめらるゝやうにて、百の司も備へさせず、禮儀とゞめられて行事もなく、亡賊の軍計のみなれば、諸卿の家の記も數ふるまでにて、定固ならぬことのみ言傳へたる中に、護良王の見ぬむかしに齒を咬ひしばる、人情の憤りをや泄すべき。御村上の御時、初和歌といふ宮女あり。是は桃井直常の一族に、右馬頭とかいふ人、石川の加名生の寺にて發心しける時、一人のむすめを吉野宮中に宮侍させける。生得聰きうへ、父が膝下にて教へ興じたる、いさゝかの白拍子をもかぞへ舞ひければ、初和哥とは召されけり。同じ時に慶の局とて、山宮の始より伏侍して、歌舞に妙に、容貌端正に

音聲靈妙にして、幽情怨語にいたりては聞く人酸楚に堪へず。傾城の色にはあらで、一たび見るもの必ず忘るゝことなき態度あり。心さとく人心をむかへて知り、又酒を釀する其法を得て、水量能く適へり。初和歌才能あるに遜り萬の教を受けしかば、互にむつまじく常に御遊のかざしともなり、彼青海のねり出でたるには品くだりたらめども、民家までも其戯れ行はれて、心ゆくまでの觀ものとなせり。此局の申さるゝは、「幼少の時、父に具して出づる羽の羽黒の下に年經たり。近き邑に俳伎の傳來ありて、里民其技を能くす。それを習ひ染みたり。漢語に是を劇といふは總名にて、扮演は物を眞似るなり。唱ひもの過ぎて動作にかゝるを發科と目け、打諢は笑ひなり。態度のみなるを舞と云ふ。調曲逸聲の次に白あること、皆漢劇の體なり。身の擧動は指すと收むると左右のみ。是を高く卑く重く輕く、速く緩くするわざをぎを以て品おほく分るゝなり。御欄の舞の左右の肩に目を添へるは故あるべし。我つたへたる態にもあるは、いさゝか餘情なければかくはするならん。凡そ出シ太鼓は乘りてのらず、着座するは鼓吹のこりてこそ。處女は言短少に、只面を伏せて起居易直なるべし。妻女は介賓つら〳〵と敬ありて、動作輕辨なり。妓女は言に嬌羞なく、心ゆくまでにして常の步はねらず。貴人の擧動は老嫗に泥じやすく、少女の態深ければ兒戯を出す。上に承けると下に臨むと、記に緊放あり。凡そ場に上りては形體を無心にすべからず。手の措きどころに煩ふ。俗劇は實情より考へ出すを、且得たりとすれども、其度を過ぐれば本來を失ふ。誰も技藝いまだ拙ければ、人の笑ひ欺くを憚る念、はからずも生ず。體態いたりて、觀る人魂をしめて息を閉ぢて坐すを思へば、拙くてあさみ笑はるゝも興を奉るの一つなるべし。角力の速に脆く負けたるを笑ふ人の其力つよきにはあらねど、强きも弱きも興せらるゝにこそ。凡そ我聞きしらぬ謠ひもの舞ふまじと辭するは、私の事なるべし。頓に入調せし今樣の類、是舞へと命あらば、只其結末の頌歌ふた言みことを先にきゝて、結べる唱より態の餘らぬ心すべし。是ら只態を舞ふと、程を舞ふとの分なり。笛を遙に延べて吹出されては、舞損ずる事あり。二段ばかりに責を打つは席を促すなり。態を專らに出しがたくこそ。又謠曲は開合を失へば詞うつるものなり。彼瞽者の唱ふ山伏の花見に、扇おつとり刀さいてと誤り、弱法師を妖靈星と聞誤るにはあらで、田樂の家にて早くひが言となりて、常にかく謠ふ

なりけらし。然はあれど、身の動くは見る人悦び愛で給ふ。穿ちて筆の動くは憎るゝ種なるべし。俗劇は男女混用す。老旦を武生に用ふれど、武生は男優の事なり。和田酒盛の五郎は剛生なり。小袖の五郎は軟生なり。又視ること帯を下らず乳より上らずといへども、誓約の言と發作の勢は、對手の面を乞と見たるが宜きなり。袖を反す事は男優はなすまじきに軟生は今もするなり。袖几帳してふりかへりたる臉の、しばし停れば映に過ぎ、とゞめされば餘情なし。是も昔は水干の袖を自らかづく手なるを、今は袖長くても被かず。又土方に從いて一同ならぬあり。唐劇は鬼形に虎面を用ふ。素面に虎斑かくの起りか。男女の脚色共に雲肩あり。劍を執りて追ふもの只とらへて刺さんとし、逃ぐるもの胸を護して顧く。東技はあきれ眄るに頬を噱かし、西技はいぶかるに口を開く。扨又舞者の執りてかざす扇をすべて翳といふよし。凡てのわざをぎを態といふ。能の字と混じやすきよし。戯場末を結んで観技の人を催し出す鳴ものを春積と名いふ。醉ものこり久しく坐して、足の縮みて歩の正しからぬを、躓きなく養ひ送るの拍子ありて、樂家の傳ありとぞ。世に歌舞を貯へたる家は、主人も舞妓も守る所ありて勘能には達すべし。聲色を貪ると銜ると、主人の枕席を抱くにいたりて、是を以て賓客に供するは敬にも背ひ、聲も態もうつりにうつりて晴には用ひる所なかるべし。静が産家篭りして程なく、しんむしやうの曲、心も及ばぬこわ色と稱せし。其記は原より前後し花多し。さこそあらめのことばなるべし。」と。是ら皆傳ある事とて、折ふしにかたり聞えけり。正平の始足利直義、兼ねて高師直が勢熾を畏れ、都に在りながら密々に南朝へ内附せんと志し、淵邊が舊識、越智成次にたよりて申入れられしかば、南方の諸大將商議區區、疑を抱かる。左馬頭正行申す。「某兼て聞候するに、近來高倉と執事と相和せず。鉾盾遠からず。後日の倚所と思ひ今無事の時に降を請ふならめ。密事とあれば許して心底を試み給へ。」とあるによつて、其降を受けさせられ、懇意くだりて邸宅の沙汰に及ばる。しかれども直義かゝる時節に心打解くべきにあらざれば北朝の聞えも忍ばれたく、始終に心を配り淵邊二郎を從へて、披露は石堂兵部と假名して參りけり。人物動作、實にも足利の連枝、一人は平日の體養にこそ。」と、人々申しあへり。爰に先朝の按察の典侍なりし南の方とて、大塔宮御最後まで介抱使喚せし人あり。石堂と云ふは直義が降り參りぬとさぐり聞きて、便ち內奏し

て、「武士に命じて急ぎ誅罰せらるべし。」と、訴へ求められければ、腹心の文武を召して內議せらるゝに、「近比は降るも納るゝも、互に計策を盡し究めたる所なれば、舊恨を夾むの時にあらず。」と申す趣につかせ給ひて、「此由聞えさするに、南の方、「左あらば、其罪を數へて恥かしめて胸を居るべき。」と、頻りに奏せらる。元より此憤りは南朝の一人より諸臣にいたりて、折に觸れ席に臨んで言葉の根ざす一節なれば、擧載に及ぶ時は大義論なり。爲に叡慮を凝らさせ給ひ、むかし漢代の末つかた、蜀の昭烈の時に、許慈と胡潜と仲惡しく、公事に懈怠するを勵さんと、內々倡優に命じて兩臣の行跡を習ひ扮さしめ、諸臣大會の席にて是を扮優せしめたるためしもあれば、それに倣ひて慶と和哥に命下り、臨時の御欄の俳伎を催さる。馴劇三場の末に組まれたる躑躅が城の劇に、新曲を作り添へて、戯名を「櫻宴」と賜ふ。便ち直義を脇の役直義の態に用ひ、和歌に南の方を扮さしむべきに定れば、執奏せし越智を以て降人に對談せしむ。越智以ての外の事なれば公道背けたりと思へど、是は新參の心を探り見給ふにこそと、新邸に行きて角と演說す。直義も是こそ大事なれと、何氣なき體にて、「かく一身を寄せ奉るうへは包むとも既にきら／＼しき己が舊惡の疎忽、畏るの外あらんや。只わざをぎの不勘なるは衆英の笑ひを蒙るべけれども、武臣の事にあらねば恥づる所にあらず。」と、御受け申しける。標の脚色已に說合定りたれば、淵邊に旗奴を扮さしむ。慶は村上、一場に兩扮、庄司の淨並びに名和長氏を承る。和歌に舞を學べる宮婢民家の女子等、二十五人を用ひて、散れば雪の衣着の垣代に立たしむ。舞監には故篠塚の女子、伊賀の局撿行す。父の勇力を稟けつぎて武器あり。預め號令して、「戯文に違ふことあらば、鐵の杖にて一百打たん。」と、美しき容すゞやかなる流眄に見やりたるは、花の下に寐ねて雷光にをのゝく心地すらん。褻の御欄なれども、端殿に錦邊の御簾を垂げて君の御棧敷を設け、文部班列に從つて次第す。絲竹金鼓は幕の內に調じ、第一に守屋稻城軍の衣摺櫓、第二に西國落の靜舞、兩関すでに滞りなく奏して、躑躅が城の旗輿はきほひある物なれぱと、上下目を拭ひて待つ程こそなけれ。

躑躅城旗輿

あかゞり踏むな、後な子。われも目がある、さきな子。悅ぶべし、君は山路におつかれもなく。いや、かた／＼こそ。扨も我運つたなうしてつゝじが城保ちがたく、是まで迯れ來ぬるが、

師傅はいまだ來らざるか。えいやと只今追ひつき奉りて候。皆々御傍ちかく御參り候へ。道を指したる農家の申候は、此前の道を芋瀨の庄司が塞ぎて落武者を礙ふとこそ。君も已も修驗道は立聞きしぬれば、山伏においては不足なく、別義あるまじく候へども、若くは敵が君を取りこめ奉る時、某一分となり、計略を以て御跡につゞきて救ひ奉るべし。又君を故なく通し奉らば後れたりとも某をも通し申すべくと存じ候へば、義照は此所にためらひ、御後より參らうずるにて候。かゝる大切の際に臨んで御傍を離れ奉る事は、何ンぼう心ゆりなく候へども、御免を蒙るべく存じ候。然らば師傅程なく來り我に遲たしむべからず。皆々來り候へ。荒心やすや。此邊の奴原聚るとも何程の事の有るべき。今は我を遲ち給はん。さらばむかひ候べし。いかにいぶかしや。錦の御旗を此に停め奉るは大凡下の奴原の賤しき手に取るべき物かと、云ひもあへず旗竿に手を搭くれば、旗奴は旗を放さじとすまふを、旗もろともに中に提げ、傍に障る大の男をかい抓みて、四五丈許拋げうちやり御旗もぎとり肩にかけ、宮の御跡追うて行く、怪力勇氣ぞめざましき。武略の程ぞめざましき。庄司は是に肝を化し／＼、物蔭より走り出て、背を見やりてあがれせず、あれはと、口をあきたるまゝにはたと坐して、よし／＼我に損益なし。彼が隨意去らしめよ。者どもは逐はゞ逐へ。此年も來る年も庄司は得こそと、舌を吐き、逐ふべき義勢はなかりけり。

同　櫻宴

吉野といへる邑の名は／＼　君來ますべきかざしかや。是は過ぎつる建武二年鎌倉の土牢にて直義に弑せられ給へる大塔宮に給侍せし、皆見と申す女にて候。最前此處につゝじが城を築きて相模入道が大軍を受け給ひしも、岩菊が反心に落されて、村上義照御名を賜はり、つゝじの花を懷にして空腹切つたる其邊の、再び龍躍のとゞまる土地となり、かなしきかな、昔は葛原の難に倣ひ、徒に國栖の奏に與り、今は義帝の恨に同じく、早く漢楚の業に移さる。さしも世につらかりし足利の連枝高階が爲に肩を壓され罪を悔いて降り參り、けふしも官軍の大名を請じ大御酒進めるとて、舞びめをめし候。わらはは思ふ所あれば舞妓のやうにて參り候。扨いかめしの設やな。時に時めく今參り、新たに賜る邸の門、千筋引いたる白沙を右左に束ねたる、寔よせの

板敷廣く、大紋に風を含めし郎等の、くつに並べる簷深く一筋引ける幕に入る。客人の數は誰々ぞ。北畠に立並ぶ三木一草得能土居も穩かに、礎堅き樟木も時に逢ひたる花の宴。新參にて歴々の御酒の量も存ぜず候へば、御かた〳〵御進め候て、席を御抱へ下されかしとねがひ候。山海の珍物を御馳走の事に候へば、誰々も量のかぎりたうべ候べし。誰かある。初獻を奉れ。己引物に參らんに、此白拍子は何とて遲きぞ。左ゝ候。只今參り候が、物の氣の附きたる樣體に見え候程に、端の屋に豫はせ置き候。何條推して出し候へ。畏り。散れば雪、たゆめば花の世に立ちて、匂ひも色も何かせん。あら不興や。席に臨んで烏帽子も捨てて、髮さへ被きて振りみだしたるは何の樣體ぞ。是こそ和殿が命じて害し奉る、大塔宮のいまはの有さまにてあんなれ。抑土の牢と申すは、地を掘下して板ひさし、月日の光見えばこそ。朝夕の濕氣にいたはり、足たゝずよろばひ給ふを、思ひかけずも刺す刃を口に啣へて咬碎き、憤怒の焰を吐いて薨じ給ふ。猛勇の御相恐ろしく悲しくて、身も縮み物も覺えざりし。是朝命にもあらで私曲の惡にあらずや。直義はただ面を伏せ、言ふべき詞の出でばこそ。時節は廻る盃の、汝に出でて汝にかへる。足利殿の其始、都の討手引きちがへ、丹波路さして横ぎりしに、方弗たる擧動は、足歩までも蹺蹊しけれ。直義またも面を伏す。名和の長氏客の座より、いかに白拍子。益なき往事を談らんより、珍しく今樣を舞ひ候へ。殿は官軍最初の忠臣。舟の上の行宮に家と身を忘れたる指折の門にも、知らずや、赤松一黨の領すべきを横に賜はり朝家を離し、我より與へて從へたる、家兄の計策は弟に出でて蹺蹊しけれ。去程に兄弟、將家の計略を失ひ、內亂を避けて此朝へ、形體は降る心ばせ濫り貌の今參り、見聞くにつけて蹺蹊しけれ。是は己が家事に及び候。皆外より推量の惡言と存じ候。名和が申し候。かゝる上は何を隱し給はん。とても事に候へば、御首賜びたる淵邊を召されて、其時の御有樣を今樣に責めて、かひなさしにて見申したくこそ候へ。(此段にいたりて、直義席を離れ、一部の果まで勤むべきなれども、此段はゆるさせ給へと、平常の言をのぶる時、伊賀の局、鐵杖取りなほし、早く打たんとする眼ざし恐ろしく、やがて戯席につきて)淵邊を召すまでもなく候。某聞きつたへ候は、宮

久しく土牢に御座の所、御心地物狂はしくわたらせ給ふと承り、御髪を剃らせたまはゞ御心地すこしくこそと、淵邊におほせて御髪を剃り奉れと此よしを啓しけるに、御心はやくもからみつかせ給ひて、御力は强かりけり。せん方盡きて淵邊が身を脱れん爲の所爲なるに、御首を取り奉れと聞きまがひたると申すこそ言語道斷。其時速に領所に遂ひやり、蟄居申しつけて候へ。いや何程に詞をかざり候とも、淵邊が罪は誰が罪ぞや。朝家の頼み倚せ重き大塔宮を空しくして、野心を振はん下心。楚人の義帝にもまさりし罪を輕しめし、怙みは誰と蹺蹊しけれ。直義自ら罪を知り候。今は宥させおはしませ。皆見も今は憤りが散じてこそ候へ。たゞ歎くべし。九重を御して一王子を覆ひ給ふ事あたはず。是元來宮の足利に反けるは、君の御内意なりければ、足利よりも恨めしきは叡慮かなと、常に獨りごち給ひし。人間の種ならぬさへ、憎む愛づるの時の變。今日の味方は明日の敵とは知りながら、君が爲法燈掲げおほせず、生を殺し佛罪を重ねても、臣等の迹は守るべき。實に是よりは今參り醜の御盾と奉り、さす竹の大宮人は花に狩りくらし、靑根が嶽は色もときはに、宇多の富士のね、撫づとも盡きず。幾來更山の春のあけぼの、さやけき日つぎの宮居かな。

直義面目を掩ひて舞收れば、衆人宿き憤り一旦に散じて、去るにても直義のわざをぎ拙からざりしを稱美す。理かな、直義降り參る身を用心して、且は北都へもれ聞く爲に石堂と假名するのみならず、近臣花光二郎兵衛經則、容貌似たるを初より假の形代として、その身は吉良八郎とて末の者となり、かゝることを何とも思はず、南朝、人なしと心に笑ひ、籠りて邸を守りゐる。正行は降人の心をためし見給ふ叡慮と聞きしかば、彼も大度の名將、いかゞ答ふると傍觀せしが、舞態の善く馴れたるに、本人にはあらざりけると、直ぐに越智と共に新邸に行きて、「眞の假名せし石堂殿に面せん。」と申すに、直義もつゝみかね名のり出でて對面す。初めて見て舊識の如く、「英雄の斷機を知らぬ、おうなわらはの執念き、かしこくも御支度ありしことかな。代の參内は既に經給へり。正行議すべき軍務の爲に參りたり。」と、南朝の舊制を詳しく告げて馴々しく、「いざ」とて庭に下りて的を射る。直義心に人數持ちたるは我にまさるものなしと、詞をかけて云ふ。「日月を貫く新田殿程にはなくとも、我よく的中せば一たびは官軍の師を賜らん。」正

行云ふ、「小臣能く的中せば、公とかはるかはる六軍に帥たらん。」と、對し射ることしばしばにして、こゝに中を得て退く。出づるに臨みて、「公の今參りは密事なり。滯留あるまじ。」と云ふ。直義悅びて私の談に師直が强梁をかたりて進退を問ふ。正行云ふ、「公は北方にかへりて、威勢を包みて待ち給へ。近年に師直必ず數國の軍を率ゐて、馬を南に向ふべし。我戰うて死生を決せんとす。貴公の領する西播の地は、人勇に案內もちかし。是を加勢に出さぬ工夫して、此朝の忠に備へ給へ。師直死せずとも、軍に打負けなば勢權衰ふべし。勝ちなば、公の家いよいよ安からず。其時心腹の一族を盡して此朝に移し來り、正行に代りて軍府を司り、師直が害を避け給へ。己が一族の遺りたるあらば、公の忠勤を視て、御指揮に從ふべし。」と。其言の理あるに服して、此折から薙髮して慧源と法號し、北には師直が疑ひを散じ、時に當りて身を保つの始終とし、南には護良王の幽魂を慰し、三年の後難を避くるの張本とせり。斯くて後に、和歌のお許は和田何某に嫁し、篠塚の局は楠正儀の妻となれ

りとぞ。時に高階の執事、威權都部に赫赫たり。隨從するもの、慶の局の容儀ありて妙舞なるを傳へ聞きて、是を取りて其興に備へんとて、日比間者を南朝に紛れ入らしめ、いかにしてか盗みだしけん、是を打圍み舁きて談の山路の間道を急ぐに、吉野の武士逐來りて輿を遮れば、京かたにも迎ひの兵卒數增して、既に斯鬪に及ばんとす。かゝるまで一語も出さゞる慶の局、輿の内より颯と飛出る其狀紅梅の小袖に赤き袴の裾を曳きて、烏のわたるが如く高き岩上に止り、衆に向つて、「我を何物とか思ふ。猩々にして猩々を知るべし。世の人は得こそ我性情は知らじ。思ひあはせて知る人はしるらめ。赤髮を拔き葉服せる、彼猩々八郎の母なるものは海島の野人なり。磯うつ波の音芦葉そよぐ風ならでは、疎かるべし。我は名山の春秋に愛でて、幽棲の君主を慰

めんが爲に、此地に遊息す。何ぞ他人を慰めん。今日こそ我停る限りとは兼ねて心えたり。我方の人々、きさいの宮へも能

能啓して、年比値遇の恩を謝し給へ。御氣色を窺ふことは蓬が島の遊び長く、御厨に己が醸せし御酒は、山宮の瘴氣を除

き寶算を增すべし。安らに下臨して見しまゝの玉だれの内に、かしこくも御坐せ。」と聞えて、翡翠の青髮、忽ち紅鶴の絲を亂し、高く飛去つて冥々と慕ふべきにあらねば、南兵は京家の間者を逐拂ひて歸り參り、此由を達し聞えけり。是をなん吉野遲々とや云ふべき。彼山は秀靈の藪澤なればなるべし。

㈦大高何某義を厲し影の石に賊を射る話

南朝は元中九年、北朝は明德三年の冬、南北和議調ひて、其間五十六年にて一統す。然れども北朝の國も、君臣治らず多事なるに乘じて、南方の舊家遺恨散ぜず、餘黨時に起る。一統の後五十三年、北朝の文安元年にいたり、また皇胤を奉じて蜂起し、西南の國に號令すること已に七年。諸方の武士來り從くもの日に加りて、勢ひ前代にこえければ、其屬國の貢物、水に浮べ陸に轉じてあつまる。伊勢の礒部兼政は多氣郡にて富有のきこえありしかば、先朝にめされて御藏もりになされたる。其子兼次參向し、先朝より倚置かれたる米錢幾ばくを上納し、「猶、半のこりたるは、用に充ちて後より幾らも召され候へ。」と申すに、一朝賑はしく先例に依つて隼人佐と召されける。保昌五郎が家にきたひ置きし打ちもの、幾振幾腰を獻じ來る。其餘諸物、先代に捧げたる例にしたがひて進らせける程に、味方の諸士も心いさましくぞ覺えける。南朝柱石の臣たる楠正勝は、合體の時、父正儀に別立し、弟正元は京に入り仇を刺さんとして遂げず、忠死す。其後は十津川に入りて已に四十餘年。此時に及びて老を極むといへども、餘烈を失はず。帝居に參向して衆と共に興復を計る。又大工の邊に住める國規とて、匠材の上手なるが、皇宮の備へを畧し粧はんとて參りければ、其事にはあらねども、たゞ面かげばかりを摸せられんとて、庚午の秋、小瀨といふ左僻の要害に帝居を經營しける。北山の庄と稱すれど、其地は釋迦岳を西に見て、東は勢の飯高へ僅に近し。帝居を造られて後は、事にふれて京家の人こそ物なれて好からんと思して、參り仕ふるものも少なからず。造營成つて三年ばかりの後、間島三郎兵衞、中邑五郎次郎兩人來つて、智晉の公卿によつて降を請ひ奉公を望む。其詞に、「是は二人が傳來の主人石見太郎が本意なり。石見はもと赤松滿祐が家人なり。赤松諸人の誹にかゝり、北方にて出身の害をなし、家を起すことあたはず。南朝の一方を承り、血脈を一郡にも任せ度く、我兩人を

奉侍せしめ、身は北京に在りて南方の爲に間者をなさん。」と。所存の趣を南帝、可として、「そのかみ、義のりたゞよしの例もあれば、是を納れん。」と諸士に仰せて、正勝に計る。正勝熟思して申すは、「たゞよしよしのりの時は我朝、猶勢ありし。今日の衰へ、何を頼みて北方の被官志を傾けん。父正儀が在りし時、河内に居りながら北方に降りしも、君が世も我が代もつきしと始終を嘆めるなりし。此事必ず拒ぎ給へ。」と諫めけれども、帝は偏に人を得んと思しけるの時なれば「なつけて試みよ。」と、其請に準ひ給へば、不日に兩人南朝にいたり、日勤仕り他事なく、北方大小の擧止、日夜に告げ來りて奏達す。萬、才幹にして上の旨にもかなひ、忠を盡すと見えける。正勝が許へも事を問ひ謀り下知を受け、聊か我意を用ゐることとなし。正勝も是を馴けて常に語る。或時中邑云ふ、「傳へ聞く、執事の先公は、張良が傳へたる三略肝要の處、一枚見給ひて武略秀で給ふと承る。主人石見幼少の爲に是を授けたく、身分にも片端を承り傳へたき所存、此樣の事も、此朝したはしく傾き奉るゆへ、今國を同じくして忠勤を分つ。其大略を授け給はゞ、共に朝家の益にもなるべし。」と、世にも思ひ入りて申すにぞ、正勝云ふ、「今同一の味方となりて、身に心えたること秘すべきにあらず。しかし是等も必竟は忠信を繩墨にして事を用ひざれば、木刀にて戰ひかちても、眞刀にて勝つことあたはざるが如く、魂定らされば用に堪へず。世に六韜三略は七ッの書に數へ入れたれど、豫め備へるの軍法は今日戰國の常に馴れたるに勝る物なし。張良が黃石公に受けたる三略といふは上中下の三計にて、三たび來よとて遲速急の三ッを、平旦、鷄鳴、半夜に譬へて如レ此なるべしと說示し、其時に當りたる王者の師となるべき進退の急務を辨ず。本朝のむかしに入鹿の臣を謀らんとて、鎌足公物學びに托せて南淵先生の所に、送迎の路上にて潛に大事を計られし。皆密事にして一人に談ることなり。今和殿にも授けたき事あり。凡そ事に臨んでは、上中下を定むべし。先づ下の策は、其許無二の忠を盡さんとすれ共新參なれば重く任用せられず。北朝には此國、今の據所、山深く攻擊の及びがたきを憂へ、返り忠の者を得て此朝を傾けんとする時なれば、短慮に心變りして、新主を捉り奉りて北に歸るの志發らば、其身の生死いまだ知るべからず。或は是を効として、主人の家を起さんと欲すとも、元來、赤松弑逆の罪にて面を出しがたきに、又、弑逆の所爲を功にし

て前の罪を兎されなんことは、國に不忠を敎へるためしにて、後、必ずそれに傚ふものあらん。其故に執達の人ありとも、公是あらば、智臣あつて納れず。却つて罪名を重ぬべし。中の策は目今、新参の初念を變ぜず、石見便ち赤松の嗣子と共に來つて此國に屬し、此朝の皇運に應じて世を一統せば、勿論和議調ふとも、愚臣が犨と帝の行宮する所に從はゞ、祿微なりといへども、赤心の士に數へられ先人の罪名却つて王事に移り、子孫後世に恥づることとなかるべし。」と、明白の利害、聽き居る間に、肝膽き色變りて、覺えず面を低れしが、きつと心を張りて何氣もなき推して、「高論朦を開くが如し。今一ッの上の策は如何。」と問ふ。正勝云ふ、「上の策尤も言ひがたし。」巾邑も止みがたく强ひて聞かんと希ふ。正勝云ふ、「是恐らくは耳に入るまじく存ずれども申すなり。今紀勢河攝の間に、此朝へ內志を屬する大家二三ならず。皆模稜の手を使ふ。和殿兩人の進退を忌み惡み、北方に流言せしめば、主人までも禍に及ぶべし。其時罪を兎るゝ兼ねての方便ありや。左なくば急に思ひ立ちあれかし。兩人倍臣と申さるれど、赤松一族の末なるべし。急に播州に行きて、赤松滿則に談じて彼を味方となし候へ。近日山名發向して滿則を攻むべきよし、我に告聞せり。此時我山名に說きて、攻める體にて滿則と心を合せ、戟を返して京師を攻めさせ、己は河內の畠山をかたらひ、宇治小栗栖に出でてはさみせめ、東國の里見原田に約束し、同時に旗擧させて鼓角の勢を張らせなば　八幡の皇居亦致すべし。滿祐の血脈政則の家を起すは此時なるべし。」と、分配の速なることと阪上より丸を走すが如きの計策に、間嶋卽答出でかねたり。正勝又云ふ、「是は日を空しく送らぬ上策なれども、播州に說く事難義なるべし。左あらば狐に化を敎へるに似たれど、北方へ便を求めて、此土地の構へるさまをあら〳〵に圖しておくり、好き時節を得て、告知らすべき表裏にもてなして、身を全うする事、是上策なるべし。」巾邑鵠を射られて、後の解說あらばと探られける言ばを、空とぼけして感伏の體に、「明斷の至る所、速に石見にも覺悟させ申すべし。」と、千稱萬謝して退き出づ。正勝心を副へて、彼二人を外事の勤役に配り用ひ、內事には用ひず。二人も新参なれば斯くあるべき事と思へり。間島三郎兵衞、神器の供物につきて事を正勝に計り問ふ、「事の序なれば尋ねけるは、笠置の御沒落の時より、武家請取り奉る神器疑はしく、是こそ何をしるしとして、誰か下さまの正し申すべき。」

と申す。正勝云ふ、「是は武家の談ずべきことならず。君の御身に添ひ給ふ徳あればこそ、皆身命を奉る所なり。神器の有無より、此朝の百事足る足らぬの分量を搜り知らんとする京家の人にこそ祕すべけれ。味方も誓約の人に非されば告げず。しかしながら國の富有を知れば賴む所あるものなり。」と、長府にいざなひ、一ッの箱を取出し、「恐れながら是を神璽とも申さばわらひなれども、軍家の三寶とする地人有の、地は此朝の據所こそ天然の要害、大都の撰に非ずといへども、人の知る所。人は伊勢の國司、先代の舊家、海を隔てたる四國皆舊民なり。斯く申す愚臣は、河内の土地に着きたる家の子なり。皆墳墓を枕とするの忠あり。有は便ち此箱なり。」と、藏寮に命じて鑰を執りて開かしめ、御藏守磯部兼政が一紙千貫の證文、一紙千俵の劵子數枚、箱に充ちたり。「此三寶備らずしては、良亮が才ありても戰ふことあたはず。狡兎常に三窟の計を爲し、乖人慣れて兩頭船を踏むとの諺あれど、兩頭船を踏むことは、人臣の好む所にあらず。」とさとす。間島共貯の厚きに驚き、「四世の將材乏しからず。」と稱歎す。秋往き春來り、此所の蜂起も早く十六年に及べり。時に南朝の元中元年より、六十九年正月二十九日、日輪東に登りて二形並べり。暫時にして一形は漸々に消失せて一輪となる。正勝奇なるかなと見とめて、天を仰ぎて長嘆する事數聲、「已んぬるかな。已んぬるかな。」と、しばし言ばなく忙然たり。侍に尾鷲海邊に生立ちたるが、笑ひて申すやう、「是を我が邊にては日比と名づけ、陰雨多からんとしては、其前つかた間見ゆることあり。何ぞ大將の憂へ給ふことあらん。」正勝何氣もなく退きて、腹心の一族に語りけるは、凡そ日月の德は古今一ッなり。只其時の地氣のそばへによりて望を異にす。彼海邊はさもあらばあれ。我此山中に是を見る時は、帝王の興廢にかゝるべきか。日輪一ッにして圓きを德とし、願ふ所あり。今兩の日の並び出るや、其一は映じて傍ひたるなり。傍ひたるもの遂に消して一に歸したるは、是新都衰へて舊都さかえんか。皇運の歎ずべき所なり。」と、深く憂へけれども、味方の軍威彌增しければ、思ひわするゝにはあらねど、軍務に紛れて打過ぎぬ。其冬の比、正勝久しく北畠殿に疎かりければ、彼に行き音信れて時の要談して退るついで、河端の正盛が宅にいたりて、今宵は此に歇宿すべしと、腹卷ときて足を伸しけるが、初昏に端に出でて陰晴を窺ふに、たゞ見る、狼に弓引くの矢尖低れて穀を失ふが如し。いぶかりて、「是

必ず賊黨其便を得るか。或は大切の仇を脱れ去らしむるか。」と、急に正盛に告げて見せしむ。正盛見るにいさゝか常にかはらず。「此星のねらひは違ふやうに見えて、迯れざるが自然の天道なり。翁の目こそ迷ひたれ。」といふ。正勝頭を擺つて云ふ、「今御邊は半隱の身、朝議に與らず。南朝の天文望に入るべからず。我が目にのみ迷ひ見ゆるは、尙々深切なる所のがるべからず。早春の兩光さへ心がかりなるに、近比烏合の官軍新參の輩多かれば心ゆるしなし。こゝに安逸して明日を待たば、其職に怠ることあり。」と即時に發足し、「微行の從者無人なれば、人數を續け給へ。」と、國司の方へ人を以て告げやり、主從十餘人、便道を取りて東川に向つて馬を馳せたり。爰に間嶋中邑は、神器を奪ひて南帝を失はんと隙をうかゞへども、正勝兼ねて心えて近侍に内屬しぬれば其便宜を得ず。南帝兼ねて邊の莊家に潜幸ありたき思召あれど、正勝に憚りてためらひ給ふこと久し。此時彼が家に下りたるを見て、下格子の後瀧口すでに名のりて、返り遊びにうたふ比、六位藏人等に駕を命ぜられ、戒服召され

女こしに御して庇を出でさせ給ふ。かゝる深夜に神寳在す御殿の方より、中邑間嶋出で來り、御箱を家人に負せやる。南帝怪しみ問はせ給ふ時、兩人輿の下にまゐりて、「明日曉天に北敵襲ひ奉らん結構を、只今ほど北より告げ知らせ候により、先づ神器をかくしてこそ、御坐を迁し奉るべき。」と、誠しげに奏すれども、事の體既にかくれなければ、卒に御輿を下りさせ給ふ。兩人劔をふり供奉の輿丁を追ひはらひ、南帝の御手を挽き、左右より夾みて二三里ばかり行く時、南主、「我は囚れとはならじ。こゝに命を停めよ。」と宣ひて、坐して動かせ給はず。今はとて中邑勿躰なくも弑し奉り、しるしの御衣甲冑をさゝぐ。哀しきかな、南胤の南にあるや、こゝに盡させ給ふ。北朝の長祿元年、此時十二月二日なり。輿丁が叫びよびたるに、武士多く出でて追來り、兩

人をやらじと取りかこむを、のがれ〳〵の命ありて、南帝を退治して歸るなり。て今は身もつかれければ、影の石を後干儞ら後日の罪を知らずや。」と聞きて、にとりて、大聲にいふやう、「我らは北朝京家の人のなす所、當主已に失せ給ひて

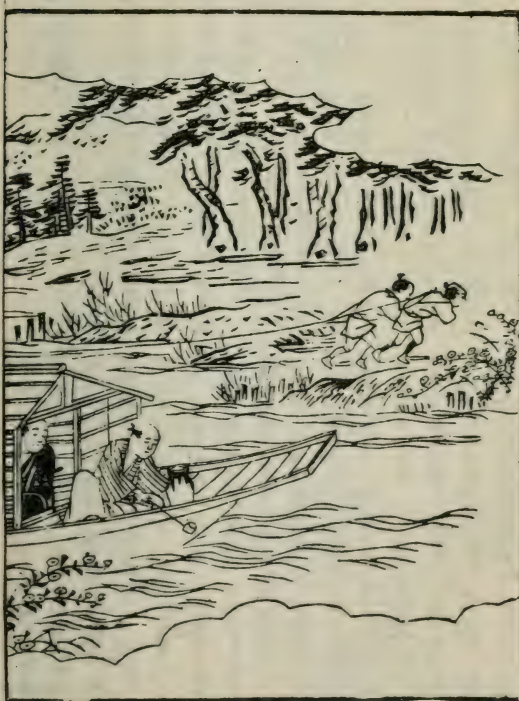
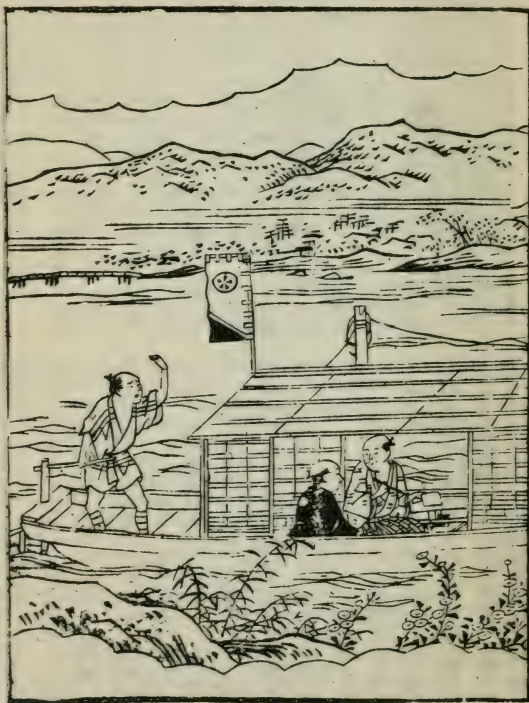
明日の咎恐るべしと、衆人皆後日を顧みる。其時に大高助五郎なるもの、心剛に義信あり。其日早く起きて田を見に行かんとする所に、「人殺し迯ぐる。」と叫ぶ聲耳に入り、急ぎ弓矢たばさみしたひ來る。東なる大石の前に兩人あり。只今貴人を殺せし體にて、龍衣御甲を驗に取りたるは、南帝を打ち奉るに違ひなしと、衆を麾きて云ふ、「きたなし儞ら、明日は明日の義あり。今日は今日の義あり。眼のあたり見るに忍びんや。」と、引きしぼりて一人を射る。胸を通して一箭に斃る。卽ち是中邑なり。間嶋勢頭よからざるを見て、しるしの衣甲も打ちすてゝ、單身にしてのがれ去る。矢比遠ざかれば鼓をならし人を集め、大高丘にのぼりて云ふ、「東荻原の先々に、一隊の來る人は我方武家の標なり。必定こそ今の一人に行逢ふべし。皆々此に屯して、かゝる時は往來をいましめ用心せよ。」とて動かず。正勝は熟路を倍して狹谷の北にいたる時、日は早高く昇れり。向ふ道より肌具足せる男一人來り、正勝が一隊を見て、横道に避けんとするを、下知して捉へさせけるに、思はざる間嶋三郎なり。「果して儞野心を起し、迯げて北に歸るか。反賊を停めて益なし。」と、鐵鞭を抽きて、したゝかに其背を撲つ。殺さでかへすは間者の反をなすなり。間嶋強く打たれて血を吐きながら、匍匐迯れて北にかへる。正勝已に狹谷にいたり、新主の變を見聞きて大に悲しみ、大高が義勇を稱賛し、棄てたる衣甲は其所に留めて、賊を打つの後記となさしめ、禮を以て神野谷の陵に葬り、帝居の跡に佛院王住山を移して、香火を奉ぜしめ、我身は再び十津川の奥に隱れて、遂に老を養ふ。南北一統より此時に至つて六十七年、其間、明滅あれども、猶餘勇說くべきあり。諸葛忠武侯薨じて蜀都治安二十九年の久しきにいたる。其尙武侯の餘德を知る。南方意氣の保つ所久しいかな。石見が立功の機を得兼ねて苦計を用ひたる、大高が時に臨んで義に進みたる、其成功を論ずれば同じ。只是遇と不遇と深淺あり。其深きは慕ふ所にあらずかし。

古今奇談英草紙第四巻　終

古今奇談莠句冊第五巻

㈧猥瑣道人水品を辨じ五管の音を知る話

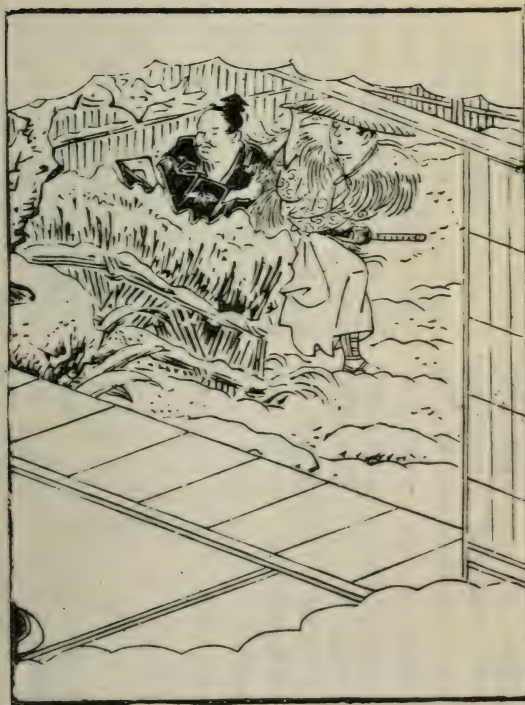
隱逸の趣は、身を我ものとして動かんとする時は、方域を越えて花紅葉を打ち月の最中も名所を尋ねて詠め、便宜につれては遠き山水の地に一遊す。幽居に朝暮するに至つては、一歩の地に蔓菁に灌ぎ、籬下に菊を養ひ、須彌を芥子に納れ橘中に碁を圍む。小室の内には、一瓶半朶の清香に狼烟を卑しとし、半障片幅の濃淡に幽襟を樂ましむ。灑掃に筋力を按摩し、晩飯の美食に養生す。塵俗の雜具なけれども、自ら猥瑣道人とよび、菴を自在と題し、飲を苦茗に親しむ。時いまだ大國に陸廬の好事專ならず、其趣を叩く人もなし。身はかくてこそ、人に利益なきも冥加いかにと、五音の人相を施す。此道や過去の事は其人思ひ合せて、我より合へりとす。後來の合はざるや、其故あるべし。それを說き與ふるもの、道義に據らざれば人の心緒を亂り、五倫に害あり。男は後の時を賴みて、おのれが器量をわすれ、女は今を假として、己が世々を期す。骨法は上古よりす。其中興の陳圖南は洒落せし高明にて、抑揚皆心を用ひたり。扨此業こそ人情に近く、敬して相を求むるものおほし。たゞ笑ふべきは、相者に後の富貴を祈ると、疑ふとなり。勝れたる貴相もなく惡相もなし。あらば善惡とも桀紂なるべし。泉の堺なる富商の妻來りて相を求む。「女は夫の相にこそよるべし。自身の相を問ふべからず。」といへど、强て請ひければ、是を聽相するに、「其言聲宮正にて、室家に宜しく、壽算あるべし。」と、說き與ふ。又、一賈人を相して、「足下、素性武人なり。しかも平士にあらず。今商となれども、猶財利は得ず。名利は得るべし。」と說き與ふ。是等皆後に合ひたる相なりし。扨此隱者は平三郎兵衛とて、畠山政長の家人なり。遺命を承けて、子息尙慶十三になられけるを、大和の奧郡へ忍ばせ、其身は出家して名を包み、紀の廣といふ所に幽居自炊しけるが、幼より葉室納言に伏侍して才學ありければ、語り來る蜷川親長とて、父大和の衛門、禪儒の學に深かりし餘風、親長も文字ありて詩歌工なり。猥瑣の住みなせるさま、心惡くちなみよる。道人は身のうへを探

るにやと、猶更に素性を下賤にもてなし、親長が權官なるを羨むが如く、卑下りて云ふ「世に貴人大人は、高屋大厦に坐して、心を逸し給へども、それさへ人に遠ければ寂々しく、小齋學窓を開き、古人の書を讀むもあり、容膝の茶室に爐を圍みて、位高きが一器兩用の辨易を空夫し水器の蓋さへ置き煩らはせ給ふ。狭室の進退、配偶の風流も珍しく、山下の草菴にも光輝を及ぼし、逍遙の小船に意興を新にし、小亭幽館は、自ら紅袖の傍近きに憐み深きまで、思し知るものならん。下民のまどしき、己が耕す畝の端せまく居て、常に棧棚にだに迫りたる分配は、甚だ得やすかるべきに、得がたきを以て淺からぬ流れとも知るべきか。」親長、「實にも、迫りたる窓の内には、器の配偶こそ心えあるべし。」と問ふ。云ふ、「存じよるに、物を排列くは、八様四方梅花様こそ固しけれ。左に一物あれば、右には無かるべし。必用の實器は野に便を取り、好事の虛器は雅に觀を專らとす。雅も用ひる人多ければ俗となり、俗も稀に見れば雅に混ず。天然の山水は眼下に在りとも、人物の掛幅は貴人數添ひたる心地す

と思さずや。」親長云ふ、「實にも山上の山は見るべく、舟中の舟はいかに棹さゝん。萬に數奇、常に佗傺しげなるは、自然なればいかにせん。朝夕に左右する調度は、取るに手いたりやすく、篋を兼ね櫃を同じくし、神人旁にありて、我爲に使役するが如くなるは、便室の要にて、自在は誰もねがふ所なれば、和尚の自在庵も、家を出でたる名にはあらず。」云ふ「是濫りに出家と名を竊めば、貴賤朝野の問顧る人の爲に設けて、塵壺に蓋せぬは意地に似て、窓の外には根こし掘かせて、袖を摺るべき樹は自然に痩せ、劍を架くの石は有るまゝに凸なり。動作焦燥ちて頂を撲つべき低楣あり。身心を降伏して背を蹈るの小牖あり。水は山後より一流にて、是第一義なり。泉源近きは毒あり。汚潦の流れを受けたるは潔からず。井水の善くて、其地に居りがたきあり。淀は酌むべし。淵は酌むべからず。」と、其談ずる所かりそめならず。自筆は書も畫も轍を離れければ、親長、一幅を持たせ來りて、「書畫に凝らさる人は、人の書畫もしらじ。和尚の鑒を借らん。」と、其壁に掛張す。「日觀の蒲桃、

故ありて河内遊佐殿より贈らる。托紙に眞相の鑒賞あり。」と。猥瑣、「是大に傳來あり。賞翫なるべし。」と、進んで見、退きて看、其雅致を美稱す。「其心底を遣さず示されよ。」と聞きて、「疎忽の愚に究めよと命あらば、幅紙は元朝にして、知歸子の印色淺明に、麻油朱ならず見ゆる。是は畫官進呈の幅にて、素より落款なかるべし。後人、擬名を塡めたるとこそ見ゆる。」と。親長聞き、「僕が思ひも其砌にわたりぬ。高鑒歎伏すべし。是を以て思ふに、世に傳來隔りて、鑒に賴れて古人の筆を欲する程、心費ひなるはなし。古人の手跡の因緣の家に遺りたるは、奇偶といふべし。それを慕りて類せんとすれば、二品三品を過ぐれば、早くも欺きを招く。骨を賞して良馬到るは物こそなれ。鑒識一尺高ければ、贋魔一丈高し。傳來を據所とすれば、其證に贋せ作る。鑒に人を得されば、鑒者自を欺き人を欺く。鑒も亦賴むべからず。」と語られける。此親長は人の知りたる相劍なりければ、此菴に詣で來る賈人、和尙に托して眼を借らんと、此日從者門に遲つを見て、入來を知り推參す。道人櫃を進め「鑒を下し賜はれ。」と介せらる。親長、禮讓して、「先づ和尙、一覽。」と辭する時、「僧家に不勘の器なれども、粗忽ながら五音にて試むべし。」と、手馴れぬ體にて先づ中根を露はしはゝきを去り、鞘を半ば拔きかけて、指をもつて彈くこと幾聲。云ふ、「是三百年は疾く過ぎたり。」又一腰を取つて彈くこと幾たび、「此劍は彼より二百年ばかり古し。」と云ふ。親長一劍を把つて、鞘を放ちて相る。鈯鎚柾理に地色白く沸星多く、背うすく稜なく二字の銘あるは是寬弘の鍛冶行平の打物、是を古作に數ふべし。いま一劍を見るに、指おもてにくりからを鏤り、刃うき〳〵と花ふれども、古作とは稱せず。是は豐後の行平とて、養和の鍛冶なり。實に寬弘を去ること二百年に近し。五音の術もまた奇なるかなと感じたり。賈人も劍相よりは是を妙とし、鑑定成りぬと悅ぶ。一頃山背の宇治の水道に、土砂桶の肝煎を命ぜられて彼にまかれば、「飛錫の志なきや。」と誘はる。道人折しも足の氣を勞はれば遺恨云ふべきなし。「曾て聞く、山をめぐれる水は、中峽を酌みて中焦を治すと。又、順流水を用ひて下焦を治し、急流水の膈を開くの類は、詞工にして効少し。茶を煮るは、分別著明なる事試みたることなり。公は貴人なれば宇治に夫を督することそ幸なれ。一壺の渓水を取つて土儀に賜はれ。彼流れは鹿飛ぶところを上峽とし、湖水を引いて漸く峽に入ればなり。志津河を中峽とし、宇

治橋の汲臺を下峡とす。此三峡の内に、世の人下峡を善しとす。愚が欲するは是中峡なり。志津川と合ひて水勢盛んなるを取る。」親長、「是程の庸易あらんや。」とうけがひければ、道人喜び款待して、「恙なく、やがてこそ。」とて別れぬ。親長公命を奉じ彼にいたり、夫に舟を引かせて、嶮しき所にては下りて陸行す。あらかじめ從者にかたり「此志津川の水こそ、猥瑣翁のあつらへたりし所ぞ。」と、猶川上の樋所まで檢知し、已に舟を下げ流れに沿ふ時、「此水路は名にふりし文苑なれば、景物に奪はれて所を失へり。誰も思ふに、湖水は懷廣くして、眼の及ばざる景地多く、遠望して識るのみ。此宇治の景は望を受くる所せまく、一小園に流れを引くが如く、其皇都に近ければ、王孫公子、遊賞絶えず。吟咏古來多く、麓に霧こめて、雲ゐに見ゆる朝日山は、誰も臨りて眺望すべく、御位をゆづり逐ひたる、宇治の弱郎子の山陵こそ尊けれ。」網代禁制の石浮圖、巍然と變らで砂洲に立つ。時しも山吹の花の比、平等院の前より川邊に沿ひて、橘の小嶋の崎へ咲きつゞけたるが、落日に影を落されて、川瀬の金色をなす。親長見て、「棣棠の名、空しく傳はらず。」と、侍に硯を備へしめ、酌んで盡くれば又盪す。「遲しおそし。」と、史三方が不レ憚二流水急一唯恨盞遲來を吟じて興に入り、「金風の山吹の瀬と咏ぜし人は、花に心はなかりしか。是こそ瓦礫のよりどころかな。」と、

秋草山吹名有則有焉
黄金不換今日此時

此あひだに急流しばしもたゆたはず、速に橋を過ぎてければ、舟子をさけびて、「今一たび舟を引上げよ。」と催せど、此急流いかで心にまかせん、槇の島にいたる。所詮、督役廨にいたりて、又こそ急流に遊ばんと、手づから一壺の水を汲み擧げて、「思へば、上峡の水、中峡にいたり、中峡の水、下峡に流る。いづれか三の差別あらんや。」と、瑠璃に傾け入れ、重々封を加へ、「名水調ひぬ。」と、監督の業落成し、南紀に歸りて、提へさせて自ら是を致す。道人悦び、即座に鍋中に傾け入るゝ。其滴聲を聞いて、呀かしげに、「是何ぞ中峡の水ならん。また下峡にもあらず。爐に上せ茶を試るに及ばず。」と、壺を閣きて申すやう、「彼上峡は瀧おほく、水和らかに土氣ありて重し。中峡は水勢せずして、土澄みて輕し。下峡は物滯り、砂湧きてます／＼重し。愚禍實は中焦の疾あり。試に中峡の水を得て、藥を服せんと志す。足下何ぞ忍んで服用を濫にす。」親長大に驚き、「是僕が上人

を試るなり。此水は我、手づから汲みて、和尚の命を奉ず。兼ねて近侍が心えて、酌み置きたる是こそ。」と、從者に持たせし一壺を召しよせて、「試み給へ。」といふ。道人便ち數滴を器にうつし、其滴聲を察して、「是こそ。」と、大に悦んで納めおく。親長其通の定りたるを感じ、友誼いよ／＼親しかりし。其比の時、近江なる石丸の何某、命を奉じて美濃の齋藤を征す。敵に加勢多く、却て散々に打負け、石丸も戰死す。畠山政光、大家の御供して大和筒井の城に入れ奉らんと道を採れど、往來塞りて自在ならず。大家其間は所定めず、泉攝の舊恩の民家にひそみ給ふ。堺の商人高麗屋何某、畠山の舊好なれば、君を其家に忍ばせ奉るに、旅人の體にて入らせ給はんと告げ遣りければ、主人は遠國に行きて留守なれども、畏り奉り、夜深けて私口より、妻女の客の間に入れ奉らんと約しけるほどに、政光は先に行きて御座所しつらひ相圖して待ち奉る。其夜しも、雪降りて小止みなし。此處に木澤といふ商人、夜ふけて通りあはせ、木履の齒さまに咬みたる雪を、門の板にて叩き落しける。内よ

り「唯」と答ふ。政光能く五音を聽取れば、云ふ「此木音合うて官を離れたり。是身を匿すの信にあらず。似せて叩くは猶用心すべし。」といふ内、戸口に待設けたる兩人の使女、戸を靜に開き、元より火はてらさず、暗夜に御手を搴きて、はるかの奥に御案内申し、屏風立て圍みたる上壇に請ひ奉る。政光物かげより見て、「雜儀の事かな。いかにもして、あれをすかし通すべし。互に身の大事なり。」といひて、其身は御光駕の迎ひに後門に行きぬ。女房出てて見て、「實にも忍ばせ給ふとも、いかで斯かる賤しき御樣體ならん。」と、慇懃に會釋して、「面目を失ひ候ふ事かな。夫數日の他國を幸に、常に逢ひがたき故ある人を、夜中に招入れ候所、思はずもあらぬ御方の御入り、此事夫聞き候はゞ、重き罪に遇ふべし。只希はくは、穩便の惠みを賜はり、人に告げ給ふことなかれ。」と、金包銀包を出して賂ひけるに、此男是をいさゝか受けず、猶問答あるべしと立出る時、早くも床の棚なりし一管の笛を取りて歸りけるを、其時は知らさりけり。政光は引互へて、此家に君を忍ばせ奉り、通路見あはせ

て數日の後、筒井の城へ入れ奉りけるが、幾ほどもなく君を敵に取られ、進退を失ひ、山口の御所を慕ひ周防に下りぬ。却つて說く、彼一管は亭主の重寶なるを失ひて、家內探ね迷ひけるに、彼商人木澤、此女房の親里入江屋にいたり、「其笛は我許に留めおく。」と告げければ、女子の難を拔ひ、此笛を取返さん爲に、「金銀望なくば、一つの望みを聽かん。」と云ふ。木澤こゝにおいて申すやう、「我は畠山政長の家人なり。年來、平野の花井を討ちて、我が世子に家を興さん願ひあり。助力賴みいる。」と申さるるに、否みがたく諾ひて、其費用をもまかなひ、徒黨の遠近こゝに聚會して、手配りを定め、杉原遊佐の人々と共に、平野へ夜討ちして、花井を難なく討ちてけり。遂に主君尙慶を請ひ奉り、河內の高屋の城を築きて、據所となし畢んぬ。

彼政光と木澤と相會せば、同一味なるべし。猥瑣水音を知り、政光木音を知る。其傳は一流にて、眞僞はよく辨じたり。但同調をば得て知らざりけり。商家の妻女は貞正室家の相ありて、一時の急難に無實の名を顯す。木澤が名をなせしは、僅に符合せり。倶に猥瑣が相せし人々なり。水金木は定りたる無情の物、其音變ることなし。人は是活動、智を用ひる物、未來の合ふべからざることかくの如し。

(九)白介の翁運に乘じて大に發跡する話

靈場の緣起に曰く、信州更科の郡に、長谷邊白介といふあり。先祖は允恭天皇に出でて、中比の人、罪を朝家に得て此地に迁され、今は世代移り、復土の赦免は先代に宣下有りながら、復官の推擧も無ければ、還り住むべき所もなし。其儘に一畝の民となり、貧窮すれども、土地の人依舊白介と呼ぶは、白は素人の意なり。介は大官の目なり。民なれども大官の末なれば、無官の介といふの名なるべし。幼名を小三と呼べり。同じ貧ならば上國に住みなんと、隣の水內郡司の都に詣でけるに附搭して行きつゝ、大和の舊知のするを尋ね求めて倚宿するに、身は獨りなり。此處にても畔の端を得て耕をなし、貧を憂へて泊瀨の觀自在に祈ること年あり。此本尊の靈應、かぞふるに遑あらず。遠近の士農もらすところなく渴仰して、其利益を蒙る。傳へ聞く、新羅國の后妃、不義を過ちて繩を受け、高く吊られて踏む足の地をはなれければ、苦しさのあまり泊瀨の名を聞き傳へ、不義を改めんと誓ひて、遠く此國の大士へ拔苦の助力を求め給ふ時、忽として足下に金

……致しま
……けまし
これなら
……らのう
……が殆ど
……ら、忽
……ました
かつて
……だけに
……藏ける
……かゝら

（非賣品）
毎月一回乃至二回發行
編輯發行兼印刷人　石川寅吉
東京日本橋區馬喰町二丁目一番地
發行所　株式會社　興文社
電話浪花 一一一四・一八四〇・一八四七・七八四〇
振替東京　八四四番

すでに第十卷を御落手になつた方々には十分編輯部の心配と、山口先生に如何に御迷惑をお懸けしたかをお察し下さる事と思ひますが、責任を明かにするために申し上げることにしました。

この書目の變つた事は、そもゝゝ日本名著全集の計畫をする頃、如何にして、よりよき全集を出版すべきかといふ熱に燃され、東奔西走して席の溫まるも知らず、だんゝゝ具體化されてゆく喜びと希望に滿ちきつてゐた編輯子には數の觀念は大した問題ではなかつたのであります。（事實は

をかゝげて狗肉を賣る式法から申せば、書目數だやして六七百頁にもすれ書目の數だけで行作にある小品を集める事は決し心を要さないので、それして出版道德上許すべきではありません。

吾々はどこまでも、よをつくることを旨として先生にいろゝゝのお願ひ（先生には御迷惑だつた思ひますが）書目の數よ內容の質を量を主として來得るかぎりの力をつくと思つてをります。

書目の減じた事は本書覽になれば御諒解下さる思つてはゐますが、親近任はどこまでも編輯子に事を明白にして山口先生會員の方々の御許容を願第であります。第十卷の先生の解題にもありますめられた十部の怪談は怪

毎月一回乃至二回發行
編輯兼發行人　石川寅吉
發行所　株式會社　興文社

第十二回配本　怪談名作集

豫告の通り今回は『怪談名作集』を配本致します。收藏書目に就いては何かとお叱りを受けましたが、この配本された物を見て戴けば「これならば」と御諒解下さることゝ存じます。これらのうち半數以上は未覆刻本です。そしてこれらが殆ど希覯本なのですから、これが書店に現れたら、忽ち價數倍することでせう。殊に卷尾に添へました停士佐經隆筆『百鬼夜行繪卷』の如きは、かつて豫告だにせず、又他の追從をも許さぬものだけに大いに名著全集の意のあるところを買つて戴けることと存じます。羊頭狗尾、算盤をすてゝかゝらなければ出來る仕事ではありません。

すでに六十卷を御落手になつた方々には十分編輯部の心配と、山口先生に如何に御迷惑をお懸けしたかをお察し下さる事と思ひますが、責任を明かにするために申し上げることにしました。

この書目の變つた事は、そも／＼日本名著全集の計畫をする頃、如何にして、よりよき全集を出版すべきかといふ熱に燃され、東奔西走して席の温まるも知らず、だん／＼具體化されてゆく喜びと希望に滿ちまつてゐた編輯子には數の觀念は大した問題ではなかつたのであります。（事實は大した事なのですが。）たゞよき本を、といふ氣持だけに生きてゐた編輯子はどし／＼計畫を進めた、忘れたと申すより誤算と申した方がよいのです、その誤算の結果が内容見本と出來上つた本との差であります。それでは内容見本に發表されたものと比較してどうだといふ御質問がありましたら、出來上つた第十卷は今まで出版された怪談本集としては特筆大書すべき好著であることを申し上げるばかりであります。

紙數を四百五十頁乃至七百頁を限度としてゐる此全集が、内容見本の書目より少くなつた『怪談名集』作の持つ頁數實に千百頁近い大冊となつた事を申上げれば、誤算であつた事を明白にする事ができると思ひます。（これはほんのお笑ひ草まで申し上げます。）羊頭をかゝげ狗肉を賣る式の商法から申せば、書目數だけふやして六七百目にもすれば、書目の數だけで名作にあらざる小品を集める事は決して苦心を要さないので、それは決して出版道德上許すべきものではありません。

吾々はどこまでも、よき本をつくることを旨として山口先生にいろ／＼のお願ひして（先生には御迷惑だつた事と思ひますが、）書目の數よりは内容の質を主として、出來得るかぎりの力をつくしたと思つてをります。

書目の減じた事は本書を御覧になれば御諒解下さる事と思つてはゐますが、誤算の責任はどこまでも編輯子にある事を明白にして山口先生及び會員の方々の御許を願ふ次第であります。第十卷の山口先生の解題にもありますが集められた十部の怪談は怪談名作集としては正系の適し難きものはその量の大部をいとはず、できるだけを收集しました。そしてそれが意外の頁を占めた爲に、傍系的なものはやむなくこれを割愛することになつたのでした。

かうして、多くの作品中から選りに選つた名篇傑作は、その書目こそ少なけれ、質に於て、量に於て、而して山口先生の精到にして委曲をつくされた解題、多くの參考圖版、附錄として添へた「百鬼夜行」の繪卷、更に山口蓬春畫伯の凄絶頁に迫るの裝幀見返し等内容外觀のいづれの點より見るも、從來刊行せられた多くの怪談集中の白眉であり、王であると信じます。……つい、我身ほめの自慢になりましたが、さいはひに「なるほど尤もだ」と仰くださることを得ましたら、まことに以て欣懷幸甚の極みです。

次回には

和文和歌集上卷

を配本する事になりました。校訂者は塩川登穂先生であります。先生が歌人として既に立派な業績を示され、且又和歌の研究家として、わが歌壇の權威であることは、今さらこゝに御紹介するまでもないことです。先生が多年の蘊蓄を傾けられて、親切周到に解題校訂して下さつたことを、會員諸氏とゝもに喜びたいと思ひます。

さて上卷には賀茂眞淵翁を中心とした縣門の歌人の和歌和文を收容することに致しましたが、内容書目を御覧に入れますと、（年代順）

賀茂翁家集	歌意考
にひまなび	天降言
うけらが花	琴後集
魚彥家集	ひとよ花
東遊日次記	藤簍冊子歌
賜蘆歌集	

まづこんな内容で收容書目は豫定の外ど全部を網羅し、更に二三希覯の書を加へて、一層充實した益容を以て、お目通りすることになりました。頁數は豫定を突破して優に七百頁を超過しました。

質か量か？

第十卷の怪談名作集が、内容見本に豫告してあるものと出來上つた怪談名作集との書目が變つてゐる事に就いて、一言會員の方々に申し上げたいと存じます。

江戸及江戸文學研究の

新雜誌に就いて

「オイやらうか」と、明日にも船出ができさうに思つて仕度したが、その反響があまりに大きくて、最初思つた箱船では、なか／＼纜綱がとけさうもない。かうなつては乘手も揃へたい。船體も小さいながら立派な艤裝をさせたい。いつ何處から大砲玉をぶつかけられるか解らないし、いつ何處で坐礁するかも知れない。イヤそんなことで沈沒するやうな船なら最初から乘り出さぬがました。

雜誌の名も會員諸彥のお力添で、いゝ名が澤山あつまつた。が赤ン坊の名付に誰もが迷ふやうに、あれかこれかとその選定に迷つてゐる。御諸君のうちでいゝと思はれる名をお持ち合せなら至急お知らせ願ひます。今までにも大ぶん集つてはゐるのですが、まだ／＼と世話役の慾心から、もつと穩よい名前もがなと思ひます。但し十月中に。

内容も各大家やら數寄者やらにお願ひして、已に戴いた原稿もあれば、約束済のもふんだんにある。勿論諸君の御投稿も大いに歡迎します。

といふ譯で、すでに大體の目鼻がついてゐるのだから、遲くも十一月中旬には、國文學の大海を縱横に乘切らうといふ裝甲船が花々しく進水式を擧げる事でせう。

會員も豫定以上に集りました。これも編輯子を大に買つてくれたものと自負させて戴いて、あとで買ひかぶつたといはれぬやうに努めるのは云はずもがなですが、雜誌の發行部數が百部增せばそれだけ、千部ふえればそれだけ、尙より充實したものが生れる譯ですから、この際に未だ申込まれぬお方は至急に御入會を、すでに入會されたお方は、お知合の方々に大いに御吹聽の程お願ひいたします。

實のところを白狀すれば、我々編輯子は「名著」で首も廻らぬところへ、かうまで船出もせぬうちにやんやと騷がれては、うつかり尻馬に乘せられた形で、又ぞろ一つ重荷が增した譯だ――が安心してください。三度の飯を止してまでも、かういふ仕事ならビクともせぬ好の者揃ひだ。又ひとつ重荷がふえても根がしよつて生れた人達だから、その點は斯く申す筆者が、大いに請合ふ次第、期待にそむくやうなことは爲々ありませぬ――その決心で、着々もろ／＼の準備を進めてをりますから、遲くも次號で、具體的の發表ができることと存じます。とりあへず御報告如件。

尾上松綠叟をほむる化物盡し讃め詞

東西々々。狂言なかばへ邪魔外道、まことに野茶と化物め、さえてなくたれ糺かいゝあつかへうぜろとおしかりを、かへり見返の大入道、大の眼に目はしをきかせ、そぼ／＼雨の丑みつ過、人靜まつてさし出に、おなじ見返の老松に、松綠さまをほめ申さう。先第一が長壽にて、八十九十百歳と、化比丘若みどり、これぞめでたき失の妖、世に化ものゝ親方株、外にたぐひも夏芝居、狸の近年ひろがりて、上り者も、おつかぶせ、かぶせたがれど、眞似られぬ、この音羽屋の御居り、工夫は智恵の海の主、ありし昔いぬれ頭、てゝ手くだと皆しりながら、つい化されし蝦蟇の術、自由自在な那須野の狐、功勞へても對面、まだ大しい牡丹燈、色氣をふくむ文月に、一筆もうじやあげとうか、ゝゝゝゝゝ、めでたくかしくなぐさに、祝ふてこはた小平次の、幽靈うぶめ骸骨の、どくろ首よりろくろ首、はてかにぬけ出た大當、今度の評ばん頭取。耳を翅に攻方から、聞つたへたる諸見物、芝のはてより神田の臺、下谷淺草深川本所、三ツ目入道、一ツ目小僧、竹子笠に丸盆の、おかべおさかべ、赤手拭、染手ぬぐひのひゐき連、猫も杓子もおとりだし、味噌ては、いかがまもとの、摺小木迄の羽根をへて、天狗にまけぬ慢の鼻、花の御江戸の町やしきも、おしなめ女、雪女五位鷺娘鬼娘、百鬼夜行の夜のうちから、片輪車のどろ／＼と、おし合へし合ふ鼠戸、物と化る高土間に、化鳥の爪もたゝいて、羽織と河道も一向に、ひらぬさどなる大入と、茶屋舟宿や桜結床、剪燈新話の化物はなし、御伽這子も、よく御存のお化の開山、寛永以來百千の役者の中にさへ、未曾有の、仕打工夫をいス／＼、まだ／＼に、亦扇のおいさま、淸風先小羅、薬と、除話に見えたる扇の化もの、それよりも名は橘町、かの橘中に隱居せし仙人仙間の幻術にも、はるかにまさる名人やと、舌を卷も赤本の、化物話しのほめ言葉、尻も見せず聲ばかりひろどろ／＼とホゝ、敬白

夏芝居歌さへ出せばわ、といふよ　狂歌　眞顏戲述
松ろくろ首すごい名人

右は、怪談名作集の解題中凸版「古今怪物評判」中の一節ですが、御覽讀の御參考までに●

第二回「大中黒本種」判讀當選發表

第二回も、第一回同様多數の應募者がありました。「ああ黄表紙の版の悪い、見にくいのに」と、讀者諸賢の御熱心にひたすら恐れ入りました。多數の應募原稿を厳選した結果、左の通り當選者を決定しました。尚御參考のために正解を添へておきました。

一　等（講談山本外史全六冊揃目／本名著全集製手拭四本）
小樽市緑町三ノ一　栗山信次郎
徳島市富田裏中ノ丁四丁目　谷　愼一
市外大井町三六〇　赤松　毅彦

二　等（新作仇討全集全二冊揃目／本名著全集製手拭四本）
岡山　齋木錠吉郎
愛知　加藤　駒雄
京都　黒見　一男

三　等（桂月隨筆近年の我盟一冊及／日本名著全集製手拭四本）
大阪　谷　梅丘
千葉　宮川　玄明
府下　木村喜太郎
福島　五十嵐愼一
京都　小森梅太郎
秋田　岩谷　喜市
京都　澤田勇次郎
京都　丹後　江山
宇和島　兵頭　通久

弓引方矢口渡　大中黒本種

南仙笑楚満人作
勝川春英畫

南朝後醍醐帝の功臣新田左中将義貞朝臣、足利治部太輔尊氏朝臣と確執によつて、越前の國にして度々戦ひ給ひけるが、藤島の城の合戦に流矢のために、義貞をおとし給ひける。氏江中務市國といふ者、はるかに見て駈けつけ、御首並に太刀迄まで取つてたちかへる。

氏江中務市國、大将尊氏の弟直義の前に来りて、首實検にそなへけるところ、これぞ敵の總大将新田の義貞の首に相違なしと聞えければ、直義大に喜び、氏江中務に當座の褒美數々下され、やがて大將軍の首なれば朱塗の唐櫃へ入れて京師へのぼせられける。尊氏義貞の首を京中わたして、獄門にかけたりける。

宮方にても義貞討たれ給ひければ、御舎弟脇屋義助敗軍をあつめ直義と戦ひ給ひしが、味方すこしも勝せず、度々の合戦に打勝ち、勇みけるところに、義助こゝちならず、いくほどなく病死せられければ、大将なくして各々力をおとし、そのうへ今まで無二の新田方と見えし人々も皆々敵になりしかば、義貞の股肱の臣共、随分力をつくし働み戦ひけれども、味方なければ詮なくちり〴〵になつてうせにける。

その中にも篠塚伊賀守貞綱ただ一人いかゞ思ひけん、八尺ばかりの鐵の棒を杖につき、寄手細川の陣に向つて名のりけるは、武藏の國の住人畠山重忠六代の孫、篠塚伊賀守とて新田殿の四天王と呼ばれし一人當千の者ぞ、討取つて一功名せよと呼りける。されども豫て聞き怖ぢしてゐたる篠塚なり、この勢におそれて、一人も近づく者なかりける。篠塚大きに怒り、奴ばらは耳つぶれにてあらん。その儀ならば目に物見せんといふまゝに、かの棒を振廻し、さん〴〵に打つて廻りければ、細川が勢共、右往左往に逃げ散り、遠矢を射たるばかりなり。されども篠塚は鎧よければ矢も立たず、向ふ敵なければしづ〳〵と落行きける。篠塚は落ちるぞ。あれ追蒐けて討取れとて追蒐くる。篠塚振返れば引返し、落つれば追蒐けせしほどに、三里ばかりおくりける。篠塚は今張の浦へ來り、商人の船に飛乗り、われを東國へおくれといふ。船頭水夫の者共、狼藉なりと咎めければ、汝等はそれがしを知らざるか、新田義貞朝臣の四天王の随一篠塚伊賀守なるぞといふまゝに、廿四人にて繰上ぐる大碇を輕々と引上げ、四十五尋ありける帆柱を易々と押立て、順風に帆を引張り、船を枕にして臥したりければ、船頭共大きに恐れ、これはなか〳〵凡夫のわざにあらじ、逆うては悪しかりなんと、漕ぎつゞきて、いろ〳〵もてなし、東國までぞおくりける。

こゝにまた耳新左衛門は、義貞義助の事を、義貞の二男徳壽丸相模の國にゐ給ひける故知らせ申し、兵を催し足利を攻めんと、東國へ下りけるが、道にて栗生左衛門に逢ひ、大きに喜び連れだつて下りける。

新田徳壽丸は、父義貞の討たれ給ひし事を聞き、何とぞ國の勢を催して、父の讐を報はんと、軍兵催し給ふところへ、耳新左衛門・栗生左衛門たづね來り、義貞の討たれ給ひし事を語り、互に涙をながし、近日越前へ忍び〳〵にのぼるべしと評議ありける。新田徳壽丸しのび〳〵に越前へ越え給ふと聞えければ、篠塚伊賀守をはじめ、われもわれもと、此處彼處より馳せあつまり、二千餘騎とぞ聞えける。されども大勢にては、敵に聞えて悪しかりなんとて、手分の日限をさだめ、山ぶし商人などに姿をやつし越えられける。扨も栗生・篠塚・畑・耳は徳壽丸の御供して、くろ丸の城へ來り様子をうかがふ。

約束の日限になりければ、新田徳壽丸くろ丸の城に押寄せける。城中足利直義大におどろき、氏江中務を呼んでいかゞせんと評議。氏江申けるは、この城要害よき城なれども、折ふし小勢なれば、出でて戦ひ候はゞなか〳〵かなひ申まじ。随分要害を守りて京師へ救の勢を請受け、後詰の勢を内外より馳せあはせ、敵を兩方より攻め候はゞ、徳壽丸を討取り候事、なんの事もあるべからずと、手にとるやうに申しける。さらばとて、京都の尊氏の方へ使をたて、援兵の勢を引いて、關抜近江木を強くして、待ちうけたり。徳壽丸、押寄せ給ひけれども、すこしも出あはず、そのうち城の要害堅固なれば、攻め入るべきやうはなかりけり。

新田徳壽丸見たまひて、栗生はなきか、篠塚はなきか、あの城門押破れとありければ、畏つて候と、栗生篠塚走りよつて見てあれば、城の門さは知れねども二丈あまりに見えければ、いかゞせんとあたりを見るに、松の大木あまり一本ありけり。これ屈竟の物なりとて、根へ五六尺掘り埋みたるを一ゆりゆつて引抜き、濠のうへ城の門のわきへ倒しかけたりければ、待ちまうけて畑・耳・二人栗生・篠塚に向つて、いしくも渡し給ふものかな、御道連は梯子行にたり給へと戯れつゝ、する〳〵と渡つて、門押破らんとしたりしかば、内より槍・薙刀を出し、さん〴〵につくを、耳新左衛門十六本まで奪ひ取り、畑六郎左衛門これを見て、もどかしき耳が振舞かな、そこ退き給へといふほどこそあれ、右の足にて門の扉をしたゝかに蹴たりしかば、閂折れ一度に左右へひらきたり。栗生・篠塚はじめ、われもわれもと込入りける。

新田の四天王、天下の門を破りしかば、足利直義かなはずして、さん〴〵にたつて逃げて行く。氏江中務市國もからがら落ち行きけるを、四天王の人々、はるかに見つけ、あれに來る者こそ氏江よ市國よといひければ、徳壽丸をはじめとして、ほかの者共目にかけず、まつしぐらに追蒐け、雑なく氏江をとらへ、栗生・篠塚・畑・耳、引張り殺しける。心よくこそ見えにけり。足利直義もやう〳〵逃れ出でて、京師をさして逃げうせける。徳壽丸氏江を討取り大に喜び、首うつて父義貞に手向け給ひ、いそぎ吉野の主上に奏聞せんと、四天王御供にて南都へ急ぎ給ひける。うれしかりける次第なり。

新田徳壽丸その時吉野の皇居へ参りしかば、主上義貞のわすれがたみ、聞いて涙をながさずといふ者なし。主上徳壽丸を叡感あつて、御前にて元服して左兵衛佐になし下され、義興とぞ名のりける。されば此中のころ鎌倉にて宗家をおこし、數度の戦ひに武功をあらはし、その名一天下にかくれなく、のちに新田大明神といはゝれ、武州府中郡矢口村に鎮座ましましける。

（戯作　南仙笑楚満人）

出たぞ〳〵　怪談名作集!!（編輯漫信）

むかしから怪談は暑い頃と相場が極つてゐると思ひの外、紅葉狩の時節にヒユードロ〳〵とおばけの出るとは、せうわの話。時節はづれの怪談だけあつた。出たか、なる程暑い夏だけでは夜も短かつたせいか、秋の夜ながでもないと出きれないと思つたか、ヒユードロ〳〵！　なる程…千頁以上もあつては、アンピヤンナイトみたやうに、千一夜ぐらゐにかゝりさうだ。有名な怪談はひとめぐり[illegible]これでもまだ〳〵くないとて、なんとお菊さん[illegible]

それお菊も命、紙とインクを喰つて腕を赤くしたおばけが、アラくやしや、ヒユードロ〳〵と出ますぞ。まあ〳〵何ひ、近う寄つて聞かつしやれ。怪談でこれ以上の[illegible]れば、またと此の世では逢ひませぬぞ。一千頁以上作り出申して居ります。

この本お讀んだら、もう十二分でございますぞ。それ以上苦情を申すと、なりますぞ〳〵おばけに。これで[illegible]

[illegible]お楽しみにお待ちなされ。

ヒユードロ〳〵―

編輯部より

▼今回配本の「怪談名作集」の装釘をしていたゞいた山口蓬春先生は、本秋帝展において、「特選」に推挙せられました。會員諸兄と共に、先生へお喜びを申上げます。

▼前々號で發表しました新雑誌は、別項所掲のとほり、意外に諸方面の御賛同御援助を得まして、關係者一同大に元氣づきました。そして皆さまの御期待御要望にそむかないやうにと、目下大車輪で活動してをります。まだ御申込の無いお方はこの際至急御申越下さい。力とも勵ともなりますやうに。

日本名著全集中の　俚諺と俚謡(3)

會員　荻上良一

滑稽本之部

浮世風呂（永前）

地獄の沙汰も金次第	二九五中一一
百貫のかたに笠一蓋	二九五中一三
兄弟は他人のはじまり	二九ゝ中一六
馬の耳に風	二九五中一八
我は身の釣合せだ	二九五中二〇
子を持る數はあるが身を持る數はない	二九　下　三
負つた子より抱いた亭主	二九五下　六
貧い寺は門から	二九六上　一
思ふ中の小いさかひ	三二一上　九
料理の明和口	三四七序　三
旅は道づれ世は情	三七五上一九
貸るも貸うも他生の緣	三七五上二〇
親船の帆恨み	三七六上二〇

早變胸機關

男の心と秋の空	三九四序一一

客者評判記

満つればかくる	四二六序　八
人食む馬にも相口	四三五上　一
河豚は食ひたし命は惜し	四四一下一七
能ある鷹は爪をかくす	五〇七跋一〇

浮世床

尺蠖の屈めるは伸びんがため	五二〇上二〇
鄉に入つては鄉に從ふ	五二五下　八
果報は寝て待つ	五二八上一三
虫に[illegible]	五三四下一六
習ふより慣れろ	五八七下　四

人間萬事虚誕計

喉から出た[illegible]	六〇一序　一
紺屋の明後日	六〇一序一二
驕る平家久しからず	六一一　一五
[illegible]めてねとをつくる	六一八　七

假名手本胸臧鈔

獅子身中の虫	六四三序　四
嘘から出た誠	六四・序　四

（以下次號）

本致しま
受けまし
これなら
れらのう
いが殆ど
たら、忽
へました
かつて
のだけに
て裁ける
らかゝら

（非賣品）
毎月一回乃至二回發行
編輯發行兼印刷人　石川寅吉
東京日本橋區馬喰町二丁目一番地
發行所　株式會社　興文社
電話浪花　一一八四〇　七一八四七
振替東京一八四四番

すでに第十卷が御落手になつた方々には十分編輯部の心配と、山口先生に如何に御迷惑をお懸けしたかをお察し下さる事と思ひますが、責任を明かにするために申し上げることにしました。

この書目の變つた事は、そも〳〵日本名著全集の計畫をする頃、如何にして、よりよき全集を出版すべきかといふ熱に燃され、東奔西走して席の溫まるも知らず、だん〳〵具體化されてゆく喜びと希望に滿ちきつてゐた編輯子には數の觀念は大した問題ではなかつたのであります。事實は

をかゝげて狗肉を賣る式法から申せば、書目數だやして六七百冊にもすれ書目の數だけで名作にある小品を集める事は決し心を要さないので、それして出版道徳上許すべきではありません。

吾々はどこまでも、よをつくることを旨として先生にいろ〳〵のお願ひ（先生には御迷惑だつた思ひますが）、書目の數よ內容の質を並を主として來得るかぎりの力をつくと思つてをります。

書目の減じた事は本書覽になれば御諒解下さる思つてはゐますが、編輯任はどこまでも編輯子に事を明白にして山口先生會員の方々の御許容を願第であります。第十卷の先生の解題にもありますめられた十部の怪談は

床を湧出し、一身を安んじ給ふとかや。國遙に隔りて、願志の通ずべき時刻もなきに、信心の感應する事、打ちて響の應ふるがごとくなるを、ましてや程なき御山を朝夕に祈り奉りて其驗を賜はらぬは、或はわれ冠弁の子孫にして、農業は福を妨ぐるにや。豐年にも價の賤しきに苦しむは農家なりと、農を捨て商となるに、猶商利なく、或は世家の從者となれば、我より下に人なし。通信の脚力となれば、住所さへ定らず。野を守る程の茅屋も、前や利をふさぎ、後や福の籠らさると、居を南北に避け西東にトす。或は貧家に剩物なけれども、鼎や古くして主を撰ぶか。太刀は家傳なれども、其劍文、身の五行に反するやと、人家に換へかりて改むれど、改めぬものは朝夕の煙細ければ、實に思ひ出したり。我名を小三とよぶこと、福を迎ふるの稱にあらずと、太万と改號し、又は其風土の人に合不合あるやと、大和を去つて近江にいたり、高嶋神崎のあたりに假り住し、わづかなる土產を買ひて、京師に負ひゆきて賣ることをしなれけれども、是ぞと增すことなし。世の人の泊瀬の利生をとなへることは、日月の著明なるが如くなれば、扨はいかで其應なからんと思ひかへりて、淡海より三日の行程を、道の便宜にはあらで、特地に月毎の參詣を思ひ立ちける。是も二歲を重ねし春の參詣に、已に拜みをはりて、鐘樓の石壇に踞けて息を納むる。此處に甘息する人、立去り入來りて幾ばくの人の中に、老いたる修驗道あり。彼が遠く詣で來るよしを憐み、其始終を聞いて甚だ悅びず。「足下の素姓いかにもせよ、時降りて民の貧は常なるに、いかばかりの分量を足る所として、今を貧しと思へる。志一途ならずして、神を降し佛を叩き、世人のなすに習ひて、迷ひに迷ひて身をうらみ人をうらやみ、容貌もかしげたるは、傷ましきのいたりなり。俗に聞かずや、業あれば命ありといふを。我が行道の若もの志學を過ぐれば、遠境に遣りて業を踏ましむるに、一冊の算命書と鷲眼五十銅をあたへ、時服のまゝにて逐ひやるに、道すがら人をたぶらかして、關の東、三野の北までも行きて、めぐり歸る時は彼所の土產負うて來る。是子を谷に擲る獅子の志をこがましけれど、我生業の常體にて、花の浮世に思へば身を憐むべし。世運道理に疾利く、物の怪も角を折り、打ち奉ることもまれなれば、我が驗を顯すもたま〳〵にて、思ひおとりせらろ中に、むかしより絕えぬは占卜のわざなり。人の迷ひを當にするやうなれど、世に人の迷ひなくば廢れたる生業のみ多く、拙きものはたれ

か擧げん。富の限りさへ覺束なく、積蓄はすれども、我身一つに盡すことあたはず。赤馬蹄刀をもて瓢酌の裏に切るのたとへ、切合せたるやうの事も約しく、過分ならざれば一人の奉養にも辨ならぬをいかんせん。家道廣きものは連累あり。世の閑樂は拙き所に出づ。安居は交り少きに依る。連累を物ともせず、安居を十分の事とも思はずして、苦心三年すれば放心一代すべし。されど方伯手を拱くの富は其域にあるべからず。」とかたる。太万云ふ、「富には定る業なし。財寶に定る主なし。何を業とせん。掌文を相て給はれ。」と問ふ。山伏云ふ、「我今足下の爲に思ひを致すこと親切なれば、恐らくは占卜を說ふ所正しからじ。卜者は知已をもらし、藝士は生土を離る。足下には妻ありや。」云ふ、「いまだし。」山伏云ふ、「いまだ妻無ければ、人家の運定らず。養ふそなへあらば早く納るべし。容をえらむか、帮を求むるか。」云ふ、「只是利あらば醜はいとはず。」山伏云ふ、「是儞の今日の見なり。一時の花か、子孫の榮か、各其願ひあり。今其悟りを窮めずんば、富を有つとも、禍水財火を滅し、小池の水面を見て、錢山の在る處を忘るべし。容は婦人の德なり。略えらぶべし。靡曼と娉婷と、蓰一掬に盈らざるは貴家の選なり。是も三代の外に和歌なし、唐詩の外に詩なしといふが如くにて、其に近きを求むるに歌も詩も無きにはあらず。櫻の唇柳の嬈それぞれあり。西施にして顰よく、褒姒のみよく笑ふにあらず。眼頰鼻口擧作柔媚に、一處の心に可なる所を取りて、顧眄の好看とせんのみ。何ぞ必ず悉く備はることをまたん。農家は足大に骨太くして勞に堪ふべし。商家は記臆ありて理にさときを專とす。扨生業の趣はいかなるや。」云ふ、「人の多く爲ざることこそ利多からん。黄金花さく奥に買ひて京師に賣り、白鑞華降る馬嶋に求めて中土に賣る類なり。唐土は黄金乏しく、一釐千錢に當り、赤銅是に次ぐと聞かば、此國の銅を任那新羅に交易せば快利あらん。」山伏云ふ、「西土もとより赤銅乏しからず。彼地は水路便宜少く、山途運送難し。國大に南北遠く、北國の產南國の用に及ばず。却我國の船路便宜なるに買ひて南國の用に充つ。是しかし私の賣買にあらず。湖水を飛跨の見識をやめてよ。足下已に近江に買うて泉和に賣るの活業を知りぬれば、むかしがたりの茅一根より利倍を與へられ、柑子一盆を寶貨に代へたる程の天福は來るまじ。我たゞ其數を卜せん。我が卜は其法世に異なり、今日兩人の談るは全く靈場の奇偶なり。土地に緣

つて本數を取るべし。觀音の應現元は三十二なり。卜に多數は除くべし。八は本朝の極數なり。三は時と日と刻なり。八拂ひに三たびして、初八除く時は七ッを剩す。足下心に七色の貨物あるべし。」太万心に數へて云ふ、「實に七品あり。」「しからば其中にて歳の退乗に就くべし。牛に跨りて奔り過ぐさず其處にいたらんか。眷屬を求むるは此兩月、幸あらんのみ。」太万其詞の項細なるに疑ふといへども、是卽ち觀音の告げきかせ給ふぞと、敬して是を謝し別をなせり。それより其初瀬の傍邊森といふ所にて、知音の人說合して妻女の緣あり。由來をきはめずいへども、人相かひぐ〳〵しく、卜者の言ばもあれば、是を娶りて淡海に歸り、高嶋にて一人の從者をえらみ使ふ。雲藏とよぶ。力強くして勞を辭せず。嘗て大山寺の二王に祈りて、力を得たりとぞ。太万店を開いて七種の物を居く。

田作　乾蔬　柑子　串鮑　青魚子　麻布　繭絮。開店の夜太万が夢に、妻女の後に十五人の童子從きて家に來る。其中に八人辭して去る。七人は留ると見たり。覺めて妻にかたれば、云ふ、「我も七人の子傍に侍ると見たり。」と。想ふに、いづれ善き夢ならんと相かたる。此妻生質愛敬づきて小心に取りまかなひける程に、家業の益多く、其初に奥の調布貢の餘とて買ひたるに、能く賣れて利倍あり。其冬南より柑子多く買ひとりたるに、江東の品にまさりて價よく賣りぬ。其比鶴が岡に土を築かるゝとて、鎌倉殿御自身に土をはこび給ひければ、東八ケ國の諸家、人夫を率ゐて自ら築かれける。日限急に促し、佐々木殿より參る人夫、土をはこぶ料にかたまを買ひはやらし、柑子の空きたるかたま、多く積み置きたるを買ひ聚むる人、一ッ〳〵柑子の入りたる價に買ひて行きぬ。是のみならず、僅に潤色して思ひ立ち、妻を具して信州に還れば、元の白介と名のり、父母の塚をも拂ひ、舊知の人も尋ね、此所にて土地利用の七種を貨物とし干魚繭絮暴布など他國に送りやりて利益多く、次第に貨殖す。しかれども庫藏の貨は世に多き時は價を減じ、久しく留むれば財を塞ぐ。土地を得ばやと思ふ。比しも近里の人雜談して、「此家は女房に福神の降りて、夜は身より光り出でて燈火を設けず。米櫃取り用ゐるに盡きず。身は緒を織り影は布をおる。量尺は丈を指し、裁刀は矩を用ひず。針躍り糸走る。臼を搗くかゝひかと聽けば、さいばらそのこまも聲よく、酒をたうべては袂をひるがへす。」と、有らぬことまで言ひ流す程に、其處の領家曾我の館、先祖蝦夷を撃ちて

功あり。蝦夷部と號して此郡を賜ふ。當館鹿主色と財とに耽りたる折から、此女房の愛あり福ありて、多藝なるに放戯つきて、古代の質朴野狀なるや、賭にして是を得んとす。吉祥天を戀ふとは是をや。郡司に含めて勝負のわざを企てしめ、初は財寶を鉒物とし、猶暗に計ごとを以て勝たんとす。近國に牒して、三番の角力を以て賭にせんと謂はしめ、「先づ本土なれば白介と對せん。白介勝ちなば領地の半分、稻貳萬束の地を永代與ふべし。領家勝ちなば米二萬斛を白介出すべし。」と式を定む。白介是を聞いて妻にかたり、領家の濫りなるを誹り憂ふ。妻云ふ、「是は片部にて、善政も普く行きいたらず。さやうの胡亂も行はるゝかな。勝負なくとも、財寶まで奪はれなんも知るべからず。速に此處を去らばや。」と、雜具奴婢を棄てゝ、隣れる知音の水内の郡司へ立退きける。更級是を聞き水内に告げて、「白介は我が郡に、先代より左迁の氏族なり。他郡に迁すべからず。急ぎ復土致すべし。」と命を請ふ。夫歸計りて「所詮勝負に及ぶならば、此郡にて對となり、事過ぎて歸り參りたくこそ。」と、水内に申乞

ふ。「此上は勝負すべし。執證は我が郡なり。」と力をそへ、兩郡司誓約の文書を立て、隣邑安曇の郡司を請ひて證人となし、兩方おの／＼角力を募り聚めけるに、先づ水内による相撲は、韮ざきの荒藤太、くろ坂の飛早、岩ふねの鐵八など先づ集る。更科は兼ねての催しゆゑ、領家より近國にえらみて、本手脇手ともしからず。あら川の藤凝浮、ぬつたりの虎太夫、こいしやうの敵無を先とし、屈强の骨柄のみなるうへ、强きを度して下手に立ち、表裡を以て勝たんとするぞ卑怯なれ。時に水内の方へ大の男二人、身の長齊しく對したるが出來り、「都にて業忠入道の門弟なり。善光寺を拜みて、此勝負を聞いて參りたり。」と云ふ。其名號を問へども申さず。「名はえらみてよび給へ。」といふ。下づかひさせ試るに、力量本手に事足りて、天晴角力やとて、矜羯羅制多伽とぞ名づけける。水内方是に競ひて陣屋鳴りひゞく。定日になれば、御簾代引きたる獻壇の東西に屯す。棧鋪の中央に諏訪の御神を勸請し、館の代人、兩郡司、安曇郡、何れも幕を掲げて臨み見る。凡そ一國の貴賤、女こそあれ來り見

ざるはなし。部署の行司するもの兩人、壇に上り八方を拜し、條目を讀みをはり、正面に立ちて手を拱き同音に申す。「今年の相撲は大家賭物の爲に發起し、即ち御國繁昌の瑞兆なり。抑 此業は神代より習來し、勝たんとして惡意なく、人情本然の戲れなり。朝覽の始は野見蹶速の後に節會となる。唐土に其會を錦標社と申す。それ相撲とは互に相推して力術をたくらべ、彼がまゝには我はならじ、彼が勝手にすまはせじとするのことばなり。世に人に不從をすまふとは、相撲の音より起るとも承る。勝つも負くるも禮を失はず。土地安靜の御祈禱專らなり。」と、謹み叙べて壇をくだり、やがて方に對はしむ。西の屯より藤こぶ、東より鐵八、壇にのぼる。行司名乘りを揚げんとする時、東の賭方の家僕雲藏、壇に上り鐵八を引きさげて、我合はんといふ。痩せたる素の男なれば、衆人、大膽者と惡むもあり、壇をおりよと叱るもあれど、雲藏引く色見えず。是こそ究めて身を損ずべしと、兩郡司より白介に、「退せ候へ。」と、制すれども下らず。行司見て、「この人の耳を見るに相撲せし人なり。此一對は彼にまかせよ。」と、翳を隔てゝ立合せ、すはや對ひたり。藤こぶは內意ありて、わざと力をひかへて對をこころみる。雲藏も所存あれば力の程を見せず。たがひにかけつもどきつ、からむかほどくか、藤こぶ十分入りたりと思へば、閃されて土に匍ばふ。勢餘りて雲藏も同じく倒れて、滿場の笑ひを湧かしむ。雲藏、今一對して勝劣を定めんと乞ふ。是は一對三番の定めなればとてゆるさず。やがて西より敵無、壇に上れば、東にこんがらのぼる。兩方魁偉小山の如く、見ぬ目にも獅子か虎か、あはれ脇手やと驚き呆める。已に對ふかと見れば、敵無、急に突き來る勢頭、奔雷の如く見えけるを、壇の端にいたりて、こんがら、腰を反つて彼が肩を一排す。敵無、右脚蹈りて左脚發含躍りて奩を出でて倒る。其力あること、存孝虎を打つの雄威もかくやと見ゆ。こんがらさへかく强ければ、せいたかさこそと思ひやらる。已に本手の相撲にいたりて、双方壇に上る。西の虎太夫、東のせいたか、いづれも當時の撰をきはめたれば、覇王各山に憑るの勇あり。時にまた雲藏壇に上り、虎大夫に對せんとすゝむ。行司焦燥ちて、「かゝる命しらずやある。是尋常の敵手と思ふか。撮まれて碎けぬべし。速に壇を下り命をつぎ候へ。」と叱る。云ふ、「是大事の勝負なれば人には合せじ。」と立去らず。賭主よりも乞望みて、「勝つとも負くとも心足るべし。」といふ。「さあらば合

すべし。」と部署承る時、更科には相撲の器量を上下に組違へたるものなれば、如何にや思ひけん、藤こぶ、壇に躍りあがり、雲藏と勝負を定めんとす。領家よりも望みなれば、是を三番の勝劣と約し立合ひて、行司已に纓を捧きて力聲を叫び、前後左右を廻りて目を放さず。藤こぶ、先に雲藏が手格を知りて、只取りとめて倒さんとするに、雲藏小材に身は只電の如く、右に去り左にうつる。藤こぶ心えて身を固めて動かず。遂に身の隙を見て、双手挿して得たりとからみつく。大力にすくめられて自在ならぬに、雲藏這個が兩臂を緊しく拘住めて、眠るが如く鎭りて敵を老らす。是柔術の手を窺み用ひたれば、藤こぶも最手に入りながら力を出すことあたはず。餓ゑたる獸の喰ひあひたると、しばし見る內、雲藏精氣を張りて力ごゑを出し、云と一聲すれば、其長忽ち伸びること一尺ばかり、一身の肉憤起ちて乞答をなし、金剛の暴れたるも斯くやと、紐む手を拂ひ去り、一撞に撥ねられ、藤こぶ眩きて踏直さんとする所を、頂平叩かれてしりゐに踒り縮む。是を見て百千萬人、喝采大に動き湧きて相撲は散じけり。領家がた憤り閙むといへども、三郡の誓約に繋りたれば變易すること叶はず。況してや領地を鉒相論に及べば收公の例なり。遂に領家の半分を水內より撿地して請取りぬ。更科のたくみ、思ひの外くすみたることにおよべば、二度の興行思ひもよらず。彼こんがらせいたかも領家の間志にて、言ひふくめて竟に負けさすべき手段なりしを、是偏に雲藏が出生を祈りたる金剛の加護によりて勝を得たりとぞ。是より土地の人、白介長者とよび、今や實に是天然素封の介なるべし。女房六人の男子を擧ぐれども、雲藏を相續となし、長子をそれが子に養はせ、更科なる本家を持せ、五子を五所に分家して、是を五方の長者と人呼ぶ。かくあれば萬事足るべきに、白介は此長者の虛名に拘らず、「諺に未ㇾ富して早く富むものは富を全くせず。此山國に住まば、必ず氣弛べて大志を遂ぐべからず。土地を得れば、安定を足るとして物の幾を失ふべし。」と、賭に勝ちたる地を館に返し入れ、領家の配介によりて海邊の地をえらみ、越の瀨浪に移り住み、更級と貨物を往來し、其上、「農家商人山林は衣食の原なり。是と互に貨を通ぜざれば、萬物饒ならず。」と、五子を役して諸國に通船して交易するに、往くところとして利あらざることなし。財蠶紙に載すべきは大利に非ず。聚寶盤に登すべきは大富にあらず。有と思へるは實の有にあらず。白介が包める

佐の金錢銀錢通國に行きわたり、家業月と日に盛んなること停る所をしらずと記し傳へたり。

天明六年丙午正月吉日

浪華書林

心斎橋筋順慶町上ル入　柏原屋清右衛門

同　博労町北入　同　重兵衛

博労町井池東入　同　嘉助

心斎橋筋傳馬町北入　同　佐兵衛

同　順慶町南入　同　庄兵衛

同　南久宝寺町南入　河内屋八兵衛

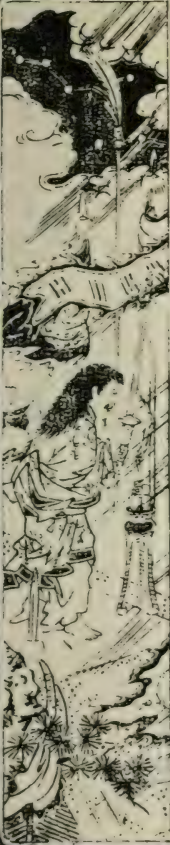
古今奇談莠句冊第五巻　終

席上奇觀
垣根草

草官散人纂述
十八公子訂校
古今奇談
墻根草
浪華崇高堂刻

席上奇觀垣根草巻首

近頃、故篋の中に垣根草と題せるものがたりを獲てこれを披覽するに、其文鄙俚にして諸家の草紙ものがたりの體にあらず。假名づかひすら、いゐ、ゑえのわかちなく、觀るにたらずとい

席上奇觀垣根草巻首

近頃故篋乃中に垣根草と題せる
ものがたりを獲てこれを披覧するに
其文鄙俚にして諸家の草紙もの
がたりの體にあらず假名づかひすら
いゐゑえのわかちなく觀るにたらずと
いへども其載する所は皆古昔の
遺事幽冥人物靈異の談誠に

へども、其裁するところは皆古昔の遺事幽冥人物靈異の談、誠に席上の奇觀といふべし。作者の姓名をしらず。恐らくは奇をこのむ閑人、これをもて茶話に代ゆるものならじ。これをよむ人、遲日長夜の徒

席上乃奇觀といへる冊子作者乃
姓名をもしらず恐らくは奇をこのむ
閑人のわざにて茶話にかへたるもの
ならしこれをよむ人遅日長夜乃
徒然をなぐさむ料とせば作者に於
本意なるべし洛西隠士某誌ス

此草紙雖非投世教補史傳之書
讀之供一時之奇觀則可謂作

然を消する友とせば、作者の本意なるべし。洛西隱士某誌す。此草紙世教を扶け史傳を補ふの書に非ずと雖も、之を讀みて一時の奇觀に供するときは則ち作者の本意と謂ふべき也。仍て剞劂に授くと爾と云ふ。

明和七年寅正月菅翁某誌

因にしるす。此書

者之本意也仍授剞劂云爾

明和七年寅正月菅翁某誌

因にしるす此書原本一帙十巻

傳りしを今その前篇を梓す

ものならむ後篇五巻を古今

武将外傳と題す凡古今

武将の事蹟紀傳より拔

原本一帙十卷侍りしを、今その前篇を梓にちりばむ。後篇五卷は古今武將外傳と題して、凡そ古今武將の事蹟紀傳にもれたるをあつめたるにて、まことに逸史といふべき書なり。梓行は他日をまつのみ。

たるをあつめたるにてまことに
逸史といふべき書なり梓行は
他日をまつのみ

席上奇観垣根草惣目録

一の巻

二の巻

三の巻

四の巻

五の巻

以上十三條

席上奇觀垣根草一之巻

深草の翁相字の術蛇妖を知る事

元弘の頃、山城深草の里に一人の隱士あり。常に都に出でて市町をめぐりて、相字の術をうりて一錢を乞ひ、その日の糧たれば、又術をほどこさず。その術、文字の點畫をわかちて吉凶禍福をいふに、少しも差ふことなし。世の人姓名をしらず、只深草の翁とのみよびなせり。元弘建武の亂に畿内最も爭亂の境となり、四民その土にやすんずる事なし。翁もいづちへか亂を避けたりけん、ふつに見えず。曆應の頃にいたり、都もすこし靜ならんとす。翁また都に出づる事はじめのごとし。人やゝ其術の妙なるをしりて相をもとむる者多し。上皇其名を聞召して、朝の字を以て北面をして翁に相せしめ給ふ。翁僅に見て驚きて云く、「是官人の書し給ふにあらず。朝の字、わかつときは十月十日の字なり。しかも日月を左右にしたる字なれば、此月此日に降誕し給ふところの天子ならで當る人なし。されども、日小にして月大なるをもて見れば、恐らくは御位を下り居させ給ふなるべし。」といふに、北面馳せかへりて此よしを奏す。翌日院の御所へめされ、再び字を相せしめ給ひ、その外伺候の人々女房達まで各、一字をかきて相せしむるに、皆その字によりて論辯する所毫髮も差ふことなし。上皇甚だ賞し給ひ、時服一領鳥目壹貫文を賜ふ。翁唯一字毎に一錢を收めて、其餘をかへりみず。上皇ますます其寡欲なるを歎じ給ふ。是より朝野に其名たかく、都下これがために喧し。一日細川家の館に諸大名集りて、雜談のうへにて翁が術の精妙なるをいふ人あり。因つてこれを招きて相をもとむ。先づ館の主頼之、春の字を以て示す。翁云く、「春の字析つときは三人の日なり。君、後來三人の隨一となり、威權おのおの日の昇るがごとくならん。されども君、はじめて此字を書し給へば、三家の中にてわきて威權君が手にあらん。但恐らくは、讒者のために覆はれ給ふべし。日月の蝕はるゝこと速なりといへども、これこそ愼みたまふところなり。」といふ。鹽冶判官高定も座にありて、大の字を以て相をもとむ。翁云く、「大の字、一點を傍に加へて犬となる。今犬をみず。君遠からずして守をうしなひ給ふべし。一點を上に加ふるときは夭となる。女を

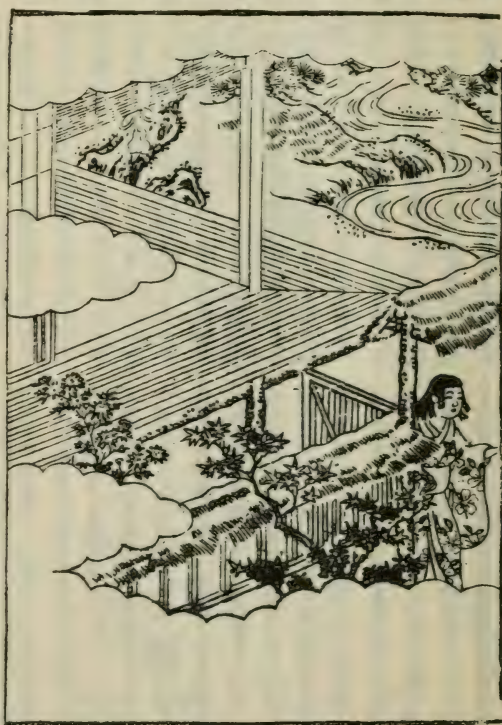
添へて妖となる。君の禍、婦人よりおこりて夭折し給ふべし。但し大の下一點を添へて太となる。今太を見ず。甚だしくしたまはざる時は、禍を免れ給ふべし。」といふに、鹽冶、色よろこびず。果して賴之は斯波畠山と三管領の職を掌り、中にも細川最もあらはれ、四箇國の惣管にして威權ならぶものなかりしが、康曆の頃讒によりて譴責せらる。後に又舊職に復して、寵遇むかしに過ぎたり。鹽冶は其妻より事出來て、遂に執事師直がために斃されたり。翁が詞少しもたがふことなし。後に執事高師直、直義と不平にして確執に及ぶ頃、翁を招きて桑の字を以て吉凶をとふ。翁一見して眉を顰めて云く、「君の禍、四十日を出づべからず。析つて四の十の字となるを以てなり。其餘はいふにたらず。」と、恐るゝ色なく答ふるに、一座の人、執事の怒をおそれて叱してさらしむ。門前に出でて、「枯骨死灰にひとしき人、何のおそるゝことあらん。」と獨言して去りぬ。果して三十八日を經て族滅の禍におよべり。人々その言の神のごとくなるに服す。その頃松浦左衛門友近といふもの在京したりしが、國なる肥前は大半南朝に與力し奉り、中にも松浦が一族のこらず無二の宮方と聞えたるに、友近在京のうちとは

いへども、將軍家の疑か丶りて、數年の思勤もいたづらに暮らす折しも、その妻妊娠して已に十二月の餘に及べども分娩の氣色なし。友近、翁を招きて、妻をして也の字をか丶しめて相を求む。翁云く、「也の字もとより助語なれば、是必ず君の内助の書し給ふならん。也の字、上に三十あり下に一畫添へたるを以てみるに、盛年三十一なるべし。」友近云く。「翁の詞にたがふことなし。猶その詳なることをきかん。」翁云く、「也に水あれば池、馬あれば馳となる。今、池に水なく馳するに馬なし。君必ず進退に窮し給ふべし。況や、人を添へて他となり、土あれば地なり。今、人と土とをさる。君、親屬土地に離れ給ふなるべし。されども也の字、語の末にありて、そのはじまらんとするの兆なり。この後、榮達のことあるべし。」といふに、友近驚きて、「翁の言、一々差ふことなし。願はくは産期の遲速を示し給へ。」といふ。翁云く、「也の字、中に十あり、兩邊に二畫あり。下また一畫あれば、必ず三月にして出産あるべし。只、一の奇怪にわたるあり。故に餘事を論じて君の心をかたからしむ。忌みたまはずは是をいはん。也の字、虫を加へて虵となる。今賢室の孕み給ふ所、

正しく蛇妖なり。速に其妖を拂ひたまはずは安穩なるまじ。」といふに、友近大に驚き、是を除くの術をこふ。翁云く、「我聊か薄術あり。試みに用ゐ給へ。」とて、門前に出でてやがて座にかへり、懷中を探りて一封の藥を出し、「東流水にて三朝に服し給はゞ、其しるしあるべし。」とねんごろにをしへて去りぬ。これを用ゐるに案のごとく三日を過ぎて、腹中雷鳴痛楚して小蛇數十をくだす。數日の後、體平に氣力復して平日にかはらず。ほどなく將軍家の不審はれて、はじめて前功の賞にあづかる。友近謝儀をきこえむため尋ぬるに、そののちは影迹をだに見る人なく、遂にその終るところをしらず。世の人、その術を學ばんことをこふものあれば、「術のをしゆべきなし、中と不中とはわれしらず。たま／＼あたるも幸なり。」とて、かつて傳へざりしゆゑ、其術を傳へたる者なかりしとぞ。

伊藤帶刀中將重衡の姫と冥婚の事

弘長の頃、宇治の邊に伊藤何某といふものあり。先祖より平氏の侍なりしが、譜

永の後は世を宇治に逃れて、仕官の望もなく風月を友として暮しけり。それが末に伊藤帯刀則資といふあり。うまれ清げに心ざまいと優にやさしき男なり。或る時所用の事ありて都に出でて、暮に及びて琴弾山の麓を通るに、年のころ十五六歳ばかりなる女の童、そのかたちきよらかなるが只一人ゆくあり。帯刀やがて袖をひかへて、「かく暮に及びて、具したる人もなく、いづちへかおはすやらん。」といふに、「このあたりに宮仕し侍るものにこそ。」と答ふるけはひ、思ひくだすべき品にはあらじと、「我は宇治のあたりへまかるものなり。道の便あしからずは伴ひ参らせん。」といふに、童いなむ色なく、さま〴〵物語しもて行くうち、松杉の一村しげれるほとりに、あやしの編戸ひきつくろひたる許にて、「これこそ童が宮仕参らす方なり、道のつかれをもはらし給ひてんや。」といひすてゝ内に入る。帯刀も主はいかなる人やらんとみいれたるに、よしある人の隠家と覚えて、庭のけしきもおのづからなる風情にて、尾花くずゝ花露ちり、やり水に紅葉うづもれ、霜にうつろひたる菊の籬一重をへだてゝ、あれたる軒ながらに簾なかばたれて、灯かすかにきらめき、琴の音ほのかにもるゝにぞ、いとゞ其名ゆかしくたちやすらひ

たるに、先の女の童出でて云く、「あるじの御方にきこえ参らせたれば、何かは苦しかるべき、こなたへいらせ給へと侍る。とく／＼。」と云ふに、帯刀よろこびて内にいるに、六十ばかりと覺しき老女出でて、奥の殿にいさなふ。帯刀いなむことなく座につけば、折敷に槲葉しきて菓物やうのものうづたかく盛りいでて饗ずるさま、いよ／＼なみならぬ人のかくれ家、さては高家の人の妾をかくはしつらひ置き給ふやらん。さるにても此とし月往きかへりするに、かゝるすまひありとだにしらぬことのいぶかしさよと思ひめぐらすに、老女居よりて、「君は正しく伊藤何某の殿にてはおはさずや。」といふに、帯刀おどろきてみゆれば、老女うち笑ひ、「老いらくの心せかれてあらましをもきこえ侍らねば、いぶかしみ給ふも理なり。君此あたりを折々往きかよひ給ふを、わが頼みたる姫君いつのほどにか垣間見給ひ、夜晝となく戀しく覺しわづらひ給ふことのやるかたなさに、折もあらば人傳ならできこえまゐらせんとおもふに、甲斐ありて女の童がはからずも伴ひ参らせしは、出雲の神のむすばせ給ひけんえにしなるらめ。かゝるわびしきすまゐをもうしとおぼさずは、姫君の心をもなぐさめ給はんや。」と懇にかたるに、「某はからずも、かく世をしめやかに暮したまふ御隱家を、おどろかし奉るつみをも問ひ給はず、あさからぬ御心ざし、などいなみ参らせん。さいはひ、いまださだまる妻とても侍らず。久米の岩橋かけてしたまはらば、渡らでやあるべき。」といふに、老女悦びて奥に入り、しばしありていさなひ参らする上﨟のてりかゞやくばかりのよそほひ、柳の黒髪春の風になびき、桃花のくちびる朝の露に濕ひて、よろこびの色、まなじりにはあまれど、すこしははぢらひ給ふけしき、春の夜のおぼろにかすむ月影の風情に、帯刀目くれこゝろ飛んでしらず、月の宮人、天の河原の織女ならずやとこゝちまどふに、老女云く、「かねてより戀しと覺し給ひし殿の、はからずも來り給ひて、花の下紐とくる春に逢ふうれしさ。そだて参らせしわらはが悦、老が身のくせとて涙こぼるゝまでよ。」とて、酒肴を出してかりに婚儀を催す。帯刀も覺えず數盃をかたぶけて後、うちくつろぎて「かゝる山里にかくおはする君は、いかなるかたの世を忍びましますにや、きかまほしさよ。」といふに、老女面愁を含みて、「とてもつゝみはつべき事にも侍らねば、明にきこえ参らせん。これこそ故三位中將重衡卿のわすれがたみの君にこそ。」といふに、帯刀はじめて黄泉の人なるこ

とをしるといへども、すこしもあやします。なほ其詳なる事をとへば、老女涙をおさへて云く、「君も世々恩顧のかたなれば、などかはわすれ給ふべき。さても過ぎぬる治承の秋の嵐に、故内府もろくもきえさせ給ひしこそ、くらき夜に灯うち消したるこゝ地して、やすき心もなきうちに、越路なる木曾の深山より兵おびたゞしく責めのぼるといふ程こそあれ、主上門院をはじめ奉り、一門の人々そこはかとなく迷ひ出で給ひ、我が君も北の方は都にとゞめ給ひて御供におくれじと、名残はつきぬ有明の、月の都に還幸の時こそめぐり逢ふべしと、ねをのみぞなく須磨の内裡も、さかしきつはものの襲ひ奉りて、又もやうつゝ心もなく、はる〴〵西海の波の上にさすらへ給ひ、つひには吾妻えびすの勝にのりて、主上をもおそれ奉らさるに、頼み覺したる西國のつはものも、山の井の淺きは人の心にて、かはりゆく世のさまを御覽じて、主上は龍のみやに御座をうつされ、御一門殘りなく秋の木の葉のちり〴〵にならせ給ひし中にも、ひとしほ心うきは我が君にて、御心もたけくいさみ給ひ、御一門の果をも見給ひ、御幸の供奉のしんがりをと覺し給ひし甲斐もなく、心なきつはものの射まゐらせし矢に、召されたる御馬のおどろきしに、御供にさふらひし者もさる人心の折なれば、餘所の時雨に見なし參らせて、つひにをりかさなりて生捕り奉りしこそ、今更心きえて涙に胸もふたがれ侍り。ころしも姫君はいまだ五つにならせ給ふを、わらはいだき參らせ、北の方もろとも、こゝかしこに隱れすみて、いつしか兵しりぞき、しら浪しづまりて、めでたく都へかへらせ給ふやらんと、心ははるか和田の原、八十島かけて行きかよふ綱手もきれて、御一門のうせ給ひしあらまし、我が君のとらはれとなり給ひしこと、きくに夢とも現ともわきがたく、さるにても世のうさをしろしめす神のちかひもおはさば、今一度の見參もとおもふにかひなき御運の末、覺ししらぬ罪を被きてうきを見給ふ都渡し。北の方はそれがために程なくむなしくならせ給ふ。黄泉の御宮仕とおもへども、この君をかしづき參らする人も侍らねば、をしからぬ命を深山邊に、ならの葉ふきわたす草の庵、たれとへとてか呼子鳥、涙の雨にかきくれてあかしくらすうちにも、やう〳〵生長ち給ふにつけても、あはれ昔の世なりせば、いかなる公達をもむこがねにと、昔をしのぶそのうちに、きみとすく世の契たえもせで、せちに戀ひさせ給ふ甲斐ありて、かくまみえ給ふことになん侍り。」と物語るに、姫

もそゞろに涙にくれ給へば、帯刀も覺えず感傷にたへず。老女涙をとゞめて、「かかるめでたき折に、しづのをだまきくりかへすべき事ならぬを、よしなき長物語に姫君のさぞや心なしとや覺したまふらん。とし頃の闇路をてらす春の日に、おもひの氷うけとけ給へ。」と戯れて、老女は一間へ退きぬ。帯刀姫の手をとりて閨にいれば、そらだきのかをりえならず。いときよらかにかざりたる文臺、草紙、歌集なんどとりそろへたるに、詠草と覺しくて、

うちもねであふとみる夜の夢もがな
うつゝの床はひとりわぶとも

ならひしも物おもふねやのひとりねに
うきを忍ぶの軒の松風

帯刀、硯引きよせて、

ほのみつる心の色や入り初めし
戀の山路のしをりなるらん

ゆめかとも猶こそたどれ戀衣
かさねそめぬる夜半の現を

姫くりかへし吟じて、「みづからとても夢うつゝ、ふみまよひたる初尾ばな、染めぬる色のかはらで。」ときこゆるに、「さるにても君いつしか見そめ給ひしにや。」といふに、姫うち笑ひて、「君はまことに知り給ふまじ。過ぎし頃、乳母なるものに具せられて石山寺に詣でたりしに、君はとくよりかしこにおはせしが、たがひにそれとみれば見もし給ひて、岩手の山の岩つゝじ、下もゆるおもひは餘所にもらさねば、心うくもさそはれて見うしなひ參らせしより、露わするゝひまもなく、君は世をへだて給へども、わが身ひとつはもとの身にして、おもひのけふりたゆむことなく幾年月を重ねたりしを、あはれとも見給へ。」ときくに、帯刀も、「すく世より契りしことよ。」と、いとゞあはれにおぼえて、新手枕をかはすとすれば、八聲の鳥にうち驚かされぬるに、老女の聲して、「山本の神ならずとも暮はゝかりあり。かさねての見參はふす猪のとしの秋にこそ。」といふに、帯刀裝束して出づれば、重ねて老女云く、「門院大原の奥にすませ給ひて後は、世のうきよりはまさりしとて、主上をはじめ一門の人々を殘りなくむかへ給へば、我が君北の方もろとも、とくよりかしこへ參り居させ給ふ。姫君は其頃、門院いまだしろしめさざりしゆゑ、めすこともなく、いたづらにこの所にひとりすみわび給ふ。折には參らせ給へども、かの御所に姫君の局も侍らず。そのうへはか〳〵しき御供の侍も侍らねば、この年月むなしく過し侍り。ちか頃は此殿もあれまさりたれば、いよ〳〵大原の御所にうつらせ給はんことをおもへども、君に一度逢瀬のう

へにてこそと待ちわびたるけふの見参に侍れば、ねがはくは大原に参り給ひ、このよし啓し給ひ、むかへの車たまはるやうになん申し給へかし。この事くれ〴〵頼み参らすといふに、帯刀、「露たがへじ。」と諾す。姫君床の邊より一面の硯を出して、「これこそ、高麗の國より奉りたる遠山といふ名硯なるを、高倉のみかど、父上に賜はりしとぞ。父上常々古硯をめでさせ給ひしゆゑ、御最期の時まで松陰の硯を身に添へたまひしが、知識と頼みたまひたる吉水のひじり、法然上人に布施物にさゝげ給ひ、遠山は母君の手にのこり、わらは給はりて朝夕手なれ侍れども、ちぎりは石のかたきによせ、またも見えまゐらせんため、ちかごとに代へておくりまゐらす。」と宣ふに、帯刀も浪に千鳥の笄を末のかたみに殘して立出づるに、姫君はたゞうちふして泣き給ふ。老女さま〴〵すかしまゐらすうちに、心つよくも立出でたりしが、又こんために枝折して麓に出づるに、宇治の里には宵よりかへりのおそきをいぶかり、こゝかしこ尋ねもとむる家の子に行逢ひて、そのやうをたづぬれども、たゞ、「道にふみまよひて。」とはかり答へて、家にかへりても其面影のわすれやらず。ゆめかとおもへど、うつり香は肌にたしかに、むつごとは耳にのこりて、その人の今も身に添ふ心地して、一間なる所に引籠りて父母にだにまみえざりしが、重ねて琴彈山にわけ入りて、ありし所と覺しきを尋ぬるに、たゞ松柏生茂り、よもぎみだれ、すゝきむれたちたるほとりに、苔むしたる五輪かたぶきて、しるしの名もきえて見えわかず。よらん方なくかなしきに、今更わかれたるごとくうちふして涙にくれたりしが、さてしもあるべきことならねば、それより直に大原にまかりて、一門の人々の姓名をしるされし過去帳をみるに、姫の名はもらされたり。さては門院世にまし〴〵たる頃は、いまだ姫もつゝがなく、その上をさなくして壽永の亂出來れば、しろしめさゞりしも理なりと、姫の名をしるしのせ猶もうしろの山にそとばたてゝ、その頃世にたぐひなきひじりの西山上人ときこえ給ひしを請じて、開眼の供養など行ひ、「これなん老女が局といひしなるべし。」と、のころことなく沙汰して宇治にかへり、再び妻を迎ふることもなく、あけくれ遠山の硯をその人のおもかげ見るごとくいつくしみ、身をはなさずありしが、十とせばかりを經て辛亥といふとしの秋の頃、いさゝか風の心地したりしが、させる事にも侍らねば、庭のけしきをも詠めんと障子ひらきたるに、過ぎしとしの女の童

いづちともなく來りて、「今宵、御迎を參らせんとのことなり。」といふに、帶刀はじめて猪のとしにと云ひしを思ひあはせて、さては今宵に命はきはまりたりと、はじめて父母にもありし次第を物語りて、「死したらん後は遠山の硯をも棺にをさめて、大原の山に葬り給へかし。」と、くれ〲あつらへ置きて、その夜俄に身まかりぬ。父母その言葉のごとく大原に葬りて、多くの僧をやとひて二人の菩提をねんごろに祈りしが、雨の夜などには帶刀、姬の手をとり女の童をつれて、大原の里おぼろの清水などのあたりにてみたるものも侍りしときこえければ、父母かなしく覺えて水陸の齋、法華書寫なんど、いみじき功德を行ひたりしゆゑにや、その後は見たる者もなかりしとぞ語り傳へ侍る。

鹽飽正連荒田の祠を壞つ事

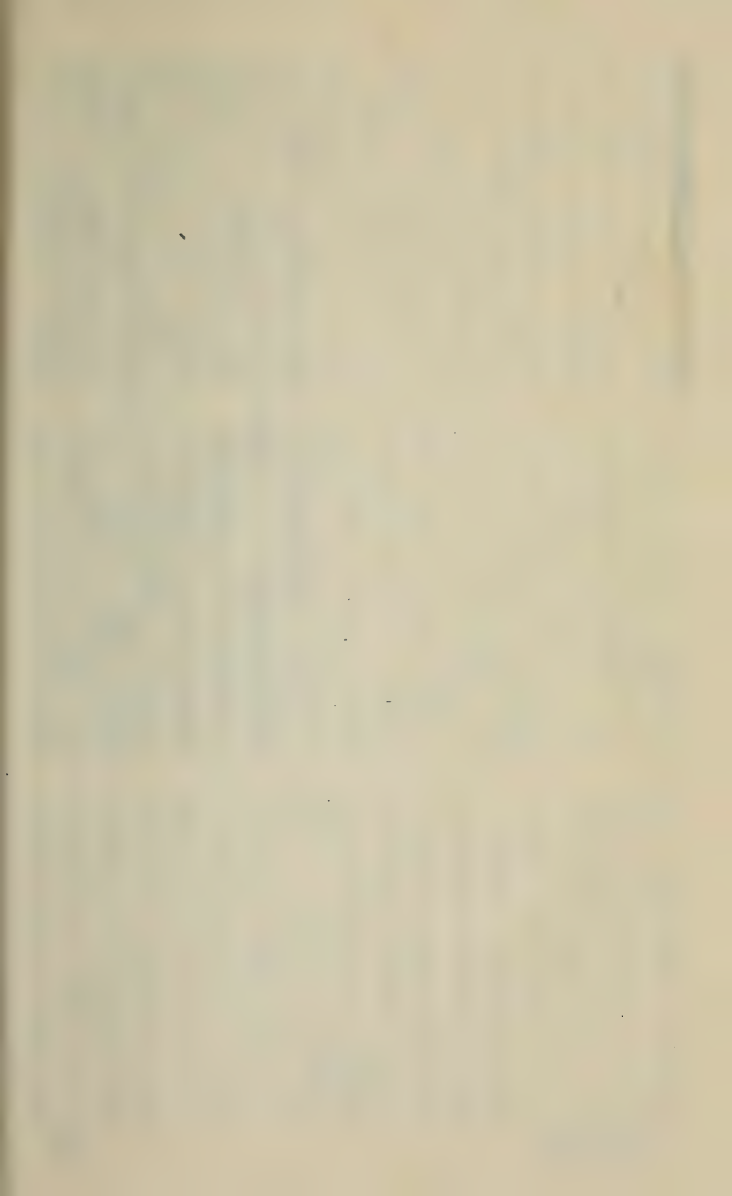
寛正の頃、笠原將監氏豊といふものあり。肥前の產にて、大友の一族として累代一城の主なりしが、氏豊にいたりて家門衰へ、勢微にして守ることあたはず。隣國に奔りて時を待ちけるが、應仁の戰に細川に屬して戰功あるによつて、將軍家に仕へて在京したりしに文明のはじめ細川大內等の群雄も各國にかへりて、天下暫く靜ならんとす。氏豊細川を送りて山崎にいたり、それより直に八幡に詣でて、別當は舊知なれば、投宿して舊を話らんと淀川を上るに、頃は神無月の一村雨、苫ふきわたし徒然なる折しも、岸に人ありて便船を乞ふ。氏豊、幸と船をよせて其姓名を問ふに、「西國方の士にて荒田何某。」と答ふ。武衞兵略を談ずるに、その辯流るゝがごとくなるに、氏豊益友なりと悦びて、酒肴を命じてこれを饗す。船岸に着かんとする時、近く居よりて云く、「我は誠は讃州富田の邊にすむところの小神なり。荒田の森と呼びて、古は宮宇廊門結構ありしを、近年の兵革に誰一人修造の者なく、その上土地卑濕にして魚鼈と居を同じうするにいたる。君、明春は彼の地に下り給ふべし。ねがはくは祠廟を新にして舊觀に復せんことを。われ又君の福祐を扶助すべし。任に赴き給はゞ訪ひ給へかし。されども神人路隔りたれば、僕從をしりぞけて君一人來りたまはるべし。」と云ひをはりて、忽ち其形をみず。氏豊奇怪とはおもへども、あはれ一城の主ともなるべきやと末頼みにおもひ居たりしに、その年もくれて翌年の春、細川より消息ありて、讃州に下りて軍務をも助けてんやと侍る

に、氏豊神の詞におもひ合せて、速に領掌して彼の地に下るに、幸ひ富田の城守なければとて、氏豊をして守らしむ。氏豊はじめて神の詞の差はざるに服し、「荒田の森やある。」と尋ぬるに、「城南二里餘にして林あり。荒田の森と呼ぶ。神祠あれども荒廢して纔に形ばかりを存す。」といふに、則ち案内を具し、かしこにいたるに、誠に人家を離るゝこと一里餘にして、左は水に沿ひ右は岡につゞき、老樹高く聳えて晝暗く、蘆葦生茂りて路をふさぐ。氏豊神の約のごとく、僕從を遠ざけ馬をおりて只一人路もなき所をわけ行くに、鳥居朽ちて路に横たふれふす。額あれども文字さだかならず。よく〳〵見るに荒田明神の字あり。さては社頭遠からじと、なほ奥ふかくたどり行くに、一陣の風起つて土沙を捲き、咫尺を辨じがたし。暫くありて衣冠正しくて出できたるあり。則ち前年見えたりし神なり。氏豊地に伏して、祐助によりて眉目を開きたることを謝す。神又約を失せざるを稱して、手をとりて進むこと二町餘にして社頭にいたる。拜殿は基礎のみをあませり。社も軒朽ち甍破れて荒廢年久しと見ゆ。傍の林の中に人の叫ぶ聲きこゆるに、誰ととへば神云く、「當國入江郷に鹽飽正連と云ふものあり。われに不敬なりしゆゑ此に繋ぎて一年餘にいたる。小吏に命じて其罪を責めしむ。されども宿債漸く畢りて、五三日のうちには放ち還すべし。」とあるに、氏豊恐懼してその他を問はず。別を告げてかへらんとするに、神また再三修造の事を託す。氏豊敬諾して出づるに、鳥居の邊まで送りて神はその去るところをしらず。氏豊城に歸りて頻りに修造を企てんとおもひめぐらせども、連年戰爭のうへ、近年荒年うち續きて費用たらず。いかんともすべき樣なく、一夜思案して忽ち一計を案じ出して、翌月早旦に鹽飽が館に至る。鹽飽は一族多く、ことさら正連にいたりて武威漸く強くして、細川にも屬せず一方を守りしが、氏豊推して相見をもとむるに、臥病を以てこれを謝す。氏豊再三强ひて後、やむことを得ずして病床にありて對面す。正連云く、「某去年以來疾に染み、就中、時々痛楚堪へがたく、身心困倦して命旦夕にせまる。君何の議すべきありて駕を枉げたまふや。」と訝るに、氏豊僞りて云く、「某貴所の病その據るところをしる。依つて聊か一言を進めんために來れり。某前年異人に逢うて、鬼神を驅役するの術、粗學びえたり。頃日城南荒田の森に至るに、彼の神貴所の不敬を怒りて、桎梏して呵責を加ふ。某その痛楚をみるにしのびず、この人をして新に

祠廟を營して罪を謝せしむべし。その桎梏をとき疾をして平復ならしめんことを乞ふ。神點頭して諾しぬ。貴恙除かんこと兩三日のうちにあるべし。願はくは平復の後修造の事怠りたまふべからず。」といふに、正連僞りて諾し、「貴府のをしへに從ふべし。」といふ。氏豐その計の成りたるを悅んで歸る。果して三日を過ぎて病ことごとく癒えて氣力平日のごとく、正連家の子郎從を集めて云く「某、生平神明をあなどり鬼神をけがしたる事なし。然るに去年以來の病、荒田の神の祟なるよし。よつて罪を謝せんため祠廟を再建すべしと、笠原氏豐が敎ふるところ默止しがたきに似たれども、荒田の神我になんの恨かある。つら〱おもふに、前年夢中に老人來りて、自ら修造の事を託す。その地を問へば荒田の神なり。某古記を案ずるに、往年彼の地に大蛇すみて害をなす。高圓何某なるものこれを殺して後、なほ邪祟甚だし。故にその髑髏を祭りて祠を建てたりしより、土人所願を祈るに其驗あるによりて、漸く宮宇莊麗になり、四時の祭祀たゆることなし。されば國の宗廟、社稷の神にもあらず。詮ずるところ淫祠にして崇ぶべき理なし。況や連年の兵亂に大小の神社佛閣、兵火にかゝりて荒廢したる、その數をしらず。それだに民饑ゑて國用たらざる折なれば、再建を議するに暇あらず。民の愚なるより淫祠を祭りて神祇を傍にし、僧徒は漫に功德を募りて無益の大刹を建てゝ、血山肉池を開きて民力を費す。幸にして廢したるものを又もや修造せんこと益なし、と打捨ておきたりしを憤りて、禍をなすと覺ゆ。それ神は民人を扶護するものなるを、民の饑ゑたるをもかへりみず、己が祠廟を建てざるを憤り私怨を含む、豈神の心ならんや。唐土にも兩頭の蛇をころして祥に逢ひ、淫祠を壞ちて榮達なりし例あり。かゝる殘忍の妖蛇、すて置くときは民の禍なり。除かずんばあるべからず。」とて、僕從數百人を具して彼の地にいたり、殘祠を壞ちて海に沈め片瓦も殘さず、火を放ちて森を燒拂ひ、掃除一空して後、富田に來り氏豐に謁す。氏豐その平復を賀し且修造の事を促す。正連祠を壞ちたることを具に語るに、氏豐駭きて面土のごとし。正連その利害をさとして憚るところなし。氏豐すべきやうなく、初より正連をすかしたる事なれば、今更言葉なくしてやみぬ。この後、心うれひてたのします。一月餘を經て城外に獵して、日暮れてかへるに、馬駭きて進まず。あやしみ思ふに、白衣にして髮ふり亂し、手に刀を提げたるが馬前にたちた

り、よく／＼みれば荒田の神なり。眼を瞋らし罵つて云く、「汝信なきはいふにたらず。毀滅にいたるこそ恨なれ。必ず報ゆべし。」と、高聲にきこゆるに氏豊泣いて始末をかたりてこれを謝す。神顔色とけずして云く、「正連威福盛んにして前年の類にあらず。われ敵すべき事あたはず。汝、祿命衰へて、恨を報ずる時なり。」と云ひをはりて、忽ちその行く所をしらず。僕従はじめより其形をみず。氏豊これより病を得て、旬餘にして遂に死す。その子孫みな夭折して一門滅するに至る。正連ます／＼さかえて、後入道して守敬齋と號し、八十餘にして死す。一族盛んにして、世々武名をおとさゞりしとぞ。誠に豪傑の手段といふべし。

席上奇觀垣根草一之巻終

席上奇観垣根草二之巻

在原業平文海に託して寃を訴ふる事

天文の頃、都相國寺に文海といふ僧あり。禪誦の暇、和歌をこのみ逍遙院殿の門人にて、叢林に文字禪の風韻をたてて、一時の奇才なりしが、その頃は室町家義晴公の治世にて、連年干戈息む時なく、西國中國は大内毛利の確執、東國に北條今川、北陸は武田長尾の合戰ひまなく、將軍家も都を沒落し給ひ、洛中の動亂また前代に類まれなる事にて、本寺も天文二十年亥七月兵火にかゝりて、禪堂法堂殘りなく燒亡せしかば、文海も安居に所なく、衣鉢を收めて東國を心ざして行脚して、此彼ところさだめず遊歷するうち、四五年も經たりしに、さすが都もなつかしく、錫を廻して伊勢路にかゝり、大神宮に詣でて法施奉り、それより大和路にこえて、吉野の花をも見ばやと分登るに、頃は彌生の末にて、花もわづかに散り殘りたる風情いとゞ哀もふかく、覺えず山深く入りたるに、日西山に沈み遠寺に鐘ひゞき、花より外に知る人もなき山中を、そこはかとなく迷ひゆけども、人家とてもなし。花を今宵の主とやせんとおもひ煩ふ所に、遙のあなたに燈のかすかに見ゆるにぞ、さては人家のあるやらんと、やう／＼たどりつきたれば、木立うるはしきほとりに、殿造いときよらかにて、門もさゝで誰いさふる人なければ、文海あやしみながら軒の邊に徘徊ひて内を窺ふに、折ふし童の出でたるに、辭をいやしうして投宿を乞ふ。童しばらくありて出でて案内するに從うて一間なる所に坐すれば、やがて茶菓點心やうの物、懇に饗應あるに、終日の饑をわすれ、はじめて安心するうちにも、いかなるかたの此奥山にかくはひそみゐ給ふやらんと見めぐらすに、主と覺しき人いで給ひたり。そのさまは淸らに年は三十ばかりと見ゆるが、裝束うるはしくひきつくろひ、文海に對して揖したまふに、文海拜伏して「山路のながめに歸るべき路をうしなひ侍りしに、はからずも厚情を蒙り奉ることの忝なさよ。」と謝すれば、主云く「かゝる幽僻の境、たれ訪ふ人もなきを、幸に師の尋ねきたり給はるこそ本意なれ。茅屋を侘しともし給はずは、ゆる／＼つかれをもなくさめてよかし。」と、いと懇なるに、文海いよいよ美意を謝す。主かさねて「某生平寃屈

の事侍りて世にこれを許へて、妄誕をたださんとすれども、その時いたらず。幸に師に逢ふ事を得たる、千載の一遇といふべし。委しくきこえ参らせん。我がために世に傳へて愁眉を開かしめ給へ。」と近く居よりて、「われこそ世の人普く知る所の在原業平にてぞ侍る。そも不平の事は、某世にありし時、和歌の林には指かずに折られ、詠草も世々の撰集に載せられ、口碑にも傳はれり。是よろこぶべきに似たれども、いつの頃よりか世の人某を古今第一の好色放蕩の者のやうにいひなせり。その妄誕の源は伊勢物語にて、かの草紙に昔男とあるを、みな〳〵某が事なりと覺ゆるより、遂に昔男は某が化名となれり。某不肖なりといへども朝家に仕へたりしもの、春のはじめより年暮るゝまで、花に雪に、ひたすら此所の處女彼所の寡婦をたぶらかし暮すべきや。後世政の武門に歸してより、公家の無下に暇がちなるを見て、往古をしらざる者のいふところなり。二條の后と密通の事は、いまだ平人にておはせし時のことにて、入内の後は衆議を憚りて吾妻へ歌枕に下りたりしを、后を竊みいだして亡命したるやうに思へるも心ぐるし。また伊勢齋宮の一段も、さほど色好の名

ある男を、宮の寝所ちかく置くべきやうなし。穢汚の悪名某のみかは連累に齎宮をも、神の禁をわすれ只ならぬ身となり給ひしなどといふ。また甚だしからずや。或は、はらからの妹に懸想して、人のむすばんことをしぞおもふと戯れ、母なる人も我に心ありしなど、さまぐ\の妄誕、その罪一人に歸して千載の汚名を蒙る。また、若年たりし時、眞濟僧正に密教を習ひしをも、龍陽の愛より斷袖の契も侍りしやうにいひなせる、衆惡海委して、誰か一人その實なき事を覺るものなし。そも伊勢物語のふみは作者昔よりさだかならねども、實は具平親王の手に出でて、昔は眞名なりしを後に假名文字になしたるものにて、古今の序などと同じ類なり。それはともあれ、物語の大體、歌の意をのべて端書を添へたるものなり。無中に有を生じて歌のさまを一轉して、風情あらせたる作り物語の體なり。近き頃定家も、詞花言葉を翫ぶべき書なりと、をしへられしは格言にて實錄のごとく年月日時を正し、誰某の事などと思ふこそいと拙きことにて、唐土の詩も辭をもて意を害することなかれとをしへ給ふ。まして大和歌は、はかなき事たはれたる事をも、興により物にふ

れて三十一文字のことの葉となれるを、彼の物語には、それが上を又一轉、風情を生じたるものから、よむもの詞花言葉をもてあそぶ外なし。唐土の詩に、漢に游女あり、求むべからずとあるより、後世附會して、韓詩外傳に至りては、孔子、阿谷といふところにて物洗ふ女を見給ひ、子路に命じて佩を贈り給ひ、いどみ給へども女從ふ事なかりしゆゑ、ああ求むべからずと歎じたまひしなどいへるを以て見るべし。詩歌のこと葉より事を生じて、それを實ならしめんとするより、古の聖すら秋胡子と一等の人とおもふにいたる。まして某ごときをや。惣じて國の實錄たる書籍、なほ傳記の言たがふ事すくなからず。況や後世に至りては、豪家權門の人は、文人をして傳記をかゝせ碑銘を彫りて、事を飾り虚を構へ、生ける日盜跖なる者、死して夷齊となるの類あげて數へがたし。文人もとより行實なきもの多き時は、紀傳すら定說となしがたし。まして作り物語の風流より、誰某と定むることもなく昔或る男とかけるを見て、一槪に某がことぞとおもふは、癡人の前夢を說くの類なるべし。むかし光明皇后の△△なりしも、浴室にして阿閦佛をみ給ひしと傳へ、近頃、道明法師が濫行なるも、五條の天神隨喜したまひしなどいふ說出でたるに、某が不幸なる、佛神その荒淫に感應し給ひしといふものならざれども、某を觀音の化身なりといふはあまり過當の說にて、却つて人の嘲を生ずる端なり。是は釋氏の作り出せるものにて、欲の鉤をもて、引いて佛道にいたらしむといふ經文より、普門品の三十三身應現の說に附會し、楊柳觀音などのその形艶麗にちかきをもて、この說を生じたるものなり。光明皇后如意輪の化身といへると、同日の談にしてとるに足らず。惣じて我が國の人は少しけやけき人をみては、某の化身誰の後身など虚誕の說をなす事、口碑にあるのみならず、傳記に載せて疑ふものなし。千百人の中一二もあるべきもはかられずといへども、唐の聖孔子すら當時化身の說なし。後世讖緯の書を作りてより、彼の國も星の精、山川の靈などいふ說いでたり。わが國の人は殘忍凶暴の人すらなみにことなる者、多くは凡人ならず。佛菩薩神明の化身なりといふものあり。たゞ今日に至りて菅相公を讒したる時平、義經を斃したる梶原を化身なりといふ說なきこそ、漏れたりといふべし。かゝる虚誕の過譽はなきにおとる。唯荒淫放蕩の汚名をすゝぐ時は望たれり。又因に託すべきは、百人一首に載せられたる歌にて、彼の歌は、二條の后

東宮の御息所にておはせしとき、屛風に龍田川に紅葉ながるゝすがたをかゝさせ給ひしを題にて、素性法師と同じくよめるが、某が趣意は龍田川に紅葉散りしきて流るゝを、一疋の練を纐纈のくゝり染にそめなしたるに見なして、かゝる大河を巧みにもくゝり染にそめなしたるは、いちはやき神の御代にはさま〴〵あやしきことも多かれど、よもかゝる例は侍るまじとよみたる歌にて、題にも應じ趣も風情あるかと覺ゆ。しかるものをいつの頃よりか『水くゞる』と、く文字濁りてよみならはせり。紅葉の川水を泳ぎくゞる、何ほどのめづべき事の侍るべき。くゝり染のかのこまだらに似てうるはしきをもて、樂天も黄纐纈と詠じたりし類あるを、知らざるものゝ濁りてよみなせるを、遂には讀癖などいふこと出來て、一定の説となりたるなり。惣じて讀癖といへること、ふつにものしらぬ者のいひ出せることにて、癖といふをもてその非なるをしり給ふべし。人に癖ありて、いづれか法則とすべき。それはさしおき、某が歌の七文字を淸みて讀むべきよしをも、世に傳へ給へかし。」と、懇に語りたまへば、文海云く、「某も幼より和歌をたしみ侍りしが、伊勢物語などよりして、君は正しく荒淫の方なれども、人をもて言葉をすてぬこそ聖の敎なりと、われかしこげに覺えたりし事のつたなさよ。その上、百人首の讀癖まことに風情も雲泥のたがひありて、秀逸をいたづらとなすこと、あまねく世に傳へて妄誕をたゞし參らすべし。さるにても、君は此山奥にて昇仙したまひしと傳へ侍るは實事にて、今日かくは相見し奉るにやといふに、主うち笑ひて「昇仙の說は、近き頃虎關が元亨釋書より出でたるそらごとにて、某世をさりしは陽成院御世をしろしめす元慶四年五月八日、家に卒したるを、わが國に仙人の少きを愁ひて杜撰したるものにて、全く跡なき僞と知り給ふべし。」と宣ふに、文海かさねて、「今日かく在すは神靈の滅びたまはざるにや。假に形をあらはして相見し奉る事にや、覺束なし。」と尋ね參らすれば、「この事たやすく答へ申すべきにも侍らず。夜もいたく深けたり。山路の疲をもやすめ給へ、夜あけてこそ。」とて、奥の殿へいり給ふに、文海も居よりてまどろむうちに、遠寺の鐘ひゞき鳥の聲するに目さめてみれば、所は吉野川のほとりにて松杉一むらしげれる中に、小き祠のかたはらにふしたるに驚きて、いそぎ麓へ下りて里人に尋ぬれば、祠は在原明神なりと答へるに、奇異のおもひをなし、とく都に登りてあまねく公卿士庶の人々に

もかたり、書にも記しおかばやと思ふところに、頃しも三好が叛逆に將軍義輝弑せられ給ひ、都の騷動前年にまさりたれば、またも諸國にさすらへありきてその事となく過し侍りしが、住吉の祠官津守の何某が許にて物語したりしを、たまたま世の人傳へ侍りしとぞ。いと奇怪なりといへども、その論辯する所は皆確論にして信ずべし。是によりて思ふに、業平を古今第一の美丈夫といふも後世意料の說にて、伊勢物語のむかし男とあるを概して業平とおもふより、美男ならずはと推度したるなるべし。傳記には體貌閑雅とのみ侍り。體貌閑雅といふもの業平一人に限らず。楊貴妃玄宗の寵愛ならびなく、三千の宮女も顏色なきがごとくなりしより、後世毛嬙西施と一等の美人とおもふ類なり。貴妃は廣西普寧縣雲陵といふ所の產にて、異質ありしゆゑ楊康もとめて女とし、のち楊玄琰また康に乞ゝてこれを壽王の宮に奉る。その頃美人のきこえも侍らざりしに、玄宗ひとたび見給ひてより至寶を得たるごとく悅び給ひしは、心あれば眼中西施を出すの類なるべし。聰明怜利は論なし。毛嬙西施と同じき美人ならば、玄宗高力士がすゝめ奉るまでしろしめさぬ事やあるべき。況や貴妃、體肥滿して暑を苦しむより、茘枝を好み胡臭ありし故に、外國の名香を以てこれを掩ひたりしを以て推してみるべし。當時君の寵姫なるより、詞曲に命じてその美艶を稱し、文人また阿諛して、天下の絕色と盛りに稱めしより、宋犬弊に咲ゆるの類にて、今にては此國の人も美女を數ふれば貴妃を第一とし、美男をいへば業平を首とす。その謬るところ皆同意にして推度の說なり。文海ま見えたりし時、これをも問はゞ一笑を發したまはんこと、觀音化身の說のごとくなるべしや。

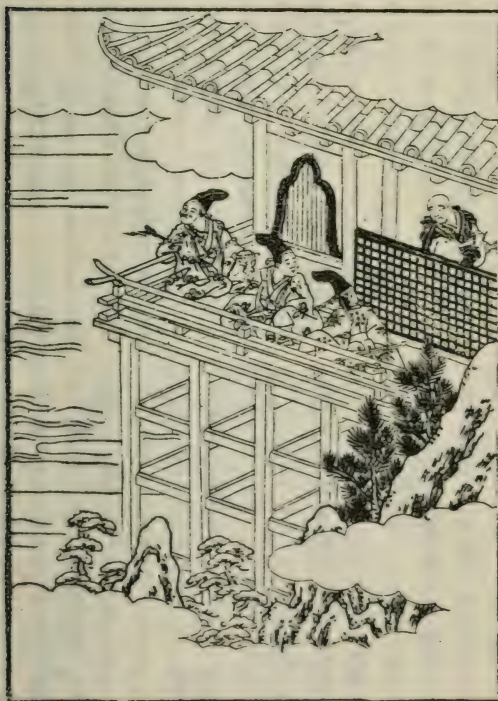
覺明義仲を辭して石山に隱るゝ事

後白河院の寵臣少納言通憲入道信西ときこえしは、實範の曾孫實兼の息にて、藤氏南家の儒流にして資性聰明類なく、古今の治亂に達し詩文の道また時流にこえて、時の人も其廣才に服しぬ。されども高階氏に養はるゝを以て儒官に昇らず、久しく登庸せられざりしが、その母、かつて後白河院の乳媼なるを以て、帝即位のはじめより親近せられて、寵遇ならぶ者なし。後薙髮して通憲の名を信西とあらため、專ら朝政を執りて威福手にあり。遂に信頼等と權を爭ふより平治の亂

いで來り、平相國淸盛また信西常に法皇に親近して平氏の短をそしることを憤りて、遂に戮死せらる。その一門ちり〴〵になりし中に、妾腹に八重丸とて四歲になりけるを、乳母懷きて木津の邊に居たりしが、やがて南都興福寺の衆徒のうちに親しきありて、寺に送りて弟子の兒とするに、父の風ありて才智他の兒に十倍し、一目に十行を讀下すの聰明にして、わづか一年ならざるうち經論の要文などこと〴〵く覺えをはりしかば、後には南京の傳燈この兒にあるべしといひはやしけり。或る時乳母なる者寺に來りて、兒の成長したりしを悅んでひそかにかたるやう、「父入道殿常々平氏の跋扈を憤りて其權を奪はんとして却つて禍をとり給へり。君は庶子のことなれば早く出家して、父君の菩提をいのり給へ。」と、淚ながらにこま〴〵と語るを聞きて、驚きて云く、「などけふまでは委しき事をもきこえざりし。」といふに、「さればとよ、相國の怒つよき事皆人の知る所なれば、いかなる禍のはしともなりやせんと深くつゝみて、この寺の阿闍梨をもすかし參らせて、われ知りたる人の子なりと申し置き侍り。あなかしこ、この事人にしらせたまふな。」と制するに、兒うちうなづきてありしが、是より日夜に父の罪なくして死したりしを憤り、平氏を亡して怨を報ぜんとおもふ心おこりぬ。九歲の春になりしかば、師の阿闍梨剃度して太夫坊覺明とぞ呼びける。剃度は師命といひ年頃扶助の恩あればいなむ所なし。報讐の志はおもひとゞまるべきにあらずと、よりより武事を學びたりしに、さいはひ三輪のほとりに橘知晴とて、軍學に達したる隱士のありしを師とたのみ、明暮兵書に心をゆだね餘事をかへりみず。その頃までは南都北嶺の衆徒、やゝもすれば合戰におよぶ時なれば、師の阿闍梨も釋門の禦侮法王の干城ともなれかしと見ゆるしたまひぬ。もとより聰明の質なるに、憤を發して學びしかば、五三年のうちに兵家の大要、天文運氣の術まで殘ることなく學び得て、十九歲の秋の頃より行脚と披露して南都を離れ、今の都に登りてこゝかしこにひそみ居て、折もあらば平相國を刺して父の怨を報ぜんと伺ひども相國出づるときは前驅路を拂ひ、入るに侍衞雲のごとく、わきて源氏の一族怨を含むとしりて其備嚴なれば、素意を達することなく明し暮すうち、治承の春北野參籠ときこゆるに、とくより弓矢を隱しもちて森の木蔭に窺ふに、さいはひ下向は暮におよびたるに、是ぞ相國の車よと放つ矢、春の夜の朧なるに見そんじて隨身の侍の袖をつらぬくに、すはや

狼藉者よと騒動するに、さては射損じたりと跡を晦して北山にかくれて動靜を伺ふに、六波羅よりは處々に屬托の札を以て追捕嚴重なれば、近國には身をいるゝ所なく、北國をさして落延びける。兎角するうち其年暮れて、明くれば治承二年の春客星あらはれ、その上洛中さまゞゝの怪異ありと風聞するに、覺明もとより天文に達したれば、ひそかにこれを考ふるに、兵亂の兆、國家の凶變ちかきにありと知りて、さらば其虛に乘じて、報讐の志を遂せんと思ひめぐらすに、その頃、木曾の冠者義仲密々義兵の催しありときこえければ、彼の人をすゝめて急に軍をおこさせばやと、義仲の館に行きて相見を求むるに、義仲云く、「貴僧何の敎へるところありて遠く來るや。」覺明進んで云く、「某一言をのべんため、はるゞゝこゝに來る。そもゝゝ、平氏の殘暴、天人の惡むところ、中にも法皇を離宮に幽閉し奉る、古今例なき不臣の至り。公卿齒を切るといへども力たらずして徒に其毒手を忍び、諸源また勢微にしてむなしく自滅を待つの外なし。たまゝゝ平治に端をひらきしかど、却つて百亂階を生じてその欲をみたしむ。しかるに相國位人臣をきはめ一門みな榮達して、凡そ天下を三分して、その二つは平氏の領國となる。物盈つるときは必ず缺く。晝夜消息の理なり。今春よりの天變正しく兵亂の兆にて、不日に大變生ずべし。さきだつ時は人を制す。この時を虛しうせずして大事を起さん人こそ誠に豪傑といふべし。君は正しく源氏の嫡流、諸國離散のものも常に意を寄せ參らす。今大義を擧げて上天子の爲に賊を討し、下父祖の爲に讐を報ずとのたまはゞ、白旗一度閃きて群雄雲のごとくに集らん。この時節をむなしうせば、長く人の下に屈したまはん。賢慮を決し給へ。」と、席を打つてすゝむるに、義仲も席を前めて、「誠に公論といふべし。われ當らずといへども指揮にしたがはん。されども内府重盛よく衆心を得て一門の柱礎たり。われこれを憚る。」とあれば、覺明云く、「重盛一人の德、一門の暴を掩ふにたらず。一杯の水、一車の薪の、火を消することあたはず。況や重盛夭折の相にして、その死せんこと來秋を過すべからず。君はやく事を圖り給へ。」といふに、義仲大いに悅び、「われ久しく大義に志ありといへども、然るべき謀士を得ざる事を愁とせしに、さいはひに天貴僧をあたふ。わがために子房諸葛なり。」とて、別館を掃うて重く用ゐられたり。翌日義仲かさねて問うて云く、「われ多年この所に蟄居して、徒に回天の氣を呑む。いづれの國へ

うち出でてか、敵の動靜民の向背をも窺ふべきや。」覺明云く、「君北陸の僻境に蟄居したまひしこそ幸なれ。地、邊境なるゆゑ、進んで敵を攻むるに後患なく、退いて嶮を守らば枕を高うして安心すべし。この所を巣穴として勢を張らば、加賀越前の諸士は招かずして應ずべし。信濃越後は已に同志の人過半なれば、先づ兵勢を張りて其機を露し給へ。四方の國國震ひおそれんこと掌を指すがごとし。一度六波羅の討手を引寄せ、地理にうとき弱卒、嶮岨になれぬ京勢、手始の軍に打勝つものならば、その勢に乘じて長驅して攻登らんに、誰か遮る者の侍るべき。況や近江に佐々木の一族ありて、多年回復をまつなれば、力をあはせんこと必然なり。一鼓して都を襲はゞ、聞怖する京童すはや敵よ合戰よと騷動せば、いとゞ武にうとき公家原動亂して、平氏内を治むるに暇なく外を防ぐに術なからん。累年の鬱を聞かんこと只一擧にあり。」と激するにぞ、さらばとて近國に潜みゐる源氏の一黨に牒じ合せ、旗を揚ぐるとひとしく馳集る勢五百騎にあまる。小勢なりといへども、蟄を啓いて雲を慕ふ龍蛇の勢、敵の十萬にも敵すべしとすなはち一通の願書を認めて八幡宮に納めておの／＼義を結ぶ。その願文、覺明執筆にて、平相國は武家の糟糠王法の怨敵など書きたりしを、後に清盛傳へきゝて、この法師を六條川原に梟首せずば、死すとも瞑目せじとぞ憤られしとぞ。されば覺明が先見に差はず、翌年の秋重盛薨去して、一門闇夜に燈をうしなひたるごとく、人心これがために動くを待つて、高倉の宮覺したちたまふこと侍りしに、計敵にもれて宮もあへなく邊土の土とならせ給ひ、與力し奉りし賴政父子も、むなしく宇治の波と消えて、暫く都も靜なりといへども、宮の令旨諸國に下し給ひし中にも、伊豆の賴朝、木曾の義仲こそ義兵を起して攻登るときこえしかば、まづその近きを攻めよとて、義仲追討のため大軍を向けたりしに、覺明が計策に六波羅勢散々にうち負けて敗走すれば、後を慕うて北陸の大軍潮の湧くがごとく殺到するに、此彼に時を待ちたる源氏舊恩の諸士、馳加りて洛中に亂入すといふほどこそあれ、上下その兵聲に氣をのまれ、平氏の一門一戰にもおよばず、主上門院を供奉し參らせ、隣家の犬の棒を見て逃ぐるごとく、西國をさして沒落す、義仲都に入りて法皇の御所に參れば、御感斜ならず。なほも平氏の一族を亡して禍の根をたち宸襟を安んぜよとの勅を奉けて、暫く都に軍馬の勞を休む。然るに義仲、北陸にありて一圖報讐

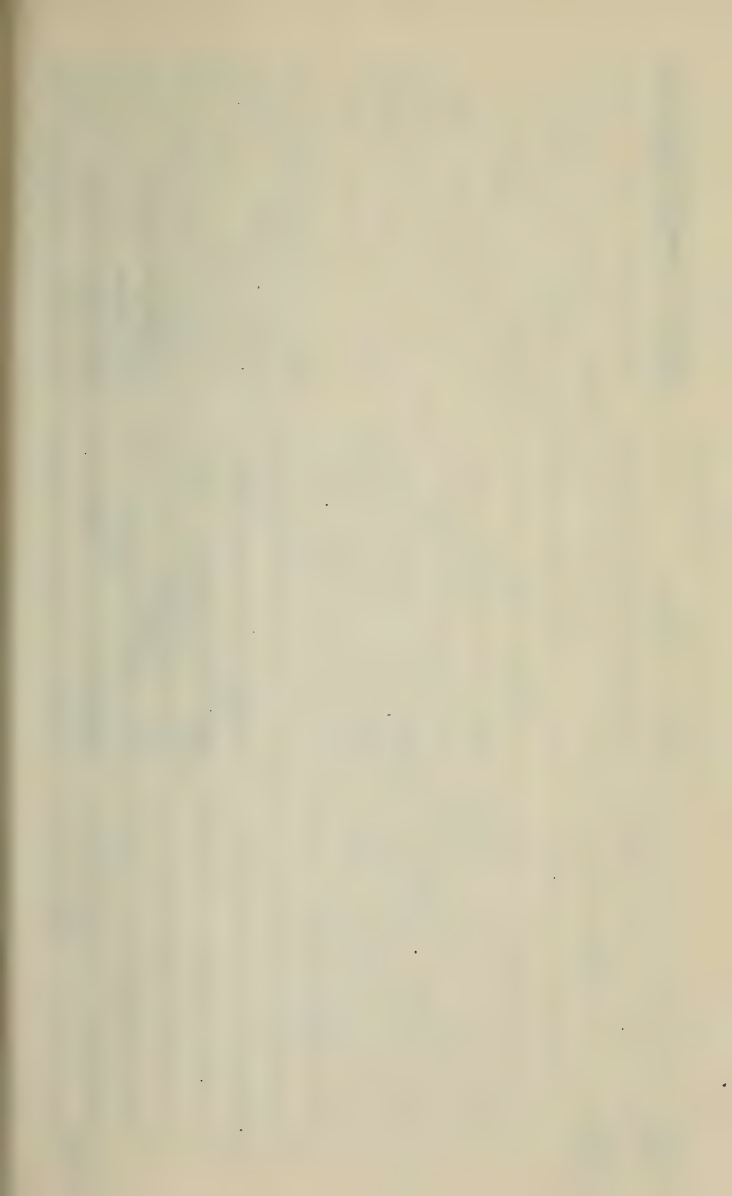
の念より外なかりしに、都滞留のうちに見聞する所、生涯見もなれぬ繁花風流、水きよく山うるはしく、むかし東門闔土の女雲のごとしといひけんは物の數かは。大宮人のいとやんごとなきはいふもさらなり、賤の女まで鄙には似ざるけはひ、木曾の山里になれたる目には天仙かともあやしまれ、六波羅の結構、大廈高樓、玉をちりばめ錦をかざれる奢侈を見るより、いつしか惰氣生じて、かゝる地に下半世の歡樂を極むるものならば、人世の望たれりと、美女をあつめて日夜淫酒を事として、軍務を心におかず。況や一戰の大功に心侍むで放逸の兆みえたるに、覺明諌めて云く、「君この所に逸樂を欲し給ふは、火宅に巣ふ燕にひとしく、大禍忽ち來るべし。平氏敗走すといへども、多年恩顧の者西國に多ければ、虎を放ちて山に入れ、龍を追うて淵に沈むるにことならず。要害を固うして敵に備へ、主上神器を挾みて諸國に令せば、なか／＼たやすく勝つべき軍と覺え侍らず。兵は神速を貴ぶこと君のしろしめす所なれば、今敵軍の怖意さらぬ間に、短兵急に攻めよせなば一戰に擒にすべし。事をあやまち給はゞ、窮鼠却つて猫を食むの譬あり。況や援兵加り喩に據らんを

や。そのうへ頼朝義經等の數人は皆故左馬頭の遺子にして、已に義兵を起す。何ぞ君の下にありて令をうけ命を守るべきや。古より兩雄ならび立たず。君のひまを窺ふこと理の當然なり。今平家を族滅して大功を建てゝ、その後都に守護をおきて、君は北陸にありて天下兵馬の權を握りたまはゞ、まくらを泰山のやすきに置きて、其時はじめて歡樂をうけて太平をたのしみ給ふも晩からじ。都にとゞまりて久しく朝家に親しみたまはゞ、はじめは武を忘れ終は不臣の罪をとり給ふべし。況や今日前に平氏の大敵あり、後に頼朝義經の梟雄あり。その中間にはさまりて逸樂を事として、後患をかへりみ給はぬは小兒の見にことならず。」と、折檻の諫をいれたりしかど、諂諛の者親近して却つて覺明を疎んずるはし見え侍るに、覺明退いて歎じて云く、「嗚呼豎子

数ふるにたらず。敵國亡びずして主將驕り士卒おこたる。いづれか滅亡を免るべきや。況や義仲天年を全うする相にあらず。われ一度空門にいりしかども、父の讐を安然として詠めをらんも本意ならずと、思ひたちたりし素意は滿足しぬ。もとより太平をともに樂しむべき望もなければ、はじめより主を擇ぶこともなか

りし。機をみてさらずんば禍近きにあり。赤松に從ひし子房、かしこくも害を免れたり。空門已に榮辱を一夢に附す。なんぞ去留に心あらんや。」と、遂に何地ともなく跡をくらまして影響を知るものなし。義仲驚いて士卒をして是を尋ねもとむれども、その行く所を知らず。果して幾程なく義仲滅亡の禍をとりしこと、覺明が先見露たがふことなし。平氏は義經範賴がために西海に亡び、四海一統して賴朝、覺明が義仲にすゝめしごとく、その身鎌倉にありて天下の兵權を掌りて、覺明、義仲を諫めしことを傳へきゝて、「あなおそろし。義仲もし其計を用ゐば、われ今日あらんや。徒に藩籬を守るの犬たるべし。」とて、是より覺明をたづね求めしめ給へども、その所在たしかならず。その後文治五年、義經衣川に自殺して海内悉く鎌倉の手に屬せしかば、建久元年賴朝上洛して恩を謝す。法皇の御氣色よろしく、數日滯留のうち和田兒玉黨の若殿原、出仕の暇をぬすみて湖水に舟をうかべ石山寺に詣で侍りしに、頃しも滿月にて山の端に出づるより、影は湖水にひたして、金の波、煙の樹木、さながら我もまた畫圖の中にあるかと疑はるる風情。御堂の欄近くゐあつまりて、いみじく興じたりしに、一人、「白霧山深鳥一聲」と吟ずれば、一人は、「月は上る庾公が樓」と朗詠するに、佛前に燈挑げゐたりし法師のうちしはぶきながら、「月には上る庾公が樓とこそありたけれ。」と、獨言するをきゝとがめて、おの〳〵舌を捲いて、「こは世の常の法師にはあらじ。いざや招きて清談をもかたりきこえん。」と、從者をして尋ねさするに、いづち去にけん影もなし。みな〳〵遺憾のことにおもひながら、さるにても月には上るの一句は、心つかざる趣をはじめて得とりたりとて、夜ふけて歸りて、あくる朝賴朝に此よし語りきこゆるに、賴朝しばし案じて俄に重忠をめされ、ひそかに仰言侍りしを、いかなる事にやと、諸大名もいぶかしみおもひしが、次の日賴朝物語のついでに、「さりし夜、殿原の逢ひたまひし法師こそ、必定木曾に從ひありし覺明ならめ。石山のほとりに隱れすむよしほのかに聞きたりしに、このほどの樣、なみの者にはあらじと、急に重忠に命じて、彼にこえて誘引してよと心をつくせしに、かしこくもはや跡をかくして行方をしらずと。われ多年彼が兵機妙算を慕ひ、且は文筆に達したれば、われに仕へさせたくおもひしに殘念さよ。」と宣ふに、諸人はじめて疑をはらしぬ。後に覺明は高野にすみて、兄の出家して蓮華谷に明遍僧都とていまそかりしにた

よりて、奥の院の傍にかたちばかりの庵しつらひて、遂にそのところにて終りぬといひ傳へ侍る。後までも文筆の業は捨てもやらで、三教指揮の抄は其頃書きたりし。この書は大師壯年の著述にて、文選にくはしからぬものは解しがたきを、覺明閑居のうちに抄を作りて今にもてはやしぬ。誠に文武の全才なるをや。頼朝の惜しまれしもむべなり。たゞ義仲の用ゐること能はざりしこそ、千載の遺恨といふべし。釋門においては論ずべきことあるべけれど、その氣象豪傑なる、稱するにたれり。文覺法師老後ふたゝび遷謫の禍を招きたるに比するに、天淵のたがひ侍るをや。

席上奇観垣根草二之巻終

席上奇観垣根草三之巻

鞆晴宗夫婦再生の縁をむすぶ事

いにしへ朝家いまだ盛んなりし頃、豊後は久我家の領國にして、國司代を置きて取りまつろひ郡司を知らせたる國人に、鞆の大領冬宗といふものあり。嫡子は早世して、次男小次郎晴宗とて、生清げに心ざま優にやさしく、幼より詩歌管絃の外書畫の工なる、鄙には類まれなる才なりと、人みなもてはやしけり。いまだ世をしらざる日、都に登りて、國司の館に宮仕侍るうち、父の大領みまかりしに、繼母のはからひとして三男三郎直宗なるもの家業を襲ふ。されども小次郎は國司のおぼえ他にこえたれば、爭ふ事なくそれが心にまかせたり。在京のうち紀の何某が娘初瀬といへるを娶り、偕老のちぎりあさからず暮しけるが、父の墳墓へもまうでたく、又は一族の者にも、國司の恩顧のほども目のあたりきこえんものをと思ひたちて、國司に其よし申しけるに、衣服太刀なんどの類かず／＼たまはりて、如月の頃妻もろとも從者兩三人を具して、難波津より舟もよひしてはるばるこぎ出すに、春の海原のどかなるうへ、おぼろにかすむ須磨明石のながめ、これなん一刻千金と、妻もろともに酒くみかはし吟情をなやまし、夜ふくるまでいねもやらで詠め居たりしに、船の者どもは早やいびき高く聞ゆるにぞ、苫さしよせてふしぬ。其頃伊豫讃岐の間に、海賊あまた横行して、往來の客船をなやませしが、小次郎はかくとも知らで不虞の備もなかりしに、とくより海賊の窺ひて熟睡をはかりて、究竟の者共小次郎が船に上り、器物調度の類己が船に移すに、初瀬驚きて、「こはいかに。」とおとたつるを、これをも己が船にうちこみたる物音に、小次郎目さめて刀おつとり起上るを、有無をいはず海へ投げいれたり。從者のねおびれたるをも、みな／＼海に打込みて、水主には奪ひとりたる衣服など處分して、賊船は遂に漕去りぬ。初瀬聲をかぎり泣叫べども、いかんともすべき様なく、海にいらんとすれば、押へて働き得ず。中にも賊主と覺しきが詞をやはらげて云く、「汝一人をたすけ置くこと、心なきにあらず。我輩かゝる非義はふるまふといへども、生れながらの海賊にもあらず、嫡子あれどもいまださだまる妻もむかへず。下賤の女をめとらんも心

ぐるし。さいはひ汝鄙にはめなれぬ容儀なれば我息婦となしてんと思ふより、かく計らひおきたり。心をとゞめて利害をはかり見よ。」といふに、初瀬眼前に夫の死を見て、何たのしみにながらへて辱をみんとおもへども、頗る心さとき女にて、あはれ敵をとりて怨を報い、夫にも手向けばやとおもふ心うかびて、はじめて涙をとゞむ。賊主その背ひたるを喜びて、やがて船を岸につけて己が家に歸る。賊主妻とてもなく、たゞ乳母なる老婆一人のみにして、その餘はみな海賊の者どもあつまり居るなり。嫡子といふは、このほど風の心地にて引籠りゐたるに、すこしは心ゆるして日を經るうち、賊主もそのけはひの外心なきに安堵して家事をゆだねぬ。十日餘を過ぎて一人來りて、「長州の商船きたるあり。その備堅固なれば心して向ひ給へ。」と告ぐるに、賊主その夜は大小の海賊みな〳〵引具して出でぬ。初瀬さいはひと老婆がいぬるをまちて、裏なる一重の垣をこえて四方をみれども、もとより都の外はふみもみぬ鄙路、ことに人ばなれたるところなれば、何所をさしてと思ひさだむることもなく、月の出しほのかたをしるべに走るに、蘆葦生茂りて路もなき所を凡そ二三里も來りぬらんとおもふ所に、行先入海にしてわたらんやうなし。引返して右に走るに、遠里に鳥のこゑするに、さては人家のあるにやと走るうちに、夜もほのぼのと明けわたる頃からうじて磯邊に出でたり。商船と覺しきが一艘つなぎよせたり。しきりに「たすけたまはれ。」とよぶに、船のうちよりねおびれたる聲して、「なにごとにや。」と尋ぬるに、「委しきことは船にてこそ申さめ。とくのせたまへ。」といふに、船主とまおし開きて見るに、艶なる女の、髮みだれすそほころび、玉ぼこもあけになりて打倒れたれども、天然の國色いとゞ媚あるに、船主悦にかひ〴〵しく抱きのせて、湯藥をあたへていたはるに、宵より息をかぎりに走りたるが、すこし心ゆりして氣つき力たゆみたるにや肢體もひえて人心地なし。さま〴〵いたはりて藥をあたへ、やうやう呼吸もたしかに覺ゆるにぞ、粥などあたへてなほも疲を息はしめんとて、端なる一間をしつらひてふさしむ。元來此船は筑紫の人商にて、諸國を廻りて婦女をすかし欺きて轉賣する船なり。はじめ初瀬をみるより、おもひの外に德づきたりと心積して、急に船もよひして藝州の嚴嶋に渡りて、かの所の葛尾の長といふもの丶許に、鳥目三拾貫文に轉賣して、人商は他國にさりぬ。その頃まで吉備いつくしまなどは海路のよせよく、繁華

の所なるゆゑ、爰かしこに賈舶商船の纜をつなぐ。路の邊の柳客をまねき、物いはでさへ人のよりくるもの。まして籬にわらひて手折りやすきには、遊客旅人の歸るを忘るゝも斷ぞかし。わきて葛尾の長ときこえしは、家居もきよらかにつぎ／＼しく侍れば、國の下司或は祿いまださだまらぬ人などはいふもさらなり、やんごとなき國司代なんども、うちひそまりて通ひくる人多ければ、妓女も綾戸二村袖師など名妹の名四方にかくれなし。されどもさすがは鄙にて、初瀬が艶色に及ぶものなし。長大きに喜びて其客をむかへん事をさとせども、初瀬人商の船にありて、はじめて毒蛇の口をのがれて虎狼の害におちいりたる心地して、ふつにものをもいはず、夜晝となくひきかづきて泣きくらす。まことや王昭君が胡地に嫁せし、漢宮萬里月前の腸、揚貴妃が驪山の舊宴をおもひて、梨花一枝春帶雨といひけんもかくやとおもはれ、誠に天然の國色、惱める西施、泣ける虞氏、せまらば玉をや碎きなんと、煙花に馴れたる妓女にすゝめさとさしめんとす。多くの妓女の中にも名を得たる綾戸二村、近く居よりて、「かくなる上は、長くかなしみて詮なきことなり。我々とてもあかぬ中を親夫のために、かひなき身を川竹の流にひたし、或は心ならずも人あきびとにかどはされて爰に賣渡されたるも侍り。朝夕に馴るれば又思ひやる事も侍りて、寄來る人もふつにむくつけなるのみにも侍らず。さま／＼かはる波の枕にも、おもひよる湊もなきにしもあらず。それがためには、遂にはたのもしげある世をもしめんと、そら賴にも暮らすことにて、うきが中にもたのしみも侍り。」などと、よそながら言葉たくみにすゝむれど、答だにせねば多くの妓女も詞つきて、今しばし里の色香も目になれば、心もなどか花にうつらであるべきとて、綾戸がねやにいたはり置きぬ。その夜、人しづまりて後、綾戸また云ふやう、「君ひたすら操を守りたまはゞ、この上いかなる遠き國へも賣渡され、からきめを見給はゞ、今日を戀ひ給ふともかへるまじ、その上この里に妓女多かる中、白拍子といふは、あながちに客をむかふるにも侍らず。たゞ一さしの風流に酒宴の興を添へ、または高貴の家に召されて月花の色を增すのみにて、操をくじき給ふにも侍らず。君は正しく都人と見たれば、今樣なんどは堪能にてやおはすらん。あはれそのみちをだに勤めたまはゞ、里のかざしともなり、身もやすく心にも恥づることなかるべし。」と、いとしみ／＼とさとしきこゆるに、初瀬おもふやう、われ甲

斐なき命をすてもやらで今日にいたるは夫の仇を報ぜんとおもふよりなれば、身をも汚さで高貴の家に近づくこそ願ふところなれと、はじめて涙をとゞめて綾戸に向ひ、「それのをしへに從ひ參らせん、よきにはからひたまはれ。」といふに、綾戸よろこびて此よし長に告ぐるに、計成りたりと翌日より專ら歌舞吹彈ををしふるに、もとより糸竹は幼より馴れたることとなれば、ほどなく里に名をしられ、初瀨が今樣には、天ぎる雲も停るとぞいひはやしける。頃しも藤原朝臣道信卿あらたに國府へ下り給ひ、ことに近年朝家の事繁きに海賊追捕も忽に成りたりしを、この度は海賊こと〴〵く搦捕り、海路の風波を靜めよとの別勅を蒙り給ひ、西國南海に此よし施行したまへば諸國の來使たゆる間なく、國府の繁華往年にまさりけり。一日國司誕辰の慶賀にて白拍子をめさるゝに、初瀨その數にえらばれて館に參るに、國司甚だ其妙手を賞し給ひ、數日をとゞめ給ふ。ある夜月のあかゝりしに南の殿に出でたまひて、初瀨に琵琶つかふまつれと侍れば、初瀨床におかれたる錦の袋紐とく〳〵と見るより、涙をうかめやゝ伏沈みたりしが、やがて涙ながらに抱きて四の緒かき

ならし一曲を彈ずるに、大絃小絃嘈々切切として雨のごとく語るがごとく、曉の鶴夜の鹿、腸を斷つかなしみ、泣くがごとく訴ふるがごとく餘韻嫋々として細谷川の流よどみてかきくれたるに、國司覺えず狩衣の袖をうるほし給ひ「汝が心中限りなき愁あるに似たり。流離哀怨の聲宛然として明なり。つゝまず語れ。」と宣ふに、初瀬おぼえず撥をすてゝ、ふしまろびて絶入りしが、やゝありて涙をおさへて、身の上のくはしきことをきこえ參らせ「この琵琶こそ裂帛と名付けて、夫が常々秘藏したりしを、六とせ以前海賊の襲ひたりし時、主さへむなしくなり侍れば海賊の手に入りしが、君の御許へは如何して來りけん。」と、憚るところなく申すに、國司甚だ驚き給ひ「晴宗久我家にありし折は、わが館へもきたり見えたり。國に下りては、さだめて一所の安堵をもしつらめとおもひしに、はからさる横難。また汝が報讐の志感ずるにあまりあり。われ其力を助け得さすべし。幸に海賊を探る最中なれば、やはかその賊天網を漏るべき。さるにても賊が住居はいづれの國の境と覺えたるや。」と宣ふに、初瀬「はじめより此國に來るまで、國所の名をだにしらず。たゞ、兩三

人の面縛をとめたるのみ。」といふに、國司うなづきたまひ、「この琵琶を得たる手より探らば、賊の巣穴をしるべし。」とて、頓て長には、初瀬が身の價をたまはりて、北の方の許にひそかに置き給ひぬ。かの裂帛の琵琶は、國人星川庄司なるもの奉りたるなれば、いそぎ召して尋ね給ふに、「先年豫州大三嶋へ公の事につきて罷りたるに、海珠寺といふ禪院に寄宿したりし時、寺僧の所持なるを見て價の絹をあたへてとり來れり。その來歷を尋ね侍りしに、同じ國、川の上といふ所の檀越、香火の料にとて寄せたるなりと承りし。」と申すにぞ、さては賊主が蹤跡も影響をしるべしと、豫州の諸司へ追捕のことしきりに促し給ふ。とくより四國は賊の藪澤ときこえたれば、追捕の宮使より〳〵に搦捕り來るに、國司初瀬をひそかに簾中にかくし置きて窺はさせ給ふに、その者にあらずといふ。さらば猶も賊主を漏したりとて、川の上の在家を探り求むるに、かしこくも影迹なし。翌春大淵の沖にて、防州の商船に海賊あまた亂入したりしを、折節追捕使の船ちかきにかゝりゐて、この動靜を聞くより取圍みて、一人も殘らず生捕りて國府に參らす。また、はじめのごとく初瀬に窺はしむるに、「かれこそ賊主なり。」と答ふ。されば張本なればとて一々鞫詰するに、七年以前、京家の武士の船を襲ひたりしことまで、具に白狀におよぶ。國司きこしめして自ら廳に出でたまひ、初瀬を召して、「賊主、この婦をしるや。」と宣ふに、賊主大きに駭きて面土のごとし。國司笑つて云く、「天道昭々、なんぞむなしからん。婦人微々たる一念今日に達することをえたり。されども公の罪人なれば私の計にまかせがたし。」とて、梟木にさらして後初瀬にたびければ、その首を小次郎が靈位に備へて、千辛萬苦して報讐の志やう〳〵に屆きたるを、生ける人にいふごとく待ちて祭りしこそ誠に千載の恨こゝに散じ、萬緒の鬱忽ちにひらけたりといふべし。見聞の人涙をおとさゞるはなし。その後僧をやとひて、夫をはじめ從者までの追薦に水陸を修したりし、その費みな國司わきまへたまひしに、初瀬恩惠の海山なるを謝し、なほこの上いかなる師をも頼み、剃度して亡夫の菩提を祈り度きよしを申しきこゆるに、國司も其志の切なるを感じさせ給ひしが、折しも北の方御産の臨月なれば、「御産やの宮仕し參らせて後、心のまゝなるべし。」と、北の方よりもとゞめ給ふにいなむべきやうなくして、御産をまちゐたり。その頃、國司別殿を營したまひ畫工を求め給ふに、近頃肥後よりきたり住む菅野主

馬といへるを進むるものあり。めして一幅をかゝしめ給ふに、畫法正しく氣韻また凡ならぬに愛でさせたまひ、その出身を尋ね給ふに、肥後の產と答ふ。されども言葉のはしの鄙めかざるに怪しみたまひ、「その本貫師家傳來を委しく語れ。」と宣ふに、主馬辭することあたはず、「元は豐後の產にして、國司につかへて都にとどまり、たま／＼國にかへらんとして海賊の難にあひ、妻なる者もむなしくなりしに、幼きとき水練の術をすこしくならひたるに、からき命を保ちて商船にたすけられ、國にかへるに繼母の姦きより、都の繁華に身を失ひ零落したりしと、あらぬ罪を數へて、一族どもに見限りてよるべなく、賴みおもふ京都の國司の館には打續きて早世したまひ、他家より家を繼ぎたまふと聞くに、賴む木の下雨もりて所さだめずさすらへありき、肥後にいさゝかの所緣侍りて、それにやしなはれ、惜しからぬ命ながらに一度汚名をもすゝぎて、父なるものゝ墳墓をも掃ひて、その後は出家して、先だちたる者の菩提をも吊ひてんものとおもひ侍るより、繪のことは都にありしとき少しく指を染めたるを、今日の烟のよすがになし侍るのみにて、何の師傳と、をこがましくきこえ參らする事も侍らず。」と、淚にくれて答へ申すに、國司つく／＼見給ふに、姓名は變りたれども、面ざし紛ふかたなき晴宗なりと覺しければ、裂帛の琵琶を出して、「これなん覺えあるや。」と宣ふに、主馬驚いて、「申すもおそれ侍れども、やつがれ往年秘藏したりし裂帛と申すにたがふことなく覺え侍る。」といふに、國司いよ／＼晴宗なる事をしろしめせども、わざと、「汝妻子とてもなく、世にたのみなき身なれば、われに仕へて賤務をもとらんや。」主馬拜伏して、「犬馬の勞をつくさん。」といふ。國司また僞りて云く、「さいはひ我に一婢あり。出身いやしからぬ者なれば、汝めとらばわれ義女としてめあはせんはいかん。」主馬云く、「尊命の重き、背き奉る理なし。たゞ、此一事は鄙心安からざる所あり。亡妻罪なくして賊手に死し、某生を偸みて今日に至りても、身の置所なきまゝ、はかばかしき追薦をもいとなまず、幽魂さだめて薄情を恨みんと心に恥づるところあれば、まして再醮の念はつゆ侍らず。願はくは高明鄙情を察し給へ。」と實情をのぶるに、國司ます／＼嗟嘆したまひ、「婚儀は心にまかすべし。今日より館下にありて安穩なるべし。」と宣ふに、主馬恩を謝して退きぬ。ほどなく北の方御產ことゆゑなく、しかも若君にて、上下その賀をのぶるに、國司より酒賜りて終日喜酒を

酌みて夜に入りて興瀾なる時、國司主馬を近く召され、「この賀筵にて汝に再生の緣をむすばしむべし。恐らくは鬼魅とやせん。驚くことなかれ、われに返魂の術あり、今見すべし。」とて、初瀬を召し給ふに、北の方とくより初瀬には、「明日こそ汝が剃度をゆるすべければ、今宵はうき世の花の名殘に。」とて、侍女に仰せて衣服をあらためさせ、よろづきよらにかざりたれば、さなきだに麗しきが上に盛飾濃粧の風流をつくしたる、誠に天津乙女の月の宮を出づるかとうたがはる。侍女いざなうて國司の傍に坐するを、いかなる上臈やらんと面をあげてよくよくみれば妻の初瀬なり。初瀬もその小次郎なるに、こはいかに夢か現かと涙こぼれて詞いでず。人々のおはすをも打忘れて取りすがりて且悅び且なげきて、たがひに涙はとゞめ得ず。國司座にむかひて、初瀬が貞操なる又晴宗が心の變ぜずして誠あるをかたり給ふに、一座みな感稱して國司の仁惠を知りぬ。國司盃をとりて初瀬にたまひ、「汝今生に賴なかりしものを、今はからずも未了の緣をむすぶ。初瀬の名をも瀧川と改めて、われても逢にあひみる月の盃を晴宗に與ふべし。晴宗又もとの姓名に復して、幸に下司の闕けたるあれば我に仕ふべし、かの裂帛の琵琶もかへしあたへむ。なれども枉げて我にあたへよ。裂帛の名も哀怨に出でたれば、今より有明と名づけて秘藏すべし。われまた美意をつくなふため婚儀を助けん。」とて、侍女に命じ給へば、白銀百枚いろ〳〵の小袖十重をさゝげ出でたり。夫婦の者天を拜し地に謝してその恩惠の雨山なるを喜び、これより長く國司に仕へて恩顧また他にこゆるにぞ、國なる一族もこのよしを聞き、纔付のさかしらなるを知りて昔のごとく親しみたりしとぞ。誠に物の離合みな其數ありて其緣盡きされば胡越も遠からずといへども、かゝるたぐひも又ためしすくなく覺え侍る。

宇野六郎廢寺の怪に逢ふ事

貞治應安の頃、室町家は細川賴之、義滿將軍を輔佐して、天下を以て任とすれば、いつしか南方の兵衰へ九州の勢疲れ、楠氏も兵機を擧ぐるに力たらず徒に回天の氣を吞み、新田の一族も北越の雪にうづもれ、回復の春をしらず。闔國漸く靜に、足利の武威大いに震ひ、海內一統して初めて干戈ををさむる頃、宇野六郎俊勝、岡部八郎資忠といふ二人の才子あり。父祖は北條家の功臣なりしが、元弘

赤族の後はいづれに屬するともなく、近頃都に登りて、もとより一族といひ竹馬の友なりしゆゑ、出づるに馬をならべ、入るに床を同じうして、水魚のまじはり淺からずといへども、二人の志操大いに異なり、六郎は生質聰明にして文學を好み風月を友とす。八郎は生得心たけく膽太くして平日獵を好み武事を學ぶの外、餘をかへりみず。世の人荒八郎とよびなせり。六郎常々八郎が匹夫の勇を諫めて文學をすゝむれば、八郎また武門に生れながら柔弱にして膽氣なきことを譏りて、その趣異にして互に容るゝことなし。六郎或る日鞍馬の邊に所用ありて出でたりしが、秋の日の暮れやすき、殊に折しる時雨に路うるほひ、おもひの外に日を暮して、從者とても具せざれば、唯一人北山道をたどるに、雷雨夥しく咫尺も見えわかねば、暫しと路の邊の辻堂と覺しき軒にたゝずみて晴間を待つうち、奥を見やるに燈かすかに人のけはひするに、さては行すましたる世捨人にてあるや。かく人家はなれたる所にひそみゐたらんは、心もさぞや澄み侍るらんとおもふより、立寄りて發心のいはれをもきこえたく、おとづるゝに、主の僧は圍爐の邊にうづくまりて念誦し居給ひしが、六郎を見て「常住の田荒れて清衆もちりうせてよりは、檀越の履をいれたる事もなき草庵に、めづらかなる賓客なり。」と親しき言葉に、六郎も爐邊に居よりて木の葉折りくべて、共に世の興廢などを物語るに、主僧器に椎をもりて出す。六郎數粒を食して、味また世の常ならず。暫くありて表に人の音するに、主僧云く、「秀才驚くことなかれ。この所閑寂なるをもて、山林の隱士、巖下の道人、こゝに集りて參話す。秀才も席に列りて塵腸をあらひたまへ。」とあるに、六郎よろこびて待ちゐたるに、程なく入來るを見れば、長七尺有餘にして僧とも俗とも見えわかぬが、髮鬚おどろに亂れ兩眼黃にして、霜の眉たれたるをかかげて座につくあり。或は衣の破れたるに肩をあらはし、頭とがり耳ながく面漆をさしたるごときが、鉢の子をさゝげたるあり。又は頭を布やうの物にてつゝみて、身には襤褸をまとひ形枯木のごとく、面するどに眼は日月のごとくなるもあり。異相の者五六人、おの〳〵主僧に禮をほどこして座につく。六郎大いに驚き魂身につかず、ふるひながらも末座に窺ひ居る。主僧云く、「今宵秀才の來るあり。われ、これをとゞむ。各位とがむることなかれ。」座客みな諾して六郎を顧みて笑うて云く、「秀才を慰めんため、薄術を呈すべし。」とて、一人空に向うて秘

文と覺しく唱ふれば、一聲の霹靂ひらめき黒雲庵にみちて、中に小龍ありて、飛動して遂に鐵鉢にとゞまる。一人手を拍すれば、大風樹木を倒し瓦をとばせて、一陣吹きしきりて後に雲晴れて龍の所在をしらず。六郎初より魂とんで徧身に汗を流し、面土のごとし主僧笑つて、「無益の戯に賓客を怖れしむることなかれ。」と制したまへば、座客席を正して餘事を論ず。その語るところ多くは上世のことにして、當代の事にあらず。兎角するうち、一人表の方を見やりて大きに驚き、「荒八郎こそ來りたれ。」といふほどこそあれ、主僧は走りて眼藏にかくれ、座客は狼狽して四散す。六郎も、こはそもかゝるあやしき上に、いかなるものゝきたるやらんと、逃るゝ路なければ床の下にかくれて窺ふに、把火に路をてらして來るものあり。おそろしとは思へども、ちかづくをよく〳〵見れば朋友八郎なり。六郎蘇りたる心地してあらましをかたれば、八郎笑つて云く、「足下のかへり遲きをいぶかり、迎へになんまかりたるなり、足下のみろところ狐狸のたぐひの妖をなすなるべし。さるにても妖怪すら、人間に荒八郎あるをしりて怖るゝこそ本意なれ。」とて、把火をもちて席をてらせ

ば、器に椎をもりたりと覺えしは、破れたる鐵鉢に鼠糞うづたかく滿ちたり。圍爐は護摩壇のくづれたるにて別に物なし。眠藏と覺しきを尋ぬるに、古佛の支分欠損じたるが一體たふれたるあり。主僧と見えしは是なるべし。されどもその餘のものこそ訝しけれとて、くまぐ\を尋ねもとむるに、簷の下なる所に十六羅漢仁王などの、或は片身あるは手足もかけ損じたるが、五六體まろびゐたり。「必定妖怪は此ものどもの業なるべし。物、千載におよぶときは必ず妖をなすといふ。あやしむにたらず。」と、八郎一所に束縛して、火をつけて是を燒きすつ。六郎は神氣いまだ定まらず。八郎云く、「足下平日の文學、胸中萬卷の書、今用ゐるにいかん。鼠糞に飽くより外なし。」と笑ふ。六郎更に言葉なし。夜已に明けたれば歸らんとするに、六郎云く、「かゝる古

物を存するをもて見れば、この所一大伽藍の舊趾なるべし。斷碑の類にても埋れあらんもはかりがたし。いざや尋ねん。」とて、八郎もろとも四面をもとむるに、西南の叢の中に丈餘の大石倒れふす。苔を拂ひてよくよく見れば碑石なり。さてはとて讀まんとするに、文字も剝落して纔に數十字を辨ずべし。水をそゝぎ苔を

うがち、からうじて其大略を見るべきに、八郎に向ひて、「足下試みに是を讀んで、寺の來歷をしらしむべし。」といふに、八郎云く、「前言の報い早くきたれり。文字の小敵は足下にゆづる。」と笑ふに、六郎碑文を讀み畢りて云く、「寺を莊嚴寺と名づけ本願上人は智證大師、檀越は藤原の闕雄、碑文菅原淸岡作なり。闕雄は內麿呂の孫眞夏の息にて、世に東山進士と稱する人なり。淸岡は善主の叔父にて當時の宿儒なり。寺のふるきを知るべし。六百年餘の古物存したるこそ幸なれ。よしや殘簡斷碑にもせよ、名儒の大作なんぞ賞せざらんや。今時杜撰の者みだりに名を貪りて金石に雕りて、醜をあらはし臭を賣る類と比せば、玉と瓦とのたぐひにもあらず。」と、限りなくよろこぶに、八郎、「妖は某が武名に伏し、魅は足下の文才にはれたり。」と笑へば、六郎云く、「古佛は足下の毒手に死し、舊碑は某が愛養に生きたり。物の幸不幸同じからずといへども、靜なるをまもり辱を忍びたる舊碑の德なり。」とて、うちつれて歸りしが、幾程なく六郎は細川賴之推擧して義滿公の師範となりて、文名世にかくれなく、八郎は明德の亂に戰功ありて數箇所をあて行はれ、後には鎌倉にくだりて、上杉叛逆の頃まで存命して度々の忠戰に家名をおこして、子孫東國に榮えたりとぞ。

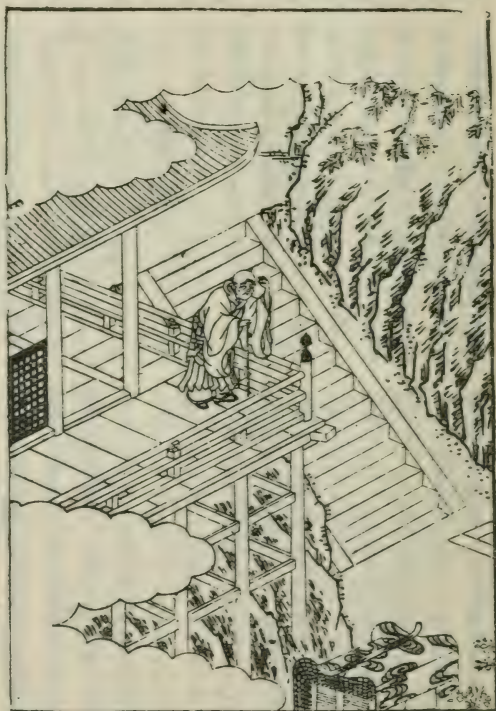
席上奇観垣根草三之巻終

席上奇觀垣根草四之巻

小櫻奇緣によりて貴子をうむ事

大和の國高市の郡に小野兵衞といふあり、代々農家にて家富榮えて一郡の豪家なりしが、夫が子に太夫通明といふあり。幼より御堂殿に宮仕へて諸士たり。父の兵衞身まかりて後は、故郷に歸りて橘の何某が娘をめとりて父の業をつぎ、公の禮節に身心をくるしめんより、村野の活計天年を全うする基とよろこび暮しけり。然るに、年四十をすぐるまで一子とてもなく、明暮これをなげき、老のね覺のたのしみにもあはれ子といふもの持ちたらばとおもふにつけて、誠や枯れたる木にも花さく大悲のめぐみ、などかいのるに甲斐なかるべきと、夫婦もろとも初瀬寺の觀世音に一七日參籠したりしに、夢ともなくうつゝ心に、御帳のうちに妙なる御聲にて、「汝等は都清水の本尊こそ有緣なれ。とくかしこに詣でよかし。」と宣ふと覺えて、其感應のむなしからざるをよろこびて、佛のをしへにまかせ都清水に籠りて、「求男求女のおんちかごと、心念不空の御いさをしたがはせたまはずは、あはれみたまへ。」と、一すぢに祈るに、七日滿つる曉に、ねむるともなくまどろみたりしに、うつくしき童子一人、手に今をさかりの山櫻一枝もちたまひしが、やがて妻が枕のほとりにさし置きて寶殿に入り給ふと見てゆめさめぬ。夫の太夫に此よしを語りて、所願むなしからぬしるしと、猶も賴をかけて下向したりしに、ほどなく只ならぬ身となり、十月滿ちて女子をまうく。夫婦のよろこびたとへをとるにものなし。靈夢にかたどりて小櫻と名付けて、手のうちの珊瑚といつくしみそだつるに、まことや大悲の授けましましたるしるしにや、天性の艷色、玉をあざむき花もはづるよそほひ、父母の心はいふもさらなり、近隣の者も其國色をしらざるものなし。齡もすでに最中の月にちかづけば、あこがれ慕ふもの數をしらず。中にも一族のうち河邊三郎芳賀十郎なるもの、切におもひ入れて、我むかへとらんと爭ひて、仲人をもて太夫夫婦に其よしきこゆれども、同じ一族といひ何れ隔なきにおもひわづらふうち、國の郡代何某、其子のためにむかへんと、度々使をもてせめたりしに、太夫おもふやう、老らくのたのしみ、只此ものにあり。外に嫁せしめ

んは、もとより本意ならず。されども今その贅婿を議せば、爭を生ずる基なり。暫し都にのぼせ、いづかたへも宮仕させて、ゆるく是をはからば、穏便の計なるべし。其うへ、玉を塵に埋まむよりは、はからぬ身のさいはひもあらば、老らくの榮行く末も見まほしなどおもひきはめ、取りしたゝめて都にのぼせ、時の關白家に宮仕させける。郡代をはじめ河邊芳賀も遺恨にはおもへども力なくてやみぬ。かくて小櫻は宮仕の後は、野路の梅がえを御園にうつしたるこゝちにて、ひとときは容儀もすぐれ、歌の道、手習ふわざまで、をさ〱世の人並にはまさりければ、政所の御いつくしみふかくおはしけり。頃しも立ちかへる春のけしき、彌生の空といへば柳櫻の錦おりわたす都のながめ、さなきだに大宮人のいとまありげに、そこよこゝよと花に心はあこがるゝ折しも、關白家の政所東山にさくら狩して、いさや名にしおふ地主の櫻をとて車を東南にきしらせ、やがて中門にさしよせて、政所をはじめあまたの女房達よりつどひ、袖をつらねて幕となし、絹の香に空も薫るばかり、さぞな花の本意ならめと、けふの花見はこゝにとゞまりぬ。其頃清水のほとりに年久しく行ひ

すまし、うき世を雲のよそに見かぎりたるひじりすみ給へり。むかしは叡山横川の學匠にて智淵中將と呼びまゐらせて、僧綱もおもひのまゝすゝみたまひ、公家の梵筵につらなり一山の學徒に仰がれたまひしかど、中々に名聞ぐるしとて、山を離れてさすらへありき給ひし後、此山の奥に形ばかりの庵ひきつくろひ、弟子の僧一人ならで具したまふものもなく、明暮法華讀誦の外は大悲の寶號を念じておはせしが、野も山も花さき鳥鳴くにぞ、さてはうき世の春にこそ、我もまた常ならぬ世になぞらへても詠めんものをと、けふしも庵を出でて地主のほとりにたちやすらひたまひ、誠や人家のへだてなき山の景色と、杖にすがりて遷流の觀をこらし居たまふに、小櫻は何心なく政所のあそばしたる短册をもちながら、とある櫻の枝に手をかけたりしを、聖一目見給ふより、いかなるすく世の惡緣にてか侍りけん、さすがの大道心もたちまち心ゆるみて、こはそもいかにや、かゝるみめかたちうるはしき女もあればあるものかは。古の美人ときこえしも、などかたとへにとるべき。離欲の仙人が帝釋天の后に通をうしなひたるも、かゝる類なるべし。常々不淨觀の前には、ひたすら

女はけがれたるものから、臭皮袋とも見すてしが、それはたゞみの女にて、かゝる美人は何れのところにか不淨の念のたよるべきか、あなうるはしと、うつゝ心なく見とれたまふに、小ざくらも後に人やあると、かづきたる絹すこしかいやりて見かはしたるに、八そぢにあまるひじりの目もあやに見とれたまふさまに、けしからずとやおもひけん、かほそむけたるにまなじりは猶のこりたるが、なほ媚ありて蓮葉に露こぼれ、曉の月山の端にかすかになるまで詠めやりたまひしかども、さすがはとし頃、行ひすましたまへるしるし、きとおもひかへし、こはそも佛のみまへにてちかひたることのたがひたるよと、淨業障の文、誦じすてゝ庵に引籠り、又も坐禪の床にのぼりたまへども、介爾愛欲の雲きりにさとりの月かくれ、一念起動の波風に禁の堤くづれ、護摩の烟にふすぼりたまひし本尊もありしすがたに見まがひ、さとりの心いつしか雲井の空にまよひて、夜晝となくおもひわづらひたまひ、遂には重き病にそみ給ふ。されども、われからこがすと覺して醫療をも用ひたまはねば、弟子の僧もせんすべなくて日を送るうち、山科の宰相ときこえしは、値遇の緣ありて折には庵にまうでたまひしが、此やうを見たまひて「など醫師をもめさゞるや。御いたはりは何やらん。」と、さまざまなぐさめたまふに、聖枕をもたげて、涙ながらにありしあらましをかたりたまへば、宰相驚ぎて「さては道心のいみじくおはすをさまたげ奉らんと、障碍神のわざにてこそ侍るらめ。さるにても御心をやすんじ給へ。毒をもて毒をかる方便、下官はからひ申すべし。」とて其日の花見車をしるしに尋ねたまへば、やがて關白家の御車にて、その女こそ新命婦小ざくらとたしかにいふものあり。宰相こまごまと消息して「かゝる貴き聖の夫ゆゑに、末の世かけてまよひ給はんも、淺ましくもそらおそろし。とても世をさりたまひてんこと、風の前の燈きえぬ間に一度きたりまみえたまはゞ、そこのためにもあしき緣にも侍るまじ。」など、理せめていひ送りたまへば、小ざくらもとより心ある女にて「うれしくもきこえたまふものかな。とくまゐりてこそ申さめ。」といらへて、あくるあした淸水に尋ねきたり「消息たまはりし女こそまゐりたれ。」と、具したる女に案内させ、やがてひじりの枕のほとりにちかく居よりて「此ほどの御いたはりは、つたなき自らゆゑときこえ侍るに、かへすがへすも罪ふかき身を持ちて、一度きよらかにさとりたまひし御心をくるしめ奉ることのあさましさよ。さ

るにても、すく世いかなるえにしの侍るらん。又末の世のやみ路をも照したまはるべきわが身の幸を、御佛のこしらへたまひし事にやとおもひわきまへて、御勞をも見もし御心をもなぐさめ參らせんため來りまみえ侍る。」と、懇にきこゆるにぞ、聖涙をおさへて、「さらば某が年頃讀誦の功つもりたる法華十萬部の、最上の功德をのこりなく讓りまゐらせん。此すゑいかなる人にも馴れ給ひ、男子をまうけたまはゞ攝政關白、もしや出家となしたまはゞ僧正僧都、姬ならば女御更衣。是なんしるしとし給ふべし。」とて、弟子の僧に筆をとらしめて、

多年愛養菩提樹
留遇人間第一春

二句を吟じ畢りて座をくみ掌を合せて、終にこときれたまふ。小櫻おどろきて雨露となげきかなしめども其甲斐なく、まして宮仕の身なれば、心ならずもそのまま歸りし跡にて、山科家より荼毘の儀とり行ひたまひ、鳥部山に葬り供養さまざま沙汰したまふ。小櫻も折にはまうでて、「今はの御言葉たがひなくは、末々は一宇の伽藍をたてまゐらせん。」と祈りしが、ほどなく宇治殿におもはれて、君達姬君數人出來て、いつくしみ深かりし事ども、聖のことば、露違ふことなく、みな〳〵爵位昇進、心のまゝにときめきたまひけり。小櫻宇治殿に事のやうをきこえまゐらせて、一宇を建立し如意山普門寺となづけ、興福寺の千覺律師供養の導師にはたち給ひし。封戸あまたよせられてめでたき伽藍なりしが、近き頃までは東山に其舊趾侍りしとぞ。

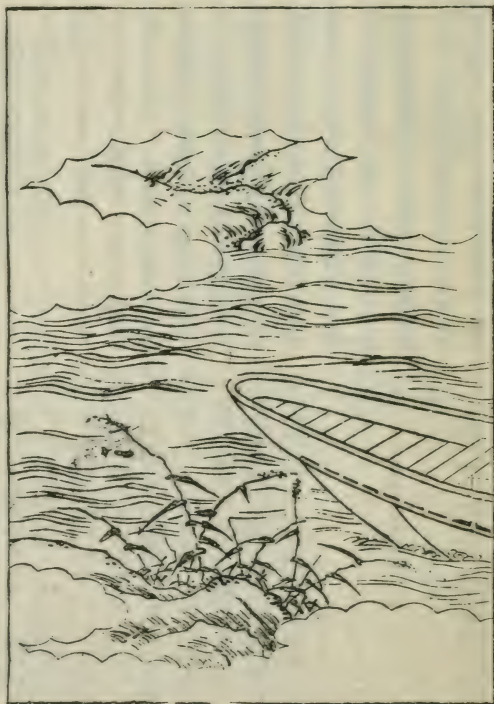
山村が子孫九世同居忍の字を守る事

中昔、江州守山に山村庄司といふものあり。代々酒を醸して酒職近鄕に高く、家富みさかえけり。庄司生質慈惠ありて、すこしの才覺もあるなれど、一箇の癖ありて夫がために不測の禍を引出せり。其病根は短慮性急にして沈思寛容することあたはず、やゝもすれば鬪諍打罵におよぶ。まして少しの酒氣を帶ぶる時は、心上の恚火に油をそゝぐごとく、人これをおそれずといふことなし。あるとき近隣の饗に應じて、酒氣七八分にして暮に及びて家にかへるに、門前人多く集りてかまびすしきに、何事にやとみるに、薯蕷をうる老夫庄司が家奴と價を論ずるより、遂に詞あらくたがひに爭ふなり。庄司たちよりて利害をさとせども、老夫却つて惡口に及ぶに、酒氣漸くみちたる上、癇疾の恚火盛んに燃えて、有無を論

ぜず拳をあげてつゞけ撃てば、老夫そのまゝ倒れて悶絶す。家奴大いに驚きて、家内に扶入れて湯薬を用ゐるに、氣息喘喘として有無の間にあり。庄司もこれに驚きて酒氣忽ち消して、初めて追悔懊惱すれどもかへらず。近隣の醫を招きて針薬さまざま手をつくすうち、漸々に氣息たしかに目を開きてあたりを見て、急に起上りて云く、「老夫平生痰火にて、折にふれてはかゝる事侍り。須臾ありて平復すること常のごとし。はからざる煩をかけまゐらせし。」と、初に似ず慇懃に謝するに、庄司をはじめ家内のもの蘇りたるこゝちして、酒飯をあたへてなほも布一疋を出して、主人の短慮よりおこるを謝す。老夫幾度も辭して後これををさめて、其喜色面にあらはれて歸りぬ。此時すでに二更の頃におよぶ。家内打寄りて奇禍を免れたるをよろこび、且庄司が輕卒を諫めて、やがて臥しぬ。夜半ならんとおもふ頃、頻りに表をたゝく者あり。「誰そ」といへば、「野須川の渡守にて侍るが、一大事の事あり。主人に密に見えまゐらせん。」といふ。庄司いぶかしながら一間に出づれば、渡守包みたる物を出して、「是なん見知りたまふにや。」といふに、よくみれば宵に老夫に與へたる布なり。庄司あやしみてこれを問へば、渡守左右の人をしりぞけて近く居より、「今夜二更の頃、例の薯蕷を賣る老夫川を渡らんことを求め、中流にして悶絶するに驚き、向うの岸につけてさまざまいたはるに、氣息出來て云ふやう、今日しも山村殿の爲につよく打たれ侍りしが、其折は格別の痛をもおぼえ侍らざりしゆゑ、暇申して門を出でて後漸々に背の痛堪へがたく、爰にいたりては一歩もすゝむことあたはず、むなしく船の上に死すべし。惜しからぬ命なれども、老夫生國は美濃の國土岐山里の者にて、妻子も侍れば此のよし傳へたまはりて、老夫が非命に死したる事をきこえたまはれかし。鏡の宿までまかれば、しりたる人も侍るなどいふうちに、痰喘せまりて遂にをはりぬ。此事やすからぬ一大事にて、君の禍まのあたりにあり。故に密につげ參らす。」といふに、庄司迅雷頭のうへに落ちかゝるごとく、面色藍となり戰ふるひて渡守が好意を謝し、猶その方便をもとむ。渡守暫く案じていはく、「此事、かたきに似てやすし。今宵三更、人のしるなし。死骸を夜あけぬさきにひそかに葬りたらんに、誰かはその影迹をしるものあるべき。」と、事もなげにいふに、庄司大いに喜び、「ひたすら其方の芳情による。我一人のみならず、公の沙汰に及ぶときは、一門の辱一郷の禍となるべし。ひそか

に葬りて得さするならば、我その勞を報ずべし。」とて、金子二十兩を出して謝儀とす。渡守猶不滿の色あるを見て、別に白銀拾枚を以て酒飯の料におくる。渡守よろこびてこれを納め、又云く、「一人の助力を貸し給へ。我一人にては夜中に事を辨じがたし。夜あけなば人口をふさぎがたし。」といふに、密事の事なれば、家に久しきものの子に、周七といへる心しりたる者あり。これを呼んで始末をかたり、渡守に添へて遣はしぬ。庄司はいねもやらで、一時の短慮より不測の禍に陷らんとせしを思ひつゞけて、周七が音信を待ち居たるに、天明にいたりて歸りて、死骸を川上の山の邊に埋み、薯蕷のいりたる籠をも、同じくうづみ終りてかへりたるよしを告ぐるに、はじめて安心して、周七にも銀十兩をあたへて其勞を償ふ。是より庄司つゝしみて短慮の癖を改め忍の一字を守るに、家内の者も氣質の變じたるをあやしみぬ。周七もとより家の子といひ密事にあづかりたる者なれば、夫が母をもひとしほ心つけて、恩顧他にこえたるまゝ、漸不敬のふるまひもあれども、庄司よく待して見ゆるしぬ。翌年の春に至りて、庄司が最愛の妾前栽に出でてあそびたりしに、周七も出來りてならび居たりしを、庄司物影よりこれを見て、不良の事ありとおもひて周七を散々に打擲し、前來の痼疾一時に發して猶も怒りやまず、即時に家を追出す。周七其實なき事を詫ぶれども、愛妾の事よりおこりたれば、日頃の恚火十倍して、罪を糺さずして遂に家を出しぬ。周七憤にたへず。直に公に出でて庄司が老夫を殺したる始終を訴ふ。時の郡代、そのまゝ庄司が家に捕吏をつかはす。庄司は家にありて帳簿を點檢し居たりしに、おもひもよらず捕吏數人入來りて、「公の命あり。とく來るべし。」といふに、驚きて其罪狀をとへども、「事の有無は公廨にてこそ決すべし。」とて、一條の繩索に縛して追立てさる。家内の者其來歷をしらず、禍天よりふりたりと號哭すれども、いかんともすべきやうなし。庄司を召捕り來るよしを申すに、郡代其前年老夫を打殺せし事を糺す。庄司密事露れたりとおもへども、「その實なし。」と陳ず。郡代すなはち周七を呼んで、「汝此者をしりたるや。」とあるに、「庄司其周七が訴へたるをさとりて陳ずべきやうなく、拷問をまたずして罪に伏す。郡代、吏に命じて庄司を獄に繫がしめ、周七をも禁獄せらる。渡守を尋ぬるに、去年德づきたる後は、何地へか行方をしらずといふに、「彼の者、老夫が生國をもしりたる上、罪も又のがれえず。急ぎ召捕るべ

し。」とて、四方遠近に追捕せしむ。庄司獄にありて日夜號泣して再生のみちを案ずれども、人を殺すの律、嚴科のがるべからざるをしりて、念佛誦經して哀を求むるより外なし。家にある妻子は猶更夢のこゝちして、雨山となきかなしむ。一族家の子より集りて脫路を商議すれども、萬死の中一生のたよりもなし。其上當時の郡代、方正にして理非明白なれば、賄賂をいるゝみちもなし。此上はとて神に祈り佛にかこち冥祐をねがふ。すべて人情として、無事の日は餘所に見なして、災患おこる時にいたりて除災のため佛神にかこつ事、古今同じき所にて、妻子をはじめ家の子まで、心々に神を祈り佛を念じて脫路をもとむ。五三日をへて暮のころ、前年の老夫薯蕷を荷ひ門に入來る。家内のもの白日に幽靈こそとてあわて騷ぎにげまどふに、老夫あやしみながら内に入りて疎濶をのべ前年の厚情を謝し、薯蕷一つとを出してしるしとす。家内のものはじめてその鬼ならざる事を知りて、其詳なる事をとへば、「去年の冬より勞りことありて里を出でず。漸々氣力復して、前年頒をうけたるを謝せんため來る。」といふに、驚きて庄司が罪に陷りたる始末をかたるに、

老夫手を拍つて大いに驚き、「我その妄誣の源をしれり。急ぎ公に伴ひたまへ。主人のために無實の罪をすゝがん。」といふに、妻子をはじめみな／＼五月雨の晴間に日を見たるこゝちして、手の舞ひ足のふむことをしらず。やがて老夫を伴ひて下司に此よしを訴ふるに、郡代これをめして其委しきことを問ふ。老夫云く、「去年酒家を出でて野須の渡しに近づくに、夜已に二更にして往來の旅人もなし。渡守例にことなりて歸ることの遲きをいぶかるに、庄司殿の家にありて酒飯をたまはりたるはじめ終りを具にかたるに、渡守その布を買はんことを求む。老父終身荒布にて事たれば、彼にあたへて價をえばやと、鳥目一貫文に代へて讓りぬ。渡守又云く、薯蕷をいれたる籠、我用ゆる所あり。これをも買はんといふに、むなしき籠を持ちかへらんよりはと、望むごとくあたへてかへりしが、此二物を以て質として僞りたる姦計なるべし。」といふに、郡代云く、「我もとくより其間姦計のあるべきをさとりて、追捕を嚴にして、頃日渡守を捕へえたり。」とて、渡守をめさるゝに、渡守老夫庭上にあるをみて陳ずべきみちなく、姦計を以て庄司を誣ひたるよし罪に伏す。郡代か

されて云く、「汝そのとき葬りたる死骸はいかゞして辨じえたるや。」渡守云く、「其夜川上より溺死のもの流れ來る。岸にあげて人の尋ね來るをまつ頃しも、老夫がものがたりに心うごきて、かくははからひたり。」といふに、埋みたる骸を發いてあらためさせらるゝに、としをへたるといへども正しく溺死の者なり。郡代一々罪狀を考へて判じて云く、「渡守首惡なること論なし。されども人を殺すの律を犯さず、もとより利を貪るよりおこりたれば、死刑一等を減じて市にさらすこと三日にして鬼界が嶋に遠流すべし。周七主人の惡を發くのみならず、誤りて妄誣の罪に陷れんとす。況や庄司密事を助成したるに報いて厚く待するをや。汝が罪甚だ大いなり。庄司が門前にさらすこと三日にして梟首すべし。庄司罪なきに似たれども、源汝が性急より起り、まして一意に打殺したりと知りて密に埋みおく事、上を誣ひる罪あり。過料として鳥目拾貫文を出すべし。又周七が罪にくむべしといへども、彼を追ふ事は汝が性急にして、罪の虚實を辨ぜざるより出づ。これがため彼が母終身の扶助、汝さたしえさすべし。母たるもの罪なく、まして汝が家に久しきものなり。よく〳〵哀れむべし。老夫その姦計をしらずして轉賣したりといへども、厚意を以て送りたる布を半途にして賣りたるより起る。況やはじめ汝が過言より庄司が怒を引出したれば、今發きたる溺死の死骸を改葬する勞は、汝これをつとむべし。一人の辨じがたきことなれば、庄司また最初かれと爭ひたる奴を出して助けしむべし。」と、輕重明白に決斷あるに、おの〳〵其罪に伏しぬ。庄司不測の禍を幸にしてまぬかれたれども、老夫もし來らざる時は一線の生路をしらず。よしなき短慮より無窮の禍端おこりたりと、心を改め「忍」の字をつねに守り、壁上に一つの忍の字をかけて短慮の疾を療じ、子孫にをしへてこれを守らしむ。其子孫連綿として九世をへて、同居して家富み榮えたり。國の守其よしをきこし召して、「いかなる教ありてか、家ををさめ業を守る。」とたづねたまふに、「世々忍の字をまもりておこたらず。」と申すに、國守感じたまひて綿百把をたまはりしとぞ。今の世までも其子孫のこりて侍ると、守山の里人のつたへ侍りし。誠に過をあらためてかしこきにうつる聖のをしへむなしからぬをや。

藪夢庵鍼砭の妙遂に道を得たる事

むかしより鍼砭の妙、誠に起死回生の功あり。脈絡の會、湯液のおよばざる所、其兪穴に中るときは速效神のごとし。傳記の載するところ少なからず。李洞玄、龐安が類、其聖といふべし。北條時頼の時に藪夢庵といふもの、異人に逢うて其術を傳へしとて、往々不測の功ありて其名ます〳〵著れたり。隣家の孕婦、數日産に臨みて分娩せず。夢庵云く、「兒已に胞を出づといへども、母の腸を執へて放さず。時を經ば母子ともに救ふに術なからん。」とて、兒の手のあるところを捫して虎口に鍼す。兒手を縮めてすなはち生る。兒の虎口果して鍼痕あり。誠に一時の權、六百四十九穴の外にいづるもの、常理を以て論ずべからず。其頃時頼の愛妾久しく中風のごとくにして、諸醫手をつくせども效なし。夢庵を召して視せしむるに、夢庵笑つて云く、「是邪疾なり。湯藥及ぶべからず。」とて、鍼を出して其足踝上二寸ばかりを刺す。暫くありて婦人醒覺するがごとくにして云く、「氣力常にことならず。はじめて疾起る日より一人の裝束したる男來りて、城外又は山林の間に誘ひ行く。今日しも伴はれていづるとおもふうち、彼の男、路のほとりの棘刺に足をさゝれて動くことあたはず。我そのひまに走りかへりたり。」といふ。時頼大いに褒賞して其術をとふ。夢庵云く、「刺すところは人邪穴なり。奇怪に似たりといへども、百邪の祟その穴十三處あり。鬼宮鬼信鬼壘のごとき是なり。近世の醫、みだりに術を試みて生民を視ること芥のごとく、百邪は刺すべし、庸醫のあやまりたるは我が術又施す所なし。」といふに、人皆術に妙なることを信じ、業を受くる者甚だ多し。中にも金澤原思なるもの、日夜心を潜めて其術の奧妙を極めんことを求む。漸くその粗を得て、猶たらずとしてます〳〵おこたらず。夢庵云く、「鍼砭の術、これを意にえて手に應ず。人命の至重なる、一鍼の下にあり。なんぞ麁心にして百年の命を斷送すべけんや。呼吸の消息にしたがひ陰陽の盈虛によりて、指尖天工に代るの妙あり。汝志すゝむといへども用心いまだあらく、況や術を試み業を賣るの念急なり。鍼砭の妙處傳ふべからず。暫く我に隨うて山に來れ。心氣を靜にし世念を消して、其後妙處を傳ふべし。古人石を以て鍼とす。金鐵を用ゐることなし。故に砭の字石にしたがひ、古に藥石の語あり。後世佳石なきがゆゑに金鐵を用ひて

後、石鍼あることをしらず。我異人に逢うて術を受けたる時、下野國二荒山に住石あることをきけり。いざや我に從ひ來れ。」といふに、原思悅びて從うて二荒山に入り、晝夜心氣をしづめて松風閑雲に伴ひ、俗慮妄念の穢汚をさらんとす。夢庵又やうやくに其術をさとし敎ふ。原思歸らんことを求むれども許さず。一日原思暴疾おこりて大いに惱む。夢庵は石をたづねて山奧に入りて、すべきやうなく、自ら一鍼を師傳の所に下すに、鍼、もののために留めらるゝごとくにして出でず。痛み又忍ぶべからず。折節師の歸るを見て、是を告げて術を求む。夢庵笑つて云く、「穴まことに疾に中るといへども、出鍼の法をしらざる時は、益なきのみにあらず、其死せんこと眼前にあり。」とて、別に手腕の交に一鍼を刺すに、さきの鍼忽ち躍り出でて疾愈えたり。原思慚謝して山にとゞまりてます〳〵心術を精練す。されども功名の心やみがたく、あはれ此術を以て世に施さば、誰人か右に出づるものあらん。師におよばざるは論なし。奧妙を得るを待つときは死灰となりて、なんの益かあらんと、頻りに暇を乞ふに、夢庵かさねてとゞめず其心にしたがはしむ。原思いそぎ鎌倉にかへりて其術を施し、遂に時賴に仕へて祿を賜はり富貴を得て後、二たび師を尋ねて二荒山にいたる。僕從を麓に殘して只一人山に登りて庵を訪ふに、夢庵窗下に書をひらきて坐せり。原思その恩を謝し業の成就したるを語る。夢庵云く、「幸ひ麓の人家に病む者ありて、今日こゝに來る。汝其術を試むべし。」といふ所に、肩輿に乘じ婢僕あまた具して來るあり。扶け出すをみれば我が妻なり。原思驚きてこれをとはんとおもへども、婢僕我が家の者にあらず、妻又疾殆うして氣息纔に通ず。急ぎ鍼を出して其穴を定めて刺すに、忽ち悶絕して息絕え手足冷えたり。原思周章て過ちたりしを悔ゆ。夢庵云く、「汝が術、わづかに其法を得て蘊奧の妙をしらず。おそらくは世の人をあやまち斃さんこと少からじ。」と、誡むるに、原思支體に汗流るゝがごとくして罪を謝す。夢庵一鍼を臍下一寸に下して、たちまち息出でてはじめて蘇る。其後婢僕に命じて家にかへらしめ、「三日驚かしむることなく、しづかに臥さしむべし。」と告ぐるに、喜んで肩輿に扶けのせて歸る。原思妻なることをしりて、婢を招きて其故を尋ねんとするうち、飛ぶがごとくに麓に下りて行方をしらず。原思益師のおよぶべからざるをしりて、此人もし世に出でば我が術は白日の螢火なるべし。ひそかに殺して後の禍を拂はんとおもふ念をさし

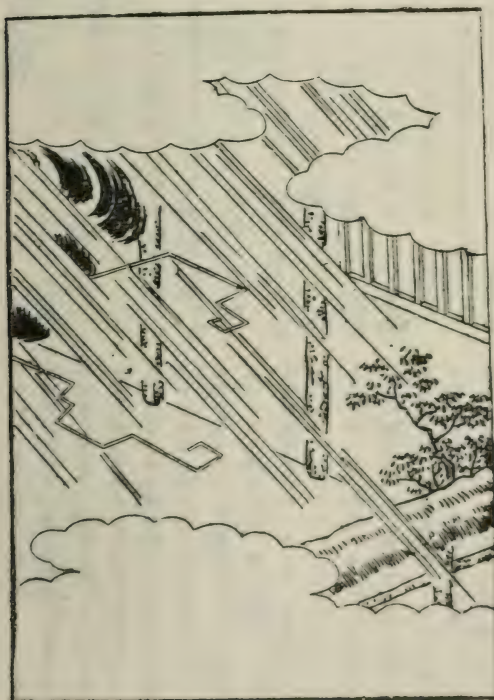
たろに、夢庵一大石を指して云く、「汝試みに此の石をさして術をしめすべし。」とあるに、原思あたはじとおもひながらこれを刺すに、鍼をれて入るべからず。夢庵云く、「術精しき時は鐵石も刺すべし。病人にのぞみて術を試むるに、堅石をさすがごとくせざれば用心粗なり。鍼砭其穴を得れば泥を刺すがごとし。しからざれば、起死の功をとるべからず。我試みに薄術をしめして、汝が心疾を療ぜん。」とて、彼の石を撫靡すること暫くして一鍼を下すに、誠に泥をさし水に投ずるがごとく、其石忽ちふたつに分れたるに、夢庵中に入るよとおもへば石合してもとのごとし。鍼穴のところより夢庵面をあらはし、「汝家に歸りて富貴をたのしめ。我は石室の中に心をやすんず。汝が累となるの日あらんや。後患をかへりみずしてとく山を下れ。」と心中の計策をいひあらはされ、慙謝するにふたゝびことばなし。原思その得道の人なる事をはじめて知りて後悔すれどもせんすべなく、家にかへりて其妻の起居をとふに、原思山に登りし日俄に疾おこりて前後をしらず。只ほのかに山中にいたりて醫を求む。君幸に座におはして鍼を下したまひしと覺えて其餘をしらず。三日を經て疾愈えたりとかたるに、いよ／＼師の得道の異人なるを信じて、愧服したりしとぞ。其後も時々夢庵を山中にして見たりしといふものあり。遂にその終るところをしらず。術の精妙かゝる神異も侍るならし。近代は無術の庸醫、人をあやまる事、不學の凡僧、士女をまどはして阿鼻に送るに同じ。原思がごとき者なほ得べからず。その術の妄なる推して知るべし。

席上奇觀垣根草四之巻終

席上奇觀垣根草五之巻

松村兵庫古井の妖鏡を得たる事

南勢大河内の郷は、そのかみ國司の府にて、南朝の頃までは北畠殿こゝにおはして一方を領じたまふ。國府の西南に大河内明神の社あり。國司より宮宇も修理したまひ、神領もあまた寄せられしが漸く義廢して、嘉吉文安の頃にいたりては、社頭も雨露におかされたまふ風情なりしかば、祠官松村兵庫なるもの、都に登りて、時の管領細川家に由緒あるにたよりて、修造の事を訴ふるといへども、前將軍義教公赤松がために弑せられたまひ、後嗣もほどなく早世ありて、義政公將軍の職を繼ぎたまふ。打續きて公の事繁きに其事となくすぎ侍れば、兵庫はもとより文才もかしこく、和歌の道なども幼より嗜みたりしかば、幸に滯留して其奥儀をもきはめんと、京極今出川の北に寓居して公の沙汰を待居たり。旅館の東北にあたりて一つの古井ありて、むかしより時々よく人を溺らすときゝたれども、宅眷とてもなく從者一人のみなれば、心にも挾まず暮しけり。其頃畿内大いに旱して洛中も水に乏しき折にも、かの古井は涸るゝことなく水藍のごとくみちたれば、近隣より汲みとる者多し。されども人々心して汲むゆゑにや、溺るる者もなかりしに、或日暮の頃、隣家の婢例のごとく汲まんとして、久しく井中を窺ひ居たるをあやしと見るうちに、忽ち墜ちいりて溺れ死したり。井水きはめて深ければ、數日を經て漸くその死骸をもとめ得たり。是より兵庫あやまちあらん事を怖れて、垣など嚴しくしつらひたりしが、去るにてもあやしとおもふより、たちよりて竊に窺ふに、中に年の頃二十ばかりと覺しき女のなまめけるが、粧飾いとうるはしく粧ひてあり。兵庫をみてすこし顏そむけて笑ふ風情、その艶なる事世のたぐひにあらず。魂飛びこゝろ動きて、やがてちかよらんとせしがおもひあたりて、扨はかくして人を溺らす古井の妖なるべし。あなおそろしと急に立ちさりて、從者にも此よしかたく制して近付かしめず。或夜二更の頃より風雨はなはだ烈しく、樹木を倒し屋瓦を飛ばせ、雨は盆を傾くるごとく、閃電晝のごとく霹靂おびたゞしく震ひ、天柱も折け地維も崩るゝかとおもふうちに、天晴れて夜も明けたるに、兵庫とく起きて

窓を開きて外面を窺ふところ、表に女の聲して案内を乞ふ。誰ことゝへば彌生と答ふ。兵庫あやしみながら裝束して戸をひらき、一間に請じてこれを見れば、先に井中にありし女なり。兵庫が云く「女郎は井中の人にあらずや。何ぞみだりに人を惑して殺すや。」女云く、「妾は人をころす者にあらず。此井、毒龍ありてむかしよりこゝにすむゆゑに、大旱といへども水かるゝ事なし。妾は中昔井に墜ちて遂に龍のために役使せられ、やむことを得ずして色を以て人を惑し、或は衣裳粧具の類を以て欺きすかして龍の食ふところに供するのみ。龍、人血をこのみて妾をしてこれを辨ぜしむる、其辛苦堪へがたし。昨夜天帝の命ありて、こゝをさりて、信州鳥居の池にうつらしむ。今井中主なし。此時君、人をして妾を拯うて井を脱せしめ給へ。もし脱することを得ばおもく報ひ奉るべし。」といひをはりて行方をしらず。兵庫數人をやとひて井をあばかしむるに、水涸れて一滴もなし。されども井中他のものなく、唯笄釵のるゐのみなり。漸く底に至りて一枚の古鏡あり。よく／＼あらひ清めて是をみるに、背に姑洗之鏡といふ四字の款識あり。さては彌生といひしは此ゆゑなり

と、香を以て其穢汚を清め、匣中に安じ一間なる所を清くしつらひて置きたりしに、其夜女又來りて云ふやう、「君の力によりて數百年の苦しみをのがれて世に出づることを得侍るうへ、不淨を清めて穢をさりたまひしゆゑ、とし月の腥穢をわすれ侍り。そも此井はむかし大いなる池なりしを遷都の時埋めたまひ、漸く形ばかりをのこしたまふ。都を遷したまふときは、八百萬の神々きたりたすけ給ふゆゑ、其むかしよりすみたりし毒龍もせんすべなくして、井中をしめてすまひ侍り。妾は齊明天皇の時百濟國よりわたされて、久しく宮中に秘め置かれしが、嵯峨天皇のときに皇女賀茂の內親王にたまはり、夫より後兼明親王の許に侍り、遂に藤原家に傳はり、御堂殿ことに秘藏したまひしが、其後保元の亂に誤りて此井に墜ちてより、長く毒龍に責めつかはれて今日にいたる。十二律にかたどりて鑄さしめらるゝ中、妾は三月三日に鑄る所の物なり。君、妾を將軍家にすゝめたまはゞ大いなる祥を得給ふべし。其上此所久しくすみたまふ所にあらず。とく外に移り給へ。」と懇にかたり終りて、かきけすごとくにして其形をみず。兵庫その詞のごとく翌日外に移りて事のやう

を窺ふに、次の日、故なくして地おちいり家も崩れたり。ます〳〵鏡の盛にして報ゆるところなるをさとりて、これを將軍家に奉るに、そのころ義政公古器を愛したまふ折なれば、はなはだ賞したまひ、傳來するところまであきらかに侍るにぞ、第一の奇寶としたまひ、兵庫には其賞として南勢にて一ヶの庄を神領によせられ、猶も社頭再建は公より沙汰すべきよしの嚴命をかうむりて、兵庫は本意のごとく多年の愁眉をひらきぬ。其後此鏡、故ありて大内の家に賜はりしが、義隆戰死の後はその所在をしらずとぞいひつたへ侍る。

千載の斑狐一條太閤を試むる事

應仁の亂は古今未曾有の至變にして、元弘建武の亂は其類にあらず。五畿七道みだれざるところなく、群雄蜂のごとく起りて各國に割據して爪牙を逞しうすること、唐土の戰國といひしもかゝる例なるべし。上一人より公卿殿上人まで、こゝかしこに身をよせてからき命を保ちて太平を待つの外なし。中にも一條太閤兼良公はいさゝかの緣を求めて、江州に亂を避けたまふ。公はもとより古今獨步の大才にて、其博識又いにしへにも類まれに、詩文和歌のみちまで一時に肩を比ぶる人なし。四書、童子訓、花鳥餘情、歌林良材、公事根元など數多の書をあらはし、後生の便となしたまへり。常々不平を抱きたまひて、「我菅丞相に勝ること三つあり。菅公は、官右府にとゞまり、我は相國に昇る。菅公は其家もとより攝關の家にあらず。我は累代執柄の家なり。菅公は唐土の事は李唐以前のみをしり、本朝の事は延喜以前のみをしる。われは和漢の古を知るのみならず、李唐以後延喜以後の事をしる。此三條彼の公に勝れども、後世我を見ること、公の萬分が一にもおよぶまじきこそ遺恨なれ。」と宣ふより、時の人太閤を請するには菅公の畫像墨跡などは憚りたりしに、たまたま心附かぬものあればはなはだ不興し給ひしとぞ。かくまで自ら許し給ふ誠に衰世の大才といふべし。されども政務は久しく武家の手にありて、損益したまふことあたはず徒に虚位を守りたまひ、夫さへ身を置きたまふ所なく、江濃の間にさすらへありきたまひて、草莽に身をひそめたまふこそ不幸なれ。頃しも愛知川の片ほとりに蟄居したまひ、友もなき荒れたる軒に都をしのび、徒然を慰めかねておはせしに、たま〳〵編戸をおとづるゝものあり。誰ぞと見たまへば、年頃二

十ばかりの少年、身にはふと布をまとへども眼中ひかりありて骨相の奇なるに、世のなみの村夫にはあらじと請したまへば、少年辭することなく座につきて、「某は此川上高野のほとりに住み侍る萱尾何某と申す者なるが、幼より書籍を好み手は卷を釋て侍らねども、寒村のかなしさ、然るべき師友とてもなく、これのみ歎き侍りしに、はからずも君此所にさすらへましますことをうけたまはりて、恐はかへりみず推して參りたれ。」といふに、太閤よろこびて其學ぶところを試みたまふに、和漢の學其博きこと海のごとく、辯舌水の流るゝがごとし。太閤大いに驚きて、「天下の奇才なり。」と、再三稱美し給へば、少年謝して云く、「敢てあたらず。されども君の尊名雷霆のごとく、僻境某がごときも幼よりこれを仰ぐ。今試みに五三を問ひ奉らん。そも四書の名、程朱に出でたるは論なし。大學中庸の二篇を表出したるは何れの時とやせん。」太閤云く、「程朱はじめて戴記の中より表出して四書の名いでたり。」少年云く、「晉の戴顒、中庸傳二卷を作る。又梁の武帝、講疏一卷、制旨義五卷を製す。宋の仁宗、王堯臣に中庸一篇を賜ひ、呂臻に大學一篇を賜はりしを以てみれば、なんぞ程朱を待たんや。」太閤其精覈に伏したまふ。又云く、「西瓜の中國に來る、いづれの時とやせん。」太閤云く、「五代の時、胡嶠といふ者戎の地より種をとり來りて、はじめて中國に西瓜あり。」少年云く、「もししからば梁の武帝、西園に綠沈瓜を食はふとあるは何物なるや。」太閤言葉なし。又云く、「竹實は鳳凰の食する所といふ、いぶかし。近頃多く生ずる所の竹實ならんや。」太閤云く、「いまだ考へず。」少年云く、「竹實二種ありて、鳳の食ふものは大いさ鷄卵のごとく、其味蜜にまさるといふ。今此方に生ずる所は、江淮の間に竹米と呼ぶものにして、生ずれば其竹ひさしからずして枯るといふ。唐句に饑年竹生花とも見えて、荒年の兆なりと李畋が該聞集に載せたり。何ぞ一物ならん。」太閤言葉なし。又云く、「曹操、關羽を漢壽亭侯に封じたる事、三國志に見えたり。其字義いかん。」太閤云く、「いまだ考へず。」少年云く、「蜀の嚴道に漢壽といふ地ありし故に、漢壽亭侯に封じたるものを、後世漢の字を世の名として、壽亭侯と呼ぶはあやまらずや。」太閤言葉なし。又云く、「論語に紫の朱を奪ふとあり、いぶかし。紫と朱と何ぞまぎるゝ事かあらんや」。太閤云く、「いまだ考へず。」少年云く、「宋の仁宗の頃より、紫を染むるに紫草を多く用ひて油紫と名づく。是我が國染むる所の

紫なり。古の紫は染むるに青とすること
なく、紫草を纏に用ひたり。鶏冠を紫色
といふを以て知るべし。唐土も淳熈の頃
よりは紫色いにしへに復して、北紫と呼
びたるよし。近世たまく染むる所の紅
紫なるべし。朱を奪ふと宣ふも宜なら
ずや。」太閤こと葉なし。又云く、「我が
國、詩のはじまる誰人とかしたまふ。」太
閤云く、「大津皇子なる事諸書に見えた
り。」少年云く、「大津皇子にさきだちて、
大友皇子河島皇子ともに五言の詩を作り
給ふ。大友叛逆の冤をかうむりたまひし
故、世の人これをしらず。日本紀にも諱み
て漏らされたるにや。」太閤言葉なし。又
云く、「羅城門の名いかなる義ぞや。」太閤
云く、「いまだ考へず。」少年云く、「羅城羅
郭などと同じ意にて外郭なり。唐の懿宗
の時羅城を築くといふ、注に外郭なりと
いふ。平安城外郭の門なるを以て名づけ
たるなるべし。」太閤言葉なし。又云く、
「木曾路は美濃の地なりや信濃なりや。」
太閤云く、「信濃なる木曾といふを以て見
るに、信濃なること論なし。」少年云く、
「承和仁壽の頃、度々兩國の境を論じた
ることありしに、勅使をつかはされ美濃
の地なるよしを定めたまへり。其後信濃
に屬したる事國史に見あたらず。」といふ
に太閤大いに憤り、かゝる小冠者に難殺
せらるゝこそやすからねとおぼせども、
せんすべなく沈吟したまひしが、忽ち一
計を生じて云く、「少年和歌をたしむや。」
少年云く、「幼より是をたしめども、ふ
つに近世輭弱華靡の體をこのまず。世の
人歌と覺えたるは剪裁の花にして生色な
し。某たしむ所は流俗に同じからず。」太
閤云く、「懷中詠草ありや。」少年一冊を呈
す。ひらき見たまふに、誠に秀逸にして
たけ高く詞なだらかなる事、定家のいは
ゆる企て及ぶべからずと歎じたまひし風
調なり。太閤卷を收めて云く、「少年全才
といふべし。されども和歌は其門に入ら
ざれば奧儀をきはむる事かたし。詠草秀
逸なりといへども、地下の風にて見るに
たらず。」と嘲りたまふに、少年冷笑うて
云く、「君の賢明なる、猶流俗の説を執し
たまふはなんぞや。聖と貴ぶ人丸赤人地
下ならずや。貫之躬恒が輩、又地下の淺
官。和歌式を定めし窺仙(喜撰)は姓氏
もさだかならぬ桑門なり。一時の風をよ
みなほさんとせし西行は、北面の士の
入道したるに侍らずや。人の心を種とす
る歌に貴賤の差別あるものならば、何ゆ
ゑかゝる輩を先達とはし給ふやらん。
雲井の上に春秋を詠めたまふも、賤が家
に折しる梅に春をしり、夜さむにうちあ
かすきぬたに夢さまして、こしかた行末
をおもひやるも、心になどか違ひ侍る

べき。よろこびかなしみの心も同じ心にて、月雪花も同じながめなるもの、などか貴賤の差別を論ずべきや。こと葉に雅俗ありて古今を論じ、心に淺深ありて優劣を定むるのみにて、人の貴賤をもて論ずるものにあらず。まして地下堂上のわかれたるは、朝家衰へ政務武家に歸してより後のならはしにて、むかしかつて其論なし。擇祿の家に地下あり、寒微の家にも殿上に登るあり。內外の名にして貴賤の名にあらず。惣じて朝權鎌倉にうつりて後は、みな〳〵虛位に居たまふより、さま〴〵の流風出來て、或は和歌の家、手跡の家など技藝を專務としたまひ、百工と其能を爭ひたまふにいたる。天朝の大臣、なんぞかゝる末技を本としたまふや。衰世のさまやむことなき業なるを、君のごとき古今の治亂に達したまひたるすら、かゝる事を眉目とし給ふ。今日の大變もみづから招きたまふといふべし。」と、憚るところなくいふに太閤心醉へるがごとく面責になり給ひ、一言のいらへなかりしが、ひそかにおもひたまふは、此少年必ず非常のものならん。是をこゝろむるは、劍と鏡とにしくものなしと、帶劍と鏡一枚を出して「少年これをしるや。」と宣へば、少年色よろこびずして云く、「君おそらくは我を鬼魅妖狐の類とおもひたまふなるべし。天地の廣き、なんぞ奇才なしとせん。衰世なりといへども、君のごとき命世の大才を生じたり。後生の畏るべき、孔子すらあなどりたまはず。夫、劍は陽にして威ある物なり。鬼魅は陰にして形なき物なり。威あるを以て形なきに逼るときは、其妖、鎮紮して敵する事あたはず。此故に鬼魅は劍をおそる。鏡また陽にして明なる物なり。精は陰にして僞變せる物たり。僞變せるもの至明に逢ふときは、其形を暴露して逃るゝ所なり。此ゆゑに狐狸花月の妖みな鏡を畏る。むかし抱朴子此事を論じ置きたり。某これを知る事久し。君此の二物を以て試みたまふことの拙さよ。」とて、傲然として畏るゝ氣色なし。太閤謝して云く、「聊か戲れたるのみ。少年意に挾むことなかれ。我此ところにありて無聊沈鬱に堪へず。少年、暫くこゝにとゞまりて、ゆるく古今を談ぜんはいかん。況や今日暮に及びたり。夜もすがら旅館の徒然を慰めん。」と宣へば、少年いなむことなくして一間にしりぞきぬ。太閤いよ〳〵あやしみ給ひ、天下奇才なきにしもあらずと、かゝる絶世の俊才、我又しらざることあらんや。おもふに鬼魅にあらずんば、必ず千歲の妖狐なるべし。我聞く、千歲の妖狐は劍鏡をもおそれず。只千年の古木を

以て照す時は、其形をあらはすといふ。「千年を經たる古木やある。」と、隣家の翁をまねきてひそかに尋ねたまへば、「多賀の社のほとりにこそ千年の餘になるといふなる杉の侍る。」と答ふ。太閤よろこびたまひ、村夫の心たけき者をめして、「今宵多賀に至りて、其古木きりて得させよ。」と宣ふに、諾りて出行きぬ。やがて多賀に近づくに、森のほとりに翁一人たゝずみて、「何事の急ありてか、かく夜中に來りたまふ。社參の人とも覺え侍らず。古木をきりとらんためにや。」といふに、兩三人の者ども驚きて、「其事なり。」と答ふ。翁云く、「われとくより是をさとれり。此山奥荒川溪のほとり、萱尾といふに千年を經たる老狐の侍るが、きのふ此に來りて、ちかき頃一條太閤愛知川の邊に蟄居したまふ。公は博學の名かくれなく、古今類なしと自負したまふ。我試みに見えて、公の博識をなやまし鋭氣を折かんため、かしこに行かんとおもふ。翁にも共に來れ、とすゝむるゆゑ、我制して云く、汝が才智詭辯、天下たれか敵する者あらん。太閤服したまはんこと明なり。只おそらくは奇禍に逢はん。汝のみにあらず、其餘殃翁をも連累すべし。其時悔ゆとも及ぶまじ。光をつゝみ德をかくして、天年を保ちたらんこそ本意なれ。草木花うるはしきを以て折られ、虎豹皮の章あるを以て殺さる。美玉碎けやすく甘泉は竭きやすし。汝ゆかば玉を懐きて深淵にのぞむの禍あらんと再三制せしかど、用ひずしてまかりぬ。果して禍翁にもおよびたることよ。」といふかとおもへば、かきけすごとくに行方をしらず。村人あやしめども、もとより膽ふとき若もの共なれば、いさやと彼の杉を切倒し一束の薪をとり、かへりてありし事どもつまびらかに太閤に語り參らすれば、「扨こそ老狐の精に疑ひなし。」と、次の間にてかの薪を燃したまへば、熟睡したる少年、あと叫ぶ聲して、年ふる蒼狐妻戸蹴はなし迯げいづるを、村人ども持ちたる斧にて只一刀に打殺したり。太閤云く、「かれが本形をあらはさしめて其詭辯を折かんためなるに、千歲を經たる靈狐を徒に殺したるこそ便なけれ。」とて、後なる山の麓に埋みてしるしを殘したまひしより、里人狐塚と呼んで今にありとぞ。其後都もすこし靜ならんとせし故、太閤も歸洛を催したまひしが、社頭の古木をきりたることをも謝し參らせんとて、多賀に詣で奉幣神樂など執行ひたまひしとき、よませたまひけるとて、

多賀の宮たが世にかくはあとたれて
神さびにけりあけの玉垣

今に人口に殘れり。蟄居したまひし所を

も公が畑とて、里人のいみじき事に語り傳へ侍る。都にかへりたまひしに、文明のはじめより漸靜謐におよびしかば、文明一統記を著したまひ治亂の大略をしめし、後に入道したまひて禪閤とぞ稱しける。誠に命世の大才、不幸にして國家陽九の運に逢ひたまひしこそ遺恨なれ。されば博識は公の長じたまふところにて、詩文は短なる所にや、世に傳ふるも又いとすくなし。新續古今の序、紀行の詩など漸く世に傳へたるのみ。其後太閤常々斑狐の事をかたりて嗟嘆したまひ、日記等にもしるしたまひしとぞ。

環人見春澄を激して家を興さしむる事

むかし小野篁少かりし時、父岑守に從ひ奥州の任に赴き兵事を調練す。ゆゑに其子孫わかれて關東にありて、武州七黨の中岡部人見など其末にて世々弓馬の業を襲ひたりしが、中にも人見民部春澄なるもの、下野國に數千町を領じて、北條家のために藩籬を守りしに、高時の代にいたりて、聊の過によりて所領を沒取せられ、安からぬ事に思へども力なく、國にあらんも面ぶせにて、都に登り權門の推擧をも假らばやと、家の子兩三人を具して、ひそかに國を離れ都を心さして登るに、木曾の深山にかゝりて、馬蹄は雲を踏んで半天に登るかとおどろき、人影寒水に映じて不測の溪に下り、ゆけどもゝゝ雲霧あとをうづみ、前途遙にして馬人ともに疲れたりしに、宿るべき驛舍もほどへだち日も峯に沈みて、いとゞ木立暗き山中をたどる所に、數十人の山賊路を塞ぎて衣服物具を剝取らんとす。民部怒りて「商客の類とや見あやまりし。命惜しくは路を開け。」と、家の子諸共切先するどに切つてかゝり、先にすゝみし賊二人を切倒したる勢に、餘黨はさんざんに逃走る。民部勝に乘じて、暗夜なれども跡を慕うて一町ばかりも追打にする所に、おもひもよらぬ後の嶮より五六人あらはれ出で、前なる者も取つてかへせば、從者は溪に落ちて死し民部は遂に生捕られたり。數十人取圍みて賊寨にかへる。其頃王澤は已に竭きて國司の威なく、鎌倉の武威も近年の我意に舊貫をわすれ、非道の政道多かりしかば、國々に盜賊起りて、守護の下知をも憚らず州郡を侵掠せしが、錦部次郎宣連と云ふ者賊主となりて部下に數百人を扶助し、木曾の山奥に山寨を構へ、數年その威を震ふといへども、元弘の變より國家いよいよ多難なれば、賊徒誅伐の議も等閑なり

しに、益時を得て近國までも其禍を苦しむ。民部を生捕りたりしも錦部が部下の者にて、やがて賊主の前に出づれば、錦部民部が風情の常ならぬにあやしみて、出身をとへども答へず。錦部いよいよあやしみおもひて、別屋にいたはり置きて、次の日自らさとして云く、「君の風骨正しく武門の豪族ならん。當今北條家の政虎よりもはげし。國をぬすみ天下をくるしむる者王侯の位に居し、吾が輩のみをさして賊とせんはあやまらずや。時の變化をもみんために、かくひそみ居る事なり。君も此所にとゞまりて、下半世のたのしみをとりたまへ。」とすゝむれば民部も鎌倉の政道を憤り、又前途もこれぞと思ひさだめたる事なければ、暫く此所にありて時を待たんこそ亂世の上策なれと領掌すれば、賊主悦びて、「一人の羽翼生じたり。」と、酒を酌みて其勞を慰む。元來此山寨人多しといへども、はか〲しく文字をしりたる者もなきゆゑ、かくは饗應してとゞめたり。民部も晝は野山に獵し夜は錦部と酒宴を催して明し暮すうち、耳目の馴るゝところいつしか功名の心も弛まりて、よき安心の地を得たりと心ゆりして暮しけり。錦部が使女のうちに環といへる婢、見めかたちもなみにはすぐれたるが心もさとく、酒宴の席にはいつも酌にたちける。民部が品のすぐれて山寨の者の類にも似ざるに、心とゞめてよしありげに見ゆれば、民部又さとりてうちとけたりしに、ある時人なき折を窺ひ、ひそかにいふやう、「君のさまを見参らすに、正しく武門の名家なるべし。何とてかゝる山賊の中にあたら年月をつひやしたまふぞや。しろしめさずや、今河内には楠とやらんが天子のために軍を起し、西國には赤松、城を守りて官軍所々に起る時にて、家をも興し名をも揚げたまふべきよき時節ならずや。」などかくゆるかせには暮したまふや。」と諫むるに、民部實にもとはおもへども、此女の心よりしていふにはあらじ、錦部が我が心を探らんためいはせたるものならん。謀について謀をなして、心しづかに思ひたちてんと、只うなづき居て、其夜錦部にむかひてありし事どもをかたりて、「伶利の女なり。」といへば、錦部其餘意なきことをよろこび、環をよびてその饒舌なるを怒りつよくいましめたり。其後日を經て人なき所にて、環またいふやう、「君さきに申したりしを、主にきこえたまひし故にせめをうけたり。されども妾が身は、甲斐なき者なればいとひ侍らず。君のあたら千金の軀を石瓦と同じく、朽ちさせたまはんことの心うさにすゝめ参らするなり。とく

とく覚したちたまへ。」と、涙ながらにすすむるにぞ、扨は實情なりと感じて、其謀ならんことを疑ひしことを謝し、「我も其日より醉のさめたるごとく、功名に心ありて日夜に山寨をさらん事をおもへども、賊主用心ふかくして心ゆるさず。其上、道の費も調はねば、心ならずも怠りたり。」と語るに、環聞に入りてひとつの袱紗包をもち來り民部に與へて、「妾年頃貯置きたるところにて、身のよすがの露なり。君の行費に參らせん。」といふに、民部いよ／＼其實情を感じ、共に逃出でんことをすゝむるに、「いやとよ。はる／＼の山川、ことに思ひ定めたまひたる事もなきに、女を具したまはば君の累なり。況や妾は身慣いまだ償ひ侍らねば、今暫くとゞまるべし。妾を念としたまふことなく、今宵ひそかに逃げたまへ。妾よきにはからひ參らすべし。」と約して別れぬ。民部は環に激せられたるうへ、彼が實情に心決して、暮るゝを待ちて山寨をのがれ出でて、本國をさして落ちのびたり。錦部はかくともしらで例のごとく酒宴を催して、環に命じて民部をまねかしむ。環民部が房に至りて其影迹なきに、さてはかしこくも逃出でたまひしとしりて、歸りて、「今宵しも勞ること侍るとて臥し給ふ。」といふに、錦部疑ふことなく、夜明けてはじめてこれをさとりて、人をして追はしむれども行方をしらず。環さきにすゝめたりしに心つきて、つよくせめとへどもしらずと答ふ。錦部怒りて晝夜これを呵責して後、山ふかく捨てさせて狼なんどの腹にみたしめよと命じたりしを、山寨の者どもいたはりて人家近き所に捨てゝかへりぬ。民部は晝夜をわかずして本國に下向したりしに、頃しも新田義貞大義を倡ひ兵を擧ぐるところなりしかば、馳加はりて鎌倉を攻むるに、家運傾きたる北條處々の軍破れたりしかど、長崎勘解由左衞門一方を防いでしかも驍勇當る者なく、寄手引色に見えたるを、民部一陣にすゝんで士卒を勵まし中にとり圍んで攻むるに、遂に長崎を打取り、高時も自殺して鎌倉平均し、先帝還幸ありて海內一統の時に至りて、義貞の推擧によりて本領を復したまはる上、出羽にて一郡をたまはり、名をも人見下野守定澄とあらため、多年の蟄懷をひらきぬ。人見いよ／＼環が志を感じ、人をつかはして山寨の動靜を窺はしむるに、去んぬる頃部下の者錦部が無狀を惡みて、これを殺して足利に下りたりときこゆるに、さては環が身の果いかゞしたりしやと、安き心もなく晝夜おもひ煩ふといへども、搜求すべき方便もなく日を送るうち、又もや新田足利

の確執出來て、天下ふたゝび戰國となる。人見は新田に屬して足利を攻めて東國に下り、數度の戰に新田利なくして都に登れば、人見は本國に下りて、奧州の國司北畠と相議して奧羽の勢を催し、上洛して足利を遂に西國に追落しぬ。新田も其忠戰を感じて親しかりしが、いまだ定まる妻もなければ、「いかなるものをも娶りて後嗣をはかりたまへ。」とより〳〵すゝめらるれど人見は環がことをわすれず、妻をも迎ふることなく暮しけり。幾ほどなく足利大軍を催し攻登れば、新田敗れて北國に走り、主上も南山に狩したまふにぞ、人見本國にかへりて再び官軍を催さんと議する頃、おなじ一族のうち岡部新左衞門成國なる者、其娘を人見に娶せんことを求む。人見も環が消息を待つ事六年を經れども、其影響をきかされば、今はやむことを得ず、後嗣をのこささらんも父祖の罪人なりと領掌したりしに、岡部喜びて、吉日をえらび婚儀を調へんとして婢を求むるに、幸ひ飛驒より來る商人一婢を連來る。よく物馴れたる者にて、岡部限りなく喜び居たりしに、人見通家の事なれば、ある日岡部が館に來る。女の童どもの「婿君よ。」とて私語するを、かの新婢も物影より窺

ひたりしが、やがて一間に走入り久しく出もやらぬに、使女等いかにとみれば縊死したり。「こはおそろし。」と泣きのゝしるにぞ、主の岡部も、「事のやうこそあるらん。」と使女等に尋ぬるに、「さらにしらず。只婿君のいらせたまふを、今までさしのぞきゐたりし。」などいふに人見も、「何事やらん。」と尋ぬれば、岡部も、「あやし。」と語り居るうち、「さま／＼針藥のしるしありて息出でたり。」といふ。人見すこし醫術を試みたることありしかば、「縊死の者はきはめて調理に意あり。」とて、岡部諸共一間に至りみれば、縊れたる婢は山案にありし環なり。人見、「こはそもいかにや。」と驚くに、岡部いぶかしみて尋ぬるにぞ、包むべきやうなく初め終りを語りて、其流落し來りたるを、且なげき且よろこぶ。環も人心地つきて涙ながらに、「われ君を尋ねて此國にさまよひ來れども、便るべきかたもなく、わけてむかしの名にてもましまさぬゆゑ、おもひよるべくもなかりしに、けふ見奉れば館の婿君にならせたまふもの、我こゝにありては便あしとおもひさだめて死したるものを、なまじひに命ありて君の體面をも、汚し參らす事の悲しさよ。」といふに、岡部大いに驚歎して、「む

かしより托むべき主を卒伍縲絏の中に撰みむつびし例は侍れども、かく時變をさつして英雄を激し、身婢妾の賤役をとりて後榮をもとめず、義に死すること家にかへるがごとくなるもの、異國にも其例をきかず。女中の烈丈夫といふべし。幸ひ我が娘の粧匳調ひたれば、これを以て環を君に娶せん。我が娘は妾と見たまへかし。」といふに、環泣いて是を辭してうけがはず。人見も答ふるに言葉なき所に、新田義矩其頃館にまし／＼たりしが、此由を聞きて、「天下の義、岡部一人に譲らんもほいならね。環はわれ養うて義女として人見に娶すべし。岡部の息女は二室とし給ふべし。諸侯大夫さだまりたる數あり。一妻一妾何ぞ嫌とせん。」と宣ふに、岡部も尤と同心し、人見も恩を謝して其議に隨ふ。こゝにおいて吉日を卜して、二家より新人を送りて婚儀を執行ひ、二人むつまじく妬忌の念なく、環ぞの婢妾の昔をわすれずして謙遜すれば、岡部が娘は其夫に功ありて、しかも賢操を崇びてすこしも輕慢めず。人見もわくかたなく親しみ、子孫榮えて南朝亡びさせたまひし後も、望族なればとて、足利家よりも敢て損益することあたはず。所領恙なく安堵して、めでたく榮えたりしとぞ。

席上奇観垣根草五之巻終

明和七庚寅年六月吉旦

堀川通佛光寺下ル町　銭屋七郎兵衛

同町　近江屋庄右衛門

皇都書林　梅花堂蔵

同綾小路下ル町　銭屋庄兵衛

寺町通高辻下ル町　菊屋七郎兵衛

同通松原下ル町　梅村三郎兵衛

漫遊記
一

建綾足凩に奥羽の境に生れ、其心廓然、中に芥らず、性國風俳諧を嗜み頗る其奥を極め、旁繪事を好くし、尤も山水花鳥を善くす。自ら寒柴齋と號す。輯むる所の畫譜畫帖、遂々世に見はる。富貴固より吾が願ふ所に非ず、故

建綾足凩生於奥羽之境。其心廓然。不芥於中。性嗜國風俳諧。頗極其奥。旁好繪事。尤善山水花鳥。自號寒葉齋。所輯畫譜畫帖。遂見於世焉。富貴固

に糧を裹んで四表を游歴し竟に其見聞する所を裒め、一書を著はし直に漫遊記と號す。予謂ふ、たゞ人嘗て夫の天地の吾と相（たがひ）に主客をなす者を知らんや。蓋吾身を以て天地に寄せば　則ち凡て見聞する所の萬象萬籟、吾の夫

非吾所願也。故裹糧游歴於
四表。竟裒其所見聞著一書。
直號漫遊記。予謂。伊人嘗知夫
天地之與吾。相爲主客者乎。蓋以
吾身而寄於天地。則凡所見聞
萬象萬籟。皆吾之所以一吾。

の天地に主たる所以を以て、之に仮して以て樂を爲す者なり。又天地を以て吾に寄せば、則ち見聞する所の萬象萬籟、天地の夫の吾に主たる所以、用ゐて以て吾の未しきに供ふる者なり。然れども彼の古の賢人君子、神化に達し、

夫天地爲假之以爲樂者
也。又以天地爲寄於吾則所
見聞萬象萬籟。天地之所
以主夫吾。而用以供吾之未者
也。然彼古之賢人君子。達神
化。通天人者。其論不有於爲

天人に通ずる者、其論玆に有らず。但尋常の士、筆の鋭きこと干將にして、墨甘液を含むと雖、其意深く世の腥腐穢濁の氣を避け、距を山川の勝に寄する者にあらざれば、爰んぞ己の操を伸し、以て一家の介を逞くするを得んや。今

但尋常之士。雖筆鋭干將。而墨含甘液香。其意非深避世之腥腐穢濁之氣。而寄距山川之勝者。奚得伸己之操。以逞一家之介耶。今此巻。就其所見聞雜

此老其見聞する所に就いて、事を襍めて端を起す。槩ね世の奇談を聞けば、則ち掌を撫て喜ぶ者の爲めにする多し。且其國詞の工、俗語野史頗る典雅の書に闘ふに非ずと雖、能く其前後を較し、學者を輔翼する者亦鮮なから

事而起端○槩屬世之閒奇談○聞
撫掌而喜者多矣○且其國詞
之工○雖俗諺野史○非頗闘典雅
之書○能較之前後○輔翼乎學
者○亦不鮮矣○雖知縷足者譏
愚也杜中有舊説之○通乞篇

ず。能く綾足を知る者、愚老の社中に遊んで舊あり、之に託して適つて篇首一語を乞うて錯かず。故に執つて一覽し畢れり。世人をして此篇の全く無益の書に非ざることを知らしむる此の如し。

寛政戊午八月

拙古山人

首一語不錯焉。故執而一覽畢。使世人知此篇全非無益之書如此。

寛政戊午八月

拙古山人

漫遊記目録
壹之巻
若狭の國の孝女
貳之巻

三之巻

文月はひとり物

峯の嫜いやがる

江戸根岸にて女の住居を求る

嫁を命にかへし人

以上

目録終

四之巻

浪花の寄り人をたかねの吹んを好る

ひとつを親にて飛つし雁

五之巻

男残念に恋る女

麗宮残の小舞

漫遊記巻之壹

綾足著

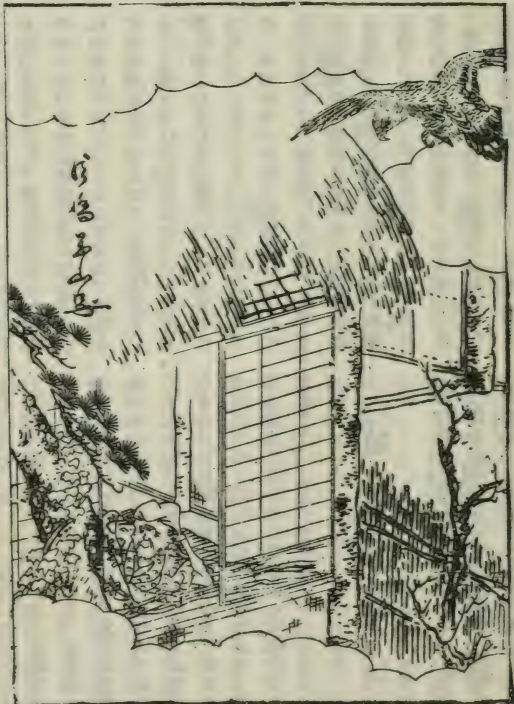
○若狹の國の孝女

若狹の國三方郡早瀬といふ所に、いとまづしくて住む女有りける。名を糸とよびて舅の、年老いたるにつかへて孝を盡したるぞ、ためしなきみさをになん侍りける。此女十四の年より此家に來り、舅姑のいとむつかしきこゝろにかなひ、おのづからなる憐みをかうむりけるが、姑は死して翁獨りに成りて、後はたよりなくおはすらんとおもひて、殊更こゝろを加へてつかへけるほどに、此舅七十年にあまりて老耄しけるにや、心も愚になり、をさな兒のごとく泣きまどひ、朝夕の給べものなども、時ならぬものを好み出して、せんかたなき事度々なれども、此女少しも翁の言ふにたがはず、こゝろをつくしてまゐらせけるに、ある時冬の最中にて風つよく吹きあれて、雨打ちしぐれ海の上いとあらく、漁夫どもも業におこたり、家に籠りて居りけるころ、此翁鮮魚を給べんと云出しけるに、七日ばかりも日和しけて侍るに、あざらけき魚とては、此國の海邊にはもとむべきやうもあらず。さりとて魚はあらずと、翁に告げんも心くるしければ、天地の神々に祈りていかにもして、あざらけき魚、ひとつ得さしめ給へと、祈りけるに其現もあらず。されども海邊に立出でて見ば、波に打ちよせられてたゞよへる魚もありなんと、いと寒き朝嵐に吹かれて、廣き磯邊をあなたこなたと、さがし求むれど鱗あるものとてはなし。こは我心のきたなく侍るによりて、神の申すことをきこしめさぬならん。今はせんかたなければいかにもして翁をいひなだめ、空のけしき海のさまのなほりなん時を待たば、鱗魚すこしにてもなきこともあるまじ。それまでは、ともかうも物こしらへてまゐらせんと、泣く〳〵家にかへれば、翁罵りさけびて、「鱗魚喰はむ〳〵。」とぞ、泣きゐける。此女ちかく居よりて、翁を撫でさすり、「唯今漁夫どものふね多くしたてて、釣に出て侍れば、此夕なぎにはあざらけき魚、數多得て歸りなむ。まづ朝食は心よく參りて、暮を待たせ給へ。よき物

こしらへ置きてさむらふ。」とて、干魚鹽魚などよきさまに作りて進めければ、「さらば夕食にはたがひなく、眞魚と〻のへ給べさせよ。」とて、朝食はよく喰ひたり。女いとうれしくおもひて、翁のいばりにてぬれけがれたる衣を解きて、「今の間に洗ひてあぶりほして、着せまゐらせん。是めせ。」とて、おのがきるものを着かへさせ、かのくさき衣を井のもとへ持出でて、そ〻ぎ洗ひけるに、鳶のかけり來て、何かあらん目のまへに取落しけるに、魚のいまだ生きてあるが、をどりめぐるなりける。いと嬉しくてとらへて見れば、二尺ばかりのめしろといへる魚なりける。只夢のやうにおぼえて、持ちかへりてさま〲に調じまゐらせければ、翁はかぎりなくよろこびける。抑此女の翁につかへ孝を盡しけることに、神々のめでさせ給ふと覺えけること、あまたありける中に、此事を専らに人云ひはやしけるほどに、終に國守のきこしめして、いとあつく祿給はりていたはり給ふ。其後此翁身まかりても、是をまつり仕ふるに、生ける時にまさりてねんごろにきこえける。此女今四十年ばかりに成りて、

其所に住みて侍りとなん。

○屁ひりの翁

加賀の金澤より折々、京に往きかよふ商人のありけるが、都の風俗になれて、うたひ舞ひをどるあそびごとよりはじめて、世に人の面白きといふほどのことに、身をやつし侍るほどに、商物のことにはあらで、人にたばかられて多くの寶をうしなひ、今は古郷にもかへりがたく、浪花の方にくだりて、相知れる人のもとに立入りて月日を送るほどに、此浪花に富榮えたる福人の子、彼男をおもしろき人なりと思ひて、何くへも伴ひ行きて遊びける。其群の中に、きはめて人のにくむ男一人ありけるが、恥かゝせんとて、屁ひる藥をひそかに酒に入れて呑ませけるに、形ありさまにも似ず、屁ひりまはりければ、終にあしき名の高く聞え、自ら恥らひて身しりぞきける。是はかの富人の子が、加賀の男にをしへてさせたるなり。それはいかなる藥ぞといへば、濁れる水の上にたゞよひ侍る泡をとりて、日に乾かし、石のごとく成るを粉に

して、酒にまじへて呑ませぬれば、屁に堪へずして、いかなるいみじき所にても、あからさまに屁のどよみ出るなりけり。此加賀の男、めでたき藥かなと覺えける。此後さいはひのことありて古郷に歸りけるに、親しき一門舊き朋友うちよりて、酒のみてあそびけるに、日比參りかよへる武家よりも、彼男の國に歸りしことぶきをのべんとて、二三人の侍達かの家に來り、ともに酒酌みあそびけるに、扨もかの男、都にてならひ得し屁ひりのくすり、かくすべきことにもあらねば、日頃したしく參りつかふるかたにて、「かゝる品こそ屁ひりの藥にて、其功いちじるし」と語り聞えおきけるに、いつの間にか、かの武家に其藥を調へ置きて、此席にもて參り、人知れず酒に調じ合せ、彼男に、「此酒ひとつのみて、さるうへにて都の風俗ひとふしうたひてよ。」とあるに、何の心も付かずのみほしぬるに、人々も皆醉ひて、上下打交り男女入りみだれ、「いざ舞へ。」「いざうたへ。」と責められて、此男立上り、「さらば一手仕ふまつらん。」とて、扇を打ちひらきて立つに、まづあやしき音ぞひゞき出でけるに、「こはいかに、」と云ふほどに、唯竹などを打破る音のさまにて、ほどと響き、とゝと鳴りてひり出たるに、いとくさき香の滿ちわたれば、「是はいかなるあやまちぞ。けしからずや。」といふ人のあるに、おのれもあきれて迯出でける。人々どよみ笑ひて、扨又酒になりけるほどに、其中にいさかひ出來て、太刀を拔きはなち、ひた切に斬殺すほどに、その席に侍りける人、あるひは命を失ひ、疵をかうむりてなやみけるに、かの男、いたく屁ひりたるに恥ちて迯歸りしかば、幸に此難をのがれにける。もし此席にありたらんには、いかなるめにかあひ侍らむ。扨後此男の思ひめぐらすは、おのれ都に往きかよひてよくつとめ、業のみに日を過ぐさば、かゝるくすりのあることもしらじ。藥をしりたればこそ、人にもをしへつれ。をしへ侍ればこそ、我にのませ給ひたれ。のみたればこそ恥らひて迯れつれ。迯れつればこそ、わざはひはまぬかれたれ。是をよしあることとは申すならめ。只此藥は我命の親なり。我がためには水のうたかたには侍らずとて、命長く活きて屁ひりの翁とはいはれけるとなん。

○龍石

大和の國上品寺といふ里にあそびける時、ある人物語せしは、我從弟は高取といふ城下に、土佐といふ所の者なりし

が、久しく音信のなかりければ、行きて訪はんと、比は六月中旬ばかり、いとあつき時なれば、朝七つの時より出立て、日の出でぬ間といそぎ行くに、はや三里ばかりもきたりぬれば、夜の明けんころは、かしこに參り著くべしとおもひて、いよ〳〵道を急ぎゆくに、かの從弟の元とは今五町ばかりに成りて、やう〳〵東の空しらみ、はやくも來りぬ。少し休足せばやと思へど、このほとり皆芝原にて朝露深く置きければ、坐しかねてそこら見めぐるに、草の中によき程なる石のあるを見出し、是に腰かけて休まんと思へど、蚋などの多からんことをおそれ、そと立寄りて手を打ちかけ引起すに、形よりはいとかろく大きさは二尺ばかりにて、鈍色の石なり。是をいだきて道の眞中にすゑ、手拭を出して石の上に打ちしき、扨腰かけたれば、此石やはらかにたわむさまにて、衾などの疊みたるうへに居りたる心地しぬれば、こはあやしと思へど、やはらかなる石のあるべくもあらねば、其儘に尻かけて火を打出してたばこくゆらせ、稻どもの心よく靑みたるを詠め、しばし休らひ居る間に、東のかたに朝日の高くさしのぼれば、いざ歩行まんとて、立ちて二町ばかり行くに、汗のながれてあつく覺えぬれば、淸水の元に立ちよりて、貌などあらひ侍るに、何となくくさき香の堪へがたく、よく〳〵正し見るに、先に石のうへにおほひたる手拭に、深く染みたる香なり。これは何に似たる香ぞとおもふに、小蚫のかをりにして、それよりもいとわろき香の添ひたるなり。こはけしからずとあらひ落せど、中々ににほひは去らず。水に入りては猶くさき香のつのりて、頭にとほりて覺えければ、其手拭を捨てゝ立ちのきけれど、手もからだもくさく成りてしのびがたければ、こはあさまし、早く行きて湯あみせんと、道を走りて從弟の許へ行きつれば、皆圓居になりて中飯を給べけるが、主のいはく、「久しく見え給はざりしに、かゝるあつき時節に、曉には來り玉はで、日盛には何しにおはしけるぞ。」といふに、此男聞きて、「今朝寅より家を出でて、唯今ふもとにて夜の明けてさぶらへ。ぬし達も今朝食參るならずや。」といへば、家内の人みな笑ひて「いづくに午睡して寐おぼれ給へる。陽陰は未の頭にて、けふは晝飯の遲くして唯今給べて侍ふ。」といふに、少し怪しくなりて空を見れば、實にしかり。又暑きこと朝にてはなし。めしつれし下部を見れば、是も唯あやしくおもへる顏にて、「道にて何事もし給はざりし。唯火を打ちてたばこ二吸斗りして、いそぎ來りし

に。」と申すに、家内の者面を見合せ、「それは狐にてこそあらん。山のふもとには狐の多くありて、折々人をまどはし侍る。」といへば、「いや〳〵、狐とも覚えず。かう〳〵のこと侍りて、その香のいまに去らず、頭口にとほりて大きになやめり。湯あみせばや。」といへば、主驚き、「夫はあしき目に逢ひ玉へり。其石は龍石とて、此邊にはまゝありて、人をなやます。その化物は何とも知らねど、唯小蛇の香の強くしぬれば、所のもの龍の化けてなるなりとて、龍石とは申すなり。是に觸れたる人は疫病を煩ひて、命を失ふ者多し。御心いかに侍る。」といふに、忽身あつく、頭いたく苦敷くなりけれど、かの從弟は藥司にてありければ、心得て藥を調じ、俄に煎じ是を呑ませ、又からだに香の止りたるには、洗ふ藥を制へてあらはせ、此家にて疾臥しなんもいかゞなればとて、其日の夕かた輿に乗りて、うめきながら歸らんとす。又主のいはく、「彼の休み給ふ所をよく見玉へ。かならず其石は有るまじきに。」と云ふ。下部共心得、「彼石は道の眞中にこそありつれ。」と行きて見るに、更になし。「人のとりのけしにや。」とさがしもとむれど、元來石ひとつもなき芝原なれば、あるべきやうなし。「扨は化ものにてありけるぞ。」とおそろしかりけるに、かの下部、「我は下人にてあれば、腰掛けべきものもなく、大地に坐してありけるゆゑ、此化物にはふれざりける」と、幸得たる顏つきして歸りける。此男八月の末まで病みけるが、やう〳〵癒えて、其後は家内に示して、「山に行きて、必ず石に腰かけそ。」と、をしへけるとなん聞えし。

○野もりといふ虫

信野の國松代といふ所の山里に、力强き男あり。角力抔よくとりて、人皆おそれあへり。みな月の比この男、二人連にて山に入り柴かりて歸りたるに、山水の流れ落ちぬる細道を行くに、一人の男は先に立ちて行き、彼力つよき男はあとに立ちて、刈りたる柴を竹にゆひ付け、さしかたげて下りけるに、何かあらむ、やはらかなるものをふみたる心地のしけるに、忽ち眞葛原さわぎ立ちて、桶の丸さほどなる蛇の形したるが起きかへり、足先よりくる〳〵と卷くと覺ゆるに、其頭は犬よりも大きく眼の光すさまじく、此男の咽を喰はんと、首をさしあげむかひたり。かの男したゝかなる力雄なれば、こととともせず、「是はうはゞみにてあ

らん。いで、口より引きさき捨てん。」と荷ひたる柴をはなち、左の手をのべて下の腮をひしととらへ、右の手にて上のあぎとをにぎり、引きさかんとするに、かなはず。鎌は持ちたりしかど、先なる男の腰にさゝせたれば、聲を揚げて「鎌よ鎌よ。」といへど、そこらにはをらず。此先の男は力なき者にて、此ていを見るより、傍なる松の木にかきのぼり、身をちぢめて見居たるに「鎌よ〳〵。」といへば、木のうへに居りながら、腰なる鎌を抜きてなげおろしたり。それを彼の力つよき男ひろひとりて、足にて下の腮をふみかため、左の手にて上の腮をもちかへ、右の手に鎌を握り、聲をかけて口より咽の元まで、二尺ばかり切りさくに、此蚰虫、くるしくやありけん、巻きしめし尾先をゆるめ、惣身を以て大地を叩くこと五六度、其響、木だまにこたへてすさまし。扨鎌を取直し、三つ四つにきりはなちぬ。此物、首は常の小蛇のごとくにて、足は六所にありて指もまた六つなり。長は一丈餘にして、まはりの太き所は桶ほどもありて、頭と尾のかたははるかに細し。その頭も尾も谷の中へ打込み、中にもふとき所を柴と共に荷ひ持ちて、けふのほまれを親にも見せ、所の者にも驚かさんと、いさみて歸りける。親は年老いて家に臥したりけるが、待ちわびて「いかに、けふはおそかりし。」といふに、しか〳〵のこと物語り「是、見玉へ。」とて、かの一切の丸き肉をとり出せば、親おどろき「あしきことを爲しつるものかな。是は山の神にてこそあらん。かならずたゝりを蒙るべし。我子とはおもはじ、家にも入れじ。」と、追出しけるほどに、此男は「ほめられんとて持歸りしに、おもひの外に侍るかな。何の山の神ならんや。人を喰はんとするものは、たとへ山の神にても命をとるべし。我がほまれを嘆り給ふは、我も親とはおもはじ。」とあらそふ中へ、村長來り合せ、とやかくいひなだめ、こと納りたり。扨其切りたるを見んといふ人多く、あなたこなたへ遣しけるに、二三日の中にいとくさくなりければ、今はうるさしとて捨てたりけり。此男もくさき香のうつりて、着たる物どもをぬぎすてけれど、更にそのうつり香のやまで、頭いたくなやみ臥したりけるを、醫師をむかへ藥を乞ひて、沐浴しければやう〳〵に止みたり。此醫師の云ひけるは「是なん老蛇の類にはあらず。野守といへる虫なり。井に生ずる虫を井守といひ、家に生ずるを家守と云ひ、野に生ずるを野守といふ。」よし、語りけるとなん。扨此男、三年斗後、國守より禁じ置かれたる山に入り

て、木を盗みたることの顯れて、捕へて首を切られけり。是は野守のむしの仇したるなりと、人々いひはやしけるとなん。

○連歌詠むを聞きて狸の笑ひし

世に化物の出づるなどいふこそ、彼も是も人の物がたるを耳傳にいへど、自ら其化物にあひつるといふものがたりは必ずなきことなり。物に書付けて侍ることも、おのれかゝるものを見しとて書きしはなし。さはいへど、なきことは世には傳へじ。こゝにみづから三四人まで居合せて、其化物を見つるといふものがたりしけるを聞きしに、武蔵の國のことなり。秩父の郡鉢形といふ處は、古き大城のあとにて、今は民の家村立ちさかえたれど、古き堀のあと、築土などの跡も殘りて侍るに、おのづから狐狸やうの物も住み侍るが、極月のころ或寺に人あつまりて、夜こもりに連歌よみて遊び居りけるに、其友の中に口おそき男の侍りて、おのれがつぐべき時にあたれば、久

敷くかんがへいりて、めぐりのおそくなるに、おのづから夜も更けわたりて、ゐなかなれば、あるじ、客あしらひもふつつかにて、火灯の影もうすくなり、ゐろりの炭も大かたに消えて、いと寒くなりまさるに、「今夜は一折にてやめん。」といへど、「夜こもりによむべしとて、あつまりたるに、朝烏の鳴くまではかへらじ。」と、いひしこる友どちのありて、二の折をよみかけて、又一めぐり二巡りつけゆくに、彼男の場にあたりてかんがへ入りけるが、「おもての見わたしよからず。次句の意ばへいかゞ。」などいひかへされてとかくにかんがへわづらひて侍るに、口ばやくいひつぎて渡しける友がらは、ねむたがりて次に立ちて、打ちねぶるもあり、或は尿に立ちなどして、人げもすくなく かの火桶どもはひえかへりて、八つ過ぐる頃にも侍らむ、夜嵐いと寒く吹

きわたる音のするに、彼が口おそくかんがへわづらひたるを笑ふにや、いづくともなく老いたる聲にて、「ハヽ」と笑ふ音す。はじめは友だちどもの、次の間より笑ふとおもひ居りしに、打ちかさねてしり高にどよみ出で、いと高く笑ふに、誰な

りと見れども、みな打ちしづまりて居たれば、あやしと見るによく聞けば、火桶をうめたる板敷の下にて笑ふなり。こは如何にとあきれて、よくきけば、人にもあらぬ聲なり。「狸ならむ狐ならん。何にもあれ見あらはさむ。」とて、人みなよりて其火桶をぬきて見れば、いと黒きけものの犬ほどなるが、飛上りて先火をばふきけして、本堂のかなたへさして走り行きしとおぼゆるに、人みなおどろきさわぎて、俄に火をともして打殺すべきかまへして、てん手に棒などひつさげて、此方かなたと見るに、さる物は見えず。戸もしめ垣も固めたれば、いづくへ行かむ所もなし。人々かひたくて「さもあれ、夜の明けば見定めん。」とて、あとをばよくさしかため、火桶などももとのごとく取入れて、火をてらし立てゝ、皆一所に寄り集りてあるに、彼男は化物にわらはれつることのいとくやしく、「おのれ、朝にならば此むくいせむ。人々力を加へてたべ。」とて、待つ程に夜も明行けば、隅々までみえわたるを待ちて、かの佛のおはすあたりを、くま〲みれども更になし。「是も化かしたるならん。」といひて、戸も格子も押しひらきて侍るに、佛にそなへたる木の實どもは何も殘らで、花瓶などは打ちみだれたるに、「されば、こゝにかくれて侍りしものを、今すこしさがし見るべし。」などいふを、佛もをかしくやおぼしけむ。頻羅果の唇を打ちひらきて「へゝ」と大聲にわらひ出し給ふに、人々打ちおどろき、魂よわき男はにげ去り、つよきは打ちすゝみて見るに、幾度も大聲にて笑ひ給へば、「何にもあれ化物なり。御首にもせよ、打叩きてみよ。」とて、長き竿を取出でゝ打たんとすれば、御首螺髪は、いと黒きけものとかはりて、飛びかけりて逃去りける。あはやといふ間に、何國へかまぎれうせぬ。うちに有るをさへもとめかねつるに、まして野をさして逃出でぬれば、いづくもとめん方便もなく、寺の主をはじめ、彼にあざむかれたることを口惜しくおもへど、とらへどころなきことなれば、その事をたゞ云ひのゝしりて止みけり。「さても螺髪に化けて居つる、毛の色黒かりしは、狐にあらず狸なりけるよ。」と、口さがなく云ひのゝしれど、深く狸がたはぶれには逢ひけるなり。みな〱うちよりて、其跡をかきはらふとて見れば、佛の御手にはいとくさき糞を、たれかけておきつるぞ、うたてかりき。彼笑はれたる男は、とにかくに其ことをいひ立てられて、口おそきことの名高くなりしかば、みづからくやしく思ひて、連歌よむことはやみにけり。是は其席に居合せて、狸

をかりまはしたる人々の云ひけるほどに
人づての空ものがたりには侍らず。

漫遊記巻之壹終

漫遊記卷之貳

○歌盗人

東の二條に住みける若き男の侍りしが、兩親なくなりてより心そゞろになりて、家業のことどもは捨置き、唯そことなくうかれ歩行くことをこのみければ、親族どもいさめて、「さ有る心得にては、家をもうしなひ、終に身もほろぼすべし。かゝることとも必ずひとりにて侍る故なり。」とて、兎角に聞きつくろひて、よき嫁をむかへて侍るに、しばらくさもせで居りしが、よき家主こそ出來たりとおもふさまにて、此度は遠き野山に到り、夜も泊りて、雨などの降れよ二日も三日も歸らず。おのづから人も見すてゝ、家業もうすくなるにまかせて、家にあればよからぬことどもを聞くとて、内には足もとめず出であるく。嵐山のさくら散りすぎて、小室の花よしといふさかり、一日も落けず行きたりしが、或日花の陰にひとり立伏して遊びをるに、かたへに幕打ちまはして、よしありげなる女達の、男たるものは童どもさへ遠くしりぞきて居るに、たゞしめやかに酒汲みかはして、暮れなんまでとて、花の陰を立ちさりがたくし給ふさまなり。いとゆかしければ、幕のほころびたるより目をすこしさし寄せたるを、こしもととおぼしき女の、はやく見付けて、「さなのぞき給ふな。あらはにてこなたへ入らせ給へ。くるしからず。」ときこゆるに、かゝることには馴れたる奴なれば、はゞからずいりければ、「よくこそ。」とて酒すゝめ給ふに、はやゑひて聲をかしく歌などうたひ出で、節もをかしく云ひさわぎ、そら物語まじへて盃の數めぐるに、女達、珍敷く聞きなして、うちさゞめき給ふ中に、上座におはすかたの年のほど、二九あまりにも侍らんと見ゆるが、主の君ならむ。けだかくにほやかにて、折々腰元の耳にさゝやき給ひて、打ちゑみし給ふに、こし元もうなづきなどす。彼男いよ〳〵そぞろに醉ひほこりて、聲を高くなして唱ひなどするを、彼是好みものし給ひて、いと珍かにしたまふさまなり。夕暮にもなれば花の下風も打ちかをりて、夕影のさやかなるに、彼君のけはひも照りそふばかりなるを、「かゝるあてやかなる君

も、又世にはおはしけるよ。」と、梢の花はなきものに思ひなしてあるを、こしもとども袖引きて、「耳かし給へ。」といふに、心はやくさしよせたれば、「あしきことはあらじ。明日のゆふ暮に、かう／＼して参り給へ。所はそれの所なり。かならずたがへ給はで来り給へよ。」と聞くより、唯夢の心持して、「いづれの星にあたりて、かくよきめを見聞くかな。」と口にさへ出づるを、こしもと等、「かまへて、ひそかになし給へ。」とて、さゝやくほどに、「男ども、御迎に参りて侍るを。」とて、おそれげなる。「扨日は暮れぬ。やがてかへらせ給ひて、明日の夕なむ。」と、とり／＼に云へば、男はまかり出でぬ。又の日はとくおき上りて、「今夜はよき人の御元に、歌よまむ人々をめすなり。われらも詠人にとられて侍る。」など、ことごとしく云ひなして、かたちは髪よりはじめ、手足耳のきはまでもかい洗ふに、湯は三度まで入りて色ありげなる人となりて、衣などはある程のものとり出して、すこしも新しからんをえり着て、夕暮のまぎれにとありし、それのかどをさして走りゆくに、いひをしへしに違はず。さて臣の木の大きなる垂枝のいとくらきもとに、立ちかくれて侍るに、折々かきならす琴の響なども遠からぬは、彼住み給ふ御あたりにやなど、おしはからるるに、門引きひらきてむかひ入るゝ人もなし。けさより晝ばかりまで、降りつる雨のしたゝりは梢に殘りて、風の吹きならすごとに、ひやゝかにこぼれ落つるにぞ、肩裳を濡らして、今や、人の出でてむかへ入るゝと立待ほどに、暮六つの頃になりて、女のこわ音にて、「おもてにそれの人や、立ち給へる。」と聞ゆれば、嬉しくて、「さいつ時より参りて、此森の雫に立ちぬれてさふらふ。」といらへすれば、「いとよし。今少しまたせ給へ。」とて入りつ。「先の事は違はざりけり。」とたのもしくおぼえ、少し心も落し居、かの濡るゝも何とも思はで侍るに、又更に音もなし。月おそき夜半なれば、いとくらくて人は見付けねど、犬や吼付きなんと、おもひおそれて居たりける。さて戌の時過ぐる頃守の鼓のきこゆるに、いよ／＼心せかれて、風のおとのさやと聞ゆるにも耳かたぶけたり。さて、待つに、おくの方よりしめやかに沓の音して、鍵にやあらん、ころ／＼と鳴る音などもして、此方に来る人あり。是なりと思ふに、彼の聞きしれる聲して、「よく待たせつるかな。御上にはしづまらせ給ふに、やうやう人氣も遠退きて侍れば。」とて、金戸をひらき手を取りて引入るゝに、常世の洞にいさなはれし人の心もかゝりけむと、

胸打ちさわがれ、花のかをりくる林をめぐり、水鳥の立ちさわぐ池の邊を行くと思ふに、泥の高くふみあがるに、裳を高くまきあげたれど、かのよくとき洗ひし脛なればはづかしからず。又、石をつたひ行く所の侍るに、沓もしとゞになりつればぬぎ捨てたり。又、中門の侍るをも打ちこえて、から垣おもしろくわたしたるに、山吹の咲きひろがりて侍るに、眞砂のいと白く、しきわたしたるを見る。庭のおもてを踏みて行けば、いと高く造りかまへたる家の欄には、白がねをのべて所々はりまはしたりとみゆる。きさ橋のもとに至りて、女は内に入りて、しばしして、ゑぼしやうのもの、また上のきぬなど見るは、白きあさごろもにてあるをもち出でて、「其御すがたにては人の見とがむるを。是召して此圓座のうへにひさくみ、此簶を前に置きて居らせ給へ。若しこのあたりを官人達の來あはせ給ひて、何人ぞとのたまはゞ、我は散る花ををしみて、かくてさむらふ者なりとこたへ給へ。後は此女がよきにはかり申さん。くらくしては人もこそ見とがむれ。燈まゐらせよ。」とて、火を前後にい

とあかくして立てたれば、今は色どれるこゝろもなく、こははなやかなる忍びごとかな、うれしからずと思へど、せんすべもなくて居るに、沓を高く引きならして、黒きうへのきぬ着たる人の、爰過ぎ給ふと見えつるが、立ちどまり給ひて、「それに候者は何者ぞ。」ととがめ給ふに、彼敎へ給へるはこゝよと思ひて、「散る花を惜しみて、かくさふらふ者なり。」といふに、「心あるかな。」との給ひて、かたほにゑみて過ぎさせ給ふ。先づよくもしたりと、ひとり思ひてをるに、又彼方より赤き上のきぬ着たる人の、こゝ過ぎさせ給ふさまなるが、又立留り給ひて、「それに侍るは何者ぞ。」との給ふ。「是は散る花ををしみて、かくさふらふ者なり。」といへば、「こゝろあるかな。」とのたまひ、ふりむきてほゝゑませ給へば、立てわたしたる御かうしの内には、女達の

聲にて、えもたへず打ちわらはせ給ふに、聲をおさへて迯行く音も聞えたり。さては女達のおはす所も近かりき。大かたにあさむきつれば、今は來て見とがむる人もあらじと思ひて居るに、此たびは靑きうへのきぬ着て、棒をもたせたる人の

聞近く來りて、「かくさふらふは何者ぞ。」とのたまふ。「是は散る花をしみて、かくさふらふ者なり。」と申せば、「いと心あるかな。さは哥をこそよまん。一くさ仕れ。是にて聞くべしや。」とあるにおどろき、いかにこたへんと、あきれたるつらつきを、御かうしの内にはどよみ笑ふ聲す。彼男は汗になりて心には願を立て、一くさ詠み得させて給へといのるに、おそくなれば、棒持ちたる男責めて、「哥よみえずば、まぎれたる者なり。さいなみてや見侍らむ。」などいふに、むねさわがれて身もふるひ出づるに、古き歌にもあれおもひ出でば、はし／＼をかいなほして、いひ出でむものをと思ひめぐらすに、ゆやといふ謡物の中に侍るが胸にうかびたるを、かゝるものの中に侍るは、高き人達は知り給ふまじ。唯此所をのがれ侍らむ間なりとおもひて「詠み得て候。」と申す。「さらば詠め。聞かん。」とあるに、

春雨のふるは涙か櫻花　ちるを惜まぬ人しやはある

と、唯其儘に打上げたれば、「さてこそ盗人よ。彼方の御門より追出し侍らむ。」とて、棒もちたる男が力を出して、頭より打つべくす。彼男、あわてゝ「何もぬすみし覺は侍らず。ゆるさせ給へ。」とわぶれば、「今のよめりといふ歌は、大伴の黒主が歌にて、古今集にはえらまれり。さらばおのれはうた盗人にあらずや。いで立て／＼。」とて、着たる物をはぎ取りて追へば、あなた此方にげまどひて、こけまろぶさまを、女達みなの聲して、今はつゝみなく高聲に笑ひ給ふを、心もつかねば、口をしき戀のあだ人どもなりと、おもひながらいたくおはれたるに、植籠めたる木の枝に、顔をばつきやぶられなどして、やう／＼に門の外に迯出でたれば、金戸あらゝかにしむる音して、又内にはどゞと笑ふ聲したり。いとくるしや、狐のしたるなりと思ひて、帯などもとけみだれたれば、むすばんとするに、ふところより白銀三つまでこぼれ出でたり。「是ぞ、かの木の葉を以てばかしたるなり」とひとりごとして、たもとに打入れてもちかへるに、猶も其おもりすれば、是は石なり、狐の性見あらはさんとて、やがて家にかへりて火を明くして見るに、猶違はず白銀なり。心ふかき奴かな。しからば物に入置きて、あす見あらはさんとて、いとくたびれたれば、「湯づけ給べん。」といふに、妻の女は、常のことなればにくがりもせで、いふにまかせて寐させ、其夜は、優寐おびれなどして、いたくうめき、朝になりてつとめておき出でて、かの狐見あらはさんとて、

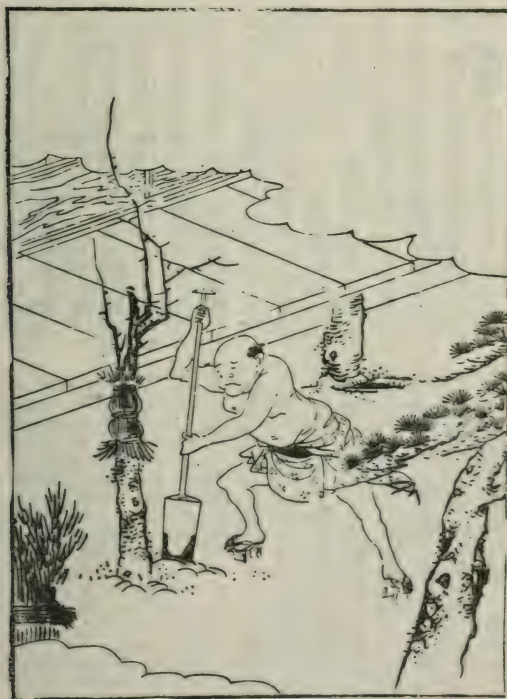
箱をひらくにかはらず。是は松の青葉にてふすぼらせたるには、たへずして化あちはすといふなれば、ふすべんとて、竈にそなへたりしを引きぬきて、火つけてけぶらすに、さらにかはらねば、此上は蹈鞴にかけて見るばかりぞと、鍛冶の家にいたり、たゝらからむと、さわぎけると聞きし。

○抱守主の兒に代りて死す

明和六年戊丑の年、水無月十一日のことなり。若狹國三方郡西津村といふ所に、小松原角左衞門といふ者の娘、つなといひけるが、三方郡の刀禰茂太夫と云ふ者の家に仕へて、兒の抱守して居りけり。年は十四になんなりける。さてある日、夕つかたに外に出でて、主の子をば背におひて立ちあるき居るに、病にあたりて、いとくるしげなる犬の走り來て、負へる子をくはむとす。たやすく迯げべくもあらねば、主の子のみ大切に思ひぬれば、はやく前にいだきとりて、懷におしかくしながら、はらばひて伏しにけり。犬は思ふまゝに、其抱守が膈腹をくひやぶり、猶もくはむとするを、人のかけつけて扣けば、犬はにげさりぬ。さて、いたはりかゝへて主の家につれ行きて、「いかにや。」と問ふに、いとくるし氣なり。「さても此子は、何としてたすけしぞ。」ととへば、「おのれ御家に參りける時、親にてさふらふものの云ひ教へけるに、御愛子をいだき守りてつかへ奉らば、唯心を加へてかしづき奉れと、聞きしことのおもひて、日比心をつくし、いたはり奉りぬ。けふ犬の來りて喰はんとせし程に、我身くはるべしともおもひめぐらさず。唯ふところにかくし奉れば、あやまちはおはすまじと、思ひつきたるのみなり。」と申す。扨見る内に、身うちはれふくれて、くるしみける。人を仕立てゝ、かれが里なる親に告げやりて侍るに、小松原が妻きたりて、我娘の病は問はで、先づ「御愛子いかゞおはしませし。あやまちやしたまはざりし。」と問ひ侍りけるぞ、いといみじかりける。かくて醫師をむかへて、藥をもとめいたはりしかども、終に愈えず、秋になりて死にけり。主も、「我子の命の親なり。」といひて、厚くはふむりをさめけるに、國の守きこしめし、たぐひなきものにおぼしめされ、今年辛卯のみなづき、其はふり所をあらため、街道のかたへに侍る西德寺といふ寺の內の人目に付くに、其墓を高くきづき、忠誠なる志のはじめ終をば、つまびらかにしるし給ひてけり。又

小松原には年貢をも長く免し給ひ、寺には白銀五枚を給ひて、「そのはか所をはき清めてよ。」となん、仰せ下されしとなり。

○梅が代と云ふ香の名

香をきくことを好める人、深く此道に惚れまどひて、人の世の中は、唯香爐の中にあり。さるは聞レ香悉能知といふことを常ごとにし、沈外といふ教をうけては、天が下の政も此外をもれじなど、愚におもひまどへる人に、其友達の人、語りけるは、「群芳譜といふ書の中に、苦楝樹に梅をつげば、叉の年必ず黒き花をひらくといへり。繼いで見たき物にぞ。」といふを聞き、何ごとも仕て見る癖なん侍るうへに、欲の心の深ければ、もし黒き花さかば、市に出してこがねにかふべしと、心の内に深くよろこべど、其苦楝樹といふ木のおぼつかなくて、所の物知りに問ひければ、「それはあふちのことなり。」と申さる。「木はいづくに侍る成り。」と問へば、「玉水の里に多く侍りしと覚え申す。」と教ふるに、「しからば、玉水

には我がいとこの侍るに、今より參りて、先づ一木繼ぎて試み侍らむ。」とて、俄に足結ひしめて、小走堤を南に走り、唯一時ばかりに行きつきて、大汗をのごひてあるに、「何ごとに來り給ふや。春日の御祭にかな。」といへば、「さることには參らず。御庭に苦楝樹や侍る。少し繼穗して試みたきことの侍るに、梅の穗もて參れり。」といふ。主思ひがけねば、「是は何ごとにて候ぞ。さやうなむつかしき名の木は侍らず。聞きたがへ給ひつらむ。」といふに、あまりにいそぎたりしかば、物知りのをしへたりし名は、とく忘れたるなり。「まことに苦楝樹にては侍らざりし。」とて、頭をひねれどもおもひ出でず。其日はおそくなりつれば、夜は泊りて、又の日の曉人を仕立てゝ、かの物知りのもとへ問ひやりければ、あふちと書きてきつるに、是なりしとて、「あふちやもちておはす。」といへば、「さる木も侍らず。」といふ。「御庭にあらずば、此所には多くある木なりと、京のもの知りのまうされたり。聞きつくろひてたべ。」といへば、「あなたこなた問ひあはせけるに、此所の物知りの申すは、あふちは栴檀のことにて

侍る。苦楝樹と申す名は聞きもおよばずと申す也。いかに違ひて聞き給へるならむ。」といふ。さる所へ、此里の醫師のきたり合せて、「苦楝皮といふ薬の侍る。其苦楝皮は黒き實のなりて、京わたりの女童は、是にはねすげてつき給ふ、もくろじの成る木なり。」と云ふ。「その木、爰に侍るや。」といへば、「いな、さる木は侍らず。」といふに、是も彼もいとまぎらはしくなりて、しばしまよひしが「さるにても、かく参りて侍るに、先づ其栴檀にもあれ、あふちと心得て繼ぎてみむ。御庭にや侍る。」といへば、「栴檀ならば、それらの木はみなそれにて侍る。いづれへとも繼ぎて見給へ。」といふに、若木の一尺ばかりなる木の本を伐らせて、もて行きし梅の穂を、ならびしまに〳〵繼ぎて、「やがて、黒き梅の花を見せ申さん。」とて、其日も其所にやどり、「此木のかたへには、童どもはよせてたべな。」と、いひ頼みて歸りしが、廿日ばかり過ぎて、いかに侍らむ、見て來ばやとおもひて、珍らかなるものをみやげにして、「先づころのつぎ木、きかまほしくて、又下りさふらふ。」といふに、主の聞きて、「仰のごとく人とてはかたへにも寄せず、守りてさふらふに、はや十日ばかりさきに、みな枯れて侍り。來る年の春、つぎなほして見給へ。」といふに、ちからなく、「さるにても、其根の木をたべ。」とて、自ら鋤もて行きて、太き根の所を挽切りて、もてかへりて屋根に打上げてほしておきたり。さて後、打切りて是を焼くに、をかしき一ふしのかをりしたりければ、梅が代といふ名を付けて、もちたりけるとなむ。

○鶯の巣に時鳥

江戸なる高橋といふあたりに、やんごとなき君の御別莊の侍るを、守りてありし人のかたり給ひき。やよひの末に、木間深き所に、鶯のしば〳〵行きかよひけるを見れば、巣をつくりおきて侍るなりよきことしたり、是がひなを取りて、養はむと思ひて侍りしに、ある時、ほとゝぎすのまだ鳴立たぬがひとつ飛來りて、其巣のわたりをうかゞふさましけるを、此方にかくれて見をるに、鶯は出でて居らざりしかば、此ほとゝぎす、心のまゝに巣をのぞき見て、まだかひこに侍るを嘴にくはへて、四つ五つ侍りけるをひたのみにのみてけり。にくきやつかなとおもひて、なほ見をりければ、しばしありておのれが口より、いと赤きかひこを只ひとつ、彼巣に吐入れてとび去りぬ。是ぞ、かの鶯のかひ子の中のほとゝぎすと、よめることならむとおもひて、此先いかに

あらんと待つに、やがて月のつごもりかた、ひゝと鳴く聲のしける程に、鶯は猶行きかよひて、養ふさまなり。卯月はじめにもなれば、からだのいと大きなるままに、巣にあまりて、巣には足をのみすゑて立居たり。彼親とおもふ鶯より見れば、はるかに大きなるを、さもかなしくするさまにて、小さき虫などくひもちて來るに、子は大きなる羽をひろげ、ながき嘴を打ちひらきて、その餌をくはむとするに、鶯は我頭さへ口のうちにさし入りて、のまるべくすれば、後はすこしおそれてや、我はすのうへなる枝に居りて、ゑは落し入れてくはせける。やうやく巣をはひ出づるころになれば、鶯は先に木づたひて、時鳥をならはせけるに、羽もながくなるさまなれば、飛びてや行かむと思ひて、やがて、是を取りてやしなひけるとぞ。

漫遊記巻之二終

漫遊記巻之三

○文月末の夜の光物

明和の頃、文月すゑの八日、いとあつかりしかば、我友どち來り、「東山の高き所に行きて涼まん。來ませ。」とあるに行きける。その家は左阿彌とて、いとよき家にて、いづくへもくまなく見わたさるゝに、涼しき風も吹き入りて、人々、心よく酒などのみてあるに、戌の時ばかりにも侍らむ、こゝにも麓にも人たちさわぎて、「北のかたの山に火つきて、もえ出でたり。」といふに、欄に立出でて見れば、北とおぼゆる空は、ひたすらにあかくなりて、家村のことにはあらず。高山の林どもに火付きて、もえのぼるならんと見ゆ。さていづくならん、倉馬の山かと見れば、すこし遠く、又若狭路の山にはまた近しとて、とり〴〵いひさわぐ間に、

かゞやく光の幾條も立登りて、天のかぎりは南をさしてたなびきたるに、「こは火にあらじ。天の氣なり。」といひ出づるに、このさきいかならむと、おもひはかられて恐ろし。さて、をかしかりける興もなくなり、みな、かへりいなんと思ふ心のみして、走りいでける。かの赤き氣の立ちのぼりしためしは、古き記にも見え、近き御代々々にもありしこととて、物にもかきとゞめ、また、近きほどなるは、おぼえたる翁の物語に聞きしが、いま、まのあたりに見ること、いと珍らし。京の町々はことさらにたちさわぎて、人は東西にはせとほり、時守は鼓をはやめてうちあるく。是等もしばしして、彼空のひかりなりと、すこしはさわぎも止みけれど、人皆たちまじりて、いかなることぞとて、さわがしく見る。我家にかへりても、是が末をみたくて、寐もせず見居るに、赤氣は東の空にめぐるやうに見えて彼光り出でたる條もうすくなり行くに、此まゝにて、こともなく消えうすべくとおもひて、子の二つばかりまでは起き居て、それより寐ねけり。さて、その後、若狭の人の來りしにきけ

ば、「その日の酉の時ばかりより、うすくれなゐに侍る氣の、北の方に見えて侍るほどに、夕日の名殘にて侍るならむと思ひ居りしに、戌のかしらよりいと赤くなるまゝに、かのかゞやき出づる條もいやまさりて侍りき。海の上は只、血をばそそぎしやうなれば、北の海のさまを見むとて、舟を出して漕出でて見れば、三里ばかりより此方のことにて、それより先へ何の氣も見え侍らず。」と。又大和の人來るに問へば「彼空の赤くなりたるを見しより、國中の人立ちさわぎ、京は不殘燒けうせるなり。その中にいと赤くたちのぼる光は、盧舍那佛の堂に火つきたるなりとて、親族の京にある人は、それ問はむとて、俄によそほひて走り登らむかまへをす。又さもなきは、火の雨といふもの丶降り來りて、生きたるもののかぎりは、のこらず滅する時なり。はかなくもおそろしき時ぞ來にける。是をのがれんには、土の室に隱るゝぞよきとて、古より侍る穴どもの中に、幾日も〳〵隱れ居て、給物の用意なども、心ぎたなくして、もちはこびつゝ、いとさわがし。是は他の國にはなきことにて、大和の國には、土の室とて所々に侍るが、みないにしへに人の住ひける所なり。其やうは石にてかこみ、出入の便よりはじめて、水など流れ入るまじき方便までも、造りたる儘にて、幾所も侍るなり。夫を人傳へていふ。むかし火の雨の降來りし時、人みな、この穴にかくれて、命をのがれしなりと。又、其火の雨のことは、書にもしかと記して侍るといふ。實に氷雨と侍ることを、耳傳に火雨と覺えつるぞ、ことわりぞかし。さてかく鳴りさわぐ間に、こともなきことなりとて、やうやうにしづまりし。」となり。其外、東は松前の人の語るも、同じ時同じやうなり。西は長崎の人のかたれるも、又しかり。唯、加賀の人の語れるぞ、すこし異り、それは「其日、暮六つ頃、黑き雲のひとむら、海のうへにたなびきて、赤き色なる光、ほの〳〵と見えけるを、夕日の影のさし渡るにもあらず。鳴神のひかりにてもなし。見る中にやう〳〵夜に入りて、彼光り出づる氣の天に登り、海にくだるを見しより、北斗南に立つ。」といふ。昔よりかゝることのためしを、物知りたる或翁の、「われよく覺えて侍る。是にたがはぬ氣の侍りしとしは、稻よくさかえて、國中ゆたかに侍りしなり。甚だよきことにて侍りし。」とかたりき。

○蜜の蜂になる

吉野の奥には蜜蜂といふ物をかひて、多

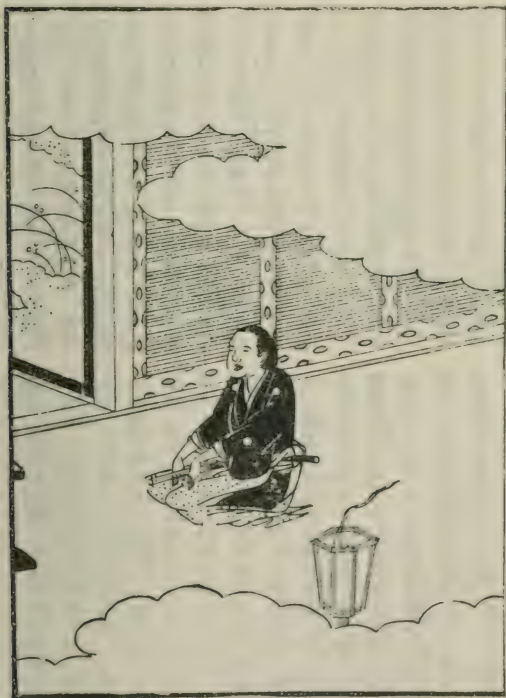
くの蜜をばとることをなせり。是を養ひし人のかたりけるは、まづ、是をもとめむには、あるべくとおもふ山の木をもとめあるきて、やう／＼見出して、是を取らむとおもふ時、衣をぬぎて頭よりはじめて、手足のうらまでも殘る所なく、蜜をぬりて行くなり。さて其巣をとらむとするに、蜂共多く飛出でて、その人をさすとて、身にひしと取りつけども、其蜜の香をかぎ知りて、おのれが友としおもふにや、少しもさゝずといへり。扨その巣をば我家に持ちかへり、蜜のしたゝりをとるに、便よき所をはかりて物につりおけば、蜂はおのが住所にさだめて、年々につくり廣げて、後は釣鐘程の大きさにもするなりと云ふ。又、其巣の中には、正に親としうやまふ蜂の侍るにや、中のほどに住み居る一つは飛出づることもなく、穴もゆたかにして住むなり。口のかたはしのかたには、數も知れず住居て、朝より夕に至るまでは、をちこちに飛び行きて、花の匂を羽がひにつけて、もてかへりて巣の中に入るなり。是を巣に侍る蜂共のくひて、ゆばりする其のしたゝるが蜜なりといへり。よく馴れたるを見るに、飛び行きたる蜂ども飛びかへりて、巣の穴にいらむとする時は、穴の口に大きなる蜂どもの守り居て、かの花の匂ひをもてこざるをば、せめにせめておひかへすなり。すこしにても、もて來らざるは、たやすく穴の中に入ることなしとぞ。實によく物を覺えてさふらふ虫なりといへり。さいへば、蜂の花につきてあるを見るに、みな、その花の黄なる匂を、足につけて飛行くものなり。是ぞかれらが役なりしよ。又かの蜜といふ物こそ、いとあやしきものになん。是を正しく見來りて、よく知りたる人の、よき蜜を久しくたくはへてもてありしに、二重の蓋をして侍るに、事ありて、うへなる蓋をこちはなちたるに、下なる蓋をば喰ひやぶりて侍るにや、細き穴ふたつまで明けて、是が中より、小き蜂どものはひあがりて侍るに、いとあやしがりて、その蓋をもひらきたれば、蜜はかたまりよりて、其色ながら、皆、かたまりて巣の穴になりて、高きひくき打重りて、其中には、蜂の子のいくつもつきて侍りしなり。又、其底なるは、ゆた／＼としてただよへるに、半より上は、終にはかわきて、殘りなく巣になりたり。かへすがへすもあやしきむしなり。

○江戸根岸にて女の住居を求む

むさしなる江戸の春邊ぞ、いともにぎは

ひわたる。松竹立て渡すほども、他國には似ず。大きなる、小さき家のかざり、門は唯、常葉木の林をなせり。川のいと廣きに行きかふふねどもも春のかざり、にぎはしくわたしたれば、見るさへのどやかなる。根岸と云ふ所は北東にあたりて町並をさがりて、山のしづくの里なれば、水の心もきよく、家居などもしめやかにて、竹垣柴垣のみを便に、しをり戸かまへたる住家どもなり。春立ちて二日といふ日、友だちにいざなはれ、其あたりをあそびあるきける。日はいとのどかにて、高き林などは霞わたり、岸は柳もえ出でて、鶯も引きあけて鳴くなり。をぐらき徑を打ちめぐりて行くに、はかなきしをり戸なれども、見入のいとよしありげに住める家の園には、椿の色々に咲きたるさへ、いとあらはなれば打見ゆる。此友人、しばし立ちとまりて、「此家の隣なりしか。」とて、のぞき見て、頭を打ちふり、「爰にもあらず。そもこれはあやしきかな。」と、ひとりごとし侍るにぞ、「こは何ごとをのたまふなり。」といへば、「いとくるしきことの侍り。いで語らむ。」とて、道を歩みながら語るは、「去年の霜降月廿三日にか侍りし。此あたりにはあらねど、日頃物いひける女の、やうやうあきかたになりて侍るもとへ、今夜はいきて、ことわりなきくぜつどもをいひかけて、相はなれんと思ひしかば、いそぎて此道をとほり侍りしに、日のくるゝに雪のいたく降り出でしかば、笠やどりせん知べも侍らず、此あたりに行きなづみてさむらひしを、正しく今、見入りつる家の隣なりし。いやしげなき女の出で來て、「いづくにおはす人ぞ。かさなしにしていかでおはさむ。簑かして参らせん。しばし立よらせ給へ」と云ふに、いとうれしく、そも山姥にてはあらじとおもひて、付きて入れば、見しよりは住居もいときよらかにはき清めてあるに、此方へといふにおもひがければ、我は只、簀子に腰打ちかけて、いそぎて参るかたの侍る。此儘に居候はん。彼笠はかし給へかしといへば、すこしたのみ參らせたきことも侍るに、さな居り給ひそ。ひたすら降り候とて、女の童の清らかなるが出でて、袖にすがりて引けば默しがたく、つきて行くに、出居と思しき所はいと香ばしうして、壁には秋野のけしきおもしろくかきつけたり。さて、其所に座をしむれば、物引きまはして中に伏し居たる女のさだかにはみえねど、年のほど、廿あまりなるが、すこし枕をあげて、おもはゆげに物いひかけたるけはひ口つき、いとけたかく、聲などもにほやかにて、直人にはあらずとみゆるに、いかなるこ

とにつきて、たかき人のかゝる隠家におはすならんと、すゞろにおしはかれども、心落ち居ずうかゞひて侍るを、先に案内せしをんなの出で來りて、「是なるはみづからが仕へまゐらせし君にて候。ここにかくおはす筋は、今なむかたり出づべきことにも侍らず。唯今おして御許を申入れて侍るむねは、この君昨日のあかつき、物まうでしたまひし道にて、しろの犬の飛出でて、御足のはしにくひつきけるを、そこに居りあはせて侍りける人人の、かいはなちて給はりしに、血もいたくながれて、からきめ見給ひける故に、氣ものぼりおはしたるならめ、人心地もなくておはせしを、やう／＼物にかきのせまゐらせて、是までは御ともして侍る。人のいふをきけば、犬にくはれたる病人は、世にむつかしき物になど、さるゆゑにや、ねつの御心も侍りて物も參らず。かく打ちふしておはすなり。そこは御醫師にこそ候。よきくすり給ひて、立所にしるし見せ給ひてよなど、わりなく聞えけるに、みればすこしおもも乳もはれ給ひて、なやましげなり。こはおもひがけぬ。今日にかぎりて、人もめしつれず藥ももたし侍らず。されど、かく俄のことには用うべき藥の、いさゝ懐に侍るを、先づ試に參らせむ。御足はいかに侍る。うかゞはばやといへば、げにもとて、かたへに侍る腰元のたちそひつゝ、表は金のいとにて、はな紅葉をぬひ重ねたる唐の絹に、裡はこき紅をあはせたる、夜の物の裾を少し押しまきて、御足出させ給へといへば、はづかしげにてさし出したる、いと白くつや／＼しき脛の、細くやさしきまで、いやしげあらぬ人なりと打守るに、それと見ゆる疵もあらねば、いづくかあやまち給へる所にて候と問へば、をんな、うちゑみてはづかしげに、今少しうへのかたに侍るとて、白きあやのきぬを二重ながらおしまきて侍るを見るに、ふくらかなるふとものゝ、いたくはれ出でたるに、牙にくひあてたりと見ゆる疵のあとも侍るをよく見とりて、今、こしもと達のたまひしごとく、いとむつかしきものには侍れども、それはやまひ付きたる犬のくひたるをいふなり。是はさる犬にもあらぬが、たゞされほたえてくひたるならむ。今、參らする御藥は、付けてものにまきふさぎておき給はば、近きほどには怠り給ふべし。われら、また、かさねて參りて、うかゞひ參らせんといへば、みな、うれしがりて、猶々頼み參らせん。妾は何ごとにつけても、便あしく侍る所なれば、神田なる柳が原あたりに、御いとこのおはするが元へ、今二日ばかりのあひだにはうつ

り給はん。扨、其所の御住所もうけ給はりおきて、こなたよりむかひ参らせん。しるしおき給へとて、うづたかく蒔繪したる硯の箱に、ふるき墨のいとこまやかなるをすりのべて、まぢかくさしおきたり。また、同じ蒔繪したる箱に、しをりの紐の房ながくたれたるをときて、内なるみちのく紙をとりいだして、よきほどにさしおきてしりぞきぬ。か丶るふるまひを見るにぞ、つたなくゆがみたる鳥の跡を殘さむは、いとくちをしかりしかども、こゝろ高くかいなぐりて、かさねては此所へうけたまはらんと、我が住所を申しおきて、出でんとすれば、もてなしせんとてたちさわぎけれども、かのことの片心にか丶りて侍るに、雪もはれければ、簑もかりうけではしり出でしが、さるにてもゆかしき人には侍るよと、道すがらも思ひつゞけて行くに、夜に入りぬれば、石にふみあて雪に踏みぬきなどして、酉の刻ばかりに、からうじてかの女のもとへつきにけり。さて思ふまに／＼いひふるまひて、いたくふければ、其夜はそこに丸寐して、あかつきかへりにけるが、風の心地に煩ひぬれど、彼かさ

やどりせし、夕暮の雪なん心にしみて、かのむかへんとありしを、けふ〳〵と待ちわびて侍るに、終に音もせで年もくれにければ、あまりにもののゆかしく侍るに、きみをなむそゝなかしまゐらせて、かく参りたり。其ふしは、いとあわたゞしかりしかば、その家のさまは露もおぼえず。たゞ隣なる庭には、椿の色々に咲きほこりて侍りしことと、黒木にてふきたる屋根に、しをり戸しかまへたるとは、よくおぼえたり。其家はさだかにて侍るに、彼隣はあとも侍らず。たしかに見しよりは三十日ばかりのほどなり。それがほどに家も消えなんやとおもひしほどに、先にも立ちとまりて、つら〳〵見入りて侍るなり。さこそおもへ、所をたがへたるにや。かくと知らば、うつらむといひし家の名、又いかなる人と、つまびらかにも聞きおかましを。をしきことしたり。」とて、くやむ。「さばかり正しく覚えたらば、かの椿の咲きたりし家に行きて問はば、家もこぼちてうつりたらむも、猶、行先も聞き得べし。」といふに、「げにも」とて、立入りつゝ、外のかたに聲つくりして。「すこし物うけたまはらむ。」と

いへども、いらへなし。「常の時すらあるに、初春の禮申しに參らむ人も侍る物を。」と打ちさゝやきて、「此主は晝寐したるならむ。よし、聲高にいへ。」とて、猶、こわつくりて、「ものうけたまはらむ。」といひ入るに、こたへねば、くるす戸のすこしひらきたるを、から〳〵と押開きて、顏さし入れつゝ、「頼みまゐらせん。」といへば、老女が顏さしむけて、二つの耳に指をさしあて、「物高くのたまへ。」といふに、こはつんぼなり。「ゆるさせ給へ。」といふさへ、ひゞくばかりにいひて、ちかくさしより、しか〳〵のよしをとへば、老女きゝて、「けふはさる御所へ、初春の禮を奉らんといき給ひしなり。人ふたりまで召しつれ給へば、老女ひとりかく守りて侍るなり。」といふ。さてはいまだに移り給はぬにやと、又よく問ひかへしぬれば、「此方の殿は、御藏守の下つかさにて侍るが、今は家をも名をもわ子にゆづりて、かくしづかにて住み給ふなり。」といふ。さてこそ聞えぬつんぼにても、聞きおほせばやと思ひて、こゑを盤渉の甲にとりて、「隣の家はいつの比、打ちこぼちて侍る。住み給ふ人はいつの程に、いづこへかうつり給ひてけるよ。」と問へば、すこし聞きとりしにや、老女舌打ちまぜらせて、「されば、老婆が頭はをとゝしの春、そりこぼちてける。又こゝへは去年の秋より移りて候。」といふに、いと腹立ちて、今はかひなければ、「よし〳〵。」とうなづきて、小聲にて、「狸ばゝよ。しびとばゝよ。」といへども、更にも聞かず。和々として、「湯なひとつまゐらせん。」とて立つを、いときたなげなれば打ちわらひて出でぬ。さては所をたがへたるなりとて、あなたへ行き、此方へゆき、椿の咲きたる庭や侍る、黒木もてふける門や侍ると、見れども〳〵侍らず。あまりのぞきあるくを人の見とがめて、ぬす人かと思ふさますれば、「今は思ひすてよ。さるにてもことのうろゑたるに、椿もとめあるかむより、椿餅賣る家もがな。」と、をかしからぬを打笑ひて、かへる路に出でける。「かくまで見るに、家もあらぬはいとあやし。犬にくはれたりとあるからは、さだめし毛のむく〳〵とはえたる脚なりけむよ。」といふに、「いな〳〵、人の脉にてうかがひつることはたがはじ。」といひ勝ちて、只、夢の中に相見る人を、慕ふばかりになむ、こひわたりける。

○蝶に命とられし人

みちのくのかたに侍りし、ある國の守につかはれける武士の、生れながらかの蝶

をきらひて、常に云はれける。「春はおもしろき物なれども、てふの飛びあるくぞうたてき。いづくへ行くべきとも思はず。」とて、よき日には内に居り、雨のしめやかに降りくらす日には、花見んとてぞ出歩行きける。友達これをあやしみて、「世にことなることをいふ人かな。實に癖ならばあしき性なり。ためしてや見ん。」とて春雨の打續きてふる頃、「花見て酒呑みなどせばや。」といひやりぬれば、出で來り、みなゑひすゝみて、かの男をいつはりて一間に入れおき、戸をさしかためて、蝶三つ四つとり置きしを、はなち入れければ、此男大聲を出し、「あなや、ゆるしくれよ。」とさけびて、あなたこなたにげあるく音しけるが、しばしして音もなくなりにけり。「さてこそ、くせはなほりつる。」など云ひて、ふすまひらきて見れば、仰向さまにたふれて死に居たり。人々あきれてかいおこし、藥などいへども、手あし氷りて死入りぬ。さて見れば、はなちたる蝶どもは、鼻の孔にはひ入りて、これらもともに死にをりけり。甥弟なども侍る人にて、後にはかゝることと知りけれど、かたきといひ出でんすぢにもあらねば、そのまゝになりにけり。

漫遊記卷之三終

漫遊記巻之四

○浪華の富人孤の兒を得る

浪花の浦におほくの寳をもちて、家とみさかえて侍る男、秋の野いとおもしろくなりぬとき、あまた友だちいざなひ比良野のかたに行くに、こぼれ口といふあたりを通り侍りけるとき、あやしき家に何の子にかあらむ、いとちひさき檻に入れて侍り。兎の子かと見れば狐の子にて侍るなり。珍しく思ひて「是賣らむや。」といひ入れさせたれば、主らしき男「これはうりさふらふものには侍らず。」といふ。「いかにして得給ひつるぞ。」と、重ねて問はせたれば「さいつころ、曾根崎のかたに參りて侍りける夕暮に、ほとりの森のかたへにて、犬ふたつが出でて、一つの狐をくひ殺して侍りけるに、いとかなしく、犬をばうちたゝきて追遣り侍りけれど、其狐はいたくくはれて、いき出づべくもあらぬさまなるに、眼をひらきて、我をば頼む心の侍りけん。頭をふりあげて森のかたにむかひて、いく度も打ちうなづき、そのかたに心ありげに見えてさふらひし故、往きて見しかば、榎の木の老いたるうつほの中に、此子狐のかくれ居て侍るなり。漸々、穴をはなれて侍るほどにて、をさな／＼侍るに、かの狐は此母と見えて、乳などもふさやかにたれて侍り。是は此子をたのむなりと思ひとりしかば、そのまゝにいだきもちて懐にかくし入れて、其母狐にむかひて申したるは「たのみかひなき我にはあれども、此子はそだてあげて、いかにもよくやしなひ侍らむ。又、よくおひ立ちて侍らば、犬など住むまじき曠野にもち行きて、はなちやるべし。若しその間によき人にあひて、社の主ともせんずるなど、きこゆるすぢも侍らば、いかにもよくはからひ侍らん。今は心やすかれ」と、人に物申すごと、云ひ聞かせさむらへば、うれしげなるさまに見えて、幾度もうなづき、目もはなたず、ふところなる子をうちながめ侍りしが、肝のあたりをいたく喰はれけるにや、直に眼をふさぎて死にける。さて哀なることかなとおもひ侍るまゝに、そこなる藪原に入りて竹を押折りて、それをもて土を深くほり

て、彼がからだをかくしとらせぬ。また、かへりては乳もあらねば、飯をねりてやしなひて侍る間に、おひ立ちてさむらふなり。彼見給へ。我にはよく馴れてさむらふを。」とて、檻の口をひらけば、手につきてざればみなどす。彼富人、是をみて、しきりにほしくなりしかば、「故ある御物がたりかな。よくもし給ひつる。是はひたすら我に與へ給へ。ねんごろに養ひそだてゝ、のちは我家の守り神にいはひて、社をも立て神の御位をも申しこひて奉らむ。さて價は申し給ふまゝにして參らせん。」と、わりなくいひかけしかば、主、うれしげに聞きて、「見奉るに、物違へ給ふべき御人がらにも侍らず。しからば神にいはひて、社の主としてたまはらむとや。此價には何をかのぞみ侍らむ。唯もち行き給へ。參らすべし。」とて、檻ながら手に渡しければ、「こはかたじけなし。さあればとて價參らせでは心すまず。」とて、さまざまにいひしかども、ことわりあつく聞ゆるに、しひていへば腹立たしくしけるを、しからば仕やうこそありとて、禮などはあつく云ひて、下部にその檻をもたせ、けふの野遊はおきて、先づかへりて是をざれて遊ばんとて歸りにけり。次の日とり。・・にさたして、又の日、物よく云ひとるべき使に、禮物どもあまたもたせ、かの得たりし家につかはしたるに、「その人は昨日、いづこへか家を移し給へり。」といふ。「いづくにか。」と問へども、その家主も、「さだかに覺えず。」といふに、いひがひなければ使はかへりにけり。さるうへは、しひてたづねとはむ方もなく、十日ばかり過ぎゆくに、かの子狐は人に馴れねば、たゞわなゝきゐて物くふこともともしくするに、いや痩せにやせて侍るを、「かくては死ぬべし。いかにして、好まむ物を喰はせなん。」と、とりどりいふなかに、狂言師の男、來りあはせて、「是は釣狐といふ舞の侍るに、鼠を油に煮てくはせんは彼がこのむもの、これに過ぎたるはあらじ。しかして見給へ。」といふ。人々きゝて、「足下の御家のこととて、をりしくも思ひつき給ひける。さて鼠は。」といふに、僕にもとらへかねて、米ども積入れて侍る藏主にいひ遣りて、「唯今の間に、よく肥えたる鼠をとりて出せ。」と云ひやりつるに、藏主等、いとわづらはしとは思へど、主の仰なりとかしこまりて、僕に升をひきかけて、彼がとびつかむとき打ちかへりて、これをかぶりふさんやうにしかまへて侍るに、しばしありて、はたと鳴る音す。すはとてはしりゆきて見れば、物ぞ入りたる。「そやつ、打ちころせ。」とて、荒雄どものとり

かこみて升なむ打ちかへせば、鼬の子のはしり出でたるに、あやしくくさきかをりの息、ひりかけたるにや、目口もふたがるばかりになやみて、荒雄どもさへ逃げぬ。「よしなきさわぎかな。」とて、又しかまへ置きて息をもせで待つに、こたびはよき鼠二つまでとり得て侍れば、俄に人走らせて遣はしたるに、かの油に煮てもていきて喰はせ侍れども、まださる物はくひおぼえぬにや、打ちねぶりたるままに捨ておき、只くらき所にはひかゞみてあるに、人々、なぐさめかねてもてわづらひける。さて夕暮かたになりて、年のほど廿には過ぎまじとみゆる、色よき女の表に来りて、「物たのみ参らせん。」といひ入れて侍るに、「いづくより」と候へば、「いとかすかにて侍る者なり。いづくよりとも聞え奉らじ。是はさいつころ、こぼれ口にて得させてかへり給ひつるものの、ゆかりの者にて候へと、いひつぎて給はらば、上にもおぼしあたり給ふ筋も侍らむ。是迄からき道をこえて参りつれば、其志をおぼしはかり給ひて、御次なる人をばよけさせ給ひて、直にあはせ給へ。かならずなかしこみおぼしそ

と、申しあげさせてよ。」とねんごろに申すを、あやしとはおもへど、しかぐくいひ入れて侍れば、主、人々をあつめて、「彼がゆかりと申せしからは、人には侍らず。先づその女はいかなるさまぞ。何をか着たる、聲はいかに侍る、手足は何とある。先づこともなく、一間に入れおきて、みな行きて、ひそかにのぞき見よ。」といふに、此方へとて一間に向へ、格子などの穴には人々ぬきあししてさしより打ちのぞき、ありさまを聞くに、「何のこともあらず。常の女にてさふらふが、とかくにともし火に打ちそむきてのみ侍る。面長に見ゆるぞ心からにや。」と申す。又ひとりが來て、「よくのぞきて侍るに、こともなく侍るが久しく見つめて侍る間に、耳のうごき侍るやうに見えし。」といふ。又ひとりが來て、「とにかくに、鼻のあたりひこめきて、物嗅ぎまはすさま

に見えて候が、是は彼油のかをりを聞きつけたるならむとおぼえさむらふ。」といふ。時もうつり侍るに、此家に古く侍る老人の出でて、「何條こと侍らむ。人みなかうしのこなたにあつまりてさむらはん間、こゝろ安くおぼして其女を此方によび入

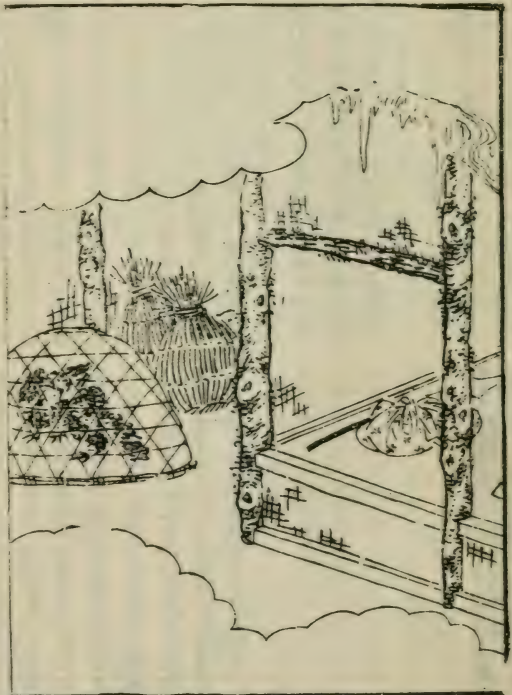
れて、彼が申すこと、はじめをはり聞取り給へ。狐おのれいかばかりのわざかせん。おそれ給ふな。」といふに、げにもとて、「さらば、こなたへ。」とて、彼女をいざなひ來るに、主立出で、「いとめづらかにこそ。」といらへば、女禮を正しくなして、「みづからことは、彼が爲には姨にてさむらへ。いもとにて侍る者、うひ子まうけて侍るを、祖父がかたへ參るとて、娘のまたいとけなきを、ともなひて侍りけるに、さいつ比、曾根崎の森にて、おもはずも命をうしなひ侍りけるとき、情ある御人のきたりあひ給ひて彼をたすけ、又いもとがなきからは土にかくし給ひつる。其後やしなひそだて給ひつる間に、此御方へとうけ給はり、かかる大宅にかこひそだて給はば、おひさきたのもしく侍れども、此ほどは煩ひて侍るよしを、ほのかにしりて侍るまゝに、なつかしくおもひさむらふほどに、何ごとをもしのびてまゐりつれ。そとあはせ給へ。」といふに、主きゝて、「のたまふこと、我きくに少しもたがはず。又煩ひて侍ることをも、いとはやくきゝ給ひしに、此方へ得てかへりしのち、人にも馴れぬにや、うちわなゝきてのみ侍るまゝに、物もたべず、痩せほそりて侍るほどに、このほどはわれ〳〵もおもひ煩ひて侍る。かのこぼれ口にすめる人は、すぐに使をたてゝ禮ども聞え侍りけるに、是は行くさきしれず。住居も移し給ふに、かへしやらん所もなく、とかくにもてあつかひて侍る時なり。よくこそ。」とて、其檻を取りよせて口をひらきたれば、其子は嬉しげにて飛出でて、女が懷をかきわけて、乳をうちくはへなどするに、主もたちのぞく人びとも、唯あきれにあきれて、「實にもいつはりなきゆかりにては侍るよ。」とて、うたがひも打ちとけてみたあやしきことになむおぼえ居たり。女やや涙をのごひて、「何かとものおもひも侍るにや、いと痩せて侍るなり。此うへは我にまかせおき給へ。おふしたてゝかへし奉らむ。自らが妹が乳ほそくかひなきまゝに、外の子はみな死して、唯是のみ殘りて侍るゆゑ、みづからが乳にてそだてあげて侍るほどに、かく馴れては侍るなり。かく聞え奉るも、妹がかたみにて侍ると思へばなり。」とて、ひた泣きになき入るを、人にもたがはじとて、皆哀になんきゝ居ける。さてしばしして、「愛にひとつの願のさむらふを、申しなやみて侍るなり。さいつころ、曾根崎の森にて、此子をたすけ給はりし人は、今事にかゝりていと苦しみたまふを、我よくしりて侍れど、すくひ奉らむ方便もなし。其方便を我にかしあたへ給はば、こ

よひの中にすくひ参らせて、此子がいのちをつぎたる禮と、妹がなきがらをかくし給ひし禮とを、ひとときに報ひ奉りたう思ひさふらへ。」と申す。「何にもあれ、うけ給はらむ。」といへば、女けしきあらためて、「世の人々に報ひ申すことは、よきことはよきにむくひ、あしきことはあしきをむくひ侍るに、さるわざはいとすみやかに侍れど、われが身のちからに及ばぬことのひとつは、世にある寶に候。しひて報いせんと思ふには、かなたをうばひこなたに奉じ、此方をかすめて彼方にむくいすることの侍るは、果はおのれが罪になむなりて、いとくるしきめを見ることの侍るに、せんすべなければ、此ことをあからさまに聞かし奉る。今、こがね百兩を出して、自らにあたへ給はれ。是を持ち行きてむくいせば、かの人、たちまちに苦しみをのがれ給ひなん。もし、さる金の數にもおよばで、苦しみをすくひ侍らば、あまれる金はもて參りて、かへし奉らむ。」と、うはべなくいひはなちたるに、主、「いとやすきことよ。」とて、鍵主をよびて、こがね百兩封じたるまゝにてとり出でて、女に遣はせば、禮あつく聞えて、「はやくかへりなん。時もうつりさむらふ。此子は今、申すごとく自らつれて參りなん。さあれど、道すがら犬の吼えつきて侍らむ。おのれはともかうもせん。此子におもひなやみてさむらふ。」と申せば、げにもとて、のりものをまうけさす。さる間に彼舞まふ男が、先の油に煮たるものを、家つとにとてもて出でけるぞ、心づきいとをかしき。女うれしがりて、「よき御玉ものかな。此かをりにあひて、命うしなふが數もしらず侍るなり。」など、いらへて持ちたり。さてのりもの荷ひて來るに、「曾根崎の森までおくりなば、はやかへれ。」などいふ。女も人々にねんごろに禮をなしてのらんとすれば、主しばしととどめて、「約し參らせしごとく、御社のこともちか〲にいとなみ侍らむ。いつのほどにか、此子をかへしたまはらむ。」といへば、「御社つくりをさめ給はんまでには、いと安くそだてあげてかへし奉らむ。社成就なし給はば、火を清くし水を清くして、粟稗稻麥大豆小豆を煮て、玉笥にはそれを盛り、辛き酒甘き酒をそなへ、掃き淸めて待ち給はば、必ず自らもともに參り來りて、ながく御家を守り奉らむ。又參り來りつるしるしには、其御社のうちを見させ給へ。あやしき光の侍らむぞ。」と、よしありげに聞ゆるに、いよ〲、たのみに聞えて、のりものかき入れたれば、かろらかに飛びのりける。さて人々、門邊に立送りて、「のりものは

しづかに行け。」などいひて、又家の内の人には、「今夜の事、人になかたりそ。まことなき人こそ、か丶る筋はあやしめ。」など、みなうれしがりていりて寐る。さてのりものをかきゆくに、夜中過ぐるばかりかの森につきぬ。「爰にてさむらへ。」と云へば、「いと遠き道也。苦しくおぼしたりけむ。我は是より参る所あれば、はやく歸らせよ。」とて、のりものをいでけるが、子をかきいだきて藪原にまぎれ入りぬ。物うたがひせぬ男どもなりしかば、其かたをふしをがみなどし、「身のうへをさへ頼み奉る。」など告げおきてかへりぬ。又家の内にはかたく人の口をとめて、何ごともるまじくしつれど、かやかくあやしき筋どもいひわたる間に、事もなきに其家の男ひとり、行方なくなりたり。か丶ることより、浪花のことなればあしがきの隔もなく、「何某ぞ、人にたばかられて金百両をとられ、そのうへに、盗人をのりものにのせてふしをがみて送りたり。おぞきやつかな。」と、いとかしましく聞えわたりける。後によくきけば、此女の乳にてかひそだてたる子狐より、いろ〳〵のたばかりをしくは

へたること也といへり。かのおばといひつる女は、こぼれ口にをりつる男の妻にて、曾根崎のわたりに住みてあるを、彼も我も見しとて、いとをかしがりつるとなん。又我に家出しつる下部は、かれらにくみして、よろづしるべしたるなりとぞいへる。

○人を頼みて飛び入りし鴈

きさらぎ十日ばかり、越前の國、坂鳥といふあたりを旅行しけるに、雪いと高し。「此雪、いかばかりの高さに侍る。」と問ふに、「十丈あまりなり。」といふ。いかにして左ははかりしれりと思ふに、常に見る大木のうへが、眞柴などを見るごとくに、雪のつもりてうへに餘り侍るをもつて、夫程の丈なりとはいふなり。雪は

おもしろきものにて、松の小枝にかゝりゆるを、かくばかりもつもりたる山路にたるあかつき、しのゝめのうら葉にふりては、人の命をもとるべきものは雪なしく夕暮などは、花にもまさりておもほり。かまへてきさらぎ斗りは、春のきさ

し下にめぐみて、かのつもれる雪は、氷りながら地をはなれてくえおつる。是を雪國には雪なだりといふなり。さる時は麓の家村を埋らし、柱梁などをさへ打ちたふし、あまたの人、是にうたれて死ぬる事ありといふ。かゝるおそろしきことを聞き知る人は、やどりをば朝早く出でて、水の消えまじきときにあゆみ、日のさしのぼりてあたゝけくなれば、さる高山の常陰ならぬ所をもとめて、晝より先づやどりを乞ふなり。又さるやどりをこふにも、大路の雪は軒より高ければ、遙に人屋を見下して大聲を出し、「やどりせん。借し給へ。」といへば、うちあふぎて、「道の件はいくたりにてさぶらふ。」など云ふを、「唯見給ふばかりの件なり。借代はいくら参らすべき。」と、又大聲にいへば、「かゝる雪の中の住居して侍るに、何まゐらせんものもなし。よきほどにし給へ。」と、いふさへ幽にきこゆ。さて谷の底にはひくだる斗りに家の外に下りて、先づ火を乞ふにぞ、眞柴はぬれにぬれて火つかず。烟はたてこめて、いぶせきことといふかぎりなし。さて落間のすみに鴈を三つと眞鴨を二つ、かごにふせてかひおけり。「こはかゝる旅人にたべさせむかまへにや。」といへば、「さることにはあらず。彼らはよく時を知りて侍る鳥なれども、西南の國のはやく春つきし年は、時をたがへてまだきに北國をさしてかへり來る故に、翼ありて空はゆけども、さすがに八重山の雪のみを見つゝとびこゆるに、とく下りて物はまむとすれども、野も岡も川もひた白にて、何はまむ所もなければ、飛びかへらんとしつゝ空にいさよふ時、かの雪國に侍る雪吹といふ嵐の吹出でて侍るに、まどひてすこしも人家のちかゝらむ所に飛びくだりて、やすらふなり。日比は人をおそれて高く飛ぶ鳥なれども、さる時は其人をおもひたのみて、かく近づくがふびんに侍り。是も十日斗り先の嵐に、我家の外にくだりにけり。此隣にも、先の家にも、三つ四つは落ちて侍るを、みなわがごとくにして、稲をはませてかひてさふらふ。やう〳〵のどけくならば、隣なるも、先のもこれなるも、ともにしてはなちやらむと、申しあはせてさふらふ。」とかたる。よき心かなとはおぼえ侍る。

漫遊記巻之四終

漫遊記巻之五

○男をこひて死にける女

いとあつき頃、音羽の瀧のうへなる寺に往きて、一日凉みせんとて、道のほどもありければ、辰の時ばかりに寺までは往きつきなむといひちぎりける。若き人のふたりは、東の五條に住む者なり。ひとりは西堀川の三條わたりにすむ者なり。又是がもとへ同じ年のほどなる若き人なるが、浪花よりのぼりてあるを、「けふはかかるあそびするに、いき給はんや。」とてともなひて行く。道のほども遠ければ、巳の時ばかりにやう／＼に參りつきける。五條よりはいとちかければ、彼二人は先に參りつきて居りける。さて浪花の男を引きあはせて、「同じ心に侍る人なれば、ともなひて參りつる。」といふに、五條の男どもも、「よくこそ」とて、先づ酒をもりてうらなく遊び、又、「一時ばかりも早くきてをりつれば、さびしきまゝにおのが知れるげいこ、ひとりふたりまゐれよと申し遣しぬるが、只今にも參りなむ。そこもとも心あての君召して。」など聞ゆるに、堀川の男も、「道にて知れる方へ立ちよりて申しおきて侍る。只今にも參りなん。」といふ。なには男には、「いかに」と聞ゆるに、「かやうに參ることはまれに侍れば、京に知れる人は侍らず。君達を仲人にたのみ申さん。よきあそびをさせ給へ。」などいらへて居たり。さてもおそしと待つほどに、やう／＼に來りて、とやかくさわぎ、さみせんなどしらべてかきならす間に、又、堀川男のいひおきて侍りけるも來りて、「我友にて侍るうかれ女が、物申したき御人を見かけて侍れば、我身も參らむとあるゆゑに、つれだちて參りし。」といふ。「こはいと興あり。浪花男のさびしくおぼしたりしものを。」といひはやして、「いつが間にかゝる知るべをばしおき給ひける。」などそゝのかしたてゝ、「いづくにぞ。」といへば、かの遊女がいふは、「志す日にあたりて侍るに、上の山の御佛にまうでて、そこへといふにまかせて、わがめしつれし婢女ひとりをつけて、みづからは別れ參りさふらふ。このところはよく申しきかせおきたり。」といふ。「いな／＼、人をつかはしてむかへさせむ。はやくよびて、浪花

人の花を見ん。」などいひさわぎて、女どもふたり上の山へ遣はして、「佛をがみておはさむを、はやく來り給へ。」とてやる。女どもの、「誰にておはす。」と問へば、「昔の名は荻と覺えつる。同じ里に居しかば、折々、往きあひて侍りしが、浪花のかたへと聞えて、後は久しく打ちたえて侍るに、先つかた、いと身のやつれたるありさまにて入り來り給ひて、そのおはするかたへみづからも參りなむ。よく知りまゐらせて侍る人のおはしたる。物申したきこともあればなど聞え給ふに、こはよき時なり、我が知り參らせし御人の御伴にて浪花人のおはしたるが、それにておはさむ。物がたりは道にて聞き參らせんとて、打ちつれて出で侍りしに、わが家にはをぢをばたち、その外人おほく居て侍りしかども、誰も見おほえねばたがひにものもいはで、われひとり、とやかくいひて出し、道すがら物語もして侍りしが、何をいひつるか聞きつるか、心もとめ侍らず。猶今の御名もきかず侍りき。其姿はたけもひくからず、細やぎてかみのめでたく侍る、としのほどは廿斗りならむ。」といふ。「さていかなる色の衣をかめして侍る、帯は何にて侍る。」ととへば、「それはおぼえず。」とうちわらふ。「こはけしからずのことかな。道の伴ひ人の何色めして侍るをもおぼえ給はずとは、あまりにうかれていそぎ給ふゆゑならむ。」とて女ども〻打ちわらひつ〻、「何にもあれ、ほども侍れば呼びて參らむ。」とて行きける。かくいふを聞きて、浪花男は心得ぬ顔して、かたへにをりしが、「それは我にあひて、物いはむとて來りつるにか。」と問へば、「さだめて君の御ことなるべし。此方の伴ひ給ふ浪花の御かたとて、外にも侍らぬものを。」といふ。「まことにしかり。いともあやしきかな。」とて心落ち居ぬを、友どち、「これは人しらぬふしの、いと〳〵深き御ゆゑこそ、きかまほし。」とて、打ちそ〻るに、「浪花には侍れど、一ふしもなき、よしなしことなり。」と、いひまぎらして居るに、女どもかへりて、「さるかたは、いづこにもおはさず。もしや千手の御方便にて、かくしおき給へるならむ。」といふに、かのつけてやりつるはした女も來りて、「御佛の御前にて、ともに拜み奉りしが、露の間にいづこへおはしたるか、見うしなひて侍るま〻に、此所はうけ給はりおきぬれど、彼かたへは申させりしかば、いづちへかまどひ行き給はんと、かなたこなたいくたびもたづねてさむらへど、あまりに間もなきことなれば、あやしく人氣もすくなかりしにぞ、此堂守などにとひても、さる人伴ひつる

とは覺えず。わが身ひとりこそ見うけたりなどいふに、物おそろしくなりつれば、まづ告げ參らする也。」といふ。みな唯、「あやし」といふ。かの浪花男は思ひあはすることも侍るにや、外の方にむかひて佛の御名どもとなへて、涙のひた流るゝに、故こそあらめとおもふに、みな聲を打ちひそめて、何ごととはしらねど佛の御名など唱ふるもあり。女どもはひとつにこぞりて、袖引合ひなどして、息もせでしばしあるに、かの男は空ながめして、いたく打ちなげくさまなれば、友どちどもの、「何事にか侍りつる。面もちもあしく、事もあやしく聞えつる。何ごとにもあれ、つゝみなくかたりて心を遣り給へ。ひとりおもひしづむことはよろづよからぬことなり。もとより心の罪は口にて申してほろぼすとなん、うけ給はれば、何ごともうけ給はりしうへにて、われ〳〵いかばかりのこともせん。」とわりなく聞ゆるに、「けふなむ初めて逢ひ奉りては侍れど、この堀川なる男はいとこにて侍るちなみに、是が御友達と侍れば、何ごとも隔て參らすることゝろもなし。それには遊び女、げいこたちも多くさむらはすれど、是も同じ業にて、誰がうへにも侍らむ筋なれば、これがはじめ終り、聞かし參らせんに苦しくは思ひ侍らねど、是申して侍らば、もよほし給へるけふの興味もなくなりて、哀れなるむかし物がたり、聞き給ふさまにも侍らず。えこそ聞かしまゐらせじ。我等はかへりて、是より志すとひごとも侍ればなり。」といふに、「ひたすら語り給へ。大かたに是らのことにもておしはかりて侍れば、たとへかくし給ふとも、けふのあそびはとゞめて、われ〳〵もかへりなん。さるよりは語り給へ。うけ給はりしうへにて、此所も寺にても侍れば、いかばかりのとひごとをもともに仕らん。」と、わりなくせめければ、「さらば、きかしまゐらすべき間、そのうへ、御志のとひごとをも、たのみ參らする。」とて先づ涙をおしのごひて、「おもひ出で侍るに月日もわすれず。四とせ先に、我いと若くて母にともなはれて、京にのぼりてをちこち見あるき侍りし時、この觀世音に詣で侍るは、卯月中の八日なり。此山のふもとの家に、いと貧しくて住める男のあるは、其妻なん若かりし時、母のかたへにてめしつかひて侍るものにて、今はそのところに人の妻となりて侍るを、京へまうでたらば、かならずとひよりてと、をり〳〵いひおこして侍るに立ちよりて侍れば、いとうれしがりて、あるじの翁も出でて、さま〴〵もてなし侍るほどに、時もうつりて暮れけるに、神な

り出でて雨もいたう降るを、いかでかへさんや、いぶせくは侍れど、今夜は爰にとまり給へと、いとせちに聞ゆるに、外のさまにもおもはで、母と我等とめしつれたるはしため、ひとりをとゞめ、男どもはやどにかへして、明日は朝はやくむかへ来れよと申してある間に、神なりもしづまり雨もをやみて、月のさしのぼるけしきいとおもしろかりしかば、若葉にうつらふ月影に、夜の御寺のさまことにしめやかならむを、ひとり参りて拝まむやといふに、いかでさはとて、外に人もあらねば、むすめのまだ年もゆかじとおもふをつけて、しるべさせたり。何の心もなく、手をひきて御山にのぼり、うしろのみてらなどもをがみて、老いたる姥のひとりをりける亭の伊豫簾垂れて侍るもとへ立ちよりて、しばしをりて、雨はりの雫、青葉の櫻が枝よりふり落つるなど、いとおもしろくおもひ侍るに、此娘がとかくけさうめきて侍るを、年はいくつにかといへば、十六なりといふ。丈は細やぎたれば高くも侍るに、いと童しく覚えて侍るに、こは所がらにて侍る、はやくいろづきて侍るなど、心におもひて、

きよげに侍りければ、心の外なることともいひひよかしなどし、こよひぞ物のまぎれになど、道すがらいひちぎりてけるに、いとあらはなる住居なりしかば、何ごともかたらはで、かさねて來らむといひて、明日はとくかへりにけるが、母なんともなひて參りつれば、おのが心にまかせて歩行くも叶はで、をしきことしたりとおもふに、古鄕よりむかへきたりて、止むことなく浪花にかへりき。さて後は若葉の月見し夜半のこと、心にかゝりたりしが、其年のふみ月、京の便にきけば、翁も妻も俄に病みつきて死しければ、娘はいとこのかたへ遣して、其家も人にゆづりてなど聞ゆるに、重ねてとはむたづきもなければ、うしとなんおもひしに、葉月になりて業のことといてきて、京にのぼりしを、先づ此御山にまうでて、さる家の隣にてとひしかども、娘のいきたる方はしれる人もなく、とひよらむ知るべもなきを、今は、歩人のわたれとぬれしえにしあればと、うち吟よひて過ぎけるに、友どちにいさなはれて、遊び女どももとめにいきける時、ちか頃よりいでて侍る狹となん聞ゆるがありと

て、我にもとめよといふ。荻ならば伊勢人にこそよからめ。浪花人にはあしかるべしといへば、あしともよしとも一夜のかりにをり伏せ給へといひて、ともなひきたるを見れば、先に契りしむすめなりけるに、いとはづかしげにて顔もえあげず。われらは觀世音のしたまふなりとよろこびて、はやくねてかたらむといふを、友どちにくむ。さるにても時うつりぬとて、やがて人げも遠のきたるに、かの夜のしづくにぞほちそめたりしより、へだたり侍りし月頃のことなどかたりて、行先をさへいひ出づるに、鷄のなけばわかれがたくしてかへり、京にとゞまりて侍りし間は、一日一夜も落さず相見て、さて業のことも果てたるに、今はせんすべなくて別れて歸りしに、玉章の便も繁くいきかはして、いよ〳〵わすれがたかりしに、長月ばかりに終に浪花にくだり來にければ、いとうれしくて、それより一とせばかりは、唯、夢のさまにて相見しを、おのれも親にいたく責められて、一年ばかり東の方へ追ひやられて侍りける間に、かの荻もより所なき事にて、人のかくし妻と成りて侍るとき〻、今はにく〻なりしに、かの夢もさめければ、人々もとりなし聞えしにや、親のいかりもゆり侍りて、此ほど浪花へかへり侍るに、さるしるべよりきけば、かのをんなは其人にもしたがはず、さることに定りしより、物をくはで唯、物病みて侍るよしなり。さてしのびておこせし文ども、あまた侍るを見るに、あはれなることどもの聞えて、一度はあひて心のほど聞かまほしくとのみ聞きしが、此比、京へのぼるに、やがてかへりてあらば、ともかくもせむと申し遣はしけるに、其返じはいとよわりて侍るにや、筆も取りあげがたく侍るにとて、人づてに心よわきことづてして侍るに、さきの夜、舟にてのぼり侍りてけるが、夜すがら見る夢も、唯かたへにつきそひ侍るさまになんおぼえ侍る。さる心がかりの侍るに、人人と交りて遊びせん心も侍らねど、此所へとうけ給はりしかば、昔をもおもひ出でて、すこし心をもなぐさめんとおもふばかりにて參りしに、覺えず人々の給まふことを聞きて、さてはこの世になき人となりたれと、一たびは逢ひ見てんといひし心の殘りて、したひ來りしかとおもひてをるに、むねもふさがりて、人々のの給ふことさへ耳にもいらず、御寺のかたを見て侍りしに、たゞ烟などの立ちのぼるごとくにて、おもかげに見えしかば、いとかなしくて佛の御名となへて侍る間に、消えうせ侍りけり。哀れなる事に。」とて、今は聲をあげてなきけるに、

男どもゝ頭をたれて、「さてもさることに
てありしか。われらがたちさわぐにぞ、
なき魂のかよひがたくやし給ひつらん。」
とてなけば、かのともなひしとおもひし
遊び女は、「もと見し人なりとおぼして、
我をたのみて爰までおはしたる心の、い
かにも〳〵いとほしく侍る。」とて眞袖を
顔にあてゝなくに、「誰々も身の上なりけ
り。ふかきえにしかな。哀の御人の行衛
かな。」とて、いひ出で〳〵はてしなきに、
女どもゝ、「かくうけ給はりては、しばし
ももださむや。みな〳〵佛の御名を唱へ
給へよ。又うへの山に人やりて、跡とふ
わざねもごろにせさせ給へ。」など立ちさ
わぐほどに、をかしからむ、おもしろか
らむと思ひつゝ、つどひよりしが、みな
法の友どちとなりて、ひねもす泣きくら
して侍るに、遊女どもゝ目をすりあかめ
しかば、夜にまぎれてなん、あかれちりけ
る。これは其日、參り合せたる五條の人
の物がたりに聞き侍りき。

○寐言を云ふ癖

筑紫の國に仕ゆる射部の中に、寐言いふ
くせの侍るをとこ、ふたりまで侍りけ
る。寒きころはいねもよく、さる癖もを
さまりてあるが、夏にもなりて、ことにあ
つき夜などは、現の時にもまさりて、口
はやく物いひいねなどはこけありくのみ
か、後はおき居、あるひは立ちあるきな
どするを、たぐひなき癖なりとて、國中
に聞えわたりけり。されども、常のさま
よろしきものどもにて、私の心なく、又
弓射るわざは、此二人にならぶものもな
く、これが組頭なる人の心にもよろづか
なひければ、其癖ひとつはくるしからぬ
こととてゆるされたり。さるは後には寐
言の名高く聞え、終には君にも聞しめし
つけて、只、をかしきことに思し召した
り。又、此二人は友としいとむつまじ
く、兄弟のごとくまじはりて、夜晝とも
にあそび居る儘に、夜もかたみに宿りな
どしてあるを、かたはらよりかのくせを
きくに、いとおもしろかりしかば、「か
れがふたりやどりあひてある時は、かな
らずしらせよ。」など、その家人どもにい
ひおきて、みな行きて其寐言をなん、き
き居てわらひけるあまりに、さることの
名高くなりければ、其組頭の人も、さる
くせはたぐひなきことなり。聞きとゞけ
ておかばやと思ひ、其こととなくまねき
て、「長雨のいとつれ〴〵なるに、酒ひと
つもりて物がたりせん。今夜は打ちとけ
て遊ばせよ。」とゆるして、よき眞魚ども
取出して、女のわらはに酌取らせて、ひ
たじひに酒をもりたれば、此二人もい

とかたじけなしと思ふまゝに、引きうけ引きうけ數もかさねたれば醉ひすぎて、無禮のことなどいひ出でむも、いとおそろしければ、「かへりさふらはむ。」といふを、「今夜は雨もいたく降り、夜も更けぬれば、次のひと間に宿りてあれ。夜の間のことも申付けたり。」などあるに、いよ〳〵かたじけなくおもひて、「しからば、今一つぎふたつぎ返し侍らむ。」とて、又うちかさねて今は眠たげに見えしかば、「我も入りて寐む。ゆるりといねてよ。」など云うて入りて、さて、「妻もこゝへ來りて、かの聲を聞き給へ。」とて、上の一間にみなつどひよりて、かの寐入りつくを待ち居りけり。此二人もいたく醉ひたれば、打ちかたぶくより、先づいびきあはせて寐付きたり。さて今にてやあらむと待つに、四郎といふ男のかたより、「五郎やおはする。五郎やおはす。」と、高聲に云ひ出したるぞ、先づをかしき。五郎いびきをとゞめて、「是にさふらふを何事ぞ、あわたゞし。」とこたへたるも、唯うつゝに物いふ斗り也。四郎、又いびきをとゞめて、「頭の三つありてつばさのかた羽なる鳥が、かの空にかけり

てくる／＼とめぐるなり。かけ鳥に射ておとせ。われらは醉ひ過ぎてあるに、かれ射當てむとも思はれず。そこもとは一杯打ちこぼし給ひて呑まざりしほどに、そのおぎなひには彼鳥を射あてよ。」とぞいひかけたり。五郎、むく／＼とおき出づる音するに、さる心得して、いとあかく火をともし置きたれば、こなたよりのぞくに、何事もくまなく見ゆる。さて起きあがりたるを見るに、目はさらにひらかず。丸寐やしつらむ、帶などもかたくしめたりしが、枕におきつる太刀をとりてわきばさみ、つと立ちあがりて、「いでや、我、射あてん。まことに空をかけりてくる／＼とめぐるに、我もし射あてたらば、今一杯呑まんや。」といへば、四郎はいびきしてこたへなし。五郎ひとりごとして、「かれはをらざるか。もの丶ふにかけ鳥を好みて、おのれはいづこにかまぎれ失せたる。もの丶ふの禮はしらざるものなり。四郎よ／＼。」と、高聲にわめきつれば、耳にや入りけむ、是もむくと起きて、「今何とかいひつる。もの丶ふの禮はよく心得たり。いで見せんず。」など、いとさけびていへば、五郎聞きとり

たる顔にて「こはおもしろし。唯今かの鳥を射あてゝ、さかなにつくりて参らせん。それなる大盃にもりて一杯のまんや。そのことをいひかためてこそ、此矢は放つべけれ。」といふ。四郎、又きゝとりしと見えて「おのれ、又射あてずんばいかにせん。」「我、もし射あてずむば、この弓矢は段々に折りて、かさねて武士のまじらひはせじ。」といふ。「それよからむ。いで射よ〳〵。」とせむるに、「さらば、それにて見よ。」といひて、物にたちむかひて弓引きため、かなぐるさまなどもまざ〳〵しくして、「彼鳥を射當てたり。」と立ちをどり、枕をしかとおさへて「いとあやしき鳥かな。是をつくりて給べさせむ。」とて、羽など引きぬくさまにふるまひ、あぶりほすさまなどするを、見るにたへがたく、唯物くるひを見るばかりなるに、四郎はいとくたびれたるならむ、「明日の夜〳〵。」といふさへ、いびきにまぎれて打ちふせば、五郎も立ちさわぎたれば、是もくたびれたらん、「明日の夜〳〵」といひて、いねたり。「けしからぬ見ものしたり。」と、とりどりいひさわぎて、人々しづまり、夜明ければ、かの二人は早くおきて、宵よりの體、正しく申しおきて歸りけり。「さるにても、たぐひなき有さまなりし。」と君にも聞え奉れば、見たくおぼしたるに、御なり所にて宴をなしたまふ時、かれらを下やにやどらせ給ひて、ひそかに忍びおはして立聞きし給ひ、物のすき間よりさしのぞき給ふに、かの二人つとおきあがりて、「國の守は國々におはしませど、我たのむ君にまさりたるはおはさず。」といひ出したるを、君聞しめして、其あとはきかで歸りいらせ給ひて、人々をめされ、「かれは罪人なり。めしとりてきびしく問はせよ。是まで多くの人をあざむきつるぞ。」と、御けしきのいとあしかりければ、とらへてせめとふに、「いかにも、はじめのほどは、覺えざる寐言も申したりしを、人の名高く申しはやし侍るにのりて、おもしろくおぼえしかば、二人して申し合せてさむらへ。」と、事をあからさまにまうしてければ、其罪はとがめ給ひしかど、射部のわざのまさりたるをばめでおぼして、其まゝにさし置き給ひしとかや聞けり。

漫遊記巻之五終

漫遊記　後編　近刻出来

寛政十年戊午十一月

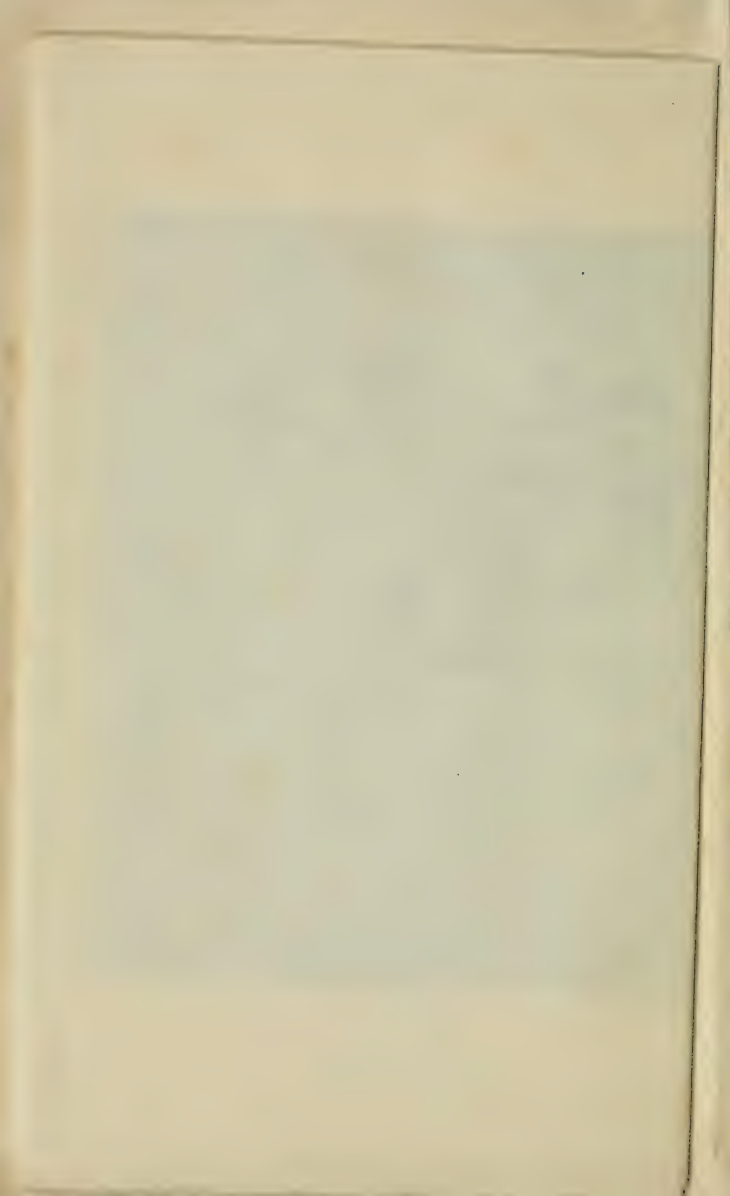
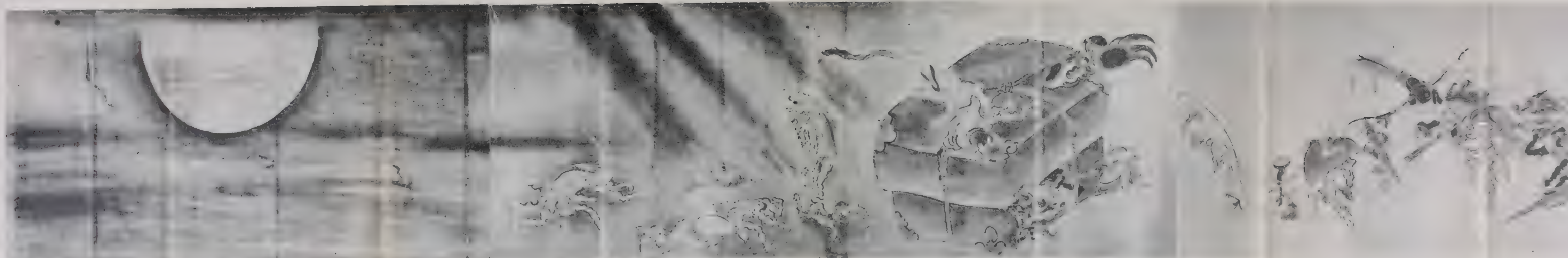
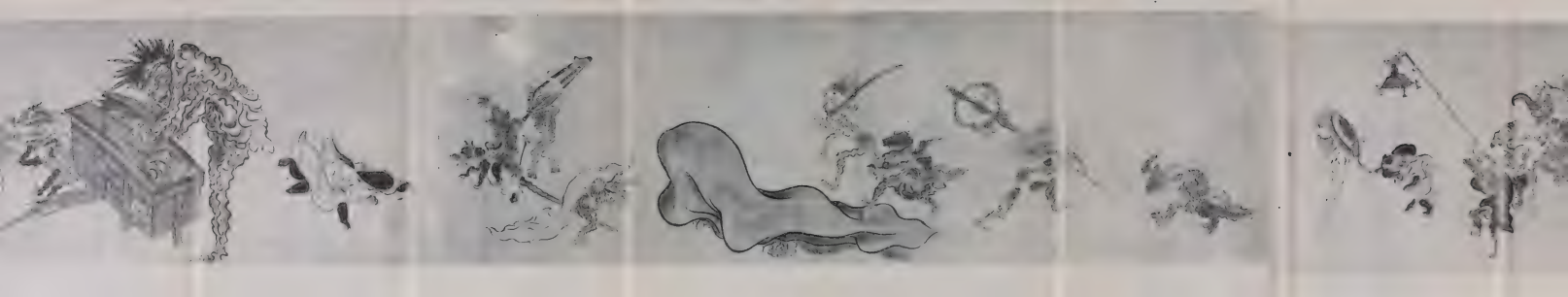
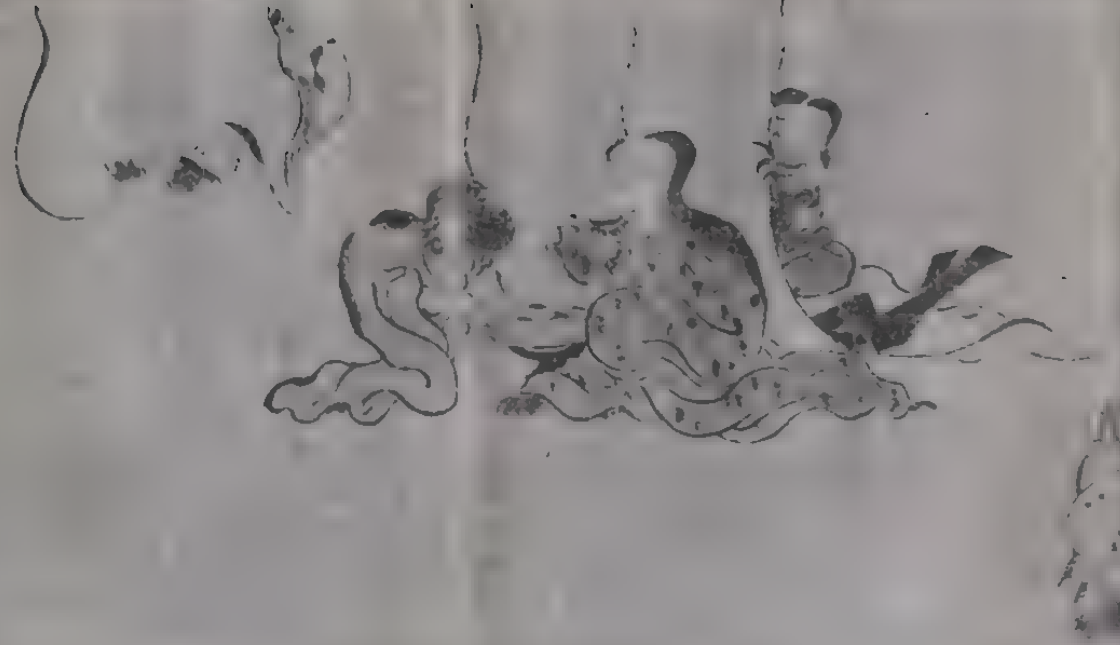
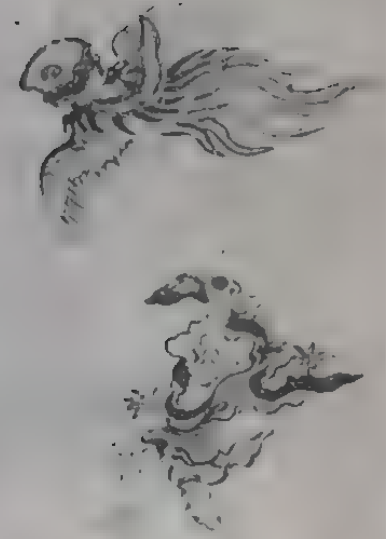
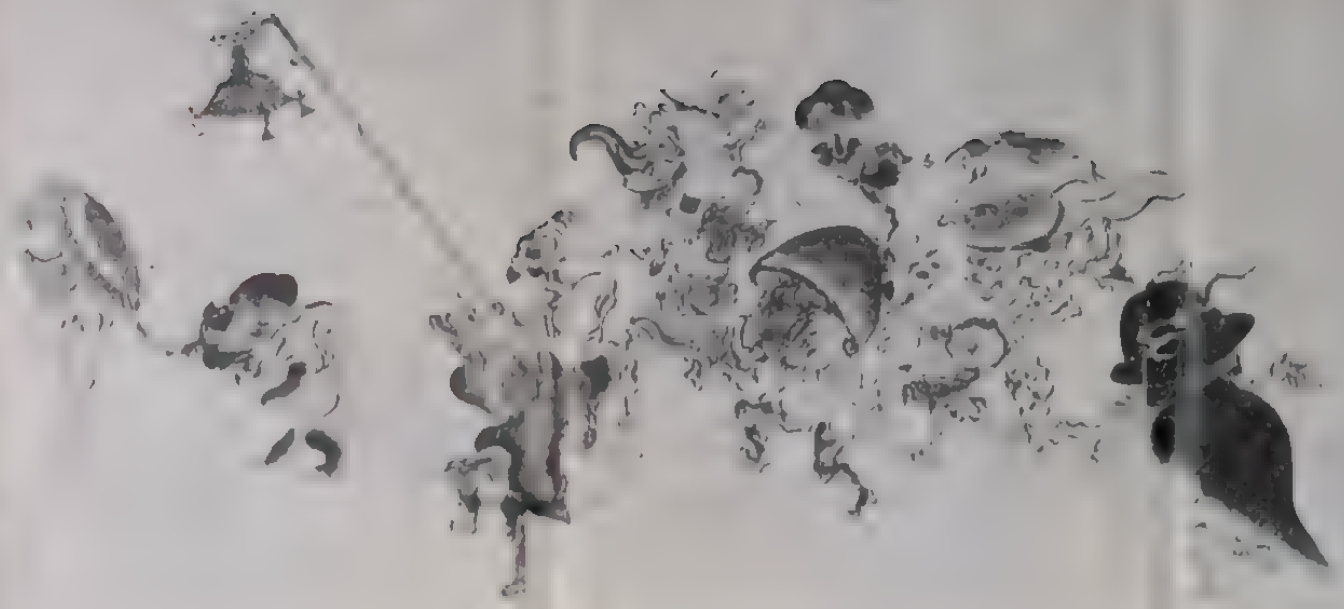
皇都書肆　寺町二条通下　鈆屋安兵衛

中橋筋瓦町南　扇屋利助

浪速書肆　同　與市

怪談名作集

大尾

百鬼夜行繪卷

傳土佐經隆筆

昭和二年十月十七日印刷
昭和二年十月二十日發行

日本名著全集
第一期出版
江戸文藝之部
第十卷
怪談名作集
（非賣品）

編輯發行兼印刷者
東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者　石川寅吉

發行所
東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番一八四一番
振替東京一八四四番

日本名著全集 第一期出版

「江戸文藝之部」全廿七巻及追加篇二巻 書目豫定一覽

(但し種々の事情により多少の變更あるべし。)

第一巻 第二巻 西鶴名作集 上 下

○好色一代男 ○好色二代男 ○好色三代男 ○好色一代女 ○好色五人女 ○男色大鑑 ○武道傳來記 ○武家義理物語 ○新可笑記 ○西鶴諸國咄 ○懷硯 ○近代艶隱者 ○日本永代藏 ○世間胸算用 ○織留 ○本朝二十不孝 ○本朝櫻陰比事 ○西鶴置土產 ○萬の文反古 ○名殘の友 ○俗つれ〴〵 ○一目玉鉾

第三巻 芭蕉全集

正篇 ○蕉翁一代の句集 ○連句集 ○文集 ○句評 ○紀行 ○消息 ○遺語

外篇 ○冬の日 ○春の日 ○初懷紙 ○曠野 ○ひさご ○猿蓑 ○深川集 ○炭俵 ○別座敷 ○續猿蓑

附錄 ○枯尾花 ○芭蕉翁行狀記 ○芭蕉翁繪詞傳

第四巻 第五巻 近松名作集 上 下

○花山院后諍 ○世繼曾我 ○賢女手習并新曆 ○門出八島 ○凱陣八島 ○源氏烏帽子折 ○出世景清 ○團扇曾我 ○蟬丸 ○最明寺殿百人上臈 ○曾根崎心中 ○薩摩歌 ○雪女五枚羽子板 ○用明天皇職人鑑 ○心中二枚繪草紙 ○兼好法師物見車 ○碁盤太平記 ○卯月紅葉 ○堀河浪鼓 ○卯月の潤色 ○心中重井筒 ○傾城反魂香 ○心中萬年草 ○丹波與作待夜の小室節 ○淀鯉出世瀧德 ○五十年忌歌念佛 ○栬狩劍本地 ○今宮の心中 ○百合若大臣野守鏡 ○心中刃は氷の朔日 ○夕霧阿波鳴渡 ○吉野都女楠 ○嫗山姥 ○長町女腹切 ○冥途の飛脚 ○大經師昔曆 ○生玉心中 ○國性爺合戰 ○槍の權三重帷子 ○山崎與次兵衛壽の門松 ○曾我會稽山 ○傾城酒呑童子 ○博多小女郎波枕 ○雙生隅田川

○心中天網島 ○津國女夫池 ○女殺油地獄 ○信州川中島合戰 ○心中宵庚申 ○關八州繫馬

第六巻 第七巻 淨瑠璃名作集 上 下

○雪女 ○本海道虎石 ○心中涙の玉井 ○金屋金五郎浮名額 ○金屋金五郎後日雛形 ○椀久末松山 ○お染久松袂の白しぼり ○八百屋お七 ○笠屋三勝廿五年忌 ○心中二つ腹帯 ○傾城思升屋 ○愛護若塒箱 ○富仁親王嵯峨錦 ○鬼鹿毛無佐志鐙 ○大塔宮曦鎧 ○須磨都源平躑躅 ○壇浦兜軍記 ○蘆屋道滿大内鑑 ○苅萱桑門筑紫𨏍 ○敵討襤褸錦 ○御所櫻堀川夜討 ○釜淵雙級巴 ○ひらがな盛衰記 ○鶊山姫捨松 ○夏祭浪花鑑 ○菅原傳授手習鑑 ○義經千本櫻 ○假名手本忠臣藏 ○双蝶々曲輪日記 ○一谷嫩軍記 ○本朝廿四孝 ○奥州安達原 ○關取千兩幟 ○近江源氏先陣館 ○神靈矢口渡 ○妹背山婦女庭訓 ○攝州合邦辻 ○新版歌祭文 ○伊賀越道中雙六 ○近頃河原達引 ○絲櫻本町育 ○繪本太閤記

第八巻 歌舞伎脚本集

○參會名護屋 ○兵根元曾我 ○源平雷傳記 ○百夜小町 ○傾城淺間嶽 ○成田山分身不動 ○中將姫京雛 ○丹波與作手綱帶 ○傾城壬生大念佛 ○鳥邊山心中 ○媚髮歌仙櫻 ○心中鬼門角 ○伊勢頭戀寢刃 ○漢人漢文手管始 ○五大力戀緘 ○金門五三桐 ○四谷怪談 ○與話情浮名横櫛

第九巻 浮世草子集

○傾城色三味線 ○傾城曲三味線 ○傾城歌三味線 ○世間息子氣質 ○浮世親仁氣質 ○世間娘氣質 ○咲分五人娘 ○傾城禁短氣 ○商人軍配團 ○棠大門屋敷 ○鎌倉諸藝袖日記 ○日本新永代藏 ○御前義經記 ○好色萬金丹

第十巻 怪談名作集

○伽婢子 ○狗張子 ○怪談全書 ○英草紙 ○繁野話 ○雨月物語 ○唐錦 ○莠句冊 ○垣根草 ○漫遊記

第十一巻 黄表紙廿五種

○金々先生榮花夢 ○親敵打腹鼓 ○長生見度記 ○啌多雁取帳 ○狂言好野暮大名 ○大悲千祿本 ○江戸生艶氣樺燒 ○莫切自根金生木 ○文武二道

万石通 ○孔子縞于時藍染 ○心學早染草 ○卽席耳學問 ○盧生夢魂其前日 ○馬鹿長命子氣物語 ○世上酒落見繪圖 ○桃太郎發端話說 ○十四傾城腹之内 ○金々先生造化夢 ○忠臣藏前世幕無 ○世諺口紺屋雛形 ○稗史億說年代記 ○御誂染長壽小紋 ○的中地本問屋 ○人間萬事吹矢的 ○人間萬事吹矢的（草稿）

第十二巻 洒落本集

○傾城買四十八手 ○契情買虎の巻 ○嫖客三體誌 ○娼妓絹篩 ○遊子方言 ○月花餘情 ○百花評林 ○大抵御覽 ○異素六帖 ○廓中奇譚 ○辰巳の園 ○和唐珍解 ○通言總籬 ○辰巳婦言 ○令子洞房 ○寸南破良意 ○仕懸文庫 ○猫射羅子 ○道中醉語錄 ○聖遊廓 ○錦の裏 ○三教色 ○契國策 ○眞女意題 ○甲驛夜の錦 ○田舍芝居 ○婦美車紫野 ○起承轉合 ○粹町甲閨 ○古契三娼 ○滸都洒美撰 ○夜半の茶漬 ○志羅川夜船 ○穴學問 ○狂訓彙軌本紀 ○娼妃地理記 ○遊僊窟煙の巻 ○女郎買糠味噌汁 ○美地の蠣殼

第十三巻 讀本集

○櫻姫全傳曙草紙 ○昔話稻妻表紙 ○本朝醉菩提 ○三七全傳南柯夢 ○占夢南柯後記 ○天羽衣 ○飛驒匠物語

第十四巻 滑稽本集

○風流志道軒傳 ○古朽木 ○阿多福假面 ○指面草 ○人遠茶懸物 ○無彈砂子 ○小紋雅話 ○奇妙圖彙 ○浮世風呂 ○早變胸機關 ○客者評判記 ○浮世床 ○人間萬事虛誕計 ○同上後篇 ○假名手本藏意抄 ○一盃綺言 ○古今百馬鹿 ○八笑人 ○七偏人 ○柳巷訛言 ○市川評判圖會室の梅 ○福來雀 ○一雅話三笑 ○言葉の花 ○鯛の味噌津

第十五巻 人情本集

○春色梅曆 ○春色辰巳園 ○春色惠之花 ○英對暖語 ○梅見船 ○閑情末摘花 ○假名文章娘節用 ○八萬鐘

第十六巻 第十七巻 第十八巻 南總里見八犬傳 上中下

第十九巻 狂文狂歌集

○古今夷曲集 ○萬載狂歌集 ○萬代狂歌集 ○四方のあか ○四方の留糟 ○千紫萬紅 ○萬紫千紅 ○めでた百首 ○かくれ里の記 ○（石川雅望の作では）狂文あづまなまり ○吉原十二時 ○（風來山人のものでは）風來山人六々部集（前篇） ○風來山人六々部集（後篇） ○風流志道軒 ○（手柄岡持のものでは）我おもしろ

第廿巻 第廿一巻 偐紫田舍源氏 上下

第廿二巻 第廿三巻 膝栗毛其他 上下

○東海道中膝栗毛 ○續膝栗毛 ○續々膝栗毛 ○南總記行旅眼石 ○江戸前噺鰻 ○落咄彌次郎口

第廿四巻 第廿五巻 和文和歌集 上下

○眞淵歌文集 ○蘆庵六帖詠草 ○桂園一枝（景樹） ○うけらが花（千蔭） ○琴後集（春海） ○宗武歌集 ○曙覽歌集 ○藤簍冊子（秋成） ○言道歌集 ○良寛歌集 ○女流歌文集

第廿六巻 川柳雜俳集

○武玉川十八篇 ○柳多留三十一篇 ○誹風柳多留拾遺十篇 ○川傍柳五篇

第廿七巻 俳文俳句集

○五元集（其角） ○五元集拾遺（同） ○五元集脫漏（同） ○雜談集（同） ○類柑子（同） ○玄峰集（嵐雪） ○其袋（同） ○去來丈草發句集 ○ひとりごと（鬼貫） ○鬼貫句選（鬼貫） ○七車（同） ○とくとくの句合（素堂） ○韻塞（許六） ○風俗文選（同） ○葛の松原（支考） ○笈日記（同） ○雅文消息（許六・野坡） ○蛙合（仙化） ○俳諧職人盡（蓼和） ○鶉衣（也有） ○蕪村句集（蕪村） ○蕪村文集（同） ○新花摘（蕪村） ○寫經社集（同） ○十番左右句合（同） ○明鴉（几董） ○續明鴉（同） ○新雜談集（同） ○井華集（同） ○太祇句集（太祇） ○春泥句集（春泥） ○三春日記（蓼太） ○芙蓉文集（耳得） ○白雄句集（白雄） ○骨書（樗良） ○俳ざんげ （大江丸） ○はいかい袋（同） ○曉臺句集（曉臺） ○佐渡日記（同） ○おらが春（一茶） ○一茶句集（同） ○鼠の道行（成美） ○成美家集（同） ○蔦眼集（道彦） ○鶴芝 士朗） ○斧の柄（乙二） ○續繪歌仙（宜麥） ○屠龍の技（抱一）

追加篇 第廿八巻 歌謠音曲集

○義太夫（近松名作集及淨瑠璃名作集と重複するものは之に採らず。）

○傾城阿波の鳴門（八つ目・順禮の段） ○艶容女舞衣（下の巻・酒屋の段）○戀娘昔八丈（下の巻・鈴ケ森の段）○桂川連理柵（下の巻・帶屋の段）○廓文章（吉田屋の段）○傾城戀飛脚（下の巻・新口村の段） ○碁太平記白石噺（七つ目・揚屋の段）○花上野譽の石碑（四つ目・志渡寺の段）○木下蔭狹間合戰（七つ目竹中陣屋の段）○蝶花形名歌島臺（八の切・小坂部館の段）○三十三間堂棟由來（平太郎住家の段）○玉藻前曦袂（三の切・道春館の段）○八陣守護城（八の切・正淸本城の段）○生寫朝顏日記（宿屋の段）○壺坂靈驗記（澤市内の段）○近江源氏先陣館（八つ目切・小四郎切腹の段）○

鎌倉三代記（七の切・三浦別れの段）○加々見山舊錦繪（六の切・草履打の段）○太平記忠臣講釋（七つ目・喜内住家の段）○祇園祭禮信仰記（四の切碁立の段）

○河東節

○松の内○神樂獅子○隅田川舟の内○禿萬歳○灸すゑ巖の疊夜着○酒中花○水調子○うかぶ瀬○ぬれ扇○亂髪夜編笠○助六所縁江戸櫻○常陸帶花桐○道成寺○淨瑠璃供養○邯鄲○熊野○泰平住吉踊○浮世傀儡師（外記物○小鍛冶名劍卷（半太夫物）

○一中節

○辰巳の四季○松づくし○泰平船づくし○高砂松の段○神樂高砂○羂繪の島臺○萬屋助六心中○自然居士過去物語○源氏妹が宿○夕霞淺間嶽○尾上雲賤機帶○源氏十二段○頼光大江山入○鉢の木○與作小萬夢路の駒○道行三度笠○鶉飼石和川○お夏笠物狂○競牡丹○源平妹脊の鶏合

○常磐津節

○老松○子寶三番叟○蜘蛛絲梓弦（仙臺淨瑠璃）○積戀雪關扉（關の戸）○四天王大江山入（古山姥）○兩顔月姿繪（葱賣）○戻駕色相肩（戻駕）○帶文桂川水（お半）○倭假名色七文字（源太）○壽靭猿○松色操高砂（太神樂）○再夕暮雨の鉢木（雨の鉢

木○寄昆娼釣髭（釣狐）○後之月酒宴島臺（角兵衛獅子）○恩愛瞳關守（宗清）○願絲緣苧環（おみわ）○忍寄戀曲者（將門）○花舞臺霞猿曳（新うつぼ）○薪負雪間の市川（新山姥）○乘合船惠方萬歳（乘合船）○其扇屋浮名戀風（夕霧）○景清○勢獅子劇花籠（勢獅子）○釣女○戻り橋○三保の松○松の島○三世相錦繍文章（おその六三）○大森彦七

○富本節

○年朝嘉例壽（長生）○四十八手戀所譯（相撲をし島）○百夜菊色の世中（關寺）○夫婦酒替ぬ中仲（鞍馬獅子）○其俤淺間嶽（淺間）○道行戀飛脚（梅川忠兵衛）○旦連理橋（蟲賣）○新曲高尾懺悔（高尾懺悔）○花川戸身替の段（身替お俊）○春夜障子梅（夕霧）○新曲かぐら獅子（神樂獅子）○徒髪戀曲物（松風）○茂懺悔睦言（扇賣高尾）○道行念玉蔓（長作）○幾菊蝶初音道行（忠信）○拙筆力七以呂波（乙姫）○草枕露の玉歌和（玉川）○奈須野○御代榮益穗富種（豐の前）○高砂女夫

○清元節

○梅の春○榮能春延壽（長生）○北州千歳壽（北州）○四季三葉草○其小唄夢廓（權八）○絲の五月雨（小菊半兵衛）○深山櫻及兼樹振（保名）○御名殘押繪交張（鳥羽繪）○月雪花名殘文臺（玉兎）○詠梅松清元（茶筅賣）○色山解深川（待人）○大和い手向五字（子守）○色彩間刈豆（かさね）○法

花姿色同（山歸り）○月花玆友島（山姥）○筐花手
向橋（吉原雀）○復新三組盞（大山參り）○道行浮
塒鴫○道行旅路の嫁入（八段目・おかげ參り）○
六歌仙容彩（文屋・喜撰）○彌生の花淺草祭（惡玉）
○おどけ俄煮珠取（玉屋）○道行旅路の花聟（落人）
○再春菘種蒔（舌出し三番）○初霞淺間嶽（淺間）
○〆能色相圖（神田祭）○造鈍菊睦言（菊畑三菊）
○菊嬉聞睦言（お岩）○倭假名色七文字（手古舞）
○重褄閨の小夜衣（白絲）○明烏花濡衣（浦里）○
梅柳中宵月（淸心）○日月星晝夜の織分（夜這星）
○初櫓噂高島（三人三吉）○貸浴衣汗雷（夕立）○
忍逢春雪解（三千歳）○色增艶夕映（雁金）○花雲
助相肩（雲助）○靑海波○助六曲輪菊（助六）

○新　内　節

○二重衣戀占（花咲綱五郎）○若木仇名草（蘭蝶）
○千日寺名殘鐘（三勝半七）○眞夢血染抱柏（花園
平三）○歸咲名殘の命毛（尾上伊太八）○傾城音
羽瀧（おとは七郎兵衞）○膝栗毛「赤坂の段」○膝
栗毛「市子の段」○明烏夢泡雪（浦里）○明烏後眞
夢○累身賣の段

○薗　八　節

○道行相合亘縺（梅川）○桂川戀の柵（お半）○鳥
邊山○花街の色糸（植木屋）○道行菜種の亂咲
○江戸の繪姿（おひな吉三郎）○道行緣花房（お花
半七）○口舌八景（小いな半兵衞）○小春治兵衞亘
縺の段○夕霧

○江　戸　長　唄（めりやす大薩摩を含む）

○矢の根五郎○無間の鐘○傾城道成寺○風流
相生獅子（相生獅子）○二人椀久○英獅子亂曲（枕
獅子）○百千鳥娘道成寺（さなきだ道成寺）○高
尾さんげの段（高尾懺悔）○天人羽衣○京鹿子娘
道成寺（娘道成寺）○英執着獅子（執着獅子）○風
流妹脊の杜建（杜建）○門出京人形（水仙丹前）○
亂菊枕慈童（菊慈童）○鐘入解脫衣（解說）○劒烏
帽子照葉盞（劒烏帽子）○柳雛諸鳥囀（鷺娘・うしろ
面）○初咲法樂舞（法樂舞）○ねこのつま○乘掛情
の夏小立（與作）○鞭櫻宇佐幣○百夜車○姿の
鏡關寺小町（關寺）○春調娘七種（七種）○童子戲
面被（めんかぶり）○衣かづき思破車（やれ車）○
童獅子○敎草吉原雀（吉原雀）○相生獅子○勸
染分紅葉（うはなり）○隈取安宅松（安宅）○御代
松子日初戀（小松曳）○其容形七枚起請（こもそう）
○關東小六後雛形（淡島）○其面形二人椀久○黑か
み○女夫松高砂丹前（高砂丹前）○菊壽の草摺
○勢五大力○吹雪の雛形（雛形狂亂）○三重霞嬉
敷顏鳥（三重霞傀儡師）○舞扇薗生梅（舞扇）○濱
松風戀歌（濱松風）○ゆかりの月○美面より○七枚
續花の姿繪（汐汲・猿廻し・老女）○遲櫻手爾葉七字
（花かり初め傾城・越後獅子・橋辨慶・相撲盞）○戀
男調松風（調松風）○再春菘種蒔（舌出し三番叟）○戀
民奇掛合（犬神）○四季詠寄三大字（門傾城・鹿島踊）
○閏玆姿八景（節季候・心猿・晒女）○正札附根元草
摺（正札附）○寄三津再十二支（小原女・乙姬・四
つ竹）○其九繪彩四季櫻（丁稚・天下るの傾城）○

新獅子〇三升猿曲舞（猿舞）〇石橋（外記の石橋）〇老松〇不動〇七所御摂初鐵漿（西王母・數入娘）〇大和い手向五字（官女・牛若）〇外記猿〇復新三組盞（初雁の傾城）〇廓三番叟（廓三番）〇歌へすゞ餘大津畫（藤娘・關三の座頭・關三の奴）〇月雪花蒔繪の巵（月の巻）〇拙筆力七以呂波（芝翫の傾城・供奴・浦島・瓢箪鯰）〇八重霞賤機帶（賤機）〇後の月酒宴島臺（角兵衛獅子）〇御哉玉海老手遊（とんび奴）〇吾妻八けい（八景）〇六歌仙容彩（業平小町）〇姿花後雛形（小鍛冶）〇初子日〇俄獅子〇外記の傀儡獅〇初しぐれ〇巽八景〇花龍勝色所八景（助六・景清・新鷺娘）〇勸進帳〇花兄弟十二月所作（若菜摘・鐘馗・雷）〇島臺〇軒端松〇士農工商〇秋色種〇繰鶴三番叟〇花見車〇手習子〇織どの〇常磐庭〇鶴龜〇五色の絲〇今様小鍛冶〇柳糸引御摂（裸三番叟）〇壽〇鞍馬山〇翁千歳三番叟〇廓丹前〇菖蒲ゆかた〇喜三之庭〇紀州道成寺〇連獅子〇時雨西行

〇歌澤

寅派、芝派の歌詞を全部收め。

〇小唄・端唄・雜曲集

江戸時代から唄はれて今日に尙唄はれてゐる雜曲三百餘を收む。

追加篇 第廿九巻 謠曲三百番集

〇脇能物

〇高砂〇弓八幡〇志賀〇淡路〇御裳濯〇代主〇佐保山〇松尾〇養老〇老松〇白樂天〇放生川〇鶴龜〇東方朔〇白髭〇大社〇寢覺〇源太夫〇道明寺〇難波〇鵜祭〇輪藏〇富士山〇江島〇賀茂〇嵐山〇氷室〇逆矛〇要石〇和布刈〇竹生島〇九世戸〇岩船〇金札〇吳服〇西王母〇右近〇繪馬〇鱗形〇玉井〇内外詣

〇修羅物

〇田村〇八島〇箙〇忠度〇俊成忠度〇經政〇通盛〇兼平〇賴政〇實盛〇巴〇清經〇朝長〇敦盛〇生田敦盛

〇三番目物

〇野宮〇井筒〇芭蕉〇采女〇東北〇梅〇佛原〇墨染櫻〇身延〇半蔀〇夕顔〇定家〇江口〇揚貴妃〇雪〇二人靜〇千手〇六浦〇藤〇杜若〇羽衣〇誓願寺〇小鹽〇雲林院〇遊行柳〇西行櫻〇陀羅尼落葉〇源氏供養〇大原御幸〇吉野靜〇住吉詣〇松風〇熊野〇草紙洗小町〇山姫〇祇王〇胡蝶〇吉野天人〇鷺〇葛城〇龍田〇三輪〇卷絹〇檜垣〇關寺小町〇鸚鵡小町〇姨捨

〇四番目物

〇三井寺〇櫻川〇柏崎〇百萬〇飛鳥川

○雲雀山○隅田川○蟬丸○花筐○班女○加茂物狂○水無月秡○籠太鼓○富士太鼓○梅枝○玉葛○浮舟○三山○卒都婆小町○碪（砧）○求塚○水無瀬○藍染川○竹雪○鳥追舟○籠祇王○室君○初雪○花車○女郎花○戀松原○善知鳥○阿漕○藤戸○松虫○錦木○船橋○綾鼓○戀重荷○雨月○鐵輪○葵上○道成寺○木賊○景清○弱法師○俊寬○攝待○鉢木○土車○高野物狂○芦刈○盛久○春榮○小督○七騎落○仲光○切兼曾我○安宅○木曾○元服○曾我○小袖曾我○重盛○楠露○櫻井○正行○藤榮○放下僧○花月○自然居士○東岸居士○歌占○蟻通○三笑○唐船○邯鄲○枕士童○菊士童○天鼓○咸陽宮○大佛供養○夜討曾我○橋辨慶○湛海○忠信○錦戸○禪師曾我○關原與市○現在巴○正尊○草薙○泰山府君○現在七面○調伏曾我○望月

○五番目物

○鵜飼○野守○鍾馗○昭君○松山鏡○壇風○烏帽子折○熊坂○鞍馬天狗○車僧○善界○大會○第六天○葛城天狗○殺生石○小鍛冶○鵺○舎利○谷行○雷電○國栖○春日龍神○大蛇○龍虎○愛宕空也○飛雲○現在鵺○大江山○土蜘蛛○羅生門○安達原○紅葉狩○船辨慶○山姥○項羽○碇潜○一角仙人○張良○皇帝○融○須磨源氏○絃上○海士（人）○當麻○來殿○松山天狗○石橋○合甫○猩々○大瓶猩々○翁○大典閑曲曲舞獨吟○護法○豐干○千引○常陸帶○空蟬○鷄龍田○阿古屋松○紫式部○鶉○松浦物狂○鵜羽○布留○丹後物狂○牽牛花○十番切○笠卒都婆○隠岐院○明智討○柴田○北條○吉野詣○高野詣○池贄○鞠○碁
其他

以上日本名著全集、第一期出版「江戸文藝之部」全廿七卷及追加篇二冊は、第十一卷黄表紙廿五種を第一回配本として毎月一冊乃至二冊宛を刊行するもので、豫約申込は、大正十五年六月十六日を以て一旦締切りましたが、會員數の增大に伴ふ多量製產の利得を以て、益ゝいゝ本を作らんがため、その後も、また現在も、おそらく當分は將來も、會員の御紹介による新入會員の申込を歡迎致します。

○豫約會員外には頒たず、分賣の需めに應じ得ぬこと、また申すまでもなし。

○會費は一冊あて一圓六十錢。外に申込金一圓を申受ける。但しこれは豫約權ともいふべきもので毎月の會費とは別。從って一時拂の會員でも、二回拂の會員でも同樣に申受く。

○送本料は、會費の外に一冊あて金十二錢を要す。

（終）